前橋南部の民俗

―上川淵・下川淵・旧木瀬地区―

春日神社太々御神楽（上佐鳥）

小島田の供養碑（小島田）

円満寺薬師如来坐像（後閑）

前橋藩刑場跡供養塔ならびに道しるべ
（天川大島）

円満寺阿弥陀三尊坐像（後閑）

百庚申　（新堀神社）

阿弥陀三尊画像板碑（公田）

阿弥陀如来坐像（小島田）

山王の宝塔（山王）

廃覚動寺宝塔（公田）

山神塔（新堀神社）

道祖神（飯王神社・後閑）

序

前橋市教育委員会
教育長　岡本信正

昭和六十年から始まった民俗文化財調査も、いよいよ最終年度を迎えようとしています。芳賀地区から、順に行い、平成五年度の本庁管内の調査で最終となります。順次刊行してきた報告書も、この第三集の刊行となりました。

この第三集は、平成二年度、三年度に調査を行った上川淵、下川淵、旧木瀬地区の内容をまとめたものです。

この地区は、前橋市内の東部から南部に位置し、豊かな農耕地域であります。また、旧利根川の流路にもあたり、その伝承も注目された場所でもありました。

これまで、十分な調査が行われていない地区でありましたが、古い伝統と生活習俗を感じさせる貴重なお話をきくことができました。

たまたま、旧木瀬村誌の編さん事業が進んでいることから、その事業と協力しながら調査を実施することで、より深い調査内容を記録できたと思います。

詳しい内容は、本文中をお読みいただければお判りいただけますが、伝承者であるお年よりの知恵の集まりとでもいえるものだと思います。こういった知識は、家庭の中での労働や生活の中で、自然と受け継がれてきたものですが、近年その伝達力が落ちているようです。

教育委員会としても、貴重な生活経験、知識の継承にできるだけの援助をしたいと考えており、この調査事業を行ってまいりました。

この報告書をお読みのうえ、より豊かでうるおいのある生活づくりのために役立てていただければ幸いです。また、民俗学研究の資料として活用されることを望んでおります。

最後になりましたが、本調査事業実施にあたりまして、ご協力いただきました地元関係者の皆様、調査にあたられた調査員の皆様に感謝申しあげて、ごあいさつといたします。

平成五年三月二十日

経　過

平成二年度　上川淵・下川淵地区
民俗調査（民俗文化財総合調査事業）

一、目　的

民俗とは、一般には民間伝承と呼ばれ、衣食住を始めとして、人々が先祖より受け継いできた日常生活の上で、繰り返し行われる生活事実のすべてを意味するものである。こういった伝承や残された民俗文化財を調査することによって、一般庶民の伝統的生活様式、社会形態を明らかにしようとするものである。

それは、民俗が、日本人であるならば、誰でもが無意識のうちに繰り返し表出する類型的行為の総体を意味し、いわば、日本人を日本人たらしめているものだからである。

そこで、社会の急激な変化により、滅び去ろうとしている民俗を、総合的に調査し、資料収集を行うことで、記録保存を図り、地域をみつめる心を取り戻させる契機とする。

また、資料整備により、来たるべき博物館建設に資する。

二、調査組織（前橋市民俗文化財調査委員会）

委員長
近藤義雄　前橋市文化財調査委員

副委員長
井田安雄　日本民俗学会会員

顧　問
阿久津宗二　前橋市文化財調査委員
梅沢重昭　前橋市文化財調査委員
近藤義雄　前橋市文化財調査委員
松島栄治　前橋市文化財調査委員
丸山知良　前橋市文化財調査委員

調査員
桑原　稔　豊田工業高等専門学校
今井英雄　県史編さん室
井野誠一　前橋市文化財保護課
岡野　健　群大附属小学校
嶌村真也　群大附属小学校
新保一美　前橋市文化財保護課
浜田博一　前橋市立箱田中学校
池田　修　前橋工業高等学校
菊池誠一　吉井高等学校
小暮正剛　伊勢崎市立第二中学校
横田雅博　高崎市立長野郷中学校
田口智彦　板倉高等学校
佐藤　健　太田市立強戸中学校
綿貫綾子　民俗文化財調査員

地元協力員
各町自治会長　名簿　別添
協力員（各町一名）　同上

事務局
福田紀雄　文化財保護課長
遠藤和夫　埋蔵文化財係長
高橋賢靖　文化財保護係長

駒倉秀一　文化財保護係主任
井野修二　文化財保護係主任

◎夏季集中調査日程

八月　二日(木)　櫛島町　櫛島公民館
上朝倉町　上朝倉公民館
下朝倉町　下朝倉公民館
後閑町　後閑町公民館
広瀬町一丁目　一丁目集会室
八月　三日(金)　広瀬町一・二丁目南部　広瀬町南部自治会館
宮地町　宮地町公民館
西善町西善　西善町公民館
西善町矢田　矢田公民館
中内町　中内町公民館
八月　四日(土)　公田町　公田町公民館
横手町　横手町公民館
亀里町竜門　竜門集落センター
亀里町矢島　矢島公民館
八月　五日(日)　鶴光路町　鶴光路公民館
下阿内町　下阿内町公民館
力丸町　力丸町会議所
徳丸町　徳丸町公民館
房丸町　房丸町公民館
八月　七日(火)　朝倉町一～四丁目　朝倉町集会室
八月　九日(木)　亀里町寺家　寺家公民館
八月一〇日(金)　亀里町阿内宿　阿内宿公民館

八月一一日(土)　新堀町　新堀町公民館
一〇月一三日(土)　山王町　禅養寺
一〇月一三日(土)　上佐鳥町　西光寺

民俗文化財調査　協力員一覧

上川淵地区

上佐鳥町	青木辰也	上佐鳥町四九八―二	六五―二四七八
櫛島町	砂川廣水	櫛島町一九―一	六五―〇六四三
	関口重雄	櫛島町八七―一	六五―〇六九二
上朝倉町	木村勇司	朝倉町八八―一	六五―三三五七
	大野敏雄	朝倉町八八〇―一	六五―三四三三
下朝倉町	笠原幸雄	朝倉町四五―一	六五―〇二四七
	阿佐美元司	朝倉町二九八	六五―〇八一八
朝倉町一丁目	下田文太郎	朝倉町一―六―六	六一―三三六六
	目崎隆雄	朝倉町一―三―四	六一―三〇二六
朝倉町二丁目	有川廣	朝倉町二―七―一四	六一―三三八五
	古澤馨	朝倉町二―一―三	六三―二二三一
朝倉町三丁目	飯島貞雄	朝倉町三―五―三八	六三―二六八七
	関口一郎	朝倉町三―四七―一四	六一―七一三八
朝倉町四丁目	真塩毅	朝倉町四―一六―二	六三―二二〇八
後閑町	中沢次雄	後閑町六七五―一	六五―〇〇三四
	川端輝雄	後閑町三三八―一	六五―一一七一九
広瀬町一丁目	矢端見治雄	広瀬町一―三三―二	六一―六六七一
	長原要治	広瀬町一―三三―一	六一―七六九一

広瀬町二丁目	萩野谷平七	広瀬町二一六一九一二	六一—〇五六三
広瀬町一・二丁目南部	鈴木弘季	広瀬町一一七一六	六一—〇五六三
	笠原忠蔵	広瀬町一一五一三	六一—〇四五〇
広瀬町三丁目	金谷征夫	広瀬町三一二九一三一三〇一	六一—三九九一 六一—五三九二
下佐鳥町	手島悌	下佐鳥町八二一一	六五—二一七四
宮地町	細野友重	宮地町二五七一一	六五—〇六三二
	勝山辰雄	宮地町二二九一一	六五—〇五六八
西善町西善	須田長平	西善町一九三八一四	六六—三〇二九
	山田三幸	西善町一八二五	六六—三二七九
西善町両家	関根繁治	西善町七一	六六—三〇三五
	亀井音次	西善町四五	六六—三〇八五
西善町矢田	飯島義定	西善町三八〇一	六六—一九一八
	飯島茂雄	西善町三六一	六六—一二九四
中内町	内田富司	中内町四四〇	六六—一九〇一
	清水益雄	中内町二五五一	六六—〇四五四
東善町	新井良平	東善町三三七	六六—一八八四
	瀬戸正弘	東善町三四四	六六—二六〇〇
山王町	関根徳司	山王町九六	六六—一七六二
山王町一丁目	小見末治	山王町一一二九一二	六六—五三八三
山王町二丁目	赤司忞	山王町二一一〇一四	六六—五五九四

下川淵地区

公田町	石原修治	公田町四一三一二	六五—〇七九七
	町田筆雄	公田町一一一四	六五—三三八二
横手町	青木幾男	横手町二五五一一	六五—一六七四
	青木文次郎	横手町二五八一一	六五—二〇四四
亀里町竜門	井野潔	亀里町二三三一一	六五—〇一九七
	青木清	亀里町二四一一二	六五—二八五九
亀里町阿内宿	井上治次郎	亀里町一一〇六一一	六五—〇二八六
	矢島章作	亀里町二二九一一	六五—一一七二
亀里町寺家	定方邦夫	亀里町六一五一一	六五—三二七三
	角田佳一	亀里町六一四	六五—一六五八
亀里町矢島	矢嶋長重	亀里町四五三一一	六五—一七七〇
	矢嶋恒祐	亀里町四六二一一	六五—一四三〇
鶴光路町	持田栄次	鶴光路町七六一二	六五—一〇〇一
	持田岩男	鶴光路町二三二一一	六五—〇六四九
新堀町	田村武幸	新堀町二三八一一	六五—一四八七
	古沢正市	新堀町二四〇	六五—〇三〇六
下阿内町	関秀夫	下阿内町一四八	六五—二〇五五
	深町平	下阿内町二五四	六五—〇五三一
力丸町	羽鳥秀夫	力丸町五〇四一三	六五—一四四九
	樋口行雄	力丸町二一〇	六五—二〇三三
徳丸町	高橋政夫	徳丸町三六二	六五—二二四八
	新井孝作	徳丸町二七四	六五—二七六〇

房丸町	清水哲夫	房丸町一九六	六五―二三四八
下川町	新井初太郎	房丸町一五三	六五―〇七七七
	田口春夫	下川町二七―一三	六五―三七一五

平成三年度　旧木瀬地区

◎夏季集中調査日程

七月三一日(水)　東上野町　個人宅

八月　一日(木)　天川大島町本町　個人宅

天川大島町原町　天川大島原町自治会館

天川大島町住宅　天川大島住宅自治会館

野中町　野中町公民館

八月　二日(金)　上大島町　上大島町公民館

上長磯町　上長磯町公民館

下長磯町　下長磯町公民館

女屋町　女屋町公民館

八月　三日(土)　小島田町　小島田町公民館

駒形町　駒形町会議所

下長磯町　個人宅

八月　四日(日)　上増田町　上増田転作促進研修施設

下大島町　下大島町公民館

小屋原町　個人宅

八月　五日(月)　小屋原町　小屋原町公民館

下増田町　下増田町研修センター

八月　六日(火)　笂井町　笂井公民館

地元協力員

町名	氏名	住所	電話	備考
天川大島本町	関口忠男	天川大島町一四六六	六三―一六六一	自治会長
	関口三四	天川大島町三	六一―三三三三	
	関口きよ	天川大島町五七	六一―三一五〇	
天川大島原町	柿沼博康	天川大島町一―三―二一	二四―一〇三三	自治会長
	青木清	天川大島町一―二七―六	二四―五〇二〇	
天川大島住宅	武田真人	天川大島町二九二	二一―二七二〇	自治会長
	牛込清	天川大島町九三五	二一―三三三七	
野中	舘野勇悦	野中町二九八―一	六一―四四九七	自治会長
	今井七治郎	野中町二七〇	六一―三七〇五	
上大島	鈴木明	上大島町三一三	六一―三四八七	
	女屋一	上大島町三六二	六一―一六八一	
上長磯	川嶋孝	上長磯町一三九	六三―一一〇八	自治会長
	宇田川一衛	上長磯町一四一	六一―三三三六	
下長磯	中沢通江	下長磯町二九六―一	六一―五二四〇	自治会長
	笠原三喜	下長磯町三〇八	六一―四二六一	
女屋	女屋昌平	女屋町一六六―一	六一―五九二六	自治会長
	女屋保男	女屋町一三二―一	六一―三三六一	
東上野	女屋幸雄	東上野町三八	六一―六一九五	自治会長
	女屋一義	東上野町四八	六一―一七一七	
小島田	下田栄吉	小島田町六九三	六一―五三三六	自治会長
	新井峯行	小島田町五一三	六一―三六一五	

駒形	松本益次郎	駒形町五四七	六六―四一四一	自治会長
	小暮安太郎	駒形町四三	六六―一一〇八	
笂井	永井利雄	笂井町七四	六六―三七〇五	自治会長
	斎藤米雄	笂井町二八五	六六―一〇六八	
小屋原	藤井万代	小屋原町甲二四八	六六―〇五七七	自治会長
	斎藤昌男	小屋原町一〇一八―四	六六―〇七一七	
上増田	矢島恒雄	上増田町一九六―二	六六―三七五五	自治会長
	細野登代三郎	上増田町一九三―二	六六―一一五一	
下増田	北爪甲子太	下増田町一四五九	六六―三三五〇	自治会長
	細野　昭	下増田町三九―二	六六―三七一四	
下大島	関口恒二	下大島町九六二	六六―一〇四一	自治会長
	関口直次	下大島町六三三―四	六六―四六七五	

民俗文化財調査員　分担表

委員長　近藤義雄　石造物

副委員長　井田安雄　地区概観

調査員　桑原　稔　民家

今井英雄　石造物

浜田博一　年中行事

井野誠一　人の一生

岡野　健　社会生活

嶌村真也　民具

新保一美　芸能

池田　修　民家

菊池誠一　口承文芸

小暮正剛　年中行事

横田雅博　衣食住

田口智彦　民俗知識

佐藤　健　交通交易

綿貫綾子　人の一生、衣食住

話者　一覧表

（上川淵地区）

上佐鳥町

篠崎　茂　大正　二年　生
牛木義人　明治三七年一一月　三日生
中島一雄　明治四二年　七月一七日生
関口喜一郎　大正　八年一二月一八日生
青木園彦　大正一二年　九月二二日生
町田毛野男　大正一〇年一一月二三日生
岡田　繁　大正一二年一〇月一一日生
村田昭二　昭和　二年　五月　九日生
中沢規矩一　大正一〇年　八月　一日生
吉田良作　大正　六年　九月一九日生
村田久雄　大正　六年　七月　四日生
町田幸夫　大正　七年　三月一九日生
町田好司　大正　六年一二月　一日生
岡田時三郎　大正　一年　八月一三日生

櫛島町

生形十一　明治三八年　七月一〇日生

上朝倉町

小屋　肇　昭和　八年　六月二四日生
大野敏雄　大正　九年　二月　一日生
小屋由造　明治三六年　五月二五日生
目崎いよ　明治三四年　三月　一日生
木村長次郎　明治四四年一一月一八日生

下朝倉町

阿佐美とり子　明治四二年　生
阿佐見勝利　明治三九年一一月二二日生
阿佐見伊三郎　明治三六年一一月二〇日生
横室鶴弥　大正　四年一〇月二九日生

後閑町

斎藤ヨネ
矢端長治
川端輝雄
塚田藤重
塚田質素
大橋俊春
関山粂雄
大橋かね
熊井はつ
中沢次雄
川端ぬへ
川端りつ
吉原章次

宮地町

井田琴志　明治三八年一二月二五日生
細野ヒロ　明治四三年一二月　七日生
勝山マサ　明治四五年　三月一九日生
石倉睦子

勝山辰雄　明治三七年　八月二〇日生
細野剛男　大正　八年一二月二〇日生
細野岩男　大正　九年　二月一五日生

東善町
瀬戸正弘

西善町矢田
諸岡義光　大正　七年　九月一九日生
諸岡源一　大正一〇年　五月二六日生
南雲次平　大正　元年　八月　一日生
諸岡　彰　昭和　三年　二月一〇日生
狩野久夫　昭和　二年　六月二一日生
南雲　勇　大正一三年　六月二〇日生
飯島義定　大正一三年　五月一〇日生
南雲あき　明治四二年　八月一六日生
狩野伊佐子　明治四四年　三月　三日生
狩野とみ　大正　三年　六月一六日生
五代よし　大正　八年一二月二一日生
諸岡　政　大正　七年　九月一四日生
南雲たきの　大正　七年　二月　五日生
飯島たかの　大正一三年一一月二二日生
飯島満江　大正一三年　八月　九日生

西善町西善
星野宮吉　大正　九年　生
田鍋吉一　大正　八年　生
須田栄次　大正一四年　生
岡田福太郎　昭和　四年　生

山田三幸　大正一五年　生

（下川淵地区）

横手町
石井なみ　明治四〇年　生

亀里町竜門
中村一太郎　明治四四年一二月　一日生
井野久雄　大正　九年　一月二四日生
小泉鍋太郎　大正一四年一一月一九日生
小泉一雄　大正　六年　生
田村正太郎　大正　三年一一月　七日生
青木　清　大正　五年　一月二七日生
三輪武男　大百一三年　四月二三日生
井田充明
小泉幸作
小泉一郎
三輪ちやう
井野栄子
嶋田志な子

亀里町阿内宿
矢島章作　大正一一年　五月　五日生
井上治次郎　大正一三年　一月一六日生
栗原大吉　大正一五年　八月二六日生
加藤忠夫　大正一五年　五月三一日生
加藤勝枝　大正一一形　九月一一日生
加藤ひろ　明治四四年　五月二四日生
内田トワ　明治四五年　三月一九日生

井上かく　大正七年四月九日生
矢島さく　大正四年一月八日生

亀里町寺家

木村雅一　昭和二年九月二八日生
角田佳一　昭和三年五月五日生
石井きよし　明治三九年七月一一日生
角田キヨ子　大正五年五月一五日生
角田いちの　明治四四年一二月一〇日生
持田アキ　大正三年一月三一日生
角田志づ江　明治四四年一〇月一二日生
小阿瀬信吾　大正四年一〇月二五日生
高田忠雄　大正六年一〇月五日生
小鮒常水　大正九年二月九日生
細野修次　大正三年一〇月五日生
清水正二郎　大正五年二月二五日生
斉田茂平　大正二年六月一八日生
定方邦夫　大正一三年七月六日生
木村恒男　明治四一年一〇月三一日生

亀里町矢島

主代重定　大正六年　生

鶴光路町

持田英次　大正一三年二月二六日生
関勉　大正一三年一月四日生
関口長代志　大正一二年三月四日生
猪岡良夫　大正一二年八月一日生
持田友衛　明治四三年五月二日生

岡本一孝　大正一五年一〇月六日生
島村太郎　大正一四年一月一四日生
田村ゑみ　大正八年七月一八日生
持田マサミ　大正一〇年三月二二日生
持田伊都子　大正九年三月二一日生
新井やす　明治四二年一月二日生
持田清美　明治四四年一〇月三日生
持田岩男　大正一四年一月一四日生

新堀町

田村武幸　大正一四年一二月六日生
古沢正市　明治四一年一〇月二五日生
田中光雄　明治四〇年九月八日生
田村治夫　大正一五年二月二五日生
田中正典　大正四年一二月一日生
久保田元二郎　大正七年四月二六日生
田村やす　明治三六年五月一日生
宮下つま　明治四二年四月一一日生
宮下たま　明治四二年九月二〇日生

下阿内町

角田ふみ江　大正一〇年　生

徳丸町

新井孝雄　明治三八年一二月八日生
瀬尾一雄　明治三六年二月二日生
瀬尾文弥　大正九年一〇月一六日生
井野秀司　大正一五年八月七日生
高橋政夫　大正一二年二月一一日生

房丸町

新井初太郎　大正一五年　八月　一日生
清水　薫　大正　二年　一月　九日生
清水さと　明治四〇年　三月一〇日生
清水みすノ　大正一二年　　生
清水　正　大正　三年一〇月二二日生
新井君子　大正一三年一〇月　二日生
清水義彦　大正　五年　一月　七日生
（旧木瀬地区）
深谷ヤエコ　明治四五年　三月　九日生
深谷由子　明治三九年一〇月　八日生

天川大島町

柳田ハル　大正　二年　一月二五日生
柳田治郎　明治四一年　三月二五日生
関口三四　明治三五年　三月三一日生
関口きよ　明治三二年　二月二二日生
狩野利治　昭和　五年　二月　五日生
武田真人　昭和　八年　一月二一日生
紫山重雄　大正　六年　八月一二日生
松井米男　大正　五年一一月　八日生
牛込　清　大正一四年一〇月　一日生
新井　斌　大正　九年　四月　五日生
下触敦次　大正　四年　二月　四日生
石田泰平　大正一三年　五月　一日生
山田ふくの　大正一四年一一月一五日生
小山愛子　昭和　五年一一月　一日生
柴山節子　大正一一年　八月二三日生
山口ふじ　大正　九年　二月　三日生
牛込岩子　大正一五年　八月　一日生

野中町

成田徳太郎　明治三七年一二月三一日生
志津　意　大正　二年　一月　九日生
松川喜代治　明治四〇年　三月一〇日生
今井幸子　大正一二年　　生
清水正三　大正　三年一〇月二二日生
宮沢一也　大正一三年一〇月　二日生
深谷ヤエコ　大正　五年　一月　七日生
深谷由子　明治四五年　三月　九日生
成田タケ　明治三九年一〇月　八日生

上大島町

湯沢きよ　明治二八年　三月　六日生
湯沢てう　明治三四年　四月一四日生
石田益雄　大正　三年　　生
女屋己之作　明治三八年　　生
石田安衛　明治三七年　　生
湯沢光江　昭和　九年　　生

上長磯町

川島八郎
木村たき　明治四一年　　生

下長磯町

中沢とよの　大正一一年　八月一七日生
小山すみ　明治四〇年　三月一八日生
生形うしの　明治三三年　三月二八日生
小出照子

小山とく　明治四二年　一月一一日生
福田雪代　大正　三年　七月　六日生
中沢通江　昭和　二年一二月一八日生
笠原三喜　大正一二年　九月　五日生
生形善重　大正　五年一〇月三一日生

女屋町

井田ひで　明治四一年　生
女屋昌平
女屋義雄
真下幸隆
女屋源六　明治三二年　五月二九日生
真下ふで子　明治三九年　生
真下常政　大正一二年　生
女屋庄之助　明治四〇年　生
女屋志津江　明治四四年　生
井田いせ子　昭和　四年　生

東上野町

女屋為義　明治四三年　生
松村定平　明治三七年　九月二五日生
女屋まさ子　明治四〇年　一月　六日生
松村みつ　大正　三年　一月三〇日生
松村志ん　明治三八年　一月二一日生

小島田町

下田裕亮
下田泰衛　明治三七年　生
下田いせ　明治三二年　五月　五日生
下田　忠　昭和一二年　四月一七日生
下田さい　明治四〇年一一月一五日生
下田きの江　大正一三年一〇月三一日生

駒形町

宝田善太郎　明治四二年　七月二九日生
若林まさ子　明治四四年　五月　六日生
今泉ヤス子　大正　二年　生
小暮はつ江　大正一〇年　生
小森利雄　大正　二年一二月一七日生
成宮弘司　明治四四年　三月二〇日生
鈴木栄作　大正一二年一〇月　七日生
清水　茂　大正一四年　四月二四日生
下田春次　明治四〇年　七月二〇日生
桜井柳次　大正　九年　三月一五日生
木暮安太郎　明治四四年　六月一四日生
須田喜久江　昭和一三年　一月　一日生
駒木　操　昭和　六年　一月三〇日生
越智秀子　昭和　六年　七月二三日生
松島幸子　昭和一〇年一〇月　八日生
設楽喜昭　昭和　五年一一月二五日生
岡村真子　大正　七年　三月二七日生
矢嶋加称　大正　八年　五月一八日生
松本雅子　昭和　五年　八月　六日生
星野民子　昭和一六年　四月一四日生
喜多本容子　昭和一五年　七月一二日生
竹村吉男　大正　七年一一月　一日生

筑井町

小屋高男　大正四年生
小屋なを子　大正四年生
斉藤達也
須藤吉太郎
須藤茂子
井田清夫　大正一二年一一月一八日生
横沢隆雄　明治四二年四月二三日生
井田県吉　明治四三年一一月二九日生
須藤延明　大正八年一月二〇日生
小屋辰雄　大正五年三月一五日生
石井たみ　明治三五年一〇月二九日生
斉藤みよ子　大正一〇年一〇月五日生
井田格朗　大正八年二月八日生
井田保　大正一〇年六月三日生

小屋原町

井野源三　大正一三年生
井野安治　明治四四年一一月九日生
井野美保乃　明治四三年一二月九日生
井野好枝　大正四年生
井野正悦　明治四四年生
布施川茂子　昭和三年生
石井きよみ　明治四〇年五月六日生
井野喜貢　大正六年七月一四日生
奈良三郎
斉藤昌男　昭和五年九月二三日生

藤井万代　大正一二年一〇月九日生
布施川忠之助　明治四一年一〇月一七日生
金井初弥　大正二年四月二八日生
奈良治郎久　明治四三年一〇月二〇日生
藤井志ま　大正三年六月一三日生
井野なか　大正一四年四月一四日生
大島恒次　明治四三年一〇月一七日生

上増田町

木村清　昭和二年生
吉田ます　大正一四年三月二一日生
北爪ツネ子
久川光圓
奈良くら　明治四二年一二月二一日生
井上徳三郎　明治四一年一〇月一〇日生
井上さだの　明治四二年生
筑井ふきよ　明治三八年生
斉藤一則　昭和六年生
斉藤秀夫　昭和八年生
南沢泰策　明治三二年九月一一日生
南沢もと　明治三五年一月二八日生
木村愛太郎
生形求　大正六年九月八日生
薊政造　大正八年八月五日生
細野幸太郎　大正二年五月二四日生
関口義太郎　明治三七年二月二九日生
大山清　大正三年一一月二一日生

吉田喜久次　大正九年四月四日生
下山三郎　明治四二年一一月一七日生
井上明　大正七年一〇月一三日生

下増田町

阿久津昭一
須永あき　明治四〇年一一月五日生
須永秀吉　明治四〇年二月一一日生
小林かつ　大正二年生
新井二三男
北爪甲子太
北爪愛太郎　明治三五年生
小林時太郎　大正四年生

下大島町

山口きん　明治三七年二月一六日生
山口行雄
清水豊三
渡辺達雄　明治三七年二月二八日生
高橋覚英　明治二一年生
関口寅三郎　大正三年生

公田町

町田筆雄　明治四一年一月一四日生
石原梅雄　大正五年六月一五日生
石原岩雄　大正一三年一二月一〇日生
町田隆一　大正一五年四月二七日生
石田松男　大正五年九月二八日生

力丸町

平井富吉　明治二八年四月二三日生
峰岸規　明治四三年三月三日生
羽鳥まさ　大正六年一〇月四日生

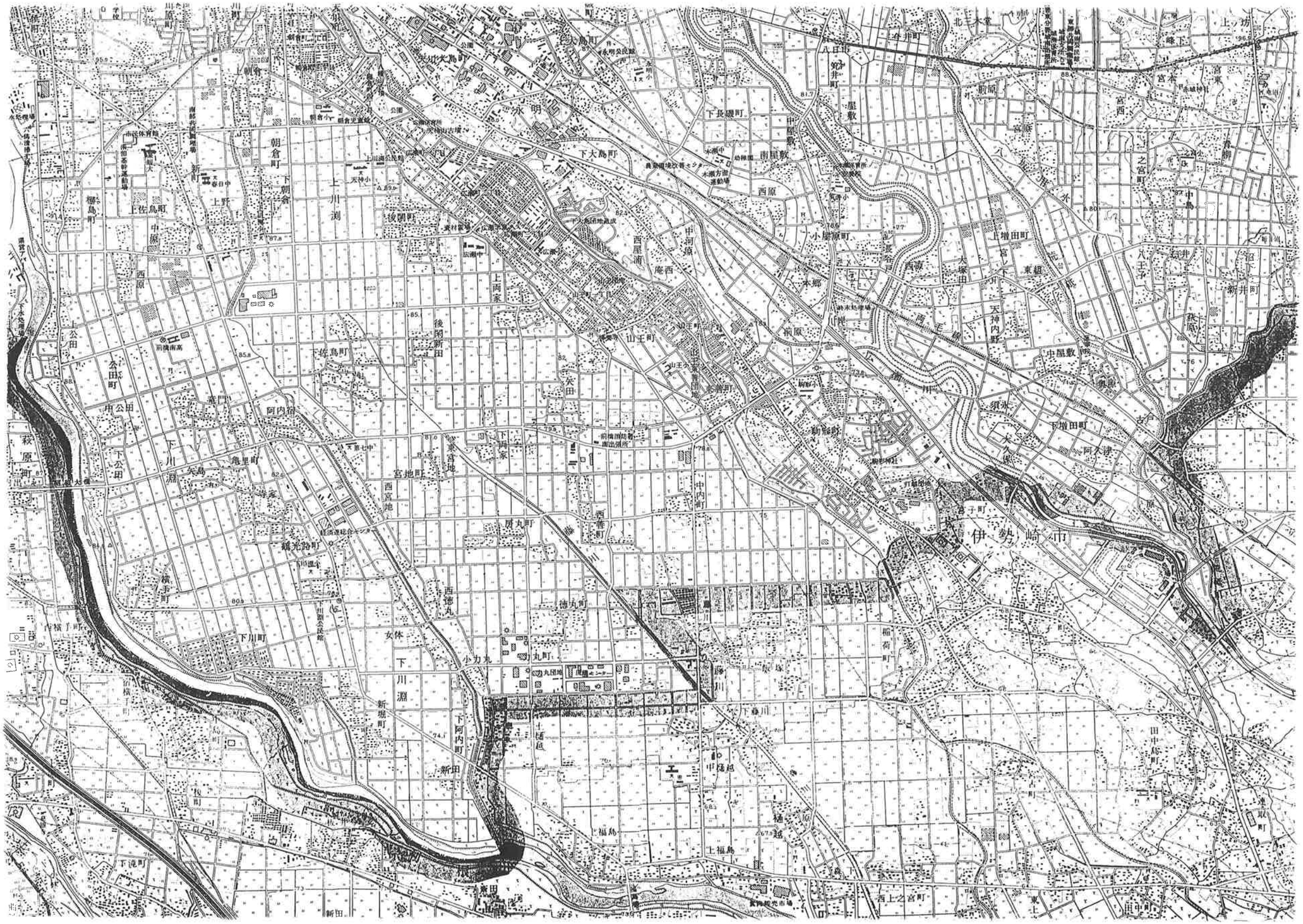
前橋南部の民俗　目次

序
経過
話者一覧表
第一章　調査内容概観……一
一、調査地域概観……一
二、衣食住について……四
(一)衣服……四
(二)食べ物……五
(三)住居……七
三、生産・生業……一〇
(一)稲作関係……一〇
(二)麦作について……一三
(三)養蚕のこと……一五
四、信仰について……一八
五、人の一生……二四
(一)産育儀礼……二四
(二)婚姻儀礼……二四
(三)厄年・年祝い……二五
(四)葬制のこと……二六
六、年中行事……二七
七、口頭伝承……二九
(一)民話について……三〇
(二)諺と謎……三三
(三)方言……三五
八、むすびとして……三六
第二章　社会生活……三七
一、村の概況……三七
(一)村……三七
(二)家……四一
(三)地名……四三
(四)川や沼……四四
(五)交通・交易……四五
(六)仕事……四五
(七)その他……四五
二、村の構成……四七
(一)クルワ……四七
(二)境……四七
(三)自治会……四八
(四)つきあい……五一
(五)共同作業……五二
(六)番頭……五三
(七)共有地……五四

(八) たのしみ……五四
(九) その他……五六
三、青年団と子供組……五六
(一) 組織……五六
(二) 活動……五七
(三) あそび……五八
四、家族生活……六〇
五、その他……六二
第三章 衣食住……六七
一、衣服……六七
二、食物……七六
三、住居……八八
第四章 生産・生業……九五
一、農耕全般……九五
(一) 農業……九五
(二) 水利……九九
(三) 水田耕作と稲作儀礼……一〇一
(四) 地主と小作……一〇三
(五) 副業……一〇三
(六) その他……一〇四
二、水田……一〇六
三、畑作……一〇八
四、養蚕……一〇九
五、諸職その他……一一三
第五章 交通交易……一一一
一、交通……一一一
(一) 鉄道と街道……一一一
(二) 橋・坂・渡し……一一三
(三) その他……一一四
二、運搬……一一五
三、交易……一一五
第六章 信仰……一一七
一、家の神仏と信仰……一一七
(一) 屋内神……一一七
(二) 屋敷神……一一七
(三) その他……一一〇
二、村の社寺と信仰……一一一
(一) 鎮守……一一一
(二) 寺院……一一七
(三) 小祠とお堂……一一七
① 地蔵……一一七
② 観音……一一九
③ 薬師……一一〇
④ 虚空蔵……一一一
⑤ 阿弥陀様……一一一
⑥ その他……一一一
(四) 石尊……一一四
(五) 天王……一一六

(六) その他……一四七
三、講と俗信……一四七
(一) 村内講……一四七
① 庚申講……一四七
② 二十二夜講……一五〇
③ お日待……一五一
④ 社日講……一五一
⑤ 天神講……一五二
⑥ エビス講……一五三
⑦ その他……一五三
(二) 代参講と社寺参詣……一五五
(三) 百万遍……一五八
(四) 天道念仏・念仏……一五九
(五) 養蚕祈願……一六三
(六) その他……一六四
第七章　石、造物……一六七
上川淵地区……一六七
下川淵地区……一七七
旧木瀬地区……一八五
第八章　民俗知識……二〇三
一、しつけ、作法、禁忌……二〇三
二、医療・衛生・保健……二〇八
(一) 薬物療法……二〇八
(二) 呪的療法……二〇八
(三) その他……二一〇
三、卜占、まじない……二一〇
四、気象、天文……二一三
五、動物、植物……二一七
(一) 動物……二一七
(二) 植物……二一九
六、その他……二二〇
第九章　芸能・娯楽……二二五
一、神楽・祭り等……二二五
二、歌謡……二四六
三、門付け、その他……二五六
四、遊び他……二六六
第十章　人の一生……二八七
一、産育儀礼……二八七
(一) 子授け……二八七
(二) 妊娠から出産……二八七
(三) 出産……二九三
(四) 子供の成長と祝……三〇七
二、厄年・年祝儀礼……三一三
(一) 厄年・厄除けと呪法……三一三
(二) 年祝い……三一六
(三) その他……三一七
三、婚姻儀礼……三二七
(一) 青年期の動向……三二七

(二) 婚姻の条件……三三〇
(三) 婚姻の成立……三三三
(四) 結婚式……三三七
(五) 婚礼後の習俗……三四三
四、葬送儀礼……三四九
(一) 葬式の習俗……三四九
(二) 墓制……三六〇
(三) 死後の供養……三六四
(四) 死霊……三六八
第十一章 年中行事……三七三
一月……三七三
二月……三九三
三月……三九七
四月……三九八
五月……三九九
六月……四〇〇
七月……四〇〇
八月……四〇三
九月……四〇八
十月……四〇八
十一月……四一三
十二月……四一三
年中行事他……四一九
家例……四二五
第十二章 口頭伝承……四四一
一、昔話……四四一
二、伝説……四八九
三、世間話、怪異……五〇二
(一) 世間話……五〇二
① 人物……五〇二
② 事件……五一二
③ 番頭……五一七
④ 神仏……五二三
⑤ 自然……五二四
⑥ その他……五二五
(二) 怪異……五三七
四、その他……五五二
(一) 話……五五二
(二) ことわざ……五五三
(三) ことば……五五四
(四) なぞ……五五七
(五) 方言……五六一
索引……


伊勢崎市
永明
朝倉町
上朝倉
下朝倉
上川渕
下大島町
下長磯町
中屋敷
南屋敷
西原
小屋原町
上増田町
下増田町
宮本
宮西
宮原
八幡
中島
新井町
沼下
八王子
秋原
中屋敷
須永
阿久津
本郷
前原
西原
大塚田
天神内野
東組
西毛線
広瀬川
山王町
矢田
後閑新田
上両家
下両家
阿内宿
東宮地
宮地町
西宮地
中内町
西善町
厚丸町
徳丸町
西徳丸
小力丸
丸町
下川渕
新堀町
下阿内町
新田
下川町
女体
横手町
内横子町
下横子町
鶴光路町
亀里町
矢島
寺谷
公田町
上公田
下公田
萩原町
上佐鳥町
下佐鳥町
中原
西原
上両家
後閑野
上野
春日中
新町
上川渕公民館
天神小
朝倉小
朝倉児童館
市民体育館
南部共同墓地
広瀬中
広瀬小
広瀬公民館
広瀬体育所
天神山古墳
木瀬中
木瀬方面運動場
幼稚園
養蚕環境改善センター
下大島遺跡
実材置場
広瀬学園
八日市
宮井町
北三木堂
上ノ坊
峰下
前原
幼稚園
下長磯
中屋敷
南屋敷
西原
小屋原
本郷
前原
西原
大塚田
天神内野
東組
西毛線
広瀬川
須永
阿久津
下増田
宮本
宮西
宮原
八幡
中島
新井
沼下
八王子
秋原
中屋敷
前原
山王町
山王
矢田
後閑新田
上両家
下両家
阿内宿
東宮地
宮地
西宮地
中内町
西善町
厚丸町
徳丸町
西徳丸
小力丸
丸町
下川渕
新堀町
下阿内町
新田
下川町
女体
横手
内横子
下横子
鶴光路
亀里
矢島
寺谷
公田
上公田
下公田
萩原
上佐鳥
下佐鳥
中原
西原
上両家
後閑野
上野
春日中
新町
上川渕
下大島
下長磯
中屋敷
南屋敷
西原
小屋原
上増田
下増田
宮本
宮西
宮原
八幡
中島
新井
沼下
八王子
秋原
中屋敷
須永
阿久津
本郷
前原
西原
大塚田
天神内野
東組
西毛線
広瀬川
山王
矢田
後閑新田
上両家
下両家
阿内宿
東宮地
宮地
西宮地
中内
西善
厚丸
徳丸
西徳丸
小力丸
丸
下川渕
新堀
下阿内
新田
下川

第一章　調査内容概観

一、調査地域概観

今回の民俗調査実施地域は、（表1）に示すとおり、旧勢多郡上川渕村・下川渕村及び木瀬村と、旧佐波郡上陽村のうち、前橋市に合併した四町を含んでいる。

上川渕村は昭和二十九年四月一日現在で、七二二世帯のうち農業が五六〇世帯。（七七・六％）

下川渕村は同じ時期において、八四三世帯中六九三世帯（八二・二％）が農業となっている。

本瀬村は昭和三十二年一月現在一七一三世帯のうち農業が七八七世帯。（四五・九％）

上陽村分については分割合併の地域であるので、右と同列に比較できる資料がない。参考までに玉村町へ合併した三大字を含め、旧上陽村全体でみると、昭和三十年現在で八九六世帯中農業が五九七世帯（六六・六％）となっている。

木瀬村についてみると、工業二七〇世帯（一五・八％）、商業二二六世帯（一三・二％）、公務自由業一八八世帯（一一・〇％）となっている。それは駒形町を中心とする市街地の占めることが大きい為であると考えられる。

この四地区とも、昭和三十年代においては養蚕・米・麦を三本柱とする農業を営んでいたことを知る。現在ではずい分様変りして、都市近郊型の園芸農業が盛んとなり、都市に近接するところでは住宅団地の造成や、工業団地の造成も行われ、かつての農村地帯が大きな変貌をとげている。

歴史的にみると、旧木瀬村の大部分は、旧利根川の河床上（氾濫原）に発達した集落である。旧利根川の左岸上に形成された東上野・小島田・上増田（宮原）などからは、縄文時代の土器・石器類が出土している。特に小島田八日市からは、平成四年に「縄文時代草創期」の円のみ型石斧と隆線文土器片が出土して、新聞・テレビで大々的に報道された。今から一万二千年前の歴史が明らかにされたのである。そのほか、国道五〇号線の拡幅工事に伴って、旧河床から古墳時代の住居址や古墳の一部、あるいは平安時代の水田址等も発見されて、当地における古代からの人びとの居住の歴史が判明し、民俗形成の背景をみる上での資料を与えてくれている。

旧上川渕・下川渕・上陽地区の集落については、いずれも旧利根川の右岸と、現利根川の左岸にはさまれた地域に形成されている。いわゆる前橋台地といわれる洪積台地の上に形成された集落である。上川渕・下川渕とも多くの古墳群の点在したところである。特に朝倉には国指定史跡の八幡山古墳（前方後方墳）があり、また東国最古の前方後円墳とされる天神山古墳（広瀬町一丁目）もその近くにある。朝倉は平安時代の『和名抄』にもその名が出ている古い歴史をもつところ

である。このほか中世の板碑や宝塔類、中世の居館址等もあって、古代から中世・近世へと続く歴史を伝えている。

今回の民俗調査の行われた地域は、以上のように原始・古代・中世にまでさかのぼることのできる歴史をもち、豊かな自然条件の中にあって、農業地帯として発達したところである。

養蚕の歴史はやや新しいとしても、広瀬川・桃木川、あるいはその分水としての端気川を中心とした用水にもめぐまれ（一部に天水場もあった）、米麦、養蚕を中心とする典型的な農村地帯であった。

集落の成立の古さと、豊かな経済力を背景にして、この地域にもさまざまな民俗が形成されている。今では、調査の時期がやや遅きに失した感があるが、なかには、民俗の古層をうかがわせる面もある。都市近郊の農村地帯として、また、群馬県のほぼ中央にあたる地域の民俗としての特徴をとらえてみたい。

（表1）調査地区の石高の変遷と旧村所属関係

前橋市

寛文郷帳（一六六八）			元禄郷帳（一七〇二）			天保郷帳（一八三四）			（一八七七）		地方行政区画便覧（一八八六）		市町村制施行による町村名（一八八九）	町村合併促進法公布時の町村名（一九五三）	現在（一九八七）町名ないし字名	備考
郡	町村名	石高	郡	町村名	石高	郡	町村名	石高	大区	小区	郡	町村名	郡	郡	郡	郡
多勢郡	野中村	四八・一〇〇	多勢郡	天川大島村	三三・八六三	多勢郡	天川大島村	四五七・二一一	7	9	南勢郡	天川大島村	南勢郡	南勢郡	市	
	長磯村	八六六・七〇〇		上長磯村	三五五・三三五		上長磯村	五三五・〇八九	7	10		上長磯村			上長磯町	
	大島村	九二・一〇〇		下大島村	三七〇・九七七		下大島村	三七八・二二四	7	9		下大島村			下大島町	
	小屋原村	六五〇・五〇〇		小屋原村	六五〇・五〇〇		小屋原村	八八八・七四四	7	8		小屋原村			小屋原村	
	上野村	三三八・六〇〇		上大島村	三七〇・三六〇		上大島村	二九〇・四九四	7	9		上大島村			下大島町	
	女屋村	四四三・五〇〇		女屋村	四四三・五〇〇		女屋村	五六八・四三五	7	10		女屋村			女屋町	
	小島田村	一八五・七〇〇		小島田村	一八五・七〇〇		小島田村	二八二・五五四	8	5		小島田村			小島田町	
	笂井村	六〇九・四〇〇		笂井村	六〇九・四〇〇		笂井村	七三二・六四	7	9		笂井村			笂井町	
	増田村	一四九・二〇〇		上増田村	七四六・六〇〇		上増田村	一〇六八・九四五	7	12		上増田村			上増田町	
				下増田村	七四六・六〇〇		下増田村	一〇四・七一三				下増田村			下増田町	
朝倉村		一三四〇・七〇〇	朝倉村		一三四〇・七〇〇	朝倉村		二七二・四五七	1	8	朝倉村				朝倉町など	
後閑村		九九四・〇〇〇	後閑村		九九四・〇〇〇	後閑村		二〇三・三六六	1	9	後閑村				後閑町など	
佐鳥村		一四六・三〇〇	下佐鳥村		四六六・四〇〇	下佐鳥村		五八八・四九二			下佐鳥村				下佐鳥町	

郡	村	石高
那波郡	西善寺村	一八六九・九〇〇
那波郡	東禅養寺村	一八四〇・九〇〇
馬群郡	勝島村	三〇一・九〇〇
馬群郡	宮地村	四六四・二〇〇
馬群郡	公田村	八五九・二〇〇
馬群郡	阿内宿村	九〇三・三〇〇
馬群郡	阿内村	三一七・一〇〇
馬群郡	横手村	四五一・〇〇〇
馬群郡	房丸村	三三九・五〇〇
馬群郡	徳丸村	三〇八・六〇〇
馬群郡	力丸村	八四八・四〇〇

郡	村	石高
馬群郡	上佐鳥村	一〇三四・九〇〇
馬群郡	勝島村	三〇一・九〇〇
馬群郡	宮地村	四六四・二〇〇
馬群郡	公田村	一〇〇・〇〇〇
馬群郡	茂右衛門分村	二九二・三三一
馬群郡	下公田村	四六六・八七九
馬群郡	龍門村	三〇一・八〇〇
馬群郡	阿内宿村	二三九・八五〇
馬群郡	矢島村	二三一・七〇〇
馬群郡	寺家村	二八五・五八〇
馬群郡	阿内村	三一七・二〇〇
馬群郡	横手村	四五一・〇〇〇
馬群郡	今宿村	一九六・四八〇
馬群郡	善光寺村	三三一・六八〇
馬群郡	新堀村	五五五・三三〇
馬群郡	下阿内村	四四九・八二〇
馬群郡	房丸村	三九・五〇〇
馬群郡	徳丸村	三〇八・六〇〇
馬群郡	力丸村	八四八・四〇〇
那波郡	両家村	六〇三・〇〇〇
那波郡	横堀村	三〇〇・〇〇〇
那波郡	西善寺村	一〇九〇・九〇〇
那波郡	山王村	四三〇・八〇〇
那波郡	東禅養寺村	一四八・一〇〇

郡	村	石高
馬群郡	上佐鳥村	一〇七八・六二四
馬群郡	勝島村	三〇六・三六六
馬群郡	宮地村	五一一・四一八
馬群郡	公田村	一〇〇・一九二
馬群郡	茂右衛門分村	三〇九・八九一
馬群郡	下公田村	五〇五・七七七
馬群郡	龍門村	三一六・九二六
馬群郡	阿内宿村	二五八・五一〇
馬群郡	矢島村	二四八・六四八
馬群郡	寺家村	三一七・四八八
馬群郡	阿内村	三一七・一〇〇
馬群郡	横手村	四五一・八一一
馬群郡	今宿村	一九六・四八〇
馬群郡	善光寺村	三三一・四〇八
馬群郡	新堀村	五七〇・八五四
馬群郡	下阿内村	四六三・一六六
馬群郡	房丸村	四一・二三三
馬群郡	徳丸村	三三・五五九
馬群郡	力丸村	八四九・六二三
那波郡	両家村	六〇六・〇八八
那波郡	横堀村	二〇二・三六一
那波郡	西善寺村	二〇四・六六七
那波郡	山王村	四九九・五五五
那波郡	東禅養寺村	一五〇五・九七七

16	18	16
17		
76		75
77		

郡	村	
馬群郡	上佐鳥村	
馬群郡	勝島村	
馬群郡	宮地村	
馬群郡	三公田村	
馬群郡	亀里村	
馬群郡	横手村	
馬群郡	鶴光寺村	
馬群郡	新堀村	
馬群郡	下阿内村	
馬群郡	房丸村	
馬群郡	徳丸村	
馬群郡	力丸村	
那波郡	西善村	
那波郡	山王村	
那波郡	東禅養寺村	
那波郡	中内村	

郡	村	
馬群郡	上川渕村	
馬群郡	下川淵村	
那波郡	上陽村	

郡	村	
佐波郡	上陽村	

郡	町	
馬群郡	上佐鳥村	
馬群郡	勝島町	
馬群郡	宮地町	
馬群郡	公田町	
馬群郡	亀里町など	
馬群郡	横手町	
馬群郡	鶴光寺町	
馬群郡	新堀村	
馬群郡	下阿内町	
馬群郡	房丸町	
馬群郡	徳丸町	
馬群郡	力丸町	
那波郡	西善町	
那波郡	山王町	一部は現在佐波郡玉村町
那波郡	東善町	
那波郡	中内町	

（平凡社『群馬県の地名』一九八七年刊）

二、衣食住について

「衣食住」については、それほど目立ったことは見当らない。その中からやや特長と思われる事柄についてとりあげてみることにする。

㈠ 衣　服

和服は大別すれば、はれぎとふだんぎに分けられる。いわゆる冠婚葬祭といわれるハレの場合に着るのがはれぎであり、ケの場合つまり常の日に着るのがふだんぎである。

こうした衣服の基本的なかたちから、生活の場面に応じて、着類の内容に変化がみられた。かたちや材料をかえて、その場面にふさわしい衣服を着るようになった。

これが、この地区では大別して五つに分れている。

もんつき、おきゃくぎ、ちょいちょいぎ、ふだんぎ、のらぎという。その区別は本文に記すとおりである。今ではちょいちょいぎとふだんぎのへだたりは、むかしほどではなくなっている傾向にある。むかしのように、和服を着る機会がずっと少なくなって、洋服がほとんど日常生活を支配しているためかとも思われる。和服はあらたまったときに着る程度で、ふだんぎとして着る人はほとんどみかけなくなった。それに応じて、ぞうりや下駄などの和装用のはきものも姿を消しつつある。

和服は稽古事とか、おまつりのときに着る程度である。ふだんの生活の中からほとんど姿を消している。親がなくなって「ゆずり」として、着物を子供たちに分けてやろうとしても、引きとりてがいなかったというはなしもある(小屋原)。和服と今の衣生活との関係を示す話であろう。

羽織を社会的な地位の象徴とした時代は過ぎ去ったといってよい。着物を着る機会は、いわゆる冠婚葬祭の場に限定されてしまったようである。

急速な洋服の普及である。最近では、身軽なスポーツウエアとかジーンズを着ている人も多くなった。

衣服の上での多様化と均一化が進んでいる。こうしたことは、後述の食生活の中にもみられることである。

こうした中で、本地区にみられた衣生活の中の特徴的な事柄をとりだしてみることにする。

明治以降の衣服の変遷については、『上川渕村誌』がその概略を伝えている。子供の場合でみると、洋服が一般化したのは昭和十年ごろからという。女子の場合には、洋服化はややおくれていたようである。

第二次世界大戦のころ、国策上男子の国民服、女子のモンペやかっぽう着着用ということは、いわば上からの服装の変化であった。なかでも女子のモンペの着用は、それまでのもとひきとはちがった便利さがあったという。しかし短期間にその役割は終ってしまった。

最後に、衣服関係で特徴的なはなしをまとめておく。

着物の格についてみると、大別すると前述のように五つに分けることができる。それも家の財力によってちがいがみられるという。たとえば、ちょいちょうぎについていえば、A家の経済力とB家の経済力に差があるとすれば、経済力に応じた程度のものをそれぞれの家の者が着て行くという。ふだんぎについても同様で、経済力が水準以上であれば、やはり水準以上のものを、ちょいちょいぎなり、ふだんぎ(つねっき)として着るというのである(野中)。金持の人はとうざんの繻天を着る者もいたという小島田の報告もその例である。

一枚の着物をどこへでも着て行くような例はほとんどみられないと思われるが、話の中には、「一見葬礼火事見舞」というのがある。一枚の着物をきて右のようなところへでかけて行くのだという（各地で聞く）。それとはべつに「「北国のかみなり」ということばも聞く。これは「きたなり」ということで、一枚しか着物を持っていない者のたとえであるという。

どうぎはむかしの男性の野良着であった。

膝までの長さであったから、しっきり（尻きり）ばんてん、こしきりじゅばん（下長磯）ともいった。ねじりずっぽうという呼び名もあった。その表現がそのものずばりである。これを着ていて仕事をしないでいると笑われたという。矢田の報告はおもしろい。

ひとえもののことをモノシ、木綿と絹のまぜたもののことはオオメといった。

洗濯物は一度たたんでから着るものという。着物を干すとき、竹竿にとおして干すが、竿からはずすときに、とおしたときと反対の方向にはずせといった。

着物をめぐっての嫁の里方ととつぎ先との関係にも注意する必要があるように思う。

嫁入りのときを中心にして、里方の負担は大きい。たんすの中に一生着られるだけの着物を用意してきた嫁さんもいたという。「たんすのこやし」になってしまう着物が多かったのである。もらい方でも、嫁に対しては一定期、着物をつくってやることが義務づけられていた。田植ぎもんや、生き盆、暮のせちきもんなどがその例である。こうした関係は次項にもあるように食べ物についてもみられた。

(二) 食べ物

食べ物も、その様子がここ近年の間に大きく変化している。

このことは食用作物の栽培の変化という外部からの要因も考えなければならないと思う。また、近年においては外食産業の急速な発展も、その地域の人びとの食生活の上にも大きな変化をもたらしているのである。

食べ物（食制）の変化については、現存する人たちの体験によっても確認することができる。

主食についていえば、麦飯から米の飯への変化であり、食事の仕方でいえば、めいめい膳である箱膳からチャブダイにかわり、さらに食卓で椅子にすわって食事をするという形に変化している。炊事の仕方もかまどで薪で釜や鍋をつかっての調理から、電気・ガスをつかっての炊飯器使用の形へと、大きく変化している。

食事の形も内容もすべて大きく変化したのである。

こうした中で、大きな変化といえば、ひきわり飯から押麦への変化と、米ぞっきの食事になったということであろう。ひきわりから押麦への変化は、だんだんにという変化だったから、その時期ははっきりしないし、場所によってもちがいがみられる。『上川渕村誌』は昭和十年代の後半、第二次世界大戦中のことだとしている。木瀬村でも同じころのようである。ひきわり飯は色が黒かったが、押麦をまぜた飯は白くて、のめっこかったという人もある。そのあと、第二次世界大戦末期から、戦後しばらくの間の食糧難をむかえる。昭和十五年ごろの新聞には、闇米で警察のやっかいになった人の記事が出はじめるようになる。それからしばやくたってから、米ばかり食べるようになる。昭和三十年代になってからのことである。年間を通して、いく度も米

の飯を食べることのできなかった時代を知っている人からみると、夢のような時代といえよう。

ここに報告されていることは、主として昭和十年代のころまでのことである。

この地域では、小麦が多くとれたから、粉食を食べることが多かった。

うどんとそばでは、うどんの方が余計食べた。ふだん（とくに寒い時期の夕食）食べるものとしては、おきりこみがあった。それは群馬県全体に分布している郷土食の一つである。おきりこみのことはにぼうとともいった。にぼうとということばは、中毛から東毛にかけて使われることばであり、ほうとうに関係することばであろう。ほうとうは利根・吾妻郡地方で使われることばであり、古い表現である。おきりこみ（おっきりこみ）という言葉は、利根川西の地域で使われている。

おきりこみ（にぼうとう）はいわば飯（めし）のたしとしてつくって食べたものである。補食のようにみられていて、主食として客のとてなしには、お客さんの特別の望みでもないかぎり出さない。小麦粉を水でこねて、にぎったものがねじっこである。ゆでて砂糖醤油でもつけて食べたり、ぞうにと同じように汁の中に入れて煮て食べる場合もあった。

まんじゅうは、特にきまった日としては、七夕、農休み、盆、月見などのときつくってあげる。餅とは対照的にあつい時期のかわりものとして作られている。

やきもちは、小麦粉を水でかためにこねてつくった、ふつうのやきもちと、少しやわらかめにこねてほうろくに油をひいて焼いたじりやきとあった。こじょうはんとして食べた。くず米の粉で作ったやきもちは上等だといい、一部の地区でつくった。本県では東毛地方では米の粉のやきもちの方が一般的である。

もちは主に寒い時につくが、「年中行事」のところでふれてあるように、正月三が日にかれいとしてもちを神仏に供えたり、食べたりしない家がある。正月に全くもちをつかない家も点在している。古い食習を示す事例であるといわれている。小正月にあかもちをつくところもある。（下長磯の小山家、小屋原の奈良家など）

十日夜に二色もちをつくということも、各地でみられる。夫婦もちともいう。もち米のもちとうるちの粉でつくったもちを二色つくった。（下大島）あるいは縁起もちといった。女の子が生まれたうちでは早くもちをつけといった。そうすれば、その子が早く縁付くことができるといった。（笂井）

ぼたもちは盆・彼岸とか、旧十月のおかまのるすんぎょう、秋の仕事が終ってからのあきあげのときなどにつくって食べた。「盆のぼたち」ということばがあるように、「あきあげぼたもち」とか「にわあがりぼたもち」ということばがあった。仕事でないときにぼたもちをつくったり、一方では、寒ぼたもちをつくるなともいう。寒念仏をするなともいうから、寒には仏事をさけるしきたりがあったのであろうか。

珍しいところでは、田植の前日にぼたもちをつくって食べた。これは田植仕事に力をつけるためといい、コウヂカラといった。上川や下川地区にみられる習俗である（一部木瀬地区でも聞いた―女屋・上大島）。また、田植のとき、クロヌリをするが、それがすむとクロヌリボタモチをつくって食べたところもある。（上佐鳥）

ぼたもちはご馳走の一つであったのである。

そのほか、盆のときの昼うどんのことをヒルバテということ、つけもののお茶うけのことをチャゾッペということ、からっちゃは麦ぼうちよりこわい、死ぬよりおおごとだという。それは県内各地で聞くこ

と。おおごとの内容がいろいろである。午前中のおやつのことをコビル（コビレ）、午後のおやつはゴジュウハンという。コビルはもうほとんどつかわないことば、小昼と小昼飯であろうか。

ザクニといって、芋、大根、人参、午房などをこまかく切って醤油味にする。おかずとも汁ともつかないもの。これを正月三が日のかれいとして食べるうち（小屋原向田家）もあるし、葬式のとき本膳におつぼに入れてだすところもある。けんちんとちがって油でいためない、とうふを入れない。

㈢ 住　居

この地域の「住居」については、特徴的なことがみられる。このことについては、昭和初年に専門家による調査が行われ、その調査結果が報告書にまとめられている。（『赤城南麓の民家』と『下川渕村誌』）

今回の民俗調査では、構造面での調査は行われずに、機能面を中心にした、いわば表面的な調査で、この報告からは本地区の「住居」の特徴をとらえることはできない。そこで、これまでの調査報告書によって補足的な事項をふくめて、「住居」についてまとめてみることにする。

まず第一に、上川・下川・上陽地区には、やしき濠といわれる屋敷の周囲にめぐらした環濠のあったことである。このことについては、下川渕地区の例が『下川渕村誌』の中にくわしく報告されている。矢島胖氏の報告である。本報告書の中では、西善と亀里の調査報告として「土地が低くて、排水の目的が強い」としている。『下川渕村誌』には「低湿地であるために、やしきの土盛りの跡としてできた場もあろう」と記している。現在ではかなり埋めたてられているが、むかしの形を残している例もある。その起源も近世以前までさかのぼることもできるという。（『下川渕村誌』）

第二のことは、赤城型民家のことである。

近年の家の建てかえによって、この型の民家はほとんど姿を消してしまっているが、かつては養蚕農家の典型としてのこの形式の民家が本地区には多く存在したのである。

矢島胖氏は『下川渕村誌』の中で、同地区の農家の母屋（主屋）は草葺屋根で、入母屋造りの屋根と四柱造りの屋根の混淆地帯に属するとした。草葺屋根のあと、トタン屋根から瓦屋根へと変化していったが、草葺屋根の時代に、その前面（平の部分）の中央を切りおとして、ちょうど少女のおかっぱ頭のようにした。これは屋根裏を養蚕（上蔟）のために利用するために、あかりとりと空気の流通をよくすることを目的として考えられたものという。昭和二年に、原田竜雄氏と原口幹三郎氏が赤城山麓の民家を調査され世に出た屋根型で、今和次郎氏によって「赤城型民家」と名付けられたものである。（昭和二十三年に『赤城山麓の民家』として発刊）

この「赤城型民家」は今回の調査地区にもかつてはかなり存在したのであるが、現在はその大部分が姿を消してしまっている。

この地区で養蚕がさかんであった頃の歴史をあらわすもので、明治初年に出現し、以来昭和初年の蚕室の出現までの間、大きな役割を果してきた民家型式であった。

この地域でもう一つの特長的な建物は、デエと呼ばれる「離れ」である。この建物もほとんど姿を消してしまったが、この地域では目立った建物である。戦争中は疎開の人たちに貸していたという例もあるし、隠居屋のようにしていたという家もあった。

床の間づきの八畳の間が二つとか一つあって、ふつうのすまいとはちがった形をしていた。江戸時代に役人の接待をしたところともいわれているが、その役目はよくわからない。「デエ」という名称が示すよ

うに、離れとしての役目をもっていたとも考えられる。それが伊勢崎から新田・太田方面のマガリヤにつながっていくのかどうか、きちんと調べないうちに、両方とも姿を消してしまったことは残念である。

もう一つ注意したい建物として、ウダツがある。これは燃料としてのもしきを収納しておく掘立小屋のことである。多くは、母屋の裏側につくられ、簡単な自家製の小屋である。場合によっては毎年つくりかえたともいっている(女屋)。これをウダツと呼んでいるのは、吾妻郡六合村とか新田郡新田町などから報告されている。本地区では、後閑・上増田・笂井・女屋などからの報告がある。後閑で聞いた話では、一人暮しのおじいさんが、母屋を明けわたして別の家族に住まわせ、自分では母屋にさっかけをかけて掘立小屋のようなところで寝泊りしていた。そのおじいさんのことを近所の人は「ウダツのおじいさん」と呼んでいたという。

防火壁としてのウダツは駒形町にみられたが、改築のためになくなってしまった。

縁側のすみのことを、サモトという。縁側から出入りすることを、サモトあがりというところがある。ここから出入りするのはいわゆる賓客で、坊さん、ご祝儀のときの一見客や嫁さん、それに死人(出棺)であった。そのために、ふだん子供が縁側から出入りすると、よくおこられたという。玄関はふだんつかっているところなので、新客や大事なお客さんは、とくに出入り口を設けて、そこから家の中へ出入りしてもらったのである。

軒下の雨だれおちのところ(アマオチ)を大事にすることも注目される。下増田では、このアマオチのところを三途の川と呼んでいた。ここへ小便してはいけないといったり、盆のときには、お茶をながしに流さないで、アマオチのところにまけろということも、本地区で広く聞くことである。ご先祖様のあとについてきた無縁仏がアマオチのところにいるからだという。

アマオチは、家と外界との本当の境界と考えられるのである。

小正月のあずきがゆをうすめて、うちまわりにまいて、長虫などが家の中に入らないようにすることが、この地域内の各家庭の行事として行われている。このことも、家と外との境界を意識してのことと考えられる。

家の中のこととしては、床の間・神棚・ヘヤのことなどに注意したい。

床の間は、どこのうちでも奥座敷(コザ)についてある。そこには天照皇太神宮の掛軸をかけておく家が多かった。正月のお供えものも、大きなおそなえ餅を飾るという家がある。神棚とは別に神聖なところとされた。単なる座敷の飾りではない意味をもたせていた。

奥座敷はコザといわれ、一番上等の座敷として、賓客を迎える場所であり、行事のときの宿の役目とか、祝儀のトリムスビ、葬儀のときの祭壇もここにしつらえた。畳の敷き方も他の部屋とはべつの形にした。ヘヤとの境はふすま、オモテザシキとの境はオビドで仕切った。床の間にならんでちがい棚を設ける家もある。

ヘヤはナンドともいう。かつては、非日常的な、ほとんど使わない部屋という印象があった。年寄り夫婦とか、若夫婦の寝室はヘヤであったともいう。

ここではお産をし、また死者の湯灌もしたのである。産湯とか湯灌の水を捨てる場所もあった。床板をはがして、縁の下に捨てるようになっていた。

「神様をまつらない」という上佐鳥からの報告は、ヘヤの性格をよくあらわしているように思われる。

神棚は田の字型の住まいだと、オモテザシキとかオモテザシキの奥の居間（正式の名称がなくて、コタツノマという家もある）にしつらえている。神棚の上は人があがらないようにと、天井を高くしていた。ここには大神宮様を中心にいろいろの神様をまつっていた。各所の神様を参拝してうけてきたお札もここに飾っておいた。正月に大きいおそなえ餅をあげた。家族がなくなったときは「宮川」をはって目かくしをすた。子供の名づけのときも、神棚に供えた候補の名をえらんだ。きまると神棚の下に、半紙に名を書いてはり出した。信心深い人は、毎朝神棚に手を合わせている。

仏壇は大てい神棚の下にまつっている。

ここにも、朝夕供え物をし、家族の無事を祈り、また感謝している。

えびす・大黒様は神棚とはべつにまつるのがふつう。神棚のすみにまつるとか、その部屋に神棚とは反対側にまつったり、お勝手にまつったりしている。

ながしのところには、オカマサマがまつられている。家によっては、稲麦の初穂をあげたり、旧十月のオカマノルンズギョウのときにぼたもちをつくってあげる家もある。稲荷まつりの日、かまじめをする家もある。オカマサマとエビスサマは神無月には神様の留守を守る神（留守神）と考えられている。

むかしの家にはオカッテにいろりがあり、ヘッツイがあった。ここも毎日の生活の関わる場所として神聖視した。

火の神様としての三宝荒神様は、神棚にまつる家もあるし、お勝手にまつる家もある。

台所には下大黒があって、そこに棚をつくって、馬の神様としてのオソウデンサマをまつっていた。正月とか、馬のとりひきをしたときにオソウデンサマをまつった。

台所にはオコンマヤとウマヤがあった。

オコンマヤは「奥馬屋」のことであろうか。ここには米びつ・粉びつ・味噌樽・漬物樽・臼などがおかれていた。上川・下川地区では、ここをソウヤと呼んでいる。木瀬地区で疫神の宿をする家では、ここにチョウパシをさげて、疫神をまつったのである。

むかし間引きをした子は、オコンマヤの味噌樽の下に埋めたという話も聞いた。

むかしは、アガリハナの板の間で夜なべの縄ないをしたという。

ウマヤは大戸をくぐって右側にあり、毎日家族の者は馬と顔を合わせて生活したのである。

むかしはニワトリの巣を台所の天井裏につくってやったという。自家用のタマゴをとっていたのである。

台所の天井裏にはツバメの巣もあって、ツバメの訪れを歓迎していた。

庭は干し物の場所として大事にした。大百姓の家では、百枚からのむしろを敷いて籾干しをした。ツボ庭は奥座敷の前につくった。ここも神聖な場所として、暮にはご幣をたてた。大掃除のときは、神様・仏様の一時安置場にもなった。モチ・モッコク・モクセイが植えてないと、本当のツボ庭ではないといわれた。

北風に備えて屋敷の裏に防風林をもっていた。かしぐねがあり、竹やぶがあった。

イヌイのすみに屋敷稲荷がまつられ、家の守り神としれた。

屋敷のタツミとかイヌイのすみに土蔵のある家は、かつては身上のあることの象徴とされた。

三、生産・生業

「生産・生業」の形は第二次世界大戦後大きく変化した。ここ十年来の変化はさらに加速されているようにも思われる。

こうしたことから、「生産・生業」に関する民俗も大きく変化している。すでに過去のものとなっているものが多い。

特に農業の機械化・集団化ということは、今後ますます進行していって、今よりもっと大きな変化を将来にもたらすと考えられる。こうした中で、養蚕業の後退は特にいちじるしい。ここ二、三年の間に、養蚕農家は極端に減少して、ムラ（大字＝町）によっては二、三軒という状態で、それまで定例に行ってきた養蚕神のまつりをやめたというところさえある。（笂井）

今回の民俗調査で聞きとり調査によってとらえたことは、農業をさかんに行っていた昭和十年代ころまでのことが中心になっていると考えられる。現在のような機械化農業になる前の道具中心の農業の時代のことである。

明治・大正生まれの人を話し手の中心としてお聞きしたこの地域の農業の話が中心になっている。

ところで、木瀬村のうち一時城南村に入っていた上増田・下増田・小屋原・笂井・下大島の五大字については、昭和四十九年度に県教委により民俗調査が行われ、その報告書が昭和五十年に刊行されている。今回の調査より二十年ほど前に民俗調査が行われているのである。その報告内容についても若干参考になる。そのこともあわせて、農耕関係を中心にした生産・生業の特長的な事項をとりだしてみることにする。

㈠ 稲作関係

○**種籾のこと**　種籾をとるために、よさげな穂をとっておいたという。稲の穂を手でこいでみて、一番上に出たものを種籾とした。

何度もそれをくりかえしてえらびだしたという。

むかしの人のいうには、籾種は北から交換してこい、上郷（かみごう）からもって来いといった。

麦（小麦）の種は逆に下郷（しもごう）からえらんで来いといった。

山水（つめたい水）でつくられた稲を種にしろといわれた。勢多郡宮城村とか、富士見村あたりの種籾と交換した。十kgくらいの籾をもって行って、八kgくらいの籾をもらってきた。

種籾の交換前は、穂をしごいて種籾をとるやり方だったという。

○**ノウヂカラ**　上川・下川地区を中心に、ノウヂカラということを聞いた。

二、三の例をあげてみる。

田植前に各家ごとに餅をついて食べるとか、ぼたもちをつくって食べるとかした。それをノウヂカラといった。（上佐鳥）

田植の前日に、米の粉の餅をついて食べた。田植をするについて、力をつけるためという。こもちのおんぴんを食べたり、ぼたもちをつくって食べたりした。それはうちによって食べものがちがう。昭和十年代までやっていたこと。これをノウヂカラとか力餅とかいった。（後閑）

田植の前の晩にご馳走をした。むかしは餅をついて食べた。これをノウヂカラといった。（横手）

夏は疲れるのでノウヂカラをつけるといった。田植の前にぼたもちをつくって食べた。これから仕事が忙しくなるから、力をつ

けるためにぼたもちをつくって食べるのだという。日は適当の日。

（亀里阿内宿）

このほかにも報告がある。趣旨は皆同じである。ご馳走を食べてどの位力がでるかわからないが、大仕事にとりかかる前の気持の区切りとしての意味があったように思われる。

○**共同田植**　これは各地で行っていた。ただその組み方がいろいろであった。労力のだしあいで、そこには平等の原理が働いていた。二、三軒で助け合うのはエエで手間賃はとらず、手間に対しては手間で返した。

オサナブリも共同で行った。

むかしは、みんな一緒に田植をしていて手ののろい人はまわりから植えこまれるようになってしまう。よそでは、「田の神にまつられる」などと、しゃれたことをいっているが、この辺では、「ナカツチマにされる」とかいった。また、個人で田植をしていて、ムラ一番おそくまで田植をしていると、「あのうちは足洗い田だ」などといわれた（笂井）。しかし今では、機械化組合ができていて、みな機械が植えてくれるから、田植のはじまりと終りに差がなくなって、そんなことはいわれなくなった。その代りに、働き手が高齢化してくると、自分では機械の操作ができないから、すべて機械まかせになって、その費用も大変だという。手植その田植がほとんど姿を消した昨今の稲作農業（麦作も同様）にそんな問題点も生まれているのである。

○**苗代祝い**　苗代についてもタツの日をさけた。苗代をしてから四十日目の苗を植えろといった。

苗代をした日には、小正月のときのかゆかき棒をとっておいて、それを苗間の水口にたてることも、この辺一帯の共通した習俗である。野中では、このかゆかき棒にあられをはさみ、あられと大豆を一緒に炒って水口に供えたという。苗だちがよくなるからだという。

苗代祝いといってこの日、赤飯などして祝った。（下増田・下阿内）

あずきがゆをするところもあるし、うどんをするうちもあった。（後閑）

夕食のとき、赤飯をふかして祝った。赤飯は神棚・稲荷様・仏様・ながしのところのおかまさまにあげた。背戸口の上の屋根裏にかましめをつくってあげておくが、そこへも赤飯をあげた。苗代をするのは八十八夜のころ。もみふりをして、四十五日目くらいの苗を植えた。

（上佐鳥）

なお、水苗代のクロにカラスオドシとして、かかしをたてた。オカナエのときにスズメヨケをしたという。（野中）

○田植唄　田植をしながら田植唄をうたった。

田植唄には、朝・昼・夕方と三種類あった。

朝の唄

朝霧に　髪結いあげて　イヤノウ　花つめば　花つめば
男が招く　イヤノウ　花はたまらぬ

昼の唄

今日の日の　時うつ鐘は　イヤノウ　いくつうつ
七つも八つも九つも

夕方の唄

夕暮に　浜辺を行けば　イヤノウ　千鳥鳴く　千鳥鳴け
イヤノウ　声くらべ

苗を植えながら田植唄をうたった。

田植をする人から「腰がいてえから歌ってくれ」といわれた。田植唄をうたうと、仕事にはげみがでたという。仕事にはげみをつけるために歌ったものである。

なお、先立って田植唄をうたう人には、日当が倍出たという。（後閑）

○**初田植**　田植をはじめるとき　特別の行事をする家（場所）がある。小屋原では赤飯をふかして神様にあげたり、こじょうはんとして田へもって行って田植をしている人に食べてもらったという。朝倉では、田植をはじめるとき、主人が田の水口に三株（あるいは五株）の苗を植えてから植えはじめるという例があるという。この地域では、初田植については、はっきりした儀礼はないようである。毎年初田植をする田をきめている家もある（新堀）。その田は水の便がよく、朝飯前に植えきるくらいの面積であるという。

○**オサナブリ**　田植が終ってお祝いをするのは各地共通で、報告も多い。

下阿内では、オサナブリはオカマサマをまつるといって、オカマサマの前に供え物をする。西善ではオカマサマをまつるのだという人と、田の神様をまつるのだという人とあった。野中の明治十三年生まれの人のはなしでは、オサナブリはオソウデンサマに供え物をするのだという。オソウデンサマは、百姓の神様だといっている。

田植の終ったあとの祝いとしてのオサナブリは、報告にもあるとおり、様々な形で各家庭で行われていたものである。

○**田植を忌む日**　この地域ではタツの日と半夏の日となっている。特にタツの日をきらう傾向が強い。タツの日は坊さん（お寺）の田植をする日だというところもある。

半夏の日に田植を忌む理由については、別項のとおり、働きすぎの人物の伝説が伝えられている。

○**初穂**　稲刈りをはじめるとき、稲の株を一株こいでくる。これをおかまさまにしんぜた。根を上にして逆さにつるしておいた（後閑）。のどにさかなの骨がささったとき、初穂でなでるとさがるといった。（上佐鳥）

初穂は稲だけのところもあるし、稲も麦も両方とってくるところもある。（上佐鳥）

○**刈りあげの祝い**　稲刈りの終ったあとの刈りあげ祝いも、各地の各家庭で行われていた。木瀬地区では、カッキリボタモチをつくって祝ったという報告を聞く（上大島・小屋原・下長磯）。（駒形ではこれを刈りきり祝いといい、そのときつくったぼたもちを、かりきりぼたもちといった。カッキリボタモチとは刈りきりぼたもちのことである）

小屋原では稲刈りが終ると、鎌あがりといって鎌をよく洗って台所にかざって、そこにぼたもちを供える家もあった。なお、上増田では、田に地干しにした稲をまるききると、まるにあげ祝いといって、小豆粥をして祝ったという。

○**ニワアガリ**　稲こきをして籾をむしろにひろげて庭で乾燥した。むしろ一枚に籾が一斗二升くらいのった。庭の広いうち（大百姓のうち）では、一庭百枚くらいのむしろをひろげた。ふつうの家で五十枚くらいだった。（後閑）

籾が干しあがるとお祝いをした。それはこの地域で一般的に行われたことである。それをニワアガリといった。このとき、ぼたもちをつくって祝うのも各地区共通である。このぼたもちをニアガリボタモチといった。好き人はこのぼたもちを重箱につめてもらって里へお客に行ったという（後閑）。駒形ではこのとき餅をついて祝ううちもあった。これをニアガリモチといった。

○**新米のこと**　新米ができると、これを炊いて大神宮様と仏様にあげてから食べた。これはこの地域に共通にみられる習俗である。

水車でついた新米は、水車番の人に、「水神様にあげてください」といって一升ほどさしあげたという。（上増田など）

下増田の事例をあげてみる。新米を水車でついたとき、新米を一升、

水車番の人においてきた。それをハツホガケといった。これは水車番の人に世話になったお礼ということであった。

新米のことをホガケといって神様に炊いてあげたり、親に食べてもらったり、嫁さんが里の親のところへ持って行ってやることは、赤城南麓地方に広くみられたことである。

(二) 麦作について

麦作についての儀礼は、稲作に比してずっと少ない。

その中でこの地域で共通にみられることは、麦まきの終った祝いであるアナップサゲのこと。そのほかには初穂のことがある。

これらのことについては、本文に報告例がないので、若干の補いをしておく。

○**アナップサゲ**　麦まきが終ると、アナップサゲといって、ぼたもちをつくっておかまさまにしんぜて祝った。ぼたもちを田へもっていって供えるようにことはしない。(上増田)

麦まきが終った祝いに、ぼたもちをつくるとか、餅をつくとかして祝った。これをうちの神様にお供えした。(小屋原)

麦まきが終ったとき、アナップサゲといって、おはぎ(ぼたもち)をして祝った。そこではアキアゲを一緒にして、おはぎを嫁さんに持たせて里へお客にやった。(下阿内)

麦まきが終ったときには、ヤキモチをつくって食べた。これをネズップサゲのヤキモチといった。(下増田)

麦まきが終った十二月のはじめのころ、阿内宿だけのおまつりで神社にはのぼりをたてた。これを(ムギマキ)ゴジンジといった。この日はぼたもち(あるいは餅)。これをゴジンジダスという。または赤飯をつくって神様にあげた。嫁さんにはこれをもたせて里へお客にやった。(亀里阿内宿)

(ムギマキゴジンジといわれる神事は、旧佐波郡の一部に行われているが、阿内宿のこの行事と関連があると思われる。阿内宿には明治の末に亀里字諏訪にある諏訪神社に合併された女体神社がまつられていた)

○**二月からの畑**　「二月のからっぱたけ」という諺がある。(上増田)これは県下各地で聞く諺である。旧二月のころ、麦畑がまだ青くなっていないほうがいいということである。このころ、畑が青々しているのは、ほきすぎでよくないといった。

○**麦ふみ**　麦ふみをよくやった。麦の徒長をふせぐためという。麦はふめばふむほどよいといった。「七回麦ふみすればこやしいらず」といった(後閑)。ふつうは三回くらい麦ふみをした。暮のうちに一回はした(後閑)。年の暮から二月の末ごろまでやっていた。「もりっこに麦ふみさせろ」などともいったという(上増田・後閑)。もりっこ(子守り)は体重があるからだという。

○**さげ穂**　稲と同じように初穂をとってきておかまさまのところにさげておく家もあった。

小屋原では、稲も麦も刈りはじめのとき二、三本の株をとってきて、お勝手のおかまさまのところにさげておいた。これをさげほといった。のどに魚の骨がささったとき、この穂でなでると骨がさがるといった。

○**御荷鉾の三束雨**　むかしは麦を刈って二日間くらいは田圃に干しておいた。平ぼしにしたものをまるいて、むかしは馬で家に運んだものである。ところが、麦を田に干しておいて、雷雨がくると大変だった。特にこの辺からみて西南の方角からくる雷は早かった。これを「御荷鉾の三束雨」とよんでいる。雨雲が出たと思っていると、麦を三束もまるかないうちにやってくるので、そのように名づけたもの(女屋)。

この辺一帯で聞くことばである。

○**穂打ち唄**　むかしは麦の脱穀はヤキボにしたり、サナブチにしたり、かなできにしたり、脱穀機を使ったりした。

大麦はノゲがあってなかなかおちないのでボウチボウでたたいておとした。夏のあついさかりに庭で何人かならんでボウチブチをした。近所の人をたのんで共同でした。

このときボウチ唄をうたった。

●赤城山から鬼がけつつんだして、なたでぶっきるような屁をたれた。ボッコメ、ボッコメ。（上増田・後閑）

●おらがとなりの味噌玉娘

嫁へ行くとて洗濯までしたが、へそが出べそでやれきらわれた。

ア、ドッコイ、ドッコイ。（後閑・上増田）

○**二毛作**　むかしは、この辺では稲の裏作として小麦・大麦を、田があいているところがないくらいつくった。小麦の方をたくさんつくった。小麦は、小麦粉にして食べたり、粒のまま売ったりした。

大麦もつくった。これは水車でひきわりにして食べた。ひきわりは昭和のはじめのころまで食べた。そのあと押し麦を食べるようになった。麦にすじが残っていたので、押し麦のことはふんどしといっていた。押麦をまぜたご飯を、子供は虫がいるからいやだといった。押麦が虫のように見えたのである。

むかしは、米の中にたくさんひきわりを入れて食べていたので、米粒が勘定できるくらいだといった。（後閑）

○**アキアゲ**　一年間の農作業が終ったあと、アキアゲという行事があった。これは、上川・下川・上陽・木瀬に共通する行事であり、県下においても広く行われているとのである。

農家にとっては一年最後のしめくくりのような行事（祝いごと）である。本文には例がすくないので、補いの意味も含めてもうすこし、各地からの報告をのせておく。

麦まきが終って、麦のさくきりまで終ってから、アキアゲをした。十二月になってからのことである。このときはぼたもちをつくって、それを重箱につめて、嫁を里へお客にやった。嫁は里へ泊ってきた。たいがい一晩であった。二晩泊ると長いといわれた。

かえりに、嫁は実家からぼたもちをもらってきた。このときはもらい方くれ方双方でぼたもちのやりとりをした。

なお、アキアゲのとき、姑が嫁さんに「あきるほどいろ」というと、これはその嫁さんが気にいらないということであったという。（後閑）

もみすりが終ると、ムギまきになった。ビクに堆肥（こやし）をいれて、馬で田圃まではこんだ。こやしはこやしつみざまで手でつんでまいた。

秋の仕事が全部すんでからアキアゲになった。ムギまきまで終りにしてアキアゲをした。ぼたもちをつくって、嫁さんに持たせて里へお客にやった。一晩くらい泊ってきてもよかった。「早く帰って来い」と嫁さんは姑様にいわれて行ってきたという。（上佐鳥）

こなしもんが終るとニワアガリといって、ぼたもちをこしらえて祝った。これをニワアガリのぼたもちといった。このときは嫁さんは里帰りをしなかった。そのあと、麦まきでも終ると、嫁さんは里へぼたもちをもって、お客に行った。これをアキアゲといった。このときは里へ泊ってきた。かえりに里からもぼたもちを重箱につめてよこした。（東善）

干しもんを干しあげた祝いがニワアガリ。

田圃の仕事が終った祝いはアナップサゲといった。アナップサゲの祝をしないとモグラを田をもぐるといった。あぜなど穴を掘られると、あすこんちはアナップサゲをしなかったんべといわれた。

アキアゲは田圃の仕事が終った祝いで、このとき嫁さんはぼたもちをつくってもらって里へ帰った。

「盆のぼたもちはちっちゃいほどごちそうだ」といった。「アキアゲのぼたもちは、でっかいほどごちそうだ」といった。（亀里阿内宿）

麦まきが終るとアナップサゲといって、ぼたもちをつくって祝った。このとき嫁はぼたもちをもって里へお客に行った。里からもおかえしにぼたもちをよこした。やったりとったりであった。嫁は里へ泊ってきた。秋が終ったということであった。むかしの嫁さんは、このときを楽しみにしていたという。（上増田）

(三) 養蚕のこと

調査地域に共通することは、かつては米麦養蚕を中心とする純農地帯であったことである。現在は農業経営もずい分様変りしているが、収入の中心として養蚕業が位置していたのである。そのために、養蚕関係の習俗については多くのことが伝えられている。

やや断片的ではあるが、二、三の地区からの報告があるので、補足的な意味をふくめてとりあげてみることにする。

内容的には、技術的なことよりも、儀礼的なことが中心になっている。

○養蚕のこと　むかしは、春蚕と秋蚕の二回だけしか飼っていなかった。このあと、晩秋蚕を飼うようになった。

春蚕は五月四、五日ごろはきたて、六月十日前にまゆの出荷をする。

秋蚕は八月一日ごろはきたて、八月下旬にまゆの出荷。

晩秋蚕は八月の末か九月一、二日ごろにはきたて。まゆの出荷が九月の末か十月四、五日のころ。

桑と人夫の関係で日どりは若干変更になる。養蚕のさかんな時分、年間に五回も養蚕をした人もあった。

養蚕をさかんにするようになってから、屋根裏に上族するようになった。そのために、むかしのわら屋根の正面（平の部分）の中央あたりをきりあげて（きりあげ二階）、あかりとりにした。養蚕のためにそうしたもの。このような屋根型のことを、昭和の初年、民家研究家によって「赤城型民家」と名づけられた。赤城山麓地方の養蚕農家にこのような民家が多くみられたからという。このことは別項に記したとおりである。

この地区の農家の主なる収入源は、米・麦・養蚕であったが、その中心（一番）が養蚕収入であった。（小屋原）

むかしは、春蚕・秋蚕・晩秋蚕と三回はきたてた。この三回で百貫のまゆがとれれば大がいこのほうだった。かいこの収入がいちばんだった。そのために養蚕は身上がけの仕事であった。かいこがはずれると、まゆ代をみんな肥料屋にとられて困った。（上増田）

一回に百貫もまゆをとる家は、大がいごとされ、ムラに何軒もなかった。（小屋原）

むかしは蚕を三回はいた。春蚕・秋蚕・晩秋蚕の三回であった。そのあと晩々秋蚕をするようになって、年四回になった。

蚕をさかんにする頃は、居宅は養蚕室兼用であった。家族の寝るところがないくらいだった。蚕糞の中に寝起きをしていた。

この辺で農家の収入の中心は、まゆ・米・麦であった。その中ではまゆの収入が一番だった。大きな農家で一期に百貫のまゆをとった。

（後閑）

○蚕神信仰　養蚕がさかんだったころには、かいこがあたるようにと、方々の神様におねがいした。本文の中に記されている豊蚕祈願の神としては、柴（伊勢崎市）の稲含様、上佐鳥の一本杉正平稲荷、沼田市

の迦葉山がある（亀里龍門）。ほかに元総社町の総社神社があげられている。（上増田）

小屋原町の井野安治家では、五月の八十八夜の日に、伊勢崎市柴町の稲含様へおまいりに行ったり、茨城県の蚕影神社へおまいりに行ったという。ここへは毎年おまいりに行って、お札をうけてきて蚕室にはっていたという。小正月のときとか初午のときには、まゆ玉をつくって、蚕があたるようにとお祝いをした。蚕の神様はおしらさまだという。この辺では、かつてはまゆが現金収入の中心であった。そのために、養蚕の時期でなくとも蚕の神様には気をつかっていた。たとえば、一月十四日の晩には蚕神様をまつるが、この日は針をつかうなといった。針を使うと、かいこを飼っているとき、かいこにアリがつくといってさけた。また、一月四日には初嫁が里帰りをするが、このとき嫁さんが里へ泊ってくると、かいこがはずれるといって泊らないで帰ってきた。八十八夜のときには、桑が霜害にあわないようにと、草餅をついて祝った。（小屋原）

小屋原の布施川忠之助家では、一月十四日におかざりかえをする。このときまゆ玉をつくってナラの木にさしてかざった。この晩のことをおしらみまちといった。うどんをぶってあげた。おしらさまは蚕の神様である。十六日にまゆ玉をさげた。このことをまゆかきといった。笊井でも十四日にまゆ玉をあげ、十六日にかざる。このまゆ玉をさげることをまゆかきといっている。

亀里町矢島の主代家の「家礼扣」にも一月十四日におかざりかえをして、餅かざりをするとある。「御かざりかいは五穀豊作を祈る祝なり」とある。十六日にこの餅かざりをとるとあって、これを「まゆかき、又は取入れ」といっている。

上佐鳥では、八十八夜のときに赤飯をして祝った。九十九夜のときは、霜除けの餅といって草餅をつくった。「九十九夜のわかれじも」といった。上佐鳥には一本杉の稲荷様がまつられていて、八十八夜の日が祭日。この日蚕を飼っている人はおまいりして「かいこさんをたくさんとらせてくれれば、あぶらげを百枚あげます」といっておねがいした。（上佐鳥）

後閑町では、蚕の神様としては絹笠様を信仰していた。どこの絹笠様というのではなく、この神様のまつられているところへ行って掛軸を買ってきて、床の間にかかけておいて、小正月とか初午のときなどにおまつりした。上沖町の大黒様とか、大間々の貴船様にも、蚕がとれるようにとおまいりに行った。二月の初午のときには、米の粉でまゆ玉をつくって蚕の神様にあげた。蚕の神様のことは、絹笠様とかおしらさまといっている。五月の八十八夜のときには、草餅をついた。霜がふらないようにと霜除けの餅であった。また、この日、上佐鳥の一本杉の稲荷様へおまいりに行った。ここの出店でさるとかぬかぶるいとか、養蚕に使う道具を買ってきて、神棚にあげておいた。使うときおろした。そうすると、まゆがたくさんとれるといった。（後閑）

○蚕の祝い　春蚕のときにかぎって、養蚕の期間中、いろいろの名目でかわりものをして祝った。

小屋原では、ふな休みのとき餅をつくって祝った。これをふなもちといった。また、かいこが上蔟したときも餅をついて祝った。これをおこあげ祝いといい、餅のことはおこあげもちといって、あんぴんをつくって神様にあげたり、養蚕を手伝ってくれた人のうちへくばったりした。（小屋原）

上佐鳥でははきたて祝いとして草餅をつくった。ふなやすみのときはふなもちをついて祝った。かいこが上蔟すると、おこあげ餅をつくって祝った。かいこあげを手伝ってくれた人のところへこの餅をくばっ

た。また、嫁さんはこの餅をもって里へお客に行った。（上佐鳥）

後閑でも春蚕のとき、いろいろの祝いをした。蚕のはきたて祝いは、する家としない家とあった。五月三日ごろの八十八夜のころがはきたて。このときは赤飯などをふかして祝った。

ニワヤスミ（四眠）のときには、まるめもんをつくって祝った。ふつうは餅をつくって祝った。

二眠とか三眠のときもふかしまんじゅうとか赤飯などをして祝った。

はきたてから二十五、六日くらいたってから上蔟する。かいこあげのときには、おこあげ祝いといって、餅をついて祝った。この餅を近所のうちへくばったりした。多いときは十重箱くらいくばったこともあったという。この餅は大神宮様、かいこ神様、仏様にお供えした。かいこ神様には、蚕室のこのめの上に「かいこ神様にあげます」といってあげた。また、おこあげ餅は嫁さんがもって里へお客に行った。おかいこあげを手伝ってくれた人とか、親戚にもくばった。親戚同士、日をかえてやったりとったりした。（後閑）

上長磯でも、春蚕のとき、ふなやすみ（三眠）のときふなもちをついて祝った。また、かいこあげのときも祝った。このとき嫁さんは骨休めに里へお客に行ったりした。はきたての祝いはとくにしなかった。（上長磯）

○農休み　七月十五日前後三日間農休みがあった。このときはふかしまんじゅうをつくって祝った。文字通り仕事は休んだ。

小屋原では、七月十四日・十五日・十六日を農休みとして、三日間仕事を休んだ。これは区役場からふれがでて休んだ。この日は、朝飯前草でも刈ってくれば一日休んでもよかった。

この日のごちそうは、ふかしまんじゅうときまっていた。（むかしはゆでまんじゅう）今は農休みの代りに、ムラ中で納涼祭をしている。

上長磯では、養蚕（初秋蚕）の進行具合と稲作との関係をみて、伍長会議を開いて、時の区長がきめて区内にふれたという。時期は八月下旬で、初秋蚕を上蔟させておくとか、まゆだしをすませてとか、蚕の様子をみて日どりをきめたという。このときは、近くのムラとのかねあいも考えて、隣接するムラの区長と相談してきめることもあったという。同じ日に休みにするということである。農休みは三日間。この日はふかしまんじゅうをつくって祝った。初日はまゆだしをしたあと、このめをはずすのに半日くらいかかり、半日休みになることもあった。あとの二日がまるまる休めたという。（上長磯）

笂井でも初秋蚕とのかねあいで日どりをきめたという。ここでも伍長会を開いて、区長がきめてふれるという形をとっている。時期は八月の下旬で、小学生の夏休みがまだ終らないうちにした。農休みは八月二十八日から三日間。この日はふかしまんじゅうをつくった。嫁は里へお客に行き、わかいしゅは町へ遊びに行った。なお、これより前は七月に農休みをした。盆行事との関係で、日どりがかわったわけである。（笂井）

亀里でも、もとは七月に農休みをしていたが、盆の日どりが八月になったので、八月に農休みをしている。日どりは区長が中心になってきめた。初秋蚕と田の草取りとの関係をみて日をきめてふれをまわした。三日間。ふかしまんじゅうをつくった。嫁は里へお客に行き、奉公人にもひまがでた。かわいしゅは町へ遊びに行った。それぞれ親（主人）から小づかいをもらった。（亀里）

天川大島では愛宕神社のまつりが八月二十三、四日なので、これをふくめて五日間農休みとした。初秋蚕は上蔟がすみ、梨も早生のあかっぽのあと、中手の長十郎の出荷がはじまる前の時期であった。子供が

中心になって神社に灯籠をつけた。農休みはふかしまんじゅうをつくった。（天川大島）

四、信仰について

信仰は神社関係・仏教関係・民俗信仰関係と多岐にわたる。内容について一々とりあげることはむずかしいので、全体を通してみて、特長的な事項をとりだしてみることにする。

○**屋敷神**　この地域では、屋敷神としては稲荷様がふつう。祭日は十二月十五日。もとは旧十一月十五日（「主代家年中行事記録」による）。稲荷様のほかに、八幡様や摩利支天様などをまつっている家もあるが、ごく少数である。もとはわら宮（オカリヤ）であったが、今は大体石宮となっている。供え物は赤飯といわし、その他（豆腐）。この供え物を子供にさげさせた。上大島ではこの子供のことをこんこんさまとよんでいるから、稲荷様ということである。

○**地蔵信仰**　各地で地蔵様をまつっている。

石の立像が墓地内とか辻に立っている。

かつて地蔵信仰がさかんであったことを物語っている。

現在でも、各地で子供たちが中心になって地蔵祭りを行っていることは、報告のとおりである。

そのまつり方は、利根西の旧群馬郡地方とちがって、地蔵様への参道に灯籠をたてるという形をとっている。この灯籠をたてることを中心に、子供たちの自治生活が行われたのである。

このとき灯籠の柱として使う竹を、ムラ中まわってもらっていたが、行事のあと、この竹を売って、子供たちは子供組の費用にした。

おまつりにくる人がじりやきをもってきてあげる地蔵様もあって、じりやき地蔵と呼んでいるところもある。

これらの地蔵様の中で、小島田の地蔵様は七月二十三日のおまつり（宵祭り）のとき、むかしは地蔵様近くの広場に、ムギわらで小屋をつくって、これを燃したという。これと同じことは、荻窪の地蔵祭りのときにもみられたが、夏のおたきあげとして珍しい例である。公田の墓地内に祀られている岩船地蔵も珍しい。

○**観音信仰**　観音信仰もさかんであった。

特に馬を飼っていた家では、石山の観音様や、埼玉県の東松山市の上岡観音に対する信仰もさかんであった。また、不幸にしてなくなった馬の供養や荷馬の安全を祈って、屋敷内や辻などに馬頭観音塔を建てることが多くみられる。今も、路傍に立っている馬頭観音塔は、荷役や馬耕に使った馬の働きを示すものである。女屋町と下長磯を通じたかつての東街道が桃木川を渡るところに観音橋が架せられていた。女屋町字観音に祀られていた、馬頭観音に因むもので、今は国道五十号線が桃木川を渡るところに架っているのが新観音様である。

観音信仰として目立つのは、駒形町の長寿観音と、上大島町の百体観音である。駒形町の長寿観音はぽっくり観音として知られ、参拝者も多いという。上大島の百体観音は昭和八年に改築された観音堂内に百体（一部欠）の観音像（木造）をまつり、同地の老人会有志による奉賛会の人びとによって、毎月十六日に十六念仏が行われている。宝暦年間に奉納された観音像もある。

亀里町矢島の観音様は、安産祈願にご利益があるという。おまつりは二月十七日と八月十七日。矢島地区の人がまつっている。八月のおまつりのとき灯籠をつけてまつる。これは大人のやること。身持ちの人には腹帯をさずけていた。無事に安産できた人は、むかしは二倍にして腹帯を返したという。今はおさいせんをあげている。

二回のおまつりにはお札を出している。

ここの観音様は七観世音といい、七体の観音様をまつっている。矢島公民館の西南、同じ敷地内にまつられている。

「年中行事」にあるように、この地域では佐波郡赤堀町下触の石山観音に対する信仰がさかんで、馬を飼っている場合は、一月十八日のご縁日に馬をおまいりさせたという。

○薬師信仰　薬師信仰もかつてはさかんであった。

公田の七薬師、新堀・亀里の薬師様はもとまつられていたところを薬師と呼ぶ。これは古くから信仰されてきた証拠である。

上増田東組のいぼ薬師はかつてはずい分さかんに信仰されていたようである。笂井の安養院境内にまつられている白粉薬師は中世の石仏である。公田の七薬師、上増田の宮東の薬師様や小屋原の屶切薬師も中世の石仏である。

小屋原の屶切薬師については、境内に享保十九年四月に建てられた「奉読誦大乗妙典一千部供養塔」があって、薬師様の由来が記されている。それによると「因記當山本尊由縁、當里諺日、弘法大師山刀切薬師也、古今霊験奇端在別記」と記して、経典を引用してその由来を記している。薬王山泉蔵寺世尊院の住職公稟の撰文である。かつてはおこもり堂もあったといい、南北朝時代に建像されたという薬師坐像をきざんだ石仏がお堂のうしろに安置されている。七夕の日がご縁日で、小屋原の長谷戸の人たちがまつっている。

薬師様は「目の神様」として信仰されている。地域内には、中世の薬師像が多くあり、古くからの薬師信仰の様子を示している。

○虚空蔵信仰　東片貝の虚空蔵様はこの近在の虚空蔵信仰の中心として広く信仰されている。この虚空蔵様についてはいろいろの伝説があって、もとは荻窪や下細井、山王にまつられていたという伝承がある。片貝の虚空蔵様のご縁日には山王の禅養寺の和尚さんが導師をつとめるといわれている。鶴光路や亀里でも虚空蔵様をまつっている。

○阿弥陀信仰　小島田の阿弥陀様が知られている。この阿弥陀様は仁治元年（一二四〇年）の造立の紀年銘があり、橘清重という人が夭折したわが子の供養のために建てたものという。信仰内容は報告のとおりであるが、今回の調査地域には、阿弥陀三尊の種子をもつ板碑が多数出土しており、中世以来阿弥陀信仰がさかんであったことを知る。特に、「法然上人絵伝」には鎌倉幕府の御家人であった大胡氏の浄土信仰との関係で、小屋原の蓮性の名もみえており、本地域の阿弥陀信仰（浄土信仰）の歴史の古さとひろがりを知ることができる。

○不動信仰　この信仰はあまり目立たないが公田の覚動寺の不動様は古くから諸難消除のために信仰されていて記録も残されている。駒形の真光寺、笂井の安養院にも不動様がまつられている。

○摩利支天信仰　これも珍しい信仰であるが下増田の奥原と須永、それに女屋にもまつられている。須永の摩利支天様は蚕と子供の神として信仰されているが、女屋の摩利支天様は勝負の神様として信仰されていて、今でもカルタ大会やゲートボール大会に出場するときにおがんでいくという。新しい信仰がみられる。

○石尊信仰　上川、下川、上陽地区ではさかんに行われた信仰で、現在でも大部分の地区で報告のとおりの信仰が行われている。木瀬地区では現在でもこの信仰を行っているのは笂井町だけである。

上陽地区では、現在でも東善、矢田、中内では、順番をきめて献灯を行っている。

もとは神奈川県伊勢原町の大山阿夫利神社まで代参が行ってお札をうけてきたところもあった。江戸時代にたてた石灯籠もあることであるから、古い時代からこの信仰が行われていたことを知る。

○**天王信仰**　夏まつりの中心として、天王様に対する信仰がみられる。各町内に天王様の石宮があると思われるくらい、天王様に対する信仰はさかんであった。夏の疫病の流行する時期にあたって、その除けとしての信仰が行われたものである。西善の天王様は石宮で愛知県の津島神社から勧請したものと伝えている。石宮には天王宮、灯籠には八坂神社と記してあるという。祭典は七月二十四日。中内の天王様は七月二十三日がおまつり。この日子供が灯籠をつけてまわる。かつてはおみこしに獅子頭をのせてムラ中をまわったというが、今は樽みこしをまわしている。むかし、はやりやまいがはやったとき天王様がまわったうちは病気にかからなかったと伝えている。女屋では、きゅうり天王様といわれる石宮が、今は桃川神社の境内にある。きゅうりの初なりを天王様にあげてから食べはじめるならわしであった。

○**天道念仏**　太陽（天道様）に対する信仰である。上川、下川、木瀬地区ともこの信仰はさかんに行われていた。現在は行っていないところが多いが、かつてはさかんに行われていたようである。木瀬地区では、十四大字のうち、天道念仏を行ったことを確認できないところは、下大島、天川大島、野中、小島田の四大字である。現在天道念仏を行っているのは、下増田（阿久津と須永）・上増田（大塚田）・笂井・上大島・東上野の五町である。このうち、上大島では三月十五日と七月十五日の二回行っている。下増田と笂井は、天道念仏のあと、ムラ境に八丁じめを立てている。その日どりは、彼岸の入り口（上増田）、中日（下増田）、涅槃会（二月十五日―笂井）、三月十五日と七月十五日（上大島）、農休みの中日（西善・中内）、四月十五日（東上野）、盆がら（鶴光路、朝倉）、八月の土用入り（下阿内）など、日どりはさまざまである。

日の出から日の入りまで、鉦と太鼓をたたきながら念仏を唱える形は共通している。

全体的には天道念仏のさかんであった地域ということができよう。

○**代参講**　遠地の神仏に代参する形はむかしからさかんであった。各地の造塔資料や古文書等によっても知ることができる。

本地区の代参講としては次の報告がある。

三峰講…奥秩父の三峰に鎮座する三峰神社に代参を送る。代参者は講金をもって三峰神社に参拝し、神札・御眷属をいただいて帰り、講の人たちにくばる。講員でオカリヤをつくって神札・御眷属をまつりこむ形をとっている。笂井や小屋原の報告にその様子がみられる。

城峰講…新堀と小屋原からの報告がある。埼玉県まで行ってくる。防火と盗難よけ。

古峰ケ原講…栃木県。蚕の神様として信仰されている。

雷電講…佐波郡境町伊与久にまつられている雷電様へ代参に行った。雷よけ。

榛名講…嵐除け・厄除けのお札をうけてきた。

伊勢講…一生一度は伊勢参りをするものだといった。各地の神社には参宮記念としてあげたこま犬・燈籠・記念碑などがあり、往時のさかんな信仰を物語っている。

むかしは、オカリヤをつくって、陰膳を供えた。

参宮にまつわるいろいろのエピソードも伝えられている。

○**産泰講**　下大屋の産泰様は子授け、安産の神として信仰されている。女人講で五人一講であった。

○**百万遍**　下大島・鶴光路・宮地からの報告がある。下大島と宮地では盆がら（盆の翌日のこと）に行ったという。宮地の場合は虫送りといっている。この地方での虫送りの行事は珍しい。下大島では厄病神送りとしている。

送る方と送られる方と、両方からの報告をのせておいた。百万遍の行事は利根西の地域はさかんであるが、本地域ではすくない。

○**豊蚕信仰**　蚕の神様として絹笠様をまつったり、蚕影様をまつったりした。伊勢崎市柴の稲含様は五月の八十八夜の日がおまつりでこの辺からもずい分たくさんの人がおまつりに行き、お札をうけたり、養蚕道具を買ってきたりしたという。

　笂井では絹笠様を神社の境内におまつりしているが、平成四年から、八十八夜の祭典は中止したという。その理由は養蚕家の減少ということである。小屋原の神社には石宮の蚕影様がまつられている。石宮の造立者の中に、この近郷の人たちの名が多く刻まれているから、かなり広い範囲の信仰のあったことを知る。

　沼田市上発知町の迦葉山も蚕神様として多くの人の信仰をあつめている。ここからはお面をかりてきて、翌年倍返しにした。

　上佐鳥の正平稲荷も八十八夜の日が祭典で、かつては養蚕家の人たちがおまいりに行き、狐様をかりてきてまつった。

　小正月とか初午の日に米の粉でまゆ玉をつくって、豊蚕を祈った。初午の日にまゆ玉のほかに、狐の像を粉でつくっておまつりすることは、笂井や後閑・女屋などでみられる信仰の形である。これはごく一部の家で行っていることである。

○**天神信仰**　かつては学問の神様として天神様の信仰があつかった。子供たちが天神講といって、宿をきめて、食料をもちよせて泊りこんで天神講をしていた。日どりは場所によってちがう。半紙に「奉納天満天神宮」などと書いて、近くの天神様へ翌朝納めに行った。

　各ムラの神社の境内には石宮の天神様がまつられていた。木瀬の北部では、下江木の天神様へその半紙を納めに行った。

　上増田東組では、八月の納涼祭のときに、天神様に灯籠をつけてまつっている。

○**熊野信仰**　矢田と女屋の熊野神社の報告がある。ふつうはオクマンサマとよばれている。ともに安産の神様として信仰されてきたという。女屋では、オクマンサマのご眷属としてアリのことを伝えている。

○**獅子（神楽）まわし**　木瀬地区では獅子をまわすのは、駒形・下増田の中屋敷・東上野の三カ所。上川地区では朝倉と宮地で行っている。朝倉では一月と七月の十七日に宮地では八月十七日にまわす。上川地区では東善、西善、中内で獅子をまわした。これは悪魔っぱらいのためという。

　朝倉と宮地の伝承によると、むかし、伝染病がはやったときに獅子頭をつくって、悪魔払いの行事をはじめたものという。中内での伝承によると、伝染病がはやったとき、獅子がまわった家には病気がはいらなかったといっている。

○**庚申信仰**　この地域でとくにさかんな民間信仰の一つである。しかも、特色ある信仰内容をもっている。

　その第一のことが、他人同士で講組を結成していること。そのために、組織をみると、参加者はムラ内とびとびであった。これは意図的にそう組ませたという伝承がある。

　第二は、正月様と庚申様とは不仲であるということを各地で聞く。

○庚申様は歳徳神様とは仲が悪いので、正月中はべつについたおそなえ餅をあげるし、べつの部屋にまつる。（上大島）

○庚申様と正月様は不仲なので、正月様の餅をついたあと、あらためて臼を洗い、米もべつにひやして餅をついてあげる。まつる場所もべつべつ。（下阿内）

○庚申様は正月様と不仲なので、正月中は庚申様（掛軸など）は味噌樽（だる）の上におく。（上増田宮原）

○庚申様はお正月様と仲が悪いので、最後の宿をする家は、今年は庚申様が年をするからよそへ行っておそなえを買ってくるといった。

（下佐鳥）

第三に、寒申はしないということ。寒に入ると庚申待をしないというところは、県下でも広くゆみられる。本地区でも同様である。この期間は慎むべき時期であったようである。

○むかしから寒庚申をきらって、寒があけないと庚申待をしない。節分がすまないと庚申待をしなかった。（亀里寺家）

○庚申様はブツであるというので、寒が終ってからまつることにしている。年寄の人は、仏様は寒の内にまつってはならないというし、寒念仏は申すものではないといっている。（天川大島）

第四に、庚申待の最中に地震があるとやりなおしをするという。つつしみ深いまつりであったと思われる。

○夜の十二時前に地震があるとやりなおしをしなければならない。そこで、庚申待の行事が終るとすぐに掛軸をはずしてしまう。

（上増田宮原）

○庚申様をまつっていて、夜の十二時になると、庚申様の掛軸をすぐ丸筒の中にしまってしまう。十二時前に地震があると、庚申待を同じ宿でしなければならないから。（小島田）

以上、おもな特徴をあげてみたが、庚申信仰がさかんであったことは、各地に江戸時代のはじめのころからの庚申塔もあり、その上、百庚申など、数量的に信仰を表現する形もあって、「百姓の神」としての庚申信仰がさかんであったことを知ることができる。

○**お日待**　太陽信仰と考えられる。

この信仰はそれほど広くは見られないが、太陽のあがる前に餅をついて、大きなおそなえをつくって、縁側に供えて、太陽（お天道様）に感謝するという信仰である。太陽の出るのを待っておそなえを供するというところに「日待」の形をみることができる。時期は十一月。

天道念仏とともに、太陽信仰である。

○**二夜待・三夜待**　月待信仰である。二夜待も三夜待も、ここでは女衆の信仰である。

駒形には真楽寺の境内にお宮があって、かつては女衆がおこもりをして三夜様を信仰したという。

（表2）調査地区の神社一覧

勢多郡

祭神	鎮座地 町村	鎮座地 大字	鎮座地 字	社格	社名
宇気母智神	上川淵村	櫛島	宮西	村社	飯玉神社
保食命	同	朝倉	鎮守廻	同	飯玉神社
保食命	同	後閑	飯玉	同	飯玉神社
健御雷神　天児屋命　斎主命　姫神	同	上佐鳥	上野	同	春日神社
品陀和気命	同	下佐鳥	村内	同	八幡宮
磐筒男命　磐筒女命　経津主命　豊城入彦命	同	宮地	梅天神	同	赤城神社
健御名方命	下川淵村	亀里	諏訪	同	諏訪神社
健御名方命	同	横手	高畑	同	諏訪神社
櫛御気野命　健御名方命	同	三公田	熊野	同	熊野神社
宇迦之御魂神	同	新堀	赤石	同	新堀神社
宇気母智神	同	力丸	飯玉	同	飯玉神社
大山咋神　健御名方命	同	三公田	山王	同	日枝神社
宇迦之御魂神	同	同	小暮	同	稲荷神社

大己貴命	木瀬村	上大島	長磯前	村社	近戸神社				
火産霊命	同	天川大島	高島	同	愛宕神社				
倉稲魂命	同	上長磯	稲荷	同	稲荷神社				
倉稲魂命	同	下長磯	宿要害	同	稲荷神社				
誉田別尊	同	野中	宅地下曲輪	同	八幡宮				
健御名方命	同	女屋	宮田	同	桃川神社				
保食命	同	駒形町	宮東	同	駒形神社				
誉田別命	同	下増田	奥原	同	今宮八幡宮				

佐波郡

大己貴命	同	笂井	近戸前	同	近戸神社				
大己貴命	同	上増田	宮下	同	近戸神社				
萱野姫命	同	東上野	村中	同	上野神社				
倉稲魂命	同	小屋原	稲荷島	無格社	稲荷神社				
大山咋命	上陽村	山王	田尻	村社	日枝神社				

（群馬県学務部編『群馬県神社輯覧』昭和三年刊）

（表3）調査地区の寺院一覧

勢多郡

所在地町村大字名	宗派	檀徒数（○印ハ信徒数）	住職（×印ハ兼務）	名称 其ノ他	名称 公称
上川淵村					
朝倉字上廓	天台宗	一〇	野平俊明	若宮山	延命院
後閑字上町	同	四二	本多慶山	医王山	円融院
上佐鳥字上野	同	一三四	谷晃賢	佐鳥山	安養浄土院
同字西原	同	一七	×真木興良	紅葉山	西光寺
下川淵村					
亀里字城ノ宮	天台宗	七三三	石井隆禅	成菩提山	光明院
横手字井戸町	同	六四	×真木興朝	横手山	医王院
三公田字不動前	同	七五	×同人	萩原山	覚動寺
鶴光寺字村中	同	九九八	宮本性順	雲上山	仏乗院
力丸字本郷	臨済宗円覚寺派	一七四		降龍山	善光寺
下阿内字寺ヶ付	新義真言宗豊山派	二六〇	×中島隆戒	熊野山	勧学院
三公田字池之尻	天台宗	一四〇	×真木興朝	公田山	魚遊寺
下大島字曲目	天台宗	二〇〇	田中祐誠	雲林山	延命院
上大島字長磯前	同	四五〇	宮崎祐玉	光明山	長福寺
野中字宅地上曲輪	曹洞宗	二五〇	久木貞亮	日輪山	放光院
					来迎寺
					浄土院
					大泉寺

村						
瀬木村	女屋字寺廻り 駒形字一里塚 下増田字奥原 笂井字近戸前 小屋原字本郷	天台宗 新義真言宗 豊山派 同 智山派 天台宗 同	三三五 三八三 一、一二〇 五八五 八九八	守山祐寛 山岡晋浄 富岡宥巌 青柳晃安	比原山 駒形山 今宮山 医王山 薬師山	宝珠院 中禅院 増田寺 真福寺 世尊院	万福寺 真楽寺 蓮花院 安養院 泉蔵寺
佐波郡							
陽村上	山王字田尻 西善字根岸 飯塚字上速見 樋越字中ノ坊	天台宗 曹洞宗 天台宗 新義真言宗 豊山派	五五〇 五八四 三五五 七四三	小出興道 谷俊国 林祐善 伊久間隆本	日吉山 鷹峯山 宮柴山 日吉山	寂光院 馬頭院 宝塔院 遍照院	禅養寺 祝昌寺 光琳寺 花臺寺

（群馬県『寺院仏堂祠宇教会所要覧』昭和十四年）

きであろう。間引きの子守唄の断片とか、「うぶ」ということばは注目すべきことである。

セッチンまわりを三日とするところと、七日とするところがある。せまい範囲のことだが、この区分けをするところまで調査が行われていない。隣り同士のムラで日づけがちがうのである。

捨て子の習俗も各地でみられた。弱い子とか、親が厄年のときに生まれた子が捨て子にされた。

七つ坊主の習俗を通して、この地域でも、太田の呑竜様の信仰や、四つの厄年の子の厄除けの信仰を通して、百軒町の高岑院や反町薬師の信仰の根強さを知る。

五、人の一生

「人の一生」についてはくわしい報告が行われている。この中から特長的なことをとりあげてみることにする。

(一) 産育儀礼

まず、産育儀礼としては、子授け、安産の神として、下大屋の産泰神社の信仰が強いことである。これは、群馬県では、ほぼ全県的にみられることである。

出産については、むかしの苦労話が報告されている。一部の地区からは、いわゆる擬娩の報告がみられる。出産のとき、旦那さんが臼を背負って家のまわりをまわったということである。

間引きの話は悲惨であるが、かつての生活の形として記録されるべ

(二) 婚姻儀礼

特にここだけの習俗というのはみられない。この近在の婚姻習俗と共通することが多い。

その中で、キモイレといって、成年組の者の中で、ムラの若者の取締り的な役割をもつ者のいたことが注目される。このことは、笂井と上大島からの報告があるだけであるが、ムラの若者の管理という点で注目される。キモイレはいわばムラの風紀取締り役であるという。笂井では、キモイレの了解がないと嫁を迎えることができなかったという。嫁迎えのとき、キモイレがその場に立ち合う。キモイレが一切の権限をもっていたという。キモイレの了解を得ずに嫁を迎えようとしたら、橋の上にわかいしゅうが寝ていて、嫁を通さなかった。婿さんが牛を売って金を用意して、キモイレにわびを入れて嫁さんを迎えることができたというはなしもある。キモイレについては、笂井と上大島で聞いているだけであるが、他にもあった習俗であろうか。

婚礼習俗の中では、トリムスビの途中でのカワリムコのことがおもしろい。トリムスビの終りの方でムコが逃げだす。大さわぎして代りの婿をさがして式を続ける。これはこの近在にみられる習俗である。

女イチゲンの習俗も注目すべきこと。なぜ女だけのイチゲンが行ったり来たりするのか。他県からの同種の報告も知らない。トリムスビの席への親の不参加とか、男だけのムカエイチゲン、オクリイチゲン、そしてこの女イチゲンのことは、単なる座敷の都合による人数の制限という理由だけではなさそうであるが、どうであろうか。

カネツケの祝いは、婚姻成立の証拠としてしっかり行われている。大事な儀式であった。

アシイレとかカリブンのことは、単に婚礼費用がないために行われた習俗とみるべきか。とくにアシイレの中には、試験結婚的な意味もふくまれる場合もあるし、カリブンは貧しい家の婚礼の形としてあったようであるが、ここに婚礼儀礼の古層はみられないか。

トモコヨビは、かなり広く行われたようであるが、挙式前に友だちを呼んで振舞うことの意味はどうであろうか。トモコヨビということばの表現が注目される。

嫁の一見とかヨメゴヨビの習俗は、近親とか近隣との新入りの嫁の近づきの儀礼としての意味をもつ。

嫁の里帰りも、もらい方とくれ方の結びつきの儀礼として大切な意味をもっていた。節供歳暮と蚕祝い、秋あげなどの骨休み的な里帰りのちがいにも注意すべきであろう。

この中で、一月四日の初嫁・初婿のご年始と、生き盆振舞のような、初嫁としての里帰りをどうみるべきか、これを、一年の前半・後半を区切っての儀礼とみてよろしいかどうか。

八朔の節供は、節供のおしまいの行事としておもんじているのはどういうわけか。すくないもらいもんで、高価なおかえしをしなければならない里方の役割はどういうことか。古い歴史をもつ八朔の行事であるから考えてみなければなるまい。

㈢　厄年・年祝い

子供の厄年としての四歳については、前述のとおりである。新田町の反町薬師へ、一月四日におまいりに行くことは、今でもさかんである。これは、それほど古いことではないというが、一種の流行神的な性格をもっていて、今の世間に共通していることである。

厄年については、むかしもさかんに厄払いをしたというが、今は寺を中心にして、組織的に行われている。

むかしは、厄年の者がおかねを出し合ってムラ内で義太夫とか浪花節語りをよんで、厄おとしをしたり、著名な社寺におまいりしたりした。今でも、成田の不動様や川崎大師・佐野の元三大師・西新井薬師など著名なところへ厄落しに行く人もいる。

この地区では、下増田の蓮花院で大々的な厄除けのご祈禱を行っている。近在からの参詣人も多い。

厄除け・厄のがれとして、特に注目すべきは、笂井だけでおこなわれている「厄年餅」のことである。このことについては、本文中に報告のあるとおりである。

厄年のいる家では、正月の行事がすんで、二月の年取り前に、「厄年餅」をついて、親類縁者にくばって厄除けをする。これはあんぴんである。これを一月二十八日のしまい正月のあとにつくって、神様に供えたり、くばったりする。この餅を多くの人にくばって、食べてもらって、厄からのがれようとするわけである。むかしは、門松をそのままにしておいたり、新しくたてたりして、もう一度正月を迎えて年をとったことにしたのである。

このような習俗は、県内では関いたことがない。あるいはどこかにあるかもしれないが今のところ知らない。ただ同じ趣旨で年がさねをするところは県内にもある。節分のとき、うちでとしをとり、隣家とか神社の豆まきの場へ出て、もう一度年をとって、厄をのがれるのである。笂井の場合は、年をかさねて、餅によって厄を分散しようという意図がみられる。

このような厄除けについては、平山敏治郎氏が早くから注目して、論文を発表されている。「取越正月の研究」（『歳時習俗考』所収）という論文の中で、東北地方では二月一日を二月年の年取りと称して、厄年の人びとがも一度仮年をとるということを紹介しておられる。このような年重ねの祝いが東北地方に広く行われているし、江戸時代の記録にも見えているとのことである。信州では四十七の大厄の男の家では、一月晦日をお年越しといって大きな祝宴を開いて、年取り直しを行っているという。

こうみてくると、笂井の「厄年餅」の習俗は、ここだけのしきたりではないのである。同じようなことが、日本各地で古くから行われてきたのである。ただ、笂井の場合は、年を重ねた上に、餅をくばって厄を分散しようというところに、珍しい形がみられるのである。似たようなことは、他の地区でもやってよさそうなものだが、この近辺では類似の習俗はない。そうすると、何百年も前からという古い習俗でないかもしれない。

㈣　葬制のこと

葬制の中には、いくつかの注目すべき習俗がある。

庭銭のこと

子墓のこと

ユミアケのこと

庭銭の習俗は、地区によっては火葬になってからの新しいことだというが、江戸時代からのしきたりでもあるという。香奠とはべつに地区の人たちが平等に小額のおかねを出して、施主のところへ届けている。上川や下川地区にさかんで、木瀬地区でも一部のムラでも庭銭の習俗があった。今では火葬料といって、火葬場へのバス代のたしにするためという説明もある。山王では棺桶代だといっている。榛東村で聞いたら棺代のたしにするのだといっていた。県内でも同様の習俗が点々とある。呼び名は地域によって異る。（新田町では念仏講、館林市下早川田ではコウチ香奠、前橋市総社町では棺代）

次に子墓のことであるが、山王・上佐鳥・竜門と小島田で確認されている。上佐鳥では共同墓地のすみに子供を葬るところがあり、そこをサイノカワラと呼んでいた。小島田では下田家の場合は、大人と子供の墓は数百米はなれている。県内にも子墓が点在している（新田郡

笠懸町・太田市只上・利根郡新治村・沼田市今井・邑楽郡板倉町など）。何故子供だけ墓をべつにするのか。盆のときも人にならない（未婚）でなくなった仏は、先祖様とは区別して盆棚の下にまつる。あたりまえの死に方をしないものを差別する気持のあらわれであったのだろうか。

ユミアケは四十九日のおたなあがり（オタナアゲ）の日に、施主が正装して、組内とかムラ内をあいさつにまわることである。ユミアケは忌明（いみあ）けであろう。忌があけて、お世話になったお礼と、ふつうのおつきあいにもどったというあいさつであると考えられる。

このオタナアガリ（オタナアゲ）の日に、むかしは四十九の餅をついた。このとき、五十コの餅をつくった。そのうちの一つを味見にするとか、寺へもって行くと、一つの餅に和尚さんが梵字を書いてくれる。それをもちかえって、墓に埋めたという。今は、四十九の餅もつかず、その意味もわからなくなった。

寺とはべつに、大きい塩あんの入った餅をつくって、近親者にくばった。

人がなくなって、四十九日の間は、仏様の魂は、自分のうちの屋の棟にいるという。その間、うちのことを心配して見ているのだという。四十九の餅をつく杵の音を聞いて、あの世へ旅立つのだという。そのために、この四十九の餅のことは、旅立ちの餅とか、タチビの餅とよんでいる。四十九日の間は、仏の魂が屋の棟にいるから、この間は、ぐしをいじるようなことをしてはいけないともいっていた。四十九の餅もまんじゅうにかわって、仏様とうちのものを結ぶきずなも、だんだん細くなっていくようだ。

むかしは、香奠として、おかねの代りに米をもって行ったという。となり組・本分家の間柄だと、米を三升、このうちは皆さん呼び。旦那呼びのうち（クルワとかこんいな家の人）は、米一重箱もって行ったという。（上佐鳥）

山王の関根家には、屋敷内に古い墓があったという。墓制の古い形を示すものと考えられるが、きちんとした調査ができなかった。

六、年中行事

「年中行事」については、各町（旧大字）別の報告のほかに、一部の家庭の年中行事の報告をうけている。その中で、江戸時代の記録である亀里町の主代家の「主代系家礼扣」は貴重である。

全体的にみると、報告例が地域的にばらつきがあって、調査地域全体の特徴をつかむことはなかなかむずかしい。

その中から、特長的な事項をぬきだしてみることにする。（紙面の都合で簡単に記す）

○一月四日のこと　この日のことをまとめてみると次のようになろう。

初嫁のご年始（ナベカリ）
初婿のご年始
おたなさがし
坊さんのご年始

初嫁・初婿のご年始については、盆前の生き盆との関連はどうであろうか。どちらも初嫁（婿）に関連した行事である。

おたなさがしの中では、この日暮に供えたおそなえ餅をさげる家が多いことが注目される。十三日のおかざりかえまであげておく家もあるが、四日については、坊さんがご年始にくる前にさげろとまでいっている。このことは、坊さんのご年始と関連させて考えることはでき

ないだろうか。おそなえをさげてしまうことと、坊さんがご年始にまわってくることとは、正月行事の一時中止のような意味があるように思われる。

○**六日年**　この行事が旧勢多郡下では赤城村・北橘村・富士見村・南橘・桂堂地区をへて、上・下川渕地区にまで及んでいることを知る。

○**マルビ**　笂井ではおみたまさまにあげるといっている。正月の行事の中に祖霊信仰がのぞいているのを知る。

○**墓場の年始日**　木瀬地区の一部の地区で、一月十六日を墓場のご年始日といって、この日墓参りする習俗がみられる。この日を仏の日として特別の供え物などすることは、利根郡新治村や月夜野町などにもみられる。一月十五日までを正月とし、十六日に新年になってはじめて仏様をまつるという形をとる。新田郡地方で盆の十六日と一月十六日の晩に十王様に五目飯を供えるということとあわせて注意すべき日であろう。

○**コト八日**　二月八日と師走八日に疫神の宿をするところが木瀬地区にみられる。現在まで確認できたのは、上増田・下増田・笂井・女屋の一部の家である。これと類似の行事は前橋市二之宮町・伊勢崎市や新田町の一部地区にみられるが、地区の一部の家庭で、むかし家族がはやりやまいにかかったことを理由にまつっているという。一種の流行神の性格をもっているようである。

○**天道念仏**　春の彼岸の中日を中心に、天道念仏を行っているところがみられる。木瀬地区の場合をみると、もとの十四大字中十大字で天道念仏を行ってきている(現行は五大字)。太陽信仰の一つの形として注目される。このうち、下増田と笂井では、天道念仏のあとにムラ境に八丁じめをして、疫病の侵入を防いでいる。

○**八朔の節供**　もとは旧八月一日、その後九月一日に八朔の行事として、嫁がショウガと赤飯をもって里帰りをする風はこの地域ではさかんであった。ショウガの節供とかタノモの節供ともいっている。三月と五月の節供のときには、嫁が里帰りをしても、里からのおかえしはしなかったが、八朔の節供のときにはきちんと節供返しをしている。古い行事といわれているが、近年まできちんと行われていたことは、嫁のとつぎ先と里とのおつきあいの中で、大切な意味をもっていたことを窺い知ることができよう。

○**生き盆**　前述のように初嫁に関係した行事である。古記録にもでている古い行事であるが、比較的はっきりした形でとらえることができた。死者の霊をまつる盆に対して、生きている親に対する儀礼としての形が見られる。

○**盆行事**　行事の内容については、周辺の地区とと大差はないようだが、特徴的な事柄をとりだしてみる。その一つは木瀬地区の上大島・下長磯と上長磯の一部で盆送りのとき、飾り物を家の近くの道の端に送りだすという形がみられること。そのあと一旦家へ帰ってから、あらためて墓参りをする。東毛や安中地方にみられるような土盛りの形はとっていない。地面にじかに送りだしている。もう一つは、東上野の一部の家で見られた「仏の野まわり」のことである。これは盆中に先祖様に田の作柄を見てもらうということで、主人が位牌をふところにして田をひとまわりしてくる形である。市内では旧東村地区からの報告であるが、前橋市内としては珍しいことである。

○**オクンチ**　十月十七日の秋祭りのことをオクンチというのは、この地域共通である。むかしは前の晩に神社でおたきあげをしたのはどういうわけであろうか。十月十七日に統一されたのは後年のことで、神嘗祭とあわせたようで、もとは旧九月に行っていたという。

○**神無月**　旧十月に神様の留守になるということは、この地域で一般

的にいわれている。この間の留守神としてはおかまさまをあげ、おかまのるすんぎょうをして、おかまさまにぼたもちの供え物をするという。

十日夜の行事もさかんに行われた。高崎の清水の観音様へおこもりに行ったということも聞く。この日のもちは縁もちといって、二色つくものだという。十日夜のことを大根のとしとりというのも他地区と同様である。

○**オヒマチ**　これも十一月三日にほぼ統一されているが、べつの日であったと考えられる。この行事は一部の地区でみられる行事で、お天道様のでる前に餅をついて、大きなおそなえ餅をつくって、天道様にあげるという行事である。太陽信仰の一つと考えられる。

○**稲荷祭り**　屋敷神はふつうは稲荷様をまつっている。このまつりの日も、木瀬地区では大体十二月十五日としている。もとは霜月十五日であったものを、新暦によって十二月十五日としたようである。むかしはわら宮（オカリヤ）であったが、今はほとんど石宮になっている。

○**亀里の主代家の年中行事について**

「主代系家礼扣」は、亀里町の主代定義さん宅へお伺いしたときにお借りしてきたもので、本書でなく写しであるが、かつて『下川渕村誌』に収録されたものと、一部表現のちがいがあり、村誌の誤植と思われる箇所もこれによってはっきりした部分もある。年中行事の古記録として貴重な資料である。この中で注目すべきことを書きだしてみる。

暮の餅搗に赤餅をつくこと。このことは、「木瀬村誌」調査資料の中にも小屋原の奈良家や下長磯町小山家などからの報告もある。

元日に本家に一族があつまって年始の祝いをすること、また、神社、お寺へのおまいりとともに、「墓地に年始する事」とあり、「御寺へ御年玉を納むる事」とある。

二日に馬の乗り初めをしている。

三が日はそば家礼、四日から餅家例とする。

一月四日はおたなさがしで、朝おそなえをさげ、ぞうにを供えている。

一月十四日にマルビを炊き、歳徳師様にあげている。

二月三日を「正月の御事仕舞、春の事始め」とし、十二月八日を「正月の御事始め、秋の事仕舞ひ」としている。

四月八日に藤を三本ずつ屋根にさしている。

盆の十四日に餅をつき、あんころもちにして仏様にあげている。

十月二十八日をおかまさまのまつりとし、ぼたもちを供えている。

暮に節分、まめまきをしている。

五節供を一月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日としている。そのほかに十日夜を大根の節供、十一月十五日を五穀取入節供、十二月八日を師走節供、御事始節供としている。

原本は「元禄十五年」に書改めたとあるがその後の加筆もみられる。しかし、内容的には、今につながる行事もあるし、今は失われている行事もあり、古い年中行事の記録として貴重である。本資料の発見が調査実施後であり、主代家の現行の行事との比較ができなかったことは残念である。

七、口頭伝承

全回の「調査報告書」では、「口頭伝承」の分量が極端に多い。その大部分は『木瀬村誌』の材料である。『村誌』の中の「口頭伝承」の部の資料は原稿量が多いので、本書の中には収められない。「別冊」の形を考えているところであるが、その大部分が今日こういう形で、本『報

告書」の中に収録していただけることになった。『村誌』材料は未編集まであるので、生原稿のまま本書に収められることになったものである。これは他の部門についても同様で、調査地域がかさなり合うということから、『村誌』の原稿がそのまま本書の中にのせていただくということになった。

さて、調査地域における「口頭伝承」の内容であるが、調査者の一人としての感想をいえば、意外にまとまった伝承があるということである。このことは、木瀬地区を中心にしてのことであるが、量的にみて、これほど多くの「民話」あるいは「方言」などを聞くことができるとは思ってもみなかった。

木瀬地区については、私自身の生まれ育って生活をしているところであるので、何十年というつきあいがある。いろいろの形で調査を継続してきた場所であるから、長い間にはたくさんの資料があつまっても不思議ではない。ただ、ここ三年ほど、『村誌』のための集中調査を行ってきたから、たくさんの伝承者にお目にかかることができ、何度も何度も足をはこんで、くりかえし、くりかえしいろいろのことをお聞きする中から、ここにとりあげていただいたようなおはなしをお聞きすることができたのである。

残念なことに、本書は一つ一つの「話」に話者のお名前が記されていない。どこのどなたのおはなしだかわからないが、木瀬地区にも、県下の他のすぐれた伝承者と比肩できるくらい立派な伝承者がおられるのである。

女屋町の女屋源六さん、笂井町の石井たみさん、上大島町の湯沢きよさん、駒形町の木暮安太郎さんには、それぞれ何十話というおはなしを教えていただいている。そのほかにもたくさんの話者の方がおられる。すでに刊行された『民話集』の中にお名前ののっている方々である。たくさんの話者の方々に、紙上よりあらためてお礼を申しあげたい。

さて、調査地域の「口頭伝承」の特徴であるが、上川・下川・上北地区についてはこまかい調査が行われていないので、まとまった形での感想をのべることはできない。

木瀬地区の例から判断すると、もうすこし時間をかけて調査をすれば、質量ともすぐれたおはなしを聞くことができるかもしれぬ。木瀬地区だけが特殊だとは考えられないことである。

本文にたくさんの資料がのっているので、ここでの説明は簡略にしたい。

(一) 民話について

「姥捨山」のはなしは、各地で聞くことができた。この中で、「灰縄」の難題の話は比較的多くの人から聞くことができるが、難問を三問もふくんでの話はすくない。その話をしてくださったのは、女屋源六さん（M32生）、湯沢きよさん（M28生）のお二人である。

女屋源六さんは、「山賊の兄弟」「動物たちの食べ物」「盆踊りのはじめ」「馬鹿息子」「おもしろいはなし」「二反の白」「引間の孫六」「北海道はうんと寒い」「雑煮の由来」「椀の由来」などのほか、世間話をたくさんしてくださった。その中で「北海道は寒い」というはなしはもっとも得意とするところであった。

湯沢きよさんと木暮安太郎さんもむかしがたりの名人である。きよさんは、長い長い「鶴の恩返し」をすらすらとはなしてくださった。べつの用事できよさんをおたずねしたところ、突然、「むかし、むかし」と、前ぶれもなくおはなしくださったのが「鶴の恩返し」の話である。私も、県下をあるいて昔話をたくさんの人からお聞きしているが、「鶴」

のはなしをしてくださる人はすくない。しかも、きよさんのおはなしはご覧のとおり大変よくまとまっている。同じように、その日一話だけはなしてくださったのが「猿聟」のはなしである。そのほか、「桃太郎」「花咲爺」「三枚のお札」「徳兵衛さんのかもとり」「和尚と小僧」「わらしべ長者」（未収録）のおはなしを聞かせてくださった。きよさんのもっとも得意とするおはなしは「松竹梅」のはなし、いわゆる「道話」に近いはなしである。きよさんは、床の中で、いつも、むかしのはなしを思いだされているのだという。明治二十八年生まれのきよさんは、市内新井の生まれ。小さいときに聞きおぼえたはなしと、「徳兵衛さん」のはなしのように、旦那様の覚治郎さんのおはなしを聞いて、上大島で覚えたおはなしや、ご自分の体験談などを語ってくださる。

木暮安太郎さんはきよさんよりずっとお若い、といっても明治の末のお生まれ。安太郎さんはいろいろの村役をおつとめだし、郷土史の研究家でもあるから世間が広い。おはなしもお上手である。「金仏と木仏」「かもとり」「キツネ退治」「仁王様とみじん」「山の神の由来」「田野久」「拾い物分配」「のみの夫婦」などのほか、土地の伝説や世間話をたくさんご存知である。なかでも、「竹橋の子狐」のはなしは短いが大変おもしろい。

昔話のほかに伝説も多く聞くことができた。

笂井の石井たみさん（M35生）は弘法伝説がお得意で、「万年機（ばた）」「弘法井戸」「石芋」のはなしをしてくださった。

この地域では、「赤堀道元の娘小沼入水」の伝説は多くの方がご存知で、本書にもたくさん収録されている。すこしずつ内容がちがっているのがおもしろい。

木瀬地区に「片葉のヨシ」の話があった。旧利根川の左岸沿いに伝えられている。笂井・上増田・下増田が中心で、べつに駒形にも伝えられている。この話の中に豊城入彦命がでてくることは注目される。ここにはのっていない話で、『神道集』の傍系のはなしとして継母にしずめにされた娘がはいあがるときにつかまったのがヨシで、そのとき切れて、片葉のヨシになったという話を笂井で聞いている。「増田ケ渕」のはなしとともに、「赤城伝説」の土着の例として考えてみる必要があろう。豊城様の足跡に生えたのが片葉のヨシともいう。（上増田）

こんな地域にと思われるのが、「椀貸伝説」である。下大島の芦原堰のところと、下増田のビクニダイの近く、伊勢崎市宮子町の竜宮に接したところに伝えられている。本文中にもちょっとでているが、下大島の方が竜宮より古い。宮子の竜宮はあるときここからとんで行ったものという話を下大島で聞いたことがある。本文をみると、竜宮の阿感坊の伝説を宮子に縁のある人が伝えている様子がわかるが、下増田にもビクニダイというところがあって、八百比丘尼の話を伝え、土地の人は「下増田の七不思議」の一つとして話してくださる。

なお、下大島の芦原堰と野中清水のところに、イヌボウ、オトボウという大きなナマズの話が伝えられている。いわゆる「おいてけ堀」系の話である。

朝倉分にあたる旦那坂の話も、この辺では有名な伝説である。

駒形の境田の話も「郷土教育」の力で伝えられている。

旧利根川にまつわる大島・長磯などの地名も残っている。上増田・下増田には百々（どうどう）という地名もある。水の流れる音をあらわしたものといわれている。笂井という地名も、一説には、旧利根川の時代に竹を割ってまるめて、ドウ（ウケ）をつくって魚をとったときの名残りだという。

赤城山にまつわる伝説は九十九谷伝説と、赤城の鍋割に腰をかけ、利根川で足を洗ったという巨人伝説（小島田）を聞くくらいである。

行人塚の伝説は、木瀬地区では下大島・駒形・小島田・下長磯にある。中でも、下長磯のお上人様の伝説は有名で、大きなイノミの木が目じるしとなっている。七月に下長磯の人たちによるまつりが行われている。

猫にまつわる話も伝えられている。飯土井の猫山と、亀泉の猫見塚、東片貝の猫田、上増田と笂井にまたがる音根沢である。猫山には猫を捨てると返って来ないという。ここに年をとった猫があつまって踊りをおどっているというはなしがある。それをみたというのが上増田の医者岡田養庵先生。そのとき遅れてきていいわけをした猫が自分の飼い猫だったというのは有名なはなし。今でもご年輩の人はこの話を伝えている。

猫田と猫見塚はセットになっている。猫田に近在の猫があつまって踊りをおどる。それを猫が見ているところが猫見塚。あるとき猫田で踊りをおどっていた仲間の猫が、野中の猫で、七草のおじやがあつくてなかなか食べられず、遅れてきたいいわけをしていたという。そのためにその猫の飼い主の某家では七草のおじやをつくらないとか。音根沢には化け猫があつまるというので、恐しい思いをしながら、そのそばを通ったのを覚えている。

純然たる伝説ではないが、駒形茂兵衛と桃中軒雲右衛門の話もおもしろい。茂兵衛の話は駒形町出身で帝劇の専務であった山本久三郎さんが長谷川伸と親友で、土地に伝わる話をしたところ、それをもとにして、長谷川伸が「一本刀土俵入り」を作ったものという。あたかも実在の人物のようになって過去帳やら石碑やら写真にとられて大きく宣伝されたことがあった。

雲右衛門は幼時上増田の木村家（現当主清さん）に寄留していた。雲右衛門ゆかりの湯呑茶碗やござなどが木村家に残されている。「桃中軒」という呼び名も、桃木川の養庵堰の流れにむかって発声練習をしたことに由来するといわれている。もうすこし前までは、雲右衛門にまつわる話を、土地のお年寄の人からじかに聞くことができたのである。今、上増田大塚田の浅間様の境内に雲右衛門の記念碑が建てられている。

世間話もいろいろとあつめられている。

オトウカに化かされた話も多い。

オサキのはなしも若干聞けた。オサキ大尽のはなしなど、六部大尽のはなしと同じく、致富に対する地域の人たちの一つの思いであったと考えられる。下長磯には巡礼橋があって、一種の致富譚を伝えている。

オトボウナマズや、イヌボウのはなしは、前述のようにナマズの化けもんのはなしである。オトボウのすんでいたという野中清水は今は水源池になっていてむかしの面影はない。

東片貝から出たという源太島の火のむのはなしは有名であった。これも、三十年ほど前までは、源太島に追いかけられたという体験談を語る人もいた。

「稲荷様に憑かれた話」と「人玉を見たら人が死んだ話」と「死んだ両親が夢にあらわれた話」の三話は、笂井のMさんが語ってくださったはなしである。はなしの内容が具体的で、世間話の典型ともいうべきはなしということができよう。

奉公人話も、世間話の中ではおもしろい内容をもっている。この辺で聞かされる奉公人話としては、「飯が仕事をする」と「田の草取り」のはなしである。これは、県内に広く分布していて、大ていは、実在の人物とむすびつけてはなされている。

「飯が仕事をする」の方は、奉公人が主人を理屈で負かす話であり、

「田の草取り」の方は、奉公人が主人に負かされるという話になっている。奉公人話の中には、奉公人が主人を負かすという話が多く、欲深な主人に対する弱者の反撃の形をとっている。

このほか、「生まれかわりの話」とか「あの世を見た話」など、昔話や伝説とちがった、身近な体験的な話とか伝聞的な話が多く語られている。「でんぼう○さん」とか「力持ちの△さん」「大食の×さん」などという変人奇人といわれる人の話も聞く。目新しい話が、むかしからのきまりきった話とはべつにおもしろおかしく話されていることを知るのである。

(二) 諺と謎

「ことわざ」についてはすくない。「なぞ」の方が多くの資料があつめられている。

○**「ことわざ」**…「ことわざ」については、生活に非常に関係の深い内容のものもある。『木瀬村誌』であつめた資料の大部分はここには収録されていない。そのごく一部がとりあげられている。

その中で、下増田で聞いた「なみにはなをそろえろ」と「追わずに逃げろ」という「ことわざ」は実に巧みな処世術を示したものだと思った。「鼻を揃える」ということばは江戸語にあるが、「顔をそろえる」とか「一緒になる」という意味であるという。つきつめていくと同じような意味になりそうだが、「人なみにする」ということとはすこしちがうようである。「追わずに逃げろ」ということは、嫁さんが気にいらない家で、その嫁さんを追いだすのではなく、嫁さんの方から家を出て行くように自然にしむけることだという。こういうことばが、あっちこっちで使われていることを聞いて、むかしの家族制度の陰の部分を知ったのである。

「のっつけがみさん」ということばも各地で聞く。姑さんのいないところへ嫁に行くとそういわれた。のっつけ（はじめ）から姑さん、つまり主婦になれるということである。こういう嫁さんのことは、楽でいいという人もあるし、大変だという人もある。「世間が姑だ」（小屋原）ということは、そのことをよくいい表わしている。うちの中には姑さんがいなくとも、世間の目はきびしいということである。

むかし、後閑はよく働いたところだという。「後閑へ嫁に行くか、はだかでバラしょうか」とまでいわれたという。こういわれるところはあっちこっちにある。よく働くところだから、大尽ぐるわだなどともいわれる。ところが、後閑へ伊勢崎の方から嫁にきた人がいた。あんまり稼がせられるので、『はだかでバラしょったほうがいい』といったというはなしがある。昼間稼いで、夜は機織りをさせられたという。そんなわけだから、世間でいっている「後閑朝倉女のよばい、男後生楽寝てまちる」というのは、本当は、「女のよばた」であるという。

（後閑）

「隣が早起きだと三文の得」とか「隣かせげば、宝もうける」という諺もある。隣につられてかせぐから身上をあげることができるのだという。（小屋原）

「隣百姓」ということばもある。隣でああした、こうしたというのを真似をすることだという。そうすれば無難だということである。

（上増田・駒形）

「いもはかげの俵」ということわざも広くつかわれている。いもを米の代りに食べたということ。いもは何俵とれたなどと、世間に公表しない。そういう意味でもかげの俵であるという。いもは食助けになったのである。（後閑）

「庚申待の夜ばなし」ということばもある。庚申待の晩には一夜をあ

かして飲み食いしたり話をしたりする。はじめのうちはいいはなしもあるが、しまいには話の種がなくなってろくでもないはなしを、ぶつぶついうようになる。そんな様子をいったものという。（駒形）

「さんばをぶつ」ということばがある。さんばとは三番叟のことで、芝居のはじまりには三番を舞う。それで、仕事をはじめることをそういった。（上増田・駒形）

仕事をはじめることを、「早くぶてや」とか「さんばをやれや」といったという。（駒形）

「からっちゃ飲むのはぼうちぶちよりおおごとだ」という。お茶菓子（お茶うけ）をださないとそんなことをいわれたという。これにはいろいろのいい方があるが、この辺は「ぼうちぶちよりおおごとだ」といっている（亀里町）。このことは、県下各地で聞くことだが、いい方は土地によってちがう。「峠へのぼるより」「麦つきより」「やすみじうないより」「越後から米つきに来るより」「死ぬより」とか、さまざまないい方をしている。どういうわけでからっちゃ飲むのがそんなにおおごとなのか説明はない。死刑囚にはおちゃがしを出さないとか、死人が出たうちへ口見舞に行ったときは出さないとかいうがはっきりしない。

○**なぞ**…「なぞ」については、たまたま「みやま文庫」で、『群馬のなぞ』についてまとめたので、本地域においても、やや幅広く「なぞ」あつめをしたので、何百例かの「なぞ」をあつめることができた。

しかし、実際に調査してみると、一人でそれほどたくさんの「なぞ」をご存知というわけではない。県下においても、五、六十種の「なぞ」をご存知の方なら、「なぞとき」の名人に近いということができよう。多くて二、三十種の「なぞ」をご存知の方が、この地区での「なぞとき」の名人というところであろうか。

「なぞ」をかけるときは、「なぞなぞなあに、なっきりぼうちょうきりぼうちょう、いくらきってもきりきんねえ」（櫛島）などというきまり文句をいってからはじめ、どうしてもとけないときは、「降参」とか「まいった」などといった。あたると、「ご名答」などといった。

県下の他の地域と同じように、この地域でも二段式の「なぞ」の方がずっと多い。三段式の「なぞ」は少なかった。

また、「なぞかけ」は、子供の遊びだけではなかった。大人の「なぞかけ」も行われたのである。三段式の「なぞ」の中には、とても意味深長の「なぞ」もあったのである。

孟宗竹藪とかけてなんととく

十歳以下の子供ととく

その心は、まだけははえぬ（女屋）

「まだけははえぬ」ということが、孟宗竹の竹藪だから、真竹（まだけ）ははえないということと、まだ十歳にもならない子供だから、あそこにまだ毛が生えないということをかけていったものである。これなど、はっきりと大人の「なぞ」ということができよう。

上大島の湯沢きよさんのおはなししてくれた「火のないこたつ」の「なぞ」も同様である。これは、弥助さんという実在の人物のはなしとしているが、「火のないこたつ」の「なぞ」は江戸時代の「なぞ」の本にもあるし、県内で同じ形の「なぞ」を聞いたことがある。

火のないこたつとかけてなんととく

弥助さんととく

その心は、あったまらない

弥助さんはやきもちやきのかみさんに対して、自分の大事なものを切りとって、やきもちをのがれようとしたという。だから、今まであったまらがなくなった。それを、火のないこたつはあったまらない、と

いうこと。

二段式の「なぞ」のなかでは、「朝早く一本道通るものなあに…雨戸」とか「上が大水、下が大火事なあに…風呂」、「切っても切っても切れないものなあに…水、空気」のようなものは、多くの人に知られている。

「びしゃりん、びしゃりん、びんびしゃりん、まご子の代までびんびしゃらん、なあに…ながし」などというのはむずかしかった。

三段式の「なぞ」では三つの特別の「なぞ」をとりあげておく。

たべらべらとかけてなんととく

富士の北平（きたひら）ととく

その心は、年中とけない（上増田）

これは、「たべらべら」という全く意味のないことばをもってきて、この「なぞ」をとかせようとしているのだから無理なはなしである。それと、一年中とけない富士山の北平の雪をもってきたもの。

子守とかけてなんととく

大根ととく

その心は、おろせばからみになる（野中）

この「なぞ」は大変わかりがよくて上手にできている「なぞ」である。

坊主糞くらえとかけてなんととく

浅間の夕立ととく

その心は、にしがくらえ（下阿内）

これは、一種のなぞむかしとしてつたえられている（女屋）。「にしがくらえ」というのは、「西が暗い」というのと、「汝（にし）が食え」というのと、二つの意味をもっている。浅間を西にみて、こんな「なぞとき」をするのは上州人だけではないか。

もう一つ、二段式の「なぞ」で

ちゃわん、ちゃわん、よっちゃわん、かろうとに、かもじに、びわのは二つなあに…馬（駒形）

という「なぞ」も、何人かの人に聞いたが大部分は木瀬地区の人。学校ででも教えたものであろうか。

㈢　方　　言

方言は、『木瀬村誌』の調査資料として、約三千語ほどあつめてある。まだ、「アイウエオ」順に配列してあるだけで、最終的なまとめをしていない。本書に収録した方言の大部分は、『村誌』の調査資料である。「カケス通信」（カケスの会機関誌）に号をつらねて収録したものを、そのままのせてあるので不ぞろいである。時間の都合で仕方ないことであった。

紙数の関係で、特徴的なものだけをえらびだして、若干の説明を加えておく。

○**かがやく**　「うちのまわりをかがやく」という表現のとおり。おもに年輩者に対してつかうことばで、かたづけごとかとか、さがしもんをすることについていう。

このことについては、亀里矢島の報告がこまかい内容まで示している。

これは人の動きだけでなく、猫とか犬が庭をうごきまわっているとか、金魚が金魚鉢の中で動いていることについてもいう。なかなか意味の深いことばである。

○**はやす**　これは、正月のうちに、のしもちを小さく切ることをいった。本文に各地の報告をのせているとおりである。一部の地区では、大根・人参・牛房などの葉を切りおとすこともはやすといっている。

（小屋原）こういういい方は吾妻郡嬬恋村方面で聞いた。

県内では、はやすについては、桑はやし、お松はやし、おっかどはやし、くさ切りなどについてもいっている。地域差のある表現をしている。

○**ちゃぞっぺ**　これは、つけもの（塩味）のお茶うけのことをいう。今の菓子類についてはいわない。ちゃぞっぺもださないとからっちゃで、これは「麦ぼうちよりおおごとだ」といわれたことは前述のとおりである。

○**ウダツ**　堀立小屋のこと。うちの裏につくり、燃料小屋として使っていた。（女屋）

○**かすみ**　「あの人はかすみが広い」といった。視野が広いということ。（野中）

○**なんぷう**　なんぷうをみるというのは、病気の様子をみること。（笂井・女屋）

○**じねえ**　病気の前ぶれのこと。（笂井・女屋）

○**けんとくをひく**　人の顔色をうかがうこと。（小屋原・女屋）

○**てびねっくせえ**　手のろのこと。（女屋・小屋原）

○**くまびる**　「あの人はくまびている」という。年齢よりふけてみえること。（笂井）

○**ひるばて**　昼うどんのこと。おもに盆のときにつかう。（小屋原・女屋）

八、むすびとして

紙数の関係で、調査項目全般にわたるまとめをすることができなかったことは誠に残念であるし、話者の方々や調査者に対しても申訳ない。どうぞお許しをねがいたい。

全体的な感想をいえば、全域にわたり、民俗全般にわたったの調査ができなかったこと心残りである。この補足については、最終巻でなんとか考えてみたい。

これだけ市街地に接しており、社会変動の波をまともにうけていながらも、ずい分と古い習俗をたしかめすのとができたように思う。

特に、信仰や農耕儀礼の面での重点的なな調査が行われれば、調査の成果をもっと豊かなものにすることができたと思う。そのためには、もうすこし時間が欲しかった。なお、私的なことを申しあげて誠に申訳ないが、木瀬地区からの報告が多すぎたように思う。

それにしても主代家の「家礼扣」や、山王の日枝神社の記録を収録できたことは本書の価値を一段と高めることになろう。（一九九三・九・一三記）

第二章　社会生活

一、村の概況

(一)　村

町の概況　新堀町の戸数は、昭和五十三年の神社改築工事の報告書によると八十七戸であったが、現在は百三戸の家がある。このうちよそからきたのは三戸だけで、その他の増加はみな村内から「シンタク」に出た家である。

町は、現在一区～八区に分かれており、それぞれの区を「クルワ」と言っている。終戦前は上・中・下の三つの「クルワ」に分かれていた。(新堀)

新堀町　昭和二十九年に前橋市に合併されるまで、勢多郡下川渕村大字新堀であった。もっと昔は東群馬郡に含まれていた。

新堀では現在新堀神社を村の神社として祠っているが、これは、新堀が現在の鶴光路や下阿内と分かれた際(明治六年)に、それまで稲荷神社であったものを、村の神社とした際にこの名前になったという。神社には、元文四年十月の「女体大明神」の棟札がある。(新堀)

新堀には、新堀山という山があって、馬頭観世音がまつってあった。

新堀神社の近くの一本杉には、年に一度雷がおちた。

この近くには、ぶっつけ場という、直線の馬場があった。(亀里)

中内　中河内という人もいる。(亀里)

村　寺家と中島は同一の村で五百石だったが、川で分かれて二百五十石ずつに分かれたという。(亀里寺家)

昔はまずしくて、二～三軒の大尽の他は小作だった。作男が十三人くらいいた。(公田)

公田　高岸・代田・林・原・町田・角田の六戸から、今五十二戸になった。

上公田は字山王で日枝神社・高岸一家。

中公田は字熊野で熊野神社・石原一家。

下公田は諏訪神社で町田一家。

公田字小暮は稲荷神社で、一時熊野神社に合祠になっていたが、戦後元にもどった。

南北三キロと細長く、下は横手山の道祖神の所まで。

どんどん焼きは、上・中・下で三つ立ったが小暮にも立って四つあった時もある。(公田)

阿内村　端気川から利根川までの村だったという。(亀里)

両家　本家・新宅の二軒きりなかったという。(亀里)

下阿内　土地が低くて、利根川から端気川へ水が返ってくるほど。大雨がふるとすぐ水びたしになった。台所を魚がおよいだ。(下阿内)

阿内宿　東西に通るオウカン通りは宿通りで、宿場町の中だったという。駒形から高崎への巡見道になっていた。

上から下へ、この道を使って競馬をやり、馬頭観世音をまつった。

何かの事故で馬が死んで、観音をまつるようになったという。
道は元の方が広くて、今は逆にせまくなった。道がしけて排水を作ってもらった。墓地も水位が高く、水をくみ出しながら掘り、上に石をおいて、かんおけを入れた。
宿阿内城の跡がのこり、石がたくさん出たところがある。
（亀里阿内宿）

龍門　ここと上之宮は持てる家が多く隣がかせげば、うちもというように競争でかせいだ。そのかわり、生活は検約した。（亀里龍門）

小屋原　本郷という土地があり、お蔵、三宝荒神さまを中心に道が通り、発達した。
昔、大胡陣屋から高瀬様という役人が来ていたという。（小屋原）

駒形と小屋原　駒形は、小屋原・下増田・西善・山王などを少しずつ分けて作った町。駒形の三分の一は小屋原であるし、駒形神社も泉蔵寺の分神である。
嘉永年間に小屋原の天王さまでまつっていた牛頭天王の頭を、駒形神社にゆずった。これが今、市指定の文化財になっている。
小屋原の天王さまは、元、泉蔵寺の前にあったが、今は稲荷神社に移している。（小屋原）

天川大島　天川大島は、天川と大島の人が寄ってつくった村であるという。（下大島）

駒形町のこと　駒形の町は、真中に商人が住んでいる。一丁目と六丁目は農家だった。二丁目は半分くらいが農家。三丁目は一部が農家。
（駒形）

六文棒　今の六文棒のところに、野良坊宿があった。宿賃が六文だったので、そういわれた。
子供の時分、のらぼうがそこで昼寝をしていたのをみたことがある。
（駒形）

栅島の由来　むかし、武士同士がけんかした。負けた方の武士がここへ逃げてきた。
そのころ、ここが島になっていた。
その武士の持っていた軍配の柄がぶっきられていた。それで、山の中へ入ってヌルデという木をとって柄につけた。
そしたら、追手がやってきた。それでまたこの武士たちは戦った。
ヌルデの柄をつけた軍配で指揮して残ったら、今度は、はじめに負けた方の武士が勝った。ヌルデの柄をつけた軍配で勝つことができた。そこが島であったというので、そこの地名を、ヌルデとよんだ。ところが、あとになって、いつのまにか、ヌデジマというようになったのだという。
ヌルデの木のおかげで戦さに勝ったので、栅という字とし、それをヌルデ（ヌデ）とよんだものという。
なお、ここの出身の今井という人が富岡へ行って、栅島を名のっているという。（栅島）

「笂」という字のこと　むかし、竹で弓矢のいれもんをつくっている人がいた。竹を丸めてつくったので、「笂」という字ができたって。
（笂井）

笂井のこと　魚をとるどうのことを、むかし、ウツボといった。
むかし、この辺を利根川が流れていたころ、人びとは魚をとっていた。そのとき、竹を割って、すのようにあんで、それをまるめてつくったのが、魚をとるのに使ったどう。それをウツボと呼んだのだという。
べつの解釈は、竹を細く割って、それをあんでまるめてつくった矢を入れるものをウツボとよんだという。
「笈」という字を使った例もある。

大前田英五郎の子分がいた。この人が笈井の出身。英五郎一家のものが、三夜沢の赤城神社へ石灯籠を寄進した。そのとき、寄進者の氏名の中に、「笈井」という地名の人物がある。（笈井）

むかしは、「笈井」のことを活字がなくって「筑井」と書いていた。

わしが南方にいたころ、独立中隊の中から三名選抜されて建築の仕事をしていた。

そのとき、忍の人だったが、人事課の人が、

「事務室で呼んでいるよ」

というので、事務室へ行ってみた。

「なんだんべのう」

といったら、

「わざわざきてもらってすまねえ。『笈井』という字はなんと読む」

「うつぼいとよみます」

「字引にねえわけだ」

といった。

人事課の人が、「笈井」という字を誰も読めなかった。

わしが、マレー半島にいて、英軍の兵舎をつくっていたときのはなしだ。（笈井）

天川大島住宅　元々本町だったが、住宅ができたので、独立した。本町が自治会長で、ここが副会長をしていた。

元々江原の雑木林になっていた所。

昭和十二年に馬の動員がかけられた時は、ここに馬をつなぎ、高崎連隊から来た軍そう以下五名の兵隊が値段を決めた。

二十二円から六十五円だった。（天川大島住宅）

住宅　東京の住宅営団が、市の依頼で昭和二十年に住宅を作り、二十一年一月から入居した。二十三年～二十四年に売却した。

二間×三間に玄関と便所がついて、六・七五坪あり、代金は九百十円、登記料は四十一円かかった。土地は江原のもの。

営団から市へ所有を移し、金は営団へ払った。最終に入居する時には、九千八百円かかった。（天川大島住宅）

住宅数　昭和二十～三十年頃で、住宅が百十軒、本町が七十軒、原町が二十軒だった。（天川大島住宅）

領地　伊達の領地であった時がある。（公田）

飛地　桃木川の南岸に女屋の飛地がある。竹やぶがあり、弓の試験をする的場にしていた。ここを守るため、提防を築いて、川をまげた。堤にはオトウカがいたといわれた。（下長磯）

軍艦岩　今、高崎市の中島分になっている岩で、利根川の中にある中洲状の岩である。岩の向こうまで新堀分になっていた。絵図がのこっている。（亀里）

利根川の中にある岩だが、岩の向こう側まで、新堀分になっていた。

元は地つづきで、本流がこっち側を通るようになって、流れで切られてしまった。

川流れがあって岩に死人が流れつくと、新堀分なので、新堀で処理するように連絡があった。福島橋を渡って、引きとりに行き、共同墓地の薬師さまの所に仮埋葬した。（新堀）

七か郷　日枝神社の祭りをする七つの村で、上北地区の六か村と下大島。（西善矢田）

地番のつけかた　道をはさんで、大字西石田が小字の川辺と稲荷に分かれている。川辺の南から北へ一番地から三百二十番地がつき、稲荷の側の住宅は九百番地がついている。三丁目は八百番地で、千番地から南の方へいっている。（天川大島住宅）

開拓　旧、相生町出身の大久保さんが、果樹園を作り、桃、なしを

作っていた。乳牛も飼っていた。作番頭を何人もやとって仕事をしていた。高い石垣を作ってあり、犬がいて、よくほえられた。一代だけで、果樹園はなくなってしまった。

明治末から大正の一けた台の頃の話。（朝倉）

はぐさっ競馬　農作物が豊作のとき、はぐさっ競馬をした。大正年間のこと。

駒形神社の前の田圃に馬場をつくってやった。中久保でやったこともあった。矢田のお寺の前でやったこともあった。

玉風とか電光は、明治の末ころに活躍した馬である。上増田の大山の新義経という馬が大関だった。

競馬に勝つとぼんぜんをもらった。五反さがり、三反さがり、二反さがり、一反さがりなど、反物をもらってきた。それを竿の先につけてもってきた。庭先にそれを立てて馬の自慢をした人もいた。（駒形）

草競馬　草競馬のことは、はぐさっけいばといった。馬場は、田のあいているところにつくった。さじきをつくって、まわりから見た。

馬には等級をつけた。大関・関脇・小結・前頭とした。

山からでっかい木を切ってきてさおにして、それにのぼりをつけて、賞品としてだした。五反さがりなどといった。それにつきもんとして、ざま・えかき・たんす・バケツなどがあった。

一等になったうちには、近所の人などがのぼり（賞品）をかついで行った。そのうちでは、馬屋の前に何等とったか賞状をかざっておいた。

あるとき、渋川の八幡様のところで競馬があって関脇で一着になった馬があった。そのとき、のぼりとたんすをもらった。

渋川から見にいった人がそれをかついできたが、夜どおしかかった。なまっ木のでっかいさおももらってきた。さおに、アリゴがつかまったんみたいだった。休み休みきた。十五人くらい手伝った。

そのうちでは、手伝ってくれた人にご馳走をだした。飲んだり食ったりした。飲みほうだいだった。（朝倉）

馬のはなし　馬の売買には、馬喰がいて、せった。値段は指で合図した。

馬喰はずんぼうばんてんを着てきた。袖の中に手をつっこんで、指でいくらと合図をした。取り引きが成立すると、施主のうちで飲みくいをした。おそうでんまつりといった。

むかしは、貧乏人は馬が買えなかった。馬持百姓はえらいとされた。

馬の神様として、埼玉の上岡の観音様と赤堀の石山の観音様があった。

馬が座敷にあがるとうまくないといった。

子をとるのは、四歳から、五歳でできる。まい年とった。大胡で、毎年オクンチの日（十月十七日）に馬市があった。トウネンコをもって行った。（朝倉）

ためくみ　昭和二十年ごろまで町へためくみに行っていた。リヤカーと荷車をひいて行った。一軒に米一升くらいやってもらってきた。

ためは田にひいた。ムギ肥にした。冬場にもらってきた。野中からは、遠くて片貝町・中川町とか新町へもらいに行った。百軒町へも行った。むかしは、ためぐるまというのがあって、四つ桶がつけられるようになっていた。まめで、ためくみに行く家は、かいこをはずした。（野中）

造り酒屋　村山という人が大正十年頃までやっていた。

阿佐美さんという県会議員をしていた人の屋敷に入って、村山さんが入って、造り酒屋をやった。銘柄は「桜一品」といった。（下朝倉）

上野　上野はフスマ袋やふろしきの子がいた。ツッポウ袖でなく、

三角袖だった。

髪の毛を無精でのばしていたので、のばしていると上野の消防士といわれた（年寄の消防が多かった）。（下長磯）

力丸村絵図（力丸）

高　札（力丸）

(二) 家

竜門五苗　三輪・中村・井野・小鮒・白河の五家をいう。小鮒屋敷・白河屋敷という所が今もある。

竜門は竜門寺のあったことから名がついた所で、常盤御前を休ませた所を寺にしたという。助けてきた家来が土着したのが、五苗という話もある。（亀里）

名字　上朝倉は、木村・六本木・目崎・斉木。

下朝倉は、笠原・阿佐見・横室・関口・倉林。

名字が違うから、上、下は別々にできてきたように思う。（下朝倉）

大塚田の姓（苗字）　四十四軒のうち、木村は十二軒。大山と岡田が多い。

大山には二つの系統がある。越後から来た人が、大山にわらじをぬいで、空屋敷に入って、大山姓を名乗ったのである。

斉田はもとは木村姓。明治のころに斉田屋敷に入ったので、斉田を名乗ったもの。これは、そのころ、徴兵のがれのために、家をたてたもの。現在二軒。

むかしは、一族のことは、イチマケといったが、今はイッケとよんでいる。（上増田）

築瀬のはなし　むかし、築瀬に三軒の家があった。

女屋さん…下長磯へ移った。

粕川さん…天川大島の原へ移った。

星野さん…東上野へ移った。今、自転車屋さんをしている。

ここの人たちは、南口とおつきあいをしていた。

なお、築瀬に田圃をもっていたのは、真下幸隆さん、博さん、女屋武雄さん、井田武吉さんのうちであった。

そこへ行く道を、ヤナセ街道といっていた。（女屋）

東上野の苗字　女屋姓が八割近くある。他に松村、池田、神野などがある。長次郎さんのうちが先祖という。（東上野）

深町家　足利の末えいといい、紋所も丸に二引きで同じである。（下阿内）

力丸氏　元、力丸に力丸さんがいた。今伊勢崎の宮古町にいるが、力丸の「シバオコシ」だという。（力丸）

矢島さん　矢島の矢島さんは、酒井氏の浪人で屋敷のまわりに堀がめぐっている。

寺家の斉田もそうだという。昔、姫路から人が訪ねてきている。

（力丸）

樋口一家　樋口次郎兼光の子孫で、戦争でモチがつけない家例である。今でもついていない人がいる。（力丸）

井野　元々は、新田義貞の家来で世良田にいた。伊勢崎馬見塚から来る時、兄が小屋原、弟が龍門に住みついたという。（亀里龍門）

角田家　前九年の役の折に、奥州方についたため、この地に移って、寺に入り、寺を作り、子供の代になって、寺の地所を半分もらった。名和氏の家臣という。

社家、寺家の関係で、今の寺家になったのではないか。（亀里寺家）

女屋姓のこと　上大島には五十軒以上の女屋姓がある。

女屋のことはおんなやとかおなやとよばれた。（上大島）

須永のこと　須永には、須永姓の人が多い。

新井・平野姓もある。

八幡様が須永の鎮守様。

ここには、お正月にしめなわをはる。（下増田）

下増田の須永には、須永という姓がある。

この姓のうちは、二派に分かれている。（下増田）

駒形の下田家　春次さんの父親が五郎作さん、もとは鈴木姓だった。

むかしは、惣領だと兵隊に行かなくもいいというので、おば（飯土井から苗ケ島へ稼ぐ）のところへ養子に行った（五郎さん）。

養子先が下田姓。ところが、駒形の兄さんが死んだので、また駒形へもどってきた。苗字はそのまま下田姓を名乗った。それが、駒形の下田姓のもと。紋所は鈴木姓の下り藤をつかっている。この系統の下田家は駒形に全三軒ある。

正月三が日の家例はそば（そばがれい）。正月三が日のうち、餅を食べると、できもんができるというので食わない。一月四日になって、はじめて餅を食べる。きり餅をやいて、しょうゆをつけて食べる。

神様にも同じように切り餅をやいてしんぜた。

三が日のうち、朝がそば、昼はあまりもんを食べた。夜は、きんぴらのおかずでご飯を食べた。（駒形）

深沢家のこと　深沢家は、深沢家は、下増田の中屋敷では一番古い家という。

深沢姓のうちは、中屋敷・須永・阿久津にそれぞれ二軒ずつ、合わせて六軒ある。采女正という人が先祖であるという。出身地がどこであったかはわからない。（下増田）

北爪家のこと　北爪家の先祖は、宮城村の鼻毛石からきたものという。もとは、大胡城主につかえていたという。兄弟三人で下増田へきた。三人でわかれて住んだ。大蔵が先祖という。（下増田）

大松　中屋敷でいちばん古い家といわれているのが大松というう ち。今は、深沢徳一郎さんのところ。

むかし、その屋敷に大松があった。ここの人が熊谷まで行ってふりかえってみると、この大松が見えたというはなしもある。大松にかみなりがおちてやけてしまった。

そのとき、ひねじいさんが力があるので、三間梯子をもちあげてつないでのぼって、火を消したという。むかしから、下肥をかければ火が消えるというので、下肥をぶっかけたという。（下増田）

定方と定形　違いがわかるように字をかえた。（亀里）

イッケンモン　ムラに一軒しかない苗字のうちのこと。

よそからきたうちのようにみえる。（上増田）

家号　房丸、公田、亀里矢島に「百石」という家がある。（亀里）

クルマヤ　水車を四十年していたので屋号になった。桃木川にかけ、上、下長磯、女屋から米をつきにきた。米が二十四俵はれる。持って

きた人や、番頭がついて番をしていた。俵にもぐりこんで待った人もいる。料金は一年して一円五十銭で、あとはただで自分でつきにくる。「止め」といって、無料の家が多かった。

水車は一町株といって、それだけの価値があった。（下長磯）

㈢　地　名

矢田の地名　山王様と八幡さまがけんかして、射た矢がおちたので矢田という。

日枝神社、山王さまが勝って、出陣の様子が祭りになったという。（西善矢田）

地名

銭神……蛇の神をまつった所。

銭面……弁才天をまつった所。昔は石の祠があったという。

油免……矢島の木の宮（愛宕神神）の燈明のため祖税を免除された所。今は主代家で城宮といっている。（亀里）

利根川に関連した地名

船渡の松……永明小学校の南のあたり。

この松は、むかし（利根川が流れていたころに）船をつないだという。

笂井の小屋さんのところは、船頭だったという。

長磯……利根川が流れていたころ、磯づたいをしたところという。

大島……ここは、むかし、川原であったという。（上大島）

ミツボトケ　下阿内にある地名で、ごぜの墓地という。耕作する家がだめになるという。（下阿内）

本郷　力丸の城あとの地名。

下阿内の深町さん宅の地名で、素掘りの堀あとがある。（下阿内）

樋越　竜門の小字となっていて、樋で田に水をかけたところ。（亀里竜門）

油田　一番南で、あたたまった水がたまった田なので湯田といったのが変ったものだ。（亀里）

油傳　元は湯田といって、水が流れているうちに熱せられてあつくなった所。（亀里）

田川　亀里の番地は、ここから始まっている。新堀の西で、極楽寺の土地が二畝くらいあり、伝染病で死んだ人を焼いた。一晩おいて片づけた。明治中頃までつづけた。提防の向こうになっている。（亀里龍門）

龍門　常盤御前が、ここまで逃げてきて、寺のあったところで亡くなった。極楽寺に納めた。

頼朝公のお声がかりで地蔵様を作った。小さいけれど良いもので、布につつまれている。見ると目がつぶれるという。前立ちもあったが、盗まれてしまった。（亀里龍門）

カナヤシキ　日の中で、竹がはえてやぶのようになっていた所をこうよんでいた。堀がまわりにあって、狐が出たという。（西善・矢田）

ビクニダイ　下増田の南のはずれに、ビクニダイというところがある。むかし、ここにビクニが住んでいたので、この名がついたという。

ビクニダイのところに寮があって、そこにビクニが住んでいた。その人があかんぼうを生んだらしい。その子は男の子で、あとで坊さんになったという。（下増田）

ここは古利根。むかしびくにだいがいたところがびくにだい。竜宮のところはうずがまいていた。そこに用のものをたのむとかしてくれた。あるときかえさないものがいたら、それからかさなくなったという。竜宮様が（膳・椀など）をかしてくれたという。（下増田）

中屋敷の大松　中屋敷には古いうちがあった。大松という。そのうちには大きな松があって、その松のねっこに、キツネがすんでいたという。（下増田）

お大日　下阿内のお大日というのは、利根川の河原が終ったところの地名で、沓石・井戸。大日塚という塚があったが、昭和二十三年の大水の時、流れてしまった。新地の者は、大日の所に住んでいたが、天明の大洪水でここに移ってきた。（下阿内）

春日　西光寺の所を春日といった。神社は春日神社で、前に池を作って猿沢池とした。（朝倉）

越殿という地名　地蔵様の東の田圃をこえどのという。（上増田）

弥勒様　上増田の中に弥勒という小字名がある。土地改良のとき、そこにあった弥勒様を、地蔵様のところへうつした。弥勒様については、とくべつの信仰はない。（上増田）

フナト　下阿内にある土名だが、対岸の斉田にもあったという。端気川の端で、デジリという名称がのこっている。（下阿内）

オケミドウロ　検見をさせる所で、今は流通団地になっている。（力丸）

ハリツケ田　新堀の内で、そこを耕作すると持ち主によくない。（亀里）

かけめ　水の流れによって川（がけ）がかけて、田がなくなってしまったところがある。そこをかけめとよんでいる。（笂井）

ゼンキュウ様の林　今の群馬ヘリポートのあたりは、上福島までつづく松株だった。見通しが悪かった。（下阿内）

江原山　江原の大尽の持ち山だった。今はくずして公園にした。（朝倉）

塚　桑畑の中に塚・古墳が土山になってあちこちにあった。それほど大きくなく土をよせた小山があったくらい。塚っ原といったくらいで三百くらいはあったのではないか。

塚の陰は日陰なので、暑い日はそこで休んだ。

石が中に入っていたので、塚をくずすと石が出て、畑のまわりにつんだり、旧の上川淵小学校の土台石にした。もっこや運送車ではこんだ。明治三十六年の話。（朝倉）

古墳　桃木川の改修で古墳が出土している。四十基ほどで、径が二十～三十メートルのもので、四十～五十メートルのものは少なかった。笂井にも大塚田の地名があり、駒形駅の旧公民館の所にも径が八mの古墳があった。（笂井）

朝倉八百八塚　古墳がたくさんあったので、こういう名がついた。下朝倉の持ち分が多かった。（朝倉）

(四)　川　や　沼

新堀と利根川　利根川には、この近くで四つの渡しがあった。公田・横手・新堀・福島。

新堀と板井の間に仮設の舟橋があり、天馬船十そうと針金で作られていた。この橋は台風の被害で渡しにもどった。新堀の側が急坂で事故にあった。

大水が出ると、流木（カワギ）拾いに新堀は全員出た。大水が出ると、西川に水が逆流したので、提防を作った。

新堀の落合は鮎とりの名所だった。河原は蚕具、牛馬の洗い場として使われていた。（亀里）

西川　新堀の西の川でヤナがあった。サガッパシ・サガッポリといい橋が低かった。新堀町の西を流れている川で、西水堀ともよんだ。川ざらえの費用として、七両ほどの金をもらった。（亀里）

古川のはなし―桃木川の流路変更　むかしは、女屋と下長磯の境のところ、桃木川はもっと南を流れていた。

ところが、そこには、前橋藩の弓竹をだす竹やぶがあった（今の川島重貴さんのところ）。そこのくねにぶつかって流れていたので、竹やぶがあぶないというので、流路を北へうつしたものという。それが、今の桃木川である。

もとの桃木川の北に女屋の人の名義の地所があった。流路が北へ移って、もとの川のところは古川と呼んでいる。（女屋）

白川　力丸町の榎橋より上は、字を白川という。白川は元は、水が枯れる川だった。（力丸）

堂木堰　欅島からくる。（亀里）

五郎右エ門堀　六月十四日に早朝、堀さらいをした。五郎右エ門堀のあとに、伊勢崎新堀がつながっている。五郎右エ門堀については、増田はもとから権利があって、八坂用水の組合に水利費を納めていない。（上増田）

観音池　ヘソのオを持っていって埋めた。用水でためたものか。（下阿内）

沼　天川大島の住宅の所は、元々砂利とりのあとで、沼になった。両毛線を作った時のバラス石をとったので掘りとられた。ここは、両方に木がしげっていて、自殺の名所だった。（天川大島住宅）

(五)　交通・交易

乗り合い馬車　大正の頃まで、赤と青の二色の乗り合いの馬車が新堀から現在の前橋駅の近くまで行っていた。（新堀）

渡しと舟橋　下川渕地区内には、公田・横手・新堀の三か所の渡船場があり、渡し舟で人を渡していた。公田の渡般場は昭和大橋ができるまであった。新堀の渡しは、大正頃までで、その後、同じ場所に舟をつないで板を敷いた「舟橋」を作って渡った。これは、利根川の両岸を太い針金でつないで、それに何叟もの舟をしばりつけたものだった。秋になって利根川の水が減ってくると、舟をおかに上げた。（新堀）

お松市　毎年暮れの二十八日に玉村で正月用品の市が立ち、お松市と言っていた。このときには門松用の松や正月用のものを籠を背負って買いに行った。（新堀）

天川大島　松並木　小学生の頃数えたら、三百十九本あったが、三百二十本として報告した。その後、№をつけて、百六十本まで覚えている。（天川大島住宅）

(六)　仕　事

バクロウ　戦前までは、農耕には主に馬を使っていた。この馬は、バクロウが引いてきて、年を取った馬と若い馬とを取り替えていく。バクロウは、玉村町の福島や下阿内にいた。なお、戦後は牛を使うようになった。初めは、県の世話で朝鮮の赤牛が来た。（新堀）

県道工事の人夫　昭和四年に県道「前橋玉村線」の工事が始まり、村の人達は工事の人夫に雇われて出た。手間賃は、初めの頃は一日に一円二十銭くらいもらえたが、昭和九年には七十銭くらいになってしまい、一日働いて地下足袋をやっと買えるくらいだった。（新堀）

(七)　そ　の　他

松の木　天川の端気川筋の唯一のもので、水車があった。

朝倉の人は、平らで山がなくて、もし木は桑ぜばかりなので、大正頃、青木さんの提唱で、赤城の赤芝に松をうえた。その苗が余ってう

えたのが、安立製材の屋敷があった所の松の木である。
そこに堰があり、せきのそうじをする朝倉の人がいった時、松の手入れもした。舟つなぎの木で、休む所になっていた。（朝倉）

検地　坪刈りをして反物を見る。出来の悪い田を見せるのが村役の腕前で、年貢を少なくさせた。（亀里）

灰よせ畑　浅間の砂の塚があちこちにあったが、土地改良でなくなってしまった。（下阿内）

土地　土地が高く、砂地で水はけがいいので、大根を作るといいものができた。塚っ原大根といって有名だった。宝船一家は野菜で身代を作った。（朝倉）

新堀のわかし湯　新堀神社の西南の所、松林の中に小さい池があり渋湯が出た。チョウヘイさんという人がいて、湯をわかしていた。その中に手ぬぐいを入れると、黄色く染まった。昭和二十二年のキャスリン台風で流されて埋まってしまった。（亀里寺家）
新堀神社の南西の所にある。今でもある。山の中の沼のような所で、清水がわいている。鉄分が多いようだ。渋池といっていた。オヒキガエルがたくさんいて、七～八年前までいた。小屋があって、温泉のようにしていた。共有林の中に、二筆の私有地があり、この池から水をくんできて、あたためて入れたものらしい。（新堀）

川の跡の田　流れにそって湿けている。乾くとカチカチでトラクターの爪がはいらない。しけると車がうまってしまう。（亀里）

厄介田　村から逃げてしまった人の田で、近くの人が共同耕作して、年貢を納めなくてはならなかった。（亀里）

郷蔵　公民館のすぐ東の土地に立っていた。土壁の蔵があった。まわりの堀をおくらっぽりという。（亀里龍門）
桃木川の舟を使って米を運んだので、都合がよかったという。米をしまっておいた。（下長磯）
今の公民館の前にあった。その後、繭の乾操場になっていた。倉東、倉西、倉前という地名があった。村の共有地なので、集会場が立てられた。（西善矢田）

避病院　元は役場のすぐ前にあり、その後今の工業短大の前に移った。（下朝倉）

焼場　今、利根川の河原の中になった所に、死体を焼いた所があって、共有地で今にのこっている。関コウゾウ他四十九名とあるだけで、他の人名がわからず、処分できない。（下阿内）

火葬地　亀里の共有地で、地目にある。明治の初めに処分した。（亀里）

自動車　大正末、布施川運輸が仕事を始めた。関東大震災の時には、仕事をしていた。稲はこびが最初の仕事だった。（小屋原）

自転車　大正年間に乗る人が出るようになった。（小屋原）

亀里小学校　極楽寺の本堂の東、庫裏の所に立っていた。最盛期には、八十人くらいの生徒がいた。人数が多くて便所が足りなくなり、東の角田家に借りにきた。学校との境にカラタチを植えた。
亀里と三公田・横手・鶴光路の子が通った。（亀里）

医者　神田ユウジロウという医者がいた。鹿児島生まれの軍医で、ここで開業した。屋敷があったので、その場所を神田ガメエとか神田南とかよんでいた。（新堀）
人力車に乗ってきた。女屋にいたお医者さんは目が見えなくて、車ひきに薬の調合をさせたという。（下長磯）

相撲大会のこと　笂井のかさ薬師で縁日のとき、奉納相撲があった。そのころ、女屋に住んでいた井上良さんという屋根屋さんは、背は高かったが細身の人で、相撲が好きで、この大会に出た。

千秋楽に、井上さんが相撲甚句をうたったのを聞いたことがある。（女屋）

まつごく　むかしは、うちのまわりにむしきが一杯になるのがほまれであった。それがないと、そこんちは、さびれてきたかといわれたという。

暮に、秋のまつばをさらいに行った。ムラの共有地が赤城山にあった。そこへまつごくさらいに行った。六本で一駄といい、馬につけてきた。そのあと、春四月ごろには、ぼやきりに行った。（上大島）

ホマチ　ヘソクリとホマチということばは同じ。かくしたふせきというのがホマチ。ふのびしている耕地（田）のことを、ホマチといった。（栃島）

二、村の構成

(一) クルワ

小島田の組織　小島田は、上・中・下組に分かれている。（小島田）

ごくみ　もとは、ごぐみ（伍組）に一家単位で組んでいた。家がはなれていてもごぐみに入っていた。戦争後にこれを改めた。（上増田）

上野ぐるわ　上佐鳥の西光寺は、上野寛永寺の直末だったので、場所が上野ぐるわとなった。（上佐鳥）

宿　阿内宿は西から上宿・中宿・下宿の三つに分かれている。宿ごとに何かあるということもない。（亀里阿内宿）

公田　上・中・下の三つに分かれている。上は一・二・三組、中は四・五組、下は六・七・八組になっている。主な姓は、上が高岸、中が石原、下が町田である。（公田）

くるわ　上朝倉の中で、柳橋くるわ・上海道くるわ・中ぐるわ・川向ぐるわなどに分かれている。川向ぐるわは、かむかいぐるわといわれ、別天地になっていた。互長が、各くるわに一人ずついた。互長になるのは大変だった。（朝倉）

(二) 境

八丁じめ　むかしは、天道念仏をする前に、ムラ境に八丁じめをたてた。これは、はやり病いがムラへ入って来ないようにということであった。昭和十年代の終りのころまではやっていた。この時期は、六月一日、たてるところは、上長磯・下長磯・天川大島・野中との境の主要道路のはた。竹の先に、お札をはさみ、よたれべえをさげたのをたてた。（上大島）

むかしは、八丁じめをした。お札を竹の棒にさして、ムラ境にたてた。あくびょうよけという。へんなものがムラに入らないようにということである。このお札は、神社からもらってきた。（下増田）

もとは旧六月一日に八丁じめをたてた。ムラの入り口（くち）の道に立てた。神主がたてた。

八丁じめをたてた場所は次のとおり。

古河線、増田の新橋のところ、小屋原の河岸、竹橋、清内、祭年橋

竹に「寒神」と書いてあるお札をつけてたてた。（駒形）

八丁メ　村境に立てた。「おめえ、なまいきな口きいたって、八丁メの外で、口がきけねえようじゃ、一人前じゃねえ」といわれた。（下長磯）

境　テンガの柄の深さまで掘り、炭俵を一俵たてに埋め、一尺土を固めたあと、その上にまた一俵をたてに埋め、その上にウツギの木を

植えて境にする。こうすれば、ウツギの木が植えかえられても、本当の境がわかる。（亀里）

隣の畑との境は軽石の塚だった。（亀里）

㈢　自　治　会

自治会の諸役

○自治会長……今は選挙で選ぶが、昔は推薦で決めていた。任期はしばらく一年ごとであったが、平成三年度からは二年にすることになっている。戦前までは一人の人が何年もやっていてとくに任期は決まっていなかった。

○代理……自治会長同様今は選挙で選び、任期は二年である。自治会長の補佐役をするが同時に会計を兼任している。

○班長……昔は伍長といっていたが、今はどちらの言葉も使っている。決め方は班によって異なるが、順番でやったり選挙で選んだり話し合いの上で決めたりなどしている。班長は、自治会費を集めたり各班に対する連絡事項を伝えたりすることが中心の仕事である。

○氏子役員……昭和三十二年までは村の中から年配の人を人選していたが、その後は自治会の役員が兼任するようになった。

○寺世話人……寺の関係の仕事をする寺世話人は村に二人おり、護寺会費（二千円）を集めたり寺からの連絡を行ったりしている。なお、各村の寺世話人が集まり、善光寺の運営委員会を組織している。（新堀）

自治会役員　自治会長・副自治会長・書記・会計・班長が役員会に参加し、計画を検討し、回覧をまわす。

班の内九班は県の独身寮、十班は本町の分だが、桃瀬小、五中、子供会の関係で、こちらに来ている。

全員が納涼祭の実行委員になっている。（天川大島住宅）

肝煎のこと　上大島には、きもいれという役があった。年番であった。上大島には四つのクルワがあり、一つのクルワから一人ずつ出た。

ムラ内にもめごとがあったときは、きもいれがでて解決した。

なにかもめごとがあったときには、後見がでておさめた。後見でおさまらないときに、きもいれがでておさめた。

わかいしゅ、消防団の上役のような形で、後見人とか肝煎という役の人がいた。年輩の人だった。

わかいしゅの間で、なにかごたごたがおこると、後見人がでておさめた。それでもまだおさまらないときにきもいれも各クルワから一人ずつでた。合わせて四人いた。二年交代のようだった。大正の末ころまで、この役があった。区で、この役の提灯をつくってくれた。

びりそうどうのときも、後見やきもいれがでておさめた。地芝居があったとき、後見がでて、さわぎのないようにとりしまった。

後見人ときもいれは、人間はちがうが、同じような立場の人がえらばれた。

（きもいれの提灯があったようだ）

きもいれは、消防手をした人からえらばれた。

後見人も、きもいれも、大正時代によしになったようだ。（上大島）

笂井の区役員

区長（自治会長）

組長（にじゅう伍長）六名

　組が六組ある。

自治会長の補佐

隣保班長（伍長―伍長組）二十二名

大体一組十軒くらい。（笂井）

小屋原の年番について　小屋原は五つの小字に分かれている。それ

ぞれの組（小字）に年番がおかれ、まつりの世話をした。
年番はその名のとおり一年交代。
各組ごとの年番数は次のとおり。
長谷戸……二名
本郷……四名
西原……四名
前原……四名
南本郷……三名（もとは本郷に含まれていた）
計　十七名
この中に年番長がいる。
年番は、家主の順にまわってくる。
年番の仕事は次のとおりである。
○春まつり　四月十日
○薬師様　七月七日（宵まつり）
○荒神様　七月三十一日
○オクンチ　十月十六日（宵まつり）
○新年拝賀式　一月一日、棒立てをする。
薬師様・荒神様・オクンチのときには、灯籠をつける。
オクンチのときは、宵に氏子が神社におてもりをする。十二時（十七日になる）がすぎるとムラの人が赤飯をあげにくる。（小屋原）

年番　組から一人ずつ出て、八～十人いる。年番長が一人いて、行事をとりしきる。正月十七日に交代式があって、新旧の交代をする。会計が行事の費用をとりしきる。
二月一日　天道念仏、各戸二百円集めて費用にする。
二月二日　稲荷
二月九日　石神様、ノボリを立てる。
四月九日　飯玉神社
七月二十四日　天王まつり
八月一日　天道念仏
十月十七日　ノボリを立てる。
二月の祭・四月・七月・十月の祭には神主が来る。（下朝倉）

上長磯の村役　農村では、（村役をきめるときは）集ったときに勝負できめる。多数決である。予算などは、伍長＝評議員がきめる。
上長磯の村役員は次のとおり。
区　長　一名
区長代理　一名
立会人　一名
伍　長　十名
上長磯は道をはさんで東西に分かれている。東・西とも五組ずつに分かれていて、伍長は合わせて十名いる。もとは、区長代理は、東西に各一名いた。任期は二年、市に入ってから三年になったこともある。
区費は、平等割と財産割であった。今は、資産割？
むかしは、村人足のとき出不足はとらなかったが、今はもらっているようだ。ふつうは、二十歳から一人前としたが、道ごしらえのときはべつ。道ごしらえのときは、子供がでても、女衆がでてもかまわなかった。上限はなし。今は、七割は女衆である。（上長磯）

大塚田の役員　大塚田全体は、当番頭がとりしきっている。現在、大塚田は九三戸。四つの班に分かれている。各組から役員を出した。
むかしは、赤城山（共有林）の当番、共有水車の当番、当番頭の三人が役員。一つの組はあけ当番（無所属）であった。今は、会計と公民館主事と当番頭の三人が役員となっている。
毎年一月二日が、大塚田の総会で当番頭が主催する。ここで、一年

間の世話役をきめた。このときは、はなしをまわさずに集った。

このとき、あたらしく組に住むことになった人は、この席に、酒一升持って出席し、皆さんに挨拶をする。この席で皆さんに紹介し、どの組に入るかをきめた。

会議のあと懇談会、酒があがるので、酒を飲みながら、新旧の融和がはかられる。（上増田）

当番頭のこと　大塚田の組にとっては、区長さんより当番頭の方が権威があった。たとえば、組の人がなくなったとき、寮の庭で穴まわりをした。そのとき、お焼香の一番は、当番頭である。なお、当番頭は、当番の人の互選による。当番は、四年に一ぺんずつまわってくる。（上増田）

神社総代の仕事

一月一日　元日祭

二月　節分祭、厄除け祈願祭

四月十日　春季火祭（春まつり）

四月二十日　護国神社例祭

七月二十四日　天王様の祭り（神社の拝殿の西にある大きなほこら）

八月一日（七月三十一日）　荒神様の祭り。荒神様は、火伏せの神様。

十月十七日　秋祭り。稲荷様のおまつり。オクンチ。

十一月二十三日　新穀感謝祭。神社に神主をよんで行う。（小屋原）

荒神様の世話人　小屋原の三宝荒神様の世話人は、各組で四人ずつくらい。戸数が少ないところは少ない。小屋原は、次のとおり。五つの組に分かれている。本郷・西原・長谷戸・前原・南本郷。（小屋原）

消防団　青年団の上の者が消防団に入った。大体、二十歳くらいから上のものが入った。三十五歳くらいまで。

人数がいないと、若いものがでた。（上大島）

自治会の会議　自治会の総会は、毎年年度替わりの初めの日曜日に公民館に集まって行っている。中心の議題は前年度の決算と、その年度の予算案についての話し合いである。何か特別な問題があれば、このとき自治会長を中心に話し合う。その他、自治会長が必要に応じて役員を集め、役員会を不定期に行っている。（新堀）

寄り合い　昭和四十四年まで、自治会長宅で寄り合いをした。その後は自治会館でやっている。（天川大島住宅）

区長事務所の札
（天川大島住宅）

区長制度　昭和三十八年に自治会長制度に変わるまで、続いていた。看板は五十一年まで使われていた。天川大島は九七区になっていた。（天川大島住宅）

自治会費　現在の自治会費は、一戸あたり年に一万円で、四回に分けて集めている。これは、昭和三十八年頃からだが、それまでは、自治会の必要経費全体を、「固定資産割…四割」「所得割…四割」「戸数割…二割」に分け、総会で基本方針を決めて各戸に割り振っていた。なお、戦前は、小作地からの小作料が村に入っており、その金でまかなえたので、とくに自治会費（当時は区費）を集める必要はなかった。

自治会費の使途は、下川渕地区連合会への負担金（全自治会費の四十四％）、各種団体（婦人会・子ども会・農事組合等）の補助金、各種後援会費（消防・教育・体育等）、神社の祭り費用などである。（新堀）

㈣　つきあい

新築祝　家ができあがると、新築祝いをする。むかしは、こういう祝いはしなかった。今は、近所の人とか近親者をよんでいる。このとき、記念品をもってくる。となりんちは、施主の子供がテレビと冷蔵庫を贈ってくれたという。家を新しくたてて、一番はじめに家の中にもちこむものは、神様と先祖様。（笂井）

火事の関係のこと

火事見舞のことは、ヤケボコリといった。

火事でうちがやけたあとに、身上がよくなったのは、ヤケボコリといった。

急に大尽になったうちのことは、ナリアガリといった。（下増田）

火事見舞のことを、ヤケボウロクという。ヤケッポウロクという。火事でやけてから、かえって、身上のよくなったことを、ヤケボコリという。

火がほこるというのは、火がさかんに燃えることをいう。

火事があった場合には、火事の原因がはっきりしないうちは、灰よせをさせなかったということである。（笂井）

灰よせ　火災が出た場合には、新堀町全体で手伝いあう。この手伝いを「灰寄せ」という。（新堀）

クルワ同士の付き合い　葬式が出たときには、各クルワごとに手伝いを行う。その際には、そのクルワの伍長が葬儀委員長となり、全体の指揮をする。

昭和三十年代までは土葬であったが、その時の穴っぽりは一区と二区、三区と四区、五区と六区、七区と八区というふうにそれぞれが組になって行っていた。

結婚式は、昔は自分の家でやっていたので同じクルワの人を呼んで嫁の披露をしたり式の手伝いをしたりした。今ではだれも結婚式場で行うので、懇意の人を呼ぶだけになってしまった。しかし、現在でも、長男が結婚した場合には、式場で披露宴をやった後、家に近所の人を呼んで御馳走し嫁を披露する。（新堀）

不幸見舞　近所の人がなくなると、近所の人がお見舞にきてくれた。このときは、あいさつに行くだけで、なにももっていかない。

施主の方ではお茶を出す程度。むかしはお茶菓子をだすが、むかしはださなかった。（笂井）

墓ほり　身内の場合は穴掘りをしない。順番に四人が仕事をする。掘りながら清めの酒をのんだ。かめを埋めたので、三メートル近くの深さがあり、せまいので掘るのが大変だった。三分の二くらいは水がたまった。（鶴光路）

よび方　葬式で近所の人をよぶ時、全員よぶのは「皆さんよび」、主人だけよぶのは「だんなさんよび」という。（公田）

念仏申し　戦後三十年頃まで、葬式の時、近所の人五―六人で念仏をとなえた。（新堀）

お念仏ばあさん　お葬式の時、念仏をとなえてもらった。食事を出すだけのお礼でよかった。横手にいた。縁側からあがった。（横手）

念仏　昔は一昼夜やったものらしい。明治からは日の出から日没までやっている。隣組と関係ない組ができていて、一組十軒で十組ある。（下阿内）

一軒の家でたたける人は全部出て、交代でたたいた。（鶴光路）

つり鐘をたたいた。これは、人数が足りないから出てこいという合図だった。（下阿内）

神社とのつきあい　暮に（十二月十五日の朝まで）お札の注文をま

とめて駒形神社に取りにいく。イナリマツリには使えるように配る。（小屋原）

お寺とのつきあい　正月に、米、粉、小豆を重箱に入れてもっていく。盆、彼岸、年回忌、葬式でお願いをした。（小屋原）

お寺　西光寺が六十軒、橋林寺が十数軒くらいのだん家になっている。（下朝倉）

寺　新堀町の元からの人は、みな鶴光路町の雲上山善光寺（天台宗）の檀家になっている。（新堀）

㈤　共同作業

キョウドウ　農耕具を何軒かで買って使った。モミスリや脱穀で、モミスリは調整ができたが、脱穀は使いたい時が一緒なので、不便ということで、各家で買うようになった。（亀里阿内宿）

スートメ　田植えをする女衆のことを「スートメ」といったが、田植えの手間取りにいくことを、「スートメに行く」といい、戦前まで玉村の板井や斉田や本町辺りの農家に頼まれて、田植えに行っていた。朝の三時ごろ起きて弁当を持って出かけていった。村に世話焼きがいて、その人に「今日はどこへ行ってくれ」と言われて出かけた。一日に四～五十銭くらいもらえた。

「スートメ」には夫婦で行くが、男衆は主に苗取りや綱張りが仕事で、女衆が苗を植えた。村の田植えと重なるときなどは、年寄りを村のスートメに残していったこともあった。（新堀）

田植えの手伝い　昔は田植えには互いに手伝うことをしていた。田植えに機械が導入されるようになってからはしなくなったが、それまでは主に繭の出荷先が同じ人が組になって手伝い合うことが多かった。これは、養蚕の仕事と田植えの仕事の流れの関係による。戦争中は、人手不足であったため隣保班ごとに手伝い合った。（新堀）

田植の組　田植組合があり、互いに助け合って、田植をした。最終的には出人夫と、反別で金の精算をした。（亀里阿内宿）

共同田植　村の中に四組あった。組によっては、正月のうちに話し合いの会議によって順番を決めた。水口の家の方が早い。

一週間から十日かかる。早い家は七月八日、遅い家は七月二十五日になり、お盆の朝飯前までかかったといわれた。昔は六月田植もあった。（亀里寺家）

一人前　田植が一日で七畝できる。今は七畝づもりだといわれれば、それほどがんばらなくても大丈夫だなと思った。桑原うないなら一反というところだった。（亀里寺家）

エイ　二～三軒で組をつくり、田植えをした。ごちそうを作って、エイの家に持っていく。コブやチクワの煮しめがあった。（朝倉）

むかしは、エエ田植をクルワごとにやった。女屋家の一部は、この組に入らなかった。田植唄の上手の人がいて、田植唄をうたった。（女屋）

堀払い　元堀の堀払いというふれがくる。水世話は島宮にいる。上増田中の人がでて、堀払いをする。笂井の三軒家のところからはじめて、下流へ行くと、各組ごとにわかれた。

「五郎左エ門の堀払い」というふれがでる。これは田植前にする。上増田中から、一軒一人権利者がでる。むかしは、このとき出ないと、出不足金をとったという。水は笂井からひいてきた。（上増田）

毎年、四月と十二月の二回に堀払いを行っている。昔は道路普請だったが、道路が良くなったので側溝などの泥さらいなどを中心に作業を行う。毎戸一人が出ることになっている。事情がある場合には出なくてもかまわない。（新堀）

五月には用水路の堀払いをした。（亀里）

新堀山の下草刈り　一～八区で、毎年順番にやった。（下阿内）

助郷　玉村宿に出た。（鶴光路）

(六)　番　　頭

番頭　一年間の契約で仕事をしてもらった。二～三月に契約の月があった。夏、冬に仕事着を支給した。金は半分くらい親が持っていってしまう。（亀里阿内宿）

小作　一町一反借りて三十五俵が小作になる。一反三俵の小作になる。一軒で二十四俵ないと食べられない。

このへんでは完全な小作はない。（亀里阿内宿）

デカワリ　二月二日に作番頭のケイヤクをした。一年間の仕事を約束して、親同士が相談してお金のやりとりをした。前払い。（朝倉）

日傭　田植、蚕、稲刈りのように季節的のようなものは一人前の人を頼み、金はあと払いだった。（朝倉）

むかしの奉公人　奉公人は、盆、正月にしきせをもらった。

盆のときは、ひとえもん、さんじゃく、下駄、麦わらぼうし。

正月のときは、長着、羽織、ももひき、足袋、下駄、えりまき。

小づかいももらった。筑井ではじめて十銭の小づかいをもらった。うれしかった。明治四十一年、数え十歳のときのことである。うちでは、五厘のかねをもらうのが、容易ではなかった。

死にかかったときでないと、医者にかけてもらえなかった。

よそへ出るときはじめて、うちからももひきをはいてでた。

給金は一年に一度くれた。当人がつとめていさえすればくれた。

前借りだったので、つとめていればかえせたが、お金を返さねばならなかった。

着物はもらえた。ふだん着は、雇い主側がだれかの古でもくれた。

食事は、家族と同じんを食べた。さしみ、肉は、二十二歳で年季奉公に行ったが、そのときまで一度も食ったことはなかった。どこへ行っても、雇うときには、食事はうちのもんと同じにするといった。しかし、うちのもんが戸棚へ首をつっこんで食うこともできず、奉公人とちがうもんを食っていることがわかった。

寝どこは、奉公人はお勝手とか、厩の二階だった。厩の二階のほうが気楽でよかった。よく、旦那さんが、

「おらちにいられねえもんは、どこへ行ってもいられねえんだ」

といった。

寝る時間は、養蚕をしているときには遅かった。十二時とか一時ころだった。

起きる時間は、いくら早くても、目がさめれば起きなければならなかった。あかるくなれば、絶対に起きなければならなかった。

風呂は、大体しまい湯だった。

かわりもんは、できたときだけくれた。

朝飯前仕事をした。一時間くらい、それは草刈りなど。

夜なべ仕事は、秋の彼岸から春の彼岸まで。

小づかいは、モノビモノビにもらえた。

遊び日は半日休みと一日休みとあった。

でがわりは二月二日、この日はうちへ帰れた。それっきりのこともあり、またたのまれることもあった。

翌年は翌年できめた。

農休みの日の朝飯前仕事は長かった。

下田いくやんがち（庚申様のところ）では、昼そばをつくったり、大根まいたりした。農休みの日に、草刈りをしたり、そば刈りをさせ

られたりした。仕事が終わらないうちは、朝飯にならなかった。
百姓奉公にいくのは、おまんまが給金になるということだった。
夜なべ仕事としては、まぶし織りとか、なわないなどがあった。なわは、もしきとり、屋根替え、くねゆいなどにつかった。まい晩、大将、番頭となわないをした。一晩に五房なうのがふつうだった。くびれわら一束なうのがふつうのことであった。
野良から帰ってくるとすぐにわらをひっぱたいた。飯を食うとないはじめた。二時間で終えなかった。それだけならいは三時間もかかった。十二時すぎまでかかった。
「彼岸の中日には、ぼたもちを食わなくもいいが、ならば半日遊びたい」という言葉があった。彼岸には半日か一日は休んだ。
よそむらのでっかいまつりに行くときには、ひまをもらった。たとえば、片貝の虚空蔵様のおまつりのようなとき。五代の木福様のおまつりのときは、夜遊びに行った。伊勢崎の山王様の飾りもんは見たことがある。
盆、彼岸、正月のときなど、かわりもんを食わせ、こづかいをもらえた。小豆の入ったご馳走を食べると、仕事を休んだという番頭さんがあったという。
ある人が、「米の飯が食いてえ」といったら、「縁起が悪い」といわれた。そして、「この人は、助かりそうもないから、おかゆでもくれてやれ」といわれたって。（ふだん米の飯など食わなかった。米の飯を食うのは、葬式のときだったから）（女屋）
子守り　女の子が頼まれたが、それほどいない。（亀里阿内宿）
ツミザマに子どもを入れて、田や畑のすみにおいて農作業をした。
（下長磯）

(七)　共有地

共有地　村の西の利根川ぞいに村の共有の土地が三町ほどあった。これは、もともと村のもので小作地として村内の人に作らせていたらしいが、天明の「ドロ押し」で流されしばらくは荒れ地となっていた。その後松を植え、その松が林になって保安林になっていたが、昭和二十二年の大洪水で流されてしまった。それまではここで「もしき」を自由に取ることができた。
川向こうの玉村側にも村の土地があった。現在はどうなったか不明だが、昔「川流れ」があると、玉村の方から「沙汰」があった。また、戦争中には東京から疎開の人がきていて、畑を耕し、サツマなどを作っていた。そして、小作料をわざわざ村へ届けにきていた。
現在、下川団地の浄水場になっているところは、新堀の共有地であった。この土地は昭和五十五年に県の企業局へ売却した。
新堀神社にも村の土地が約三反あり、終戦まで農地として人に貸していた。しかし、農地解放で解放してしまった。（新堀）
リョウ　薬師堂の裏の共同墓地のある所にあった。
リョウ坊主がいた。鶴光路の善光寺の隠居が入っていたという。
（新堀）

(八)　たのしみ

湯治　晩秋蚕の後に出かけた。四万温泉が多く、自炊した。田村が安くてよくて、積善は大尽が行く所だった。伊香保温泉では、福善や横手館に泊って自炊した。（新堀）
湯治　春と秋に、赤城の地蔵の湯と、梨木温泉に行った。腰の痛みにいい。

伊香保は湯治ではない。四万温泉が多かった。（亀里龍門）

草ばくち　仲間と一緒に草刈りに行ったときにした。

参加者がそれぞれ草を出しあう。木の枝などでわっかをつくる。それを草の山の中にかくす。そのわっかをめがけて、鎌を草の山につきさす。わっかに鎌がつきさされば、その草が全部とれた。

順番をきめてやった。これを草ばくちといった。わかいしゅも子供もやった。五、六人くらいあつまってやった。

はじめに、刈った草（一かご分）を出し合って山にする。

わっかは二十センチくらいの径のもの。わっかの上にみんなして草をぶっかけるから、どこにあるかわからなくなる。（下増田）

草競馬　下増田にも、上増田にも草競馬があった。時期は、大正十四年一月。場所は、今の加工場の東の前の耕地。まるい一周三百メートルの馬場であった。

参加したのは、近在からの駄馬。これは馬場を三周した。いくらかいい馬も参加した。いい馬は十周した。

山へ行って、ナラの木などを切ってきて馬場の内と外にさくをつくった。くねをゆった。

賞品は、のぼりとかタンス、茶ダンス、バケツなど。

大関、関脇、小結とわかれていた。これは早い馬。五反さがり、二反さがり、一反さがりとのぼりをくれた。五反さがりは、松の丸太につけた。このほかにタンスがもらえた。（下増田）

大正時代の途中まで、村の中で草競馬が行われていた。昔はどこの家でも馬を飼っていたので、その馬を出場させていた。

初めは、「ノッキリ馬場」と言って直線の馬場であったが、その後「マワリ馬場」に変わった。この競馬は神社のお祭りの日に行っていた。競馬にはタンスなどの賞品が出たが、入賞すると、近所の人が寄って酒などを飲んでお祝いをした。（新堀）

あんこ会　何人かで集まって、材料を持ちより、あんこを作って、食べた。昔のたのしみだった。（新堀）

あすび日（あそび日）　あすび日には、一日あすびと半日あすびとあった。番頭さんを使っているうちでは、遊び日に区切りをつけた。あずき飯をすれば一日あすびだった。もち、ねじっこなど、あずきの入ったものができれば一日休みだった。

一日あすびのときには、前の晩に、旦那さんがいってくれた。半日あすびのときは、米の飯。この場合は、その日の朝、番頭さんに旦那さんがいった。

「今日は、おひる食ったら遊びだ」という。

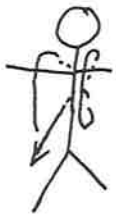
「今日は半日あすびだから米のやきもちだ」といった。

盆、正月、農休み、百姓の人たちにとって三大あすびだった。

農休みは、田植を終えて三日休んだ。盆は三日休んだ。農休みは、田植が終ると、ムラの寄合できめて休んだ。（櫛島）

消防の点検と餅食い　消防手がおさなぶりのときの餅食いの真似をした。消防の点検が終ったあと、餅をついて食いっこをした。六百匁の餅を食った者がいたという。これは一升分の上ある。これを大食会といった。場所は、わかいしゅ仲間の親方のうち。（上大島）

力くらべ　昭和の始めによくやった。二十三貫の石があり、たすきに動かせると一人前だった。石に二十三貫と刻んであった。（亀里　寺家）



(九) その他

半鐘　女屋の半鐘として使っている鐘は、もとの念仏鐘である。もとの消防小屋のところにあった。（女屋）

買い物　買い物が必要なときには、玉村か駒形へ行っていたが、玉村へ行くことが多かった。今ではほとんどが前橋へ行くが、昔は、前橋へ行くことは、今で言えば、東京へ行くくらいの感覚であった。（新堀）

カワギ拾い　大水のあと、流木を拾いに出た。出た人が流されて死んだ人もいる。（公田）

新堀神社の祭り　新堀神社の祭りは、春祭り（三月十五日）・夏祭り（七月二十四日）・秋祭り（十月十六日）の年三回ある。春と秋の祭りでは、神主にきてもらって神社でお払いをしてもらう。夏祭りは、八坂神社のお祭りで、昔は天王様の垂台があったらしい。

この三つの祭りのほかに、正月元日の朝村中の人が神社に集まり御神酒をもらう。これを「互礼会」という。（新堀）

出かせぎ　農閑期に土方仕事に出た。（戦後の話）県内や市内（亀里阿内宿）

屋根職　三十日～二か月くらい来て、宿の家から近くの村へ仕事に行った。四～五人来た。屋根を部分ごとに修理して、四～五年でひとまわりした。

小麦ワラは、「サイタマ」という品種のもので、実もつき、しっかりしている品種だった。一反分のワラは、最低用意した。二百束はあったものか。夏は天気のいい日に干しておいて用意した。（亀里阿内宿）

農機具屋　中村があり、昔はボウヤで、エンガ、テンガなどを作っていた。（亀里阿内宿）

ご年始　むかしは、塩釜に手拭一本くらいもって行った。塩釜はもちまわしたので、粉がこぼれてしまった。

マッチの大箱（小箱が十二箱入っている）とかもとゆい二把くらいもっていく人もあった。そのあと、お茶に手拭とか、砂糖折になった。障子紙一束もってくる人もあった。（上大島）

山の組合　天川大島にある。十二人組。赤城山の植林組合である。組合員は毎月千円ずつ貯金している。箱がまわってくる。この金で旅行に行ったりしている。また、一年に一回、三月（二十三日）に会合をしている。

赤柴と桐吉という二カ所に共有林があった。両方合わせて十三町歩くらいあり、十二人の者が権利をもっていた。

むかし、五十軒（五十人）近くの家があったが、組合に加入したのは、十二人だけであった。

これとは別に、火葬場の近くに天川大島の共有地があった。これは、四十七人でもっていた。（天川大島）

萬福寺の棟札　ひじ木の裏に銘文が入っている。

「上野国勢多郡二宮村大工棟梁内田源方丈廣徳　寛政元年己酉三月吉日」とある。（女屋）

三、青年団と子供組

(一) 組織

青年団　尋常高等小学校を卒業してから二十五歳までの人が入っていた。上川淵全体で、団長、副団長、会計がいて、その下に支部があり、支部長、副支部長、会計がいた。学校が青年団の会場だった。ちょ

うちんをつけて集まった。

ワラを持ちより、それをなわにあみ、小舞かき用のなわとして、小泉町の荒物屋に一ぽう一銭〜一銭五厘で買いいれてもらって、活動資金になった。春の作業前に、夜なべ俵あみをして、二俵編んだ。（下朝倉）

青年会　卒業から二五歳までの人が入っている。青年会長が婚礼を主催し、会長には力があった。（力丸）

若者組　子ども組をぬけると、若者組に入る。一月のうたいぞめで入会する。入会の時には、お酒を一升さげてゆき、あいさつをする。祭への参加が中心になる。結婚式の進行、とりむすびの中心となる。堰普しん、道普しんや警防の中心でもあった。（亀里）

処女会　卒業して、結婚するまで入っていた。まつりに参加したり、旅行にいった。結婚すると、婦人会に入った。（下長磯）

伊勢崎から機屋が来て反物をおらせた。一反で一円〜一円四十銭くらいくれた。

㈡　活　動

力自慢　むかし、わけえしの力のあるものが、前の神社で力自慢をした。真石、道祖神塔などを力のある者がかつぎあげた。背中からたすきにとった。今、そのときの石がのこっている。（下増田）

力石　むかしのわかいしゅは、石かつぎ、俵かつぎをした。

「二十三夜塔」という石塔をかついだりした。

「おらあ強えぞ、みんなして石のかつぎっこすべえや」

といって、かつぎっこした。

むかし、野中の神社の庭に、かつぎ石があった。この石には「三十貫余」と書いてあった。この石は、第二次世界大戦後、進駐軍がきて、割ってしまったらしい。

徳太郎さんがこの石をかついだのは二十七歳くらいのとき。もと消防団の点検があった。ポンプ操法などした。そのとき、土俵のまわりをかついで一まわりした。「よいしょ」と石をおこしておいて、一度ひざの上にのせてからかついだ。

俵はさしあげた。俵の両脇をもってさしあげたことがあった。

むかしは、そんなことが自慢であった。

たまごをふところに入れておいて、それをつぶさないようにして米俵をかついだ。たすきがけというかつぎ方もあった。俵を斜にかついで背中へまわしてから、はじめと逆におろした。ちょうどたすきをかけるようにしてかついだ。（野中）

かつぎ石　天川大島には、むかし、かつぎ石が二つあった。一つは三十三貫、もう一つは二十四貫だった。細長い石で、真ん中がくびれていた。共同墓地のところにあった。これを、わかいしゅがかついだ。

わしが子供のころ、三十三貫の石で、新井由太郎という人がかついだ。この人は力持ちだった。六供の八幡様にかつぎ石の奉額がある。それに由太郎さんの名前がでている。前頭六枚目くらいだったという。

かつぎ石は、わかいしゅが、おまつりのときなどにかついだ。（天川大島）

力丸に三十三貫のかつぎ石があった。それ以下の重さの宝塔もあって、かつぎ石にした。（力丸）

俵かつぎ　米債を三俵たてておく。その両端の俵の上にのぼって、真中の俵をぬいてかつぐ。いちのふとちょうぱしに手をかけて、腹の上にのせてからかついだ。（上大島）

米俵をかつぐこと　わし（石田安径さん）は、米俵をいろんなかたちでかついだ。

いちのふ……いちのふをもって、片方の手のひらに俵をのっけてかつぐこと。俵のいちのふをもって直接肩へもっていくかつぎ方。

くそかつぎ……俵をもちあげて、一度体にくっつけてからかつぐこと。これは、かつぎ方が下手だということ。力がないということ。

ますぬき……一升ますの上にあがって、くそかつぎと同じかつぎ方をする。かつげないものは、背中に背負って、ちょうぱしの先をつかんで、そろそろあるく。これでけいこをする。せおいといった。りんそかつぎとも。

三俵つり……一俵を口でくわえ、あと、両手で一俵ずつさげるやり方。（上大島）

土俵かつぎ　青年団の競技として、力くらべをした。十貫目から十六貫あった。墓石かつぎも力くらべでやった。（小屋原）

力くらべ　墓石をかついで力くらべをした。（下朝倉）

㈢　あ　そ　び

でがわり相撲　下増田の中屋敷は、大尽グルワといわれていて、むかしは財産家が住んでいた。大尽のうちでは奉公人をたのんでいた。奉公人は一年契約で、二月二日に出入りをした。その日に、でがわり相撲をしていた。宿は交代でつとめた。（中屋敷のうちで）

二月二日には、宿のうちの庭に辻（土俵）をつくって、そこで相撲をとった。順番表があって、順番に宿をつとめた。

今では、先祖まつりということになり、中屋敷の集会所にあつまって会合を開き、そのあと会食をする。それが終わると、庭につくった土俵のところで相撲のまねごとをする。

そのあとに、神社の境内にまつってある稲荷様におまいりしている。（下増田）

野中の太鼓　むかし、野中の青年会は、毎日当番をきめて、朝の五時と夜の九時に太鼓をはたいた。当番の者は、日記をつけて、それを寺の和尚さんに見てもらった。これは、太鼓をたたいて、ムラの人に時計をあわせてもらうためであった。（野中）

下水まわり　わかいしゅの夜遊びのことを、むかしは下水まわりともいった。（下増田）

よばいのはなし　昭和のはじめのころのはなし。

駒形の者で、いつも、増田とか二之宮あたりへよばいに行っていた。ところが、その日は運わるく、雨が降っていた。

雨のことで、障子はあけっぱなし。隣のうちへよばいに入った。そしたら、そこのうちのおかみさんが抱きついた。すると、あそこに毛がない。旦那さんはしょうきさまといわれるほどのけひろの人（毛ぶかい人）。それで、この人は旦那さんとちがうということがわかった。

おかみさんは、その男のシャツの袖を破っておいた。

男は逃げだした。巡査が犯人をさがした。二年くらいは見つからなかった。しかし、世間にはあの男だというわさがながれていた。その男は、本妻であれ、妾であれ、どこへでもしのびこんでいた。

ところがあるとき、庭に袖のもげたシャツが干してあった。それでわかって、つかまった。その男は、二年くらいの懲役に行ったという。（駒形）

夜あそび　むかしは、夏は外湯をたてた。それを、わかいしゅが夜

遊びにきて、のぞきにきた。娘さんは、風呂の中にしずんだっきり立てなかった。ゆけにあたってしまうものもいた。（上大島）

忙しいときには行かない。冬に行くのが多かった。

むかしは、夏には外風呂をたてて入った。すこしくらいの雨のときには、蛇の目の傘をしばっておいて入った。

娘さんが風呂に入るのはおそかった。わかいしゅが夜遊びに行って意地悪をした。

三人くらいで風呂桶を移動した。そこへ、おばあさんがすっぱだかできて、「やいふろこがはどこへやった」などとさわいだりした。

また、娘さんが外風呂に入っているところへわかいしゅが行って、わいわいやっていると、娘さんはたてないで、ゆけにあたって大さわぎをしたというようなはなしもあった。（駒形）

東は田中、福島、北は上陽、上川渕まで遊びにいった。

着物を頭にしばりつけて、夜利根川をわたってあそびにいった。（新堀）

わかいしゅのいたずら　わかいしゅが三人で、娘さんの入っている風呂桶（外風呂）をべつの場所に運んだという話がある。

娘さんが外風呂に入っていると、わかいしゅがどんどん火を燃してあつくした。娘さんはあつくって、立とうとしたが立てなかったというはなしもある。（天川大島）

夏は外湯だった。わかいしゅが夜遊びに行って、その湯をこぼしてしまう。

それを知らないで、娘さんがはだかになって湯に入りに出てくる。湯がまがないのでおったまげて、うちの中へ逃げこむ。それを、わかいしゅはおもしろがって見ていた。（駒形）

わかいしゅのとき、利根むこう（群馬郡横手）へ夜遊びに行った。利根川を泳いで渡った。そのころ渡し舟があったが、五銭かかった。

着物を頭にしゃんしゃく（三尺）でしばりつけて泳いで渡った。下駄も頭の上にのせていった。わかいしゅの中には、先方のムラにおとくいさま（娘）のいるものもいた。わしはその頃高山社へ勉強に行っていたから、（おとくいなどなく）ほかのわかいしゅのあとについて行った。

夜遊びに行くと、いろいろと失敗もあった。

ながしが裏にあった。夕飯を終わって、娘がお勝手仕度をしていた。わかいしゅが夜遊びに行って、さまのところから、うちの中をのぞいていた。わかいしゅがおしゃべりをしていた。それを聞いていたそこんちの大将（旦那さん）が、わかいしゅをなりっとばした。わかいしゅはたまげて逃げだした。

あわてもんだから、入ってきた道をまちがえた。娘さんのうちのかどのところには、ためおけ（下肥のため）があった。そのわかいしゅは、寒中にもかかわらず、その中へとびこんでしまった。

かえりに、渡し舟に乗るとき、かちかちに凍ってしまって、よろいを着ているのと同じようだったという。うちへやっと帰ってきた。うちでは風呂がたっていた。近所の人が湯にはいりにきていた。

戸をあけるより早く、そのわかいしゅは風呂の中にとびこんだって。ためぐるみとびこんだわけだ。

そのあと、風呂には入れなかったということだ。（朝倉）

女郎屋　玉村町や前橋の柳川町に女郎屋があって遊びにいった。明治生まれの人の時代の話だ。（新堀）

お諏訪橋　端気川の橋で、若い衆のたまり場になってよくバクチをしていた。（亀里）

菓子の食いっこ　むかし、わかいしゅが菓子の食いっこをした。

一箱六十コ入っている菓子を全部食べた人がいた。天川大島の人で、義憲公（よしのりこう）という人であった。（天川大島）

書初め　むかしは、子供たちが、一月二日には書初めをした。

何枚も書いて、それをならべて、一番上手のもの（よく書けたもの）を、親類へもって行った。そうすると、おかねをくれた。大正五年ごろのことで、五銭とか十銭くれた。母の実家では、二十銭くれた。隠居の家では五十銭もくれた。（上増田）

四、家族生活

イッケ　村内の本家・新宅の関係を「イッケ」と言う。これは、何代前に分かれた家であっても同じイッケに入る。イッケ同士は、昔はかなり濃い付き合いをしていたが、今はだいぶ簡単になってきて、分かれたのが近い家でもなければ、ほとんど付き合うことはなくなっている。今では、葬式のときなどにお付き合いする程度で、普段は村内の付き合いの方が大事になっている。

新堀町には全部で以下の七つのイッケがある。

吉沢イッケ……二つ

田村イッケ……三つ

久保田イッケ……二つ（新堀）

同じ苗字のうちのこと　同じ苗字（ムラの中で）のうちのことは、ウチウチ、イッケ、イチマケなどという。（下増田）

イッケとイチマケ　イッケということばは、今もつかっている。

イチマケは、としよりの人がつかうことば。

イチマケともイッケともいうが、イチマケということばは、どちらかというと、悪い意味のときにもつかう。

山口イッケは十軒ある。

イッケ（となり近所）で湯はいりに行ったりきたりした。提灯もって湯はいりにきた。二度も入っていった人もあった。（下大島）

シンタク　次男以下の男の子が一人前になるとシンタクに出すことが多かった。しかし、その家に余裕がないとシンタクに出すことは出来なかった。シンタクに出す場合に、昔はほとんどが農業をやっていたので、宅地と田畑とを分けてやり、家もホンケが作ってやった。今はシンタクに出るような人で農業をする人がほとんどいなくなったので、田畑を分けてやることはほとんどなくなったし、家も自分で立てさせ、宅地だけを分けてやることが多い。今はなくなったが、昔はシンタクに出た人はホンケが田植えや養蚕の忙しいときには必ず手伝いに行くものとされていた。（新堀）

先祖まつり　横室一家と阿佐見一家でやっていた。総本家が主催している。斉木家では交代でまつりをしている。呼び方にも差があって、今は全部よびはなくなっている。（下朝倉）

シンショウマワシ　家の財産を切り盛りしたり、村の付き合いや近所の付き合いを中心に行うことを「シンショウマワシ」という。シンショウマワシは親（父親）が死ぬまでやっていて、子供に渡すのは親が死んでからである。村や近所の付き合いでは、親が動けなくなったり何か都合ができたりしたときには、子どもが代理で行くこともあった。（新堀）

むかしの嫁さん　むかしの嫁さんは、寝て、いびきなどかけなかった。

（つかれていて）めまいがして、すとんとひっくりかえってしまった。

田圃へ行って、つかれているので、オオナに大の字になって寝た。

たまにリヤカーにのせてもらった。そんなときは、タクシーに乗っ

たよりまあだ楽だねといった。

腹に子供があったとき、両手をひろげて、麦の粒の上に伏せた（おっかぶさった）。こうして、腹をひやしたことがあった。（下長磯）

天下　姑様がなくなると、嫁さんは、近所の人などに、

「天下になったからいいがね」

といわれた。（下長磯）

嫁が姑になることを、天下をとるといった。

嫁に行ぎたては苦労する。苦労してもいまに天下がとれるといった。（笊井）

インキョメン　むかしは、インキョメンというのがあった。

親が、長男を実家において、次男とか末っ子をつれて隠居する。そのとき、インキョメンをもってでる。これは土地のこと。あんまり大変はもってでない。

隠居した人は一軒うちをつくった。

明治のはじめに、徴兵令がしかれたときに、戸主は兵隊に行かなくともよかった。兵隊のがれのために、隠居したうちもあった。

笊井で、むかしの長屋の大尽のうちのおじいさん（羽鳥文治さんのところ）が隠居にでた。

そしたら、隆治さんのおとっつぁんがいうに

「このやつらのところにいちゃあ、今に食えなくなる。」

といって、隠居にでたという。

隠居にでて戸主になれば、兵隊に行かなくもいいからというので、隠居にでたという。

隠居にでたうち（長屋んちという）の方が本家より大尽になった。

隠居にでたときには二反歩ほどの土地をもってでたという。それが、あとで、ムラで一、二を争うほどの大尽になった。

水車をまわして、ひきわりをつくって、大間々へもって行って売った。馬がよかった。それでうんとかねをのこした。

ここのおじいさんは普請（ふしん）をするのが好きで、親方のうちへ職人をたのみにいくと、西のあんにゃをよこしてくれといって、わしを呼びにきてくれた。（笊井）

女屋家の家例　上大島の女屋家では、正月三が日の間、餅を食べない。三が日の間は、朝がそば、夜がご飯、四日から雑煮を食べられた。（上大島）

家例　樋口さんは、木曽義仲の家臣の系統といい武田菱が家紋になっている。三が日、赤飯の家例になっている。（力丸）

中林はイモ家例、小管はゾウニ家例、持田はソバ家例、北村はソバ家例。（亀里）

お歳暮　お歳暮はしゃけをもって行った。親のところには、いいかげんの年数を行った。親の存否には関係なく行った。

仲人のところへもお歳暮をもって行ったが、初子が生まれれば、うちきってもいいというが、かたい人は、何人生まれてもいく。（栃島）

お歳暮は、暮に、子供が親のところへ持って行く。

親が丈夫なうちは持って行くものという。さけを持って行くのがふつう。（東上野）

お歳暮をもってくると、おかえしをした。おせいぼがえしは、もらったものの三分の一でいいといった。シャケは生まれたところへ帰る習性があるので、子供はお歳暮を里へもって行くのだという。このごろは、シャケよりサケ（酒）がいいという。（上大島）

お歳暮には、しおびきをもってきた。どこのうちでも、お歳暮にしおびきをもらって、猫も食わねえから、ねこまたぎといった。（女屋）

子供が生まれた家のお歳暮には、男の子なら八幡太郎・義経、女の

子には静御前の掛け軸をおくった。（亀里）

嫁は、里へお歳暮として、塩引きのさけをもって行った。

むかしは一匹一円しなかった。八十銭くらいだった。一番安い魚だった。（下大島）

節供歳暮として、仲人のところへは三年間は行くものだといった。嫁の里の親のところへは、親が丈夫なうちは行くものだといった。（笂井）

五、その他

女屋に電灯がついたはなし　わたしが尋常小学校五年生のときに女屋に電灯がついた。宮子んちへお客に行く前のこと。うんとあかるいよと、お客に行っておしゃべりしたのを覚えている。

ふつうのうちは一灯だけ。大きいうちで二灯つけてもらえた。うち（女屋家）は二灯、十六しょくだった。（女屋）

大さわぎしたこと　道が開通したころには、村中のものがとんでで、大さわぎをした。

飛行機がとんできたときも大さわぎした。（女屋）

大震災　尋常六年のとき関東大震災があった。宮城拝観に行く計画があったが、震災でとりやめになって、はりあいがわるかった。（女屋）

ちょうどお昼時で、はしを持ったまま外に出たら、タルの中の水がタルがゆれて外にこぼれた。とてもゆれた。（新堀）

フレ正月　ふだん、区長が伍長を通してフレをまわして、休み日にしたことがある。これをフレ正月といった。これは、むかし、奉公人からの要求によるものであったらしい。（野中）

千両祝い　むかしは、ふつうの百姓では、なかなか百円札をみることができなかった。ふつう、米だけでは百円ためることはできなかった。米を売ったり、まゆを売ったりして百円ためたという。

大正時代に、千両祝いをしたうちがあった。千両たまると、内祝いをしたという。赤飯でもたいて祝ったという。（野中）

むかしのご年始　わたしが嫁にきた時分、ムラ中「おめでとうございます」といってあるいた。それが、ムラの半分だけとなり、組合のうちだけになり、今のように、神社へよってあいさつをかわすだけとなった。（上大島）

名前　衛門の名をつけてはいけないことがあり、装門（よそえもん）とつけた人がいる。（鶴光路）

誕生日の違い　生まれたのは七月七日なのだが、三男坊でもあるし、田植えで忙しいこともあって、十一月二十日に届けを出した。（下朝倉）

むかしの食事　むかしは、おやじとあととりは東向きで食事をした。（笂井）

セナゴ　兄のことを、セナゴという。

「〇〇は、セナゴンチにあるから」といういい方をする。（上増田）

兵隊のがれ　長男はのがれるというので、家を継いだ人が多かった。金を出して買って入った人もいる。（亀里）

一人前　一人前のことは、イョチョウメエといった。むかしは、米俵をかつげるのを一人前とした。米俵がかつげないと、半人前とされた。（小屋原）

石のこと　小さいものから順に、スナージャリーグリイシ―ふつうの大きさの石―でっかい石―岩。（笂井）

古墳の石　旧上川淵公民館の前の記念碑の台石は、古墳の天井石で、上川淵村三号墳の蓋石という。（亀里）

石塔　笂井には元禄以前の石塔がない。幕府を倒す呪詛をしたため、集められてしまったからだという。（笂井）

米俵　十六貫の重さがある。網んだばかりは固くて持ちにくい。ひざの上に一度のせてからかつぐ。背負わせてもらえるとはこべる。（公田）

借金　田を質に入れるのを禁じられているので、売った形にして。買い戻す証文を入れている。（力丸）

土地広げ　田んぼの間の道を歩く時は、隣の田のほうを歩く。歩いたほうが道がゆるんで動くから五年でおうなひとつくらいは動いて、自分の田が広くなる。水まわりの時やったことだ。（亀里）

水あび　桃木川へ水あびに行って、日下部橋の上からとびこめるのを一人前とした。これは、小学校四、五年生のこと。（小島田）

映画　前橋の帝国館で新劇、ヤマト館でチャンバラ、玉村の金ショウ館などで映画を観た。音はなく、弁士が解説していた。（新堀）

駒形に二軒あった。新駒町の駒形座と昭和館の二つで、昭和館は東善分に入る。（西善・矢田）

大水　町の中の人の蔵に、大水が出たあとが壁にのこっていたが、修理してわからなくなってしまった。（新堀）

女郎屋　駒形、玉村にあった。だるま屋といった。

駒形は新駒町にあった。細い通りで、トンネル横丁といった。

土方のかせぎが一日六十〜七十銭のとき、一円五十銭から二円くらいかかった。歩いていると帽子をとられてとりかえしたかったら入りなといわれたりした。（亀里龍門）

アカシア　アカシアの葉を食べて馬が死んでしまったことがある。

昭和二十二年〜二十三年の大水のあと松からアカシアになった。

桑畑が流されて防風林としてアカシアを植えた。

早く大きくなるが、土手守りには向かなかった。（亀里）

子供のけんか　東上野の子供と堀之下の子供は、寒いころよくけんかをした。春になって、レンゲが咲くころになるとレンゲとりなどして一緒に遊んだ。（東上野）

むかし、七月から八月にかけて、桃木川へ水あびに行って、下長磯の子供とけんかをした。川をはさんで、石のなげっくらをした。

小さい子どもは、石はこび。大きいのが石の投げっこをした。

雨が降って、水あびに行けないと、はりあいがわるかった。

女屋の子供とは、四月八日の甘茶の日に、甘茶のとりっこでけんかをした。（小島田）

四月八日には、女屋と小島田の子供がけんかをした。

「けんかをすんべえや」といってきて、おたがいに、石を投げあった。

相手のムラへ追いこむと、追いこんだほうが勝ちといった。

けんかのあとは、レンゲばたけで相撲をとって遊んだ。

このときは悪口をいいあった。

「小島田こやし、田圃のこやし」

「女屋のやつら馬鹿やつら、なあべんなかへくそひって、かんなめじゃくしでかんなめた」（小島田）

追いはぎ　天神山のこっちで、追いはぎが出て、金をとられたという話だ。（下朝倉）

足軽　幕末に川越からお殿様が移ってきた時、家がなくて、天川原の親せきに侍が泊まったが、いばっていて、親せきの人が大変だったと聞いている。足軽だったのでしばったらしい。（亀里）

がったん　がったんともすっとんともいった。縄の先に石をしばりつけて、とぼ口のところにさげておいた。縄を遠くまでひっぱっていっておく。夜、夜中にわかいしゅが夜遊びに行って、遠くの方から、縄

をひっぱって放す。そうすると、でっかい音がした。がったん、がったんとえらい音がした。（朝倉）

合併問題　学校差で、旧市内の学校に通わせたいことと、役場に遠いことがあって、前橋へ合併したい運動が始まった。

住宅、原町、東電住宅で合併委員会を作った。合併の発端は住宅であった。役場前で四人ハンガーストライキをした。加藤、清水、長沼、金子だった。二十七年から二十九年にかけてがさかんだった。三十年四月からは子供は天川小に通うようになった。中学は二中に通った。

（天川大島住宅）

豊受小　駒形神社は豊受大神をまつっている。それで、ここにできた学校を豊受小とよんだという。駒形小学校の前身である。（駒形）

むかしの学校　むかしは雪が降ると、足袋はだしで行った。下駄ではころがってしまうので、遠いところの者は、親が迎えにきた。

（上大島）

むかしのはなし　むかし、わかいしゅは、娘のうちへ娘を見に行った。かんばんじゅばんをかぶって、娘がお勝手仕事をしているところを見に行った。

むかしばなしは、「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがあったとさ」ということばではじまった。

子供がぐずいって親を困らせると、「うばすて山へしょっておいてくるぞ」といった。また、人さらいがくるともいった。

むかし、赤堀の本間の大尽の娘が、赤城の小沼に入って死んだという。蛇（じゃ）になったという。（朝倉）

下阿内緊縮会議定書

昭和五年十月

下川淵村大字下阿内緊縮会議定書

第一条　本会は下阿内緊縮会議定書と称す

第二条　本会は勢多郡下川淵村大字下阿内区民を以て組織し其本部を字内区長宅とす

第三条　本会は旧来の陋習を廃し相協力して消費節約を図り時間を励行するを以て目的とす

第四条　本会の実行すべき事項左のごとし

一　正月の七五三飾は庭には松二本とし室内は成る可く質素にすること

二　年礼及礼受は質素を旨とし字内相互訪問には一切酒を用いざること

三　節句歳暮の贈答は一切廃止すること但し嫁婿は其限りにあらず

四　常食には麦飯を使用励行すること

五　巻煙草を廃すること但し他出の場合はその限りにあらず

六　字内に於ける相互訪問の際は成る可く麦湯を饗し茶菓子を用いざること

七　室内の電灯は出来得る限り減灯すること

八　理髪は出来得る限り相互の理髪を励行すること

九　婚礼に付いては引物を廃止し節酒を励行すること上棟祝いも之に準ず祝儀の参日は成る可く廃止す

但し新客に対しては此の限りにあらず

十　字内は法事念仏には一切酒を用いず葬儀に向ては穴及び庭へ各一笈□とす又二の膳饅頭其他の引物を廃し又寄贈品に就いては放鳥造花等成る可く御遠慮申し上げ可きこと

一一　婚礼葬儀に就いては慰労饗応又快喜祝等廃止すること
一二　入営及除隊兵士の送迎の際近親及縁故者の外は饗応せざること又鎮守様に於ても送迎者に酒肴赤飯等を饗せず兵士除隊土産も廃止すること
一三　出産見舞を廃止すること但し長男長女は其限りにあらず
一四　すべて新しき講には加入せざること
一五　爾後一切の寄付は断ること
第五条　本規約は字内住民の議定せるものにして破約せざる様実行委員会を置く
第六条　実行委員会は永年区長伍長に委託す
第七条　本規約実施に際して之を確守すべく区民一同茲に署名捺印す

火防組合規約準則

第一条　本組合は大防予防に関し組合員協力して予防の設備をなし又は互いに注意警戒をなすを以て目的とす
第二条　本組合は消防組（又は消防組第何部）の区域内の居住者戸主又は之にかわるべきものを以て組織し組合長一名を置く
第三条　組合長は何町村消防組数（又は何消防組第　部）を以て之に当て以下消防組員は其指揮を受け組合の事務に従事す（但し部の区域により組合を設けたるときは組頭は各組合を監視す）
第四条　組合は費用を徴収せず
第五条　組合には規約を設け加入者は之に調印するものとす
第六条　毎年十一月、十二月、一月、二月、三月の五か月間は少なくとも一か月二回以上組合長又は小頭以上一名及び消防手一名若しくは二名一組となり組合員各戸に就き火気取扱上危険の有無を調査し尚も危険なりと思料したるときは家人に危険排除の方法を示し注意を与ふる事
第七条　組合には調査の便を供する為の火気取扱調査心得を備う
第八条　組合員は火気取扱上殊に遵守するものとす
イ　マッチの置場を一定し且つ小児をして容易に持ち出す能はざる方法を講ずる事
ロ　灰塵場は地中を掘り下げて之を設けたるか若しくは四周厚壁を以て構造し万一残火あるも危険の他に及ばざる設備をなす事
ハ　爐は位置の如何に不拘周囲及底部は必ず完全に石土其他不燃質材をて構造し且つ燃料置場接続するときは少なくとも平面より高さ七寸以上の衝立様の境板を設け其爐に面する部分を不燃質の詰止めとする事又枯葉を燃料となすものは必ず不燃質の容器に入るるにあらざれば爐辺に置かざる事
ニ　炬燵を用いるときは必ず金属性の網を使用する事
ホ　竈は可成屋内に設け不得已場合に於て屋外に設けたるときは必ず適当なる境囲をなし防火設備を完全にし又竈の周囲には適当なる窪地を存し破損の調査に便し焚口と燃料置場との界は爐辺と同一の衝立或いは土壁を設け僅かに注意欠くことあるも竈内の焚火絶対に燃料と重複交わざる設備をなし尚竈に接近したる床下には相当の板張をなし竈火の風の為飛散する事あるもその床下に及ぼしめざる事殊に竈の上方には注意と危険の練実を圖る事
ヘ　風呂桶の構造は竈に注意して設備する事
ト　煙突の構造は規則通り施工し且つ掃除は調査の前日又は当日に於いて行う事
チ　ランプの油壺は金属性のものを用い注油は必ず昼間に之を行い湯壺桶は火気設備に遠からしめ又釣具は必ず金属を用い釣釘は折釘にして「ランプ」との距離は少なくとも一尺五寸以上たるべく

若し其距離を保つ能はざるときは焔熱の向上部に金属鏤を張る事

リ　屋外に於いて焚火為すときは少なくとも燃質屑を去る三十間以上の場所たる事

日枝神社（山王）

祭りののぼり旗（上佐鳥）

飯玉神社（櫛島）

ヌ　用水桶の減水に注意する事

ル　水利不便の地に在ては可成火防用水池を作る事

オ　消防器具をして常に完全ならしむる事

祭りののぼり旗（中内）

飯玉神社（力丸）

祭りののぼり旗（西善）

第三章　衣　食　住

一、衣　服

ご祝儀のきもの　ご祝儀のときのきものは、男の人は綾織りのもので、こうき織りが多かった。羽織は、ななこ織りか、それより上等な羽二重のしおぜ、白地のひも。はかまは、仙台平がふつうだった。

女の人は、江戸づまが多かった。（小島田）

女の人のあいぎは、緋いろか、茄子こんで、三ツ紋がふつうだった。自家の紋着をもっていく人もいた。（小島田）

嫁ぐときにもっていくきものは、自家で織ったかべちりめんか、こはまちりめん等があった。（小島田）

女の人は羽二重の白無垢で、緋のじゅばん、色直しは、自分で持ってきた着物の一番いいものを着た。男は紋付袴で、着物は縞文様のかさね着で亀の子状の織りの結城だった。羽織は三ツ紋の羽二重、塩瀬のものが多い。袴は縞で、小倉袴が一番いいとされた。下着は、ステテコとシャツ、メリンスの柄物のじゅばんを着た。（西善矢田）

喪服について　喪服は、男の人は、夏に白がすりのきもの、絽のはおり。冬は、黒地の塩瀬のきもの、ななこ織りのはおりだった。

女の人は、夏に麻か、上布地の白むくに、無地の絽のはおり。冬は、りんず地のきものだった。

喪服は、もらい方が一式つくってくれた。

イキミタマ（新盆）の時、とつぎ先がつくってくれた。（小島田）

喪服　男の人は御祝儀の時の着物支度と同じ。女の人は縞の黒い紋様の着物で嫁に来る時に持ってきたものだった。縞紋様はだいたい儀式用と決っていた。（西善矢田）

セチギモノ　お正月を迎えるとき（暮に）、奉公人にはしきせといって、主人が新しい着物をつくってくれた。

あるいは、しきせこづかいといって、奉公人におかねをくれるうちもあった。

てっぺんからつまさきまでつくってくれた。

ふんどし、足袋、帯、着物までつくってやった。（女屋）

羽織のこと　むかしは、ムラの中で、羽織を着せないといううちが二、三軒あった。

ふつうは、ご祝儀、葬式、村祭りのときなど正式の時は羽織を着た。

むかしは、差別があったのである。

礼儀作法しっかりしなければ、交渉に応じないというので、

「文句があるなら、羽織着て来い」

といった。（上長磯）

木綿の着物・絹の着物　ノラギやフダンギは木綿でつくった。

チョイチョイギは銘仙程度のものでつくった。チョイチョイギは、ちょいと祝いごとのじんぎに行くとか、買いもんに行くとき、人がなくなったときのじんぎに行くときに着た。

ヨソイギは絹もんイワイギは祝儀のときに着たもの。モフクともいって、祝儀・不祝儀のときに着た。

むかしの男の人は、ナナコの紋つき、女の人はちりめんのもんつきを着た。男は、もんつきをつくるのは、兵隊検査のときとか、婿になるとき。女の人は、嫁にくるとき、実家でつくってくれた。

ノラギは毎年つくった。田植の前につくった。

初嫁は生き盆のときに絽のきもんを一枚つくってもらった。これを着て里へお客に行った。ひとえもんで、絽のきもん。これを盆ぎもんといった。(笂井)

ふだん着　お客にいく時のきものは、よそいぎといった。上、中のうちの中位の格のきものだった。

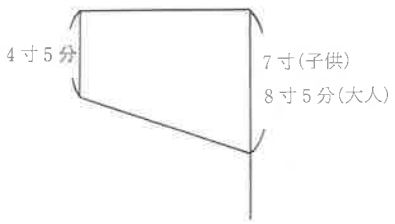
よそいぎの袖のかたちは、男女共に、たもと袖で、紋はつけない。夏は、裏のないメリンス。冬は、裏のついためいせんで、伊勢崎めいせんが有名だった。上には、はおりをきた。

ふだん、となり近所のみまいや、寄り合いの時に着るものは、ちょいちょい着といった。男の人のちょいちょい着は、たいそう袖で、同じ袖形の半天か、げんろく袖のはおりをきた。金持ちの人は、もめんときぬの混じった、とうざんの半天を着る人もいた。ふだん家にいる時のきものは、つねっき、にこにこといった。

男の人のつねっきは、夏に、白地に黒がすりか、黒地に白がすりのきもので、細かい柄がおおかった。

しじまといって、一本すじか二本すじ（はけじま）のものか、しまが細い順から太くなる五本すじ(たきじま)のしま紋様のきものがあった。

女の人は、つねっきの上に、嫁さんになった人は白かピンク。娘さんは赤地のたすきがけをした。つねっきの上に、ねじり袖の半天をきたが、冬は綿入れだった。(小島田)



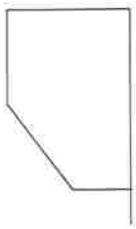
タイソウ袖

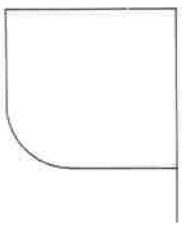
よそいぎ　女の人は自分の持ってきたいい着物の他、白絹一反を紺屋へ行って染めてもらったりした。羽織はよそいぎとして常に着ていたが柄物とされていた。(西善矢田)

ちょいちょい着　男の人はタイソウ袖で、木綿の絣の着物で、重ね着はしなかった。女の人は上等なもので銘仙、だいたいはメリンス地の一枚着で元禄袖だった。(西善矢田)

着物のはなし　羽織　いい人が着た。まちが入った。えりがおれていた。

はんてん　ふだんぎである。まちが入らない。つけひももない、寒いうちは、わたいれのはんてんを着た。ひとえもんのはんてんもあっ


ねじり袖
（着物の上に着るハンテン）


元　禄（普段着）

タモト（四角1尺7寸）

た。

じんぎこうぎには羽織を着た。そんなときには、「羽織を着て来い」といわれた。むかしは、結婚式のときに、かみしもを着られるうちと、着られないうちとあったという。

着物の格はつぎのとおり。

○もんつき……ご祝儀・葬式・なんぞのときでないと着なかった。上等の絹もん（ちりめん）

○おきゃくぎもん……銘仙でつくった。

○ちょいちょいぎ……銘仙くらいのきぬもんであった。がらもん。

ちょいと、おまつりのときに着たり、近くへ買いものに行くときくらいに着た。

○ふだんぎ……もめん

○のらぎ……もめん。ふだんぎのやくざになったのを着た。のらぎを着ているときは、座敷へあげなかった。

○しっきりばんてん……仕事をするときに着た。

寒いときに着た。わたいれだった。半天のように長くはなく、ひもでしばった。（つけひも）下にはももひきをはいた。

モンペがでてきてからは、女の人はももひきに代ってモンペをはくようになった。モンペのほうがはきよかった。わたしの娘時分は、モンペでなくももひきをはいた。田植のときには、新しく、田植ぎもんをつくった。

嫁にきたてのころは、田植ぎもんは、実家からすっかりつくってよこした。うでぬきまでつくってくれた。

女の人は上にははんきり、下にはももひき、はきもんなしのはだしだった。はんきりは、布半反でつくった。はじめにももひきをはいていたが、あとで、モンペをはいて田植をした。田植のときには、女の人はかすりのきもんを着た。（笊井）

着物　反物で買ってきて、着物にした。（小屋原）

普段着　つねっきといった。男女共に木綿の柄物で、通称ニコニコ着といった。寒い時は上にネジシ袖のハンテンを着た。こうした普段着は自分で作ったものが多い。

つねっきはひざたけまでの長さで、こうしたかっこうでいると「ぬしは何してた仕事もしないで」と笑われることもあった。（西善矢田）

作業着　作業着もつねっきといった。一枚から二枚位は作っておいた。田植えの時の支度は、木綿のモモヒキを二か所でしばり、着物はしりっぱしょりして前掛けをかけ、赤いタスキに手甲をつけて手ぬぐいかすげ笠をかぶった。

桑取りの時はモモヒキをつけないだけであとの支度は田植えと同じだった。

昔は着るものに使う木綿・麻は自家栽培していた。

昭和元年に信州から嫁に来た人がつけていたモンペが、この頃からはやりだした。（西善矢田）

作業をするときのきものは、のらぎといった。

男の人は、下にももひき、上は細いつめ衿のシャツで、袖口はボタンをつけた。その上に腕ぬきをつけた。

女の人は、下はももひき、上はひとえのきもので、大方の人はおはしょりしていた。中に、きものを自分で工夫して、お尻がかくれる程度に切る人もいた。

女の人は、のらぎの上にたすきがけ、手甲、うでには、こはぜの付いた腕ぬきをした。

のらぎを作る時期は、田植え前に作った。嫁さんのものは、実家が一式作ってもたしてくれた。のらぎの枚数は、だいたい二枚位で、ひ

とつは自分のもちもので工夫した。のらぎは、季節のちがいはあまりなく、冬はその上にちゃんちゃんこを重ねる位だった。（小島田）

仕事着　男の仕事着はこしっきりの長さで、わたいれであった。これをどうぎといった。おびをしめた。（上増田）

ねじりずんぼう　仕事着として、百姓のせがれが着た。これは、冬に着た。綿入れである。長さは、腰までで終っている。長着を着て、その上に着た。胸よりすこし下のところにつけひもをつけてしばった。下にはももひきをはいた。

はきものはわらぞうり。

こういうかっこうで仕事をした。男も女も大体同じかっこうをした。（駒形）

モンペ　戦争中は、女子青年は、モンペをはいて、竹槍の稽古をした。

上衣は標準服、防寒頭巾をかぶった。

モンペは、ももひきよりきゅうくつでなくってよかった。（下長磯）

もりっこばんてん　もりっこばんてんのことは、ずんぼうといった。わたいれで寒いときに着た。（上増田）

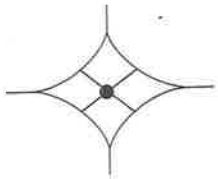
下着の種類　男の人は、メリヤスのシャツ、モモヒキ、下ばきに木綿のシャツとステテコ位だった。女の人は、夏はサラシかメリンス、冬はネルの腰まきに同じサラシで袖口にレースのついたじゅばん。（西善矢田）

男の人は、六尺ふんどし、女の人は、おこしで、冬はネル地、夏は、白かピンクの木綿地だった。（小島田）

子供のきもの　生まれた子供のきものは、さらしのじゅばんに、男の子は、みずあさぎ色、女の子は、赤地に白のきものだった。

宮まいりの時のきものは、メリンスか、ちりめんの布地で、袖は、つつ袖がふつうだった。中には中振袖をする家もあった。

背守りや袖口のかざりは、つづみかがりやこぼれまつばなどがあった。



メ印をして中央をしめる。

つづみかがり

こぼれまつば

生まれた一ツ身の子供の着物の大きさは一巾

四〜五歳の子供の着物は一巾よりやや広めの大きさで後身頃の部分から衿をとる方法でたがいちがいに切る為、裁縫の出来る人が縫った。

六〜一三歳頃の子供の着物は、一反で羽織と着物を一対つくった。これを「オツイ」といった。柄は染め絣、紺絣、縞が一般的だった。

中学生位になると本裁になり、一反で一枚つくった。

肩上げ、腰上げは学校にあがるまでで、おくみは、生まれた時からだった。（小島田）

十歳位からえび茶のメリンスの袴をつけるがスカート状になっているもので、紀元節、天長節等の記念日に、はくものとされていた。着物はひざまでの長さで、普通は元禄袖、金持はタモト袖の子もいた。

布地は縞の着物か、絣だった。

肩あげは生まれるとすぐやるが、腰あげは歩けるようになってから十二〜十三歳位まで、またひもは十歳位までだった。

三歳頃の帯ときの祝いの時は、メリンスと人絹の混じったハエバの柄物を贈った。（西善矢田）

あかんぼうの肌着　むかしは、扇子の丈のさらしで、あかんぼうにはだぎをつくってやった。縫い目がはだにあたるといたいので、縫い目は外にして着た。ひもはうしろにつけて、前にまわした。（上増田）

麻の葉の着物　むかしは、子供がうまれると、里の親がふだん着をつくってくれた。麻の葉の着物で、男の子は青色の麻の葉、女の子はあかい麻の葉の着物をつくってくれた。それをしょんべんぎもんといった。ふだんぎとして着ていた。

お宮まいりのときには、いいきもんを着せて行った。（上増田）

手拭の着物　できたてのあかんぼうには、手拭ひとひもできもんをつくってやった。（笂井）

着物の呼び名と大きさ　生まれた子供のものは一ツ身といって幅九寸五分、出来上り九寸のもの。

四ツ身は後身一尺四寸、前身一尺三寸位のものでたまにつくるだけだった。

十四〜十五歳位になると本裁で、後身七寸五分、前身六寸五分、おくみ四寸。

はんてんは大人で後身七寸五分、前身五寸五分で、ちゃんちゃんこは、一巾で半巾のマチがついていた。

羽織は、後身七寸五分、下のマチが一寸五分となった。（西善矢田）

きものの文様と柄　ご祝儀のきものは、昭和四年頃、「松竹梅」、「流水文」がはやり、前橋のエビスヤに染めてもらった。

昭和のはじめ頃、「滝縞」、「矢羽根」柄がはやった。

江戸づまの染め賃は、昭和四年頃、二九円位で、桐タンス一棹が三六円位だった。

ふだん着は、木綿かすりが多く、「井桁」、「亀甲」の柄があった。（小島田）

御祝儀に着る江戸褄は、裾に幅二〇㌢位の紋様がついている。（西善矢田）

防寒具　男の人は、胴着といって綿入れの厚いもので、やれると袖を切って半天につくり直した。（小島田）

足袋のこと　秋のえびすこうがすぎると、足袋をはいてもいいといった。足袋をぬぐ時期については、とくにいわれない。実際には、四月ころからぬぐ。（笂井）

足袋について　御祝儀の足袋は、キャラコ地の白足袋で、明治頃はひも付き、その後二枚コハゼ〜昭和の初め頃は三枚コハゼだった。

よそいぎの足袋は、男の人はシスタビ（繻子足袋）で、色は黒か紺だった。普段着の足袋は、ベッチン足袋で男の人は紺、若い人はえんじ、年寄りは青色で、男の人は五枚コハゼだった。（小島田）

ご祝儀の時は、男女共に白足袋で、木綿のキャラコ、コハゼは四〜五つと決まっていた。よそいぎは、女の人はご祝儀用に同じだが、男の人は、冬は木綿にネルの裏のつくものあるいはキヌテンの裏地のないもの。夏は木綿で裏地がさらし布の薄手のもので、色は紺が大半で黒等もあった。

普段は、冬が男女共にコールテンの無地で、女の人はキヌテンを使うこともあった。色は赤、むらさき、かばちゃ色等さまざまだった。（西善矢田）

被り物について　花嫁の被り物は綿帽子で、羽二重の角隠しの上に

被った。女の人は冬に「オコソズキン」を被る人がいた。（小島田）

花嫁さんの被り物は、羽二重でできているアゲボウシで、紅白二色で一対になっていた。

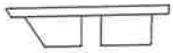
手ぬぐいは、菅笠を被る時は結び目のないアネサマカブリで、普段は結んだ形のアネサマにしていた。

たすきは、赤やピンクの色でひもぎれにして売っていたものだ。だいたい九寸五分を四等分したものが一本とみればよい。（西善矢田）

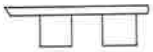
履物について　ご祝儀の時、男の人はござ下駄、嫁さんはアトマルと称し、松、鶴の金箔の模様がついていた。

よそいぎは、男の人は桐のこま下駄か、上にござが貼ってあるキルクの草履。女の人はヒヨリゲタ（塗下駄）、パッコンゲタ（ポックリよりやや薄めの下駄）の他、バンカラの学生等はホウバゲタをはいていた。

作業時の履物はワラぞうりか、はだしが大方だった。（小島田）



ゴザゲタ



コマゲタ

御祝儀の時は、上にござを張ったゴザゲタをはいた。前歯が台形、後歯が長方形の形をしたもの。

よそいぎや普段使いは、山桐のコマゲタでござの張ってないものだった。

作業する時は、女がワラぞうり、男はワラジか地下足袋（コハゼが四つ）だったが、はだしも多かった。

幕末の頃はポックリで嫁にきたと年寄りがいっていた。（西善矢田）

ぞうり・わらじ　子供の時分、稲荷山の人たちが、わらじ、ぞうりを店に売りにきた。ここ（稲荷山）ではわらしごとをしていた。

（駒形）

わらじのはなし　むかしは、堰人足のとき、わらじをはいた。西の方の人は、一晩にずい分わらじをつくったというなはしを聞いた。しかし、そのわらじは、あるきながらきれてしまうといわれた。

河川工事のときにはいたわらじは、一日もてばよいといわれた。

（東上野）

帯について　ご祝儀のお嫁さんは錦織りの丸帯で、「のし結び」した。桐生の帯がよいとされた。

よそいぎの帯は「コハクオリ」か「シュスオリ」の帯で、表・裏一対になっていた。また無地のものは葬式等にも使用した。

上等なものは「オヌイコ結び」にした。普段着の帯は「メリンス」が大半だった。

帯結びの種類は「オヌイコ結び」、「貝の口」、「蝶結び」等があった。

帯の種類は特には、農作業の際単の帯を「中巾（チュウハバ）」といった。その他丈の短い帯は「一巾半」、「一巾」があった。

作業着の帯は個人〳〵が着物の余り布で作り、裏をつける人や、単にする人もいた。

昭和の初め頃丈の短い「サロン前掛」を若い娘が田植えの時かけていたこともあった。（小島田）

ご祝儀の時は女の人が丸帯のダキアワセ帯で、両面使えるもの、男の人は角帯だった。よそいぎ用のものは、女の人が片側がメリンスの柄があるもの、もう片側は黒繻子でできている昼夜帯、男の人は角帯だった。

普段用は、三尺か半巾帯で、半巾帯はメリンス製の縞文様が大半で自分で作った人が多い。（西善矢田）

※琥珀織―横系の方向に、低い畦がある絹の平織物

繻子織―織物の表面に、縦糸か横糸だけを浮かせたもの、大正年間京都で織り始められた。

季節ときもの　あわせからひとえに変るのは、だいたい九月頃だった。はたらく家では十二月でもひとえを着る人がいた。あわせとひとえの間、五月頃は、ふだん着にネル地、よそいぎにセル地を使った。（小島田）

春先はセル地が多いが、入梅時期は黒地の銘仙で、夏場はゆかただった。雨具は、男衆がワラで亀の形をして編んだケダイが多く、女衆は油紙がついているキゴザを着た。

前掛の大きさは、巾が九寸五分、丈が一尺八寸で、耳は縫わないで下だけ縫ったもので布地は木綿だった。（西善矢田）

むかし、小学校へ通っているとき、雪が降ると、ぞうりをふところに入って行って、学校ではいた。そうすることも、べつに苦にならなかった。十月に冬仕度になり、五月の末に夏仕度になった。きりかえをした。（駒形）

ひとえもん　ひとえもんのことは、モノシという。（女屋）

ヒトエモンのことを、モノシという。生き盆のときに嫁さんが着る着物のことは、イキボンモノシといった。（上増田）

着物のはなし　行く先によって着物をかえて着て行った。

いいところへ行くときには、じじまの着物やちりめんのきものを着て行った。ふつうのお客に行くときは、きぬとかめりんすを着て行った。近所へ買物に行くときには、もめんのきものに着かえて行った。特別のお客に行くときには、ちりめんのきもんを着て行った。

上にいいきもんを着るときには、じゅばんはめりんすとかきぬもんであった。いいきもんのときには、帯をいいものをしめた。ふだんしめる帯はせまいものだが、ちりめんのきもんを着るときには、腹あわせの帯といって、ちりめんとかこはくのものをしめて行った。

ふだんぎは、丈夫でなければいけないというので、じじま。

百姓家でないちょっとしたうちでは、にこにこかすりを着た。

野良着は、むかしはもめん。女衆は、今はズボンをはいているが、ひとっきりはモンペをはいていた。モンペの前は、ももひきをはいた。あさぎのもめんだった。

女衆は仕事をするときには、長いすそをはしょって、しりっぱしょりだった。前掛の長いのを二重に折ってかけた。はきものは、野良へ行くときは地下足袋をはいた。また、もめんのうでぬきをした。かぶりもんは手拭、あねさんかぶりにした。わかいころは、すげがさをかぶった。

ご祝儀とか葬式のときには、いわいぎを着た。葬式のときには、紋だけ入っている、がらのないいわい着を着た。帯も黒いものをしめた。足袋は白をはいた。いわい着は、嫁になるとき、もらい方（婿方）でつくってくれた。もふくは自分でもってきた。これには実家の紋をつけてきた。気の早い人は、とつぎ先の紋をつけた。

わたしのころは、もふくは実家でつくってもらえず、とついでから、つくってもらった。もふくまでとつぎ先でつくる人はあんまりなかった。

いわいぎは、むかしは、ひとこしちりめんでつくった。今ははぶたえでつくるようになった。いわい着の紋を見て、よその人から、こっちでつくってもらったか、自分でつくったのかといわれた。

一番いいきもんがいわいぎ。二番目がおきゃくぎもん。三番目がちょ

いちょいぎ。四番目がふだんぎ。五番目がのらぎ。（上増田）

雨具　蓑、笠でケゼエといった。女はゴザを着た。（亀里）

農作業の時、男の人は、「ケデェ」といってみので作った雨具。女の人は、ござでつくった「キゴザ」をきた。「ケデェ」は、油紙が上に貼ってあった。昭和のはじめ頃は、切りこみをいれて衿がわりにしたこともあった。わらでつくった「ジュウロウタ」、「ジョロタ」があって、だいたい自家製でつくった。よそいぎの雨具は、こうもりか、蛇の目で、蛇の目は、嫁に行く時仲人さんが二本位くれた。（小島田）

寝具と寝間着　寝具は掛けぶとんを「ヨノ」、敷ぶとんを「ミノ」と呼び、客用のそれは上下合わせて通称「ヨギ」といった。柄は唐草が多かった。

寝間着はおくみ付きで黒衿、肩あてがついているものだった。

季節のちがいは夏は単、冬はネル地が普通だったが、夏物は手ぬぐいで作る人もいた。古くなった寝具は子供のオムツか、自分の普段着に作り変えた。（小島田）

ふとんはガスメイセンの布地で、三巾位の格子縞が多かった。大きさは、三巾のミノ敷ぶとん、四巾のヨノかけぶとん一枚ずつで夏冬の替えはなかった。

枕は箱枕で、括り枕の部分は木綿地でなかにそばぬか又は米ぬかの入ったものだった。

ネマキは、うすい綿の入ったものをヤグと称してかけぶとんの下にかけてねた。古くなった寝具はシビブトンにして、その上にミノふとんを敷いた。（西善矢田）

しび布団　冬になると、夜なべにわら仕事をした。おもになわない。わらをすぐると、しびがでた。それを布にくるんでしびぶとんをこしらえた。これは、おもにとしよりの人がつかった。敷布団にした。冬の間つかったしび布団は、やっこくってよかった。幅はよの、ひろかった。厚さは一尺くらいあった。（笂井）

着物と履物に関する俗信　「新しい下駄は座敷からはいておりてはいけない」。

「新しいものを身につけたら稲荷様へおまいりしてから出かける」。

「縁側から下りてはいけない」。（小島田）

※縁側は、祝儀か寺のお坊さん以外の出入りが禁じられていた。

下駄の裏に三回つばしておくと帰りが早い。

新しい履物は葬式におろすな。

新しい履物は床の上ではくな。

着物はいい日を選んで着る。（西善矢田）

嫁入り道具ときものの数　嫁入り道具は、張板、裁ち板、下駄箱、タライ、鏡台、寝具位で、金持ちの家は箪笥をもっていった。（小島田）

ふろしきに祝儀着、よそいぎ、普段着を入れて嫁入りし、風呂敷嫁御といわれた。長持、下駄箱、鏡台を持っていくのは金持ちで、普通は長持があればいい方だった。（西善矢田）

髪型について　未婚の女性は「耳かくし」か、後が刈込みで前にパーマをかける「半バック」等の洋髪スタイルがはやった。男性は「オールバック」が流行った。たいていは「坊主頭」だった。既婚の女性は三ツ編にして髷を結った。髪結いの値段は一円五十銭位だったと思う。髪飾りは櫛、玉かんざし等であった。洗髪はうどんの茹で汁か、三～五銭位で買ったあらい粉だった。子供の髪型は「オカッパ」、「タケナガ」等と呼ばれた型があった。（小島田）

女の子供は、タカマゲ、カツラシタジ、アミサゲにしていた。娘頃になると二つに小さく分けてまげにするヒッツメかイチョウガエシで、よそいぎの時はモモワレにした。既婚者は嫁に行く時タカシマダ

に結う。娘のときにうしろにリボンをつけるハイカラ巻やミミカクシが流行った。男は、子供から大人になるにしたがい坊主、五分刈り、オールバックの順だった。

洗髪は、洗い粉が二銭位でこの他石けんやうどんのうでたあとのお湯で洗ったりした。

髪飾りは、べっこうのくし、根付、かんざし位だった。（西善矢田）

化粧品　さかずきに紅のついたものや水おしろい程度で、髪につける油としてつばき油、日本髪につけるギンザシといって香油があった。

お歯黒の習慣はなかった。（西善矢田）

盃に入った紅の他、練おしろいがあったが、嫁入りの時位で普段はしないものだった。（小島田）

機織り・裁縫について　はた織りの機械は中位の所に腰かける「バッタン」というのを使った。織ったものは「伊勢崎銘仙」「トビ大島」にで二反を三日位で織った。

賃代は大正十一年頃で九円五十銭、昭和四年頃は六円五十銭だった。大正頃は娘三人いれば倉が建つといわれた。

はた神様は別段なく、初午の日に針供養をする位だった。

単と合わせは一日一枚位は縫えた。両者にかかる日数はあまり大差がない。

裁縫のことは「オハリ」といった。（小島田）

はた織機の種類は、賃機とそれより以前にいざり機があった。賃機は二反を一日で織って一円十銭、また平大島は二日半かかって一円八十銭の手間賃だった。二反で二円もらえたのは昭和二十年頃になってから。その当時は一円八十銭で仏壇が買えた。織る時期は農閑期で、朝六時頃から始めたものだ。

はた神様がそれぞれの村にあったものだ。

裁縫のことはおさいほうといった。

単で半日、裏付きで一日、羽織で一日位で縫えた。

裁縫道具は、裁板、張板、物指し、鋏、へら、針さし、針箱、指貫、針、くけ台、伸子張、糸等で、糸は木綿糸、ガス糸、絹糸等があった。（西善矢田）

縫い物に関する俗信　「初午にオハリをすると火が立つ」。

「正月十四日はオハリをするな」。（小正月の準備）

「申の日に衿ツボを切ると子供がぐずつくあるいは火事になる」。

「おくみは片方つけて止すと地震？がくる」。

「女の人は一日、十五日は洗たくするな、すると下の病にかかる」。

女の人の洗たく物はタメ小屋にほす。（小島田）

洗たく　洗たく用具は、サワラで出来ている木のタライと洗たく板がある。

洗たく石けんは、四角の硬い石けんだったが、田んぼ着はモシビの灰を水によどましておいたもので洗った。物干し台は竹さおでひっかけいい場所をみつけて干した。

着物の虫干しは土用干しといって土用の頃のいい日を選んでやった。（西善矢田）

洗たく用具は洗たく板、タライ（木製）があった。

洗たく石けんは、おかいこの繭を練るのに使うソーダを入れると油がとれた。この他木蓮の皮も使った。

物干し台は竹製で、三本足をつくってかけた。これは片方を家にかけ、馬の蹄鉄を切ってだんだんに使った。

着物の虫干しは土用の後で秋風が立つ頃がよいとされた。（小島田）

女の人の洗たく物は、「月のものの洗たく物は日に当たる所に干すな」といって家の裏の方へ干した。

洗い事に関する俗信は、月の一日、十五日は洗髪してはいけないとされた。（西善矢田）

ふろしき　ふろしきは三尺幅のものを「ミノブロシキ」、四尺幅のものを「ヨノブロシキ」といった。（小島田）

すすけだつ　北風が吹いてくると、すすけだつといった。あわせは、十月頃から着る。五月ごろになると、ひとえもんになった（笂井）

つつたけ　つつたけとは身の丈のこと。子供がおおくでっかくなった人で、つつたけになったとか、つんつるてんになったという。これは身長に比して着物の丈が短かくなったことをいう。（笂井）

二、食　物

食事　サツマ、ウドンは毎日たべた。米をたすけた。おかずがいらなかった。ふだんは麦メシで、魚は特別の時。米のゴハンはモノ日にたべた。ふだんはヒキワリのカンカンメシ。（上長磯）

主食はヒキワリメシで、米が六、麦が四の割合だった。

大麦を水車でつく時、水を入れながらやると、皮がむける。

干したものを石臼ですってかく。かいたものをふるいにかけ、落ちたものは、ヒキワリで食べる。粉はエサにする。（小屋原）

米と麦が三対七で麦が多い。それも外三分といって、麦の方が多い。

よく働くので、食事もよく倹約して食べた。一年で正月と節分の時だけはれて魚を食べた。（亀里龍門）

麦と米が半々のひきわりめしに、汁とたくあんがつき、魚は一年に一ぺんくらいだった。かわりものは、お盆の時や仕事の区切りの時におはぎを作ったり、赤飯をふかして食べた。（新堀）

米と麦の割合は、三対七で麦の方が多かった。おかずはこうこ、うめぼしで、汁の中になすやじゃがいもを入れた。（西善矢田）

食糧　主食として作ったものは、米、麦、大麦、小麦、粟、黍で、代用食料は、そば、山芋、里芋、さつまいも、じゃがいも、とうもろこし等を作った。米にさつまいも、米にさといもを混ぜて食べた他、さつまいもはふかすなどした。豆類はみそやとうふの原料として使った。

野菜は、春―いんげん、じゃがいも、つみ菜

夏―なす、きゅうり

冬―大根、ごぼう、白菜、ほうれん草

食べる方法は、いんげんとじゃがいも、ねぎとじゃがいも、大根と白菜のみそ汁、つみ菜は汁にしたり、うでたりする。

果物は、トマト、柿、スモモ、モモ等をつくった。

つくった主食は米、麦、小麦であった。

代用食料はじゃがいも、さといも、さつまいもがあり、間食用のものは特にはなかった。主食の混ぜ物は大麦と米。さといもと米がある。

豆類はとうもろこし、大豆をつくった。

野菜は白菜、ほうれん草、ごぼう、にんじん等がある。果物は柿位だった。

米の割合は米三分に麦七分だった。

粉食はうどんで、割合は小麦粉だけで作った。

朝は、米二合位にじゃがいも一キロを皮をむかずに千本切りしていれて塩味でいただく。昼は、精米する時の粉をやきもちにしたり、とうもろこしをゆでて食べた。夜は、なすを入れた煮ぼうとうが常だった。米が三分、麦四分の割合が普通だった。（西善矢田）

副食について　おかずはみそ漬け、梅漬け、つくだ煮、切り刈しと干にしんの煮物、コウナゴ、ふきの煮付等であった。

汁物はけんちん汁かみそ汁位だった。夏はきゅうりの冷やし汁をつくった。

煮物は前述の他に、里いもの煮ころがし、あぶらげの煮物、きんぴらがあった。いため物は茄子の油味噌、葉とうがらし味噌等である。

魚はさんま、にしん、歳暮時期のさけ等があげられる。（小島田）

おかずは、春―ちくわ煮、夏―なすの油みそ、きゅうりの冷し汁、秋―里芋の煮ころがし、冬―塩ビキ、タラの煮付、イカのあし等で、昼ごはんにキンピラはつきものだった。

田植え時にニシンの昆布まきをよくつくった。（西善矢田）

保存食品について　漬け物は一般的には冬のたくあん漬けで、この他きゅうり・ごぼうの味噌漬け等をつくった。

干物はあじ等で、この他いわしの缶づめを買ったりした。（小島田）

保存食品　つけ物として、きゅうりとなすのみそ漬、タクアン漬、梅ぼし、ラッキョウ漬け等で、他に塩づけしたナスを粕漬けした。

納豆やコンニャクは自分達でよくつくった。（西善矢田）

調味料について　自家製でつくったものは味噌、しょうゆ。

買ったものは塩、さとうで、油は菜種を作ってそれを売り、油と交換してもらった。調味料は四斗樽二つ位が八人家族の平均だった。（小島田）

調味料　自家製でつくった調味料は、みそ、しょうゆで、塩は買った。（西善矢田）

出来秋　サツマイモやサトイモができた時、弁当にした。

サツマイモは余裕のある家でないと作れなかった。作る土地の余裕がないと作れない。みな桑畑にしていた。甘いので、弁当にもっていくとうらやましがられた。一軒か二軒くらいきり作らなかった。（新堀）

夕食　うどんが多かった。煮こみうどんだった。（新堀）

おかず　なすをいためてみそであえたものは、スタミナの元になった。（新堀）

煮物につけ物だった。魚があれば上等で、小魚をとって干物にし、マキマラにさしておいて食べた。ミソ、ショウユは自家用で、組合で持っていて、後、村持ちになった。（小屋原）

ばっかり　混ぜもののない食事のこと。麦もなくて、麦一升借りたこともある。（西善矢田）

弁当　ごはんに、梅干し、こうこ、なっぱ。卵焼きを持ってこられる子は上等の方で、組で二～三人だった。さつまいも、二～三本の子もいた。（西善矢田）

三日月さま　この日だけは必ずとうふを汁に入れるので、とうふ屋が売りにきた。（亀里龍門）

主食　ひきわりめしで、麦七、米三の割合で、イモを入れたり、麦だけの家もあった。（下長磯）

食事の量　「おかゆは一合、めしは二合めし、三合ごわめし、四合だご（だんご）、五合のぼたもちゃ、だれも食べる。」（下長磯）

大食　善太郎さんという人は、ふだんがまずいものを食べているので作った時はもちを四十五食べた。（下長磯）

卵　卵焼きかゆで卵にして食べた。目玉焼きは作らなかった。切って分けて食べた。（下長磯）

病気の時に食べたくらい。（亀里龍門）

やぎの乳　母乳の足しにした。（下長磯）

米だけのごはん　モノ日、正月、来客、弁当には、米だけのごはんをたいた。年寄りは別メシといって、お釜の中にザルを入れ、米だけを入れて炊く。ツゲに出すめしも、米だけだった。（小屋原）

二合食らい　三杯めしを食べること。（小屋原）

コジョウハン　おやつでイモを食べる。午後は必ず食べた。（小屋原）

青年団の会食　一人三合と計算した。（小屋原）

おなめ　大麦、豆で作って、おかずにした。（下長磯）

正油の代り　みそをせんじて、ふきんでこして使った。煮物に使った。正油しぼりの道具も用意していたが、使わなくなった。（下長磯）

香辛料　唐辛子、柴蘇、生姜、茗荷を作った。うどんの薬味としてよく使った。長期保存は、塩づけにするのが一般的だった。（西善矢田）

年中行事の食事　正月三ケ日はそば家例だった。（西善矢田―南雲家）（房丸―新井家）

正月三ケ日はぞう煮家例で、七草まで菜のものは食べない。

（房丸―新井家）

小正月に米の粉をひいてまゆ玉をつくり、あんこでころがしていただく。（西善矢田）

八坂神社の天王まつり、新七月二十五日にはどの家も赤飯をいただく。

三月のおひな様にはすし、五月の節供には赤飯と決っていた。

小正月にはあずき粥を食べた。

養蚕行事のうち、おこあげ祝いの時アンピン餅をつくった。（房丸）

（西善矢田）

オサナブリにはうどんを食べて、いっぱいやったものだ。また田植え時のゴジョハンは協同作業だったので、いんげんの煮ものやみがきにしんの煮ものを作った。

田植えの終った頃の三日間は農休みで、かわりもんとしてまんじゅうを食べた。

秋あげの頃、嫁さんの里帰りに合わせてブタ餅（ボタ餅）をつくった。（房丸）

オサナブリにはスシを作る。田んぼの水口で稲を三株取ってきて神棚にあげた。子供がのどをつかえた時なでるとなおるといわれた。

五月のカイコ祝いには、餅やすしなど、おもいおもいのごちそうを作ったものだ。

十二月二十五日の稲荷祭りはいわしと赤飯を食べた。

冬至には、こんにゃくのごまよごしをかならず作った。

十一月の神様のルスンギョウ（るす神）の時はおはぎを作って嫁さんを里帰りさせた。（西善矢田）

はし　正月のはしは、柳の木を使った。ゆでて皮をむいた。元日から使った。（房丸）

柳の枝の皮をむいて作った。ハラミバシはない。（下阿内）

油もち　くずの米の粉でついた。こもちのようなものだった。ごま、くるみを入れた。（亀里）

五月の節句のもち　こもちをついて、ふかし、またついて作る。それをひし形に切った。（亀里）

もちとまんじゅうのこと　春蚕の三眠のときにもちをついた。

嫁さんはこの餅を実家へもって行った。これは五月のなかばごろのことである。そのあとは大体まんじゅうになった。あったかくなるとまんじゅうをつくった。七夕や農休みのときにふかしまんじゅう。

お盆にぼたもち。むかし、お盆様は、臼（杵）の音を聞いてくるというはなしを聞いた。

むかしは、十五夜、十三夜に餅をついた。最近はつかない。十日夜にも餅をついた。十日夜になると、秋がいそがしくなった。

むかしの人のはなしに、このころ、おおく忙しくって、腹がへっていて、餅を大口に食べたら、餅と一緒に指をかんだという。それで、その人がいうには、

「今夜の餅は、骨があるんか」
と、よくみたら、それが自分の指だったというはなしがある。
十日夜の餅はあんぴん。あんぴんを重箱に入れて、庭に積んであった稲束の上にあげた。餅のほかに大根を二本あげた。餅は十個。十日夜のときにあげる大根はかいこのあたるうちのものをとってきてあげるとよいといった。そうすると来年のかいこがあたるといった。
むかし、前屋敷の岩ちゃんのたねをはけばかいこはずれっこなしといった。岩ちゃんがはきたてるたねと同じものを注文した。
（上増田）

あきあげ　あきあげは、ぼたもちときまっていた。重箱に入れて里へもって行ったり、かえりに、その重箱にぼたもちをもらってきた。
（上増田）

米の飯　むかしは、米の飯をあまり食わなかった。だから、朝飯のとき米の飯をつくると、作番頭は、モノビだといって、足を洗って、仕事を休んだというはなしがある。（駒形）

七草がゆ　しらっかゆをつくる。その中にナズナを入れる。味をつけない。ナズナのほかに、イモ、大根なども入れる。（上増田）

十五日の小豆粥　十五日の朝、小豆粥を煮る。これを、ニワトコでつくったかゆかき棒でかんまわす。かゆかき棒には、おかざりの餅を一つはさんでおく。そのかゆかき棒で小豆がゆをかんまわす。そのあと、かゆかき棒は神棚にあげておく。
苗代をつくったとき、かゆかき棒を、苗間の水口に二本さす。
なお、小豆がゆを食べるとき、あついからといって、ふいて食べると、田植のときに風がふくといった。ふいて食べてはならないという。
十五日の小豆がゆはすこしとっておいて、十八日の朝食べた。
（上増田）

一年間のご馳走

○一月……正月は餅、えびすこうはてんぷら
○二月……八日は、赤飯、あるいはぼたもち
○三月……お節供は、すしか餅、彼岸はぼたもち
○四月……春祭りで赤飯
○五月……節供は赤飯
○六月……田植をしたあとのおさなぶりのときは赤飯とうどん
○七月……七夕のときまんじゅう
○八月……ぼんのときはぼたもち
○九月……八朔は赤飯、十五夜にまんじゅう、十三夜もまんじゅう
○十月……十日夜にもち
○十一月…つじゅうだんご
○十二月…稲荷まつりのときは赤飯、油もち

大体、あついときはまんじゅう、寒いときは餅をつくる。（上増田）

おきりこみ　おきりこみのことは、にぼうとうという。おつゆのみをたくさん入れる。寒い時期の夕飯のときにつくって食べた。昼間は、ねじっこ（つみっこ）をつくって食べた。ねじっこは汁の中に入れて煮て食べるほかに、ゆでたものに、砂糖醤油をつけて食べたこともあった。（上増田）
おきりこみのことは、にぼうとう、にこみともいう。おもに夜つくって食べた。にぼうとうをすくうのは竹製のしゃもじ、つのが三本でていた。まごの手といった。（朝倉）

すいとん　小麦粉をやわらかくこねて、しゃもじで小さくちぎって汁の中に入れる。塩気はそのあとから入れる。
ねじっこは、小麦粉をややかためにこねて、手でにぎったもの。これを汁の中に入れて煮る。（朝倉）

やきもち　飯があまったとき、小麦粉と一緒にこねてつくった。中に、砂糖とねぎをいれてやいた。ご飯をまぜてつくったのがやきもち。小麦粉だけでつくったものがじりやき。（朝倉）

おちゃがしのこと　つけもののおちゃがしのことを、ちゃぞっぺといった。いいお客さんには、白砂糖のおちゃがしをだした。ふつうの人には、ちゃぞっぺをだした。

近所の人には、ちゃぞっぺとか、梅干などをだした（梅干に砂糖をかけたもの）。

すこし格をおとすと、さんぼんをお茶菓子にだした。

「からっちゃ飲むのは、死ぬよりおおごとだ」といった。（小屋原）

芋はかげの俵　「芋はかげの俵」という諺がある。芋は米のたしになるということ。

わしが小島田に奉公しているときのはなしだが、八月から四月くらいの間に、いも飯を食った。

なお、いもにはさといも、じゃがいも、さつまいもとあった。

じゃがいものことは、さんとくいもといった。また、一年に三度とれたので、さんどいもともいった。（女屋）

あんころもち　小麦粉でも、もち米の粉でもよし。まるめて、あんこの中に入れて食べるもの。（上長磯）

あまねじ　うどん粉でねじってつくって、あんこの汁の中に入れて食べる。くず米を粉にひいて、ねってゆでこねて、にぎって、ゆでて、あんこの中にくるんで食べる。それは、こじょうはんに食べた。いつでも、食いてえときにつくって食べた。（上長磯）

ねじっこ　小麦粉をこねて、にぎって、ねじっこをつくって汁の中に入れて煮たもの。飯が足りない夕飯のときなどにつくって食べた。おきりこみよりかんたんにつくれた。すいとんのこと。小麦粉をゆるくこねて、しゃもじですくって、汁の中に入れて煮たものもある。（上長磯）

うどん粉をこねて、にぎって、汁の中に入れて煮たもの。

あるいは、これをゆでて、砂糖醤油をつけて食べた。（上大島）

小麦粉を水でこねて、にぎって、そのままゆでて、砂糖醤油などをつけて食べた。また、野菜をたくさん入れた汁の中に入れて煮て食べたこともあった。これをねじっこといった。すいとんもつくって食べた。（下増田）

むかしの食事のはなし　ふつうは、一人一合の割合で炊いた。食いつさかりの者がいると、一合以上炊いた。

むかしは、保有米は、一人三升といった。

ネコは一年間で一匹一斗食べるといった。田植のとき、クロのわきに、イヌ・ネコの分といって、余計に植えたことがあった。

ふかしまんじゅう　ふかしまんじゅう（むかしは、ゆでまんじゅう）をつくるのは、七夕、おさなぶりのときなど。（上大島）

おかいこあげ　このときは餅をついた。嫁さんは、この餅を持って里へお客に行った。（上大島）

あきあげ　あきあげのときには、ぼたもちをつくった。

嫁さんは、このぼたもちを重箱につめて、里へお客に行った。このとき、姑さんから、

「あきるほど泊ってきてもいい」

といわれる人もあったという。

このとき、もらい方の姑さんは、ぼたもちをたくさん入れるので、重箱のふたをあけてみたら、おされて一つになって、ひっかいて食べたという。

また、里の親も、かえりにお土産にぼたもちをよこした。一つでも

余計にやりたくってぎっしりつめてやったら、四角にそっくり（重箱の形に）ぬけたというはなしもある。（上大島）

盆と彼岸のぼたもち　盆のぼたもちで、嫁と姑の仲なおりができるといった。

盆のころは、ぼたもちがすえてしまうので、姑さんが嫁さんに、

「食べない、食べない（食べろ、食べろ）」

とすすめるので、そういったもの。

「彼岸ぼたもちどうでもよいが、ならば半日遊びたい」という歌がある。（上大島）

あずきぼうとう　あずきと砂糖で煮た汁の中にほうとうを入れたもの。これをつくる時期については、とくにきまっていない。雨でも降ると、雨っぷり祝いといってつくって食べた。（上大島）

まんじゅう　むかしは、うでまんじゅう（ゆでまんじゅう）をつくった。そのあと、炭酸まんじゅう（ふかしまんじゅう）になった。

まんじゅうをこしらえているものは、はじめのふたっぷかしくらいは、自分で食べることができなかった。ふかすとすぐに、まわりが食べてしまった。

一ぷかしは十二コくらいだった。

むかしは、農休みにはふかしまんじゅうをつくった。

春は餅をついた。

なお、てんぷらをあげるときも、はじめのうちは、あげている本人は、食べることができなかった。（下増田）

やきもち　飯がすえかかっているとき、小麦粉とまぜて、水でこねて、ほうろくでやいた。味噌を入れてやいた。

じりやきは、たまごをまぜてつくったこともあった。（下増田）

にぼうとう　おきりこみとも、にぼうとうともいう。これは、醤油味だった。にぼうとうのあっためけえしはうまかった。にぼうとうは、おもに寒いときの夕飯として食べた。夏に食べた人もあった。暑いときのにぼうとうもうまかった。竹のしゃもじのにぼうとうもりがあった。これは、つっかけともいった。（下増田）

オヤコモチ　もち米と米の粉をまぜてついた餅のことを、オヤコモチといった。この餅は、年寄りの人が食べるのに、食べいいという。いつついて食べるというきまりはないが、ふつうは、餅をつくときに、一緒についた。ふかすとき、もち米を下にして、上にねじっこにしたのを立てる。これを一緒についた。（下増田）

モチグサ　モチグサのいちばんうまい時期（いい時期）は、三月のお節供のとき。あったかばってのところにあったモチグサをみつけてとってきた。（笊井）

西善矢田　南雲家のそば家例の献立例		
朝	そ　ば	角松にいったんあげてから食べる。
昼	ごはん	キンピラ、スエ（大根とにんじんの酢のもの）
夕	ごはん	いもの煮ころがし、豆の煮たもの。

かたけということ　朝飯に米の飯、お昼にも米の飯を食べると、かたけに米の飯を食ったという。

赤飯を朝飯、お昼に続けて食べると、「よくかたけに食える、あきねえで食えるな」といった。

かたけに食うとは、毎食、毎食食べるということ。ひとかたけというのは、一食のこと。（笊井）

赤飯と餅

むかしは、お祝いごとのとき赤飯をつくった。

餅をついたおもな機会はつぎのとおり。

・子供の誕生祝い
・お正月
・三月の節供
・かいこのあがった祝い
・八十八夜、しもよけもち
・十日夜

十日夜のときには、かさねないおそなえをつくった。

おそなえは、机を縁側にだして、盆の上にのせてあげた。

十日夜のもちのことは、縁のもちといった。二色つけという。紅白のもちとか、こもちといいもちを二色ついた。

娘さんのいるうちでは、その娘さんを早く縁づかせたければおそなえを、娘さん一人に食べさせろといった。

子供が生まれて、はじめて十日夜をむかえるうちでは、十日夜のもちは早くつけといった。(笂井)

けんちん汁　北爪家では、えびす講のときのけんちん汁にふつうのときのけんちん汁とはちがうつくり方をする。

えびすさまにあげるのは、大根、人参、牛蒡は四つ割にする。でっかく切る。いもはまる。豆腐のかどもでっかくとる。

ほかの神様にあげるけんちんはふつうのつくり方である。

人参、牛蒡は、細いのなら二つわりにする。太いのは四つわりにする。大根は一センチくらいの幅のわぎりにする。里いもは、まるでいれていいくらいの小さいのをえらぶ。

けんちん汁は、大きいおわんと小さいおわんによそって、一つのお膳にご飯と一緒にあげる。

正月も秋も同じにあげる。

けんちん汁は、翌日さげて、主人が食べる。(上増田)

にんじん、ごぼう、いも、だいこんを切って油でいため、豆腐をさいごに入れる。しょうゆ味である。(女屋)

ご飯　正月のときは白いご飯を炊いてあげる。これは、はじめに茶碗にもって、それをべつの茶碗にあけて、山もりになるようにしてあげる。

秋には、ご飯でなく、赤飯をあげる。

正月も秋も、大もり(おてんこもり)と小もり(一口分くらい)の二色あげる。

けんちん汁と同じように、翌朝さげて主人が食べる。(上増田)

えびす様のお膳　えびす様にあげるお膳は、会席膳、これを一つだして、二人前のものをあげる。

ご飯は、大もりのものと小もりのもの一つずつ、けんちん汁も同じく一つずつ。

さかな、こんぶ、てんぷらは一人前ずつ。ご飯、汁のならべ方はふつうのやり方、左ぜんにはしない。このほかに、酒をあげる。また、枡に入れておかねをあげる。

ご飯や汁は翌朝、主人があっためて食べる。

大もりのご飯、汁は、えびす様のすぐ前になるように供える。小もりの方がうちのもんからみて手前になるように供える。(上増田)

さかな　正月のえびす講のときは、しゃけのきり身秋のえびす講のときは、さんまをあげる。さかなは一人前ずつあげる。(さんまは二匹、きり身は二切れ)

正月には、こぶまきをつくってあげる。えびすさまにあげるのは、太くまいたもの、これを十本くらい皿にもってあげる。

ふつう食べるのは、細(ほそ)くまく。秋のときには、てんぷらをあげる。五色か七色の材料をつかう。切るものは大きめに切った。これも、一

人前山もりにしてあげる。（上増田）

つじゅうねじ　秋のはきまとめ、むしろっぱたきのくず米をよなげて、粉にひいて、だんごをつくった。それをくしにさして、屋敷稲荷にあげたり、とぼ口のところにさしたりした。つじゅうねじといった。（上大島）

おきりこみのこと　おきりこみは寒いときの夕飯につくって食べた。竹でつくったしゃもじをまごの手といった。これでしゃくって食べた。

おきりこみ、にぼうと、にこみといった。（上大島）

もろこしもち　むかし、もろこしもちをつくった。これは、はじめの一杯はうまかったが、二杯目はまずかったという。（上大島）

ねじっこ　ご飯が残っているが、うちのもん全体で食べるには足りないとき、ねじっこをつくった。これは、小麦粉に水を入れてこねて、にぎったもので、汁の中に入れて食べたのと、ゆでて、砂糖醤油をつけて食べた場合とあった。（上大島）

つじゅうだんご　稲をするすでひいているとき、こぼれおちた米のことを、はきまとめといった。はきまとめはくず米である。これをつじゅうともいった。はきまとめてよなげたもの。これを、石臼でひいて、粉にした。これを、こねて（湯を入れて）、だんごをつくった。

川びたりのとき、一つはまるいもの、もう一つはにぎったものをくしにさして、川神様にあげたり、便所ののき下のところへさしたり、家の入口のところへさしたりした。これを、つじゅうだんごといった。（上大島）

米の飯のはなし　お正月の三か日とか、としとりのときには、米の飯を食べた。田植のときは、米の飯を食べた。田植が終ると、米の飯が食べられなくなる。「米の飯とはなれるのがつらい」といった。

葬式のときは、うどんはしなかった。長くつづくといっていやがった。このときは米の飯をだした。

むかしは、ふだん、ひきわり飯に、なっぱにこうこのおかずだった。今は毎日が米ぐらしである。（上大島）

間食　午後の間食のことは、こじょうはんという。（下大島）

新米　新米ができたときは、神様にあげてから食べた。（下大島）

いもめし　「いもはかげの俵」という。いもは飯のふやしにした。

むかしは、麦飯を食べていた。この中に里いもを入れて煮ると、のめっこかった。いもといえば、里いものことだった。（下増田）

しゃけのはなし　むかし、しゃけの切り身をおかずとして食べていたのは、根岸さんのところと、小島さんのところ。

大地主のせがれは、十一時ごろになると、番頭さんが弁当をもってきてくれた。

まっしろい飯で、さけの切り身がおかずだった。わしは、小島さんと机をならべていたが、わしの弁当はまっくろい飯、おかずはなっぱにこうこう。弁当箱にふたして、かくして食べていた。

むかしは、ふつうの家では、正月でもしゃけの切り身など食えなかった。

お歳暮にもらったしゃけも、つるしておいた。一月十四日のきりかえのとき、はじめてしゃけの切り身を食った。（駒形）

とろめし　とろめしは、暮の冬至の晩に食った。（駒形）

ウナギ　わしのおふくろは、東片貝の森家から嫁にきた。実家では、虚空蔵様を信仰していたのでうなぎを食えなかった。うなぎを食うと、目がつぶれるといった。（駒形）

米飯　むかしは、一月十五日がすむと、米助けのいも（里いも）を食った。ふつうは、正月三が日がすると、米の飯でなくなった。

（駒形）

あぶら餅　冬至の宵には、あぶらもちをついた。それは、仏様にあげるくらい。（上佐鳥）

むかしの食事　むかしは、むぎ飯を食べていた。

米九に麦一の割合が上等。ふつうのうちで、米六に麦四くらい。米がなくなって、麦ばっかり食べていたという家もあった。こういう場合を、ばっかり飯といった。

番頭さんにも、家族と同じものを食べさせていた。あすこんちは、食いもんがいいから、いいといっていた。

昭和十年代になって、押し麦になった。押し麦は水車にたのんでついてもらった。車づかいをした。押し麦になってからは、うちによってちがうが、大体米七に麦三がふつうだった。

いも飯は年寄りの人が好きだった。里芋を入れて食べた。ただ、いもというと里いものことであった。「いもはかげの俵」といった。

米ばかり食べるようになったのは、今から（昭和五十七年）二十年くらい前からである。

なお、水車で米をついたときには、山かけで一升ずつ、水車番の人にやってきた。むかしは、年の暮には、車使いは混んでいた。早いもん勝ちだった。布団をもっていって泊りこみだった。（上佐鳥）

サケの切り身　盆の十三日の晩と十二月三十一日の晩に、サケの切り身を食べる。（上佐鳥）

ヤキモチ　ヤキモチは、小麦粉でつくった。ご飯が残ると、ご飯に粉をまぜてやいた。ひらたくまるくつくって、ほうろくでやいた。

じりやきは、粉ばっかりでつくった。フライパンでやいた。これは油をひいてやいた。大きくやいて切って食べた。

ぜいたくなヤキモチは、牛乳とか砂糖をまぜてこねてやいた。ヤキモチは、こじょうはんとして食べた。（上佐鳥）

ヒルバテ　盆のときの昼うどんのことを、ヒルバテという。（橡島）

なべ飯　なべ飯ということは聞いたことがある。時によれば煮た。飯は、ふつうは釜でたいた。へっついでたいた。（橡島）

五穀のこと　アワ、ヒエ、米、麦、豆このうち、アワが一番もとだという。ヒエは、米と同じ値段で売れるといった。粗末にするなといった。（橡島）

主食のこと　昭和のはじめのころは、米、麦を食べた。

はじめは、ひきわりを米にまぜて食べていた。そのあとおしむぎにかわった。この交代の時期についてははっきりしない。

子供のころ（大正のはじめのころ）には、米四に麦六という割合がふつうだった。米がとれると米七に麦三の割合になった。

十七、八のころ（大正十年代）、弁当をもっていったとき、米の飯の弁当をもっていくと、

「おめえのうちには屋根屋さんがきたんかや」

といわれた。

昭和二十年代にはまだおしむぎの入った飯を食べていた。

米ばかり食べるようになったのは、昭和三十年のころからである。

むかしは、ひどいころには、ひきわりの中に大根を切っていれたこともあった。また、さつまいもとかさといもを入れて食べたこともあった。（橡島）

かげの俵　むかしから、さつまいも、さといもはかげの俵といわれていた。米の代用として食べられていた。

番頭さんを使っていたうちでは、秋になると、夕飯の前にさつまいもを食わせた。そうすると、夕飯がすくなくてすむといった。（橡島）

「いもはかげの俵」という。さつまいもとかさといもを飯の中に入れ

て食べた。（下増田）

ジャガイモのこと　ジャガイモのことを、サントクイモという。

その理由は次のとおりである。植えてすぐ食えること。栄養があること。食ってうまいこと。（野中）

やきもち　うどん粉を水でこねて、味噌をまぜて、径十センチくらいにまるめる。うすくまるめる。それをほうろくの上でやいて、灰の中にくべてむして食べた。これをほどやきといった。やきもちはこじょうはんに食べた。

やきもちの中にあずきのあんこを入れてつくることもあった。

飯があまっているときは、飯をまぜたやきもちをつくった。これをめしやきもちといった。

うどん粉をふつうのやきもちをつくる場合よりやわらかめにこねて、まるめて、ほうろくでやくのがじりやき、これはたくさん食えるので、損だといった。粉が同じ分量なら、うどんはそれほど食えないから、じりやきの方が損だといった。

米の粉（うるち）でつくったやきもちもあった。これは、上品なほうであった。（櫛島）

餅のかたち　くしもちはましかく。

節句のときは、ひしもち、ひしがた。

正月の大判餅は四角、初嫁は一月四日に大判餅をもって、里へご年始に行く。餅は半紙にくるんで、水ひきでゆわえた。（櫛島）

ひるばした　盆のとき、昼うどんのことを、ひるばしたという。

昼うどん（ひるばした）を食べると、

「盆のようだなあ」

といった。（天川大島）

にぼうとのことなど　おきりこみとにぼうとは同じもの。うどんを幅広くきって、生のまま、汁の中に入れて煮たもの。

大根、にんじん、ねぎ、いもあるいはじゃがいもなどを切って汁の中に入れて煮た。汁がにえたったところへうどんを入れた。

にぼうとは、寒いころの夕飯におもに食べた。夕飯のとき、ご飯が足りないという場合に、よくにぼうとうをつくって食べた。

寒いころは、体があったまっていいといった。夏はあまりしない。

にぼうとは、ふつうは、お客には出さない。お客さんでも、にぼうとの好きな人にはだした。竹のしゃくしがあって、それでもった。

翌朝のあっためけえしがうまいという人もあった。

「今夜はさみいから、にぼうとでもすべえや」といって、にぼうとをつくった。（笂井）

うどんを幅広く切って、生のまま汁の中に入れて煮たもの。汁の中には、野菜をうんと入れた。

にぼうとうは、おもに、寒いころ、夕飯のときに食べた。飯が足りないとき、飯のたしとしてつくって食べた。

にぼうとうは、竹でつくったしゃもじですくった。

このしゃもじのことを、おにもりといった。（下増田）

おきりこみ、にぼうとう、にこみという。

飯が残っているが、足りないとき、飯のたしにつくって食べる。

竹のしゃもじをつかってもる。野菜をことしてたくさん入れる。

（下長磯）

おきりこみとかにぼうとうといった。

冬のころ、夕飯として食べた。夏はあまり食べない。汁の中には、大根、いも、なっぱなどを入れた。寒いころには、毎晩のようにつくって食べた。にこみともいった。

お昼のとき、飯が足りないときには、つみっこをして食べた。小麦

粉を水でこねて、片手でもって、おしだしてちぎって、鍋の中に入れて煮たもの。

昼には、ねじっこもつくって食べた。飯がたりないときに、ねじっこをしろといって、つくって食べた。ご飯がすこし足りないとき、その補いとしてつくったもの。おきりこみより早くできた。（朝倉）

すいとん　小麦粉を水でこねて、にぎって、汁の中に入れて煮て食べた。これを、すいとんともねじっこともいった。大体、昼食のときに食べた。

飯があまったとき、それをこなと一緒にしてこねて、ねじっこをつくった。（下増田）

小麦粉をゆるくかいて、しゃもじでにたての汁の中にたらして煮たもの。これをつみれといった。

昼食のとき、ご飯がすこし足りないというときに、ご飯のたしとしてつくって食べた。夜でも食べることもあった。しかし、これだけで一食とすることはできない。これは簡単につくれた。（下増田）

今はすいとんという。小麦粉を水でこねて、にぎって、汁の中に入れて煮たもの。これも飯のたしにつくった。

ねじっこを汁の中に入れないで、ゆでて砂糖醤油をつけて食べる場合もあった。

ねじっこをあんの中に入れて食べたのもあった。これをあんねじといった。これはかわりもん、ご馳走であった。こじょうはんとして食べた。（下長磯）

正月の食習

三か日……朝はそば、夜はご飯。

四日～六日……朝はぞうに

七日……七草がゆ。ナズナなど野菜を入れておかけをつくる。

十一日……かがみもちをぞうにに入れて食べる。

十五日……小豆がゆ。（下増田）

おひねり　正月になってから、半紙に粒を包んで、正月棚にあげておく。

正月二十日がおたなおろしで、正月棚をはずす。

そのとき、お棚にあがっているおひねりは年男がとる。年男の報酬だといった。（上増田）

赤飯の上手なふかし方　赤飯をふかしていて、なかなかふけないときに、シトをぶっと、やんわりふけるという。二合くらいの水を、赤飯の全面にかけるようにする。そのあと、下から火をあてる。（上長磯）

ご馳走　あぶらもちは、神様が出雲から帰ってきてからついた。

あきあげのときは、ぼたもちをつくった。あきあげのぼたもちといった。

ふかしまんじゅうは、七夕、農休みのとき。

餅つきは、八十八夜で終り。

十月は、餅つきは、おひまちからにする。十日夜（十一月）とおひまちは、特別の日だから餅をつけといった。

やきもちは、女屋の地蔵様のおまつりのとき（七月二十三日の晩）につくった。（女屋）

お茶菓子　つけもんのおちゃがしのことは、ちゃぞっぺといった。

たくあん、おはづけなど。

区長していたとき、たくあんを大樽に二本つけたことがあった。ムラの役をしていると、お茶がしをたくさんつけておいて、人がくるとだした。

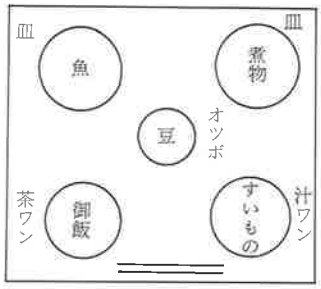
「からっちゃは、むぎぼうちするよりおおごとだ」といった。

なお、人がなくなったとき、隣組の人などはじんぎに行った。そのときにお茶がしは出さなかった。また、一杯茶だった。（女屋）

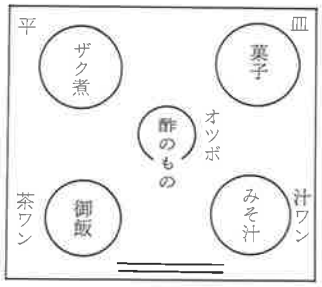
食制　一日の食事の回数は、ゴジョハンを入れて四食が普通だった。食事の時間は、朝が農作業をやってから八時頃食べた。献立は米三、麦七のごはん、みそ汁、たくあん、菜のもの位だった。昼は十二時で、朝ごはんの残りかやきもちにちくわの煮もの。夕食は七時頃で、あげうどんが多かった。

食事をする場所は、オカッテかアガリハナと決っていた。

ゴジョハンの内容は、うどん粉のじり焼き、とうなす、じゃがいものふかしたもの等であった。（西善矢田）



祝儀の膳



不幸の時の膳

祝儀の膳　オチツキは、蓋付の椀にごはん一口入れるのと、一見の客は最後にねぎぬたをだした（西善矢田）

不幸の時の膳立て　御飯は白いごはん、みそ汁はとうふと大根、ザクはいも、大根、とうふ、コンニャクのけんちん風のものが入っていた。この他みやげ用としてまんじゅうが五個ついた。（西善矢田）

一食の基準　普段は山盛り一合でフタカタケ分（二人分）といった。農作業の時は一人一合はゆうに食べた。お振舞いの時は一人三合位の見当でたいた。建て前の時は、うどん五合うっても一人で食いきる程だった。（西善矢田）

食べ物に関する俗信　食べ合わせでいけないのは、びわとあずき、すいかと天ぷら。

妊婦は柿を食べるとくさるといった。

茗荷の木の根元に乳をすててはいけないといった。

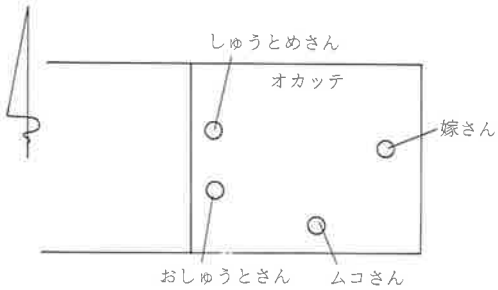
山芋の木のそばを歩くと乳があがる。

正月の七草は、トウト（他国）の鳥とニホン（日本）の鳥が渡らぬうちにきざむといった。（西善矢田）

道具　炊事用具は、釜が三丈釜で鍋は、二丈〜三丈で、十五人鍋とか二十人鍋といった。この他セイロや胴ブカシがあった。煮炊きの場所はヘッツイか囲炉裏で火吹き竹や一尺五寸の火ばし等があった。

調理用具は、ヤナギかシナ材の足のついたまな板、菜切り包丁、擂鉢、こね鉢や、ザル類はみそこし、しょうぎ、あげすいの等があった。（西善矢田）

付け火のマッチは高く、越後から天ビンでツケギを売りにきた。（房丸）



食事の配置

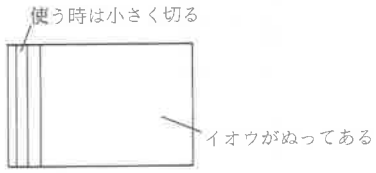
飲食用具は、箱膳の中に飯椀、汁椀、湯のみ茶椀、箸等が入っており、食べた後は膳棚へしまった。ちゃぶ台になったのは昭和二十年頃からだった。

飯を入れる容器は、オヒツかやや小型のオハチがあった。この他に豆皿、お皿、どんぶり、蓋付オツボ等があった。

弁当用具は、柳づるで編んだコリ（行李か）があって大きさはまちまちだった。その他瀬戸びきのべんとう箱があった。

嗜好用具は、ギヤマンでできた二合徳利、土瓶の他一升か二升用の鉄瓶等があった。

（西善矢田）



ツ　ケ　ギ

食料の貯蔵法　みそやしょうゆは、母屋のオコンマヤで充分冷たく貯蔵できた。この他木の樽等があって米は俵にいれたままつかった。

（西善矢田）

穀類の精製　米の精白は一俵やるのに一昼夜かかった。力丸町のイノキに水車があってそこでやった。

大麦はヒキワリ機でつぶしオシ麦にした。（房丸）

嗜好品　お茶は自家製で、つんでからふかしてゴザの上で干す。干し上るとよってからホウロクで乾燥させた。

麦コウジ、米コウジと豆の煮たものをおなめとして食べた。

（西善矢田）

三、住　居

にわとり小屋　玄関の天井裏の箱の中でかっていた。（西善矢田）

堀　屋敷のまわりの堀は、排水のために掘った。風をよけるために低い所に屋敷を作ったので、屋敷が低くて湿けた。北側を高くして防風林を作った。

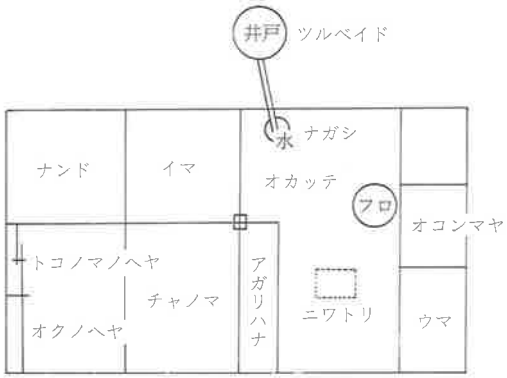
（西善矢田）

屋敷のまわりの堀　土地が低くて、排水の目的が強いようだった。

春にそうじをして、泥あげをして、魚やどじょうをとった。穴を掘って魚を追いこんだ。めいめいで、夕方堰をして、朝三時ころから出て、二人一組で三組、六人でくみ出し作業を始めた。二人でつるさげおけを使った。息をそろえないとむずかしい。夜中から始めて、昼頃にならないと、魚がとれるようにならなかった。（亀里寺家）

住居　**屋敷どり**　母屋は、西北の位置で、多少東へふれる位置にとる。これは北風が強いためだと思う。大きい家で四間×八間の平家で、三尺の縁側がついた。

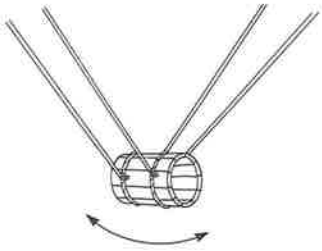
屋根はワラ屋根か、板屋根で、麦ワラとカヤの混じったものが多かっ



一般的な間取り（西善矢田）

た。（房丸）

蔵は、南東のいぬい蔵かたつみ蔵で母屋から少しはなした。規模は二間×三間、三間×四間、高さ丈三、厚さ三十センチで、壁は丸竹の芯に土をぶつけて作る。屋根は合掌造りだった。酒蔵をもつ金持ちもいた。（西善矢田）



つるさげおけ

蔵の収蔵法は、上に衣類、下に俵や穀類、麦等を入れた。昭和二十三年頃、長持ちに木の車がついたカロウトがあって、火事の時これに入れて蔵へしまったものだ。

蔵にまつわる話として、清水茂さんのお父さんが伊勢まいりしてから、生まれた子供に「伊勢蔵（いせぞう）」の名前をつけたとのこと。

物置き・作業場は、だいたいはバラックだったが、なかにヒトザシキの家と称するものがあり家の南側か東側にあることが多かったが概して定まった位置はなかった。

堆肥場は、西側のたつみの方向につくる。

便所はチョウズバといって屋敷内にはいって右手にあり、焼物か木でつくったチョウズバチが置いてあった。その北側に並んでコヤシダメがあった。これにはフロの残り湯を捨てた。また便所のそばには難をのがれるといって南天を植えたものだ。また、正月にはヘイソク、お盆には盆棚にあげたものと同じ造花の蓮の花をあげた。

井戸は、母屋の裏の西側に作った。タグリの鎖がついていた。深さ一丈か一丈一尺か二尺の素深りの井戸で井戸枠はないが竹製の枠で、ワラで編んだ蓋がついていた。

井戸水は鉄分が多く、昭和八年頃軍隊の大演習があった時不適とされた。

井戸替えは一～二年おきの春、それぞれの家でやったが、なにしろ水が少なかったのでせわはなかった。またこの時厄払いする家はオンベ（ヘイソク）を飾って井戸神様をまつった。

オンベは、春の井戸替え以外では正月飾りもやったものだ。

井戸をつぶす時は、息ぬきの為節を抜いた竹をいれる。井戸のそばにはよく雪の下を植えて、子供の気つけ薬としたものだ。

つぼ庭は、裏鬼門の西南方向につくった。ここから出入りするなといった。そのわけは神様の遊ぶ場所だからよごしてはいけないとされた。

植えたものは、ツゲ、松、ヒイラギ、モクセイ等で、植えていけないのはシキビとされていた。

屋敷神は、イヌイの方角で西、北の隅につくった。

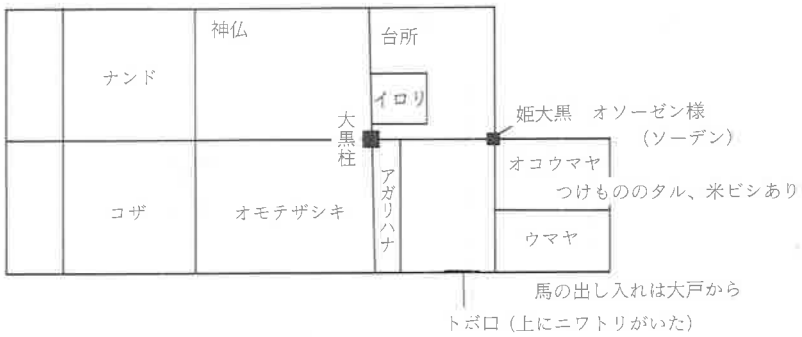
垣根（カシグネ）は防火除けと防風をかねて北と西の二方向につくる。

庭は、大きい家で三十坪位あってネギ干しやいろいろの農作物を干すのに使う。しかし普通の家では無理で、ある家ではみんなからけなるがられた。（ウラヤマしがる）こういう家はクワゼやマキもたくさん持っていた。（房丸）

家づくり　家を建てるにいい日は、大安、友引で、悪い日は仏滅、三りんぼうとされた。

地づきは、ジギョウといって近戸の人や組内の人がたのまれて行った。明治二十七年頃は村中で行ったという話を聞いた。二人用はタコづきといった。五～六人でやる時は一丈位の枠をつくり、真ん中で棒をもつ人はカシラ格の人で、一尺（三十～四十センチ）位掘って軽石を入れた。

リュウバシラは、高砂、日の丸がかいてある末広状の扇子形で、下にヘイソクが白麻でしばってある。これは地まつりの時使った。使用後は棟梁に贈るのがしきたりで、大工はリュウバシラの数でうでがわかるといった。



棟上式の時は、ワラでつくった五枚一組のグシ餅がつかわれた。これはカイコがあたるゾウリ・ワラジとみたてて縁起物だった。

屋根替は、竹のはりかえしが秋～春先頃に行なわれ、コマイ竹をまわす作業は家の者が手伝うが中内は越後から出かせぎに来たものだ。ワラ屋根は、屋根裏に麦ワラを保存しておいて五～六年に一度一週間位かけて替えた。この時の賃金は八十銭から一円もらえて、朝、昼、晩の食事がでた。カヤ屋根は二十五年位もった。グシにはかならずカヤを使用した。

壁は、普通の家はあらかべで仕上げとされたが、なかには細かく切ったネコ（ワラ）と砂を混ぜてなかぬりする家もあった。

家移りは、世主が神棚と仏壇をまず最初に移すとされていた。

（房丸）

間取り　入口は、トボクチといって、入ってすぐ東に馬屋があって一間位のマーセン棒がしてあった。

馬屋の上は九尺まっかく（六帖）あって、竹のスノコをわたし、その上にワラで編んだ厚いネコ（二人でやっと持てる重さ）を敷いて新婚さんの寝間としていた。ここから下はハシゴで上り下りしたものだ。

アガリハナは、トボクチを入って左手の板の間で、大きさは奥行九尺、間口二間程でよく火鉢等が置いてあった。

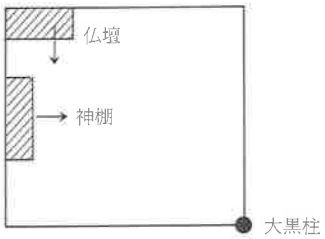
アガリハナの北側オクリに板床のオカッテがあった。

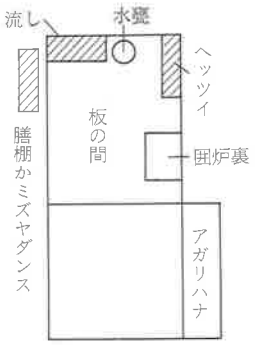
オコンマヤは馬屋の北側オクリにあって八帖位で、四方が壁で薄暗く日が当たらない。ここにはみそ、しょうゆ、つけ物等が置いてあった。

ナカザシキは、アガリハナの西側オクリにあって六帖～八帖位あった。

オクザシキまたはオモテザシキは、ナカザシキの奥にある八帖位の部屋で、おしゅうとさんやおしゅうとめさんの寝所だった。

オモテザシキの東手の部屋か茶の間で八帖位あって、東向きに神棚、





北西の隅に南向きで仏壇があった。また冬になると掘りごたつをしつらえた。

オカッテは、オコンマヤの西手で、次の間の入口にネズミイラズ（ミズヤダンス）か膳棚があった。

ナカザシキ、オクザシキはタタミだったがそれ以外の場所は、カバの木で編んだカバゴザかニュウキュウムシロ、ワラゴザを敷いた。これらは手づくりで農閑期に各々の家で編んだものだ。

入口の方は、オオドで、普段の出入りはクグリマドからだった。またオオドの内側の上部にニワトリを五～六羽位かっていたもので、どろぼう除けにもなった。

アガリハナとオクザシキの境はしょうじ戸で、ナカザシキからオクザシキの境はオビ戸の一枚板（杉材等）だった。

オモテザシキとオクザシキはふすま、オモテザシキから勝手の間は障子戸だった。

ウマヤの西側にフロオケがあって、よく借し出しをしたものだ。川の水を使ってわかしたので大変だった。フロをもらいに行く時コンバン提灯（字入り）をさげていったものだ。時に二月～三月の渇水期にはバケツで何人かくみ入れをして入った。順番待ちをしている間つけ物等出しあって世間話をしたものだった。

照明は、昭和十年に電気が通るまではランプで、タケボヤのそうじが大変だった。蔵の中へ行く際は提灯を使ったが、昔は提灯の火事が多かった。この他ヒャクメローソクを使う家等があった。また神棚には、山吹きの燈芯がついたトウガイ、仏壇には小型の行燈等をつかった。

ほうきの種類は、台所や軒下をはく草ボウキ、広い所や庭をはくタカボウキ、座敷をはくモロコシボウキその他庭先をはく竹ボウキ等があった。

暖房具は、機織りの時足の下におくネコアンカがあり、消し炭やタキオトシ（ごはんを炊いた後の残り火）を入れて燃料とした。

この他掘ゴタツはどの家にもあった。また家によっては銅壺付きの節火鉢等があった。（房丸）

間取りのこと　むかしのうちは、四間八間（よまはちけん）

オモテザシキ

コザ…トコノマザシキ、湯灌、トリムスビ

（ナンド

（ヘヤ…としよりがねおきするところ、産部屋。

チャノマ

ランプ　電気が入る前の主な明かりだった。大きい家では二つくらい使った。石油をもやすのでホヤの中がすすで黒くなり、子供が毎日ホヤみがきをしていた。（小屋原）

電気　大正十二年四月に入った。電気は一軒で二つくらい入れ、コードを長くして使った。球の大きさで料金がきまった。養蚕の時には、養蚕灯を借りた。盗電する人もいて、十燭を百燭につけかえさせる人もいた。（小屋原）

燃料　くわぜを赤城山の共有地から、松葉、篠を取ってきた。

ナラの木を荷車につんで帰る。帰りは重く下り坂なので、こわかった。四時おきして、途中で一回、朝ごはんを食べていった。モミガラは、餅米をふかしたり、うどんを作ったりする時には、よく使った。（小屋原）

井戸　一丈四～五尺が深い方なので、水には困らなかった。竹つるべでくみあげた。夏は水位が上がるので、ひしゃくでくめた。

井戸の中にコイを入れておく。エサはやらない。

暮にヘイソク、モチをしんぜ、正月に松飾りを立て、しめなわをはる。若水くみを戸主がやる。（小屋原）

周濠　極楽寺には二重の堀があった。持田家も元三重だったが、内堀を埋めて二重になった。ほとんどの家に環濠があった。（亀里）

むかしのあかり　むかしは、各家庭は、ふつうは、一灯しか電灯が許可されていなかった。

そのほかは、手ランプで補った。

電灯、ランプの前は、とうすみをつかっていた。（下長磯）

むかしの食事　昭和二十年代までは、おじいさん、おばあさんは、まだ箱膳をつかっていた。ほかの家族は、ちゃぶだいをつかって食事をしていた。

そのころ、うちは十二人家族、三夫婦そろっていた。そのころ、押麦を食べていた。朝三升釜で二升五合たいた。十二人が食べ弁当を五つつめると飯はなかった。

うちでは、お昼のとき、ご飯をたいた。ひるだきをしたわけである。ふつうのうちでは、ひるだきなどはしない。（駒形）

畳の入れかえ　かいこをはく前、四月のころすすとりをする。そのとき、掃除をして、畳をはいだ。

十月のころ、すすとりをして、畳を入れる。

このころから寒くなる。

晩秋蚕をすませてから、畳をしいた。

畳をあげたあとには、うすべりをしいた。

あついころは、板の間にしておいた。

板の間にむしろをしいて、かいこを飼った。

九月の晩秋蚕がすむまでは、あつどこ（畳）などはしいてはいられなかった。（笂井）

ウダツ　掘立小屋のことをウダツという。

核の下に土台を入れないでつけった小屋、木小屋のようなもの。（上増田）

かぎ竹　かぎ竹は、松、竹、梅でつくっているという。

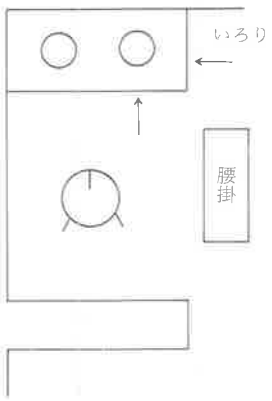
ふなは梅の木でつくる。心棒は松の木でつくれ。竿は竹でつくれ。（天川大島）

いろり　いろりはふつうはコの字型であった。いろりの真中には三徳をおいた。鉄瓶をかけた。

へっついはべつだった。

いろり（ゆるり）では、かぎ竹に鍋をかけて、おつゆをつくったり、お湯をわかしたりした。かぎ竹は二本あった場合もあった。

ゆるりの中に図のようにへっついをつくった。



おじやは鍋で煮た。三徳にかけて煮たり、コンロにかけて煮たりした。この辺では、鍋で飯を煮たはなしはない。飯は釜で炊いた。釜には、一升だき、三升だき、四升だきのものがあった。大きいのは五升だきであった。鍋の場合は、十人鍋、二十人鍋といういい方をした。ふつう使っていたのは、十人鍋であった。

いろりのまわりの座席はきまっていた。旦那さんは、東向きに坐っていた。むかしは、家族は東向きには坐らせなかった。うっかり旦那さんの席に坐ると「米を買え」といわれた。（上長磯）

お産はヘヤでした。仏様はオクリから出した。トリムスビは、オク

リでした。（上長磯）

ぐし　ぐしのことは、むね（棟）といっている。くず屋根の場合は、ぐしに花を咲かせた。カキツバタ、アヤメのようなものをのせた。（笂井）

ごしもち　たてまえのときには、おそなえは、十二かさねこしらえてしんぜた。これは、あとで、大工さん（棟梁）がもっていった。ごしもちは四角、うすいもちだった。むかしは、ごしもちは五枚ずつ、わらでしばった。ごしもちは、施主からみて、兄弟とか、子とか、近い関係の人がもってきた。

ごしもちは、ホケエに入れてもってきた。一つには三升分のもちが入った。近い人は一駄（二つ）もってきた。たいがい一つだけであった。

むかしは、たてまえのとき、ごしもちをふらすと子供がもらいにきた。ごしもちは焼いて食べるものではないといった。ただ、ふらしたもちでなければ焼いて食べてもよいといった。たてまえのときは、もちとおかねをふらした。（笂井）

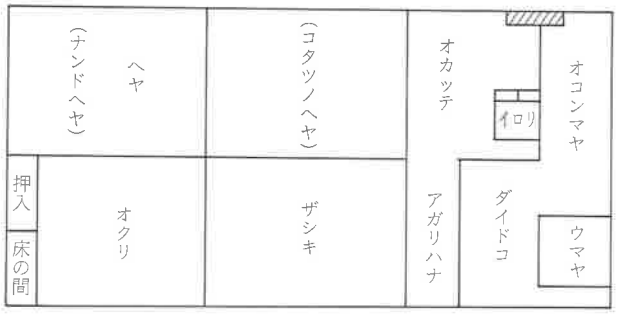
かいやし　夏のこと。むかしは、蚊がうちの中に入ってこないように、いぶした。山からくずをさらってきて、火鉢にくべていぶした。こうすると、うちの中の蚊がにげだした。なお、蚊がいなくなれば大晦日だといった。（上大島）

オコンマヤには米びつとか味噌などをおいた。

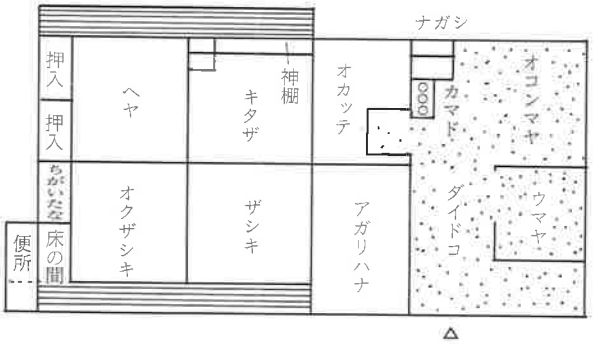
ウマヤは九尺×九尺

お産はヘヤでした。湯灌もヘヤでした。うぶゆもヘヤでした。むかしは、若夫婦の寝室はヘヤだった。

トリムスビはオクザシキでした。人がなくなったときの祭壇はオクザシキに設けた。おやかた夫婦の寝室はオクザシキ。



間取り（上長磯）



間取り（上佐鳥）

イロリは茂さんが小さいときに使ったのを覚えているが、あまりはっきりした記憶ではない。

カマドではご飯をたいた。馬を飼っていたので、カマドの口は三つあった。馬にも、ぞうすいをカマドであったためてくれた。

ヘヤには、神様をまつらなかった。

神棚はキタザにあった。仏壇もキタザにある。

床の間には、ふだんでも掛軸をかけておく。

お正月のときは、違い棚におそなえをあげる。

オモテザシキには、おそなえの大きいのをあげておく。

十日夜のときには、縁側にもち（おそなえ一をあげた。大きいおそなえ（かがみもち、かさねてないもの）をあげた。大判餅一枚くらいの大きさこものである。十日夜のことは、大根のとしとりといった。（上佐鳥）

ぐしもち　上棟式のときのなげ餅のことは、ぐしもちという。

ぐしもちは、この辺では、なるべくうすくのして、四角にきった。

ふつうは、一合ますのへったにあわせてきる。五合ますのへったにあわせてきる場合もある。

棟梁が棟にのぼっておがむときにおそなえをあげる。これは十二かさね。なげもちは、イヌイのすみから投げる。その次は、うしとらの方角、順にまいた。四方がためをしてから、あつまってきた人に投げる。（欅島）

上棟式の投げ餅　上棟式のときの投げ餅のことは、ゴシモチといった。これは、四角だった。七、八センチくらいの大きさだった。今は大きくなった。ゴシモチは、近親者がもってきてくれた。うちでもついた。

これを投げるのは、仕事師、近親者、うちのもの。

ゴシモチはやいて食べるものではないといった。やいて食べると、そのうちが火事になるといった。（上佐鳥）

新米のこと　新米のことは、ホガケという。これは、うちの中の神様にあげる。

なお、新粉のことは、ホガケとはいわない。

ソウヤは穀などを入れておくところ。

ナンドはほかの座敷より床がさがっていた。

ヘヤは子供を生むところ。

むかし、嫁にやるときにはあいくちを持たせてやった。嫁がとつぎ先にいてもたってもいられないようになったとき、自害するところがナンド、なんぞのときのへやという意味という。

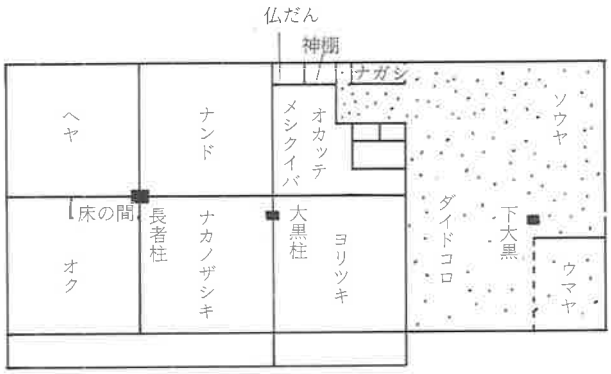
嫁に行くときには「そこんちの位牌になれ」といってやった。

ナンドには、ついた米とか粉（小麦粉）などを置いていたうちもあった。むかしはナンドといえば物置だった。

ヘヤはお産部屋だった。

人がなくなったときには、ほかの座敷でなくなっても、オクザシキにうつした。トリムスビも奥座敷でした。結婚式のときの一見ザシキもオクザシキをあてた。（欅島）

外湯のはなし　むかしは、夏になると、外湯をたてた。わいいしゅが夜あそびにきて、風呂桶を、そうがかりで、べつの場所へはこんでしまったこともあった。いたずらをしたのである。（女屋）



むかしの家の間取り（欅島）

第四章　生産・生業

一、農耕全般

(一)　農　業

田と畑　水田四十五町、畑四十町があった。土地改良でみんな良くなった。桑園が多かった。ナスや、キュウリは自家消費用、スイカをする人もあった。(上朝倉)

田で七割で畑が三割、タンボガタと言われた。ぬかった田もあり、「ドブッタ」と言われた。桑園を作り、蚕をかったが、その昔は大麦をまいた。野菜は自家用のみ。(宮地)

田が七割。田は良くできた。

砂田(スナタ)―乾いている田

一丁田―細長い田

ホッター―しけているところ。

寺のそばは地下水が高かった。畑は砂地で、ゴンボ、サツマイモには良かったが、野菜にはあまり良くない。(公田)

田が七割、畑が三割。米が良くとれる田で味も良かった。田も砂の多いところは悪く、粘土の多いところはホッタと言いだめであった。タジマという土を寄せたところはしけるので桑用にした。(力丸)

耕地　畑四の田が六。ヒエダという名の田あり。公民館の北がヤワタ、南がスグロ。(上長磯)

田と畑は五と五。

ヤナ田(湿田)、イヘェ田(位牌の形の田で、借いるとブクを着ると言われ、作っている人が厄に会う)ゲエロ田(カエルのいる田)。

シミズジリ(清水が出ていて水まわりが良い)。ダイモン田(昌観寺の大門があった)。(小島田)

田が三十町で畑が五十町歩。(下大島)

生業　米、麦、蚕が主なる生産手段だった。(亀里寺家)

田と畑　畑が四分で田が六分の割合だった。(鶴光路)

作物　米、麦、養蚕が主だった。大麦は主食にし小麦は売った。養蚕は現金収入の元だった。

小作が多く、収入は少なかった。(西善矢田)

五穀とは　五穀というのは、米、麦、大豆、アワ、ヒエのことである。一番大事な穀物は米である。(上佐鳥)

農業　米、麦(大麦、小麦)、養蚕が主で、ここは、四分六から三・七で田が多かった。(下朝倉)

農作業　手作業だから、大変だった。田植の時には東善からスートメに来てもらった。スートメの請け負いが駒形にいた。一人一日七畝で、一町なら十二～三人はつれてきた。広さによって値段を出し、精算した。

仕事は、エイで、水の上下、田植の時期のずれる家と組んだ。(小屋原)

連作のこと　連作のことを、ケエシという、つくりかえすことをいう。一ぺんつくったところに、同じ作物をつくることをケエシという。ナスとジャガイモは、絶対にケエシはだめである。トマト・スイカもだめである。ケエシでいいのはサツマイモの方がかえっていいという（笊井）

カエシ　連作のことをカエシという。ナスとジャガイモは、カエシはいけないといった。トウモロコシはカエシの方がいいといった。（下増田）

仕事　一日一反で農業のイッチョウマエといわれた。朝三畝は田植えできた。稲刈りも、今より収量が悪く、一反で二俵くらいきりとれないので、五畝も刈れた。（力丸）

土　火山灰土で、地味はよくない。三尺ほると浅間土が出てくる。西の方は桑畑にして、養蚕に使っていた。（新堀）

耕作土　この辺では地表から一五センチくらいまでの深さで、下はロームだった。信州の米作日本一の家は二一センチあった。（亀里）

浅間砂　砂を秋になると、田から抜いた。抜かないと米の出来がよくない。（亀里）

野中の耕地整理　野中では耕地整理をした。この辺は砂っ原で、風が吹くと新道（野中新道）に砂が山になった。（野中）

収入　現金収入が少なかったので、蚕や機おりの収入は貴重だった。蚕を買った金で魚を買った。（下長磯）

一日の仕事（夏場）

起床　四時
草刈り　七時まで
朝食　七時～七時半
農作業　八時～十二時
昼食　十二時～一時半
昼休み　三時頃まで
農作業　七時頃まで（暗くなるまで）
夕食　七時半～八時（亀里龍門）

一年間の農作業　一月十一日　鍬立て畑でさくをきり、松を立てる。おさごと餅をそなえる。

冬場　藁仕事をした。縄ない、俵編み、藁ぞうり、まぶし折りなどだった。

暖かい日には、麦踏み、除草、さくきりなどをした。

彼岸ころまで　麦の手入れ

五月はじめ　春蚕のはきたて。はきたて直後にどどめ（桑の実）の青いのをとって、蚕にくれる。麦刈り前には上がる。

六月二十日すぎ　麦刈り。大麦は庭で棒打ちで穂をとった。庭の真中に麦をひろげ、大勢で麦打ち唄を唄いながら、たたきながらまわる。小麦だけは、梯子の両端に樽を蓋をつけ、梯子の麦をはたいて穂をとった。

出稼ぎ　麦刈りの後、玉村へ田植えの仕事に村中で出稼ぎにいった。三時起きをして舟でいった。一日一反は植えていた。綱はり、苗取りの分をいれると、平均八畝になる。

朝、日がでてから沈むまで仕事をした。白いごはんが出て、待遇がよかった。たんぼの面積を少なめにいうので、余計に仕事をさせられた。

苗代つくり　麦があるので、水をいれるのに支障があって、岡苗代だった。その後、水苗代になって、田の水口につくった。

代かき　肥料に大豆かすをいれてやった。駅の前の中島という肥料屋で買って、運送に運んでもらった。

田植え　昔はエイ田植えで本家新宅が多かった。その後共同田植えなり、出稼ぎの人を雇うようになった。

おさなぶり　田植えが終わったあとのお祝い。苗を三株とっておいて、神棚に備えた。

桑園の手入れ田の草取り　三回やった。てぬぐいでほおかむりして、脚絆を付け、手に除草の爪をつけた。

七月十三～五日　お盆。最近八月に変わった。前橋は元々八月だった。前橋は製糸業者が多いので、八月のお盆だった。

七月末　初秋蚕

八月二十日頃　上蔟

農休み　初秋と晩秋の間にやった。うでまんじゅうを作った。地区で日を決定した。

八月末　晩秋蚕

初秋蚕との間がなくて忙しかった。

九月二十日　上蔟。よく彼岸とぶつかった。

昔は、片倉、井口、交水社、マルニなどへ持っていった。町の中に三つの組があって、組ごとにもっていった。今は共同飼育なのでまとめてもっていく。

繭は、正量取引で、樽の中にいれてもっていく。糸を引いてみて、質と糸目を見て、お金を払ってくれた。取引の約束ができているので、前貸しもしてくれた。現金で払い、二～三日で精算がある。

屑繭は屑繭商が集めにきて、現金で買っていった。検定ではずれたもの、最初からよごれているものは、屑繭になった。

十月　祭

十月末十一月　稲刈り

田おこし。堆肥をいれ、鋤をかけ、まんがで平らにした。おこさないで、まき、その後手入れするやり方もした。

堆肥は二～三回、天地返しをしてくさらせ、麦の芽の上においていく。昔は種を堆肥にまぜて蒔いた話を聞いている。

脱穀　かなごき、足踏み脱穀から動力、コンバインとかわってきた。

十一月中旬　麦まき

稲が生えているときに間にまくのは、むぐりまきで、稲を削るときには、すこし伸びている。（新堀）

農作業　春蚕

桑園の手入れ（一番どおり）

麦刈り　六月末

七夕　七月七日

田植　七月十日

小麦の脱穀、乾燥

桑園の手入れ（二番どおり）

お盆　七月十三～十五日

初秋　七月末～八月

農休み　八月末（二十九～三十・二十五～二十七日）

蚕準備

晩秋　（秋の彼岸までにあがる）

晩々

稲刈り

麦まき　十一月末（西善矢田）

農作業　春蚕

麦の取り入れ

田植

盆

草とり
夏蚕
秋蚕
農休み
晩秋
取り入れ

旧盆は九月一日〜三日で、農作業の区切りと、収入の状況でこの日になった。

支払いは盆暮の年二回だった。

盆は七月十三〜十五日で、今は八月十三〜十五日になっている。区長会、自治会長で決定する。

農休みは八月末、二十五日頃で、農協で決定する。（下朝倉）

一年間の農作業　麦ふみ
除草
苗代つくり（五月）
養蚕準備

はきたて（五月）これには家の差があって、力を入れる家、入れない家があった。現金収入の道として大切にした。

蚕をあげる
大麦、小麦の刈り取り（六月十日）
まゆ代金が入る（農協や製糸家から借りていた家は返す）
田植（七月）九寸角で植えて一坪四七株だったが、今は狭くなり、七十株植えている。

上の家から植えてくると、早い家は六月二十八日にできる。お盆が十三日なので七夕までにはすませるが、十四日の朝飯前までにはおわらせるといった。

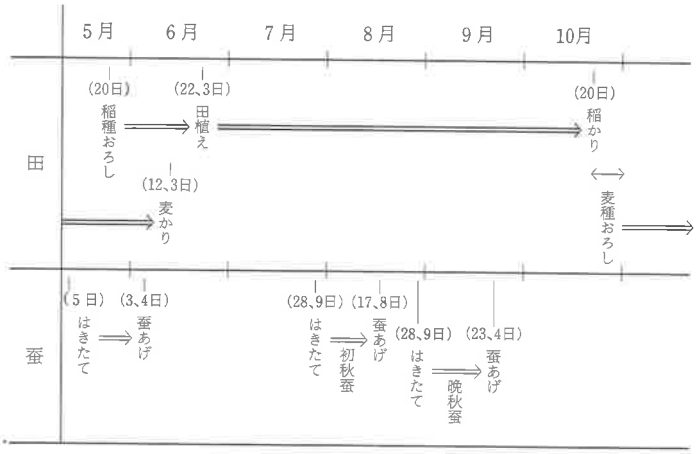
田の草とり　八反ころがしを使う。除草は二〜三回やり、金っ爪をはめ手甲に手ぬぐい二枚でほっかむりした。

桑園の手入れ
初秋蚕（七月下旬）
農休み
蚕があがる（八月いっぱい）
晩秋蚕の準備、八月二十七〜二十八日。遅いほど危険がない。
蚕があがる（九月いっぱい）
桑園の手入れ、旅行、秋祭、法事
稲刈り（十月末〜十一月）
麦の準備
麦まき（亀里阿内宿）

一年の農作業　麦の手入れ
春蚕（四月中〜五月始め）
麦刈り（六月）
代かき
田植
お盆（七月十三〜十五日）
田の草とり（三度くらい）
初秋蚕
農休み（八月二十三日頃、三日くらい）
晩秋蚕（十月始め）
晩々
桑園の手入れ
稲刈り
麦まき

麦ふみ
除草（亀里龍門）

一年間の農作業　わら仕事……俵、縄、むしろ、まぶし作り
麦の手入れ
桑園の手入れ
春蚕



一年の農作業

苗代つくり……ニワ休みの頃、苗代を作った。田の隅に低い苗間を作った。大正頃皆水苗代になった。五月二十日頃になる。
麦刈り
田植
農休み……七月十五日頃うでまんじゅうを作った。
お盆
初秋蚕
田の草とり（三回）
晩秋
秋まつり
稲刈り
麦まき（西善）

(二)　水　利

水利　端気川より水を引いた。田植えは昔は七月の七夕ころで、今は六月五日まで。櫛島用水が分かれていて、上流にあたる。クイを打って水をとめた。早くに水が使えるのであまり水の苦労はなかった。

春に川ざらいの「デズタリ人足」が一戸一人出た。ドロは川のそばの道にすてた。はじめはぬかったが、すぐに平らになった。（上朝倉）

広瀬川より、城東町の十六本で分け、上朝倉より端気川を通ってきた。今は宮川よりくる。櫛島用水もある。

昔は上川渕小のすぐ東に「四郷堀（シゴッボリ）」という堀があった。毎年堀はらいに出た。四郷の世話人があり、佐鳥の人がやっていた。四郷人足を頼んだ。

昔は水口冷えがなく、上の田より水が水口にくるので、かえってあたたかかった。水の苦労はあまりない。（宮地）

水は広瀬川の広桃両堰より、二子山の東の川を通り、協立病院のところから、栃島公田へと入った。

栃島用水管理組合があり、春一回堀さらいをする。

ドーギで番をしていてけんかをしたことがある。水を分けているので、水が来るように、南にもっていかれないようにと大変であった。（公田）

広瀬川・端気川・藤川。ドーギの十六本堰で分かれた。十六本堰水利組合で管理した。水はとりやすい。（力丸）

桃木川。長磯堰より水がくる。二十五町歩分。水利組合があり、当番で水の管理をする。

水争いは少ない。昔はあった。上より順に使うきまりであった。昔は水路が狭く素堀りであったので。（上長磯）

桃木川より水がくる。兵藤堰（ヒョウトウゼキ）よりひく。（小島田）

広瀬川の水。広桃両堰水利組合。水田がなく畑だが費用ははらっている。（下大島）

用水　八ツ穴用水があり、水利組合を作っていた。端気川の西で、公田を除く地区が入っており、亀里矢島も半分入っている。

春に年一回ごみをとった。出ないと出不足をとられた。

堰の修理が大変だった。（亀里阿内宿）

八ツ穴堰の組合は、年末の二十九日か三十日に集金にきた。（力丸）

力丸堰用水　宿阿内からひいて流れている。（亀里）

五郎右衛門用水　五郎右衛門という人は増田の人だという。うちの裏にくる用水が五郎右衛門用水という。この用水は、下増田地先で終っている。（下増田）

新田用水のこと（五郎右衛門堰）

新田用水（八坂用水）のことは、伊勢崎新堀ともいった。

笂井の人は、五郎右衛門堀（堰）のことは、増田川（堀）とよんでいる。

いちばん最初は、増田へひく用水であった。おもに上増田神社の東の田圃へひいた。三軒家の西にあった堀。

五郎右衛門という人が水を伊勢崎の方へもっていくので堰をつくった。それで、五郎右衛門堰とよんでいる。上増田の東組の北爪いつおさんのうちの先祖の人が五郎右衛門という人だという。

笂井の堰（桃木川の取水口）から三軒家までは、増田川といった。用水を増田へもっていく川である。その後に延長して伊勢崎へもっていったもの、それで、伊勢崎新堀ということになった。伊勢崎の方で、江戸時代にひろげた。

ここを拡げるについて、伊勢崎と笂井の間で争いになった。しかし、しまいに笂井の言い分を聞いて、条件付きでひろげることになった。新堀については、笂井の人たちはうんといばっていたという。

戦前に、新堀の役は（小屋）四郎さんのところでやっていた。伊勢崎（八坂）の水番の人（高橋某）が、かならず、四郎さんのところへ寄った。むかしは、なにかもってきたという。

八坂の水番の人は高橋某という人以外の人がなると、水をやらなかったという。この高橋さんという人は、しまいには財産をなくしてしまったという。

じくぼというのは、堀の関係で屋敷がしけて困るうちのこと、これに対しては、伊勢崎の方から補償金がきた。

この分配について、区とじくぼの人たちの間でもめたことがあったが、結局、大字で六分、じくぼで四分ということで和解したという。

昭和五、六年のころ、それまでためておいたかねを分けることでもめたもの。補償金は大字宛にきていたので、間にたつ人がいて、その

ように分配した。（横沢善作さんという人が調停した）。当時の金で一軒あたり、二円か三円になった。（笂井）

増田堀の水番のこと　増田堀の水番は、小屋四郎さんのところで長くやっていた。そのあと羽鳥彦九郎さんのところでつとめた。今は羽鳥元治さんのところ。（笂井）

堰普請　笂井では、まい年、貴船川の堰普請をしている。時期は六月の末。各戸でむしろ（こも）を一枚ずつだした。堰をつくりなおした。そのあと会食をした。宿をかりて、ぼたもちをつくった。各自が米三合ずつもちよせた。小豆や砂糖は買った。一合ぼたもちをつくった。それは男衆がつくった。

あるとき、このぼたもちを、七十三コ食った人がいた。そのあと弱って、ひでえめにあったという。（笂井）

水の苦労　水が来なくて田植に苦労した。阿内宿の定方医院の裏まで水上げにいった。今は土地改良で水がすぐ来るので四日ほどですむ。（下阿内）

㈢　水田耕作と稲作儀礼

水田耕作と稲作儀礼　陸苗代で作った。

スキオコシ（馬）→肥料をまく→水を入れる→アラクレ（マンガでかく）→シロカキ。

田植えは共同でやった。東宮地共同組合の二十五～三十軒でした。世話役がいた。苗とりの役、シロカキの役を決めておいた。まかないは自分でした。

昼すぎのコジョハンは共同で買った。

田植え唄があった。（大麦の麦打ち唄もあった）

田植え勘定があり、面積と人数により会議で計算をした。

刈り入れは自分の家でした。平ら干しにした。

脱穀は、昭和はじめまでカナゴキがあった。稲穂をひんまいて（まるめて）、先をひろげてこいた。のち足踏みの脱穀機になった。手まわしのものもあった。

ニワアガリにはオハギとフカシマンジュウを作った。

麦がおわるとアナップサゲと言い、おいわいをした。（宮地）

田植えはおそかった。

力丸堰があり、当番が毎日行った。

室田に冷えた水のモミを買いに行ったことがある。

元は陸苗代で（大正ころ）、戦後水苗代になった。

村には五つの組があって田植えをした。戦後も少しあった。組合でクジを引いて決めた。

一人七畝づもりとか八畝づもりとかあり、一日に一人何畝やるか決めた。アルキズモリ（出来高次第）で点々とやっていたら七畝づもりでせまかったり、大マチで広い田では九畝から一反も植えた。

オサナブリは飲むだけ。（力丸）

種モミはカンに入れた。種は注文した。麦は自家のもの。

水がないので陸苗代が多かった。

公田に頭が一人いて指示をした。いく日に何と決めて「人足まわし」をした。

オサナブリはその終った仕度で来て、稲をとってきて神棚にかざった。

稲刈りは自分の家でした。脱穀機はカナコギから足踏みのものにかわった。

「ブッパタキ」という、竹を半分に切って先を少しまるめたものでイネをたたいた家もある。

こいだものは馬で石を引っぱらせて穂をとった。
馬のハンドリは大変で、マンガ押しで、「つけのひけの」と使われることが多い。それで父とケンカして田にフンゴまれたことがある。
（公田）

種モミは、二重の俵に入れ、すずしい屋根裏などにいれた。
苗代は地力のあるところにした。年々かえるのは苗代の下は地力がなくなるため。水苗代は川の端の畑のある人で、陸苗代は普通の田に麦を作らず作った。直まきはなかった。
田植えの時は助け合いで、仕事の出入りを帳面につけていた。「西組」は二十軒で、人手間を計算していた。馬は村で六・七匹しかなく交代で休ませた。食事は自家で食べた。
オサナブリはまわり持ちで一杯のんだ。
草は三回とった。一回は田打ち車で十文字に通り、二回は手にツメをつけてとった。ブリキのツメはとれやすかった。
稲刈りと麦まきは自分でした。
地干し。
初期は足踏み。金ごきは古い人。
モミすりがおわると、ニワアガリで、ボタモチやネジッコ（アン付）を作った。（上朝倉）
種モミは人の見えるところにつるしておいた。
スキおこしをして、代かきをし、水をはって、三尺巾のサクを作り、水十cmの上にタネをふった。
静かに足を入れないと種をふったところがわからなくなるので水苗は苦労した。昭和三十年ころまで続いた。
のち陸苗になった。箱苗になって十年はたつ。
田植えは六月二十五、六日から七月七日までで、十月二十五日ころに稲刈りをした。十一月はじめには麦まきをした。
田植えは五～六軒でエイを組む。本家・新宅などで。
おわるとオサナブリでモチをついた。
水口の苗をとってきて、箕の上に置き、神棚にあげた。
麦まきがおわるとアナップサギと言い、オハギを作った。お客に行けた。
蚕がおわると上蔟の祝いをした。
蚕は年間三～四回で、春夏（初秋）・晩秋である。（上長磯）
種モミは蔵の中にいれた。ない人は俵にいれた。
水苗代は河川改修のあった昭和三十年ころまでで、のち陸苗代になり、のち箱苗代になった。
田植えはもよりの家々で組合を作ってやっていた。エイガエシと言い、お互いに労力をかえした。馬がないと馬のかわりに人を出した。
田植えがおわるとオサナブリ・ナエシロイワイをした。
農休み（フレ農休み、フレ正月とも言う）には赤飯とウドン・ウデマンジュウを作った。ナス、インゲンも出た。
最後の水口の苗を七株とり（五本とり七株にする）ミにのせ、マンガにのせ、酒その他をおそなえした。
アナップサギにはボタモチを作った。（小島田）
タネモミは家のカマスに入れ、ハリにさげておいた。
苗代は陸苗代と水苗代が半分半分であった。
田植えは組を作ってした。おわるとオサナブリをした。
苗をとってきて、箕の上に七五三にわけてのせ、酒・赤飯をおいた。
麦まきの後、アナップサギでボタモチを作った。嫁は里にかえした。
（下大島）

(四) 地主と小作

小作が多かった。村内に地主があり、数十町歩を持っていた。

一反あたり三俵が小作料。一反あまり六俵くらいしかとれなかった。（公田）

小作が多かった。地作農創設の金をかりて土地を買った。田は一～八等級まであった。

田は一反二十五円で畑は十円であった。（力丸）

番頭　一年契約で仕事をしてもらう。二月一日の次郎のついたちか、二月三日の節分を区切りにして、出かわりといって年季奉公した。

着物の仕着せをやり、お金をやった。一月十五、十六の薮入り、七月十五、十六の盆は休みだった。（亀里龍門）

機織り　はたは一日三丈織ればいいといった。なかには、一日に一匹（二反）織る人もいた。

これを日機（ひばた）といった。日機を織るには、朝の五、六時ごろ起きて、十二時ごろまで織らないと織れなかった。くだまきはおばあさんがしてくれた。

あるとき、妹と二人で、日機を織る人がいるというからためしてみべえというのでやってみた。二人とも織れたが、わたしの方がすこしおそかった。わたしが、十九か二十才くらいのときのことである。

下大島のうちには娘が三人も四人もいた。

このうちは機織りで身上をのこした。（笂井）

(五) 副　業

織おり。伊勢崎の賃ばたおり。三日で一匹を織って五十銭。駄織りは安く、文様は高かった。（上長磯）

蚕。三～四回。

昔は春・夏・秋・晩々秋。今は春二回。（一回は春ののこり）晩秋。

自作農は少なかった。（小島田）

副業はあまりなかった。（下大島）

冬場にはたおりをした。

一匹おると五十円もらえた。早いと一日半でおれた。三人娘がいると土地を買ってもその金はすぐにかえせた。（下増田）

夜なべ仕事　秋から冬の仕事で、縄ない、俵あみ、つくろい、機おりなどをした。（亀里龍門）

むかしは、秋の彼岸をすぎると、よつうつくりとか、なわないをした。正月前はなわない仕事が多かった。俵あみ、まぶしおりなどは、正月すぎの仕事。

なわないは、一晩に五ぼう（わらひとつくじり）なうのがふつうだった。足にながらんではかった。ひとひろ。二十ひろで一ぼうとした。

なわないは、一晩に五ぼうなうのがきまりであった。わかいしゅのとき、それをすませないと、夜遊びに行げなかった。

なわないも、早くなると、一時間かからないで、そのくらいはなえた。雨が降ったときも、なわないをした。雨っぷり仕事として、どこかのうちへ五、六人寄って、世間話をしながらなわないをした。わかいしゅ同士は世間話が中心だった。（駒形）

わらたたきつちとなわない　かしの木でつくった。自家製である。

このつちをつかって、臼の底をつかってわらをたたいた。

秋の農作業が終ってから、春うちくらいは、わかいしゅがあつまってなわないをした。宿のうちに、近所のわかいしゅが五人も六人も寄って、なわをなった。みんなして、じょうだんをいいながらなわないをした。

一晩に五房くらいなった。一房は二十ひろ。
個人では、一年に五十房くらいはつかった。余計になってあまったときは、そのなわを売った。
わかいしゅは、宿のうちへ早目にきて、風呂に入ったりしていた。
なわは足にからんでいくひろか数えた。二十五房を一束として売った。
堀之下に、なわ買いの人がいて、まわって買いにきた。
なわは、いろいろのものにつかった。くねゆいにつかったり、赤城へもしきとりにもっていったりした。
わかいしゅは、自分でなったなわを売って、自分のこづかいにした。
こぜなわは細いなわのこと。こぜなわは、四十ひろで一房とした。これは、俵あみのときに使った。
大正の末のころに、機械なわになった。これは、太なわも、こぜなわも双方。（東上野）

(六) その他

畑作と儀礼　ジャガイモ・ナス・キュウリを作り、組合に出した。関東製酪のそばにあった。野菜は少ない。卵を出したことがある。乳牛の家は昭和三十年ころから。（上長磯）
養蚕がさかんであった。野菜は自家用くらい。（小島田）
麦とオカボ。今はナシとモモになった。今は水田もナシになってきている。（下大島）
草刈り　朝草刈りには、朝飯前に行った。草のあるかぎり草刈りをした。
夏はかいこがあって行けなかった。
四月までと、かいこが終って十月になって、枯れ草を刈った。
草刈りかごを背負って行って刈ってきた。あぜの草を刈った。
草刈りには、起きてすぐに行った。朝草刈りは、朝飯の日当だといった。
若いころはよく夜遊びに行った。それでも、朝草刈りには行った。
わしが、あるとき、一ぺんだけ夜遊びに行って翌朝、ねぶっているところを親におこされた。草刈りに行って、かごをおろして、ばらっかぶつのかげで寝た。ばらっかぶつのでっかいのがあって、かげになっていた。そこへ寝た。
顔があったかくなって目がさめた。そのとき、お天道様は西へ傾いていた。
一日寝ていたわけだ。（朝倉）
むかしは、朝飯前の仕事として、朝草刈りをした。せえかごに一つ刈るのが業、子供も刈りに行った。土手の草を刈った。（笈井）
荒子（実家）でおんなしゅが朝草刈りをしたのは一軒だけだった。それを見込まれて、ここのうちへ嫁にきた。
朝草刈りをするときには、前の日のうちに草をみておいた。つぐ朝、三時起きして、ももひきをもって出て、かいどに出てそこではいてから行って刈った。
刈った草は、草刈りかごに山もりにして背負ってきた。（下長磯）
牧草　牛は踏んだ草と黄変した草は食べない。
家蓄にやる草は、家から七百m～一キロまでの所の草刈り場から刈ってきた。どこの家でも刈りにいくので、草刈り場をさがすのが大変だった。
隣村へ行くのは、敵地に行くようなものだった。（亀里）
こやし切り　こやし切りは夜の仕事で、竿の先に提灯をつけてやった。切ったこやしをほぐして、つみざまに入れた。（下長磯）

けえば（飼い葉）切りは子供の仕事であった。稲のわらを押切りで短く切った。そのあと、けえば切りの機械ができた。

けえばとふすまをまぜてくれた。うまやの前には、けえば桶がつるしてあった。その中にけえばなどを入れて、馬にくれた。（笂）

手伝い　麦刈りから田植で、お金で人を頼んだ。新潟から来てもらった。昭和二十五年で、一日二百円くらいだった。

大工棟りょう五百円、大工二〜三百円、小僧で百円の時代。

（亀里阿内宿）

不況対策　不況のとき、日ぜにの入ることを組合員で考えた。そのころ、うちのおやじさんが農事組合長だった。

沖でかますをつくって、いい副業になっているということを聞いて、うちのじいさんが大沢利平さんの指導をうけて、かますをこしらえて出荷したことがあった。

大正の末のころのはなしである。（東上野）

霜道　上沖から上長磯へは、霜がおりる所で上原あたりは寒く地獄たんぼとも、飲んだ酒がさめるから五合たんぼともいった。（下長磯）

雹害　いつだかわからないが、雹がふったことがあった。

そのとき、皇太后様がおいでになったので、笂井橋を渡ってみに行った。

そのときは、小麦がだめになった。大麦は多くつくっていなかった。

この辺でひょう害のひどかったのは三月四日のことであった。何年のことだかわからない。（編者㊟『群馬県気象災害史』によると、木瀬村方面で三月四日のひょう害というのは、昭和十二年のこととある）

ひょうの道、しもの道というのがあるという。（笂井）

松葉刈り　むかしは、二、三月ごろになると、赤城山へ松葉刈りに行った。朝の二時か三時ごろ出かけて行った。

夜なべ仕事がなくなると、松葉刈りにでかけた。赤城山の金丸と白草に共有林があった。そこまで馬をひいて行った。六束で一駄といった。弁当をもって行った。むこうへつくと、夜があけた。

松葉のことは、松ごくといった。これはたきつけになった。一年中のたきつけをとってきた。あかるいうちに帰ってきた。

山仕事の関係で、お十二様というおまつりがあった。どういうのか内容はわからない。（下大島）

しって　田のいちばん南のこと。みなくちしってというのは、しりみなくちの近くのこと。苗間のみなくちのところには、ごみよけとて、かゆかき棒をさした。（上大島）

マンガ　春使うものと、秋使うものとでは、刀の長さが違い、秋の方が三寸くらい長い。（亀里龍門）

農休み　農休みのときには、里へはちょっとお客に行ってくるくらいだった。

里へお客に行くのはたのしみだった。（駒形）

秋あげのはなし　秋になると、早く仕事を終らせて、里へお客に行くのがたのしみだった。それだから、秋になると、体の動きがちがった。

秋あげのもちとか、ぼたもちを早くつくってもらいたかった。

秋あげがまちどおしかった。

秋あげのぼたもちをつくって、重箱に入れてもって行った。

このときは、姑さんから、

「あきるほど泊ってきてもいい」

といわれたが、二晩くらい泊れるのはいいほうだった。

お正月と秋あげのときには実家に泊ってきた。

秋あげのときの、実家からのおかえしはやっぱりぼたもち。

里へ持って行くのも、里からおかえしでもらってくるのも、ぼたもちが押されて一つになるほど、重箱にぎっちりつめてあった。（駒形）

あきあげのときは、嫁はぼたもちをもって里へお客に行った。

ぼたもちを一重箱もって行った。

一つでも余計に入れてやった。山に入れてやった。ふたをあけてみたら、ぼたもちが一つになっていたというはなしもある。

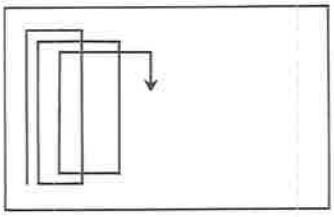
おかえしもぼたもち。（上大島）

だんどり七分　「だんどり七分」ということわざがあるように、田植のときには、クロヌリは大事な仕事であった。（小屋原）

二、水　田

田おこし　こやしを馬のびくにつけてゆき、西側からいっぺんにおとした。すきをかけ、まんがをかけ、ふりまんがをかけ、まねで筋をひいた。（西善矢田）

代掻き　ぐるぐるまわりながら、だんだん横に移動していく。（亀里）



つなはり　田植えの時のさいはいで、早乙女のならび方から早さ、田植唄で気分をまぎらわすことなど、進行全体をうけもった。（下長磯）

田植え　朝四時に始まって、夕方七時までの十四時間の労働だった。（下阿内）

苗取りをした苗を苗散しが、分散しておく夕方になると田植唄をうたった。七夕までには田植えを終えた。（亀里）

辰の日には田植えをしない。竜頭ののりになる。辰の日はお寺の田植えをする。（鶴光路）

田植の時、時々つかれた頃を見て、明治生まれの人が田植唄をうたっていた。

一人七畝を植えると一人前、実際は五畝くらいだった。一～三年かけて一人前になるので、一年目は七分くらいの手間賃だった。右手で植えて、左手で苗を分け、植える準備をしていた。

長年の経験が大きく、年長者には、かなわなかった。（亀里阿内宿）

共同田植（横手）

一月十五日は田植のわけ。この日の朝、あずきがゆをつくってあげる。神の鉢にいれて正月棚にあげた。あずきがゆは、熱くてもふいて（息をかけて）食べると、田植のときに風が吹くといった。「ふいて食べちゃぁだめだ」といわれた。

なお、十五日のあずきげえを入れた神の鉢を洗って、その洗い水を

うちのまわりにまいた。こうすると、うちの中へ、ヘビが入らないといった。（笂井）

むかしは、田植をするときには、つなを張って植えた。ところが、親方が自分の持ち場のところを植えきると、そのつなをとってしまう。そんなことをされて、困ったことがあった。（下長磯）

むかし、一番遅い田植は、七月十五日ごろだった。

半夏田植をしたときには、三年続けてやれといった。むかし、はんげという人がいて、おおく稼ぐ人で、クロをまくらにして、半夏の日に死んだという。

オサナブリには、最後に植えた田の水口の苗をとってきて、七本箕にならべる。いい実がなるようにということであるという。表座敷に箕をおいて、ご馳走をしんぜた。

このときは、うどんをつくった。こばちに入れてしんぜた。苗はあとでうちゃった。（笂井）

田植の時は、干しにしんを買ってきて、みそで煮て出した。長持ちするように煮た。（西善矢田）

田植をはじめるときには、そこのうちの主人が、田の水口のところに三株（あるいは五株）植えてから植えはじめた。（朝倉）

のうぢから　明日田植だという今夜、米の飯とか赤飯を食べた。おかずに、こぶ・いか・さつまあげなど、五色ぐらいのおかずをつくった。おわんにおかずをもりつけて食べた。これをのうぢからといった。（朝倉）

田植の前の日に、ノウヂカラといって、餅をついて食べた。（女屋）

田植の仕事（作業）の分担　タロウジ…馬や牛で田の代かきをしているとき、それと一緒に手鍬で田をならす役、これは男衆の役目。

クロヌリもタロウジの仕事

スウトメ…苗を植える役、若い娘さん嫁さんが中心。

ツナハリ…年とった人がやった。

ハンドリ…子供の役目。「七つなきなきはんどり」ということばがある。

マンガオシ…男衆の役目。

ナエトリ…男も女もした。

田植唄…これは、上手で、唄の好きな人がやった。（上大島）

エエ仕事　田植のエエ仕事は、二、三軒でした。このときは、おたがいに、おかねのやりとりはない。いくたり出てもよかった。手間でやりとりした。

ムギまきのエエ仕事もしたが、これはすくなかった。

ムギ打ち（ムギボウチといった）もエエ仕事だった。むかしは、ムギボウチができないと、嫁に行けないといわれた。（上長磯）

オサナブリ　田植えの終った時の祝いで、うどんを作った。（亀里）

田の水口の苗を三本抜いてきて、箕にのせお神酒をしんぜる。マンガなどの農具の上にのせる家もある。（鶴光路）

田植が終ると、オサナブリをした。

水口のところから、植えた苗を三株とってきた。これを箕に、ふえるようにと、わけてならべた。

ご馳走は、酒とぼたもちなど。田植が終るのがうれしかったが、「米の飯とはなれるのがつらい」ともいった。（上大島）

田植が終ったときには、一番しまいに植えた田の苗をいく株かとってよく洗ってうちへもってくる。

苗を三株か五株、お膳の上にのせて床の間にしんぜた。ご馳走は赤飯、これも、同じお膳にあげてしんぜた。これを、おさなぶりという。

うちだけの行事で、手伝ってくれた人をとくに呼ぶことはしない。

なお、ながしのおかまさまにも、苗を三株か五株あげた。苗は、あとで川へながした。（朝倉）

むかし、共同田植のとき、田植が終るとおさなぶりという行事をした。その晩、餅をついて、餅食いをした。一番餅を食った者がいばったという。（上大島）

タノクロアズキ　田植が終ってから、田のクロにアズキをまいた。タノクロアズキといった。（小屋原）

クロ　タノクロという。

田の土手のことは、オオナといった。

クロヌリは、田の東と西南をする。水をもたせるためである。

田のクロのまわりがりの場合には、土手の下の人が刈る。へつらは刈るが、土手全体は刈らない。（小屋原）

苗代祝い　苗間の水口にかゆかき棒を立てる。このかゆかき棒は、ニワトコの木で作り小正月に飾ったもの。（亀里）

田の草とり　七月十三日～お盆までの間は、田ころがし（中耕と除草）。田の草とりをした。

草とりは、指に金属の管を入れて、爪にしてとった。（亀里）

八月上旬になると三番草の除草をした。手甲、顔にあみの面、手に爪をつけて作業した。（西善矢田）

金網の目がねをかけ、手に爪をつけ、手甲をつけてやった。

ひげのこい人は、ひげをそらないで草とりをした。

粟ふるいのふるいをかぶったこともある。（鶴光路）

草取台は、使う所と使わない所がある。（亀里）

新米の米の検査官　駒形の人が米の検査官になりたてのころ、下増田の須永へ米の検査に行って、米を不合格にした。

そしたら、須永の人たちが新橋のところに待ち伏せしていて、その検査官を川へほうりこんだ。それで、その検査官の人は、検査官をやめてしまったという。（駒形）

新米のこと　新米のことは、ホガケといった。新米を炊いたときは、神様にお供えした。（上大島）

刈りあげの祝い　稲刈りが終ると、かっきりぼたもちといって、ぼたもちをつくって祝った。（上大島）

一人前の農家　むかしは、馬が持てないようではしょうがないといわれた。

しかし、ふつうの百姓では、なかなか馬をもつことはできなかった。

馬持ちになれば一人前の百姓といった。馬がないと、気の毒な百姓だった。馬のないうちでは、馬をかりて、おかえしに、人が働きに行った。ええげえしに人がきた。

むかし、馬の初のりということを聞いたが、いつだったかわからない。（下増田）

三、畑　作

小麦ほし　小麦は庭に干しておいた。

天候が悪くなると、お盆に里にお客に行っていても、とりこみにかえってきた。（駒形）

棒打ち　大麦や豆をたたいた。（下長磯）

脱穀　穂だけとったものを、庭にならべて、石のローラーを馬でひかせて、庭の中をまわす。（下長磯）

麦を庭に広げ、ローラーを馬でころがしてひく。（小屋原）

女屋の梨　女屋ではむかしから梨をつくっていた。そのころの梨は、しっこぶなしだった。

お寺の裏で、女屋保男さんのおじいさんが小屋をつくって、売っていた。宮次さんという人だった。（女屋）

かこい梨　むかしは、かこい梨だった。

六尺という大きな桶があった。その中に入れて、上蔵にしまっておいた。

かこい梨は、だれかが風邪をひいたときとか、親戚の者がお客にきたというときなどに、しまっておいた梨をだした。

何軒かのうちは、かこい梨をしていた。（下大島）

大島梨　関口とせひこという人がいた。梨でもうかってしょうがねえといっていた。

夏かねが入っておおふに使う。

梨の棚をゆうのに使う竹を、銀行でかねを借りて買ったという。

梨は米の十倍の値段で売れたという。

梨づくりは、下大島からはじめて、上大島、天川大島へとひろがった。梨は蚕よりよかった。（駒形）

四、養　蚕

下川淵地区の蚕種　明治初年までは自家用の蚕種は村内でも自給したが、それだけでは需要を満たしえなかったので、前橋の弁天通りにあった種屋に買いに行った。信州産のものが多かった。明治末期から村内に種屋ができてからは村内産のものを多く使うようになった。越後から種を売りに来たこともあった。

村内の蚕種屋のうち最も古く、そして長く営業したといわれる寺家の定方渡平（とへい）氏は、明治三十八年〈あるいは同四十一年〉の創業であるから、本村の蚕種業はこのころからはじまったわけである。その後、逐次業者が殖えて盛時には、公田には石原忠三郎・石原康重・町田新三郎・石原藤造・町田彦三郎がおり、横手には中林重太郎・中林金四郎、矢島には大島稲三郎、竜門には小泉忠造・島田竹太郎・井野幸一・三輪覚治、新堀には田村竹治郎・久保田勇七、下阿内には深町隆寿、力丸には樋口春吉・峯岸由太郎・高木新八、徳丸には井野倭平、計二十軒の蚕種屋さんがあったわけである。

定方左右太も一徳にやっていた。定方渡平氏と同じ頃の創業者には、石原忠三郎氏・深町隆寿氏・石原元次郎氏（公田）があり、明治四十三年の共進会の頃には同業者九名だった。定方氏は共進会に「角又」を出品して賞状をもらった。この頃、組合をつくり川淵産という判をおした紙に種を掃いた。定方氏は小諸の柳沢太六氏の所の風穴へ入れたが、大洞〈赤城〉の天然氷を切り出す所の脇に置いたのがうまくゆかなかった為である。大正六年までは秋蚕の風穴種屋だった、下川淵全体がそうだった。大正六年以後は春蚕・秋蚕となり秋蚕の普及に努力した。秋蚕のはじめは上陽の人だが、夏秋蚕の元祖は下川淵の蚕種家であった。定方氏は元養蚕技師であり、村内の指導にもあたった。

養蚕　蚕日庸は、あっせんする人がいて、きまった人がきた。あっせんする人はケイアンといって、桑のあっせんもした。

寺家の人、新堀の田村さん、島田さんが種屋をしていて、前の年に注文をとりにきた。

一年で百貫蚕をすれば大きいほうだ。よほどやっても八十貫くらいだった。

半分くらいナダレではずれてしまう。共済が大変だった。

鶴光路は田場（たば）なので、桑園が少なく、大きく蚕をした人は少ない。（鶴光路）

米に次ぐ収入になった。

迦葉山でお面を借りて、倍返しをする。一本杉正平稲荷に八十八夜の祭日に行き、キツネを借りてきて、倍返しをする。初市で、「養蚕繁昌、家内安全」と書いたものを買ってきた。

春日神社の祭で売っている羽をはきたてに使う。（亀里阿内宿）

養蚕が盛んで、農家の収入の七割くらいを占めていた。

まゆ一貫と麦一俵の値段が同じだった。米や麦よりも収入になった。

飼育場も下川渕で最大だった。三千グラムから四千グラムをはいた。

養蚕をする農家は四十～五十軒くらいあった。多い人は年四回はいて、春と秋が同じくらいで、夏は少なく半分くらいだった。百貫蚕は、この町では一段的だった。一回で百貫蚕をする家も七～八軒あった。

十グラムの種から十貫セドリするが、十二～十三貫とる人もいた。

種屋も二軒あった。種屋の田村さんは、多い時で二十人くらい人を雇っていた。子どもがちょっと近づけない家だった。

草競馬の馬を飼っていて、練習していた。草競馬場は鶴光路にあった。（新堀）

高山社へ講習によく行った。（力丸）

床にも目張りをして床下におちないようにしたが、落ちたマユは羽化して、川に行って卵を生んだ。（亀里）

むかしは、かいこは年に四回はきたてた。春蚕・夏蚕（初秋蚕）、晩秋蚕、晩々秋蚕（駒形）

子供のころは、表屋敷に棚をたてて、蚕をかった。その次には、条桑育になった。

かいこあげのときは大さわぎだった。

うちによっては掘立小屋をたててかいこをかった。小さいうちの場合に掘立小屋をたてた。わらの屋根であった。

ふつうは、かいこは二階へあげた。下から火を燃した。乾燥によかった。二階に窓をあけると、風とおしがよくなった。

昭和十七年、総二階のうちが七千円かかった。（駒形）

春蚕で二百貫かった家があった。代金で百円札を見せてもらったことがある。

仕事をする人は、ケイアンが集めてくれた。蚕ビョウという。

できた繭は、玉糸買い、ノシ買いで買いに来た。（朝倉）

四十四戸で年間四千グラム計画して掃き立てた。実際三千五百グラムくらい。

最も多い家で、まゆを百十貫出した。初秋と晩秋で百貫くらい。計二百～二百十貫して、一番多かった。百貫かいこは多い方だし、一つの目標だった。（亀里龍門）

母屋の屋根にやぐらをあげてから、かいこがよくとれるようになった。それまではとれなかった。

惣社の明神様へおまいりに行くと、かいこがあたるといった。

神無月は旧十月、旧十一月一日がおかみむかえの日。この日、明神様へおまいりに行くと、かいこがあたるといった。

なお、神無月には、おかまさまは出雲へ行かずに留守居をしている。それで、留守のあいだに、なにかご馳走して食べる晩があった。おかまのるすんぎょうといった。（上増田）

高山社へ行っていた人に聞いてつくった。

母屋の前を切って、障子二枚いれた。

むかしは、春蚕・初秋蚕・晩秋蚕の三回かいこをした。そのうちに、かいこを飼うのがいいということになって、晩々まで飼うようになった。

昭和元年に、駒形で太々神楽をはじめた。そのころから晩々秋蚕を飼うようになった。晩々は、晩秋蚕の残り桑を利用した。

むかしは、米より蚕の収入の方が多かった。七割くらいは養蚕収入であった。

むかしは、一年に一人で米を三俵くらい食った。だから、あんまり米を売ることはできなかった。麦はほとんどうちで食うくらいしかつくらなかった。食べた残りを売った。（駒形）

春蚕は田植勘定で終ってしまう。

夏蚕は暑いのでそれほどの生産にならない。農休み分。晩秋は家の収入になる。

晩々秋は、伊香保、川原湯、四万へ湯治に行ったり、着物を買ったりする金になった。

晩秋が上手な家は身代を大きくした。

ビションマイ、タママイは嫁の収入になった。つむぎやめいせんになり、高いものはくつ下になった。（朝倉）

蚕種は、塩原蚕種と新堀の田村から仕入れた。（朝倉）

島村蚕種から種を買った家があった。新地島村といって、なかなかうるさかった。（下阿内）

やままゆ　ナラ、クヌギ、クリの木についているカイコで、ズングリムックリの蚕だった。頭も径も同じで長さが半分だった。（鶴光路）

鑑別師　蚕が蛾にならないうちに、オス、メスを見分ける人がいた。（力丸）

桑のつみはじめ　桑をつみはじめるときは、その年の明の方からしろといわれた。たとえ一葉もつめといった。（下長磯）

桑切り　朝から夕まで桑切りをしていると、手の指がひらかなくなる。（亀里）

ずになる　蚕が熟蚕になり、小さく透ることを言う。こうなると、マブシに入れる。（亀里）

ビションマイ　黒くなり、中がくさって水が出てきたマユのこと。ホルマリンで消毒しておさまった。清涼育でおさえようとした。ホルマリンは、せきや涙が出て大変だった。一回まいては外に出て息をした。（下阿内）

キョウソ　ウジといって厳しい検査があった。さなぎをとる方は、一匹いたら全滅なので大変だった。（亀里）

蚕の病気で、ナダレをおこすという。玉まゆを各戸から五つずつ出して発生率を調べた。（下阿内）

かいこの休み　しじやすみ

たけやすみ

ふなやすみ　このとき餅をついて祝う。

にわやすみ

かいこは、むかし、竹やぶに捨てられ、船ですてられ助かって、庭に埋められて、（桑を食って）まゆになったという。

しじやすみの意味はわからない。

かいこには、馬のかなぐつのあとが体についているという。（笂井）

かいこは、次の順序で休んだ。

しじ

たけ

ふな…このときふなもちをついてくばった。

にわ（下長磯）

オコモチ　蚕が三眠の時ついた。五月十五日頃だった。（亀里）

オコマゲモチ　蚕が上蔟した時についた。（亀里）

紙のマス　さんざ紙で作った。折りたたみできるようになっていた。（鶴光路）

お蚕日庸　一週間から半月くらい、泊りこみで蚕の仕事をしても

らった。富士見や赤城村の人で、山の方は蚕が遅いので、こちらで仕事をして、帰って蚕をした。農協があっせんしてくれた。（亀里阿内宿）

養蚕祈願　芝の稲含神社掃き立て前に、お札を受けてはっておく。一本杉正平稲荷五月二日（八十八夜）に参詣した。

迦葉山　掃き立て前におまいりした。

小正月の飾り　マユ玉を作り、ミズナラの枝につける。柳の木を削って作バナを作って飾る。飾り菓子を下げた。（亀里龍門）

五、諸職その他

副業　日雇いでお金をかせぐくらい。河川の砂利仕事、石とり仕事があった。（下朝倉）

ワラ仕事　十二月～三月末までの仕事で、俵、ちょっぱしら、まぶし作りなどをやった。（西善矢田）

機おり　日機（ひばた）をおるといい、一日でおりあげる人がいた。女の人は、皆やっていて、伊勢崎銘仙をおっていた。（亀里寺家）

賃ばたを女の人の仕事でやった。伊勢崎の茂呂、豊受から仲買いが来た。一反で三～三円五十銭の収入になった。機おりができないと嫁に行けなかった。

「後閑、朝倉、女の夜ばた（夜なべ）

男、後生楽、寝てまつる」

といわれた。（朝倉）

伊勢崎から銘仙を頼まれておった。（亀里阿内宿）

腕のいい人は、一日一反織れた。（亀里阿内宿）

家畜　にわとりは、余り物で育て、卵をとり、売ってしまう。うさぎは、皮を買う人が来て、肉を置いていった。（西善矢田）

くずさらい　赤城の山へ馬でもしきをとりに行った。松ごくといい松ばかりだった。（下朝倉）

虚空蔵大根　虚空蔵さんのある所は、土がよくて、大根とごぼうを作れば、かなうものはなかった。土がサラサラして、ねばり気がない。県道を境に、東側は粘土質で土がよくない。（鶴光路）

水車　下朝倉に高橋車と西光寺車の二か所で個人持。上朝倉には藤井車があった。料金は米や粉で置いてきた。米一俵で二升くらいだった。金で払ったこともある。（下朝倉）

魚取りの道具など　ハッキリ網……鳥のカスミ網のように網にひっかける（下阿内）

火ぼり……ヒーボリといった。

ギュギュウ……魚の名前。形はナマズを小さくしたもので食べるとうまい。

さされると痛い。（力丸）

ボックミド……ドに重りをつけ、ロープをつけておく。朝引き上げる。

バカド……二重になって長いもの。（鶴光路）

端気川　魚がたくさんいて、蚕のザルでもたくさんとれた。エビ、メダカ・タナゴがずいぶんいた。（力丸）

堀の水かえ　二～三年に一ぺん、屋敷のまわりの堀の水かえをして、とった魚を村の人で分けた。

春にやり、鯉、うなぎ、どじょうなどがとれた。丸一日かかった。

ハスのはえている所もあったが、戦後、アメリカザリガニが入って、絶えてしまった。（鶴光路）

待ちあみ　夕立が来たあとのにごり水を綱を入れるだけで魚がたく

さんとれた。とった魚は焼いてまきワラにさしておき、冬に食べた。うなぎは魚屋に売った。（鶴光路）

害虫　ブヨ……顔に寄ってくるので、目をあけていられない。麦ワラ帽子をかぶっていると、少し顔が暗くなるのでよってこなかった。ハエやアブも大変だった。（鶴光路）

馬捨場　笂井の馬捨場は、墓場の南にあった。死んだ馬をそこに埋めたという。その土地や、ムラの土地だった。（笂井）

うまや　うまやは、台所にあった。ふつうに九尺、二間の大きさだった。うまやの前には、おそうでんさまという馬の神様がまつってあった。馬をとりかえると、おそうでんまつりというのをした。

葬式のときには、馬をなかせるなといった。馬がなかないように、馬にはうんとえさをやっておけといった。

葬式のときの棺桶のひよけきれ（布）は馬もちの人がもらった。これをたてごにむすびつけた。そうすると、ダイドよけになるといった。（笂井）

馬を借りる　田植えの時、一週間から十日くらい借りた。馬労があっせんした。貸すことはあまりなかった。（亀里阿内宿）

酒蔵　真下博さんの家の裏の畑になっているところ（女屋喜八郎さんのうちの桑原だった）に井戸があって、そこに酒蔵があったという。信州から、さかえもん（さかやもん＝杜氏）がきた。

（酒の入っている）大樽をかんまわした。（女屋）

仕立て屋の生活

大島恒次さん

○仕立て屋になったきっかけ

私の元々の出身地は伊勢崎市西町で、明治四十三年十月十七日に生まれました。父親は代々続いた足袋屋の商いをしておりました。私は四人兄弟の三人目でした。尋常小学校四年生の時、事故が原因で病いを患ってしまったのです。それまでは皆勤賞をもらう程学校を休んだことはありませんでしたが、一年近く休学を余儀されてしまいました。病いの経過が契機となって、卒業後十四歳の頃から、父親について縫製の手伝いを始めました。最初はミシンの技術を収得し、直線縫いから押し縫いへとおぼえていきました。昭和になってからはズボン、モモヒキ等も手懸けるようになりました。父親は手を取っては教えてくれず、その仕事ぶりを盗んでは修業したものです。また兄は、学校を出てから足袋屋に勤めたことがあって、父、兄、私の三人でパンツ等の簡単な製品をつくって商いにはげみました。

よく父親から兄の作ったものと比較され、ダメを言われては、この次は上手につくるぞと自分をはげましたものです。父親は仕事の上で小言を言うことはあっても、はたかれたことは一度もありませんでした。技術第一の人で、兄もまた、そういう心情の人だったと思います。

○仕立てのやり方と工夫

寸法の取り方は、一、長さ—腰骨からくるぶし踝までと腰骨から膝（ひざ）までとの二段階の取り方をする。二、腰回り、三、尻回り、四、股下の順番で計る。寸法だけは慎重に取れとよく父親に注意されたものでした。しかし昔の客は仁義があって、今の人のようにうるさい注文をつける人はおらず、今とは雲泥の差を感じます。

厚地の布地は長ければ長い程下布がくい込む率が高く、下布を気持ひっぱるときれいに縫い並う。一番むずかしいのは薄手の絹物だったが、戦中の化繊もすべりやすく縫いにくかった。ミシンは、朝八時頃食事を終わらせてすぐ手入れをするのが常でした。まず油をさしてから余り布で試し縫いをしてから使い始めるのです。天気の按配で雨の日等は、糸が切れやすく、商売するのがいやだなあと思うこともありました。

股引の寸法は、普通の着物の場合半反が二丈四尺ですから、一丈四尺五・五mで一枚出来る勘定でしょうか。

○お仕着せについて

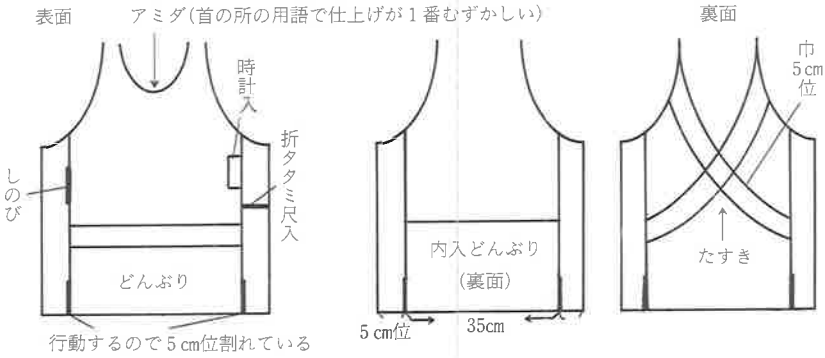
「紺腹掛」

使用生地は綿製で、表地は紺反物、大たい二百二十匁～二百匁使います。二百二十匁は上等品、二百匁は中等品になりましょうか。裏地は薄青色反物、二百匁～百八十匁位使います。私の知っている限りでの時代的特徴は、江戸時代―どんぶり、明治時代―時計入、昭和時代―しのび入、平成時代―折タタミ尺入（メジャー入）等の移り変わりがみられます。この他内入どんぶり等まだ色々工夫があります。

この腹掛は主に職人用にあみだされたものですが、祭典用にも使います。

「紺股引」

使用生地は腹掛同様紺反物で、紺地の小幅の布地を使います。これも使うのは二百二十～二百匁位でしょうか。裏地は、



空色か白生地で、昨今の天竺地のようなものです。二百匁使います。夏は白生地の半股引もつくりました。寸法はひざ位までの長さです。これも江戸時代から昭和時代まで、職人や農家の男子用作業着として使われました。しかし昭和五十年頃から使われなくなり、現在はもっぱら祭典用のみの使用となりました。

股引の上代（売り値）は、昭和五～六年頃で七十～八十銭位でした。当時の土方の日当は六十五～七十銭で、地下足袋一足分位だったでしょう。ズボン一式の値段が一円二十～三十銭でした。

「ズボン」

大正末期～昭和初期にかけて大衆的となり、実用化されました。特に戦時中は防空的見地からも使用が頻繁になったのです。戦後は腰に紐の付いた軍人用ズボンが大量に放出され、昭和二十五～二十六年頃までそれが続いたでしょうか。その後私の知る限りで、埼玉県行田市あたりで作業ズボンの既製品が出回り、全国に販売するようになったようです。こうした中で、戦前乗馬用に使われた「乗馬ズボン」が戦後は大衆的な、特には農家作業用に使われたりした時代もありました。昨今はまれに老人が便利にしているようです。

私も戦後昭和二十八年頃、上野の闇市で米袋を買い、ズボンに仕立てて売ったことがあります。仕入れ値は一枚三十～三十五銭、染め代二十銭で製品は一円四十銭で売りました。売れに売れて生産が間に合わない程でした。特にアメリカ製の米袋は、自分でひざあてとしりあてをつけて売り評判が良かったことを思い出します。

「半天」

生地は縫込なしで九寸五分×二＝一尺八寸で、縫込巾は各二cm位、呉は八十cm程でしょう。身丈は着る人により増減があります。襟は名入りの場合、字数によって襟の長さの三分の二位にとどめるときれい

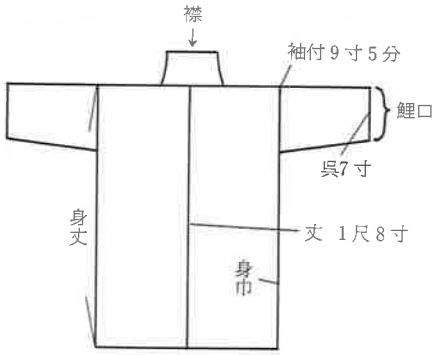
に仕上ります。また太っている人は脇身頃で調節します。

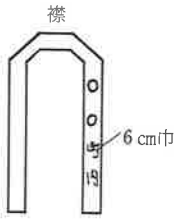
「祭り用の股引」

通称「ハンダコ」といって半股引に作ります。生地は綾生地の白で、平織りのものを使います。寸法は男女共用で、長さ二尺六寸（一m～一m五十）、巾九十cm、紐は十五cm～二十cmの長さで全体で二m四十は使います。紐は左が短く、右を長くして右結びします。ヒキマワシは直線的に縫い、前の部分より約三cm短くします。

「シャツ」

シャツは戦前、恐らく大正、昭和の初め頃は襟のないシャツが普及したのでしょう。値段は昭和の初め頃は七十銭位だったかと記憶します。その後戦事中に開襟シャツが軍隊用に開発され、戦後それが放出品として大量に出回り、一般の人々も着るようになったということでしょう。昭和二十四～二十五年頃はずいぶん開襟シャツが流行りました。値段は、昭和の始め頃で七十銭程だったと思います。この頃の話しですが、農家から仕立て依頼がくると、半分は現金で支払ってもらいあとの半分は農作物の収獲物でもらう事もありました。





○服装の移り変わりとものの値段

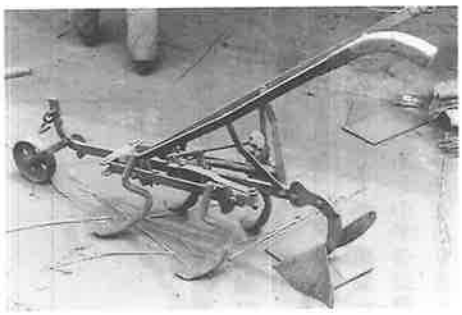
大正六年当時私が小学校へ上る頃は人々の服装は全員着物でした。大正八年頃は十歳以上の男の子はモモシマタ、女の子は木綿のキャラコ製のズロースをはいていました。メリヤス製が出回ったのは昭和五～六年頃でしょうか。しかし、一般的に下着を着けるようになったのは昭和三十年頃ではないのでしょうか。従い男性はブリーフへ、女性はズロースからパンツへと移っていったわけです。思い出す限りでのものの値段は、昭和十五年二十九歳の時、太田の中島飛行機に就業徴用された私の日給が一円四十五銭で、作業内容によって十割～十五割もらうこともありました。綾足袋（紺地）の男物は、二十銭～十八銭位だったと思います。

下って昭和三十年前後、立ち襟の婦人物の作業服が七十銭（現在の七百円～千円位）、かすりのモンペが九十銭（現二千円）、ズボンが九十銭～一円位だったでしょうか。

○標準服

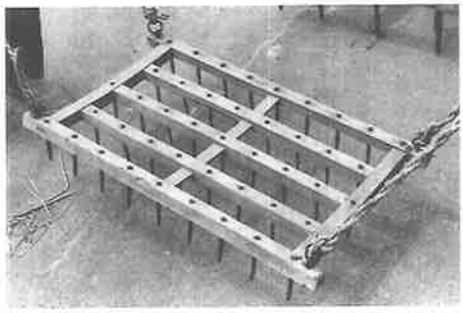
作業標準服は、昭和八年頃より防空的見地高揚の意識から戦時中を通して作られました。主には着物を改造して、上衣と紐付きのモンペとする婦人物が知られていることでしょう。時代は下りますが、昭和三十八～四十年頃同じようなつくりで、下が腰巻状の上下別作りのものが農家の婦人達のよそいぎに流行ったことがあります。足元は合板製の下駄だったことが多いと思います。

一人用フリマンガ（下阿内）



サクオコシ（下阿内）

ズリマンガ（下阿内）



フリマンガ（下阿内）

ナエかご（下阿内）

ナエ取り台（下阿内）

田の草とりのツメ（下阿内）

シロカキ（下阿内）

エンガ（下阿内）

田の草とり（コロガシ）（下阿内）

ボウウチ棒（下阿内）

土入れ（下阿内）

ツミザマ（下阿内）

ローラー（下阿内）

カイコダナ（下阿内）

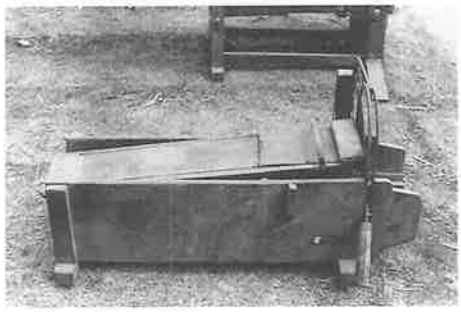
万　石（下阿内）

キカイマブシ（下阿内）

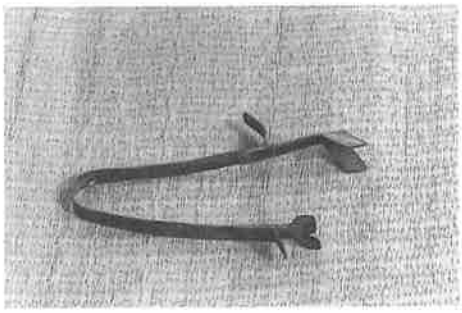
タメくれのジョウロ（下阿内）

桑つみ（下阿内）

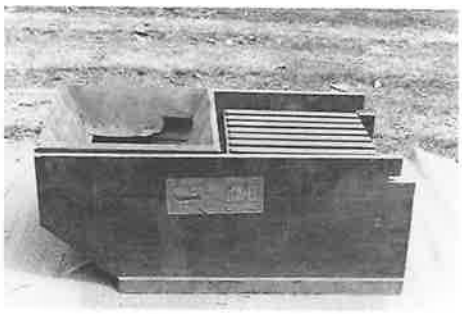
マブシ折り器（下阿内）



桑切り（下阿内）



桑こき（下阿内）



電照選繭器（下阿内）

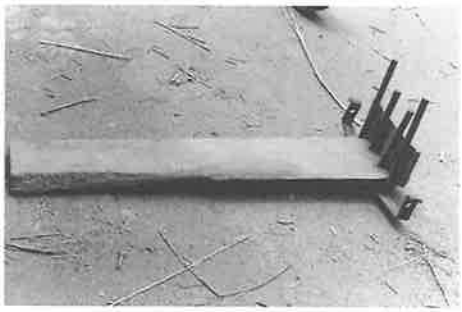
木ばち（下阿内）

カイバキリ（下阿内）

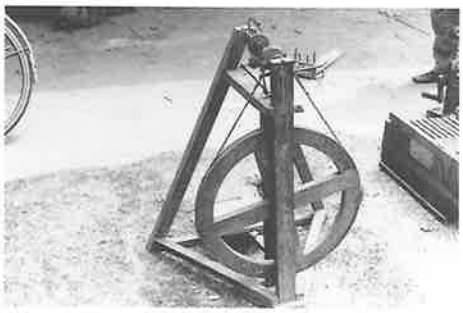
牛のくら（下阿内）

綿の種とり（下阿内）

カイバオケ（下阿内）



ワラジゾウリあみ（下阿内）



糸繰り（下阿内）

カサとキゴザ（下阿内）

ワラスグリ（下阿内）

俵編み（下阿内）

第五章　交　通　交　易

一、交　通

(一)　鉄道と街道

駒形駅のはなし　駒形駅は、田圃の中につくられている。本当は、駒形の町を通過するわけだった。ところが、両毛線ができる前に、汽車は火をふくから火事になりやすいことと、汽車がけぶをはいて、それが桑にかかって、蚕がはずれるからというので、駒形の人が反対した。

駒形駅（小屋原）

それで、今のところ（当時は）田圃の真中につくったのだという。（野中）

両毛線は、はじめの計画では、駒形を通るわけだったが、石炭のけむりに害があるというので、駒形の人が反対して、小屋原に駅がつくられたという。明治十九年のこと。（小屋原）

東前橋駅　東前橋駅をつくるというとき、下大島では、損にも、得にもならないから賛成すべえということにしたという。（下大島）

両毛線　線路をひくのに、駒形の人が反対して、北に移った。小屋原は土地も田も切られ、行き来しにくくなった。

線路を作るため、土をとったので線路の隣に沼ができ、昭和二十四年の耕地整理までのこっていた。

火の粉が心配で、寺小屋をつぶした家、火の粉で火事になった家がある。（小屋原）

東街道　むかし、東街道を、源義経が通ったという。（小島田）

東道の裏街道　前橋と伊勢崎の境に、東道の裏街道といわれる道がある。この道は、新田郡の方まで続いている。（駒形）

下川渕村道路之標（鶴光路）

鎌倉街道　極楽寺からの鎌倉街道は、八幡原の寺につづいている。（亀里）

上海道　カミカイドウ、シャンハイドウなどとよばれ、天川二子から上朝倉に通る道で、川沿いに通っていた。（朝倉）

往還　南北に通る道を玉村往還といい、学校へ通じる道なので、学校道路といった。上陽の学校に通う道

だった。今団地があるところに上陽の小学校と中学校が立っていた。（西善矢田）

信濃街道　善光寺から信州の善光寺までときいている。横手から横手の渡しを通って高崎へ通じているという。（鶴光路）

道しるべ（鶴光路）

あずまおうかん　むかし、あずまおうかんは山だった。清水の原を通って、天川大島の供養塔のところへ出て、天川の下へでた。（下長磯）

国道五十号線　五十号線は、はじめ、小島田まで開通していた。その後、東へのびて行った。（笂井）

けえっと　むかし、桃木川、笂井地先では石垣が積んでなかった。水が浅くって、川をこえていった。それを、けえっとといった。

橋のない時期のはなし。

桃木川の東岸には、小屋まさのぶさんのところが川棚になっていた。西側は、石垣が積んでなかった。そのあいだを渡った。川をこえることを、けえっとといった。

これは、笂井大橋のできる前のはなしで、知っている人で、けえっとの経験のある人はいない。（笂井）

(二)　橋・坂・渡し

むかしの橋　下長磯分に観音様や浅間様がまつられていた。

桃木川の西のところである。

桃木川にかかっていた観音様も、こんにゃく橋も木の橋だった。

観音様は運送が通った。

こんにゃく橋に、下長磯の車んちでかけた橋である。水車を利用する人のための橋であった。

むかし、ここから、東上野の子供がおちて、女屋武雄さんちの南のあたりまで流れて行った。それを、武雄さんの弟の政雄さんが助けて、ほうびに硯箱をもらったというはなしがある。（人命救助により）

国道五十号線がつくられたのは、わたしが十九歳のときで、昭和四年のこと。この道は、トロッコで土をはこんでつくった。（女屋）

橋　端気川には、木造の橋が二本あったきりで、ひとつは、倉林さんの屋号で「高橋」とよんだものと、水車があったので、車橋とよんだものだった。水車は西光寺の側にあった。（下朝倉）

中鳥河原の軍艦島に太鼓橋がかけられた。（横手）

笂井大橋と笂井橋のこと　（二つとも桃木川に架けられている。笂井橋の方は藤岡県道にあり、大橋の方は市道の橋である）

大橋の方が先にできた。こちらは、むかしからあった橋。

笂井橋は、昭和のはじめごろ、県道ができてからつくった。

笂井橋ができる前は、大橋を渡って、運送車をひいて、川の東の煙草屋さんのところを東へ行って、八日市の西の道をのぼった。東街道に出て、小島田へ出た。（笂井）

コンニャク橋　木造でゆれたので、この名前がついた。大水で流れたあと、女屋の舞台の木をひっぱって直した。

流れた時、日下部橋にひっかかり、堤が切れたという。（下長磯）

下長磯の水車の南、下長磯から女屋へぬけるところ、桃木川にかかっていた橋。（下長磯）

清内　広瀬川にかかっている橋は清内橋。清くながれるようにとつけた名前という。（駒形）

巡礼橋のはなし　むかし、巡礼がやってきた。うんとかねをもっていた。

あるうちの人が、その巡礼からかねをとって殺して清水川へ流したという。その場所にかかっている橋を巡礼橋という。

そのうちは、その後、三代も四代も屋敷の人がかわっている。

そこにいた人は大胡にうつってしまった。今は全く関係のない人がその屋敷に住んでいる。（下長磯）

力丸橋　元は蛇窪橋といった。地名が蛇窪といい、大きい蛇がいて、のたくった跡がついたほどだったからという。（力丸）

忠兵衛橋　善光寺用水に最初に架けられた橋。（亀里）

福島橋　大正十五年に完成した。工事に出たい人が多くて、くじびきだった。新堀は全員働けた。（亀里）

観音橋　むかしは、東街道が、桃木川を渡るところに架けられていた。観音橋といっていた。

国道五十号線に架けられている観音橋のことは、「新観」とよんでいた。新しい観音橋という意味である。（女屋）

牛橋　牛橋は運送がとおった。

牛橋については、次のようないいつたえがある。

むかし、牛をひいてきた人がいた。ここまでくると、その牛が立っていないで伏せてしまった。

それで、この橋のことを、牛伏せ橋といい、それがのちに牛橋になったのだという。（女屋）

寺沢川にかかっている橋。

むかし橋がなくって、牛をならべておいて、その上を人が渡ったので、牛橋と名付けたという。（女屋）

道玄橋　女屋の山街道、寺沢川に道玄橋がかかっている。この橋は、赤堀の道元という人がつくってくれた橋だという。（女屋）

これも、寺沢川にかかっている橋。

むかし、赤堀道玄という人が金を出してつくったというので、この名がついたという。（女屋）

巡礼橋　むかし、巡礼が下長磯へきて神社の西の家に泊ったという。そのとき巡礼が通ったんで、巡礼橋と名づけたという。（下長磯）

せんぞく橋　むかしの東街道にかかっていた橋。むかしは木の橋だった。むかし、二之宮の赤城神社のおまつりのとき、わらじを一日に千足も売ったというので、この名があるという。（上増田）

念仏橋　東片貝へ行く方の用水堀に、念仏橋という橋がかかっていた。その近くにイノミの木があった。（野中）

竹橋　竹橋は駒形の四丁目、韮川にかかっている橋。

むかしは、竹を五、六本束にして渡った橋なので、竹橋とよんでいた。今は、松と竹でつくってあるので、松竹橋とよんでいる。（駒形）

はんねん橋　むかし、清水川にかかっていた橋の名。

木の板っぺらを敷いていた。半年だけかかっていて、あと水に流されてしまうので、この名があった。

木工団地になっているところにあった。今は、永久橋になった。（上大島）

涙橋　今の供養塔の西方にある橋。

天大橋のことを、涙橋といっている。むかし、天川大島に藩の首切り場があった。罪人がひかれてきて、橋のところまで来ると涙をながしたという。

それで、この橋のことを、涙橋とよんでいるのだという。（天川大島）

新堀の舟橋　玉村の板井と新堀をむすんでいた。博覧会を前橋でやった時に、岩倉具視が渡ったという。緋もうせんをしいて渡したと

いう。

くいを持って板をのせてある橋だったので、雨が降って水が出ると、板をはずして流されないようにした。（亀里寺家）

旦那坂　朝倉の村はずれにある。むかし、ここに追いはぎがでたという。（朝倉）

後閑には旦那坂というところがあった。むかし、ここにおいはぎがでたという。

そこを通ると、おいはぎが、「だんな、だんな」といってでたという。（女屋）

もとの天川町のところにある。土手になっていて、梅の木が生えていた。

むかし、そこへおいはぎがでて、通る人に、「だんな、だんな」とよびかけたという。（天川大島）

旦那坂は朝倉にある。むかし、ここを通る人を、オトウカがでて化かしたという。後閑山にはオトウカがすんでいたという。（下大島）

公田の渡　利根川の対岸、萩原へ渡る渡しがあり昭和大橋ができるまで使われていた。

川幅は一町四十間、水深三丈、浅いところでも六尺あったといわれ、激流のため竿が使えず、両岸から綱を張り、これを手操ってわたしたという。

一時舟橋となったが、大水でまた渡しになった。（公田）

横手のわたし　横手と対岸の宿横手を結んでいた。元は公営で後に民営になった。（横手）

渡し　新堀の渡しは古いもので、大正一五年に福島橋開通で廃止になるまで使われていた。舟橋で使われていた。

横手の渡しは、横手と対岸の宿横手をむすんでいた。

公田の渡しは、上は石原の酒屋の所からおりた所で、萩原で当番をしていた。

下は不動の所から下ったところにあった。大水であぶなくなり下に移った。

自転車で通る人は、かついで下におりた。舟の上で立てておくとゆれてあぶないので、ねかせておいた。自転車は別にお金をとられた。

県営になってただになった。

上の渡しは、萩原の渡しといっていた。（亀里）

㈢　その他

おまいり　朝倉から明神様へ行くのに、途中神明宮により、くいつめ横丁から舟で渡った。（朝倉）

船渡の松　むかし、この辺を利根川が流れていたという。

あるとき、大水が出て、利根川にむこう（今のところ）を流れるようになった。それで、島が残ったという。

それが、上大島・下大島・天川大島である。

この辺は石っかわら。上大島の人は、あげどもといわれた。石が多いところなので、足をあげてあるくからという。（上大島）

道しるべ　安養院の参道に道しるべがあった。平たい石で二方向を示している。（笂井）

福島渡舟場と書かれた道しるべが立っていた。（西善矢田）

追分　増田堀が分れているところを、追分という。大塚田へ行く堀を、下増田へ行く堀とに分れている。（上増田）

一里塚　駒形の一里塚というところには、江戸から二十三番目の一里塚があったという。（駒形）

二、運　搬

端気川　舟が通った話は聞いている。町の人が運送に使ったので、途中ではつんだりしたことはなかった。（下朝倉）

横に舟ひきの道があった。（力丸）

馬車　赤馬車と青馬車が走っていた。赤馬車は早くやめた。青馬車は田町から新堀から玉村まで行った。

青馬車は宮地の自転車屋が権利を買い後東武に移った。代金は一五銭くらいか。ラッパを吹いて通った。経営者は両方とも古沢さんだった。店で旗を出しておくと、荷物を持っていってくれた。

（朝倉）

船改鑑札（新堀）

税金は九銭（新堀）

新堀と前橋の間を一日二往復した。一回一五銭の費用がかかった。

（亀里）

新堀と鶴光路に馬車があった。旧道を馬車道といった。昭和の初めまで通っていた。

前代田のスカヤができ競って走らすようになった。

赤馬車と青馬車があって、青馬車は後までつづいた。（鶴光路）

石船　石船が利根川をのぼりながら石をひろい、いっぱいになると下った。（下阿内）

立て場　運送の休み場所で、馬を休ませた。（朝倉）

三、交　易

八日市　むかし、東街道があって、そこに市がたった。それが八日市であるという。そのころ、八日市の下に利根川が流れていた。八日市のところは、土手であったという。（笂井）

盆市　盆の前に、盆市が駒形にたった。

ここで、盆花、ござ、ろうそく、線香など盆に必要なものを買ってきた。おもに年寄の人が買いに行った。（下大島）

行商人　茂平あめやがきた。箱を肩に背負ってきた。どこから来たかわからない。

七色とうがらし売りもきた。派手な着物を着てきた。自転車に乗って、箱をうしろにつけてきた。

キャンディー屋も自転車で来た。

焼きまんじゅう屋もきた。串に二コずつさして売った。

なんでも屋もきた。百円だった。なんでももってきて売った。

（下増田）

富山の薬売り、越後の毒消し売りが来た。小屋原の古久屋、駒形の井川屋に泊って、まわった。

富山の薬売りは、おみやげに紙ふうせんをくれた。（小屋原）

魚屋……干しにしんなど、干物が多かった。

とうふ屋……とうふ、油揚を売りにきた。
薬屋……薬を売った。富山の薬売りで、ダイショウ（暦）を置いていった。
魚屋
パン屋……「玄米パンのホヤホヤ」といいながら売った。県道を車にパンをつみ鈴をならしながら夕方通った。
アメ売り……ぶっかけあめ、そらまめ、小さい車にのせて、鈴をならしながらひいてきた。
とうふ屋……月に三日きり食べなかったので、三日月といった。
とうふを買うと、高いのでその分で、とうふ一つ分の田地が買えるといった。
つけ木屋（鶴光路）
富山の薬売りは、袋や箱に薬を入れておいておく。使った分だけお金を払った。（下長磯）
魚屋は、横手のショウサンが、月に一度商売にきた。塩のよくきかせてあるサケの塩引きが多かった。
干物が多い。売りに来ても、イワシを半分買うような生活だった。
勘定は年二回だった。（新堀）
むかし、よかよかあめやがきた。
たらいのようなものを、頭にあげて、旅をさしてきた。その旗がほしくって子供たちはあめを買った。
「よかよかあめやだれがなる。仕事のきらいなやつがなる」
と歌をうたってきた。（上大島）
榎店のこと　木賃宿をしていた。今の小暮美好さん方。榎の大木があったが、終戦の前に切った。
昭和十三年まで営業していた。

家はがぎのてになっていた。道なりに建物がたっていた。つるべの井戸もあった。
ここへは、旅の商人がおもにとまった。
栃木のかんぴょう屋さん富山の薬屋さん越後の毒消屋さんなどが泊ったという。
越後の方からきて、ここへおちついた人もあったという。ここのおじいさんは親切な人で、一人前にしてやった人もあった。今駒形で商売をやっている人のなかに、越後からきて住みついた人もいる。
なお、小暮家がまわりに何軒かあるが、この中が二つに分れているとかいう。小暮美好家は古い家という。（駒形）
勘定　盆と暮の年二回の支払い。支払いを蚕のあとにするので、盆がずれていったということもある。（朝倉）
買い物　呉服、茶わん、干物などは旧市街へ行って買ってきた。
行商人で、呉服、干物、いかけ屋、富山の薬売り、毒消し売り、目立て屋などがいた。（亀里阿内宿）
通帳（かよいちょう）　各店ごとに作ってあり、買い物の時に持ってゆき、代金を記入してもらい、暮、盆に支払った。（小屋原）
膏薬　西原に膏薬屋があり、戦前まで秘伝の薬を作って売っていた。
アカギレに効く薬で、貝の中に入れて売っていた。ひびわれに薬をつけ、焼けヒバシで埋めこんだ。（小屋原）
油屋　本床や伊勢崎の稲荷町にナタネ油をしぼってくれる家があって、ナタネを持っていった。（新堀）
ナタネ油　駒形のマルモ（岡崎さん）でしぼってもらった。
（西善矢田）
油　ナタネを作り、実をしぼってもらい油にしてもらった。（小屋原）

第六章　信　　仰

一、家の神仏と信仰

(一)　屋　内　神

オショウデンさま　百姓の神様といい、アガリハナの所にまつられている。(房丸)

おそうぜんさま　馬の神様で、馬屋の所におたなを作って、おまつりしてある。(鶴光路)

お釜様　神さまが出雲に集まる時でも、出かけないで、家を守ってくれる。

それで、お釜のるすんぎょうで、ボタモチをあげる。(鶴光路)

木のはち、神だなを神さまあつかいし、台所に三本のへいそくを立てた。(鶴光路)

斉藤家の地蔵様　斉藤達也さんのところに、地蔵様がまつられている。

この地蔵様は石でつくられている三十センチほどのものであるが、むかし、川にながれてきたのを、順衛さんがひきあげて、つぼ山にまつっておいたもの。

順衛さんのおっかさんが信仰家でおがんでいた。そのあとをひきついで、みよ子さんがまつっている。

かわりごとがあるたびに供え物をしている。

一日と十五日にはおさごをあげていたが、今では、水をあげている。

屋敷稲荷様と同じ扱いをしている。(笂井)

石殿　東組の地蔵堂の裏に石殿がある。これは、東組の井上家の先祖様といっている。

地蔵様と一緒の日におまつりをしている。(上増田)

金魂神(きんこんじん)　吉田家では、屋敷の東南のすみに、金魂神という石碑をたてておまつりしている。

昭和六年七月吉日

吉田氏　建之

そのころ、吉田家では運の悪いことがあった。

おがみやさんにみてもらったら、屋敷を他人様にふませるからというので、金魂神様をたてたものという。おまつりの日はとくにない。

ヘビの神様のこと　四、五代前の人が強盗におそわれたことがあった。そのとき、白いヘビがでてきて、強盗にからみついて、そのおじいさんは助かったという。そのとき、ヘビはきずついた。

ヘビが死んでから神様にまつったという。(女屋)

(二)　屋　敷　神

屋敷神　屋敷稲荷様のおまつりは、十二月十五日。やしきいなりという。

もとはわら宮をつくったが、今から七、八年ほど前に石宮につくり

かえた。

屋敷祭りのときに供える物は、赤飯とかしらつき（いわし二匹）

稲荷様に供えるのは家の主人。赤飯はおひつに入れてもっていく、しゃもじをもって行く。子供がつきそいに行く。子供は提灯をもち。赤飯は残してきて、うち中のものが分けて食べる。（小屋原）

それぞれのうちで、屋敷に稲荷様をまつっている。屋敷稲荷とよんでいる。

井野喜貴家には、稲荷様のほかに、もう一つ古いほこらがある。真中に穴のあいている自然石をまつっている。この神様の名称はない。

おまつりは、稲荷様と同じ、同じものを供えている。稲荷様に供えるものは、赤飯、おかしらつき（イワシ）、豆腐、きり火をしてまつる。これは主人の仕事。豆腐は、四すみを切って、三センチ四方くらいの大きさにして、芯をあげる。むかしは、わらを切って、竹のひごをわたして、撰をつくって、その上に半紙を折ってあげた。

むかしは、子供にさげてもらった。供え物がさげてあると、うちの者は稲荷様のおまつりができたといって喜んだ。

稲荷祭りは十二月十五日。（小屋原）

新しく屋敷神をまつるときは、本家の屋敷神（稲荷様）の土をもってきてまつりこんだ。（下増田）

屋敷神としては、稲荷様をまつる。屋敷のイヌイのすみにまつる。

いなりまつりは十二月十七日。下増田は十五日、もとは、旧暦の十二月十七日だった。

いなりまつりのときは、わらのお宮をつくった。わらみやといった。

いなりまつりのときは、赤飯とおかしらつき（イワシ二匹）をあげる。あげたものをさげてもらわないと、かわりごとがあるといった。

子供とか家畜がお宮をこわしても、許されるといった。（上増田）

屋敷神としては、稲荷様をまつっている。稲荷まつりは十二月十五日。稲荷様に供えるのは赤飯、魚、豆腐など。（小屋原）

稲荷様　稲荷様のお宮は、稲のわらでこしらえたのが一番いいといった。そこのうちの親が死んだときは、一年間は、屋根のぐしがとれないといった。

稲荷まつりのとき、稲荷様に供えものをしたら、かえってくるとき、あとをふりかえってはならないといった。

むかしは、稲荷まつりのとき、子供たちが近所の稲荷様をまわってあるいた。供えてあるいわしをさげてあるいた。一人で、五、六匹もいわしをさげてきた。子供がさげにいくと、こんこんさまがきたといって喜んだ。

供えた物がさげてないと、やりなおし（まつりなおし）をしなければならなかった。（上大島）

屋敷稲荷様のおまつりは、小屋原では十二月十五日。

布施川三男さんのところでは、一日、十五日に、稲荷様のお宮の扉をあけて、供え物をしている。（小屋原）

稲荷様のお宮は、もとはわら宮、今は石宮にしている。

稲荷まつりのときには、三つの神様には赤飯を供えている。

稲荷様に赤飯をあげたら、かえってくるときにうしろをふりかえってはいけないといった。ふりかえると、オトウカサマがあげたものを食べてくれないといった。

吉田家では、稲荷様（なかの神様にも）にはカシラツキをあげない。また、稲荷まつりのときには、魚を食べてはいけないといった。（上増田）

稲荷祭りのときにおかしらつきをあげる。このとき、魚のあたまとしっぽをあげて真中はうちのものが食べる。あたまとしっぽは、骨で

つなげておく。
阿久津家の先祖はむかしは武士で、生活に困っていたことがあった。おばあさんはせんべい屋をしていた。
稲荷様を信仰していた。
あるとき、稲荷様がおばあさんの夢枕にたった。
「子供には魚の真中をくれて、あたまとしっぽだけあげればよい」といったという。
それから、あたまとしっぽだけをあげるようになった。（下増田）
屋敷の稲荷様のおまつりは十二月十五日。そなえるものは、赤飯、いわし、あぶらげ。
このそなえものを、さげてもらえないとまつりなおしをしなければいけないので、近所の子供にたのんでおいてさげてもらった。子供たちは、そなえものをさげてあるいた。たくさんさげてきた。その子供のことを、こんこんさまといった。子供がさげにくると、「こんこんさまがきた」といった。
そなえものをしたら、うしろをふりかえらないで帰ってこいといった。
稲荷様のお宮のことは、いなみやさまといった。その年の新しいわらでつくりかえた。ただ、うちの親がなくなったときはお宮のぐしをとってはいけないといって、お宮のつくりかえはしなかった。
ふつうは、お宮はまい年つくりかえた。（上大島）
山口一家の稲荷まつりは、他の家より一日早い。十二月十四日にまつる。
むかしは、わら宮をつくった。お宮のことはおいなりさまといった。
稲荷まつりのときのお供えものは、赤飯、イワシ（二匹）と幣束。
お供えするときは、うちのもんが三、四人ついていく。その場で赤飯をわけて食べる。そのあと、のこしていって、うちに残っているもんも分けてやる。おみごくという。これを食べると、風邪をひかないといった。
なお、稲荷さまにあげたものは、さげてもらったほうがいいといった。近所の子供が、あげるのをねらっていてさげた。わしらも、子供のときにさげに行ったことがあった。
稲荷様におまいりしたあと、帰ってくるときうしろをふりむいてはいけないといった。うちへ帰ってきてからうら（背戸）へでてはいけないといった。
むかしは、井戸が母屋の裏にあったから、あらかじめ水を汲んでおいた。（下大島）
稲荷まつりは、十二月十五日、この日、わら宮をつくりかえた。
（東上野）
お稲荷様は、十二月十五日にまつる。この日が稲荷まつりの日。お稲荷様のお宮をつくった。この日には、赤飯とイワシを二匹あげる。
このほかに、豆腐をあげる。これは、まわりを（すみ）切りおとして、真中をあげる。きりおとした分は、けんちん汁の中に入れてにる。
うちのものがお供えをして帰ってくると、近所の子供がさげに行く。赤飯は全部あげないで、すこしのこしてきてうちのものが分けて食べる。
なお、稲荷様へおまいりして、帰ってくるとき、うしろをふりかえるなといった。
稲荷様のお宮は、むかしはまい年つくりかえた。わら宮をつくった。今は石宮である。（小屋原）
十二月十五日。イワシを二匹そなえる。子どもが後で下げたが、早く下げられると縁起がいいという。魚屋が塩をまぶして持ってきた。

ケンチン汁を作って食べた。（下長磯）

赤飯と頭つきを上げるが、下げてもらったほうがいい。後ろをふりむかないで帰る。（亀里龍門）

稲荷まつりは十二月十五日。

ご幣をつくるときは、半紙を切りだしできりはぎをする。庖丁をつかってはならないという。供え物をのせるお膳も、半紙を折ってつくる。一枚の半紙を四つ切りにして二重にする。

供え物は次のとおり。

○豆腐、中ぬきをあげる。まわりのきりおとしたところは、けんちん汁の中に入れる。

○赤飯

○おかしらつき…いわし

○おさご

○塩…きよめ

○おみき

供え物をするときには、主人がおともをつれて行った。（おじいさんとせがれといった形）

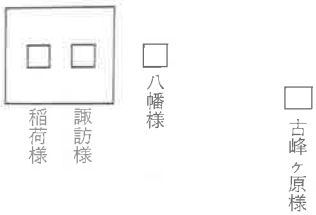
真下家は、五つのお宮に供え物をした。

八幡様は、八幡坂のところにあった八幡様をうつしたという。真下家の畑にまつってあった。（女屋）

井田家には、屋敷稲荷が二つある。

この二つの稲荷様は、階級がちがうという。

一緒にまつると、片方が頭があがんねえ



とか、いいことがないというのでべつべつにまつっている。

一つの稲荷様は十日夜の晩にまつり、もう一つの稲荷様は、十二月十五日にまつっている。

しかし、おまつりのときには、両方に同じものをあげている。（女屋）

東組の吉田喜久治さんのところでは、屋敷神として、稲荷様と八幡様をまつっている。八幡様は、山名の八幡様という。

八幡様の石宮には、次のように刻んである。

享保七壬寅天十一月吉日

神主

卜部氏吉田昌信

屋敷神のまつりは十二月十五日。

供え物は赤飯だけ。この日、魚を食べてはいけないという。

（上増田）

上増田東組の吉田家では、稲荷まつりのとき、魚をあげないし、うちのものも食べない。（上増田）

下田源内家では、屋敷の稲荷祭りは、十二月十五日にしている。供え物は、赤飯とおかしらつき。お宮は一つ。今は石宮だが、むかしはわら宮を毎年つくりかえた。大体、おまつりの当日につくった。

（小島田）

㈢　その他

おかまじめ　屋敷稲荷のおまつりのとき、しめをお勝手の出口のところにはる。おかまじめという。（上増田）

正月棚　正月棚には、神様を二つむかいあってまつった。おそなえも二組あげた。一つの神様は歳徳神様、もう一つの神様はわからない。

（小屋原）

あきの方　暦で、今年の恵方。正月だなをあきの方に向けるし、正月の初詣もあきの方の神社に行く。（鶴光路）

ヤカガシ　二月三日の節分に、ナラの木のザンマタにイワシの頭を二つさして、焼く。焼きながらつばをかけ、なす夕顔につく、ムシを焼くという。恵方を向いてやる。（鶴光路）

神無月　神無月には、神様は出雲へ行く。

おかまさまは、どういうわけだか、出雲へ行かないで、うちを守っているという。

おかまのるすんぎょうといって、旧十月のうちの一日（いちにち）だけ、ぼたもちをつくって、おかまさまにあげる。

釜のふたをさかさにして、その上にぼたもちをのせて、へっついのところにお供えした。

わたしが嫁にきたては、どこのうちでもみんなこの行事をしていた。（笂井）

旧十月（神無月）には、神様は（出雲へ行って）みんな留守になる。おかまさまは出雲へ行かないで留守番をしている。そのために、神様が出雲へ行っている間に、おかまのるすんぎょうをするという。（女屋）

お神おくり　旧十月一日。暗いうちに、自分の家から灯ちんをつけて、諏訪神社へおくった。（亀里龍門）

お神むかえ　旧十一月一日、朝早く、午前零時にむかえにいく。早くいかないと、いい神様をむかえられない。遅いと厄病神だけがのこるといわれた。（亀里龍門）

明神さままでむかえにいった。早くむかえに行けばいくほど、いい神さまをおむかえできるので、暗いうちに出ていった。（鶴光路）

この日は、ムラの神社へおまいりに行った。（下長磯）

旧十一月一日のお神迎えのとき、北爪一家では油餅をつく。

そのとき、ふかしの上に小豆の煮たのをのっけておいた。餅米のふけたのをすこしさくって（上（うわ）っつらを一つか二つ）、茶碗に入れて、稲荷様にあげた。茶碗の中で、ふかした餅米と煮た小豆をまぜてあげる。

あとに残った小豆はあんこにし、餅米はついて餅にする。これは稲荷様にはあげない。餅米と小豆をまぜるのは赤飯のわけという。

北爪一家では、お神迎えの日に稲荷祭りをしたのである。（下増田）

お正月のお札　神無月に出雲へ出かけた神様は、冬至の日に出雲から帰ってくる。正月のお札はこの日にうけるのがよいといった。（東上野）

二、村の社寺と信仰

(一)　鎮　守

山王様の氏子　山王様の氏子は七ケ郷といった。

東善・西善・両家・矢田・山王・中内・下大島の七つの村。

氏子総代は各ムラ二名ずつ。

日枝神社は、日吉大社の末社であるという。

山王様は、六十年ごとに大祭をしてきた。（下大島）

下大島も天川大島も、山王の山王様の氏子であった。

天川大島は、山王からはなれた。

天川のオライレンサマを買ってきて、今の愛宕様につくりかえた。

むかし、山王様は、戦さのとき桃の木で目をついたので、その氏子は桃をつくらない。下大島も山王様の氏子だったので桃をつくらなかった。

山王様の祭典のときやぶさめをした。そのとき、しゅんめがでた。そのしゅんめにつく人は、女衆の用意したものを食べなかった。そのために、その役の人は、おまつりまでの間は、べつの家に寝泊りしていた。大島の中の大きい家がおまつりの前、十日間くらい、その宿になった。

世話人は十人くらいだった。これは毎年交代した。

下大島には山車がなかった。片貝とか駒形から借りた。天川大島には踊り屋台があった。

十月十九日がおまつりだった。春は中の申の日が祭日。(四月十四日)

山王様は、山王のお寺（禅養寺）の坊さんが京都へ行ってもってきたという(分祠したこと)。そのとき、紫の雪が降ったといわれている。

天川大島・下大島べつべつに屋台を出した。

山王、東善、西善、中内、両家、矢田。

ヤブサメはオクンチのときにした。

このときは、東善からは、大神楽を出した。馬は各大字から出した。

西善から神楽獅子（ササラ）が出た。

下大島からは、何もでないので、ご神体をはこぶ馬を出した。そうしないと祭典に参加できないので。

山王が元締めであった。

七度の使いが行かないと、七五三を切る人は出てこなかった。上下(かみしも)を着けて出てきた。その人がおしめを刀で切ってまつりがはじまった。

やぶさめのとき、唐崎からお宮へむかって馬がかけりこんだ。女の仕度をした者と男の仕度をした者とが馬に乗った。馬は山王の裏をとおってもどってきた。馬はすぐにかけりだした。まごまごしていられなかった。おみこしが到着してから、馬がかけりだした。ぼんぜんをもっていったが、下大島からはださなかった。(下大島)

村の神社と寺

神社は稲荷神社、お寺は浄土院。下田と笠原は神葬祭でやっている。(下長磯)

稲荷神社　むかしは、小屋原の人は、笂井の神社へおまいりに行った。昭和十二年に、稲荷神社が独立した。境内をたしてやって村社になった。(小屋原)

護国神社　小屋原の遺族会でたてた。

日露戦争、日清戦争の戦死者を一名ずつまつっている。ほかは今回の大戦による戦死者。もとは三月十五日がまつり、のちに四月三十日に変更。神主さんをたのんでおがんでもらっている。(小屋原)

小屋原の護国神社のこと　小屋原町出身の戦死者をまつっている。日清・日露戦争で戦死した人もふくめた。高崎の護国神社とは関係はない。四月二十日が例祭、むかしは、村民の人もなるべく参列してもらったが、最近は減って、自治会関係者と、ムラの役職の人が参列している。祭典のときは、神主さんをよんでおがんでもらっている。戦没者の霊をなぐさめるということが祭典の目的である。祭典の世話は、神社総代がしている。(小屋原)

上野神社のこと　東上野の神社は、天狗様

この神様は、悪いことをすると、罰をあてるといった。境内に乗りもんを乗り入れたりすると罰をあてるといった。

神社の祭りは、四月十五日と十月十七日、十月十七日はオクンチ。十六日の晩に子供が神社に泊った。十七日になると、ムラの人がおこわを重箱に入れてもってきて、神様に供えた。泊っている子供が、たらいに赤飯をあけて、重箱には、ギンナン（神社の境内にあるギンナン）を茶碗に一つくらい入れてやった。おかえしというわけ。供えられたおこわは、食いきんなかった。それを町へ売りに行ったこともあっ

た。（東上野）

神社のこと　若宮八幡様を、今宮八幡様に合併したところ、そのあと、よくないことが須永にあった。それで、また、もどしておまつりしている。（下増田）

神様の合併のはなし　島では天神様とか城峰様、天王様、蚕影さんなど六つくらいの神様を一緒にまつっていた。

それを神社に合併したことがある。わしが二十歳くらいのときのこと。そしたら、その年か次ぐ年に、組に伝染病がはやった。二軒で三人くらいでた。宮下からも三人でた。それで、クミの人が考えてもどしたという。

元気で病院へ行った人が死んで帰ってきた。それで、クミの人が、盗むようにして神様をもどしてきたという。（上増田）

城宮（まのみや）　寺家と合併した阿内村の氏神、本体は愛宕神社で、火防の神であり境の神なので、矢島との境にある。元は木の宮だった。

愛宕講で先達をする人がいた。

この灯明代にする田が、油免といわれた。（亀里寺家）

女体神社　女体大明神といい、三月二十七日と、十月十七日が祭日だった。十月には、十七日の午前零時になるのを待って赤飯を上げた。十六日の晩から番小屋を篠、ワラで作りおこもりをした。三年～高等二年の子が泊って火をもやして泊った。

この日は区長さんに証明を書いてもらって早退させてもらった。

おまいりの人が、おこわをくれたし、お灯明代として、一～二銭くれたので、全部で二～三円集まった。

生菓子が二銭、鉄砲玉が一銭で四つ買った。上のものは生菓子、下の子は駄菓子を食べた。

昭和十八年頃までつづいたが、やらなくなってしまった。

高等二年が親分でとりしきった。

毎日曜に、三年生以上の子が、そうじをした。（亀里阿内宿）

女体さま　新堀神社は元々女体さまだった。棟札には、元文四年十月とある。（新堀）

飯玉神社　後閑と対抗してまつった。後閑と一緒に神さまをもらいにいったところ朝倉の方へは鏡をくれ、後閑には正一位をくれ、けんかしないようにいわれた。（朝倉）

新堀神社（新堀）

石神神社　シャクジサマといっている。下朝倉の神社である。上は飯玉神社。今は飯玉神社に合併してしまった。

十月十七日にはお赤飯を上げる。オクンチ二月九日が祭日。（下朝倉）

細野天神　細野天神は天神菅原社といわれ、いつの頃から伝わったか、さだかでない。昔は一月二十五日と十月二十五日にお祭りがあり、当時は近郷からも、老若男女がお参りに見え大変賑やかであった。

特に学問の神様として崇められ、学問向上を願う人達の書物が沢山奉納され、参拝に見えた方々の目を楽しませてくれたという。

この天神様の扉が竜巻により、利根郡の追貝（現在の利根村）まで飛んでいったという伝説は有名です。

その天神様は明治三十九年不慮の火災にあい（当時の両毛線の蒸気機関車の火の粉による）消失してしまった。

明治四十年下増田町の今宮八幡宮に合併され現在に至っている。

当時の賑やかさについては細野家中の古文書によれば人形浄瑠璃かども催されたという。
又戦前においては毎年軍談士や浪花節等が催され、その日は細野家一同が集まり餅をついた。
現在は一月二十五日に細野家中が集まりお酒などを供えて明治から百二十余年続いている行事を継承している。（下増田）
むかし、たつまきがあって、細野天神の扉をまきあげて、その扉が追貝（利根郡利根村）におちたという。
それで、細野天神のことを（追貝では）扉天神といっているという。（下増田）

今はない。地名として天神というところが残っている。
むかし、やなが流れてきて竜宮様（竜神）にぶつかったという。
そしたら、急に、一天にわかにかきくもり、大風が吹く、大雨が降ってきた。そのときに、天神様の戸をまきあげた。その戸が追貝に行っているという。「扉天神」といって、今まつっているという。
そのとき、ムラの人は、ぼうちぶちをやつていて、麦をかたづけるのが大変だったと伝えられている。（下増田）

天神さま　公民館の東にある。南雲の天神講としてまつっており、現在は十一月二十五日が祭日になっている。石宮がある。
現在お宮の建物はない。大正の始めにはなくなっていた。池だけがのこっていた。
池の北に出し高い所があり、そこにあったものらしい。（西善矢田）

東組の天神様　天神様は八月二十四日の晩がおまつり。
この日は、灯籠をつけて、納涼祭をしている。天神様は、もとは水車の前にあったが、川の流れの関係で現在地（公民館裏）に移した。（上増田）

天神様　東組に天神様がまつってある。
八月二十四、五日がおまつり、夜灯籠をつける。石宮。勉強の神様として信仰されている。大人が掃除して、子供がまつっている。
納涼祭を兼ねて、この日におまつりをしている。今から十年ほど前からのこと。地域の和を保つため、八月二十四日に灯籠をつける。
東組には天神様と地蔵様、島には天神様、大塚田には浅内様がまつられている。宮原には、薬師様と諏訪様がまつられている。（上増田）
むかしは、天神様が、現在の公民館の裏にあった。昭和十年ごろ、神社に合祀した。（小屋原）

木村天神　浅間様の境内に、木村天神がある。木村一家だけで祀っていたもの。
赤飯をもっておまいりしたことがあるという。（上増田）

若宮八幡宮　須永の鎮守様（神社）は若宮八幡宮である。
今まつってあるところに、境内も大きくって、えらい杉の木の大木があった。この木は、よそから見ても、あそこが増田（須永）の神社だということがわかったくらいだった。
世の中もかわって、ここの若宮八幡宮が、中屋敷の今宮八幡宮に合併になった。それで、もとの境内の杉の木を切った。そして、杉の木で、葬式のときこしをのせる車をつくった。そしたら、組に死人がでた。
西の方の人がなくなって、次にうらの人がなくなった。そんなに間をおかないでなくなった。さきに車にのったのは、さきさんという人。そのあとをぐんぐん押していったのはぐんさんという人。
そこで、ムラの人はこういったって。
「さきさんが先にたって、そのあとぐんさんぐんぐんのっていった」って。

その当時、ムラの人は、そんなことをいっていた。
須永の八幡様を、若宮八幡様に合併したことがあった。そしたら、そのあと、はやりやまい（赤痢）がはやった。
そこで、（これは八幡様の）たたりであろうというので、また今のところへ、八幡様をもどしたという。（下増田）

オクマンサマ　安産の神さまなので、子供が生まれそうな家でおまいりした。
てぬぐいに願いをかいて、石宮の前にかけた。
お米を進ぜ、それを下げておかゆにして食べさせた。
仰願寺ろうそくをまわりに立てる。短いろうそくをもらってつけると早く生まれる。
宿になった家で子供たちが泊り、夜おまいりにくる。その後会議所に泊ったが戦後しばらくして、やらなくなった。
宿に泊ると、ごはんを食べさせてもらった。
今もろうそくを上げる人がいて、高崎の西の方の人から旗が上ったことがある。
おかげで、矢田で難産で死んだ人はいない。（西善矢田）
女屋にはオクマンサマという神社があった。
一本杉があった。
株をもたない神社はたっていられずに合併して、桃川神社になった。
アリは熊野様のご眷族という。
それを、あるとき、キリギリスが食ってしまった。それで、女屋には、キリギリスは繁殖しない（すめない）んだって。（女屋）
もとの豆腐屋の西が、おくまんさまの境内であった。
そのあとを畑にして、青年会で耕していた。桑原としてつくっていた。
おくまんさまの入り口に道祖神塔があった。今、この塔は神社にうつしてある。

キュウリ天王様　キュウリ天王様という石宮があった。
今は、神社の境内にある。
はつなりのキュウリをこの天王様にあげた。それから食べることができた。（女屋）

稲荷神社　元は旧九月二十九日のオクンチが祭日で、おまつりしていたが、戦後四月十日の春まつりとしてやるようになっている。
昭和十二年に建てかえて、今の建物になったが、元はクズ屋根の小さいお宮だった。
元は無格社で、その後村社になった。元は笂井の近戸神社の祭りにいっていた。（小屋原）
小屋原の稲荷様は、もとは、布施川家でまつっていた稲荷様という。（笂井）

初午　新堀神社はお稲荷様なので、二月十一日と十月十七日におまつりした。二月は寒いので、今は三月十五日に変えている。
祭の時には、のぼり旗を立てる。おまいりの人が、油揚をおそなえする。
ここに行く道の橋を稲荷橋といい、村で唯一の橋だった。（新堀）

祭　二十才のころに村に屋台が二つあった。大正八年ころに出たのが最後。山王でやるのをまねてやった。その後一台は上佐鳥へ、一台は二〜三年前まであった。
部落の道をまわったが泥道で大変であった。そろいの着物で太鼓たたいて、おはやしをした。お金がかかるので大変であった。（力丸）

諏訪神社　亀里の村社で、合併した村の神社を合祀した。
春、秋の祭りののぼり立ては交代でやっている。神社総代が出て仕

事をしている。（亀里寺家）

横手の諏訪神社は、利根の流れを避けて、一番高い所に移った。東光寺と神仏混こうだった。（横手）

愛宕様　上大島では愛宕様をまつっている。一月二十四日が祭日。火伏せの神様としてまつっている。（上大島）

宮原の薬師様　薬師様の南に深い穴があった。そこへ人の首がいっぱいいかっていた。大穴があって、そこへ首切ったのをいけたという。

宮原の薬師様は目の神様として信仰されている。

四月八日（七日）がご縁日。七日の晩に、子供たちが灯籠をつけた。

このとき、組世話の人（三名）がでて世話をした。

組世話というのは宮原で三人でる。一年交代。むかしは、宮原の中が六つの班に分れていた。

一、二班十一名ずつ
三、四班―一名ずつ　三名が組世話
五、六班―一名ずつ

自治会とはべつだが、組の世話をいろいろやっている。

二月二十日が宮原の初会合、一戸一人ずつ出席、このとき役員改選をする。

おもに、薬師様の世話、諏訪様（八月二十六日が祭典）の世話をしている。（上増田）

神明様　神明様は、小島田の鎮守様であった。

社地が三畝あった。一反歩ないと村社として認められなかった。それで、無格社だった。

笂井へたのんで、昭和四十九年秋まで近戸様の氏子であった。

昭和四十九年、赤城様のお宮の中へ、神明様を一緒にしてまつった。

前橋東高校の西あたりに、むかし、八幡様があった。岩八幡といった。それをお八幡といっていた。そういう地名があった。

小島田には、三つの神社があった。

神明様…川島（かわじま―女屋では落合という）の東北のあたり。東向きにあった。

八幡様…前橋東高校の西。

赤城様…下田貞次郎さん宅の前。

神明様のことを、お鎮守様とよんでいた。

十月十七日がオクンチといって、秋まつりの日。（小島田）

小屋原の荒神様　荒神様のことは、三宝荒神様といっている。本郷にまつられている。七月三十一日がおまつり。火伏せの神として信仰している。

小屋原中でおまつりをしている。神社総代が世話役としてまつっている。

当日の朝から準備をする。燈籠の準備をしたり、境内の清掃をしたりする。六時ごろから十時ごろまで燈籠をつける。お札はださない。

ムラの人が参拝するだけ。

小屋原は、荒神様を信仰しているおかげで大火がないという。（小屋原）

夏祭り　区役場で主催するのが水神様。

神社総代が主催するのが、天王様。

笂井大橋の北側にしめをはる。

そのあと、サンゲ、サンゲで、水をかけっこする。川の中へ入って水を浴びる。

むかしは、上流へむかって泳いだ。（笂井）

明神さまや青柳大師さまに初詣に行った。

貫前神社、水沢観音にも行った。

安産祈願には産泰神社に行き、お札を受け、底抜けひしゃくを上げた。岩田帯も受けた。

八十八夜には、一本杉正平稲荷、迦葉山に養蚕祈願に行った。中郷の稲荷にも養蚕祈願で出かけた。

子育で呑竜様に出かけた。（下朝倉）

下沖の大黒　沖の大黒さまにお願いするには、「人」がつくものを、二つあげる。「なんてん」「にんじん」など。（亀里寺家）

(二) 寺　院

薬師山泉蔵寺　むかし、長谷戸で薬師様を維持管理できないので、ご本尊様を小屋原の泉蔵寺へうつした。

お寺の方がもとだというので、ご本尊様をお寺へうつした。そうしたり、長谷戸にわるいことがあったので、また長谷戸へもどしたという。

小屋原のお寺の山号は「薬師山」というので、こちらがもとだろうということであった。

もとは、寺のまわりに堀があったという。

前に沼があった。沼のそばに墓地があった。

水害にあって、今のところへ移転したものという。（小屋原）

山王の祝昌寺　山王の祝昌寺は、もとは畜生寺といったという。

ここに、源頼朝の乗った馬がなくなって、葬ったという。（野中）

女屋の観音様　もとの女屋の共同墓地の入り口のところに小屋があり、その横に大杉があった。わかいころには三本あった。この杉は、だんだん枯れてしまった。

小屋の横(右)には、観音様と馬頭観音様がまつられていた。（女屋）

箕薬師　ここの縁日のとき、境内で相撲をとったことがあった。

裏のうちの利雄さんという人は三才くらいのときに相撲大会があって、勝つと、大マッチなどがもらえた。それをみて、けなるくなって、

「おれもでっかくなったら、相撲をとる。あれをもらう」

と大声で泣いたという。（下長磯）

宝乗寺　お堂だけが西向きでのこっている。大胡が本山で、山号は徳丸山といった。木が繁ってさびしい所だった。

明治五年暴徒が集った所。（徳丸）

不動様　公田の不動様は、今は昭和大橋ができている所にあった。萩原山覚動寺という名が、公田山覚動寺と変った。

舞台が立っていた。間口十二、三間の大きさがあったが、火事でやけてしまった。

隣に村の事務所がつけてあった。（公田）

庚申堂　上佐鳥の飛び地で、神清寺というお寺があった。（上佐鳥）

善光寺　聖徳太子の四十六の如来の道場の一つであるという。

火災にあったことがあるという言い伝えがある。（亀里）

大日寺　下阿内の船渡のあたりにあった寺。（下阿内）

お寺　新堀のお寺は鶴光路の善光寺である。鶴光路の元村が新堀村であるため。（新堀）

青柳大師　早い人は、夜の十二時をまわるとおまいりにいく人がいる。（鶴光路）

(三) 小祠とお堂

① 地　蔵

地蔵　七月十六日、八月二十三日にまつっている。愛宕地蔵尊。

開けると目がつぶれるといわれ、開けたら火事があったので、それから開けない。

子育て地蔵といって、腹がけを借りてきて丈夫に育ったら、倍にして返す。（亀里竜門）

七月二十三日の晩にまつった。子供が燈籠をつけた。共同墓地の入り口にあった地蔵様をまつった。

道のはたから墓場までの間に燈籠をたてた。

ムラの各戸をまわって竹をもらった。これは燈籠の柱にした。竹のないうちは、おかねをもらった。これをかんけいといった。

おまいりにきた人は、じりやき（やきもち）をもってきてあげた。中にあんこの入ったやきもちであった。子供が丈夫に育つようにとおまいりに行った。（女屋）

小島田の地蔵様はやき地蔵という。おまつりのとき、むぎわらをあつめてきて燃した。（上増田）

東組の地蔵様はじりやき地蔵といった。この地蔵様には、じりやきをやいてあげた。うちのおばあさんは、初粉でじりやきをやいて、地蔵様にあげに行った。おまつりの日でなくともあげた。

地蔵様のあるところは、地蔵堂という地名である。

東組の地蔵様は、もとは四月二十三日がおまつりだった。ところが、このころは、寒くておまつりの人がいなかった。それで、おまつりを、七月に変更した。

現在では、中学三年生が全体の世話焼き。

小学校一年生から、男女とも参加した。一つの家では人も参加できた。

おまつりの当日は、地元の人がおまいりにくる。おさいせんをあげてくれる。

子供たちが、太鼓をたたいて、組中よびあるいた。リヤカーに太鼓をつけて、組中をまわった。

むかしの人はじりやきをあげた。信心の人が、頭巾・よだれかけ・三角布団などをお礼にあげた。

この地蔵様は、厄除地蔵様として信仰されている。

なお、おさいせんは、子供の大将が相談して配分した。（上増田）

下長磯の西原にある地蔵様のおまつりは七月二十三日の晩。むかしの盆迎えの日であった。このとき、下長磯の子供が燈籠をつけた。ムラ中の子供でまつった。

おまいりに行く人はやきもちをもっていってあげてきた。子供が丈夫に育つようにとおまいりした。（下長磯）

七月二十三日の晩に灯籠をつける。子供の行事。

小島田の地蔵様は、下田栄作さんが子供のころには、小屋をつくった。地蔵様のおまつり（七月二十四日）のとき、ムギわらで小屋をつくった。

下田裕亮さんの竹やぶの竹をきってきたり、ムラ中、「竹をくんねえかい」とまわって竹をあつめた。

小屋の中には一晩泊って、つぐ朝もやした。

竹のあまったのは売った。物干竿にするとか野菜の手にするので買った人があった。（小島田）

須永の地蔵様は、もと日陰にあった。その前は日向にあった。地蔵様は日向にだしておくもんだという。

あるとき、地蔵様を日陰においた。そしたら須永に大火事があった。隣のうちからはじまって、西の方へ焼けていった。うちの本家のところで大火事がとまった。それで、おがみやさんに見てもらったら、地蔵様が日陰におかれたので、火事にしてあったまったんだという。

そのために、また、日のあたるところへ、地蔵様をだしてまつったものという。（下増田）

七月十六日と八月二十三日の晩にやっている。七月は八人の年番が灯籠をあげる。八月二十三日は灯籠に、色紙で花をつくり竹につけたホロを飾った。この花を持って帰ると一年間無病息災であるという。灯籠の紙に「奉納地蔵尊」と書き、ナス、キュウリの絵を書く。

（亀里龍門）

上長磯全体でまつっている。七月二十三日の晩に灯籠をつける。この地蔵様は、火伏せの地蔵様ともいうし、子育ての地蔵様ともいう。この地蔵様のおかげで、上長磯には、丸焼けの火事があったことなし。（上長磯）

岩船地蔵　上公田の墓地の中で西を向いて立っている。自然の石が舟の形になっていて、その上にある。（公田）

ボタモチ地蔵　病気になると願をかけて、なおるとボタモチをあげ、オカケをあげる。（公田）

厄除地蔵尊　上増田の東組でまつっている。厄除地蔵尊といっている。

七月二十三日がおまつり（宵祭）、二十四日が本祭り、大人が当日の朝から出て境内の清掃をする。夜、子供たちが灯籠をつける。

もとはかやぶきの屋根、昭和三年十月に銅板の屋根にふきかえた。

（上増田）

②　観　音

駒形長寿観世音（通称ぽっくり観音）　奈良県北葛城郡香芝町に阿日寺と云う由緒ある格式高い寺があります。今から凡そ一〇三〇年前恵心僧都が此の寺に生まれました。恵心僧都は源信とも云い、我が国七高僧の一人で念仏の始祖と仰がれています。十五才にして村上天皇に召され宮中で法華経の御前講演をされた程の人です。その著「往生要集」は古今の名著で念仏の功徳が述べられてあります。この思想は法然上人に受継がれ浄土宗が開かれ、更に親鸞聖人により真宗が開かれました。

恵心僧都は大変親孝行な方で母の臨終の際、母に新しい浄衣を着せ、長寿は観音様のご守護と感謝し、仏力加祐の秘法と共に母と声を合わせ称名念仏されましたところ、三百余遍に至って母は無苦正念にほほえみながら安楽往生を遂げました。

此の事が世に伝えられると多くの人が「厄除け長寿安楽往生」にあやかろうと此の寺に参詣し「ぽっくりさん」と云って信仰するようになりました。

駒形長寿観音（駒形）

当地有志の者、これを伝え聞き身近な所に安置して信仰しあやかりたいと、昭和四十八年六月阿日寺に参詣し、長寿観音の分霊を、入魂祈禱を受けていただいて参りました。そして全町民の寄進を受け、駒形長寿観音堂を建立し、ご本尊を安置し信仰を捧げることになりました。（駒形）

馬頭観音　今の須永公民館のところに、寮があった。

この中に馬頭観音がまつってあった。今は公民館の南西のすみにまつってある。また、お釈迦様が寮にまつってあった。この二つを四月八日に一緒にまつっている。甘茶をだしている。（下増田）

矢島の観音　安産祈願に御利益があり、お札と布を出している。おかげで矢島ではお産で亡くなる人はいない。（亀里矢島）

百体観音　観音様は百体ある。村の人が奉納したものである。

③ 薬　師

（上大島）

薬師様　薬師様は目の神様として信仰されている。
しかし、この薬師様がさかんだったころ、おまいりの人のはくわらじが、一日に千足もうれたというので、千足橋という橋がある。
この橋は、宮原の東、上増田と二之宮の東にある用水にかかっている。（小屋原）

力丸の薬師　下川淵村誌には、新堀を掘った時出たと書いてあるが、そうではない。
祭も昔はにぎやかで、屋台が二台出たことがある。
鬼の顔をした薬師さまで、榎橋の隣組でまつっていた。
羽鳥の大尽がまつり、屋敷に移したら火事になったので、元にもどした。（力丸）

いぼ薬師　上増田の東にあった。この薬師様の石像を石ではたいてかいて、その粉をいぼにつけると治るといった。えのきまちというところにあった。いぼ薬師様のおまつりはなかった。
今は、東組の地蔵様のところにうつしてある。（上増田）

新堀町薬師堂　鰐口の銘文
奉納　御宝前　新堀村寒念佛供養同行七人
享保十四己酉天十二月吉日
売所　高崎田町釜屋権兵衛（新堀）

薬師如来　銘文
奉造立父母為一世安楽　施主　佐太郎妻女
元禄十四年　十月朔日（新堀）

薬師さま　目薬師といい、加藤さんの屋敷の中にある。
元は薬師という名の八坪の土地から移してまつった。宅地で、元は木造の六角堂にまつってあったが、雨ざらしになって、耕地整理の時移した。
願をかけ、定期的におまいりに来てお礼まいりには布ののぼりをおさめた。（亀里阿内宿）

岁刻（なたぎり）薬師　小屋原の長谷戸でまつっている。今は十七八軒、もとは十五軒くらい。当番は年番で、毎年かわる。
七夕のときにおまつりをする（七月十七日）。この日、灯籠をつける。目の神様として信仰している。むかしは、ごまだんごがたくさんあがった。それを食べて仕事をしない人がいたという。
むかし、弘法大師が来てつくったという。「弘法大師のなた切り薬師」といった。むかしは、かやぶきのお堂があった。
ご縁日には、坊さんがきておがんだ。
お堂のまわりには廻廊があって、そこを数珠をもってまわった。
ご縁日は七月八日、七日の晩に灯籠をつける。
ムラの年番の人がきてつける。年番は十七名、そのうちの一人が年番長。べつに神社総代が五人いる。五つのクルワから一名ずつえらばれる。任期は四名。クルワごとにえらんだ。
むかし、薬師様におまいりにくる人がわらじを買った。そばの橋を千足橋といった。
さかんのころは、薬師様の西隣に貸布団屋がでたほど、おこもりがさかんであったという。（小屋原）

笂井の七薬師
笂井には七薬師がある。
○辻薬師　大手金次郎さんのところ。
○　〃　星野勝英さんのところ
○　〃　井田保男さんのところ

○　〃　八日市にある。
○笹薬師　西原、小屋原からの人り口
○　〃　中島ぎょういちさんの墓地内
○白粉薬師安養院境内
右のほかに、笠薬師がある。（笂井）

薬師まつり　九月八日、七日はよいまつりだった。（亀里寺家）

④　虚　空　蔵

虚空蔵様の祭日　片貝の虚空蔵様の祭日は、むかしから荒れるといわれている。この日は寒いという。

虚空蔵様の信者は、ウナギを食べてはいけないという。（東上野）

虚空蔵の祭　十月十七日に子供がつめている。寝袋をもって集まる。零時になると、村の人が赤飯を持って集まってくる。食べてもらうと御利益がある。（鶴光路）

こくぞう　七月二十四日の晩、こくぞうの前に五～六個の灯籠をつけた。（亀里）

⑤　阿弥陀様

下長磯の阿弥陀様　今、森村久平さんの屋敷の北側にある阿弥陀様はもとは、三反まちの真中ごろにまつられていた。

阿弥陀様をうつして、その関係のうちでは、いいことがなかった。

あるとき、道西のBさんのうちで、提灯をつけっぱなしにしておいたところ、火が屋根をつきぬたが、火事にはならなかった。

みんなが、「火事はどこだ、どこだ」とかけりだした。Bさんのうちには、おばあさんが一人残っていた。

ある人が、たまげて阿弥陀様の前でつぶれて、三日くらいたって死んでしまった。阿弥陀様をいじってから、この地域では、いいことはないといっている。（下長磯）

小島田の阿弥陀様　阿弥陀様のおまつりは、四月十七日と十二月十七日の二回やってきた。今は四月だけのおまつり。

むかしは、おまつりのとき、子供相撲をしたが、戦争があって、たえてしまった。相撲のとき、富田の庚申山というすもうとりがきたことがあった。

むかしは、おまつりのとき、店がでるほどにぎやかだったという。

境内の東側には、あずまやがあった。

阿弥陀様の地所は、長岡幾男さんのうちのもの。

西側、南側には石垣が積んであった。

かごを背負って、桑をつんでくるときに、石垣にこしかけた。ざまがすわるのに、ちょうどよかった。

おまつりはしばらく休んでいたが、昭和四十八年に、前橋市の文化財に指定されたことを機会におまつりを再開した。

おまつりのときは、灯籠をつける。これは組の大人のやったこと。

今は十二軒の人がまつっている。

むかしは、阿弥陀様の前に土俵をつくって相撲大会を開いた。大人も子供も相撲をとった。本職（田舎相撲）のすもうとりがきたことがあった。

おまいりにきた人はおさいせんをあげた。

組の人はだんごをあげた。それを、おまいりにきた人に、おみごくとしてわけてやった。

阿弥陀様は、子育ての仏様として信仰されてきた。（小島田）

⑥　そ の 他

いろいろの神仏

・阿弥陀堂
・諏訪様……須藤新平さんの畑の中にあった。

・北組の石井保太郎さんの屋敷の中に八幡様がまつってある。
・地蔵様……安養院境内にまつってある。おまつりのときに、灯籠をつけた。（笂井）

上増田の字の神仏

大塚田……浅間様
宮原……薬師様
東組……地蔵様、天神様
宮下
島……赤城神社（近戸様）

島のうち五軒（北爪四軒、高橋一軒）は下増田の屋敷と一緒におまつりをしている。

城峰様は四月十七日、のちに五月五日に変更。　天王様は七月二十五日がおまつり。（上増田）

子供の灯籠つけ　東上野の子供たちは、一年に八回灯籠をつけた。うぶすなさまの春と秋のおまつり。

金毘羅様
八幡様
穴神様（神社の境内）
八坂神社（天王様）（東上野）

オコリボトケ　今は神社にあるが、昔は別のところにあった。少しさわると腹いたになる。息をとめて三回りするとなおる。（上朝倉）

水神さま　村境の所に常夜灯があり、祭の時には毎晩火をともした。男が裸になり「サンゲサンゲ、六根清浄」といいながら水をかけた。神社の杉にはボンゼン、水神様には小ボンゼンをあげた。（下長磯）

弁才天　極楽寺の西にある。厳島神社で、九月十七日が祭日。ここの灯明代を出すための田を銭免といった。（亀里寺家）

天神様　東の三組、四組でまつっている。昔の像の目に宝石が入り又は金が入っていたという。旧八月二十五日（十五夜から十日目）が祭日だった。

各家から燃料をもらっておこもりした。お金も平均十銭もらったので、三十戸で三日くらいになった。（生菓子一個で二銭の時代）

四年生は二個、三年生は一個もらった。

男の子のみの祭だった。（亀里龍門）

おそうでんさま　田のまん中にまつってあったが、南東の角に移し、また移して家の前に持ってきた。（下長磯）

観音山　へそのおを埋めた所で、小字を観世音という。（下阿内）

三宝荒神さま　仏を守る神で、百姓の神、かまどの神といっている。七月三十一日の八朔の前の日にまつる。年番が灯籠を上げる。（小屋原）

荒神様　門前に木賃宿があったというから、栄えたことがあったらしい。寛英師という人がいて火渡り、釜鳴りをした。毎月十八日には、和讃をした。（力丸）

摩利支天様　女屋の摩利支天様は、もとは、桃木川の土手のしのやぶの中にあった。

田代敬太郎さんが兵隊に行ったときには、うちのもんが、毎月、一日、十五日にはおまいりをしていた。（上増田）

女屋の丸支天様は、もとは女屋万右衛門さんの家の裏で、桃木川の東側の土手（しのやぶ）にまつられていた。

桃木川の改修工事のため、現在地（桃川神社の境内）に移された。

もとは、女屋弥五郎さんのうちの系統でまつっていた。このうちは、下長磯へ移って（婿入り）下田姓を名っている。（下田一味さん）

弥五郎さんの娘さんがおせいさん。おせいさんは島崎九十郎さんのところへ嫁いだ。このとき、丸支天様の掛軸を島崎家へもって行った

という。

戦争中まで（昭和二十年前）は、上級学校へ進学する人とか、勝負をする人（競馬馬に乗った人）がおがんだ。お正月の子供のカルタ大会に出場する子供も、丸支天様におまいりする。（女屋）

下増田須永の摩利支天さまは、毎年一月二十八日にオカリヤをつくってまつる。摩利支天さまは、蚕と子供の神様として信仰されている。

子供が（境内で）いくらいたずらしてもけがをしたことがないという。大人の場合に、摩利支天さまのほ境内の桜の木にのぼったら、おりられなくなった人がいたという。

蚕があたるようにとおねがいした人は、お礼に縄をなっておさめる。ほかの人が納めた縄をかりてきて、このめにまいておくと、ネズミがでないといった。

伍長さんが手分けして、祭りの準備をした。

オカリヤのカヤを刈りに行く係の人。しめなわをなう係の人。

一月二十八日がおまつりで、この日に準備をする。

むかしは、八幡様の社務所（集会所をかねた）にカヤをとっておいた。

奥原の摩利支天様のおまつりは、十一月二十八日。朝八時ごろから、組の人があつまって、お宮の前に土俵をつくりなおした。

むかしは、夜中の十二時になると、太鼓をならして、人びとをあつめた。組の人は、一斉にあつまってきた。かや刈りに行ったり、火をたきながら、縄をなったりした。これで、摩利支天様のお宮（おかりや）をたてた。

むかしは、お宮の前の土俵ですもうをとった。（下増田）

淡島さま　西原でまつっていたが、今は稲荷神社に合祠している。木のお宮であった。（小屋原）

マダリンさま　広瀬川の川岸にあったお宮で、元はカヤぶきのお宮だった。今は稲荷神社に合祠している。（小屋原）

日下部様　日下部様は稲荷様である。

もとは、日下部橋の南に杉森があって、そこにまつられていた。

おっかさんの時代には、初午日に、前の晩におたきあげをして、それから、日下部様へ、まゆ玉をあげに行った。（女屋）

扉天神　阿久津に細野天神がまつられていた。

あるとき、竜巻がまきおこって、細野天神の扉をとばしてしまった。その扉が、今、利根郡利根村の追貝というところにあるという。

追貝に天神様があって、その扉に、「増田」というお札がはってあったので、増田からとんできた扉であることがわかったという。（下増田）

愛宕さま　雨乞い、火防の神さまとしてまつっていた。

地名で愛宕の所にいた人がいなくなり、信仰が絶えてしまい、その後、明治になって、城峯（じょうみね）山の信仰に変った。

四人ずつ交代でおまいりにいっている。（小屋原）

一月二十四日が祭典日。

この日、自治会の役員がでて祭典をしている。

赤飯をふかして、おみごくとして参拝者にやっている。

火伏せの神様として信仰、お札を出している。（上大島）

疫神の宿　二月八日に疫神の宿をしたことのあるのは、笂井では、石井勲さんのところと、保太郎さんのところ二軒。（笂井）

十二月八日と一月八日にやる。

八日に、けんちん汁の実（具）と赤飯を、左右にならべて、たわらっぱしの上にあげる。九日の朝、それにご飯をすこしあげて、近くの三本辻へ送りだした。

島では、北爪家の本分家と、斉藤さんの本分家で、同じようにやっていた。今から六十年くらい前までのこと。（下増田）

金毘羅様　金毘羅様のご縁日は、一月十日。この日が、上大島の年始日であった。

金毘羅様は、四国から分社したものという。文政十二年のこと。

金毘羅様は、こがねの神様という。（上大島）

後閑の稲荷様　後閑の稲荷様のあたりは、むかしはさみしいところだった。そこにオトウカがすんでいたという。そのオトウカがでて、よく人を化かしたという。

天川大島のおばあさんが、芝居を見に行ったかえりに、松並木のところの稲田圃の中を

「おおふけえ、おおふけえ」

といいながらあるきまわっていた。

うちのもんが出てみたら、稲の穂をもって立っていたという。

（天川大島）

富士山　近江富士を二反の田を使って作った。（横手）

下阿内の板碑　四尺近くある大きなもので、体の具合の悪い人が、新堀のナンミョウさまにおがんでもらったら、井戸の中にあるといわれて出したもの。いたずらでこわされてしまった。

出陣する時、戦勝祈願であげたとの言い伝えがある。（下阿内）

三輪大明神　笂井の小屋一家では、三輪大明神をまつっている。

十二月二十日に一家の人たちがおまつりしている。

今は、近戸様に合併され、だれも、三輪様といって手をあわせる人もいなくなった。三輪様ははりあいが悪いといって、小屋家から下増田へ嫁に行った人にのりうつったことがあった。

下増田の嫁ぎ先の相手の人が大病みしたときに、総社町の丁間稲荷様へおまいりに行った。三輪様がもとの屋敷へもどりたいといった。

それで、神社総代の人にたのんで元屋敷にもどってもらった。昭和二十二、三年の大水害のあとのことである。昭和二十五、六年ころのこと。

それからまた三輪講がはじまった。

十二月二十日に一家の人たちがあつまっておまつりをした。二十軒ほどあつまった。

非農家の人は金を出す。農家の人がかいばんをしていた。前日から準備をした。今は休んでいる。

下増田の人は、旦那様の病気のことで丁間稲荷様へ行ったのに、稲荷様が三輪様のことをいったのでおどろいたという。

稲荷様のおばあさんは、ずっとこもっておがんでいた。神様がのりうつった。この稲荷様はよくあたるので知られていた。（笂井）

鬼門除けの八幡様　石井家では、鬼門除けに八幡様をまつっている。屋敷の鬼門の方向にまつっている。毎年、十五夜の晩にまつっていた。赤飯をふかしてしんぜた。おそなえ餅も供えた。

むかしは、小島田のてるさんという人（素人神主）をたのんでおがんでもらった。

今では、春の稲荷祭りの日に一緒におまつりをしている。（笂井）

見返り稲荷　飯塚ぐるわでまつっている。ふりむいたほうが福が来るという。（下朝倉）

㈣　石　尊

石尊様をまつる　七月二十七日の行事であった。

広瀬川の堰をとめて（役員の人たちが）裸で川へ入って身を清めた。

代表が大山まで代参に行った。

今の公民館のところに灯籠がたっていて、そこへあかりをつけた。（下大島）

石尊ごり　七月二十八日に、厄払いでやる行事。石灯籠に朝、昼晩に灯明をあげる。川の水に入って水をかけっこする。（亀里龍門）

石尊様　石尊様のおまつりのときには、川で、さんげさんげといいながら、水をあびた。

大山阿夫利神社まで、二人で代参に行った。泊りで行って、お札をうけてきて、講の人たちにくばった。代参には、第二次世界大戦が終ったあとも行った。

七月二十七日の盆がらの日。

大門川で、青年が

「さんげさんげ、ろっこんしょうじょう、大山石尊大権現」

といいながら、水をかけた。水のぶっかけっこをした。大門川に竹をたて、しめをたてて、水をかけあった。

そのあと、地蔵様のところのくぬぎの木に一本と川島のところへ、ぼんぜんをたてた。

水ごりをしたあと、川島ではわずか一杯のんで、寮のところで、本格的にのんだ。

昼間の行事であった。

地蔵様のところに、四月のしるしのある灯籠をたてて、青年が毎晩、交代であかりをつけた。（小島田）

石尊さま（亀里竜門）

上大島でも、石尊様のまつりをした。清水川の石橋の上のせきでやった。

「さんげ、さんげ」を川の中でした。（上大島）

七月に、桃木川の観音様のところで、しめなわをはって、石尊様の水ごりをとった。「大山石尊様大権現」といって水をかけた。川のしもからのぼりあげてきた。

この日から、石尊様の灯籠に毎晩あかりをつけた。これは順番があって、毎晩、ろうそくを一本ずつあげた。箱があって、その中にろうそくが入っていた。その箱を当番のうちにまわした。（女屋）

七月二十八日が祭日。水場にしめを四本立ててしめをはる。水ごりをしてお祈りする。「六根　清浄～」ととなえた。（亀里矢島）

七月二十八日にまつった。端気川の端に石灯籠があり、お盆まで毎日灯明を上げた。（下朝倉）

灯籠がある。悪魔はらい。

七月二十七日に準備をして、二十八日にした。昔は子供がしたが、今は大人。川の上に四本の竹をたて、しめつけた。

水ごりをする「コオトリ場」と言い子供がした。「サンゲ、サンゲ、ロッコ、ショウジョウ」と言い、水をかけっこする。

灯籠は三の日より一カ月毎晩つけた。

灯籠は三面に紙をはった。一面は太陽で赤い紙、一面は黄色い紙で月、一面は白い紙で表側にした。

ボンゼンという竹にマキワラをつけたものを一本あげた。次の年にそれを干しもの棹に売った。神社の木の上に出るようにあげてゆわえた。竹が枯れておわった。（宮地）

七月二十八日に、ボンゼンを立て、石灯籠に毎日ろうそくをあげた。川に入って、水のかけっこをした。

「さんげさんげ、六根　清浄」という。
石尊さまの元が、本庄の利根川へりにあるという。（亀里寺家）
夏、年番が行って灯をともした。石の鳥居があった。川に入って水あびをする。（朝倉）
七月二十八日が祭日で、石灯籠が立っている。水神さまである。
村中で交代で一日一軒、上からロウソクをともしにいく。最近までやっていた。
子供の頃までは、お祭の時子供におかしをくれるのが楽しみだった。
費用は毎戸から集めた。
この水たまりで、馬やかごを洗ったり子供が水あびをした。
大雨のあとは鯉がおよいでいた。（新堀）
大山祇神社の祭り　川の中に竹を四つ立て、おしめを張り、その中で水をあびる。（亀里）

㈤　天　　王

天王様　石宮が、女屋幸雄さん方屋敷の西南の隅にある。
八坂神社
明治廿五年十月吉日　村中
天王様には八月に子供が灯籠をつけてまつった。（東上野）
天王様（おしし）　七月二十五日、駒形のおししがでる。獅子頭は神社にある。頭は二つある。昼間から夜にかけて、町内をまわる。
もとは、おししは、町内をまわってから広瀬川にぶっこんだ。
新駒町からながして、川の中をもんできて、清内橋の下流であげて、また上流へ行き、川へぶっこむ。これを何回かくりかえしたという。
このおししは、前橋様からいただいたものという。
あくまっぱらいでまわすという。（駒形）
中屋敷の天王様は、七月二十四日にまつる。中屋敷の公民館に獅子頭をまつり、組の人が寄っておがんだあと、会食をする。むかしは、お祇園のとき、天王様をこしにいれてかついだ。毎戸をまわった。
もとに、ここの天王様を川の中に入れてばしゃばしゃやったらしい。車川に入れてもんだ。
夏まつりのときは、野菜物をあげた。ナス、キュウリ、カボチャを供えた。
各個人のうちで、机をだしてあげてあるのを、個人のうちをまわって、さげてあるいた。
お札は、前は出したが、神主さんがなくなってからは、ださなくなった。
獅子頭を、車川にもって行って、水のかけっこをした。組のわかいもんがかついだ。
中屋敷の範囲だけまわった。
須永、阿久津にはべつの獅子があった。（下増田）
駒形の獅子頭は、おがみ獅子。かついでまわすよりおがむほうが主という。
このお獅子は、前橋藩主の何代目かの殿様からもらったものという。（この人は、加賀の前田侯のところから養子にきた人）
もとは、酒井様がご自分の屋敷に、鬼門除けとしてまつっておいたもの。姫路へ転討になるについて、竜海院へあずけた。
ところで、竜海院と矢田のお寺（祝昌寺）は兄弟寺という。先祖様の供養というので、その檀家である駒形の小島氏と根岸氏などが、矢田のお寺の世話人ではなしをしたら、駒形で厄病がはやっているというので、このおししをくれたのだという。
なお、祝昌寺の山門は、竜海院からもらってきたものという。（駒形）

土用の三か日で、七月二十二か二十三日になる。
鶴光路はまつらない。神の塔（鐘楼）があるためという。
東くるわ（元の今宿）はやっている。（鶴光路）
七月二十四日がよいまつりで神主がおがむ。七月二十五日が本祭り。花（ほろ）を飾り、キュウリ、ナスを上げる。（亀里龍門）

牛頭天王　ふだんは天王様といっている。
おまつりは、七月二十四、五日、しかし、今は住民の要望により、その日に近い土、日曜の両日に変更している。
もとは、旧六月十四日が宵まつり。（駒形）

祇園　天王さまといっている。出車は、寺家、阿内で石宮と一緒に文久に作ったといわれている。明治になってやらなくなった。出車は万日堂の所において、もえてしまった。（亀里寺家）

(六) その他

お諏訪様のご眷属　お諏訪様のご眷属はヘビ。女屋の人は、ヘビを殺しちゃあなんねえとしより人にいわれた。しっぽのされたヘビは神様ヘビといった。
ヘビを指さすと、指がくさるといった。指でわっかをいってなにかいってきってもらった。（女屋）

無縁仏　無縁仏は、盆のとき、別にまつった。（上大島）

七里の土手　宮原の薬師様は、七里ヶ土手にまつられている薬師様の一つであるという。（上増田）

出替り稲荷　七月二十四日が天王まつりで、年番が灯籠と花をあげる。二月三日が祭日、浪花節をやった。飯塚グルワでよんだ。
二十歳の仲間が、徴兵検査（四月～七月）前に金を出し合ってやった。（下朝倉）

獅子　正月一七日と八月一七日に、獅子を町内まわす。石神と稲荷にまつり、下から上にのぼりあげる。
道具は年番長の家であずかっている。年番長は、昔は天道念仏や十三年仏の道具もあずかっていた。
縁側から上がり、座敷をまわる。おさごに金をのせる。代りにお札をわたす。昔は、もらったお金で、五目飯やすしを作って食べた。（下朝倉）

一本杉　小島田の東街道に沿ったところ、女屋のもとの牛橋を渡って百米くらい東のところに一本杉があった。
すこし、草地があって、そこに古い石塔があった。その石を、小石でたたくと粉がでた。その粉を、ひたいにつけると、風邪をひかないといった。（小島田）

三、講と俗信

(一) 村内講

① 庚申講

庚申待　こごめを粉にひいて、それでねじっこをこしらえた。ねじっこにごま味噌をつけて食べながら、夜ふかしをした。（野中）
もとは庚申待をした。七、八軒のうちで寄ってした。宿は交代。秋にした。（上長磯）
今は七軒で、庚申待をやっている。もとは、下長磯全体で、庚申講の組が四組くらいあった。
三月の末か四月からはじめて、十二月の庚申の日までの間に、春に二、三回、暮に二、三回やる。夏は忙しくってできない。

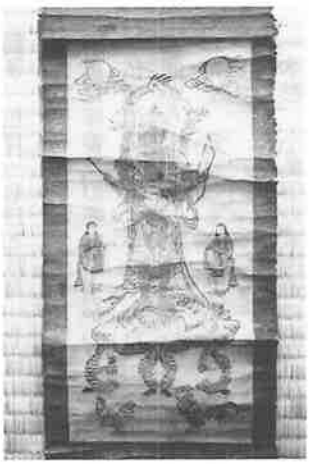
最後の宿のことは、オヤドという。このうちで餅をついてまつる。
庚申様とお正月様とは仲が悪いといった。お正月様とはべつの部屋に庚申様の掛軸をかざってまつる。
チボクの人はきらう。べつの部屋でご馳走になった。シンボクはいいという。
庚申様をまつっている最中に地震があると、もう一度おまつりをしなおさなければならなかった。火事があったときもしなおした。鉦の音を聞くとやりなおした。
庚申待をしていて、ご飯を食べ終ると、掛軸ははずしてまるめてしまう。おあかり（そうそく）は消す。
庚申様は百姓の神様として信仰している。
庚申待の当日、前の宿の人が、庚申様の掛軸、箸、おわん、記録類をもってくる。宿をした人は、次の宿まであずかっておく。七軸目の最後の宿がオヤド、ここで、次の年の宿の順番をきめるくじをひく。オヤドは何度あたってもよかった。オヤドのくじがあたれば、そこのうちは米がとれるといった。
順番は紙に書いておく。三番は、サンに通じるのではずしておく。
むかしは、ナマグサ類はつかわなかったという。参加者は、宿で風呂に入ってからご馳走になった。ご馳走は一度、腹一杯食べてから休んでまた食べた。くいっこをした。
オヤドではおそなえをつくってあげた。
一月には、たとえそ申の日があっても、庚申待はしなかった。

順　番
第一番　小山松寿
第二番　川島重貴
第四番　中沢　清
第五番　中沢福治
第六番　小山昌栄
第七番　中沢義男
第八番　小山市郎

右ノ通リ
昭和六十四年度

庚申待の席では、いろんなはなしをしあった。（下長磯）
二月から四月にかけての、農家のひまなときに、庚申待をした。
庚申待のときは、一晩中はなしをしていた。ここでは、庚申待の人数は、一組九人ときまっていた。
くじをひいて、ご馳走をきめたこともあった。宿の順番もくじびきできめた。年の暮に、庚申様の箱がまわっていくと、そのうちでは、お正月様の餅と一緒に、庚申様のために、一升餅をついてあげた。
庚申様は、神棚とはべつのところにまつった。
庚申様は百姓の神様という。

庚申講の掛け軸（亀里町竜門）


庚申講の掛け軸（亀里町竜門）

庚申講の掛け軸（亀里町竜門）

庚申講のはし（亀里町竜門）

庚申講の申し合せ（亀里町竜門）

庚申様は長くうちへおくものではないといった。

昭和になってからは、庚申待のときのご馳走は、こわめし、もち、うどんなどをきめて、くじびきにした。ご馳走は宿のうちでだした。

庚申待のときには、宿のうちで、一晩中起きていて、百姓ばなしをした。庚申待は農事研究会のようなものであった。

庚申待のときは、生ぐさもんはださなかった。

ここでまつっている庚申様は、猿田彦ではない。庚申様といっている。庚申待をするのは、庚申（かのえさる）の日。寒の内はしないで、寒あけにした。なお、寒の内は、鐘をはたくものではないといった。寒念仏をするときには、小鉢のへったをたたいた。

寒のときの葬式のときには、どら・かねをぶたなかった。ただもっているだけであった。（上大島）

むかしは、五軒くらいで組をつくってやっていた。交代で当番をした。泊ってやった。男衆だけが参加した。（小屋原）

農家の人が寄って、農業のはなしをした。この日は、いくらながっちりをしてもいいといった。

「ながっぱなしは庚申様の日でいい」といった。（駒形）

五、六組あって、一年に六回くるので、六軒でくんでいた。

組の人を寄んで、夜中の十二時まで食事をとりながら話をした。

番をしいた人は餅をつく、他の人は赤飯でよい。最後の家で、翌年のくじをひいた。（亀里寺家）

猿田彦は庚申様。お正月に、庚申様の掛軸を床の間にかけた。その前に、おそなえを一かさね供える。これは、暮のうちにあげて、一月四日にさげる。

お正月様と庚申楽とは仲が悪いというので、正月中は、べつのところにかざる。お正月様はおもて座敷にかざる。正月棚をつくってかざる。

正月にかざる庚申様の掛軸は、庚申待のときにかざる掛軸とはべつのもの。（上長磯）

むかし、庚申様をまつった。

宿は仲間のうち、交代でした。一年に一回、時期は不明。酒は飲まず、なまぐさも食べなかった。（小屋原）

昔は三組あった。小山さんの所は七人組でやっていて、一年に二回やった。お茶出しも女はやらない。

本家組は庚申の時小作料を決めた。（下長磯）

六軒で組を作っていて、神様の掛軸をまわしている。昔は宿で、フロを立て、ごちそうした。六十日に一ぺんまわし、一年で一まわりする。昔は秋～春までのサルの日に六軒が順に宿をして、講をやった。ごちそうをたくさん食べた。次の年の順をくじで決め、一番になった家は宿の時ぼたもちを出した。（亀里龍門）

庚申講は、七人組でやった。

秋、麦まきが終るとやった。一年に一回だけの行事。

宿は交代。宿がまわりばんだから、食べ物はみんな宿で負担した。大体、うどんをつくって食べた。宿では、夜中の一時くらいまでお茶を飲んだり食ったりしていた。

庚申様の掛軸があった。絵が書いてあった。

庚申様は百姓の神様だといった。

農作業が一段落すると、庚申様を祝った。参加者は男だけ、寄るのは七人。線香はあげなかった。ろうそくをあげた。

酒はのまなかった。なまぐさもあげなかった。（駒形）

十年くらい前まで、八人で庚申講をつくっていた。本山は栃木県、今はない。（天川大島）

集まって飲み食いしたらしい。（新堀）

庚申待の日には、夜食を食べたあと、ねそべって、いろいろのはなしをした。（野中）

順番に宿をした。風呂に入って神様をおがんだ。泊らずに帰ってきた。（東上野）

庚塚　庚塚というところがある。そこには、庚申塔が立っている。（小屋原）

庚申堂　もとは山王入口のところにあった。

それを、お堂をこしらえて、今のところ（公民館わき）にまつりこんだ。（下大島）

② 二十二夜講

二十二夜様、二十三夜様　このときは、長生きをねがった。

月があがるまで夜なべ仕事をしていた。

なにかかわりもんをしてしんぜた。

観音様の前に塔がたっている。そこへおさいせん、おさごをもっておまいりにきた。

二夜様のとき、娘のうちへ夜あそびに行くと、てんぷらをあげて、ご馳走をしてくれた。おんなしが余計信心した。

むかしは、おんなしは糸くりをして、お月様のあがるのを待っていた。おとこしは、縄ないをして、お月様のあがるのを待っていた。

夜、縄をなって、翌日、その縄をもって山へもしきとりに行った。（上大島）

両方とも、女衆の行事。ご馳走をこしらえて食ったりした。信仰と娯楽をあわせたもの。（駒形）

三夜待　三夜待をすると、かねに困らないといった。

むかしは、三夜様があがるまで、糸よりをしていた。夜なべ仕事をしていた。男衆はなわないをしていた。

おさんじょさまがあがると、さんじょさまをおがんで、お茶でも飲んで、夜なべ仕事をやめた。（解散した）

むかしは、どこかの家にあつまって夜なべ仕事をしていた。男も女もあつまった。いろいろとおしゃべりをしながら、夜なべ仕事をやった。

三夜様を毎月おがむと、おかね（こがね）に困らないといった。

むかしは、夜なべ仕事が忙しかった。とくに、十二月になると忙し

かった。「師走女に角が出る」という諺があるくらいだった。
女衆は、糸ひきをしたり、お針仕事をしたり、はた織りをしたりした。手拭まで織った。足袋もうちでつくった。夜なべをおそくまでやっていると、近所の人がきて、「ねたんかい、おきたんかい」といった。（上大島）

二夜様　むかし、二夜様を信仰すると、こがねにこまんねえといった。（上大島）
戦前までやっていた。戦後も少しやった。（徳丸）
まわり番で講をしていた記憶がある。十二時すぎ、二十二日の月が出るまで待っていた。ふかしまんじゅうをした。（鶴光路）
公田に二十二夜様の掛け軸があった。（公田）

二十二夜様　昔やった話がある。（下長磯）
掛軸をかけて、月が出るまでおまつりをした。ごちそうが出て、月が出たら帰った。各くるわでおばあさんがした。回り番でやった。（公田）
ニヤ様と言い、月があがるまで、飲んだり食べたりした。（新堀）
むかし、はたおりをしていた人が、はたが上手に織れるようにと、二十二夜様をおがんだという。（上増田）

二十三夜様　地蔵様に集まって月が出るまで、念仏をした。女の人だけの集りだった。
念仏講の人が集まってやった。（亀里龍門）

③　お日待

お日待　十一月一日の朝、餅をついた。
この日は、かならず餅をついて、大きいおそなえをつくって、縁側にだして供えた。ていねいなうちは、この餅を親類にくばった。
特定の家で、お日待の餅を、お寺へもっていった。（女屋）
お日待は、お天道様のおまつり。十一月三日のこと。
餅をついて、おそなえをつくった。おそなえは、縁側のところにあげた。
早くおきて、お天道様のでるのをまっていた。この日は、よそからお客がきた。（上大島）
おひまちは十一月三日。この日、餅をついて、嫁さんの実家へもって行った。あんぴんを重箱に入れてもって行った。（上佐鳥）
お日待は十一月にした。この日、餅をついたうちもあるし、あずきめしをして祝ったうちもあった。（櫛島）
むかしは、おひまちという行事があった。
（十一月三日）朝早く起きて餅をついて、おそなえをつくって、天道様にあげた。縁側にだしてあげた。（上大島）
おひまちのときは、朝早く起きて、餅をついて、おそなえをつくって、縁側にあげた。（机をだして）おひまちは、十一月三日の行事。このとき、早く起きないと、おひまたれえになってしまうといわれた。この日、嫁さんに餅をもたせて、里（お客）にやった。（上大島）
十二月三日がおひまち。この日もちをついて、径が三十センチくらいのかがみもちをつくって、天道様にあげた。朝日がのぼるとき、机を縁側にだして、かがみもちをその上にのせて供えた。（東上野）

④　社日講

社日様　社日様は、彼岸のころにまつる。社日講の組があった。
社日様は、百姓の神様、土の神様という。（天川大島）
西原でやっており、ごちそうを食べる。（下長磯）
春と秋に、社日の日があった。この日は、仕事をするものではないといった。寄った連中で、ええ仕事のことなどのはなしをした。宿はまわりもち。ええ仕事をする人があつまった。

社日講は、町内にいく組もあった。掛軸があって社日様をまつった。一組十人くらい、一家中心であった。

今はやっていない。昭和三十年ころまで行っていた。（駒形）

むかしは、社日講もあった。

社日の日にやった。農家の人たちが会議所にあつまってやった。

社日の日には、土をうごかすものではないといった。（下増田）

十人くらいで社日講をしていた。今はやめてない。（天川大島）

⑤　天神講

天神講　宿阿内に、天神さまがまつられていた。二月に習字を書いて納めた。

元は山で、梅の木がたくさんはえていた。（亀里）

旧十月二十五日が祭日で、高等科の子が責任者だった。

南雲でチフスにかかった年があったからとも、それ以前からやっていたともいう。今は形が変ってつづいている。

各家からおさごを一合くらい、お金を拾銭前後もらい、油揚、ちくわ、正油を買い宿の家で食事をもらい泊った。（西善矢田）

一月と二月の年二回、宿になる家に泊った。

リヤカーでフトン、野菜をあつめたおぼえがある。（小屋原）

中学二年の子が泊った。九月十六日の晩に泊り、一晩中太鼓をたたいている。（鶴光路）

古い筆は天神さまにおさめた。十五夜から十日後が講の日で、泊った。（亀里龍門）

むかしは、子供が天神講をした。

宿に泊って会食をして、半紙に「奉納天満天神宮」とか書いて、翌朝、江木の天神様へ納めに行った。（女屋）

むかしは天神講をした。三月二十四日の晩。個人のうちを宿にした。一晩泊った。その晩、書き方をした。「奉納天満天神宮」と書いた。

これをもって、ムラの天神様（神社境内にまつってある）とか、江木の天神様へおまいりに行った。書き方を、天神様のお宮の中につめこんだ。つぐ朝、これを燃した組もあった。紙が燃えあがるほど、字が上字になるといった。

天神講のときは五目飯をつくって食べた。（笂井）

天神講は、十一月二十四日、一月二十四日、二月二十四日、三月二十四日の晩に、つづけて四回やった。（初参加のものは）次の年からとうろっこになった。

宿は新兵のうち。

小島田全体の子供が参加した。

米はもちよせ、布団ももっていった。

習字道具と翌日の学校道具も用意していった。

宿では半紙に

奉納天満天神宮

〇〇氏

と書いて、翌朝（二十五日の朝）江木の天神様へもっていってあげてきた。

このとき、字をかくと、字が上手になるといった。

食事は、宿で出してくれた。

二十四日の晩と、二十五日の朝食の二回。

ふつうは五目飯。（ごぼう、にんじん、あぶらげ、こんにゃくをつかってつくった）。（小島田）

一月二十四日、子供たちが天神講をした。

男女とも一緒、宿に泊った。組ごとにやった。小学生が参加した。

宿では、半紙に「奉納天満、天神宮」と書いて翌朝、ムラの天神様

（神社境内）に納めた。
江木の天神様へおまいりに行ったこともあった。（こうすると、字が上手になるといった。（小屋原）

⑥　エビス講

エビス講　エビス様は一人ものだから、独身の人が上げたものを食べると縁遠くなる。
夫婦だけで食べる。
一月はマスの中に入れ、上げるものも少なめにする。元手にさいふをあげる。
十二月は俵の上にのせ、上げるものも多くする。米、お金をあげる。さいふもあげる。
具体的にもうけさせてほしいとお願いする。（鶴光路）
春は、ごはんを茶わんに平にあげる。これは、たくさんとらせてくれたらたくさん上げますという意味。
秋は、山盛りのごはんをあげる。
次の日が大黒講で、うどんをつくる。翌日お茶をあげて、元の所にしまう。（下阿内）
新一月二十日と旧十月二十日の二回おまつりしている。（亀里龍門）
むかしは、えびす講を、暮と正月と十月の三回やった。（下長磯）
十日夜の餅をつくとき、えびす講のときの餅もついておく。それをとっておいて、えびす講のときにあげた。
餅を油であげた。もちあげるということ。そのほかに、かきあげをつくった。これは、かきあげるということ。
せりのてんぷらもあげる。これはせりあげるということ。（上大島）
商売の家ではよく祝っていた。恵比須大黒は一人ものなので、既婚者が下げたものを食べる。（亀里）
上増田の北爪家では、正月のえびす講のときはご飯、秋のえびす講のときは赤飯。本家新宅とも同じ。（上増田）
吉田家では、えびす講のときには、おもてざしきにえびす様をかざっておまつりした。えびす講は、正月二十日と秋の二回。
お膳は二人前つくってあげる。正月、秋ともご飯とけんちん汁、さかなをあげる。正月より秋のほうがていねいにまつった。
身上をあげるというので、えびす講のときには、あげもんをした。
秋には、俵をあんで、その上にえびす様をまつった。
また、かねをまきあげるといって、すしをつくってあげた。（上増田）

⑦　そ の 他

講
庚申講……昭和十七年頃までやっていた。
甲子講……大黒さま
日待ち……二十三夜待ち
こういう講を「食い講」といっていた。（小屋原）
二夜様……三夜様、毎日一回夕食後集って念仏をいう。
天神講……二月二十四日、十二月二十四日宿に泊り「奉納天満天神宮」と書いて、ごはんと一緒にあげる。
三峰講……四日に代参に行く、元は仮宮を作った。（下朝倉）

城峰講　五月五日が城峰様のおまつり。この日に代参に行く、代参は四名。前は四月十六日に代参に行ったが、城峰様の方で、おまつりの日に来てくれというので、五月五日に変更した。家並で当番がきまっている。ぶくをきた場合には、次の人と交代してもらった。
城峰様のお宮が井野富造さんのうちの前にある。富造さんのうちを宿にする。代参の人が帰ってくると、富造さんのところへ、お札をうけに行く、酒があがるので、宿で飲んだり、食ったりする。

おみきがあがると、それをもらってわかれる。
お札は二枚。一つは防火、もう一枚は盗難よけのもの。これを、とぼ口のところにはっておく。（小屋原）

三輪様　今は講の行事を休んでいるが、もとは小屋一家で三輪講をやっていた。今は、小屋高男家だけで行っている。
十二月二十日の行事。赤飯をつくってあげている。（笂井）

水神様　水車でまつっていた水神様は、もとは水車の裏にあった。石宮になったが、もとはわら宮で、毎年つくりかえていた。（下増田）

古峰ヶ原様のはなし　あるとき、古峰ヶ原へおまいりに行った人があった。みんなならんでおまつりをし、おさいせんをあげていた。
大勢ならんでおさいせんをあげているので、なげたおかね（おさいせん）が、箱まで届かずに途中におちてしまうのもあった。
ある人が、そのおさいせん拾ってふところに入れたって、
そしたら（古峰ヶ原様が）
「おまえはうちへ行ってみろ。」
という。
その人が急いでうちへ帰ってみたら、自分のうちが火事でやけてしまったって。（下増田）

伊与久の雷電様の講　伊与久の雷電様の講があった。代表の人が伊与久までおまいりに行った。
上大島の神社には雷電様がまつってある。
あんまり雷様が悪いことをするので、こっちへ雷電様をまつったのだという。
昭和十年代までは、伊与久の雷電様まで代参の人がおまいりに行っていた。みのかさをかぶり（すげがさ、きござ）、七十すぎのおじいさんは杖をついて行ったという。わかいしゅも行った。雷電様のお札をうけてきてくばった。各家庭では、神棚にあげておいた。
かみなりさまがなると、おらいれん様に線香をあげた。（上大島）

落雷　むかし上大島に落雷があったので、雷電様を、石宮をつくってまつったものという。伊与久の雷電様の分祀という。（前から雷電様はまつられていた）
落雷があったときには、その場にしめをはると、その害がふえないといった。そのときは神主さんにおがんでもらった。
かみなりさまは、海におちると、上へあがれない。それで、船頭さんは、海にさおを立ててやる。そうすると、それをつたわって宮へあがっていくという。（上大島）

甲子講・子待講　六十日に一ぺんで戦後少しやった。（亀里龍門）

産奉様　下大屋の産奉様へおまいりして、あかん坊がぽかんと抜けるように生まれるというので、底抜け柄杓をあげた。（上大島）
むかしは、下大屋の産奉様の春のおまつりの日に、ほうそうみせをした。とくに、はらみ女がおまいりに行った。また、つごうのいい日にもおまいりに行った。
この辺の人は、産奉様のほかには、安産の神として、おまいりに行くことはなかった。
なお、腹帯は、五月目（いつつきめ）のイヌの日にした。（女屋）

大山講　七夕に石尊さまの講をし、その後水あびをした。（笂井）
大山の阿夫利神社へは、むかしは青年団の正副団長がおまいりに行ったことがあった。（下大島）

観音講　観音講も二月の行事。
これは、男の人のあつまり、馬を使っていた人の行事であった。
観音祝いといった。
馬を飼っていた人は、一月十八日に、石山の観音様へ、馬をつれて

おまいりに行った。（駒形）

戸隠神社の講　昔は代参が行ってお札を受けてきたが、今は、お札が送られてきて、お金を送るようになった。（亀里龍門）

秋葉講　一月一七日、きも入りがいて、宿に集まってやっていた。戦前までで絶えてしまった。（鶴光路）

羽鳥一家がまつっている。火事が明治の頃多くて始めた。屋敷まつりと兼ねておまつりしている。

しめなわをはり、赤飯をおそなえしている。（亀里寺家）

八海山　竹の上にお札をつけて高く上げておいた。昭和十年頃やっていた。（亀里）

小石神社　深町一家で講をしている。シャクジサマといっている。（下阿内）

(二)　代参講と社寺参詣

三峰講　毎月四十九日に三峰講をしている。笂井では、現在三組で三峰講をしている。

むかしは、男衆だけが参加していた。

宿のことは、会番という。各軒で交代でしている。

笂井の三峰講は、前組、北組、西原・中組に一組ずつ、計三組ある。

代参のときは、三組が一緒に行った。前組には、組が小さいので一人、あとの二組は二名ずつ行く。十九日に間に合うように行ってきた。

代参の順序はあらかじめできている。

代参人名簿

会番台帳

昭和廿五年春季三峯講

会番主　須藤勝太郎

六本木喜久造
須藤　米男
須藤理十郎
須藤　與重
須藤　春雄
小屋勝三郎
梅沢　義衛
中島彦一郎
羽鳥　幾造
小屋得司

代参費　一人四円
飯　料　一人拾円

明治三十弐年
会番人名簿
旧十月十九日

記

斉藤多三郎
小屋　歌吉
須藤　政八
須藤与太郎
中嶋彦太郎
斉藤　房吉
小屋　嶌吉
小屋右兵衛
梅澤　鉄蔵
六本木政次郎

井野庄太郎
斉藤作次郎
須藤儀十郎
須藤柳次郎
梅澤仙太郎
斉藤敬十郎
小屋　皆司
斉藤　文八
須藤小太郎
須藤紋三郎
須藤栄太郎
代　田島秋三郎
星野源太郎
参　大手宮吉
羽鳥幾太郎
者　井田嘉津雄
小屋孝太郎
昭和十年四月十七日
一金五圓八拾銭
内　金参円　眷属料
訳　金弐円八拾銭　附札料

○ブクをきている人は、三峰講の会合には参加しない。親類の人がなくなった場合には、オタナアゲがすめば、参加してもさしつかえなかった。自分のうちの家族がなくなったときは、一年間、会に参加することを遠慮した。

お札は三枚あった。

三峯神社諸災除御守護
三峯神社火防御守護　お勝手にはっておく
三峯神社盗賊御守護

笂井の斉藤誠さんのうちでは、泥棒に入られた。そのあと、三峰様を信仰するようになり、毎年三峰様へおまいりに行っている。（笂井）

むかし、三峰講をした。代参に行った。宿は代る代るやった。

（下大島）

下田裕亮さんのところが講元で、毎年四月十九日が祭日で、三峰様をおまつりしている。

もとは十五軒で講を組織していたが、今は十一軒である。一家づきあいの人、親しい人が加入している。

山峰様の方から、講不へ連絡があって、その日に本社へ代参の人がおまいりに行き、お札をうけてくる。代参の人は二名、のこりの人は、当日、オカリヤづくりをしている。

当日の宿は交代、くじびきできめている。宿でおひまちをする。

費用の負担は、お札の代と代参者の足代だけ、飲み食いの費用は宿もち。ここに掛軸をかけておまつりをする。このとき、三峰様からうけてきたお札をくばった。

お札は、火伏・盗難よけ、諸災除の三枚。各家では、うけたお札は神棚においたりする。

お宿で赤飯をだしてくれたりする。もち米を四合ずつもちよせる。おかねは実費負担。

大昔は三峰様まで歩いて行ったという。その後、自転車で行くようになり、今では自家用車を利用している。むかしは、おこもり堂でおこもりをしてきた。あるいて行ったときは、三晩泊りであったという。

（小島田）

竜門でやっている。代参が行く間、仮宮をつくる。（亀里竜門）

蚕があたるようにオイヌサマを借りてくる。（笂井）

鶴光路、横手、下阿内にある。下阿内は、宿をまわり、宿に作ったお仮屋はくちはてるまでおいておく。鶴光路、横手は石宮にした。

鶴光路は五〇軒で七人代参なので、七年に一回順番がくる。七人の内一人が代参長になる。

盗難、火防、家内安全の三枚のお札を受けてくる。（亀里）

横手の約半数、竜門の全戸、下阿内の三分の一でやっている。公田は昔やっていたが、終ってしまった。（亀里）

くじをひいて、交代で参詣に行く。お札を受けてくる。厄病・盗難・災害除けの札だった。代参の間、年番が仮宮を作った。のぼりがある。

一月八日が祭日、この日は龍門の御年始日になっている。（亀里龍門）

昔は講があり、年に一回行った。徳丸・竜門はしていた。

下川は行くところが多く、大山アフリ様へ四人、貫前神社へ四人、伊与久、雷電神社に三人行った。

昔はお礼を納めるお仮屋を作った。

当番がいて、残っている人がお仮屋を作り、代参（二人と四人もある）の人が来るのを待っていて、ごちそうをした。（力丸）

講

三峯講。代参が出かけている間、仮小屋を作った。

念仏講。葬式のあとに念仏をあげた。（亀里阿内宿）

榛名山代参講連名帳

明治四十四年　三月改正

立札　四枚

大札　九枚（区長一人、伍長八名）

笊粥　九枚（作柄を占ったもの）

お　札（新堀）

嵐除けの札（新堀）

厄除　百枚（各戸に一枚ずつ配った。）

費用は各戸から二銭五厘集金している。今は八百円になった。

明治三十三年の厄除は九十枚だった。（新堀）

ジョウミネサン　四月一五日が祭日、十名が代参に行って、お札を受けてきて毎戸に分ける。

火伏せ、盗賊除けの神で、代参の時は、各戸から一人出て、竹とワラで仮宮を作った。代参は前の日出ていくので、次の日の夕方帰ってくるまでに作る。夕方には、お赤飯をあげた。（新堀）

代参講　榛名神社に、四月末頃、代参が十名行ってお札を受けてくる。町の東西南北の四か所に、竹にお札をつけて立てておく。（新堀）

伊勢参宮のオカリヤ　むかし、伊勢参宮に行くとき、オカリヤをつくった。

自分のうちの田圃につくった。

おまいりに行っている間は、そこへ陰膳を供えた。

帰ってくると、オカリやのところでお祝いをした。本人が、オカリ

ヤに入っているところを火をつけて、オカリヤを燃した。
火をつけて、
「ほれほれ、早く出なくっちゃ」
といった。（小屋原）

伊勢参り　伊勢参りは、一回はじめたら三回しろといった。
伊勢参りのとき、コンニャクをあっためて体にだいていく（体のあとさきにつけていく）とかいろの代りになるといった。
とんがらしをもっていって、それを売りながら、伊勢参りができたという。むかしの人のはなし。（上大島）

伊勢まいり　むかし、伊勢参りに行くとき、田の中にオカリヤをつくった。オカリヤに一晩寝てから出かけた。
帰ってくると、またオカリヤに入ってから、オカリヤを燃した。
なお、伊勢まいりに行っている間は、オカリヤのところへうちのものがかげ膳を供えた。
この習慣は、大正時代まで続いていた。（下大島）

㈢　百　万　遍

百万遍　盆がらに、下大島の青年が行った行事。
はじめは、お寺の庭で太鼓と鉦をたたいていた。すずしくなると、ちょうぱしにへいそくをたてて、それを、太鼓と鉦をたたきながら、大通りを行列をつくって、駒形との境、塚のあとのようなところまで送りだした。青年はゆかたを着ていた。
この行列が通るとき、ムラの人は道のはたに出て見送った。このとき、ちょうっぱしのへいそくでおはらいをしてもらった。
この行事は、昭和二十七年にはまだやっていた。（下大島）
七月のお盆のあと（盆がらの日）百万遍を行っている。
庚申堂のところで、ずず（数珠）をまわす。としよりの人が、鉦と太鼓をならしながら念仏を申す。
そのあと、下大島と駒形の境まで送りだした。ちょうぺしに幣束をたてて、鉦と太鼓で送りだした。これは午後からの行事。
おまつり世話人が出て、お札をすって、これをムラ中にくばった。
ムラの人が出て、このちょうぺしをいただくと、悪い病気にかからないといった。ちょうぺしをあたまの上にいただいた。
ずずまわしは、世話人と年よりの人がやった。「ナムアミダブツ」といいながらまわした。
送りだすときは、ずずはもたず、鉦と太鼓で、どんかん、どんかんならしながらやった。太鼓は二人でかつぐ、はたく人がべつにいた。鉦は一人でたたいた。
ちょうぺしにご幣束をたてたのをもつ人が一人いた。（下大島）
盆がらの日に、寺の境内（庭）で、百万遍の行事をした。この中心になったのは、としよりの人。鉦、太鼓をたたきながら、庭で珠数をまわした。朝から晩まで珠数まわしをした。
そのあと、ちょうぱしに赤と白の幣束をたてて、それを青年団長がもって先頭にたち、おはやしやムラの人がついて行列をつくって、駒形と下大島の境のところまで送りだした。
その途中に、ムラの人たちがかど口に横にならんで待っていた。
ちょうぱしを、そのムラの人の頭の上にかざしてがった。厄をおとすといった。お寺から、駒形までの間を行列していって、境のところに、ちょうぱしをおいてきた。疫病神をムラの外へ送りだすということであった。
行列は、ちょうぱし、太鼓・鉦・一般の人という順序で、太鼓と鉦をならしながらいった。行列には、わかいしゅが中心になって参加し

た。

この日は、盆がらだったから仕事は休みで、ムラの人も参加できた。

そのころは、七月の盆だった。

なお、太鼓と鉦をたたき、数珠をまわすときに唱えごとがあったようだが、覚えてはいない。

この百万遍の行事が終ると、夏の農作業がはじまった。（下大島）

七月二十二日か二十三日にじゅずをまわして百万遍をした。（鶴光路）

虫送りの行事で、土用の午の日にした。昔は数珠があった。神社の拝殿でした。子供が集まってした。数珠をまわしながらカネをはたいた。（宮地）

百万遍は、寺の本堂でした。青年がしたこと。

じゅずをまわしたことがあった。

行列をしていって、ちょうぱしを頭の上にとおしてもらうと、病気にならないといって、途中にならんでいる人はそうしてもらった。

ちょうぱしは、駒形との境のところにおいてきた。（下大島）

子供のとき、下大島のわかいしゅが、太鼓と鉦をたたいて、大島田圃を行列してきたのを見たことがある。

ちょうぱしに幣束をたててもってきて、ムラ境において行った。

大島の連中は、逃げていった。

ムラ境にこんもりしたところがあって、そこへちょうぱしを置いて行った。大島のてえがいなくなると、駒形の子供たちは、大人に「早く行っておっぱらって来い」といわれてちょうぱしと幣束を川へ流してきた。

厄病神を捨てて行ったというので、そんなことをした。（駒形）

念仏の鉦　干時明治七年甲戌年十月納之　上毛野群馬郡朝倉村観音堂下曲輪施主阿佐見横室大嶌　小林笠原吉田倉林関口石幢組一家中

観音堂は上朝倉にある。下曲輪は下朝倉のこと。（下朝倉）

ジュズ　銘文があって次のようである。

「文久五庚申閏七月吉日　善光寺　施主新五衛門　常念仏」

このジュズが　まわってくると　ジュズにおじぎした。（鶴光路）

㈣　天道念仏・念仏

天道念仏　上増田の大塚田では、今でも天道念仏を行っている。

期日は、春の彼岸の入り口の日。

場所は、大塚田の公民館。むかしの寮。

薬師様の像があって、その前で鐘をたたく、むかしは、線香一本たてて、それが燃えきるまでが二人一組で鐘をはたいている。今は十分間くらいで交代。鐘がとなえないようにたたいた。

「ナムナム」といいながらたたく。

今は十時から三時ごろまで。終ってから会食をした。むかしは、ぼたもちなどをあげた。

この行事は、お天道様に、悪疫退散・組内安全を祈ったもの。

数札があって、数とりの人がいて、「ナムナム」の声を数えた。五～六万回鐘をたたく。

「ナム」といえば一回とした。

念仏が終ると、お札をすって、おそなえと一緒に各戸にくばる。（今は駄菓子）

天道念仏は、日の出から日の入りまでしている。

大塚田が、九十三、四戸。これを四班に分け、一年交代で当番をつとめることにしている。

当番の中の三役は、当番頭、会計、公民館主事。この三人が中心と

なって、天道念仏、浅間様、ご年始の世話をしている。（上増田）

天道念仏は般若心経をあげてからはじめる。

大太鼓、念仏鐘、双盤を一つずつ、三人でたたく、これは交代でする。

線香をあげる。幣束もあげる。お灯明（ろうそく二本）をあげる

三月十五日と七月二十五日（のちに七月は十五日に変更）の二回、観音堂で行っている。もとは七月は十五日だったが、盆がぶつかるので二十五日に変更した。

天道念仏は、日の出から日の入りまで行ったが、今は（昭和五十三年）八時から四時三十分までとしている。

お札を毎戸くばっている。

「奉修天道念仏」というのは三月にくばった。とぼ口にはっておく。

朝飯前は消防手の人たちがしていてくれる。朝飯をたべてから老人会の人たちが出てきて交代する。

もとは、和尚さんがきて、お経をあげておがんでくれた。今はしていない。

天道念仏は、天道様が、町民の疫病をしないように救ってくれるという。町民の代りに、天道様が病気を背負ってくれるのでお礼にしているのだという。

七月二十五日には、上大島の人たちは、粉類を一切食べない、お天道様がひっこむまでに食べない。ムギダチといった。

お天道様がひっこむと、うどんをつくってあげて、夕飯に食べた。ムギダチだから、味噌汁もすわなかった。こもみならついて食べてもよかった。（米の粉のもち）朝とお昼はもちを食べ、夕飯にうどんを食べた。（上大島）

このとき餅をついてあげた。

餅はうすぬきにして、まるめてあげる。

お盆にのせて、ちゃぶだいの上にあげた。

暗いうちについた。天道様があがるまでについてあげた。（上大島）

むかしは、天道念仏を、日の出から日の入りまでやった。

場所は当番のうち。これはくじをひいて順番をきめた。

三月と十月と三回やった。今は、三月に一回だけするようになった。

かねと太鼓をたたきながら、「ナムアミダブツ」といった。

線香をたてておいて、その一本がもえきると交代するようにしていた。

宿では、お茶とお茶うけ（おもに煮物）をだすくらいで、食事はださなかった。酒は、おがむとき一升しんぜておく。天道念仏が終ってから、これを参列者になした。

なお、天道念仏のときには、「廻状」をまわして、天道念仏がいつ、何時からどこで行うかを、組内に知らせた。

天道念仏のとき、お札をすって組内にくばった。

なお、宿（会場）の座敷（今は須永公民館）の四隅にささ竹を立てて、しめをはった。

天道念仏が終ると、代表者がしめを切って、四隅はたてた青竹にお札をはさみ、しめなわを短く切って、まるめてから竹にさげた。その竹を、ムラの出入り口にたてた。これは、七、八本用意した。このことを、八丁じめといった。これは、外から病気が入らないようにということであった。八丁じめをたてるのは、当番の人とか、その方面へ帰っていく人。

むかしは、当番のうちで一升餅をついた。おそなえをつくって、天道様にあげておく。

天道念仏が終ると、おそなえを小さく切って、その組内の人たちに、

お札と一緒にしてくばった。今は、餅の代りに、小さいお菓子を買ってきてくばっている。

天道念仏は、天道様をおがむ行事。（下増田）

阿久津では、もとは、春秋の彼岸の中日に天道念仏をおこなった。そのころは、日のあがりから、日の沈むまでしていたという。宿は交代でつとめた。現在は、研修センターで行っている。

この天道念仏は、阿久津の人たちだけで行っている。

個人の家を宿にしてやっていたころは、おくりの座敷で行っていた。はじめは、床の間の方へ西）へむいてやっていた。しまいに、お天道様の方へむいてやる。

鉦と太鼓をはたく。どうとりがいて、リードする。

「ナムアミダンボ」

をくりかえし、鉦と太鼓をはたく。

どうとりが、

南へむいて「南無阿弥陀仏、南無天道大日如来」といいそのあと、「ナンマイダンボ」と唱える。「ナンマイダンボ」をくりかえしながら鉦、太鼓をたたく。

むかしは、お札をすって、個人の家にくばったが、今はくばらない。天道念仏が終ってから、竹にお札をはさんでムラ境にたてた。

今は、東が安堀との境（二か所）、北、南、西（須永との境）にたてている。帰りがけに、それぞれの方面へ行く人が、お札（竹）をうけとってたてる。それは、盗難防止、はやり病気が入らないようにということであった。

むかしは、天道念仏を一昼夜行っていたという。

どうして天道念仏をするかについては、むかしの人がいうには、天道様が、人間の代りに病気になってくれるので、お礼に、天道念仏をやるのだという。（下増田）

天道念仏の鉦は二つ、太鼓は一つ。

交代で念仏を唱えた。交代の時間は、むかしは、線香一本が燃えきるまでの間といった。

むかし、一晩中やっていたころは、夜中には寝たり、ちょうはんをしたりした。

線香については、早く交代できるようにというので、線香をかいてたてたり、香炉に深くたてたりしたものもいたという。

掛軸を入れておく箱

文政元年　下増田村

如来様御箱　施主

細野甚右衛門

花立て

天保十年

月天子　願主

亥六月日　細野久之丞

明治廿二年七月ヨリ記

天道念佛會所連名簿

群馬県南勢多郡

木瀬村大字下増田村

阿久津組（下増田）

奥原では、むかしは天道念仏をしていた。

班ごとに、交代で世話をした。

個人のうちを宿にしてやった。彼岸の中日の行事。（下増田）

むかし、小屋原でも天道念仏をしていた。

春の彼岸のころにした。場所はお寺。朝から晩まで鐘をたたいていた。(小屋原)

ナムアミダブツを三べんいって、太鼓をトントントンと三回たたく。唱えごとは、鉦をならしながらいう。

やめるときには、「オンアボキャア……」を三べんほどいってからやめる。

むかしは、個人の家を宿にして、天道念仏をやった。奥座敷に四本の竹をたてて、しめなわ(たなわになったもの)を張った。竹と竹の間には、ご幣を四つずつさげた。

天道念仏が終ると、このしめ縄を切って、まるめて、お札と一緒に竹の先にゆわいつけて、辻々に立てた。これを立てるのに当番の人。場合によっては、その辻に近い人が立てた。

むかしは、天道念仏は、太陽があがってからひっこむまでやっていた。座敷の障子をあけて、太陽の方向にむかって念仏を唱えた。天道様にはおそなえをあげた。

これをつくるのは当番の人。一升のおそなえを、当日の朝つくった。

このおそなえは、天道念仏が終ってから、小さく切って、供物として各戸に、お札と一緒にくばった。天道念仏のお札は二枚、二種の版木があって刷った。

なお、天道念仏の日どりについては、廻状があってまわした。組を東西に分け、二手に分けてまわした。大体、当日の十日くらい前からまわしはじめた。当番のうちから、家の順にしたがってまわした。半紙に名前と日どりを書いて、竹の先にはさんでまわした。

天道念仏は、三人一組でやった。

鉦をたたく人

太鼓をたたく人

数とりをする人

「ナムアミダンブツ」ととなえながら、太鼓と鉦をはたいた。「ナムアミダンブツ」を三回となえると、太鼓をうった。

線香をたてて、その一本が燃えきると交代した。

仕上げのとなえごとが「オンアボキャア」。

座敷に坐った人たちを半分ずつに分け、それを交代にやってもらった。

天道念仏が終ると、当番の人が、会計報告をする。(当日あつまった人に対して)、これは会所の人。

前は、一年に二回、春と秋の彼岸の中日にしていた。

隣保班単位に当番をしている。

当日のご馳走(お茶菓子)は当番の人がもってきた。

宿はもとは個人宅、そのつぎが八幡様の社務所(会議所)その次に公民館を宿とした。(昭五年から)

天道念仏は、天道様をおがむこと。

辻に竹をたてるのに、組の中へ、厄病が入らないようにするため。魔除けのためである。

新しい当番表は、昭和三十一年にできた。

昭和三十一年三月二十一日

天道念仏順番帳

会計平野金次

日どりは、宿のうちの都合できめた。(当番)大体、彼岸の中日とした。(下増田)

女屋では、むかし二月十五日に天道念仏をした。もとのポンプ小屋のところ、火の見があった。そこでやった。

朝、暗いうちから、天道様がひっこむまでの間、太鼓と鐘をはたい

天道念仏（下阿内）

た。

すぐそばを、赤城へたきぎをとりに行く人が通った。やまどといった。この人たちが通るとわざとかね・太鼓を大きくはたいた。子供に駄賃をくれてはたかせた。「やまどがくるから、うんとぶっぱたけ」といった。

どんちゃん、どんちゃんと鉦を交互にはたいた。

うちではもちをついた。こもちくらいはついた。（女屋）

鉦をたたき、日の出ているうちは念仏をとなえた。

八月の土用の入り、八時から四時まで、太陽と月の観音さまがいる。（下阿内）

七月一七日、天道念仏をした。大きなじゅずを大勢で持ってまわした。（鶴光路）

八月一日～二日にかけて、公民館でやっている。（下朝倉）

七月一七日にやった。とうふ一丁を四つに切って分けた。そのためのきもいれをした。

太鼓と鉦をならしながら念仏をとなえた。体の動せる人は、一度入ってじゅずをまわす。夕方村の中をまわした。（鶴光路）

旧七月十七日に、年番がお寺へ集まって念仏をとなえた。鉦、太鼓をたたきながら、じゅずをまわした。

この日はボンガラといって、盆があけた日になる。（朝倉）

むかしは、駒形でも天道念仏をやったという。（駒形）

土用の三ツ目、七月二十二日にやっている。（下阿内）

七月二十五日。一家の全員が交代で鉦をたたいておまつりする。日の出から日の入りまでするのが本当。

月と日の観音様の掛け軸をかけた。（亀里）

寒と念仏　寒に入ってしてわるいのは念仏。

どうしても、寒の間に念仏をしなければならないときは、鉦をならさなかった。ひざをはたいて念仏をした。

往生寒念仏といった。

寒には、ひばな（大根葉・なっぱをゆでて干したもの）をつくるなといった。火にたつといった。火事になりやすいということ。（野中）

念仏講　女の人に男の人が入ってやっていた。葬式の後念仏をあげた。（朝倉）

寒念仏　寒念仏はするなという。寒に入ったら、鉦の音をさせるな。念仏のときは、枡のへったをたたく。（上大島）

十六日念仏　十六日念仏は、毎月、観音堂でやっている。（上大島）

(五)　養蚕祈願

絹笠様　もとは、神社の東の真中辺にあった石。　石がまるだしにあった。それが絹笠様だった。今は、その石を神社の東北のすみにうつしてお宮をたててまつっている。

絹笠様は、蚕の神様として信仰されている。

祭日は八十八夜(五月一日)。この日、神主をよんでおまつりをした。

酒・果物・野菜・かしらつきをあげた。

まゆがとれたとき、お礼まいりにきた。そのとき、まゆをもってきてあげる。

八十八夜の前の晩には、各家庭では、霜よけとして、草餅をついて、

畑にあげた。桑の木に一つさした。霜除けとした。
餅は、神棚・仏檀・屋敷稲荷様にもあげた。なお、斉藤家には、つぼ山に地蔵様がまつってあるが、そこにもあげた。
くわぜにさす餅はあんこを入れない草餅。
もとは、五月一日に養蚕講話を聞いた。
お札をくばって、そのお札は蚕室にはっておいた。
親の代には、小屋原の稲荷様へおまいりに行った。まゆを五粒に糸をとおして持っていってあげてきた。(笂井)
絹笠さま。人形が徳丸にある。女の人の像のようである。
(亀里寺家)
オシラサマといった。
迦葉山へお札を受けにいった。芝稲含様にもらいにいったこともある。(鶴光路)
キヌガサさまで、像を売りにきたことがある。(新堀)
養蚕の祈願　迦葉山に行ってお札を受けてくる。
芝の稲含におまいりして、籠を買ってくる。
一本木正平稲荷におまいりして、狐を受けてくる。
上川淵の春日神社の祭にいって、神楽の中てまくはしをひろってきて、蚕の時に使う。
蚕のあたる家の桑の木をもらってきて、飾りかえの時に使うと、蚕があたる。
朝倉の少林山、初市でだるまを買ってきた。
蚕のお札　迦葉山のお面を借りてきて、新しいのを買って返す。
朝倉の少林山(少林山古墳の上にある)でお札が出た。塚の上で階段があり東向きになっていた。赤いほこらがあり神木の杉が生えていた。昔は栄えた。
上佐鳥の一本杉正平稲荷のお札もあった。
少林山は正月にだるま市、暮には松市が出た。(朝倉)
榛名神社の霜除けの札を受けてきた。桑の葉が霜でやられないようにいのった。五月始めにおくので、四月下旬には受けてきた。迦葉山のお札も受けた。(新堀)
蚕影様　もとは、自治会の行事として、この蚕影様の世話をしていた。戦中・戦後にかけて。(小屋原)

(六)その他

いぼ薬師　地名が榎町というところ、上増田の東方に位置する。そこにはイノミの木があった。石仏があって、いぼ薬師と呼ばれていた。小石で石仏をはたいて、その粉をつけると、いぼが治るといった。
(上増田)
いぼ神様　もと、榎町というところにあった。石の粉をいぼにつけると、いぼがとれるといった。耕地整理(土地改良)のときに、地蔵様の境内にうつした。(上増田)
供養塚　これは、むかし生き埋めになった人の塚だという。
下川淵の人という。ゆうか坊という人だという。
塚の中に入って念仏を唱えていた。竹の筒をたてて、中へだんごを入れてやったという。
この人は、念仏の声がしなくなったら死んだと思えといって、中へ入ったという。(小島田)
軒下のこと　軒下には、無縁仏がいるから、お茶を外へ捨てるときには、軒下に捨てろといわれた。
あまおちのところは、三途の川といった。
軒下には、小便するなといわれた。神様にばちあてられるぞといわ

れた。（上大島）

無縁仏　無縁仏にやるといって、軒端にお茶をこぼした。

無縁仏は、宿がない、縁のない、（盆のときでも）呼んでくれる人のいない仏様のこと。

よそのうちの軒端で迷っているんで、盆様にあげたお茶をとりかえるときになげてやった。（女屋）

無縁仏　無縁仏というのは、ほんとうにたよりにする人のない、お守りをしてくれる人のない、血をひいた人のない仏様のことである。

盆のとき、そのうちの仏様を迎えてくると、仏様のあとについてくるという。

無縁仏は、座敷へあがれないで、軒下にいる。

盆のとき、寺からもらってきたお茶を軒下におとす。そうすると、そこにいる無縁仏がお茶を飲めるといった。

なお、盆迎え、盆送りのときには、仏様は玄関（とぼ口）から出入りしないで、縁側のサモトから出入りする。（天川大島）

子供のこと　あかんぼうがにっこり笑うことがある。

それは、子供の神様がいて、あかんぼうをちょうすのだといった。

あとの子がはじまると、上の子がよくぐずるといった。（東上野）

初穂　今は稲刈りも機械を使うようになったが、稲の刈りはじめのとき、二、三株とってきて、おかまさまのところへさげておく。（下長磯）

ナスの初なり　ナスの初もぎは、棒の先にさして畑にたてた。お天道様にあげるという。

初もぎのナスは食べる前に天道様にあげた。（上大島）

初なりのナスは、棒にさして、畑にたてる。お天道様にあげるという。

初物のナスは、天道様にあげる。棒にさして、ナスの畑に立てておく。

キュウリの初物についてはとくにいわない。（小屋原）

天竺浪人　一月十八日に、かゆのうつわを洗って、その洗い水をうちのまわりにまく。虫にさされないという。

そのあと、そのかすをうつわに入れて、庭の石の上とか、くねの上とかにおく。これは、天竺浪人にやるのだという。

これとはべつに、鳥のえさと、屋敷の中二、三ヵ所においておく。

もみすりのあとのこごめ、夏にはとうもろこし、野菜など。

これは、天竺浪人とはべつ。なくなると足してやる。（富田）

お百度まいり　自分の体の具合が悪いとか、自分の子供が丈夫でないようなときに、ムラの神社へお百度まいりをした。（東上野）

重病人がでたとき、お百度まいりをした。（あるいは、出征兵の無事を祈ったりして）あとでお礼まいりをした。（東上野）

百社まいり　ムラから戦地へたくさんの人が出征したときには、ムラの人がでて、百社まいりをした。武運長久を祈ってのこと。

紙のお札をはってきた。（東上野）

戦争中、出征兵士のために、百社まいりとか、十二社まいりというのをした。出征兵士が戦地でけがをしないように、また無事に帰ってくるようにと百社まいりをした。

県内の十二社まいりをすることもあった。

ムラの人がはなしあいで、百社まいりをしたこともあったし、親戚の人がたのまれて百社まいりをした。

十二社を、親戚のものが手分けをして祈願のお札をはってきた。

「百社まいり」（祈願者の住所氏名も書いてあった）のお札を神社へはってきたもの。

県内の比較的大きい神社へおまいりに行った。
佐波郡の麻利支天さまへ、無事帰還を祈りに行ったこともあった。
（東上野）

お上人様　雨乞いのお願いをした。七月二十一日におまつりする。二十一日間生き埋めになったという。（天川大島住宅）
二十一日間生き埋めになった。土の中に竹のつつをさし、ゆすぶると水をさしてやった。中で鈴をふっていた。
二十一日たったので、本当のお上人さまだといい、七月二十日が祭日である。二十日の晩にとうろうをつける。
ここの木を切ってはいけない。切ったら中気になったとかいう。
とうろうをつけると雨が降る。（下長磯）

お遍路　秩父へ行った話を聞いている。（横手）

星祭　オサンジョサマをまつる。暦を見て、星が出るまで念仏をとなえた。（オリオン座）
宿を順にかえて行った。（朝倉）
埼玉県騎西町へ参参にいった。（亀里）

ナンミョウサマ　新堀のおばあさんが占いをした。板碑が井戸の中にあるからさがせというので、井戸の中をさがしたら、六尺で大日如来の梵字が書かれたものがでてきた。（亀里）

国さんのこと　上大島に、国さんというおがみやがいた。
この人はしゃくじさまをおがんでいた。上大島でも、しゃくじさまをまつっていた。（上大島）

おがみやの国さん　上大島の館野明正さんのうちの隣へ女屋から婿にきた人。
上大島の北に尺地様をまつっていた。
ゆびがひょうそうになった。おとっつあんにおがんでもらっといていたら、指がもげてしまった。
国さんは、易をみたり、おがんで病気をなおしてくれたりした。
尺地さまが国やんにのりうつっていた。（下長磯）

第七章　石造物

上川淵地区

上佐鳥町

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	六地蔵	79・23	宝永二乙酉歳四月吉日 明治三年七月
2	三界万霊塔	106・28	三界萬霊 施主墓壇中
3	廻国供養塔		(右)西國一番観世音供養塔 (如意輪観音坐像) (左)文化十三年丙子閏八月吉日 越後國蒲原郡山嶋村願主了真
4	紀念碑		富国強兵 為御即位紀念　中澤吉之助勤書 (裏)上佐鳥村青年会 顧問　村田勝太郎　他六名略 會員　四十七名略 庭師　岡田寛次郎　大島忠次郎刻 大正四年十一月十日
5	道祖神	73・48・22	(右)中英書 道祖神 (裏)寛政四壬子歳八月
6	道祖神	90・57・34	(右)明和八辛卯年」九月吉日」新町中 (正)道祖神
7	道祖神	84・50・30	道祖神 (裏)明和八辛卯年九月吉日」西原中
8	旗立て一対	206・37・28	(右)奉　日露戦役 (左)明和四十年一月　上佐鳥村出征軍人一同 (右)人名十四名略 (左)献　凱施紀念
9	鳥居	350・520	春日社　元治元甲子歳八月吉日　氏子中
10	神灯一対	(212) 143・55・55	(右)昭和十二年三月 御神燈　奉 氏子中 (左)氏子中 納 (台)昭和十二年三月 太々神楽装束新調記念
11	灯籠一対	180・42	(右)一天太平四海静□ (左)万民豊楽氏子安全
12	手洗	50・110・55	無銘
13	猿田彦命	83・35・30	猿田彦命

櫛島町

14	石祠二基	60・38・53 61・33・40	無銘 午頭天王宮」寛政十二庚年 (左)申五月吉日」上野講中
15	石祠	61・34・45	八幡大菩薩」奉祈　願主」延宝九辛酉九月吉日」北爪弥左右エ門
16	石祠	58・39・55	八幡宮」北爪氏
17	石祠	55・28・41	(右)大正二年」八月十五日」建設
18	石祠	64・35・51	奉造立　願主」正徳五乙未六祥□日 (左)薬王院住□□□代
19	石祠	64・31・47	(右)明治二庚己年」三月吉日 (額)山神宮 (左)新町中
20	石祠	65・28・44	延享二乙丑年」五月吉日 (左)関口幸八
21	庚申塔	83・58・26	庚申塔」中束英拝書 (裏)天明八戊年」當村講中」申九月祥日
22	石祠(天満宮)	65・25・44	(右)明治廿七甲午」年八月吉日 (台)氏子中
23	二十三夜塔	114・54	享和元辛酉歳　願主金吉 (如意輪観音坐像) 十月吉祥日　村女講中 (台)二十三夜

朝倉町

24	地蔵菩薩像	84・29	(台)念佛供養村中」天明」元丑」十一」月吉日
25	大山彦尊	76・48	萬延元庚申年」大山彦尊」村中」現住貫中代
26	石祠	80・50	享和元酉天」天満宮」八月廿五日
27	道祖神	75・45	明和八辛卯天」道祖神」八月吉日
28	馬頭観音	57・30	馬頭観音
29	庚申塔	98・30	庚申塔」砂川氏
30	馬頭観音	97・42	安政三丙辰年」馬頭観世音」六月吉日」今井□□造
31	馬頭観音	124・51	宝暦六丙子年」奉造立馬頭観音」七月吉日
32	庚申塔	66・22	(表)(二猿レリーフ) (裏)(二鶏レリーフ)　板碑形
33	庚申塔	155・61	寛政十二庚申年十二月吉日」庚申塔」當村講中
34	大黒天	100・40	安政四丁巳年」大黒天」二月吉日　牛込氏
35	甲子塔	110・31	元治元甲子年十一月甲子」甲子」村中
36	鳥居	238.5・371・24	(右)飯塚氏子中 (額)正一位稲荷神社 (左)大正六年二月吉日

37	道祖神	73・50・16	(右)寛政十二庚申年三月吉日 道祖神 (左)當村飯塚中
38	墜神碑	100・72・12	墜神碑　耕雲書 (裏)慶應紀元乙丑歳八月日
39	石祠(天神)	69・34・39	(右)天保十二辛丑年三月吉日 天神宮
40	石祠(稲荷)	95・53・100	(額)正一位稲荷神社 (裏)大正六年二月吉日 (台)飯塚氏子中
41	石祠(天王)	70・42・57	(右)明治三十三年」六月吉日此建 (額)天王宮
42	地蔵	35・21・6	
43	庚申塔	106・43	寛政四壬子年六月吉日　新町講中 庚申塔　中英書
44	子持塔	82・32	新町講中二十人 子待碑 明和八年外年九月吉日
45	如意輪観音	126・30	寛政十二庚申六月日 (如意輪六臂坐像) 新町女人講中
46	子安観音	106・44	文政六癸未四月吉旦 (子抱き観音像) 女人講中

47	馬頭観世音	80・48	左前橋道 馬頭観世音 文化四丁卯年正月吉日
48	文字五輪塔	89・54	寛延三年天 空風火水地建立也 十月下旬　小屋氏立之
49	如意輪観音	165・74	福聚海無量」最敬応頂礼 (如意輪六臂坐像) □□□戊寅歳　(文政元) (台)奉造立百萬人誦供養」具一切功徳」慈 眼視衆生 (台)現世安穏」後生善處」世話人(九人略) □□村筆子中 (台)(八人)霊位」有縁無縁」乃至法界平等 利益
50	二十二夜塔		(右)天明四甲辰年 (如意輪観音坐像) (左)十一月吉日 (台)上朝倉邑」二十二夜
51	庚申塔	63・46	(右)寛政十二年 庚申塔 (左)庚申六月吉日
52	念仏庚申塔	67・25	元禄十三庚」南無阿弥陀佛(二鶏二猿)」 辰十月十三小(日)
53	観音像	75・41	

後閑町

54	石祠(庚申)	95・32・53	(右)明治三十六年八月十二日 (額)猿田彦 (左)後閑中組氏子中 (台)中組中
55	阿弥陀如来		三体あり
56	石祠	94・32・57	(右)天明八甲申年」四月吉日 (左)村中
57	筆子塚	176・51・48	(右)慶應三丁卯歳」正月九日」俗名川和儀右エ門墓 (正)川徳儀園清居士位 (左)奉読誦大乗妙典一千部供養之攸　浄土へ (台)筆子中
58	庚申塔	78・32・6	(右)安政七庚申年 (正)庚申塔 (左)二月吉日
59	馬頭観世音	63・21・20	(右)嘉永五壬子歳」三月吉日 (正)馬頭観世音 (左)村中　世話人　中澤彌八
60	巡拝塔	54.5・23・19	(右)文政八酉三月吉日 (正)秩父」西國」板東」四國」百番八拾八箇所 (左)世話講中」塚田源七娘

61	地蔵像	217・37・23	(背)天下太平国土安全」奉納大乗妙典六十六部日本□繁栄□楽廻国」享保六辛丑十月七日
62	庚申塔	118・43・32	(右)于時宝暦二壬申歳 (正)庚申塔　(三猿がレリーフ) (左)八月吉祥日　村中　(二鶏が線刻)
63	石祠(庚申)	84・43・62	(右)一鶏と二猿 (左)奉供養石堂」為庚申加護」後閑村童男」童女佛果菩提也」岩寛文十年十一月大吉日
64	馬頭観音	99・48・11	于時寶暦十二壬午歳」(馬頭観世音像)」十月吉祥日
65	皇国戦死塔	105・94・25	有無」皇國戦死塔」両縁 (裏)世話人」當村中」橋本直七」設楽平吉」(他八名)石工　川和倉吉
66	摩利支天	83・37・30	(右)明治廿二年九月大吉日」摩利支天
67	日待塔	52.5・27.5・20.5	(右)文正夂八乙酉仲冬十一月吉日 (正)(地蔵菩薩立像) (左)當村女人講中建立
68	二十二夜塔	151・49・43	(右)天明元辛丑年 (正)(如意輪観世音坐像) (左)十月吉日 (右)女人」村中 (台)二十」二夜」供兼 (左)石工」信忍伊那郡」高遠領芝原邨」赤羽利助鎮義

69	地蔵菩薩	102・50・45	(台)念佛供養」願主拾九人」施主村中」于時明和二年」申九月十辰
70	二十三夜塔	98・74	(右)安政三丙辰年九月吉祥日 (正)二十」月天子」三夜」村中
71	地蔵菩薩		三体あり
72	庚申塔	92・68・30	寛政十二庚申年」庚申塔」八月吉祥日」講中
73	念仏供養塔	110・60・36	天下泰平」施主富村講中」享保五庚子季 願主億誓
74	庚申塔	74・30・25	(右)安政七庚申歳 (正)庚申塔」東組中 (左)二月廿五日
75	百番巡拝塔	84・31・31	(右)文化十酉天四月 (正)羽州湯殿山」一百番供養」月山霊山 (左)河和源右エ門」源七

広瀬町

76	石祠(稲荷)	62・28・43	(右)明治廿三歳」十有二月 (破)天下」正一位稲荷 (台)村中
77	赤城神社	98・38・33	(右)明治二十四歳」四月吉日 (正)赤城神社」霊符講社」梅沢太知賀」橋本力造」橋本直七
78	石祠(鶴天狗)	92・34・50	(右)明治廿三年」第十二月 (破)鶴天狗 (台)當所納人」川端勝五郎」梅澤半治郎」梅澤幸治郎
79	石祠(鈴ケ嶽金山)	70・35・50	(右)明治二十三歳」十二月 (破)鈴ケ嶽　金山 (台)當所」納人」小暮善五郎」川和清□」後閑茂八
80	石祠(小呂嶽大天狗)	70・35・49	(右)明治二十三星」第十二月 (破)小呂嶽　大天狗 (台)當所」納人」塚田定太郎」川和類造」橋本栄造
81	石祠(切嶌稲荷)	60・27・42	(右)明治二十年」第十二月 (破)正一位」切嶌稲荷 (台)村中
82	石祠	57・32・47	(右)北堀彌兵エ」野中清五郎 (台)村中
83	石祠(雷電)	98・52・84	(右)文政五年」十二月吉日 (破)雷電宮 (左)當村中
84	疱瘡神	66・24・20	疱瘡神
85	石祠	52・30・42	三基あり、内一基に　齋木直造
86	石祠	58・31・43	(右)文久二壬戌年」九月二十九日」當村中 (左)　せハ人」梅沢太知賀

87	石祠（春日）	58・29・42	（右）明治廿三星」十二月 （破）春日大神 （台）村中
88	石祠	51・30・41	①後人衆中 ②川端栄左エ門」毘兵エ ③村岡吉エ門」設楽佐兵エ　三基あり
89	道祖神	67・44・42	（右）萬延元年庚申仲冬」組中 （正）道祖神
90	石祠	89・53・72	（左）旹元禄九丙子稔五月拾八日
91	手洗石	74・76・45	（右）慶應元乙丑歳」九月吉旦　氏子中 （正）漱水 （左）人名二段　二十九名あり （裏）人名二段　三十二名あり 世話人」矢端惣兵衛」塚田平右衛門」後閑吉右エ門」北堀甚左エ門
92	狐（一対）	64・34・20	（右）奉　明治廿四年」九月吉日 （左）納　納人　設楽平吉
93	燈籠	240・52・52	（右）明治三十一年」十月吉日 （正）御神燈 （左）納主　矢端森之助 （台）奉納
94	燈籠	217・52・52	（右）納主　矢端芳三 （正）御神燈 （左）明治三拾貳年」二月吉日 （台）奉納

95	燈籠	173・62・62	（右）嘉永四辛亥年」八月吉日 （正）御神燈 （左）矢端平兵衛　拝殿前の一対
96	燈籠		（右）明治十四年巳八月 （正）御神燈 （左）願主」橋本直七 （台）奉納
97	双体道祖神	83・76・30	（裏）當村中」寛政八丙辰十二月大吉日」信州石工」倉田政右衛門
98	燈籠	252・57・57	（右）明治三十八年二月吉日 （正）御神燈 （左）当村梅澤半治郎
99	石祠（十二社）	56・27・43	（台）文久二壬戌年」九月二十九日」当村中 （左）後人衆中」矢端惣兵エ　十二基あり
100	天神宮	36・22・14	天神宮
101	大黒天	45・32・17	（正）大黒天 （裏）元治元甲子季冬建之」當所中
102	石祠（青麻宮）	92・44・69	（破）青麻宮 （裏）文久二壬戌年」五月吉祥日 （台）役人」宮本佐吉」後閑吉右エ門」塚田清右エ門」同平右エ門」矢端想兵衛」塚田源兵衛」名主」塚田平左エ門 （台）川端長助」世話人」橋本茂七」同亀右エ門」同佐二右エ門」願主」常五良
103	石祠	52・86・40	（右）熊井亀之助」宮本左兵治

下佐鳥町

104	石祠（黒檜山）	100・52・85	（右）明治廿三歳」第十有二月 （破）黒檜三舗 （台）黒檜講」世話人 （正）村中
105	石祠	77・47・50	（左）文化四卯年」四月吉日　他に石祠六基
106	燈籠（一対）	127・48	（右）文政四辛巳年 （正）御神燈 （左）九月吉日
107	大国主命	70・47・10	元治元甲子歳」大国主命」十一月甲子日
108	墓石	97・34	正徳四甲午年」邨宝照円居士」六月二十二日（地蔵菩薩立像）
109	石殿（庚申）	75・58	（右）敬白」于時寛文七季丁未」十月吉日 （正）（二鶏二猿） （左）奉建立庚申宮」道俗惣供養
110	二十二夜塔	62・26	（右）文政六未年」十一月二十二日 （如意輪六臂像） （左）女人講中
111	石祠	111・38	

宮地町

112	石祠	76・50・81	（正）天王宮 （裏）文化八辛未年」六月吉日 （台）東邑中 （台）信列」高遠」笠原村」石工赤羽和吉
113	幟立	197・36・25	（右）奉 （右）明治三十一年九月吉日 （左）獻 （左）氏子中
114	灯籠	160・62・62	（右）大正四年十一月 （右）御即位紀念 （右）伊勢講連中（七名の名前） （左）伊勢講連中（六名の名前） （左）御即位紀念
115	石祠	47・33・41	銘文なし
116	石祠	98・70・98	（右）大歳神」大将軍」大陰神」歳刑神」願主尊應 （裏）聖智代 （正）八将神」奉建立 （左）歳破神」歳殺神」黄幅神」豹尾神」宝歴」五乙亥」九月」吉旦
117	石祠	63・40・55	（正）十二天 （裏）□久元辛酉年」十一月吉日
118	大黒天	54・24・17	（正）安永三甲午天 （左）十月吉日
119	石祠	60・46・57	元禄十六癸未天」九月十九日
120	石祠（天神）	62・42・65	（右）宝永二乙酉天」十月廿五日

121	灯籠	140・37・37	(右)寶永二乙酉年四月吉日」奉納御寶□細野□右衛門
122	双体道祖神	77・40・23	奉道陸神供養 宝暦五乙亥九月吉日」宮地村中
123	道祖神	70・42・27	明和五戊子季」道祖神」七月大吉祥日」宮地村中
124	馬頭大士	80・38・24	(右)享和三癸亥年十二月吉日 (正)馬頭大士塔 (左)當村中
125	庚申塔	60・35・10	(裏)安政七庚申年」三月吉日 (正)庚申塔」東中
126	供養塔	38・28.5・14	亥年」供養塔」月吉日」宮地講中(上部欠)
127	地蔵菩薩	90・32・20	(銘文なし)
128	二十二夜塔	62・27・18.5	(右)二十二夜 (左)慶應四辰二月二十二日 (台)女人講中
129	二十三夜塔	74・23・23	(右)明治七甲戌年」正月二十三日 (正)二十三夜塔
130	石堂	168・69・69	(正)奉造立石堂一宇」□海阿闍梨菩提也」明暦二□南呂吉辰
131	義隣	78・32・28	義隣」文化六季」己巳中冬

西善町

132	石殿	130・68	寛永六乙巳九月廿七日　施主 (内に五輪板碑と合掌仏あり)
133	二十二夜塔	73・31	(右)二十二夜供養塔 (正)(如意輪観音坐像) (左)文化八辛未歳」二月吉祥日」西善養寺村 (台)女中講中 (台)信州高遠」石工赤羽和吉
134	庚申塔	84・31・32	明治八辛卯天」庚申塔」九月吉祥日
135	板碑	32・18・2.5	(室町時代)
136	板碑	18・20・7	(室町末)(安山岩)
137	双体道祖神	62・33・20	明和三丙戌季」八月吉祥日」村中
138	地蔵菩薩	45・18・17	銘なし
139	大日如来	44・28・16	銘なし(智拳印)
140	地蔵菩薩	123・67・63	(右)文政四辛巳年 (左)三月吉祥日
141	観音菩薩	160・67・60	(右)文政四辛巳年　(六臂観音) (左)三月吉祥日 (台)當邑中
142	庚申塔	108・39・31	奉造立庚申諸願成就所」延宝八天九月吉日諸願主敬白　(二鶏二猿あり)
143	宝篋印塔	180・42	(東)永正八年辛未正月十八日(伝摺墨の墓)

144	阿弥陀如来	80・44・22	(銘なし　上部欠)
145	馬頭観世音	47・25・10	(二臂合掌立像　銘なし)
146	馬頭観世音	51・29・17	天明八戊申八月吉日 (馬頭尊像) 南雲傅右門
147	馬頭観音	43・25・14	天保七丙年 (二臂合掌馬頭立像) 七月吉日」南雲氏

東善町

148	石祠	85・48	天王宮 (裏)文化十癸酉年」九月吉祥日 (台)當村中
149	庚申塔	117・67	(右)万延元庚申年」十一月吉日 (正)庚申塔 (台)村中
150	庚申塔	81・33	(右)天明五乙巳歳 (正)庚申塔 (左)十二月吉日 (台)女人」當村」講中
151	二十二夜塔	83・31.5	明和七歳庚寅十一月吉日 (如意輪観音) 二十二夜待供養

152	無縫塔	54・24	安永四乙未天」 八月十一日 権律師歓邦塔
153	観音菩薩	74・28	銘なし
154	法華経塔	57・25	観音経三万巻」卍法華経三千部」不動咒百万篇
155	地蔵菩薩	62・27	(右)寛政十一巳未天」(地蔵菩薩)」八月吉日
156	仏像	57・23	銘文なし

山王町

157	十王像	43・31・25	(江戸中期　十体あり)
158	回国供養塔	124・103・24	天明二壬寅年」キ」日本回國供養塔」十月吉日」行者」真了
159	庚申塔	83・31・24	明和六乙丑歳十二月吉日」ボ」山王村中 (日月と三猿あり)
160	六観音石幢	115・54・54	延享元年」七月吉日」施主上人□□」甲子
161	上人像	63・61・41	(背面)正徳寺第八世上人」ボ中興□都法印及海形躰」享保元辛酉天十二月吉辰
162	上人像	52・52・36	文禄三甲午天三月二十一日上人　施主久海 ボ開山入定権大僧都形躰」法印」教海 寛保二年逝百四十九年壬戌年像立
163	石堂	120・61・61	(右)受明阿遮黎及海人 (正)ボ (左)延享三丙寅」十二月七日」入寂

164	石幢(四角)	103・50・50	(正)奉造立五大尊佛」天下大平國土長久 (背)寛保三年亥今月日」施主上人久海
165	不動明王	50・28・23	(線刻)
166	地蔵像	140・37・19	(背)念佛」供養」享保四己亥天」施主敬白 十二月吉辰日
167	大日如来	100・45・24	(笠)施主岡田覚右ェ門」奉造立大日如来」 享保十六亥季十月十五日
168	勢至菩薩	147・52・20	勢至菩薩」願主」(立像)」享保□天七 月日一誉須故
169	聖観音	123・56・51	(坐像)
170	薬師如来	96・46・43	(坐像)
171	墓石	82・38・38	(右)宝永五子天勢子」月山妙栄大姉霊 位七月四日　照徳寺 (左)享貞二乙丑天」田桑霜多旦居士 覚信」十二月十六日
172	燈籠	171・60・60	(竿)文政二卯年」九月吉日」御神燈 氏子中 (竿)御神燈」文政二卯年」九月吉日 氏子中 (台)町々村々」惣商人」駒形　林右ェ門」 東善　半次郎」下阿内　彌右ェ門　力 丸　助左ェ門」下左鳥　市五良　天川 大島　弥兵衛」今井村　佐助　山王村 世話人　勇吉
173	白山	103・64・32	白山

174	手洗	38・71・45	(正)浄午 (左)氏子 (裏)願主一念法師」享保十五庚戌」十一月 八日
175	石祠	64・28・58	(左)発越者」佐波郡□□村　佐波郡山王村 青年中
176	記念碑	280・130	(正)日露戦役碑　希典書 (裏)明治三十七八年日露戦役従軍者(二段 四十二名略)戦病死者(三名略)明治四 十年四月」上陽村北部」前橋市」石工 唐澤丹峰刻
177	石祠	87・43・74	(無銘)
178	燈籠	211・68・68	(竿)御代官　矢内三郎左衛門」岡田作左ェ 門」大工信濃國　茂作
179	燈籠	211・68・68	(竿)于時寛永四年丁卯十一月廿一日敬白 大願……

下川淵地区

公田町

180	廃覚動寺宝塔	220・72	(西)[illegible] (北)[illegible] (人名多数) (人名多数) (東)[illegible] 永和二年戊午三月二十一日」大勧進 (南)[illegible] 本願法□賢(カ)載 法身常住妙躰多宝石塔一如説修行 諸徳三昧勤修名帳先達積善坊法印 □云(以下人名多数)
181	常夜塔	206・106	(正)文化五辰年仲冬」常夜塔」當村中 (裏)當山三十五世眞了代(52名略)
182	常夜塔	206・106	(正)常夜塔 當處中 (左)法印龍忍代 (台)石工 石倉 高柳毎八
183	地蔵菩薩	93・33	(背)[illegible] 享保四己未暦三月吉日
184	猿田彦	85・46・23	(右)大正六年 (正)猿田彦大神 (左)石原氏
185	庚申塔	87・37・19	(右)寶永三年 戊 (五名略) (正)[illegible] 庚申青面金剛尊 (左)十一月大吉日 (五名略) (裏)[illegible] □不動寺然海 (四名略)
186	地蔵	61・31・15	奉造立念佛供養」于時元禄十一年戊寅九月十八日

187	道祖神	76・29・17	(右)文化元甲子歳 (正)道祖神 (左)霜月吉祥日
188	庚申塔	67・45・22	(正)庚申塔 (裏)文化元甲子十二月吉日」組講中
189	庚申塔	75・32・20	(右)萬延元庚申年 (正)庚申 (正)(四名略) (裏)(二名略)
190	馬頭観音	68・40・30	(正)安永四未年」馬頭観世音」十月吉祥日 (左)石原氏
191	念仏塔	65・48・25	(正)明和三戊天」念佛塔」八月吉祥日 (左)講中
192	如意輪観音	67・36・25	(正)享保八丁酉七月廿一日
193	庚申塔	83・30・29	(正)庚申 (裏)萬延元庚申歳」霜月吉辰(五名略)
194	子待塔	56・36・20	(正)子待塔 (裏)元治元甲子年」十二月吉祥日
195	庚申塔	65・28・24	庚申 (左)萬延元庚申歳 (裏)(七名略)
196	墓石	65・40・22	宝暦四戊天」[illegible]大阿闍梨法印尊」四月廿三日
197	幟立て	208・36・24	(右)明治四十壱年四月吉日」三公田村」在郷軍人一同 (正)奉日露戦役 (左)献凱旋紀念 (十八名略)

198	幟立て	177・26・19	(右)昭和十二年三月吉日 (左)氏子中
199	石尊宮灯籠	285・90	(正)石尊宮
200	順拝塔	78・30・20	(右)文化八辛未歳八月吉日 (正)月山」湯殿山」羽黒山」奉順禮百番供 願塔 (左)願主當村」小林吉兵衛
201	二十二夜塔	120・56	女人講」卍(如意輪像)願主□」寛政八歳 辰十二月朔日」公田邑
202	道祖神	120・68	寛政七己卯年十一月吉日」道祖神」川中英 謹書
203	地蔵立像	92・30・20	(銘なし)(舟乗地蔵)
204	百万遍供養塔	74・36・20	寛延二己巳天」百万介供養」十月廿五日高 岩氏
205	庚申塔	70・32	(右)萬延元庚申歳」臘月吉辰 (正)庚申 (左)當村中
206	青面金剛塔	93.5・42	元禄六年癸酉」青面金剛尊」霜月吉祥日
207	如来坐像	75・59	奉□立□□石塔一基」應永二十一年十月十 二日
208	石堂	105・53・53	奉造立石堂壱宇」于時寛文四丁卯□ 四月
209	如意輪観音	61・44・21	□菩提」寛文元年　九月九日
210	石宮	71・26・20	(銘文なし)

横手町

211	己子待塔	70・74・33	(右)安永四未 (正)己　子　待塔 (左)十月吉祥日」一組中
212	庚申塔	57・35・18	(一鶏二猿)
213	庚申塔	83・40・22	今千里内」七難不起」敬白」皆延 宝元年
214	地蔵	83・110・45	(銘なし)
215	庚申塔	88・100・40	寶暦六子」庚申」九月吉祥
216	鳥居	310・392・30	氏子中」大正十年三月二十八日
217	馬頭観音	80・62・18	明治廿三年」十二月吉日」馬頭観音」籠忍 書六字三公田発起人(二名)世話人(六名)
218	常夜塔	277・170	常夜塔 (裏)安政三丙辰年十二月吉日建之」當村若 者世話人
219	灯籠	145・56	(右)文化六己巳年八月吉日 (正)奉納御寶前
220	石祠	166・51	(右)文政六癸未年四月吉日建之 (正)當村中 (左)世話人青木文治良」同金平

221	白雲山	297・42	文化六己巳年仲秋」白雲山」横手村中
222	石祠	143・48	(右)文政六癸未年二月吉日建之 (正)當村中 (左)世話人石井庄兵衛
223	石祠	62・30	(額)水天宮
224	庚申塔	74.5・28	元文五庚申年十月吉祥日」奉造立庚申供養 施主村中
225	出羽三山塔	80・50	月山」湯殿山」羽黒山」供養塔 (裏)文化元甲子年」十一月吉日」横手村　願 主(六名略)
226	石祠	48・35	(額)山神宮 (台)嘉永五□子年」九月吉日」建之 (台)當村中 (左)世話人　(三名)

亀里町

227	石祠(金比羅)	55・32	金比羅大権現 文化三丙寅年七月吉日」當村願主　田村 安五郎
228	石祠	49・35	天保十亥年三月吉日
229	石祠	44・35	元禄九年」子九月十九日

230	石幢(輪廻車孔)	216・61	時正七分全得逆修善根□」明応七年戊午 四月廿□
231	庚申塔	105・56	萬延元年歳在」庚申閏三月吉日」當村 中
232	二十二夜塔	136・30	(右)明和九癸辰歳」十一月廿二日 (正)(如意輪観音像)二十二夜 (左)阿内宿村中」女人講
233	馬頭観音	55・34	文政八酉正月吉日」(馬頭観音立像)」栗原氏
234	道祖神	77・44	安永四乙未年」道祖神」十月吉日」阿内宿 村村中
235	地蔵菩薩	210・40・30	(地蔵立像)旋主寺家阿内村中」寛政六乙未 十月十五日
236	地蔵菩薩	223・40・34	(地蔵立像) (基礎)願以此功徳」普及於一切」我等與衆 生」皆共成佛道」享保二酉十月吉日」願主 梅誉□
237	灯籠	303・130・130	奉納石燈籠両基」東叡山」厳有院殿尊前」 延寶九辛酉年五月八日」従五位下本多越前 守藤原利長 昭和四十一年五月九日東叡山寛永寺ヨリ移 入
238	庚申塔	60・33・20	安政七庚申年」猿田彦大神
239	五輪塔	102・34・34	(古城趾より移したもの)
240	薬師如来	60・27・10	文政七甲申天」(薬師如来坐像)四月吉日
241	馬頭観音	45・28・13	延享四卯季(馬頭尊像)十二月十八日

242	薬師如来	55・31・24	寺家村常法院造立之」（薬師如来坐像）享保十九甲寅季九月吉日
243	灯籠	232・120・110	文久二壬戌」両村中
244	石祠	96・56・110	（右）文政二己卯年」六月吉日（左）寺家」阿内」両村中
245	馬頭観音	100・73・22	安政七庚申歳」馬頭観世音」正月吉日」両村中
246	馬頭観音	45・28・25	（裏）文政十一子十一月吉日」羽鳥氏」（表）馬頭観世音
247	庚申塔	78・67・26	安政七庚申年」庚申塔」二月吉祥日
248	庚申塔	61・25・23	宝永三丙戌九月十七日」奉供養青面金剛」寺家村」阿内村」巨越
249	道祖神（双体）	61・33・16	（右）明和六己丑年」九月吉日（正）（双体像）（左）願主寺家村」阿内村」女講中
250	庚申塔	60・30・18	庚申塔」高田栄吉
251	庚申塔	36・26・12	庚申
252	二十三夜塔	120・52・25	（右）嘉永二己酉歳（正）二十三夜（左）仲冬吉辰」両村中
253	二十三夜塔	130・55・52	（右）嘉永元甲歳（正）（如意輪坐像）（左）十一月吉日（台）女人講中

鶴光路町

254	金山彦命	83・63・35	（表）金山彦命（左）阿家　両村中（裏）文久元辛酉歳」三月吉祥日
255	地神塔	74・23・23	少彦名命」埴安姫命」天照皇大神」倉稲魂命大己貴命　（六角柱）
256	石祠（天神）	70・30・43	（額）天神宮（裏）嘉永三年」十一月吉日（台）當村中
257	大黒天	73・71・15	（表）大黒天（裏）元治元甲子年」花月大吉祥日
258	庚申塔	44・27・14	庚申
259	五輪塔	126・52・52	（當盤御前の墓と伝えるもの）
260	水盤	61・140・67	（表）瀬盥　徳巷書（裏）嘉永二龍集己酉清明下浣」新堀邑」田中倉吉」田村平次良」當所」持田孫平治　當山見住」法印秀算代
261	宝篋印塔	188・73・73	（北）元文四年龍集己未」仲冬穀旦（東）雲上山善光寺」二世□貫（南）寶篋印陀羅尼塔（東）石工」信濃国」伊那郡」高遠片倉住」守屋七郎兵衛」利常（西）讀誦大□供養　（氏名略）

262	道祖神	62・56・34	(右)寛政八丙辰年 (正)道祖神 (左)六月吉日　惣村中	
263	道祖神(双体)	45・34・13	道祖神」(双体立像)」明和元年三月吉日 村中子供	
264	庚申塔	66・51・20	(表)猿田彦大神 (裏)明治十三年二月建□(人名略)	
265	石祠	56・28・40	(額)浅間宮 (右)明治三庚午年」三月吉日 (台)元講世話人」村中」講中　(人名略)	
266	灯籠	248・58・58	(笠)御神塔 (台)奉納　昭和三十九年十月吉日」吉沢章内」石工平田栄次郎刻	
267	石祠	66・46・65	(右)文化十五戊寅 (左)三月吉日」氏子中	
268	灯籠	110・47・47	(右)慶應三卯歳七月吉日 (正)御神燈 (左)願主内山清助	
269	灯籠	115・40・40	享保十己巳年」奉建立石燈蠟」七月吉日	
270	庚申塔	67・33・25	(正)猿田彦大神 (裏)(人名六名)	
271	石祠	77・44・56	(無銘)	
272	六地蔵石幢	168・45・45	(無銘　中世)	

273	二十二夜塔	57・45・39	(右)天保五甲午年霜月廿二日 (正)(如意輪坐像) (左)女人講中	
274	馬頭観音	89・25・22	(右)安永三甲午季 (正)(馬頭観音立像) (左)九月吉祥日	
275	二十二夜塔	60・25・22	(右)安永三甲午季 (正)(如意輪観音) (左)九月吉祥日 (台)惣村中	
276	六地蔵	55・22	(背)正徳三発巳天四月八日」奉建立六地蔵 徳丸村瀬尾喜右衛門」内儀 他に正徳二壬辰天十二月十五日の銘あり 氏名略	
277	庚申塔	55・30・20	(表)庚申塔 (裏)享和二壬戌年」講中	
278	庚申塔	50・45・12	万延元庚申」庚申」十一月吉日　内山□助	
279	馬頭観音	49・32・20	□治三年正月」馬頭観世音」施主持田	
280	庚申塔	65・31・24	(右)八月大吉日 (正)庚申塔 (左)宝暦十庚辰稔 (裏)惣村中	
281	庚申塔	75・38・34	(右)寛政六甲寅年 (正)庚申塔 (左)九月吉日」願主　(六名略)	

新堀町

282	道祖神	55・50	(右)天明二壬寅 (正)道祖神 (裏)八月吉祥□」當村□
283	山神	85・32	(正)山神 (左)寛政四壬子季六月吉日」村中
284	百庚申	97・75	九三基存在する。代表の一基 (正)庚申塔」寛政九丁巳歳」正月吉日」村中
285	石祠(痘瘡神)	43.5・33	(額)痘瘡神 (左)嘉永七甲寅」正月吉祥日
286	石祠	66・44	(右)享和元酉天 (左)八月吉日」當村中

下阿内町

287	二十二夜塔	56・26	安永六八月吉日」(如意輪坐像)二十二夜待村中女人
288	行者像	45・26	寛政六巳未」(行者像)二月吉日」関そよ
289	出羽三山塔	85・77	月山」湯殿山」羽黒山」百八十八番供養塔 文化十癸酉年二月吉日 (裏)下阿内村」願主関藤兵衛
290	地蔵菩薩	113・39	(台)享保」四己亥」三月」十五日」下阿内村惣」施主」敬□
291	宝塔	134・54	(無銘　室町)

292	二十二夜塔	123・55	天保五□年」(如意輪坐像)」三月吉日 (台)村中女人
293	馬頭観音	41・24	天保三年三月日」(馬頭尊立像)」岡本氏
294	馬頭観音	55・30	(立像)
295	庚申塔	71・38	庚申供養塔」延享元甲子稔□吉辰 (二鶏　三猿　日　月あり)
296	庚申塔	93・44	(右)寛政十二年未冬吉旦 (正)庚申 (左)下阿内惣村中
297	庚申塔	63・32	万延元庚申年」庚申」十二月吉日」組中 (氏名四名略)
298	庚申塔	64・44	(表)庚申塔 (裏)寛政七乙卯天」四月吉日(氏名六名略)
299	庚申塔	52・37	天保三壬辰年十月」馬頭大士
300	二十三夜塔	66・34	弘化四丁未年正月吉日」二十三夜」関和治郎
301	庚申塔	56・37	天保四癸巳□」庚申
302	庚申塔	59・38	文化八□歳」庚申」九月吉日
303	庚申塔	62・33	萬延元庚申歳」庚申」十一月吉日
304	道祖神	66・50	明和己丑」道陸神」十一月吉日
305	庚申塔	68・40	庚申塔 (裏)寛政六甲寅歳四月吉日」組中

力丸町

306	薬師如来	67・47	薬師如来
307	地蔵菩薩	114・37	(台)降龍山善昌寺□十二世江岩 (台)(経文) (台)享保十七壬子暦」四月如意秣覚
308	聖観音	116・36	(台)享保三戊戌□」仲冬祥吉□
309	庚申塔	97・75	明和元甲申天」庚申塔」十一月吉祥日
310	馬頭観音	70・55	安永三午年」(立像)三月十八日

房丸町

311	薬師如来	39・33	(坐像)
312	道祖神	73・51	安永三甲午季」道祖神」十一月吉祥日」左まいはし (左)房丸邑中
313	庚申塔	50・34	(右)奉造立庚申供養 (正)(青面金剛六臂像)旹宝永七丁丑天十一月吉日 (他に庚申塔十六基)

314	石祠(天王)	81・55	(額)天王宮 (台)村中」世話人」新井三左□」同勘□」清水□□
315	道祖神	110・85	安永三甲□季」道祖神」十一月吉祥日
316	不動明王	94・44	天下太平」奉立役行者」□全」為万人繁昌」長久安楽」寛文二二暦」五月吉辰日敬白」坊丸村住」上野国群馬郡」大蔵院 (裏)文化八未年」葉月吉祥日」建立 (台)世話人」新井勘右エ門(他二名) (台)二十二夜 (台)女人講中
317	二十二夜塔	156・78	
318	宝篋印塔	214.5・108	(右)雲上山善光寺」三世聖者法印貫亮 (正)寶篋印陀羅尼塔」願主浄山養全」 (左)施主村中 (裏)明和七龍集庚寅」葉月穀旦
319	六地蔵石幢	97・44	
320	道祖神	68・56	(表)道祖神 (裏)弘化三丙午年 (左)房丸邨
321	庚申三層塔	189・44	(二層目に鶏 三層目に日月)
322	十一面観音	58・39・21	奉新立石□仏諸男女為二世安全」(十一面観音立像)」寛文三天九月吉辰日□□□□敬白□□

323	馬頭観音	47・24・22	宝暦九卯年七月吉日」（馬頭観音立像）□□村　植木氏
324	馬頭観音	43・19・22	（右）嘉永六癸丑□夏造立 （正）馬頭大士 （左）新井氏

旧木瀬地区

天川大島町

●	6	5	4	3	2	1
如意輪観音	石祠（雷電）	石祠（天神）	道祖神	庚申	道標	供養塔
	60・34・51	90・45・70	103・55・29	93・47・8	69・44・25	232・54・42
□□大姉　覺□　享保十一丙未年　五月廿九造立	（右）安政二卯年」六月吉日 （正）雷電宮 （左）當村中 他に石祠六基	（額）天神宮 （右）天保四巳年」二月吉日 （台）當村中	天明八戊申歳」道祖神」十二月吉日」當村中	百庚申　七三基存在中最大のもの	寶暦五歳」南無阿弥陀佛」亥十月吉日 右江戸」みち　左あ徒」満道（市重文）	（右）照生死長夜大燈明 （正）南無妙法蓮華經 （左）切元品無明大利劔 （裏）天保十二年辛丑」九月吉祥日　日戒（花押） （台）講中 （基）天川大嶋村（七名）」寄進連名（二九名） 世話人（一三名）世話人（九名）　□中世話人（一三名）（市重文）

野中町

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
庚申塔	庚申塔	二十二夜塔	庚申塔	庚申塔	馬頭観音	百番供養塔	鳥居	石祠（天神）	石祠（天王）	石祠
101・84・46	67・52・10	151・33	117・68	83・32	67・20	97・27	274・340	152・44	110・51	111・41
（表）庚申塔・ （裏）安政七庚申年」二月吉日	百庚申　四十八基中最大のもの 猿田彦	文政八乙酉歳」二十弐夜供養」晩冬吉良辰	寛政七乙卯年」庚申塔」仲夏吉辰	庚申塔	天保十五辰天」馬頭大士」十一月吉日□□	奉納西國」阪東（ママ）」秩父」百番供養塔」寛政七乙卯年卯月下浣日	（額）八幡宮	（額）天神宮 （右）昭和九年十月十七日 （正）氏子中	（額）天王宮 文化七庚午年」八月吉日」村中	天保十未年野中村」二月吉日講中」世話人（一五名略）

上大島町

18	庚申塔	125・45・23	(右)寛政十二庚申歳 (正)庚申塔 (左)十二月吉祥日」當村」講中
19	庚申塔	110・53・12	嘉永五壬年」庚申塔」子三月吉日
20	出羽三山塔	180・79・17	国幣出羽神社」官幣月山神社」國幣湯殿山神社 (裏)大正九年四月吉辰」カミオホシマ」カミナガイソ」シモオホシマ」シモナガイソ(人名五二名略) 駒形町石工宮嵜弘道
21	出羽三山塔	135・82・14	(右)明治五壬申年 (正)月山」湯殿山」羽黒山 (左)二月吉祥日 (台)(三十一名略)
22	出羽三山塔	104・95・29	月山」湯殿山」羽黒山　嘉永二丑丙年 講中(三十九名略)
23	出羽三山塔	116・47・9	出羽神社」月山神社」湯殿山神社 (裏)昭和四十二年七月三十日」参拝記念 上大島町(五名略)下長磯町(一名略)
24	甲子塔	135・67・40	大國主神 (裏)元治紀元甲子歳十一月甲子日
25	石祠	95・56・100	(額)八坂神社 (裏)昭和十四年」五月吉日」氏子中
26	石祠(日枝)	83・46・84	(無銘)
27	石祠(雷電)	91・55・90	(額)雷電神社

28	石祠(十二神)	78・48・68	(額)十二神 (右)文政二己卯年 (左)三月吉日 (台)當村中」世話人(二十四名略)
29	石祠	56・36・46	(無銘)
30	灯籠(一対)	141・56・56	(右)文政十三庚寅年」夜燈」六月吉日」小松氏 (左)文政十三庚寅年」夜燈」十二月吉日 願主 女屋宇右エ門」同文兵衛 石工 北原伊作義陳(高遠石工作)
31	石祠(貫前)	90・44・52	(無銘)
32	手洗石	47・84・47	(右)文政十二己丑初冬 (正)當村　奉納 (左)朝倉村　(二十九名略)
33	百番供養	208・31・29	(右)享和三癸亥年」當村施主(五名略) (正)百番供養 (左)仲冬吉祥日
34	二十二夜塔	138・49・12	(表)(如意輪線刻)　女人講中 (裏)二十二夜　(台)潤三月吉祥日
	二十三夜塔	138・49・12	(表)(勢至線刻)　講中 (裏)二十三夜　(台)萬延元庚申天
35	六十六部供養塔	135・30・25	(右)寶暦十二壬午歳二月吉日 (正)卍　六十六部供養塔 (左)上大島村」願主无曲
36	六十六部供養塔	177・90・68	天下泰平國土安全」六十六部供養塔」寶暦八年十一月吉日」願主　植□七之助

37	地蔵(一対)	98・34・19	(台)享保」十年」□」十一月」吉日	
38	念仏供養	77・33・27	(右)寛政六甲寅天」仲冬吉祥日 (正)(地蔵立像) (左)念佛供類塔 (台)當村」世話人」湯沢庄右エ門」女屋源左エ門 (台)女人講中	
39	二十二夜塔	77・33・27	(右)二十二夜供類塔 (正)(如意輪坐像) (左)天明七龍集丁未天」仲冬吉祥日 (台)當邑」女人」念佛」講中 (台)世話人」□下田」弥兵衛」□沢庄右門」石工　唐沢文吉	
40	庚申塔	40・29・8	庚申	
41	阿弥陀如来	90・60・20	(坐像)	
42	阿弥陀三尊	51・61・14	(無銘)	
43	阿弥陀如来	55・33・18	(無銘)(坐像)	
44	庚申塔	48・23・16	文政四辛巳天」馬頭大士」九月吉日	
45	馬頭観音	71・30・24	(右)寛政四壬子年 (正)(馬頭観音坐像) (左)四月吉祥日　(八名略)	
46	百番供養塔	94・65・15	(表)百番供養塔 (裏)明治五壬申歳」二月吉祥日	

47	百番供養塔	88・34・28	(表)奉納百番供養塔 (左)十一月吉日 (裏)昭和八辛卯年　(二名略)	
48	百番供養塔	96・27・30	(表)卍百番供養塔」願主　十名略 (裏)天保三歳次壬辰四月吉日	
49	百番供養塔	106・37・37	嘉永二己酉年」卍百番供養塔」四月吉日 (台)(十名略)	
50	石祠(天満)	96・72・90	(額)天満宮 (在)文化十二乙亥歳」三月吉祥日 (台)當邑」子供講中」世話人」門兵衛同若者	
●	道祖神	43・28・11	宝暦十□(立像)九月吉日	
●	道祖神(道しるべ)	90・75・27	寛政四壬子年(立像)四月吉祥日」右前はしこめの道」左こ里やう(五料)いせ崎道	
●	役行者立像	86・58・20	(無銘)戦国時代　県内に例がない	
●	土地改良記念碑	155・88・10.5	竣工記念　前橋市長藤井精一 昭和六十年二月吉日」前橋永明土地改良区	
●	笠塔婆	61・34・34	(無銘)	
●	廻国供養塔	140・70・9	(表)卍　西国三十三番」坂東三十三番」観世音菩薩供養塔 (裏)西国七名　坂東十人」　昭和五十九年甲子三月吉日建之」石工市川石材店	
●	供養塔	128・50・20	(表)三界萬霊供養塔 (裏)昭和五十六年十一月吉日」施工　西村石材　(奉納者氏名二十名略)	

●	地蔵菩薩	95・30・27	(立像) (裏)上大島長寿会」昭和四十五年十月」作工者　湯沢重弥
●	廻国供養塔	123・93・12	(表)「[illegible]　秩父霊場」三十四番」供養塔
●	百番供養塔	98・34・24	(表)奉納百番供養塔 (裏)明和八辛卯年」十一月吉日
●	馬頭観音	82・40・27	(表)馬頭大士 (側)施主　当村」天明六歳集丙午初冬吉旦
●	馬頭観音	81・37・6	(表)七代前地附先祖屋敷守護神」馬三頭霊 馬頭観世音祝奉碑 (裏)昭和十二年八月」供養主　関口勝治
●	鳥居建立記念碑と沓石	180・124・16	(表)鳥居建立記念碑　記　(略) (裏)(寄附者二三二名)
●	社標	220・33・27	(表)村社　近戸神社 (裏)昭和十四年一月吉日」木瀬村青年団」上大島支部
●	のぼり枠石柱(一対)	245・36・32	奉納」当村」青年会」軍人会
●	石鳥居	450・330	氏子中　施工駒形町(有)石川石材店」昭和六十三年八月吉日
●	石燈篭	220・74	昭和六十年十一月吉日」発起人」近戸神社氏子総代」町内有志会」上大島町自治会
●	石燈篭	220・74	(燈)昭和五年四月吉日 (台)伊勢参拝記念
●	石燈篭	163・58	(右)伊勢代々御神燈」二月吉日 (左)参拝記念」大正十年

上長磯町

●	庚申塔	46・36・12	(銘文欠損)
●	石宮(天満宮)	100・68・71	(側)文化十二乙亥歳」五月吉日 (台)当邑講中(世話人名略)

51	馬頭観音	39・21・6	明治二己六月吉日」馬頭尊」閑氏
52	薬師如来	68・25・13	(右)嘉永二年八月日 (正)(薬師坐像) (左)深山北向薬師
53	鳥居	320・388・30	(額)正一位稲荷大明神 (裏)天保七丙申天」九月吉旦
54	道祖神	77・50・40	(右)嘉永六癸丑季正月吉祥日 (正)道祖神 (左)願主　當村中
55	石祠	53・31・49	(右)宝暦十一己」正月廿□ (左)代施主」下境氏
56	庚申塔	125・44・27	寛文五乙己暦」奉造立庚申石塔如意安全成就所」□月八日施主敬白(一鶏二猿あり)
57	手洗石	63・78・42	(右)文化四丑歳」九月吉鳥 (正)御神前 (左)願主　閑弥七 (裏)心だに」まことの」道に叶ひなき」いのり□とても」神や守らむ」随国堂素浣書

58	庚申塔	79・33・30	(右)寛政十二庚申稔 (正)猿田彦命 (左)十一月吉祥日
59	灯籠	144・62・62	(右)萬延元庚申年 (正)常夜燈 (左)九月吉日 (裏)願主　閑市五郎
60	馬頭観音	50・37・14	(右)汝是畜生発菩提 (正)馬頭尊像 (左)天明元丑十一月十六日
61	地蔵菩薩	177・31・25	(背)明和元申年」九月廿四日
●	庚申塔		于時寛文十二壬子天十月十八日」奉建帝釈三光寶塔如意諸願成就所」上長磯町惣檀那敬白

下長磯町

62	青面金剛像	115・54	(一面六臂像)(二鶏三猿あり)
63	百番供養塔	80・40	(右)文化元甲子年 (正)百番供養 (左)九月吉祥日　(台の九名略)
64	二十二夜塔	91・36・31	(右)天明五歳集乙巳建之」仲冬十又五日 (正)(如意輪坐像) (台)念佛供養」二十二夜 信忍高遠」伊那部町」石工」唐沢文吉 世話人」森邑佐七」同定右エ門

65	念仏供養塔	85・33・25	(右)天明七丁未歳」初冬廿四日」建之 (正)地蔵立像 (台)女人講中」念佛供養」地蔵大菩薩」二世安楽」世話人」森村佐七」同定右エ門
66	庚申塔	74・42	(正)猿田比古命 (裏)萬延元庚申歳八月吉日
67	百庚申	105・77・11	(約七十基ある中の主尊) (右)萬延元庚申年八月吉日 (正)庚申供養」世話人　(氏名略)
68	道祖神	38・25・25	(右)小山□ (正)道祖神 (左)寛政五丑九月日
69	道祖神	80・50・40	(右)天保十五甲辰正月吉祥日 (正)道祖神 (左)村中」願主世話人」生方安□
70	二十三夜塔(橋供養塔)	55・27・25	(右)弘化二乙巳年」九月吉日」下長磯村 (正)二十三夜 (左)橋供養
71	念仏供養塔	68・28・36	(正)[illegible]　念佛供養塔 (左)寛政六寅霜月　(五名略)
72	地蔵菩薩	100・28	(立像　無銘)
72	馬頭観世音	57・33	享和元年辛酉年」(立像レリーフ)」十一月吉日
74	馬頭観世音	47・25	安政四丁巳年」馬頭観世音」八月日」中澤氏

75	馬頭観世音	47・76・14	安永三午天」（馬頭立像）」七月吉祥日
76	神燈	188・53・55	（右）文化十一甲戌年 （正）稲荷宮　當村中 （左）三月吉祥日
77	神燈	184・52・52	（右）文化十一甲戌年 （正）秋葉宮　當村中 （左）三月吉祥日
78	石祠（天王）	93・50・76	（裏）嘉永六癸丑年」六月吉日」村中 （額）天王宮
79	大黒天	115・50・34	（表）大黒天（大黒天像） （裏）元治元甲子年建之」當村中
80	石祠（稲荷）	54・35・56	（右）文化四□九月吉日 （左）村中　平次　他に文化八　天明四　文化九　文化十一

女屋町

81	大日如来	244・90・84	（大日如来坐像）（台）安永十辛丑歳」三月吉日」北原山慧舟代」施主」江木村」大島真七」文春」同妻 （台）信州伊那郡」笠原村」赤羽利助」鎮義
82	庚申塔	70・42・13	（青面金剛像　六臂　邪鬼　三猿）
83	馬頭観世音	50・33・11	寛政四壬子年」（馬頭観世音像）」三月吉日

84	馬頭観世音	40・20・12	弘化二乙巳天」（馬頭観世音像）」五月吉日
85	百番供養塔（道標）	100・31・25	（右）明和五戊子年二月吉日」東いつる道 （正）奉納百番供養塔 （左）西みつさわ道」當村」真下清兵衛」同金兵衛
86	月待塔	166・36・29	（右）仲冬吉辰建之 （正）（如意輪観音坐像） （左）寛政元己酉歳 （台）當村女人講中
87	庚申塔	153・34・23	（右）元禄十丁丑十月十三日 （正）（地蔵菩薩立像） （背）為庚申供養」奉造立地蔵幷（菩薩）」刻彫之者也
88	地蔵菩薩	90・40・14	（地蔵菩薩立像）
89	庚申塔（道標）	94・64・40	（正）庚申塔」無幻道人書 （台）右きりう大間々」向まえはしたかさき左みよさわあかき
90	庚申塔	70・34・30	庚申
91	燈籠	123・45・45	（六地蔵が笠部にある） （台）天明」三癸卯」季夏」施主」女屋氏道祖神
92	道祖神	100・69・57	（裏）天明五乙巳年」仲□吉日」講中
93	毘沙門天	86・35	（右）嘉永三戊六月吉日 （正）毘沙門天 （左）女屋邨」女屋與兵衛

東上野町

94	石祠（金比羅）	78・50	（正）金比羅宮」講中」世話人」若者中 （裏）文政二己□年」三月吉日建之
95	石祠	84・82	（右）奉造立石宮諸願成就之所」村中施主」 惣氏子敬白」名主文右エ門
96	庚申塔	92・45・24	宝永元甲申□九月□ （青面金剛　六臂　二鶏　三猿）
97	石祠（石尊）	73・38・51	（右）文久二壬戌年 （正）石尊宮 （左）七月吉日」世八」若者
98	石祠（天満宮）	54・30・50	（右）文化五戊辰十」二月吉日 （正）天満宮 （左）當村」子供中
99	石祠	50・34・60	（右）寛政八丙辰□ （左）八月吉日
100	石祠	73・52・69	（右）上長磯村」女屋村」上江木村」同」上 同同（下の人名略） （左）小島田村」今井村」堤村」堀之下村」 當村
101	石祠	63・34・49	（右）女屋氏 （左）寛政二庚戌天
102	石祠	56・38・53	（右）（氏名四名略） （左）寛政八丙辰年」八月吉日
103	石祠	56・34・51	（右）寛政八丙辰歳 （左）八月吉日　（人名略）
104	石祠（弁才天）	62・63・42	（右）文化六己巳年 （正）辨才天」十五童子 （左）十一月吉日」女屋八右衛門
105	月待塔	177・34・31	（右）當村」女人講中 （正）（如意輪観音坐像） （左）寛政八丙辰年霜月吉日 （台）世話人」女屋章十郎
106	二十二夜塔	140・34・31	（右）文政六癸未年十二月吉日 （正）（地蔵菩薩坐像） （左）女人講中 （台）二十二夜
107	地蔵菩薩	175・35・20	（地蔵菩薩立像） （台）（人名六名略　願文略）
108	馬頭観世音	40・25・11	汝是畜生□菩提心」（馬頭観世音）」安永 八亥七月吉日
109	庚申塔	110・68・29	（右）万延元庚申歳」庚申荎」周岳謹書（花押）
110	百番供養塔	90・27・26	（右）寛政三辛亥天 （正） 奉順禮百番供養塔 （左）十月吉日」當村」女屋彦右エ門」妻
111	馬頭観世音	55・25・15	（右）文久元辛酉季」季春禎祥日」馬頭観世 音物徳主」池田惣吉
112	百番供養塔	92・30・22	（右）于時」明和七庚寅天四月大吉日 （正） 奉納百番供艱塔 （左）施主當邑」女屋清八」同妻
113	馬頭観世音	75・25・10	文化六己巳天」（馬頭観音）」十一月吉日

114	馬頭観世音	40・25・20	文化辛未天」（馬頭観音）」八月吉日
115	百番供養塔	95・30・26	（右）寛政十二庚申中冬大吉日 （正）𑖨𑖭𑖽𑖨 奉納西國坂東秩父百箇所供艱塔 （左）願主」女屋八右衛門
116	百番供養塔	102・31・31	（右）于時延享四丁卯天正月大吉日 （正）𑖨𑖭𑖽𑖨 奉納西國坂東秩父百箇所順禮供艱塔」為結縁逆修」権大僧都壽栄 （左）施主當世女屋儀八
117	百番供養塔	94・31・29	（右）于時安永二癸巳歳仲冬吉日 （正）𑖨𑖭𑖽𑖨 奉納西呱國坂東秩父百箇所供艱塔 （左）施主當邑女屋八九衛門
118	百番供養塔	100・30・27	（右）寛政第三辛亥天 （正）𑖨𑖭𑖽𑖨 奉納西國坂東秩父百箇所供艱塔 （左）十一月吉日　當邑高橋與市

小島田町

119	弁財天	120・87・55	寶暦八戊寅年」辨財天」當村」講中」九月吉日
120	道祖神	90・50・30	（右）天明三癸卯歳四月吉日」當村願主」前島藤兵衛」浅野吉之亟（五名略） （正）道祖神 （左）笂井村、小屋原村、駒形宿」富田村」江木村（下の氏名略）
121	庚申塔	85・37・30	（右）寛政五癸丑年 （正）猿田彦命 （左）二月吉祥日
122	庚申塔	93・42・8	庚申
123	石祠（天満宮）	70・36・53	（右）寛政四壬子歳 （左）八月吉日 （台）村中」願主（九名氏名略）
124	月読命（天王様）	145・94・42	（右）當村中 （正）月讀神 （左）文政七星次」甲申春
125	石祠（雷電）	88・48・68	（右）戌第三月建之 （額）雷電宮 （左）明治十九歳 （台）願主（二名略）當村中
126	庚申塔	60・52・30	庚申 （正）聖徳太子 （左）文久二戊季龍次壬」仲春禎祥日 （台）若者中」小淵安五郎（以下六名略）
127	聖徳太子	139・55・15	（右）安永四乙未歳 （正）𑖨𑖭𑖽𑖨 百番供艱塔 （左）十二月吉日 （台）施主（五名略）右いづる道」左日光道 同行五人
128	百番供養塔（道標）	113・31・28	
129	地蔵菩薩	124・30・20	（地蔵菩薩） （台）寶永二二年」右ニノ宮」左大胡」拾一月吉日

130	二十二夜塔	77・50・40	文化五戊」（如意輪観音）」二十二夜」辰三月吉日（左）當村」講中」世話人」下田茂七」宮田惣兵衛	131	庚申塔	34・24・16	庚申塔	132	板碑	35・16・10	〓	133	板碑	36・17・10	〓	134	庚申塔	34・34・13	寛政四壬子年」庚申塔	135	板碑	31・17・8	〓	136	庚申塔	36・29・17	庚申塔	137	庚申塔	35・24・14	庚申塔	138	板碑	34・13・10	〓	139	板碑	49・17・12	〓	140	如来	51・37・13	（如来坐像）	141	如来	57・41・17	（如来坐像）	142	五輪塔	94・39・39	（他に地輪を欠くもの二基、水地輪を欠くもの二基、水輪のみ一基、空風輪のみ二基）

| | | | | | | | | | | | |

●	板碑	31・17・8
		(キリーク)
●	石宮(八幡社)	50・30・40
		若宮八幡宮」大正六年十月一日」下田喜三郎敬立

駒形町

145	馬頭観音	90・45・12	大正四年二月七辰」馬頭観世音」駒形町五六丁目」馬持一同
146	庚申塔	91・35・15	(表)庚申塔 (裏)万延元庚申十二月吉日
147	大国主命	199・74	元治紀元甲子年正月吉日」大国主命」講中連名(六名氏名略)　追加連中(六名氏名略)
148	道祖神	61.5・33	安永二癸巳年」(双体道祖神)」正月吉日
149	道祖神	103・45	(表)道祖神 (裏)寛政十一己未年」十二月吉日
150	道祖神	106・41	(表)道祖神 (裏)寛政二庚戌歳」十二月吉祥日
151	庚申塔	83・37	(青面金剛像)奉願所庚申供養」駒形村連中施主」十月吉□」根岸□兵衛」根岸□兵衛
152	道祖神	62.5・24	天明三癸卯年」道祖神」四月吉祥日
153	地蔵菩薩	139・40	(地蔵菩薩坐像) (台)下町講中　世話人(三名氏名略)女人講中　寛政十戊午十一月吉日

154	念仏供養塔	77・33	(右)寶暦十二壬午歳陽月大吉□ (正)念仏供養 (左)施主當町願主芳誉□
155	庚申塔	50・38	(表) (裏)寛政七乙卯七月吉日
156	庚申塔	63・27	(右)寛政四壬子歳 (正)庚申塔 (左)十二月吉日　當中町中
157	六地蔵	62・28	當町中」十月吉日」天明五乙巳年(六体中三体に銘文あり)
158	念仏供養塔	90・33	(右)念仏供養 (正)(如意輪観音坐像) (左)安永四乙未十二月吉日 (台)中宿中
159	念仏供養塔	90・33	(正)(如意輪観音坐像) (左)奉念仏供養　安永四乙未天」十月大吉日 (台)世話人　(四名氏名略)
160	二十三夜塔	177・36	(右)万延元季龍集庚申八月良辰 (正)二十三夜塔」原正方書 (左)施主亀井佳兵衛　演山六三郎
161	如意輪観音	105・21	天保八丁酉天」(如意輪観音坐像)」二月吉日
162	庚申塔	126・63	(表)青面金剛 (裏)安永四乙未十二月吉日

笂井町

163	手洗石	111・90・62	(右)慶応四戊辰年」正月吉良日 (正)清盥 (左)梅亭謹書
164	馬頭観世音	113・32	(右)安永六歳 (正)卍(馬頭観音立像) (左)丁酉十一月吉日　下町中
165	道標	150・24・24	(右)南　芝　本庄道 (正)東　東京いせ崎道」天保十二壬寅歳」 五月吉日(四名氏名略)
166	鳥居	280・320・23	近戸
167	石祠(日本七五尊)	57・30・44	(右)日本七五尊 (左)安政丙辰季」齋藤平菴」建之
168	石祠	67・40・64	(正)先祖供養」天保二辛卯天九月 (左)施主　梅沢氏敬白
169	石祠(天神)	74・49・65	享保五年子」天神宮」二月廿五日
170	石祠(山王)	84・57・74	享保七壬寅天」山王宮」九月吉日　良憲敬白
171	雷電神社	64・43・16	昭和六年十二月十日」及雷電神社」小林氏」小屋氏」羽鳥氏
172	大黒天	68・70・18	元治元甲子年」大黒天」三月吉日
173	板碑	40・16・12	飛月 (正)(大黒天線刻) (裏)元治元甲子年」五月吉日 (台)(六名氏名略)
174	大黒天	60・51・8	(額)秋葉神社 (裏)文化六己巳年」九月吉日 (台)当村中
175	石祠(秋葉)	97・78・106	(裏)文化六己巳年」九月吉日 (額)秋葉宮 (台)当村中
176	石祠(秋葉)	93・65・109	(右)寛政九己巳」初夏吉日 (碑)牛頭天王 (左)当邑中
177	石祠(牛頭天王)	76・36・60	(右)文政三庚辰年 (正)大天狗」石尊大権現」小天狗 (左)七月吉日
178	石尊大権現	150・61・61	(表)甲子天 (裏)元治元子季歳次甲」子月清□日 (台)(五名氏名略)
179	甲子塔	87・54・18	享和三亥歳」四月吉日」道祖神」当村中
180	道祖神	108・62・30	宝永四丁亥天　笂井村」奉造立石燈籠一□ 子孫繁昌之祈所」九月吉祥日」羽鳥権右衛門
181	燈籠(一対)	177・60・60	

182	庚申塔	115・100・40	(表)庚申塔 (裏)寛政七乙卯年」十一月吉日」當村中
183	庚申塔	57・43・26	安政七庚申年」二月吉日」庚申塔 (台)(八名氏名略)
184	庚申塔(道標)	84・57・25	(右)(安政七庚申年」二月日 (台)北□東大こ」さん」たい　南こまかた」五れう　(氏名一六名略)
185	月待塔	112・34・27	(如意輪観音坐像) (台)天明二」壬寅年」十月吉日 (左)當村中
186	地蔵菩薩	160・38・25	(地蔵菩薩立像) (台)維時」享保十七子天」十月大吉日
187	道標	60・15・15	(北)御即位紀念　木瀬青年會第十四區會 (東)東　上増田經伊勢崎道 (南)南　駒形道 (北)北　□

小屋原町

188	石祠	128・53	寛政十一己未年二月十二日
189	石祠	125・44	當村中」文化五戊辰年八月吉日
190	大国主大神	115・69	大國主大神」高橋成章書」總邨中 (裏)元治紀元甲子年」長寒霜逢霊穀日
191	大国主神	168・60	(右)元治紀元甲子季」長寒吉辰祀 (正)當邨中」天国主神」谷原正方□書□

192	大国主大神	170・60	(表)大國主大神」上毛野朝臣真国拝書 (裏)元治元甲子年十一月吉日前原組中
193	道祖神	139・66	(表)道祖神 (裏)文久元辛酉年三月吉日」西原講中
194	道祖神	141・46	(表)岐塞神」上毛野朝臣成孝拝書 (裏)萬延元庚申年八月日
195	石祠(天王)	104・61	文化九壬申年六月二十八日」天王宮」當邑中
196	鳥居	272・390	(右)奉造立稲神講　施主村中 (左)宝暦八戊寅十一月吉日　泉蔵寺現住宗寛代
197	手洗石	48・91・57	(右)釈公稟」寄進 (正)薬師山 (裏)享保十五庚戌季」四月八日」石工」大胡町北泉(原)文六
198	二十二夜塔	56・25・18	(右)文政九丙戌年 (正)(如意輪観音)二十」二」夜塔 (左)十一月二十二日
199	如来	53・40・15	(如来坐像)
200	馬頭観世音	45・28・10	(馬頭観音)安政二天四月吉日
201	庚申塔	97・95・13	(表)長谷戸講中」庚申塔」一徳齋書 (裏)天保六乙未年」長寒吉良辰
202	燈籠(一対)	175・65・65	享保十三天五月二日」勢田郡野中村」奉造立石燈籠薬師如来御宝前」諸願成就之所願主　立野傳吉

203	204	205	206	207	●	209	210	211	212	213	214	215
井戸枠	薬師如来（百番供養）	千部供養塔（経典読誦）	馬頭観世音	旅人地蔵尊	石祠（護国）	道標	石幢	石祠（天王）	石祠	石祠	庚申塔	大黒天
	78・57・18	193・67・65	65・30・14	220・73・73		13.6・45.5・53	185・58・58	73・41・62	70・41・54	60・37・61	125・34・25	90・43・13
清泉　四月吉日　法印」公稟」調進	（薬師如来坐像）（右）皆明和五戊子歳仲冬吉日（正）奉巡禮百番供養塔（左）願主任譽西運	（右）因記當山本尊由縁（縁起）（正）若人得見此塔禮拝供養」奉奉讀誦大乗妙典千部供養塔」是等皆近無上平等正覚（左）夫妙法蓮華経者（経文）（台）石工」信州高遠」北原浅右衛門	安永十丑天」（馬頭観音立像）四月十四日施主助七	（無銘）	昭和三十年五月十日建之（氏名略）	南　右ふくしま一り半　五料二り　左まいはし三り　さねまさ三り　北　右さんたい一り　大胡二り　左いせさき一り□	（輪廻車孔）	（右）七月吉日」組中（正）天王宮（左）寛政十二庚申天	（右）寛政七乙卯」十二月廿五日	（右）文化八未年」組中（左）二月吉日	（表）宮の下組中」庚申塔」高素幸敬書（裏）万延元庚申年」十一月吉日	（表）大黒天」菊城嶠淡拝書

上増田町

216	217	218	219	220	221	222						
庚申塔	馬頭観世音	庚申塔	二百万遍供養（道標）	道祖神	二十三夜塔	二十二夜塔						
63・32・12	63・21・13	73・39・26	55・15・15	60・70・27	66・22・16	73・28・23						
元禄四年」奉庚申供養現當二世安楽之所」未四月十一日（六名氏名略　二鶏　二猿）	（右）元治元甲子」九月吉日（左）馬頭観世音（左）願主　奈良菊次郎	（右）安永三□（正）庚申（左）七月大吉日	（北）皆明和五戊子歳三月吉日」施主生形弥右エ門（東）右まへはし道（南）奉造立阿弥陀称号二百万遍供養（西）左こまかた道	（右）嘉永五年壬」子正月吉辰（正）道祖神」徳菴潜書	（右）文久三癸亥年八月吉辰（正）二十三夜塔（左）願主」奈良彦次郎」大山新右衛門（台）天明八」十二月」二十二夜」常組」女人講中	（如意輪観音）二十二夜」天明八戊申」十二月吉日」当組女人講中						

223	馬頭観世音	48・25・16	文政二卯三月吉日」（馬頭観音）」奈良三左エ門」同三次郎
224	大国主大神	94・38	（右）元治甲子年十一月吉日 （正）大国主大神 （左）願主　當組中
225	石祠	61・52	（右）寛政七乙卯天 （正）大□□ （左）七月日　大□田組
226	石祠（天神社）	67・49	（右）文化八辛未年 （左）十月吉日
227	石祠	02・92	（無銘）
228	石殿	70・34.5	
229	庚申塔	88・43.5	元禄十年丁丑二月廿日」（青面金剛）」大□田□（二鶏三猿あり）
230	石祠（諏訪社）	123・92・97	（右）元禄十三年施主大塚田村」奉造立 □之所□」光明院」辰九月十日」 □右衛門　諏訪宮
231	記念碑	93・62・8	（表）神道建設記念」皇紀二千六百年」氏子中 （裏）昭和十五年四月十日　（氏名略）
232	社標	195・27・21	（表）村社近戸神社 （裏）大正七年五月十日
233	水盤	67・170・98	手洗」大正八年三月吉日」氏子中

上増田

234	駒犬	126・91・60	（台）平和祈願」昭和五十四年十月十五日 天皇陛下喜寿祝」日中平和友交条約締結　（氏名十二名、十三名略）
235	記念碑	250・102・15	（表）日露」戦役」記念碑」希典書 （裏）明治三十七八年戦役従軍者（二十一名略）明治三十九年十二月建設上増田村中
●	石宮	88・60・52	（無銘）中世末
●	道祖神	80・50・45	（表）道祖神」星野、奈良、神沢」岡」阿佐見」津久井」中島」井上 （裏）宝暦九己卯天八月大吉日
●	二十二夜塔	75・54・30	霜月吉日」文化二乙丑歳」（如意輪観音）二十二夜」女人講中
●	阿弥陀如来	50・50・22	（無銘）南北朝
●	薬師如来	54・45・19	（無銘）南北朝
●	百番供養塔	92・35・32	安永元壬辰年」百番供養塔」十二月吉日 施主」奈良藤七
●	庚申塔	123・98・23	元文三戊午天」庚申塔」九月吉日
●	庚申塔	69・28・22	（表）庚申塔 （側）明治十七甲申歳」十一月六日建之」文明開化広大天」講社安盛祝祈豊蔵

●	庚申塔	94・54・25	寛政戊午十月吉日」庚申塔」組中」右主」笂井村　羽鳥金右衛門
●	庚申塔	50・27・24	(表)庚申塔 (側)天保八酉年」霜月吉日
●	念仏供養塔	59・23・10	(地蔵菩薩立像) (台)宝暦十三癸未天」寒念仏供養」七月吉日
●	念仏供養塔	64・23・21	元禄五年」南無阿弥陀佛」正月十一日
●	念仏供養塔	58・53・35	(地蔵菩薩立像) (台)文化九歳」念佛供養」十一月吉日」宮原中
●	石燈篭	133・50	御神燈」文政七甲申年」仲冬吉日
●	石宮(金比羅宮)	53・27・47	(側)宮原奈良氐」今比羅宮
●	石宮(天満宮)	52・35・54	(正)天神様 (側)享和元年辛酉天」八月吉日」子供中
●	石宮	47・31・53	(側)寛政八丙辰」六月吉日」弥五郎殿
●	石宮(天王社)	50・36・60	寛政六寅天」七月吉日」宮原中」牛頭天王
●	石宮	46・38・50	寛政八丙辰」六月吉日」居森殿
●	石宮	53・44・55	(前)享保三歳
●	大黒天碑	103・50・16	(表)大黒天 (裏)元治元甲子年」十一月吉日」当組中
●	門弥陀如来	40・33・12	(無銘)坐像、室町

●	馬頭観音	42・25・12	(無銘)
●	石宮	76・53・48	(無銘)江戸初期
●	二十二夜塔	73・30・25	(如意輪観音) (台)二十二夜」安永八巳亥稔」十一月吉日
●	馬頭観音	60・35・10	宝暦四戌天」(馬頭観音立像)正月二十五日
●	庚申塔	70・28・25	(正)庚申塔 (側)明和元甲申年」十月吉祥日
●	十六夜念仏塔	80・23・15	(地蔵菩薩立像) (台)念仏」十六日」供養
●	念仏塔	50・24・14	(表)(真言) (側)宝暦十三癸未天」十一月大吉日
●	阿弥陀三尊	83・80・24	(板碑形式、種子碑)
●	馬頭観音	73・38・10	大正元年十月廿一日」馬頭観世音」名馬藤錦木村政□建之
●	水盤	48・98・68	奉献㊂　笂井、増田講社」明治四拾三年拾壱月三日
●	顕彰碑	222・130・57	(表)桃中軒雲右衛門」顕彰碑
●	用水改築記念碑	110・49・6	養蕃堰改築記念碑」昭和十一年四月竣工
●	富士講社記念碑	165・58・14	三寸三度　登山記念碑」東園書 大正十年十月二十六日(一二五名略)
●	石宮(八幡社)	57・40・58	奉造立八幡宮」延宝三乙卯三月
●	石宮(天神社)	49・32・50	(正)天神宮 (側)文政二卯一月吉日

●	石宮	38・34・46	(側)文化三戊寅年」八月吉日
●	石宮(浅間社)	94・73・40	(正)富士　浅間大神 (側)明治十七年」歳次甲申」十月吉日 (台)後見人」木村三次郎(他八十八名略)

下増田町

236	二十二夜塔	245・45・30	(如意輪観音坐像)」文政十丁亥年」二十二夜塔」七月吉日 (台)奥原」女人」講中
237	子安地蔵	135・40・30	(子安地蔵坐像) (台)□善男」善女」講中　奥原」中屋敷
238	如意輪観音	208・76・40	(如意輪観音坐像)福聚□無量 (裏)天明二壬寅季十一月吉日
239	庚申塔	85・67・50	(正)[illegible] (左)明和五戊子稔」八月吉祥日
240	手洗石	77・123・62	(右)明治二十五年」十二月吉祥日 (正)嗽盥 (左)蓮花院 (裏)寄附人(人名約五十名略)
241	石燈籠(一対)	206・77・77	正徳五乙未天」法印舜賀」奉造立石燈籠衆願成辨之所」敬白」二月十九日
242	宝篋印塔	244・65・60	(西)[illegible]皆寛保元辛酉天」暮春吉旦」施主細野忠七」母」細野長左右門 (北)[illegible]寶篋印陀羅尼 (東)[illegible] (南)[illegible] (経文省略)

243	御神燈	137・46・46	(右)文化十二乙亥年 (正)御神燈 (左)十二月吉日　講中
244	神名碑	83・43・22	(右)天明二寅年三月吉日 (正)天来人去者道命」地来人去者道命 (左)下増田村」奥原組中
245	道祖神	100・80・60	道祖神
246	石祠(蚕神)	67・40・56	蚕影山 (台)講中　文久三」亥三月
247	石祠(天満宮)	73・45・55	(右)明治九年」子八月吉子 (正)天満宮 (台)氏子中
248	石祠(天王)	83・49・83	(右)天保七丙申年 (正)天王宮 (左)六月吉日 (台)阿久津」組中」世話人(十一名氏名略)
249	石祠(諏訪)	87・60・87	(右)文化五戊辰年 (正)諏訪宮 (左)五月大吉日 (台)世話人(三名氏名略)組中(十一名氏名略)
250	石祠(秋葉)	86・44・84	(右)文政九丙戌年 (正)秋葉山 (左)九月吉日 (台)阿久津中(十名氏名略)
251	道祖神	60・33・16	(表)道祖神 (裏)文化五戊辰四月吉日

252	八海山神社	140・37・14	(表)八海山神社」高山伊之吉 (裏)年六十七歳ニ而立
253	道祖神	125・56・30	□□神 (裏)願主」□山伊之吉」細野瀧次郎
254	三笠山神社	155・33・17	(表)三笠山神社 (裏)高山伊之吉」年六十七歳ニ而建
255	石祠(今宮大明神)	127・56・80	(右)寛永元甲子歳」九月吉日 (裏)深沢采女正繁利」同重廣」奉造立今宮大明神」同清次」同正吉」同成家
256	石祠	94・55・86	(右)天保十三壬寅年 (左)八月大吉祥日 (台)惣村中
257	石祠	73・37・75	(正)天神 (台)中屋敷」奥原」総組中
258	石祠(金毘羅)	86・70・90	(正)金毘羅宮 (裏)文化五戊年」辰四月吉日 (台)(十一名氏名略)講中(三名氏名略)
259	石祠(蚕神)	90・43・70	(右)文久三癸亥年」三月十九日 (正)蚕影山 (左)中屋敷」奥原」両組中
260	石祠(天満宮)	60・49・84	(右)文化四丁卯年」八月吉日 (正)天満宮 (左)中屋敷組中 (台)世話人(三名氏名略)
261	馬頭大士(道標)	44・21	馬頭大士」右野道」左五料福島橋」文政五辰七月吉日」施主北爪氏

262	道祖神	46・30	道祖神
●	石祠(水神)		水神宮」大師口山
●	供養塔		大震災」大火災」横死者聖霊供養塔」東京横濱横須賀小田原墓地(正午)大正十三年九月一日」院主」檀信徒敬白

下大島町

263	石祠(天神)	90・57	(裏)明和二酉季」九月吉祥日」當村中 (室内に天神の板あり)
264	石祠(天王宮)	94・61	寛政四壬子季六月吉祥日」天王宮」當村中
265	庚申塔	88・54	寛政十二庚申歳」庚申」霜月吉祥日」村中
266	蚕霊塔	62・35	蚕霊塔　昭和
267	燈籠	180・64	石尊宮」献燈籠 (台)世話人　若者」當村中」文化十一甲戌年極月吉日
268	宝篋印塔	412・115	(南) (西) 維持寛政八年星次」丙辰十一月吉祥日　(造塔趣旨) (北) (東) 宝篋印塔」施主天川大嶋村住」関口衛易

269	大日堂建立碑	94・47	(右)享保八癸卯　入定山正徳寺」奉建立大日堂」十二月大吉祥日」當住上人及海 (表)天下国土旦那所」奉平安全繁昌所
270	地蔵菩薩	114・31	(無銘)
271	念仏供養塔	65・27	奉念仏供養　當村女人中」(如意輪観音坐像)明和八辛卯天仲秋吉祥日
272	巡拝塔	62・31	天明二壬寅□一月吉祥日」奉納秩父坂東西国四国供養塔
273	庚申塔	78・33	(表)(青面金剛像)(三猿あり) (裏)正徳四甲午　正徳寺」奉待庚申供養」今月今日　(二鶏あり)(七名略)
274	庚申塔	85・63	(裏)明和八辛卯年八月吉日」當村講中
275	石祠	54・44	天明八戊申九月吉日」當村中
276	大黒天	65・28	大黒天 (裏)元治紀元甲子歳」九月甲子建立
277	百番供養塔	46・26	明和八辛卯」奉納百番供養」當村　富岡口
278	如来	73・50	(背)□海　甲口　丈大日求之
279	百番供養塔	104・80	宝暦十二壬午歳」奉納百番供養塔」陽月吉祥日」當邑関口善左エ門」(外に五名)
280	馬頭観音	70・36	馬頭観音 (台)□セ馬土中

281	道祖神	68・56	道祖神 (裏)天明二壬寅年勢多郡下大嶋村」七月吉祥日　講中

第八章　民俗知識

一、しつけ、作法、禁忌

田植をして悪い日　半夏の日には田植をするな。

タツの日にも田植をしない。この日田植をすると、その米が葬式のときのタツガシラののりになるといった。（女屋）

この辺で田植をしては悪い日は、タツの日である。たちがれになるといった。

半夏の日にも田植をしては悪いといった。この日に植えると、半分しかとれないといった。（小屋原）

タツの日には田植をしない。その米が葬式のときのタツガシラののりになるといった。この日は、お寺の田植日といった。檀家の人は、お寺へ田植のすけに行った。

半夏の日も田植をしなかった。

むかし、ハンゲさんという人がいて、田圃で田植をしていた。

「はあ、おひる（弁当）もってくるころだ。おひるもってくるころだ」と待っていた。

ところが、うちの人は、その日が半夏の日だったから、田圃へは行っていないだろうというので、弁当を持って行かなかった。

そしたら、ハンゲさんはぶったおれてしまった。

それで、半夏の日には田植をするなといっている。（駒形）

半夏の日には田植をしない。タツの日にも田植をしない。

六月二日と三日には、田植をさせなかった。五月二十九日もさせなかった。

おばあさんがさせなかった。田の中に一歩も入れさせなかった。わけはいわなかった。

六月四日が田植のおしまいだった。あとだといった。

半夏の日も田植をしなかった。（天川大島）

タツの日には、田植をしなかった。もみふりもタツの日をさけた。

タツの日に田植をすると、葬式のときの、タツガシラののりになるといった。このときののりは、飯を、そくいにしてつかった。

むかしは、人が死ぬと、「米になる」といった。

半夏の日も、田植をきらった。

むかし半夏さんという人がいて、（半夏の日に）お昼も食わねえで仕事をしていて、田圃で倒れたという。

それで、半夏の日に田植をするのをきらった。

つぐ日に田植をした。苗取りはしてもよい。（下増田）

苗代をして悪い日はない。

田植をして悪い日はタツの日。この日に田植をすると、その米がタツガシラの糊になるといった。それは、人が死ぬということである。

半夏の日も田植をしては悪いといった。麦まきをして悪い日というのはいわない。（上佐鳥）

田植をしてはならない日は、タツの日。半夏の日については、とくにいっていない。

タツの日に田植をすると、葬式のときのタツガシラののりに、そのつくった米がなるという。人が死ぬということである。

この日は、お寺の田植をしたという。坊さんが利口で、タツの日には田植をさせないで、寺の田植をさせる口実にそういうことをいったのではないかといわれている。（上増田）

田植をしてはならない日は、タツの日という。（女屋）

苗代をしてわるい日はタツの日、田植をしてわるいのもタツの日。タツの日に田植をすると、その米が、じゃんぼんのときに、たつがしらをはりつけるのりになるといった。（櫛島）

田植をして悪い日は、タツの日。この日田植をすると、この日植えた稲が葬式のときのタツガシラののりになるといっていやがった。

半夏の日にも田植をしないという家があった（源三家の新宅）。

（小屋原）

半夏の日　半夏の日は、タツの日ほどさわがない。

田植をする場合には、この日に三年続けて植えればかまわないといった。

半夏さんという人が、この日田圃で倒れたという。（上増田）

むかしは、半夏の日が田植のほんしゅんといった。このあとさきにすれば、米がとれるといった。しゅんをのがしてはいけない。

「せんだのこえより、一夜のしゅん」ということわざがある。

なお、ムギまきについては、とくに悪い日はいっていない。（櫛島）

半夏の日には田植をしないといった。どういうわけだか知らない。

ただ、半夏の日に田植をするときには三年続ければいいといった。

（野中）

半夏の日には田植をするなという。

半夏の日には田植をしない。

むかし、ハンゲさんが、しちゃあ悪い日に田植をして死んだので、その日には、田植をしねえほうがいいという。（笂井）

禁忌　辰の日に田植えはしない。（亀里）

タツの日を忌むこと　たねおろしはタツの日を忌む。

田植もタツの日をさらう。この日植えた稲は葬式のときのタツガシラののりになるといった。（上増田）

笂井では、タツの日には田植をしないといっている。この日に植えた稲は、葬式のときのタツガシラののりになるといった。

むかし、タツの日に田植をした人があった。そしたら、葬式がでたという。（笂井）

タツの日には田植をするなといった。この日に田植をすると、その米が葬式のときのタツガシラののりになるといった。

この日は、お寺の田植の日という。（下長磯）

タツの日には田植をしない。この日植えた植は、タツガシラの糊になるという。

苗代も、タツの日は悪いという。（笂井）

縁側から出入りする人　奥座敷のところの縁側から入るのは嫁にきた嫁さん。

亡くなった人は、ここから出た。

一見客は縁側から出入りする。（下長磯）

ご祝儀のとき、嫁さんは、おくりの縁側からあがった。

一見客はおもての縁側のところから出入りした。（野中）

嫁さん—嫁入りのとき、姑さんが縁側から嫁さんを抱きあげた。

結婚式のときの一見客。

坊さん
縁側にござをしいておいた。（下大島）

あわせ苗はするな　苗取りをしていて、あわせ苗をしては悪いといった。たとえ小束でも、自分とった分だけで束にしろといった。
稲の苗取りをしていて、あわせ苗をしてはいけないという。
自分の苗とほかの人の苗が半端だからといって、あわせ苗をしてはならないといった。
どういうわけだかわからない。（笂井）
田植のとき、苗取りをしていて、とった苗が一束には足りないというとき、隣の人がとった苗とあわせて一束にするな。あわせ苗はするなといった。自分でとった分で一束にしろといった。（上増田）
苗取りをしていて、あわせ苗はするもんじゃないといった。「そんなことは、するもんじゃない」といった。（小屋原）
あわせ苗はするもんじゃないといった。（野中）
あわせ苗はするなといった。
どういうわけだかわからない。（下長磯）

うどん　小正月の準備が完了するまで食べられなかった。（房丸）

菜　正月三が日は、菜が食べられない。七草までは　菜が食べられない。（亀里寺家）

そうじ　三か日はそうじをしない。逆に門や台所から三回ずつはきこむ。（鶴光路）

俗信　竹ぼうきで、台所をはくなといった。（小屋原）

ご祝儀といも　ご祝儀のときは、くれ方ではいもはつかわなかった。嫁に行ってもまれるからという。
もらい方ではいもをつかった。いもは子がはくからという。（小屋原）

ナズナと爪切り　一月六日の夜　ナズナをひたした水を爪をつけてから爪を切れ。こうすれば、一年中、いつ爪を切ってもいいといった。（上大島）

釜のふたの上で餅を切るな　ふだん、釜のふたの上で餅を切るなという。四十九の餅は、釜のふたの上で切るからという。（上大島）

夕方墓参りに行くな　夕方墓参りに行くなといわれた。夕方墓参りに行くと仏様が背中についてくるといった。（下長磯）

サンニチ　月の一日、十五日、二十八日は、洗濯をするなといった。
この日に洗濯をすると、愛敬を洗いおとすといった。
夜、洗濯物を出しておくと、子供の夜泣きができるといった。
お産、葬式のときの洗濯物は、日光にあてて干してはならないといった。もったいないといって夜干した。
死んだ人には、洗濯したものを、さおぬきで着せた。洗ったものを、たたまないで、そのまま着せた。
そのために、ふだん、洗濯したものを着るときは、一度たたんでから着るものだといった。（上大島）

洗濯をしない日　下長磯の中沢義男家では、元日は洗濯をしない日としている。一年に一度くらいに、物干竿をやすませろといった。（下長磯）

冬至　うちをいじるとか、大きい木を切るときなどに、冬至の日にやれば、たたりはないといった。（下長磯）

写真のこと　としよりの人は、写真をとると、影がうすくなるといっていやがった。
三人で写真をとると、真中の人が死ぬといった。
三人で写真をとるときには、かならず一人に人形を持たせてとった。（下長磯）

夏下冬上　これは炭のおこし方をいったもの。

夏は、炭をおこっている火の中（下）へ入へておく。そうすると、火は外へ出たがっていておきるという。

冬は寒いから、火がめった炭の中へもぐっていくから早くおきるんだという。

これは、明治六年生まれの私の父が教えてくれたこと。（小屋原）

盆のお茶のこと　盆のときには、お寺からお茶をわけてくれる。そのお茶をいれて、朝・昼・晩の三回、仏様に供えろといった。

仏様にあげたお茶は、三回とも、のきばに捨てろといった。

のきばには、無縁仏がいるという。

守りをしてくれるものがない仏様のことは無縁仏という。盆のとき、うちの仏様がうちへお客にくるとき、そのあとに続いてくるという。

無縁仏には、お茶をこぼしてやれといった。（天川大島）

仏様のご飯　仏様に供えものをする子はいるが、さげて食べる子はいないという。仏様にあげたものをさげて喜んで食べれば、事故にあわないといった。（天川大島）

てんがのはなし　むかし、てんが（手鍬）をとられると、てんかをとられるといって、ひやがった。田へおいてくるなといった。えんがはおいてきても大丈夫だった。（下増田）

山口の本家の禁忌作物　山口の本家では、そらまめと麻をつくれない。

むかし、山王様が麻畑に入ってころんで、麻の木で目をついた。

それで、山王様の氏子は麻がつくれないという。（下大島）

同い年（人間と猫の子）　同じうちで、人間の子と猫の子が、大体同じくらいの時期に生まれると、かちまけができるといった。

そのときは、猫の子はうちからだしてしまえといった。（上大島）

まんじゅうの皮　まんじゅうの皮をむいて食べると、死んで地獄へ行って、石の皮をむかされるという。（天川大島）

オサキ　茶碗をはたくもんではない。茶碗をはたくと、オサキがくるという。オサキにくるが、姿は見えない。（小島田）

生まれかわり　死んだ人にしるしをつけてやると、生まれかわるという。だから、しるしをしてやるもんじゃないという。（野中）

寒念仏　寒念仏はするなという。寒念仏をすると、火にたたるといった。（東上野）

うちの中でけんかをするな　うちの中でけんかをすると、うちの神様は出て行ってしまうといった。いやだからという。

神様はそういうときに、南天の木のところへ逃げて行くという。（上増田）

俗信　屋敷の鬼門の方にはなりもんは植えないほうがいいといった。（上増田）

ことわざ　足袋をはいてねると、親の死に目に会えない。

禁忌　真東に便所を作らない。三尺ずらすものだ。（鶴光路）

辰の日には田植をしない。お寺が田植えをする日。

石臼をまたいではいけない。

砥石を女の人がまたぐと、砥石が割れる。（亀里寺家）

寅年生まれなので、ウナギを食べない。

トウモロコシを作れない。石野家

キュウリを作れない。

七草まで菜を食べない。（女屋）

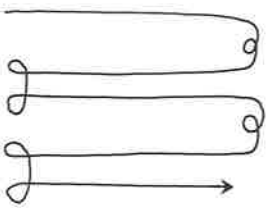
十三日までモチが食べられない。（上長磯）（下長磯）

福田一家は初市のダルマを買ってはいけない。（下長磯）

米俵に腰かけてはいけない。（亀里龍門）

キュウスの口を外に向けない。

しきいをふまない。（亀里阿内宿）
敷居の上にあがってはいけない。（亀里）
座敷でくつをはいて、下におりるのはよくない。（鶴光路）
オサキ　食事をしているとき、子供がいたずらに茶碗をたたいた。そうすると、
「茶碗たたくもんじゃあねえ、茶碗たたくとオサキがくるぞ」
といわれた。（上増田）
館野家とキュウリ　野中の館野喜代見さんのところでは、三代前くらいの人が、畑へキュウリもぎに行って帰って来ねえ。
それで今でも、キュウリをつくらないという。
明治時代のはなし。（野中）
三峰様の禁忌　三峰さんは、お産のときは、とくにブクということはいわない、人がなくなったときには、期間があってその間は参加できない。
きょうだいがなくなったとき……二十日間
子供がなくなったとき……二十日間
親がなくなったとき……一年間
三峰様のおまつりのときには、もとは、風呂に入って体をきよめてから、三峰様をおがんだ。
三峰講の前に、うちの元屋敷の裏にあったところへもりっこちんとして、おこわをもって行ってあげてくる。
三峰講に参加する人びとの住所はとびとびである。この組では十八軒ある。
現在ある三峰様のオカリヤは、次のところにある。
斉藤米雄さんのところ。
羽鳥鬼子雄さんのところ。
大手誉さんのところ。（笊井）
俗信　農道具を使って、土をつけたままにしておくなという。土をつけたままにしておくのは、葬式のとき穴っぽりに使った農具と同じという。
「墓場へ使ったんじゃないから土をおとせ」といわれた。
釜などのからたきをするな、から子ができるといった。破水がなくっておおごとだという。
ぬすっとに入られたら、ぬすっとの足跡に釘をさしたり、かまをつっとおしたりして、足どめにした。
夫婦で、相手がなくなったときには、髪の毛を切って縁切りといった。その毛を棺箱に入れてやった。（東上野）
川びたりもち　この日は、おそなえを川へもっていって川の中に入れてきた。
それを「ひやっけえ、ひやっけえ」といいながら、とりだして、もっていった人があった。（上大島）
ぞうきんがけ　単に往復するだけではなく、一度端の所でまわしてふく。（亀里）
あまだれ　あまだれのことを、ぬきだれといった。（野中）
のきだれ　軒下には小便をしては悪いといわれた。（上増田）
軒下には小便するなといわれた。軒下には神様がいるからという。（笊井）



二、医療・衛生・保健

(一) 薬物療法

やけど じゃがいもを、擂ってはった。

下痢 ゲンノショウコを煎じてのんだ。(亀里竜門)

げんのしょうこ 胃・下痢に効いた。(下長磯)

とげ抜きの薬 焼きぐすり。まゆみの木を焼いて作ったまっ黒な飲み薬。のむとよく効いた。(下長磯)

やんめ 墓石に穴をうがち、たまった水で目を洗うと目の病にきく。やんめがなおるといわれた。(下長磯)

熱さまし キュウリのナカゴと、タザをもんで、足の裏にすりこむと良い。(亀里寺家)

ミミズの内臓をしごいて出して、土瓶で煎じて飲む。(亀里竜門)

あつけ あつけにかかったときには、きゅうりをしぼって、その水を足の裏につければ治るという。(女屋)

アツケ キュウリをもんで、足の裏にはりつけると、アツケまけしないという。(小屋原)

できもん ドクダミ、桃の葉を風呂に入れてはいった。(亀里竜門)

(二) 呪的療法

頭を冷やす方法 枕の中にそばがらを入れた。そばは頭をひやすといった。(東上野)

風邪の神送り むかし、風邪の神送りをしたことがある。

風邪をひくと、豆をいって、それを紙につつんで、うち中の者の体をなぜて、風邪の神を追いすだといって、その豆を三本辻に捨てに行った。豆をひとひねりつくってそうした。

風邪の神を送りだすのは、だれでもよかった。(笂井)

カゼ カゼをひくと、煎った大豆を、紙につつんで三本辻においておく。誰かが下げると、カゼがなおる。(新堀)

めけえ めけえをかぶると、めけえごができるからかぶるなといった。(女屋)

目の病 持田さんの池の水で目を洗うと病がなおるという。(鶴光路)

子授けの米 三夫婦そろっているうちの米をもらってきて、嫁さんに食べさせると、子供が授かるといった。

子供のない人は、そういううちへ、米をもらいに行った。(笂井)

子供のやけど 子供のやけどは仏のたたりという。

とろろ 中気にならないために、三か日の内一日食べる。

とろろを食べて、すぐお茶をのむと中気になる。(亀里)

ほうそう送り むかしは、二歳の子供にほうそうをした。ウツギの木で、ほうそう棚をつくって、赤いへいそくをつけた。ここに供え物をしていた。

ほうそうがつくと、ほうそう送りをした。寮の西の竹やぶのところに送りだした。ほうそうは四月のころ、うえてから、二週間くらいたってから、ほうそうみせに行った。

つかないとまたうえた。(下増田)

ほうそう棚をつくって、それに赤飯をのせておくりだした。(笂井)

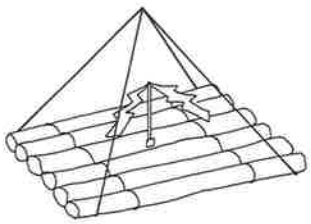
チョウッパシラに赤いオンベを立て、赤飯を上げる。(鶴光路)

桟俵にお赤飯、赤いへイソクを立てる。軽くすむと、川に流す。(下朝倉)

神社の中のホウソウ神にウツギの木を麻縄でしばって、赤いオンベ

ロを立てる。赤飯をあげる。
ホウソウが軽くすむようにねがった。祭の時には、赤飯をずっとあげる。(新堀)

ハシカ　大室では、ハシカにかかってもわるくならないようにと、三つある石橋の下をくぐった。



この石橋の下を、あかんぼうをおぶってくぐると、ハシカを長くわずらわないですむといった。あかんぼうを背負って石橋をくぐるのは容易じゃなかった。この日は、とくにきまっていない。(上大島)

十月とう歯　子供が生まれて、十月目に歯が生えると「とつきとうば」といって、前の三本辻に捨てた。

捨てる前に、隣の人にたのんでおいてその子を拾ってきてもらった。たのまれた人が抱いてきた。

捨てるのを見ていて、すぐに拾ってくれて、つれてきてくれた。

つれてきてくれた人には、「お茶でものまねえかい」といって、もてなしてやる程度であった。(下長磯)

イボ　イボをなおすには、「イボイボ一本橋わたれ」といって、ワリばしでつなぐまねをすると、イボがうつって、うつしたものはなおる。(笂井)

六三除け　小林さんのおばあさんはよく知っている。お天道様が出ないうちに、一把線香を三本辻に立てて、そこを左まわりに、三まわり半まわって、うしろをふりむかないでかえって来いといわれた。

このほか、新田町の反町の薬師様にお願生する人もあった。

西大室に観昌寺というお寺がある。六三になったら、ここへお願生かければよいという。

むかし、ここの和尚さんが六三除けをやっていた。この和尚さんは酒好きだったという。

あるとき、檀家の人が、和尚さんがいなくなったら困るといったら、わしが死んだら酒をあげてくれといったって。

それで、六三にかかった人に、和尚さんの墓へ行って、

「わたしは六三で難渋しています。治していただきたい。治ったらお酒に青菜をいれてあげます」

とおねがいする。

六三が治ったら、お礼に酒をあげるわけ。(笂井)

節分のこと　二月の節分のとき、豆をいりながら、豆木にさしたイワシの頭をやいた。

このとき

「田の虫の口を焼き申す」とか、「畑の虫の口を焼き申す」といいながら、豆をいったり、イワシをあぶったりした。

なお、ナスの木（から）とか、菊の木を燃して豆をいった。

それは、「借金なすがら、よいことき・くがら」、という意味であるという。そのために、前もって、ナスとキクのからをとっておいた。

むかしのはなしだが、口やかましい姑様がいると、嫁さんが、

「やかましい姑様の口を焼く」

いいながら豆をいったという話もある。なお、豆はほうろくでいって、豆がらでかきまわした。(笂井)

あつけ　あつけにかかったときは、本人を井戸端につれて行って、すげ笠をかぶせて、井戸水をかけた。(女屋)

あつ気にあたった者に、すげ笠をかぶせ、ひしゃくで三杯水をかける。笠から水がもれば、本当のあつけ気あたりだといった。(亀里寺家)

はれもの　はれものができたら、朝、お天道さまに向かって、「アビロ、オンケン、ソワカ」と三回唱え、薬指をなめてはれものをさすると良いと言った。（亀里寺家）

㈢　その他

ことわざ　夏蚕と味噌汁はあたらない。（公田）

妊婦と柿　子供が腹にあるとき、柿の木のそばへ行くなといった。消化が悪いといった。（下長磯）

カマイタチ　子供のとき、たんすへあがっておちたら、ぱくって口があいた。痛くないし、血もでなかった。そしたら、としよりのおばあさんが、カマイタチにきられたといった。そのうちに、治ってしまった。（小島田）

チバナレ　子供がわけもわからずに、一週間もぐずることがある。ぐずるのがやむと、あとで、あれは、チバナレだったという。あとでわかってそんなことをいった。（小島田）

じねえ　「馬鹿にくしゃみがくしゃみがでる。はながむずむずする」そんなときは、風邪をひくじねえだという。それに前兆ということである。（小屋原）

健康のもと　「腹八分は健康のもと」といった。飯はあまり食わない方がいいといった。「病いは口より入る」という。食うもの、飲むものを、あついめ、さむいめに、気をつければ、人間は丈夫になるといった。

厚着をすると風邪をひきやすいといった。皮膚が弱くなるという。（東上野）

仏のたたり　子供がやけどをすると、仏のたたりだといった。仏様を大事にしないから、子供にばちがあたったといった。（東上野）

足を冷さない方法　むかしの人は、足袋の底にとんがらしを入れておいた。そうすると足があったまるといった。足を冷やさないようにした。（東上野）

三、卜占、まじない

下駄うらない　下駄をはいたまま、足をけあげるようにする。はいている下駄をほおって、地面におとし、下駄の表がでれば天気は晴れ、裏がでれば雨とした。これは、前もって、表、裏についてきめておく。（上増田）

ツバキハッケ　つばきを左の手のひらの上にはいて、右手の指ではたいた。つばきがとんだ方へ行く。

さがしものをしているきなどに、こうしてうらなった。

なにかをめっけるか、どっちの方角に行ったらいいかということを知るときにやった。

かくねんしょをしていて、かくれているものをめっけるときに、ツバキハッケをしたりした。（笂井）

子供のころ、つばきのうらないをしたことがある。

つばきを手のひらにはいて、「ちんちん、ぱいぱい、おかめのごまとう」といって、人さし指で、つばをはたいた。つばがとんでいった方向が、方がいいといった。（下増田）

つばきを手のひらにはいて、人さしゆびでそのつばをはいた。

さがしことをしているとき、そんなことをした。つばのとんで行った方にさがしもんがあるといった。（上大島）

まじない　朝、蜘蛛が降りてくるのは縁起がいい。夕、蜘蛛が降りてくるのは、不吉だ。蜘蛛を捨てる時は「おとといこい」といって捨

てる。

夜爪を切るときちがいになる。

爪をもやすものではない。

くつのはきおろしをしてはいけない。

人が死んだ時、遅くかけつけると死人が鼻血を出す。

逆の葬式の時、親は斎場や野辺のおくりにいかない。

雨の降る晩は、墓場に行くもんじゃない。りんがもえる。（鶴光路）

娘をもらいたいという願い　十五夜とか十三夜におそなえをした。そのうちに好きな娘さんがいて、ぜひ嫁さんにほしいというときには、そこのうちのそなえものをさげればいいという。そうすれば自分の願いがかなうといった。（上大島）

耳ふさぎ　ムラ内で同じ年の人がなくなると、馬糞を紙に包んで、耳をふさいでから三本辻に捨てた。

「聞かないよ」ということであった。これを耳ふさぎといった。（上大島）

ムラの中で、同い年の人がなくなると耳っぷさげということをした。ある人がなくなったという話があると、馬糞を半紙に包んで、両耳にあてて「聞くな、聞くな」といった。

同い年の者がなくなったということを聞かないようにということであった。

これは、子供でも、大人でもしたことである。（下長磯）

成木責め　柿の木をナタで傷付け、小豆粥をつけ「なるかならぬか」といって、木をたたく。（公田）

山へ行く時　仏様へ上げたごはんを食べるとけがをしない。（下長磯）

まじない　式三番の衣装を小さく切り、坏一坏くらいのお酒にひたして、前線の兵隊にお守りに送った。（下長磯）

蚕のまじない　小正月にマユ玉飾りをする。桑の枝にマユ玉と菓子を下げる。

小豆粥を吹いて食うと蚕がナダレになる。十八日粥を家のまわりにまくと、蚕の害虫が入ってこない。

初午にお供えをする。マユからサナギが出てくる掛け軸をかけておく。神様の絵もあった。（朝倉）

雷除け　節分の豆をとっておいて、初雷にまく。おちた所へは、それ以上広がらないようにしのを四本立て、なわをはって。ヘイソクを下げた。（鶴光路）

六三除け　三本辻に線香を立てた。（鶴光路）

お礼を寝る所の天井にはった。（公田）

節分の豆　節分の豆をとっておく。

これを、かみなりが鳴ったときに食えば安全だといった。（下大島）

厩肥をだすとき　厩肥をだすとき、どんぶりに水を汲んで、その中に桑の枝をいれてあがりはなにおいた。どういうわけかわからない。

馬は外へ出しておいて、もっこで、肥を二人ではこびだした。（下長磯）

草はホウキグサがきらい　ホウキでまい朝庭をはけば、草が出ない。それで、草はホウキグサがきらいだという。（上大島）

ナスの初なり　ナスの初なりは、棒の先にさして、畑にあげた。これは、天道様にあげるのだという。そのあとに食べた。（女屋）

初なすは、もいで、棒の先にさして、畑にたてた。

お天道様にあげるという。（朝倉）

ナスの初なりは棒にさして畑にあげる。お天道さまにそなえるという。（亀里）

ナスの初物は、棒の先にさして、ナス畑にたてておく。
これは、お天道様にあげるといった。また、仏様にもあげた。
キュウリの初物は、仏様にあげてから食べた。仏様にあげないうちは、食べてはならないといった。（下長磯）
ナスの初ものは、棒の先にさして、ナス畑にたてた。お天道様にあげるといった。キュウリの初なりは、天道様にあげてから食べた。
（上大島）
初ナスは、棒の先にさして、畑にたてておく。お天道様にあげるという。（小屋原）
キュウリは、はつなりは、もいできて、大神宮様と天王様にあげた。神棚に、「大神宮様と天王様にあげます」といってあげる。
ナスのはつなりは、畑で棒にさして、天道様にあげますといってたてた。（筑井）
初ナスは、棒の先にさして、畑にたてておく。お天道様にあげるという。（下大島）

便所をきれいにすること　便所をきれいにすれば、腰の病いをやまないといった。（上大島）

厄おとし　むかしは、ムラの厄年の人がおかねを出しあって、厄おとしの催しものをした。浪曲家をよんだりした。宿は、ムラ内の大きいうちをたのんだ。（上大島）

二月のかっぱたけ　ムギの作柄についていう。
ムギ畑をみて、旧二月のころには、からっぱたけのようになっているほうが、その年のムギはとれたといった。（野中）

川びたり　川びたりといって、餅をついて、川神様にあげた。（十二月一日）川でまちがいのないようにということであった。餅を川へ入れると、のらぼうがきて、「ひやっけえ、ひやっけえ」といいながら、その餅を川からだして食べた。（上大島）

祈り釘　人をのろうことがあるとき、夜中に頭の上にろうそくを立てて、神社のご神木に釘を三本うってくる。
ところが、それをしているところを、人に見られてはだめという。
白装束でうつという。（上大島）

物をさがすこと　物がめっかんないときは、ご先祖様にたのめという。先だって、大工さんがきていて忙しいときに、息子に長崎から給料が送られてきた。その給料がめっかんなくなった。それでわたしとせがれで、ご先祖様に、どうかめっかるようにとおねがいした。そしたら、すぐにみつかった。（筑井）

厄おとし　でっかいうちを宿にして厄おとしをした。前橋の丸一などをたのんで余興をした。女屋のご年始が一月十一日だったので、この日にしたこともあった。（女屋）

えびすこう　えびす講のときに、えびす様に供えたものはうちの未婚の娘には食べさせるなという。えびすさまはひとりもんだからという。（小屋原）
えびす講のとき、えびす様にあげたものを、未婚の娘に食べさせるなといった。そうすると、縁遠くなるといった。
むかしは、娘は、十九にならないうちに、くれたりもらったりした。十九になると手がつめたくなるといった。それは十九では、年をとりすぎたということ。（上大島）
えびす様には、
かきあげるといって、かきをあげる。
せりあげるといって、せりをあげる。
えびす様にあげたものは、子供にくれるな。縁遠くなるといった。
えびす様には、なっぱをあげるな。大根をあげろという。

なっぱをあげると、「なく」（菜食う＝泣く）といっていやがった。
大根は大黒様が大根を好んで、だいこん食う＝だいこく（大黒）ということ。（小屋原）

子宝米　たつみ倉で、北に入り口のある倉で、三代そろっているうちの米を食べると、子供がさずかるといった。
うちの米をもらっていって食べて、子供がさずかった例がある。（小屋原）

予兆　カラス鳴きが悪い。死人が出る。太陽が、かさをかぶって、その中に星が入ると葬式がある。
寺の庭を誰か通った気配がする。本堂に上って鉦をならすと男の人が死んだ予兆だ。人魂がとぶ。（亀里寺家）
亡くなった人が出ると、お寺で音がする。台所で音がすると女の人、本堂で音がすると男の人が亡くなったことを知る。（公田）
カラス鳴きが悪い。人魂がとぶ。お寺で音がする。男なら本堂、女ならお勝手で音がする。はな緒が切れる。（鶴光路）

四、気象、天文

天気の予兆　アマガエルは、雨の降る前に鳴く。
カッコウは、晴れるときに鳴く。（笂井）
あかぎれが痛むと風が吹くといった。北風があした吹くというときには、あかぎれがいたんだ。
上毛電鉄の電車の通る音がよく聞えると、天気がよくなるといった。
また、北風が吹くと、天気になるともいった。
うちの土台石がしめってくると雨が降るといった。
これは、どじがしめってくることを意味した。（東上野）
天気の予兆　夕方蚊柱が頭の上にたつと、明日は天気だという。
「天虫風を知り、下馬雨を知る」
虫が上をとぶときは風がでる。鳥が下の方をとんでいるときは雨になるということ。
したけが吹くと、天気がくずれるといった。（小屋原）

気象　「赤城・子持山に雲がかかっていれば、風が吹く」
「浅間山に笠がかかると雨が降る」
「お月さんが赤く見える時は日照り」
「朝、霧がまくと天気になる」
「御荷鉾に雲がでると三束雨が降る」。（亀里竜門）
嫁の来た日がいい日だと嫁の心がけがいい。次ぐ日がいい日だとしゅうとの心がけがいいといわれた。（亀里寺家）
あけ六つ風に　九わやまい
ごしちが雨に　よつひでり。（九は十二時、よつは八時のこと）
駒形駅の汽車の汽笛が聞こえると、二〜三日後に雨が降る。
利根川の瀬音で、公田河原の音は晴、横手河原の音は曇、新堀河原の音は雨になる。
晴天の日には、公田河原の瀬音が聞こえる。（亀里寺家）
赤城山がまるみえ、雲がかかってないと、晴れるといった。そういうときは風が吹かない。
鍋割と荒山のあいだに雲がまたがると、窓があくといって、天気がかわるといった。風が吹くと、雨になるといった。（天川大島）
夕日のうつりかげんで、あしたの天気がわかった。
夕日が北へまわれば雨、南へまわればお天気だといった。
榛名山へ夕日がおちるといい天気になる。
赤城山へ夕日がおちると悪くなるといった。（天川大島）

天気まつり　雨が降り続いて困るときには、川へ行って水ごけをとることもあった。
八坂神社もおがんだ。（東上野）

天気雨　「キツネノヨメドリ、テンキアメ」という。テンキアメというのは、晴れているときに降る雨のこと。（上増田）
お天道様がでているのに、雨がパラパラっと降ることがある。それほど降らない。そういう雨のことは、天気雨という。（笂井）

寒のこと　寒には鉦をならすなといった。
寒にはいって、人がなくなったときには、念仏のときにも、鉦をならさなかった。こばちをたたいた。（下長磯）

寒九の雨　寒に雨が降らないと夏に水がなくって、田植がおおごとだという。新井では、沼から水をひいて田植をした。
水がないときは、太鼓をたたいて、ムラの人をあつめて、上流の田から順々に水をさげて田植をした。
水がないときは、あさくわをもっていって、田の草をかいたことがある。
寒に雨が降れば、夏に水がふえるといった。
寒の一粒の雨は、夏に九倍になるという。
新井では、かわく年には、田の草をあさくわでかいたことがあったという。（上大島）

赤城の夕立　赤城の夕立は、駒形まで来たことがないという。
この辺へ来るかみなりは、御荷鉾とか榛名のかみなり。
御荷鉾のかみなりは、「御荷鉾の三束雨」といっていそがしくくる。麦を三束たばねるうちにくる。
赤城からのかみなりは、あんなんでどうするといっていたのがよくきた。（駒形）

かみなり　赤城ではじまったかみなりは、大体日光の方へ行って、ここへは来ない。
榛名ではじまったかみなりは、ここへくる。
赤城からでたかみなりは、この辺へはおおくは来ない。
御荷鉾からでたかみなりは、「御荷鉾の三束雨」といわれるように、ムギの束などのまるきっことを三束しないうちにやってくるという。（笂井）
赤城からはじまったかみなりは、たいてい、東へまわってしまう。
そのために、赤城のかみなりが、桃木川を三度越せば、その年に豊年だといった。
赤城からはじまったかみなりは、こっちへは来ない。
この辺へくるかみなりは、おはるなさま、みかぼもきた。これは、「みかぼの三束雨」といって、ムギを三束まるめないうちにやってきた。
赤城からはじまったかみなりさまが、こっちへくるようだと、その年は米があたりだといった。
赤城のかみなりさまが、桃木川を渡ってこっちへくれば（赤城が桃木を越せば）、米はあたりといった。（上大島）
赤城から出たかみなりさまが、この辺までくることはすくないといっている。（小屋原）
赤城からくるかみなりは、この辺には来ない。この辺にくるかみなりは、榛名から出るかみなり、伊与久からくるかみなりはひどい。
むかしは、御荷鉾の三束雨といった。御荷鉾から来るかみなりは、早かった。ムギを三束まるくうちにやってくるという。音がすると、もようしがなく、すぐにきた。（上増田）
雷が田に落ちると、その範囲に注連縄をはりめぐらし、下肥えをま

いた。こうすると被害が拡がらなかった。そのままにしておくと、稲が黒く拡がってしまうといった。（徳丸）

落雷のあと、落ちたところにしめをはらないと、広がってしまう。（公田）

落雷のあとに竹を四本立て、しめなわをはった。はらないと、中の黒いのが広がるので神様に守ってもらうのだという。（亀里）

雷が落ちそうな時は、かやをつり、線香をつけて「遠くの桑原」といって、外へ線香をなげる。節分の時、のこした豆を食べる。

田の中へ落ちたら、その四方にしめをはっておくと、黒いのが広がらない。

屋根に落ちた時は、ためをかけると消える。

雷が通る雷道があり、川端から上沖、上泉あたりになる。（下長磯）

雷の置ちた所にしめを張り、中に人ぷんをまくと、広がらない。しないと被害が広がる。

しめはせまくはる。

雷除けには、線香を立てる。

年取りの豆をとっておいて、雷の時に使った。カヤの中に入るとよい。（亀里阿内宿）

雷がおちたところには、四角くしめを張る。雷の火は水では消えない。

遠くの桑原、遠くの桑原と、となえるとよい。

麻のかやの中にいると大丈夫。（朝倉）

赤城からのかみなりは来ない。

御荷鉾や榛名山方面からのかみなりがくる。（下大島）

御荷鉾の三束雨　わしが若いころは、「御荷鉾の三束雨」ということをいった。

御荷鉾の山の方に雲がでると、小麦を三束まるかないうちに雷がきたといった。

赤城から出た雷は東へまわってしまって、あまりこない。（笂井）

西南からくる雷は、ムギ三束まるくうちにやってくるという。（野中）

御荷鉾山のほうからでたかみなりは、早くやってくる。

ムギを三束まるくかまるかないうちにやってくるという。

それほど早くやってくるという。（駒形）

御荷鉾の三束雨は早くくるといった。

前橋の方に夕立がでると、小麦を早くまるけといった。（上増田）

御荷鉾の方からくるかみなりは早くくるといった。ムギの束を三束まるかないうちにやってくるので、御荷鉾の三束雨といった。

赤城からでたかみなりはこの辺へはめったに来なかった。赤城のかみなりが三回来ればその年は（米）豊作だといった。たいがい、榛名か御荷鉾のかみなりさまで終ってしまった。（上大島）

若いころには、御荷鉾の三束雨が降るといった。御荷鉾の方に夕立がはじまると、こっちでムギを三束まるかないうちにかみなりがくるという。

御荷鉾の方に雷がでたら、早く野良から逃げて来いといわれた。（上増田）

霜と雹　霜の道があるという。この辺にはあんまり来ない。雹の道もあるという。同じところへ降るという。（小屋原）

霜除けの餅

「夏の日でりの草もちついて霜のふたする九十九夜」…父親に聞いたこと。

九十九夜がすんでから、なすなどの苗をうえろといった。（小屋原）

からっ風　春からっ風が吹いた。

春の彼岸になると、からっ風といった。
むかしの県道は舗装などしてなかった。風が吹くと、砂ぼこりでえらかった。
赤城おろしは十月ごろから吹いた。夏になるとやんだ。
「上州名物、からっ風にかかあ天下」といった。
駒形の神社から東のはたけは、風が吹くと土をとばされてしまうので、畑にわらを二つ折りにしてさした。十月ころから春の彼岸のころまでやっていた。
駒形は砂地だったから、大風が吹くと、砂ぼこりで、むこうが見えなかった。屋敷のまわりには、風除けとして竹やぶがあり、かしぐねがあった。高さが一丈もあるかしぐねもあった。
駒形のあたりは、むかしの利根川の川原まであったから、砂利すなでほこりが余計にでた。(駒形)

ダンダゴロ　暗くなって、人の顔がはっきりわからないころのこと。誰だかわからないような時刻のことを、ダンダゴロといった。(上大島)

冬至のはなし　冬至のとき、冬至とうなすといって、中風にならないようにと食べた。
また、ゆずのはを風呂の中に入れて入った。ゆずのはで体を洗うと、中風にならないといった。(東上野)

七夕のこと
七夕の日には、ウズラ畑に入ってはいけないといった。どういうわけだかわからない。七夕の日には、七日水を浴びろといった。
七夕様（飾り竹）に、子供の新しい着物をしんぜてから着せると、その子は丈夫に育つといった。
七夕の日に雨が降ると（七夕様）とおひめ様があえないという。川があふれるからという。
七夕様のときにはゆでまんじゅうをつくってあげた。六日の晩に、縁側に机をだして供えた。
飾った竹に、七日の晩方川へおさめた。これを畑にたてるうちもあった。これはスズメよけといった。(笂井)

さんじょさま　十二月から正月にかけてよなべ仕事をしているわらひとっくびりを一晩になった。
よなべ仕事は、大体なわないだった。わらひとっくびりを、さんじょさまがでるかでないかぐらいになった。
わらひとっくびりなってから、わかいしゅは夜あそびに行った。
八時半か九時ごろのことである。
女衆はおもに、はたおりをしていた。(駒形)
さんじょさまは、向きをかえる。
たてになったり、横になったりした。夜なべをしていて、さんじょさまのあがりぐあいをみて、仕事をよした。(下長磯)
三つ星のことは、サンジョサマといった。
家内安全をおがんだ。(上大島)

とびあがり　夕方、田圃で仕事をしていて、夕方になって（天道さんがひっこんで）「それ、とびあがりがでたぞ」といった。
とびあがりがでるころ、仕事をしまってきた。とびあがりは、くれの明星。
空になんにもないところへ、ぴょんとでるので、とびあがりといった。
星とはべつに、人より目立つ人のことは、とびあがりといった。人より先にでる人のこと。
明星も、ほかの星より一足先にでるからそういったもの。
明けの明星についてはどういったかわからぬ。明けの明星があがれ

ば、あとから天道様がでる。
天道様より先にみえるのが明けの明星。
天道様がひっこんでからでるのが、暮の明星。両方とも、光がつよいのではっきりみえる。暮れの明星のことを、とびあがりといった。
（下長磯）

よあけのみょうじん（みょうじょう）とひぐれのみょうじんとある。
よあけのみょうじんは、とびあがりといった。
むかし、ムギまき時分、「とびあがりだ、早く起きろ」といわれた。よあけのみょうじんさまがあがるから起きろということである。
ひぐれのみょうじんさまがでると、日ぐれになるといった。
（天川大島）

いちばん早くでる星、でっかい星。
あけのみょうじょう、くれのみょうじょう。（笂井）
（金星のことは）とびあがり星がでたとか、動いたといった。
それは、すこし暗くなってからよくわかった。くれのみょうじょうのこと。（上大島）
あけのみょうじょうとくれのみょうじょうがでた。（駒形）

日蝕　日蝕は、天道様が人間の代りに病んでくれるのだという。
日蝕のときは、手をあわせておがんだ。
日蝕になると、国が乱れる。戦争になるといった。（上大島）

たつみ　むかしから、たつみけえどはいいといっている。
土蔵を建てるうちに、屋敷のたつみ、いぬいの方角に、それぞれ、たつみぐら、いぬいぐらを建てた。（笂井）

五、動物、植物

(一) 動物

ホウジロ　ホウジロは、「テッペンイチロクニシュマケタ」と鳴くという。
「セックセチマニモチツイテクンルゾ」と鳴くともいう。（野中）

葬式と馬　葬式のときは、馬をなかせてはいけないといった。
そのために、葬式の日には、うんとえさをくれておけという。
（上大島）

馬のこといろいろ　馬が死んだときには、うちの近くの三本辻とか畑にうめた。
そのときさ、馬頭観音をたてた。（下増田）

馬のまきめのことなど　まきめがまっつぐ（正面）にある馬はよくないという。
むかし、かなぐつやさんが駒形にあった。新井さんという人だった。
妊娠している人は、馬の道具などをまたぐものではないといった。
馬は十二月で子供をうむので、子供の生まれるのがおそくなるといった。（笂井）

牛、馬　牛は後、馬は前にいるのが安心で、馬にけられて死んだ人がいる。（亀里）

牛　疲れて動かなくなった牛は青竹でたたいて動かすが、たたきすぎて殺した人もいる。麦ワラに火をつけて近づけると動く。（亀里）

馬のことなど　馬の子は、生まれるとすぐにはいだす。
おそうでん様は、台所の下大黒のところにおまつりしてあった。
そうでん様は、生き物を育てる神様であるという。

むかしは、丙午年生まれの人は好まれなかった。その人の旦那様を食うといわれた。

馬をとりかえたり売ったり、買ったりしたときは、おそうでん（おそうぜん）まつりをした。このときは、馬喰についてきたばんぞうと、うちのもんだけでおまつりをした。

馬の売買のときには、馬喰と、馬喰についてきたばんぞうがたちあいで取り引きをした。馬喰は着物を着てきて、たもとの中に手をひれて、指をうごかして値段をつけた。

馬のない人のところには、馬をもっている人が馬と一緒にすけっとにきてくれた。このときには、馬を借りた人は手間がえしをした。

すきかけ、しろかきには馬をつかった。はんどりとまんがおしは仲が悪いといわれている。

「つけ」とか「ひけ」とか、まんがおしは、はんどりに叱言ばっかりいっていた。「七つ泣きはんどり」ということばがある。むかしは、七つくらいになると、はんどりをさせられたという。

代かきしたとき、小麦のかぶつで、足がきずだらけだった。お湯に入ると、お湯がきずにしみて痛かった。つらかった。

馬の病気にせんつうというのがあった。これははらいただった。腹をこすってやって、ビールをのませると糞がでた。ふんずまりだった。

葬式のとき、天蓋の下の赤いつぎをもらってきた。もらいに行くと、やぶいてくれた。それをもらってきて、馬の耳のところ（くつわ）につけた。

ダイバよけになるといった。

馬は火事のとき、うまやから逃げださないといった。むかしの人は、餅をふかすときのゆでゆは馬にくれるなといった。そうすると、火事のとき、馬がうまやからでないといった。（下増田）

ホウジロの鳴き声　ホウジロは、「セックセチマニモチツイテクンルゾ」と鳴くという。（野中）

モズ　モズは、カエルとか、カマギッチョを、桑木につきさしておく。これはホトトギスにくれるためだという。モズは、それを、天上の雲をみてめじるしにしておくという。ところが、雲は動いてしまうから、さしておいたところが、わからなくなってしまうのだという。だから、モズのことは、忘れっぽいという。

モズは早く起きるという。朝でないと鳴かない。（野中）

モズッパヅケ　モズが、カエルとかカマギッチョなどとって、桑の棒の先などにさしておく。これを、モズッパヅケという。（上大島）

ホトトギス　ホトトギスは、一日に八千八声鳴くという。「ないて血をはくホトトギス」という。（上大島）

ヒバリ　ヒバリは

「ヒイチリョウ、ヒイチリョウ」と鳴くという。（上大島）

ネズミ　蚕を飼っているときは、ネズミというなという。そういうと蚕がいやがるという。

蚕を飼っているときは、ネズミのことは、ヨメゴといえといった。（笂井）

ネズミは近眼だが、耳はいい。じっと立っていれば、近くまでくる。（亀里龍門）

よめごさん　おかいこのときは、ネズミのことを、よめごさんといった。かいこを飼っているとき、ネズミというと、かいこにネズミがつくといった。（野中）

ことわざ　ハチワレの犬は飼うな

（頭の紋様が割れている子犬を飼ってはいけない。）（亀里）

犬　石神さまのけんぞくが犬なので、犬に害をするとたたりがある

という。（下朝倉）

禁忌　ウナギを食べてはいけない。（鶴光路）

うなぎ　丑年の人は、鶴光路の虚空蔵の祭の時。うなぎを買って中池にはなす。（鶴光路）

ネコ　ネコが死ぬと、三本辻に埋めて、シャモジを立てておいた。（新堀）

かぶと虫　かぶと虫には、次のような種類があった。

上杉田　のこぎり→武田→上杉と大きくなっていくという。

上杉

なた

のこぎり

おんな　ぶたともいった。（女屋）

かいこの首のところの模様　かいこのくびのところには、馬のひずめのあとがあるといった。（上大島）

田植のときにハエがうんということ　田植のときには、ハエがうんとでた。これは、ハエが田植を手伝ったのだといった。米がとれると、またハエがうんときた。これは、ハエが米を食いにきたのだという。田植のときに手伝っておいたから、その米を食いにきたといった。（上大島）

秋の馬鹿ばえ　秋になると、はえがいなくなる。そうすると「人間は、おれたちがひっこんだから寒くてしょうがなかんべ」という。人間をあざわらったという。（櫛島）

雨蛙　雨蛙は、雨の降る前に、「おばさんが流れる。おばさんが流れる」と鳴くという。（天川大島）

ミミズ　八十八夜時分、ミミズが鳴くという。（天川大島）

三すくみ　ナメクジが通ったところへヘビが通るとヘビの体はとけてしまう。

ヘビがカエルを食い、カエルはナメクジを食う。（野中）

ヘビとナメクジ　むかし、ヘビには目がなく、ナメクジに目があった。

ヘビはナメクジから目をもらった。それで、ヘビはナメクジのそばがやだ。そばへいくと、とけてしまうという。（天川大島）

ケサハハ（コオロギ）　ケサハハは、「カタサセ、スソサセ」と鳴く、寒くなるので、冬を知らせてそう鳴くのだという。（野中）

コオロギ　コオロギは、

「サムサガクルカラ、カタサセ、スソサセ」と鳴くという。（上大島）

ギス（キリギリス）　ギスは

「ギイッチョン」

と鳴く。

「粋な声して、人足とめて、まさか手を出しゃ、逃げるでしょう」（上大島）

ホウシャク　かなぶんのこと、大豆の葉を食ってしまう。

豆類につく。

トウモロコシ、ブドウ、インゲンなどをホウジャクがなめてしまう。（上増田）

(二)　植　物

カワラチゴ　カワラチゴを屋敷に植えると、その屋敷は原になるという。

アネモネに似ている。チョウチンバナ。（上大島）

大木を伐るとき　でっかい木を伐るときには気をつかった。方をみて伐った。

神道さんに聞くと、でっかい木を伐ったときには、切株のところに、しるしに、なんでもさしておけといった。

伐った木の根っこの芯にさした。（下増田）

どくだみ　丑の日に、ドクダミの湯をたてて入れば、体のためによいという。（女屋）

ハンゲッパ　田植の時期になると、ハンゲのはが半分白くなるという。そのころが、田植のほんしゅんという。田植の目じるしにした。

むかし、ハンゲさんという人がいて、半夏の時分、おおく一生懸命仕事をして死んでしまった。

その人が死んだときに、ハンゲッパが半分白くなっていたという。それで、ハンゲッパが半分白くなるころを、田植の目標にするようになったという。（櫛島）

ツバメのこと　いつもツバメがきているうちで、ツバメが来ない年は、かわりごとがあるという。

ネズミがうちからいなくなると、かわりごとがあるといった。（上増田）

柿の実　柿の実は、あたりどしと、はずれどしがあった。

柿の実は、一つだけとらずに残しておく。（笂井）

桑の実　今は桑イチゴとして売っている。モチドドメといった。（亀里）

作れないもの　トウモロコシ、キュウリ。（下阿内）

ごぼう　先祖が、ごぼう畑で馬にのっていて、ころんで討ちとられたので、ごぼうは作らない。（鶴光路）

柳　田の畔によくはえていた。つきの良い木。（亀里）

ニワトコの木　ニワトコは骨継木といって、葉か根を粉にして、痛めた所につけた。（公田）

ヘビイチゴ　毒で食うものじゃないといわれた。（鶴光路）

梅　入梅前に食べてはいけない。入梅後の黄色いのを食べる。（亀里）

六、その他

俗信のいろいろ　旦那様が死ぬと、かみさんは自分の髪の毛を切って、棺桶の中に入れてやった。

古いおひなさまは川へ流した。

節供のとき、おひなさまを出してかざってやらないと、そのおひなさまは泣くという。

こわれたおひなさまでも、みんなだせという。おひなさまをしまうのは、八日、七日げえりはだめという。

五月節供ののぼりについても同じことをいった。だすのはいい日をみてだした。しまうのは八日。

むかしわかいとき、ご祝儀によばれていったら婿がいなくなった。これはトリムスビのときのこと、わざと、見えないところへかくれておくという。

田植のときはおこわをした。

おこわを食って田植に出た。

一月十五日の朝、あずきげえをつくるが、それをふいて食べると、田植のときに風が吹くといった。だから、小正月のあずきがゆはふいてさましてからたべた。

この十五日のあずきげえをとっておいて、十八日の朝、食べたのこりをうすめて、うちのまわりにまいた。

これはだれがやってもよかった。

ムカデやヘビがうちの中へ入らないようということである。これを

十八げえといった。

一月四日に坊さんがご年始にくる。檀家をまわってあるいた。しゃもじをもってあるいた。縁側から障子をあけてうちの中へ入った。坊さんは、玄関からは入らなかった。

なお、嫁入りのとき、嫁さんや、一見客は縁側から入った。

四十九の餅は、四十九日のときついて、寺へもって行った。四十九こもっていった。

この日はおたなあげをする。位牌を仏壇に納めた。

東上野の松山のうちの土蔵は出入口が北についている。

この土蔵の米をもらっていって煮て食べると子供はまちがいなく授かるという。

カドイレ…口がためして双方で、行く、行かないをきめて、カドイレをした。（東上野）

俗信いろいろ　ふだん、まんじゅうを食べるときに、まんじゅうの皮むくと、死んでから、自分の皮をむかれるぞといわれた。（おじいさん）（あるいは石のはをむかされるともいう）

葬式のとき、ころがんなといわれた。

葬式のとき、馬をなかすな。馬にはさんざえさをくれておけといった。

火事のときは、馬を早く外に出せという。ところが、位牌を早く出さないと、馬が出ないといった。

台所は、竹ぼうきではくな。

五郎右衛門と次郎右衛門　五郎右衛門の弟に次郎右衛門という人がいた。二人とも墓がないという。五郎右衛門という人が五郎右衛門堰を掘ったという。五郎右衛門堰の堀はらいは今でもしている。五郎右衛門堰の水があがって夏になるという。笂井の三軒家のところに堰があった。

五郎右衛門堀のことは、増田堀ともいった。新田用水は、増田っ堀の延長という。川下の人が水利費をとりにきたが、やらなかった。

川上には迷惑をかけないというので、増田堀を延長したのだという。（上増田）

いろいろのこと　松山（女屋喜代松さんのところ）は、はらんちと呼ばれている。

下駄などにおす焼印は「原」という字。

むかし、十六歳の娘は、赤城へ行くなといった。

むかし、大水がでて、利根川は今のところへ移ったという。それで、大島とか長磯という地名がある。ごくむかしは、島があったのだという。

東上野の西の方に、万才池という三角の形をした池があった。

あくまっぱらい（獅子まわし）のときに使った幣束は、万才池のそばに立てておいた。今の水車の西の方にあった。獅子（かぐら）をかぶって、「あくまっぱらい、あくまっぱら、あくまはらったりや」といって、各家をまわった。

ムラをまわりきると、その幣束を、ムラざかいにもっていって立てきた。

源太島にはよしがはえていた。むかし買いもんに行ったかえりにそこで化かされたという。（東上野）

俗信　竹ぼうきはうちの中へ入れるな。

臼をうまやのくちにおいたうちがあった。

十五日のあずきがゆはとっておいて十八日の朝、あっためて食べた。これを十八がゆといった。

馬はおかいこ神様といった。（女屋）

いろいろのこと　「日が短けえな、短けえな」というほうが、働いている証拠だという。

むかしある人が、西田圃のガマラという畑に、桑つみに行った。そしたらうちへ帰ってくる道がわからなくなった。おとうかに化かされたのだといった。

ツバメの巣をこわすと、目がつぶれるといった。

米を捨てると、目がつぶれる。

カラスの鳴きまねをすると、口をやかれるといった。口のりょうはしがあれる。

子供のやけどは、仏様にばちをあてられたものだといった。ふだん、仏様をかまわないとそうなる。仏様は大事にしろといった。

あるうちで、お彼岸のとき、仏様になにもしんぜなかった。そしたら、仏様が、子供を火の中にけおとしたというはなしを聞いた。子供がやけどしたという。（小屋原町）

ことわざ　赤飯に汁をかけて食べると、結婚式に雨が降る。

朝ぐもは、縁起がいい。（亀里）

早寝をすると白髪がふえる。（下阿内）

モノビ　モノビには、天ぷらや煮物を作った。春まつりには、イカのしっぽ、切りこぶ、ちくわのにしめを作った。（西善矢田）

三隣亡　自分が欲しいと思う田に、おそなえを埋けておくと自分のものになるという。

三隣亡を防ぐために猿田彦をまつる。なお、埋けるのをめっけられると、だめになるといった。（上増田）

むかし、三隣亡まつった人がいて、大尽になったという。

どこどこの屋敷がほしいと思えば、その屋敷の人にわからないように、餅をついて埋けておく。

それがみつかると、大さわぎした。埋けた餅がくさってしまえば成功するという。（野中）

三隣亡を信心している家は神徳社で、モチや赤飯を田や壁の中にいれておくと、持主が気がつかないうちにくさると、その田や家は三隣亡の人のものになる。

新築中の家の壁が凍ったので、ぬり直しをしたら、壁の中からモチが出てきた。（亀里）

三隣亡でオサキにごちそうするため、もちをつくのでオサキを飼っているといわれた家には、猿田彦の碑を立て、その家の方向にむけた。（公田）

欲しい田にモチや赤飯を入れておくと、何代か後には、入れた人のものになる。くさらないうちに見つかると効果がない。（公田）

信じている人が、ほしい田の中に餅や飯をうめておく。見つからずにくさると、その人のものになる。よけるためには、猿田彦を立てておく。（下朝倉）

オサキ　オサキがつくと、きりなく飯を食うという。（下増田）

公田の石原さんがつかまえたことがある。目がたてにさけている。（亀里）

釜の口をシャモジでたたくと、オサキにごちそうする合図になる。（公田）

年よりでオサキがついた人がいて、寝たままなのに遠くの様子がわかり、親せきで赤飯をふかしているからもらってこいなどと言った。

ある日泣いているのでたずねたら、親るいのオサキが焼け死ぬという。

あとで聞いたら、オサキつきの家で、家をもやして、オサキを焼き殺した日だったという。（亀里）

オサキはきれい好きなので、便所のゾウリを米びつの上に乗せておくと、米びつから米をもっていかない。（亀里）

狐つき　三峯の神をつれてくればなおる。（亀里）

厄おとし　むかしは、厄年の人が金を出しあって、会場をきめて、厄おとしをした。

時期は都合のいいとき。

会場は、大きなうちを借りた。浪曲師とか役者（芝居）をよんだりした。（下大島）

厄おとしには、むかしは浪曲師をよんだ。一月十日が上大島のご年始日。この日によんだ。

上大島の中口（なかぐち）の石田さんのうちが大きな家で、毎年このうちを宿にした。

その年の厄年の人が費用を出しあって厄落しをした。

婦人会、青年会、処女会などが手伝いに出た。（上大島）

お正月様と庚申様は不仲　お正月様と庚申様は仲が悪いといった。寒になったら、庚申待はするなといった。（女屋）

餅は遠火で焼け　赤城山に山火事があったとき、ある人が、餅を背戸にだして焼いたって。

「餅は遠火で焼いたほうがうんめえ」といわれたからだって。（上大島）

いもはかげの俵　いもとは、里芋のこと。いもは米のたしになるということ。（野中）

髪をのばすこと　髪をのばしているので親が子供に叱言をいった。そしたらその子が、

「霧雨が降っても、中までしみらないよ」といったって。（上大島）

ホウキ持ってかけってあるく　あるとき、油屋へ近所の人がきたら、「動かないでいるより、ホウキ持ってかけってあるくほうがいいよ」といったって。

そしたら、それを聞いていた子供が、ホウキ持って、かけってあるいたって。（上大島）

よめご　田植をしていて、はしっぱのところができると、余計植えた。これは、猫の分だといった。

田植のとき、植え方の下手な人は、さくがとうらない。そういうときは、よめごをこしらえたといって、やりなおしをさせられた。（下長磯）

ヒノウエ　人がなくなったとき、その人の近親者、子供とかきょうだいなどが、ヒノウエといって、米を四、五升もってきた。

これは、香典とはべつ。（下増田）

はんどりとまんがおし　はんどりとまんがおしは仲が悪いといわれている。（笊井）

はんどりとまんがおしは、むかしから仲が悪いといわれている。（下長磯）

年まわりのはなし　丙午うまれの人は、人数がすくない。

女の丙午うまれは、亭主を食うといっていやがられた。午年ははねあがって、景気がいいといった。

かいこのはきたてのとき、午年の人に、たねがみからはきおろしてもらった。一枚でもいいという。午年の人にかいこのたねがみからはきおろしてもらうと、かいこがあたるといった。

己年には雨が降るといった。（女屋）

竜柱　竜柱には、くし、こうかい、かもじ、はたおりのおさをしばりつけておく。

この柱は、いの一番にたてる柱。

うしとらの方角に魔除けとしてたてた。

ぐしもち（つつき）

ぐしもちをやいて食う人がいると、ぐしをやかれるといった。ぐしもちはやいて食べてはいけないといった。そのために、棟上げのときに、ぐしにミズ木をしばりつけた。やかれないためにそうした。（櫛島）

石の大きさ　スナ、マナゴ、グリ、玉石というのが小さいところから大きい順の石の呼び名、マナゴは、コンクリートに使う。道に敷いたりした。

グリと玉石は、石垣とかうちをたてるときの土台石として使った。（東上野）

稲荷様のひっこし　稲荷様をうつすとき（ひっこし）には、稲荷様の下の土をもっていった。（下大島）

丙午の人　丙午うまれの女の人は、亭主っ食いだといった。隠居のおばあさんは丙午うまれ、おじいさんの方が先になくなった。（上大島）

男女の双子　男と女の双子は、心中もんの生まれかわりといった。むかしは、迷信で、どっちかが死ぬといった。（東上野）

けっかい　血のかたまりがぶらさがっているという。けっかいが、お勝手へ水を飲みに行くと母親が生きていないといった。（東上野）

ブドッコという。（下増田）

長生きの秘訣　むかし、百二十五歳まで生きた人がいた。その人はある人が長生きの秘訣を聞いた。そしたら、その老人がこういったと。

「わかいころに女房なくして、独身でいたからであろう」

「それじゃ、いくつのときに奥さんをなくしたんですか」と聞いたら。

「八十歳のときだった」といったって。（女屋）

社日　秋と春の社日の月には仕事をしなかった。この日社日講をした。近所の農家の主人をよんで半年ごとの事業計画、相談をした。

昼間の行事、宿は交代。大体イッケうちであつまった。ご馳走は、宿のうちで負担した。半年ごとの計画をたてた。

昭和四十年くらいまで行っていた。

木暮一家五軒が中心で行っていた。近所の親しい間柄のうちの者があつまった。（駒形）

夕方のこと　子供が夕方おそくまで遊んでいると、

「人さらいがきてつれて行く」といった。

晩方になると、あずきとぎばあさんが出るから、早く田圃をしまってこいといった。

橋のところへ、あずきとぎばあさんが出るといった。（野中）

やまど　やまどは、暗いうちに通った。

冬場、真下きよちゃんちの東の道をのぼって赤城へ行った。やまかいどうといった。

夕方になると帰ってきた。

そのころになると、やまどが通ってあぶないから道へでるなと子供にいった。（女屋）

枕めし　茶わんの糸尻に六坏、米をにて、一つ丸くして他は茶わんにもって枕におく。

枕のごはんにははしを立てる。（下長磯）

第九章　芸能・娯楽

一、神楽・祭り等

駒形神社の神楽　鎌倉へ行ってならってきた。
笂井の近戸神社の氏子だった。（亀里）

春日神社の太々神楽　明治十七年頃、産泰神社から伝授された。
（上佐鳥）

神楽　正月と夏の十七日に、獅子頭を持って年番がまわる。玄関に入ると、頭をかじってもらうので、家の人が出てくる。かじってもらうと、できものができない。米のおひねりをもらう。

上朝倉は旧エイフク寺にしまってあり、下朝倉は、石神（シャクジ）さまの所にしまってある。石神さまは、笠原一家の氏神という。（朝倉）

四月三日は近戸神社の祭りで、十月十七日おくんちの祭りも行なわれる。春祭りには駒形や産泰から神楽打ちを頼んでくる。（笂井）

小屋原の稲荷祭りは九月二十九日おくんちに行なわれ（現在は十月十七日）、戦後に四月十日に変わった。昭和十二年に神社を建て替えたのを機に、春祭りを始め、神楽を奉納することになった。産泰の神楽師を呼んでいる。祭りには笂井の近戸神社にお札を貰いに行った。
（小屋原）

太々神楽（小屋原）

四月十五日は近戸様の祭りで、下増田の北爪さんが駒形の駒木さんの家へ行く。

十一月二十三日は感謝祭。米一升と玄米を供える。（増田）

駒形神社の祭りには、かつては灯籠人形も出された。（駒形）

四月十五日は駒形神社のお祭りで、今はその近くの日曜日としている。上品で優雅な神楽が奉納される。明治三十七年の舞子は八人、昭和三年には十五人の舞子がいたが、昭和二十三年には七人、昭和四十七年には舞子三人となってしまった。この苦境を乗り越えるため保存会を結成し、平成元年十一月現在、大沢勝三郎を会長に、会員百八十名を擁す。

舞子は十二人で五、六丁目が今でも中心で二十四座の演目があり、祭りの前一ケ月間の稽古をする。

その伝承は次の資料のとおりであ

太々神楽（駒形）

る。

駒形神社太々神楽の事柄

駒形神社に伝わる太々神楽は今より凡そ二百拾年前享保（キョウホ）年間産泰神社神官鯉戸信濃守を始め赤城神社大胡神社（近戸神社粕川）各神官によって島根県出雲大社より伝授されたもので出雲式大和舞と云ふ優雅で格調高い舞である此の神楽は産泰神社を中心に此の近在の神社でも凡そ二百年以前より奉納されていたものと思はれるが其れは主として神社関係者の人達によって行われ且つ引継がれて来たものである明治以降当町の人々によって始められたのは明治三十六年三十七年頃と思はれる。産泰神社の神官鯉戸信濃守の子供で鯉戸豊太と言ふ人が居り幼少の頃から太々神楽を厳しく仕込まれていたが当町六丁目の岡本家に養子として当時の駒形敬神会の小森善七氏他数名の人達に伝授した。そして駒形神社社殿の改築成った明治三十八年の秋此の神社において奉納されている。其の後も春秋の祭典には奉納されていたのであろうが、本格的になったのは昭和四年である。此の年には舞子の数も増員され、駒形区より助成があり、新しく神楽衣装も新調し、ここに駒形敬神会太々神楽の基礎が定まったのである。以來此の神楽は良い指導者に恵まれ区を始め町民の協力によって近在唯一の貴重なものとなり、祭典には各地の有名神社にも招かれ好評を得ていた。然し第二次大戦の後、此の貴重な文化財も、急激な社会情勢の変化に伴い舞子の育成が困難となり、又諸道具も破損し其の補修も十分出来ない状態になり、一時は断絶の危機に至ったのであるが、舞子始め有志の人達の努力により復興の気運が盛り上り、太々神楽保存会が結成され自治会においても強力な支援をされ、舞子及び保存会員も増員し再発足する事になったものである。太々神楽の舞は前段後段に別れていて前段は式舞後段は受敬舞と云ふ。太々神楽は奉納するに当って必ず舞わねばならないものであるが、特に式舞は四方固めの舞とも言われ火木金土の神によって大地四方を清め此の後他の舞をする事になっている。式舞は此の外岩戸の舞扇の舞等十二座の舞がある。愛矯舞には大蛇の舞種蒔等十二座合せて二十四座あって、一人が一座を舞っても二十四人の舞子が必要となる囃方は笛大太鼓小太鼓等があり五人～六人の囃やし手によって構成され、笛の曲は譜面はなく口伝えによって覚えるのであり、平拍子鎌倉拍子笹拍子等がある。

太々神楽設立年代簿師匠岡本本豊太　（駒形）

上佐鳥の春日神社は、かつては法相寺院であったという。この春日神社では、八十八夜に祭りが行なわれ、神楽が奉納される。産泰神社から明治の中ごろに伝えられたといわれる。

大振りの舞風であるが、八十八夜を祭日とすることも加えて、農村の五穀豊穣にはふさわしい。またこの地域は五穀をしのぐ収益のある養蚕が盛んであったため、「蚕の舞」が演目に加わっている。地域の特徴を良く出し、また他に類例のないことから、昭和四十九年に前橋市重要無形文化財に指定されている。（上佐鳥）

おねり　笂井の近戸神社の春の祭典のとき、神楽を奉納するについて、神楽師を下大屋（産泰神社）からたのんでくる。神主さんも一諸。神主さんと神楽師の人たちを、神社の世話人さんのところを宿にして接待する。昼食を出し、仕度をしてもらう。

祝詞を奏上してから、おはらいをし、世話人さんを先頭にして、行列をつくって、神社までおねりをして行く。神社総代、自治会役員、伍長さん参加。そのあと、神社の拝殿にて春の祭典を行う。祝詞奏上、玉ぐし奉奠（氏子総代、自治会の役員全員）。

そのあと、神楽殿にて、下大屋産泰神社の人たちによる神楽を奉納。
宮司、鯉登茂行氏（産泰神社宮司）　（筑井）

筑井町の祭典

四月三日　近戸神社例祭
五月一日　絹笠様祭典
七月二十四日　阿夫利神社祭典
十月十六日　秋季例大祭
十二月二十三日　（新穀）感謝祭。（筑井）

駒形の祇園　もとは、七月二十五日が、駒形の夏祭りであった。（今はその近くの日曜日）

このとき、大きな獅子頭をだす。これは大きいので有名である。

この獅子頭は、むかし、駒形に厄病がはやったとき、酒井侯の二男か三男の人からもらったものという。

韮川でもんで六文棒まで行って、また宿をのぼってくる。（駒形）

盆踊りはお諏訪様に八木節を出した。扮装付きの八木節大会も行なわれた。（山王）

駒形神社午頭天王記録

取極ノ儀定之亥

一當町午頭天王御神輿三町落合
之上出来仕候右ニ付當廿五日
御遷宮仕候
當町真楽寺
御別當同所本明院
小屋原村泉蔵寺
右三ケ寺ニ而御遷宮可仕候
但シ□来之儀者順番ニ御守護可仕候
一祭禮之節若もの諍論仕間敷候
一午頭天王祭禮之儀三町若者落合
六月十四日ゟ御神輿當番江帰候儀
是迫之通御祭リ可仕候
附リ其歳ニ當リ称リホ仕度候節三町一統落合之上當番御別當所講
元江
頭出差図可請候
一御祭リ終候節三町若もの落合當番
御仮リ屋江御神輿帰候被置可申候
但シ御建之儀者當番別當所江預リ置可申候
右以聞書之趣相歩ニ承知之上儀定
仕候得者幾々陸間舗可仕候為後日
連印仍而如件
右者町内一統　仕ニ付　御三ケ寺様
御相談之上幾久御祈念奉御預
申上候以上

駒形町　世話人
〃　丈八
〃　七之助
〃　傳兵衛
〃　茂太夫
〃　武右衛門（カ）
〃　清五郎（カ）
〃　小兵衛
〃　守右衛門

同問屋　金右衛門
〃　傳兵衛
〃　儀兵衛
同組頭　儀　八
〃　孫　七
〃　冨五郎
〃　嘉右衛門
与組　粂　八
〃　源兵衛
〃　茂兵衛
〃　辰兵衛
名主　忠右衛門
〃　宮多久松
當町御別當川
　真楽寺様
同所同町
　本明院様
小屋原村
　泉蔵寺様

東上野のまつり　むかしは、ぼんぜんあげ、天道念仏、獅子まわしはべつの日にした。

獅子をかぶって、各家をまわった。あくまはらいをした。

天道念仏のときは、お札をこしらえて各戸にくばった。

むかしは、七月二十七日か八日、組の人が桃木川へ行ってさんげ、さんげをした。その後、寺沢川でさんげさんげをするようになった。そのあとぼんぜんあげをする。ある年、ぼんぜんあげをやめたら、桃木川があれて、橋が流れた。またするようになった。

おまつりは、三つのクルワで交代でした。たとえば、

上…獅子まわし
中…天道念仏
下…ぼんぜんあげ

というように、分担して、それぞれの行事の世話をした。（東上野）

小屋原町の祭り　四月十日　稲荷神社の春祭り

下大屋町の産泰神社から神楽をたのんできて奉納する。十一時～四時、神社の神楽殿

七月七日　労切薬師の宵祭り。夜、薬師様の境内に燈籠をつける。

八日には、おまいりする人があるくらいで、特別の行事はない。

七月三十一日　三宝荒神の宵祭り。燈籠をつけてまつる。

十月十六日　オクンチの宵祭り。神社の境内に燈籠をつける。むかしは、子供が神社におこもりをした。境内で火を燃した。（小屋原）

駒形町の夏祭り　現在は、駒形町は合同祭典委員会が主催で、駒形町夏祭りとして実施している。

もとは、まつり宿は民家を借りて行っていた。その年の当番町のうちを借りた。

最近は、交通上の理由で、会議所を宿としている。平成四年の当番町は五丁目。十年前は新駒町を宿とした。そのよく年から会議所を宿とするようになった。

明治三十年代には、かしら（天王様）をかついで町内をまわった。

駒形町の下（しも）から上（かみ）へもって行って、韮川（名和村用水）へながした。それを繁平橋の下であげて、またかついて行ってながした。

行列は、神主さんが先頭に立って、幣束をもって行った。

途中で、造り酒屋のところでは、酒樽のかがみをぬいて酒のサービ

駒形神社　牛頭天王（駒形）

スをした。そのためによそむらのわかいしゅも、駒形のわかいしゅと一緒になって、天王様をかついだ。

かつぐものは、赤いはちまきをしていた。

赤いはちまきをしていれば、酒を振舞ってもらうことができた。

よそむらのわかいしゅがくると、赤いはちまきをさいてやった。そのために、駒形のわかいしゅのしていたはちまきが、だんだん細くなったという。

行列をしていて、途中、行列からはなれて天王様を大川へ投げ入れ、またひきあげてきて行列に参加した。最後は、金毘羅屋敷へ行けばおしまいになった。

天王様は、本陣どぶのところから川へ入れた。

下流の繁平橋のところでひきあげ、行列に復帰した。同じことをくりかえした。

むかしのわかいしゅは、お茶屋遊びをしたので、お茶屋には借金があった。そういうところへ、わかいしゅが天王様をかつぎこんだ。

しかし、こういうことは、明治三十三年の県の取締りでやめになった。

行列の出発は天王屋敷から。

駒形の脇本陣であった五十嵐家の広場から。

ここに、むかし、馬の休んだところ、七八七番地、ここを、天王屋敷とよんでいる。

そこから、天王様をかつぎ出した。そこから上町（かみ）へのぼりあげた。

最後に、金毘羅様へ、ここから先は、世話人が、神社まではこんで行って収納した。（駒形）

相撲大会　おまつりというと、駒形ではよく相撲大会を聞いた。（駒形）

屋台のおはやし　笛一、かね二、しめだいこ三、大太鼓一　屋台のおはやしとしては、次の三つがある。

さんてこ…とまっているときのおはやし。

かきくら…相手のあるとき、けんかばやし。

ころがし…移動するときのおはやし。（駒形）

矢島の屋台　明治の初めの頃からやっている。大工は大島清蔵という人だ。

お囃子をしながら諏訪神社へひいていった。

駒形の祇園（駒形）

「さんてこ」をやる。

横笛二、鉦二、太鼓一、小太鼓一、大つつ一で演奏した。

連雀町へ三回行った。（亀里矢島）

屋台　天川大島の本村に屋台があった。神社を作った一年後に作った。若者を上にのせておどらせるはずだったが、道がせまくて、通せなかった。ひかずじまいで、村で材木を分けた。

神社は百二歳のおじいさんが、十七歳の時できたという。

（天川大島住宅）

世良田の祇園　世良田の祇園は、世良田七宿七小路といって屋台が出た。見物にいくのには、新堀まで伝馬船があがってきたので、舟にのって見にいった。

のってこうもり傘をさすと、帆かけ舟のようになってしまい、進まなかったという。（亀里寺家）

祭り　一つの村で、天神さまと八幡さまと別々にやっていたが、同じ村なのにということで、一年だけ一緒にやったら、五軒の家が火事になり、元にもどった。

どんど焼きをしないで、八幡さま天神さまに集めてもやした。

（亀里龍門）

八幡まつり　西の一組、二組でやった。旧八月十四日の晩にやった。丸太で仮小屋を作り、終れば解体した。

太鼓をたたいて集め、おさいせんを上げた人に駄菓子をくれた。夜大人が赤飯を上げたが、その人も菓子をくれた。（亀里龍門）

八月二十七日のお諏訪様の祭りで山車がでる。十年前この山車は市民文化祭に出演した。二十六日の晩は豊作祈願のために灯籠を張る。一メートル五十センチ程の大灯籠で、二間近い〆縄を張る。二十年位前はくず屋根を祭りのために葺き替えた。

七月二十八日は石尊様の祭り。大山祇を祭神とし、五十センチ×五十センチ程の日月灯籠を立て、〆縄を張った。昔はこの日に川で行水をした。水難防除の祭りである。

七月二十五日は土用祈禱（夏越祭）で、寺と神主双方が行う。寺で護魔を焚き、それから神主同行で流行病の難のがれをする。

山王では全てが寺を優先する。（山王）

初午の朝、上人様（大日様）の大榎の下に埋めてある百庚申を、消防団が掘り上げて清掃をした。大火がきっかけであった。

水神様があり、さんげ〳〵六根精生と唱えて沐浴をした。こんにゃく橋のところで、常夜灯にボンゼンを上げた。（下長磯）

納涼祭をワタゴ様でやった。ワタゴ様を移動した年には火事が続発した。（中内）

弁天山に弁天様がありみこし祭りをした。また示現堂があり、弁財天、恵比須、大黒、弥勒菩薩が祀られる。また荒神様があり神楽が奉納された。（上佐鳥）

お庚申待ちを一軒だけであるが、今も続けている。（野中）

一月十五日にはドンド焼きをした。

一月二十日には恵比須講が行なわれた。講中の年番でまわり持ちであり、新年祝いを兼ねた形であった。馬具を飾りたてた。

（広瀬一丁目）

初午のことをオヒラ様と呼んで祝った。（広瀬一丁目）

泉蔵寺を駒形に勧請し、そこに嘉永年間に天王さまを移した。七月二十五日は天王まつりで、明治十九年頃山車を作ってお祭りをした。今でも神主を頼み、各戸で〆縄を張る。（小屋原）

三宝荒神は百姓の神様で、八月一日の祭りは灯籠をつけた。輪番（神社年番）がこれを受け持った。

また権現沼に灯籠をつけたことがある。（小屋原）

八坂神社は元、字伊勢にあった。七五、六年前に境内地から伐った大きな丸太棒を、十五連隊の北の門に立てた。

七月二十四、二十五日はこの天王様の祭りであり、コサギリ屋台を仮設し、三テコ・キザミ・タゴマル・昇天クズシ等の囃子を奏でた。笛は一メートル二十〜三十センチの大きなもので、梅の木で作り、囃子の時の笛のリズムを

〈蔵六　蔵六　蔵六ヤ　と唱えた。（亀里矢島）

亀里町矢島の山車について　屋台は明治始め頃造られたものである。七十七歳の人が十八歳で青年団に入った時は、もうあった。以前あったものを売って、矢島に山車がなかった時、竜門・寺家・阿内が矢島を困らせてやろうと山車を引いたので、それにあわせていそいで造った。大工は同所の大島清蔵である。

演奏は「さんてこ」の他に数曲あるが、曲名はわからない。

横笛二、鉦二、大だいこ一、大鼓一、小鼓一で構成されていた。

上佐鳥に招かれて三回ひいていった。

春日神社の石鳥居にひっかかって、鳥居を動かしてしまった。

連雀町へも三回行った。

祭日は七月二十四、二十五日の天王祭、八坂神社の祭である。

八坂神社は境内に合祀されている。

山車にのせる人形は、本庄から借りたが、七月の二十三、二十四日に玉村が借りているので、玉村に借りに行って本庄に返した。本庄に人形師がいた。

お夏、清十郎を借りたのを覚えている。

戦後、手製で造った。

下川淵地区では、唯一の囃子である。（亀里矢島）

八月八、九日は金平様の灯籠祭りが行なわれた。子供達は灯籠を飾る絵を書いた。また夜は、金平様で度胸だめしをした。

八月二十四、二十五日は天王様の祭りである。また地蔵まつりも行なわれ、寺でおはぎを貰った。

他に霧島稲荷もあったが、お祭りをしたかどうかわからない。

（広瀬一丁目）

飯玉神社の祭礼は三月二十八日で、松の木の頂にボンゼン（梵天）を掲げた。全てが五人組を中心とした共同作業である。

うつ木で編んだ一尺四方の棚を作り赤飯を入れてあげる。この赤飯を食べるとホウソウが治るといわれた。（広瀬一丁目）

町内に神輿や山車があったが、かなり以前に売脚してしまった。

（広瀬一丁目）

八月三日には八幡様で祇園囃子を奉納。三〜六年の子供会でやる。

野中は八木節が盛んで八木節保存会がある。

出店のことを昔は三等店・十銭店といった。（野中）

昭和十四年の十月十七日おくんちには八幡様で相撲大会が開かれた。

寄付を貰いに中川町や新町へ行った。天川町ののりやんが行司。うらは石井東次郎が受けた。相撲の格が低くなると火事になると伝えられる。しょっきりもあった。石倉あたりからも取り組みに来た。

土俵は常設であり、その土俵の四隅に柱を立てて、四周に〆縄を張り、寄付者の名前を書いた半紙をその縄に付けて下げた。

勝負検査役は、石井定次郎・石井伊勢太郎・深谷島治・小沢保太郎が務めた。

十六日には赤飯をあげに行った。八幡様は軍神であり八幡八社と一口に言う。境内に相撲取りの二見潟仙平や岩清水の墓がある。

土俵のわきに松があり、それが大風で倒れて鳥居を壊した。（野中）

七月二十六日は浅間神社の祭りで灯籠をあげた。昔は十六日が祭りであった。子供が主体で灯籠祭りを行い、大将をおき、昔は男の子のみであったが、今は小学生でやっている。（増田）

七月二十日には、お上人様に灯籠をあげた。灯籠はお上人様に向かってあげた。

他に、二十三日の地蔵さま、八月二十四、二十五日の天神様、七月二十八日の稲荷さまは二晩続きで、祇園祭りも一緒に行なった。これ

らが子供中心の行事で、親方、小頭、世話人などの役を置き、カンケイ呉れと、村内を歩き、竹と金を貰った。仲間に入るには、灯籠寄付か金を払って入った。（下長磯）

おししのこと　東上野のおししは、ムラ中まわった。玄関から入って、うちの中で三回まわった。ぞうりとりがいて、はきものは、縁側の方へまわしておいた。（東上野）

おまつり　東上野では、次の行事を春まつりの日にまとめて行う。

（四月十五日）

天道念仏　獅子舞

ぼんでんあげ

もとはべつべつの日に行われていた行事。この三つを上・中・下で分担して行う。

東上野は、ムラ全体が、上・中・下の三つの組に分かれている。

上組

中組…神社のまわり

下組…共同墓地の南、道路から南。

各組（クルワ）とも クルワの中が二班ずつに分かれている。各班には伍長がいる。

獅子舞のときには、ご幣でうちの中をおはらいして、それをムラはずれに送りだす。（幣束を立ててくる。）このとき、帰りにはうしろをふりむくなという。ふりむくと、悪魔がついてくるといった。（東上野）

竜門の子どもとまつり　竜門の一、二組は八幡宮祭、三、四組は天神祭を子供たちがやっている。元々は一緒にやっていたが、だいぶ前に別になった。

八幡祭は、旧八月十五日で、前の日がよいまつりだった。天神祭は、八幡祭の十日後だった。子供が集まって一晩すごす。男の子だけの祭りで、小学三年生以上が参加した。高学年の「大将」が行事をとりしきった。

ワラで仮小屋を作り、たき木を集めて火をもやした。

寄付を集めて生菓子、ビスケットを町で買って食べたが、上の学年ほど数が多かった。

昭和四十五年の土地改良で八幡祭の御神体の石が諏訪神社に移動させられ、子供も少なくなったので、祭りもなくなってしまった。

天神祭りは今でも、場所があるのでやっている。

片原まんじゅうが一個二銭の時代に、一軒から五～十銭くらいの寄付を集めたので、全部で十円くらい集まった。

子供たちへの性教育の場でもあった。（亀里）

祭　高等二年が大将とよばれ、二人くらいで相談しながら、運営から会計までをやった。

一晩中太鼓をたたいた。さつまいもをやいて食べた。夜中の二時～三時ころ、赤飯が届いた。（亀里龍門）

一月十四日に天神講が行なわれる。子供達が大きな家に集まって、手習いや本を読み泊まりこみをする。翌朝早く天神様にお参りをし、各自半紙を継いで作った幟を立てる。およそ尋常三年から高等二年までの子供行事。（山王）

十二月二十四日と三月二十四日は天神講で、子供達は習字をした。（下長磯）

阿夫利様には神社で三回、お寺で三回の灯籠をあげる。

笂井には、おしろい薬師、笠薬師、辻薬師など八薬師があり、四月八日が薬師様の祭りで、七日の晩の灯籠のために、三、四年から高等二年までの子供達が準備する。一銭五厘の新兵から、十銭以上の大将までの役割があり、灯籠のカンケイを貰いに来た。（笂井）

今は中止になったが、八日市の墓前の六反田でドンド焼きが行なわれた。賽の神でございといって子供が村を回った。（笂井）

下阿内のお獅子　三月十五日、元は二月十一日で玉村町上陽の神明様と同じだった。

十四日に世良田の八坂神社から、ご幣とお札をうけて公民館に泊まる。部屋にしめをはりめぐらす。

十五日の朝から、町を回る。現在は九時から十二時くらいで車を使うが元は全部歩いたので三時くらいまでかかった。

町が十組に分かれており、交代で役になる。十年に一度役が来る。

太鼓が先触れになって行列の来ることを知らせる。

ご幣とお札が先頭になって家敷に入り、ご幣とお札だけが座敷に上がる。部屋の中でご幣とお札をふって、家を清める。

家では、おさごとお札（家に配るお札）の代金を用意して待っている。お札は二〇〇円である。御神酒やお包を出す家もある。

もらったおさごなどは、桶に入れて運ぶ。

由緒は不明で、記録も残っていない。

同様の行事が市内堤町と力丸町、下朝倉、上佐鳥、西善町に伝わっている。（下阿内）

山王町日枝神社では、昭和八年まで古式豊かな流鏑馬が行なわれていた。山王様を祀るのが日枝神社で、現在の町名はこれに由来し、天台宗の寺域守護のために祀られる社である。この神社に隣り合わせるように、天台宗善養寺があり、現在はこの寺を中心に東善・西善の町名が残っている。本来は東善養寺・西善養寺であり、山王町を含めて広大な寺域を誇ったものと思われる。

つまりは、善養寺と日枝神社は一体のものと考えるべきであり、現在の日枝神社の祭りでも、必ず善養寺が先に祈禱して、その後に玉串を奉納するしきたりが行なわれている。

日枝神社の由来については、次に資料を掲げる。

上野國那波郡上陽村大字山王村字田尾神田□□ト云鎮座

一村　社　日枝神社

祭神大山咋命

一創建事由

貞觀元年巳外十二月郡民等相議シテ一神宇ヲ創シテ産土の神ト仰キ五穀豊饒國家安全萬性快樂ヲ祈ラント欲ス故ニ曰方今　天朝詔シテ祠ヲ山城ノ男山ニ創シ八幡宮ヲ祀ラレ亦諸國モ神宇ヲ建テ神宇ヲ祈事ヲ聽シ給フト云云我輩此時ヲ以テ一神ヲ創建シテ土産ノ神ト崇メ祀ン而其爛遂ニ不爲翌年庚辰正月十六日癸酉二品兵部卿忠良親王上野ノ天守ニ任ゼラル是ヲ以テ郡民等親王ノ拜任ヲ祝シ社殿ヲ爰ニ創シテ産土ノ神ト崇メント請フトキニ宮内少輔從五位上上野介清原人集リヲ請願ヲ受理シ爲ニ太守殿下ニ上申ス殿下ヲシテ嘉内アリテ其清頭ヲ許シ因テ此年九春近江國滋賀郡比叡ノ社ニ鎮座シ給フ大神ヲ當郡ニ遷ストキ

二、叡山座主慈覺大師山王七社ノ神ヲ奉シテ爰ニ祀ラル特ニ敕宣ノ御願アリ天下安全寶祚無窮ヲ祈ルト云々故ニ山王所在地稲七萬把ヲ別ニ称シテ山王村ト云フトキ清原真人某和歌ヲ作リテ山王ニ奉ル

遷シヌル神ヤ此地ヲ照シケン元ノ光リハ比叡ニアルモ貞觀七年乙酉ノ歳春正月二十七日從五位上阿部朝臣真行上野介ニ任セラル真行任國ヲ治ル甚タ治積アリ而シテ水田數町ヲ献シテ神田トナス嘉應元年己丑ノ歳ニ聖體安全御祈禱ノ宣旨アリ神殿ニ於テ執行セリ後鳥羽天皇又敕ヲ賜ヒテ敕願ノ儀式アリトキニ元暦二年正月鶴岡八幡ヘ神馬二頭ヲ獻ツル武士アリ勢多郡山上太郎高光緑野郡小林二郎重弘二人

其馬ヲ牽テ日枝社ニ參詣シ武運長久神馬安全ヲ祈ル按スルニ我上毛往古ハ名馬ノ産地也故ニ毎歳貢馬三十五疋ヲ上ツルト云續日本紀ニ見在ス諸牧場ヨリ四歳以上ノ駒ヲ牽テ山王境内ニ群聚シ馳テソノ遲速ヲ試シ其建捷ヲ檢シテ貢馬ヲ定ム或ハ兵部省ノ用馬トナリ或ハ驛路ノ用馬トナルコノ日ニ當社ニ於テ聖壽万歳天下安全ノ祈禱ヲ行フトキニ牧場人益場ニ臨ム其年三月二十九日逢坂ノ關ニ至リ關内左右馬寮官人五位以上コレヲ受納スト云又諸貢馬ハ牧場ニ於テ各駿馬ヲ擇ヒテ貢獻シ叡感ヲ蒙ラントス故ニ豫テ飼養ヲ厚クシ或ハ神明ニ祈リテ各良馬ヲ獻ストキニ天覧ニ臨ミテ龍蹄一疋アリ其産土ヲ敕問シ給フ和歌ヲ以テ是ヲ奏ス定信朝臣〇上毛ヤ出シモ遍キアリ明ノ影モ又ツキノスヘノ駒ヒキ上野ノ國八所ノ牧アリ各所ヨリ善養寺ニ集ル是ヲ点檢ス是其地理ヲ案スルニ不便ナリ所謂牧場群馬郡二所利根郡三所吾妻郡二所甘楽郡二所也是ヲ以テ各郡地方ヲ推測スルニ其貢馬点檢ハ地ヲ中央故ニ又牧場部分ト雖適所ニアラス當地生方左近田村某説曰抑上毛ト称スルハ吾國上古不毛ノ地多シ而シテ當郡最初開設モ亦利根川急流西岸タレハ必ス道路便利アリ上古ハ上京路次當社ノ前ヲ以テ順路トナスト云〻亦古城路アリ爰ニ存ス是貢馬檢査官ノコヽニ在シ文治二年七月足立盛長參詣シテ武運ヲ祈リ鰐口一箇ヲ獻ス建久八年十二月右大將源頼朝卿社參アリ國家安全ノ祈請アリテ弓箭楯等ノ武器ヲ献セラル又三百餘町ノ地ヲ寄附アリ此時ニ當リ神殿及ヒ別當僧舍皆舊現ニ復ス故ニ恒例ノ祭典缺典ナシ以後數通ノ宣旨ヲ社頭ニ賜フ敕頼祈請アリ元弘三年五月新田義貞朝臣羽黒ノ僧俊賢ヲ遣シ代參トシテ山王比叡神ヲ拜シ一詠歌及ビ祈請丈ヲ捧ク

始足立藤九郎盛長當國ヲ管シ後建久五年十二月當國社寺ヲ管轄ス後上野國ノ守護職上リ群馬郡八幡原邑ニ館居ス其舎邸ヲ建築ス地神祭ヲ行フ則チ當社ニ執行セリト云〻元弘三年義貞朝臣所捧祈請文曰掛卷母畏岐日枝大神臣乃忠義乎鑑美給比我行乎志天無恙擧義旗發兵賤手亡滅志以天上波辰襟乎休米奉リ下波萬其堵乎得世志米幸辺給辺止奉祈止云又和歌ニ曰願フ事カナフシヲ宮川ノ岸宮居ニフシ祈リツヽ日本外史ニ義貞朝臣北國下向ノ時坂本大神ヲ拜ストアレハ是ニ同ジ應永十八年鎌倉管領足利満家誤リカ満氏ノ社殿ノ荒廢ヲ興シ其造營殆ント舊製ニ起タリ領ノ主式部太輔那波宗廣甲冑一領獻スト云抑天下分裂シ戰國ノ世トナリ長禄寛正會仁ニ至リテ海内一モ寧日ナク殊ニ東國ハ戦爭甚シク神社佛宇モ廢亡ノ數寡カラス既ニ天文年中ニ至リ當社兵火ノ爲ニ烬燼トナリ一モ存セズ後永録年中ニ比叡山ノ僧舜慶法印當郡ニ下向シ神殿僧舍ヲ復興ス僅ニ形體ヲ存ス實ニ現今ノ本社ハ其時ノ建築也元龜元年庚午七月宣旨ヲ賜ハリ敕願ヲ以テ寶祚無窮聖躰安全ヲ祈ル當時山王七社権現及ヒ七條大師仏蒸秀法眼ノ像ヲ造ルト云云山王座主法印定真御体ヲ開眼ス今現在アリ傳詔使權右中辨藤原朝臣和歌ヲ詠ス曰スメロシノタノム宮トゾナリニケル遷スヒヨシノ神ニイマセバ後慶長五年關原戰爭ノ時ニ當リ關東戦勝祈禱ヲ修ム同キ十五年ニ伊奈備前守當國ヲ巡回シヌ故ニ神官神僧等社殿ノ破壊ヲ歎キテ保存セン〕ヲ請フ是ヲ以テ伊奈氏其花表ヲ修繕ス慶長二年八月神官僧徒等由緒ヲ幕府ニ上申シ再ヒ維持保存セン〕ヲ請フ土井伯耆守利勝是ヲ具申シ大將軍德川家光公田五十石ヲ寄セラレタリ寛永十五年酒井雅樂頭前橋ニ在城ス酒井忠清社殿舊造ヲ再造アリテ社務所ヲ復セラル後六世酒井中將忠恭祭祀科ヲ獻ゼラレ延享年中酒井氏本社ノ修復ヲ加ヘテ后酒井氏播州姫路ヘ轉城ノ後廢セラル亦元禄年間社殿ヲ修復ス寶暦三年本社幣殿拜玉垣鳥居等ヲ修復ス同ク四年山王七社ノ神體ヲ彫刻ス此年ニ梵鐘ノ再鑄アリ後明和元年復本社幣殿拜殿ヲ修繕ス去年烈風ノ爲ニ社樹僵倒シテ拜殿ヲ□破ル故也其造營費額三百二十両也當時武州岩築城主領地ナリ故領主最モ崇敬セリ〇岩築

城主二万石大岡氏也〇傳曰古貞觀三年冬十月二十八日佛法布教ノ僧當國ニ到リ教法ヲ布ク我上毛國俗勇武慄悍ナレハ神ヲ信シテ佛ヲ悦ハズ爰ニ正六位上阿部興氏従七位上伴宿祢貞宗等其布教ヲ悪ミ黨ヲ集メテ遂布職ノ僧ヲ殺ス故ニ佛徒大ニ怒リ官ニ訴フ是ニヨリテ阿部伴二氏罪死刑ニ處セラル然レトモ郡内外神職社僧等衆□ノ俱哀訴シテ二氏ノ罪ヲ償ハント乞フ勅旨アリ死一等ヲ減シテ遠流ニ處セラル其処阿部真行社參シテ賽物ヲ獻ス同ク七年正月阿安部朝臣真行従五位上ニ叙シ上野介ニ任ス真行赴任ノ後力ヲ農業ニ水田數百町ヲ開墾ニス大ヒニ治績アリ是ヲ以テ田數町ヲ山王社ヘ寄附スト云

一春秋祭典古式

比叡大神貞觀二年鎮座アリシヨリ傳ヘ行フニ季祭式夏□中申ノ日コレヲ行フ農就神事ト云フ或ハ中申祭トモ称ス神楽ヲ奏シ神職參會シテ祭祀ヲ奉務シ群村民相群參シテ倶ニ祭儀ヲ援ク（タス）秋九月（秋季祭也）舊暦九月九日ヲ刻シ大祭式ヲ行フ其式ハ前八月十五日各村氏子惣代等社頭ニ會議シコノ議決ヲ以テ毎村各議シテ祭事中ノ惣理者ヲ撰フ是ヲ位左根（イサネ）ト云フ亦祭事係員ヲ定ム競走馬ハ各持馬ヲ以テコレニ充若馬ヲ持サレバ村中或ハ他郷ノ馬ヲ借テ是ニアツ或ハ有志者馬ヲ借セバコレヲ用ユ走馬演習ハ八月二十八日九月一日三日五日ヲ以テコレヲ定ム祭器新調或ハ修復ノ事アリ但シ五日ハ花造ト称シ各村氏子等位在根ノ宅ニ聚合ス祭事諸般ヲ議シ其支（サキツカ）ヘナキヲ要ス諸事ヲハル後盃ヲ揚テ濁酒ヲ酌ム□（位在根者ノ□□□ナリ）是神代ノ古列也八日ハ馬揃也騎者礼服ヲ用ユ又陳羽織ヲ用ウ袴ヲ着テ馬ニ乗四回ス九日大祭事明申ノ上刻大小神樂則獅子頭ハ午前八時ヨリ社頭ニ至リ舞曲ヲ奏シ吹笛撃鼓シ神明ヲ慰ム傍ラ拜觀者ノ餘興ニ供ス大捷還城樂擬式也

第一的則位在根方ニ向ヒ（位在根役ハ舊冢門閥ヲ以テコレニアツ）第二的ヨリ迎フ使者七度ニ及フ是舊例也（故ニ他方事故ヲ以テ招人□回ヘハ一的ノ如シト云是故也）既ニ例刻ニ至レハ第一的正列シテ唐崎ニ到着ス（第一ハ山王村東善養寺村字也走馬場）唐崎ハ山王村内（中内村矢田）既ニ二的（善養寺村）三的（横堀村西善養寺村）四的（両家村）サキニ唐崎ニ至リ第一的ヲ迎待（何レ旧例ノ休馬場アリ）（尾端ナリ）申ノ上刻第一的近シテ馬場ニ出コヽニ於テ大注連アリ注曰此祭儀流鏑馬ハ八頭也一二三四ノ四組也祭日濁酒ヲ獻供シコレヲ祭ル例ナリ九月一日ヨリ馬掛リ其他祭式ニ預ルモノ宮川ニ至リ身滌齋潔シテ祓殿ニツキ一周間通□ス此間ニ馳馬演習アリ九月七日夜注連神事ヲ行フ丑刻神事ト称ス最厳重也神官社殿庭前ヨリ長馬場ヲ清メ祓ヒテ後唐崎ニ至ル是注連縄ヲ張也是例ナリ此間ハ往復人ニ逢フヲ忌ム此夜ハ馬場左右人家各戸ヲ開テ外ヘ出ズ九日祭式奉供シテ午後三時ニ至ル

前七日ノ夜ヲ以テ神官注連ヲ張也則チ九日祭事ニ先タチ刀ヲ振テ其注連ヲ切断ス是ヲ行フ者ハ善養寺村人多胡氏也行列社前ニ着キ□二十間許ニアタリ警畢群集ヲ拂ヒ神官神前ノ大注連ヲ切ル群集愛慶トヨブ是則注連切ノ神事也

是ヲ還城式ト云行列順序ハ先拂警蹕（左右各一人群聚ヲ拂フ）一的大神樂大萬度コレニツク（善養寺村若年者是ヲ守護シ長大刀ヲ帯シ小鼓鐃用笛囃子也）次ニ（左右）二行第一的標鉄砲（中古ノ器ナレ左後加ヘ用ウ）弓警固日章錦籏（礼服ヲ着テ両刀ヲ帯ス）注連祓（位在根）的標鉄砲弓（警固）大麻月章錦籏次金紋先箱（右警固礼服臺傘立傘（列左右）長柄鎗（左右）各二筋前騎口附（着陳羽織）後騎口附（流鏑馬）女装扮長袖廣帯冠花笠太刀ヲ佩弓箭ヲ負フ萬度是ハ縄也惣勢押第二（同第一但シ大神樂ナシ籏日月章ナシ錦ヲ用ヒズ）第三（小神樂三頭子供囃子五穀日吉山王御祭礼天下泰平国堵安全ノ字ヲ書ス豊饒ノ古風ノ歌ヲ唄フ）以下第四ニ同ジ各村區別第一山王村（一ケ年番東善養寺村三年）第二山王村中内村第三西善養寺村横堀村第四（両家村）矢田村第五大嶋村天川大嶋村（是ニ村賓客トナリ）如此行列ヲ正シ堂々整々タル甚ダ威儀アリ（參觀人ノ行列ヲ許サス）此間ハ（祭器ヲ用ヒズ）諸開業者ノ鳴物ヲ禁ス既ニ行列鳥居前ニ到レバ神官拜殿ヲ下リテコ

レヲ出迎フトキニ注連ヲ切斷シ（其体唐笠ニ同シ）於此神事竟ル四區ノ供奉者ハ正ヲ廢シ各礼服脱シ或ハ祭器ヲ參拜此間神馬ハ社前ニ進ミ拜礼シテ本社ノ下ヲ巡リ騎者ハ女裝ヲ脱シ軍服ニ改メテ弓ヲ執リ矢ヲ放ツトキ其矢ヲ捨ヘル者幸福アリト唱ヘ相爭ツテ是ヲ拾フ八頭走馬的立場ニ至リ第一ノ位在根ハ左ノ桟敷ニアリ采ヲ振ツテ馳出ルヲ指揮ス馬口附コレヲ見テ馬ヲ放チ馳テ遲速ヲ爭フ如此三回ヲ例トス或心願ノ爲礼走ト称シ勞回アルニ及フ（古ヘハ地頭ヨリ見分役員右ノ〇一段下リテ氏桟敷ニアリ神官コレニ同ジ　子村吏祭礼掛員亦列座ス）各村祭料員着袴草鞋ヲハキ群集ノ間ヲ往來シ古例ヲ指揮ス意ヲ百般ニ止メ祭事首尾全キヲ勤ム

十日ハ笠脱ト唱ヘ祭事済祝言ヲ位在根ノ家ニ告テ社頭ヘ參詣ス　附祭山車錺臺ハ各村年々新意ヲ考ヘ參観者ノ賞賛ヲ望ム八九日走馬神事前後回馬ヲヒキ上下シ九日夜ニ及ンデ社頭ニムカヒ列シ後一同祝言ヲツラネ拍手シテ各帰村ス

是則當社傳來ノ大祭事也

一資本財産　無之

一建物

一本社　間口貳間奥行一間半、此建坪三坪

屋根　栩葺白木作

右本社再建年度

永禄二年酉年再築

一幣殿　間口貳間奥行壹間五尺此建坪三坪六合六夕六才

屋根栩葺宝暦三年酉年再建築明治二十五年修復瓦葺トナス

一拜殿　間口三間半奥行三間此坪十坪五合

屋根栩葺宝暦三年酉歳再建築明治二十五年修復瓦葺トナス

一神樂殿　間口二間奥行三間此建坪六坪

宝暦三酉年再建築

一鐘楼　一宇貳間四方也此建坪四坪

屋根萱葺宝暦四年改造釣鐘一個同年改鑄

一鳥居一基　丈一丈二尺幅一丈一尺木作丹塗

建設年度不詳宝暦四年修復後朽損現在鳥居

弘化五年三月再築

一石塔籠一對

丈五尺八寸寛永四年十一月建立

両代官田村左エ門矢内彦右衛門納之

一石塔籠一對　丈四尺氏子納之

建設年度不明

一盥漱石　一基

建設不詳

一井戸桁一口

鑿貫厚一尺餘建久三年當國守護足立盛長納之

一境内末社　五社

一神明宮　祭神大日霎貴命（ルルメ）

本社間口九尺奥行一間此建坪一坪半

白木作屋根萱葺

創建年度不詳

一菅原神社　祭神前右大臣太宰權帥従一位菅原道真公

本社

創建年度不詳

一諏訪神社　祭神建御名方命（クテテガタ）

本社

創建年度不詳

一赤城神社　祭神大巳貴命（ヲヲナンムテ）

本社
創建年度不詳
一白山神社　祭神　伊弉冊命　□理媛命
本社
創建年度不詳
一嚴嶋神社　祭神　市杵嶋（イツキ）媛（ヒメノ）命
本社間口一間奥行八尺此建坪壱坪三合三夕三才
屋根葺萱本作但覆殿内宮間口二尺奥行二尺
屋根板葺也
創建年度不詳安永四年再築也
一境内地七百三十七坪　官有地
一寶物
一鏡　一面　九十六匁銅製　藤原光長作
一猿像一軀　丈一尺八寸木製　製作年度不詳調刻人不明
一甲冑　一領
應永年間當郡領ノ主那波式部大輔宗廣之甲冑也
一鎧一筋　大身續長サ一尺五寸　無名
應仁年間細川淡路守茂定日吉持總介茂行日吉大炊助茂信
當郡ニ在居ス故ニ茂定コレヲ献ス
一額一面　日吉山大權現　長樂寺僧正ノ書
慶應四年三月御布達ヲ以テ今善養寺ヘ渡ス
一鰐口　一個　周囲三尺三寸三分
建久五年足立盛長コレヲ献ス後破損ニヨリ神官新井米女正
代ニ鑄直ス
一太刀　一口　無名一尺七寸四分
年度由緒不詳或傳云正宗作也ト云〻

細野善三郎献之
一境外所有地
林反別三反九畝十九歩
□
右之通リ相違無之候也
明治二十八年九月

右神社〻惣代
山王　鈴木　澤吉㊞
東　新井　常吉㊞
中内　清水　茂十㊞
西　須田　定吉㊞
矢田　狩野　政吉㊞
両家　武藤利重郎㊞
天川　柳罡　啓造㊞
下大島楳沢熊三郎㊞
同社掌
新井　直英㊞

祭りについても既述されているが、現在は四月十四日の春祭り、十月十七日に秋祭りを行い十二月三十一日には大祓いを行なっている。春祭りは前日から準備をし、産泰や後閑から舞人を呼んで代々神楽を奉納する。十五日の晩の直会（なおらい）の時に、氏子総代が本祭りを行なうか否かの決定をするという。本祭りが無くとも住職と神主を呼んで式典のみは現在でも行なっている。祭りには、山王・東善養寺・中内・矢田・横堀・西善養寺・両家の七ケ村が参加した。

祭りの詳しい次第については次に資料を揚げる。

日枝神社祭礼記録

一、春秋祭典古式

比叡大神貞觀二年ニ鎮座アリシヨリ傳ヘ行フニ二季祭式小夏四月中申ノ日コレヲ行フ農就神事ト云フ或ハ中申祭トモ称ス

神楽ヲ奏シ神職参会シテ祭祀ヲ奉務シ群村民相群参シテ倶祭儀ヲ援秋九月秋季祭也舊暦九月九日ヲ刻シ大祭式ヲ行フ

其式ハ前八月十五日各村氏子惣代等社頭ニ会議シコレ議決ヲ以テ毎村各議シテ祭事中ノ惣理者ヲ撰フ是ヲ位在根ト云フ

祭事係員ヲ定ム

競走馬ハ各持馬ヲ以テコレニ充若馬ヲ持サレバ村中或ハ他郷の馬ヲ借テ是ニアツ或ハ有志者馬ヲ借セバコレヲ用ユ

走馬演習ハ八月二十八日～九月一日三日五日ヲ以テコレヲ定ム祭器新調或ハ修復ノ事アリ但シ五日ハ花造ト称シ各村氏子等位在根ノ宅ニ聚合ス祭事諸般ヲ議シ其支ヘナキヲ要ス

諸事ヲハル後盃ヲ揚テ濁酒ヲ酌ム是位在根者ノ是神代ノ古例也八日ハ馬揃也

騎者ハ礼服ヲ用ユ又陣羽織ヲ用ウ袴ヲ着テ馬ニ乗四回ス九日大祭事明申ノ刻大小神楽則獅子頭ハ午前八時ヨリ社頭ニ至リ舞曲ヲ奏シ吹笛撃鼓シ神明ヲ慰ム傍ラ拜觀者ノ餘興ニ供ス大捷還城楽擬式也

第一的則位在根方ニ向ヒ（位在根役ハ舊家門閥ヲ以テコレニアツ）

第二的ヨリ迎フ使者七度ニ及フ是舊例也（故ニ他方事故ヲ以テ招人数回ニ及ヘハ一的ノ如シト云是故也）

既ニ例刻ニ至レバ第一的正列シテ唐崎ニ到着ス（第一ハ山王村東善養寺村）唐崎ハ山王村内（字也走馬場ノ尾端ナリ）

既ニ二的（中内村矢田村）

三的（横堀村西善養寺村）

四的（両家村）

サキニ唐崎ニ至リ第一的ヲ迎待（何レ旧例ノ休馬場アリ）

申ノ上刻第一的進シテ馬場ニ出コヽニ於テ大注連アリ

注、日此祭儀流鏑馬ハ八頭也一、二、三、四ノ四組也

祭日濁酒ヲ獻供シコレヲ祭ル例ナリ

九月一日ヨリ馬掛リ其他祭式ニ預ルモノ宮川ニ至リ身滌齋潔シテ祓殿ニツキ一周間通夜ス此ノ間ニ馳馬演習アリ

九月七日夜注連神事を行フ丑刻神事ト称ス最嚴重也神宮社殿庭前ヨリ長馬場ヲ清メ祓ヒテ後唐崎ニ至ル是注連縄ヲ張也是例ナリ此間ハ往復人ニ逢フヲ忌ム此ノ夜ハ馬場左右人家各戸ヲ閉テ外ニ出ズ九日祭式順供ジテ午後三時ニ至ル

前七日ノ夜ヲ以テ神官注連ヲ張也則チ九日祭事ニ先タチ刀ヲ振テ其注連ヲ切断ス

（是ヲ行フ者ハ善養寺村多胡氏也行列社前ニ着キ鳥居ノ下ニ進ミ行例ヲ迎ヘテ一札シ左右ト是ヲ祓ヒ太刀ヲ抜一声鳴吟トヨビテ注連ヲ切ル

群集愛度トヨブ是則注連切ノ神事也

是ヲ還城式ト云行列順序ハ先拂警蹕（左右一人群聚ヲ拂フ）一的大神楽大萬度コレニツク（善養寺村若年者是ヲ守護シ長大刀ヲ帯シ小鼓鐃用笛囃子也）

次ニ二行第一的標鉄砲（中古ノ軍器ナレ𪜈後加ヘ用ウ）

弓警固

日章錦籏（礼服ヲ着テ両刀ヲ帯ス）注連祓位在根的標鉄砲弓警固大麻

月章錦籏次金紋先箱左右警固礼服壹傘立傘列左右長柄鑓左右各二筋前騎口附（着陣羽織）後騎口附（流鏑馬）女装扮長袖廣帯冠花笠太刀ヲ佩弓笠前ヲ負フ萬度是ハ縄也惣勢押第二（同第一但シ大神楽ナシ籏日月章ナシ錦ヲ用ヒズ日吉山王御祭礼）

第三（小神楽三頭子供囃子五穀豊饒ノ古風ノ歌ヲ唄フ）

以下第四ニ同ジ各村區別第一山王村（一ケ年番東善養寺村三年）
第二山王村中内村
第三西善養寺村横堀村
第四両家村矢田村
第五大嶋村天川大嶋村（是ニ村賓客トナリ祭器ヲ用ヒズ）
如此行列ヲ正シ堂々整々タル甚ダ威儀アリ（参観人ノ行列ヲキルヲ許サヌ）此間ハ諸開業者ノ鳴物ヲ禁ス既ニ行列鳥居前ニ到レバ神宮拜殿ヲ下リテコレヲ出迎フトキニ注連ヲ切断シ（其体唐崎ニ同シ）於此神事竟ル四区ノ供奉者ハ正リヲ廃シ各屯聚所ニリノ（ママ）礼服ヲ脱シ或ハ祭器ヲ余（ママ）
此間神馬ハ社前ニ進ミ拜礼シテ本社ノ下ヲ巡リ騎者ハ女装ヲ脱シ軍服ニ改メテ弓ヲ執リ矢ヲ放ツトキ其矢ヲ拾ヘル者幸福アリト唱ヘ相爭ツテ是ヲ拾フ八頭走馬的立場ニ至リ第一ノ位在根ハ左ノ桟敷ニアリ釆ヲ振ツテ馳出ルヲ指揮ス馬口附コレヲ見テ馬ヲ放チ馳テ遍速ヲ爭フ如此三面ヲ例トス或心願ノ爲礼走ト称シ数回アルニ及フ（古ヘハ地頭ヨリ見分役員右ノ桟敷ニアリ神官コレニ同ジ）
○一段下リテ氏子村吏祭礼桟員亦列座ス
各村祭料員着袴草鞋ヲハキ群集ノ間ヲ往來シ古例ヲ指揮ス意ヲ百般ニ止メ祭事首尾全キヲ勤ム
十日ハ笠脱ト唱ヘ祭事済祝言ヲ位在根ノ家ニ告テ社頭ヘ参詣ス附祭山車錺臺ハ各村年々新意ヲ考ヘ参観者ノ賞賛ヲ望ムハ後一同祝言ヲツラネ拍手シテ各帰村ス

日枝神社大祭四ノ的式順

的　二　狩野　靜洲
　　亀井佐与吉
大マンドー一　狩野　嘉覚　細野
鐵砲　二　南雲　定次　武藤　照拍
幟　二　狩野　嘉有　川島　徳重
黄槍　四　飯島末次郎　亀井菊太郎
　　飯島　胤男　笠原　豊次
黒槍　二　亀井　国造　関根　良平
大笠　一　関根　英吉　橋本　嘉造
立笠　一　橋本　嘉造
馬　馬主　南雲茂十郎　口取南雲　寅次　矢ノ役　諸岡　源　飯島　雅男　田
馬　馬主　細野　寅次　口取細野要次郎　両ノ役　〃　福　橋本　三津　家
小槍　一　武井　厚次
長柄笠一　狩野　類三
ハサミ箱二　鳴川　時造　高山初太郎
位在根
居賽　旧細野　寅次　新諸岡　宇平
サッソイ　南雲　伊平　細野　清吉

昭和八年十月十七日

飯島末次郎

次に聴き取り調査の折の記録をまとめると、東善では桃と麻は作らないと言われ、祭りの時に桃の図柄の着物を着てはいけないという。

祭典指揮者としてイザネが置かれ、氏子総代がこれを務める。役イザネとして七五三張り役があり、丑の刻に〆縄を張るという。他に差添役・い取り役・馬式役・祭典諸役（以上ママ）が置かれたという。射手は鎧を着て馬を走らせ、万一事故が生じた場合は、矢を射ることを禁じたという。馬は七頭用意し、かつては前橋様が馬を出したとい

われる。屋台（山車）も七台出た。

祭りに関する諸事は全て七ケ村の合意の上で取り決められ、祭典当番は三班に分かれている。

昔は祭礼用の水は赤城で汲んで、かついできたという。その桶には天下泰平の文字が書かれていた。

神社入口には右大臣・左大臣の絵巻の幟が立てられ、直径二十センチの四本の棹が社殿前に建てられた。またそれより少し細い二本の棹が天神様の前に建てられたという。その柱の先端には竹と榊で作った梵天を付け、柱には幟をつけた。

東善には山王様が預けてあり（現在は東善の集会所）、東善からは神楽を奏しながらお参りをするという。

神主は駒形から来るが、先にお寺さんが拝んだ。また神主境内にお寺の鐘撞堂があり、この釣鐘を上げるときに、強力が鐘をかついで三足歩いたという。これを見ていた宮下元吉・享太・千代吉の三人が一緒に鐘をかついでみたが、三人共に腰を痛めたという。

また天川大島にある愛宕様は日枝神社の末社であり、山王の範囲は昔はもっと広かったという。

祭り用の武具・馬具一式は昭和五十三年まではあったといい、祭りについては新井先生の記録があるという。

以上が聴き書きの要旨であるが、大正五年生まれの宮下千代吉さんの兄清五さん（宮城村在住）の記憶による文章を次に掲げる。

日枝神社祭典記録

山王様のお祭り　　宮下清五　著

山王祭、それは日枝神社の収穫祭である。

祭神は「大山祇の命」、御本社は京都の日枝神社、本祭は氏子にとっては大変な行事である。それは費用が多額になり、とても歳々は出来ない。

祭典当日の諸行事を手違いなく行う為には、数多くの人たちが十数日間練習をしなければならない。

祭典の行われたのは、近年では昭和七年十月の秋祭が最後である。その後は今日迄、本格的には一度も実施されていない。

四十二年前の出来ごとの追想で記すので、異なっている点も有ると思うが、現在では当時の実行委員の方も皆居ない為に、相談する人もないので異なった点があっても、それを指摘してくれる人もない。

大正五年の祭りには、私の父が口取り役をしていた。

大正十五年の本祭には、主役的と云われていた「ヤブサメ」役で神事に参加する事になった。昭和七年の祭典の時には、在郷軍人分会救護班長として全体的に行事を視る事が出来たので、思い起こして記述します。

神事に参加する為に　十五夜の日の氏子総代会議が、本祭を実施するか否かの重大な決定日である。氏子がいよ〳〵やる事になると村役の方々に知らせて来た。その夜の中に字でも一番大役が一の的の「イザネ」役、次いで騎手役の「役イザネ」七五三張役、差添役、口取り役、馬疋頭、祭典諸供物役、山車役、囃子方役等が決められる。役頭になった人は、十五夜の翌日から準備にかかる。神事の馬と騎手、口取り騎手二名、口取り四名は祭典十日の間神社拝殿にお籠りをして毎日〳〵朝四時起床、神社の裏の河で水離（禊）をして身を清めてから神前に正座して神官の大拔の儀式を受ける。午前六時鐘をつく。各字の「イザネ」邸に行って朝食をとる。午前中は馬の手入れ、馬具その他の手入れをする。午後騎手としての練習をする。神官から、神事である故に祭が終るまでの間勝手な行動をしてはならない、と説かれる。食事は「イザネ」が用意した物以外は絶対に口にしてはならない。

稽古習い　十月十五日練込行列　神社から発信する競馬の総習いをする。八頭の馬、騎手八名、口取り役十六名、差添役四名、「総イザネ」役の指示に依って夕方迄に終る。一の的のイザネ役が総イザネ役を兼務する。供物役は総ての供侍の持物飾付けを今日迄にまかなって置かなければならない。

十月十六日宵祭り　この日は馬の関係の者は休養する。囃子方は申の刻迄に社前に山車を集合させる。山車の本番である。

各字の氏子若連小若連をひく者、囃子をする人一名の山車に五十名から六十名の人手が必要。社前から参道を東方へ百間から百十間位の所に仮宮が在り、山車囃子の中を神馬と御輿が渡宮する。神社と仮宮の間を三度、山車の行進が行われ、宵祭りは終る。山車は社の境内に入る。山車の位置は神社に向かって右に大島、山王、東善、中内、左に西善、矢田、両家の順に位置して泊まる。

祭典の当日　早朝寅の刻に七五三張り行事。一の的の仮のイザネ山王の氏子総代の一人が村人の寝静まるのを待って、誰にも見られない様に張り終る。

練込神事の大拔行事。参道上で七五三断りが行われる直前に、仮宮から二十間程神社よりの所でササラ踊りが奉納される。担当役は西善養寺村の氏子の中から十歳位の男児四名、一人は鉄心役、若連の奉持する万燈を中心にして右廻りに凡三十分位踊る。囃子方は横笛二管二名と鉄心一名(子供)。踊り子の服装は中振り袖の三枚重ねで、鮮明な花模様、裏地は萌黄・桃色・朱色・兵児帯は白、鉄心の児も踊子と同じ服装をしていた。

踊り子は頭に獅子頭を頂き、獅子頭から垂れている布で素顔は見えない。前腹上に小太鼓を置き両手に一尺程の撥を持って鼓を打ち笛に合わせて踊る。連込行進開始と同時に終る。

連込み神事の開始直前に一の的総イザネ邸に二のイザネ役が未の上刻になったので発進されます様にと七度目の迎えに来る。

二の的イザネ役七度の迎え　慣わしとはいえ大変な役柄である。迎えを受ける当の総イザネの座席位置は床の間を背にし、向かって左に武将、右にヤブサメ役の両騎手、(床の間は東向き)座敷の北側床の間に迎う所に七五三断り役、東善多胡家当主、その左に総イザネ、南側に仮イザネ、庭に面した障子は全部はずしてあった。

七度目の迎えが去ると、直ちに発進用意の発令があり、騎乗する。七五三前に行く迄は仮イザネが先導する。神宮三名に続いて総イザネ、七五三断り役、差添役、武将の馬、ヤブサメ馬が勢揃いして、神官が大拔の詞を奏上する。仮イザネが右手を高く挙げると七五三縄が目の位置迄下ろされ、両方の竹が係の人にしっかりと持たれ、ピンと張られる。

七五三断り役は、一拝して、上下の右の肩をはずして大刀の柄に手をかけ、拔刀するや大上段に振りかざして気合もろとも七五三縄を切断する。

参集した氏子をはじめ、観客一斉に拍手をする。今日祭事が平穏に終ると思うからです。

神事連込行の順序と衣装

先導　イザネ役

一　神官　大拔榊を奉持、冠は垂纓衣は青色木靴

二　神官　宮司、冠は立纓衣は白、手に笏を持、木靴

三　神官　稲穂を奉持、冠は垂纓、装衣は青色、木靴

四、総イザネ　服装は上下、腰刀一振、白足袋、草履

五　七五三断役　上下、大小二本（正宗の銘在）

六　錦旗　鉾の下に錦織の布、上部に日の丸型をした平面のもの

がついていた。（進行方向右）
錦旗　三ケ月型をした銀色の平面のもの（左）
七　神馬　鞍下は白布麻布を重ねて白木の鞍に横枠がつけてあり、それに三本の幣。幣の高さ中心は三尺、両側は二尺五寸
口取り二名　鳥帽子、白衣、白足袋、草履
八　輿祭人　担夫六名　衣装は口取りと同じ。
九　楽士　笙二　篳篥二　太鼓二　衣装は神官用のもの
十　大神楽獅子頭（二尺位）連台に安置。大獅子舞役一　添役二名
大太鼓二名　担夫四名
十一　ササラ踊三名　小獅子頭、鉄心打一名
十二　大幟二本　持役各二名
十三　大万燈　持役五名
十四　一の的（一尺角板に的）
十五　毛槍二名
十六　徒歩侍　大小刀二本　上下、草履。八名二列
十七　弓四張　四名二列
十八　種子島銃四丁　武士の装束。二列で行進。
十九　差添役　羽織、裁着袴、白足袋、草履。手に竹箆。
二十　武将　口取二名
二十一　ヤブサメ口取二名　千役巻薙刀四名　武士の服装
二十二　二の的　差添役、供侍、馬二頭の順（中内）
二十三　三の的　西善　昭和七年の祭り
二十四　四の的　両家の氏子
末の下刻に社前に拝礼する慣わしとされている。
神官参拝。氏子総代は連込を拝殿にて待っている。神馬は参拝の後、神楽殿前の神馬舎に一する。総イザネ七五三断役参拝。参殿して輿を安置する。大神楽参殿、獅子舞奉納。同時に一の馬二頭、騎乗した儘参拝。一の馬二頭は参拝直後社殿左裏手に廻り、ここで衣裳替えをする。

総イザネは直ちに鳥居前の検段に大麻の大拔を奉持して座につく。二の馬は参拝直後鳥居の左側に待機、三、四の馬は参拝後鳥居右前に位置。大神楽が拝殿にて獅子舞を奉納している間に、一の馬は社殿裏で具物を狭筐に納め、ヤブサメが使う弓を渡す。供侍は二つの狭筐にヤブサメ役の衣裳、頭飾りを納める。

連込神事の武将とヤブサメ役の装束について　武将は狩鞍装束の上に陣羽織、赤色地に襟と裾廻りに黒色の縁取りがしてある。陣笠、腕当て、革足袋。手に金色糸の房のついた采配を持つ。

ヤブサメ役（女役と言われている）顔に化粧、口紅。白布の袖の細い腰から上の物、下は乗馬ズボンの様な袴。白足袋、草草履、背中に壺胡籙を、右肩から左脇下に負紐で背負う。矢は三本。矢羽は切班、鏃は昊鏃である。その上に打掛様の合わせの着物。模様は菊の葉と花、帯は唐草模様、五寸位の幅で厚手のものを二度巻いて前で結ぶ。頭には地笠。直径一尺二寸位の円型のもの。材質。桐材中心に一寸位の穴が垂直にあけてある。其上に花枝台がはめられる。花枝台の径は一尺位の厚さ二寸の桐板を円形にしたもの。周りに三十二本の花枝（五尺位の割竹に紅白の紙を巻き、一寸間隔に五箇の造華がつけてあるものを差込んである。地笠の台の周りに、五色の布が長さ一尺二寸位に切り込みがしてある。）

花枝台の上に「神事」と称される径五寸位の造花五本が、花枝台の中心の孔に差し込まれる。造花は厚手の紙で蠟が泌み込ませてある。花種は牡丹である。花片は十二枚。小さい葉三枚がついている。以上

が連込行事の衣裳である。

これ等を狭筐に納めて弓を受け取り、出陣の神事に移る。一の的の馬は社の裏を廻って鳥居から発進する。二の馬は鳥居の左から、三・四の馬は鳥居の右から出て、鳥居の右前方で発進の合図を待つ。発進の合図は総イザネが行う。

出陣の神事　検段（カ）　鳥居の前方（社）から見て左側約十間の所に、間口五間、奥行五尺。段の高さ五尺、丸木組板張り、新莚が敷かれてある。検段に着席の順序。社から見て最前方が上座、神官一名。次に総イザネ。次に七五三断役、二・三・四の的のイザネ、氏子総代二名。

発進の時刻は、神官が総イザネに知らせる。神官が刻限申の上刻を総イザネに告げると、総イザネが奉持している大拔を左右に大きく三度振る。これが発進の合図である。合図を見て発進を決めるのは各的の差添役である。三・四の馬が発進の準備動作が早過ぎるとか、所定の位置より出ていると、一斉に発進する事は出来ない。発進が遅れると供侍が拔刀して検段に向かって、二の的がよくない、いや三の的が早いとか、検段のイザネ役に早く決断して発進を一斉にせよと熱り立つ。この際が最も険悪な時である。一の的の差添役が一と二の口取りに何事か耳打ちをする。三・四の馬の様子を見て、一斉に発進。八頭の馬は鳥居から百間程の所、仮宮の所、樹齢凡そ二百年の所から引き返す。この行動を三度繰り返す。

検段前に帰る際、ヤブサメは裏参道から社前に来るが、その時矢を射る。一度に一本づつ、三度射る。三度の競馬が終って検段前に整列。差添役が総イザネに神事の終了を報告して、馬の神事が目出度く終了となる。

山車の行事　各字から一台ずつ、十六日の午前中に所定の位置に整列する。午後二時未の刻から社前に向かう。

参拝の順序は下大島から始まり、次に山王・東善・中内・西善・矢田・両家の順に参拝する。

十六日の夜宵宮祭り。境内から仮宮迄の参道を三度往復して、境内に入る。鳥居の右から入り社に近い所の上席、下大島・山王・東善・中内は参道の右側に、鳥居の左から境内に西善・矢田・両家の順に入って定位置に止める。山車七台が境内に一泊する。

祭典当日山車は午前中の連込神事中は所定の位置に止まって囃子は絶対に鳴らしてはいけない慣しである。位置は大坊山の側で西の田、善養寺の持田であった。此処が山車の定位置。

申の刻が過ぎ、馬の神事が終了すると、山車は灯を入れて参道に出て検前に一台ずつ進み出る。検段の前で方向を東に変えて仮宮前迄行き、方向を神社に向けて進む。この行動を三度行う。午後九時頃各字に向かって引き揚げて行く。

十七日の夜　昼の神事が終了して、午後五時頃から山車祭。検段（カ）はその儘正座しているので、山車は前日同様検段前で検証を受けて仮宮前迄三度往復し、各字のイザネ邸に引き揚げて行く。

大祭が無事に終了。各役の気持ちも落ち着いて、祝の酒宴が朝方迄続く。

十八日　午前十時　笠脱の儀　神馬は幣を納め、各的の馬全頭と差添役・口取社前に整列。各的イザネ・七五三断役・氏子総代が参殿。神官が大祭神事の終了を奏上。氏子の家内安全・五穀豊穣を祈願。祝詞を奏上する。神官から玉串を渡され、奉典して祭の終了をひしひしと感ずる。神前に奉納された御神酒（ナオライ）を以って乾杯。総イザネの音頭で手締めをする。祭典の参加人は勿論のこと、家庭の主婦は尚更に苦労が大きい。親戚の人が平素の何十倍も多くなるのが山王祭の行われる時だという。最後に各字氏子の役割等を記してみる。

各字氏子の役割

一　下大島　神馬　御輿　山車
二　山王　一の的　馬二頭　総イザネ　仮イザネ　山車
三　東善　七五三断役　大神楽　山車（一の的山王と交代）
四　中内　二の的　馬二頭　山車
五　西善　三の的　馬二頭　ササラ踊　山車
六　矢田　三の的（西善と交代）　山車
七　両家　四の的　馬二頭（下両家含む）　山車

各字祭典役及び係り控所

一　下大島　神社社務所
二　山王　イザネ邸　宮下忠次郎邸（大正十五年）
三　東善　山王イザネ邸
四　中内　二の的　生形友吉邸
五　西善　ササラ踊　生形茂平邸　鈴木邸
六　矢田　鈴木仲太郎邸
七　両家　善養寺

昭和五十九年八月吉日　以上追想で記す

日枝神社の大祭　昭和八年が最後だった。毎年はやっていない。旧八月十五日に、年番の会議をやって決めた。矢田は三の的を受けもった。

山車は、お寺（禅養寺）の前にあって、組み立てて、神社へひいていった。

道が悪いので、道板をしいていった。（西善矢田）

やぶさめ　日枝神社の東への参道はまっすぐで、やぶさめのようなことをやったようだ。

的に向けて、馬にのった人が矢を射た。

日枝神社　昭和９年大祭（山王町）

神社から山王の宝塔のある所までが、参道だった。（西善矢田）

おくんち　十月十七日。日枝神社の祭りに山車をだした。昭和八年まであった。また馬場道を乗馬した。（中内）

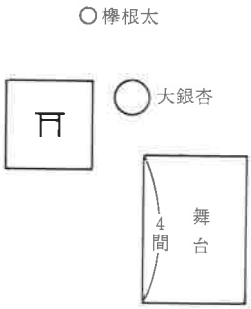
操翁式三番叟　下長磯には県指定重要無形民俗文化財の操翁式三番叟が伝えられている。昭和三十三年に早稲田大学を中心に調査されて以来、その詳細については、種々報告がなされている。ここでは拾遺的に聴き取り調査を中心に記録する。

操り人形は、糸操りと傀儡系のくぐつ回し、箱回しと呼ばれる一人遣いの人形が、浄瑠璃の流行とあいまって、文楽人形へと派生する。当初一人遣いであった文楽人形も、享保年間の吉田文三郎によって三人遣いが完成した。下長磯の人形は差込み式の人形でありながら、二人で一体の人形を操作する。これは全国的にも例を見ない珍しい形態であり、文楽人形の完成過程を考察する上で貴重な示唆を与えるものとして、全国の研究者や好事家の目を惹く所以となっている。

この操式三番は、地元保存会の手によってしっかり守られ、毎年四月十五日に下長磯の稲荷神社の例祭に奉納されている。

長磯が上・下に分かれたのは慶長年間のことと言われ、現在は土地改良の結果、示談掘りを境界とし、水田農家が中心で養蚕は少ないという。

祭りは「組村」で実施され、上長磯と組んだり笂井と組んだ。舞台



は公民館となっていて、上・下長磯、下大島の人達が利用した。

人形芝居が終るので舞台をわけたという。丁髷爺さんと呼ばれた田代さんの家に人形の頭があった。貴重な位置に三番さまを置いたという。二番さまの着物はお守りになるといわれ、日華事変で無事に帰って来た兵隊がおり、笠原三喜氏はけがをしないという理由で学校へ一年着て通ったという。また、「只見せるのは三番とジャンボンだ」という俚言が通用していたという。祭りの供物はミジンコのお菓子とお酒一本であるという。

祭りの他に宮郷の森村氏主人の病床で舞ったことがあるという。息災祈願のため長持の下をくぐらせてくれとの依頼があったという。今では面箱くぐりをしている。

記録としては、天保七年の台詞書き、鼓符があり、シテ・カゲの記述がある。長持のふた内側には下長磯若者の銘があり、銅板の頭まわりに安永午年五月細工人桐生下久保永山熊蔵の名があり、安永九年の墨書のある鳥帽子もあるという。

上大島・天川大島・下大島では、郷蔵の跡地を祭り道具小屋にした。道具小屋は唐紙（背景）を三面にして、地下二メートル程掘って、上・中・下の移動を可能にしたという。全て経費は盆暮勘定である。

稽古は二十五～四十人位で、十日間行なう。以前は露天での稽古だったので天気次第だったという。この村に定着するであろう男のみに継がせたという。ボクを着た人（不幸があった人）だけは、自発的に遠慮した。稽古中はほうれん草やきんぴら等の差し入れがあった。大胡は先祖がした通りに差し入れをしているという。

頭などは、以前は個人の蔵の二階に預かっていた。大正十三年から十四年に預かりを一軒にしたら、村内に大火があり、それは三番様の障りだということで、東西のはずれで三番様に対する認識の強い旧家の土蔵に預けられるようになったという。

その家では、嫁に来た時点で「蔵にはこういう大事なものがあるから火には気をつけろ」と言い聞かされたという。

これも今では昭和四十五年に作られた収蔵庫に全て納められるようになっている。

桃木川に流れ着いたのが三番叟の始まりだった。

背景の幕（緋の鶴と松の幕のうしろ側）は純毛で、ゴロウという生地だった。

操翁式三番叟（下長磯）

三番叟用の拝殿は、力丸村の棟梁の手になるものである。

子供相撲や演芸会に三番叟を出した。（下長磯）

さんばさまは、もとは、上長磯でやっていたが、もちきれなくて、人形を川へながした。

それを下長磯の人が拾いあげて、そのあと、下長磯でやるようになったという。

人形の頭は、中沢鍋平さんのところにあり、胴は、小山一郎さんのところにある。

初午が町内総会であり、昭和八年から同三十三年までは三番叟の抜

き稽古が行なわれ、二月十日過ぎに最後の稽古が行なわれた。（下長磯）

芸能　五反田には舞台の跡がある。そこで使われたと思われる、三尺×五尺の箱車がお寺にある。（野中）

駒形座へ行き、芝居や映画を見た。また駒形には昭和館という映画館があった。

他に大胡のメイブ館という映画館があり、玉村の錦松座へ芝居を見に行ったことがある。（山王）

中川町の関根銀蝶や県庁の近くの竹本すろうの弟子が義太夫大会を催した。

車んちのじいさんは琵琶を語った。（野中）

駒形座という舞台があって、芝居を見に行くことを楽しみにして農作業を行った。一時期には芝居が来た。

高浜某　市川三好という役者が口上触れに来た。人力車に乗り村廻りをした。

これを聞くと早く芝居を見たくなり、仕事に精がでた。（中内）

舞台を組んで芝居をやった。芝居は盛んだった。盆踊りも盛んだった。（筑井）

芝居　高松座一行が来て興業をした。（亀里阿内宿）

浄瑠璃しばい　義太夫にあわせて、あやつり人形をあやつった。さえきのはっちゃんという人がやり、長持の中に人形と衣装を入れてまわった。

めくらの三味線引きのつるざわなかあきが仲間でいっしょにまわった。

舞台　龍門には、間口四間、床高さ四尺の舞台があり、七～八間の返し向りょうが通っていたという。昭和四～五年、火事で焼けてしまった。（亀里龍門）

芝居のこと　下増田に伝ちゃんという人がいた。この人は道楽もんで、床屋をしたり、芝居をしたりした。

駒形のまっちゃん芝居というのと組んでやっていた。

おっちゃんという人は、駒形の人で、女形になった人。（下増田）

二、歌　謡

田植唄や棒打（麦打）唄が労働に合わせてうたわれた。岩村忠治さんは名人である。（広瀬一丁目）

麦打唄や田植唄は、昔は唄った。歌詞は通例のとおりで、戦争中の共同田植の頃まであった。（野中）

麦打唄や田植唄を歌った。田植の時期は火の見櫓に旗を立てて天気を示した。

共同田植えも行なわれ、四組に分け、色分けをした旗を立てた。母親目付と言い、共同炊事場でおかず作りをした。今も神田という地名が残る。（山王）

田植唄を聞いたことがある。田植の請負師がいた。（増田）

田植唄は井野トヨが唄った。一町平均の田植えであり、請負師に田植えをまかせることが多く、その請負師が歌うこともあった。（小屋原）

中内町には中内町田植唄保存会がありその会則の「2目的」の項には、「この会は郷土に唄いつがれた田植え唄を保存すると共にその果した役割を今日に生かす方途をはかりながら会員相互の親睦をはかることを目的とする」とうたわれ、会長に岡田市郎氏をおいている。

曲目の中に、田植神事の系譜をひくと思われる古格な詞章が伝わっていることは、特筆すべきものである。

〈田の神は　まんがの上で　お祈りあい
　お祈りあい　秋穂に出ては　ゆさゆさと
〈朝露に　髪結いあげて　花つめば
　花つめば　男がまねく　花はたまらぬ
〈今日の日の　時うつ鐘は　いくつ打つ
　いくつ打つ　七つも八つも九つも
〈夕暮に　浜辺をゆけば　千鳥なく
　千鳥なく　また鳴け千鳥声くらべ
〈玉村の八幡様は　何で葺く
　何で葺く　ひのきとさわら　こけらぶき
〈葦の根の　そよめく中で　寝たいもの
　寝たいもの　花ござすいて　寝たいもの（中内）
　二人で歌う
㈠今日の日の　時うつ鐘は
　やあの　いくつうつー
　いくつうつ　七つも八つも
　やあのここのつも
㈡十七が　むかいで招く
　やあの橋がない
　橋がない　わが身を橋に
　やあのわたらせる
㈢夕暮に　浜辺を行けば
　やあの千鳥鳴く
　千鳥鳴く　また鳴け千鳥
　やあの声くらべ　（小島田）
　朝つゆに　夕暮……　ハイーハイー
　千鳥なけば――　ハイーサイー　（天川大島住宅）
　田植えの時、田植え唄をうたっていたら、まちがって、夕暮のうたをうたってしまった。
　施主がこれをきいて、もう終りにしたいのだと思い、田植えを終りにしてしまった。（下長磯）
　つかれてきた時、唄がきこえてくると、調子はゆっくりなのに、手が早くなった。
　朝、昼、夕の唄があった。（鶴光路）
　田植唄の中に
〈大黒は俵の上で……（以下不詳）
という歌詞があり、おさなぶりの時に唄った。
　麦打唄
〈おらが隣のミソ玉娘　嫁に行くとて
　洗濯までしたが　ヘソが出ベソで嫌われた
〈ヘソの出ベソが　まだまだ良いが
　尻のおたなは　やれかくされぬ（駒形）
　田植唄の中に、「田の神」という歌詞があったが、記憶がさだかではない。
　麦打ちの時
〈赤城山から　雲が押しだして
　猿がケツつんだした
と唄った。（亀里矢嶋）
㈠山寺の時うつ鐘はいやの
　いくつうついくつ七七ー
　ああつも八つもいやの
　九つも

(二)夕暮にはまべを見れば
　いやの千鳥なく千鳥なく
　またなけ千鳥いやの
　　こゑくらべ　（山王）

玉村の八オーイ幡様は
アーそうともそうとも
いやーの何で葺く
何でふくひのオーイきとさわら
アーそうともそうとも
いやーのこけらぶき
葦の根のそよオーイめく中で
アーそうともそうとも
いやーの寝たいもの
ねたいもの花オーイござすいて
アーそうともそうとも
いやーのねたいもの

朝露に髪オーイ結いあげて
アーもっともそうだよ
いやーの花つめば
花つめば男オーイが招く
ハアーそうともそうとも
いやーの花はたまらぬ
今日の日の時オーイ打つ鐘は
アーもっともそうだよ

いやーのいくつ打つ
いくつ打つ七オーイつも八つも
ハアーもっともそうだよ
いやーの九つも
夕ぐれに浜オーイべを行けば
アーもっともそうだよ
いやーの千鳥啼く
千鳥なく又オーイなけ千鳥
ハアーもっともそうだよ
いやーの声くらべ

〈二子山から朝倉みれば
　ナスやキュウリのヤレ花ざかり

田植唄

夕暮に
いやはのー
浜辺を行けば
いやはの千鳥鳴く
千鳥鳴け
よく鳴け千鳥
いやはの
どうした、どうした（女屋）

麦打歌「棒打歌」　此の歌は六月末の最夏の麦（ムギ）打歌ですので農作業の一番厳しい時期なので多少狂言歌であります。

一、お前百まで　わしゃ九十九までー
　共にぃ白髪の　やれはえるまで
　　ハアーぶつこけぶつこけ
二、オらが隣の　みそ玉娘えー
　嫁に行くとて洗濯までしたがー
　臍がぁー　出臍で　やれ嫌われたー
　　ハアー
三、浅間山から　鬼がけつつん出してー
　鉈でぇー　ぶっ切る様なやれへをたれたー
　　ハアー

三番は浅間山の噴火を良く評言されて歌われた事と思われます。

〈後閑朝倉女の夜機

男ごしょうらくヤレねてまちろー

私の思い出　　後閑町　川端寿夫

私は農家に生まれ農家に育ち何の取得も有りません。何時か中島主事さんが田植歌なぞと言われた事が有りましたので、書いて見ます。

1　朝

朝露に髪結い上げてぇー
　いやーの　花摘みばぁー
花摘みばぁー　男子、がぁ招くー
　いやーの　花たまらぬうー

2　十時　三時休

芦の音のーそよめく中でぇー
　いやーの　寝たいものをー
寝たいものー　花ござすえてぇー
　いやーの　寝たいものをー

3　昼

山寺でー時打つう鐘はぁー
　いやーの　幾つうゝつうー
幾つ打つー七つーも八つもをー
　いやーの　九つうもをー

4　奥山のー榊のー枝にいー
　いやーの鳩がすうむー
鳩の子の寝言には小豆さゝげはいよさんせ
　豆なら鳩も又きやさんすー
豆も豆えー六月はなのをー
　いやーの　早生豆をー

5　鎌倉のー八つ棟え造りいー
　いやーの　何で葺くうー
何で葺くうー槍とさわらぁー
　いやーの　鱗ら葺きいー

6　夕暮

夕暮にいー浜　辺を行けばぁー
　いやーの　千鳥鳴くうー
千鳥鳴くー　鳴け　鳴け千鳥ー
　いやーの声えー比らべえー

7　十七が使いにー出せえばアー
　いやーの　山蔭でえゝー
山蔭でえー　帯いとけ寝ろとー
　いやあの　若い衆がアー
ゆうぐれにはまべをゆけばぁー……

いやーのちどりなく
ちどりなく又なけちどり　あー……
いやーのこえくらべ

麦打唄

おらがとなりのみそ玉娘
よめに行くとて洗たくまでしたが
ヘソが出ベソであらきらわれた
えちご出るときや
なみだで出たが
今じやえちごの
かぜもやだ
泣いてくれるな
これ吾が娘
家を出たからは
よくつとめろよ

麦打唄は唄われた。でんでん虫をオツノコ又はデーソンと呼び、でんでん虫を取る歌があった。また最後に「……カンカシナ」と歌う子守唄があった。（笂井）

「おらがとなりの、みそ玉娘、嫁に行くとて、洗たくまでしたが、ヘソが出ベソで、やれ嫌われた。」

「赤城山から鬼がケツをつんだして、ナタでぶっきるような屁をたれた。アー、ブッコケ、ブッコケ」

「赤城山から谷底みれば、瓜（うり）やナスビの花ざかり」（上朝倉）

おらがとなりの
味噌玉娘
嫁に行くとて
洗濯までしたが
ヘソがでべそで
ヤレホントニきらわれた
ソオレ、ボッコケ、ボッコケ
おばばどこへ行く
三升だるさげて
嫁の在所へ
やれまごだきに
ああ、そうかい、そうかい（女屋）
おらがなあ
おらがとなりの味噌玉娘
嫁に行くとて
洗濯までしたが
へそがでべそで
やれきらわれた
へそのでべそは
まだよいけれど
……（笂井）
おらが隣の味噌玉娘
嫁に行くとて洗濯までしたが
へそがでべそで、やれきらわれた
どっこいしょ
へそのでべそは、まだよいけれど
はながおしでやれきらわれた

どっこいしょ（天川大島）
おらがとなりの
味噌玉娘
嫁に行くとて
洗濯までしたが
へそがでべそで
やれに、ホンニサ、きらわれた
ああ、ぽっこけぽっこけ
おばばどこへ行く
三升樽さげて
嫁の在所へ
やれ、孫だきに
ああ、ぽっこけぽっこけ

田植唄

夕暮に
いやはのー
浜辺を行けば
いやはの千鳥鳴く
千鳥鳴け
よく鳴け千鳥
いやはの
どうした、どうした（女屋）
おらがとなりのみそだま娘
嫁に行く時　せんたくまでしたが
へそが　でべそできらわれた
ドッコイ　ドッコイ（下長磯）

〈おらが隣りのミソ玉娘　嫁に行くとて
洗濯までしたが　ヘソが出べソで
やれ嫌われた（中内）

草刈唄

〈くにを出るときゃ　涙で出たが
今じゃ越後の風もいや
〈恋の駒形　情の都（宮子）
情知らずの稲荷山
〈十七がむかいの土手で　布さらす
布さらさんで　身をさらす（中内）

十日夜のうた

「十日夜、わらでっぽう、あさそばきりに、
ひるだんご、ようめしくってぶったたけ」
それに、東村でうたうた。（小屋原）

十日夜

十日夜　十日夜、十日の餅　いくつ食った
十食った　遠くの山へ　ひりこした。（新堀）
十日夜は旧の十月九日で、大根の年とりといった。下長磯・今井・群馬町稲荷では、新藁の上に餅の供物をあげる。藁鉄鉋にいもがらなどを入れて良い音を出すようにした。
〈十日夜〉〈朝切りソバに昼団子
夜めし食っちゃ　ぶったたけ
と囃しながら近所を歩いた。
近年、子供会を中心として復活した。（下長磯）
十日夜の夜、子供達はワラ鉄鉋を持ち、それで地面を叩きながら、
〈十日夜〉〈十日の餅はいくつ食った

十食った　遠くの山へひり越した（亀里矢島）
〈十日夜〉〈朝きりそばに　昼だんご
夕飯食っちゃ　ぶったたけ〉〈（鶴光路）
と唄った。
馬子唄などは囃子言葉として残っている。（駒形）

正月の唄

正月はいいもんだ
雪のようなどどたべて
こっぱのようなととすいて
お正月はええもんだ（上増田）

かいこの歌

しじたけやすんでふなからおきて
にわのむこうにかねのやま（小屋原）

同じ名前のものが出会ったときの唄　同じ名前のものが山会うと、それをみたまわりのもんが、次のような唄をうたってはやしたてた。

○○と○○がよりあって
よりあいの前でへひって
いくつひった十ひった
遠くの山へ、ひりこした
ソーダ村の村長さん
ソーダ村の村長さんが
ソーダ飲んで死んだソーダ
ソーシキまんじゅうでっけえソーダ
中にはあんこがねえソーダ（小島田）

つぶどんの歌

つぶどん、つぶどん、山へいげ
ほほう、やのことさ
去年の春行ったらば
からのようなくろどりが
あっちへむいちゃつんのめし
こっちへむいちゃつんのめし
雨さえふれば、そのきずが
ずっき、ずっきとやめもうす（上増田）

手の指の遊び（指遊び）

○子どもと子どもとけんかして……小指
くすりやさんがとめて　……薬指
なかなかとまんねえ　……中指
人たちはわらう　……人指し指
おやたちはおこる　……親指
◎両手の指をあわせながらうたう。
○いちにっさん
にのしのご
さんいち、にのしのにのしのご
○やなぎの下からおばけがでたや
おっかないよ（小島田）

ざれうた

後閑朝倉女のよばい、男後生楽寝てまちろ
この辺の女の人は、夜・昼ねずに働くという（駒形）

お手玉のうた

「いっちっめこさっさ、にちょめこさっさ、高い所の竹の子、低い所のひきがえる、よって、めぐり、とっとの眼」（亀里寺家）

まりつき唄

向山のなきどりは
ちゅうちゅうどりか　めんどりか
ちゅんざぶろうの　みやげ
何　なによ　もらった
金のかんざし　もらった
やぶのかげ　おいたら
ちゅうちゅうねずみが　ひろった
どこからどこまでひいてった
どこから　どこまで　ひいてった
かまくら　かいどの　まん中で
いちぬけ　にぬけ
さんぬけ　さくら
さくらの下の　ぼうさんが
はちに　おめめ　さされて
いたいとも　いわず
かゆいとも　いわず
ただなくばかり
まずまず　いっかん　かしもした。（天川大島住宅）

子守り歌

「ねんねん、ねやまのシロ猫が、足駄をはいて木に登った、足駄じゃあぶない、じょんじょ（ぞうり）が良かろう、じょんじょの鼻緒が、おっ切れて、やれやれ、かわいそうだ、たててやれ」

「ねん〳〵ころりよ、おころりよ、坊やは良い子だ、ねんねしな、ねんねして起きると、乳やるぞ、お乳の出ばなに、何もろた、でんでん大こに、しょうの笛、鳴るか、鳴らぬかふいてみろ。」（亀里寺家）

子守り唄

もりっこは楽げでつらいもの
雨風吹いても宿はない
人の軒端に立ちよれば
あっちゃ（家の主人）にや叱られ、子にや泣かれ？
うちへ帰ればお洗濯
もりっこは楽げでつらいもの（上大島）

子守唄　むかしの子守り唄かなにかに、
「おんなができたらひねりつぶせ、男ができたらそだてろ」
というのがあった。（東上野）

まりつき唄

才りょうだんは　霧ふかし
千曲の川は　波あらし
はるかにきこえる　物音は
逆まく波か　時の声……（下長磯）

まりつき唄

あの山の向こう通るは
月かほうしかほたるか
ほたるならば　手にとりましょ
月ならば　おがみましょ
（高くついてボールが高く上る間に手をあわせる）（下長磯）

蔵びらきの唄

たのしい蔵びらき　お蔵をひらいて　祝いましょう　おいわいましょう（鶴光路）

七草

七草なずな　唐土の鳥が　わたらぬ先に　ストトン　ストトン（新堀）

七草の唄

「七草なずな　唐土の鳥が　日本の土地へ　わたらぬ先に　何たたくせりたたく」（鶴光路）

豆ぜんという豆売りが来て
〽豆やのおじさんやって来た
豆やのおばさんついて来た

と歌いながら村内を回った。（上佐鳥）

ざれ歌

金のなる木を庭に植え
かわいいおなごを手にとって
奈良の大仏腰にして
横須賀の軍艦下駄にして
世界一周してみたい

うらのおじいちゃんがいったこと。（上大島）

〽盆はボタモチ　昼間はウドン
夜は米のめし　とうなす汁よ（中内）

駒形の八木節　駒形の八木節の組は、この辺では一番早かった。それまでは、稲荷藤節がはやっていた。

八木節のことをむかしは、源太節といった。

駒形へ八木節が入ってきたのは、大正三年か四年のこと。

この下に木賃宿があった。（六文棒）

その木賃宿に、よかよかのあめ屋が来ていて、あめやが源太節をした。

その宿にあめ屋を泊めて、半田八木節をおそわった。（一円五十銭）

これが、大正三年か四年のこと。（おそらく大正四年のこと）

駒形神社ではじめて、舞台をかけて八木節をおどった。わしが五歳のときのこと。

そのころ太田の治郎右衛門橋の方で、さかんに八木節がうたわれていたという。

そのとき、八木節を教わったのは、駒形町の次の人たちであった。（駒形）

稲荷藤節　稲荷藤節は、久川藤太郎さんがはじめた。

この人は越後からきた人

浅間様をおじいさんと信仰していた。

富士講に入っていた人。

この人の音頭を聞いたことがある。

八木節の前の盆踊唄である。

「わたしは増田の稲荷藤の弟子よ」といって音頭をとっていた。（上増田）

稲荷藤節は盆踊唄である。

手おどりであった。

昭和四十九年八月二十六日、前橋市の文化財に指定された。

当時の代表は、泉沢町の小沼徳三郎さん。

笛と唄　小沼徳三郎さん、荒口町田村利久太さん

太鼓　須藤喜久衛さん

稲荷藤節は、八木節がはやってきたので消えたという。

今から七、八年前に、泉沢の人が東組へ稲荷藤節を教えにきてくれた。東組の夏祭りのとき一、二度踊ったことがあった。

はっぴもつくった。

当時の世話人は、薊政之さんであった。

次のときは、踊りは覚えたが、音頭は覚えなかった。泉沢の喜楽さんがきて、音頭をとってくれた。

はっぴをつくったのは、昭和五十七年ごろ、東組の婦人会の人が十

二、三人いた。この人たちがはらった。本部の指導で上増田の納涼祭のとき木崎音頭をおどったが、稲荷藤節は、このあとに踊った。

稲荷藤節は農繁期で、みんなが働いているのに、踊りはんが踊っていては申訳ない。きまりが悪いというので、ほっかぶりして、ここんで踊っているんだという。

稲荷藤節は、八木節にくらべると、

テンポがおそい、

手おどりである

ほっかぶりをする

という特長をもつ。

稲荷藤さん（久川藤太郎さん）は昭和十三年七月二十一日に数え八十一歳で死亡している。（上増田）

教育ない〳〵づくし

ない〳〵ない〳〵〳〵と何がない
上の御慈悲が勿(もっ)爲ない
かい〳〵づくしで申ませふ
学校がひらけて無筆がない
文明開化に今昔はない
浮世がひらけて重荷やない
諸税の直あげても無理ではない
稼げば請合周らない
預産するほどそんはない
不満げな人にはお金がない
みがかぬ玉には光がない
習ふてできない業はない
学問好めば隙はない
家業を励めば不自由がない
ほね折嫌ふは百姓でない
源儲け余さずは商法でない
安く売ってもそんはない
高く売ってはお客がない
欲に迷えばとくはない
無義理するのは人でない
心が清けりゃ病ひはない
流るゝ水にはくされがない
達摩さんには足がない
それでも産ま□事はない
命のいらないものはない
泥ぼうするから首がない
そんなべらぼうたんとない
などゝ云出しゃきりがない
爰(ここ)らで鳥渡(ちょっと)御免ない

残

七十有四翁
東庵主人筆書

開国貴人萬福ある〳〵づくし

ある〳〵ある〳〵〳〵と何がある
今年は利益が沢山ある
豊年万作ゆたかである
蔵にはお米が山ほどある
金庫にやお金が一ぱいある
世間は頗(すこぶ)る景気である

商いは非常にもうけがある
店屋は大いに繁昌である
朝から晩までお客がある
一日の儲けもがうぎである
紙幣入れにやおさつがぎっしりである
ゆたかに　すごし　あまりがある
あまりは銀行へ預けてある
預けてあるから利益がある
利益があるから愉快である
愉快で安堵で慥である
仕事はいち〳〵立派である
家内は皆〳〵達者である
　　の嫁御も機嫌である
御霊薬子は戸棚も明れはある
お酒は斗樽にいつでもある
酔えば踊るがきまりである
命の洗濯は肝要である
無事に長命の御家である
願ひもよく叶ふである
も度数〳〵重ねえある
手枕万歳幸ひである
如件にある〳〵づくしである
　　残
七十有四翁
東庵主人筆書（公田）

盆踊りの唄

おばばどこへ行く、さんじょざるさげて
よめのざいしょへ、あかだきに
これは、おくろさんがざるの中に力米を入れて、娘のとつぎ先へもっていくところをうたったものという。
嫁にくれた娘に子供ができれば、母親がとつぎ先へ見舞に行くものときまっていた。
これはおぶあげ（男は十九日、女は二十一日）の前に行った。
うぶぎは、おぶあげのときにもっていった。（上大島）

盆唄

「盆にぼたもち、ひるまはうどん、夜は米の飯、とうなすかぼちゃ」
（上佐鳥）

三、門付け、その他

春には天道念仏が行なわれ、雨乞いも兼ねていた。
後閑新田に宮本とうさいという人がいて、念仏をよくした。
葬式儀礼として五人組で十三仏を唱えた。（広瀬一丁目）
九月の農休みの中日に天道念仏が行なわれ、念仏申しと呼ばれるお婆さんが五、六人いた。鉦や大鼓で念仏を唱えた。念仏が済むと翌日駒形に按摩に行った。（中内）
春の中日には天道念仏がある。（下長磯）
三月の彼岸の入に天道念仏をした。（増田）
天道念仏は昔あった。融通念仏は隣組で行う。（小屋原）
六人位の念仏婆さんがいた。葬儀の後で後念仏を唱えた。町田毛野
男さんが8ミリに収録している。（上佐鳥）
念仏講がかってはあった。前原には念仏婆さんがいた。

二十三夜待ちやお日待（十一月三日）があった。（野中）

天道念仏　「ナンマーハイハーハンポー」といいながら太鼓と鉦をたたいた。

神社の北の小さなお堂の中で天道念仏をする。

日時は春の彼岸のころ。

天道念仏は、むかしは日一杯やっていた。

鉦には、次のようにある。

勢多郡木瀬村大字東上野村

大正四年九月

お札は二種類つくる。天道念仏のものと、お獅子のお札である。

むかし、東上野には、ほうしょうじというお寺があったという。この寺は火事にあった。

そのとき、近所の人が仏像をいそいで外に出して、仏像は焼けなかったという。（東上野）

下阿内のお念仏　真言

(一)　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

(二)　南無観世音菩薩　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

(三)　南無地蔵菩薩　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

(四)　十王十体南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏（十回）

(五)　道の端の六地蔵　おとない申す御威徳に　ろくせきのがれる南無阿弥陀

(六)　一日　四日　十四日　二十四日の念仏に八幡よじんの血の池を申し埋めるよ南無阿弥陀

(七)　西はさいほう極楽浄土の障子が池の蓮の蓮草は一ぺん申せば一本開く　西のこうやへ輝きわたりし即ち仏に疑いなし（十回）ゆうづう念仏南無阿弥陀

(八)　南無不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿闍・大日・虚空蔵・南無十三仏・南無阿弥陀仏

(九)　舎利礼

一心頂礼・万徳円満・釈迦如来・眞身舎利・本地法身・法界塔婆我等礼敬・爲我現身・入我我入・佛加持故・我證菩堤・以佛神力利益衆生・発菩堤心・修菩薩行・同入円寂・平等大智・今將頂礼

(十)　おん・あぼきや・べいろしやろう・まかぼだら・まに・はんどまじんばらはりばりたや・うん

(十一)　十句観音経

観世音・南無佛・与佛有因・与佛有縁・佛法僧縁・常楽我浄　朝念観世音・暮念観世音・念々従心起・念々不離心

(十二)　きみよーちょうらい四十九日位牌の前をながむれば一に燈籠二にお花、三にしきびの折枝をあげて念仏唱えれば、十三佛も御影さす南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏　ああ有り難や地蔵さん

三公田お念仏　天台

我昔所造諸悪業・皆由無始貪瞋痴・従身口意之所生

一切我今皆懺悔

(一)　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏（十回）

(二)　じうおうじったいなむあみだ（十回）

(三)　道の端の六地蔵尊　唱ひ申す御威徳にろくせきのがれる

南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛　なむあみだ

(四)　西は西方極楽浄土しょじが池のはすの連花一べん申せば

一本開いて西の廣野へ輝きわたればすなわち仏にうたがいなしと

ゆうずう念仏なむあみだ

(五)　(女)　一日四日十四日二十四日のお念仏に八万四人の血の池を申し浮かべよ南無阿弥陀

(六)　(子供)。さいの河原で小供の集りうやまい申せば　そこでおじぞが手に手を取りて　ならびうかんでとうづるとうづるなむあみだ

(七)　南無不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿闍・大日・虚空蔵・南無十三仏・南無阿弥陀さんぜのしようぼさつなむあみだ

(八)　西国三十三番世　坂東が三十三番世　秩父が三十四番の　観世音聖師申せよ南無阿弥陀

(九)　南無阿弥陀佛（六回繰り返す）

(十)　おんあぼきや・べいろしやろう・まかもだら・まにはんどまじんばらはりばりたや

(十一)　今日申したお念佛を黄金のお盆につみ上げて佛様へと差上げておいとま申していざ帰る

南無阿弥陀佛　南無阿弥陀

お念仏の栞（小野梅五郎口唱）

(一)　南無阿弥陀仏（三べん返し）

なむあみだーぶーつなむあみだんぶーつなむあみだー

(二)　六観音

ろくかんのんに　六じぞう　ちゝぶやくし　はつせかんのん　南無　十王に　十三仏　三世のしよぼさつ　なむあみだ

(三)　融通念仏

光明釈迦牟尼仏壇で　一べん申したお念仏は月日のご恩を

おくると申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　二へん申したお念仏は父のご恩を

おくると申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　三べん申したお念仏は母のご恩を

おくると申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　四へん申したお念仏は四品の浄土を

おがむと申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　五へん申したお念仏は極楽浄土を

おがむと申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　六ぺん申したお念仏は六道の辻にも

迷わぬためとや　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　七へん申したお念仏は七曜のお星を

おがむと申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　八へん申したお念仏ははちすのれんげも

開くと申す　ゆうづうおねんぶつなむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　九へん申したお念仏は九品の浄土を

おがむと申す　ゆうづうお念仏なむあみだー

光明釈迦牟尼仏壇で　十ぺん申したお念仏は十悪罪をのがるるためとや　ゆうづうお念仏なむあみだー

(四)　身はここに

身はここに　身はここに　心は信濃の善光寺　お助け給えやみだ如来　なむあみだ　んぶつなむあみだ

(五)　道の端のお地蔵さま　お唱え申した　ご威徳で　十悪罪をおのがれ申した　なむあみだんぶつなむあみだ

(六)　岩舟のお地蔵さま

岩舟のお地蔵さま　お唱え申した　ご威徳で　四十八責おのがれ申した　なむあみだんぶつなむあみだ

(七)　陀羅尼

おんあぼきやあべーろしやのなかほんだらまにはんどじんばらは

らはりたや（くり返す）

(八) 十三仏

南無不動・釈迦・文珠・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿閦・大日・虚空蔵

お念佛

懺悔文

我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋癡従身語意之所生一切我今皆懺悔

南無阿弥陀仏

念佛

南無阿弥陀　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

五反

一　融通念仏　南無阿弥陀

　　融通念仏　南無阿弥陀

二　南無地蔵大菩薩

　　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

四　南無観世御菩薩

　　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

五　南無観世大菩薩　南無阿弥陀仏

　　南無阿弥陀

女の人だけ

六　四日四日十四日二十四日のお念仏に八万余塵の血の池を申しうめるよ南無阿弥陀　五反

七　道の端の六地蔵お唱い申したお威徳に

　　六せきのがるる　南無阿弥陀

　　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

八　西は西方極楽浄土の生死が池の蓮の蓮華が一遍申せば一本開いて

西の廣野え輝やきわたりし即ち仏にうたがいなあし融通念仏南無阿弥陀　十反

九　南無不動　釈迦　文殊　普賢　地蔵　弥勒　薬師　観音　勢至　阿弥陀　阿閦　大日　虚空蔵　南無十三仏　南無阿弥陀　先に三本お線香を上げて十反唱える

舎利礼文

十　一心頂礼萬徳円満釈迦如来真身舎利本地法身法界塔婆我等礼驚為我現身入我我入仏加持故我證菩提以仏神力利益衆生発菩提心修菩薩行同入圓寂平等大智今將頂礼　五反

十句観音経

十一　南無仏與仏有因與仏有縁仏法僧縁常楽我浄朝念観世音常念観世音念念従心起念念不離心観世音　五反

光明眞言院羅尼

十二　びろしやなまかほだらまにはんどまじんばらはらはりたやうんおんあぼきや

有難や玉のすだれを巻き上げて念仏の声ぞ聞くぞうれしき

十三　なむあみだぶ

　　なむあみだぶ

　　なむあみだぶつ　三反

　身はここに　心は信濃の善光寺

　導き給えや　弥陀の浄土え

十四　なむあみだぶ

　　なむあみだぶ

　　なむあみだぶつ　三反

生きるとて末をはるかと思うなよ
無情の風は　時ぞきらわん

十五　なむあみだぶ
なむあみだぶ
なむあみだぶつ

十六　かけ念仏
なむまいだぁ　なむまいだぁ　水の終るまで

十七　帰命頂礼〇〇年忌位牌の前を眺むれば一に香炉二にお花三に樒の折枝を上げて念仏唱うれば十三仏のみ光さす
南無阿弥陀仏　阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　阿弥陀仏
万日の供徳有情安楽護法大師南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

西善町矢田の念仏

一　南無阿弥陀仏　三唱十回
一　縦横十体南無阿弥陀　三唱十回
一　道の端の六地蔵唱え申す御遺徳に六夕のがれる南無阿弥陀
一　融通念仏南無阿弥陀　三唱十回
一　一日十四日二十四日の念仏に
八万余尽の血の池を申し埋めますよ

南無阿弥陀
一　西国三十三番よ阪東三十三番よ秩父が三十四ケ所の観音お願い
申せば即ち仏にうたがいなしの融通念仏南無阿弥陀
一　西は西方極楽浄土の障子が池の蓮の蓮花は一扁申せば一本開い
てにいしまこうやに輝き亘りし即ち仏にうたがいなしの
融通念仏南無阿弥陀
一　南無不動釈迦文珠普賢地蔵弥勒薬師観音勢至阿弥陀阿閦大日虚
空蔵（南無十三仏南無阿弥陀）
よいな
一　南無阿弥陀仏　三唱十回
一　おんあぼきや、べいろしやのう、まかぼたらまにはんどま、じん
ばらはらばりたや、うん

亀里町矢島の和讃、御詠歌

諸佛尊御和讃
謹んで唱へ上げ奉る諸佛尊　御霊文　御和讃
帰命頂礼　佛菩薩
大慈大悲の　深くして
現世来世の　衆生をば
慰み救ふぞ　有難し
十二諸佛　諸菩薩は
十方世界に　ましませる
諸佛菩薩　明王と
天神地神　悉ごとく
大慈大悲に　かはりなし
悲しきときも　うきときも
悪しき心の　起るとき
艱難災難　起るとも
南無阿弥陀佛つ　御名号
妙法蓮華の　題目を
一心不乱に　唱ふれば
諸佛菩薩の　大悲にも
悩み災わい　消え去りて
歓喜の心　湧き起り

心身共に　安からん
未来は諸尊の　力らにて
極楽浄土に　導びかる
南無阿弥陀佛　阿弥陀佛
帰命頂礼　諸佛尊
大慈大悲の　諸佛尊

（南舞阿弥陀佛々々）

（三唱三礼）

七観音　地蔵尊　御詠歌

七観音御詠歌

◎矢しま村、七観音に願いして
利益あらたに受ける嬉しさ
○極楽寺、阿弥陀如来に、付隨して
大慈大悲の、七つかんのん
◎人々の、諸難残らず、よけ給ひ
導き給へ、七つ観音
◎有難や、七観音の利益にて
災禍も消へて、五穀豊かに
○極楽の、七観音の、霊験も
常盤の前の、縁にしなるかも
○弥陀佛と、七観音の御利生を
常盤の前の、祈る心を
◎南無大悲、七観音の御利生は
人天牛馬も、救ふ尊とさ

地蔵尊御詠歌

○地蔵尊
矢しまの村に、示現して
火難災難、救ふ尊とさ
○有難や、大慈大悲の、地蔵尊
救くひ給へや、後の世までも
○願ひなば、諸難を除ける、有難や
すがりて頼の免、地蔵菩薩に

七観音御和讃

毎讃上げ
抑も唱へ上げ奉る
七観世音御和讃は
七観音の使人と成菩提山
光明院極楽寺
阿弥陀如来の使僧と共に
諸難□□□なり
佛は自から之を唱へ給はず
人を以て唱へしむ即ち
七観世音菩薩と
阿弥陀如来の合作なり
常に真心を本として
我慾を起さず一心に
唱へ奉れば家内安全
諸難消除功徳唐捐
からず利益は目前に
顕はれ心身安楽にして
禅定に入るが如く
聖衆現前せん
是に依て和讃し奉る

謹て

七観音御和讃

帰命頂礼矢嶋邑
七観音の誓願は
家内安全諸難より
安産子育福智徳
善男善女のともからと
牛馬の類に至るまで
功徳あまねく施して
導き給ふぞ有難や
阿弥陀勢至はかけにそい
七観音と唱ふれば
すくひの舟にのせたまひ
極楽浄土に導きて
自然に生る真心は
なさけと智慧のあらわれて
世の為め広く善根を
行ふ心となさしむる
観音菩薩の大願の
大慈大悲ぞ有難や
南無と唱ふる功徳にて
導き給へ観世音
南無や大慈の七菩薩
南無や大悲の観世音

主代氏合掌

七観音和讃終

誓願和讃

唱へ上げ奉る

阿弥陀如来御和讃

帰命頂礼極楽寺
阿弥陀如来の誓願は
どする願は四十八
八正置の幡たてゝ
救の舟を出したまひ
観音勢至はかげにそひ
阿弥陀と唱ふる者あらば
慈悲のみふねにのせたまひ
功徳の水のみち〳〵て
如法蓮の花開らき
自然に生ずる音律は
念佛念法念僧の
心を起す極楽に
導きたまひ神通を
三々九品の修行者に
授けたまふてみ佛と
同じ身になさしむる
大慈大悲ぞ有難や
南無と唱ふる功徳にて
導きたまひ阿弥陀佛
南無阿弥陀佛

阿弥陀佛

南無阿弥陀佛
阿弥陀佛
誓願和讃終
隆禅上人稱讃
主代合掌
霊覺
有や

七観世音御詠歌

謹で唱へ上げ奉る
御詠歌は
上野國群馬郡
阿内郷極楽寺
直末西福院
七観世音菩薩
第一番は
聖観世音
濁より出し心の
蓮の花
開かせ給へ
聖かんぜおん
第二番は
千手千眼観世音
千万の願も大慈
大悲にて
救ひ給へや
千手かんおん
第三番は
馬頭観世音
吾れ人のむ明に迷ふ
煩脳越
つきさせ給へ
馬頭かんおん
第四番は
子安観世音
大慈悲にすがらば
親子さわりなく
あらしめ給へ
子安かんおん
第五番は
十一面観世音
南む大悲十一面の
かんぜおん
導き給へ
よしあしの人
第六番は
如意輪観世音
もろ〳〵の願越
如意に輪らして
救ひ給へや
南むかんぜおん
第七番は
不空羂索観世音
度しがたき人も大悲の
み綱にて
済ひ給へや
不空かんおん

七観音和讃

七観音御和讃
毎讃上
抑も唱へ上げ奉る
七観世音御和讃は
七観音の使人と
成菩提山光明院
極楽寺阿弥陀如来の
使僧と共に
讃歎し奉る所なり
佛は自から之を唱へ給はず
人を以て唱へしむ即ち
七観世音菩薩と
阿弥陀如来の合作なり
常に真心を本として
我慾を起さず一心に
唱へ奉れば家内安全
諸難消除功徳唐捐からず
利益は目前に顕はれ
心身安楽にして
禅定に入るが如く
聖象現前せん
是に依て謹で稱讃し奉る
七観音御和讃
歸命頂礼矢嶋邑
七観音の誓願は
家内安全諸難よけ
安産子育福智徳
善男善女のともがらと
牛馬の類に至るまで
功徳あまねく施して
導き給ふぞ有難や
阿弥陀勢至はかけにそい
七観音と唱ふれば
救の舟にのせたまひ
極楽浄土に導きて
自然に生る真心は
情と智慧の顕はれて
世の為め廣く善根を
行ふ心となさしむる
観音菩薩の大願の
大慈大悲ぞ有難や
南無と唱ふる功徳にて
導き給へ観世音
南無や大慈の七菩薩
南無や大悲の観世音

十日夜には歌いながらワラ鉄鉋で地面を叩いて回った。（筑井）

昭和二十年に村の厄年（男二十五、女十九歳）が金を出し合い、広沢虎声という浪曲師を呼んで厄落としをした。旧家を会場として借り、背景幕はグンゼと契約したものを使った。来場者には落花生を配り、ハナを貰った人には、ハナを返した。

才文（せえもん）婆さんが来て、才文を語った。この人は飴売り婆さんであり、朝鮮飴やぎりぎり飴を売りに来た。

また地元の清水圭太郎が才文を語った。

正月末から二月頃に鶴福太夫という三河万才が終戦後まで来た。宿は決まっており、特定の家であった。

中川町から虎ちゃんブルさんという丸一が来た。一軒ずつ回って行った。

瞽女さんや春駒が来たが宿は聞かなかった。（野中）

お正月には獅子・万歳・春駒などが門付けにやってきた。（中内）

二月十七日の観音縁日に演芸をした。昭和十七年が最後となった。丸一（代神楽）・浪曲・万歳等が行なわれ、厄落としを兼ねていた。出征の時などは花を多く貰った。

高松屋一行が二年おきくらいに来た。

本庄に人形師がいた。二十二日に玉村で興業した後に、矢嶋にやって来て天王様の祭りに興業し、本庄に帰った。

竹を割って色紙をまいた木口というものを捧げ、おみこしを出した。

正月には万歳・春駒・獅子等がやって来た。また女二人連の瞽女が来て、春駒などを唄った。金や餅などを渡した。（亀里矢嶋）

正月には子連れの春駒、獅子舞、猿回し等がやって来た。また大神楽や瞽女には定宿があった。浪曲や芝居も冬場には良く来た。寺家に住んでいたデロレン祭文の語り師は、通称ミセと呼ばれる義太夫をやっていた人の家に泊った。（鶴光路）

機紙祝いに瞽女が来た。新駒町の伊賀屋を宿とした。親子の大道芸や丸一が来て神楽を舞い、三河万歳や浪曲語りも来た。初世・二世の竹本大国太夫は駒形の人であった。

祭文語りやチョボクレも来た。チョボクレは頭巾を被りチョボクレ坊主と呼ばれた。

京山菊助という漫談語りが来て、日本漫遊などを語った。また大塚田の木村宅に寄宿した親子のうち子供の方が浪曲師の桃中軒雲右衛門となった。（駒形）

二十五の厄年には浪曲師や万歳を頼んだ。（下長磯）

春駒や獅子・才文、その昔には瞽女さんも来た。（下長磯）

コウジ売りやカンピョウ売り、小川の紙などを売りに来た。

二月二十七日にはヒナ市が開かれた。（駒形）

春かわっきの頃玄米パンを売りに来た。ラッパを吹いたオデンヤが来たり、キャラコ（キャンデー）売りも来た。

浪曲師や猿回し、瞽女さんが五人程来た。瞽女の泊る宿があった。また個人的に丸一を呼んだ家がある。（増田）

瞽女や才文が来た。また天田夫婦は才文を語って方々を回った。

おじいさんの厄落としの時に浪曲師の木村若衛を呼んだ。（小屋原）

瞽女さんは毎年来た。春駒や神楽（獅子）が来た。三河万歳が来ると酒肴でもてなした。駒形で丸一をやっていた。

厄落としに娘義太夫を呼んだ。男二十五歳の厄落としには浪曲師を呼んだ。（筑井）

正月二十四日、青年会では新築した家を宿として、浪曲師を呼んで浪花節の会を開いた。寄付に対しては花かえしをした。（中内）

ぎりぎり飴を売りに来た。踊り子がついていた。
玄米パンのホヤホヤと囃しながらパンも売りに来た。
正月の獅子は、乞食が神楽を持って来た。また五、六人の丸一の代神楽が来て獅子踊りを行なった。三河から万歳が来たし、春駒も来た。
冬場には祭文語りが泊まり込み、瞽女さんが来て、宿もあった。浪曲師も来た。(上佐鳥)
上大島に春日井若之助という浪曲師がいた。(野中)
六十年位前には、正月には三河万歳が来た。年輩者だった。座敷へ上がって舞った。時分どきには昼食を出し、餅をやったり歓待した。冬場には瞽女が来て泊まった。赤い布に鈴を付けた馬を持った春駒や鈴の付いた太鼓を叩く飴屋が来た。太鼓を叩きヨカヨカ踊りをした。
二、三月になると厄落としを兼ねて浪曲師を呼んだ。(山王)
芸人　寺家にデロレンの祭文語りがいて、語るのをきいたおぼえがある。
義太夫、なにわ節、春駒、猿まわし、芝居、獅子舞が来た。
正月二十三日には、代神楽がやってきた。
ごぜさんが来て、宿をした家がある。一週間くらいいて、その家に聞きに集まった。
毎年、同じ人が来た。(鶴光路)
春駒　持っている馬のあごの所に色紙がたくさんついていて、お礼をもらうと、一枚ずつ色紙をあげる。もらった家では、神だなに上げておく。蚕ができる。(鶴光路)
大正頃来た。太鼓をたたき、踊る人との二人組でまわった。
蚕の唄をうたった。(下朝倉)
二〜三人でまわってきて、蚕のことを唄った。「〜春駒なんぞ」という文句だった。(朝倉)

楽しみ　祭文語り(天川にいた)
義太夫
薩摩琵琶、筑前琵琶
浪花節(下朝倉)
一冬に一度か二度ナニワブシと地まわりの講談師だった。厄年の人が厄落としで浪曲師をよんできいた。
夜あそびは、上、下佐鳥へ行った。新町、西原、中原とまわると、一晩があけてしまった。(亀里龍門)
芸人　正月に三河万歳が来た。新潟からはごぜさんが来た。ごぜさんは手引きを入れて三、四人で来て、区長さん宅が宿になった。
個々の家からお金をもらった。
中川町のマルイチが三〜四人で来て、球、棒を使った曲芸に、獅子神楽(雄雌)をやった。(下朝倉)
芳町のマルイチ、三河万歳、ごぜさん、獅子舞が来た。(亀里阿内宿)
浪花節語り、浪曲師がいた。浪花節は、下両家にタケヤン、浪曲は石田儀什、京山重友がいた。
芝居の一座、マルイチの曲芸(皿まわし、紙切り、浪花節)、獅子神楽、春駒などがきた。
春駒は、馬の頭の人形をふって、歌をうたった。もちを二〜三きれ渡した。(亀里寺家)
正月には、獅子舞、万歳、ごぜさんが来て、家をまわった。(亀里)
浪花節　新築した家や厄年の人が厄おとしのためにやった。
(亀里阿内宿)
映画　学校の庭で映画をした。
前橋に前活、第一、大和、帝国館電気館という四つの映画館があった。

入場料は大和が十五銭だった。前活は五銭だった。
昭和三年に定方さんの建物の完成祝いに映画をした。入場料をとった。旗もちは太鼓をたたいて村中を歩いたものはただで入れた。
（亀里龍門）

ごぜさん　新潟からやってきた。木村家が宿になってとめた。
五～六人来るのに夜具がないので、近所から布団を一枚ずつ借りてきて用意した。
昼は各家を三味線をひいてまわり、夕方、宿に人が聞きに集まった。
目が見えない人ばかりで、多少見える人が手をひいてつれてきた。
（亀里寺家）

むかし、ごぜさんがきた。
ごぜさんの泊りつけの家があった。
ごぜさんがきたとき、はなしがあって、そこへ歌を聞きに行った。
一曲歌いおわると、「おひってくれ」といった。おかねを紙に包んでやると、歌をうたった。三味線の伴奏でやった。（下増田）
むかし、女屋にごぜさんがきた。
今の女屋喜八郎さんのうちで泊めた。（女屋）

ゴゼさん　正月にゴゼさんが来た。一～二銭持って聞きに行った。昔はあまり楽しみがなかった。（阿内宿）

三河万歳　正月にやってきた。来る家は決まっていた。（亀里寺家）

チョボクレ坊主　祭礼にやってきて各家をまわった。門付坊主ともいった。（亀里寺家）

お獅子　三月十四日に世良田の八坂神社に行き、獅子と御幣を借りてくる。宿を決めて御神体をとめる。
男だけで、朝九時から町を下から順にまわる。
今は公民館の一室におき、まわりにしめをはり、女は入れない。
（下阿内）

祭文　この頃（須永）に祭文を語った人がいた。音左衛門といった。まわりの人からは、音さんとよばれていた。うまれたのは山田家。素人だが、祭文をやった。結婚してからはよそへでて、夫婦で祭文をやっていた。
音やんが、どこで祭文を覚えたかは、わからない。
ムラで、音やんをたのんでかたってもらったこともあった。
むかしは、男でも女でも、厄年の人は、やくおとしをした。そのときに、いろいろの芸人をたのんだ。浪曲師とか、祭文がたりをたのんだ。宿は、でっけえうちを借りた。小さいとき、祭文を聞いたことがある。
雲右衛門という人が、上増田にいたというのは聞いたことがある。この人のことについては、名前を聞いただけで、どういう人だかは知らない。
浪花節は、安堀の菊若という人がうれっこだった。（下増田）
むかし、天川に祭文語りがいた。
上大島の観音様の縁日のときによく来た。
十日夜の晩には、布団・米・小豆をもって観音様にあつまった。鍋であずきがゆをにて食べた。
布団をもっていって泊ってきた。
観音様には、百体観音がまつってある。それをおがんだ。
今でも、毎月十六日には、十六念仏をしている。としよりの人がしている。
このほか、三月と七月の十五日には天道念仏をしている。（上大島）
むかしの祭りは、半分は乞食のようなものだった。
下長磯に祭文語りの人がいた。

浦野文五郎さんのおかみさんのおしげさんという人は、菅谷から親子してきていて、文五郎やんにみこまれて一緒になった人。
このおしげさん親子は祭文がたりであった。
中村けんじさんという人もやはり長磯の人で、祭文語りであった。
この近くでは、天川男にも祭文語りがいた。（女屋）

浪花節語り　下両家のさたやんという人は西洋軒清水と名乗って浪花節語りだった。（天川大島）

祭文語り　祭文語りが天川にいた。高山さんという人だった。大正四年生まれ、とびしょくだった人。祭文語りだったので学校へは出なかった。
この人の親も祭文語りだった。親のあとをついてあるいたという。（天川大島）

祭文語りがきた。祭文は、須永の寮でした。
よそからきた人であるが、一度嫁に行ってもどってきた人がいた。
この女の人が、師匠と一緒にきて語った。
「デロレン、デロレン」といいながら語った。文句を途中で休むときにそういった。（下増田）

四、遊び他

ねっくり。ぶっつけをして遊んだ。
白い葉っぱで黄色い花の咲く草で蛙つりをした。蛙は焼いて食べた。
りゅうぐペット（カラスウリの花）を取り、焼いて食べた。
網やド・置き針で魚とりをした。これも焼いて食べた。（増田）
男の子はぶっつけ・竹馬・竹とんぼ・ガッタ引き（ガッタリ棒）・ねっくい・兵隊ゴッコで遊んだ。また四、五人であげるうなり凧があった。藤づるを削ってうなりにした。
女の子はくにとり・ちゅうとり（野球）・石けり・お手玉・きしゃご・縄とび・まりつき・かくれんぼ・けだしをして遊んだ。また羽根つきには、「おひよおはよ　唐土の鳥がくるりと　どっち見てござる　一かんしょ」などと唄った。
男女共には、魚取り・火掘り・螢取りなどをし、どどめ（桑いちご）を竹の筒に入れ、桑の棒でそれをつついてなめる、つっかん棒が菓子代わりだった。
稲荷祭りや十五夜のそなえものを下げたり、十日夜に十日棒を作って地面を叩く行事が最大の楽しみだった。（野中）
昭和七年から十年頃の子供の遊びは兵隊ゴッコが主であった。
両家とけんかをよくした。（広瀬一丁目）
子供の遊びとして、竹馬・メンチ（メンコ）・お手玉・キシャゴ（おはじき）・石けり・マリ・朝日・畝取り・兵隊ゴッコがあり、西善とよく戦争をした。
昭和三十年代にはバレーボールが盛んに行なわれ、ネットは手作りであり二晩がかりで完成した。（中内）
お手玉はトッチャカチャクイと言いながら遊んだ。この言葉がお手玉の代名詞ともなった。（駒形）
兵隊ゴッコ・魚とり・置き針をした。マリツキ・ポックリ・国とり・ゴム飛び・羽根つき・お手玉・綾とり・縄飛び・おはじき・石けり・かくれんぼ・着せ替え人形ごっこ・ビー玉・ベーゴマ・お店屋ごっこ・ボール投げ・ぶっつけ・くぎぶつけ・五目ならべ・トッコ遊びなどをした。
縄飛びには「一番初めは……」、まりつきには「一つとや人々……」、お手玉には「一、二、三、四、四つや……」などと唄って遊んだ。（小屋原）

兵隊ゴッコ・ドロボウゴッコ・ドロ合戦・ハコケダシ・字カクシ・国とりで遊んだ。昭和六、七年頃は木をクサビ形に削ったものでネョクイ（ネッキ）をした。その後木でなく針に変わった。個人では、ホオジロ取りをした。もちを買って来たり、ブッチメを作って捕えた。地震グモ〳〵地震が来たから機織りなと囃した。セミトリやコウモリも捕えた。桃木川で遊泳した。わらにゅうで火を消す方法を教えたり、彦ひもなどはシャバのママゴトであった。

柳の木にクワガタが多くいた。ホタルも取ったし、日曜日に川干しがあって、魚が沢山取れた。鮒ド・鰻ド・バカドや置き針・ボツコミ（ブッコミ）を仕掛けた。八月にはボッコミにはミミズを入れ、九月にはドジョウをエサに入れた。沢蟹が脱皮したあとをトウフ蟹と呼び、鎌倉エビ・ドジョウなどと同様に生きたまま食べた。明治十五年位までは二、三匹であったが鮭が上った。

三月の終り頃はひき蛙を取った。テコマコ（蟻地獄）を取るときには言葉があった。

カミキリも捕えた。カマキリのことはワーワと言った。幼児はニラムシツリをした。

シラガ太夫（毛虫の一種）の腹内の糸の素を酢につけると釣糸になった。ゴム引き（パチンコ）や杉の実鉄鉋で遊んだ。

マリツキや縄飛びにはそれぞれ唄があった。天下落としという遊びもした。陣取りは陣屋鬼といい、さらにつまってじゃおにと呼んだ。ぶっつけにはカネベタ・厚ベタが使われた。ロウの塗られた小さいメンコをメンチといい、四角のメンコ（角メン）をドンと呼んだ。ハンテンの裾を持って空気を動かすインチキのことを手ボーと呼んだ。一尺もある大メンコのことを二銭一と呼んだ。ビー玉や木綿糸を長く継いだ凧あげもした。

金属のフチ取りのあるコマをケンカゴマと呼んだ。ベーゴマは戦後のものである。

カネタガといって自転車のリム回しをしたり、三歳ナマズ・ゲンショウブ・カマヅカなどという遊びもあった。（笂井）

余暇と娯楽　大人の娯楽　実家にお客に行く。寺、神社に行く。（上長磯）

夜あそび、地まわり。

縄をヒトタマなって行った。提灯（チョーチン）を持ち歩きで行った。

娘のいる家は見当をつけて行った。

上陽、旧木瀬地区、駒形、増田、笂井、両家、西善に行った。

五閑に行ったら堀があり、石をいろいろいれられ恐かった。

松並木の辺に家はなく、こわくて行かなかった。供養塔の辺はこわかった。焼き場があった。

モノ日には駒形の映画館に行った。（下大島）

戦争の直前や戦中は特になく、たまに映画に行ったくらい。（上朝倉）

歩きで町の映画（活動写真）に行った。

夜あそびでは近くの村に行った。（宮地）

玉村に映画を見に行った。

青年団で舞台をかけたので見に行った。（新堀）

前橋へモノ日（祭りの日）に行った。戦前は二十〜三十銭。前活（安い）、大和、帝国館（高い）。

ヤキマンジュウを食べたりした。二クシ十銭くらい。ソバは上等。一日ゆっくりできた。（力丸）

夜あそび　平井の三島様の夜まつりにあそびにいってその分、帰ってから仕事をした。

高崎へ遊びに行くのに、渡船がなくなってしまうので、利根川をお

よいで渡った。
頭の上に浴衣をまるめておよいだ。（亀里寺家）

子供の娯楽　お手玉、マリつき、石けり、縄とび、ドドメとり、水あび、かくれんぼ、陣とり、木のぼり、玉ころがし（ビー玉）、キシャゴ　（天川大島住宅）

お手玉、オハジキ、マリツキ、縄とび。（上長磯）
兵隊あそび、たこあげ、竹馬、ブツケ、コマまわし（下大島）
あそびがあまりなし。（上朝倉）
お手玉、マリつき、羽根つき、キシャゴ、オタマ、クニトリ（ジャンケンで勝つと指でコンパスのように陣地をとった）。
ドドメ、ダイコンがおやつであった。（宮地）
女の子は、お手玉、マリつき、おはじき、縄とび、石けり。
男の子は、コマ、タコ、棒をもって兵隊あそび。魚とり。
利根川でおよいだりした。向こうに行けた。（新堀）
女の子は、オテダマ、縄とび、オハジキで、男の子は、兵隊ごっこ、ネックイ、陣とり。（力丸）
女の子はお手玉。男の子は、ブツケ、ネックイ、タコあげ、木の実とり、木のぼり、竹馬、自転車のリムころがし。（上佐鳥）
お手玉、なわとび、ボール遊びなどがあった。（朝倉）
たこあげ　たんぼとかうちの庭であげたりした。
水鉄鉋
紙鉄鉋
ねっくい　細いまきにつのつけてねっくいさした。
畑のやわらかいところへぶっとおしてあるねっくいを、自分のねっくいでぶちこんで倒した。相手のくいを倒して、自分のくいがたっていれば、それをとることができた。

こままわし
ぶつけ
陣とり　国とり　じゃんけんをして勝つと、とれるだけ相手の陣地・国をとった。
けとばし　ガラスのけだしができた。（わしが子供のとき）
なわとび
かくれんぼ（かくねくしょ）
じゅんさごと　泥棒役のものを追いかけて、つかまえて、しばった。
おしくらまんじゅう　板塀のところでやった。「わっしょい、わっしょい、おしくらごんべでたもんは……」といった。それを聞いた鳥山校長がでてきてそういうことをいうのをとめた。
馬のり
棒かくし
字かくし　地面に字を書いて、その上に砂をかけて、たたいてわからなくして、相手に書いた字をあてさせた。
ちゃいだま（上増田町宮原のことば）　泥をにぎって玉をつくる。相手の玉を下において、上からはなしてあてて、相手の玉をくだけば自分の勝ち。
すもうとりばな　花の先をからませて（ひっかけて）きりっこ（すもう）した。
がいろっぱ　がいろっぱの芯をぬいて、二つ折りにして、おたがいにひっかけて、ひっぱりっこをした。相手のを切れば勝ち。
竹馬
日月ボール　子供のときした。大正時代から。
まりつき

お手玉（女屋）

たこあげ　うなりだこといって、藤を薄く切って作り紙をはって揚げると、音がする。（亀里寺家）

あそび

かるた……いろはかるた。（犬棒かるた）

すごろく……鉄道にそっていく。皇居にあがる。

きしゃご……ガラス

折り紙

お手玉

まりつき……十五銭くらいの白いゴムまり

羽子板

ぶつけ（下長磯）

土遊び　ドンドン焼きのところで、泥をまるめて球をつくって、おとしてわりっこをした。

手のにぎりの幅だけの高さからおとしてわりっこをした。

球をまるめるとき、「石よりかねよりかたくなれ」といった。（女屋）

ネックイ　木の枝の先をけずって、地面にささるようにした。

それを地面にぶっつうしたりした。

相手のネックイをねらってうちこんで、はずれた場合には、はずれた方が負けで、ネックイを相手にとられてしまった。（上佐鳥）

伊勢崎を中心として草競馬が盛んに行なわれ、草競馬を買い、馬のササ・タライと言った。上陽小学校が火事で焼け、その後の落成記念の競馬は盛大であった。

二～三月に、田にシャジキを作り、大相撲のように一反さがり、二反さがり、五反さがりと呼ばれる懸賞が上った。一反さがりは副賞として箪笥がかかり、五反さがりは五色で飾りたてた。（中内町）

競馬　大正十四～十五年に、鶴光路で競馬をやった。賞金が出た。反物、タンス、着物をくれた。（新堀）

大正十五年の秋、鶴光路と今宿の間でやった。羽鳥の大尽がつぶれて、土地を配分してそのあとやった。

競馬の札を出した。

ボンゼンという布をつけて、にぎやかだった。（鶴光路）

昭和の初めのころやっていた。（横手）

むかし、上増田で草競馬をしたことがあった。春先にやった。

麦畑は、馬がかけったところは、そのあと麦はだめになってしまうが、人間がふんごねたところは、麦がでるという。（上大島）

矢田の競馬　頼朝公の愛馬スルスミ追善大競馬会をやったことがある。（力丸）

二見潟音十郎の碑

文化元甲子年

大　黒　天

十二月吉辰　□

二見潟音十郎

右の碑が、東上野の女屋明さん宅の竹藪の中にある。

音十郎という人は、国定忠治と仲よしだったという。

あるとき、忠治が、煙草の火をくれといったら、養蚕火鉢をもって、だしてやったという。（東上野）

駒形小かるた　駒形小かるたは、駒形町全般の伝承が良く表われている。ここにその説明書を資料として載せておく。

駒形小かるた

㋐かい

まえかけ

子育て地蔵

子育て地蔵は、長寿観音前にある。

或る夜、鏡田を耕作している人が地蔵さまが鏡田に埋まっているという夢を見た。そこで、掘り返してみたところ、地蔵さまが出てきたので、それを清内橋のところに建て祀った。ところが、その地蔵さまを拝むと、子供の夜泣きに効くという噂が広まり、願掛けにくる人が多くなった。

今では、念仏を唱える小屋を建て、毎月命日を定め拝んでいる。

いまもわく
きれいな水で
酒づくり

駒形は、水がよく、きれいでしかもおいしいといわれ、酒づくりが盛んである。一つの町に三酒造が存在していることも珍しいといえる。

森本正右衛門による森本酒造、町田卯三郎による町田酒造、馬場久三郎による馬場酒造の三つである。駒形三大酒として、

黒松正泉―森本酒造
清　嘹――町田酒造
群馬誉――馬場酒造

が特においしい地酒として有名である。

うじ子を
守る
駒形神社

明治三十八年、社殿改築、同四十年に琴平神社、雷電神社を合併し、現在の姿になっている。

慶安元年（約三百三十年前）東善より数戸引っ越し、駒形新田として町を形成し、日吉山王を氏神とした。

宝永七年になって、戸数も増加し小屋原泉蔵寺より駒形明神を貰い受け、これを氏神とした。

春秋の例祭・祇園祭などがある。

えどから
続く
一里塚

江戸から、熊谷―境―伊勢崎―駒形の道筋で二十三番目の一里塚である。

もともとは、現在の中屋ストアーやみのわ美容院の前にあったといわれている。

「一里塚」という地名が残っていることからも、ここに一里塚があったことがわかる。

駒形が沼田街道の道筋であったことがしのばれる。

おしえを
きざんだ
石柱

この石柱は、明治二十四年一月一日に設立されたが、昭和六年の大地震で折れてしまった。当初は、屋根型の笠をつけて、袖垣もある立派なものでした。門柱には岡崎長兵氏の筆で次の言葉が刻まれていました。

右―幼年不学胎後悔
○幼年にして学ばざれば悔を後にのこす。
左―培養失時難結実
○培養時を失えば、結実しがたし。

㋕がみ田に姿うつした頼朝公

鏡田には、源頼朝・義経にまつわる伝説がいくつか伝えられている。

その一つとして、昔頼朝が湯治に行く途中ここで休憩をした際、田の水で自分の顔をうつし見たことから鏡田の名がついたといわれている。また、義経が頼朝に追われ、当地に逃げて来た時に、「カガンデ」身を隠したことに由来するとも伝えられている。

㋖人の力士駒形茂兵衛

茂左衛門ともいわれ駒形上町に生まれた。

幼いときから、体が大きく力もあったので力士を志し、江戸にのぼり苦行を重ねたが、うまくいかず、故郷に戻った。

しかし、田沼失政に対する一揆が、当地にも起こったことから、茂兵衛はその首謀者と目され、ついに処刑されてしまった。

そこで、土地の人は相はかって隠し墓を造り、冥福を祈った。

㋗ろうしてみんなで築いた土の橋

広瀬川にかかる現在の須永橋のことである。駒形町と下増田町をつなぐ重要な橋で、人の往来でたいへん賑わった橋である。

昔は、鳥居のような足を何本もつぎ足して上の部分に土をのせて作ったので、俗称を土橋といった。

そのため、橋が傷んでくると、下増田町と駒形町の人が双方から出て道普請を行ったという。

㋙ん道の達人北爪源求

下増田に昭和の初期まで存在した人物である。

赤堀町の本間念流の流れをくみ、自宅に道場を構えて、剣道の普及に努めた。

当地は、弟子も多く免許皆伝を目指して、修業していた。

下増田町も駒形町も含め、近郷近在の人が弟子となった。

現在、上増田町にある筑井吉雄さんの道場もこの一派である。

㋚が親を支える姿親だきの松

駒形町六丁目の根岸裕さんの屋敷内に、一本の大きな松がそびえ立っている。

この松は今は形が変わってしまったというが、昔は親松を子松の枝が抱きかかえるような形をしていたので、親抱きの松といわれている。

今から四百年前、天川の松並木を植樹した際に貢献したというので、藩主から頂いたものであるという。

㋟かいの殿様拝りょうの牛頭天王

駒形神社には、酒井の殿様から戴いた一対の獅子頭（牛頭天王）がある。

この獅子頭は、以前本陣どぶから韮川に投げ入れて、川下の六文棒からかつぎあげ、一丁目一番地の金比羅さんまでかついで走った。

祭りの途中、もんで乱暴な事も行われたので、日露戦争後の風紀取締りで取り止めとなり、以後はお祭りの際に飾られるようになった。

しん楽寺開基は新田眞辯法印

前橋古河線に面した真楽寺は、一六四八年（慶安元年）新田真弁によって開かれた。

本尊は、成田山新勝寺分身の不動明王像で十一面観音菩薩像も安置されている。

毎年二十八日の不動明王縁日の他、

正月三箇日の御年始

二月三日の節分会

春秋の彼岸会

四月八日の花まつり

八月の盂蘭盆会

十二月の除夜

等の行事がある。

すがたかえ悲話を伝える片葉のよし

勢多郡深津の城主、高野辺の大将家成は、妻との間に一男三女があったが、妻に先立たれてしまい、信州の更科太夫宗行の娘を後妻に迎え姫が生まれた。

家成の上京中、後妻は、弟の更科次郎兼光と計り、四角の籠（大アシカ）に前妻の三人の姫を入れ、利根川の増田淵に沈めてしまった。

三姫の怨念で葦が片葉になったと言われている。

せい活の無事を守る琴平神社

駒形町一丁目の北の端に、琴平神社が奉られている。

通称金比羅さまと呼ばれ、縁日である一月九日、八月九日、十日は大層にぎやかだったそうである。

現在のように、計測器のない時代の話であるが、琴平神社の地面と駒形神社の大松の頂上の高さが同じだといわれていた。

そくしん仏のお行塚

駒形橋の近くにある塚にまつわる伝説。たいへんな飢饉の頃この地区でも疫病が流行してたくさんの死人が出て困った。そこで、徳の高い行者が、自分の身を犠牲にし「悪病を払ってやる」といって土中の穴に入った。鉦の音が聞こえている間は竹の管で水をくれといいつつ、みんなの幸せを願って念仏を唱えながら死んだ。現在の石碑の位置は、当時とは少しかわったが、ここをお行塚という。

たいしょうの名残とどめる駒形駅

駒形駅は、明治二十二年十一月三十日に両毛鉄道会社として

開設された。
その後、明治三十九年に日本鉄道となる。
大正十一年三月二十日に改築された。
現在働いている人は四人で、切符の販売・改札業務・駅舎内外の清掃を二十四時間交代で勤務している。
乗降客は、隣接地区に専門学校や短大などができたので年々増加している。

ちずの基準（きじゅん）三角点

三角測量の基準となる点で、見とおしのよいところに石柱が埋めこまれている。
この地区では、駒形町北部の琴平さまの北の畑中にある。
ここは標高七八・三メートルで、二之宮と上増田の境目あたりに一点、文京町二丁目の二子山古墳あたりに一点、宮郷小の北に一点というように四キロごとに埋められており、格は、「三等三角点」である。

つき夜に消（き）えた比丘尼（びくに）さま

下増田の東南端に、比丘尼台と呼ぶところがある。
村の人たちが、農業の神の祭りをしている夜、珍しい魚を持った比丘尼が現れた。その魚をめぐり騒動が起きたため、比丘尼は村を去った。その際、小松苗一本を屋敷内に植えていった。何年か後、比丘尼が村に戻ると、小松は大木となり、八百年を経過していた。
その年老いた比丘尼はそこに庵をつくり往生したという。

てん正の文字をのこす宝筐印塔（ほうきょういんとう）

駒形町は、慶安元年に新田開発をして、東善から、三、四軒が出たのが初まりといわれていた。
しかし、この宝筐印塔が、天正三年三月十七日の文字を刻んでいることから、天正三年以前にも、この地にある程度の人々が居を構えていたのではないかといわれるようになった。
この塔は、ぽっくり観音北の墓地にあるが駒形の古さをたぐる大切な証である。

としよりのお参（まい）り続くぽっくり観音

奈良県の阿日寺に生まれた恵心僧都は、大変親孝行で、母親の臨終の際に浄衣を着せ、長寿は観音さまの御守護と感謝し、母親と声を合わせて念仏を唱えた。すると、母親はほほ笑みながら安楽往生を遂げたという。
これにあやかり、昭和四十八年、駒形町の韮川のほとりに駒形長寿観音堂が建立され、ぽっくり観音として観しまれている。

なく場所（ばしょ）えらぶギスのむれ

昔、下増田町は、古利根川の本流で、川原にはたくさんのキリギリスがすんでいた。
いたずらキリギリスが、ある時、八幡さまをかじったことか

ら、八幡さまが怒って、下増田地内にキリギリスのすむことを許さず、キリギリスは泣きながら川の向こうの荒砥地区へ移っていったということである。

（ギスとは、キリギリスのこと）

㊀もつを
運んだ
広瀬川

小屋原には、「河岸」という地名が残っている。

又、明治九年に出された郡村誌にも「人々が河岸の復活を願っている」との文書がみられる。

当時は、引き舟で、主に日用品をを運んだ。

今の落合から上流へと舟を引いて行き、川巾が広くなると、櫓をこいで舟を進めたという。

㊁きんでた
義太夫語り
竹本大国太夫

竹本大国太夫の功績を偲んで建てられた記念碑が駒形町に現存している。

その碑文によると、大国太夫は、嘉永三年二月、木暮貞次郎の長男として生まれ、名を理作と言った。慶応元年、十六歳の頃、胃病を治すため医師内田忠順の勧めにより義太夫を始める。三年後、大坂竹本大国太夫門人となり、演芸界に入る明治十三年、二代目大国太夫として師の芸道を受け継いだ。

㊂ん輪とうで
お百度
参り

もともとは輪廻塔。

石燈籠の中に石車がついていて、一回お参りするごとにそれを回した。

下増田の八幡さまの鳥居の前に一基だけ残っている。

お百度参りのなごりが残っているのは、この辺では珍しい。

お百度参りは、願い事がかなうようにと、鳥居から神前を百回往復したもの。

㊃うぎょうの
未来を語る
研修センター

農業構造改善関連事業の一環として、下増田町農業生産組織協議会が主体となり、昭和五十二年に着工、五十三年に完成した施設である。

施設は、大広間、ステージ、マイク設備、浴室などがあり、多目的研修施設となっている。

農業後継者や各種生産部会の研修を目的として作られたが、老人会・PTA・婦人会等にも利用されている。

㊄はな岡青洲に
医学を学んだ
内田忠順

内田忠順は、天明五年、駒形の農家に生まれた。

生まれつき優れた才能を持っており、幼い時から学問に親しんだ。

十七歳の時、名医華岡清州に学ぼうと紀州へ向かった。この時、学資を給してくれたのは原沢文伸で、忠順は先ず野田の原沢家で学び、数年後故郷に帰り開業した。

医業は大いに栄え、五十六歳で世を去った。

ひやく二十年
伝統誇る
駒形小

駒形小学校は、明治六年、駒形新田に豊受小学校として設置された。生徒数は四十五名であった。

明治二十年には駒形尋常小学校と改称、昭和八年には増田小学校を合併した。昭和三十五年には境界変更により、前橋市立駒形小学校となった。

その後、プールや体育館も建設され、児童数も八百四十名と増え現在に至っている。

まもなく、開校百二十周年をむかえる。

ふたりで
仲良く手つなぐ
道祖神

一般に、道祖神とは路傍に建てられる石造物のことをいう。これらは、「道祖神」とだけ刻んだもの、一体のみのもの、男女二体の双体道祖神とがある。

道祖神は、旅人の安全や悪霊、悪疫防止のため、村境に建てられた。

駒形神社裏の双体道祖神も、路傍で人々の往来を見守り、その後今の場所に移されたものである。

へいきでいたずら
大松屋敷の
親子狐

下増田字中屋敷の城跡に、大松屋敷といわれる名家があり、その屋敷の堀の穴に人を化かす狐がいた。

ある時、その狐に
「りこうにしてやるからこの知恵袋に入れ」
と狐の一家を袋に入れ
「淵へ捨てる」とおどかした。

狐は降参して、「これからは人は化かさない」と血判の証文を書いた。

この証文は近世まで残っていたという。

ほうさくの
願いをこめた
赤鳥居

京都の伏見稲荷を大正三年に勧請した稲荷大社。

この辺で養蚕が盛んな頃や八十八夜の頃になると、繭がたくさんとれるように祈る人や五穀豊穣を祈る人でにぎわった。

願いごとがかなうと赤い鳥居をあげた。

駒形神社境内に駒形神社と並んで奉られてえる。

まちの安全
守り続ける
消防小屋

駒形町一一〇二番地にある消防第十三分団は、昭和四十五年頃に現在地に移動した。

以前は、四分団あったが、南分署の設置に伴い、ここ一カ所になった。倉庫には、ポンプ車が一台ある。

火災が発生すると、町内の消防団員が出動し、消防署と協力して消火につとめる。

消防団員は、定期的に消防訓練を行っている。また、防火点

検にも努め、地元を守っている。

ⓜみんなの
心をつなぐ
駒形会議所

近代的市民活動の場として、明るく住みよい町づくりに役立てることを目的に建てられた施設であり、運営は駒形町自治会が行っている。

自治会やボランティアなどの会議、生涯教育、読み聞かせや図書の貸し出し、予防接種など、多くの活動に利用されている。

部屋数も多く、同時にいくつもの会が開催できるようになっている。

ⓜかしの
おもかげ残す
藤岡街道

清内大橋から旧道で上今に向かう道筋で藤岡につづく道である。ここは、玉村を通って新町、倉賀野に向かう人々の往来で賑った。

六斎市が開かれ、商人が泊まったりした為遊女のいた名残りの屋号のついた家（宝来屋、吉原屋、住吉屋）もある。六斎市は、時期の日用品（例えば桑や生糸）などの市が立ち、二月二十七日にはひな市もたって賑わった。

大正十三年にこの道は舗装された。

ⓜいじに
始まる
郵便局

前橋市に二つある集配普通郵便局のうちの一つが、山王町にある前橋東郵便局である。

郵便局内には、窓口事務室、作業室がある。作業室には郵便番号自動読み取り区分機や区分棚、配達する郵便を町名ごとに分ける棚押印機などが備えられてえる。

集配係の人は、十数カ所に分けてある地区内を、一年中休みなく廻っている。

ⓜうこりた
人にだまされ
泣いた子狐

年寄りが子供を寝かせつけるときにしたおとぎ話で、「竹橋の子狐」といった。

現在松竹橋より三十メートル南に堰と橋があり、これを竹橋といった。

ある時、子供が二、三人で栗拾いに行くと子狐が頭の上に葉っぱをのせて化ける練習をしていた。子供は馬ぐそを「おいしい」といって食べたふりをすると、子狐も食べた。子狐は、「やられた」といって泣いて帰った。

ⓜな場の
せきで
うるおう増田

下増田をうるおす堰の一つであるが、この他に
①五郎衛門堰
②養庵堰
③今宮堰
があげられる。

やな場の堰は、下増田町の須永南面と阿久津の南面のたんぼ

をうるおしている堰である。
耕地整理が行われたため今では、五郎衛門堰の役割が大きくなっている。

ゆう気の
神様
摩利子天（まりしてん）

摩利子天尊は、明治十九年、疫病に悩まされた部落の有志が、佐波郡芝根村川井（現玉村町）の本社より分祀したものと伝えられている。
十一月二十八日が例祭日と定められ、毎年この日に「茅の御暇屋」を作り、その神殿前において近隣の者たちが、相撲を取り体を鍛えた。この行事は昭和三十九年まで続いていた。今でも、近くの住人が決められた日に出て清掃し、土俵を奉納してえる。

よみ書き
そろばん
増田学校

佐野の摂津の守のお蔵屋敷だったものを、明治の初めに改造して増田学校にした。
昭和八年、駒形小に合併したが、当時の児童数は、百七十～百八十人、先生は六名程であったという。児童数の増加に伴い校舎増築ができなかったともいわれている。当時使用していた校舎と便所を解体移築した。　下増田町須永の、当時学校だったところを今でも「学校」と呼んでいる。

らんかんを
支えた松と
竹の橋

六、七十年前は竹を五、六本ゆわえて渡しただけの粗末極まる物だった。従って東岸と西岸を繋ぐに過ぎなかったが、人も馬も通したい要求が盛んになり真楽寺の松を二つに割り渡した。それでも不足で増田村のある家から買い受けた杉材で、立派な木造の橋が作られ、昭和五十五年三月まで使われた。
以後、鉄筋コンクリート造りとなり、現在に至っている。

りゅうぐうに
伝わる話
ぜんわん貸し

広瀬川と荒砥川の合流する所を増田ケ淵と呼び、そこにはいつも大きな渦が巻いていた。
川の向こう側に竜宮という所があり比丘尼が住んでいた。村の人たちが、膳や椀を貸して下さいと頼むと、比丘尼は紙に書いて流した。すると紙は渦に飲み込まれ、間もなく川下に揃って出てきた。
ある時、借りた人がお椀を一こ返さなかったので、それ以来、その頼みをきかなくなったといわれている。

るんるん
楽しい
幼稚園

昭和三十年四月、根岸輝夫氏が自宅を解放して開園し、若駒幼雅園としてスタートした。
昭和三十八年には駒形幼雅園と改称され、四十九年には現在の地に新園舎が建てられた。
更に五十二年名称を学校法人駒形学園駒形幼雅園とし現在に

至っている。教育の基本目標を「体まるまる心まるまる」とし、地域と一体になって幼児教育をすすめている。開園以来二五〇〇名以上の園児を送り出している。

㋺んげ院は
厄除(やくよ)け
大師(だいし)

一五三三年に真言宗派の玉泉上人により、貧しい領民の苦しみを救うために聖観音菩薩を奉安して開かれた寺である。

一六九〇年に舜賀上人が、現在の本堂を建立し、今宮山蓮花院増田寺と称した。

そして、明治二十一年に川崎大師御本尊厄除弘法大師の分身を安置し、現在でも正月二日の厄除大祭ではにぎわいを見せてえる。

㋩く文棒
あめを買って
ひと休み

現在もバスの停留所名として残る「六文棒」のいわれにはいくつかある。

その一つは、前橋から本庄へ抜ける道は大変さびしい道で、その道中の宿が駒形のはずれにあり、六文で飴を売っていたという説である。

古河線のバス停「六文棒」の近くに、今も石碑が残り、道しるべとしての文字が刻まれているが、これは六文の飴を形どったものといわれている。

㋥っしょい
わっしょい

夏祭り

祭の起源は、文化九年（一八一二年）の祇園祭が最初で、酒井の殿様から雌雄一対の獅子頭を貰い受け、祭の御神体とし、疫病退散の夏祭りとしたものである。

以来、幾多の変遷と共に、現在は春・夏・秋の三季に亘って祭りを行っているが、特に夏祭りは各町内から「みこし」や山車が出て、勇ましいものである。

㋭(にん)情に
支えられた
新潟(にいがた)の女(ひと)

現在の根岸酒店あたりはかなり賑やかだった。

宿場には、新潟からの女の人と働きに来ていた。中には病気でなくなる人もいたが、無縁仏では気の毒だと石塔を建てて大事に葬った。

ぽっくり観音に隣接するお堂のわきに並べられた石塔の中に「新潟の女」とだけ書かれた石碑がある。

雇い主の人情と働き手の心が通った話として残しておきたい。

前橋地方の古い手鞠歌

井田　格朗

私が幼児の頃、母（明治二十三年生）が「前橋の古い手鞠歌だよ」と言って歌ってくれた手鞠歌を記録して置きます。

歌は、三種類ありますが、手鞠歌らしく「まずまず一貫貸しもーーしーた。」まで完結して居るのは一種類だけで、残りの二種類は途中までです。（これは、母も此所までしか覚えて居なくて、それも、教えてくれた父親〈私の母方の祖父……母はこれを「父親から」とか「御祖

父さんから」とか言わず「男親から教わった」と言ったので、奇異に感じたのを覚えて居ります。女の子の遊びの唄を母からではなく、父から教わったのが、母としても強く記憶にあって、特に「おとこおや」と言ったものと思われます。〉も覚えて居なかったのではないかと思われます。各地の手鞠歌に比べて、一種は、特に文芸的に優れて居ると思われますが、惜しいかな、これは未完決です。細部の解説は、個々の記述の所で記します。一々の唄に、題名が付いて居ませんので、識別のため、内容の内で特に注目される「語句」から仮に題名を付けて置きます。

1 「ギバが娘」

①テンジクの、ギバが娘　天竺の、耆婆が娘
　天下一のハタオリ　天下一の機織女
②ヒトツでは、オチを呑みソロ　一歳では、お乳を呑み候
　フタで　オチを離れて　二歳で　お乳を離れて
③ミッツでは、ママをタキソロ　三歳では、飯を炊き候
　ヨツでオイドの水を汲む　四歳で　御井戸の水を汲む
④イツツでは、クダをマキソロ　五歳では、管を巻き候
　ムツでコロバタオリソロ　六歳で　コロ機　織り候
⑤ナナツでは　アヤをカケソロ　七歳では、綾を懸け候
　ヤツでキンランタンデ　八歳で　金欄　畳んで
⑥ココノツで　オヤニウラレテ　九歳で　親に売られて
　トオデコオヤエノボッテ　拾歳で　高野（山）へ上って
⑦オータムギ　ナヌカウテバ　大田麦　七日打てば
　オテにマメがココノツ　お手に　まめ（肉刺）が九つ
⑧ココノツの、マメをミレバ　九つの　まめを見れば
　オヤガコイシクアジキナク　親が恋しく　味気なく
⑨アジキナサニ、ソラをミレバ　味気無さに　空（虚空）を見れば
　ホホニナミダヒトスジ　頬に涙　一筋
⑩――――

2 「オカノ」

①タンボ通るは　ホイヤホー　田圃　通るは　ホイヤホー
　オカノじゃ　ないか　「おかの」じゃ　ないか
②オカノカタビラ　ホイヤホー　「おかの」帷子　ホイヤホー
　カノコノ　オビを　鹿の子の　帯を
③ミエニ回して　ホイヤホー　三重に回して　ホイヤホー
　うしろで　しめて　後ろで　締めて
④しめたごとくに　ホイヤホー　締めた如くに　ホイヤホー
　イロハと　かいて　「いろな」と　書いて
⑤イロハトモダチャー　ホイヤホー　「いろは」友達は　ホイヤホー
　イセイセマイリ　伊勢、伊勢参り
⑥イセノチョウジャノ　ホイヤホー　伊勢の長者の　ホイヤホー
　マガリキノシタデ　曲がり木の下で
⑦ナナツコジョロガ　ホイヤホー　七つ小女郎が　ホイヤホー
　ヤツゴヲハランデ　八つ子を孕んで
⑧ウムニャウマレズ　ホイヤホー　生むにゃ生れず　ホイヤホー
　オロスニャオリヌ　堕ろすにゃ堕りぬ
⑨――――

3 「イトビンヤッコのあねさん」

①マーアエバシノー　マエバシノー　前橋の　前橋の

イトビンヤアッコノアネサンガー
ヤッツデベニカネツケサセテー
トーデクマノエノーボッテー
クマノノミーチデヒガクレテー
コンヤワドーコエトマロカナー
オテラエトマーッテキズカイデー
サカヤエトマーッテアサミレバー
ジュウシチハーチノゲンザイガー
コガネノサカズキブンダシテー
イッパイオアガレオキャクーサマ
ニーハイオアガレオキャクーサマ
サンバイメーニワサカナガナイトテ
サカダルケッコロガシテヒーヤーフ
ミーヤーヨー　イーツームー
ナーナーヤー　コーノートー
トシガミーサマノオカザリワー
ダイダイカチグリホンダワラ
ウラジノキノネニヤブコージ
イチモーンメ　イッカーンサ
マズマズイッカンカシモーーシータ

糸鬢奴の姐さんが
八歳で紅鉄　付けさせて
十歳で熊野へ上って
熊野の道で日が暮れて
今夜は何処へ泊まろかな
お寺へ泊まって気遣いで
酒屋へ泊まって朝見れば
十七八の（ゲンザイ）が
黄金の盃　ブン　出して
一杯御上がれ　御客様
二杯御上がれ　御客様
三杯目には　肴が無いとて
酒樽蹴転がして　一や二
三や四　五つ六
七・八　九の十
歳神様の御飾りは
橙・勝栗・（ホンダワラ）
裏白の木の根に藪柑子
一匁　一貫　さ
先ず先ず一貫貸し申した

飯玉神社太々神楽（後閑）

祐天さま（鶴光路）

飯玉神社太々神楽（後閑）

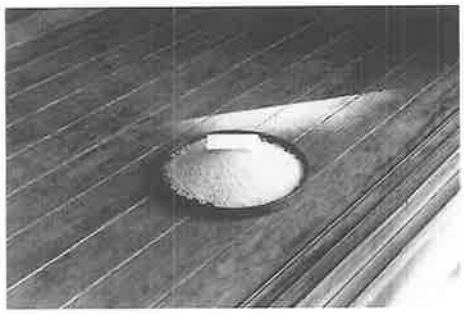
祐天さま（鶴光路）

神楽の宿の入り口（後閑）

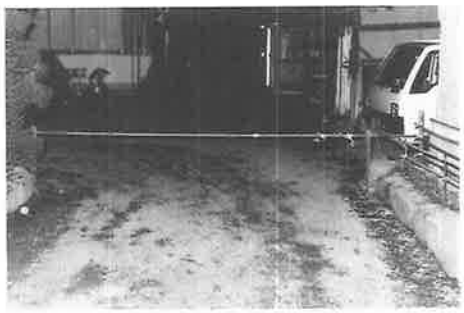
飯玉神社太々神楽（後閑）

チョッパシラの神楽（西善上両家）

後閑の獅子（後閑）



チョッパシラの神楽（西善上両家）



忌みのため獅子が入れないしきりの棒（後閑）

「常盤塔読上」①（亀里竜門）

チョッパシラの神楽（西善上両家）

「常盤塔読上」②（亀里竜門）

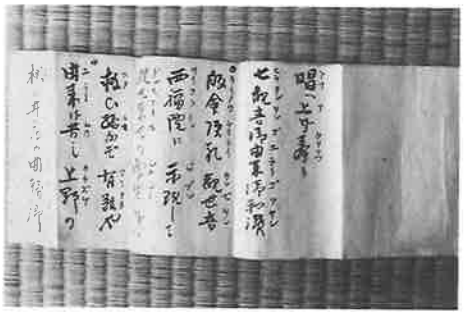
チョッパシラの神楽（西善上両家）

「常盤塔読上」⑦（亀里竜門）

「常盤塔読上」③（亀里竜門）

「七観音由来和讃」①（亀里竜門）

「常盤塔読上」④（亀里竜門）

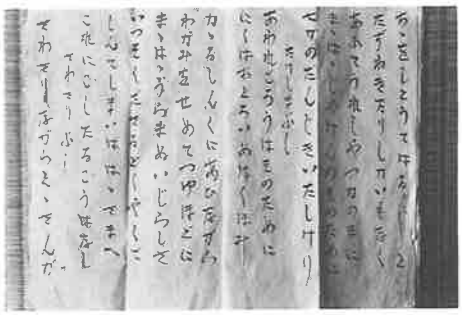


「七観音由来和讃」②（亀里竜門）

「常盤塔読上」⑤（亀里竜門）

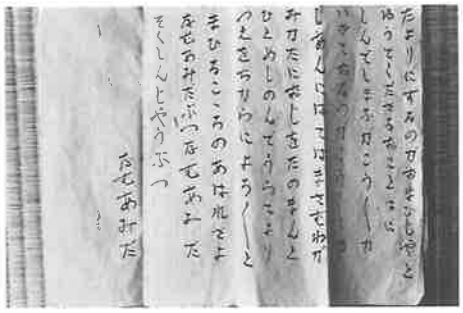
「七観音由来和讃」③（亀里竜門）

「常盤塔読上」⑥（亀里竜門）



「刀工正宗和讃」②（亀里竜門）

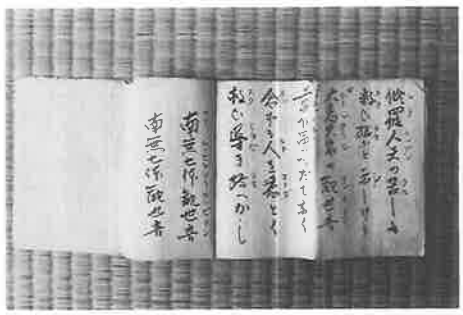
「七観音由来和讃」④（亀里竜門）



「刀工正宗和讃」③（亀里竜門）

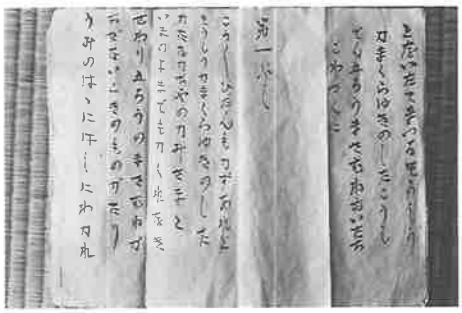
「七観音由来和讃」⑤（亀里竜門）

「千手千眼観世音和讃」①（亀里竜門）



「七観音由来和讃」⑥（亀里竜門）

「千手千眼観世音和讃」②（亀里竜門）

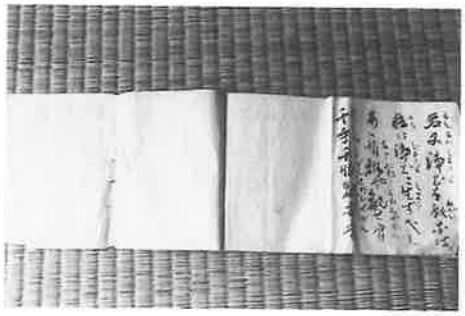


「刀工正宗和讃」①（亀里竜門）

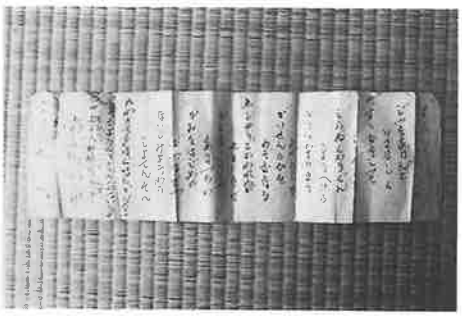
「薬師和讃」②（亀里竜門）

「千手千眼観世音和讃」③（亀里竜門）

「薬師和讃」③（亀里竜門）



「千手千眼観世音和讃」④（亀里竜門）



「戦勝祈願和讃」（亀里竜門）

「乃木大将和讃」（亀里竜門）

「薬師和讃」①（亀里竜門）

「火防宣傳和讃」（亀里竜門）

「高野山大師教会講員之証」（亀里竜門）

「高野山大師教会講員之証」（亀里竜門）

「安来節」（横手）

第十章　人の一生

一、産育儀礼

(一)　子授け

子授け祈願の方法　北向きの蔵の米をもらうと、子がない人に子ができる。七年たってできた例がある。（北向きの蔵の数は少なかった）（上朝倉）

産泰様へ行った。（公田）

特になし。（宮地・力丸・新堀）

女体様（にょたい）（石宮のお産の神様）におまいりした。お参りするとお産が軽いとか失敗がないと言った。ここには、お七夜・オボアキにもオサゴと赤飯を持って行った。（阿内宿）

よそから子供をかりると「ヤキモチッ子」ができると言う。二〜三晩とまらせた。

しつこい物や、肉、野菜を食べた。野菜は女の子で、肉や卵は男の子で、男の子がほしいとそういうものを食べた。（天川大島住宅）

特になし。（上長磯）

産泰さまにお参りした。

産泰様の村から出た腰元が「産泰さまにお参りしたら子ができた」と言ったので、子がほしかった前橋の殿さまが西向きに作った。

途中で左遷されたので造作が途中になっている。

子ができると底のないヒシャクをあげる。うまれたのちお礼まいりにゆく。（下大島）

三世代そろっている家から米を借りて食べるとできる。

養子をもらうと「イジゴ」ができる。（下増田）

産泰さまにお参りすると子がさずかる。

子供をあずかると「ヤキモチッコ」が生まれる。養子をもらうと子ができる。北口の蔵の米をもらうと子ができるという。（笂井）

おしゅうとめさんが前橋市下大屋の産泰様へ御札とひしゃくをもらいに行ってくれた。生まれてからひしゃくの底を抜いて御礼まいりに行った。

しゅうとめさんが行っていいと言った時しか行けなかった。（後閑）

地元の「子待塔」へオサゴをあげて子授け祈願をした。

地元の子育て地蔵へ子供が生まれると丈夫になるよう祈願した。

まじないとして便所をきれいにすると丈夫な子供が生まれるといった。（亀里竜門）

子育て地蔵　八月二十三〜二十四日にかけて子育て地蔵のまつりがあり、戦前から多くの人が参詣にきたとのことであった。（亀里竜門）

(二)　妊娠から出産

妊娠を最初に話をする人　だんな。（上朝倉・宮地・力丸・新堀）

オシュートさん。（阿内宿）
ダンナさん。姑には言えない。（天川大島住宅）
実家の親。ダンナ。（上長磯）
姑さんがすぐにみつけた。その後ダンナにも話をした。（下大島）
姑さんに。（下増田・笊井）
夫に話をし、夫からしゅうとめさんに言ってもらった。（後閑）
夫に話した。おしゅうとめさんにはなかなか言えなかった。（亀里竜門）

妊娠の呼び方　ハランダ、ハラミと言う。（上朝倉）
ハランダ、ミモチ。（宮地）
ミモチ。（公田）
ハランダと言う。（力丸・下増田）
ミオモになったと言う。（新堀）
ハラミオンナ。（阿内宿・笊井・後閑）
ハランダとかハラミオンナと言う。（住宅・下大島）
ハランダと言う。わかるまでかくしておいた。（上長磯）
お腹（なか）が大きくなったみたいだと言った。（後閑）
ハラミオンナ等と年寄りが言っていたが、当時の嫁としては決していい言葉使いだとは思わなかった。（亀里竜門）

安産祈願　産泰様に行った。（上朝倉）
産泰様や二十二夜様。（宮地）
産泰様。（公田）
産泰様。蛇の皮のキズのないものを胴巻にいれておく。（力丸）
産泰様。底ぬけひしゃくをあげた。（新堀）
産泰様。願をかけた。生まれるとお礼まいりに行った。（阿内宿）
産泰様。軽く生まれるように、生まれる前に行き、生まれた後でシャクをあげた。生まれる前に生米とローソクをおき、生まれる時に三粒生米をのませた。軽く生まれると言う。（天川大島住宅）
産泰さま。生まれてからヒシャクを買ってあげた。祭りでなくても子供をおぶって二～三人で歩いていった。産泰さまにおまいりしておき、ローソクをあげておくとそのローソクのもえきらないうちに生まれた。
初卵を食べると軽く生まれる。
北向きの蔵の米をもらってくると子が生まれると言う。（上長磯）
産泰さま　塩釜さまのお札をもらった。掛軸をさげ、塩を山かけにしておいた。
葬式の六地蔵のローソクをもらい、痛くなったら立てると消えるまでに生まれると言う。（下大島）
蓮華院にお参りする。
産泰さまに行って願をかける。行かない人はない。二之宮の祭りからそのまま産泰へ行った。ヒシャクの底をぬくオガンショウをした。生まれたのちに抜いたヒシャクをあげた。産泰様に行く川の石橋の下を通ると安産になると言う。
庭場（ニワバ）の穴地蔵のローソク（コーガンジ）をもらってきてつけておくと早く生まれた。
今は寺の灯明のローソクをもらいにくる人がある。（下増田）
二十二夜様の信仰をすると軽くできる。灯明をあげ、一寸ほどのこしておき、産気づくと、ともし、おわるまでに生まれてくれと願う。
六地蔵のローソクの話はある。
生まれる前はもつようにヒシャクの底のあるもの、生まれたのちは底ぬけヒシャクをあげる。
ニワトリの初卵を食べると軽く生まれると言う。（笊井）

子供がはじまると、無事に生まれるようにと、うちにいて産泰様にお願生かける人もあるし、産泰様におまいりに行く人もあった。

子供ができると、お礼まいりに行った。門前で柄杓を買って、底を抜いてあげてきた。おまいりは、四月ならいつでもいいとした。とくに、四月十八日のおまつりのときは、子供をおぶって、おまいりに行った。

腹帯は、五月目のイヌの日にさらしをまいた。まかないと動けなかった。（東上野）

妊娠の兆候

上の子がわけもなくぐずると、下に子供がはじまったからだといった。また、上の子が、股のぞきのようなことをすると、やはり、下に子供がはじまったからだといった。（笂井）

妊娠中の禁忌やことわざ　ほうきをまたぐとお産が重い。

火事を見ると赤いアザができる。

葬列に入ってはいけない。（上朝倉）

葬式の時は鏡をだいている。そうでないとさわったところにアザができる。火事を見た時に体をなぜると、なぜた所がアザになる。（宮地）

川をとんだり、とび降りてはいけない。

葬式を見ないようにする。アザのある子ができる。（力丸）

火事では赤いアザの子ができ、葬式では黒いアザ、赤いアザの子ができる。防ぐためにはふところに鏡をいれておく。（新堀）

麦まきではコヤシを腹の上に乗せない、重いものを持たない。高いところに手をあげない。（チズナが切れる）

火事を見ると赤い子ができ、葬式では黒い子ができるので、ふところに鏡をいれておく。（阿内宿）

障子の目の見えるうちは生まれないと言う。重いものは持たない。

サトイモ、トロイモを食べるとカイカイになる。

馬の道具をまたぐと十三カ月にお産がのびる。（馬が十三カ月なので）

餅つきの時に臼の中から餅をつかんで食べると口の大きい子が生まれる。

ウサギの肉を食べると三ツ口の子が生まれる。（住宅）

「片足カンオケ」とか「命さだめ」と言った。「障子の桟がわかるうちはだめ」と言った。

医者が来ることはないし、仕事も食事も同じで、できるまでした。（上長磯）

重い荷物を持ってはいけない。

火事に会うと鏡をいれておく。赤いアザができないように。

動物の肉を食べるといけないと言う。（下大島）

制限はない。いそがしくて、動けば軽くできると言って働かされた。

葬式の時は鏡を入れておくと青いアザができない。火事は赤いアザという。

馬具をまたいではいけないと言う。馬が一年なので月が長くなるという。

片足カンオケ、障子の骨がみえるうちはダメと言う。（下増田）

馬の道具をまたいではいけない。

火事をみるとチン毛のところに赤いアザができる。火事を見ると生まれてくる子供に赤いアザができる。仏様を見せると黒いアザができるので、妊婦に葬列は見せるなと言う。

乳が出なくなった後で、駒形六丁目の鬼子母神でオサゴをもらったら乳が出た。

障子の目がみえるうちは生まれないと言う。（笂井）

火事を見るなと言った。腹に鏡を入れて火事よけとした。（後閑）
子供は満二歳になるまで葬式を見せるなと言った。
火事をみると青アザの子供が生まれるといった。（亀里竜門）

胎児の性別の見分け方　お腹がとがると男、まるいと女。やつれがひどいと男、やつれがないと女。（上朝倉）
男はやせる。女はやせない。（宮地）
母親の顔がきついと男、そうでないと女。お腹の左が痛いと女、右だと男。（力丸）
左っ腹（左に胴が出る）は男。顔がきつく、やせると男、おだやかだと女。（新堀）
右っぱらは男。（特に右で動く）左っぱらは女。お腹がつき出ると男。丸いと女。（阿内宿）
お腹がつのだと男、丸いと女。きつくなってシミができると男。
（天川大島住宅）
顔がきびしく、お腹がつのになると男。顔がやさしくて、お腹が丸いのが女。（上長磯）
お腹がとんがると男、丸いと女。お腹の左にいると男、右にいると女と言う。（下大島）
お腹がツノは男。（下増田）
顔がきびしくなると男。やさしいと女。お腹がつっぱると男、丸いと女。男はいたいほどけとばした。（笂井）
顔がやせてくると男の子。腹がつきでると男の子。顔がやさしくなると女の子。（後閑）
男女の産み分け
身持ちになって、男が欲しい、女が欲しいというとき、（うちの者が）すりんぼうとしゃもじを持って、
「男がいいか、女がいいか、どっちがいい」
って、それを上の子にひかせるんだって、その子が、すりんぼうを選べば男の子が、しゃもじを選べば、女の子ができるという。これは、臼井（二之宮町）で聞いた話。（笂井）

腹帯　五カ月目の戌の日に腹帯をしめる。店で買ったサラシをお姑さまがまいてくれる。または、大神宮様にあげておろし、自分でまいた。（上朝倉）
三カ月目の戌の日。サラシの六尺くらいのものを買ってきてまいた。（犬が軽く生まれるので）ダンナのフンドシをまくと軽くなるという。二十二夜様にお願所をかけると、軽く生まれる。（宮地）
三カ月目の戌の日にサラシ一反でまいた。また、戌の日はコタツをあげる日と決まっている。（力丸）
五カ月目の戌の日に一反近い長さのサラシをまいた。（新堀）
五カ月目の戌の日に一丈くらいのサラシを用意してまいた。昔は印はなかった。犬のように軽くできるようにと言う。（阿内宿）
五ケ月めのイヌの日に、矢島の観音様へお参りに行って、イワタオビを借りてきた。
「働くほど丈夫な子が生まれる」といって生まれる直前まで働いた。
（亀里寺家）
五カ月の戌の日、七五三の七尺五寸三分に切り、寿と赤い字をサンバさんが書いた。使ったサラシは買った。（天川大島住宅）
五カ月の戌の日。内緒でしめた。サラシを買って自分でしめた。
（上長磯）
五カ月の戌の日。オサンバさんが巻いてくれた。（下大島）
五カ月目の戌の日に、オサンバさんがしめてくれたり、自分でしめた。（下増田）

五カ月の戌の日にしめた。犬はお産が軽いので、それをかたどったもの。ダンナの六尺フンドシをしめると軽くできるので、それを巻いた。（笂井）

五カ月目の戌の日にまいた。さらしの布地で、さんばさんが安産祈願と書いてくれ、おさんばさんがまいてくれた。さらしの大きさは、一丈四尺位とのこと。従って一反から二つとれる計算になる。さんばさんが「寿」の字を書き、まいてくれた。腹帯をまくと内祝いと称して赤飯をたいてくれた。（後閑）

おさんばさんが赤い字で「寿」の字をかいてからまいてくれた。二人目、三人目の時もおさんばさんが腹帯をまいてくれることに変りはなかった。さらしは一反の半分で二本作り、一枚は替えにする。（亀里竜門）

臨月の妊婦への配慮　生まれる前は、その日まで仕事をした。差はない。働いていると軽く生まれると言った。昼マンガ振りをしていてその夜生まれた例や、田植えをしていてその夜生まれた例がある。（上朝倉）

仕事は同じ。（宮地）

当日まで仕事をした。したほうが安産である。（力丸）

仕事は同じ。楽をするとよいじゃない。仕事をしているほうが安産と言う。田植えをしていて生まれた例がある。（新堀）

当日まで仕事をしていた。仕事をしているとお産が軽いといった。動けば軽くできると言った。（阿内宿）

動いたほうが良いと言った。軽く生まれると言った。生まれるまで仕事をした。高いところに手をあげると乳綱（ちづな）が切れると言った。（天川大島住宅）

ふだんと同じ。（上長磯）

生まれるまで同じ。動くと軽く生まれると言った。お腹が大きくてもタイヒのザルをかかえたり、フリマンガを使ったりした。それで体調くずし、肥立ちの悪いことがあった。（下大島）

生まれるまで田んぼにいた。苗とりをしていて、帰りにアガリハナをまたいだところで生まれたことがあった。（下増田）

仕事はふつう。動くほうが良いと言った。働かないとお産が重いと言う。高いところのものをとると、乳綱が切れると言う。（笂井）

生まれるまで働いていた。（後閑・亀里竜門）

生まれ月になった頃、麦のサクへ堆肥をまくのに小さなカゴを横腹におさえて大変にきつかった。道路で見知った人にあっても、腹をかくす様に工夫していた。腹帯をしっかりまいておかないと子供が育ちすぎるといわれた。（後閑）

桑取りの時期で背にしょえるだけの桑をのせ、自転車で帰ってきて、その晩子供が生まれた。（亀里竜門）

出産前後の妊婦の食事　食事は他の人に同じであった。すっぱいものが食べたくて生梅を食べる人もあった。（上朝倉）

生んだ後は乳がはるので、甘いもの・すっぱいものはだめだと言った。ニシンは良い。おかゆをカツオブシミソで食べた。男十九日、女二十二日のオボヤキまで。（宮地）

生まれる前は同じ。生まれた後は梅干しにタイミソのオカユが一週間くらい。からいものはいけない。（力丸）

生まれた後は、カツブシミソにオカユが一週間で、のちサツマイモになり、その後普通になった。甘いものは乳があがるのでだめでビスケットもだめであった。からいものもだめであった。（新堀）

生まれる前は同じ。

生まれた後はお七夜までおかゆになった。オカユにカツブシミソと

カンピョウ。梅干しは乳が出なくなる、卵は強すぎると言った。のちにごはん（麦メシ）になった。いくら食べてもおなかがいっぱいにならない。たくさん食べると産じょく熱になると言った。（阿内宿）

からいものはひかえ目にする。鼻の赤い子ができると言う。卵はむくむのでだめ。トロイモ、ヤマイモは子が白くなると言った。

生まれたあとはカツブシミソに鰯（イワシ）の缶詰を食べた。コイコクや餅を食べた。乳が出ると言う。サンマは血をさわがすのでいけないと言う。

お七夜までで、だんだん普通になった。お七夜に井戸、台所をきよめて入った。（住宅）

コイコク、鰯は乳が出ると言った。カツブシミソにカンピョウが一週間続いた（上等なほう）。カンピョウのオツケが出た。

からいもの、油ものはだめと言った。ヨモギ（モチ草）は乳が出なくなると言った。（上長磯）

生まれるまでは同じ、生まれると男の子だと鯉ミソで扱いが良く、女の子だとフノリ、鰯の缶詰程度であった。（下大島）

トウモロコシ、トウナスはオデキができると言って、子供ができると食べなかった。からいもの、豆は食べなかった。イカを食べると流産する、堀をとびこえると流産すると言ったが流産しなかった。

お産する時は甘いものがいいと言う。ウドンを食べると乳が出る、甘茶は肥立ちがいいと言う。卵食べると乳が張って出すぎるのでやめたことがある。おカユは一週間食べた。（下増田）

鯉を食べると乳が良く出ると言った。からいもの、強いものは避けた。

生まれるとオミソにカツブシになる。オカユにカツブシミソと焼き塩でお七夜まですごした。その後御飯になった。カツオブシは実家より届いた。

餅、ウドン、鰯の缶詰を食べると乳の出が良かった。米は上等。見ていると食べている間に出てくるほどであった。今より栄養がなくても良く乳が出た。あまった乳はフクベにとり、南天の木の下にすてろと言った。

油ものを食べると目が悪くなると言った。（笂井）

出産前　出産前は特別なものは食わなかった。（後閑）

普段と変わりはなかった。（亀里竜門）

出産後　かつおぶしと梅ぼし。ふをみそ汁にして食べた。ふは体にいいとおしゅうとめさんが言った。秋にとれたものは毒にならず体にいい。出産して一週間はおかゆ、一週すぎていわしのかんづめを食べさせてもらった。（後閑）

かつぶしみそとチカラゴメといって、お七夜までおかゆ。それもしゅうとめに遠慮して里からもってきたものを食べた。

煮炊きは家族のものと同じであった。（後閑・亀里竜門）

出産時に用意するもの　さんばさんで生んだ。たたみをへがし、ワラをしいた。（あとですてやすいように）

オシメ・はだ着・うぶ着（洗ってやわらかいもの）を前から準備した。新品はない。生まれたばかりは頭に真綿のぼうしをかぶせた。

（上朝倉）

うぶ着と布団皮、ボロ、綿を用意した。（宮地）

オシメ。（力丸）

オムツと着るもの。着るものは出産見舞いの一丈のキレでだんだんに作った。（新堀）

油紙によく洗ったボロ、おむつ、はだ着を用意した。（阿内宿）

布団、渋紙、薄い布団皮にワラを入れたもの（すぐすてられるもの）、タライ、麻のひも（髪をしばる、ヘソのおをしばる）、真綿の帽子（子

供にかぶせる）

生まれるとすぐコップ一杯水をくれる。

生卵をのむとすぐ生まれる。（住宅）

布団に厚い布か蚕座紙を置く。下にカッパ紙をしく。

食事と子供を育てるのは余分仕事で、仕事が中心であった。洗濯は川でして土堤で干した。遊ばせてはくれず、十一～十二時まで裁縫をした。

鬼子母神に行くのがあそびであった。

農道を通るので夏はハダシであった。（上長磯）

畳に布団。（昔はタタミをあげて、ワラと蚕座紙にボロ）

タライとオシメ。（下大島）

夜の布団をたたんでおっかかった。上にボロをしいたワラの上に生んだ。シビブトンは休むところにあった。ワラの下にはムシロを敷いた。子はボロでそのままつつんだ。床に移るのが大ごとだった。生むとワラはすて、キレの布団は干して次の子に使った。

キレの布団は厚さ二cmくらいで、普通の針ではぬえないほど厚いものであった。ぬいにくいので、針をゴマの袋にさしてのめっこくしてぬった。（下増田）

ボロを用意した。ワラの上に腰巻（オコシ）を置いた。

つっぷして布団を四ツ折りにして生んだ。背をなぜてもらった。布団の下にシビ布団を使った。（笂井）

たらい・洗面器・ボロ布で作った薄いふとん（自分で作ったもの）・油紙を用意し、他のものはおさんばさんが用意してくれた。（後閑）

ジョクぶとん・油紙を用意した。（亀里竜門）

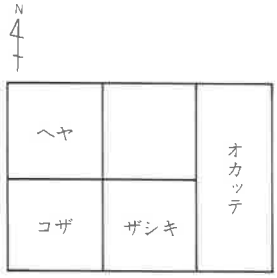
春キトウ……それぞれの家の無病息災を願う儀式で、毎年神主さんがそれぞれの家をまわる。米一升と五〇銭位が礼だったとのこと。

春祈禱の際使ったヘイソクをしばる麻をとっておいて子供のへその緒をしばると縁起がいいとされている。（房丸）

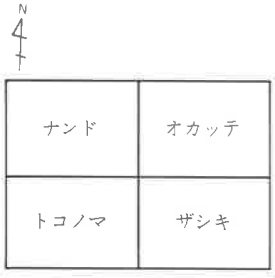
(三) 出　産

出産の場所　「ヘヤ」。ふだん自分のいる部屋。（上朝倉）

「ヘヤ」で生んだ。（宮地）　「ナンド」で生んだ。（公田）



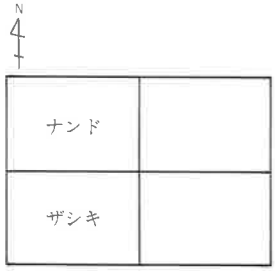
（宮地）



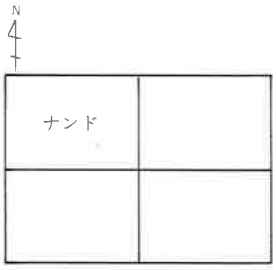
（公田）

「ナンド」で生んだ。オクリのヘヤと言う。（力丸・小島田）

オクリの部屋で生んだ。（新堀）



（力丸）



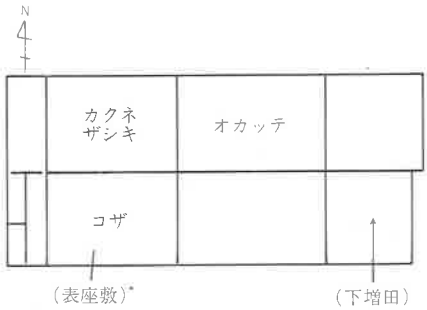
（新堀）

床の間付のオモテザシキ。前の代の人は裏の「ヘヤ」で生んだ。（阿内宿）

嫁ぎ先で産んだ。

納戸を板の間にして、ワラを敷いて産んだ。一人で産んだ人もいたし、素人で慣れた人が手伝ってくれた。産婆さんは、力丸と玉村にいた。

浅間さまの掛図をさげて、「こうがんじ」を2本あげ、もえきるまでに生まして下さいとお願いした。（亀里寺家）



ナンド（床の間の北）。いつも寝ているところ。（住宅）

奥の部屋（ナンド）。北西の部屋。（上長磯）

奥の部屋。（ナンド）。表の部屋の人もあり。（下大島）

カクネザシキ。（コザの裏）ナンドとも、カゲ座敷とも言う。

オクリかナンドの日の当らない部屋だった。（後閑）

コザの間（寄りつきの次の間）でタタミの上にふとんを敷いて産ませてもらった。（亀里竜門）

お産の方法　やぐらにおっかかって生む。うつぶせで生んだのもある。力をいれるためにお姑さんと手を引き合った例がある。（上朝倉）

枕をだいて、うつぶせで生んだ。六人目はあおむけであった。

床は、シビ（ワラ）をしいて、上に布団とボロをしいた。（宮地）

あおむけで生んだ。（力丸）

布団をたたんでおっかかった。明治の前半くらいか。（新堀）

おすわりをして、うしろからお腹をさする。布団をまるめて、つっぷして生んだ。昭和二十二～三年まで。（自分で湯をわかして生んだ）（阿内宿）

五日の節句の時の、しょうぶとよもぎをとっておいて、せんじて飲ませることがあった。『ハヤメの薬』といった。（亀里寺家）

コタツやぐらを使った例は聞いたことがある。サンバさんが来るまではやぐらにつかまっていて、来ると寝た。布団の下にヒモを通し、それをひっぱった。人の手につかまって生んだこともある。（住宅）

つっぷして生んだ。コタツやぐらにつかまったり、固いものにつかまって生んだ。布団を積んでつかまった。（上長磯）

昔はヤグラにつかまって生んだ。（下大島）

昔、夜の布団におっかぶさった。自然にさがるようになっている。できないと親が腰をかかえてもちあげてくれた。（下増田）

二人目は早く生まれるが初産は大変で8時間くらいかかった。朝しるしがあり、夕方生まれた。3時間は早い。（天川大島住宅）

寝産で、ふとん→油紙→ボロ布の順で敷く。（後閑・亀里竜門）

まじないとして障子の桟（さん）がみえるうちはまだ生まれないと言う。（亀里竜門）

お産に立ち合う人　サンバさんお姑さん。（上朝倉）

親。一人で生んだこともある。近所の年寄りがとりあげてくれた。（宮地）

サンバさん、とりあげバアさん。（力丸）

サンバさん。トリアゲバアさん。

綱をとり、引っぱって生んだ例、そばの人の手をとって生んだ例がある。

子供は五～六人が多いが、八人の例もあった。（新堀）

自分とおばあさん。おさんばさんや、近所のおばあさんでなれている人が立ち合った。（阿内宿）

サンバさんとシュートさんくらい。（天川大島住宅）
サンバさんくらい。ダンナはサンバのむかえくらいで、そばにも来ない。（上長磯）
トリアゲバアさん（前の代）。のち助産婦になった。（大正十五年ころより）（下大島）
うちうちの人が立ち合う。近所の人も二人ずつくらいいる。のこりの人はコタツにいた。とりあげると近所の人がいて、男の人は湯をわかしたりする。（下増田）
母親かトリアゲばあさん。子供のころにサンバが来はじめた。頼みに来なくなるのでトリアゲバアさんがさびしがっていた。（笂井）
しゅうとめさんとさんばさん。（後閑・亀里竜門）

お産を取り扱う人　サンバさん、トリアゲバアさんがいた。サンバさんは日赤のそばの人を頼んだことがある。（上朝倉）
サンバさん。（房丸・徳丸にいた）（宮地）
トリアゲバアさん。サンバ。（力丸）
サンバさん。親の代はトリアゲバアさん。お産バアさんと言った。（天川大島住宅）
サンバさんかトリアゲバアさん（近所の器用な人）。（上長磯）
サンバさん。（下大島）
トリアゲバアさんがいた。器用な人はいく人も頼まれた。
トリアゲ孫になり「オバアサン」と呼ばれ、たずねてくることがあった。サンバさんは駒形の細野さん。（下増田）
昭和十八～十九年頃、取り上げ婆さんからお産婆さんに変ることになった。砂糖の特別配給があり、妊婦手帳と配給手帳があって印を押すと出るようになったこともある。（下長磯）
小山はなさん。下長磯の子はほとんどとりあげ、上長磯にもいった。人数のいない家には泊りこみで取り上げをした。墓石の台が、たらいの形をしている。取り上げがすむと、米だけのウブタテメシをごちそうになった。（下長磯）

お産　取り上げばあさんに、取り上げてもらった。「みせかん」といっていた。みせのおかみさんなので、この名がついた。（鶴光路）
おさんばさん。生む時に「さあイキミなさい」といった。（後閑）

お産の時の夫の役割といい伝え　「夫はいるもんではない」と言われた。臼をしょった。ぞうりと高歯を片方ずつはいて、タカボウキをしょって走って回ったと話に聞いた。（上朝倉）
ダンナは仕事。生まれても遠くから見るくらいで、あまりそばにもこなかった。夫はそこには入れない。男衆は来るものでないと言う。俵をかついで回った話がある。（宮地）
夫はてつだいはせず、お湯をわかすくらい。（力丸）
ダンナはそばによらない。親夫婦がいればそのあともあまりそばにいない。畳の目がみえると生まれない。見えなくなると生まれるとか、障子の目が見えると生まれないとか言ったが個人差があった。（新堀）
夫はお湯をわかすくらい。自然に生まれるものと思っていた。（阿内宿）
サンバさんを呼びに行く。はじめにダンナがいると、次にもいないと子が生まれないと言う。（上長磯）
お湯をわかす。（小島田）
石臼（ウス）しょって家のまわりをまわった。一緒に苦労するように。
オトッアンがいると子供ができないと言ってよそにやらされる家があった。男はくるものではないと言う。田に行っていれば何もしない。臼をしょって家のまわりをまわった。オレも苦労すべえということ。

（下増田）

親がいなければ湯をわかす。いるもんではないと言われた。タライをもってゆくのはダンナ。杵（キネ）をしょって家のまわりを回った。（笂井）

そうじ位で一般的にはじゃまにされた。（後閑）

ウブタテメシ　ウブタテのマンマ・メシと言う。お膳ごしらえをして赤ん坊の枕もとにおいた。サンバさんに食べてもらった。そなえるもの、所はなかった。（上朝倉）

ウブタテメシはサンバさんに食べてもらった。お膳に男の子は筆、女の子は紅をそなえた。（宮地）

ウブタテゴハンをみんなで食べた。（力丸）

ウブタテのゴハンは姑様が作り、稲荷様などにそなえた。（阿内宿）

なし。（天川大島住宅）

ウブタテのゴハン。神様にあげた。（上長磯）

できるとすぐにウブタテのゴハンをたいた。サンバさん、神様にあげ、家の人にも出した。（下大島）

ウブタテのゴハン。できるとすぐに膳にした。ソロバン、筆、コモ石（男の場合）を膳にあげた。来た人に食べてもらった。（下増田）

ゴハンをたいて神様にしんぜた。（笂井）

テーブルをつくり、白いごはん・生いわし・つけ物をそえて産神様にあげる。後であげたものは動物にくれた。一週間は産神様以外の所へはそなえ物をしなかった。（後閑）

白いごはんで、大人数で食べると丈夫で長生きできるといった。

一生充分食べられるように一升たくといった。このごはんは身内でいただいた。しかし、してくれない家も多かったと聞いている。

（亀里竜門）

子供が生まれた時にごはんをたいて、お産婆さんに食べてもらった。はしをつけてもらった。（鶴光路）

子供が生まれるとすぐにご飯をたいて神様にあげた。これを、オボタテノゴハンといった。それから一週間は、不浄といって、子供を神様におまいりさせなかった。（笂井）

子供が生まれるとすぐに、オボタテノゴハンを炊いた。近所の人をよんで食べてもらった。（上長磯）

子供が生まれるとすぐに飯をたいた。お膳（会席膳）をつくって、座敷のすみにあげた。（下大島）

後産の処理　屋敷のアキの方に埋めた。（上朝倉）

ノチノモノはツボ山や、踏む所へといい、台所や軒の下の地ちょうにいけた。（宮地）

方位を見てアキの方にいけた。墓に持って行く人もあった。（力丸）

便所のうしろの方の、ひなたでないほうにダンナか姑がいけた。墓に持って行っていけた。（犬に堀られないように深く堀れと言われた）

家に床なしのスノコのところがあり、お産の時ウブ湯をつかい、人に踏まれないように縁の下にこぼした跡がある。（新堀）

墓のそばに、方位をみていけた。（阿内宿）

方位をみていけた。（天川大島住宅）

墓にいけた。（上長磯）

カンベッパラに穴があった。ない人はトボ口にいけた。（人に踏まれるほうが良い）方位をみていける人があった。そこの穴にはお七夜までの水などもすてた。（下大島）

カメにいけた。（下増田）

昔は人に踏まれるといいと言って大戸のくぐりのすぐ外の土台の下にうめた。頭が良くなると言う。（笂井）

屋敷の東南へ穴を掘って普段は仮蓋をしておいた。鬼門（きもん）はよけるし

きたりだった。（後閑）

村のイナヤキバへ処理した。（亀里竜門）

のちのもんは、人があがったり、またいだりするところに埋けたほうがいいといった。（上大島）

お墓の山へ、穴を掘って焼いて、そこへ埋めた。男親の仕事だった。

りょうの山で、エナを炭で焼いた。少し焼いて土の中に埋めた。（亀里寺家）

小ばち、かめに入れて、玄関を入ったところ（とぶ口）にいけた。

流産した子も、同じにした。だから、しきいをまたいで入るものだといわれた。（下長磯）

むかしは、お産のよごれたものを、捨て場に捨てた。

梨畑のそばに山だったところがあった。そこに、井戸のように掘ってあって、井戸枠のようなものがついていた。掘りこんであって、うんと深かかった。ふたがついてあった。（下大島）

産湯の処理　一週明はオサンバさんが、あとはお姑さんがいれた。使ったウブ湯はアキの方にすてた。少し大きい穴を掘っておいた。（上朝倉）

うぶ湯の処理は、その年の年徳神様の方向をみて、神様のいない所へ穴を掘って捨てた。（亀里竜門）

産湯はサンバさんがいれてくれた。捨てるのも場所を決めてすてた。（宮地）

産湯はサンバさんがいれてくれた。すてるのはアキの方に穴を掘って入れた。（力丸）

産湯は昼あたたかい所で、オサンバさんがお七夜までいれてくれた。あとは年寄りで、のち自分になった。産湯はやたらな所に捨てられないので、穴を掘って捨てた。（新堀）

一週間（ウブヤキ）までお姑さんがいれた。サンバさんにかかればサンバさんが入れてくれた。産湯はタイヒ場か、墓のすみにすてた。ノチザンをいけたり、裏の「山」のどこかで、日のめをあてない日陰にすてた。（阿内宿）

後産をいれた穴にすてた。（天川大島住宅）

サンバさんが一週間いれてくれた。風呂にはウブヤまでいれない。

いれた湯は屋敷のすみの穴にすてた。（上長磯）

一週間はウブ湯に入った。（下大島）

家で一週間はサンバさんかトリアゲバアさんがいれた。その湯は方位をみて穴をほってすてた。オボヤキまでは子も親も風呂に入らない。隣の家にも行けない。（下増田）

いれた湯はその年の良い方位をみて穴を掘ってうめた。棒をおき、犬をふせぐためムシロをかぶせた。天道さまにあたってはいけないと言う。（筑井）

臍の緒の処理　とっておく家も、処分する家もありいろいろ。とっておくのはあまり見たことがない。（上朝倉）

乾操させて箱に入れておいた。（宮地）

とって箱に入れておいた。とっておくだけ。（力丸）

ヘソの緒をしまっておいた。しばって切り、またしばっておいた。（新堀）

自然にもげる。とっておいた。ノチザンのところにいけるところもある。（阿内宿）

助産婦さんが切って箱の中に入れておいた。（天川大島住宅）

サンバさんが切った。特にしまわなかった。（上長磯）

はさんで切り、麻でしばった。麻は妊婦の髪もしばった。切ったヘソの緒は干して、糸をつけてしまっておいた。大病の時せんじてのむ

といいと言った。（下大島）

桐の箱に入れてしまっておいた。兵隊検査までとっておくもの、嫁に行く時までもたせるものと言った。（下増田）

もげたものはつつんでおいた。死ぬほどの大病の時にけずってのませた。すててしまった家もある。にぎった手の巾で麻でしばり切った。（笂井）

約一寸の所を麻でしばる。臍の緒は、九死に一生の病気の時煎じて飲ませると病気が直るといわれた。（後閑）

新生児の呼び方　アカッコ（上朝倉・宮地・力丸・新堀・阿内宿・下大島・下増田・後閑）

アカッコ、アカンボ。（住宅）

アカッコ。（一週間は名なし）（上長磯）

アカッコ、アカチャン。（笂井）

アカゴ。（後閑）

フタゴ。（双生児の場合）（亀里竜門）

異常分娩　サカサッコと言う例がある。（上朝倉）

サカサッコ、ケサカケゴ（ヘソの緒を巻いた子）（宮地）

サカゴ。（力丸・新堀）

サカサッコ、ケサカケッコ（ヘソの緒を巻いてくる）「丈夫でないと言う」

ケサ。（ヘソの緒を巻いた子）

サカサゴ。（天川大島住宅）

ケサカケ子。（坊さんの生まれかわり）ケサの字を名に入れる。

サカサゴ。（上長磯）

サカサッコ（足から出た子でお産が重い）（下大島）

サカサゴ（大ごとである）（下増田）

クビッカカリ（袈裟（ケサ）をまいた子のことで首つりもクビッカカリと言う。）

サカサッコ（足より出た子）（笂井）

サカサッコ。（足から生まれる場合）

エビッコ。（頭と足がまがってエビのように生まれる）。（亀里竜門）

ぶどうっこ　子供のかわりに生まれる。ぶどうのような形をしていて、つながっている。（笂井）

子供になるわけが、悪い血がみんなかたまっててでてくるという。親がたまげた。富田あたりにこういうことがあった。その母親は死んでしまったという。（東上野）

鬼っ子　生まれつき歯がはえている子のことを、おにっ子といった。かじってしまうので、乳がのめないという。口が耳まで割れているという。（東上野）

ケッカイ　（異常出産）動物みたいに毛が生えているという。

ケッカイは、生まれてすぐに、お勝手の水がめの水を飲む。そうすると、ケッカイをうんだ母親は死んでしまうという。

それだから、おさんしのそばには、みんながついている。（笂井）

これは、子供のできそこないという。子供がもう生まれない年になって、そういうのができた人がいた。

けっかいはまものだという。ぶどうのように、たまになっているもの、ぶどっこといった。それをうんで、気がちがってしまった人もいたという。（女屋）

初めての授乳　ホウズキを真綿にくるんで、にがい水を吸わせてからくれた。乳首状のガーゼを作り、杯でぬらした「マクリ」をくれた。体内の毒を出す。

鯉を食べると乳が良く出る。

もらい乳に行くことがあり乳兄弟（チ）という。つきあいは近く、今でも仲が良い。（上朝倉）

はじめにホウズキをしゃぶらせる。「ホウズキ虫」にならない、虫を切るという。

鯉を煮て食べると良い。

乳が足らないと、モライ乳をしたり、米をひやかしてすってのませた。（宮地）

乳が足らない時は、砂糖水をのませてから乳をもらったりした。（力丸）

薄い砂糖湯を脱脂綿にしめし、吸わせてから乳をくれた。

乳不足の時は、ミルクや、クズ湯、米の粉をすって煮たものをくれた。

モチを食べるとオッパイが出る、甘くなるという。鯉コクを食べるとオッパイが出るという。（新堀）

乳房をきれいにふいてからくれた。

乳が不足の時は、ヤギの乳や重湯、米をひやしてすって作ったものをくれた。

乳があまった時は南天の木の下にすてるきまりがあった。乳をもらったり、あまった乳をくれることはよくあった。

モチ米、赤飯、ウドンを食べると乳の出が良かった。（阿内宿）

あたたかいタオルで乳房をむした。

乳が足らないと重湯をくれた。

子には初めは真綿をまるめて砂糖水をすわせた。（天川大島住宅）

鯉コクを食べると乳が良く出ると言った。

乳をもんだ。

はじめに虫くだしのホウズキをなめさせた。乳が足らないと米をすって煮て、そのつゆに砂糖を入れてくれた。（上長磯）

乳をふいてもんであげる。

乳が足らないと、お粥をたくさん食べろ、鯉をたべろと、里より米、鯉、カツブシが来た。（下大島）

乳が良く出るように、サンバさんにもんでもらったり、すってもらった。

モライ乳もあった。（下増田）

最初は砂糖水をくれた。それを三日ほどくれてから乳にした。（三日目に出る。）

初乳をすてた例がある。モライ乳もあった。（笂井）

さんばさんが消毒してくれた。白いものが（初乳？）出てから乳がよく出るようになった。（後閑）

米のとぎ汁でふいてからやった。（亀里竜門）

乳不足の時は鯉を食べると乳がよく出るといわれた。（後閑・亀里竜門）

里米（チカラゴメ）　嫁の里から米を持ってきて、母子に食べてもらう。（小屋原）

力米　むかしは、お産をすると、産婦の実家から米をもってきた。米とかつぶしとかんぴょうをもってきてくれた。

かんぴょうは、おつゆのみにして味噌汁をつくってくれた。（上大島）

力餅　子供が生まれると、産婦の実家から餅をついてもってきてくれた。餅のことを力餅といった。

一升餅をついて、里のおっかさんがもってきてくれた。この餅は産婦が一人で食べた。乳が出るようにということであった。

のし餅ができるとおっかさんがもってきてくれた。（上大島）

産婦の食事の内容　一週間はオカユで、カンピョウ、ケズリブシと

ミソがおかず。魚の強いものはダメであった。のちごはんになった。
ケズリブシはお産見舞いに届いた。（上朝倉）
オカユにカツブシミソとイワシ。焼き塩の場合もあった。カツブシは実家より二本ずつ届いた。（宮地）
同じ。（上長磯・下大島・筑井）
モチはつよい。甘いものはだめといわれた。おかゆにかつをぶしをかけたくらいだった。（鶴光路）

あかっこうみとだし　あかっこうみには、だしを食わせるなといった。子供に虫がわくといった。
オボヤくらいまで食わなかった。（上長磯）

出産後の禁忌とことわざ　三日目の夜ウドンを食べると乳の出が良い。モチを食べると乳の出が良い。三日目にダイコンのヒバの湯に入り腰を洗う。力になると言う。
七日はお勝手に入れない。（けがれているので）　用たしも玄関を出入りしない。
外に出るのに太陽をはばかるので菅笠をかぶった。（上朝倉）
オボヤキまでは神棚にさわらせない。お勝手の仕事もしない。オシメにはワラでもちょっとかけ、天道さまにあてない。（宮地）
男十九日、女二十一日まではオボヤキなので神まいりはしない。洗たくは日陰にした。
十日〜二週間は床についていた。ずっと寝せておく家もある。（力丸）
男十九日、女二十一日のオボヤキ（ウブアケ）までは、外に出て橋を渡らない、台所にたてない、冬ならばフロに入れない、髪洗えない、笠かぶり便所にゆくきまりがあった。（新堀）
男十九日、女二十一日目をオボヤキと言った。
お七夜までは洗たくをひなたにしない。洗たくにはワラ一本でもかけた。（ブッチゲエにしてかけた）
外に出る時はぼうしをかぶった。（阿内宿）
針仕事はしない（オボヤキまで。女二十一日男十九日）。目が悪くなる。外出、洗たくもしない。
オボヤキ後実家に赤飯をもってゆく。（天川大島住宅）
男は十九日、女二十一日はブクを着ていると言う。日がすぎるとオボヤキになる。（上長磯）
男十九日、女二十一でオボヤキになる。その時にお産みまいのお返しをした。それまでは橋をわたらない。また、それまでは日にあたらないように（ケガれるので）、神棚まいりをしない、髪を洗わない。（下大島）
男十九日、女二十一日目をオボヤキと言った。オボヤキがすんでから実家にお客に行ったり、もらった着物を着せてお宮参りをした。
お産の時の洗い物は表にほすなと言われた。（下増田）
男十九日、女二十一日のオボヤキののち普通になった。
それまでは神まいり、洗たく、髪を洗うことができず、台所にも入れなかった。また洗たくも表にほさなかった。
納戸より台所に行くのに神だなの下を通るので上をむくなと言った。人の通る上に神だなを作るなと言う。（筑井）
丈夫に育つように多野郡西平井の三島様へ願をかけた。
三十三歳の厄年に生まれた男の子は、役に立たない、役に立てば出世するといわれている。（後閑）
出産時の下着は陰干ししないといけない。ただし子供のものは例外といった。三十三歳の時に生まれた子供は辻ですててひろってもらうといいといった。（亀里竜門）
お産のあと、七日間くらいは、お勝手に入ることはできなかった。

七日後、塩で清めてから、お勝手に入った。
天道様にあたると、けがれるといって、七日間くらいは、産婦は帽子をかぶせられた。外へは出なかった。
神社まいりは、オボヤがあいてから。
産婦は、産後、二十一日間は石橋を渡ってはいけないといった。橋を渡ると、乳がでなくなるといった。（上長磯）

避妊・中絶　なし（上朝倉・宮地・力丸・新堀・阿内宿）
避妊具ができてから避妊があったが、その前はなし。
昔は「数え三つ」で次の子ができた。生まれて百日か一年で生理があり次の子ができるので。（天川大島住宅）
ホーズキの根を使った例がある。（下大島）
生めよふやせよの時代だったから、そういうことはなかった。（後閑）
ほうずきの根を煎じて飲むと下りるということを聞いたことがある。（亀里竜門）

間引き　むかし、子供（あかんぼう）に手をかけて殺しては悪いといって、口に紙をはって殺したという。紙をぬらして口にはったという。
子供に叱言をいうとき、おこんまやの味噌樽の下に埋けるぞといった。むかしは、子供を殺してわかんねえように、かくしておこんまやに埋めたという。（上大島）
むかしは、子供の間引きをしたという。
間引きした子は、オコンマヤのところの、味噌樽の下に埋けたという。子供がうまれるとすぐに、ござの下におっかって殺してしまった。
むかしの唄で
男ができたらとりあげろ
女ができたらふんづぶせ
というのを聞いたことがある。（笈井）
むかし、間引きした子供は、へやの床下に埋めたという。
へやで産んで、へやにいけた。
むかしの子守唄に、
「男ができたらとりあげろ、女ができたらふんづぶせ」
というのがあった。（天川大島）
むかし、子供がたくさんできたとき、生活に困って、子供を殺して味噌樽の下に埋けたという。
三年味噌といって、味噌樽は動かさなかったので、埋けてもわからなかったという。（下増田）

うぶ　むかしのはなしだが、おこんまやで、うぶが泣くといった。うぶというのは、間引きしたあかんぼうのこと。（上大島）

流産・死産　なし。（上朝倉）
死産の時は式はなく、いける場所も考えていける。（宮地）
墓にいけた。式はない。（力丸）
直接墓に持って行き、いけた。（新堀）
おがんで墓へ。二～三カ月の子もそのまま墓へ。（阿内宿）
いけてしまう。（天川大島住宅）
墓にいけた。（上長磯）
葬式なしで墓にいけた。一カ所イナイケ場があり、そこにいけた。（下大島）
墓にいけた。きちんとはしておかない。墓まいりをしない所。
命をもって生まれないのはガキ仏にはしない。仏様扱いしないので墓にいけない話もある。ガキ仏はすぐ近いところで生まれかわると言う。七つ前は神様と言い、いたずらをしても罪せられなかった。「…童子」と戒名をつけた。（笈井）

死産だったので寺へたのんで水子として埋葬してもらった。
（亀里竜門）

妊産婦が死亡した時（流れ灌頂）　産んですぐ亡くなると、川のそばに四本棒を置き、赤い布を置き、白くなるまで水をかけた。（小さい時にあった）（上朝倉）

お腹が大きくて死ぬと、川に赤いキレを置き水をかけた。色が落ちるといいと言う。（宮地）

死産の時に、赤いキレが白くなるまで水をかけると子が成仏する。
（力丸）

お産で亡くなると、川に赤いキレをおき、水をかけた。（新堀）

赤いサラシ布に水をかけ、色がさめると成仏すると言う。川に四本柱をたててキレをつける。流れ灌頂と言う。（阿内宿）

笂井で見たことがある。（天川大島住宅）

なし。（上長磯）

お産で死んだ人がいると、川に四角いキレをたてて、通る人が水をかけて供養した。（下大島）

川に赤いキレをたて、お夕ナあがりまで通る人が水をかけて白くなるようにした。色がさめると供養となると言う。（下増田）

川に赤いキレをつけ、水をかけた。通る人が供養にと水をかけた。
（笂井）

小川の片側に竹の棒をたてて、赤い布がしばってあって水面にさらされていた。（後閑）

流れっ川の、四隅に竹をたて、ひもうせんをめぐらして、色が失くなるまで水をかけた。（亀里寺家）

ある人のおふくろさんが死んだとき、新田の前に流れ灌頂をつくった。赤いつぎをはって、竹の柄杓で水をかけてやった。赤い布が白くなるまで水をかけろといった。（駒形）

お産でなくなった人があると、川に赤い布を張っておいた。（四本柱をたてた）そこを通りがかった人が、その布に水をかけてやった。色がさめるまで水をかけてやれという。（大勢の人が）水をかけてやると、早く成仏できるといった。（下長磯）

腹の中に子供がいて、親が死ぬと、子どもも一緒に死んでしまう。そういうときは、川にあかい布をはっておいて、通行人に水をかけてもらった。白くなるまでかまんでおいた。そこへは線香をあげた。
（東上野）

産毛　そる家が昔は多かった。（上朝倉）

すって坪山にいけた。日にあてるともったいないと言い、包んですてた。チン毛をのこした。ころんだ時にひっぱっておこすと言う。
（宮地）

すった。てっぺんの毛をのこす。（力丸）

昔はすっていた。（新堀）

今はそらなくなっている。オボヤキにそった。それまでは日にあてるものではないと言う。チン毛を少しのこした。丈夫に育つと言う。川におちそうな時に川神様がひっぱると言う。ころがった時に三本抜くと鼻血がとまる。産毛は坪山の南天の下にすてた。（阿内宿）

一回はすった。すらない家もある。良い毛が出ると言う。（親の代）

する。チン毛は残した。チン毛はぬくと鼻血が止まると言う。

すった毛は南天の木の下にすてた。そこはたまった乳をすてるところ。（上長磯）

お七夜のころにすった。サンバさんがする家もあった。するといい毛が生えた。（下大島）

昔はそった。するといい毛になると言う。（下増田）

オボヤキののちとった。日が決まっていた。カミソリはじめと言う。いい毛が出ると言う。

鬼子母神に願をかけた子はチン毛とコメカミの三カ所の毛をのこした。ころぶとチン毛をもっておこしてくれると言う。

すった毛はツボ山の人の踏まないところにすてた。（笂井）

新生児の命名　父が決める。いくつか書き、大神宮様にあげ、引いて決めた。横山町の神社の神主やコトリ様でつけてもらった。

書いたものは神だなの大神宮様の下に貼り出した。（上朝倉）

浅間様をおがむ人がいて、みてもらった。父がつけた。決まった名は紙に書いて人の見えるところに貼り出した。（宮地）

年寄りがつけ、居間にはった。（力丸）

おじいさん、おばあさんがつけた。いくつか決め、稲荷様にあげ、小さい子がいなければおじいさんが引いて決めた。決まった名は神だなに貼った。（新堀）

一週間目に名前をつけた。いくつか決め（3つくらい）神棚にあげ、引いた。決まると神棚の下に書いて出した。（阿内宿）

父とむこさんが相談した。性名学の人にも作ってもらった。作った名は三つ紙に書き、よって、一升マスに入れて神棚に置いて引いた。決まった名は大神宮様の下に貼った。（天川大島住宅）

ダンナさんが字引きをみてつけた。近所の人や長生きの人、懇意な人の名をとった。決まると神だなの下に貼り出した。（上長磯）

家の人がおじいさんの名をとったりして作った。字画をみて、長生き、利口な人の名前をとった。決まった名は神棚の下に貼り出した。

命名……、〇〇年〇月〇日と書いた。（下大島）

神社、寺などで名をつけた。マスの中によじっていれ、神にあげ、子供にひかせた。決まった名は紙に書いて貼った。（下増田）

おじいさん、ひいおじいさんがつけた。三つつけて神棚にあげて子供がひいた。のこり2つの名は知ると良くないと言いすぐにすてて焼いた。決まった名前は神棚の下にさげた。（笂井）

寺の坊さんに三本つけてもらい、家の小さい子供にひかせてえらび、半紙に書いて座敷のかもいに下げておいたものだ。（後閑）

三本の名前をつくり、稲荷様あるいは神棚へあげてから身内がひいて決めた。（亀里竜門）

スエ子、トメ子という名をつけて、子供を終りにしたい。女の子に男の名をつけて、男の子が生まれるように願った。（下長磯）

つきあいのある家、家族、神社、お寺などでつけてもらった。

三つ作って、父親がひいてきめた。

岩男……岩櫃（いわびつ）山の所で生まれたので、岩男にした。

道男……道ができた時に生まれた。

正二……正月二日に生まれた。（鶴光路）

近所の人につけてもらうこともあった。いい名前を幾つか用意して、すぐ上の子（はじめての子ならば親が）にクジを引かせてきめることもあった。（亀里寺家）

出産届の遅れ　仕事が忙しい。三日も生きのびたから届け出た。（下長磯）

便所まいり・お七夜　三日目に、橋を渡らないで3軒まわった。せっちんまいりと言う。女の子は紅をつけ、男の子は墨をつける。オサゴをもって行った。

ヒトヒチヤには赤飯を作り、両親が来た。オボヤキの時に一斉にお返しをした。南天の葉をいれた赤飯を配った。

オボヤキは男十九日で女二十一日目。里にお客に一週間〜十日とまってきた。体を使わないので体を休めることができた。帰ると普通

に仕事をした。（上朝倉）

三日目がセッチンまいりをした。女の子は口に紅を、男の子は額に墨をつけた。これをすると下（シモ）の病にならない。近所三軒に行くが、戸をあけておがみ、オサゴを投げた。親せきがだいて行った。

お七夜は赤飯をたいた。実家の両親が、カツオブシ、ウブ着を持って来た。

近所の人はお産みまいとしてキレの一丈くらいを持って来た。おかえしは、オボヤキに赤飯とイカを五枚くらいつけて帰した。（宮地）

赤飯をたき、お宮まいりをした。墨を額につけてお便所まいりをした。カツオブシ、フがお産見舞いに届いた。（力丸）

お七夜のころにセッチンまいりをした。オサゴをあげ、額に紅（女）、墨（男）をつけ二～三軒をまわった。赤飯をたき、身内にくばった。

キレがこの日ころまでにお産見舞いで届くので、オボヤキに赤飯とスルメをお返しにした。（新堀）

三日目にセッチンまいりをした。前と両横の家のせっちん参りをした。

額に黒い星や口紅をつけた。セッチンにはオサゴをそなえた。そのオサゴをいただき食べると子供がさずかる。あげるといつももらって食べた人があり、七年目にできた人もある。

お七夜には赤飯をたき、近い人が寄った。布一丈くらい（近い人は一反）で、ネル、藤絹、メリンスが多く、子供の着物を作った。

この布も姑さんがいると自由にはならなかった。（阿内宿）

三日目は便所まいり。姑さんが三軒両どなりをまわった。その時、男の子は墨、女の子は紅をつけ、オサゴをあげた。

お七夜は赤飯をたいた。サンバさんが来て赤飯、スルメ、お金をもたせた。お頭（カシラ）つきの膳を出した。（天川大島住宅）

赤飯を神様にあげた。親のお祝いと言う。産婦に赤飯を食べさせた。オカボヤキは子のおいわい。お祝いに反物（サラシ一丈くらい）をもらった。くれる人は近い人と親くらい。お返しは赤飯にイカ（スルメ）。

三日目は便所まいりでオサゴをまいた。家のお稲荷さんにも行った。男は墨、女の子は紅をつけた。（上長磯）

四日目に橋のない隣3軒をまわった。「お便所まいり」墨で印をつけ、おシロイをつけた。

お七夜は赤飯にお頭つきで、石をおいた。歯が固く丈夫になるように。（下大島）

近所の三軒の便所をまわり、オサゴをあげた。男は墨、女は紅をつけた。一軒ゆくとまたそこにつけてくれた。お七夜は赤飯をたいた。親せき、実家より着物が来た。八幡様に行った。（下増田）

三日目に三軒のお便所をまわった。男の子は額に墨で天星（テンボシ）をつけた。女の子は紅でつけた。

お七夜は近い親せきや親が祝いにくる。赤飯を神棚にあげた。

出産見舞いはメリンスの一丈くらい。半紙一丈（二十枚）を三つ折りにして、水引きでしばったものがたくさん届いた。近い家より着物が届いた。親元は紋付、重ねの産着。それをひっかけて神社に行った。着物は麻の葉の文様で、紋のところに赤い菱の文様があった。（笂井）

お七夜にはおさんばさんに来てもらい赤飯を食べてもらう。さんばさんとの別れ飯といった。近所の三軒のせっちんを回り、オサゴをあげる。この時橋をわたってはいけないといった。（後閑）

生まれて三日目に自分の家を中心に両隣のセッチンへしゅうとめさんがだいてまわる。いった先の家の人が女の子の場合はさかづき紅で、男の子の場合は墨でひいた印をつけてくれる。この時も橋をわたってはいけない。（亀里竜門）

三日目に、近所を二、三軒まわってお便所まいりをした。そこの家の者が、男の子にはスミを額に二つ、女の子には紅を額に二つ、天星といってつけてくれた。（亀里寺家）

上長磯では、便所参りは生後三日目にした。あかんぼうを、姑さんがつれておまいりをした。女の子は、白粉とか紅（べに）をほっぺとか額にぬってくれた。男の子には、強くなれと、墨を額につけてくれた。（上長磯）

七夜のとき、あかん坊を便所まいりさせた。男の子にはすみで、女の子には紅で、ひたいに天星をつけてやった。これは近所の人がやってくれた。うちの便所と両隣の便所あわせて三軒の便所におまいりした。姑さんがつれて、オサゴをもっておまいりしてきた。（小屋原）

子供が生まれてから三日目に、便所まいりをした。うちの便所と隣の便所（二軒）合わせて三軒の便所をおまいりした。

このとき、あかんぼうをつれていくのはふつうはおばあさん、あかんぼうを抱いて、おさごをもっておがんできた。まわっていくと、額にしるしをつけてくれた。

生まれて七日目には、お七夜（おひちや）といって、おこわをふかして神様にあげる。この日名前をつけた。（笂井）

お七夜のとき、あかんぼうの便所まいりをした。姑様がつれて行った。しもやまいりといった。（上増田）

お七夜のとき、おじいさんがあかんぼうのうぶ毛をそってくれた。そのとき、うちのもんの下駄をひっくりかえしにして、あかんぼうの母親がもっていて、そったうぶ毛をのせた。これは、これから先、下駄にお世話になるので、恩をきせておくのだという。なお、そったうぶ毛は、人にふまれないようにと、つぼ山にすてたようだった。

うぶ毛がそりあがると、あかんぼうにいいきもんをきせて、おばあさんが抱いて、はじめに、うちの屋敷稲荷様におまいりをして、そのあと、うちの便所におまいりする。そして、さらに、両隣の便所におまいりした。あわせて三軒の便所へおまいりした。おさごをあげた。

まわっていくと、そこのうちの人があかんぼうに、ほほ紅とか口紅をつけてくれた。額に犬という字を書いてくれた場合もあった。（下長磯）

あかんぼうの名前は、お七夜ぐらいでつけた。本を見たり、うちのものが考えてつけたりした。候補の名前がきまると紙に書いてこよりにした。三本とか、四、五本用意して、神棚にあげておく。これを、小さい子にひかせた。

その子がひいたのを名前としてきめて、半紙に書いて、神棚の下にはりだした。

お七夜には、便所まいりもした。（下大島）

オボヤキのときに、お宮まいりをした。男が十九日、女が二十一日。このときは、あかんぼうの母親がつれて行く。里からもらった紋つきのきものを着せて行く。（笂井）

うぶやきの日には、産婦はまだ神まいりができなかった。

わたしの場合は、長女を姑さん（おばあさん）がおんぶして行って、おまいりさせてくれた。わたしは、神社の境内へ入らないで、道で待っていた。

うぶやきのときには、里からうぶぎを贈ってくれた。それをあかんぼうに着せて、神社へおまいりに行った。（上増田）

カナババ　百カ日のタレグソと言い。その間は黒いクソ（カナババ）が出る。のちなくなる。（天川大島住宅）

産婦の床上げと就労　里帰りののち仕事についた。（上朝倉）

オボヤキ後ふつうに仕事となった。一週間は床についており、のち起きたり寝たりしている。オムツの洗たくをするくらい。（宮地）

オボヤキから動き出す。夏のいそがしい時には一週間で働きに出た話があり、それで体をこわした例がある。普通は二週間くらいは寝ている。（新堀）

オボヤキ後仕事についた。床には一週間いた。手がないと十日くらいから台所にたつことがある。親がいなければ三日目くらいから洗たくもした。（阿内宿）

オボヤキ後。（天川大島住宅）

家の事情によっては早くはじめた。（一週間）オボヤキまでは働くなと言った。（上長磯）

オボヤキ後。早い人もあったが、早いと大変であった。床がとってあった。

蚕、田植えの時は早く仕事をしたが、あとで熱が出たり、体をこわしたりした。なおりにくかった。（下大島）

一週間は床についていた。家によっては三日目くらいで仕事に出た。かたい家はオボヤキまでさせなかった。（下増田）

オボヤキまでいられるが、十日くらいで仕事になり、オシメなどをぬった。

床は用意しておくものではない。不慮の事故があると言った。（笂井）

ウブ明けを過ぎた頃。（後閑）

お七夜を過ぎてすぐに働いた。（亀里竜門）

産婦の話　むかしは、あかんぼうをうんだ人は、三日も寝ていればおきだして働いた。（下長磯）

ウブアキ　オボヤキは、男女で日がちがった。男の子は生後十九日目、女の子は生後二十一日目がオボヤキ。この日、お宮まいりをする。里へあかんぼうをつれて、母親がつれて行った。このとき着せていくのがウブギ、これは、嫁の里からつくってよこした。紋付きのもの。（小屋原）

男は十九日、女は二十一日目がウブアケ。この日。あかんぼうは母親と一緒に、里へお客に行く。姑さんがおんぶするとか、荷物をもつとか、しておくって行ってくれた。あかんぼうは、ひっかけぎもん（うぶぎ）を着て行った。ゆっくり泊ってきた。帰りには、里のおっかさんがおくってきてくれた。（女屋）

七夜…（便所まいり）

オボヤキ…男の子は生後十九日目、女の子は生後二十一日目。

オボヤキの日にお宮まいりをする。

また、この日、あかんぼうは、嫁の里へお客に行く。

このときウブギを着せていく。これは、里から贈られたもの。ふつうは紋つき。（小屋原）

この日、屋敷神様と産土様（うぶすなさま）におまいりする。男の子は生後十九日目、女の子は二十一日目にウブヤキ（産明け）となる。女の子は不浄だというので、ゆっくりウブヤキをするという。

このときは、母親も一緒におまいりする。あかんぼうには、ウブギをかけていった。（小屋原）

女の子なら二十一日、男の子なら十九日めに弁天さまへ、お宮参りに行った。（亀里寺家）

誕生　出産三日目に近所の家の便所参りをおさごを持って回る（二～三軒）御印として白粉（おしろい）等を鼻の頭に塗ったりする。（鶴光路）

お七夜　名前を付ける。（鶴光路）

お産見舞　親戚等からお祝として反物一丈又は八尺を送る。

お産見舞いを戴いた家へ男は十九日目、女は二十一日目に赤飯を重箱に詰めてスルメ等を配った。（鶴光路）

初節句　三月三日　お雛さまを送る、反物を送る家もある。

五月五日　鯉登り、吹き流し、絵旗等を送る、室内の飾人形をおくる家もある。お節句のお祝を戴いた家へお節句前にアンピン餅を重箱に詰めて配る。アンピン餅とは大福餅のこと。（鶴光路）

お歳暮　男は破魔弓の飾物、等　嫁の家から送る。女は羽子板等。（鶴光路）

㈣　子供の成長と祝

出産祝　お七夜のころにセッチンまいりをした。女は額に紅、男は墨をつけ、二～三軒をオサゴをあげてまわった。（新堀）

オボヤキにお宮まいりをする。（チボクがぬけるという）「石橋の渡りぞめ」と言う。姑さんがだいて行った。（阿内宿）

お七夜の赤飯には石をそなえた。

オボヤキは男十九日、女二十一日で、近所の社へお宮まいりをした。

産泰へお礼まいりをした。

お七夜までに産着が届いた。麻の葉の着物（ネションベン着物）とオシメ、胴着（綿入れ）。その他米やお金が届いた。（天川大島住宅）

神棚に墨、筆をあげた。お姑さんが実家よりの産着をかけてお宮参りをした。（上長磯）

祝いに反物のメリンス一丈くらいが届いた。小さいので使いにくいが、三歳までくらいの子供の着物はできた。

ウブヤキの赤飯は、「豆になるように」と大豆をいれた。おいしかった。（下大島）

お七夜に親戚を呼んだ。着せるものが届いた。カマド三とこに塩をあげて赤飯をふかすのが大変だった。

オボヤキには親戚がたくさん集まった。赤飯をたいて食べたり、お返しにした。オボヤキまでにお見舞いをもらうので、お返しをもっていってもらった。

実家より紋付がくるので、五歳のお祝いに使った。女の子にはチリメンが来たので三歳のお祝いに使った。（下増田）

お宮まいりと里にお客に行った。里には二～三日とまった。赤飯を持って行った。スルメがつけば上等。

この時はアズキ（マメになるように）大豆をいれるきまり。他はササゲでも良い。アズキは煮ると二つに割れるので、腹を切ると言って使わない家がある。（筑井）

里帰りさせてもらい、その時実家で着物とうぶぎ、おむつを作ってくれた。おしめはふとん地か着古したゆかたで、他におしめ五枚重ねて縫っておむつカバーとした。

仲人・親せきからメリンスの反物がとどいたが、自分の自由にならずおしゅうとめさんが他の家の出産祝いに出すことが多かった。（後閑）

実家から肌着、着物の中に着せる胴着、おむつや普段着として、よく育つ縁起をかついで麻の葉の着物が届いた。（亀里竜門）

産婦の里帰り　最初の子より婚家で生んだ。最初の子なのでよけい身近かで大切にした。

里帰りはダンナが送って行った。（上朝倉）

オボヤキ後ダンナが送って行く。二晩くらいとまる。（力丸）

オボヤキで帰る。だれかが送ってくれる。赤飯を持って行った。二～三晩とまったが、家により長くとまった。（新堀）

オボヤキになってダンナが送ってくれる。　自分の都合で帰れる。何日の場合もある。「早くけえってこお」は気にいられている場合で「ゆっくりしてこう」は気にいられていないということ。（阿内宿）

オボヤキの日に帰る。一晩の人も一週間の人もいた。二～三日が多

い。ダンナが送り、むかえに来た。（天川大島住宅）
実家で生むとオボヤキに帰った。里に帰ってから来るまで三カ月にまたがらないように、三月がかりにならないようにした。
来た家で生んだ時は、オボヤキで五日〜一週間とまった。（ひまなころ）、稲刈りや田植え期でいそがしいと二日くらい。（上長磯）
生むのに実家にもどった人は幸せである。行けばオボヤキまではいた。ふつうはウブヤキになってから行った。二泊するくらい。実家で送ってくれた。（下大島）
とついだ家でみんな生んだ。オボヤキに帰れた。二〜三晩とまった。（下増田）
オボヤキに自分で赤ちゃんをしょって歩いて帰った。明るいうちは行くなと言われた。遊んでいるみてえだと言われた。（笂井）
オビヤ明けに一人で帰った。荷物かかえて大変だった。二晩位とまって帰る時も一人だった。（後閑）
夫が送っていってくれた。（亀里竜門）
拾い親　生まれて一回すててすぐひろってもらった。今でも丈夫である。（上朝倉）
丈夫でないので、すててひろってもらった。四十四軒のキレをもらって着物（チャンチャン）作り、三本辻にチョッパシの上にのせてすて、ひろってもらった。拾うのは近所の人に頼んだ。（宮地）
三本辻に一回すてて近所の人に拾ってもらった。（公田）
なし。（力丸・新堀）
三本辻にすててひろってもらった。拾うのは親せきや近所の人、知っている人。
歯の一本の子は「オニッコ」といい、俵の端の上に麦飯もたせてすわらせた。（阿内宿）
女の厄年（三十三）に生まれた子は、チョッパシにのせて、三本辻におき、ひろってもらう。厄年がおちると言う。隣のオバさんにひろってもらった。（天川大島住宅）
昔はあった。体が弱かったりして、子を三本辻にすててひろった。ひろった人は親扱いのつきあいをする。（上長磯）
子供を三本辻にすてた。（話にあり）
女に男の名をつけると丈夫になると言った。次に男の子ができると言う。（下大島）
捨て子をした。すてると丈夫に育つと言った。寺の本堂の廊下にすてた。ひろって親になった。親子のつきあいになる。
丈夫な母の乳をもらうと丈夫に育つと言い、丈夫になるように乳をくれたことがあった。（下増田）
話にあった。親が厄年の子は三本辻にすて、ひろった人が拾い親になった。
また、女の子が育たず、丈夫に育つように男の名をつけた。
丈夫に育った子の着物をもらったこともある。
女の子が七ツ坊主で七歳まで髪をそった。学校に入っても短かかった。（笂井）
厄年　親が厄年の年に生まれた子どもは、厄おとしに、三本辻におとして、他の人に捨ってもらう。女は三十三歳、男は四十二歳。（鶴光路）
食い初め　百十日目。お膳一式を用意した。しない家もある。（上朝倉）
百十日目。食い初め。赤飯を作り、一粒でも食べさせた。お膳は家で用意した。（宮地）
百日目。少し食べさせた。しないこともある。（力丸）

百日目。お膳を用意し（そろえないこともある）御飯粒をいれるまねをした。（新堀）

百十日目の食いぞめ。お膳にその子の茶碗を用意した。おかずを入れ、麦飯の御飯一粒をくれた。離乳食はなかったので、それから少しずつ食べるのをふやして行った。（阿内宿）

百十日にした。実家より道具が届いた。祝い事はのばしてもよい。

一歳の時に親がはきものを届けた。（天川大島住宅）

百日。実家で買ってもってくる。（上長磯）

百十日目。御飯一粒いれてやる。碗は新しくする。お頭付。（下大島）

百十日。箱お膳と茶碗は家で用意した。その日はお米の御飯にした。赤ん坊に二～三粒くれた。（下増田）

百日の食い初めという。食いのばすように百十日にした。神様に御飯をあげ、子供に食べさせた。一粒入れても出してしまった。

道具はありあわせのもの。（笂井）

生まれて百十日目で、実家から箸、お碗茶碗が祝いとしてとどいた。食い初めは米ひとつぶ食べさせた。（後閑）

本膳で頭付だった。膳は、食いぞめ膳といって実家から祝いとして届いた。（亀里竜門）

生後百日目にクイゾメの祝いをした。嫁さんの里の親が膳椀（わん）、箸（はし）を買ってくれた。ふつうので飯をたいて、お膳立てをしてあかんぼうに、ご飯をくれる真似をした。（笂井）

クイゾメは、生後百日目。お膳をこしらえてやる。（うちで）あかんぼうにご飯を食わせる真似をする。（小屋原）

百日目が食いぞめだが、『食いのばす』と言って十日のばして、百日目にした。実家が茶碗二つと皿、箸一膳もってきてくれた。赤子の口にごはんとおつゆをつけた。（亀里寺家）

生児へのお歳暮　掛軸、羽子板が届いた。掛軸は鍾馗（ショウキ）、武将のもので暮から正月に座敷にかざった。お返しはない。（上朝倉）

掛軸。武士、那須与一、清正。女の子には羽子板が届いた。（宮地）

掛軸が届いた。男の子には義経の絵などがあった。（力丸）

掛軸。武士の絵があった。おかえしはない。のちにクツなどにかわった。（新堀）

掛軸が届いた。女の子には姫や羽子板の絵、男の子は清正（きよまさ）や鍾馗大神の絵。お返しはない。お祝いでお返しがないのはこれだけ。（阿内宿）

はじめての子には掛軸（カケジ）、ズボン下、シャツが届いた。掛軸は清正の絵など。女の子には破魔弓（ハマ）と羽子板（ハゴ）が届いた。（天川大島住宅）

掛軸が届いた。男女にそれぞれの絵。正月に書き初めと並べて掛けた。（上長磯）

掛軸「鍾馗（ショーキ）」「日の出」「武者」が男の子に、破魔弓や羽子板が女の子に届いた。生まれた年の暮にきた。（下大島）

紙の掛軸で女の子には羽子板、羽根つきの絵であった。暮の二十五日ころに届いて、正月いっぱいかけた。（下増田）

掛軸が親せきから届いた。男子には武者絵、八幡大神、女の子には藤娘、道成寺、公家の娘の絵で、実家より羽子板が届いた。掛軸は紙で作ったもので、じきにダメになった。（笂井）

実家から男の子、女の子用の羽子板が届いた。産見舞した人は全員歳暮する。掛軸が多かった。二十日正月まで飾っておく。お返しは別にしなかった。（後閑）

羽子板・掛軸が多かったが、最近は破魔弓。（亀里竜門）

初節句　結婚して初めての三月の節句に内裏様をくれた。のち、女の子が生まれるとすわりびなをくれた。くれ方の両親がくれた。モチをついて配った。

五月の節句には柏モチを作った。実家より紋付きの吹きながしが届いた。のぼりには鍾馗（ショーキ）の絵があった。のぼりは、並や広い巾のもの、小さいもの、四角のもの、長いものといろいろであった。（上朝倉）

三月の節句は桜モチを作り、おひな様をかざった。五月の節句は柏モチを作り、のぼりをかざった。（宮地）

三月の節句はおひな様をかざった。実家や近所からすわりびなが届いた。赤と白の菱モチを作り実家にお客に行く時に持たせた。

五月の節句は鯉のぼりが来た。柏モチを作った。（力丸）

三月の節句には赤と白のモチをついた。ヒナさまくれた家にモチをおかえしにした。

五月の節句はタテノボリ、ザシキノボリが来た。柏モチを作った。（新堀）

三月の節句にはひな人形が届いた。紅白のモチをかえした。一軒二十～二十五個で、奇数にする。自分の家でついて丸めた。

お歳暮くれる家はくれるものだと言われて用意したら多くて、二十四～五軒から来て大変だった。一俵モチ米を使ったこともある。

五月の節句は座敷のぼりが来た。鍾馗（ショーキ）大神ののぼりで庭にかざった。柏モチを二十一～二十五個かえした。タラの干物をそえた。（阿内宿）

三月には人形が届き、五月はのぼりが来た。（天川大島住宅）

三月にはおヒナ様が届いた。桜餅とニゴリ酒を届けた。

五月には吹き流しが届いた。柏餅と干しタラを二枚届けた。（上長磯）

三月はおヒナ様が届いた。五月には木綿のノボリが届いた。実家の紋の入ったもの。「乳（チ）」をつけてかざった。今は吹き流し。

ノボリは戦中にそめかえてズボンにした。

吹き流しは杉の葉付の木を切ってきてつけた。三人でたてた。木はしまっておくのが大変であった。くさってしまった。（下大島）

三月はヒナ人形が届いた。今ほど大きいものではない。初子の時に絵がきた。他の子には人形が届いた。桜餅をかえした。

五月はノボリがきた。「乳（チ）」をつけて庭にたてたもの。今は吹き流し。

お返しは柏餅と酒（たくさんの家には）（下増田）

三月には高砂や羽衣の人形を贈った。

菱餅を実家と仲人の家に返した。他の家には赤飯をかえした。

菱餅は餅草で色をつけた餅をまん中にした三枚の菱餅であった。のち食紅のものになった。

五月はノボリが届いた。武者、為朝（ためとも）、金太郎、八幡（はちまん）太郎などの絵であった。また、座敷のぼりが届いた。

吹き流しは二～三軒で共同で送ってくれた。送った家と送られた家の紋をつけた。共同だといくつか紋がついた。輪も昔は竹がのちにカネになった。お返しは柏餅とタラの干物であった。

ノボリは鍾馗（ショーキ）大神、神宮皇后（こうごう）、武者の絵のもので一丈くらい長さがあった。「乳（チ）」をつけるのが大変であった。（筑井）

親せき内が話し合いでいいものをくれた。主に高さ二十～三十センチ位のすわりびな、あるいはたちびな（桃の節句）をくれた。また鍾馗様の絵入りののぼりと吹き流しをくれた。

お返しは三月の節句に紅白のもち、五月は青白のもちで戦争中は中のあんがさつまいもの時もあった。（後閑）

誕生祝い　歩ける子供はアンピン餅を重箱に入れてしょわせた。数は五個位だった。一升二つに分けて、女の子は紅白、男の子は青白の餅だった。（後閑）

誕生祝　お祝いをくれた家にモチをついて配った。子供が歩けるとミでモチをしょわせた。夏だったのでモチ米を一升しょわせたがよじけて歩けなかった。

昔はしょう時におしめで足をくるみ、ヒモでしばったのであまり歩けなかった。（上朝倉）

小さいクツを買いモチをしょわせた。一年では歩けず一年二〜三カ月で歩く。（宮地）

モチを一升しょわせた。手を引くが、歩くかっこうだけ。（公田）

一歳で歩けるとモチを作り近所に配った。（力丸）

歩けばいくつかモチをしょわせた。昔はあまり歩けなかった。（新堀）

歩けば誕生モチを作った。いくつか風呂敷でしょわせてころがせた。一年と半年くらいで歩いた。（阿内宿）

誕生前の一足でも歩いた時に、餅を重箱に入れてしょわせ、つっころがした。早く行かないようにとの意。アンピン二つの家もある。（天川大島住宅）

誕生に歩ければ、重箱に餅を入れてしょわせ、歩かせて、ころばせた。二、三人目になるとだんだん質素になる。

昔は着物でオシメで歩けなかった。誕生に歩ける子は少なかった。一年と三カ月くらいかかった。

昔の子は生まれて六カ月くらいは手をにぎっていた。今の子は手をひらいている。（下大島）

誕生祝いは歩ければ誕生餅としてアンピンの大きいものを三十くらいいれてしょわせた。（下増田）

子供が歩けると餅をついてしょわせた。十個くらいいれて、わざところばせた。歩けないと赤飯にした。（筑井）

初誕生のときは、誕生餅をついた。あまくそだたないようにと、餅の中には塩あんを入れた。また、その子が大きく育つようにと、大きなもちをつくってやった。（上大島）

一年目に、一升のもちを背負わせた。アンピンだけでなく、甘くみられるなといって塩アンもつくった。（亀里寺家）

子守りと子守唄　モリッコオビでしょった。足はまっすぐで動かない。子守りの子供は一年で二十円であった。年の順に上の子や年寄りもした。（上朝倉）

子供がした。頼んだ家もある。モリッコオビでしょった。

外に行く時はヒロハバの天竺でしょった。子守唄、マリ唄、数え唄があった。（四十年前）（宮地）

おばあさんが子守りをした。「ネンネンコロリヨ」の唄。嫁さんは仕事。モリッコオビでしょった。（力丸）

オバアさんが子守りをした。コモリオビやモメン帯でしょった。

丸いカゴに布団をいれた「イジメ」と呼ばれるものがあり、田んぼがいそがしいとアゼに子供を入れて置いた。（新堀）

オバアサンが子守りをした。いないと自分でした。年上の子供がいれば年上の子供。「子が子を育てる」と言う。「総領が十五になると貧乏大ざかり」と言う。食いざかりの子のみが多く、まだだれもかせがないので。

アゼにムシロを敷き、フトンをおき、棒をたてて屋根を作り、仕事中は子供をおいた。子守りがなく、子を背負ってのマンガ振りは大変であった。

「イジメ」はワラのカゴにシビをいれ布団を入れ子供をいれた。

子供をしょう時のヒモは、天竺の巾広の帯があり、それで作った。（阿内宿）

姑さんがした。いないと自分でした。天竺の広巾のものを使った。モリッコオビと言った。その後「カメノコ」がはやり、のちネンネコになった。

仕事に追われてあまり唄はない。「カニがはいこんだ」という唄が

あった。（天川大島住宅）
おばあちゃんがモリッコオビでしょった。ないと三尺を使った。
「ホラホラよい子だ、ホラホラ畑のスイカの皮でもとっとけ、あったらつけときな」という子守唄があった。（上長磯）
おばあさんが子守りをした。一丈の巾広のモリッコオビや、キレで芯をいれたオビでしょった。
唄はなし。（下大島）
年寄りがした。モリッコオビや白い巾のひろいものがある。（下増田）
姑さんやダンナの妹がした。モリッコオビや三尺の古いものを使うことがあった。子守りの人を頼んだことがある。
子守唄「カニがはいこんだ」は「ネンネンネコのケツ、カニがはいこんだとって出してまたはいこんだ、オッカサンがたまげてお茶をこぼした」とか「早くねえと馬にくわせるぞ」
「雨が降っても風が吹いても汽車道、汽車がゴーゴーくればよい」とか言った。（笂井）
ワラのいれもの（イジメ）におしめを敷いて手の届く範囲においた。
モリッコビ（守子帯）はボロを芯にした丸い帯で、それで子供をしょって子守りした。
冬はネンネコバンテン（自分の着物のお古で作った。着物一枚で三つ出来た。）普段使いは筒袖、よそいぎは元禄袖だった。またカメノコといって子供だけ入る今でいうケープ式のもの等があった。
子守りをする人は主に兄弟で、モリッコにかせぎにいく子供もいた。礼は、一銭位（鉄砲玉アメが二銭で二つ買えた）だった。
子守唄は「ねんねんころりよ、おころりよお前よいこだねんねしな」。（後閑）

七五三の祝　なし。最近のものである。（上朝倉）
なし。大尽の家、町の人。（宮地）
やる家とやらない家がある。（力丸）
なし。大尽の家のみ。（新堀）
親せきより着物などのお祝いがきた。祝いはかんたんで、太田呑竜（ドンリュウ）さまや八幡様に行った。（阿内宿）
家によってやる家、やらない家があった。十軒に一軒くらい。（上長磯）
ない家が多かった。銘仙（メイセン）の着物を作ってくれた。（下大島）
昔はあまりなかった。（下増田）
家によってやった。男で七・五・三の三人がそろったらした。（上増田の例）昭和十三・四年のころで、水兵の仕度をした。（笂井）
そうしたことは金持ちしか出来なかった。普通の家では出来なかったし、したら笑われた。（後閑）
屋敷稲荷か、氏神様へおまいりする程度であった。（後閑）
長女が七つ、長男が五つ、二男が三つと、そろわなければ祝わなかった。（亀里寺家）

成育期の習俗　太田呑竜様におまいりに行った。八歳でお礼に行く。
ヨセギレ着物は小さい時に話にあった。丈夫に育つと言う。（上朝倉）
呑竜様で丈夫に育つように五ツ坊主にしておき、おまいりをしてのばした。（宮地）
なし。（力丸）
呑竜様に願をかけて、五ツ坊主、七ツ坊主にしたことがある。（新堀）
太田の呑竜様で願をかけ三ツ坊主にした。願を果たしてからのばす。その前にのばすと呑竜様が毛をむしりに来るという。三十三軒殿といい、キレをもらって着物を作ると丈夫になると言う。（阿内宿）
五ツ坊主、七ツ坊主。丈夫に育つように親が願をかけてしてくれた。

男女とも。小ギレを三十三軒もらい集めて着物を作り赤ん坊に着せた。（聞いたことがある）（天川大島住宅）

五ツ坊主、七ツ坊主、十坊主を健康のためにした。女の子でもしておいた。三十三軒のキレをもらって着物を作って着せると丈夫になる。

子供ができない、子が育たないので、親が着たこともある。（上長磯）

七ツ坊主は太田の呑竜様に願をかけて七歳まで坊主にしておいた。

丈夫に育った子の古着をもらいに来たことがある。（下大島）

体が弱いと呑竜様に願をかけて坊主にした。七ツあがりの学校に行くまで坊主にした。（下増田）

小さいキレを持ってきて、生まれた子に着物を作り着せて丈夫に育った例がある。鍋のつるをくぐると丈夫になるので、ナベとかナベ太郎とか名をつけたことがある。（笂井）

二、厄年・年祝儀礼

㈠ 厄年・厄除けと呪法

幼少年期の厄除けと厄年　体が弱いので、名を変えた例がある。「辰」とか「鷲」とか付けた。生まれてすぐ、ナベつるをくぐらせると丈夫になると言い、名もナベ太郎、ナベ子とか付けた。

反町の薬師様に行った人がある。昔は講があり代表が行った。

百軒町の高岑院、正幸寺にも行った。（上朝倉）

四歳で呑竜様に行った。（宮地）

四歳で反町薬師に行った。（力丸）

三十三軒からキレを集めて着物を作り着せると丈夫になる。（新堀）

四歳で反町薬師に行った。

三歳では青柳大師に行った。（阿内宿）

四歳で百軒町の高岑院に行った。（天川大島住宅）

四歳で中川（市内）の鬼子母神に行った。小づかいをもらい、日赤前で焼マンジュウを買ってくれた。楽しみがあった。（上長磯）

四歳で反町に行った。（下大島）

四歳で反町には必ず行った。

木崎のヒギリ地蔵に行った。〇〇までになおしてくれと日をきってお願いした。なおってそのままにしておくとまたなってしまう。（下増田）

四歳で反町に行った。着物を持って行き、おがんでもらうといいと言う。縁日に行くと水アメを売っていた。ブッキリアメという白いアメで、ウドン粉をまぜてのばしたもの。のちにチョーセンアメになった。（笂井）

体の弱い子の場合は、反町の薬師様、百軒町の高岑院、または地元の薬師様へいった。（後閑）

むかしは、七つ坊主ということを聞いた。うちではしたことはない。はなしによると、太田の呑竜様へ、子供が丈夫に育つようにとお願生をかけたという。

わたしよりもっと年寄の人のはなしである。あたまをかみそりですったというはなしを聞いた。チンケはのこした。はなじがでたときには、チンケをぬくととまるといった。（東上野）

呑竜坊主　七つ坊主といった。

生まれてすぐ（お七夜ごろ）に頭を剃った。チンゲは残しておいた。

七つまでは剃っておいた。呑竜様のおまつりにかけておまいりに行き、髪の毛をのばした。七つのころのこと。

それは、弱い子でなくともそうした。（女屋）

病気に対する呪法　虫封じ　孫太郎虫をとってのませた。

夜泣き　細井の桃井川の川岸の皮をむしってのませる。天井にニワトリの絵をかいてサカサにはる。

ホーソー　ホーソーをうえて良くつくと桟俵を神社にあげた。ホーソー送りは赤い幣束をたて赤飯をおいた。

あつけ　菅笠をかぶせ、上から水をかける。その水をうけて飲むとなおる。（上朝倉）

虫封じ　力丸のお坊さんに頼んだ。手のひらに字を書くと虫が出るのがわかった。

あつけ　菅笠をかぶり井戸の水を三つかけるとむった。あつけだとむった。（宮地）

カンの虫　神主さんにおがんでもらう。

ホーソー　すむと俵ぱしにヒモをさげ赤い紙をさげたものをホーソーがえしでおさめた。

あつけ　菅笠をかぶり、綿入れを着せ、水かぶる。水がむるとなおる。タゼをもんでその汁をのむとなおる。（力丸）

夜泣き　虫が強いと言われ、虫よけに山名の八幡様に行った。天井にニワトリの絵をはっておく。

ホーソー　チョッパシでホーソー棚作る。

あつけ　菅笠かぶり水を三回かける。（新堀）

夜泣き　大神宮様の掛軸をさかさにしてかけておまじないにした。寝ていればいい。

虫封じ　山王様でおがんでもらう。

あつけ　井戸端で菅笠をかぶせ水をかぶる。むるとなおる。キューリのタネを足の裏につける。（阿内宿）

カンの虫　虫封じをしてくれた人があった。孫太郎虫をくれた。

夜泣き　枕の下にニワトリの絵を竹の筒にいれ、サカサにして入れた。

あつけ　ユカタで笠をさし、水をひしゃくでかけた。ふるえるとなおる。キューリを塩でもみ足を入れる。足の裏にキューリの芯をつける。（天川大島住宅）

夜泣き　ニワトリの絵を書いて枕もとにさかさに貼る。

虫封じ　虫封じがあった。

あつけ　笠をかぶって、敷居をまたぎ、ヒシャクで水をかぶせ、むればよい。（上長磯）

夜泣き　ショーズカバアサンが夜泣きをなおした。ニワトリの絵をさかさにして水ガメのところに貼った。

カンの虫　虫よけする人のところにつれて行き、青竹に虫よけ入れてくれた。

ホーソー　ホーソー棚があり、木のまわりにしばりつけた。「送ってゆく」と言う。

アツケ　タデの葉をかじるとなおる。ムギワラか笠をかぶり、上より水をかぶせる。上よりたれる水が背をタラタラ通るとなおる感じがした。（下大島）

夜泣き　流しのオカマ様にオトコのトリを書いてさかさにつるす。

虫封じ　神主さんにおがんでもらう。手の平に白い虫が出てくる。手を洗うとなおる。

ハシカ　神社へ糸でさげるタナを作り、赤飯と赤い幣束をたてた。一週間目でなおると言う。赤いはんてんができるとなおってゆく。

ホーソー様　ウツギ（柳）（萱）で小さい十五センチメートルくらいの棚を作り麻縄でさげる。赤い紙を切ってはる。まつっておくと軽くすむので、すむと神社におさめた。

アツケ　裏の井戸に行き、菅笠をかぶりひしゃくで三回水をかぶせる。もると良い。

ハシカ　石橋の下を通るとハシカが軽くなるのでくぐる。「橋くぐり」と言う。（下増田）

夜泣き　おまいりに行くところがあった。孫太郎虫売りが来た。小さい旗を背にたてていた。それをせんじてのませた。

虫封じ　小屋原のナタギリ薬師（弘法大師がナタで作った仏像あり）や笠薬師の人にきとうしてもらった。虫が出てゆく。

ホーソー　赤い色紙をさげてツリを作る。ウツギの枝でサンを作り、チガヤで縄を作った。オカマ様につり、三本辻においてつるした。一つの家の例であるが、チョッパシをさかさにして二つ作り、ヘイソクをつくり、正月の十六日まで毎朝晩おまいりした。はやり病、病気が軽くすむという。七色菓子、金、豆、赤飯をあげ、ホーソー祝いをして送り出した。

カクラン　すげ笠をかぶり水をかぶせる。むると良い。キューリをつるの芽ともんで、その水をのむ。キューリを二つに切り足の裏にしばりつけて寝る。（筑井）

夜鳴き　にわとりの絵をさかさに書いて家の玄関へ下げておく。ヤギの乳を自分の肌であたためて飲ませるときくとおしゅうとめさんにいわれた。

ハシカ　着物を着せて熱あげて早くなおす。

カクラン　雪の下を塩でもんで、あしの裏につける。

よく穴のあいた笠をかぶせて水を三回かける。

キュウリの芯を塩でもんで足の裏へつける。

下痢がひどい時　神明丸を飲ませる。

傷口　綿クソ（ポケットの中にたまったもの等）やタバコの葉をつけるとよい。

あせも　よもぎあるいはももの葉を乾燥させてうける。

蜂にさされた時　歯クソをつけるとよい。

生涯の厄年と厄除け　男四十二、女三十三が本厄。戦前までは寒いうちに浪波（なにわ）節を頼んで厄除けをした。二十五、四十二の厄年の人が胴元になり、大きな家を借りてやった。（上朝倉）

女は十九・三十三。男は二十五と四十二。仕事がいそがしくて厄除けも行けなかった（宮地）

女十九と三十三、男二十五と四十二。神社で厄落しの名前で演芸会をした。（力丸）

男二十五と四十二、女十九と三十三。川崎や佐野に行った。（新堀）

女十九と三十三。男二十五と四十二。寒いころに金を出し合って浪波節を呼んで「アクマッパライ」とした。（阿内宿）

厄年の人が厄おとしに映画をした。厄年の人が自分の家を使った。（公田）

女は四、十九、三十三、男は四、二十五、四十二。村内の増田の蓮（れん）華（げ）院や反町薬師に行った。（天川大島住宅）

女は十九、三十三。男は二十五、四十二。女三十三と男四十二同士があつまり、家を借りて浪波節を頼んだ。（上長磯）

女は十九と三十三、男は二十五と四十二。反町薬師に行った。

また、厄年の人が金を出して浪波節をした。芸能の人をよんだ。

金を使うと厄がおちると言って、芝居などもした。（下大島）

女十九で男は二十五。（下増田）

男は二十五と四十二。女は十九、三十三。その時にはヤクドシモチと言って、餅をついてよそに配った。厄年は二回餅をついた。一つ年をとばした。

女の三十三歳の時に△の文様の帯をもらった。
広い蚕室のある家を借りて、浪波節を頼んで厄おとしとした。(笂井)
男　四歳、二十五歳、四十二歳、女　四歳、十九歳、三十二歳で百軒町の高岑院へおまいりする。(後閑)
男女ともそれぞれの厄年の時は反町の薬師か、川崎大師へおまいりする。(亀里竜門)

(二) 年祝い

年祝い　なし。(上朝倉・宮地・力丸・新堀・阿内宿)
七十七歳のフキダケ祝いをする。フキダケを一対つくって近所、親せきへ水引きつけてくばる。(亀里竜門)
八十八歳の米寿に赤いちゃんちゃんこと、羽織を着せる。(亀里竜門)
七十七歳で吹き竹を作った。八十八で赤いチャンチャンを作った。
六十年に一度の亥の年には柴の布団を作った。(天川大島住宅)
親の代にはなかった。数は少ない。(上長磯)
八十八歳に子供が着物を作ってくれた。
年寄りは写真をとると影が薄くなるといっていやがった。(下大島)
八十八で赤い着物を作った。(下増田)
昔はなかった。還暦は家によってした。
家によっては吹き竹を七十七の時に配った。吹き竹で吹くと火事がよそに行くと言った。それで大事にして大神宮様にあげておいた。(笂井)
八十八は米寿で、赤い足袋、帯、ぼうしをチリメンで作った。(上朝倉)
特になし。(宮地)
七十七歳では吹き竹(長息きの意)とオコシを配った。
八十八歳では赤いチャンチャンコを作った。(力丸)
七十七歳では吹き竹を二本ゆわえて配った。
八十八歳では昔は着物まで赤いのを作った人がいる。(新堀)
七十七歳では、吹き竹を作る人があった。
もらい火事の時に吹くと火事がかえるという。(阿内宿)

初潮とお祝い　十三～四歳ごろ。祝いはなし。(上朝倉)
十五～七歳くらい。祝いはなし。(宮地)
十六歳くらい。赤飯をふかした。(力丸)
十四歳くらい。何もしない。(新堀)
十九歳くらいの人もあり遅かった。(阿内宿)
十五～六歳くらい。高等二年くらい。
祝いをした家としない家があった。(天川大島住宅)
十六～七歳くらいか。隠したもの。(上長磯)
十六歳くらいが多い。家によっては赤飯をたいた。(下大島)
十五～七歳くらいか。かくしたもの。(下増田)
十七歳くらい。かくしていたほう。家により赤飯をたいた。(笂井)

一人前の条件　俵をかつげること。かつげないと夜あそびができない。エンガうないができること。(男)(上朝倉)
なし。(宮地)
男は俵がかつげること、女は裁縫ができること。(力丸)
女は機織り、裁縫ができること。銘仙(メイセン)が多く、早い人は日バタという毎日一反できる人があった。普通は二日で一反。
柄で値が違い、娘が三人もいると金になった。冬はその金で家計をまわしていた。(新堀)
平均に仕事が何でもできること。(阿内宿)
ウドンとソバうてないといけない。お裁縫。

田植えの箱植えができないと一人前ではない。小さいころから機織(ハタオ)りをさせられた。(天川大島住宅)

裁縫ができること。六十キロの米俵がかつげると一人前。

力があると足の親指をワラでしばり、米俵を肩の左右に動かした。(上長磯)

米俵をかつげれば一人前。かつぎ石があった。

馬に荷をつけられないとダメ。つけるのはむずかしかった。(小島田)

仕事が大人並にできると一人前。和裁など。(下大島)

特になし。(下増田)

伊勢崎銘仙の機織り。サク切りができる。マンガふりができる。俵(六十キロ)がかつげる。

力石(チカライシ)があった。若い衆が墓場の石塔をかついだ。小島田の丸い石塔がありかついだ。(笂井)

徴兵検査　二十歳で検査をすませると、お祝いに浪花節をやった。(下朝倉)

(三) その他

子供組　子供組に入る式があった。

七ツからは悪いことをすると罰があたると言われた。

トーロッ子と言って天神講に入った。入るのは自由で、布団を持ちおこもりをした。

寺のオシロイ薬師、天道さま、アブリ様、八坂社、オクンチのトーローを建てた。

若い衆は、ふれて回ったのちコサギリをした。また、春・秋の彼岸に道ぶしんをした。(笂井)

三、婚姻儀礼

(一) 青年期の動向

青年会　青年会は小卒から二十五歳くらいまで入った。年がくれば会員になった。修養団体で、剣道・柔道をした。

会長・副会長・会計・幹事・監査がいた。

上と下一つずつあり百人くらいの会員がいた。四月九日の神社の祭りの余興に武道大会をしたり、秋に伊香保に旅行をした。(上朝倉)

青年会は二十五歳くらいまでで、会長・副会長・幹事がいた。長男・次男など全員が入った。運動会や道ぶしんをした。(宮地)

青年会。のちの青年団。小卒で二十五歳まで。団長・副団長・会計がいた。二十五歳から四十五歳までは壮年団に入った。

田を借りて農業をした。二反五畝(セ)借りた。米と麦を作り、麦を売って収入にした。

運動会をして選手を出したことがある。郡大会から全国大会に行ったことがある。旅行をして伊香保に行ったことがある。

三月二十八日の不動様の祭典の余興として浪曲師を頼んだ。割り当てをして寄附を集めた。割り当てが高かったので若い者だけではだめだということになり顧問が二〜三人入った。

映画をした。雪が降り、客不足で金が集まらずあとが大変であった。(公田)

壮年団　大正始めから昭和はじめまであった。団長と下に執行委員がいた。仕事は道ぶしんや夏の水が来るように掘はらいをした。また、狭い道をひろげた。杭をうち道を作った。(公田)

青年会。入会は十六歳から数え二十五歳まで。のちに三十、四十ま

でになった。
会長と副会長がいた。出かせぎはなく、長男・次男ともに入った。
仕事としては、田を借りて米を作ったり、水路をはらったり、年二回道ぶしんをしたり、雪が降ると通学路の雪かきをした。伊香保・妙義にあるきで行ったことがある。(阿内宿)
青年団は高等二年がおわって入った。進学は十人に一人。高等小学校が永明にできるまでは駒形に行った。(上長磯)
大正は青年会で、昭和で青年団になった。木瀬に十四支部あり、小島田は十三分団であった。仕事は道ぶしんや雪かきで、伊香保まで歩きで行った。
五月八日の赤城大洞の神社の祭りは往復歩きで大胡より頂上の小沼まで行った。三夜沢神社にも行き、神主の家にもとまった。
消防組は各部にあった。木瀬に十三あった。部頭と副が小頭と呼ばれた。無執酬でやっていた。ハッピをぬぐと言うと村長もふるえるほどの力があった。戦争中は伝令をした。
また、青年団が堰番をした。川の上・中・下にあった。水切りの時に魚がとれた。小島田の水切りは有名で町より人が集まった。事前にとられないように前に番をした。下の堰の所に火葬場があり、伝染病の人を焼いた。そこを青年団が借りて耕作をした。(小島田)
青年団は戦後さかんになり、一時八百五十人もいた。村単位に団を作った。木瀬中の校庭ならしに三日出た。
キモレイは今の自治会で、橋のところにオシメをたてた。組に一人ずつ四人いた。(笂井)
一五～一六歳で男は青年団、女は処女会にはいった。
(後閑・亀里竜門)
道路清掃、雪かき、学校道の雪かき等の作業をやった。青年団、処女会への入会は半ば強制的だった。(後閑)
青年団になる前まではわかいしゅ組といった。村祭りの世話等の作業をやった。責任者は頭といって年長者の中で頭のきれる人がなった。
(亀里竜門)

処女会　小学校卒業から嫁入りまで。修養団体で、祭の接待をした。
(上朝倉)
処女会があり、のち女子青年会でのち青年団になった。
月二回勉強会があり、村の集会所に集まった。高等二年より嫁にゆくまで入った。(天川大島住宅)
十六歳から嫁に行くまで入っていた。神社のそうじや墓のそうじをした。(力丸)
学校卒業後入った。神社のそうじなどをした。(新堀)
学校卒業の十五、六歳から結婚するまで。出征兵士を送ったり、その家のてつだいをした。(阿内宿)
処女会には高等二年の後に入った。高等には月謝が必要であった。裁縫・はた織仕事が多かった。町の裁縫学校に行った。(上長磯)
処女会があり、のち青年団になった。梨の袋かけをお盆休みにした。金をもらって会の経費にした。一つの畑をあずかって袋をかけた。尺トリ虫をとると一つでいくらという金になった。
苗間とりが蛾をとった。蛾をとるのは生徒の時で、センベイなどのお菓子がきた。イナゴとりのこつは、歩いて行き、後ろの人がイナゴの出てくるのをとる。(下大島)
結婚まで女子会に入っていた。のち女子婦入会に入った。
女子会は旅行に行くくらいで、渕名より先生が来て作法をおそわった。八十三歳の人が十六くらいの時。(下増田)

夜あそび　仕事が終ってから行ったが、人によりけり。

知り合いの娘のいる家に夜行った。歓迎する家あり、敬遠する家ありであった。

恋愛で結ばれる人はなかった。

仕事が終ってからは、盆踊り・浪花節・演芸会に行った。冬場、厄年の二十五歳の人が厄おとしに浪曲を頼んだ。

聞くとけっこう遠くまで行ったことがある。伊勢崎近くまで歩きで行った。駒形の下の町や紺屋町にも行った人がある。（宮地）

相性のある村があり、佐鳥の西原、下佐鳥、横手に行った。朝倉ではしめられ、竜門には行かなかった。夕方行って、二時ころ帰った。娘が出てきて話をした。祭に行く約束などした。

二人だと批判されるので、三～四人で訪ねている。それでよくなって嫁としてもらう人があった。

口笛を吹いたり、下駄の音で出てきた。

モノ日（お盆、釜の口あけなど）には決まって休んだ。樋越（ひごし）の祭り、上陽・西善・中内などに行った。（公田）

歩きで昭和館・駒形座の芝居を見に行った。浪曲がさかんで、あちこちに行った。玉村のキンショウ座にも行った。着物を上に持ってハダカで川をこえた。

若い娘の家にも行った。障子に穴をかけてのぞいたりした。縁側や橋の上で話をした。芝居に通っていくと言って話をした。祭りは若い衆が集まって話をした。中樋越・中井に行った。

馬の運動と称して馬で行く人もあった。村内に三十～四十頭も馬が多くいた。（力丸）

夜は機おりが多かった。玉村の方に夜芝居を見に行った。福島橋を渡るので、そこで知り合って嫁にした場合がある。（新堀）

村の演芸会があり、若い人が集まった。女の人を家に送って行った。十五夜・十三夜には夜若い人がよく出ていた。十五夜は、しんぜてあるものを子供がさげた。

夜若い人についていって追い帰されたことがあった。（阿内宿）

よそ村の演芸大会や盆おどりを見に行った。町ごとに大会があり、色をかえて競争した。

団体で片貝・駒形・山王に行った。ユカタに黄の三尺をしめて行った。

関東製酪よりは町なので、「ことばかえよう」と言った。

（天川大島住宅）

八木節大会・演芸大会があった。舞台を作った。村内でも家をかりてした。上泉・細井・増田あたりにも行った。盆おどりは必ずあった。

（上長磯）

歩きで五代の木福様まで行った。人が集まった。

麦まきが終ったあとで、夜縄なわないのあとで行った。十二時ころに帰った。団子をしんぜた。

八木節の道具をそろえて大会をした。

駒形の稲荷町へ行った。

富田・荒口・女屋・二之宮・荒子などの若い娘のいる家に行った。

（小島田）

歩きで町に映画を見に行った。昭和館や帝国館。石ゴロゴロで歩きにくかった。

「君の名は」や「愛染かつら」はすごい人気で帝国館より八間道路に人が並んだ。

駒形で芝居の時は楽しみで、仕事をいそいで行った。姑さんが早くすればつれて行くと言われ、いそいで仕事をした。役者が人力で前橋から通った。（下大島）

盆おどりは稲荷藤さんが有名だった。寺の西に屋台を作った。
青年会が芝居をした。界わいで盆おどりがあると見て回った。ヤグラをたててしていた。（下増田）
下長磯・石関・富田・荒口まで歩いて行った。
娘のいる家では来ると接待した。茶・ナッパくらいは出た。
親が若い衆をことわると、入っているフロをかついで移したりした。
まだことわると、「ガッタンかけべえ」と言った。大戸のはりに荒縄の三本よったものをつけ、タメのオケをさげ、石をさげる。ひっぱってはなすと石がぶつかり戸がこわれる。続いてタメがおちてタメがひろがった。
タメは二尺くらい土をとらないとにおいがとれないと言う。
いくつか例あり。
また、集会所に寄ってきもだめしをやった。（笂井）
夜あそびに行くことは俗に娘をひっぱりに行くといったものだが、歩き仲間と一緒に荻窪までいって八木節踊りをやって帰ってからまた大胡の樋越まで出かけていった。帰りは夜中の二時頃だった。（後閑）
昭和の初め頃駒形座へチャンバラを見にいった。代金は十銭位だった。夏場は八木節まわりをした。七月～八月にコンクールがあって人気投票で決めることが多かった。登場は青年団の呼びかけで各村々で浪曲語りを呼んで聞きにいったものだ。代金は十円位だった。浪花節のような内容のサエモン節や越後からごぜさんが来て民謡をうたったりするのを聞きにいった。（房丸）
利根川の渡しに乗って川向こうまで遊びに行ったが帰りは船がなく泳いで帰ったこともあった。（亀里竜門）
恋愛の呼び方　あまりなし。（上朝倉）
クッツキアイ。（宮地・上長磯）
イイナカ・クッツキアイ。（公田）
ナレアイ。（力丸）
クッツキアイ（例はあまりない）。（新堀）
クッツキアイ。親が反対してもクッツキアイで、できてしまうと結婚できた。（上佐鳥）
クッツイタとかいい人がいると言う。（天川大島住宅）
クッツイタとかイイナカと言う。あまり歓迎されない。
村内で結婚の場合を「地しばり」と言う。地にへばりついている草のことである。（小島田）
クッツキアイとかナレアイと言う。あまり良く聞こえない。（下大島）
イイナカになった。クッツイタと言う。（下増田）
クッツキアイは三～五円村の肝煎（きもいり）に金をはらった。（結納金の額）
クッツキアイ、ホレタ、クッツイタとか言った。（笂井）
クッツイタ。
ヤクザした。
はだかはだしで追い出せ。（後閑）

(二)　婚姻の条件

結婚適齢期　男は二十四～六歳、女は二十三～四歳。（上朝倉）
男は二十五～六歳、女は十九～二十三、四歳。（宮地）
男二十三～四歳で、女二十一～二歳。二十四と十七で結婚した例や、女が十四～十五、十六の人もたまにはあった。（力丸）
男は兵隊後の二十五～六歳。女は二十から二十三、四歳くらい。（公田）
男は二十五～七歳くらい、女は二十三から四、五歳くらいで、男が二歳くらい上であった。女で二十くらいの人もあった。（新堀）

女は二十三～四歳くらいで、男は二十五～六歳くらい。三つちがいくらい。女が一歳上は金のワラジをはいてさがせと言う。（阿内宿）
男は二十二～三歳で、兵隊検査と現役の一～一・五年がおわってから。女は十四～五歳から。（上佐鳥）
女は二十三～四歳くらい。（天川大島住宅）
十代もあり若かった。二十二～三歳が多く、二十五歳は年増。（上長磯）
跡つぎがないと兵隊検査前に結婚した。普通は検査ののちに結婚した。
甲種合格の人は兵隊ののちに結婚した。甲種の人は村うちで年に五～六人くらい。
五尺三寸は大男であった。一六〇センチで兵隊、一六五センチで騎兵。（小島田）
「二六は立ちどおし」と言い遅かった。（下大島）
二十一～三歳くらい。（下増田）
二十二～三歳くらい。五すぎると遅い。（笂井）
結婚適齢期は二十四～二六歳が男で、女は二十二～二十三歳位だった。適齢期を過ぎた場合はイキオクレ、あるいは桑の根をもじってタテドウシ等々といった。（後閑）

見合い　見合いなしの場合もあった。「親まかせ家まかせ」であった。（上朝倉）
昔はなかった。嫁の仕度をして式に行くまでダンナの顔をみせるなと言った。見せると逃げるので。（宮地）
親が決めて、下見をしておいて見合いさせる。（公田）
見合いはなく、親の言うまま。（力丸）
見合いはあまりなく、顔を見ないで結婚する人が多かった。（新堀）
親が決め話をした。（阿内宿）
親に七～八割の権利があった。（上佐鳥）
仲人があり、親の言うなりであった。
男が道の方より見に来た。
二～三日たったらどうかと聞きにきた。（天川大島住宅）
見合いなしの式で初対面の人がけっこういた。その家へ仲人がつれて来て盗み見をした。当人の話はなし。（上長磯）
仲人がくれる娘の家にむこをつれて行った。中座敷に娘をつれてきて男と会わせた。菓子を出させ、出し方を見た。あまり顔は見られなかった。式まで姿が見られないことがあった。結納金は五円。（小島田）
見合いなしで決めた。子は言うままに結婚した。（下大島）
見合いはしないのが多い。親がつれて会わせた。（下増田）
見合いはなし。（笂井）
稲荷様か石塔をみてくると家柄がわかるといった。見合いの時と結婚の時はちがう人で替玉が多かった。見合いの場所は仲人の家、くれ方の家とかいろいろだった。諾否は仲人を通じてやるのが一般的だった。（後閑）
戦前はほとんどくれ方の家で見合いした。場所をとってやるのは戦後になってから。（亀里竜門）

仲人　結婚話は仲人さんが話をもちこんでくる。（上朝倉）
仲人が話をもちこみ、親が決めた。親同士の気質も考えた。「仲人ナナデンボウ」と言うが通らない。（宮地）
親同士で決め、仲人を頼んだ。なれている人（五十～百組もした人もある）に頼みに行った。（公田）
話は仲人さんがもってくる。ナナデンボウとかゾウリキラシとか言った。仲人が好きでめっけて歩く人がいた。「仲人にはまった」と言

う言い方もした。（力丸）

モライ方で、クッツキアイの時に頼まれ仲人を頼んだ。「仲人ナナデンボウ」と言った。仲人には信用のできる人を頼んだ。親同士が決めて仲人を頼んだ。（新堀）

仲人が話をもちこんだ。話があると近所で聞いてきた。男は見に来た。財産のある家では家柄をみたが、普通の家では本人しだいであった。レンアイ、クッツキアイでは仲人を頼んだ。近所で知っていたり、夜あそびで知った場合。（力丸）

話は仲人がもちこむことと、親同士が決めることがあった。「仲人ナナデンボウ」と言う。（新堀）

年をとった世話好きの人。専門に近い人がいた。古着売り、魚屋、屋根屋さんもした。仲人のナナデンボウ、ゾウリキラシ、ハラキリドウグ（破談になったら大変なので）と言った。（天川大島住宅）

おじ・おば・近所の人など。

田畑は多く言った。三反は五反。八反は一町と言った。今は少なく言い、仕事させないと言う。（上長磯）

親せき。時間がとれたので。（小島田）

仲人が話をもちこんだ。世話好きな人。仲人のゾーリキラシと言う。「仲人にはめられた」と言うことがある。話と違う人の場合がある。（下大島）

仲人のゾーリキラシ、ナナデンボウと言う。（下増田）

知り合いに頼んだ。仲人好きの人が村々にいた。まとまればいいといって、適当な人がいた。（笂井）

世間を広くわかっている人で、商人さんが多かった。うそのうまい人、人望のある人がなった。（後閑）

仲人のぞうりきらし、仲人下駄七足とかいった。（後閑・亀里竜門）

(三) 婚姻の成立

婚約　口がためと言う。日をみて決めた。クレ方に仲人さんが酒一升で祝い、使った分を一ぱいにして相手方（モライ方）に行った。（上朝倉）

口がためと言う。日をみて行った。仲人が一升持って行き、クレ方でお祝いをして、酒を一ぱいにしてモライ方におさめた。（宮地）

口がため（樽入れ）と言う。元は樽を二つ持って行ったものだが、今は仲人が来たくらい。式の日どりを決めた。（公田）

口がためと言う。近い家がよかった。仲人が酒を持って来て飲んだ。嫁の家に一升くらい持って来て、のこりを一ぱいにして男の家に行った。（力丸）

樽たてでモライ方に来た。あとで日を決めて式にした。

クレ方に一升を持って行き、使って足してモライ方で残りを使った。（新堀）

嫁方で飲み、持ちかえり、むこさんの方でした。（阿内宿）

口がため。むこ、よめ方に仲人が一升持って行き、半分おき、一ぱいにしてかえす。（上佐鳥）

口がため、樽立てと言う。父、母方の代表の親せきが集まる。

足入れ、カド入れと言って、式の一年くらい前に二晩とまる家もあった。しない家もある。（天川大島住宅）

口がためと言う。男側より仲人が酒をもってくる。酒一升と蛇の目。飲んで酒をまた持って男側に来る。そしてまた飲む。（上長磯）

口がため（樽立て）と言う。仲人が酒一升を持ってクレ方にゆく。半分使ってモライ方にゆく。クレ方にはムコは行かない。近い人や隣保班もあつまっている。（小島田）

口がため（樽たて）と言う。仲人がクレ方で一升の半分を使い半分をモライ方にもってゆく。（下大島）

口がためと言う。内々の人を呼び一杯のんだ。仲人が一升持ってゆく。また、こっちの家に一升もってくる。樽を二つ重ねたものを使う家がある。当時の結納金は三十円。その前は八円。（下増田）

口がためと言う。男の仲人が酒を持ってモライ方にゆく。二本で一本ずつ使うのと、一本をのみ分ける場合とある。蛇の目の傘は仲人のはなむけで、上を見るなと言う意味。（笂井）

口がためといって仲人がくれ方へ酒一升持って行き、半分はくれ方で飲む。くれ方で飲んだ酒をたしてもらい、こんどはもらい方へ行って全部飲むのが礼儀とされた。この時は親せきも同席し結婚の日取りや結納金の額などが決められた。

結納ぶるまいは、式の前日もらい方からくれ方へタンス、ぞうり、赤い祝い樽、唐草のふろしき、着物一式の目録と現金を別々にして仲人を介して届き、くれ方から受け書をもらい正式に婚姻成立のはこびとなった。（亀里竜門）

仲人が、たるの酒をもって、嫁と婿方を往き来する。せんをぬき、半分仲人に飲ませる。のませないと不満があるように思われた。飲んだ分を足して帰す家もあった。（亀里寺家）

結婚式の日取り　暦と女の体の都合で。（上朝倉）

日をみて（大安の日）、女の人の体の都合で決めた。（力丸）

暦をみて、近所のいそがしくない時に。（新堀）

仕事のひまな時に。（上佐鳥）

暦をみる。女性の体の都合と、季節での家の都合による。（住宅）

女の方から暦をみて決めてゆく。（上長磯）

暦で決めた。大安、先勝、友引が良い。（小島田）

暦で大安日で、女の体の都合を聞いた。（下大島）

暦と女の人の体の都合。（下増田・笂井）

十二月〜四月頃までの農閑期にやるのが常だった。（後閑）

婿家への出入り　式がおわってから。「門入れ」と言い、口がためと同時に二日間とまって仕事をした。（上朝倉）

式までは行かなかった。（宮地）

式から出入りした。口がためで一晩とまる人があり、それで行ける人があった。交代にむこも向こうでとまった。（公田）

式まで行けなかった。口がためで入る人もあり、大きいおなかで式の人があった。（力丸）

口がためで行き、仕事をした。（新堀）

式までは行かなかった。相手も知らず、式の次の日にのこったのがダンナであったという話がある。（上長磯）

カド入れと言い、むこの家に二晩とまることがあった。半分くらい。（小島田）

式までは行かない。むこの人も来ない。（下大島）

式までは行かなかった。式までは会わないのが多かった。むこをまちがえた話がある。（下増田）

式から出入りした。口がための時にカドイレになっていると、二〜三日とまったり、手づだいをした。そのまま入ったりする人があった。（笂井）

結婚当日まで行かないのが普通だった。（後閑）

アシイレのことは、カドイレともいう。むかしは、口がためをして、そのまま婚家にいたものが多かった。

いく年も婚家に奉公していてから式をあげるという場合もあった。たいがい、一人ぐらい子供が生まれてから式をあげた。子供がはじまっ

てから式をあげる場合もあった。これは、嫁さんを、そのうちにならすためであった。

カドイレは、忙しいときにむかってすることが多かった。秋の収穫前とか、養蚕の前とか、農家にとってかきいれどきの前にした。

むかしは、カドイレがきめ（婚約）のようになっていた。

カドイレは、大尽のうちでもやったこと。

ある旧家で、カドイレしてから四年間くらいで、式をあげた場合もあった。

カドイレしておいて、両家の間を行ったり来たりする場合もあったし、カドイレで来っきりの場合もあった。（女屋）

足入れのことを、カドイレといった。カドイレで嫁に行くといった。

クチガタメでカドイレをした。人によっては、カドイレで行って、それっぱなしの人もいた。これは、ご祝儀をしない。都合がわるくて、式があげられないという。

忙しくて式があげられないで、秋まで先方へ行っているという人もあって、ちょっと（七日間くらい）行って帰ってくる人もあった。

長いこと行っている場合は、その間に内祝いというので、近所の人を旦那よびにして祝った場合もあった。

カドイレしてから、嫁さんは、とつぎ先と里とを行ったり来たりした。

農作業が忙しいときは、どちらの家へ手伝いに行ってもよかった。

また、なにか出来事がある場合も、双方で行ったり来たりした。

カドイレで、縁談をやめる場合もあった。

カドイレは、身上のよしあしには直接関係のないことであった。

むかし、カドイレもしないで、二人が一回もあわずに式をあげる場合もあった。こういうときには（もらい方で）ごまかしができた。たいがい、婿方では、嫁さんを内緒で見に行っている。ことによると、見に行っていやになる。困るので、見に行かない場合もあった。

むかし、嫁になる人ではない、ちがう人を見せてごまかした場合もあった。

たとえば、姉と妹がいて、妹さんの方がきりょうがよかったりすると、妹さんを見せておいて、姉さんを嫁にくれたという場合もあった。

カドイレをしないほうがふつうだった。

すぐに式があげられないときに、カドイレをした。

口がためのときには、泊らない人もあったし、一日とか二日泊った人もあった。

カドイレは、忙しくて困って、嫁にもらうことがきまったとき、うち人数に困っている場合にした。

年まわりのわるいときにもカドイレをした。

もらい方が貧乏で、式をあげることもできないで、カドイレですませてしまう場合もあった。こういうときは、仲人は、式をあげないからというので、仲人礼をもらえず、損をするということもあった。

こういうときでも仲人が間にたって、口がためはする。酒一升もって、むこうとこっちへ行く。骨折り損ということもあった。

嫁入りの着物をこしらえても、式をあげない人もあった。髪はまるまげに結っても、式をあげない人もあった。

口がためできっぱなしになった。いっそうおくりになってしまう。あの人は嫁御になんねえんだと人がいった。だから、どんな思いをしても、式をあげた。

正式に仲人をたのむと金（かね）がかかるので、親類の人の世話になってごまかす人もあった。（東上野）

結納　仲人さんが日をみて、親とも相談して、式の前日かその前に

した。

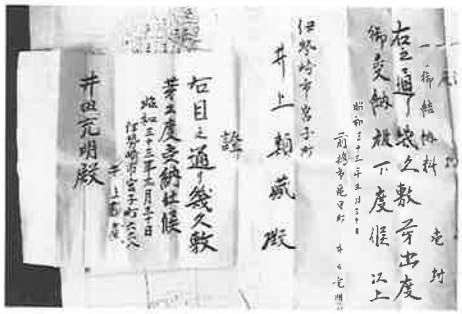
モライ方がクレ方にタンスを贈ったので、一緒に結納にした。

目録をそろえて出し、受け書をもらってくる。おじさんん位の立ち合いがあった。タンス・着物（嫁入り衣装）、下駄、カサ、トモシラガ、ノシなど。（上朝倉）

日を決めてした。結納金は三十円～高い方で五十円。

目録には、着物・帯・足袋・アゲボウシなど一式が書いてあった。結納金も書いてあった。タンスも贈り、タンスに入れてきた。

「結納目録」（西善町矢田）



「結納受取」（西善町矢田）

クレ方に行き、ハンコをおした。ハカマ代と言い、いくらかつつんでかえした。荷物は前の日におくった。（宮地）

口がための日にしめしあう。目録には、着物（白・黒）・帯・スルメ・カツオブシ・結納金が書いてあり、目録と実物をてらしあわせた。

目録は、うけとりに名ハンを押してかえした。（公田）

昔はできあいで、いい日を選んでした。ていねいだと、着物を持って行き、目録と照らし合わせた。式の前日にタンスをひっぱっていった。（力丸）

前の日にした。玄関の板の上にならべた。（新堀）

前の日に仲人さんが持って行った。「受けとりもうしそうろう」と書いて受けとり書とした。道具は翌日持ってきて被露をした。

三十～五十円くらいの結納金があった。江戸褄（ないと借りて持って行く）、タンスが入った。（阿内宿）

口がための日にしてしまう。目録にして書いた。一見の新客の名も書いた。（上佐鳥）

式の前の日が結納おさめで、タンスと結納金がきた。（住宅）

前の日あたりに日を決めてした。目録と金。昔は五～十円（十～二十円）が多かった。（上長磯）

結納おさめは日を選んでした。前の日が多い。目録を書いて決めた。「祝い樽・のし・スルメ・カツオブシ・タンス・結納金〇〇円受けとりました。」と書く。仲人は蛇の目と酒を出した。（小島田）

式の前の日か、その前。大安の日。結納金をおさめ、ハカマ返しで半分くらいかえした。

喪服一式（黒・帯・ぞうり・バッグ）を作っておき持って行った。その時に作っておくものと言う。モライ方の紋を入れる。カツオブシ・コンブ・麻が目録となっている。（下大島）

前の日に仲人が行った。結納前にタンス一棹を持って行った。（笂井）

結納収めといって式の前日きょうだい近親者、はなむけを持ってくる人全員がたち合った。麻、昆布、扇子、するめ、かつぶし等を半紙でくるみ、水引きがかけてあり、祝い樽の酒をそろえて届けられた。はなむけは二百円、五十円、その他三十～五十円位だった。（後閑）

結納金の半分はハカマ返しといってもらい方へ返すのが礼儀だっ

た。（亀里竜門）

婿のうちで、嫁仕度が仕上がると、みんなに確認のためにみてもらった。落ちなしということになると、目録をつくって、結納おさめに行く。結納は、仲人がお供をつれてくれ方へ持って行って納めてきた。（そのうちの都合で、仕度ができあがった時点で結納おさめをした。）（櫛島）

仲人まわり　昔はあった。式の二～三日前。隣保班や村内の近い家を回った。昔は仲人が道中の急所・急所に仁義をきった。昔は横どりがあったのでと言う。（上朝倉）

近所を口がための時にまわった。（宮地）

式の日に、クルワを回った。区長さんのところや寺も回った。手ぬぐいを置いた。（公田）

口がため（タルタテ）の時にクルワをまわり、手ぬぐいを出した。（力丸）

口がための日にまわった。（新堀）

御祝儀ののちに隣組をまわった。（上長磯）

隣保班に名入れの手ぬぐいを配った。（下大島）

前日に（結納おさめ）隣保の人と区長・組長の家をまわった。（笂井）

口がための時、おじさん格の人を仲人をつれて区長さんの家の他、主だった親せきの家をまわる。（後閑）

仲人とくれ方から本家の一番の長老格の人が立ちあい、名刺がわりに手ぬぐい等をもっていった。（亀里竜門）

結婚を許されない場合　カケオチの例がある。

まわりが承知の上で、親を納得させ、親戚がむかえに行った。（上朝倉）

例なし。（宮地・力丸・新堀）

例なし。親が言った通りにがまん、あきらめた。（公田）

かけおち。心中した人もある。（天川大島住宅）

好いた同士のものはまれで、あきらめた。（上長磯）

かけおちした例がある。（小島田）

かけおちの例がある。あきらめる場合が多かった。（下大島）

かけおちをした。一週間くらいしてもどった。クレ方があきらめた。（笂井）

カケオチや心中する人もいた。（後閑）

通婚圏　利根西・旧市街は少ない。（上朝倉）

笂井・小屋原・宿阿内など、上川渕・下川渕の内。（宮地）

利根むこうはあまりない。京ケ島・滝川からは縁があれば来る。（公田）

隣村くらい。歩いてくるので。（力丸）

利根川があったため東より来る人が多かった。（新堀）

まわりの村や親戚（いとこ同士が多かった）。親戚がふえなくていいと言った。（阿内宿）

上川渕・荒砥・富士見・増田・赤堀・大胡辺まで。自転車で三十分くらい。（天川大島住宅）

木瀬・桂萱が多い。上泉・荒砥・上川渕・下川渕からも来た。長磯同士は少ない。（下大島）

荒口は鬼門と言うが、その人の生まれ年による。暦を見て方位により決めた。東の方より来る人が多い。八キロ（二里）内。歩いて来られる範囲。まわり。特になし。（下大島）

荒砥か前橋の南。（下増田）

東より西が多い。荒砥地区。（笂井）

片貝や下増田から嫁にくる人が多かった。（後閑）

だいたいは村内婚が多かったが、公田（くでん）の渡しを通って川向うから嫁にくる人がいた。（亀里竜門）

通婚圏はほぼ一里四方の範囲であった。（広瀬町一丁目）

公田と萩原（高崎市）との間では多いが、亀里の龍門とはよくないという。氏神様同士の仲が悪いからといわれた。（公田）

東は佐波・伊勢崎、西は利根川まで、北は天川・六供まで、南は福島。村内・上川渕・下川渕が最も多かった。村内が多い。一人関係がつくと、縁がふえる。（亀里寺家）

対岸の中島や板井とは、何組かある。（新堀）

玉村の上陽、下川渕、上川渕で、十キロくらいで歩いてこられる範囲だった。（鶴光路）

嫁とり　仲人がまとめることが多く、くっつきできあいは少ない。式で初めて顔を見ることが多かった。四代続いて同じ家から嫁をもらう例もある。家のつりあいが重要で、つきあいも関係した。（亀里寺家）

㈣　結　婚　式

結婚式の多い月　二～三月。仕事のない時に。（上朝倉）

冬～春の四月ころまでに。五月は蚕でいそがしい。（宮地）

春、三～四月ころが多い。農家の仕事の関係で。（公田）

十月～三月ごろ。夏はかせぐ。（力丸）

春、三～四月ころ。（新堀）

三～四月か仕事のおわった十一月から正月。農家の仕事のあいだ。（天川大島住宅）

春先が多い。十二～一・二月ころに口がためで、三～四月に式であった。（上長磯）

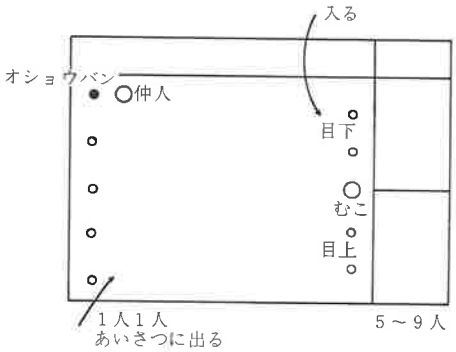
一～三月ころまでの農閑期。暮にまとめて、十二月に樽たて、三～四月に式。（小島田）

農家があるので、正月～三・四月まで。秋は十月から。（下増田）

春の農閑期。夏はない。（笂井）

結婚式の呼び方　ゴシュウギ（上朝倉・宮地・公田・力丸・新堀）（住宅・上長磯・小島田・下大島・下増田・笂井）（後閑）

嫁迎え　当日、モライ方が昼につくように行く。ひと祝いある。夕方送り一見が来る。仲人がクレ方を紹介する。おちつきののち紹介があり、のち酒が出る。



（宮地）

途中の決めた場所に行き、送ってきた列よりうけとった。タンスなどは荷車でくる。（宮地）

迎え一見に行く。家により人数はいろいろ。当日の昼につくように行く。

荷物は大八車で来るのを途中でうけとる。

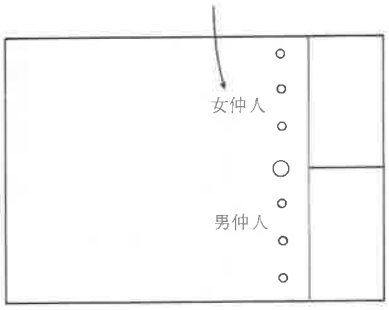
新客（しんきゃく）が行き、ごちそうになる。のち嫁と親戚が来る。途中で嫁と荷物を隣保の人がうけとる。酒一升持って行く。飲んでもいい。

むこ、親戚は八～十人くらいで行く。人数は話（仲人さんが調整）によって決める。ならぶ順は大変である。

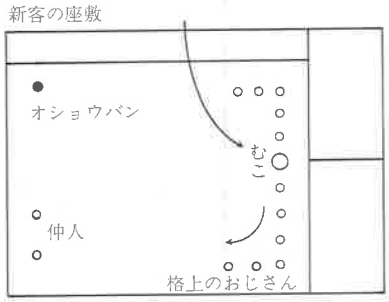
嫁は日没を会図に夕方くる。このあとで嫁方の宴席がある。（力丸）

むこさんと近い人が何人かで行く。一緒に帰ってくる。親戚も来る。（新堀）

前の日に、組合、親戚が来て、服、お椀を用意し、キンピラ・オカ



（力丸）



（力丸）

ラを作った。

当日は、むかえ一見に樽二本をタンスの上にのせて送り、タンスに入れて持って来た。

おしょうばんがいて飲ませ、嫁をつれてきた。

荷物は組合の人が中間地点まで送って来るのをとりに行った。そこで酒をのみっこした。

荷車（のちにリヤカー）で運んだ。一見が来る前には来て、荷物をかざった。（上佐鳥）

むこ、おじ、おば、仲人でむかえ一見に行った。ごちそうになり、帰る。オクリ一見が嫁を送ってくる。（上長磯）

モライ一見がゆく。仲人二人に兄弟、おじ、本家の人、むこなど七～八人。身上による。席順がむずかしく、狂うともめごとになる。

兄弟が多くても総領しか一見には行けないので、一見に行けるというのは大変なことであった。（小島田）

日が決まると当日の昼～午後につくように行った。むこ・仲人・親戚・兄弟が「新客」として行った。（下大島）

式は三日間で、前の日が結納。一日目はムカイ一見が行った。紋付のむこや兄弟・おじ・おばなど近親が五～六人行った。

夜送り一見が嫁さんつれてきた。

二日目が式で、三日目が里がえりで女が行った。里がえりに女一見がついていった。（笂井）

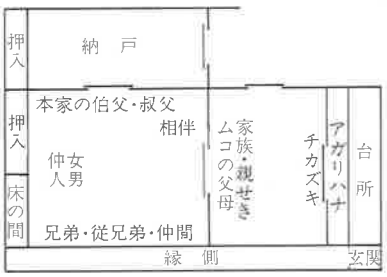
もらい方からムコ・両親・親せき八名位で午前中に出発して中宿にはいった。この時はお茶とおかし程度の対応がまず最初だった。迎えの人数は、もらい方が五人ならくれ方は七人位出るのが常だった。（亀里竜門）

仲人とわかいしゅが人数に関係なく出かけた。迎え一見の最後に区長が音頭をとって「今日のよき日に嫁とりすましてしゃんしゃんのしゃん」で手うちする。この後衣変えをして実家の一見座敷にあいさつする。（後閑）

ムラで嫁さんをもらうときは、施主のうちの近所のわかいしゅが、ムラ境まで迎えに出た。嫁さんを迎えたり、荷物をうけとりに来た。そのとき、高張提灯をもって出た。（下大島）

式の当日、先に、もらい一見が、嫁方へ行く。婿のおじとか男のきょうだいなど、男性が行く。嫁さんを送ってくるのが送り一見。これも男衆のみ。（橋島）

嫁が実家を出る時の作法　縁側より出る。「お世話になりました」と言う。出た跡をほうきではき出す。（上朝倉）



（後閑）

ほうきではき出す。帰ってこないように。橋を三つ渡るまでは、はき出させないようにと言った。（宮地）
クレ方が行くと座敷をはく。（力丸）
座敷をほうきではく。帰ってこないように。（新堀）
トボ口ではなく、縁側より出す。葬式も玄関ではない。縁側が表・正式と言う。その後ホーキではき出す。帰ってくるなという意味。
（上佐鳥）
縁側より出た。（天川大島住宅）
縁側より出て、ホーキではき出した。嫁は式の前の日だけは一番の風呂に入った。（上長磯）
ホーキではき出し、座敷より出てゆく。（下増田）
ホーキで三回はき出し、使っていた茶わんをぶっかく。縁側より出た。（笂井）
嫁さんが縁側から出る時、実母がほうきではき出した。（後閑）
はなむけとしてトモコヨビをやった。嫁さんの支度が出来しだい氏神様へお礼参りした。別れ盃をしてから縁側からはき出しをした。
（亀里竜門）
実家を出る時、ホウキではき出される。（力丸）
トモコヨビ　嫁に行くときには、その日の朝、同じムラの女子をよんでご馳走した。とくに仲のよかった人を呼んだ。よばれてくる人は、駒下駄とか足駄とかを、箱に入れてもってきてくれた。（駒形）
嫁に行くとき、嫁の近所の女の友だちを招待した。みんなして呼ばれて行った。むかしは、トモコヨビというのはなかった。（笂井）
嫁に行くとき、ムラの同い年のものがムラ境まで送ってくれた。嫁の場合は、女友達、婿に行く場合には男友達が送ってくれた。ムラ内の同い年のもののことをトモコといった。ご祝儀のとき、大字全体のトモコを招待した。（櫛島）
むかしは、嫁さんは、仲のいい友だちを、嫁ぐ当日うちによんでご馳走（ちそう）をした。ムラ内の、特に親しい友だち（同級生）をよんだ。これを友だち呼びといった。（上増田）
嫁送り　荷物も一緒に親戚が来る。村はずれで決めておき、荷物のうけとりをする。（上朝倉）
親戚が送ってくる。（宮地）
送り一見に同じか、少し少ないくらいで送る。（公田）
隣保班が送る。（力丸）
迎え一見と一緒に行く。（新堀）
親戚と来た。（天川大島住宅）
送り一見で来た。（上長磯）
親戚と来た。（下大島）
高張り提灯（ちょうちん）で近所の人が組境までむかえに行った。酒を持って飲みながらゆく。（下増田）
送り手側のわかいしゅが荷物を持って村境まで行き、もらい手側のわかいしゅへ受け渡しをやった後、互いに一坏酒を飲みかわした。
（亀里竜門）
嫁入り行列　嫁さんは大半があるいて嫁入りしたが、金持ちは人力車をつかうこともあった。（後閑）
嫁ぎ先に入る際わかいしゅがかかり火や麦たばを燃して迎える。また青竹で嫁さんの裾を持ちあげた。（後閑・亀里竜門）
嫁迎えの際、長い提灯を使った。（亀里竜門）
中宿　チューヤド。一軒隣で来る場合でも頼んだ。ない家もある。休けいをし、婚家で式の用意ができたら入る。（上朝倉）
近くの家。仕度がくずれるので仕度をなおし、化粧をした。（宮地）

近所のチューヤドにとまり、小一時間休む。休むのみ。式場の準備をまつ。（公田）

チューヤド。新客も入る。仁儀をするまでまってもらう。オショーバンが案内し、お茶、お茶菓子がでる。仕度は同じで（力丸）

チューヤド。少し休む。用意ができるまで待つ。（新堀）

途中の家の中宿で一服した。みんなで見に行った。（住宅）

となりの知り合いの家。一たん休む。（上長磯）

近い家。準備の間いったんおちついて、お茶を飲んでから入った。（小島田）

途中で休んだ。あと〇分で来るのでと準備をした。モライ方の人が荷物をうけてくる。（下大島）

オチューヤドと言う。道がもどりにならない家。新客の親類が入った。準備をまっている家。（下増田）

ひと休みをした。（笂井）

御祝儀の服装　男は紋付、羽織。女は江戸褄。髪結い付きで変えたことがある。中宿で江戸褄より訪門着にした。（上朝倉）

紋付、ハカマ、羽織（男）。女は文金高島田に江戸褄。（公田）

女は丸まげに角かくし、男は紋付に羽織はかま。（力丸）

女は島田でツノカクシ、江戸褄。男は紋付、羽織、はかま。（新堀）

御祝儀の服装・江戸褄・留め袖。ツノカクシ。筥迫（紙入れのこと）を胸に入れ扇を持った。男は羽織と仙台平の袴。重ね着の着物。（住宅）

江戸褄に島田。足はゴザ付のアトマルの駒下駄。のちにいい家は黒塗りのパッコンになった。男は羽織、袴に桐下駄。（上長磯）

江戸褄に髪は島田。のちに丸マゲのホンダになった。足は塗り下駄。

男は紋付、羽織、袴、桐下駄であった。（小島田）

江戸褄に高島田。嫁さん下駄というゴザの貼ってあるパッコンをはいた。男は紋付、羽織、袴。（下大島）

むこのあいさつまわり　むかえ一見の時に近所をまわった。村のご長、区長さんの家を回った。むこに来たら村の上・下をみんな、手ぬぐいを配って回った。（上朝倉）

むかえに来て、その村をまわった。区長、伍長、昔はみんなまわった。（宮地）

迎え一見の時にまわった。手ぬぐいを配った。（公田）

クルワをまわった。結納の時に仲人とまわった。祭の時などに行って、一見に来てくれた家を少しずつ回った。そうすると他の親戚もいるので紹介されたりする。（力丸）

迎え一見の時にまわった。（新堀）

前の日に仲人と組内をまわった。（上長磯）

場合により隣保班長がむこをまわす家があった。小島田では次の日にまわった。（小島田）

当日行ってごちそうの間にまわる。家の人が案内して隣保などをまわった。みやげはむこうで準備した。（下大島）

むかえ一見の時にまわる。一見の客は飲んでいて、嫁は仕度をしている。（笂井）

嫁の入家の儀式　縁側をあがる時に、モライ方の姑さんが手を引き、もう一人が笠をかぶせた。街道の入口のところにカガリ火があった。（上朝倉）

ケエド（街道）に麦ワラを置き、棒の上にしばり、燃やした。嫁はまん中をまたいだ。

上にあがる時は姑さんが菅笠をかけ、だきあげた。（上をみないように）仲人さんはハナムケに蛇の目をくれた（これより上を見ないように）。（宮地）

縁側より入った。火をたき、竹の棒をまたいだ。（少しあげる）

入る時には謡い込みがあり「高砂」。「ツキニケリ」ですわる。また、入る時には菅笠をかぶせる。（上を見るな）（公田）

麦ワラの束をもやし、青竹をまたいだ（ケエドたき）。入る時は姑さんが笠をかぶせた。（上を見るなと言うこと）

青竹が持ち上げられないように仲人が踏んでいるものだと言う。昔は謡をした。（力丸）

入る時には縁側より入り、笠を上にかけた（上を見ないようにと言う）。手を引いてあげる。竹が敷いてあり、クワゼを束ねたものをもやした。式の中で謡をした。（新堀）

カドでタイマツをたく。竹の棒があり、通る時に持ち上げた。「内側があなたの家の意味」。本当はまん中であげるが、通ってからあげていた。入る時には菅笠をかぶせた。（上佐鳥）

姑が縁側よりだきあげる。笠をかける。上を見るなということ。

カイドに火をたく。竹をおいてまたぐ。左足よりまたぐと生まれる子が男、右は女と言う。（天川大島住宅）

火を両側でたき、竹をわたし、縁側より姑が笠をかぶせて入る。（上長磯）

カドに麦ワラを置いてもした。竹を置き、嫁がまたぐとあげた。縁側より入るか、もらい方の姑さんがだきあげた。菅笠をかぶせた。「上を見るとキリがない」と言うこと。子供のころには謡があった。六十年くらい前。宝生流。「ここは高砂の……」という謡。（小島田）

たいまつ式の迎え火をたいて、竹ざおをまたがせた。もう帰らないという意味。笠をかぶせ縁側より入った。（下大島）

入口で火をもして、竹をまたがせた。竹をあげるが、ふみつけてくれる人もあった。若い衆の仕事であった。若い衆が謡をうたっていた。（下増田）

むかえ火をたく。青竹を若い衆がいて持ちあげた。

村境に高張りを日中でもたてておいた。形式上うけわたす。

略奪結婚があったので、とられないように定数入りを持って行ってたてたと言う。（笂井）

嫁さんが縁側から入る時、おしゅうとめさんが菅笠をかざし、嫁さんの手をとって上にあげる。（後閑）

菅笠をかざし、おしゅうとめさんが縁側からだき上げる。（亀里竜門）

嫁がきたとき、縁側から座敷へあがるとき、おっかさん（姑）が手をひいてあげた。そのとき、嫁は上を見ないようにと、菅笠をさしかけた。嫁さんは、つのかくしの上に菅笠をさしかけられた。

姑さんは、片手で菅笠をさしかけ、もう片方の手で嫁さんの手をひいて縁側へあげた。（上増田）

和尚さん、結婚式のときの一見客、嫁さんは、縁側からあがった。

むかしの嫁さんは、上をみないで生活していくようにと、姑さんが菅笠をさしかけて、縁側からうちへあげた。（上増田）

門口にかがり火をたき、竹ざおを置いて嫁がまたいだ。この後竹ざおは持ちあげる。嫁は縁側からあげ、姑は嫁にすげ笠をかぶせ手を引いて座敷にあげる。「下を見ろ」といってあげた。（亀里竜門）

ふりこのよめご　ご祝儀のときに雨に降られると、ふりこめ嫁御といって、縁起がいいといった。（野中）

待ち女房　二人いた。前帯で手を入れている。江戸褸。親戚うちで年の近い人。（上朝倉）

二人。両親のある人。前帯で髪を結っていた。（宮地）

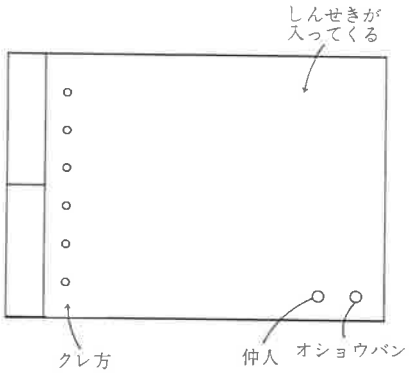
二人いた。江戸褸で前帯にしていた。すわっているだけ。年がそばの人で嫁より若くない人。（公田）

仕度はふつうであった。（力丸）
した家としない家がある。前帯。仕事は特にない。（新堀）
前の代にはあった。（天川大島住宅）
前帯で嫁と同じ江戸褄。すわっているだけ。両親がそろっている人で結婚した人。（上長磯）
近所の若い奥さんが前帯ですわった。嫁さんの世話をする係。
（小島田）
昭和八年三月の式まではあった。家による。特に仕事はなかった。
（下大島）
銀杏返しの髪の人が二人嫁のそばにいた。（下増田）
近所で、まだ結婚してまもない人が嫁ゴの仕たくをしていた。カドに入る時に笠をかぶせてくれた。縁側より姑がだきあげる時に、菅笠やスリバチをさしかけた（上を見るなということ）。（笂井）
座敷に二人、前帯をしてすわっていた。嫁さんが気をおちつくようにとの配慮からではなかったか。（後閑）
待ち女房は、人妻になった人で両親がそろったちゃんとした家庭の人がなった。またひきたて役だから嫁さんよりきれいじゃいけないといわれた。（亀里竜門）
嫁さんがくると、トリムスビの席に、嫁さんと同じ仕度をした女の人が二人坐っていた。これを、お待ち女房といった。年齢は、嫁さんと同じくらいの人。（下増田）
嫁の道具送り　近所の若い衆。クレ方、モライ方ともいて、送る人、うけとる人となった。特別の扱いはしなかった。（上朝倉）
近所の若い衆が頼まれて運んだ。式には呼ばれていた。（宮地）
荷物は一見より先にきて、座敷にかざっておいた（近所の人にみせた）。運んだ人にはお祝いをつつみ、一見と同じ待遇であった。タンス、長持ちがあれば良い家であった。道具はその他に、姿見・下駄箱・ハリ板やタチ板があった。（公田）
式の前で、嫁の新客が帰ったあとで、コザの次の部屋に置き、てつだいの人に御被露した。持ってきた人には一杯のんでもらった。（力丸）
道具は近所の若い人がリヤカーで運び、一緒に来た。（新堀）
その日に近所の人が持ってくる。モライ方が村の境でうけとった。若い人に御祝儀と酒をわたした。（天川大島住宅）
タンスが届く。途中まで近所の人が届ける。酒を持って行き、飲みかわしてうけとる。（上長磯）
嫁さんの家の親戚の人を頼んだ。タンス一棹（三ツ組）と長持ち（のち道具タンスになった。昭和二十年ころより）、下駄箱。
白ムク、黒ムクをつけた。白ムクはその家の家風にそまるようにとの意味。
ここはモライ方がタンスだけ用意すればいい。川の西は結納金でみんな買う。三日目にタンスをあけて見せた。親戚中で見るので着物を借りてきた人もある。（小島田）
その日に持ってくる。嫁方へはタンスは結納おさめに持って行く。
隣保の人が途中まで持ってゆき、モライ方の人がうけとる。酒一升と提灯を持って行く。タンス・長持ち・鏡台・タライ・ハリ板・タチ板・下駄箱・衣類。（下大島）
前に運ぶ。近所の人を頼んで持って行った。足代をつけた。（下増田）
荷物は当日に来た。嫁と一緒か少し前にくる。モライ方が受け渡しをする。嫁が中宿にいる間に長持ち被露があった。着物をひっぱり出してみんなが見た。運んだ人は御祝儀に出た。おつつみがつく。タンス・長持ち（もしくは衣具タンス）・布団一組・寝まき・鏡台など。羽織・式服など実家の紋のものを実家で作ったが、モライ方で式服を作っ

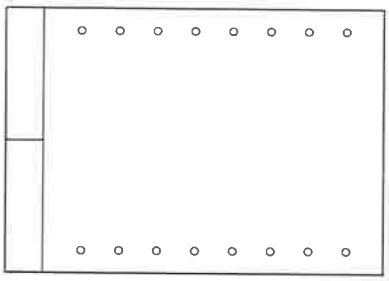
て持ってきてもらう家もあった。（笊井）

道具を運ぶ人はおともといって親せきのわかいしゅ（年寄りでもよかった）がなることが多かった。道具の披露は、仲人まわりの際か取り結びの後に行なう。（後閑）

一見座敷の配列　式がおわると送り一見が入ってくる。（中宿にいる）（上朝倉）



（上朝倉）

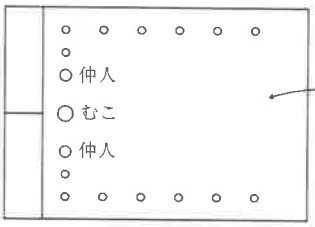

（力丸）

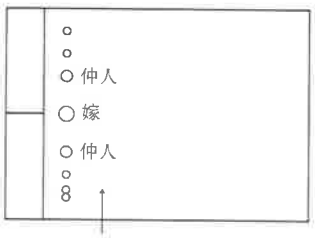
仲人が紹介し、近づきの盃をかわす。嫁さんは仕度をかけて仁義にでる。お給仕の女の子（親せきの子）が二人でる。ネギヌタがおしまいのしるし。

村の人の座敷は台所にあった。（力丸）

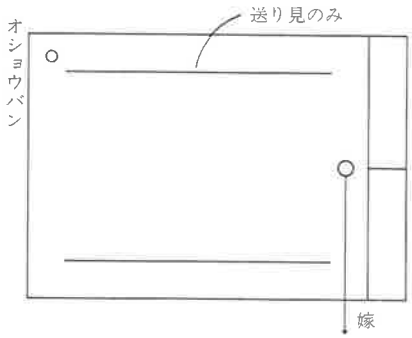
帰さないように飲ませるのがオショウバンの腕。かなり遅くまで（十～十一時）飲ませた。近所の人の座敷は別に作った。（公田）

嫁、むこはおくりに入り、嫁はおしゃくに出る。最後にネギヌタが出る。一見が帰ると身内、近所の人の大祝いになる。嫁さんが接待に出る。（宮地）

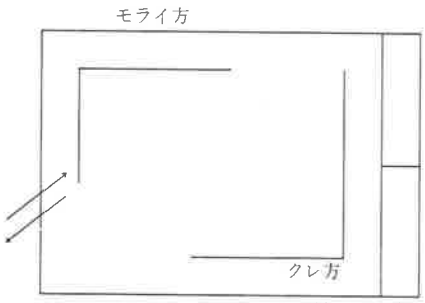




（上長磯）



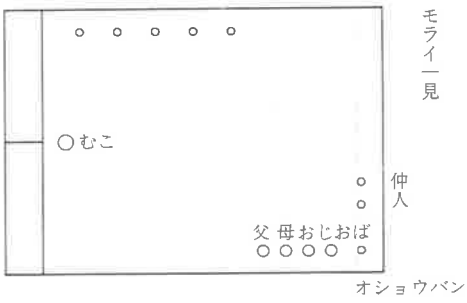
（公田）



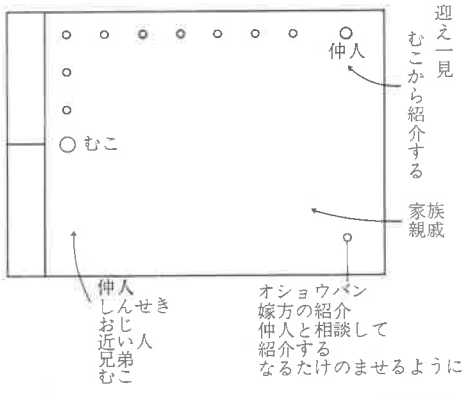
（新客のみ）

（宮地）

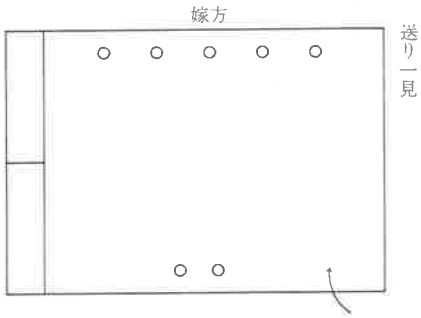
モライ一見　三〜四時に行き、嫁と一緒に帰る。オチカヅキは、順に入って紹介があり、娘が入って飲んでもらう。お膳で料理が出る。



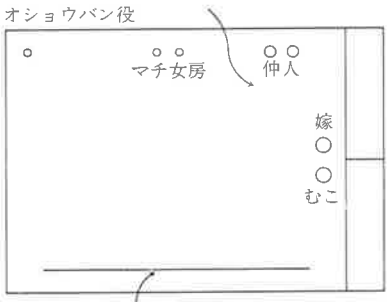
（小島田）



（下大島）



（小島田）



（上朝倉）

送り一見（小島田）

迎え一見（下大島）

婚礼儀式　嫁・むこは中座する。嫁は村内の人へのあいさつ・おしゃくをする。

式では二人の子供（男女）がキッタテで酒をついだ。（雄蝶（おちょう）・雌蝶（めちょう）の折り紙がついていた）男は女へ、女は男へとついだ。

参列する人を親子・村の代表にした例もある。

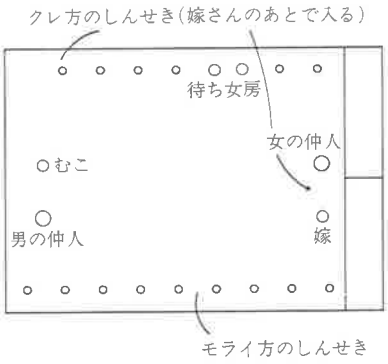
嫁は食べないので折りにいれ実家に送ったこともある。

待ちきれず別の座敷で村の人の宴会がはじまる。

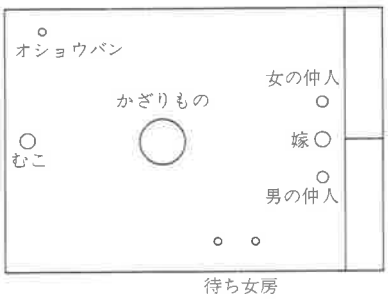
宴会のおわるのが十二時ころになり、片づけおわり寝るころには夜が白む。

家により謡でうたいこむ家がある。「高砂や……」

座敷のまん中に大根とヤブコウジでハマグリをこしらえて向き合わせにしておき、二人の前でいい話を聞かせた。「昔、ハマグリが……」。



（宮地）



（公田）

また、蓬莱山、鶴、亀を米の山の上に作った。（上朝倉）

三三九度は雌蝶・雄蝶がする。男の子が女へ女の子が男へ。

次に両親戚が入ってくる。落ち着きがあり、紹介があって飲み会になる。

約二時間でおわる。

宴会の時にむこさんが逃げ、代わりのむこさんが入ってくる。

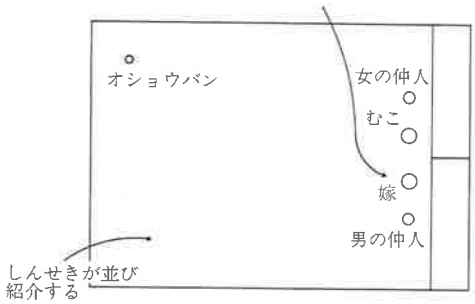
近所の人は別のところで一杯のんでもらった。（宮地）

男の子と女の子の二人の子供が三三九度をした。

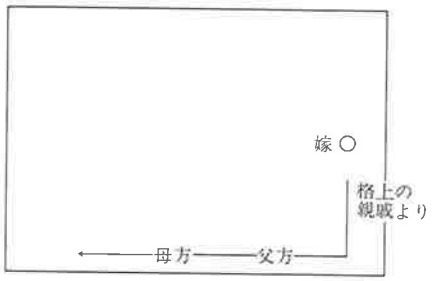
三三九度ののちむこが逃げ、近所の人を仮むこにすわらせた。

謡があり、千秋楽でおわりになった。

座敷の中央にかざりものがあり（鶴・亀）お膳の上にあった。別に大根で男女の道具を作り、ソロバンの上にふんじばり、ころがしてあわせた。（公田）



（力丸）



（力丸）

昭和五～六年ごろには、ソロバンの上に大根で男女の道具を作りころがした。三三九度のあとでころがした。

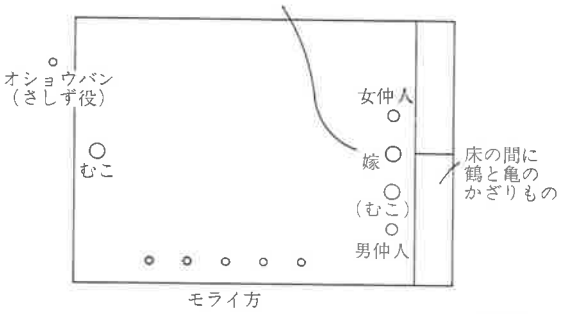
取り結びのあとで、親戚の紹介、近付きがあった。

新客がすわりこむとむこはひっこむ。

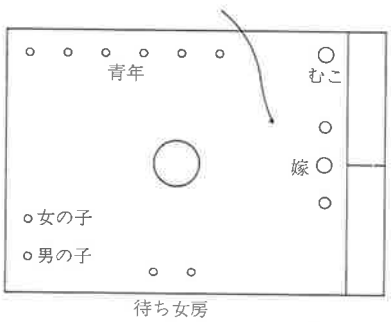
三三九度は男女二人の子供がした。男の子が嫁さんに、女の子がむこさんに。

床の間に紙で作った鶴・亀をかざった。

別座敷に近所の人の座敷を作る。（力丸）



（新堀）



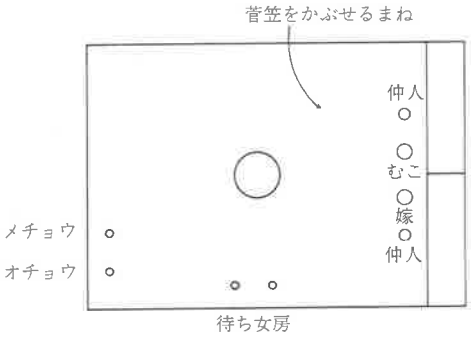
（阿内宿）

皿の上に大根の作りものをおいた。（新堀）

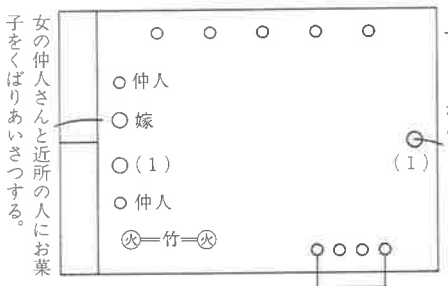
嫁は中宿によって前帯にする。高砂の謡で入ってくる。並んだ青年が謡をした。

三三九度は男の子と女の子がおしゃくをした。その後高砂の謡をして、ソロバンのお祝いをした。男の女の道具を作ってのせてころがした。のちに床の間にかざった。

待ち女房は、嫁に来たての若い人が嫁と同じ仕度ですわっていた。（阿内宿）



（上佐鳥）



（上長磯）

門でたいまつをたく。

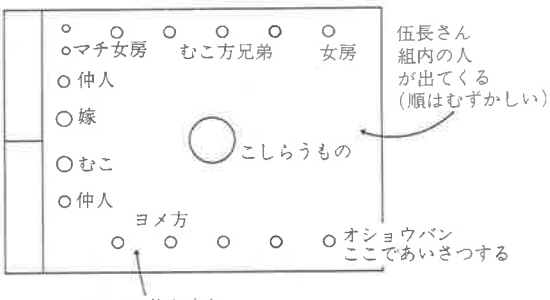
竹の棒があり、通る時にもちあげた。「内側があなたの家の意味」本当はまん中であげるが、通ってからあげた。

入る時には菅笠をかぶせた。

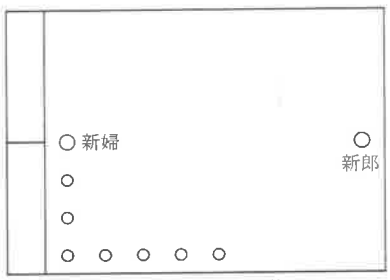
三三九度は、雌蝶（女の子）がむこに、雄蝶（男の子）が嫁に。

中央に米を敷き、紙で鶴とスルメで亀を作ったものを置いた。松・竹・梅をつけた。

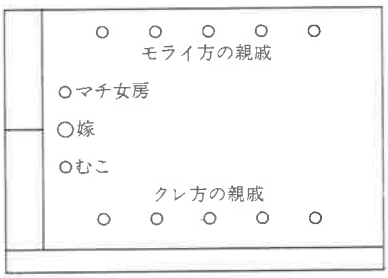
待ち女房は、前帯に手を入れていた。



（下増田）



（住宅）



若い人2人
センスをもって謡をした
高砂
長生殿
千秋楽

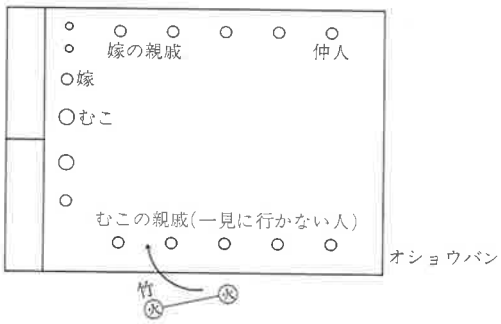
（小島田）

（上佐鳥・天川大島住宅・上長磯・小島田・下増田）

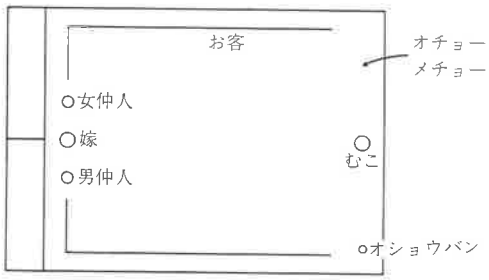
中宿ではオチツキにスシを食べた。

式がはじまると、伍長さんが高砂の謡をうたってくれた。昔は若い衆の仕事。

三三九度ののちかわりムコがあり、ムコが逃げてしまう。おどけたことを言ってわらわせる。ソ



①謡で入ってゆく。(例は少ない、昭和8年がおわり)半日練習をした。
三人で三通り(高砂、四海波、千秋楽)
・オチツキにお茶とお茶菓子が出る。
②紹介
③三三九度、オショウバンが指示した。
④披露宴には高砂のかざりものがある。
嫁さんは仕度をかえて、ついでまわる。
嫁ゴのみやげのお菓子をくばる。



①オチョー、メチョーがキッタテをもち入る。
三三九度
②それから新客が入ってくる。
③太いアキハシ(水引きがかけてある)の長さ30cmのものがおいてあった。
別のハシでお高盛りの上の方だけたべた。
④むこ側の新客を紹介する。おわるとひっこむ。
また出ておしゃくしたりする。

(笂井)

ロバンの上にダイコン・龍のヒゲ・キリコブ・鮭で男と女の道具を作り、真綿の棒でつなぎ、謡の時にころがり出した。

九十の人の式が最後であった。

嫁さんのお吸いものの中にニンジンで小さいものを作り入れておいた。

式がおわって落ち着いたあとにヨメゴよびがあった。隣・近所をよんだ。(笂井・下大島)

取り結び むこ・嫁の順に子供のオチョウ・メチョウがした。親子盃はない。(上長磯)

オショウバンの指図でした。仲人のあいさつ、親戚の紹介で三三九度となった。三三九度は子供の男女のオチョウ・メチョウが男は嫁へ、女はむこへとオショウバンの指図でした。お膳が入ってくると嫁さんは仕度をかえて一杯ずつついでまわった。

床の間に鶴・亀を大根で作り松竹梅をかざった。

米をお盆に盛り蓬莱(ほうらい)山とし、大根と松竹梅をさした。(小島田)

嫁方の親族は取り結びの時には出席しない。

取り結びの後、嫁さんは色直しをして、送り一見を接待する。

(亀里竜門)

謡は、両親がそろっている人の子息三人で高砂を三回謡う。

昔は迎え一見で一日、取り結びで一日、送り一見で一日という風に三日かけて婚礼をした。(亀里竜門)

蓬莱山は、大根の輪切りに松竹梅を立て鶴を結え、米で山をつくる。

両親が健在で、二十歳から二十五歳位の選ばれた若衆三人によって作られた男女の性器を、裏返したそろばんにかざる。男性器は大根をきざみ、まん中に人参をさし、龍のヒゲでおおう。女性器は聖護院大根を使った。これを取り結びの時、時計と反対まわりに蓬来山のまわりを転がした。若衆は「海へ行ったら良いものを見つけた。きれいな貝があったから拾ってきた。」「金山へ行って良い松たけを拾ってきた。」などと口上をのべた。この後これを床の間へ飾り、翌朝嫁婿に煮て食わせた。(亀里竜門)

かわりむこ トリムスビのとき、婿がかくれてしまった。そのあと、代りの婿がでて、トリムスビがすすめられた。(下長磯)

謡

高砂や
月もろともに出で潮の
遠くなるをの沖過ぎて
着きにけり
御影の拝む新たさよ
声も澄むなり住みのへの

所は高砂の
老の波もより来るや
落葉かくなるまで命長らへて
夫れも久しき名所哉

四海波静かにて
枝を成らさぬ御代なれや
松こそ目出度かりけれ
事もおろかや斯る世に
君の恵ぞ有難き

庭のいさごは金銀の
五百重の
しゃこの生き下駄めのうの橋
鶴亀は
君の恵ぞ有難き
泉猩々
夜も盡じ夜も盡じ

此の浦船に帆を上げて
波の淡路の島影や
早や住みのへに着きにけり
住みのへに
実に様々の舞姫の
松影も写るなり

おのへの松も年古りて
木の下影の
猶何時までか生きの松
夫れも久しき名所かな

国も治まる時津風
相に相生の
実にや仰きしも
住める民とて豊かなる
君の恵ぞ有難き

五を連らねてしきたいの
錦やるりのとぼそ
池のみぎはの
宝来山もよそならず
君の恵ぞ有難き

萬代までの

竹の葉の酒くめども盡じ
秋の夜の盃影も傾く
足もとはよろ〳〵と
さむると思へば泉は其の儘

千秋楽

神のと君との道すぐひ
夫れぞげんじょう楽の舞
御々夜。さすかい名るは
治むる手には寿福をいだき
命を延ぶ
さっさっの声ぞ楽しむ

飲めども恋らぬ
入江にわれたつ
よいに伏したる枕の夢の
つきせぬ宿こそ目出度けり

教への春に行くべには
さて萬代の
悪魔を払ひ
千秋楽は民撫で万歳楽には
相生の松風
さっさっの声ぞ楽しむ

完

うたいこみ　嫁が門口に入り、縁側につくまで、ちょうどになるようにうたう。（力丸）

婚礼の謡　嫁が入り口で竹の棒をまたぐと「高砂や」をうたいはじめる。

三人でうたった。

頭の文句を一人がいい、他の二人が続いて合わせてうたった。近所の人がそれに続けた。

この謡の練習は、朝から別室で師匠から酒を飲みながらおそわった。「千秋楽」はいそがしくうたう。「千秋楽」の謡の途中でムコが逃げる。

昭和八〜九年頃、うたったおぼえがある。（力丸）

披露宴　大正のころはつきあいが広く、広い隣保班で、家中呼びを十〜十五軒した。

昔は嫁の里帰りの留守に、近所の人が持ってきた荷物をみた。

式の間に菓子をもってきて、近所の人や子供にくばった。（上朝倉）
嫁は宴会の間にあいさつに出て、お菓子をくばった。
嫁入り道具は、つぐ日に姑が近所の人にあけて披露した。（公田）
手伝いの人に嫁がみやげを配った。ムコも向こうに行く時はみやげをもって行った。（力丸）
近い人は近い人で、近所の人は別座敷でしている。（新堀）
三三九度の後で、組合で謡になる。四海波（しかいなみ）など三つあり行なった。十七～八軒集まった。（阿内宿）
親戚・組合の人が全部入り、親戚の長老が進めた。（上長磯）
招待者の範囲は近い親戚位で、その他にお相伴（しょうばん）さんと料理を運ぶ中番さん位だった。（亀里竜門）
食べ物は、赤飯・カマボコ・タイのおかしら・さしみ等で一見座敷ではくれ方が品数が多く、もらい方は少い方がよいとされた。（後閑）
嫁さんが持ってきたお茶菓子は座敷にいる人達の他、勝手の女衆さんや近所の子供達にくばった。（亀里竜門）

むかしの婚礼

中宿…むかしは、嫁さんを迎えるのに中宿があった。
仲人が嫁さんをつれてきて、中宿でやすませていた。そこで、もらい方の準備ができるまで休ませていた。
嫁さんを迎えに行くのは、もらい方の近所のわかいしゅ、これは両親のそろっているという条件があった。このわかいしゅは三人。三役といった。羽織はかまを着ていた。
かどいれ…もらい方の式場の準備ができると、仮仲人が中宿に連絡をした。
そうすると、三役のわかいしゅが、定紋（もらい方の）のついた弓張提灯をもって、中宿まで迎えにきた。
嫁さんを迎えてきて、かど先のところで、長さおをまたがせた。
かどに入るときたいまつに火をつける。
きゅうじが、竹ざおをもちあげてくれた。
そこから縁側までの間、「高砂や」のうたいをうたい、「はやすみのえにつきにけり」で、縁側のところまで行きつけるようにうたう。（櫛島）

入家式　えんがわのところで、姑が嫁さんを抱きあげる。そのとき、女仲人が菅笠を嫁の頭上にかざす。
そこからざしき（オクザシキ）に入って、トリムスビとなる。
トリムスビの式の司会役をつとめるのが仮仲人。
仮仲人役をつとめる人は、近所の人でいくらか物を知っている人。皆さんの前で口のきける人。だから年輩の人をたのんだ。
トリムスビの席には待女房という人をたのんだ。これは、おばさんなど、親戚で相当の年輩の人をたのんだ。また、近所の人をたのむ場合もあった。この人は、前帯にしていた。トリムスビの席に東むきに坐って、手を帯の中につっこんでいた。役目としては、嫁の世話をした。
式のはじまるときに、嫁におちつきとして、赤飯をすこしやって食ってもらった。
式の途中で、婿がにげだす。
「ところは高砂や」をやってから、婿は逃げだす。ひとさわぎ、だんぎをして、婿をみつける。かわりのものが婿をつとめる。
「四海波……」でちょうじめになる。「千秋楽」をうたって終り。
トリムスビが終ると、ちかづきをした。
婿のきょうだい、おじ、おばなどを仮仲人が嫁に紹介した。（櫛島）

むかしの婚礼　式の第一日　トリムスビ

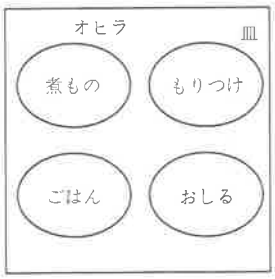
第二日　カネツケ里帰り　この日のことを、サンニチという。
カネツケの祝いといって、おこわをふかしてそれをホカイに入れて嫁の実家へもって行った。
これを持って行くのは、近所のわけえしゅとか、親類の人、このおかえしは、ホケエのなかに、麻と梅干。これは、頭の毛が白くなるまでとか、しわのよるまで元気にすごせるようにということである。
また、この日は里帰りといって、嫁御が里へ帰った。嫁と一緒に行くのは、婿のおばさんとか、女のきょうだいなど、女の人が行った。
これを女イチゲンといった。
第三日…嫁さんの近所まわり
このときは、姑さんがつれてまわった。屋敷神と鎮守様におまいりした。嫁の名前を書いた手拭をもって、近所をあいさつまわりをした。
第一日目に、くれ方の男衆が嫁を送ってくる。これを、送り一見といった。かたいうちでは、二日目に、くれ方から女一見がきた。嫁のおばさんとか女のきょうだいがきた。女一見がもらい方にくる家というのは、ムラでもいく軒もなかった。（笊井）

むかしの嫁入り　わたしは、嫁にくるとき、荷車にたんすと長持（夜具を入れてきた）をのせて女仲人と荷車に乗ってきた。男仲人は自転車に乗ってきた。
式をあげる前に嫁さんをもらい方につれてきておくことがあった。それを、カドイレといった。あとで、式をあげた。
嫁入りのとき、嫁さんは玄関からは入れなかった。縁側からあげた。
そのとき、姑さんが菅笠を嫁さんにさしかけた。これは、嫁さんが上をみないで暮らすようにということであった。
縁側をあがるとき、姑さんが嫁さんの手をひいてあげた。表座敷へあげた。嫁方からは、嫁の兄さんが一見にきた。
トリムスビの式は、奥座敷でした。
式の翌日、カネツケの祝いをした。赤飯をふかして、近所のわかいしゅが嫁の里へ届けた。（朝早く持っていく）その赤飯がいかないと、嫁にもらってくれたことを認めてもらえなかった。
三日目が嫁の里帰り。
このときには、もらい方の親（父親でも母親でも）がついて行った。
「お宅の娘さんをもらいにきました」
と挨拶をした。嫁さんが帰ってくるときには、里の母親がおくってきた。
「ふつつかな者ですが、よろしく頼みます」といって挨拶する。
里の男親は、お節供のときにお客に来たりする。
女一見と男一見とを、ていねいに分けてよこすうちがあった。
（下長磯）

婚礼　むこや身近な人が一見に行き、お祝いをする。お嫁さんをつれて帰る。身内の人がついてきて、むこさんの家でお祝いをする。
入ってくる時に、小麦ワラをもやし、棹（サオ）をまたぐ。若い衆が棹をあげ、仲人がおさえる。
嫁には笠をかぶせ、縁側より入る。（上を見るなということ）
青年が途中まで荷物をもらいに行く。荷車で先に行き、途中で向こう側と取り引きをする。
式の間には、ソロバンに大根で作った鶴亀をのせてころがした。
（阿内宿）
婚礼で、嫁が入ってくるとき、竹を入り口にさしわたしておいて上に持ち上げる。
式には二人の待ち女房がいて、前に帯をしめ、上掛けをかける。
島台には、松竹梅、鶴亀がのり、蓬来山（ホウライサン）には大根の陰陽がのって飾

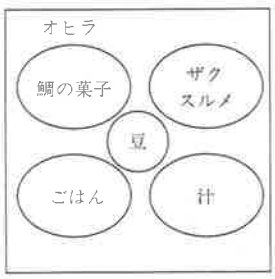
られる。
両力丸では、式の途中でムコがかくれる。
翌朝、カネツケの祝いがあり、三日目に里帰りする。（力丸）
謡が式の中でうたわれた。親方がいて、練習した。納屋に集まってやった。
式の中に、女の人が待ち女房といって二人別室にいる。
そろばんをさかさまにして、その上に大根で男と女の象徴を作り、ころがして一緒にした。（亀里寺家）
嫁入り　門口から入ると、高砂をうたいはじめ、座敷の縁側に上るところで、うたい終るようにする。
縁側から上がる時に、シュウトメが雨笠を嫁の頭の上にかぶせる。
嫁入り道具は、村境まではこび、そこでひきわたしをした。弓張りちょうちんを交換して証明にした。
むかえ一見が、嫁の家を出る時には荷物を積み出し、嫁さんが来る時にはかざってあった。
近所の若い衆がはこんだ。
三日間くらいはかざっておいた。二日目には、女衆（隣組）が見にきて、ごちそうを食べた。（亀里寺家）
結婚式　見合い　結納　結婚式　肝煎（きもいり）の役目　婿、嫁の村回り　待女房　代り婿　お魚　迎え火を炊く　門に竹でとうせんぼ　送り一見料理　葱（ネギ）ぬたは最後（鶴光路）
オチョウメチョウ　式の中で酒をつぐ役は、男の子と女の子をたのんでついでもらった。（亀里寺家）
結婚式を見に来る人への振る舞い　なし。（宮地・新堀）
近所の人が見に来た。子供には菓子をくれた。（公田）
お菓子をくばった。（上長磯）
みんなで見にきた。（小島田）
床入れ　仲人さんが見届けた。女の仲人さんがチリ紙を渡してくれた。（上朝倉）
なし。（宮地・力丸・上長磯・下大島）
仲人が見とどけにくる。のぞいてみる。「紙がとんだ」と言う。（公田）
話にはあり。（新堀）
床入れの風習　おばさん格の人がミトドケ人として立ち合った。
女仲人が二人をねかせ、結ばれたのを確認して衝立（ついたて）の上からチリ紙を投げて役目を終えた。（亀里竜門）
専門の料理番　近所のなれていた人。隣保の人が手伝った。（上朝倉）
近所の人が作った。（公田）
親戚で、好きな器用な人が作った。（力丸）
近所でやった。（新堀）
近所の器用な人。（上長磯）
組内の人で作った。親方は男。（小島田）
隣保班の器用な人が作った。（下大島）
器用な人が作った。みんな買ってきて作った。（下増田）
本膳の料理　人参、ゴボウ、大根の煮たもの。さしみは戦後。（上朝倉）
あまり豪華ではなかった。（宮地）
キンピラ、数の子（子ができるようにとの意）オカラ（結婚式ではつきもの）、なっぱのうでたもの、ウドン（長く細くの意味）、赤飯。
サカナはあまり多くない。（公田）
新客（十二～三人分、親戚）はサカナ折り（鯛、鶴、亀、松、竹のミジンコのお菓子）を魚屋に頼み、スルメをつけた。

数の子、コンニャク、キラズ、キンピラ、菜がでた。
仲人をするとスルメが10枚ずつの二十枚と菓子折りがついた。三年間は鮭が来た。
酒だけは充分に出すようにした。(力丸)
御飯、汁、お椀にトーフと厚あげの煮たもの。里イモと人参(切って)の煮たもの(ザク)を出した。(新堀)
キンピラ、菜、タラ、オカラ、卵焼きを近所の人が出した。
引き物にはミジンコのお菓子(鯛などの形をしたもの)に干しイカを五〜十枚つけた。(阿内宿)
キンピラ、キラズ、厚揚げ、里イモの煮もの。つけもの、ゴマメ、数の子。煮魚とレンコンなどの煮たもの。キンピラ。吸い物が三通り。キラズ。オチツキにソバかウドンが少し出る。膳の酒のサカナの盛ったものが出る。
煮物は三通りは出る。
ネギヌタが出るとこれで終り。
モライ方はイモを出す。(もむの意味)
クレ方は出さない。(もまれるので)(小島田)
里イモ、ゴボウ、煮魚。
ネギヌタが料理のシメになる。
一見の引き物は別にミジンコがある。(下大島)
本膳にはスルメの束を出した。(下増田)
ねぎぬた 婚礼で、ねぎぬたが出ると、「ぬたが出た」といって、上りだからということで、おひらきになった。(亀里寺家)



(上長磯)

結婚式のとき、一見座敷の最後にだす料理がねぎぬたである。
ねぎぬたがでれば、その座敷はおしまいになった。だまっていてもねぎぬたでわかった。(笊井)
結婚式の引き出もの 一見には鶴、亀のミジンコの菓子。(上朝倉)
おヒラにミジンコのお菓子がついた。(宮地)
鯛の形をしたミジンコの菓子。(公田)
固い家で、一般の客にも二枚のスルメをつけた。(力丸)
ミジンコ(亀、鶴、松などで形の菓子の折り箱)
スルメイカ五枚。カツブシ(ムコの引きザカナと言う)。(天川大島住宅)
カツブシやミジンコの菓子。(上長磯)
ミジンコの菓子。鯛、海老、鶴、亀、松竹梅の形のもの。戦後アン入りになった。(小島田)



(宮地)

(五) 婚礼後の習俗

嫁の村廻り 夜、ちょうちんをつけて回った。近い人がつれて行った。昔はかなり多くまわった。(上朝倉)
つぐ日親戚と村中をまわった。(宮地)
三三九度ののちに、一見が飲んでいる間にまわった。近所の人がつれてゆく。郭(クルワ)、自治会長、寺、神社、区長さんのところなど。(公田)
式の当日の三三九度のあと。おばさんがつれて村中をまわった。(新堀)
その日に仲人と近所をまわった。

モライ方のおばさんと神社、寺、親戚、近所をまわった。（住宅）

三〜四日目に親戚の人がつれて村をまわった。昔は六十戸で西と東にわかれていた。（上長磯）

次の日にまわった。お宮・寺などを回った。（小島田）

よく日村まわりがあった。（下大島）

次の日に髪を丸まげにして、組内を一回りした。寺・神社もまわった。（下増田）

当日嫁の仕度で一見が飲んでいる間にまわった。村まわり、また、お勝手でオフルマイといい、手つだいの人にお菓子を配った。（筑井）

婚礼の翌日嫁にいった先のおばさんの案内で村廻りした。区長等の役づきの家が最初で神社、寺まわりもした。この時は江戸褄を着て、手ぬぐい等をもっていった。（後閑）

嫁さんのみやげとして、夜の手伝いにきてくれた人達にあいさつし、おかしを配る。最中等が多かった。（後閑）

カネツケ　昔はあった。つぐ日に歯を黒くそめた。まゆ毛をそった。赤飯をたいて実家に持って行った。「カネツケになりました」と口上を言う。（上朝倉）

オハグロをつけていた人を見たことがある。次ぐ日実家に赤飯がゆく。おかえしに、梅干し、麻、白い紙が来る。（宮地）

おばあさんの代。赤飯をたいて、重箱一つを朝早く「カネツケの祝い」として届けた。（公田）

オハグロはおばあさんはしていた。（力丸）

親の代は、外に出る時にはオハグロをしていた。赤飯を持って行った。（新堀）

前の代の人はつけていた。上品にみえた。赤飯をたいて実家に持って行った。三角の袋に入った粉をといて、ヨウジでつけていた。（阿内宿）

ひいおばあさんの代の人。マユ毛をおとした。（妻になった印）（天川大島住宅）

前の代の人。オハグロをつけた。つけたあとにタバコを吸うと良く染まる。マユ毛をそってしまう。カネツケの祝いとして次ぐ朝赤飯を持って行った。（上長磯）

子供のころのおばあさんの世代の人。明治三十七年生まれの人の母の文久元年生まれの人。明治のころまでおわる。

翌日の荷物を運んだりヤカーを返しに行く時にカネツケのオコワを持って行った。祝儀が出た。（小島田）

カネツケは話にあるのみ。赤飯を作り、カネツケのオコワとして嫁の家に持って行った。（下大島）

昔はマユ毛をおとし、オハグロにした。親の代。嫁の家に赤飯と梅干しをおひつにいれて持って行った。（下増田）

前の代の人。見たことがある。

オハグロの道具も売っていた。マユ毛はおとさなかった。

カネツケのオコワを実家に持って行った。（筑井）

式の翌朝早く、カネツケの祝いといって、嫁さんの実家へおこわを持って行った。ホケエに入れて持って行った。

むかしは、この日お歯黒をつけたという。これは、もらい方から、うちのせがれとおたくの娘さんが夫婦になりましたという祝いであるという。（上増田）

式の翌日、もらい方から赤飯を、嫁の里へもって行った。これをカネツケの祝いといった。（下長磯）

むかしの嫁　十八で嫁にきて、三日目には歯をそめてまゆげをおとした。人妻になったということ、だれがみても人妻ということがわか

るようにした。（上大島）

式の翌日の行事　三日目に近所の女衆があつまった。（上朝倉）

「サンニチ」は村まわり。お宮まいりののち村を全て回った。

「ごくろうよび」は三～四日のちで、集まって食べてもらった。（宮地）

なし。（公田）

次の日は「オカタズケ」があり、手つだいの人は「ごくろうよび」で食べてもらった。オカタズケでは少しずつ持ってきたものを持って帰った。（力丸）

近所の人が来て、嫁はあいさつに出る。荷物披露をした。（新堀）

「サンニチ」には、お勝手の人、親戚が来て赤飯をたいた。

二か三日目が里がえりで嫁さんは、むこさんやおばさんと行った。

五日目がひざなおしで、泊りになった。手みやげを持って行く。（阿内宿）

ゴタイギブルマイ。手伝ってくれた人へのふるまい。（上長磯）

最後の日にバンバライが近所、親戚の人であった。オタイギブルマイ。（小島田）

ゴクローヨビと言って近所の人を呼んだ。（下大島）

カネツケの祝いを通称ホカイといって紋入りの重箱に赤飯を入れて身内のわかいしゅを介して実家へ届ける。お返しは梅ぼしだった。（亀里竜門）

三日通して婚礼する時は、三日目にもらい方の両親が嫁の実家へあいさつに行くこともあった。（亀里竜門）

式の翌日、嫁さんはおはぐろをつけた。かねつけの祝いをする。

これは、おはぐろをつけて、嫁ぎ先の人間になりましたということをあらわす。

嫁の里へ赤飯を届ける。「お宅の娘さんが、うちの人間になりましたよ」というしらせであるという。（赤飯は行器（ほかい）に入れていく）このときのおかえしは、ほかいの中に豆を入れてよこした。これは、たとえ三粒でも一合でも、一升分としてみなしてよこした。

「一生まめでいられるように」という意味であるという。

三日目には、サンニチといって、もらい方の女一見が、嫁をつれて嫁の里へ行った。これをヒザナオシという。

里へ行って嫁を休ませるわけ。

その日のうちに、里方の女一見が送ってくる。女一見は、女だけで、おばさんとか女のきょうだいである。

一見客には、ご祝儀のときのご馳走と同じものをだした。（櫛島）

女イチゲン　式の当日、まず、もらい方から、ムカエイチゲン（ムコイチゲン）が行く。

これは、もらい方（婿方）の男性の親族がついて行った。とくにおじさんが中心、いとこくらいまでのものが行った。人数は十人くらい。

次に、くれ方から、嫁のあとから、嫁の親族（男性）がついてきた。十人くらい。この人数は限られていた。

人数については、双方はなしあいできめた。同じくらいの人数とした。人数がたりないときには、いとこくらいまでたのんで行ってもらったこともあった。

嫁の荷物は、近所のわかいしゅがもってきた。その荷物を、もらい方のわかいしゅが、ムラ境まで受けとりに出た。このとき、双方が提灯をつけてきた。ムラ境で、酒をだし、酒をのみながら荷物を受けとった。

二日目が、嫁のムラまわり。

三日目に、髪を結いなおした。島田まげを、まるまげに結いなおし

た。

この日、嫁は里帰りをした。女仲人がつれて行った。女イチゲンがついて行った。おもに嫁のおばさん、人数は五人くらい。里帰りのときには、泊らずに帰ってきた。くれ方には、すぐには、女イチゲンはなかった。

五日目には、ヒザナオシという。

嫁にきて、この間に、うんとぎょうぎよく坐っていたのでくたびれた。それで、里へ帰って二、三日泊ってきたものという。

このとき、嫁の母親が、姑を近所をつれてあいさつにまわった。姑は泊らずに帰る。

そのあと、嫁の母親が、嫁を送ってきて、姑につれられて、伍組くらいはまわった。手拭一本もってまわった。手拭の袋には嫁の母親の名前を書いておいた。

初孫ができると、嫁の里方のおっかさん、おばさん、姉などが一見ながらお見舞に行ったようだ。（女屋）

女一見　式の当日、嫁さんを迎えに行く。これをムコイチゲンといった。親、おばさん、おじさんもついて行った。このときは、女性も行った。

嫁さんを送ってくるのは、親類のもの、これは男性だけ。この人たちは、もらい方でおそくまで酒もりをして帰って行った。

二日目　嫁さんはもらい方にいる。

三日目　里帰り。

婿さんと一緒、仲人がつれて行った。このときは、泊らずに帰ってきた。

五日目　ひざなおしといって、嫁さんが里へ帰って、好きなだけ泊ってきた。このときは、もらい方の親（あるいは婿）が送って里へ行った。里へ嫁さんをおいて、婿さんは先に帰ってくる。

嫁が帰るときには、里の母親（または男親）が送ってきた。

七日目　これは行っても行かなくとも、どちらでもよかった。

（補足）

式の当日　嫁をもらいに、おじさん、おばさんがまじって行った。

二日目　ムラビロウ。

この日、近所のおばさんなどがつれて、ムラ中まわった。このときは、嫁さんは式のときと同じ仕度をした。まげにわたぼうしをかぶせた。

区長さんのうちへは、お世話になりますといって、手拭をもって行った。ほかのうちへは、なにももたずにまわった。ただ、組合内とか近くの親類のうちへは、手拭をもって行った。

この日、嫁さんの里から、女イチゲンがきた。女親とか、おばさん、女のきょうだいなどがきた。仲人（二人）がつれてきた。

三日目　嫁さんは里帰りをする。仲人がつれて行く。もらい方の親とか婿がついて行った。このときは、泊らずにきた。送って行ったものがつれてきた。嫁をもらうときと同じに、一見座敷でご馳走をした。大さわぎだった。

五日目　嫁さんはヒザナオシに里へお客に行く。このとき、もらい方の親が嫁さんを送って行く。

帰ってくる（七日目くらい）ときには、里の親がついてきた。このとき、もらい方の母親（あるいはおばさん）が、里の親を案内して、近所のうちをあいさつまわりした。

このときは、手拭をもってくばった。これは、もらい方で用意した。もらい方で、どこのうちへあいさつにまわってくれと指示した。

「気のきかない子がお世話になりますから、おねがいします」といっ

てまわった。
式の当日　この日、くれ方からたんすをひいてくる。おともの人がひいてくる。これを、もらい方の近所の人がムラ境まで迎えに行った。
ふつうはわかいしゅが迎えにでる。そこで酒をのんだ。
仲人は、一人もんではできない。二人でうごく。相手がいないときは、人をかりてきた。
一見客は、もらい方の方が多い。くれ方がすくない。
女イチゲンは、娘をくれたうちへきてみたいのでくるのだという。ふつう、女イチゲンとしては、母親は来ない。（東上野）
嫁の里帰り　三日目に里帰り。村まつり。三月五月の節句。お盆。生き盆（もらった年）は「ヤドかり、ナベかり」と言い、食器かりるだけで、近親で一見に来なかった人にごちそうする。
八朔。ショーガ、赤飯を持ってゆく。メケエ（かご）を持ってくる。
お歳暮には鮭を持って行く。（上朝倉）
三日目が里がえりで、おみやげを持ち、一晩とまった。
ヒザなおしは五から七日で、ゆっくりとまれた。
アキアゲにはボタモチを持って行く。
生き盆にはモライ方で着物をこしらえてくれた。モライ方から持って行ったものを配った。ウドンを三本ずつ配ったが、一杯たべてもらうのが本当。
八朔（九月一日）、砂糖折りにショウガを持って行き、みやげにメケエ（ザマ）を持ってくる。
歳暮は塩鮭。
正月四日がむこの年始日で、大版のモチを三枚持って行く。（五枚出し、二枚かえす）（宮地）
三日目に里がえりで、手みやげを持って行った。
モノ日、節句、盆には行った。
生き盆があり、お客にやった。
九月一日には竹の棒でカゴをあげた。
秋あげにはボタモチを持って行った。（公田）
三日目が里がえり、ダンナが送ってゆく。あるきで、親が持たせたものを持って行った。
節句、お盆、正月、お蚕があがると帰った。
生き盆には着物を作り、クレ方に人をあつめた。
八朔はショーガの節句と言い、ショーガとタラを持って行き、ザルをくれた。（新堀）
生き盆には干しウドンを持って行った。
むこうでむこがむこうの親戚を呼んだ。
嫁さんに着物（生き盆着）を作った。
八月一日はショーガと赤飯を持って行った。メカイをくれる。
暮には塩引きを三年持って行った。
仲人さんには三年間節句、節句はした。（阿内宿）
三〜四日目に帰る。帰ってくると実家の母とあいさつをしてまわる。（住宅）
里帰り。三日目にゆく。手みやげを持ち、泊らないですぐに帰る。はじめての正月も八日は日帰り、十五日は泊れる。行ってこいと言われないと行けない。
節句、お盆、米があがるとオコアゲモチ、オクンチ、正月に行った。
八朔（九月一日）はメカイをもらってきた。メカイは蚕のエカキザル。（上長磯）
式のあと三日目が里帰り。実家に行った。すぐ帰ってくる。
一週間くらいしてから泊りに帰る。

その他はモノ日、正月、節句に帰れるくらい。八朔にはショーガと赤飯を持って行った。

正月にモチと酒（ショーギのおかえし）、五月五日の干物もって行った。（下大島）

三日目が里帰りになる。生菓子を持って行く。

八朔節句（八月一日）には箕（ミ）をもらってくる。正月にはモチを持ってゆく。（下増田）

三日目に里帰りをした。その日に帰った。

モノ日に泊りに行った。

節句、お盆、農休み、秋あげ（麦まき後）お歳暮。

八月一日の八朔の節句には新ショーガか新ゴボウを持ってゆく。帰りにイカキをもらう。イカキはお蚕の葉を入れるザルで、ザマやメケエよりも大きいもの。（笂井）

婚礼から三日目の朝実家へ帰る。この時嫁さんのふかした米三升を道具を運んできたわかいしゅがもらい方から預り、くれ方へ届ける。くれ方はわかいしゅ達にごちそうを出す。またお返しとして、おつつみと麻を持たせた。（後閑）

三日目にもらい方の両親が嫁さんを連れて手ぬぐいを持ってくれ方へあいさつに行く。（亀里竜門）

正月十五日は嫁のゴネンシといって里帰りする。その他カイコ休み、盆の頃はイキボンといって帰れた。また旧暦九月一日は八朔節句で留ってくることが出来た。（亀里竜門）

端午の節句はタラの開きを、歳暮にはシオビキをみやげとして持っていくことが普通だった。（亀里竜門）

泊りお客　嫁さんにとっては、里へお客に行くのがたのしみだった。おひまち、おくんち、春まつりのときなどは、泊りお客に行った。（上大島）

生きぼんぶるまい　嫁をもらってはじめての年には、盆の前に、生きぼんぶるまいをした。

このとき、嫁さんは実家へ、うどんとかうどん粉をもって行って、里でご馳走してやった。（上大島）

正月四日、節句には餅を持って里帰り。

八朔の節句には、赤飯、しょうがを持って里帰り。他には、農休み、祭の時に里帰りする。（力丸）

嫁のお客（ご年始）　嫁さんは一月十五日にお客に行った。このときは、折箱などをもって行った。ゆっくり泊ってくることができた。（女屋）

婿のご年始　はじめて正月を迎える嫁さんの婿さんのご年始日が一月四日。この日は、夫婦そろって行った。持って行くものは大判餅。この日は、泊ってくるものではないといった。日帰りにした。泊ると、かいこがはずれるという。（女屋）

正月四日に嫁が里帰りするのに、泊ると蚕がはずれる。なだれが出る。十五、十六は鬼の首もゆるされるといって、泊ってきてもよかった。（亀里寺家）

サンニチといって、三日目の朝早く、ホケエに赤飯を入れて里に帰った。（亀里寺家）

嫁御よび　もらい方のうちの人（本家、新宅）とか懇意の人が、嫁を夕飯によんでご馳走をしてくれた。嫁、婿と嫁のおっかさんをよんでくれた。もらいたてのときにした。このときには、手土産をもって行った。（女屋）

若夫婦ともらい方の親が呼ばれていった。組合（隣組）のうちで呼んでくれた。となりのうち、本家、うしろのうち、新宅など、近所と

かムラの近い親類のうちで呼んでくれた。また、嫁の里の親類でも呼んでくれた。

一日に一軒ずつくらい呼ばれて行った。おこわをして祝ってくれるうちもあった。手土産を持って行った。（笂井）

嫁をもらった年に、嫁御よびというのをした。

ご祝儀が終っておちついてから、となり近所の人とか、本分家のうちなどで、嫁をよんでくれた。

このときは、嫁と婿が二人してよばれて行った。おひるでも、夕飯でもよばれて行った。このときは十銭くらいおかねをもって行った。（上大島）

一見　嫁は、一見といって、婿方のおじさん、おばさんのところへ呼ばれて行った。

これは、式が終っていくらか日がたってのこと。そのムラの祭典のときなどに、おまつりをかねて呼ばれて行った。このときは、嫁婿一緒で手土産をもって行った。近所の嫁御呼びの方が先だった。（笂井）

仲人へのお礼　酒一升とお金。モライ方とクレ方の割合は六対四か七対三。（上朝倉）

お金。七対三などは話し合いで。（宮地）

お金。六対四とか七対三にした。額はいろいろ。（公田）

金。五円（今の五万円くらい）。五対五とか七対三とかで分けるが、縁起ものなので、かたいことは言わない。（力丸）

金。モライ方が多くわける。（六対四）（新堀）

お金。結納の額による。一割くらい。モライ方が少し多い割り合いになる。（阿内宿）

お酒。四分六分（モライ方）か五分五分。（天川大島住宅）

暮に魚。お中元に物。（上長磯）

六分―四分（嫁方）（小島田）

金。六分―四分（クレ方）。（下大島）

三年間は仲人に贈った。（下増田）

十日後位の時日を選んでお礼した。お礼は男六分、女四分とされた。（後閑）

仲人礼は三年位するものだといった。（亀里竜門）

仲人さんには三年、新巻鮭を届ける。（下阿内）

離婚　エンキリ。（力丸）

エンキリしたと言う。（上長磯）

今ほどではない。（下大島）

離婚のことはリエン、エンキリ等といった。（亀里竜門）

離婚者のことはタビツカエリ、デモドリといった。（亀里竜門）

タビガエリ　結婚したのに別れて帰ってきた人のこと。（下阿内）

その他　婿いじめ　むかし、婿を田の中にふんごんだという。

大島に婿にくるのはおそろしいといった。（上大島）

モヤイ身上　もちあい身上（しんしょう）ともいう。

男と女が一緒になるとき、両方から出しあって、身上をつくること。

嫁に行くでもなし、婿に行くでもなし、新宅にでるのでもなし、二人がもちよって身上をつくる。

たとえば、一人息子と一人娘が好きあって、モヤイ身上をもったという。

身上道具を、かねを出しあって買ったりする。二人の名義で家をつくった。

これはあまり例がない。

なお、共同仕事のことを、モヤイ仕事という。（上長磯）

恋愛結婚　笂井では、むかしは、恋愛結婚すると、罰金をとられた。

五円というときもあったという。牛を一頭売ってその金を払ったという話もある。（結納金が五円）

この罰をうけた最後は、〇〇さんと、〇〇さんという。今、八十歳くらいの人が最後という。

この金はきもいれという役の人に払った。きもいれは、にじゅう伍長の下にいて、むかしは組が四つだったので、四人いた。きもいれは、ムラはずれまで嫁さんを迎えにでた。

むかし、笂井をはさんでの縁談はこわれたという。笂井の橋の上にわけえしが寝ていたという。じゃまをしたわけ。（笂井）

結婚式場　今の四十代の人から、公民館や式場に代った。昭和三十六年に三輪さん宅でやったのが最後だった。（亀里）

四、葬送儀礼

(一)　葬式の習俗

葬式の呼び方　ソーレイ。（上朝倉）

ソーシキ。（宮地・新堀）

ジャンボン（公田・力丸）

ジャンボン。（上長磯・小島田・笂井）

トムライ・ソーシキ。（下大島）

ジャンボン。（後閑・亀里）

死の予兆　寺では言う。女の人は勝手口より入り、水の音がする。男は入り口に入る。（上朝倉）

カラス鳴きが悪いとかわったことがあると言う。（宮地）

人玉は寺に飛んで行くと言う。カラスが鳴くとそう言う。（公田）

カラス鳴きが悪いとは言う。（力丸・新堀）

カラス鳴きや（青い火で）人玉が飛ぶと人が死ぬのではないかと言う。

一人死ぬと続けて死ぬことがあり「むかえに来た」と言う。

寺の本堂で「ボーン」と鳴ると死んだとわかった。お勝手から来るのは女、玄関は男。

夢に出たことがあり、あとでそうだったかと思う。（上佐鳥）

カラスが鳴くと「だれかが死ぬかな」と言った。カラス鳴きが悪いと言った。

夢に出ることがある。（上長磯）

人玉が飛ぶ。カラス鳴きが悪い。その声は家族にはわからない。カラスは死臭が好きでわかると言う。カラスは、シニシニと四回、二回区切りで鳴く。

水ガメがカランと鳴った（寺）。（小島田）

カラスの鳴き方。さわいで家の上をとんでまわる。（下大島）

寺で水ガメの音がして、「お知らせがあった」と言った。

音がしたので、「だれか親戚に不幸があった」と言った。（下増田）

カラス鳴き、人玉が出る。カラス鳴きが悪いと、だれか死ぬかなと言った。（笂井）

カラスが鳴く。

ヒトダマがとんだのを見たことがある。

なくなる三日前タマシイが離れるといってヒトダマがとぶ。

ヒトダマは年寄りはゆるく、若い人は元気がいいといった。大きさは、おぼん位の大きさといわれている。

ヒトダマは20歳前に見なければ一生みないといわれている。

ヒトダマが家から焼場の方へ飛んでいったのを見たことがある。自

分が30歳位の時だった。（後閑）

火の魂　火の魂がとぶと、人が死んだといった。（上増田）

カラス鳴き　カラスは奇態だ。

人が死んだときとか、死ぬ前に、カア、カアと鳴く。カラスは、まわってあるいて鳴くという。カラスが鳴くと、何事があるぞといった。カアカアカアと、うんと鳴く。

むかし、あるうちで飼っていたカラスが小屋から逃げだして、そのうちのぐしにとまって鳴いていた。

そのあと、おじいさんが脳溢血（いっけつ）でなくなった。（東上野）

死の知らせ　お寺には、人が死ぬ知らせがあるという。戸をたたくとか、水がめをたたく音がするといった。

男の人は、縁側から入ってくるし、女の人は、お勝手から入ってくるという。

死ぬ人が前もって知らせにくるのだという。（下長磯）

魂呼び、死水　井戸で大声で呼ぶと呼びもどせる。（宮地）

なし。（公田・力丸）

大病の時に井戸にむかって大声で呼ぶ。

死に水は真綿でくれた。（新堀）

死水は脱脂綿を水にひたしてくれる。「おわかれ水」（上佐鳥）

脱脂綿か、ガーゼで口につける。飲みこむ気力はない。（上長磯）

口をガーゼ（綿）でしめらせる。（小島田）

口をガーゼでぬらす。（下大島）

子供がひきつけた時に、名を呼ぶと息をふきかえす。死にそうな時に、井戸にむかって孫に呼ばせる。（笂井）

病気中に夢をみた。きれいな花畑で、気持がそちら（あの世）の方へひかれた時、誰かが耳元で名前を呼んでおり、思わず気がついて、この世に生き返ったと思った。

死水は水でぬらして綿で口をふく。（後閑）

よびけえす　むかし、死にそうな人があると、井戸にむかって、その人の名をよんだ。そうすると、その人はもどってくるといった。

また、長く病んでいる人がいて、もうおしまいというとき、近所の人などの人が見舞にきて、その人の名をよんだ。

これを、夜とぎといった。（天川大島）

安楽死のポックリ観音　駒形のポックリ観音。（宮地・新堀・上佐鳥）

最近駒形のポックリ観音に行くようになった。（公田・力丸）

駒形のポックリ様。（上長磯）

死後の対応　枕なおしをして北向きにし、手を組ませる。上に鎌などの刀物を置く。刀は鯛口を切る。

神棚に笹をひく。（他人にしてもらう）（上朝倉）

枕なおしで北向きにし、手を組ませる。刀物を魔よけに置く。

身近かでない他人が「笹をひく」と言い、竹の葉付きを置く。（宮地）

北向きにして手を組ませる。胸に刀物をのせる。仏壇はしめ、神棚には笹をはる。（近所の人にしてもらう）（公田）

体を北向きにして手を組む。体の上に刀を置く。「後生願えば北枕」と言う。殿様は北向きで、一般の人はそれにならって死んだ時くらいといい北枕にした。（力丸）

北向きにして手を組ませる。体の上に刀物を置く。仏壇、神棚に笹の葉を置く。（新堀）

北枕にして胸で手を組ませる。刀物（鎌など）を胸の上に置き、魔物よけにする。そうでないと猫があがったりすると言う。

線香をたいて、花を一本たてる。

神様には笹をあげる。笹がない時は「宮川」と書いた紙をはる。

カマドには寺の「ホドばらい」の紙が来るので置く。
家の出入口には塩を置く。塩は納棺したあと手を清め、墓に行ってきて清めた。（上佐島）
手を組ませる。
神棚に「宮川」の紙を貼り、笹をあげる。
仏壇をしめる。（上長磯）
神棚を笹でかくす。今は「宮川」の紙を貼る。
北向きにし、手を組ませる。刀物をのせる。農家は鎌が多い。
（小島田）
神棚に笹の枝をおく。笹がないと「宮川」と書いた紙を貼る。
仏壇は閉める。
体を北向きにして刀（刃物）を置く。手ぬぐいをかぶせる。（下大島）
体を北向きの北枕にする。神棚は笹の葉でと顔がくしをする。仏壇はしめる。
動物がとばないように刀物を置く。カシャがつかないようにと言う。（ネコがつく）葬列の途中で墓よりカシャが手をのばしてお棺をとってしまうと言う。
刃物は鯉口を切っておく。その刃物でモッコで入れた縁のつなを切る。
刃物は刀、ナッキリ、ナタ、カマの家がある。（筑井）
枕なおし。（後閑・亀里竜門）
魔除けとして、なくなった人のふとんの上に刃物をのせる。不浄除けとして神棚に笹をあげておく。四十日の忌み明けまで。（亀里竜門）
死者への供物　枕団子を作り、御飯にはしをさしてそなえた。（しない家もある）（上朝倉）
お膳に御飯にはしをたてたものを置く。（普通はするものではない）
枕団子を六個あげる。（玄米の粉の団子）
線香と団子。御飯（はし一本たてたもの）と水。（公田）
神葬祭ではしない。線香のみ。（力丸）
団子。一輪ざし。高盛りではしを一本さしたもの。（新堀）
団子を四つあげる。（上佐島）
枕元に線香一本と一輪ざし（上長磯）
通夜の前は枕元に団子をおいた。（小島田）
机の上に線香。団子を作った。
御飯にはし二本さしたものと、おつゆをおいた。（下大島）
水と一輪花。枕団子と一本ばしの御飯に線香一本。
枕団子は、臨時でいそがしいので玄米の黒い御飯を二つあわせて丸くして作った。（筑井）
通夜　昔はなし。（上長磯）
親戚あつまり、一晩中おきていた。あまり大きくなかった。（小島田）
一晩中近い人がおきていて、線香を絶やさなかった。（下大島）
一晩とまって、みんな交代で朝まで線香をあげた。（筑井）
玄米ごはんに箸をたてたものと枕団子六個と線香一本をたてた。
まきわらに米の粉の団子を半分にしてはりつけたものを一本に七個で七本これを対にして墓に下げておきおまいり（七日毎か）する毎に、はがしてくる。（亀里竜門）
念仏玉　葬式の当日、米の粉をひいてだんごをつくって仏様にあげた。だんごを五十コつくる。そのうちの一つは、ゆでたとき、芯までゆだっているか割ってみた。一升枡の上で切った。その四十九コを山に積んで仏様に供えた。
このとき、一升枡のへった(底)をつかうので、ふだんは絶対に使ってはならないという。（上増田）

枕団子　よくつかないで作るから、黒い団子になってしまう。玄米を粉にしたようなもの。（亀里）

通夜　近い人が一晩中そばにいた。通夜は昔はなかった。

一戸二銭の「カケ銭」を集めた。四歳から一人いくらであった。

自治会で集めたが、昔はその金で棺箱が買えた。貧しい家はその金で葬式ができた。

今は一戸五十円、下の組は百円。（上朝倉）

身内のみで一晩中線香をたやさない。（宮地）

本当に近い人のみ。交代で線香を断やさずつけていた。（公田）

身内が寄る。（力丸）

近い人が寄り、線香をあげた。村中より金をあつめた。火葬代という。（新堀）

ツヤあるいはオツヤという。通夜は近親者で行ない、線香をたやさないでおく。添い寝の習慣は話には聞いたことがあるが、経験したことはない。（亀里竜門）

湯灌　使わないなべで、三本足をたてて、シキビの湯をわかした。（オトーカが堀るのでオトーカよけにした）。

施主がうしろにおこしてだいた。息子でもふるえることがあった。

手ぬぐいを切って体をふいた。男が上半身、女が下半身をふいた。

のち、川に行って手足を洗った。あまった湯はショイダルで川にすてた。

男はフンドシ一つ、女はシリハショリでふいた。（上朝倉）

シキビの葉をとり、なべで煮て、その湯で体をふいた。

肌着になり、サラシを切ってふいた。男は頭のほうを、女の人は下のほうをふいた。使ったものは川に流した。（宮地）

シキビを煮て、その水で洗うと体が軟かくなる。丸いタルにその水はいれておいた。

男は六尺を一本、女は腰巻きと上着の仕度でふいた。

大正ころは終ると、そのタルはフンドシでかついで行った。利根川、端気川にすてた。（上佐鳥）

シキビの葉を湯に入れ、ガーゼ（サラシ）でふいた。男は上、女は下をふいた。ふくのは普通のしたく。

使ったものは利根川ですてた。フトンも流した。洗った人はハダシで利根川に行き、体を洗ってきた。（公田）

たたみをへがし、ショーチューをかけた。女は下のほう、男は上のほうをふいた。

使ったものは寒の内でもはだしですてに行った。（力丸）

シキビの葉を煮て、キレをしめして体をふいた。のち、利根川ですてた。ショイダルにいれ、二人でハダシでかついた。

ふく時はまわりに線香をたて、ハダカでふいた。（新堀）

畳をへがし、裏にした。なくなった人は着物をぬがしてすわらせた。

三本足に鍋をさげ、シキビの葉の湯をわかした。その鍋は四十九日まで使えなかった。

その湯でふいた。男ははだ着、女はシリハショリでふいた。

その後ハダシで川に洗いに行った。（上長磯）

タタミをへがし、死んだ人をぬがしてふいた。シキビの葉の湯を使った。棺に入れる前の固くなる前に棺の形にしてすわらせた。

下着姿でふいた。使ったものはタライに入れ、水も桃木川にすてた。（小島田）

シキビの葉をにて湯を作った。タライに水を入れ、次に湯をいれた。

その湯で体をふいた。

昔はフンドシでふいた。

使った水は川に流し、自分も体を洗った。（下大島）
なくなった人は縄で着物をしばった。
シキビの葉で湯をわかし、体をふきとった。
主人（アルジ）が酒をふきかけ、線香一輪かかげた。
使った道具は桃木川にすてた。布団、着物などは川の土堤でもしてしまった。（笂井）
湯灌する人は、男はふんどし、素足でねじりはちまき、女の人はじゅばんに腰まきでさらし一反を五寸位に切ってしきびのお湯でふく。この際線香をたやさない。湯灌に使用したオケ、ふく時に使用したふとん等はゴミ捨て場へ処理する。（後閑）
湯灌はなくなった場所で行なう。水→湯→しきびの葉（けものにいたずらされないように）の順でつくった湯で身内が行ない、下の方は女の人がやる。（亀里竜門）

湯灌の湯の捨て場
村の共同のエナ焼場（墓地の端あたり）に捨てた。（亀里竜門）

死者の装束　サラシで着物をぬって着せた。ぬう糸にはシリを結ばないでぬった。（上朝倉）
カタビラを着せ（男は上の方、女は下のほう）、三角のキレを頭につけ、手甲、キャハン、ワラジ、底ぬけのタビ、数珠をもたせ、五円くらいをカクシゼニとして着物のすみにつけた。印刷の六文銭をもたせた。（宮地）
経カタビラ（白布）は一反でぬい、左前にした。タビ、ワラジとビタゼニにズダ袋をもたせた。昔は三角のキレはなかった。（力丸）
白装束はサラシで女衆がぬった。白タビにワラジ手甲をつけた。実際は置くだけ、三角のキレをつけた。五銭をいれた。（公田）
白い経カタビラに手甲、三角のキレをつけた。ワラジはしばらず、タビは底をぬいた。六文銭はすそにいれた。（新堀）
念仏ばあさんがサラシで経カタビラをぬった。腹がへるからズタ袋に米をいれ、首にさげ、三途の川の渡し賃として、カクシゼニを五～十銭すそにぬいこんだ。（上佐鳥）

死者の装束　ゆかた。もとはサラシでぬった。念仏もうし衆がぬった。三角のキレをつけ、手甲、脚半、ワラジをつけた。着物のすそに金をいれてしばった。（上長磯）
葬儀社より来たものを着せた。一番大事なものを入れた。（小島田）
着物の上に白いカタビラをかけた。サラシでバアサンがぬった。
三角のキレをつけ、モチを入れる袋を首からさげた。手甲、白タビ、ワラジ、脚絆（キャハン）をつけた。旅に行って困らないように一銭か五里銭をいくつかもたせた。タチ棺。（下大島）
好む着物を着せ、上に経カタビラをかぶせた。三角のキレ、足袋（タビ）、ワラジ、手甲（テッコウ）、脚絆をつけた。お産のできない人が新しいサラシで、縫いっぱなしで作った。ジュバンとおこし。裾にはカクシゼニをいれた。エンマさまにわからないように。ショーズカババアにわたす金とも言う。（笂井）
死装束は帷子（カタビラ）・手甲・脚絆・草鞋（ワラジ）で頭に三角形（男の人の場合）のキレをつけ、足袋といった装束で、左右反対に着せた。しかし経帷子は形だけ着せて生前使っていた着物を土に着せた。
縫う人は近所の女衆（特に年寄り）で、糸に玉をつくらない。足袋は、こはぜの所を切った。（後閑）
死装束はさらしで、早縫いと称して年寄りが縫う。帯はたつこ（たてしばり）にする。左前に着せて、足袋も左右反対にした。その上に本人が気にいっていた着物をかけてやる。（亀里竜門）

納棺　器用な人が松の木で作ったり、大工さんが作った。たて棺。

昔はかめもあった。たて棺の時は、なくなるとすぐに足をまげておいた。（上朝倉）

昔はカメがあった。たて棺から、のち寝棺になった。（宮地）

カメ棺にした。早くに体を固めた。寺の辺は水が高いのでカメにした。（公田）

大正ころには駒形でカメを買って使った。まけるかわりに一杯のませてくれた。石板をのせて使った。明治のころは四角のタテ棺で、のち杉板のおけになった。火葬になってから寝棺になった。（力丸）

棺には好きなものを入れた。眼鏡や飲んべえには酒、杖、数珠などもいれた。（上佐鳥）

たて棺。寝棺もあった。元は大工さんで作った。すわらせていれた。中には好物や日常道具、メガネ、万年筆などを入れた。下大島で甕（カメ）の例がある。（上長磯）

寝棺。土葬のタテ棺は少なかった。甕棺もあった。買ってきたもの。

棺は素焼のもの釉（ウワグスリ）のぬったものがある。（小島田）

タテ棺、いい家は甕。タテ棺は二尺五寸くらいか。葬具屋より買った。（下大島）

タテ棺。（寝棺は特例）作ってもらった。カメ棺はフタをして縄でしめた。ひざをだかせて入れた。棺は二尺四寸は大きい。二尺くらいか。（笂井）

明治の初め頃は甕棺。その後大正～昭和は立棺と寝棺の併用。その理由の一つとして墓穴から水が出てこまる場合もあった為、あるいは硬直が著しく立棺では大変な場合は寝棺にすることもあったのではないか。（後閑）

立棺と寝棺の併用だったが、親族の意志により決まることが多かった。立棺を覆う入れ物は朱塗りのうるしで作られたもので上に宮蓋（みやぶた）（上にホウシがついている）が、また下に滑車がついているものだった。寝棺の場合は宮蓋だけつけた。（亀里竜門）

葬儀執行までの準備　告げには二人で行った。行くと御飯が出て清めの酒も出た。たきたての御飯がでた。

ハヤドウグは四本旗などを作った。

辰の日に田植えをすると、天蓋（てんがい）を貼るのりになるので、するなと言う。（上朝倉）

告げは二人でゆく。出棺の日時を知らせる。酒、サカナの清めが出るが、かわりにおつつみをした。

来たら、女衆がお勝手をガタガタさせる（何か作る）ものという。（宮地）

二人で告げは行く。清めの一杯と昼が出る。（公田）

隣組の人が二人ずつ自転車で行った。遠くには若い人がワラジ銭をもらって行った。

行くと飯をたいて一杯のませてくれた。（力丸）

告げは二人で行った。お昼を出す決まりがあった。若い人が行った。

道具も作った。

四十八個の団子を作った。クシにさし、ワラの芯にさした。六個ずつ八本にした。

床の間においた。（新堀）

告げは二人組で行く。清めが出た。「二人で入ってゆくと葬式だぞ」と言った。（上佐鳥）

ツゲは二人組で行く。来るとお昼と酒を出した。それで、二人組で来るとツゲみてえだと言う。

葬式の道具は村にあり、紙などをつけた。（上長磯）

告げは親せきと近所の人が一組二人で行った。行くとお清めが出た。

村内のは村つげと言い、各隣保班長に連絡をした。

庭場（ニワバ）は決まっていた。

六地蔵、灯籠（トウロウ）、四本旗（シホンバタ）、花籠（カゴ）二つ、弓矢（棺ごしにその家の屋根をうつ）、膳（娘）、位牌（長男）。近い人が棺付きに入る。庭を3回り半まわる。（小島田）

告げは隣保の人などが二人組で自転車で行った。行った先では良い扱いをうける。清めを出す家がある。来てから米をとぐのでこわい飯が出た。

庭銭は一戸十銭集めた。

困っていて式を出せないと困るので集めた。（下大島）

告げは二人で行った。チャチでも紋付をつけるものと言う。

必ず行った家で食事（オカシラ付）を出す。ニワバ（庭場）葬列の道具作りは、龍頭に紙をはり、天蓋（テンガイ）のピラピラをつけ、四本旗の紙をはった。花籠、弓矢も作った。

四十九の団子を作り、オタナアゲまでおいた。ワラにまきつけ、墓まいり（オタナアゲ）に配った。今は書くだけ。（笂井）

葬儀の日取りの決定以下告げ、その他の準備は家々の格によることであり、世主にちかい人で近親者のリーダー的存在の人が中心となって相談の上決めることが多かった。炊事等は近隣にいない親せきや、五人組と称される隣保班が協力する形をとっていた。（後閑）

葬儀の日取りは身内で決定し、それ以外の諸準備は隣保班長さんが指示した。告げは二人一組にして行なう。その理由は落度があってはならないという意味があったものであり、身内以外の人があたるのがたてまえであった。また、告げられた側はかならず清めの酒と食事を出すのが礼儀であった。（亀里竜門）

やき場の金　葬式のとき、大字の人は、やき場の金だといって、一戸百円ずつ出している。これは香典ではない。火葬になってから出すようになった。

前はこうした金をだす習慣はなかった。（栅島）

葬式のときの赤飯　八十歳からの人がなくなったときは葬式のときに赤飯をだした。お昼のときとか、夕飯のときとかにだした。今だと、焼場へ行くときにも、赤飯をもって行った。

なお、葬式のときには、うどんは出さない。長くひくので悪いという。（下長磯）

葬式　魔除けで体の上に刀を置く。

枕元には、びょうぶを逆さにして立てる。玄米をひいて枕団子を四つそなえる。

盆近くに死ぬと死体にスリバチをかぶせてやる。

かめ棺が多く、骨になる頃は、澄んだ水が中にたまっている。（公田）

祭壇　棺とその前後に線香をたてるくらい。祭壇は戦後。（上朝倉）

棺箱に白い布（サラシ）をかぶせ、上に宮棺蓋を置き、前に机を置いた。（宮地）

棺のみ。縄で四角にあんだものでくるむ。机、果物、線香を置いた。（公田）

棺の上に白い布をおき、前に小机と位牌を置いた。昭和三十九年に村で祭壇組合を作り二十年くらい使った。（力丸）

昔はなし、白いキレをかけているくらい。村で蓋を作り使った。（新堀）

寺に近いところは本堂でした。

普通は上に四角の宮蓋を置き、前に花と線香を置いた。棺は体を西向きになるように置いた。（上佐鳥）

机があるだけ、棺箱をたてておくのみ。（上長磯）

寺に組み立て式のがあり、共同で作った。その前はなかった。
十三仏の掛軸をかけたくらい。
タテ棺用のみこしがあり、アナバンの人が四人でかついだ。（小島田）
昔はなかった。
棺の前にある机の上にお膳をおいた。（下大島）
昔はなし。
棺の前に机を置き、線香をたてておがんだ。刃物は出るまで棺の上においた。（笂井）

チカラメシ　鉢に入れ、少しずつくれた。（庭まわりの時に）（上朝倉）
葬列が出る時に少しずつ御飯をくれた。デバの御飯といい念仏バアさんがしてくれた。（宮地）
女衆がチカラメシをくれた。（公田）
ハシで一口ずつくれた。（力丸）
おがみの時に少しずつまわした。（新堀）
列の出る時に一はしずつくれた。（上長磯）
少しずつ御飯をくれた。（小島田）
庭まわりの時に御飯をくれた。（下大島）
庭をまわる前の焼香中に一口ずつ庭場のゴハンを配り食べた。
葬列中にたおれると、またその人が死ぬのでそれを防ぐために食べさせると言う。（笂井）

穴掘り　アナッポリと言う。四人ずつで伍長組単位で、式の隣りの組でやった。
墓地管理人の図面を見て、立ち合って場所を決めた。掘る人には清めの酒を出した。昔は葬式には酒は出さず穴掘りにのみ出した。
酒は祝いにのみ出したもの。
穴掘りには別の家に席を作り、料理を運んだ。おつつみなしでも夜呼ばれた。管理人もよばれた。
穴掘りは穴掘り用の唐鍬を用意した。深さは一m五十～六十cm位掘った。水が出るところでは上におもしをのせたり、棺に穴をあけた。トラの日にいけると帰ってくると言い、十二時すぎに掘った。（上朝倉）
当番に順番があった。四人一組で「アナカタ」と言った。
墓地帳により、図面であいているところに掘ってもらった。寺世話人と施主で決めた。夏の葬式は穴を掘ると水が出た。（宮地）
回り番があり、帳面で見て（墓地台帳）場所を決めた。
お昼におわってその場で食事と清めをした。（家には帰らない。）
穴掘り道具は、置いてきて一週間は置いてきた。フロは一番はじめに入ってもらった。（公田）
隣組で回り番で掘った。三～四人。商売でする人がいた。回り番の人には酒一升で夕飯食べてもらった。（力丸）
アナッポリと言い、郭で順があり当番でした。隣の郭の人がした。（新堀）
順があり、「アナッポリ」と「買い物」で交代した。墓地管理者が指示をして六尺くらい掘った。夏は水が出て大変だった。
使った道具は土をおとさず、管理者の家におき、墓なおしで使い、土をおとして家にもって帰り清めて使った。
「農具のドロをつけてかえるな」とおこられたもの。（上佐鳥）
アナッポリ。組の人がする。お金と酒をつけて飲んでもらう。
墓の向きにより掘る。（上長磯）
アナバン。表があり、葬式があると決まって班の人が掘った。六人。
掘る位置は施主と相談して決めた。四隅に金を置く。（一応形の上では買う）穴は深く六尺は掘った。水の出るところもあり、水で浮くと

ころもある。上から押して埋めた。（小島田）

アナガタ。土葬で六人組で村中で交代でした。順番があった。その組にあたると次の組がした。六人は親戚と同じ扱いで、引き物に本膳がついた。掘る道具は寺にあり、酒で清めて使った。その後一週間は使えなかった。（下大島）

番があった。同じ組の人でない組み合せがあった。掘る時は酒のサカナを持って行く。納めるまでまっている。水が出るので足でおさえてしずめた。（笂井）

アナッポリといった。五人組がこの役にあたり、世主の家の道具を使って掘り、終ったら酒で清めた。穴掘りが終る昼頃べんとうを持っていき食べてもらうというのが一般的であった。（後閑）

アナッポリ又はアナバンといい順番で四人一組で行なった。それに関しては村に保管の墓地台帳に記載され、村の顔役さんが管理していた。掘りきる頃、キンピラ、卯の花、清めの酒等が届けられた。（亀里竜門）

出棺前後の習俗　穴まわり（三回半）の時にお経をした。大きなお墓では四角い石垣があり、そこを回った。（上朝倉）

列が出るとアトネンブツを念仏バアさんがした。（宮地）

念仏をした。出る時に念仏もうしの人が六～十人いてしてくれた。（公田）

念仏バアさんが五人くらいいて、列が出る時に後念仏をしてくれた。（上佐鳥）

念仏もうしの人が五～六人いた。列が出ると、あと念仏をした。（上長磯）

念仏講があり、念仏バアさんがいた。あと念仏をした。今は隣保班でした。（小島田）

庭でアト念仏をした。二～三人。夜も念仏があった。（下大島）

列の出たあと念仏、墓で念仏、夜念仏をした。四十九日にも念仏をした。（笂井）

出棺する際、お別れごはんがあり、箸でひとつまみずつ食べた。（後閑）

出棺の際鉦が一回鳴り、おひつに入ったごはんを勝手の手伝いの人が竹の箸でひとくちづつ配ってあるいた。（亀里竜門）

野辺の送り　ドラとカネを庭で鳴らした。ジャンボンと鳴った。

列は六地蔵のろうそく—竜頭—四本旗など—位牌持ち（あととり）—香箱—お膳（嫁）—棺（子供）「棺づきと言う。昔は四人でかついだが、のち穴っ掘りが正装でかつぐようになった」—棺の上に天蓋—墓標

年をとった人が死ぬと花籠を作りお金をまいた。

盆中の葬式はスリバチをかついだ。

一年に二回葬式が出ると、二回目の時には人形をいれた。「これが三回目だよ」と言った。（上朝倉）

庭を三回リ半まわり、出る時にジャンボンと鳴らした。

六地蔵—灯籠—四本旗—竜頭—お膳—位牌—棺—墓標—天蓋の順。

弓と矢二本用意して、穴回りの時に屋の棟に向かって一本、墓で鬼門の方向に一本放った。（宮地）

順は、竜頭（買ってくる）—六地蔵（近所の人）—四本旗—花籠—お金と小さい色紙が入っている。ひろった金はなるべく早く使うもの。—野位牌—お膳—棺—天蓋（買う）—弓、矢（買う）の順。

矢は列が出る時に屋根にむけてうった。（公田）

高張りチョーチンは身内の近い人で、棺は近い人。庭まわりに弓、矢を用意し、出る時に屋の棟に打ち、墓で打った。弓は腹を中にして

張った弓。（力丸）

一年に二回葬式があると人形をいれた。（新堀）

一つの家で二人死ぬと、二度目の人の時におひな様を棺に入れた。

お盆に死ぬと、スリバチをかぶせる。「みんながお盆に行っていないので、みんなのいないところに行くと、『お盆に行っているのにおまえはなんで来るのだ』とエンマさまにたたかれるので」

庭場は、六地蔵―四方旗―竜頭―銘旗（死んだ人の名がある、有名人のみ）―シカバナ―お膳―花籠―冠（カムリ）（お坊さんのもの）―野位牌―お棺―墓標。棺には棺づきと、上に天蓋。うしろに年寄の人が金剛杖をもった。

列は行ぎっぱらいでもどらないもの。列は庭で二回り半まわった。

天蓋のものを馬につけると魔よけになる。

弓と矢を用意し、一本は棺の上をめがけてその家の屋根にうつ。一本は墓（寺）でうつ。（上佐鳥）

六地蔵（ローソク付）、四本旗、シカバナ、竜頭（タツガシラ）、墓標。写真、棺。弓矢は屋根に向かってうった。金の入っている花カゴが二本あり、庭を三回まわる二回目半で金をまく。

盆、お彼岸（ヒガン）中の葬式では、棺箱の中に擂鉢（スリバチ）をかぶせる。お客にくるのに、行くのでたたかれるので。

一年に二回葬式があった場合、三人目がないようにワラ人形を入れた。（上長磯）

盆中の葬式はのばした。（小島田）

六地蔵（道案内）、四本旗（兄、弟）、竜頭、花かご。

お盆、お被岸中には焼き物をかぶせていけると言われた。帰ってくるのに行くので。

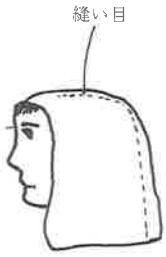
一緒に二人死ぬとヒナ人形を入れた。（下大島）

ローソク三本、灯籠（トウロウ）、四本旗、お棺（一番近い人が棺付き）、位牌（あとつぎ）、写真、お膳（嫁）。

昭和七年の式では、寺に納める着物を持っている人、米の入った袋があった。

お盆、お被岸中は仏さんに擂鉢（スリバチ）をかぶせた。お客に来るのに行くのでたたかれる。（笂井）

庭まわりは左まわりに三回まわり、その間鬼門の方向へ弓矢をうつ。鉦の会図があり、葬列はおよそ六地蔵、灯籠（赤と青の花の絵がかいてある）、高張提灯、花籠、四本旗、弓矢、冠膳、位牌、棺、天蓋、しか花、墓標の順で、それぞれ身内、親戚、縁故者が手わけして持つ。この他ヒガクシと称して竹を四本にさいて半紙を四面につけたものを寺に収める。この半紙には「東西南北何処にありや」の文句が書いてある。この文句は寺の坊さんが書いてくれる。近親者の女の人は白い喪服で、真四角のズキンをかぶる。（後閑）



庭まわりはアナマワリまたはジャンボンまわりといって、日の神様がいるうちは野辺の送りはするなといった。

花カゴは死んだ人の年の数だけ入れる。また花カゴにさわれる人は成人をすぎた人だけにかぎられる。

女の人がかぶるズキンはヒガクシといった。（亀里竜門）

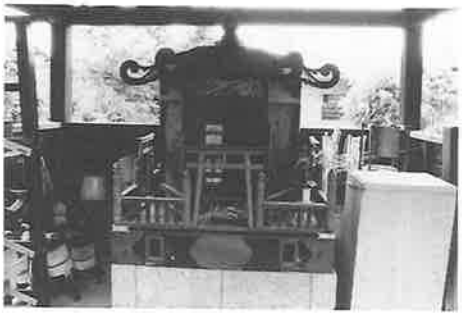
お葬式の葬列について

順序

六地蔵　村の人が案内役

灯籠　親戚

銘旗　親戚
寄贈旗　同上
華籠　同上
四本旗（龍頭）　同上
造花　同上
生華　同上
四華花　同上（主に女子供が持つ）
鐃はち　村の人が二人でジャラジャラ、ボンと音を出す
香炉　親戚
冠衣　同上
お膳　同上
写真　同上
位牌　同上
弓　同上
棺　同上
天蓋　同上
墓標　同上
（下阿内）


葬儀の御輿（小屋原）

香奠と香奠返し　香奠はお金。お返しは一人五個ずつまんじゅうをつけた。七日目に呼ばれた人にはミジンコの菓子をつけた。

元は庭帳があり、来ると判を押し、金をあつめた。

そう式は「みなさんよび」で、子供もみんな来た。生揚げの大きなものがついた。（上朝倉）

香奠はお金で、お返しは葬式まんじゅうやサラシをつけた。

庭香奠は五銭くらい（今は二百円）で、せめて火葬料とか棺着が買えればとか言った。村中で一軒いくらで集めた。お返しはなし。（宮地）

香奠はお金。お返しには葬式まんじゅう（大きいものを2つ）かえした。

また、名目は火葬料として一戸いくらかの金をあつめた。（公田）

香奠はお金で、お返しは葬式まんじゅう。（力丸）

香奠は米の時とお金の時があった。お返しはマンジュウ（玉村より）で、のちにお茶や風呂敷になり、今はいろいろである。（新堀）

香奠は線香とお金。近所では米を一升とか二升。みなさん呼びの家では三升。昔はマンジュウをお返しにした。（上佐鳥）

お金を出し、大きいマンジュウがきた。新盆（アラボン）には粉やウドンを持って行った。（上長磯）

金を出し、マンジュウや砂糖がきた。新盆には干しウドンの二〜三本を持って行った。（小島田）

金を出し、マンジュウがきた。近い人が弔旗をおくった。（下大島）

金を出し、マンジュウがきた。のちにサラシ一反から布団皮とかわってきた。近い親戚から旗がきた。（笂井）

香奠は、お金でこの他供物として座ぶとん、石どうろ、ひばの植木、置きもの台、線香立て、花立等があった。

香奠返しは、ふとん地、瀬戸もの等であった。（後閑）

うどん代と称して棒うどん、砂糖折等であった。

ふとん布（並巾のもの）さらし一反等を返した。（亀里竜門）

庭銭　下大島では、ムラの中に葬式ができたとき、ムラの人は、庭銭というおかねを、そのうちへもって行った。

これは、香典とはべつのおかねであった。組合の人が受付けをした。

ムラの人が受付けとした。ムラの人は全戸もって行った。

受付のところに箱があって、そこへおかねを入れた。その後、記帳

するようになった。これは土葬時代のしきたりであった。
各戸とも同じ金額であった。ムラの人が会葬のときもってきた。
もとは一銭、それが、五銭とか十銭になり、だんだんと金額が大きくなった。やめるときに十円だった。今から五十年ほど前までやっていた。（下大島）
葬式があると、庭銭をもって行った。葬式のでたうちへ、お焼香に行くときにもって行った。これは、一軒で一人もって行けばよかった。帳面があって、それにつけてくる。
下朝倉の範囲でもって行く。今は、各戸百円ずつ出している。もとは十円、二十円だった。むかしから出している。百円になったのは最近のこと。つきあっているうちは、このほかに香典をもって行く。（朝倉）

ヒノウエ　むかし、葬式のとき、ヒノウエ、ヒノエというのがあった。これは、香典とはべつに、施主（仏様）に近い人がもってきた。そこんちの財産に応じて出したようだ。うんとだしたという。これは、むかしのことで、実際にははなしだけで、わしが覚えてはない。（笂井）

葬式参列者の服装　女衆で近い人は白ムク（戦前）。今は黒になった。参列者はふつうの仕度。（上朝倉）
紋付、羽織。黒ムク。近い人は白ムクもあり。（宮地）
普通の仕度で来た。近い人は黒い服。女衆は白ムクにした。（黒もあり）結婚式の時モライ方で白と黒は贈った。（公田）
黒で来た。（力丸・新堀）
黒紋付の羽織・ハカマ。羽織のみのこともあった。結婚していれば持っていた。若い人はあるもので来た。昔は女の人が小さい白い布をマゲにつけた。（上佐鳥）
白装束があった。今は黒。女の人は白いキレをかぶった。来る人のしたくはいろいろ。近所の人は普通のしたく。（上長磯）
近い人は紋付・袴（ハカマ）。参会者は普通のしたく。（小島田）
黒。昔は白もあった。参会者はふつうのしたく。（下大島）

盆中に死者が出た場合　死者にスリ鉢をかぶせる。それはむこうからくる神様に頭をひっぱたかれる為といわれている。
二人目の死者がでた場合は人形をいけて埋葬する。（亀里竜門）

ご苦労賃（お勝手の人）　親がなくなったとき、施主のきょうだい（よそへ嫁いだ女のきょうだい）がお勝手の手伝いの人（組合の女衆）にエプロンとかモンペなどをやった。
これは、施主は関係なし。
お世話になったからというのでやった。ご苦労賃ということである。
こういうことは、むかしはなかった。ここ十年（四十年代のころ）くらいのこと。（上長磯）

(二)　墓　制

葬法　土葬が主で、伝染病は火葬にした。焼き場があった。（上朝倉）
伝染病の人は火葬にした。天川に持って行った。（宮地）
土葬だけ。（公田）
病気の時に川原でもしたことがある。（新堀）
伝染病の場合は天川の火葬場。神明山の平地林に火葬場があった。（上佐鳥）
土葬。（上長磯）
土葬。火葬は伝染病の人。（小島田）
伝染病の場合火葬にした。（下大島）
土葬。伝染病の時は墓で焼いて火葬にした。（笂井）

土葬の方法　縄を十文字にしばりおろした。縄は身内が切った。（上朝倉）

縄をつけ、頭を北に向けて入れた。穴まわりは親戚で、穴方が運搬をした。穴方か親戚が縄を切った。（宮地）

穴に入れて、縄を切った。縁切り縄と言い、一番近い人が切った。「縁が切れる」と言う。（公田）

縄で網を作り、四隅に太い縄をつけておろした。おろしてだれかが縄を切った。棺に印をつけ表向きにした。（力丸）

縄で棺をさげ、縄は入れてしまう。穴は深く、見おろすほどに掘る。（水が深いので。）清めにショーチューをのむ。（新堀）

水が出ると、水の中に入れ、一人が中に入ったままでおもしにして、上よりドロを入れてうめた。（上佐鳥）

石のおしをして埋めた。（夏は水が出た）参会者が少しずつ土を入れた。（上長磯）

六尺くらい掘る。棺オケが入り、近い人がドロをかぶせる。モッコに入れておろし、施主が最後の縄を切る。（下大島）

位牌をもっていた人が縁切り縄をする。子供の葬法は大人と同じようにやるが、ギャクといって親は立ち会わなかった。（亀里竜門）

世主に一番ちかい人が中心で鎌で切って縁切りをする。鎌は浄めて、また使う。（後閑）

夫婦の葬式　夫婦のうち、どちらかがなくなったときには、生きのこったものが、かみの毛をすこし切って、棺桶の中に入れてやった。（下増田）

子供の墓　しょうがん寺（大門の近くにあった寺）の共同墓地に、子供の墓（十八歳未満、未婚者の墓）がある。

小島田の下田弥三郎さんの家では、子供の墓と大人の墓がべつべつにあった。子供の墓は、集会所の西の共同墓地の中にある（ブロック塀でかこまれている）。大人の墓は、前橋東高校の南にある。（小島田）

幼子の仏様　小さい子がなくなったときは、ミカン箱に入れて、ぬかをつめて葬った。お寺さんにおがんでもらってからいけた。（上増田）

墓つくり　竹でメハジキ（ケモノハジキ）を作った。材料は四方旗などのものを使った。竹は白い方を内で、青い方を外にした。

七本塔婆、六角塔婆を置いた。一（ヒト）七日ごとに塔婆はとってゆき、六角塔婆は四十九日に石でたたいて埋めた。（上佐鳥）

棺の上には仏のもの縁起という宮蓋を置いた。井戸のフタで作った例がある。土盛りの上には四の木を置いてそこにおいた。

お宮（宮蓋）のまわりには「イヌハジキ」を竹を割ってさした。（上朝倉）

ハカナオシは次ぐ朝。灯籠などの竹を割って垣根状に作った。上に宮蓋をおいた。（ない人もある。）。（宮地）

アナッポリが墓標をたて、前に野位牌。その前に六角塔婆。その前に六地蔵とお膳がある。墓に行く時に六角塔婆をたたき、六地蔵を一つずつとってくる。六角塔婆はだんだんたたいて打ちこんでしまう。

また、犬が掘らないように竹で垣根を作った。

小さい子の葬式は、小さい土マンジュウを作るくらい。（公田）

土まんじゅうを作り、ハカナオシをした。墓標の前に野位牌とお膳を置き、トラッパジキをまわりに置いた。仏の場合は六角塔婆と、七本塔婆を置いた。（力丸）

土まんじゅうを作り、まわりに竹でクネを作り、上に宮蓋を置いた。

まわりに、旗、チョーチンを置いた。

六角塔婆の前に置き、七日おきに行って四十九日までにうめた。

土マンジュウはまたぐとはっこく（なぐられた）られた。（新堀）

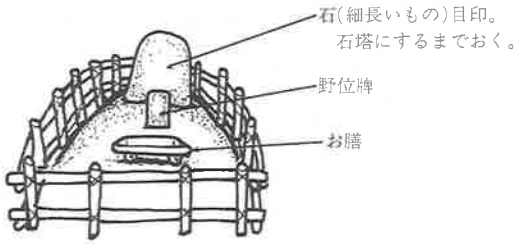
まわりに竹を切ってさした。杉の葉をまわりにさした。（動物が入らないように）塔婆をたてた。（上長磯）

葬式の行列で使った竹を割り、まん中にさして六つにひろげた。

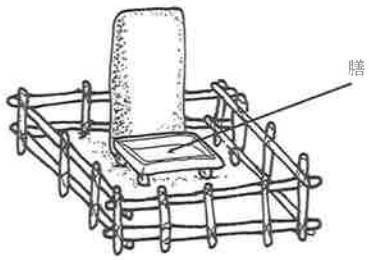
墓はアナ番の人が埋めて仮のものを作った。のちに、その家の人が墓なおしをする。四角にかこいをして、竹矢来（ヤライ）にした。（小島田）

山にして、竹でクネをゆう。（隣保の人がする）墓なおしと言う。（下大島）

子はイヌハジキ、大人はヤライを作った。イヌハジキは墓なおしでヤライにした。野犬よけに犬ハジキにした。



（下大島）



（笂丸）

お膳には左に汁、右に御飯。水団子を六個おいた。（団子を皿状にしたもの）膳は木目がタテになるようタテ膳に置いた。（笂井）

墓つくり　墓なおしといって当日が多いが、七日後に行なう場合もあった。墓なおしは身内が行ない、三方にハジキをめぐらす。（後閑）

イヌッパジキといって、刃物を使わず石で竹を切り四方にめぐらす。この時入口だけあけておく。

野辺の送りにもっていった六角トウバは七日日でタタイテ土に埋める。四十九日まで。また、七本トウバは七日毎にはがしていく。（亀里竜門）

犬はじき　むかしは土葬だった。

死体を、犬にほじくられるというので、墓の上に、犬の予防として、竹を割って、犬はじきをさした。大人の場合は、竹を細く割って、墓の土盛りのまわりに、垣根のようにしてさした。子供の場合は、竹をまん中でわって、折りまげてはじきにした。これを犬はじきといった。

四十九日とか、三十五日の墓なおしのときに犬はじきはとってしまう。（笂井）

イヌッパジキのことは、カッパジキという。葬式の当日、埋葬した塚の上に竹をわってつっつうした。

これは近所の男衆（穴っぽりの人）の仕事。

仏様をうめるとすぐにした。

棺をかついだときに使った竹を、石塔の上で石で割ってつくった。

これは、埋葬した塚を、犬がほじくるというので、そうしたものという。

子供でも、大人でもした。

墓（はか）なおしをするまでかまわずにおいた。（東上野）

むかしの土葬のとき、土まんじゅうに竹をわってさした。

これは、墓なおしのよく朝したこと、身内のものがした。

大人でも、子供でもした。

これは、山犬がきて、墓を掘らないようにということであった。

いつまでも、そのままにしていた。（女屋）

浄め　タライで足を入れるまねをする。塩をふった。（上朝倉）

タライと塩を置く。足を洗って入る。

横にした臼の絵を玄関に書いて置いておく。臼はころがしておく。（宮地）

タライを置き、足を洗うまねをし、塩をふる。臼を横にしたものを置く。（公田）

タライを置き、「臼が横の絵」を書いて置いた。タライで足を洗うまねをして塩まいた。（力丸）

タライがあり、足を洗うまねをした。臼の絵を書いて置き、塩をまいた。（新堀）

タライの上で足を洗うまねをした。臼があり、その上に塩を置いた。（上佐鳥）

塩で体を清める。臼（ウス）を横にしておく。絵をかく家もある。タライに足を入れる家もある。（上長磯）

臼をさかさにして上に塩を置いた。今は臼の絵をかいておく。（小島田）

塩を清める。タライで足を洗った。昔は臼があったが、今は紙に描いておく。（下大島）

モチツキウスを横にして塩をふった。今は紙に書いた臼。（笂井）

臼を横倒しにしておく。タライで洗うまねをして塩できよめる。（後閑）

臼の横倒しは忌み明けの四十九日までもちをつかないの意味がある。

梵字で書いたオハライの札を寺からもらってくる。また勝手にはやや形の異るオハライをへっついの所に置いた。これをホド払いと称した。（亀里竜門）

葬式に行ってきたとき、玄関のところに塩をおいて、それをまいてからうちの中に入った。（上大島）

初七日　昔は次ぐ朝が七日の法事であった。今は当日にひっかえし七日をする。

マンジュウが五個ずつつんであった。

天プラと酢の物（ダイコンとニンジン）か菜びたし、チョコに煮豆、オツボにザクが出た。（上朝倉）

その日のうちにヒツケエシ七日の念仏をした。（宮地）

その日にヒッカエシ七日をした。オバアサンにおがんでもらい念仏をしてもらった。（公田）

七日の念仏をその日にした。近所に念仏ばあさんがいてやった。おつつみと引き物をした。他の人へはお膳。（新堀）

ヒトナノカ。六日の晩に七日念仏ばあさんがした。

ナノカの朝は忌中（キチュー）バライをした。祝いの姿で、清めの酒もあたたかい酒で、はじめて酒、サカナが出る。

念仏ばあさんは、お和尚さんと同じ扱いで、おそなえ、送りむかえ、おつつみをした。（上佐鳥）

七日目にした。お菓子がきた。（上長磯）

ヒトナノカでした。今はヒツケエシナノカでその日にする。（下大島）

初七日、あるいはヒト七日といった。（後閑）

その晩にやる為ヒッカエシ七日といった。

七日の膳といって箸をたてた。その理由はいそいで追い出しをする為といった。料理は、生物の変りにあつあげ、天ぷら、その他きんぴら、おつぼ（いもとにんじん等の野菜のごった煮）等であった。

手伝ってくれた村内の人、その他親族や身内をよんだ。（亀里竜門）

料理内容は、きんぴら、おから、あつあげ、けんちん汁、まんじゅう、ごまよごし、水だんご、酒は清めの酒といって茶のみわんに一杯だけだった。

行事は膳をいただいた後夕方から念仏をやった。集まる人は、家々のつき合いのうちで決めた。

四十九日まで笹の葉を神棚にあげて神様をかくす。（後閑）

㈢　死後の供養

法事　四十九日。味のないアンコ入りの十五センチメートルくらいのモチを重ねて配った。また、新仏を仏壇にあげた。今は三十五日でおたなあげになる。（上朝倉）

七日七日に身近かな人が線香たてにくる。

新盆のオタナまいりには、干しウドンや輪のフを持って行く。おかえしはなし。（宮地）

三十五日に集まって法事をした。（公田）

七日ごとに念仏と墓まいりをした。四十九日におたなあげがあり、近い人が来て念仏もうしをした。

新盆は別に棚を作った。ナスの馬、キューリの馬を作った。（新堀）

ヒトナノカには親族は墓まいりをした。四十九日はする家としない家がある。

一周忌は念仏ばあさんの念仏があった。（上佐鳥）

三十五日か四十九日にお坊さんにおがんでもらう。近い人や組合（隣保班）の人を呼ぶ。

オタナアゲ。

新盆は引き物を出し、食べてもらった。

葬式、オタナアゲ、新盆、一周忌、三年忌の順。（上長磯）

オタナアガリ。（四十九日。三十五日もある。）のち、新盆、一周忌となる。（小島田）

七日七日に線香をあげにゆく。式の次の日にゴクロウヨビがあった。のち新盆になる。（下大島）

四十九日のモチを作った。上が大きいモチ2個。アンピン四十九個。（下増田）

普通は四十五日までにやる。このうち三十五日、四十二日は農家のつごうで行なった。（後閑）

二十一日には念仏講をやった。

四十九日のお棚上げは親せきに集まってもらいデキゴトの際のお礼がえしをかねてやった。その家の出来るかぎりの料理にまんじゅうをつけたものだ。

野位牌は死んだ人の子供の数や、身内の数そろえて四十九日に形見分けする。（亀里竜門）

ユミアケ　人がなくなって、四十九日（三十五日）のオタナアガリのとき、あとつぎの者が、おつつみを出してくれたうちを「いろいろお世話になりました」といってまわった。いい仕度、なにももたずにまわった。ユミアケという。（上長磯）

紙位牌　親がなくなったときには、その人の子供には、木の位牌をわけてやった。子供以外の人には、紙の位牌をくばった。なくなった、その日のうちに渡した。たなあがりになるまでは、仏壇の外においた。もとは四十九日、今は三十五日でたなあがりにしている。

今は、位牌をわたすのは、たなあがりのとき、たなあがりがすんでから、仏壇の中に位牌を入れた。（下増田）

四十九日のこと　なくなった人の魂は、四十九日の間は、自分の家の屋の棟にいるという。その間、子孫を見ているという。

四十九日がすぎると、あの世へ旅立って行く。四十九日には、四十九日の餅をつく、この餅のことは、旅立ちの餅という。

この餅は寺へ持って行った。小さいまるめ餅を四十九個つくって持って行く。そうすると、寺の和尚さんが、その餅の一つに梵字を書いて返してよこす。その餅を墓へ持って行ってその仏様の墓に埋めてきた。

四十九日の餅は、今ではどこのうちでもつかなくなった。今は、まんじゅうをつくってもらっている。（笂井）

四十九日の餅　人がなくなって、四十九日目のときに餅をついた。このとき、五十コの餅をつくって、一コは味見にした。あとの四十九コを重箱に入れて、お寺へ持って行った。

人がなくなったときは、四十九日までの間は、仏様の魂は、自分のうちの屋の棟にいるといった。

仏様は、そこで、うちのものがやることを見ているのだという。だから、その間はとくに気をつけてやれといわれた。

四十九日の餅は、仏様からみて、子供とか、きょうだいのところへも配った。特に、施主のきょうだいのところへは、大きい餅を一かさね持って行った。

塩あんを入れたうちもあった。ふだん、塩あんの餅をつくると、仏様だからよしたほうがいいといった。（下長磯）

四十九日の供養　四十九日には餅をついた。

四十九日の餅（おそなえくらいの大きさ）を寺へわらのつとっこ（今はおはちに入れていく）に入れてもって行った。このうちの一つを寺でかえしてくれた。その餅を墓へもって行ってうめてきた。

親戚のうちへは、塩あんの大きいもちをつくってもって行った。

今は、塩あんでなく、あんぴん。（上佐鳥）

四十九の餅　人がなくなって四十九日目についた。お寺へ四十九コ持って行った。

親戚の人は呼ばれてきて、餅を食べた。

「四十九をするから来てもらいたい」といってきた。呼びつかいの人が、二つかさなったのを持ってきたことがある。塩あんだった。（下長磯）

力餅のこと　わしのおやじがなくなったとき、二之宮の義姉が、四十九日にならないうちに、餅をついて持ってきてくれた。

「姉さん、これはどういうんだい」

と聞いたら、

「うちの方じゃするんだ。親がなくなったうちでは、力をおとしてしずんでいるのが気の毒だからもってきたんだ」

といった。

この餅のことを力餅といった。（笂井）

タチビの餅　おたなあがりのときに餅をついた。これをタチビの餅とつくった。

今は甘いあんを入れてつくるが、むかしは塩あんだった。（上増田）

念仏供養　昔は何人も念仏ばあさんがいて年忌には念仏に来てくれた。（上朝倉）

ヒツケエシ七日とお棚あげには念仏をした。（宮地）

念仏もうしは、オタナアゲ、一周忌、三年忌などでした。お坊さんよばない家もあった。（小島田）

念仏があった。大寒のうちはカネはならさない。（下大島）

葬式の終ったその晩にアト念仏を行なう。専門の女の人四～五人だった。

サンヤ様の時にも念仏講を行なう。（亀里竜門）

あと念仏の水　あと念仏のとき、水を汲んでおいて、念仏を一区切りするごとに水をかえる。ドンブリからドンブリに水を汲みかえる。コップに入れてあげる。水を汲みかえるのは、仏様に近い目下のもの。水をかえるものと、線香をたてるものと二人いた。念仏もうしの両脇にいる。この水は、翌日、墓へ持って行ってあげてくる。（笂井）

水掛け着物　四十九日まで水洗いをして日影に干しておく。（宮地）日影干しにする。（公田）なくなった人の着物を北向きにして干しておく。（新堀）なくなった人の着物を裏庭で干した。（上佐島）なくなった人の着物を北向きにして三日三晩ほした。（上長磯）ひかげにほした。身につけたものはもした。（小島田）なし。（下大島）次く日に着物を洗って日陰に北向きにほした。一週間初七日までおいた。（笂井）七日ざらしといって、屋敷の北側に裏返しにしてほす。だから普段のものを夜ぼしするなといった。（亀里竜門）

形見分け　四十九日。施産の考えによる。「ゆずり」と言う。（上朝倉）お棚あげに形見分けをした。位牌をつけた。位牌分けに同じ。（宮地）お棚あげにした。子供に位牌をつけた。（公田）ゆずり。四十九日にした。位牌をやった。家にはユズリをつけてやった。（上佐島）四十九日に位牌分けと一緒に形見分けをした。（上長磯）女衆がなくなると子がした。一周忌すぎてやった。（小島田）四十九日のオタナアゲにした。（下大島）四十九日にした。（笂井）ユズリといって四十九日に嫁に出たこじゅうとさんが中心となって分けた。（後閑）カタミワケ又はユズリといった。四十九日の忌み明けに行なう。世主自身か、嫁に出たこじゅうとさんが中心となって年功序列の順にくばった。（亀里竜門）

喪中の禁忌と忌み明け　忌み明け。四十九日に村中をまわった。来てくれた村の家を羽織、ハカマで一軒一軒まわった。上は一戸ずつ、下は役員のみ。目下で、あととりなどが回った。あととりが十歳で、一緒に行ったことがある。（上朝倉）ボクを着るという。（宮地）おたなあげでふつうになる。仕事をはじめるのはいろいろですぐする時もある。（新堀）七日の日に施主が隣保をまわった。昔は佐島中まわった。「喪があけて普通になりました」と言う。（上佐島）おたなあげてゆける。昔は一年は神社に行けなかった。（力丸）神様には百日間は行けない。（公田）オタナアゲであける。その日に家のグシから魂がはなれる。それまで線香の粉は片づけない。旅行、神様にはそれまで行かない。（上長磯）一周忌すぎてあける。（小島田）四十九日がイミアケ。それまで外出はひかえ、神様には行かない。（鳥居はくぐらない）イミアケは昔は村中みんなにふれて回った。半日ではいそがしかった。昭和四十一年二月で中止になった。（下大島）神事に関係する人は喪中に徹すること。派手な行動はしない。神社におまいりをしないこと。鳥居をくぐってはいけない。忌み明けは四

十九日をもってあける。（後閑）

一七日・忌明け　むかしは、人がなくなって、一七日には、さかなを出した。イカなどを、いもと一緒に煮て食べたりした。

忌みあけのことは、おゆみあけとも、きあけともいった。

このときは、親戚の人をよんだ。酒、さかなで振舞った。

むかしは、隣組の人もよんだ。今は親戚の人だけをよぶ。イッケの人もよぶ。組合の人は、旦那さんだけをよんだ。近い親戚というのは、むらうちが多かった。仏様からみて、そのきょうだいとか子供、いとこくらいまでよんだ。大勢よばれてきた。

（きあけ）このときは、坊さんはよばなかった。（上佐鳥）

ユミアケ　むかしは、ユミアケというのをした。

四十九日（法事）がすむとその日に、施主が下朝倉中をまわった。これは庭銭をもらっているので、「いろいろお世話になりました」といってまわった。

おたなあげのときにまわった。

おたなあげのときには、位牌わけをした。木の位牌をわけた。これは、仏様からみて、ごく近親者にわけた。子供とかきょうだいにやった。

この人たちには、ほかに、ゆずりもやった。

もらってきた位牌に入れておく。その位牌をもらってきた人がなくなったときは、位牌を寺へもって行って、和尚さんにおがんでもらって焼いた。あるいは墓へもっていって焼いた。

なお、位牌わけのとき、紙の位牌をくばるうちもあった。

四十九日もちをついた。

寺へは四十九コの餅をもって行った。近い親戚にも、餅をくばった。あんなしでまるめたものを二コとか四コとかくばった。（朝倉）

イミアケ　葬式のあったうちで、四十九日がすぎると、イミアケといって、施主がよそいぎの仕度をして、ムラ中をあいさつしてまわった。

このとき、紋付きの着物を着た人もあった。「また、世の中へもどりましたから、よろしくおねがいいたします」といって、ムラ中一軒残らずまわった。

今から三十年ほど前までやっていた。

施主がおたなあがりの日にあいさつまわりをしたということ。

（下大島）

見舞いに米をもってきたこと　むかし、仏様の供養として、念仏を申した。そのとき、近い親類のものは、おはちに米を入れてもってきた。ふつうは重箱に入れてもってきた。

新盆のとき、むかしは、干しうどんを三本とか、五本、十本（近い親類の人）ともってきた。

むかしは、念仏をすると、親戚の人が米をもってきてくれて、もうかるくらいだった。（上佐鳥）

口見舞　人がなくなったとか、お祝いごとのとき、懇意の人とか近所の人が、とりあえず、なにももたずにお見舞に行った。これが口見舞。それよりまわりの人、縁の遠い人は、いくんちかたってから、なにももたずにお見舞にくる口見舞である。

お産があったときは、近所のおんなしゅが、

「よかったね」

といって、お見舞に行く。口見舞である。

ご祝儀とか不幸の見舞については、としよりの人などは、はなしあって、式のあとにお見舞に行った。（小屋原）

年忌　昔はあまり寺は頼まず、念仏ばあさんを頼んだ。（上朝倉）

一年忌には念仏ばあさんの供養があった。一・三・七・十三・十七・二十三・三十三年。三十三年忌はトムライジマイと言う。同じようにした。（宮地）

一・三年でおわる人が多い。ゆとりがない。（公田）

一・三・七・十三年。昔は人よせをした。塔婆を書き、家でおがんでおわる。三十三年忌でおわる。（新堀）

家による。

三十三年忌やる家もある。三年忌をすると法事が三年連続になるので、寺のみでして次は七年忌になることがある。（上佐鳥）

一・三・七・十三・十七・二十三年忌をする。三十三年忌であける。法事は同じ。五十年祭をする家もある。（上長磯）

一・三・七・十三が多い。十三・二十三・三十三年までする家もある。親戚などあつめた。（小島田）

一・三はする。七・十三・十七もする。三十三年が最後。塔婆が葉付きになる。（下大島）

一・三・七・十三が多い。三十三年忌は葉付きの塔婆をつける。（笂井）

三十三年忌までやる。この時は特別なことはせず、普通の年忌と同じやり方。（後閑・亀里竜門）

年忌毎に寺なら供養塔婆をもらい、墓地に供養して立てる。（亀里竜門）

三十三年忌　おばあさんの三十三年忌の供養をした。近所の人や、親戚の人をよんで、念仏を申して、供養した。

三十三年忌の供養をすれば、そのあとは、特に供養をしなくともいいといった。

このとき、葉付きの塔婆をあげるという。これは、話に聞いただけで、見たことはない。（笂井）

(四)　死　霊

死霊が家を離れる時　四十九日のモチの音が聞こえないと、棟より離れないという。今はマンジュウ。四十九モチを作り寺に持って行くと、寺で一つに梵字を書いてくれるので、それを仏にそなえる。（宮地）

四十九日にはなれる。棟にいる。（力丸・公田・新堀）

オタナアゲのころ。（小島田）

一年は家にいる。（下大島）

四十九日に家でつくモチの音で出てゆく。五十個作り、一つは墓にうめ、四十九個は寺におさめる。（笂井）

四十九日のモチの音でヤノムネから離れるといった。（亀里竜門）

死者の生まれかわり　話にはあるがあまり例はない。（宮地・力丸・新堀・上佐鳥）

言うことはある。（上長磯・小島田・下大島・笂井）

死んだ人の性格によく似ている身内は生まれかわりといった。（亀里竜門）

旧十月になくなること　むかしは、旧十月のなかばすぎになくなると、「あの人はごしょうがいい」といった。（東上野）

サイソクマゲ　旦那さんに死なれたおかみさんは、まげを切ってしまうという。（笂井）

葬式　村を西と東の半分に分けて、村半分ずつ手伝いをした。

屋敷の本街道から出して、万日堂に持ってきて、そこで葬式をした。直接お寺には持ってこず、葬式寺である万日堂に入れた。万日堂に寺家のだしが分解しておいてあった。

穴掘りは、西と東から二人ずつ出てやった。独身者、出征前は出す

なといわれた。着物をなわおびでしばって仕事をした。朝、施主から清めの一升酒が出た。

夏は水位が高いので、かんより上まで水があがってくるし、上に一八乗っていないと、うかびあがってしまう。

四十九日間は、うすで餅がつけない。その間に正月などにあたると、その家に餅を持っていってやる。

棺は、板を買ってきて組の人が作った。ハヤオケといって、板に紙をはって作った。かめの時もあった。かめの中にもみがらを入れた。改葬したら水ともみがらだけのこっていた。

遺体には、経かたびらを着せ、わらじをはかせる。紙のさいふの中に六文銭を入れ、愛用品を入れてやった。

かめの中にきれいな水が入っていることがあって、その水を飲むと、ろうがいに効くといって、盗掘されたことがあった。

深いと形がのこっていることがある。(亀里寺家)

葬式　区長が施主の意をきいて色々と決める。

告げ　二人で葬式の件について親類へ直接行って話す。告げには、しのぎをだすこと(仮の食事)

お墓の穴堀り四人は区長が決めた(予め表がある)

お墓へ行った人は穴の中に棺が入ったら必ず手で土をかけて来ること。

葬式の時に拾った金は全部その日に使う事。

庭仕事　葬列の時に持つものを造る。

葬列を組む　役割を決める(大事な事柄なので親戚の年より等が協議する)

葬列を組んで葬場へ向かう　野辺送り

念仏供養。

七日毎の墓参り　四十九日のお棚上げ(今は大部分三十五日でお棚上げ)

村中忌み明けの挨拶まわり。

四十九日に餅を搗く　お供え餅を四十九ケ造ってお寺え上げる。一ケ雲上山佛乗院善光寺へもってゆくと印を押して返してくれる。

(鶴光路)

下阿内のお念仏　真言

(一)南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

(二)南無観世音菩薩　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

(三)南無地蔵菩薩　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

(四)十王十体南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏(十回)

(五)道の端の六地蔵　おとなに申す御威徳に　ろくせきのがれる南無阿弥陀

(六)一日　四日　十四日　二十四日の念仏に八幡よじんの血の池を申し埋めるよ南無阿弥陀

(七)西はさいほう極楽浄土の障子が池の蓮の蓮草は一ぺん申せば一本開く　西のこうやへ輝きわたりし即ち仏に疑いなし(十回)ゆうづう念仏南無阿弥陀

(八)南無不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿闍・大日・虚空蔵・南無十三仏・南無阿弥陀仏

(九)舎利礼

一心頂礼・万徳円満・釈迦如来・眞身舎利・本地法身・法界塔婆・我等礼敬・爲我現身・入我我入・佛加持故・我證菩提・以佛神力利益衆生・発菩提心・修菩薩行・同入円寂・平等大智・今將頂礼

(十)おん・あぼきや・べいろしやろう・まかぼだら・まに・はんどま

じんばらはりばりたや・うん

(十)
十句観音経
観世音・南無佛・与佛有因・与佛有縁・佛法僧縁・常楽我浄・
朝念観世音・暮念観世音・念々従心起・念々不離心

(十一)
きみよーちょうらい四十九日位牌の前をながむれば一に燈籠
二にお花、三にしきびの折枝をあげて念仏唱えれば、
十三佛も御影さす南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　ああ有り難や地蔵さん

三公田お念仏　天台

我昔所造諸悪業・皆由無始貪瞋痴・従身口意之所生
一切我今皆懺悔

(一)
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏（十回）

(二)
じうおうじったいなむあみだ（十回）

(三)
道の端の六地蔵尊　唱ひ申す御威徳にろくせきのがれる
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛　なむあみだ

(四)
西は西方極楽浄土しょじが池のはすの連花一べん申せば
一本開いて西の廣野へ輝きわたればすなわち仏にうたがいなしと
ゆうずう念仏なむあみだ

(五)
（女）一日四日十四日二十四日のお念仏に八万四人の血の池を申
し浮かべよ南無阿弥陀
（子供）　さいの河原で小供の集りうやまい申せば　そこでおじ
ぞが手に手を取りて　ならびうかんでとうづるとうづるなむあみ
だ

(七)
南無不動・釈迦・文殊・普賢・地蔵・弥勒・薬師・観音・勢至・
阿弥陀・阿閦・大日・虚空蔵・南無十三仏・南無阿弥陀・さんぜ
のしょうぼさつなむあみだ

(八)
西国三十三番世　坂東が三十三番世　秩父が三十四番の　観世音
聖師申せよ南無阿弥陀

(九)
南無阿弥陀佛（六回繰り返す）

(十)
おんあぼきや・べいろしやろう・まかもだら・まにはんどまじん
ばらはりばりたや

(十一)
今日申したお念佛を黄金のお盆につみ上げて佛様へと差上げてお
いとま申していざ帰る
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀

お念佛

懺悔文
我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋癡従身語意之所生一切我今皆懺悔
南無阿弥陀仏
念佛
南無阿弥陀　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀

一　融通念仏　南無阿弥陀
　融通念仏　南無阿弥陀（五反）

二　南無地蔵大菩薩
　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀（五反）

四　南無観世御菩薩
　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀（五反）

五　南無観世大菩薩　南無阿弥陀仏
　南無阿弥陀（五反）

六　一、日四日十四日二十四日のお念仏に八万余塵の血の池を申しう
　めるよ南無阿弥陀（五反）

七　道の端の六地臧お唱い申したお威徳に
　六せきのがるる　南無阿弥陀

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀（五反）

八　西は西方種楽浄土の生死が池の蓮の蓮華が一遍申せば一本開いて西の廣野え輝やきわたりし即ち仏にうたがいなぁし融通念仏南無阿弥陀（十反）

九　南無不動　釈迦　文殊　菩賢　地蔵　弥勒　薬師　観音　勢至　阿弥陀　阿閣　大日　虚空臧　南無十三仏　南無阿弥陀（先に三本お線香を上げて十反唱える）

舎利礼文

十　一心頂礼　萬徳　円満　釈迦　如来　真身　舎利　本地　法身　法界　塔婆　我　等礼　驚為我　現身　入我我　入仏加　持故　我證　菩提　以仏　神力　利益　衆生　発菩提心　修菩　薩行　同入　圓寂　平等　大智　今將　頂礼（五反）

十句観音経

十一　南無仏　與仏　有因　與仏　有縁　仏法　僧縁　常楽我　浄　朝念　観世音　常念観世音　念念　従心起　念念不離心　観世音（五反）

光明眞言陀羅尼

十二　びろしやなまかほだらまにはんどまじんばらはらはりたやうん　おんあぼきや（五反）

有難や玉のすだれを巻き上げて念仏の声ぞ聞くぞうれしき

十三　なむあみだぶ　なむあみだぶ　なむあみだぶつ（三反）

御詠歌

身はここに　心は信濃の善光寺　導き給えや　弥陀の浄土え

十四　なむあみだぶ　なむあみだぶ　なむあみだぶつ（三反）

御詠歌

生きるとて末をはるかと思うなよ　無情の風は　時ぞきらわん

十五　なむあみだぶ　なむあみだぶ　なむあみだぶつ

十六　かけ念仏

なむまいだぁ　なむまいだぁ（水の終るまで）

十七　帰命頂礼〇〇年忌位牌の前を眺むれば一に香炉二にお花三に樒の折枝を上げて念仏唱うれば十三仏のみ光さす

南無阿弥陀仏　阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　阿弥陀仏

万日の供徳　有情　安楽　護法大師　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

後念仏

念仏ばあさんにたのんであげてもらう。

公田では、大人、子供、男女の違いがある。（公田）

お念佛

懺悔文

我昔所造諸悪業皆由無始貪じん癡従身語意之所生一切我今階懺悔　南無阿弥陀佛

念仏

南無阿弥陀佛（五回）　融通念仏南無阿弥陀（五回）

南無地蔵大菩薩南無阿弥陀佛　南無阿弥陀（五回）
南無観世御菩薩　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀（五回）
南無観世大菩薩　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀（五回）
一日四日十四日二十四日のお念仏に八万余塵の血の池を申しうめるよ
　南無阿弥陀
道の端の六地蔵お唱え申したお威徳に　六せきのがるる　南無阿弥陀
　南無阿弥陀　南無阿弥陀
西は西方極楽浄土の生死が池の蓮の蓮華が一遍申せば一本開いて西の
　旷野え輝ぎわたりし即ち仏にうたがいなし　融通念仏　南無阿弥
　陀
十三佛
南無不動　釈迦　文殊　普賢　地蔵　弥勒　薬師　観音　勢至　阿弥
　陀　阿しゅく　大日　虚空蔵　南無十三佛　南無阿弥陀
舎利禮文（シャリライモン）
一心頂禮　萬徳圓満　釈迦如来　真身舎利　本地法身　法界塔婆　我
　等禮敬　為我現身入我我入　佛加持故　我証菩提　以佛神力　利
　益衆生　發菩提心　修菩薩行　同入圓寂平等大智　今將頂禮
（下阿内）

第十一章　年中行事

一月

一日

朝湯　中沢一家では、正月に順番に朝湯をたてた。

番にあたった日は、朝の三時おきして水をかいこんでわかした。

本家から順番に宿をした。

そのうちの主人が一番はじめに入った。そのあとは、来た者の順に入った。女衆は、正月のお棚の下でご馳走の用意をした。

朝のうちは男衆が湯に入りにくる。夜になると、一家の女衆とか年寄の人が湯に入りにくる。子供もつれてくる。

女衆は、お茶の接待をした。女衆は、夕飯を食べてから来た。お茶を飲みながら話し講をしていった。（下長磯）

（一月一日〜　）　元日は本家で朝湯をたてて、身内の者がもらいに行った。二日以降は身内が順に朝湯をたて、身内の数だけ朝湯が続いた。前の晩から子供が、「お湯がわいたから、入りにきとくれ」と身内に沙汰をしてまわった。朝湯を楽しみにしている子供達は、沙汰があったらすぐ行けるように手ぬぐいを腰ひもに引っかけて寝た。最初に湯に入るのはその家の大将で、後は順番は決まっていなかった。湯を待つ間、大人はお茶を飲みながら話をするのが楽しみだった。夜中の一時頃から翌朝まで、時には昼頃まで何十人もが入ったので、終りには湯はどろ〳〵になっていたが、湯殿にはろうそくの灯りしかなかったのであまり気にならなかった。（亀里竜門）

西徳丸では十四、五戸が交代で湯を沸かし入りにいった。（徳丸）

大将が若水を汲んで、顔を洗った後、神さま・仏さまにあげた。

朝湯は一家内で順にわかしたので、湯がわくと「朝湯がたったからきとくれ」とふれてまわった。（亀里寺家）

元日の朝、本家新宅で朝湯が立つ。朝二時なので、戸をたたいておこして入ってもらう。年男がふろをわかす。十数軒の隣組が入りにくる。

今でも四〜五時ころおきて、フロをわかして朝食をすませる。暗いうちにすませた。

風呂に入って体を清めてから初もうでに出かけた。（房丸）

正月の朝、風呂をわかし、近所の四〜五軒の家の人に入ってもらう。そのあとは順に交代でやっていた。（亀里寺家）

初湯　元日の朝、湯を立てる。湯づきあいをする家がきまっていた。人をよんで、順に入ってもらう。よんだ家の家長が入ってから、よんだ人に入ってもらった。人がたくさん集まったので、座敷がぬけた家もあった。集まっていろいろな話をした。昭和三十年頃までやっていた。（鶴光路）

石井家の朝湯のこと　小屋原の石井家は本家新宅三軒。

元旦には、本家で朝湯をたてて新宅の人をよんだ。二時ごろ朝湯を

たてた。朝飯をだし、酒を飲んだ。旦那が朝入り、女衆は昼間入りにきた。食事は旦那だけに出した。

一日が本家。

二日が古い新宅。

三日が新しい新宅。（小屋原）

若水　元日の朝、大将がおしめをまいた桶で井戸水を汲み、炊事に使った。（亀里竜門）

元日の朝、始めてくむ水で、年男である戸主がくんだ。

この水で料理も作った。三が日は男が作った。（亀里寺家）

元日の朝は歳男が、水をくみ、お茶、おぞう煮、風呂の用意をする。しめなわをはった入れ物で水をくみ、朝風呂をわかした。この風呂に近所の人をよんで入ってもらった。（公田）

三か日と、小正月の十四、十五日にくんだ。「あらたまの　年たつ月の朝（あした）より若やぎの水くみぞめにけり」と三べんとなえた。となえてから水をくむ。この水で、そばをゆでたり、汁の水に使ったりした。（房丸）

恵方まわり　元日に町内をまわっている。（亀里寺家）

ご年始まいり　村内の各戸を大将がご年始にまわった。からてんぼうだった。お諏訪さまと極楽寺にも初まいりをした。（亀里竜門）

一日は龍門の年始日で、よその部落から客うけをした。年始日は部落毎に重ならないようになっていた。（亀里竜門）

お元日の朝は、どこんちでも大将が村中をまわってあいさつした。手ぶらだった。

「おめでとうございます。昨年はお世話になりました。今年もよろしくお願いします。」というような事を言ってまわった。

女衆は、あがりはなで火ばちをおこして待っていた。

今は神社へ寄って、あいさつをしている。（上朝倉）

村内をあいさつまわりをし、お寺へ御年始に行く。（鶴光路）

年始まわり　一月一日に、年始まわりがあった。ムラ中のうちをまわった。このときには、しまいには、しりっぱしょりで来る人もあった。そのあと、上・下に分れて年始まわりをするようになった。そのつぎに、組合のうちだけまわるようになった。今は、神社へ寄ってあいさつをするだけになった。

寺へは、一日に男衆がご年始に行く。

二日には、女衆がご年始に行く、このときにおかねをもって行く。むかしは、餅、そのあと米をもって行った。

一日には、寺へご年始に行って、かえりに墓まいりをしたり、神社へおまいりしてきたりした。墓へはおさごをあげてきた。（上大島）

ご年始　ご年始のときには、手拭と一緒に塩釜をもってきた。

嫁さんが里へご年始に行くときは、大判餅を三枚もって行った。それは、一升桝の底をあてて切った大きさのものである。（女屋）

寺へのご年始　寺へのご年始は、旦那さんが一日、おかみさんが二日。

旦那さんは、おかねをもって行った。おかみさんは、粉一重箱もって行った。今はおかねになった。

お盆のときも、粉を一重箱もっていった。（上大島）

一月一日は、旦那が寺へご年始に行った。旦那のご年始日であった。おかねをもって行った。

三日は、女衆のご年始日、このときは米を重箱に入れてもって行った。はじめに玄米をもって行った。搗くのがめんどうだというので白米になった。そのうちに、寺の方から、米を持ってくるのを断った。かねにしてくれといってきた。菓子折をもっていくうちもあり、おか

ねをもって行くうちもあった。
今は、ほとんどのうちでご年始に行かなくなった。（女屋）
男衆は、一月一日にかねをもって、寺へご年始に行った。
「やっと残した松葉銭」といって、おかねをもって行った。
女衆は、三日に寺へご年始に行った。このときは、大判餅を三枚もって行った。

初詣　あきの方の神社にいく。八幡さま、蓮花院、玉村八幡などにいった。昔は氏神に行くくらいだった。（房丸）
神社からお寺へ行く。その帰りにクルマやによった。
お寺へは、元日に赤い祝いの袋でお金を持っていく。（下長磯）

二　日

仕事はじめ　二日は仕事はじめで、女衆は機織り、さいほうを初めてやった。男衆はワラナイをした。子供は書き初めをして、近所をまわり小使いをもらった。（亀里寺家）

四　日

お寺の年始日　この日は坊さんが檀家をまわってお札をおいていった。（亀里龍門）
正月四日に村中をまわる。「浄土院御年始」といってまわった。ツノガラ大師のお札と番茶をおいていく。（下長磯）
四日は、坊さんのご年始日だった。むかしは杓子とかお札をもってきた。今はこない。
今は、重箱の中に、杓子を入れてよこす。（女屋）
四日に、坊さんがご年始をもってご年始にきた。（女屋）
一月四日、「泉蔵寺、御年頭」といってまわってくる。お札をおいていく。「つのがら大師のお札」。（小屋原）
一月四日は、坊さんのご年始。つのがら大師のお札をもってきた。これは、とぼ口のところにはっておいた。（上大島）
一月四日には、初嫁は実家に帰った。この日は、坊さんのご年始の日。（小屋原）

里帰り　初嫁を日帰りで帰した。（亀里竜門）
一月四日は、嫁の年始日といった。この日、嫁は、大判の餅二枚もって里へお客に行った。こもちとふつうのもち一枚ずつをかさねてもって行った。このときは日帰りであった。婿も嫁と一緒に行った。
一月十五、六日にも、嫁は里帰りをした。このときは、姑さんから、「ゆっくり泊ってくればいい」といわれた。
お茶とか菓子折をご年頭にもって行った。お茶をよくもって行った。（駒形）
正月四日には、嫁が実家に日帰りで帰った。白いもちの間に色もちをはさんで、三枚重ねのをもっていった。四角いもちだった。（上朝倉）
嫁が実家に帰る日で、オオバンのモチ（一尺四方位あった）を三枚のうち、実家では嫁に一枚返してよこした。（亀里寺家）

初嫁のご年始　一月四日に、初嫁は里帰りをした。このとき、大判の餅二枚持って行った。（東上野）

一月四日は婿のお客　一月四日には、婿が嫁の実家へお客に行った。嫁が大判の餅を三枚もって行った。かえりに同じくらいの餅をもらってきた。（小屋原）

なべかり　あたらしく嫁にきた人は、一月四日を、なべかりといって、この日里へお客に行った。
このときもって行くものは、大判餅、ふつうの場合は、三枚もっていった。五枚、七枚もあった。この日は泊らずに帰ってきた。（小屋原）

一月四日は初嫁の行事、なべかりという。この日は、婿のご年始ともいい、嫁婿が一緒に、嫁の里へご年始に行く。

この日は、泊ってきてはいけないという。持って行くものは四角の餅（大判餅）。婿がしゅうと（嫁の親）にわたす日といった。（上増田）

結婚後はじめての一月四日には、なべかりといって、嫁婿は、嫁の里へご年始に行く。（駒形）

婿の御年始日　一月四日。（亀里龍門）

一月四日を婿のご年始といった。この日、嫁と婿で仲人のうちと里へご年始に行った。

大判の餅をもって行った。これは三枚がさねである。上下は白で、真中が紅だった。（笂井）

一月四日は、婿のご年始といった。新しい婿はこの日、嫁さんの家へご年始に行った。何年も行った。嫁、婿が一緒に行った。（下大島）

一月四日は、新しい婿のご年始日といった。この日、嫁婿そろって、嫁さんの里へご年始に行った。大判餅をもって行った。このときは、泊るもんではないといった。（下増田）

五　日

仕事はじめ　仕事はじめは五日で、わら仕事をした。（上朝倉）

おたなさがし　三が日続けて神だなに上げたものを下げ、五日の雑煮にした。（公田）

正月だなとおそうぜんさまに上げてあったものは、分けて下げておいた。（鶴光路）

六　日

仕事はじめ　作頭（さくがしら）が麦畑のさくを三はかきって、真ん中のさくへおしめをたて、おさごと頭つき（にぼし）を半紙にのせておそなえした。（西善）

六日年　六日は、六日年越といって、四日に客に行った嫁の一夜泊りはしてはいけないといった。（亀里）

山入り　一月六日は、山入り、仕事はじめといった。この日から、田の仕事でもなんでもはじめた。（東上野）

山はじめ　一月六日は山はじめという。この日、山刈りに行った。弁当（おむすび）をつくってもって行った。赤城山まで山刈りに行ったこともあった。仕事はじめの日である。（小屋原）

一月六日は、山はじめという。（下増田）

おそうぜんさまに供えたものと、おさごとお頭付きを持っていく。（鶴光路）

しめかざり、お供えを屋敷の木にかざった。自分の家の山へ酒ともちをもって行き、道具にお神酒をかけ、まきを切ってもってきた。（亀里龍門）

山へ入って、お神酒・おそなえ・半紙で包んだおさごをそなえ、木の枝にお注連をさげ「今から刈り払いをさせてもらいます」と言って草を刈った。（徳丸）

山はじめは六日で、自分の山へくずかきに行った。午後は半日遊んだ。女衆は、ぬいっことをしたり、男衆はしょうぎをさしたりした。（上朝倉）

一月六日の行事。この日、きりもちをもって赤城山（共有林）まで行って、十二様にあげてきた。共有地でまつごくをとってきた。（上大島）

正月六日は山始めで、山の下草刈りをした。（房丸）

山開き　正月六日、オショウデンさまのおしめを持ち、おさごを持っ

てそなえる。（鶴光路）

七　日

七草のこと　春の七草というのは、次のとおり。
セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ
このうち、ナズナ一色だけで、七色の代りになるといった。
七草の日につめきりをした。
ナズナを水につけておいて、その水をつけて、爪を切るといいといった。（上大島）

七草がゆ　「七草なずな、とうどのとりが、日本国へ、わたらぬうちに…」
と、お勝手で女衆が、こう唱えごとをした。（上大島）
一月七日は七草。朝おじやをつくった。（小屋原）
元日から三日までに、神さまなどに上げたものをさげてかゆにする。
草をきざむ時には「七草なずな、とうどの鳥と日本の鳥と、わたらぬうちに、トントン」ととなえる。
草は五日にとり、ひやして根の土をとって用意しておく。（鶴光路）
三が日の間あげておいたおそなえを四日の朝さげる。これをとっておいて、七日の朝おじやに入れて食べた。
おじやの中には、餅を入れたり、七草を入れて、おじやをつくった。
いも、ななくさなずな、にんじん、大根、ごぼう、なっぱを油でいためて、ごぜんをにこんだもの。その中にもちを入れて食べた。
神様におそなえするときは、神の体（こばち）の中に入れてあげる。
おそなえは、半紙を二つ折りにして、その上にのせてあげる。（笂井）
まな板の上で、包丁の峰と、うどんをあげる箸か火箸とで唱いながらたたいた。
「七草なずな、唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に」
「七草なずな、唐土の鳥が日本の鳥とケンカやったそうだ」。（西善）
雑すいを作った。菜を切る時に「七草なずな、唐土の鳥が、渡らぬ先に…」というように歌った。（上朝倉）
なずな、せり、人参、ゴボー、大根、昆布を入れて七草がゆを作った。「一夜ぜりはとるな」、「四日にとっとけ」と言われた。
七草のおじやの汁を残しておいてお椀に入れて、その中に爪をつけて初めて爪をきることができた。
まりつきの時に
『七草なずな、唐土の鳥が渡らぬうちに、イッチョメコサッサ、二チョメコサッサ』
『　（前半右に同じ）
トンカラカン、トンカラカン　』とうたった。（亀里寺家）
「七草ナズナ、唐土（とうど）の鳥が、日本の国に渡らぬ先に、ストトン、ストトン」と言いながら、包丁の背でたたいた。（公田）
包丁の峯でまな板をたたいて、となえごとをいった。
「七草なずな、とおくの鳥が、日本の橋を、わたらぬさきに、ストトン、ストトン」。（房丸）

十一日

さくたて　正月十一日、歳徳神のしめなわ、おさご、お頭つき、おそなえ餅の上を持って畑に行き、さくを少し切ってくる。（鶴光路）
一月十一日にはさくだて、うちの畑へ行って、男衆（だれでもよい）がさくを六尺ほどの長さに切ってきた。（下増田）

くわだて　男衆が畑へ行き、おしめをかざり、おさごともちを供えた。（亀里龍門）

畑に出かけ、松の枝におしめをあざり、お供え・みかん・昆布・おさご・お神酒を供える。さくを三さく切った。（徳丸）

正月十一日はくわ立ての日で、へいそく、おさご、ごまめ、餅をそなえ、麦のさくを二～三そく切ってきた。（房丸）

お飾りを持っていって、畑に立てる。お頭つきを持っていって、おそなえする。正月棚の歳徳神さまにあげてあったおそなえものをもっていく。（鶴光路）

倉開き　正月十一日は、倉開きで、倉の前に御神酒をあげる。（房丸）

蔵びらき　蔵の扉を開いて、福が入るようにおさごを入口にまき、「大福がまいこみますように」と唱えた。（徳丸）

床の間の鏡もちを雑煮にしてたべた。（西善）

十三日

小正月のもち　おそなえ・きりもち・采（さい）の目に切ったもちを用意した。ミズキか楢（なら）の木の枝に、彩の目に切ったもちをさして繭玉かざりとした。（亀里龍門）

もちを搗いてマイダマを作り、くぬぎの枝にさした。一緒に、最中の皮でできたお飾り菓子（エビス・大黒、小判、おかめ、絹笠）も飾りこんだ。（徳丸）

もちを搗いて、まいだまかざりをした。まいだまはナラの木の枝にかざった。（上朝倉）

小正月　どんど焼きをした。

ナラかクヌギの枝にマユ玉をさして飾った。ニワトコの枝を削って、ハナを作った。（朝倉）

小正月のうどん　細長くうつ。絹が長くなるようにするため。（鶴光路）

小正月のおそなえ　丸モチを作って、十二、十六をおぜんにのせてあげる。ヤナギの枝にキリマユ玉をつける家と桑の根にマユ玉をつける家とがある。（下長磯）

十四日

マルビ　一月十四日にマルビをたいた。

米の飯をたいただけ全部神の体（こばち）に山もりにして、正月棚にそなえた。ヤナギの箸を十二膳さした。翌日さげて、うちのもんが念じた。（女屋）

一月十四日の晩にマルビをたいた。米を三合くらいたいて、それをそっくりこばち（神の体）に山もりにして、ヤナギの箸をさした。これを正月棚にあげた。さげるのはいくにちかあと。（女屋）

小正月の行事　一月十五日の朝、あずきがゆをつくって神様にあげたり、うちのものが食べたりした。

あずきがゆをすこし残しておいて、一月十八日に食べる。そのいれもんを洗った水を、うちのまわりにまいた。女衆が、あとかたづけをしてやった。水でうすめて、やかんに入れてまいた。魔除けのためという。（下大島）

小正月のこと　一月十四日に餅をつく。

一月十五日の朝、あずきがゆをつくる。あずきがゆの中に、もちのきれっぱしを入れて、もちあずきがゆにした。

このとき、神の体（こばち）を洗った洗い水をとっておいて、土瓶に入れて、うちのまわりにまいた。（十五日の朝）

これをしたのは嫁さん（嫁にきたてのときにそうした）。

うちのまわりに、ひとまわりまいた。悪い病気が入らないようにまいたもの。（上大島）

小正月の行事　一月十四日…おかざりかえ、まゆ玉をつくってさした。まゆ玉・もちばなどをつくってかざる。

一月十五日…朝、あずきがゆをする。

ニワトコでかゆかき棒をつくって、この朝、あづきがゆをかきまわす。かゆかき棒のもとで四つ割りにして、そこへもちをはさんでかきまわした。これは、まんがで代かきをするわけ。

かゆかき棒は、このあと神棚にあげてとっておいた。苗代つくりをするとき、もち、うるちの種の種類をかいたのをはさんで、苗間にたてておいた。

一月十八日…十八げえをつくる。供え物をしたこばちを洗って、その水をうちのまわりにまいた。

一月二十日…二十日正月。

小正月のかざり物は、二十日の風にあわせるなといって、二十日正月の前にさげた。（東上野）

小正月　小正月にも餅をつく。

十四日がおかざりかえ、まゆ玉をつくって蚕神様にあげる。

十五日の朝、あずきがゆをつくる。これをふいて食べると、田植のとき風が吹くといった。

あずきがゆは残しておいて十八日にふやして食べる。これを十八がゆといった。

十六日には、墓まいりをしない。（小屋原）

おかざり　正月のおかざりをはずして、小正月のおかざりにかえた。ニワトコを二本対にして、繭玉かざりと一緒にかざった。正月の松かざりをした場所は全てこれにかざり替えた。（亀里龍門）

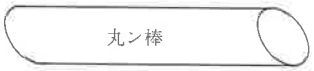
十三日にもちをついて、まいだま、あられ、ヘビ（のしもちの切れっ端）を作った。ヘビはネズミよけになるといった。

十四日はお正月のおかざりをはずし、ミズナラの枝にまいだまかざりをして天井からさげた。ミズナラは火をよけるといった。にわとこで花を作って一緒にかざった。（西善）

お正月のおかざりをはずした。マイダマかざりに飾り替えた。（徳丸）

十四日におかざり替えをして、十五・十六日とかざり、十七日にまいかきをした。（上朝倉）

十三日にもちをついて、おそなえを「十二・十六」と言って二十八と、粉もち（うるち米）を丸ん棒にしたものを切って小判の形にしたものとつくった。のしもちのへりはヘビだと言って、一緒にまいだまかざりにかざった。「ヘビは金づる」と言った。（亀里寺家）



飾りかえ　正月十四日は飾りかえで、正月の飾りをとり、小正月の飾りをした。柳の枝にまゆ玉、アラレ餅を飾った。昔は座敷いっぱいになった。餅を細長く切って、ヘビの形にして四隅につけておく。ニワトコの木でハナ、カユカキ棒を作った。

カユカキ棒は端を十字に割り、餅をはさんだ。十五日の小豆粥をつけて神だなに上げておく。苗代をたてる時に立てて、品種の違いの目印にした。（房丸）

正月十三日にもちをついて、十四日に小正月の飾りにかえる。モチをさいの目に切ってならの木の枝に花のようにさした。飾り菓子を売りにきて飾った。また、細く切ったモチをヘビのように枝にまきつけておいた。

十二、十六のおそなえは、おぜんの上に数だけならべ、床の間にあげておく。十二は十二か月を表すという。（亀里寺家）

一月十四日　この日、餅をついて、ヤナギの木の枝にきりめえ玉を

つけてかざった。いいまゆがとれるようにということ。十二、十六をこしらえてあげた。（下長磯）

かゆかき棒　ニワトコの木を切り、十センチくらい皮をむき、むいた方の端を十字に割りモチをはさんでおく。

この棒で十五日の小豆粥をかきまわす。小豆粥は、熱くて吹いて食べると北風が吹いて苗が枯れてしまうという。

かゆかき棒を二本あわせて半紙でつつみ、水引でしばっておく。そして大神宮さまの所に、あげておく。（鶴光路）

小正月のハナ　ニマトコの枝を一尺二寸くらいに切る。上から根に向けて、切り出して皮を細くむく。三段に節をつくる。上ほど小さくかく。

ハナをあげるのは次の通り

門松二、たな二（お正月様、歳徳神様）神だな一、仏だん一、お釜様一、屋敷稲荷一墓地各一、池（川棚）＝水神様一、井戸一、倉、作業小屋、便所、物置各一、道祖神各一

クヌギの枝にモチをさしたものを一緒に上げる。北向きに飾る。（鶴光路）

トブサマ　小正月のお飾りかえの時、大正月の飾りの桧のしんを切り、ニワトコと一緒にさす。二十八日のしまい正月までさしておく。（亀里寺家）

お飾りかえのニワトコ　ニワトコは早くに芋がふくので縁起がいい。三本ゆわえて、十五日の粥をかきまわす。

枝の片方を十文字に割って、四角に小さく切った餅をはさんでおく。苗代に持っていってさしておくと、よい苗がはえる。（亀里寺家）

小正月飾り　まゆ玉をつけた。モチを細く切ってとぐろをまかせてヘビに見たてて飾る。飾り菓子を下げた。（鶴光路）

小正月のまゆ玉　一月十四日には、米の粉（うるち）をひいて、まゆ玉をつくった。これは、マユゴといった。

十四日の朝、アカイノミの木かクワの根っこをとってきて、それに、マユゴをさして神様にあげた（かざった）。（下増田）

マルビ　一月十四日の晩、マルビをたいた。二合でも三合でもたいただけのご飯をそっくり神の体（こばち）に入れて、それにカヤのはし十四膳をたてて、神棚にあげた。これは、何という神様にあげたかはわからない。その晩のうちにさげてしまう。（下増田）

一月十四日の晩に、マルビをたいて正月棚にあげた。

十四日の晩、ご飯をたく、三合分。これをそのままそっくり、おはち（こばち）に入れてあげる。ご飯のままそっくり、おはちに入れてあげる。ご飯には箸を十二膳（ヤナギの箸）さした。これは一年の月数という。歳徳神様の相むかいにあげた。おしらさまにあげるといった。さげるのは十八日か、二十日。（女屋）

正月十四日に、男が米をたいて、白木のはちにそっくり盛り上げる。そっくり上げて、ニワトコの木をさした。（公田）

ドンドヤキ　この辺では、ドンドンやきということはやらなかった。

一軒一軒おかざりを燃していた。（上大島）

おかざりかえで外した正月のおかざりを、各戸が自分のところの田で燃した。この火で燃いたもちを食うと風邪をひかないといった。また、松の燃えっくじを屋根にほうり投げた。こうすると火事にならないといった。（亀里竜門）

各戸の苗まで、おかおがくし、おしめ、お松など正月かざりを燃やした。この火でもちを焼いて食うと風邪をひかないといった。（西善）

正月のおかざりを子供達が前もって集めた。この時、各戸では十銭くれた。十三日の晩は煮ものや菓子を食ったりして泊った。（徳丸）

正月のおかざりを集めて燃した。この火でもちを焼いて食うと病気にならないといった。（上朝倉）

正月飾りをもやした。その火でモチをやいて食べた。どんど焼きのもえ残りを持って帰り、屋根に上げると火事予防になる。（公田）

十四日にお飾りをとって、しばって出しておいたものを集める。もやし賃をとった。小屋を作って泊った。中で火をもした。餅をやいて、おみごくにした。無事息災を祈る。まっ黒にやいた。どんど焼の田は、麦をまかずに苗間の田にする田だった。（房丸）

小学校六年生が当番学年でやっており、昭和十五年が最後だった。

奉加帳でお金を集めた。松のもえくじを屋根にあげると、火事予防になる。消えきらないのを投げて火事になったことがある。火で焼いた餅は吹いて食べてはいけない。食べると風邪をひかないという。

（亀里寺家）

正月十五日に正月飾りをもやした。子どもがリヤカーで集め、もやしたあとの門松のもえくじを返した。これを屋根に上げると火事予防になる。もちを焼いて、返した。これを食べると、腹具合が悪くならない、病気にならないという。（亀里阿内宿）

十四日、子供が村内のおかざりを集めて、青年団がつくった。どんどやきの火でモチを焼いて食べると病気にならないと言った。松のモエックジを屋根にあげると火事にならないと言った。（亀里寺家）

今の共愛短大のあるところの前でドンドンヤキをした。おかざりかえをしてから一月十六日の行事。

この行事は昨年あたりからはじめたもの。その前は、個人個人でおかざりを燃して、村全体のドンドンヤキというのはなかった。（小屋原）

ドンドンヤキは一月十四日の晩にした。子供が、正月のおかざりを家ごとにまわってあつめた。竹とおかざりとおかねをもらいあつめた。おかねのことは、かんけいといった。

女屋では、ドンドンヤキを、北口、南口、西口の三か所でやった。

毎年ドンドンヤキの場所はきまっていた。田であいているところでやった。

しんもち（十四日についたもち）をもっていって、やいて食べた。そのもちを食べると、できもんができないといった。（女屋）

一月十五日の夜の行事。ムラ中のおしめ（おかざり）をあつめて小屋をつくって燃した。小屋は、神社の境内で、前で西側につくった。

（東上野）

一月十四日の夕方、東上野ではドンドンやきをした。上野では、一カ所、とね八池のところでした。

十四日はまでに、子供がムラ中まわって、おしめをもらいあるいた。このとき、おかねも一緒にもらいあるいた。それをかんけいといった。このかねでは、あとでお菓子などを買って食べた。高等科二年のものが全員大将といった。それ以下の者はとくに名前（呼び名）がなかった。

当日の三時ごろから小屋をつくった。小屋の中には入れるようになっていた。この中で食べ物を食べたりした。

日が暮れてから、どんどんやきをした。火を燃したあと、餅をもって行って焼いて食べた。この餅を食べると、できもんができないといった。小屋に火をつけるのは、大将を中心にした子供であった。

なお、どんどんやきのもえくじをうちへ持ってきて、屋根の上へほうりあげておくと火事にならないといった。（東上野）

下大島では、一月十六日すぎにドンドンヤキをした。

小学生が小屋をつくった。小屋は円錐形であった。

つくった場所は西の田圃、毎年場所はちがった。苗間のあいている

ところを借りた。

竹とわらなわをムラの各戸からもらった。このとき、お金（かんけいをくれといってまわった）ももらった。中心の柱にする木は、近所の山へ行ってぬすんできた。骨組とする木は六本。小屋をつくって、いく日かおいて、そのあと火をつけた。燃すのは十七日ごろ。ドンドンヤキの火で、棒の先につけた餅を焼いて食べた。これを食べると、風邪をひかないといった。

なお、もらいあつめたかねとか、あまった木をムラの人に売った。このかねは、高等科二年の親方が中心になって、子供たちだけで分けた。（下大島）

どんどんやきのときには、わかいしゅうが奉賀帳をもってムラ中まわった。

おかねをうんとあつめると、その親方は腕がいいといわれた。このとき「かんけいをくれ」といってまわった。

家の格（身上）にくらべて、出すかねがすくないと、わかいしゅうが肥桶をかついで行って、庭にためをまけたこともあった。いやがらせをしたわけである。（下大島）

女屋では、むかしは、寺沢川の牛橋の近くにドンドンやきというところがあって、ここでドンドンやきをしたという。宿田川が流れこんでじくじくしている所だった。（女屋）

女屋のムラ中のどんどんやきは、薬師様のところでやった。

一月十四日におかざりかえをして、十五日にどんどんやきをした。

おかざりは、まとめてけえどのところにだしておいた。子供がそれをもって行った。

ムラ中から、おしめ、竹などをもらいあるいて、小屋をつくって、どんどんやきをした。竹で骨組をつくった。（女屋）

どんど焼（下川）

どんどんやきの火で餅を焼いて食べた。くわぜの棒の先に餅とかいかをつけて焼いて食べた。小正月の餅を焼いて食べると丈夫になるといった。大門の家の北、かしぐねの北でやった。今の三角の駐車場のところ。

竹で、わらをくんで、三角錐の小屋をつくった。各戸からむぎわらを一束ずつあつめて小屋をつくった。

子供だけでやった。これをどんどんやきといった。正月のどんどんやきはしなかった。

正月のおかざりは、もとは神明様にあげた。とうろっこは、小学校三、四年生から入った。小学校二（三）年生のとき、天神講（十二月二十五日）に参加しないものは、とうろっこに加わることができなかった。（小島田）

どんど焼（横手）

十五日

小豆粥を熱くても吹いて食べるな。吹くと田植えに風が吹く。もし吹くなら、北向きに吹け。（公田）

「あずきがゆを吹いて食べるんだら、北向いて食え」と言われた。田植の時、北風が悪いからだと聞いた。

正月十五日の粥は熱くても吹いて食べてはいけない。吹いて食べると、田植の時、風が吹く。

十八日に、ナベの洗い汁をナガムシが入らねェように家のまわりにまいた。なり物の木にナタでキズをつけて洗い汁をかけ、「ならねェと、ひっきるぞ」と言った家もあった。（亀里寺家）

もちを入れたあずきがゆを食べた。吹いて食うと「田植えに風が吹く」、「嫁に行くとき風が吹く」といった。（西善）

小豆がゆは吹いて食うなと言われた。田植え時に風が吹くと、「小豆がゆを吹いて食ったのは誰だ。」と言い合った。

十八日の朝、小豆がゆを煮たナベの洗い水を庭にまいた。もぐらがもぐらないようにと言った。（徳丸）

六〜七寸程に切ったニワトコの先を四つ割りにしてもちをはさみ、これを三本作った。この三本を束ねて半紙で包み水引をかけ、小豆がゆの鍋をかきまわした後、苗間の隅にさした。

小豆がゆは「吹いて食べるな」と言われ、吹いて食べると田植えに風が吹くと言った。（亀里竜門）

朝、小豆がゆに切もちを入れて食べた。切もちをカイバシラといった。

十八日に小豆がゆをたいた釜の洗い水で、大将が屋敷のまわりをまいた。もぐらがもぐらないようにまいた。（上朝倉）

一月十五日の朝、あずきがゆをつくって神様にあげる。これをとっておいて、十八日に食べる。おかゆはあっためて食べる。

神の体（こばち）など洗った水を、女衆がうちのまわりにまいた。これは、うちの中に長虫が入って来ないようにということのためにある。（下長磯）

十五日の朝あずきがゆをして食べる。

このおかゆをすこし残しておく。（これをあたためて食べる—十八日）その残りに水をいれて、うちのまわりにまいた。お勝手をする人の仕事で左まわりにまいた。（小屋原）

小正月のかゆかき棒　一月十五日の朝、小豆がゆをする。

この小豆がゆは、かゆかき棒でかきまわしてから食べる。

小豆がゆは、あついからとて、ふいて食べてはいけないという。ふいて食べると、田植のとき風が吹くといった。

かゆかき棒は、ニワトコの木でつくった。小豆がゆをかきまわしたあと、半紙でくるんで、水ひきでゆわえて神棚にあげておく。

苗代をしたときに、かゆかき棒につけ木をはさむ、つけ木には、稲の品種の名前をかく。それを、苗代のさくのところへたてておいた。

大体、もち米とうるちが一、二種類くらいだから、二、三本たてた。（上増田）

十六日

一月十六日には、今でも墓参りをしている。

このときは、線香とおさごを持って行った。これを、はかばのご年始といっている。（笊井）

仏の日　一月十六日は仏の日という。

この日は、墓参りに行く。この日、だんごをこしらえて墓参りに行

く人もあるが、おさごと線香と水をもって行ってあげる。

むかしは、お棚をつくって、鍋とか釜で飯を炊いて、炊いただけそっくりあげた。これは、みたまさまにあげたもの。

お棚には、歳徳神様とみたまさまと二つまつる。おそなえは二つあげる。なお、炊いただけあげたものをマルビといった。これは、みたまさまにあげたもの。みたまさまは、ご先祖様という。（笂井）

一月十六日の墓まいり　一月十六日は、仏の日、先祖様の日という。この日、線香とおさごをもって、墓まいりに行った。

盆の十六日は、仏様を送って行く日。このときに、線香やだんごをもっておまいりに行く。

正月のお棚は、その年の明きの方へむけてつるす。棚には、片方に神様（歳徳神様）、片方におみたまさまをまつった。

一月十四日のばんに、鍋でご飯をたいて、それをそっくり（神の体（こばち）に入れて）正月棚のみたまさま（仏様）にあげた。これは翌日さげてうちのもんが食べる。風邪をひかない。これを、マルビさまといった。（笂井）

一月十六日に墓まいりをした。ちゃんとしたうちでは、この日墓まいりをした。この日は、年があらたまってはじめての墓まいりの日。（女屋）

一月十六日と盆の十六日には墓まいりをする。一月の場合は、正月の行事が十五日で終る。それで、十六日に、先祖様のおまつりをするのだという。この日が、正月になってはじめての墓参りとなる。線香をもっておまいりに行った。（下長磯）

一月十六日は、墓まいりの日。このときは、おさごをもって行った。また、ムラの観音様へおまいりに行ったり、お寺へ行ったりした（お寺へは、おかねをもって行った）この近所のうちではやっていることである。（上大島）

上長磯では、一月十六日に墓参りはしなかった。（上長磯）

馬や肥いだし　一月十六日と盆の十六日の朝、うまやごいを出した。これは、朝飯前の仕事であった。子供のとき、手伝ったことがあった。一月十六日には、嫁は里へお客に行ってゆっくり泊ってきた。（下増田）

馬屋そうじ　正月の十六日には馬屋のそうじをした。（公田）

十八日

十八日粥　十五日の小豆粥を釜のままのこしておき、十八日に温めかえして食い、洗った水を家のまわりにまいた。（鶴光路）

切れ目なくまくものだという。（公田）

十五日の粥をわざとのこし、オマルビと一緒にして十八日粥にした。この十八日粥を水でふやし、やかんに入れて家のまわりにまいた。もぐらがでないと言った。（亀里龍門）

粥の水を家のまわりにまく。（下阿内）

十五日の小豆がゆを少しとっておいて、十八日にどんぶりで家のまわりにまいた。まよけになるといった。（西善）

石山の観音様　一月十八日には、馬に乗って、石山の観音様へおまいりに行った。

石山の観音様には、大きなわに口があった。その下につれて行ってならしてもらった。馬があばれた。（下増田）

二十日

二十日正月　神棚にまつりこんであるエビス・大黒をおろしてかざった。すしや大根の煮ものを供えた。さげたものを若い者が食うと

縁遠くなるといった。（亀里竜門）

逆さにしたスリ鉢の上に、よもぎをもんでのせ、火をつけてお棚にあげる。そしてお棚の下に家族を座らせ、頭の上でスリ鉢をまわし、「頭が痛くならねえように」などと順に唱えた。この後、お棚をはずした。（西善）

オエビスさまをかざって、すしや昆布巻を供えた。（徳丸）

馬の作業に使う道具を作って、半日は休みだった。（上朝倉）

朝のうちにワラ仕事をして、下大黒に豆の木で棚を作って、おそうぜん様をまつった。また二十日灸といって、神棚の下で、頭に皿をのせて、その上に灸をすえた。（鶴光路）

二十日灸　上増田東組の北爪博家では、一月二十日にお灸をすえる。この日の朝、正月棚の下でやった。家族の者がしらじをかぶって、火をつけたゴボウのはっぱを三カ所において、火をつけた。こうすると、頭の病いにかからないといった。（上増田）

二十八日

シメエ正月　それまで、ひきゃり飯（ひきわり麦）を食っていたものが、この日は米の飯が食えた。

シメエ正月がくると、夜なべ仕事が始まった。ヨウ飯（夕飯）を食って、七時から九時頃まで、縄ない・俵あみ・チョッパシあみ・わらじ作りをした。縄ないは一晩でニボウ（二十ひろで一ボウ）、俵なら三俵、チョッパシなら立った背の高さと座った高さ（身長の一・五倍）をやれといわれた。これがすめば、夜あそびに行っていいといわれた。（西善）

雑煮とか赤飯とかかわりもんを作った。（亀里龍門）

やくどし餅　厄年の者がいるうちでは、厄年餅をついた。その日時は、うちによってちがう。一月二十八日すぎにつく。餅は、親戚とか懇意の人のところにくばる。あんぴんである。

女性は十九、三十三。男性は二十五、四十二が厄年。

厄年餅をつくのは、門松を二度たててあたらしく年を迎えてから、二度正月を迎えて年を余計にとるわけ。（笂井）

火伏せの不動尊祭り　徳丸の不動さんのお祭りで、お念仏申しのお婆さんがカネをたたき、スズをならした。前日、五人の当番が各戸から茶飲み茶碗に米をもらっておいて、念仏申しの人に食べてもらった。（徳丸）

三十日

厄年餅　厄年餅は一月三十日についた。今年は厄年の者がいるから、おかざりかえをしなくともいいやといった。おかざりをはずさないでそのままにしておいて、正月を二度迎えたことにして、厄年餅をついたのである。（笂井）

その他

初卯　正月様は卯の日に帰るといい、松を下げる。朝卯の刻（午前六時頃）年神に酒飯を上げる。（亀里）

おそうでんさま　お正月にはおそうでんさまをまつった。でっかいおしめをつくってあげた。二人がかりでつくった。特別でっかいものをあげた。（下増田）

正月のお飾りの処分　正月のお飾りは、自分のうちの苗間で燃した。友だち同士持ち寄せて燃したこともあった。（小島田）

お正月のおそなえ　木のおはちを二十くらい用意して毎日あげた。小さいおそなえは、四十八も作った。（亀里寺家）

松かざり　正月の松は、門口、便所、井戸、かまど、屋敷稲荷さま

にかざった。三が日は、飯のお初をこの松にのっけた。（亀里竜門）

かど松　庭に、ナラの木の杭をたて、松・竹・梅、おしめをかざり、朝晩食事をあげた。（西善）

一月十五・十六日　鬼の首も許されるといって、嫁、番頭が里帰りした。（西善）

正月のもの日　三が日と、十五・十六日、二十日、二十八日は、おおっぴらに休めた。

「もの日節句にできた子に、利口な子はいねェ」と言った。（西善）

正月のごちそう　キンピラ、スエ（大根、人参のすのもの）、昆布巻、豆の煮もの、芋の煮ものは毎年つくった。（亀里寺家）

正月飾り

みかん

魚（お頭つき）――めでたい

干し柿

昆布――よろこぶ

ゆずりは（親子草）――代々家系が続くように（亀里）

正月のお棚　歳徳神と大神宮さまをまつったお棚を恵方に向けて、座敷にかざった。三が日の供えものはさげないで木のワッパにつみあげ、七草のおかゆに入れて食べた。（亀里竜門）

お棚に進ぜるものは、昆布・頭つき（ニボシを十匹）・スルメ・ほうずき・干し柿・手ぬぐい・大福帳・みかん（十二個）・麻・しゃけ（ます）などであった。（徳丸）

三輪家では、回転式ではなく、座敷の恵方にたなを作って飾った。（亀里龍門）

御年始日　四日はお寺さんの御年始日で、暗いうちから「善光寺の御年始日だ」といってまわってきた。

九日、前橋の御年始日

六日、鶴光路の御年始日

八日、公田の御年始日

五日、下阿内の御年始日。（亀里）

前橋の御年始日　一月九日　初市の日。（亀里龍門）

年始日　鶴光路は六日になっている。（鶴光路）

女屋のご年始日　女屋のご年始日は一月十一日。

この日は、よそへ行っている人がご年始にきた。親類のご年始日。（女屋）

年始日のはなし　お寺へご年始に行くのは一月一日。

坊さんが檀家をまわってくるのは一月四日。

女屋のご年始日は十一日。

小島田は五日。

下増田の奥原は十一日。（女屋）

正月の行事　一日～三日の三が日、そばを食べる。

一日は、ムラの新年会。この日、男衆が寺へご年始に行く。おかねをもって行く。

二日は、女衆の寺へのご年始日。むかしは、大判の餅を三枚もって行った。今は、おかねをもって行く。

四日におたなさがし。石井家はこの日から餅を食べてもよいといった。この日は寺のご年始日。和尚さんが「安養院ご年頭」といってまわってきた。つのがら太師と大黒様のお札をもってくる。むかしは、このとき、ご飯のしゃもじをもってきた。四、五日は、石井家ではいもがれい。

六日…山入り、この日、年男がおしめをもって竹やぶに入って、竹やぶの木とか竹におしめをさげてきた。

七日…七草、七草のおじやを食べる。
十一日…くわいれ、くらびらき。
十三日…片貝の虚空蔵様のご縁日。寅年の人の守り本尊という。今でもおまいりに行っている。
十四日…おかざりかえ。この日は餅をついて、まゆ玉をつくって小鉢に二つ、まゆ玉をもって、表座敷の机の上にあげた。蚕の神様は絹笠様。それをだしてお供えした。（小屋原の神社の境内にまつられている）。
（笂井の須藤家では、お正月のお棚の片方には歳徳神、もう片方にはみたまさまをまつった。十四日の晩に白飯をたいて、それをそっくり正月棚にあげた。）
十四日の晩に、むかしはどんどんやきをした。
十五日…朝小豆がゆを煮た。この小豆がゆを、ニワトコでつくったかゆかき棒でかんまわした。これをするのは年男。かゆかき棒の先を四つ割にして、まゆ玉をはさんでかきまわした。このかゆかき棒は神棚にあげておく。苗代のときに、苗間に一本立てた。こうすると、苗がよく立つといった。小豆がゆは神の体（こばち）に入れてあげる。小豆がゆをさげて、神の体を洗う。この洗い水をうちのまわりにまいた。これをするのはおばあさん、十五日の夕方。こうすると、うちの中へヘビが入らないといった。
なお、十五日のあずきがゆをすこしとっておく。十八日の朝、あっためて食べた。
十六日…この日の朝、うまやごいをだした。
二十日…二十日正月、えびす講をする。
二十八日…不動様の日。各家ではなにもしない。（笂井）
正月三が日の間に、朝に晩に神様にそなえものをした。
四日の朝、たなざらしといって、三が日あげたものをさげる。
六日は、山仕事をする人は、山の神様を祝った。
七日は、七草の祝いをする。
十一日がくらびらき、さくたて、この日は、畑でも田圃でも行って、さくたててきた。百姓の仕事はじめといった。
十四日は、おかざりをとったので、やくばらいというのでどんどんやきを夜した。おかざりで小屋をつくって焼いた。どんどんやきは、子供の行事。
十五日は朝あずきがゆをつくって、神様にあげる。ニワトコでつくって、神様にあげる。ニワトコでつくったかゆかき棒で、あずきがゆをかきまわしてから食べた。あずきがゆをふいて食べると、田植のときに風が吹くといった。吹いて食うなといった。
十五日は、苗代の祝いといった。
十八日は、石山の親音様の祭日。
二十日は、二十日正月、しまい正月ともいう。この日で、正月の行事が終った。
二十五日は天神様の日、二十四日の晩に宿に泊って天神講をした。二十五日の朝、神社の中にまつられている天神様へおまいりした。半紙に「奉納天満宮」と書いたのを納めてきた。
（二十八日はしまい正月）
三日は、大師様のご縁日、おまいりに行った。
四日は、反町・薬師様のご縁日。
四歳の子供をつれておまいりしてきた。
四歳の子供の厄おとしであった。
最近は旧百軒町の高岑院へつれて行くようになった。
むかしは、正月がくると年をとるといった。

本当のとしとりは二月の節分のとき。正月の晩には、米の飯を塩引のおかずで食べた。（東上野）

正月のこと　正月三が日は、サケを食べろといった。朝焼いて食べる。

朝はご飯、ひるはうどん、夜もうどん。（上大島）

正月三が日のこと　正月三が日は、火をたやすなといった。いろりに火をおこしておいた。

むかしは火をうんと大切にした。火打石で火をおこした。（上大島）

そば家例　そば家例の家では三が日の朝はそばを食った。四日に初めてモチを雑煮にして食った。三が日にモチを食うと、できもんができるといった。（亀里龍門）

井上家はそば家例で、そばをそなえる。三が日はそばだけだった。（亀里）

家例　正月に便所の前でカブをかじる家例の家があった。（力丸）

三が日はそば家例で、神様にあげるだけおぞう煮が作れた。

そばを作るのは男衆の仕事で、ゆでるところからつゆまで作った。（房丸）

三が日はそば家例。一日はぞうに、二日はそば、三日はそば。（小山家）。（下長磯）

正月三が日は、そばを食べる家が多い。ぞうにの家は少ない。（亀里寺家）

加藤一家は餅家例で、三が日もちをあげる。他の家はそば家例でもちが食べられない。食べるとできものができるという。（亀里阿内宿）

そば家例の家が多い。三が日にもちを食べると、おできができるといわれた。うどん家例の家もある。

徳丸に、三が日、便所の中でかぶをかじってすごす家がある。身代を大きくしたためという。（鶴光路）

樋口一家は、美作の四天王の今井、樋口の一家という。戦争に負けて、追いつめられてモチがつけなかったので、モチはつかず、ひやかして、カマドの上でみんな赤飯にして毎日それを食べた。

そこで三が日は赤飯を食べることになっている。（力丸）

藤井万代家　元日の朝はそば、夜は米の飯。

二日の朝は飯、夜も飯。

三日の朝は飯、夜も飯（とろ飯）。

三が日は、男衆が朝飯だけ料理した。

三が日の間は、供えた物はさげないでおく。四日の朝さげて、これを七草までとっておいて、七草のおじやにいれて食べた。

三が日の間は、餅を食べることができなかった。餅を食べると、できもんができるといった。餅は、四日から食べはじめた。四日の朝はしるこを食べた。（小屋原）

奥原の深沢賀一家　下増田の深沢賀一さんのうちは、正月には、めんば板を正月棚にする。

正月三が日は、うどんが食えない家例という。（上増田）

須永家　須永家は正月三が日は、ぞうにかれいである。三が日の朝は、ぞうにをつくる。

神様にあげるのはかて、大根、にんじん、いもを汁の中に入れて煮る。それを神様にあげる。その汁で、家族の者が餅を入れてぞうにを食べる。三が日にあげたものは、四日のおたなさがしのときにさげる。これをとっておいて、七草のおじやにまぜて食べる。

須永家では、十四日まではうどんをうつことができない。十四日になって、はじめてうどんをうつことができる。むかし、臼の上にめんば板をあげて、その上におかざりをしたので、めんをうつことができ

ないのだという。

十四日のおかざりかえのあと、はじめてめんをうつことができた。その間は、組内の親戚の人などがめんをもってきてくれる。ほうぼうからもらって食べた。十四日にめんをうって、それまでにめんをくれたうちへおかえしをした。（下増田）

山口家　山口行雄家では、正月三が日は、うどん（そば）。餅つきの日から朝はおじや野菜を入れた味つけをする。（三十、三十一日）、大晦の晩はご飯。大晦日にそば、うどんをぶっておく。これを三が日食べる。三が日の夜はご飯、とろめしを食べてもよかった。

四日の朝、三が日にあげたものをさげる。朝はぞうにをした。正月になってはじめて餅を食べる（ぞうにの中には餅を入れた）。

三が日の間は、餅を食べては悪いといった。なお、大晦日には、男主人がご飯を炊いた。一合くらい炊いて、それをお鉢に入れて、おあかりと一緒に神棚にあげた。この名称はとくにない。

正月の間は、ヤナギの箸で、うち中の者がご飯を食べた。ヤナギの枝をとってきて、鍋で煮て、皮をむいて、うちの人数分箸をつくった。

山口家は、そばがれいで、三が日は餅を食べなかった。

また、七草までは、なっぱ（白菜、つけもん）が食えなかった。（下大島）

湯沢家　湯沢家の三が日の家例はそばがれい、そばは、女衆がつくった。

そばは、神の鉢に入れてあげる。三が日は、朝がそば、ひるは餅を食べてもよかった。神様にはあげなかった。夜はとろめし、これを三が日食べると中風にならないといった。

三が日の間は、供え物はあげっぱなしにしておく。四日の朝、「たなさがし」といい、供えたものをさげる。これはとっておいて七日の朝、七草のぞうすいにたきこむ。（上大島）

新井家　一月一日の朝は赤飯、夜はご飯。

一月二日の朝はそば、夜はご飯。

一月三日の朝は赤飯、夜はご飯。

三が日の間に、とろめしを食べるもんだという。

戦後になって、暮の餅をつくようになったが、戦前は、餅をつかなかった。むかしは、正月のお飾りのときに、臼をつかったので、臼をつかうことができず、餅をつかなかった。

暮の三十日、よそのうちの餅つきの日に、ほうぼうのうちから餅をもらった。

一月三日は、赤飯をふかして餅をもらったうちにおかえしをした。一重箱ずつ餅をもらった。おそなえはあげなかった。

なお、三が日の間、餅を食べるのはよかった。一月十四日にも餅をつかなかった。

三月のお節供のときまで餅をつかなかった。なお、暮の三十日に、餅をもってきてくれたうちは、近所のつきあいをしているうち、新井家からよそへ嫁に行ったうちなど。

十軒くらいのうちからもらった。

須永の新井一家では三月までは餅をつけなかった。

昭和二十年ごろまでは、このしきたりを守っていた。

第二次世界大戦が終ってから、神主さんにたのんで、おがんでもらってから、正月の餅をつくようになった。（下増田）

北爪家　上増田には北爪家が五軒ある。このうち、わらじぬぎの家が三軒。

正月三が日の朝はそばがれい。昼もそば夜はご飯

ザクといって、ニンジン、ダイコン、ゴボウ、サトイモを汁の中に

入れ、ほかにゴマメを入れて、醤油味にして食べる。
四日のあさ、餅をはじめて食べる（三が日の間餅を食べるとできもんができるといった）。
いもと大根を入れた汁の中に、やいた餅を入れて食べる。（むかしは餅をやいて入れた）。おそなえは、四日の朝、坊さんがご年始にまわってくる前にさげる。これをとっておいて、一月十一日の倉開きのときに煮て食べる。これは、今でもしていること。
おそなえののこりは、しまっておいて、あとであられにして、油であげて、砂糖をまぶして食べた。これはむかしのこと。
ご飯も七草までは、あっためることができなかった。
なっぱも、七草がゆのときはじめて食べられた。七草前は、なっぱを食べては悪いといった。（上増田）
下田家　下田家ではそばがれい、しかし大体はうどんをつくってあげたり食べたりしている。三が日の間は、朝はうどん、ひるはなんでもよい。夜はご飯、三が日の間は餅を食べなかった。この間、餅を食べると、できもんができるといった。
また、なっぱは五日までは食べなかった。なっぱを食うとなくうといった。
五日になれば食べてもよいといった。ほうれんそうは草だから食べてもよいといった。（小島田）
井野源三家　源三家は、正月三が日は、そばがれいという。元日の朝はそば、昼は残りもん、夜はご飯。二日の朝はうどん。三日の朝はそば。昼は残りもんを食べたが、餅を食べてはいけないといった。
夜は、三日間とも米の飯、おかずはサケの切り身。三が日の間は、餅を食べてはいけないといった。餅を食べると、できもんができるといった。三が日の間あげたものは、四日の朝さげる。おたなさがしという。このとき、おそなえをさげて、やいて、ちぎって神様にあげて、それをさげて食べる。おそなえは、三十一日について、三十一日にあげる。
四日は、坊さんのご年始といい、坊さんがまわってくるが、その前に、さげろという。
三が日の間は、白菜を食べてはわるいという。四日から食べはじめる。（小屋原）
川島家　川島家では、正月三が日はぞうにをあげる。餅をあげる。夜はご飯。（上長磯）
奈良家　宮原の奈良家では、正月三が日はそばがれい。朝がそば、夜はご飯。おかずはサケの切り身。三が日の間は餅を食べない。
朝と晩、ヤナギの箸で、お松に供えた。里いも、いんげん、大根を入れた汁は夜食べた。
神様にあげないうちは、食事はしない。かれいは、今はくずれてしまった。（上増田）
下長磯の森村家　元日には、そばを神様にあげたり、うちのものが食べたりした。二、三日はぞうに、一月四日はおたなさがし。
この日から餅を食べてもよいとした。四日はぞうにをつくって神様にあげる。森村家では、一日はそばだが、二、三日はぞうにをつくって神様にあげた。
いも、大根、ねぎを汁の中に入れて、餅も入れて食べたり、神様にあげたりした。（下長磯）
北爪愛太郎家　正月三が日の朝はそば家例。昼間は、そばのあまりでも食べる。夜はご飯。三が日の間は、餅を食べない。餅を食べると、できもんができるといわれている。四日の朝、おたなさがしといって三が日あげたものをさげる。

おそなえは、十二月三十日に神様にあげておく。このおそなえを四日にさげる。

さげたおそなえを、一つでもやいて、雑煮にして食べる。

七草の日から菜を食べてよいといった。その前には、菜を食べては悪いといった。（下増田）

笂井の石井家　正月の三が日はそばがれい。昼は好きなものを食べた。夜はご飯。

三が日は、餅を食べなかった。餅を食べると、できもんができるといった。今は略して、おばあさん（たみさん）だけが、家族を代表して、餅を食べないでいる。

四、五日はいもがれい。

里芋を切って、大根は短冊にきってあげる。四日の朝、おたなさがしといって、三が日、お正月様などに供えたものをさげる。

四日から餅を食べてよいといった。おそなえときりもちをさげて、ぞうにして食べる。

石井家では、十二月三十日にもちつきをする。三十一日の朝、おそなえを全部の神様にあげる。それぞれの神様には、まるいおそなえを一つに、その上にきりもちを二切とみかんをのせ、さらにその上に、こぶとお松をあげる。こぶは、よろこぶということにちなんであげたもの。（笂井）

篠崎家　篠崎家では、正月三が日の朝に、そばの家例である。

餅は三が日すぎてから食べた。（上佐鳥）

女屋為義家　女屋家では、正月三が日にそばがれいである。そばをうって、神様にあげてからうちのものが食べた。

汁の中には里いもを入れた。七草までそばを食べていた。（東上野）

小林家　正月三が日はそばがれい。

三が日の間は、餅を食べてはならないといった。餅の食べはじめは一月四日。

中屋敷の（阿久津）せいいちさんの新宅では正月三が日のうちは、めんば板が出せない。それで、四日がうちぞめでうどんをぶった。

暮の三十一日は、餅（ぞうに）ばっかり食べていた。四日にはうどんをつくって神様にあげたり食べたりした。

小林さんのうちでは、三が日水あびをした。井戸端で裸で水をあびた。朝早くおきて、水をあびてからそばを食べた。

板垣家は正月三が日、朝風呂に入ってからつめたいそばを食べた。

小林家の水あびは、おんなしゅうは食べる用意をするので、男衆が先に水をあびた。あとでおんなしゅが水をあびた。

頭から水をあびた。

体を清めるわけ。

うちのおじいさんはかたい人で、このことをさせた。（下増田）

井野家　正月三が日はそば家例。

むかしは、女の人はけがれているというので正月三が日の間は、男衆がおつゆまでにて、女衆にさあ食べろといって起こしたという。

そばをゆでて、さますところまで男衆がやった。

三が日の間は餅を食べない。餅を食べると、できもんができるといった。お客にだしてもよかった。四日にはじめてぞうにをして食べた。

一、二、三日はそば。

四、五、六日はぞうに。

七日は七草がゆ。

八、九、十日はあまりものを食べた。

十一日はくらびらきで、ぞうに、土蔵にも供えた。

十二、十三日はなんでもよし。

十四日はぞうに、この日はおかざりかえ、わかもちをついた。
十五日は朝は小豆がゆ。
十六日はぞうに。

仁兵衛のこと　むかし、(石井家に)仁兵衛という人がいた。二十五歳のとき家を出て、国定忠次の子分になった。なにかあって、逃げてきた。お寺へ逃げてれば助かるとおもって、お寺へ逃げこんだが、寺で殺されてしまった。

ところが、石井の墓地へは埋けられないで広瀬川のそばに埋けたという。(庚塚というところ。藪の中に埋けた)駒形茂兵衛が有名になってから、駒形の人がよそへその墓をもっていったという。(小屋原)

関口三四家　関口家は、正月三が日はそば家例。
一、二、三日は朝はそば、夜はご飯、餅は食べない。
正月三が日の間に餅を食べると、できもんができるといった。
四、五、六日の三日間は、餅を神様にあげたり食べたりする。餅を焼いて汁の中に入れて煮て、野菜と餅だけをあげた。(大根、ほうれんそう、里芋、人参など)
雑煮にして食べる場合もあるし、汁粉にして食べる場合もある。
なお、おそなえは、暮のうちにあげて(供えて)おく。(天川大島)

阿佐美家　阿佐美家では、正月三が日はそばがれい。三が日の間は餅は食べない。餅を食べると、できもんができるといった。
四日にはじめて餅を食べた。
なお、おそなえは、一月十五日まであげておく。(朝倉)

奈良家　正月三が日は雑煮をあげる。イモ家例といった。
イモは切って煮て、おしらきにのせて二切れくらいずつあげる。
ニンジン、ゴボウ、イモ、ダイコンを切って、餅と一緒に煮た。餅はきり餅、やかないで煮る。醤油味にした。
あげるのは、サトイモ、サトイモをとりだしてあげる。それで、イモ家例という。外のおかざりのところは野菜をはさんであげる。
同じものを三日間あげる。これはあげっぱなし、四日の朝、たなさがしで、供えたものはさげてどんぶりにとっておく。
これを七日の朝、七草がゆの中に入れてにこむ。これをまた、正月様にあげる。(小屋原)

大塚田の木村家　大晦日に、でっかいねっこをいろりにくべておいた。灰をかけておいて、正月になって、火をつかうときには、付木で火をつけた。マッチはつかわなかった。
正月三が日の間は、いもがれい。この間は、おんなしゅは料理に手だしをしてはならないといった。男衆がした。
むかし、木村の兄(忠男)は二時に起きて風呂をわかして、後(うしろ)と西と床屋と隠居の一族が初湯に入って、一杯お祝いをして、男衆が帰ってから食事になった。
正月三が日の間は、餅を二切れずつ、焼いて神様にあげた。これを三日間さげずにおいた。四日の朝全部さげた。(上増田)

宮原の奈良家　正月三が日は、朝そばをする。そばがれいである。
正月三が日の間は、餅を食べてはならないという。
神様には、暮のうちにおそなえをあげておく。三日間はそばを食べ、四日になると餅を食べることができた。四日には、たいがいおしるこにして食べた。
三が日の間に餅を食べると、できもんができるといった。なお、三が日の夜はご飯をした。おかずは魚。
元日になると、餅を食べられなかったので、大晦日にさんざ食べておわっせえと、おばあさんがいった。(上増田)

小暮家　小暮家は、正月三が日はそば家例。

一日、二日、三日の朝はそばをつくって、神様にあげたり、食べたりする。そばをつくるのは男衆。（むかしは、おじいさんがそばをつくった。）

餅は暮の三十日についた。一夜餅はけがれるといって三十日についた。

十二月三十日の夜には晦日（みそか）どろといって、とろ飯を食べた。三が日の朝、そばだけを神様にあげる。汁はあげない。

三が日の間は餅を食べない。餅を食べると、おできができるといった。

三が日の間、夜はご飯を新しくたいて、シャケを切って、切り身をおかずにした。シャケはお歳暮としてもらったもの、シャケは大晦日のうちに切っておいた。

シャケは二切、角皿にのせてあげる。それはやかない。ご飯はお鉢に入れてあげる。

四日の朝、ぞうにをつくって神様にあげたり食べたりする。餅はやかないで、ちぎって汁の中に入れる。それをあげる。

汁の中には、大根、にんじん、ホウレンソウ、あぶらげなどを入れる。もちとかてをお鉢に入れてあげる。餅の上にかてをのせてあげる。

四、五、六日の朝ぞうにをつくってあげる。七日の朝、七草がゆをつくってあげる。

七日間神様にあげたものをさげて（おたなさがしという）すこし、七草がゆにまぜる。のこりはすててしまう。

七草がゆには、七草として、セリ、ナズナ、大根、にんじん、ごぼう、さといも、あぶらげを入れる。

なお、七草をまないたの上にのせて、包丁で切るとき、七草ナズナ、とうどのとりが、日本の国へ、渡らぬうちに…

と歌った。（駒形）

女屋庄之助家　三が日はうでぞうに。

もちに火をあてると火事になるといって、三が日の朝はゆでぞうにをする。三が日の間は餅をやくことができなかった。

おひるは、ありあわせのものを食べた。夜は赤飯。五日の間は、赤飯をふかして神様にあげた。三日は夜はとろめしで、赤飯ではない。

ぞうに（こきれ）と大根、にんじんを神様にあげる。女屋庄之助家では、いもはえびすこう（一月二十日）までは、食べることはできない。野菜は食べてもよかった。

真下幸隆家　いもをぞうにのかてにした。一月四日には、はじめてうどんがうてた。四日まではうどんを食べることができなかった。四日にはじめて、めんば板をだしてうどんをぶった。（女屋）

二　月

一　日

ジローの一日　ふかし万頭とか、かわりもんを作った。（徳丸）

この日は、特に何もしねェで、遊ぶ日だった。（西善）

もの日で、かわりもんを作った。（亀里竜門）

厄年餅　厄年の者が家族の中にいる場合には、二月一日に餅をついて、近い親戚にくばった。近所とか、嫁の実家とか、施主の兄弟などのところへくばった。重箱の中に二十一コと二十五コとか、あんぴんを入れてくばった。

これは、厄おとしのわけ。

お正月を二度して、年を余計とって厄をのがれるわけ、このおかえ

しはない。今では、笂井でも、かたいうちだけでやっている。（笂井）

二　日

デカワリ　雇人にひまを出し、お客にやる。雇人の更新日だった。（亀里竜門）

出替り稲荷（二月二日）　雇っていた人を里へ帰した。（徳丸）

三　日

節分　節分の豆を炒りながら、かまどの火でイワシを焼き、耕作四十八種の害虫の口を焼く唱え言を言った。

豆まきは早くやるほうがいい。遅くなると他から追い出されてうろうろしている鬼が入ってくる。（亀里龍門）

豆を炒りながら、豆がらの二又（ふたまた）にさしたイワシの頭を焼き、

「ナス、夕顔の虫の口を焼きもうす」

「四十二色の虫の口を焼きもうす」

などと唱えた。焼かれたイワシはトバッ口（くち）にさした。

豆まきの後残った豆は神棚にあげておき、夏になって雷がくると庭にまいたり、カヤの中で豆を食べた。（徳丸）

ヒイラギの枝にイワシの頭をさし、ツバキをつけて火で焼く。「ヘビの口を焼きます、油虫の口を焼きます」という。

この日は「鬼の首もゆるされる」といい、番頭が家に帰る。

この時の豆をとっておき、神だなに上げると雷除けになる。（朝倉）

豆まきのこと　豆をいるときには、きくとまめがらとなすがらを燃して、豆をいった。そのときの唱えごとは次のとおり。

いいこと、きくがら

しごとは、まめがら

しゃっきん、なすがら

このとき、いわしのあたまを、やなぎのざんまたにさして、豆をいる火であぶって、とぼ口のところにさしておいた。（上大島）

としとり　「鬼の豆は黒く炒れ」といわれ、ホーロクで豆を黒くなるまで炒った。豆がらにイワシの頭を二つさして、その火で焼きながら、「稲につくずい虫の口のむしやき」などと称えてツバを二回はきかけて、次々と害虫の名をあげた。他にスキ虫（桑の葉につく）・ハマクリ（稲の葉を巻く）・うんか（稲の花をなめる）などの名をあげた。（亀里寺家）

大豆を焙烙に入れ、豆がらを燃して炒る。この時、豆の枝のザンマタ（二股の枝）に、イワシの頭をそれぞれさして、唱え言を言いながら豆がらの火で焼いた。

「稲につく、ズイ虫の口のむし焼き」

「何でもかんでも、百姓に害をなす口の、むし焼き」

虫の名を思いつくだけ唱えて、あとは四十八種いるという虫をまとめて唱えた。唱え言の合い間にツバを二回イワシにはきかけた。こうして焼いたイワシは、くず屋の屋根下にさした。

炒った豆は、「ヨウ飯を食って年をとるべェ」と言って、屋敷の中の建て物は全部まいて周った。『鬼は外』は外へ向かって二回、『福は内』は内へ向かって一回唱えた。ただし、「蔵の前では鬼は外と言うな」と言われ、これは蔵を鬼に守ってもらうからだといった。

まいた豆は、年の数だけ茶碗に入れ、梅干しも入れて福茶として飲んだ。

余った豆は、神棚にカンにでも入れてあげておいて、夏の雷の時、『雷は遠くの桑原』と唱えながら、庭の天に向かってまいた。（西善）

ヤキカガシ　節分の時、大豆をいりながら、マメの木にイワシの頭

を二つつけて焼く。（亀里竜門）

八　日

コト八日　ヒイラギの枝を玄関のあちこちにさした。（亀里竜門）

二月八日と十二月八日、コト八日といった。

めけえにヒイラギの枝を入れて、それをさおの先に結びつけて、庭先に立てた。ヒイラギのとげで、鬼の顔をつっつくという。こうして、鬼を追い払うわけ。（駒形）

十二月と二月の八日には、ヒイラギの枝をめかいの中に入れ、さおの先につけて庭先にたてた。これは、鬼を除けるためといった。

また、この日、天からおかねが降ってくるともいった。

とぼ口、うちの出入口のところにも、ヒイラギの枝をさしておいた。これは、ぬすっとが入らないようにということであった。

なお、ヒイラギは、つぼ山に植えておいた。（下増田）

二月八日をコト八日という。

めかいをさおの先につけて、庭先に立てた。この日、天からおかねが降ってくるといった。こごわめしをつくって祝った。（天川大島）

師走八日と二月八日。

この日は夕飯に赤飯をふかした。また、夜なべをしてはわるいといった。この日夜なべをすると、そのとき得たおかねは、薬礼にはらわなければならないといった。この日、めかいにヒイラギの枝をさして、軒下につるしておいたうちもあった。（上増田）

「水も流さぬコト八日」と言った。

ミケエにヒイラギを入れて、長ざおの上にたてて、庭の木にしばっておいた。こうしておくと、翌朝金がおっこっているといった。

雨戸にもヒイラギをさしておいた。ヒイラギは、まよけになるといった。各戸で、この日針供養をした。（西善）

ザルの中にヒイラギを入れ、街道か庭の木に結えつけた長ざおの先につけた。（徳丸）

二月八日のことを、「水もならさぬコト八日」という。

この日、ヒイラギの枝を、めかいの中に入れて、竿の先につけて庭先に立てた。魔除けのためという。（上増田）

二月八日は針供養の日。この日針をつかうと、かいこの中にありが入るといった。だから、二月八日には、針を使うなといった。

また、石井家では、この日、厄神払をして、厄病神様をまつっていたのをおくりだした。正月のおかざりをする日に、厄神様のおかざり（ちょっぱしになわをつけたもの）をおてんまやにした。ここへは、他の神様と同じように、毎朝、ごぜんばつ（おはち）をあげた。

二月八日の朝には赤飯、おかね、豆、おさごをちょうぱしにのせて、三本辻に送りだした。

これは、ほかのうちで送りだす（うちへ入れない）厄神をうちへまつりこんで宿をしてやるのだという。そのために、厄神のきらいなヒイラギを庭先に植えておかない。

なお、十二月八日には、厄神の宿はしない。（笂井）

二月八日、ヒイラギを入り口にさし、髪の毛をもやした。　ざるを立てておく。（鶴光路）

二月八日、十二月八日にやった。（亀里）

二月八日に、ヒイラギの枝を、とぼ口のところにさした。（外に出るところ＝出入り口にさした）また、ヒイラギの枝をめかいの中に入れて、竿の先に結いつけて、庭先におったった。

悪いものがうちへ入らないようにということである。（上大島）

疫神送り　二月八日に、さんだわらに幣束をたて、おこわをあげて、

三本辻へ送りだした。（女屋）

初　午

初午　米の粉でマイダマを作って一升ますに入れ、ダルマさまにあげた。ダルマさまは蚕の神さまだといわれた。（亀里龍門）

メーダマを一升ますに入れ、床の間にかざった。

「初午の早くくる年は火ばやい（火事が多い）」といった。（西善）

米の粉でマイダマを作った。他にウサギ・馬・犬・カマツプタの形のものも作って進ぜた。進ぜたものは、後でしょう油・砂糖・かたくりでアンを作ってまぶして食べた。（徳丸）

二月のはじめの午の日は初午といった。重箱に笹の葉をしいて、まいだまを盛って、オヒラサマに進ぜた。進ぜる場所は床の間だった。（上朝倉）

二月の節分後の最初の午の日。まゆ玉を飾った。（鶴光路）

まゆ玉を米の粉をこねて、ふかし、まゆの形にして作った。実際のまゆより少し大きいくらいの大きさにした。

まゆ玉を枝にさして、かざった。（亀里寺家）

二月の初午の日には、まゆ玉をつくって、神棚と屋敷の稲荷様にあげた。一升ますにわらをしいて（わらを短く切って升のまわりにたてた）、その中に、山もりにして、床の間の机の上にあげた。

稲荷様と神棚とは、半紙の上にまゆ玉をあげた。二コずつ。

なお、ここでは、初午の前の晩のことはとくにいわないし、屋敷の稲荷様のまつりもない。（女屋）

二月の初午のときには、もちをついてまゆ玉をつくった。

一升ますにまゆ玉をもって（山もりにする、一升ますの中にささ葉を入れて、その上にまゆ玉をもりあげた）、床の間にあげた。

まゆ玉は、かいこ神様にあげたもの。東上野では、初午の日の前の晩にはとくに行事はない。

まゆ玉は、屋敷の稲荷様にもしんぜた。数は特にきまっていない。

初午の日に、屋敷神をまつることはない。（東上野）

二月の初午のときには、だんごをこしらえて、まゆ玉を、升に入れて、おかいこがみさまにあげた。おかいこがみさまは、おしらさまという。

まゆ玉は、屋敷の稲荷様にもあげた。なお、初午の日に仕事をすると、火にたつといった。（上大島）

二月の初午のときには、まゆ玉をつくった。これを一升ますに入れてしんぜた。（あるいは神の鉢）

表座敷に机をだして、その上にあげた。初午が早くくると、その年は火早いといった。（笂井）

二月の初午のときには、まゆ玉をつくって、おしらさまに供えた。

表座敷におしらさまの掛軸をさげ、机を出して、まゆ玉を供えた。おしらさまは、かいこの神様である。（下増田）

十五日

シャカのねはん　かわりもんを作った。（亀里竜門）

ふかしまんじゅうを作って、お供えものをした。（西善）

十七日

鎮守（ちんじゅ）さまのおまつり　もの日で、かわりもんを作った。（徳丸）

春の彼岸　春の彼岸は墓まいりだけした。

秋の彼岸から春の彼岸まで夜なべ仕事をした。縄ない・まぶしおり・俵あみ・ちょっぱし・わらじ作りが主な作業だった。

わらじは大正の半ばすぎまではいた。夏は、はだしで仕事をする事が多かった。（上朝倉）

はたがみ祝い　機織りをしていた女衆の骨休みの行事であった。大体二月ごろの行事。このとき、近所の人がおかねを出しあって、浪曲師をたのんできて、浪曲を聞いたり、ご馳走を食べたりした。二人たのんで、一晩で一円か一円五十銭くらいだった。これを、はたがみ祝いといった。（駒形）

おひなさま　二月二十八日に飾り、三月四日にはしまう。終ったらすぐしまわなくてはいけない。（公田）

三　月

三　日

おひなまつり　三月の三日は、買ってもらった裸の人形に着物を着せて、おすしをもって、天川の二子山へ遊びに行った。この人形のことをダイコンボーといった。ダイコンボーはひな段にかざった。いたんだおひなさまは、お菓子をもたせて端気川へ流した。（上朝倉）

お節供のこと（嫁の里帰り）　三月のお節供には、ひしもち、おかねを持って嫁の里へお客に行った。おかねは、婿の名で持って行った。

五月の節供のときは、たらのひものと、おかねをもって行った。

八朔の節供のときには、赤飯に葉ショウガをのせて里へお客に行った。里からは、おかえしとして、かいこのみけえとかいかけざるなどをよこした。（笂井）

イワシの開きを五枚、嫁の里へのみやげに持たせてやった。（亀里）

二日にもちをついて、三日に嫁はひしもちを持って里帰りした。この時、嫁が泊まってくると蚕がはずれると言われ日帰りだった。女の子は、おひなさまとおすしをもって利根川原へ行って遊んだ。おひなさまは年に一回出さないと悪いとこ（特に眼）ができるといった。また、いたんだおひなさまは川へおさめた。（亀里寺家）

ひなまつり　二日にヘシモチ（ひしもち）をついた。初嫁をもらった年に、むこが嫁の里へ紅白のヘシモチをもっていった。

ひな段は二月の大安にかざった。嫁の実家からは一対のひなを初節句でもってきた。いたんだひなは、藤川へ流した。年に二人の死人が出た場合は、一番古いひなをヒツギに入れた。（西善）

ひなの節句　紅白三枚のひしもちを作って水ひきをかけ、嫁の里帰りにもたせた。（亀里竜門）

十五日

ししまつり　三月十五日に、太鼓をたたいて町内を下から上へのぼる。世良田の八坂神社で祈禱をしてもらい、お札を各戸に配る。代参が二人行く。しし頭がある。（下阿内）

梅若忌　三月十五日を梅若という。この日に子供が河原で殺されたので、梅若忌としたのだという。（鶴光路）

梅若　三月十五日のこと。

社日　お彼岸近くの日で、この日は土を動かさない。（亀里竜門）

下阿内のお獅子（下阿内）

四月

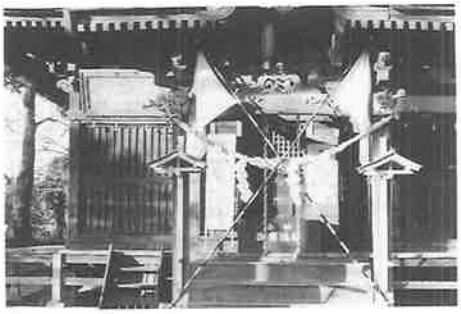
八日

花まつり　須永では、毎年四月八日に、寮で花まつりをやってきた。むかしは、お釈迦様を寮の外縁にだして、甘茶をかけていた。祭壇があった。もっとむかしは、おくりの座敷にまつって、おまいりにきた人は、屋敷にあがって、甘茶をかけた。

むかしは、寮のおもりをしていた人がいた。この人が甘茶をだしてくれた。その人のあとは組の役員がひきついでやっている。

この日、蓮花院でも花まつりをやった。須永の人は、須永の花まつりをしてから、お寺へ行って甘茶を飲んできた。

四月八日には、各家庭では草餅をつくった。この日が、草餅のつくりはじめだった。（下増田）



日吉神社（山王）

『死んでまたくるおしゃかさま』と言って、この日におしゃかさまが生まれた。ぼたもちを作って仏様にあげた。

この日は節句で、遊ぶ日だった。『ものぐさもんの節句ばたらき』といってもの日に働くもんはまずなかった。（西善）

はなくさ（はなくそ）餅　四月八日には、米の粉で草餅をついた。これを、はなくさ餅といった。仏様と神様に供えた。なお、八十八夜のしもよけ餅が草餅のおしまいという。（上長磯）

十四日

日枝神社の祭典　この日は、村中で赤飯をたいておまつりし、人よびをしたり、親類に赤飯を配った。神社では太々神楽があった。（西善）

日吉神社（山王）

十五日

八幡様の春祭り　四月十五日が下増田の八幡様の春祭り。むかしは、太々神楽もあった。前橋の丸二代神楽もきた。ひっぱりもんもでた。店もいっぱいでた。この日は、花見でもあった。（下増田）

春まつり　下増田の春まつりは四月十五日。神社の境内に神楽殿はあるが、神楽の奉納はない。後閑から神楽師をたのんでやったことがあった。長いこと、神楽の奉納はない。（下増田）

春祭り　四月十五日は、東上野の春祭り。この日、獅子まわし、天道念仏、ぼんでんあげをする。これを、上、中、下組で分担して行っている。（東上野）

二十八日

小旗始め　四月二十八日。五月節句ののぼりを立てた。（亀里）

五　月

二　日

霜除け餅　八十八夜の前の晩に、しもよけ餅といって、草餅をついた。それを神様にあげた。（上長磯）

八十八夜　前の日に、霜よけもちといって、草もちをついた。（亀里寺家）

八十八夜のとき、霜がふらないようにと、餅をついて祝った。（朝倉）

むかしは、八十八夜のときに草餅をつくった。この日、柴の稲含様へおまいりに行った。稲含様は蚕神様で、むかしは、この日、蚕につかう道具類を買ってきた。今は植木市がたっている。今でも竹細工の類は売っている。（下増田）

四　日

五月四日の晩　このときは、ショウブ酒を飲んだ。ショウブ酒を飲むと、病いにならない。虫にさされないといった。（笂井）

軒下に、かやともちぐさをさした。また、神棚にもあげた。魔除けのためという。（小屋原）

五月節供のこと　五月四日にヨモギとショウブを軒下や家の入り口にさしたり神様、仏様、屋敷稲荷様にあげたりした。

また、ショウブをきれいに洗って、徳利にさす。徳利の中に酒を注いで神棚にあげておく、それをさげて、うちのもんが飲んだ。

夜、ショウブ湯をたてて入った。五月四日を、宵節供といって、そのばんにショウブ酒を飲んだ。

五月の節供　五月の節供のときは、四日の夕方、ヨモギとショウブを軒下にさした。三カ所にはなしてさした。

また、風呂の中にも、ヨモギとショウブを束ねて入れて、その風呂に入った。これは、邪気を払うといった。（笂井）

タラの開きを二枚くらい、嫁の里へのみやげに持たせた。（亀里）

五　日

ごんちの節句　よもぎとしょうぶを庇（ひさし）にさし、神棚にもあげた。晩にはしょうぶ湯に入った。（亀里竜門）

よもぎとしょうぶを、庇（ひさし）の三場所にさした。その晩は、しょうぶ湯に入った。（西善）

よもぎ・しょうぶを軒先の三ケ所にさした。しょうぶ湯に入ったり、しょうぶ酒を飲んだりした。（徳丸）

しょうき大神をかざり、のぼりを立てた。ふき流しは嫁の実家からもってきた。（上朝倉）

男の子の節供で、嫁の実家から両家の家紋の入った吹き流しがおくられた。他の親せきは、しょうきさまのぼりをくれた。

晩にはしょうぶ湯に入った。しょうぶを腹にまいて、しょうぶをこくとと虫がきれると言い、頭にまくと頭痛よけになると言った。（亀里寺家）

十五日

おこもち　お蚕が休んでいるので農休み。

その日の朝、白いもちと粉（こ）もち（うるち米）をついて、夫婦（ふうふ）もちと言った。（亀里寺家）

農休み　もの日。お蚕が休んでいるので農休。おこもちをついた。（亀里竜門）

六　月

おこあげ　お蚕があがると、もちをついて、おこあげの手伝いをしてくれた人に配った。（亀里寺家）

天王さまのお祭り　きゅうり、ナスをもっておまいりした。はやり病にかからないようにだと言った。天王さまの紋は輪切りにしたキュウリに似ているので、キュウリをあげた。「キュウリは輪切りに切るもんじゃない」と言われた。（亀里寺家）

石尊さま（六月二十八日）　川の端に竹を四本、短形に立ておしめをかざり、青年団が水をかけあった。水をかける手は丁度相撲の突っ張る時の手の形でなければだめだといった。

唱え言は「サンゲ、サンゲ、六根清浄、大山（おおやま）セキトン（石尊）大権現」と言った。いま、石尊さまをまつるのは老人会である。（亀里寺家）

石尊さま（亀里竜門）

七　月

一　日

かまの口あけ　やきもちをつくった。ごぜんにうどん粉を入れて水でねってほうろくで焼いた。（徳丸）

ハッチョウジメ　七月一日に村の境に立てた。役員が出て、竹のさおにお札をつけて立てた。お札は、淡島神社の代田さんの所から受けてきた。（亀里寺家）

水無月払い　半年が終った祝いのこと。（亀里）

七　日

七夕　七夕のときは、六日の夕方、おかざりをたてる。短冊には、自分の願いごとを叶うように、いろいろのことを書いてさげる。短冊に書く字は、いもっぱのつゆで墨をすって書く。おかざりは田の水口にたてておく。虫がつかないといった。

七夕の日に、ネムッタのはっぱで目をこすると、目がよくなるといった。また、七夕の日には水浴びをすると、病気にならない。よく水を浴びて、（病気を）洗いながせといった。この日、髪を洗う。よごれが落ちるといった。なるべく朝洗った。

七夕の日には、雨が降るといいといった。厄病がはやらないといった。三粒でも降ればいいという。

竹のかざりは軒下にたてた。六日の夕方。新竹を切ってそれに短冊をさげてかざった。とるのは、七日の朝でもいいし、いつでもいい。みんなして水口に持っていってたてた。

七夕のときに、ふかしまんじゅうをつくってあげた。（上大島）

六日の宵に竹竿に短冊を切ってつるさげ、立ち木にしばりつけた。竹は新竹を使った。かざり物は七日に、田植えのすんだ田のしり水口に立てておいた。（西善）

新竹に作物の豊じょうを祈って短冊をつるした。「天の川、遠き渡りにあらねども、君が船出は時にこそまで」などと書いた。

こうして庭にかざった物は、田の水口（とり入れ口）に赤飯をそえ

て夕方さした。（徳丸）

かざりは、とぼ口の近くにたてた。新竹に短冊をつるした。短冊には思い思いのことを書いた。

七夕のときには、ふかしまんじゅうをつくって供えた。

かざり竹は川へながした。（筑井）

七夕には、七日水あびをしろといった。この日は、遊び日だった。ふだんぎでなく、いいきもんを着て遊んだ。子供は小づかいをもらった。この日は、ふかしまんじゅうをした。（女屋）

七夕のこと　七日びには、めずら畑に入るなといった。この日、あまのかみさまが、めずら畑でおあいになるから、めずら畑に入ってはいけない。めずらは、その前にとっておけといった。（上大島）

七夕のかざり竹　七夕のかざり竹は、苗間にたてたり川へながしたりする。（小屋原）

農休み　田植えが終って三日間は農休みだった。ふかし万頭を作った。若衆は活動写真を見に行った。十銭か二十銭だった。（亀里竜門）

二十二日

土用のみつめ（三つめ）　戸主がでて、宿を決め祭りの宿とした。悪魔っぱらいに、獅子舞が各戸をまわった。男獅子二つ、女獅子一つ、かんかち一人、笛二人か三人、まんどう、その他で組をなした。各戸では米と金をくれた。獅子は宿の家で保存した。（西善）

二十四日

天王まつり　二十三日に、十歳以上の長男が寄って半紙に絵をかきとうろうに張って、とうろう竹にかけて立てた。南向きの天王さまのお宮の参道に、このとうろうをかざった。

二十四日には子供達が『天王さまのおぼしめしをくれて下さい』と各戸をまわった。二銭、三銭、五銭のおぼしめしがあった。昼頃には「天王さま、わっしょい」といいながら部落中をまわった。二十四日、五日の晩、子供達は集会所におこもりをした。村中の大人が天王さまにおさい銭をあげたので、それが子供達の小使いになった。（西善）

灯籠をつけること　オクンチの前の晩と、七月二十四日の地蔵様の晩に灯籠をつけた。オクンチのときには、前の晩（十月十六日）に、神社の庭に灯籠をつけた。このときは、子供たちに、竹とかおかねをもらいあるいた。これをかんけいといった。「かんけいくれ」といってまわった。竹のないうちは、代りにおかねをくれた。竹はあとで、あまると売った。

子供たちは神社の拝殿に泊った。早く寝ると、ちんぼなどいたずらされた。

ムラの人は、夜明けと同時におこわをもっておまいりにきた。一番のりをするといって競争で早くもってきた。

地蔵様は七月二十四日の晩、むかしは灯籠をつけた。おまいりする人は、じりやきをつくってもって行った。（女屋）

二十五日

天王まつり　八坂神社の天王まつりで、ハナを戸数分作って天王さまにあげる。各戸で、天王さまにおまいりをしてハナをいただき、もち帰ってトバッ口や馬小屋にかざった。一緒に赤飯を進ぜた。（徳丸）

七月二十五日が天王まつり。もとは七月十五日であったが、盆の関係で二十五日に変更した。この日は、境内に灯籠をつけるだけ。（下大島）

夏祭りのこと　午後五時に屋台、みこしが十字路のところに勢ぞろ

いしておまつりがはじまる。
一丁目・二丁目…あわせて、山車が一台でる。
三丁目…屋台（山車）とみこしがでる。
四丁目…本みこしと子供みこしをだす。
五丁目…大人と子供のみこしをだす。
六丁目…大人と子供のみこしをだす。
打越…大人のみこしをだす。（駒形）

二十八日

ぼんでんあげ　七月二十八日の昼過ぎ、お昼を食ってから桃木川にしめをはって、さんげさんげろっこんしょうじょうと、水ごりをとってからぼんでんあげをした。わかいもんが多くでてやった。そのあと、神社の拝殿へあがって一杯のんだ。

そのぼんでんあげをやめたことがあった。そしたら、その年に、桃木橋と上野堰が一緒に流れた。昭和三十九年の七月二十八日のことだった。雷がなり、豪雨のため、国道五十号線から東上野の入口にかけて大水がでて、桃木橋と元堰が流失してしまった。また、東の卯三郎さんのうちの子が、神社で遊んでいたら、突然石宮の屋根がおちてきて、その下敷になりそうになった。それまでは、毎年、ぼんでんあげをしていた。

下増田・北爪神主さんをたのんでおがんでもらっていた。神社の拝殿の前で東側に大杉があって、その上にぼんでんをあげていた。大杉には穴があいていた。そこに蜂の巣があった。

ふんどし一つで大杉にのぼった。七寸くらいの太さの竹を切ってうらから一尺五寸のところに枝をのこして、そこにご幣（ぼんでん）をはめこんで高くあげた。ぼんでんを高くあげるほど神様がよろこんでくれるといった。

このぼんでんは、永明地区から見えるようにと高くあげたものである。このとき、厄病神がムラへ入らないようにとおがんだ。

東上野では、石尊様のおまつりをしても大山阿夫利神社へおまいりに行ったことはない。石尊様のまつりは、この近くでは、上長磯、小島田、堤でやっていた。桃木川へ入って、さんげさんげろっこんしょうじょう、とくりかえした。不動明王、大山石尊大権現、さんげさんげろっこんしょうじょうと唱えた。すっぱだかでやった。三べんとなえてはやすみ、水をかけあった。おがんではじめて、三回くりかえして、東へむかっておがむ水ごりは、桃木川の上長磯のすぐ上でやった。水の深いところでやった。村中、一戸一戸一人ずつ出てやった。自費で、酒、さかなを買って用意した。さけのさかなにきゅうりもみをだした。

ぼんでんは、一年中あげておいた。太いなわで、ぎっちり、三ばしょしばった。

昭和三十九年のときやめたら、災害があったのである。

獅子まわしは、七月二十八日のぼんでんあげの日に一緒にやっていた。

天道念仏は、三月のお彼岸の中日に、寮でやっていた。もとは一昼夜やっていた。「なんまいはいどうさんぼう」をくりかえしていた。当番にあたったクルワの人がやっていた。

この三つの行事を四月十五日の春まつりの日に一緒になやることにした。上・中・下の三つのクルワで、それぞれの行事を分担してやっている。（交代して）

たとえば

一組…天道念仏

二組…獅子まわし
三組…ぼんでんあげ
これを交代でしている。
これを一度にまとめたら、不思議なことがあった。（東上野）

八　月

一　日

八朔　嫁が、ショウガをもって里帰りする。里では、最初の年には箕、翌年にはメカイをくれてよこした。（亀里寺家）

タノモの節句ともいった。嫁の里帰りにショウガを手土産に持たせ帰した。実家ではメカイか箕をもたせてよこした。（亀里竜門）

嫁にしょうが、ごぼうを持たせて里に帰した。節句返しに里では、み、しょいざまをくれてよこした。（西善）

しょうがを束ねて、のし紙つけて嫁の里に持たせた。嫁は実家でごちそうになり、土産にメカイ・イカキをもらって帰ってきた。（徳丸）

八月一日の行事。この日、嫁御さんが赤飯をふかして、しょうがを一緒にもって里へお客に行った。里からのおかえしは箕。蚕がさかんだったので、ざるとかいこをもらってきた。それは、嫁がせた娘を大切にしてもらいたいという親の願いがこめられていたこと。

八朔のときは、おかえしの方が大変だった。里の親は、「おこわとしょうがで、みかいをやらなくちゃなんねえ、よういじゃない」といったという。（小島田）

八朔のときには、嫁は、ショウガとかゴボウをもって里へお客に行った。いいもんを持って行った。これは、婿の腕のみせどころだった。こんなに真剣につくっているということを、嫁の里の親に知ってもらうことだった。婿の腕の見せどころだった。

里の親からのおかえしとしては、わしらのときには、はじめの年はめかい、つぐ年が箕だった。これは、里方から、嫁を大目にみてくれというのでよこすのだという。五、六年行くとやめになった。（上増田）

嫁は赤飯をもって、里帰りをした。おかえしがあったが、よくわからない。（下大島）

八朔の節供のときには、初嫁は里へお客に行った。

このときは、しょうがの年とりの日にあたる。しょうがをとるのにいい時期であるという。

しょうがは泥の中にいて赤い色をしている。このときは、婿が嫁をつれて一緒に行く。「われわれは、泥の中にいて、これだけのことをしています」というわけという。

里からのおかえしは、目のあるものをよこした。めかいかごを嫁にくれてよこした。婿には、天秤棒とか、ため揚杓をよこした。

めかいをよこしたのは、めのかずがふえるようにということで、子供を多くうめということであった。

仲人のところへもあいさつに行った。仲人からもおかえしがあった。なお、仲人のところへも、盆暮お正月のときにはあいさつに行った。お正月には大判もちを三枚がさねにしてもっていった。（勝島）

八朔の節供には、砂糖折などと、夏ごぼうを持って行った。ショウガももっていった。水引をかけていった。

里からはおかえしに箕をよこした。これは、嫁さんが早く身持になるようにということであった。よく年はみかいなどをもらってきた。持って行くのは同じもの。三年くらいは行った。

八朔の節供のことは、たのもの節供といった。（駒形）

八月一日はショウガの節供という。

嫁がショウガの束をもって、里へお客に行った。これは、もらい方からくれ方に対して、しょうがねえよめごだということだという。

里からは、おかえしとして、箕をよこすうちもあったが、ふつうは、ざまとかめけえをよこした。これは、くれ方の親が、もらい方に対して、「大目にみてくれ」という意味をもたせてよこしたものという。ざまをよこすといやがった。これは、「ざまあねえ」ということを意味するからという。（上増田）

おかまの口あけ　盆月の一日は、おかまの口あけという。

この日は、ふかしまんじゅうをつくった。神様と仏様にあげだ。

盆前に墓掃除をする。

また、かまのくちあけのときには、やきもちをやいて、仏様にあげた。（上大島）

お盆がくるので、地獄のフタを開けるといった。うで万頭を仏壇へそなえた。（上朝倉）

このことばは聞いたことはあるが、内容はわからない。（下大島）

このときは、やきもちをやいて、オカマサマにあげた。かまどの神様にあげた。そのほか、仏様とか神棚にもあげた。（櫛島）

生き盆　親が丈夫な人は、嫁に行った娘が、盆の前に、うどん（干しうどん）をもって里へお客に行った。それを里の親に食べてもらった。うちうちだけの行事であった。（野中）

（八月一日ごろ）　嫁が実家へ夫婦で帰った。嫁ぎ先で作ってもらった着物を着て行き、うどんの束を隣近所へ配った。（亀里竜門）

むかしは、生き盆といって、初嫁が、もらい方からかかりを出してもらって、里へ行って、里の近親者をよんでごちそうをしてやった。

このとき、生き盆の着物を着て行った。

初嫁には、生き盆のときに、絹のきもんをつくってくれた。嫁はそれを着て里へお客に行った。その着物のことを、生き盆ものしといった。（笂井）

生き盆は、盆の前の行事。絽のきもんをこしらえてもらって、嫁はお客に行った。結納金をたくさんもらった人が絽のきもんを着せてもらった。結納金が少ない（三十円くらい）のは、そんなにいいきもんをつくってもらえなかった。（女屋）

初嫁の場合、盆の月の都合のいい日をえらんで、生き盆ぶるまいをした。

嫁と婿が、嫁の黒へ、干しうどんとかおかねをもってお客に行く。

近所の人をよんでふるまいをした。親のうちには、一銭の負担もかけないでご馳走をした。

たいがいは、干しうどんを買っていってだした。

里の親、親類の人、近所の人をよんでご馳走をした。

このときが、婿と里の近所の人とのちかづきになった。

このときは、泊ってはならないという。なお、里の親が生きていても、なくなっていても、関係なくやったこと。

今はしていない。（櫛島）

初嫁は、盆前に里へお客に行った。このとき、もらい方では、嫁にいい着物をつくって、着せてやった。

里方で食べるうどんをもって行ってご馳走をしてやった。里方では、かかった費用をとってくれというが、もらわない。かかった費用は一切もらい方でもった。このときは、婿も一緒に行った。婿も泊ってきた。一晩だけ泊った。

近所の人、近い親戚の人（本分家、おじ、おばなど）をよんでご馳走をした。よばれてくる人は、お包みをもってきた。（上佐鳥）

生き盆というのは、初の嫁さんが、里へお客に行くこと。時期は盆の前。新しい嫁さんが何年か行った。

このとき、もらい方で、きもんをこしらえてくれた。それを着て行った。紹の羽織を着ていった。婿さんも夏のひとえもんをこしらえてもらって着て行った。

このときもって行くものは、うどんとか粉。それで里の親とか義姉などがご馳走をつくってくれた。

このとき招待するのは、里の親、きょうだい、おじさん、おばさん、仲人など。ムラ内の人をよんだ。夕飯のときによんでご馳走した。

わしのときは、銘仙のようなひとえもんをつくってもらった。帯もつくってくれた。

この行事のことは、生き盆振舞といった。このときは、泊らずに帰ってきた。（笂井）

嫁にきてはじめての盆を迎えるとき、盆より前に、里と仲人のところへ、物とおかねをもって行った。親によろこんでもらえるような食べ物をもって行った。嫁さんと婿さんが一緒に行った。これは、嫁にきた年一年だけの行事。

なお、このとき、もらい方では、生きぼんぎもんといって、絹もんのいいきもんをつくってくれた。おびも下駄も新しくしてくれた。そろえてつくってくれた。これを着て、嫁さんはお客に行った。（駒形）

嫁にきて、はじめての盆を迎える人は、嫁ぎ先でひとえもんをこしらえてもらって、里へ着て行った。そのきもののことを、生き盆ものしといった。ものしとは、ひとえもんのことである。（上増田）

嫁いだその年の夏、盆の前にする行事。

嫁さんは、夏の仕度をつくってもらって着てきた。これは、とつぎ先でつくってくれた。

里方の近所の人をよんでふるまった。（女屋）

十三日

盆行事　盆迎えは十三日。この日の晩はご飯。十四日の朝はぼたもち、ひるまがうどん、夜はご飯。また、トウナス汁をする。

十五日は、十四日に同じ。

十六日の朝はぼたもち、ひるまはうどん、夜はご飯。（上大島）

盆迎え　むかしは、盆迎えのときには、餅をついた。十年くらい前まで。もとは、泉蔵寺まで迎えに行ったが、今は（寺と縁を切ったので）墓まで迎えに行く。提灯をもって迎えてくる。かど口で、ムギわらを燃して迎える。盆棚のあかりに、迎えてきた火をうつす。

なお、仏様は、餅つきの杵の音を聞いてうちへ帰ってくるといった。

なお、成人した仏様の位牌は、盆棚の上にまつり、子供の仏様は、机をおいて下にまつる。（小屋原）

新竹四本を棚の四隅に立て、チガヤでなった縄をはりめぐらし盆棚を作った。棚にはマコモの葉で編んだ盆ござを敷き、また買ってきた造花の盆花をかざった。盆棚はザシキに東向きにし、御先祖さまの位牌を全部仏壇からおろして並べた。

おつつみをもって盆ブチに行き、比叡山の法燈をいただき提灯に灯りをうつす。この時寺から茶や線香をいただく。墓まいりをすませた後、家の門口の麦ワラ束に持ち帰った灯りをつけ迎え火をたいた。また、この灯りで仏壇の燈明をあげた。

お盆（八月十三～十六日）　十三日は盆むかえで、墓まいりをした。お寺からの帰りは後を振り返ってはいけないといった。家の門口で、家族が麦ワラを燃してご先祖さまをむかえた。

十四、十五日はご先祖さまをおまつりした。ぼたもちは十四日と十

五日に作った。

十六日は盆おくりで、ナス・キューリの馬と線香をもってお墓へ行った。この時、盆棚をこわして一緒にもって行き、後で燃した。（西善）

盆棚は十二日に作った。おしめに、『仏さまのしょい縄』のうどんをかけた。

迎え盆は十三日で、墓まいりの後門口でむぎわらの迎え火を燃やした。

送り盆は十六日で、門口の火はたかず、ぼたもちなど進ぜたものとナス・キュウリで作ったウマをもって墓へ行った。ウマには、どんぶりで水をはりネブタの葉で水をあびせてやった。（徳丸）

明治の終り頃まで、八月三十一日から九月三日までがお盆だった。その後三度日が替って、三年程前から八月十三日から十六日までとなった。（上朝倉）

十三日には五時におき、まこもを綱み、ちがやをなう。まこも、ちがやは十日頃刈って干しておく。青竹は、葉の細かいものをとり、杉葉も切って用意しておく。

十三日にボンブチに行き、帰りにワラをもやしてむかえをする。

新盆は十四日にすませなくてはならない。（亀里）

お寺から本堂の分かされの火をもらう。帰って小麦ワラを街道でつけて迎え火をする。

送り火は、他の家の街道、田や畑、川の端へ持っていって線香をもやす。なすのうまを作ってそなえる。（下長磯）

盆むかえ、盆おくり　八月十三日は盆むかえで、アカシをつけない提灯をもってお寺へ行った。墓まいりをすると、お寺のアカシを提灯にもらって、そのアカシで、仏だんの灯明をつけた。

十六日は盆おくりで、提灯にアカシをともしてお寺へ行き、帰りはアカシを消してきた。

十四、十五、十六日は毎日ぼたもちを作って仏さまにしんぜた。

「朝はぼたもち、昼はうどん、夜は米の飯というなす汁」といった。（上朝倉）

盆行事　山口一家は盆棚を、ほかのうちより一日早くつくった。

盆迎えは十三日。寺へ迎えに行く。

盆送りは十五日。

かどにむぎわらをおいて火をつけた。迎えてきたものは、玄関からうちへ入った。山口一家は十五日に送りだす。ほかの家は十六日に送りだす。（下大島）

十五日

盆のこと　盆のとき、うちの先祖様と、のぼとけさんはべつにおまつりする。ご飯、汁、お茶はべつにあげる。のぼとけさんには、盆棚の下に、「のぼとけさまにあげます」といってあげた。（筑井）

女屋では、盆送りは十五日の夕方、盆の野まわりはなかった。（女屋）

盆棚　お盆のときは、おもて座敷に棚をつくる。

人にならないで亡くなった人は、棚の下に供え物をした。下にお膳をだして供え物をした。無縁仏といった。（下長磯）

棚の四方に竹を四本たて、かやで編んだおしめをまわして位牌をおろし、表座敷の西南の角にかざった。おしめには杉やヒノキの葉をさげた。（西善）

十六日

盆送り　早い人は、十六日の朝の七時ごろに送りだした。おくりの縁側のところから送りだした。ここでは、小学校へ行く道のはたに送

りだした。
ナスでつくった馬や、お盆のあいだ供えておいたものを、お盆にのせて送りだした。そのうまには、うどんでつくった荷縄をあげた。仏様は、馬に乗せてひいて送りだした。
あかりは、うちの棚のあかりをうつして、墓参りに行った。そのあかりで線香に火をつけてたててきた。うちへ帰ってきてから、分けておいた供え物をもって、こんどは、墓へ行く。これは昼過ぎのこと。
（下長磯）
提灯にあかりをつけて、むかしは、お寺まで送りだした。（小屋原）
女屋では、十五日に盆送りをする。ほかのムラより一日早い。むぎわらで、かど火をたいて送りだした。（女屋）
盆の飾りもんは、韮川用水にながした。（橋の上から）、十六日にながした。（下大島）
ナスに竹の棒を四本さして足とし、とうもろこしの毛を尻尾として作った馬と、盆棚をこわしたものを墓へもっていった。（亀里寺家）
盆の十六日に、うちではおふくろさんが、わざわざお茶をいれて、うちのまわりにまいた。これは、もぐらがもぐらないようにということであった。
駒形でも、一月十八日に、おかゆのあまりに水をたして、うちのまわりにまいたうちがあった。うちではしなかった。（駒形）
女屋では十五日の晩に盆送りをする。墓まで送りだす。わらをもって行って、墓で燃して、仏様を届けてくる。ナスの馬をこしらえて送っていく。仏様はこの馬にのって帰って行くといった。（女屋）
盆の野まわり　松村家では、盆の野まわりはしなかった。（東上野）

旧八月十五日

八幡まつり（旧暦八月十五日）　十五日が本祭りで、十四日は前日（まえび）。前日には男の子が『八幡さまでおぼしめしをもらいにきました。』と言いながらリヤカーを引いて部落をまわり、十銭から五十銭のおぼしめしや、おこもり宿を作る杉材料を集めた。おこもり宿は八幡さまの境内に作られた。畑をあらしてもってきた野菜を食ったりした。
本祭りには赤飯が各戸でふかされて、おこもり宿へもってきた。
（亀里竜門）
十五夜（旧八月十五日）　米の粉でつくったおてまる十五個と、すすきを十五本かざった。子供達は棒の先に釘をうってあげたものをさげにいった。しみったれ家は格子戸の向こうにかざったので、つったものが格子にじゃまされてとれなかった。（亀里龍門）
果物と団子をそなえた。子どもが、さして取る道具を用意してとってまわった。とられると縁起がいいという。（亀里）
むかしの人は、お月様の中で、ウサギが餅をついているといった。「十五夜にくもりあれども、十三夜にくもりなし」という。（上大島）
十五夜、十三夜　おそなえを子供が釘を棒の先につけたもので、とりにくる。（亀里龍門）
十五夜のときには、ふかしまんじゅうを十五コあげた。十三夜のときには、おてまるとかふかしまんじゅうを十三コあげた。
「十五夜に、くもりあれども、十三夜にくもりなし」といった。
十三夜にくもると、ムギが不作だといった。（女屋）
農休み　八月の晩秋の前に二〜三日休んだ。区長会で決定して、フレをまわした。（亀里阿内宿）
土用餅　むかし、土用餅をついた。あついときについて食べた。あ

んぴんもちにして食べた。骨をおっている時期なので、かわりもんをして食うわけ。（女屋）

薬草取り　土用の丑の日には、薬草をとった。

ドクダミとかゲンノショウコなど、それをかげぼしにしたり、風呂に入れたりした。ドクダミは、おできのくすりになった。ゲンノショウコは、胃のくすり、腹痛のくすりになった。

ゲンノショウコのことは、ジャキクダシともいった。（上長磯）

天道念仏（八月二十五・六日から三日間の農休みの中日）　一戸一人でて、集会場に集まり、ろうそくを立て線香をたいて、日の出から日の入りまで鉦をたいた。（西善）

九　月

八朔　九月一日、タノモの節供ともいった。

嫁いで、十年くらいは行った。持って行くものは、赤飯とショウガ、おかえしはめかい。これは、里の親がとつぎ先の親に対して、大目にみてくれという意味であるという。何年も行くと、里の親にめいわくをかけるので、だんだん行かなくなった。婿は行かなかった。（上佐鳥）

十五夜、十三夜の供えもの　十五夜、十三夜のときは、近所の子供がまわってきて、供えものをひっかけてとっていった。十五夜や十三夜の供え物は、さげてもらったほうがえんぎがいいといった。（笂井）

十五夜のときには、まんじゅうは十五こあげた。そのほかに、果物などをあげた。十三夜には、まんじゅうを十三こあげた。（上大島）

十五夜　ふかしまんじゅう、秋の果物、すすきを十五本か五本あげた。あげたものを子供がつっても怒られなかった。（西善）

秋の彼岸　ぼたもちを作って、墓まいりをした。（西善）

十三夜（旧九月十三日）　おてまる十三個と、ススキを十三本かざった。（亀里竜門）

二百十日　日枝神社から、あらし除けのお札をいただいた。（西善）

十　月

一　日

八朔の節句　タノモの節句ともいって、大正の始めまで九月一日だったが、その後十月一日に変わった。赤飯をふかして、しょうが、とうなすをもたして嫁を実家に帰した。実家ではメカイをくれてよこした。（上朝倉）

神無月　日本中の神様が、神無月に出雲にあつまるといわれている。旧十月一日に出かけて、旧十一月一日に帰ってくるという。

おかみむかえ（旧十一月一日）に、総社の明神様へおまいりに行った人もあった。

神無月には、神様は出雲へ会議のために出かけるという。お神おくりとお神むかえとあった。この間におかまのるすんぎょうをする。この日は、釜をつかってはいけないといって、鍋でご馳走をつくって食べた。

「死なば十月なか十日」という諺がある。（野中）

旧十月一日が神おくりの日、この日は神社へおまいりに行く人はすくない。旧十一月一日は、神むかえの日、この日は、朝早くおきて、神社へおまいりに行った。仕事のひまな人は、神むかえのとき、総神の明神様までおまいりに行った。いいことがあるようにとおがんできた。神無月には、日本中の神様が出雲へ縁結びに行くのだという。こ

のとき、留守居をしているのは火伏せの神様（おかまさま）。
旧十月六日、十六日、二十六日にかわりもんをして、おかまさまをまつった。おはぎをつくってあげた。夜の行事。（天川大島）
神無月には、神様に出雲大社縁組の相談に行くのだという。そのために、神無月には、神様は留守になるといった。
このとき、出雲へ行かない神様がいる。おかまさまと、えびすさまである。えびすさまは、相手をもたずにいたので、出雲へ相談に行かないでいるのだという（神様のいないときに）えびすこうをする。
おかまさまは、うちを守る神様なので、行かない。おかまさまのるすんぎょうといって、旧十月の六のつく日に、ぼたもちをつくっておかってのおかまさまにしんぜた。（東上野）
旧十月（神無月）には、神様は出雲の大社へ行くという。このとき、結婚をきめてくれるという。お神送り、お神迎えのとき、総社（元総社）の明神様へおまいりに行った。
神様が出雲へ行った間、おかまさまが留守をしているという。
おかまさまのるすんぎょうといって、ながしの棚にまつってあるおかまさまをまつった。このときは、まんじゅうをつくってあげた。
日ははっきりしない。
なお、おかまさまは、稲の初穂をあげるうちもあった。（上増田）
神様は旧十月一日から十一月一日までの間はいないという。十月一日のことはお神送りといった。おかまさまとえびすさまは、つれて行ってもらえないで、留守居をしているという。
そのために、おかまさまは、旧十月の六日、十六日、二十六日の三日、おかまのるすんぎょうという行事をやった。このときは、ぼたもちをつくって、ながしのそばにまつってあるおかまさまにあげた。数はわからない。

旧十月二十日には、えびす講で、えびすさまをまつった。（下長磯）
おかまのるすんぎょう　旧十月六、十六、二十六日のことを、かまのるすんぎょうという。この日は、ぼたもちをつくって、かまっぷたの上にのせて、おかまさまに供えた。
旧十月には、神様は出雲へお客に行くが、おかまさまが、その留守をまもっている。それでその間に、るすんぎょうしてやるのだという。なお、ふだん、家族の留守に、誰かがご馳走をつくって食べることを、るすんぎょうといった。（笊井）
神無月に、おかまのるすんぎょうという行事をした。このときは、ぼたもちをつくって食べた。お勝手の棚へ、おかまさまへというのであげた。釜のふたをひっくりかえしにしてしんぜた。（下長磯）
力丸は六の日といい、竜門では神おくりして何日かあと、暦を見ておすしなどをあげた。（亀里）
おかまのるすんぎょうは、旧十月中にする。なにかご馳走をした。
「死なば十月なか十日」という。このころが新米がとれるし、野菜もいっぱいあって、人寄せをするにはいちばんいい時期だという。
（女屋）
元総社の明神様へ、お神送りに行った。出雲へ行かないエビス、大黒をまつってぼたもちを進ぜた。十一月一日は、お神迎えだった。
（亀里寺家）

九　日

くんち　十月九日。赤飯をたく。（亀里寺家）
下長磯の九日夜のこと　下長磯では十日夜でなく、九日夜をしている。下長磯は、おとうかが神様（ムラの鎮守様が稲荷神社）なので、トウカンヤをしないで九日夜にしろといった。一晩早くした。

わらでっぽうでうちの庭をはたきまわった。十日夜（九日夜）のときには餅をついた。

このときは、縁組み餅といって、二色の餅をついた。こもちといいもちと、二色ついた。子供が生まれて、はじめて十日夜をむかえるうちでは、あかるいうちに餅をつくもんだといった。これは、その子の縁組が早くできるようにということ、前述のように、十日夜の餅のことを、縁組み餅といっている。あんぴんをつくった。臼ぬきにして、おそなえをつくって（あんこはいれない）、おぜんにのせて、縁側に供えた。かさねないおそなえを一つだけあげた。

このおそなえは、「高崎の観音様へあげます」といってあげた。

餅は九日についた。

十日に、総社の明神様へおまいりにあるきで行った。また、高崎の観音様へおまいりに行った。（下長磯）

十　日

十日夜　巻きワラの芯に干した芋がらを入れて縄でしばり、トウカンボーを作った。

「十日夜、〳〵、十日夜のもちいくつ食った。遠くの山へひりこした。」などと唱えながら庭をたたいた。（徳丸）

旧暦十月十日にあわせて、十一月二十六日頃トウカンボーを作って、屋敷の庭をたたいてまわった。トウカンボーはワラ束の芯に芋ガラを入れていい音がでるようにした。

夕方、モチつきをしておそなえをつくり、庭に台をおいてかざった。（上朝倉）

もぐらでっぽうをつくって、子供が夜などをたたいてあるいた。

下長磯は十日夜でなく、九日のばんに九日夜をするという。（上大島）

もぐらでっぽうわら（中にいもがらを入れた）でつくって、モグラのもるところをはたいてあるいた。

下長磯は九日夜。上大島は十日夜。（上大島）十日夜には二色の餅をつくってあげた。白いもちと、ひきわりもちと二種類つくってあげた。（北爪家）十日夜の餅のことに、えんもちといって、二色つくもんだといった。（吉田家）（上増田）

十日夜のとき、あかんぼうのいるうち（その年にできたうち、はじめて十日夜を迎えるあかんぼうのいるうち）では、夫婦もちといって、二色のもちをつくった。こもちとおやもち（いろのもち）の二種類。（小屋原）

十日夜には、わらでっぽうをつくって子供が庭をはたいてあるいた。

わらでっぽうの中にいもがらを入れた。これは、モグラ退治のためという。十日夜にはもちをついて祝った。（駒形）

十日夜には、子供たちは、わらをまるめて、とおかんぼうをつくった。中にいもがらを入れると、いい音がでるといった。

とうかんぼうで、庭をはたくと、モグラがでないといった。

とうかんぼうをつくったわらで、わかいしゅうがなわをなった。

なわの先に石をいわいつけた。これを、すいっとんといった。

そのすいっとんを、人のうちの壁につるして、自分では、田の中の稲にゆうの中にかくれていていって、そのたわをひっぱった。石を壁にぶっつけた。そういういたずらを、わかいしゅがしていた。そんなことをすると、風呂に入ったおやじさんが、ふんどし一つでわかいしゅを追いかけてきたことがあったという。（上佐鳥）

十日夜の餅は、十日の晩についた。その晩にお供えする。

白い餅と粉餅と二色ついた。それを、夫婦餅といった。五つずつ合わせて十コあげた。餅はあんぴん、大根を二本あげた。縁側にあげた。

供え物は、お月様にあげるわけ。

十日夜の餅は早くつけといった。遅くつくと、そこのうちの娘が縁遠くなるといった。

十日夜の餅は、子供が盗みにきた。十日夜の餅を盗まれると、そこのうちの娘をとられることになるから、餅は盗まれたくないといった。

そこんちの娘を盗みたければ、十日夜の餅を盗めといった。

十日夜には、わらでっぽう（とうかんぼうといった）をつくって、子供が庭をたたいてあるいた。モグラをひっぱたくといった。

「十日夜、十日夜……」といいながらついてあるいた。

むかし、十日夜の前の晩に、高崎の清水観音へおまいりに行った。

なお、むかしは、十日夜までにムギまきが終えないとおそいといった。

十日夜の餅は、神棚には一コずつ、仏様には二コあげた。

十日夜からあとの餅つきは、お正月までひとよ餅はつけないといった。餅米の餅のほかにこもちとかいろもちをついた。（東上野）

「トウカンヤ、トウカンヤ、ユウメシクッチャ　ブッタタケ」といいながら、ワラデッポウをたたいた。（鶴光路）

十日夜にはまめ餅をつくった。あんぴんを重箱に入れてお寺へもって行く。十日夜にお寺へ餅を届けるのは、篠崎家くらい。

お正月の四日（今は元日）には大判の餅をもって行った。このムラでも二軒くらいしかもって行かない。公田の乗明院へ持って行く。（上佐鳥）

十日夜には夫婦餅といって、二色の餅をつくった。うるちの粉の餅ともち米の餅である。この粉の残りで、木福様のときのだんごをつくってもっていった。

十日夜の餅は、嫁さんが早く縁づくようにというので、早くつけといった。（天川大島）

十日夜のときは、夫婦餅といって、二臼ついた。草餅といい餅の二臼ついた。草餅は、こもちといって、くず米を石臼でひいたもの。

十日夜の餅は、早くついた。娘が早く縁付くようにと、早くつけといった。遅くつくと、縁遠くなるといった。（上大島）

十日夜の餅は、二色ついた。こもちとおやもち。二色もちといった。

また、十日夜の餅に、えんもちといった。娘さんのいるうちでは、娘さんが早く縁付くようにと、早くつけといわれた。

餅は夜ついた。神仏にもあげた。

十日夜は、大根のとしとりといった。十日夜のとき、おかいこを上手にするうちの大根をぬすんできて十日夜様にあげると、そのうちのかいが、あたる（来年のかいこ）といった。（女屋）

旧の十月十日の晩にもちをついた。

もちは、えんがわに机をだして、月のさしこむところにあげた。あんぴんを十コ。もちのことは、十日夜のもちといった。十日夜のときには、夫婦もちとか、えんぐみもちといって、二色のもちをついた。こもちとおやもちの二種類。

大根を二本あげた。これでからみもちにして食べた。十日夜のときには、わらでっぽうをつくって、子供たちが庭をはいてあるいた。モグラがもぐらないようにということであった。

「十日夜、十日夜、十日夜の餅いくつ食った。十食った。遠くの山へひりこした」

といいながらたたいてあるいた。

十日夜のもちののめっこが悪いと、きりょうの悪い嫁がくるとか、娘ができるといった。だから、十日夜のもちは、のめっこくつくれといった。（女屋）

十六日

番小屋のおこもり　十月十六日の晩、おこもりをして、一晩中いろんな話をした。（亀里）

十七日

秋まつり　日枝神社のまつりで、遊ぶ日だった。十六日の朝、西善ののぼりを立て、十八日におこした。（西善）

オクンチ　オクンチ（秋祭り）は十月十七日。山王様と同じ日におまつりをする。山王様のおまつりのときには、下大島は客分であるので、山車をださなくともいいといわれた。山王様の氏子の七の郷のうち、下大島は戸数が多いので、一番負担金が多いという。（下大島）

オクンチは十月十七日、ムラの鎮守様のおまつり。

この日は、各家で赤飯をつくって、神社へあげに行った。（笂井）

十月十七日が上大島のオクンチ。子供たちが、ムラ中まわって、もしきをもらいあるいた。

神社の境内（庭）に穴を掘って、夜その中にもしきを入れておたきあげをした。夜中をすぎると、ムラの人がおこわをもって、おまいりにきた。そのおこわを、子供たちがさげて食った。なお、オクンチは旧十月に三日間あった。ミクンチといった。（上大島）

おこもり　十月十七日のお祭の前の晩、青年団が神社におこもりをした。一晩中参道に灯籠をともした。

午前零時に一番まいりをして、こわめしを重箱につめて持ってきて、一部をおみごくとして持って帰った。（下阿内）

池さらい　春と秋（十月）に村の人が出て池さらいをした。うなぎなどの魚がとれた。（亀里）

十月の行事　十日が十日夜。

十二日はおめこ様、この神様は養行寺にまつってあった。子供の神様であった。

利作さんという人はひょうきんな人、この人は十一人きょうだい、真中の人が一人欠けたという。そしたら。

「うちじゃ、子供が育たないから、おめこさまにおまいりに行ってくる」

といったって。

十六日は木福様のおまつりの日。

おまいりに行く人は、やきもちをもって行った。つとっこに入れて行った。ごまだんごをもって行く人がふつう。

おまいりに行く人を、わかいしゅがまちぶせしていた。わかいしゅは、どんなにあばれてもいいような仕度をしていたという。おまいりに行った娘さんをかついだという。

人がでて木福様のそばまで行けないので、もって行っただんごは、遠くから投げてあげた。（女屋）

須永の行事　十月十日地蔵様　九日の晩に灯籠をつける。

十月十七日　オクンチ、十六日の晩に灯籠をつける。八幡様につける。

十月十八日　観音様のご縁日、十七日の晩に灯籠をつける。

須永の地蔵様には、トウガラシをあげる。おまいりにくる人があげた（ご縁日）子供同士で、トウガラシを口の中に入れっこをした。

（下増田）

十一月

おひまち　十一月三日が上大島のおひまち。
この日、餅をついてお天道様にしんぜた。餅は縁側にあげた。
収穫のお礼としてあげた。餅は新米でつくった。この頃は、旧暦でやったので、そのころ新米ができた。（上大島）
十一月におひまちをした。餅をついて、お天道様のでる前に、おそなえもちにして、かさねて、縁側にあげた。（朝倉）

オヒマチ　十一月三日をオヒマチといって、餅をついて祝った。
嫁さんは里へ、餅をもってお客に行った。親戚に餅をもって行った。
この日、でっかいおそなえをつくって、縁側にあげた。お天道様にあげるわけ。（女屋）
朝三時起きして、もちをつき、お天道さまの出る前に庭にかざった。（上朝倉）

十日夜　『十日夜、十日夜、十日夜のもちいくつ食った。遠くの山へひりこした。』
『十日夜、十日夜、朝そばきりに昼だんご夕もち食っちゃぶっぱたけ』
と、歌いながらトウカンボウで屋敷のまわりをぶっぱたいた。トウカンボウはいい音がでるように、ワラの束のなかにイモガラを入れて芯にした。庭は大事な場所だった。（西善）
ワラ束の芯にイモガラを入れて、トウカンボウを作り屋敷のまわりをたたいてまわった。十日夜のモチは十個食えと言った。（亀里竜門）

秋あげ　秋の仕事が一とおり終ると、嫁さんは、ぼたもちをつくって、重箱に入れて、里へお客に行った。このときは、一、二晩泊ってきた。これを秋あげといった。里からは、おかえしにぼたもちをつくってよこした。（野中）
あきあげのときは、嫁はぼたもちをもって里へお客に行った。一重箱もって行った。秋のとり入れが終ってから行った。嫁は泊ってきた。里でもぼたもちをこしらえておかえしとして、嫁にもたせてよこした。（上佐鳥）
ムギまきとか、する事が終ってから、嫁は里へお客に行った。
農家の場合は、ぼたもちをこしらえてもって行った。
それは秋あげというが、ムギまき、するひきが終って、一年の百姓の仕事が終ってから行った。ぼたもちは重箱に入れてもって行った。（勝島）

十二月

一日

カビタリモチ　水車では、川をつかっていたので、カビタリモチといって、（十二月一日に）川へおそなえをおさめた。（女屋）

八日

コト八日　豆腐に針をさして、針供養をした。（亀里竜門）

厄神の宿　今から、十年くらいまでまつったことがある。十二月八日、師走八日のときにまつった。八日にお勝手の土間に、ちょっぱしに半紙を敷いて、にごわめしをあげてまつった。九日のあさ、これを、近くの三本辻へ送りだした。このわけは聞いていない。
奥さんの、中内の実家では、十二月八日にざるの中にヒイラギの枝

を入れて、かいどの木の枝にさげておいた。そうすると、翌朝行ってみると、ざるの中におかねが入っていた。天からおかねが降ってくるといわれた。子供のときのはなしである。

十二月八日に、たわっぱしにご馳走をのせておまつりして、九日の朝、近くの三本辻へ送りだした。

上増田では、十二月八日にヒイラギをめかいに入れて、さおの先にゆわいつけて立てておいた。

斉藤家では、この行事を今から十年ほど前までに行っていた。（上増田）

十二月八日　十二月八日には、ヒイラギの枝をとってかどにたてた。疫除け、魔除けといった。（下大島）

師走八日　十二月八日は師走八日という。この日、にごわめしをたいて神様にあげた。ちょうぱしに塩と米をのせて、三本辻に出した。あくまぱらいといった。（上増田）

十五日

おいなりまつり　稲ワラで毎年新しいお仮屋（稲荷さまの小屋）を作って、コン〳〵様を一対おいた。お仮屋のまわりには幣束をたて、晩になると、赤飯、頭つき（イワシ）二匹・豆腐・油揚をあげて祭った。（西善）

十二月十五日が、屋敷の稲荷まつり。この日、新わらで、オカリヤをつくりかえた。供え物は、おこわ、いわし（二匹）豆腐（四角に小さく切った）。これはあげっぱなしだった。

子供がまわってきて、いわしをさげていった。さげるのがあたりまえといった。

初午の日には、稲荷様のおまつりはしなかった。（女屋）

稲荷まつりは、十二月十五日。

奈良家では、この日、赤飯とイワシ（三匹）を供える。奈良家にはお宮が二つあるので、大きい方のお宮には二匹、小さいお宮には一匹のイワシをあげる。

おこわは、重箱につめてもって行ってあげる。シノの箸ではさんで、半紙にのせてあげる。おこわはのこしてきて、それを、うちの中の者が分けて食べる。また、けんちん汁をつくる。この中に豆腐を入れる。

稲荷様のお宮のうち、大きい方はトタン屋根、小さい方は石宮。

新宅ではわら宮。

初午の日には、とくに稲荷様をまつらない。餅でもついてうちの者が食べるくらいである。

稲荷様に供え物をしたあと、うしろを見ちゃあだめという。（上増田）

屋敷稲荷のまつりは、十二月十五日、この日、稲荷様のわら家をたてかえた。新わらでつくった。

この日、稲荷様におそなえするものは、赤飯、おかしらつき（イワシ二匹）、あぶらげ。お供えしたものが、さげてないと、「稲荷様が（供え物を）とらっしゃらないから悪いことがある」といった。神様がごきげんが悪いときは、供えたものを受けとらないという。

むかしは、近所の子供が、イワシをさげにあるいた。よそのうちの稲荷様にあがっているものをさげてあるいた。さげてもらうと、縁起がいいといった。（東上野）

屋敷稲荷様のおまつりは十二月十五日。この日は、赤飯とおかしらつきをあげた。うちの主人が子供をおともに、提灯をつけておまいりに行った。

北んち（真下幸隆家）では、稲荷様にあげたものをさげてもらえないと、またやりなおしをしなければならないといった。この日、親類

のものをよんだ。
子供がいわしをさげてあるいた。
お宮はわらでつくった、おかりやといった。これは、毎年つくりなおした。
なお、稲荷様におそなえをしたあと、かえってくるときに、うしろをふりむいてはいけないといった。（女屋）

屋敷祭り　屋敷祭りは十二月十五日。稲荷様をまつるのがふつう。原の山口一家は、一日早く、十四日にしている。このときの供え物は次のとおり。
赤飯、おさご、塩、おかしらつき（二匹）このいわしは、子供がさげてあるいた。あげたものは、さげてもらわないと、子供をよびに行ってさげてもらったというはなしを聞いている。供え物をしてかえってくるときには、うしろをふりむくなといった。
なお、供え物をさげにくるのは、あげに行ったそこのうちのものの姿が見えなくなってからのことである。
自分のうちの子供はさげてはいけないといった。屋敷の稲荷様は、屋敷の西北のすみにまつった。お宮は、むかしはわら宮であった。まい年つくりかえた。それを、おかりやといった。今は石宮が多い。
（下大島）
お稲荷さんのお宮を、竹で骨組したうえにワラでふいて作り替える。赤飯・頭つき（イワシ）・油揚げ・豆腐を供える。供えた後は振り向くなと言った。供え物は近所の子供が隠れていて、すぐにさげた。最近は誰もさげてくれないので、近所の子供に頼んでおく。（亀里竜門）

二十一日

油もち　油神様を、火が出ないようにとおまつりをした。もちにゴマをいれてついた。（亀里寺家）
もちをついて、神棚へあげた。（亀里竜門）

二十二日

冬至　『冬至とうなす』といって、とうなす、コンニャクを煮て食べた。また、晩にはゆず湯に入った。（西善）
冬至とうなすといって、とうなす、こんにゃくを煮てたべた。この日はゆず湯に入った。（上朝倉）
冬至のときには餅をつく。川びたりもちといって、川神様にあげる。一年間かわだなの神様にお世話になったので、お礼にあげるのだという。（櫛島）

冬至まつり　むかしは、冬至の日に、冬至まつりをしたが、今はしない。（東上野）

正月の松　十二月二十日頃、龍門の共有林がある赤城の金丸までとりに行った。松は実生の赤松（女松）で枝が三段になっているものをとった。赤松は黒松と比べ、しなやかで細工がしやすかった。くずかきも一緒にした。（亀里竜門）
暮の二十五日頃、赤城山の柏倉へとりに行った。実生の赤松をさがした。赤松は女松といって、松ぼっくりがつくので子宝に恵まれるといった。二十八日か三十日に松かざりをした。一夜かざりはするなと言われた。（西善）
正月の松は黒松ではだめで、赤松（女松とも言った）を赤城山へとりに行った。日は決まっていなかった。松をかざる所は、門口・稲荷さま・馬小屋・川棚（洗いっことにふだん使っている場所）などであった。（上朝倉）

玉村のお松市　買って上ってくる形になるので、縁起がいい、のぼ

り松といった。神社の境内でやってにぎやかだった。（亀里）

松飾り　十二月二十八日、玉村町福島の松市で松を買ってきて立てた。清水家では、雄松にナラをそえて立てる家例だった。（房丸）

松　正月飾り用の松は、玉村八幡宮の松市で買ってきた。上り松といって、縁起をかついだ。十二月二十八日にやった。（亀里寺家）

松市　十二月二十八日の玉村の八幡さま、上福島の松市で松を買ってきた。下で買うので、のぼり松という。（鶴光路）

もちつき　二十八日か三十日についた。「九もちはつくもんじゃねえ」といった。（亀里竜門）

四升臼で七つか八つ搗いた。おそなえは十二～十五つくった。十二は一年が十二ケ月あるから。そなえる場所は、大神宮さま、歳徳神、床の間、エビス・大黒さま、だるまさま、馬小屋、便所、井戸などであった。もちを搗く時、臼と桶に七・五・三のお注連を巻いた。（徳丸）

正月さまのもちつきは、たいがいの家で十二月三十日だった。もちを供えた所は、床の間・お勝手・水神さま・お諏訪さま・井戸神さま・川神さま・蔵・石蔵・仏さま・大神宮さま・お恵比須さま・大黒さま等であった。（上朝倉）

二十九日はクモチといったので、二十八日か三十日についた。前の晩にモチ米を井戸水でといで、水にひたしておいた。三升ウスで七ウス位ついた。モチ米のとぎ汁は捨てないでおいて、モチをついた晩、風呂に入れた。一年のアカがおちるといった。（亀里寺家）

亀里龍門の三輪さんの家では十二月二十九日にもちをつく。

（亀里龍門）

朝餅をついてからしめをつくり飾った。一日がかりだった。（公田）

正月の餅つきは、十二月三十日。二十九日は、「苦餅をつく」といってつかない。（上大島）

暮の餅つきの場合、十二月二十九日の晩に餅米をひやす。米のとぎ水はとっておく。このとぎ水をつかって、一年間のよごれをおとすといって、三十日の晩と三十一日の晩に風呂をたてて入った。とぎ水の風呂に入った。（駒形）

大そうじ　二十七日か八日は家中のススをはらった。神棚の神さまは、「じかにおろすもんじゃねエ」と言って箕におろした。

（亀里寺家）

正月のお札　お諏訪さまから、歳徳神と大神宮さまのお札を受けると、「お正月さまがきた」と言った。（亀里竜門）

暮の二十日頃、日枝神社の氏子総代が天照皇大神宮ととし徳神のお札を各戸に配った。お札はお盆でうけて、「お正月さまがきた」といった。（西善）

お正月さまは、お伊勢さまからくるといった。『お正月さまを配りに参りました。』とお札が配られた。お札は、天照大神（昭和三十四年次で三十円）、歳徳神（同二十円）、飯玉神社（同二十円）、祓（同十円）、三宝荒神（同二十円）であった。（徳丸）

代田のお宮から、お札が四、五日前に配られると、お正月さまが来たといった。（上朝倉）

大神宮さま、とし徳神のお札がくると「お正月さまがきた」と言った。暦をみて、「とし徳さまが早く帰るといい年になる」「…遅いと悪いことがある」と言った。

「お正月のお棚の下は通るな」、「とし徳神さまのいる時はケンカするな」と言われた。（亀里寺家）

注連縄　二十八日にワラをほとばし、三十日にシメ縄をなってかざる。松かざりにはおしめをかざった。うす、若水桶、風呂桶にもおしめをまいた。（亀里竜門）

お飾りのワラ　稲の品種が「野州」といって、細長いものを使った。裏庭に干して日陰干しすると、黄色く変色しない。（鶴光路）

こじっこめ　オンベロだけつけたもので、便所、蚕室、蔵、屋敷稲荷、墓に飾った。墓は三十一日に飾る。（房丸）

大じめ　座敷と神だなに飾るもので、干し柿とみかんをつける。（房丸）

お飾りつくり　ワラは干して、ワラすぐりで、すぐっておく。大じめの上は少したたいてやわらかくしておく。（房丸）

十二月三十日の朝から作って、午前中に飾り終えた。（房丸）

ワラでこじっこめを作り、墓まで上げた。（亀里寺家）

こじっこめ　公民館前の道祖神、天道さまにもあげる。（房丸）

おかざり　おそなえ二つおいた上に、切りモチ三枚のせ、マツの枝を水でぬらし米の粉をかけて雪の降ったようにした。（下長磯）

麻を輪にしたもの、みかんを七つ、いか（するめ）、こぶ、升、半紙を半帖、扇子をかざる。神棚に竹の棒をわたして下げた。これをひとまとめにして

「朝は皆　いかにも　よろこぶ　ますますはんじょう　末広く」

という。

頭つきということで、ごまめを七ひき糸にさげた。

金鉗と柿をさげ、「金か　かきとる」と言った。（亀里　寺家）

おかざりも、一夜飾りはするなといって、三十日にした。お棚も三十日につるした。

この日は、餅をついたり、お飾りをしたりするわけ。一寸くらいの大きさのおそなえを十二かさねつくって、おかまなど十二カ所にあげた。

径が一尺くらいの大きさのおそなえは一つ、床の間にあげた。正月棚にもおそなえをあげる。

床の間には、としとくじんさまにおそなえするといった。小さいおそなえの一つは、さんじゅうばんにんさまにあげるといった。これはおかっての神様という。

十二のおそなえは、井戸神様、おかまさま、いなりさま、さんじゅうばんにんさまなど、十二カ所にあげた。えびすさま、便所神様（しものやまいにかからないようにということ）にもあげた。お正月のおそなえは、小さいおそなえを十二かさねと、大きいおそなえ（一つ）をつくってあげた。

お正月に神様をまつれば、一年間まつったのと同じになるといった。おそなえは、三十日にあげて、一月十四日（あさ）にさげた。正月は十四日に終るといった。（東上野）

お顔かくし　半紙をひし形に折って、正月だなにおいておくもの。みかんを一つつける。（亀里寺家）

正月のお棚　中座敷の真ん中へお棚をつるし、年によってアキの方へむけた。天照皇大神宮と、とし徳神のお札をまつった。（西善）

毎年、暮の二十八日にお正月の棚をかざった。家の真ん中の部屋に棚をつくった。年によって方をちがえてかざる家もあった。（上朝倉）

せまい方を暦のあきの方（歳徳神）の方に向けた。

ワラで鶴の形を模して作ったものを飾る。（房丸）

みそかに正月棚をつくった。棚は毎年板をつくって（ひいて）つった家もあるし、つくるのがやっかいなので、既製の棚をつかったうちもある。

棚板の材料は、そこんちによっていろいろであった。かしの板のうちもあった。棚をつるむきは毎年かえた。せいもんにむけた。その年のあきの方がせいもんである。これは、こよみをみてきめた。

お正月様は棚の真中にかざった。棚の右と左に、よろこぶというのでこんぶをおしめと一緒にさげた。

お正月様のことは、としとくじんという。十四日すぎにおたなをはずす。としとくじんさまは、神棚にあげてしまう。翌年の暮の大掃除のときに神社へもっていって納めてきた。

お正月様のお札は、下増田の北爪神主さんのところから届けられる。区長さんのところでおあずかりをする。伍長さんがそれを組下にくばった。（お正月様のお札は、床の間にかざっておく人もある）

正月様おむかえするのは冬至の日。このときには、まだお札はおむかえしていないが、正月様はやってくるという。（東上野）

正月棚はハギをなわであんでつくった。ハギはうちでつくっておく。棚は十七日にはずす。これは焼いてしまう。棚には、としとくじんさまとおしらさまをまつる。

十四日におかざりかえ、お松をとって、山の木の枝に餅をさしてあげる（かざる）

おしらさまは、十四日にまつって、十六日の晩まで、十七日にさげる。（天川大島）

お正月棚は、歳徳神様を迎える方角にむけてつるした。

歳徳神様をおたなの真正面にまつった。なお、豆まきは、その年の恵方の方角からまきはじめた。その次に、大神宮様のところにまいた。（下大島）

ワラで鳥居の形を作り、オカオカクシという。へいそくは、三ツ折りにしてさげる。（鶴光路）

おそなえ　九重ねか十一重ねつくった。おそなえをあげるところは、大神宮さま、とし徳神さま、おエビスさま、大黒さま、お稲荷さま、おかまさま、道祖神、井戸神さま、仏さま（二重ね）、便所神さま、川神（がみ）さま、おしらさま、三宝荒神さま、など。（亀里寺家）

正月のおそなえ餅は、はじめについた。臼からとった。おそなえは、うちの新米でついた。

神様にしんぜるおそなえは、しめえの臼からとらなかった。（東上野）

大みそか　「大みそかは早く寝るもんじゃねェ」と言った。（亀里竜門）

みそかそば　大みそかには、そばを食った。そばを食うと小使いに困らないと言った。（上朝倉）

大みそかのそばは、ナスガラ、菊ガラ、豆ガラをくべてゆでた。ナスガラは、「借金ナスガラ」、菊ガラは「よいこと菊ガラ」、豆ガラは「豆になるように」と言った。（亀里　寺家）

大晦日　「みそかどろ」といって、とろ飯を食べた。（西善）

おおみそかの火　大みそかに、みそかそばをゆでた後、かまどの火を絶やさないでおいて、元日の朝湯はそこからツケギで火をとって湯をわかした。朝湯へ入ってから、お燈明をあげた。（西善）

おおみそかは「火を消すもんじゃねェ」と言われて、火ばちに桑の根っこなどをくべて元日の朝まで火を残した。

またおおみそかの晩は、早く寝ると白髪になると言われた。（亀里寺家）

年末の行事　樫ぐねや築山の切りこみ

山刈り、畑に接した篠や雑木を切る。（日陰になって桑の成長を阻まないようにするため）

井戸と水がめの周りにしめ縄をまく

かまどにしめなわをまく

三十日に餅つき、九人家族で七臼つく

きんぴらごぼう作り。（亀里）

年中行事他

矢田の年中行事

一月　一日　年始会　世帯主が集まる。新年のあいさつと乾杯。
いりびとのあいさつ。祭当番の交代。
年始まわり
元日マラソン
二日　祭当番の申し送り
四日　たなざらし　しんぜたものを下げてぞうにを作った。
坊さんのご年始日
むこのご年始日
五日　ゴカンニチ　半日休み。ごはんを食べた。
六日　出初め式。消防団。
七日　七草。草を刻むごとに唱え事がある。
十一日　倉開き。お供えをおしるこにした。倉開きの唄があった。子守唄のような唄だった。
さくたて。米俵の上のおしめを持っていって、畑をみさくきって、さしておく。ごまめのおかしらをそなえる時もある。
十三日　小正月の餅付き。
おかざり替え。みずならの枝に小さく切った餅をさす。米の粉で団子を作ってさす時もある。餅を細く切って、丸くまいて置いた。
十五日　どんど焼。竹で小屋を作っておかざりを集めて燃やす。習字を書いてもやすと上手になる。繭玉や餅を食べると風邪を引かない。
十六日　小豆粥を作る。うつきの木を三本しばって、一方をささらのようにして、しろかきのようにかきまわす。吹くと田植えの時に風が吹く。
十八日　粥　十六日の粥を温めて食べる。残りを家の周りにまいてありよけにする。時計まわりにまく。
二十日　二十日正月。一日休み。遊びに行く。
総会。
二十八日　しまい正月。半日正月。

二月　一日　次郎のついたち。ものび。
三日　節分。まめがらを燃やし、ほうろくで豆をいる。手で豆をかきまわす。福は内、福は内、鬼は外といいながら蒔く。座敷から神棚、玄関から外にまく家。神棚から仏壇、床の間から外と蒔く家。入り口で外に向けて蒔く。早く蒔いたほうがいい。年の数だけひろって食べる。福茶にして飲む。豆はとっておいて、雷よけにする。いわしの頭を焼いて、ひいらぎの枝にさしてとぼぐちにつける。焼くとき、わざわいの虫の口を焼きもうすなどという。
初午　繭玉かざりをつくってそなえる。
乙午（おとうま）　二回目の午の日。
あんこをいれた餅をつくると、繭がくさるといって、餅をさとうしょう油で食べる。

三月　三日　節句　初節句にはもちをついて配る。

彼岸　ぼたもちをつくる。

四月

五月　五日　節句　のぼり旗が多かった。初節句には餅をついて配る。

六月

七月　七日　七夕。

十三日～一五日　お盆。お寺で種火をもらう。街道で麦わらをもやした。盆棚の横に水子と無縁の棚を作った。キュウリとなすに四本の足をつけて馬を作った。

農休み。

八月　一日　八朔　嫁が里のしょうがを持ってお客にいく。帰りにめけえをもらってきた。しょうがねえ嫁だ。大目にみてくれという意味だ。

十五日　十五夜　そなえた団子が盗まれたほうがいい。

九月　十三日　十三夜

十月　十日　十日夜　さといものからに縄をまいて、地面をたたく。とうかんや、とうかんや、とうかんやの餅いくつ食った。とう食った。遠くの山をひりこした。

十七日　おくんち

十一月　三日　お日まち　太陽が出る前までにお供えをする。三時ころ起きてしたくした。

八か九日頃　お釜のるすんぎょう　かまどにぼたもちをそなえる。神様が出雲にいっているあいだかまどの神様が留守をしている。

秋祭

冬至

十二月　八日　針供養　針を使うなといわれた。

二十八日　松を駒形で買った。すすはらい。

二十八日か三十日　餅つき。

三十日　おかざり。

鶴光路の年中行事

一月　一日　元日　初湯をたてる、年男が若水を汲む。猫柳の枝でお箸を造り七日まで使う。そば家例の家は三ケ日は餅は食べない。毎朝そばを食べる。年始の挨拶回り。（村内）

二日　前橋の初大売出し、初買いにゆく。

三日　青柳大師、龍蔵寺、縁日。

四日　お棚探し、神棚等にあげた御供えを下げる。朝食にお雑煮（初めて餅を食べる）

婿の御年始、泊まらないで帰ってくる。

お坊さんの御年始日。

六日　山始め。

七日　七草粥を食べる。主にセリ、ナズナ、スズシロ、サトイモ、フキノトウ、ニンジン、ハクサイ等家の近くで採れるものを使う。

高崎少林山の縁日。

九日　前橋初市。

十一日　蔵開き、鍬立て、（恵方の畑へ行って柵をたてる）

十三日　若餅を搗く。十二、十六のお供えをつくる（アンピンはつくらない）

十四日　お飾、どんどん焼き。門松その他の飾りものは纏めて門に出しておく、後で子供が集めて行く、子供達が集めたものを使いどんどん焼きの小屋を造り、夕方これに火をつける、村の人は切り餅を棒の先に差し、この火で焼いて食べる（この餅を食べると風邪をひかないといわれている）又門松の燃え残りを屋根に上げて置くと火災にあわないといわれている。

接骨木（ニワトコ）の木の皮をむき花を造る、二本を半紙でつつみ水引をかけて十二支天様に上げる。夜は丸美を炊く。（マルビ）

マルビとは色々の説がある。二合なり三合のごはんを炊いて全部盛って神様にあげる。火をつける場合、つけぎ等使わずにマッチで直接付けること。

マルビは一月四日と二月の節分と十二月三十一日の三回行なう。

十五日　小正月　嫁のご年始日、実家へ行って泊まってくる。

朝は小豆粥、食べるときフゥフゥ吹きながら食べてはいけない。田植のとき北風が吹く。また小豆粥は少し残しておき十八日の朝食べる。

ニワトコで造った粥掻棒で小豆粥の表面を掻く家もある。

十六日　藪入り（鬼の首も許される日と言う）十四日に飾りつけた餅などを楢の枝からとる。

十七日　秋葉様の祭り、（火ぶせの神）村の人が出てお仮屋をつくりお祝いする。

十八日　小豆粥を食べる（十五日に残したもの）、食器等を洗った水を家の回りに撒く。

石山観音様（馬の神様）馬を連れてゆき安泰を祈った。

二十日　二十日正月、御棚仕舞い、夜は恵比寿講、赤飯を炊く、又は寿司を造る、恵比寿、大黒の彫り物等を机の上に出してそのまえに御馳走を並べて祝う。

家長が三度の拍手で五穀豊譲を祈願する。供えた物は未婚の者は食べてはいけない。

二十八日　二十八日正月（半日正月）朝は雑煮、正月の行事は全て終り、仕舞正月とも言う。

二月

一日　二郎のついたち、朝赤飯　仕事休み。

三日　節分、豆まき（鬼はらい）楢の枝でヤカガシをつくる、鰯の頭を二つ枝に刺してその年の恵方に向き頭を焼きながら、茄夕顔の葉に付く虫の口を焼く。と言って頭にツバをかけながら焼く。後で家の入り口にさしておく。夜は丸美を炊いて上げる。

八日　針供養　女の針仕事は休み、朝煮ごわ飯、柊の枝を入り口に刺す、又篭、笊等に柊の枝を入れて庭に立てたり、家の入り口に置く。女の髪の毛を燃やして魔除をした。

初午　石臼で米の粉をつくり、繭玉、団子等を造

り御シラ様にあげる。
夜はうどん

十一日　春祭り（新堀神社のお祭り）　村中の人が出てのぼりを立てる、赤飯を炊く。
昭和二十五年分神してから個々の村の神社となる。今春祭は三月十五日である。

十五日　釈迦のねはん、餅を搗く家もある。

三月

三日　お節句（桃の節句）雛祭り　寿司を作る、菱餅を飾る（紅白の餅）
初節句の家は餅をついて御祝を戴いた家へ配る（アンピン餅）

十五日　お獅子祭り（旧二月十五日）騎西代参　当番の人が行く、朝は赤飯
肝煎が主になってお獅子を被る人、神楽と一緒に賽銭箱を担いで歩く人、神主になって「武州北埼玉郡玉敷の神社おんいり」と門前で告げる人等を決める。各家ではお盆にお賽銭、おさご等を載せて家中の者は座敷で待っている、神楽は縁側から上がり家じゅうの悪魔を払う。

十五日　梅若忌　餅を搗く家もある。

十八日　彼岸の入り　仏壇に線香をあげ花を飾る　ぼたもち。

二十一日　中日　春分の日　親戚の人たちが墓参りに来るぼたもち
社日　春分に最も近い戊の日　土を動かしてはいけない日　仕事休み。

二十四日　彼岸の走り口　彼岸明けの日　団子を造り花線香等をもってお墓参り

四月

八日　お釈迦様の誕生日　草餅を搗く、お寺へいって釈迦の像に甘茶をかける。
目の悪い人はこの甘茶でふけば目がなおるという。

二十八日　小旗始め　子供の初節句で戴いた鯉のぼり等をたてる。

五月

二日　八十八夜　餅を搗く（いなふくみの縁日）「絹かさ様」

五日　端午の節句（尚武の節句）朝赤飯　屋根によもぎと菖をさす。菖湯をたてる
嫁を里帰りさせるときはお土産に鱈の干物を持たせる。

八日　小旗じまい　鯉のぼり五月人形等を仕舞う。

十五日頃　御蚕餅を搗く（春蚕の三眠頃餅をついて豊作を祈る）

六月

下旬頃又は六月になってから　お蚕の上蔟したときに餅を搗く（アンピン）親戚に配る
蚕びょう　蚕のお手伝いさんを呼んで御馳走し寸志を上げる、嫁に餅を持たせて里帰させる。
六月中又は下旬頃　農力餅を搗く家もある（餅を食べて忙しい農作業に力をつける）

七月

田植始め　朝白米の御飯。

七日　七夕祭り　色紙にお願ごとを書いたりして新竹に短冊に切って結び庭に立てる。

田舎饅頭　ふかし饅頭等を造って食べる。

七月上旬　夕方七夕の飾は田圃の畔に立てる（雷除けになる）おさなぶり（田植が終ったときを言う）五目飯にウドン、農器具を洗い清め御神酒と御飯を上げる、又田の水口の苗を二、三本抜いてきてお釜様に上げる。

辰の日には田植はしない。

中旬　農休み　田舎饅頭　ふかし饅頭等を造って食べる仕事はしない。

天道念仏　その年の当番が御寺に集まり、鐘、太鼓を叩き（日の出から日没まで）

夕方大きな数珠を大人子供等大勢で回す。

祐天様（土用入りの日）今宿で行う。

二十五日　天王祭りはない　お寺に宝篋印陀羅尼塔があるため。

生盆（結婚した最初の夏）夫婦揃って嫁の家へ行き相手の親戚を呼んでふるまう。

八月　一日　八朔の節句（田の面の節句）嫁に赤飯と生姜を採って持たせて里帰りさせる。又田のもの返しといって婿の家に　めかい　いかきをやる。

十三日～十六日　お盆　昭和六十一年から八月となるそれまでは七月。

十三日盆棚を造る、お寺え盆迎えに行く以前は重箱に米や粉を入れてもっていったが今は御霊前の袋に現金を入れて行く　盆迎えの人が家の門に来ると麦藁などを燃す

篝火を焚く

十四日　新盆の家へ線香を立てに行く（村内と親戚）

十五日　お盆　ぼたもち。

十六日　盆送り　盆棚を仕舞う　家中揃って墓参りをする。

九月　旧八月十五日十五夜　すすき　果物　団子等を十五夜様に上げる。田舎饅頭、ふかし饅頭などをつくる家もある。

一日　十一日　二百十日、二百二十日

二十日　彼岸入り　春と同じ事をする。

十三夜　（旧九月十三日）すすき　だんご果物野菜等をあげる。

十七日　秋祭り（虚空蔵様のお祭り、おくんち）子供達が宵晩（十六日）は泊まる、中学生

早朝赤飯を上げに行ったが今はお賽銭を上げる人が多くなった。

太鼓が一晩ぢゅう鳴ったり止んだり。

虚空蔵様をお祭りしてあるので、鶴光路の人は饅は食べられないと言われている。

十月　（旧十月一日）お神送り、早朝おさごとお賽銭を持って村の神様に上げる。

お釜のるすんぎょ　旧の四日にぼたもちをつくりお釜様にあげる。

三十日　お日まち　天道様に秋の実りを感謝する。餅を搗く　アンピン餅を造り親戚に配る。

すすきをとり大判の御供え餅を造り供える。

十一月十日夜　（旧十月十日）　夜餅を搗く　アンピンもつくる。
十かん棒を造り子供が庭を叩く、子供達が柿その他の果物を夜秘に採ること等大目に見た。
御庚申待（話し講）一組が十軒ぐらいあって、順番を決めて、猿田彦大神の掛け軸を掛け、赤飯を炊いて夜更けまで話しあった。
秋上げ　（秋の取り入れが終ったとき）ぼたもち嫁にぼたもちを持たせて里帰り。
恵比寿講（旧十月二十日）一月二十日と同じことをする。
（旧十月三十日）おさご御賽銭をもってかみまいり。
穴塞ぎ　（麦まきの終った日）ぼたもち、または焼きもち等を供える。
十二月十五日　お稲荷祭り（屋敷祭り）夜は赤飯　お仮屋を造る、幣そくを造る。お稲荷様には赤飯鰯などをあげる。上げたあとは後ろを振り向かない
ケンチン汁　お仮屋は毎年新しくする。
二十一日　油餅をつく　胡麻を入れた餅。
二十二日　冬至　とうなす　こんにゃくなどを食べる　柚子湯。
二十八日　お松市　玉村神社の境内の松が良いと言う（上り松）家の回りをかたずける。
三十日　餅つき　おそなえもち　切りもち　アンピンもちなどつくる。
門松を立てる（一夜飾はしない）神だなを造ったり清掃する。
三十一日　朝おじや（一年ぢゅうの物をいれてたべるの意）
夜丸美を炊く
そばをうつ　柳の箸を造る。

年中行事（天川大島住宅）

一月一日　町内の顔あわせを自治会館で行う。おみきをのみ、座談会を行う。
第二日曜　新春マラソン（昭和五一年より）
お年玉抽選会
夜、有志で新年祝賀会
三月　班長の選挙（一年任期）
自治会は二年任期
四月　自治会総会、他に婦人会、長寿会、老人会、子供会など。
五月頃　下水（農業用水）そうじ。
田植前で水があがる前に行う。草とり、どろ、石をとる。
七月　ラジオ体操、廃品回収
八月　納涼祭。三、四か十四、五日
九月　町内運動会（平成元年まで）
九月十五日　敬老行事、六十歳以上を招待
五十六人ほどいる。ごちそうする。以前は記念品を配っていた。
長寿会が葬式の旗を持っている。
十月　町内清掃（春にもやる）
毎月第一日曜に八時から町内清掃。

家　例

村の行事と我が家の家例

下阿内町　角田ふみ江

一月一日、お雑煮。神仏と門松へ雑煮の餅を供える。

一月二日、朝。蕎麦。夜とろろ汁。一月三日、お雑煮。一月四日、お雑煮。お棚さがし、鏡餅を下げて水につけて置く。一月七日、七草粥。一月九日、お雑煮。前橋初市。鍬立て。一月十一日、お雑煮。倉開き。一月十四日、暮の餅でお雑煮。朝餅を搗き繭玉を作り、樽の大枝に繭玉飾りをし、十二個と十六個の丸餅を作り、神棚へ上げる。どんど焼き。（左義長）夜、丸美炊き。白木の鉢に山盛に丸美炊きの飯を盛り、接骨木（にわとこ）の木を二本半紙に巻き赤白の水引に結わえて差し、神棚に上げる。

一月十五日、小豆粥、熱くても口で吹いては不可（田植の風を忌む）。一月十八日、十八日粥、小豆粥の残りと丸美炊きの飯を炊き直して朝食に喰べ、食器を洗った水は家の回りに撒く。

一月二十日、棚終い。夜恵比須講。寿司を作り恵比須様を机の上にまつり、白飯を腕に平によそり、汁はけんちん汁お頭付の魚二尾皿に、恵比須様に供え、五穀の豊饒を祈り、豊作ならば秋の恵比須講には、大盛の飯を上げると告げる。一月二十一日。大黒講、うどんを上げる。一月二十二日朝、お茶を上げて恵比須大黒をいつもの棚にうつす。一月二十八日、お雑煮。正月終い。

二月三日立春の前夜、追儺（豆撒き）。二月八日、朝、煮ごわ飯、針供養、夜ひいらぎの枝を籠に差して戸口に置き、魔除けをする。針仕事休み。午の日、初めての午の日に繭玉を作り、蚕影山の掛けじくを掛け、前に供える。二月十一日、以前は下阿内村の春祭りで赤飯を炊いて神に供えた。

三月三日、雛祭り、二日に搗いた三色の餅をひし形に切り三枚重ねて（赤白青）雛に上げる。寿司を作り雛に上げる。三月十五日、獅子祭り、赤飯。三月十八日、彼岸入り、六個の小さい茶わんに飯と汁を盛り仏に上げる。三月二十一日、中日、ぼた餅。三月二十四日、はしり口、だんごを作り、水と花と線香を持ってお墓まいり。

四月三日、春祭り、赤飯を炊く。四月八日、お釈迦様、草餅。四月二十八日、小旗始め。

五月五日、端午の節句、赤飯、屋根に菖蒲と蓬を挿す。五月八日、小旗終い。

七月七日、七夕祭り、新竹に色紙をつけて飾り、星に供える。朝赤飯、夜饂飩。七月十三日、お盆迎え、盆棚を建て、お寺様へ先祖をお迎えにゆき、迎え火を焚いて家にまねく。七月十四日、おはぎ、親せきの新盆参りをする。昼は饂飩。生うどんの紐を盆棚に掛けて置く。茄子と胡瓜の馬を作る。七月十五日、おはぎ、或はごもくご飯、昼うどん、七月十六日、盆送り、だんごを作り盆棚をたたみ、茄子胡瓜の馬に生うどんの紐で大根のさいの目をしばり、先祖の土産として、お墓参りに水、線香、お花といっしょに持って行く。七月十七日、盆がら、お盆で忙しかった女の休み日。七月二十二日、天道念仏、ふかし万頭を作り、朝早く、お天道様（太陽）に上げる。日の出る前から村の年寄がお寺で鐘をたたき、夏の豊作、無病息さいを祈願する。七月二十五日夏祭り、世良田の八坂神社に代参し、お札を頂き（二十四日）宵祭りに灯籠を家毎に上げ、無病息さい、家内安全を祈願。

八月一日、八朔、赤飯。嫁さんに赤飯と生姜を持たせて生家へ挨拶にゆかせる。八月十五日、旧の八月十五日、十五夜の月見ふかし万頭とうどんとすすき、野菜、果物を十五夜様に上げる。

九月十三日、旧十三夜の月見。大根と果物、すすきを十三本上げる。

九月二十日、秋の彼岸入り口、お萩をつくり先祖に供える。九月二十三日、お萩を作り仏様に供える、九月二十六日走り口、お客に来た御先祖の霊を送りお墓参りをする。

十月十日、旧暦十月十日の夜とうかんやとし餅は二臼。夫婦餅を搗き、あんころ餅も作る。お月様に餅十個と大根を上げる。

十月十七日、秋祭り。赤飯。

十一月二十日、旧、恵比須講、夕方俵の上に恵比須、大黒をまつり白飯を大盛りによそり尾頭付の膳を上げ、亦白菜の大株と柿を供える。寿司を作りそれも供える。

十二月十五日、お稲荷祭。夜赤飯、けんちん汁、屋敷稲荷へ、半紙二つ折を二つ作り、赤飯といわし二尾を供える。十二月二十一日、油餅、米粉餅にゴマを搗き入れて作る。二十二日、冬至、柚子湯、かぼちゃの煮付、大掃除。二十八日、玉村町のお松市に行き、正月飾りの松を買ってくる。他正月用品も。餅搗きをする、この日に出来なければ三十日に搗く、二十九日は苦持ちになるので搗かない。十二月三十日、お正月飾りを作り、それを飾る。お供え餅も上げる。一日飾りはしない、夜晦日蕎麦、松飾りに飯を上げる。三十一日、お正月三ケ日は座敷を掃き出さないため、家内くまなく清める。この日で菜類は食べ納める。正月七日の朝から菜を喰べる。

村の仕来たりと我家の家例

鶴光路町　持田　清美

一月一日、初湯をたてる。近所の親戚をよんで一献ふるまう、朝そば、神棚、御棚、門松へそばを上げる。三ケ日は絶対に餅は食べないそば家例である。初詣、年徳神（あきの方）の方位にする。二日、前橋初大売出し。三日、青柳大師、龍蔵寺縁日。四日、婿のご年始日、泊まらないで帰る。お棚探し、お供え（餅）を上げたのを全部下げる、その場合歳徳神様のお供えと、お総前様のお供えを別々にしておく。一日中お雑煮。反町薬師縁日、厄年の人は厄落としに参拝する。六日、山始め、消防出初式、鶴光路町ご年始日親類の人達が年始に来る。山始めにはお総前様の四日に下げたお供えとおさご、ごまめ（お頭付）おしめを正一位稲荷様の榊に結び供え、今年の家内安全を祈る。午後はなずな取り。七日、高崎少林山縁日、七草粥（おじや）なずなを入れる。九日、前橋初市、前橋のご年始、朝お雑煮。十一日、蔵開き、備州住備前長船之祐貞の宝刀を床間に飾る、朝雑煮、夜ご飯。鍬立て、あきの方の方向の畑へ行って天鍬でさくを切る。この際にも六日の山始めと同じ物を持って行く勿論これは歳徳神様のものである。十三日、若餅をつく、十二、十六、のお供えを作る。せち餅（暮れの餅）で雑煮、餅で切り繭玉を作る、大判を作る（大きなお供え）。十四日、飾り替へ、お飾りは全部取り門へ出しておく、歳徳神・御総前様のお棚だけは取らない、またお松は切って小さくする、切り餅の繭玉を栖の小枝に刺し、接骨木の花を作り、今までに飾った場所に一緒に飾る。はえかき棒を作る（接骨木の棒二本を二十糎位に切って半紙に水引を掛け作る。接骨木の二本を半紙に包み紅白の水引に結わえ歳徳神様の御棚の前、目付の所に飾る。道祖神（どんどん焼き）子供が荷車で御飾りを集め運び田の中で燃やす、村中の人が集まって餅を焼いた、その餅を食べると災いに偶わないと言う。またお松の燃え残り（燃えくじ）を屋根の庇に投げ上げるとその年は火災に遇わないと言う。夜うどん、おしら様（絹の神様）の掛軸を出し座敷に掛け、お神の鉢に山盛り一杯うどんを供える。

一月十五日、小正月、嫁のご年始日（里帰り）泊ってくる。朝小豆粥、一日中小豆粥、朝はえかき棒に切り餅を挟みあきの方の方向に向いて攪伴する（代掻）小豆粥を食べるときは吹いてはいけない（田植

の時に風が吹く）此の日の粥は全部食べないで十八日粥に少し残しておく。十六日、藪入（鬼の首も許される日と言う）年期の子は家へ帰らせて休ませた。繭かき、楢の枝の切り繭玉をとる。十七日、秋葉様（火ぶせの神とも言う）村の行事で毎年新しいお仮屋を造り御祝いする。十八日、石山観音様（馬の神様である。うまを連れて行き大きい鰐口をならして安泰を祈った）。十八日粥、十五日に残した粥を朝食べる、食器を洗った水を家の回りに散く。二十日、二十日正月、恵比須講、赤飯を炊く、恵比須・大黒の掛軸を座敷に下げ棚を机に飾る、二つの膳に昆布巻、おひら（人参、ごぼう、芋、大根）お汁赤飯を供へ家長が三度の拍手で今年の五穀豊譲を祈願する。供えたお膳のものは決して末婚の子供たちは食べてはいけない。縁遠くなるという。二十八日、二十八日正月（半日正月と言う）、朝離煮。これを最後、正月の行事は全部終わり。

二月一日、二郎のついたち、朝赤飯、仕事休み。三日、節分、豆撒き（鬼やらい）楢の枝で「やがかし」を作り、（ザンマタを作り）それに鰯の頭を刺し恵方に向かい「茄夕顔の葉につく虫の口を焼く」と言ってツバキをかけて焼き門口に刺しておく。寝る前にお丸美を炊いて御椀一杯大盛にして大神宮様に上げる。八日、針供養、女の針仕事は休み、朝煮ごわ飯、ひいらぎの枝を建物に刺した。篭にも入れてとぼぐちに置いた。女の頭の毛を門で燃やし魔除けをした。不定日、初午（今年始めての午の日である）石臼で米の粉をひき繭玉を作りおしら様に上げる、繭玉はあんころ餅にして食べる。夜うどん、おしら様に上げる。十一日、春祭り（新堀神社のお祭り）のぼりを立て赤飯を炊いてお祭りした。今は昭和二十五年分神し、個々の村の神社となった。十五日、釈迦のねはん。餅をつく、お寺参りをする。

三月三日、桃の節句（雛祭り）朝寿司を作る、お雛様に供える。正月切繭玉を焼いて上げる、前日ついた紅白青の菱餅を上げる。不定日、御獅子祭り（騎西町代参、今年の当番の人が行く）『註　旧二月十五日』朝赤飯　代参人、当番の人、子供たちと一緒に村をおさい銭箱をかつぎ太鼓を叩き、神主、神楽と一緒に回った、神主は先ず、『武州北埼玉郡玉敷の神社おんいり』と門前で告げる。家中待っていてお盆におさい銭とおさごを上げる、神楽は家中の悪魔を払う。神主役は村の人がやる。十五日、梅若の日（梅若忌）餅をつく。十八日、彼岸入り、仏壇に線香、花、水、ぼた餅を供える、朝ぼた餅。二十一日、春季皇霊祭（彼岸の中日、いまは春分の日）朝、ぼた餅、親戚の人が墓参にくる。不定日、社日、この日は土を動かしてはならない、暦のうえでは彼岸中にこの日がある。二十四日、走り口（彼岸明け）朝　ぼた餅、だんごを作り水、花、線香を持って祖先の墓まいりをする、必ず帰りにお寺へ寄る。

四月八日、お釈迦様の誕生日（甘茶の日）草餅をつく、お寺へ行って釈迦の像に甘茶をかける、目の悪い人はこの甘茶で拭けば眼病が治ると言う。二十八日、小旗始め、鯉のぼりを立てる。

五月二日、八十八夜、餅をつく、（いなふくみの縁日）「絹かさ様」。五日、端午の節句（尚武の節句）朝、赤飯、屋根に餅草と菖蒲をさす、菖蒲湯を立てる。菖蒲酒を酌む、初めて嫁を里帰りさせる時は土産に鱈のひものをもたしてやる、赤飯も一緒にやる。八日、小旗終い（赤城山の山開き）

六月不定日、お蚕あげ餅、お蚕の上がりきった晩、あんぴん餅をつくり親戚に配る。「蚕びょう」（蚕の手伝い）を呼んで御馳走し寸志を上げる、翌日餅を持たせ嫁を里帰りさせる。

七月不定日、田植始め、朝　白米のご飯。不定日、おさなぶり（田植が終った時を言う）五目飯にうどん、農機具を洗い清め御神酒とご

飯を上げる。また田の水口の苗を二、三本抜き御釜様に上げる、辰の日は絶対に田植をしない。七日、七夕祭り（星祭り）五色の色紙を短冊に切り新竹に結わえ庭に立てる。朝、ふかし万頭、夜、うどん。夕方になったら田の畔に立てると雷避けになる。不定日、農休み（田植が終わって行なう（天道念仏、天道念仏は農休み終いの日に行なう、その年の当番がお寺に集り太鼓、鐘を叩き太陽に奉納する、夕方じゅずを回す。二十五日、鶴光路にはお寺に宝篋印陀羅尼塔ある為、天道念仏はない。不定日、生盆（結婚したその夏にする）新婚の夫婦がそろって嫁の家へ行きあいて方の親戚を呼んでふるまう。夏のしたくを買ってやる。不定日、祐天様（土用入りの日）今宿で行なう。

八月一日、初朔（田の面の節句）嫁を生家に赤飯としょうがを持たせて里帰りさせる。田のもの返しといって婿の家に（めかい、いかきをやった）。

九月不定日、十五夜（旧八月十五日）月見酒、すすき、果物、団子を上げ十五夜様に供える。夜、うどん。二十日、秋の彼岸の入口。仏壇に線香、花、水、果物を供える。二十三日、秋季皇霊祭（秋の彼岸の中日）親戚の者が墓参にくる。朝、ぼた餅。二十六日、走り口（秋の彼岸明け）

十月不定日、十三夜（旧九月十三日）すすき、だんご、果物、野菜を机に供える。十七日、秋祭（虚空蔵様、お祭り「おくんち」）鎮守様ののぼりを立てる、子供達は宵晩は、おこもりをした。朝早く赤飯とおさごを持ってお供え、おさい銭も上げた。当日は勿論一年中、当村の者は饅は絶対に食べられない。不定日、旧十月一日、お神送り、朝早くおさごと、おさい銭を持ち村の氏神様にお参りした。（お釜の留守んぎょう）旧四のつく日にぼた餅を作ってお釜様に上げた。三十日、お日待ち（お天道様に秋の実りを感謝する）。餅をつく、あんぴん餅を作り親戚に配る、すすきを取り大判の餅を膳に盛り机に供える。

十一月不定日、十日夜（旧十月十日）夜餅をつく、あんころ餅も作る。十日棒を作る、唄をうたいながら村の庭を叩いて歩いた「がったん」といって子供達の間で悪戯があった。人家の軒の下に縄で大きな石を吊るし縄を付けて引っ張って雨戸に大穴をあける、そして逃げる。不定日、御庚申待（話し講）当村には一組が十軒位あった。順番を決めて、猿田彦大神の掛軸を掛け赤飯を炊いて夜更けまで話し合いをした。酒をくみかわした。不定日、秋上げ（秋のとり入れが終わった時）ぼた餅、嫁にぼた餅を持たせて里帰りさせる。不定日、恵比須講（旧十月二十日）赤飯、座敷に恵比須大黒の掛け軸を掛け今年の五穀豊譲を感謝する。不定日、お神迎へ（旧十月三十日）おさごとおさい銭を持って氏神様にお参りする。

十二月不定日、穴塞げ（麦蒔きの終わった日）ぼた餅、焼き餅を焼いて神棚に供える（もぐら避けとして）。十五日、お稲荷祭（屋敷祭）夜赤飯、お稲荷様のお仮屋を作る幣束を作る、川端、家、小屋、倉等に二本ずつ幣束を供える、半紙を四つに切って鰯と赤飯をそれぞれ紙に包んでお稲荷様に上げる。帰りには後を振り向かないこと。汁はけんちん汁を作る。お仮屋は毎年新しいものが良いとされる。二十一日、油餅、胡麻をいれて餅をつく。二十二日、冬至、夜南瓜とこんにゃくの煮付物。二十八日、お松市、玉村のお松市に行って買ってくる、上り松といって縁起がいい、御用納め、家の回りを整へ庭に巻き藁を作りしびを敷く。三十日、おせち餅、朝五時起きで餅を四斗つく、あんぴん餅、切り餅、お供へ餅（十二重ね、大判一重）をとる、門松を立てる、その場合家の前に一対、門に一対、建物、井戸、山端に一つずつ立てる。翌年の暦を見て歳徳神（あきの方）の方向にお棚を作る。お総前様のお棚にゆづりは、昆布、ごまめ、密柑を飾る。座敷にお正

月様、大神宮様の掛軸をかける、お供え餅を供える、お棚二つ、神棚、仏壇、大神宮様、お釜様、お稲荷様、弁天様のお飾りを作り、お顔隠し四つ注連縄若干、七五三縄一つ、十二管棒を作るそして飾る、一夜飾り（翌日元旦）お松に御飯を上げる。三十一日、大晦日、朝（おじや）一年中の物を全部入れて食べるの意、柳の箸を家中の者全部揃える、その箸でお正月中食べる。歯を丈夫にする意味と言う。夜塩引に白米の御飯、寝る前に御丸美を炊く、米三合を土鍋で豆木で炊く、この場合、あきの方へ向いて炊く、炊き終わったら御神の椀に山盛りにして大神宮様に上げる。これはすべて年男が行う。（注）御丸美は季節の変り目に行なうとされている。

三輪武男家の家例

亀里町　三輪ちゃう

一月一日、朝湯に入る、年男（若い主人）が若水を汲む。三日間は、朝食はそば、柳の箸、餅は食べない。四日、朝食、おぞう煮（餅を入れる）お棚探し。七日、七草粥、今日まで柳の箸。十一日、倉開き、鍬達（鍬を使い始める）十三日、若餅つき、十二、十六、のお供えをとる。あん入り餅は作らない。十四日、お飾り替へ、夕方どんど焼き、夜、丸美。接骨木で粥かき棒を作り、小さい餅を挟む、接骨木の元より先までの物、二本を半紙にて包み、水引を掛け十二支天様に上げる。堆肥場へ先まである接骨木一本をさす。十五日、小豆粥、粥かき棒で小豆粥の表面をかく。十六日、餅飾りを下げる。十八日、十八日粥。二十日、御棚仕舞、夜恵比須講、寿司を作り、昆布巻等を上げる。二十八日、仕舞正月。

二月三日、節分。豆まきは年男がする。夜丸美。八日、針供養、ひいらぎを入口に挿す、ひいらぎを入れて庭に立てる。初午、年によって違うが、米の粉で繭玉を作り上げる。イワシの頭をヒイラギにさしてつばきをつけて焼く。

三月三日、雛祭り（桃の節句）十八日、彼岸入り、お墓を掃除してお参りする。二十一日、彼岸の中日。二十四日、お彼岸明け、お団子を作って供える、社日、彼岸の近くにある、土を動かさない。（農作業を休むこと）。

四月八日、藤飾り。二十八日、小旗始め、子供の初節句で戴いた、のぼり又は座敷のぼり、五月人形を飾る。

五月二日、八十八夜。五月五日、端午の節句、屋根に菖蒲と蓬を三本ずつ挿す。八日、小旗仕舞、のぼり又は五月人形をしまう。十五日、御蚕餅（おこもち）、春蚕（はるご）の三眠頃餅をついて供へ蚕の豊作を祈る。下旬、お蚕上（こあ）げ餅。

六月中・下旬、農力餅（のうぢからもち）、餅を食べて忙しい農作業、麦の取り込みや田植の仕事に力をつける。

七月七日、七夕祭。十三日、お盆迎へ、盆棚作り、お寺へ盆迎へに行く、墓参りして仏様を迎えて供養する。十四日、十五日、お盆。十六日、盆棚仕舞、盆送り、墓参りする。

八月一日、八朔の節句、嫁を実家へ客にやる、進物の上にしょうがをあげてやる。二十四日、地蔵尊祭り。

九月一日、二百十日、二十一日、二百二十日、陰暦。十五日、十五夜（お月見）。二十日、彼岸入り、墓参り、彼岸中に大体社日がある。社日には赤飯を炊いて地鎮様に上げる。この日は農作業は休みにする、土を動かさないこと。陰暦八月二十五日、お天神祭。部落東半分の男の子が西半分の子は十五日に八幡祭をする。お天神様へおこもりする。夜中に赤飯を炊いて重箱に入れて進ぜに行く。

十月一日、陰暦、御神送り、十日陰暦の十日夜、餅つき、からみ餅。陰暦十月二十日、恵比須講（セリの天ぷらをあげ供える）。

十一月朔日、お神迎へ（陰暦）

十二月初午の日、三輪家の稲荷祭。二十七日、餅米洗い（とぎ水、湯に入れる）。正月飾りを始める。二十九日、餅つき、三十日では切っている間がないので忙しいので一日早くついた。三十日、正月飾りを作る。三十一日正月飾り、お松を立てる、そば打ち、柳の箸を作る、夜丸美を炊いて神棚に上げる、大晦日、お正月料理を作る。

家例について

下阿内町　岡本　三郎

我家にはべつに取り立てる程の家例と言うものはないが、強いて言えば正月三ケ日の雑煮家例位のものか。子供の頃よく友達から餅が食べられていいなあと言われたりしたことを憶へている。そば家例の家では餅が食べられないからだ。その頃の餅は何ともうまい、おいしいもので、子供には大きな魅力があった。暮れに沢山ついておいて、正月になっても四日迄、お預けとは子供にとってたまらないことの様だった。

家例で子供心に不思議に思った事がある、畑に作るとイヤな事があると言われた作物にトウモロコシ、キュウリがあったが、作る事は駄目だが、貰って食べるには何の差し支えはないと言う事、作れない家の年寄りがきてさんざん焼いて食べて、そのうえ両手に沢山持って帰って行ったのを思いだす。大人は自分勝手だなあと思ったことがあった。

下長磯の年中行事

一月、一日～五日、中沢一家は朝湯をたてて順番に宿をして、湯入りに行く。三が日の家例は、朝はぞうに、夜は飯。四日、おたなさがし。この日の朝、三が日の間あげておいたものをまとめてさげる。七日、七草がゆをする。十四日、もちつき。おかざりかえをする。ニワトコの木をけずってハナをつくる。ヤナギの枝にまゆ玉をつくってさす。これらは、十四日にかざって、十六日にさげる。これが、まゆかきのわけ。十五日、朝、あずきがゆをつくって、神様にあげたり、食べたりする。このおかゆはとっておいて、十八日の朝、水でうすめて、うちのまわりに、一まわりまいた。これは、おんなしゅの仕事。やかんなどに入れて、左まわりにまいた。母屋のあまだれのおちるところより外側のところへまいた。朝の行事。二十日、二十日正月。夜がえびす講。えびす講のときは、こぶまきとすしをつくってあげる。身上をまきあげるようにということ。ご馳走のほかに、そろばんと財布をあげる。二十八日、しまい正月。この日、こもちを一臼くらいつくうちもあった。

二月一日、次郎の朔日という。この日には遊び日。かわりもんをした。八日、針供養の日。めかいの中に、ヒイラギの枝をいれて庭先にたてた。三日ころ、豆まき(節分)。豆まきをした。ヒイラギの枝にイワシの頭を一匹分つけて、豆をいるときやいた。このとき虫の名をいって、つばをかけながらやいた。これをとぼ口にさしておいた。としとりの豆は、三回やかないとだめだといった。たとえすこしでもそうした。大神宮様のところからまきはじめた。家の中が終ると外へでてまいた。土蔵、屋敷稲荷様、井戸、外、便所などのとこへまいた。豆まきをするのは年男。唱えごとは、「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外」まいた豆を、家族の者が自分の年の数だけ拾って食べた。なお、いった豆は、まく前に一升桝に入れて、大神宮様にあげておいた。夕飯を食べてからまいた。まき終ったら、残った豆で、豆茶をいれて、うち中で飲んだ。悪魔払いのためとか。豆は瓶に入れてとっておいた。初雷のとき、この豆を子供にくれた。雷様をこわがらなくなるといった。

初旬、初午の日。この日、まゆ玉をつくって、本鉢にもってしんぜた。

（絹笠様に）表座敷に絹笠様の掛軸をさげてまつった。

三月三日、節供。餅をついたり、すしをつくったりした。初嫁さんは、麦餅を赤、白、青の三種類、実家へ背負って行った。おひな様は、二月二十八日に出してかざる。大安にだして、大安の日にしまえともいう。早くしまったほうがいい、娘さんが早く縁づくといった。なお、おひなさまは出してかざってやらないと泣くといった。古いおひなさまは、淡路島へ着くと成仏できるといった。「淡路島へながしてやれ」とおばあさんがいった。十五日、梅若。この日は、赤飯をした。彼岸、春の彼岸には、ぼたもちをつくってあげた。墓参りは、走り口の日。だんごをつくっておくって行った。社日、土の神様をまつる。春秋二度。この日一日は、土をいじってはならないといった。近所の人が十数人寄った。男衆のみ。夕方からの行事。社日講の人が、順番に宿をする。農事研究会のようなもの。おしゃべりっこをした。むかしは、昼食をすませると宿に集って、料理をつくった。すしとかぼたもちとか、講の人が料理をした。今は、面倒くさがって、うどんをつくって食べ、酒を飲む程度である。なお、社日様の掛軸があってさげてまつる。

四月八日、お釈迦様の日。この日、お寺で甘茶をくれた。子供が行ってもらって飲んだ。十五日、春祭り。赤飯をつくって祝う。この日、神社でさんばさまを舞う。親戚の人がお客にくる。

五月二日ごろ、八十八夜。かいこの出る前、霜除けに、おがんしょうに行った。大室のおくまんさま、五社稲荷、上佐鳥の正平稲荷様（一本杉の稲荷様）。この日、草餅をつくって祝った。五日、節供。赤飯あるいは餅をついて祝った。旗竿は、四月の末の大安の日にたてる。四月には、ショウブとモチグサをとってきて、軒下三カ所にさした。夜は、ショウブ湯に入った。初節供の場合には、旗竿は早くたてた。むかしは、のぼりをたてたが、その後吹流しになった。初節供の人は、お祝いもらったうちへおかえしとして、餅をくばった。五日より前にくばる。苗代祝い、五月のはじめの大安の日にもみふりをした。このとき、苗間（水口）に小正月のかゆかき棒をたてた。苗代祝いには、苗がこわくできるようにと、赤飯をふかして祝った。蚕のはきたて祝い。蚕の休み祝い、蚕は四回休む。休みごとに祝った。ふかしまんじゅうとか赤飯をつくって祝った。蚕の神様の掛軸があって、それをこのめのところにさげた。そこへ供え物をした。蚕の休み祝いは、春蚕のときだけでなく、ばんちょうした。蚕があるときは、仏様の鐘をならさないようにした。ネズミよけという。五月の末、おこあげもち、蚕があがった時、おこあげもちをついて祝う。このときは、養蚕組合長がはなしをまわす。各組長が組下にふれをまわした。「かいこあげ祝いだよ」といってまわった。嫁さんは、その餅を持って里へお客に行った。一晩くらい泊ってきた。

六月

七月二日ごろ、半夏、この日は、田植をするなといった。むかし、半夏様という人がいて、この日おおく忙しくって、田へ片足、畑へ片足つっこんで死んだという。そのために、半夏の日には田植をしないのだという。七日、七夕。十九日、お上人さまのおまつりの用意。二十日、お上人さまのおまつり、燈籠をつける。前日にかねあつめにムラをまわった。二十三日、地蔵様のまつり。燈籠をつける。この地蔵様は子育地蔵。子供が夜泣きをすると、お願生かけた。お礼におかけをこしらえてあげた。おまつりのときには、じりやきをたくさんつくって行ってあげた〕それを子供が待っていて食べた。燈籠は、子供が中心になってつけた。前の日に、ムラ中、一軒一軒まわっておかねをも

らいあるいた。このとき、「かんけいもらいにきたよ」といってきた。二十五日、天王様のまつり。神社の境内にまつってある。

八月一日、八朔の節供。この日、嫁さんは、赤飯とショウガをもって里がえりをした。里からは、嫁にきて、最初の年には、箕をもらってきた。身持ちがいいようにということであった。次の年には、えかきをもらった。その次の年には、桑つみざるをもらった。八朔の節供には、三年行けばよいといった。仲人さんのところへも、同じように挨拶に行った。盆、十三日、迎え盆。お寺へ迎えに行く、ムギわらの束を、かいどのところへおいて、お寺の本堂からもらってきた火でムギわらに火をつける。提灯をもって行って、お寺の本尊様のあかりをうつしてきて、墓へ寄って仏様をむかえてくる。むかえに行った人が仏様をおんぶしてくる。かいどうのところで、お寺からもらってきたあかりで、ムギわらに火をつける。お寺からもらってきたあかりで、盆棚のあかりに、火をつける。その火で線香をつける。(ランプ)盆のあいだは、朝はぼたもち、昼はうどん、夜はご飯をあげる。十五日、昼のとき、うどんをゆでる。これは、馬のたずなといって、二本つくる。このとき、ナスで馬を二匹つくった。足は篠の棒、しっぽはトウモロコシの毛。キュウリを細く切って馬のえさにした。十六日、盆送り。仏様のあかりから火をとって、提灯につけて、ムギわらに火をつけて、近くの三本辻(道端)に送りだした。供えたものもそこへ送りだした。花も、馬もそこへだす。そのとき、かど口でムギわらを燃す。そのけむりを体になする。健康であるようにということ。そのあと、一旦うちへ帰ってきて、また線香、花、お菓子などを持って墓へ送りだす。

九月一日、二百十日。十一日、一百二十日。なかばすぎ、十五夜。あげるものは、おてまる。そのほか柿などまるいものをしんぜた。ススキは五本あげる。お月様にあげたものを子供が槍をこしらえてつきにまわった。お月様の中で、ウサギが餅をついているといった。

十月十三日(旧九月)、十三夜。まつり方は十五夜と同じ。ススキは三本あげる。十三夜に雨が降ると、小麦のできが悪いといった。十三夜に雨が降ると、小麦にしぶがわくといった。ふつうは、「十三夜にくもりなし」といった。十七日、オクンチ。秋まつり。この日は赤飯をつくった。十日夜、餅をついてあげた。子供がわらでっぽうをつくって、うちのまわりをたたいてあるいた。モグラが入らないようにということであった。二十日、えびす講。秋のえびす講のときも、まきずしなどをつくった。また、いかとこぶと芋を煮てあげた。バケツに木炭をとかしておいて、その中にいかをまるごと入れておく。いかの胴に二本すじをつけて、足をまげて、胴にとおして、それを煮た。そのまんま、大きいいれもんにいてて、ほかの煮物の一番上にのせてえびす様にしんぜた。

十二月十五日、稲荷まつり。屋敷の稲荷様のまつり。このとき、わらのお宮を、毎年とりかえた。今は、石宮になった。供え物は、赤飯、おみき、塩、さかな(二匹、イワシなど、かしらつき)。供えてから帰るとき、うしろをふりむくなといった。稲荷様の社(土台)は、うちの床より高くまつれといった。赤飯とけんちん汁をつくった。二十三日ごろ、冬至。コンニャクとトウナスをにた。ユズ湯に入った。コンニャクを食べると、腹の中にたまった一年中の砂がとれるといった。

(補足)十一月十五日、七五三の祝いをした。

十一月三日、オヒマチ、餅をついて、縁側のところに供えた。中沢家の正月三が日の家例。ぞうに家例である。前日(大晦日)から火をたやさないでおく。年男(旦那、あとつぎ)が、三が日の間に朝

飯の用意をする。里芋、にんじん、大根の三種類のものを短冊に切る。これを煮て、醤油味をつけて、小鉢の中に三種類のものを入れてあげる。餅はあげない。かてだけ入れてあげるわけ。餅はあげない。家の者はやいて食べた。餅はおんなしゅが料理した。神様にあげるものは男衆が料理し、うちのものが食べるものは、女衆が料理した。四日の朝、おたなさがしといって、三が日供えたものを、まとめてさげる。暮の三十日に餅をついて、三十一日に神様にあげる。おそなえは、半紙の上にのせてあげる。四日まであげておく。おたなさがしのときにさげる。十四日がおかざりかえ。餅をついて、おそなえをあげる。暮にあげたところへあげる。一月四日は、坊さんのご年始。三が日供えたものは、朝のうちにさげてしまう。朝飯を食べるとすぐにさげる。一月六日、山はじめ。この日の夕方、せり、ナズナ、ホウレンソウ、イモ、ニンジンなどを用意しておく。これを七草の材料にする。A月七日、七草がゆを食べた。このあと、嫁さんなど、いくらかひまがでた。自分のしたいことができた。一月十四日、この日、ご飯とうどんをおはちに、べつべつに、いっぱい、山もりにしてあげた。おたなにあげた。十四日にあげて、十六日にさげた。一月十五日、朝、あずきかゆを煮た。あずきがゆの残りに水を入れてふやして、あきの方からまきはじめて、うちのまわりにまいた。おんなしゅの仕事。あずきがゆを食べる前に、かゆかき（ニワトコでつくった）二本でかんまわした。そのあと、半紙にくるんで、もとゆいでゆわえて（二本を）とっておいた。それを、苗間をつくるときに、なえまへもっていって立てた。もちとうるちのしるしにたてた。

二月のとしとり。ヤナギの木の二又のものをきってきてイワシの頭を切ってさした。それを、豆をいるのと一緒にやいた。うち中の野菜の名をいって、「……の虫をやきます」といってつばをかけてやいた。それを、とぼ口のところにさしておいた。豆まきの豆は、おんなしゅが、ほうろくでいった。三回に分けている。

三月十五日、梅若。赤飯をふかして祝った。

四月八日、お釈迦様の日。お釈迦様の誕生日という。この日、上大島のお寺へ行って、甘茶をもらって飲んだ。お釈迦様に甘茶をかけてから、甘茶をいただいてきた。盆迎えのとき、早くおきて餅をついた。その餅の音を聞いて、先祖様がお客にきた。餅はあべかわにして、先祖様にあげたり、うちのもんが食べたりした。生き盆、このとき、嫁ぎ先のおっかさんが、嫁さんにひとえもんを買ってくれる。それを着て、嫁さんは里へお客に行った。それは、嫁にきてはじめての年だけのこと。このときは、婿さんも一緒にお客に行くのがほんとう。一晩くらい泊ってくる。仲人のうちへも行く。持って行くものは、ぼたもちなど。

正月三が日は、ヤナギのはしで食事をした。うちの人数分だけつくった。それは、箱膳をつかっていたころのはなしである。あなっぷさげ麦まきが終ると、あなっぷさげといって、嫁はおはぎをもって里へお客に行った。この行事は、ムギをまいたあと、モグラが田畑にもぐらないようにするというわけ。

十二月の末、お歳暮。嫁は、実家と仲人さんのところへ持って行った。実家へは五年間、仲人のところへは三年間もっていくもんだといった。八朔の場合も、右と同じように、里へは五年、仲人さんのところへは三年もっていけといった。つじゅうだんご、むかしは、庭で干しもん（穀類）を干した。むしろからこぼる穀物を、毎日毎日とっておいて、べつにしておいた。それをまとめてするすにひいて、こなもちをつくって、神様にあげた。だんごをつくってあげた。これを、つじゅうだんごといった。ねじっこにして食べたもの。だんごには、砂糖味

噌とか、きなこをつけて食べた。石をひろって、よなげて、粉にひいてだんごをつくった。秋の仕事が終ってからのこと。秋あげ、もみすりがすっかり終ってから、秋あげといって、嫁はお客に行った。このときは、里へ、ぼたもちをもって行った。一晩くらい泊ってきた。姑さんからは、「ゆっくりして来おや」といわれた。一一晩泊って来おや」といわれたときは、一晩泊って来た。そうしろと、自分の親にいわれた。（下長磯）

桃井庄主代宗家　主代系家礼扣　主代家寶

規　定

一代々自分の覺に寫す事
一古き者を大切に保存し置く事

第七十二代之代善内義豊
改写之

郷土調際
昭和五年春主代万五郎書加ふ
主代系家礼の事阿内大膳主代豊彦　写之

一家礼は祖先の教ひたる事
一家礼は神佛を祭る方法の事
一家礼は五穀豊熟を祝ふ事
一家礼は國家太平を願ふ事
一家礼は子孫繁永を祈る事
一家礼は惣て幸の基なる事
一家礼は一心に守り行ふ事
一神供物は榊。神燈。水。酒。米。果物。野菜。魚類。鏡餅。其外食物。塩。又は切火にて清め上る事
一佛供物は柳花。燈明。水。香。果物。團子。穀類食品。
一農は國家の寶にして祭日は春秋の社日にて主祭神は天照皇大神埴安姫神。倉稲魂神。少名彦神。大己貴神。にして其他諸神佛をも拝礼する事
一神佛尊敬の為め御神事遠慮に衷服の時にて慎む事延喜弐年春主代家礼控子孫為桃井膳司主代國豊之書主代争中家礼正月御可座利の事
一煤拂。十二月十三日歳徳神の方へ向ひて始る事
一可知喜。松を三階松を求むる事松に（田作り白米）を上る事
一藁可座利を造り始メを吉日を選ひ始る事
一餅搗二十八日小豆を入れ赤き餅を搗く事
一大晦日前に門松より始めて御可座利する事
一御松杭を楢にて皮を外にして松を皮に添い立てる事
一大注連密柑に松を挿し紙六枚を三ツ折りに畳みて三ヶ所挟み水上に張り終りを巻き置く事
一御嘉保賀久志へ串柿昆布を水引にて結び密柑に松を挿し紙二枚を三ッ折りに畳みて挟み松を両方に附け南天も附ける事
一御嘉保賀久志を歳徳神御相殿三玉様両棚へも串柿五こ。太神宮。惠美壽。御壮傳様。（観世音の事）を串柿三ヶつ、附ける事（両棚の御棚を楢板三枚か五。七の事）
一歳徳神へ冨喜の玉を竹の枝に挿して上る事
一注連を松に小半紙を切りたる紙二枚を三ヶ所挟み。穀柳を置く處。（倉庫）水瓶。手桶。風呂桶。臼。に張る事（大注連注連共七五三）
一久治好芽を松と小半紙を切りたる紙二ツ、挟み八将神へ八本。十二天様へ月の数十二本閏年を十三年を束ね上る事
一久治好芽を、神佛棚の氏神。井戸。川神。鎌。手鍬。一本つ、上る事

一歳徳神へ手冨貴。かち栗。ほうづき。暦。麻。鱒。塩引。を上る事
一大晦日にも立善く掃除をする事氷餅を造る事
一大晦日に御供へにも赤き餅を用い松を挿し紙を敷き神佛へ上る事
（御供は鏡餅と切御供の事）
一大晦日に久治好芽を鎮守。墓所へ上け御可座利祝として鰯と餅を焼き食する事
一大晦日一夜を火の気の有る様する事

元日より三日間蕎麦家礼

一元日早朝風呂を沸かし寅の刻頃にを一族隣家に沙汰をなし金平。数子。豆。の肴にて御祝をする事（箸を元日より廿日朝迄柳の箸）
一元日より三日間御松の箒にて朝歳徳神の方より三箒掃き込む事
一歳徳神へ火鉢に火を入れ上る事
一御酒神の御白木を上け置きの事
一門松より朝晩共上げ始る事朝蕎麦晩ハ飯
一門より内に掃き込む様に掃除する事
一元日朝祝儀一族宗祖家に集り年始の祝三杯して一同座敷の氏神。八幡社。村内神佛。鎮守。御寺。墓地。に年始する事菩提所極楽寺地内に墓地有り御寺へを御年玉を納むる事（一族は従兄の交相の事）
一卯日には早朝卯の刻前に歳徳神へ御酒と朝祝を上る事歳徳神御立ちの日なり
一二日は仕事始メ書き物。馬の乗り初の事

正月四日より餅家礼

一御棚差賀志四日朝御供へ御白木を下け朝祝を御雑煮を上る事（晩を飯し）五日御雑煮
一山始メ六日朝食後久治好芽。餅。白米。田作り。小半紙にて幣帛を造り山に供へ山かりを始る事
一七草粥正月七日朝七草ハ古礼を略し左の七種なずな。芋。大根。人参。午蒡。菜。昆布。七草粥を食する事。なずな。を水に浸し其水を爪に附け切る事を病に拘らぬ為に行ふなり若菜節供
一倉開き正月十一日早朝門松より御松を引き若松にして朝祝ひ雑煮を上る事
倉庫（衣類食物を置く場所）へ御酒雑煮を上る事
鍬建をする事御松。久治好芽。餅。白米。田作り。を小半紙にのせ田甫に供へて鍬を使へ始むる事
一御可座利嘉意正月十四日朝餅搗き朝祝後藁可座利を取り餅可座利と庭床の木を上る事（朝雑煮晩蕎麦（ソバ））針仕事を休む事初午の日を休む事蚕神祭日
一楢枝に四角に切りたる餅を挿したりを餅可座利と云ふ
一庭床木を一尺御寸位に切たりを上る事庭床木を花と云ふ
一十二十六を上る事丸るめたる餅十二丸るめたる餅十六木枝に挿したるを十二十六と云ふ
一庭床木の元より末迄の者二本を半紙にて包み水引にて祝ひ十二天様に上る事久治好芽二本位初午の繭玉上げに置く事
一厩肥場に末迄有る庭床木を上る事粥掻棒を造る事
一餅可座利と庭床木を鎮守。墓地に上る事
御可座利嘉意を五穀豊作を祈る祝なり
一道祖神正月十四日晩藁可座利を焼き其火にて餅を焼き食する事
一丸美正月十四日晩歳徳神へ上る事
米一合位炊き好場知に全部を盛り豆木を月の数十二本閏年を十三本挿し切火をして上る事を丸美と云ふ
一小豆粥正月十五日朝吹かずに小豆粥を食する事一年の無事を祈る為に吹かずに食する事　庭床木に餅をはさみ粥をさます事（晩は飯）

一七疋粥正月十六日朝馬家肥を取り藁にて七ツ盛れる者を作り。大麦。豆のさやがら。を煮て盛り馬頭尊又を三本辻に上る粥掻棒は籾種子蒔の時苗代に建る事
馬の壮健を祈る為なり（朝雑煮晩飯し）
一繭かき。又を。取り入れ。正月十六日朝食後餅可座利を取る事
一十八粥正月十八日朝小豆粥朝食後粥を水にて延ばし家の週りに引く事害虫除家の無事を祈る為なり（丸美と十五日粥とを入れ十八粥を煮る事）
一御棚仕舞正月廿日、朝祝後門より若松を取り始メ御棚を仕舞へ恵美寿様を机の上に奉る事藁仕事始めする事（朝は雑煮）晩を恵美寿様の御奉り桝に金銭若干（八の数を用ふる事）を入れ上る事御酒御膳を二膳供る事
御開芋。油揚。大根。人参。昆布。煮たる者御皿生鰯二尾ツ、御椀飯を高盛にし大根の千本切を汁にて煮たるを掛け上る事
一翌早朝恵美寿様を仕舞ふ事
一二十八日朝は御雑煮晩は饂飩。古正月祝ひ
一二月朔日朝は赤飯晩は饂飩（二月一日）
一二月初午日朝は繭玉晩は饂飩。倉稲魂祭り。正月の十二、十六を上る事
一二月八日（正月の御事仕舞。春の事始め）宵日に桝に久治好芽の七草に繭玉を入れ上る事
柊を入口に挿し目笊に柊を入れ立る事朝は赤飯。宵晩葱の葉を焚く事
饂飩。十二月八日（正月の御事始め。秋の事仕舞ひ）
二月八日と同様の事（柊を目笊に入れ立る事を大眼を建ると云ふ魔除也福生事）
一彼岸。御墓来りする事春秋共同し入口は牡丹餅。中日は赤飯。走口は牡丹餅
一社日。土動かさぬ事農の神を祭る日
朝は御飯。晩は饂飩。（入口日迄に墓地掃除の事）
一三月節句二月二十八日雛始め豆。餅花煎を上る事
宵迄に卵。芋湯出。菓子を上げ晩は餅搗き。
一三月三日節句。朝は御酒。御膳を二膳供へる事
御開は。油揚。芋。大根。人参。昆布（上己の節句桃の節供）
御皿は生の開き魚。御汁椀は大根。千本切り。御飯蔵方に餅を切り桃の枝を挿して上る事桃の花を杯に入れ桃花酒を神佛に上げ呑む事
晩は饂飩（土産に餅を入れる事雛を七日目仕舞せぬ事）
一三月二十五日赤城明神。赤山主祭。宵晩は餅の饂飩朝は御飯。御酒。鏡餅。供物を上る事後ち四月八日に改む
一四月八日朝は餅。晩は饂飩。宵に藤を三本つゝ屋根に挿す事釋迦祭り神様に鏡餅。御酒。供物
一五月節句四月二十八日旗始め晩は饂飩
五月五日宵日に屋根に菖蒲と蓬を三本つゝ挿す事
神棚にも上げ。朝は赤飯。御酒。菖蒲酒を呑む事
宵に菖蒲湯に這入る事八日旗仕舞。朝。赤飯
一六月朔日氷り餅を神佛に上げ食する事（正月中に餅を氷らせ無き用ふ暑さ当りせぬ事）
一六月十五日天王祭。宵晩。饂飩。朝。赤飯。御酒。瓜。供物
一七月朔日釜の口開け。朝は焼餅。晩は饂飩
一七月七日七夕祭。宵日午後新竹に色紙を附け祭る
宵は御飯。朝は饂飩。花。果物を供へ表座敷にて御祭りする事朝は顔をねぶたの木の葉にて洗ひ川に流す事

一盆棚造り七月十二日草縄二本にて四方へ新竹を立て上下二ヶ所廻す事其の縄に杉の葉とめずら。を挟み前の両方へ芋豆木を附る事
茄子。胡瓜の馬とみろはぎ。にて馬を湿す物を造り棚の下に杉の葉を置く事棚には草の敷物を敷く事墓地を掃除する事
一七月十三日墓地石碑に新竹にて作りたる香立を立て菩提所へ盆供を納め提灯に御寺より火を附け持ち来り門にて小麦藁を焚きて迎火する事
御棚へ水。線香を上る事朝棚に祖先を祭る事
晩は飯し野菜を煮て上る事其他供物を上る事
一盆十四日早朝。餅搗き餡轉餅に砂糖を拭け上る事
晝は饂飩。晩は飯し。茄子。昆布。めずら等野菜を上る事
一盆十五日朝は赤飯。菜。晝は饂飩。晩は飯し菜。御棚の縄へ生饂飩を拭る事（しよい縄と云ふ）
一盆十六日朝は牡丹餅に砂糖を拭け上る事
早朝に馬家肥を取り七疋粥を上る事
朝食後盆送り提灯を持ち御墓乗り後に盆棚を仕舞ふ事（御墓に精進切、背笈縄其他花。線香、供物を上る事）
一盆十七日観音祭り朝は赤飯。晩は饂飩。
一七月二十七日諏訪祭り宵は饂飩。朝は赤飯。御酒供物を上る事後ち明治末年に三月二十七日に改む
一八朔節句。二百十日。御九日其他の祭日は赤飯。御飯又は饂飩の事
一八月十五日八幡社祭り宵日に掃除し幟を立てる事
朝は赤飯。御酒。大根等の供物を上る事
祖先豊城入彦より主代与兵衛尉綱彦迄の霊を八幡社に合せ天正十一癸未年八月屋敷内に祭る
一八月十五日夜は十五夜祭り表座敷に祭り果物。すゝき等の供物を上げる事饂飩の事
一九月十三日晩は十三夜にて十五夜と同様の事
一九月十六日神明宮御祭り。宵晩は饂飩。朝は餅早朝に表座敷に祭り御酒。餅。供物を供へ日の出を待ち御祭りする事菊を供へ菊の花を杯に入れ菊花酒を呑む事は菊の節供する事重陽節句九月九日
一御神送り十月朔日朝早く神様を祭る事御神迎ひ十一月朔日も同様の事
一十月朔日夜。十五日夜。二十八日夜。は御釜様の祭り牡丹餅の事
一十月十日夜は夕方早く餅搗きの事座敷に祭り御酒。大根。供物を上げる事蕎麦。からみ餅を食する事
一十月廿日恵美寿様祭り正月と同じ
一十一月初の子日朝。恵美寿大黒様に生の物七種。金柑。いんげん。ぎんなん。かんてん。人参。蓮根。南天。を上る事晩は饂飩。無事幸運を願ふ御祭りの事
一十一月十五日稲荷祭り。晩は赤飯。御酒。生鰯を紙にのせ二ツ上る事夕方迄に御宮を掃除し幣帛と御釜注連を造る事御釜注連の紙は月の数十二。閏年は十三の事十二月煤拂後に張る事家内一同参拝の事
一師走朔日。佳備渡（カビタリ）。宵日朝は地従飯。晩は地住ねじ。地従米にて。ねじを作り茅に二ツ刺し入口。神佛に供る事（災難除）。朝は餅。井戸川神様に鏡餅を上る事（水神祭り）
一師走八日は二月八日同様の事（葱の葉を焚く事毒気拂ひ）
一冬至の宵晩は餅。（胡麻木を焚く事油祭の火神祭）柚湯に入る事
朝は御飯。蒟蒻。唐茄を食する事晩は饂飩
一十一月二十三日晩は大師祭り小豆粥の事
一節分晩は飯。御酒の煎豆を桝に入れ神棚に供へて豆蒔する事早夕食後。豆煎。屋嘉賀志家喜焼きする事（鰯の頭を豆木に挿し二ツ焼く

を云ふ）豆蒔後豆煎にて福茶を作り上る事茶菓子には柚の漬物を用る事屋嘉賀志家喜は作物害虫除福内。々。鬼外と豆撒は福生の事を祈念の事

一毎月朔日十五日二十八日は御祭りする事

一正月御可座利。御遠慮の時に松の代りに榊。又は常磐木を用ふる事。止む得さる時は代りの品にて行ふ事

一垣根の横樗を三所にせぬ事矢来垣は三所の定めなればなり

一午蒡を作らざる事主代与兵衛尉綱彦が武田氏の臣たり或時に午蒡畑にて苦戦せしに依り祖先を偲ひ農となりても作らざる事

一惣て祝祭の風習は守り行ふ事

元録十五壬午年正月吉日

主代善内義豊

改写書加之

破損の時は写し改む事以上

参考　御節句事

◎正月七日若菜節句。七草粥節供

一二月八日御事仕舞節句。八日節供

◎三月三日上巳節句。桃節供。女子祝。桃花酒

一四月八日藤節供。釋迦年尼如来祭。高千穂祭

◎五月五日端午節句。菖蒲節供。男子祝菖蒲酒

一夏期入梅入りの日。梅の節供。樹木。稲。植付節句梅干を食する事

一六月十五日稲田節句。瓜節供。天王祭

◎七月七日種子田節句。色紙節供。星祭

一八月朔日八朔節句。五穀實入節句和合節供。陰陽和合祭

◎九月九日重陽節句。菊節供。御日待日。神明祭菊花酒

一十月十日大根節供。月読祭。重陰節句

一十一月十五日五穀取入節供。稲荷祭

一十二月八日師走八日節句。御事始節供

◎本は五節供の本

一九月九日九月十九日九月二十九日の三の九日に茄子を食する事

一金比羅社祭り正月十日朝。赤飯。御酒。供物

一古峯神社祭り節分の朝。赤飯。御酒。供物

一庚申祭り庚申日晩。饂飩。御供物猿田彦（サルダヒコ）大神祭

一甲子祭甲子日晩。饂飩。御酒。供物。大黒天祭弘化三年事

一三月二十三日晩。火難除の祈念する事

一七月廿一日朝。火難除の御祭りする事大正六年事

一唐もろこしは子供の病気の為め主代勇五郎時に作らざる事

一祝祭日を太陽暦に明治末年明治三十九年頃改む

一八幡祭。十五夜。十三夜。御神送り。十日夜

秋の恵美寿大黒祭。御神迎ひは陰暦の事

一天王祭は七月二十五日。稲荷祭十二月十五日。佳備渡十二月二十五日に改め祭る事

矢嶋村名傳説

一毛野國群馬郡桃井庄曲輪郷阿内村後ち上毛野國と改め其の後ち上野國群馬郡阿内郷上阿内村を後ち上阿内村を分ち矢嶋村と改称

一毛の國と云へしは古にして牛馬の生育に適したる土地なるにより毛野國と呼びしと云ふ後ちに人皇四十三四代頃に毛の國を上下の二ヶ國に分ち上毛野國を云ふ和銅五年郡を割って國を置き郡郷の名を雅馴の字に用へしむと古記録に有り後ち上野國と改めしと云ふ事時一群馬郡と唱へしは馬の生育盛なりしより賣買の為め集りて群んをなすに依り群馬郡と名付けたりと云ひ傳ひ居り候

一桃の井の庄とは古しへは絹綾を織る事を桃文と呼びしと云ふ人皇四十三代元明天皇の御代に絹綾を織る事を教ふる為めに桃文師を諸國に遣したりと云ふ古書記を見ても絹を織る事を桃文と云へしは明かなり織物の盛なる土地なるに依り桃文の名を形とりて桃の井の庄と名付けしと云ふ事候

一曲輪の郷とは前橋は以前は厩橋と云へ古にしへは曲輪と呼びしと云ふ曲輪と呼びしは牛馬の賣買を行ふ為め此の他に集り市をなし曲輪をなしたるより曲輪と名付け其の近邊を曲輪の郷と呼びしと云ふ後ち阿内郷と云ふは古にしへより阿内家阿内太郎國彦住し居り以後曲輪郷主阿内家の居住により源頼朝氏時代に曲輪郷を後ち阿内村近邊を阿内郷と改め呼びしと云ふ事に候

一阿内村と云ふは阿内氏の住居により名付けたりと傳ふ上阿内村と云へしは阿内村の阿内郷となりし時に阿内村と分ち上阿内村と名付けしと云ふ事候

一矢嶋村と云ふは慶長六年酒井雅楽頭正の家臣矢嶋三右衛門上阿内村に住す夫れより矢嶋氏の居住に依り正保年間に上阿内村を今ちて其の進傍を矢嶋村と名付くと傳ひ居り候

一上阿内村を分ちて矢嶋村阿内村寺家村阿内宿村龍門村善光寺村今宿村有り寺家村は極楽寺を形どり寺家村と云ひ阿内村は古にしへ阿内城の有りし附近なれば阿内城の名を取りて阿内村と云へ阿内宿村は古にしへ商きない屋の有りし處にて宿の名あり依て阿内宿村と云へ龍門村は諏訪明神の眷族の名を形どり龍門村と名付け善光寺村は善光寺の名を無りて善光寺村となし今宿村は近く宿をなしたるに依り今宿村と唱ひしと云ふ事に候

御達しに依り矢嶋村履歴書に矢嶋村名履歴傳説書相添へ御届申上候也

明治三庚午年三月廿五日

矢嶋村名主　堀口紋造㊞

組頭主代　文造㊞

取締役

主代勇五郎様

御役所御中

極楽寺由来御届書写

主化善内　写之

極楽寺由来御届書

世良田村長楽寺直配

上州群馬郡阿内村

天台宗成菩提山光明院極楽寺

一當山の開基は仁壽辛未年秋彼岸入口御本尊は阿弥陀如来開祖は御仁僧正慈覺大師比叡山延暦寺直末成菩提山光明院長楽寺と稱せしも治承二戊戌年春彼岸入口に中興開山心猶上人當山を改築し長楽寺を極楽寺と改め新に千手千眼観世音。馬頭観世音。十一面観世音。子安観世音。聖観世音。如意輪観世音。不空羅索観世音の七尊を勧請し諸人に切徳を授け給ふ心献上人は源頼朝正の母正常盤御前にして元暦元甲辰年十月十一日当山に於て御寂滅依て建久四癸丑年四月十四日征夷大将軍源頼朝分は母公廟所造営菩提の為め當山に同郡阿内郷阿内村当山近邊字寺前参拾五町歩の寺領と造営費として参百五拾石を寺禄に附し十月十一日造営御検分御来村鎌倉より極楽寺に通ずる廟所参拝の要路には路傍に梔の木を植へ目印となす後ち時代の変遷により天正年代に廟所頂上の墓石を其傍に移し新に宮を造り弁才天と改む文禄四乙未年四月十六日神君東照権現様よりは葵の御定紋と

参拾五石の寺領を常盤御前菩提の為め当山に賜る後ち徳川御代々の将軍様より参拾五石の御朱印を当山へ下附せらる常盤御前心猶上人勧請の七観音は弘安三辰年十一月火難の為め当山の末寺石川山御福院永楽寺に七尊を移す永楽寺は後ち多聞寺と改む時に元冠渡来の困難の為め國家安泰諸人安全守護の祈願を行ふ古記録寶物等は天文七戊戌年七月阿内城落城の戦難と元和八壬戌年十月九日火難の為め無之れ以上御達しに依り極楽寺由来書右の通りに相違御座なく此の段御届申上候

敬具

享保二丁酉年正月廿五日

上州群馬郡阿内村
極楽寺住職
権大僧都　尊覺㊞

仝所檀徒
寺家村名主
久右衛門㊞

阿内村名主
□□興造㊞

矢嶋村名主
主代　善内㊞

龍川村名主
茂　右衛門㊞

阿内宿村名主
僧　兵衛㊞

社寺奉行御役所
御中

備考　本書不明箇處は判断し書き
昭和八年秋彼岸に写改む

主代万五郎

参考　鎌倉街道の起因

一鎌倉街道と極楽寺街道と云ふ名は鎌倉より成菩提山光明院極楽寺に通する道路にして征夷大将軍源頼朝公母公廟所は村の要路にして路傍に梔の木を植へ巨印となす此の道路を鎌倉街道と称し鎌倉にては此の道を極楽寺街道と呼び其の名は今尚を伝説に伝ふ

鎌倉街道の略圖

一大日河原と云ふは征夷大将軍源頼朝公母公廟所来村の歸途此の河原にて日の出の御来迎を拝されしより大日河原と尊稱銘名せしと伝る候

備考　主代善内義豊　書之

明治維新迄は御朱印寺なる故に極楽寺前の東西の道大門裏門墓道は下馬道

明治四十一年春彼岸祖父よりの伝説

主代　万五郎書之

手毬歌　赤山

手毬歌

向ふやまのなき鳥は　ちゅうちゅう鳥か
うき鳥か　源三郎の土産
何に〳〵貰た　銀のかんざし貰て
やぶの影に置たらば
忠々ねずみか引て行った
どこからどこ迄で引て行った
鎌倉街道のまん中で
一ぬき二ぬき三ぬきさくら
五葉松やなぎ柳の下の坊さんが

はちにちんこうさゝれて
いたいとも言ひずかいとも言ひず
唯だなくばかり
極楽寺常盤の塚の面影も手毬の歌に己か庵りも
天正十一未年秋彼岸
言の葉を仇に思ふ業へがし

為子孫
阿内郷上阿内村
赤山
書之

古書中より発見
昭和十年春万五郎書之
参考　手毬歌　主代赤山　之書
備考　宮城村苗ヶ島なる井上嘉十郎翁の勧めに依り歌の真味を悟り修養に入り左に其の解釋を附す
昭和十年三月不明の箇處は判断し万五郎事
為子孫修養　主代赤山

手毬歌　極楽寺面影

今の将軍は
向ふ山の名貴鳥は（将軍の言葉を伝ふと云う）
忠義の人か　不忠の人か
忠々鳥か　うそ鳥か
源頼朝の下され物
源三郎の土産（源頼朝の幼名源三郎と云ふ）
なにとなにを貰た　土地と目印を貰て
何に〳〵貰た銀の簪貰て（銀は價にて土地なり）
源氏に関係の将軍の時は有たが
薮の影に置たらば（薮は笹笹は源氏）
いたずら者が持て行った
忠々鼠か引て行った
どこからどんなに持て行かれた
どこからどこ迄引て行った
極楽寺で
鎌倉街道の真中で（極楽寺大門南に鎌倉街道極楽寺北方なる字細井に鎌倉坂の名あり）
だん〳〵取られた源頼朝の納め物
一抜き二抜き三抜き櫻（櫻は佐蔵の源頼朝を始め佐と呼ふ。蔵は納め）
常磐御前のを
五葉松柳（松は緑、常磐柳は家内貴にて御前）
常磐御前の墓を守る坊さんが
柳の下の坊さんが
愚か者の為に香を焚く事をとめられて
覇痴に沈香差されて
ちがうとも言ひず　あやしいとも言ひず
異體とも言ひず怪異とも言ひず
たゞなくなった
唯だ無くばかり

第十二章　口頭伝承

一、昔話

桃太郎　むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがあったとさ。

ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行ったとさ。おばあさんが川で洗濯をしていると、桃がいくつも、どんぶらこ、どんぶらこと流れてきたって。

おばあさんは、

「いい桃はこっちへ来い、悪い桃はあっちへ行け、いい桃はこっちへ来い、悪い桃はあっちへ行げ」

といったとさ。

そしたら、いい桃が一つこっちへ流れてきたって。おばあさんは、その桃をうちへ持って行ったと。そして、おじいさんが山から帰ってくるのを待って、割ってみたって。

そしたら、桃の中から男の子が生まれたって。

桃から生まれたので、桃太郎と名づけて、大事に育てたって。

桃太郎は大きくなって力持ちになった。

ある日、桃太郎が、おじいさん、おばあさんに

「鬼ヶ島に鬼退治に行ぎたい」

といった。

おばあさんは、きびだんごをつくって、桃太郎に持たせてやった。

鬼ヶ島へ鬼征伐に出かけると、途中で、犬・猿・きじがおともになった。桃太郎は、鬼ヶ島へ行って、鬼と戦って大勝利をおさめた。鬼からは、金銀珊瑚綾錦の宝物をもらってきた。それを車につけて、犬がひき、猿があとおし、キジがつなをひいてうちへ帰ってきた。

おじいさん、おばあさんは大喜びだって。（上大島）

浦島太郎　（むかしあるところに、浦島太郎という漁師がいた）

ある日、浦島太郎が釣りに行くと、海辺で子供たちが一匹のカメをいじめていた。

浦島太郎はそれを見て、かわいそうだというので、子供におかねをやって、カメを助けてやった。そして、海へ逃がしてやった。

それからしばらくたって、ある日のこと、浦島大郎が海へ魚釣りに行くと、カメがでてきて、

「浦島さん浦島さん、このあいだは命を助けてくれて、ありがとうございました。今日は、竜宮城へ案内しましょう」といった。

浦島太郎は、カメに乗って、竜宮へ行った。

そして、毎日ご馳走してもらい、月日のたつのも忘れてしまっていた。

ある日のこと。

「こんなにやっかいになって申訳ない。わたしは、故郷へ帰ります」

といった。

そしたら、乙姫様が玉手箱をくれた。
浦島太郎が故郷へ帰ってみると、知っている人もいないし、自分の家もない。それで、玉手箱をあけてみたら、白いけむりがでて、浦島太郎は、おじいさんになってしまったって。（上大島）

花咲爺　むかし、むかし、あるところに、おじいさんがいて、犬を飼っていた。
ある日のこと、おじいさんが裏の畑へ芋掘りに行った。そしたら、犬がわんわんとなく。
おじいさんは、犬がないて教えてくれたところを掘ったって。大判、小判がざくざくとでた。
おじいさんは、それをうちへ持ってきて、庭にひろげて干していた。
隣の欲深じいさんがそれを見て、
「これはどうした」という。
「犬をつれて芋掘りに行って、犬がなくのでそこを掘ってみた。そしたらおかねがでてきた。」
その話を聞いた隣の欲深じいさんがきた。
「犬を貸さねえかい」
犬を貸した。
欲深じいさんは、裏の畑へ犬をつれて行った。ところが、犬はなかない。
おじいさんがおこって犬をひっぱたいた。そしたらないた。
そこを掘ったら、かわらかけやらせとかけなどががらがらでてきた。
欲深じいさんはおこった。
「このちくしょう」
欲深じいさんは、とうとう犬を殺してしまった。そして、松の根元に、「こやしにすべえ」といって埋けた。
そしたら、松の木がでっかくなった。
いいおじいさんは、犬を殺されて悲しかったけど、しょうがねえ、その松の木を切ってもらっていった。
その木で臼をこせえた。そして、その臼で餅ついた。そしたらまた大判、小判がでてきた。
「こりゃ大変だ」
いいおじいさんは、またその大判小判を庭に干しておいた。
欲深じいさんがそれ見て、
「どうしたんだ」
という。
いいおじいさんは、
「あの松の木で臼こしらえて、餅ついたら出てきたんだ」
といった。
欲深じいさんは、
「その臼貸せ」
という。
欲深じいさんは臼を借りて行って餅をついた。ところが何も出ない。そのうちに、ヘビだの、カエルだのが出てきた。
欲深じいさんはおこって、その臼をぶっかいて燃してしまった。
いいおじいさんは、いくらたっても隣のじいさんが臼を返してくれない。
隣へ催促に行った。
そしたら、欲深じいさんは、
「あんな臼はつんもした」
という。
いいおじいさんは、臼を燃した灰をもらってきた。

殿様がお通りになるというので、いいおじいさんは、木にのぼっていたって。
そしたら、殿様の行列が、
「下に、下に」
とやってきた。
そして、木の上にいるいいおじいさんを見付けて、
「そこにいるのは何者か」
「日本一の花咲じじい、枯れ木に花を咲かせてみせます」
「ひとつ咲かせてみよ」
いいおじいさんは、灰を枯れ木に
「花咲け」
といって灰をまいた。
そしたら、たちまち花が咲いた。
いいおじいさんは、殿様からたくさんのほうびをもらってきた。
それを聞いた欲深じいさん、おれもやってみるというので、
「灰よこせ」
って灰をもって、いいおじいさんと同じように、木の上にのぼって、殿様の行列を待っていた。
じいさんが木の上にのぼっていると、殿様の行列がやってきた。木の上のじいさんを見付けて、
「そこにいるのは、なにもんだ」
「日本一の花咲爺、枯れ木に花を咲かせてみせます」
「ひとつ咲かせてみよ」
欲深じいさんが、
「花咲け」
と、灰をまくと、殿様の目に灰がはいった。
欲深じいさんは、ほうびをもらうどころか、とうとう牢屋に入れられてしまったって。（上大島）

鶴の恩返し　むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいた。
おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんはうちで機織りをしていた。
ある日のこと、雪の多い日、おじいさんが山へ行ってくるとき、ばかに、ひいひい、鳥のなき声がする。みると、ぶっちめにツルがひっかかっていた。
おじいさんは、
「おまえは、こんなもんにひっかかってかわいそうに。二度と、こういうところにひっかかんな」
といって、放してやった。
それからいく日かたって、大雪の降る晩、
「一晩やっかいになりたい」
といってきた者があった。
なにもんがきたかわからない。おじいさんがそおっと、外をのぞいてみた。
そこには、娘さんが立っていた。
「よりな、よりな」
といってその娘さんを寄せた。
おじいさんとおばあさんは、いろりばたで、おかゆを煮ていた。
その娘さんは、一晩、二晩と、おばあさんの仕事を手伝って、うちへ帰らない。
おばあさんは
「いつまでいてもいいよ。ほかに遠慮はいらないよ」
といった。

いくにちかたって、娘さんは、機織りがしたいという。
「あんたは機(はた)が織れるんか」
「織れます。道具がありますか」
おばあさんは、物置からごみだらけの機織り道具をひっぱりだしてきて、掃除した。
娘さんは、おばあさんに、
「わたしは機織りをするけど、機を織っているところを決してみないでください」
といった。
そしてカランコンバッタン、カランコンバッタンと機(はた)を織っていた。
その反物をおじいさんが町へ持って行ったら
「こんないいもん」
と注文をうけた。
いく度も町へ持って行って売ってきた。
そしたら、娘さんがどうもつかれた様子。顔色が悪くなった。
おばあさんが、
「すこし休んだほうがいいよ」
というと
「わたしはどうにもしないから、心配しないでください」
という。
ある日のこと、おばあさんが、娘さんの機織りしている部屋の障子をすこしあけてみた。
そうしたら、はたし（機織り機）に、つるがのって、機を織っていた。つるが、口で白い毛（羽根）を抜いては機を織っていたって。
娘さんは、
「見られたんじゃ仕方ありません、わたしはぶっちめにあっていて、おじいさんに助けられたつるです。これでおわかれです」
といって、鳥になって、かえって行ったって。（上大島）

猿聟のはなし　むかし、山のふもとに老人夫婦がいて、娘が三人いたって。
春だから、ほしいもんがあれば、娘さんをくれたいんだが、山の奥だもんだから、なかなかもらいてがなかったって。
そうしたら、そのうちに、おじいさんは、ごぼうだのにんじんだの山際だからいいのができて、掘っておかなければ、あおさんたってしまうから掘りに行ったって。
それだけれども、おじいさんは、（年をとって）力がないからうまく掘れねえんだって。
そうしたら、猿が、木の高くのほうで、なにか木の実をとっていたって。
おじいさんは、ごぼうを抜こうとしたら、ごぼうが抜けないで、自分がひっくりけえってしまったって。
そんなんで、猿がとんできて、
「おじいさんなにする」
「みるとおり、ごぼう抜こうと思ったら、ごぼうに負けて、自分でひっくりけえってしまった」
って。
それで、
「ごぼう抜くことができねえ」
っていったら、猿が
「手伝ってくれる」
という。
「手伝ってくんない」

っていったら、親猿だもんだから、ぐんぐん抜いてしまう。
それで、おじいさんに、おじいさんがほうびやるっていったもんだから
「おじいさん、ほうびになにくれる」
って。
「おじいさんとこには娘さんがいくたりもいるから、娘さんを一人ほしい」
って。
おじいさんは、じょうだんだと思ったから、
「ああ、いいよ」
っていった、おじいさんはうそをいうのが大きれいだもんだから、そういってしまったので、「ああよわった」と思った。
だけど、猿はごぼう抜いてくれた。なんでも好きなものをやるといった。
おじいさんは、ごぼうをうちへ持ってきて、いつもほがらかないいおじいさんだったんだけれども、うちへきて炉端へ坐ったきり娘さんが、「お茶だよ」っても飲まないし、口きかない。いつもはほがらかなおじいさんが、ちっとも口をきかないから娘さんが、
「おじいさん、どうかしてるんじゃねえかい。おなかでも痛いんかい。」
「なに、痛かねえ」
っていっても、お茶やっても、なにやっても、飲みも、食べもしないで、ただだまって考えている。
それで、娘さんが、どうしたと思った。
おじいさんは、人にはうそをいったことのねえ人なんだから、できることなら、口からいうのがやなことが、どうせあるにちげえねえ、どこもわるくねえ、気がすぐれねえんだからと、娘さんが
「おじいさん話してくれ。できるだけのことは聞くから」
って。
それで、おじいさんは仕方ねえ、やっといったんだって。
「こういうわけで、(猿に)ごぼう抜いてもらった。猿に、『三伝ってくれればほうびやる』っていった。そしたら、猿が『ほうびに何くれるんだい』っていった。『娘やる』っていった」
って。
それで、一番大きい娘さんに
「おまえはどうだ」
って。
「いや。やなこと、やなこと、猿の嫁になんかやなことだ」
って。
それから二番目のがに、
「おまえはどうだ」
っていったら、
「やなこと、なおやだよ、猿のところへ嫁に行くんなら死んだほうがいい」
って。またことわられた。
こりゃ困った。猿にだってうそをいえば悪い。おじいさんは弱ったと思った。
こんだ三番目だから一番若い。その娘に聞いた。そしたら、
「おじいさんは人にうそついたことがない。うそをいうのが大きらいなんだから、わたしがいきます」
って。
そうしたら、おじいさんも、おばあさんも泣くようだった。なみだ

こぼしながら、かわいそうで、
三日たったら猿が、
「お約束どおり、嫁さんもらいに来たから。何か用意ができたでしょうか」
って。
おじいさんは覚悟していたから、
「あげますよ、おまちしていました」
っていった。
おじいさん、おばあさんは、嫁入り道具として、『はなかんざしでも、きもんでも、帯でも、はきものでも、なんでも好きなものを買ってやる』っていった。
そうしたら、娘は
「なんにもいりません」
って。
「それじゃなにがほしいんか」
「米がほしい」
って。
その次は、
「石臼と杵がほしい、米がほしい」
って。
それで、大きい袋に米をいっぱいつめた。
そしたら、そこへ婿さんが、
「約束どおりもらいに来ました」
ってきた。
石臼だの杵だの米だのみんな出した。
そうした、婿さんだから、米の袋をしょって、その上に石臼と杵をおいて、嫁さんに
「あとからついておいで」
っうんで、でかけたと。
おじいさんとおばあさんは涙ぐんで、娘が「帰ってくればいい」と思って、見送ったと。
娘は、あとをふりかえり、ふりかえり、婿さんのあとについて行ったと。
そうしたら、山道だから、細い、ふらふらするような、深い谷のあいだの細い道を通って行ぐんだから、娘さんは婿さんのあとをやっとつづいて行ったって。
そうしたら、春のことだから、山桜のいい花が咲いているんだって。
そうで、立ちどまって、娘は花を見ていた。
婿さんは、
「花がほしいんか」
って。
「花がほしいよ。こんな立派な花があるから」
って。
猿は木のぼりがお得意
「じゃとってやる」
って、猿は臼をおろさないで木へあがって行った。
猿が、
「この枝がいいか」
というと、娘さんは
「もっと上の枝がいい」
という。
「この枝がいいか」

「もっと上の枝がいい」
「この枝がいいか」
「もっと上の枝がいい」
って、
猿は、一番あぶないようなところへ手をかけた。
そしたら、枝が折れて、川へぼちゃんとおちた。猿は、臼をしょったまんまだから、体がくるりとまわって、川へ流れて行ったって。
娘さんは無事に家へ帰ってきた。
おじいさん、おばあさんは大喜び。
一番下の娘さんが親孝行できたって。（上大島）

松竹梅のはなし　むかし、むかし、すこし気のむずかしいおばあさんがあったって。
嫁さんをもらっても、つとまる人がいねえ。八人も九人も十人も嫁さんもらって、つとまる人がいねえ。みんなでてしまう。つとまらねえ。
そしたら、ある一人の娘が、「どんなおしゅうとさまだがなしんねえけど、そういうところへわたしが行ってみようか」って。
親は大反対。
「そんな、いく人嫁さんもらっている人がいねえ。そこへ行ったって、つとまりっこないんだから、行ったってだめだ」
って、両親が反対する。
「おめえは、おしきって行ぐんなら、行ってもいいから、よくなくっても、家へもどってきちゃだめだ」
って。
それで、たんすの中へ刀一本入れてやったんだって。
「これ入れてやるから、もしつとまらなかったら、覚悟して行げ」
って、
それだから、いくら悪いったって、家へは帰ってこられねえ。
そしたら、行ってみると、いく人ももらって、でたあとだから、案外むずかしくねえ、行ぎたてだからわかんねえ。
一月くらいのうちは、ちっとも気むずかしいことはねえ。
「こんなくれえでつとまんねえんじゃ、わがんまがすぎる」と思っていたって。
そうしたら、だんだん、月日のかさなるうちに、どうもあらがだんだんにひろわれてくる。あらひろわれる。それではあ、しまいには、自分でもはあつとまらねえからひまいただきてえって、旦那さんにはなしたって、
「わたしも、ここにやっかいになっていようと思ったけど、どうもつとまりそうもねえから、ひまをもらいてえ」
っていったら、旦那さんが
「ひまもらっておまえは、家へかえることはできねえし、どうする」
「そのときには覚悟があるから」
「覚悟があるんなら、ここで覚悟してろ。いざこざがないように、おばあさんをかたづけるから、北海道にも九州にも、わしの兄弟がいる。そこへ、船に乗せてお客にやる。そこで、一週間でも十日でもお客させてもらって、船に乗せて送りだしてもらう、そのとき、かたづけてもらう。」
といったって。
そしたら、嫁さんが
「そんなことはやめてくれ。あんな物わかりのいい人はねえんだから、もういい。大丈夫だ」
って、

それで、いい嫁さんになって、いざこざがなくなったって。
松は旦那さんで、一年中たっても色はかわんねえで、青々している。
竹はおしゅうとさん、すこし風が吹いてもかさがさなる。
梅は嫁さん。寒中しのいでいて、花を咲かせ、実をむすばせるのが嫁さんの役目。
松竹梅のはなし。（上大島）

ヨコのあてっつぎ　今はコンクリートで立派な橋ができているが、むかしは、杭をぶって、川普請をして、堰をつくった。水の多いときには、堰がとまらねえ。
それで、その堰を仕上げるのには、どうしても、誰か人柱にならなければならなかった。むかしはそういう迷信のことをいった。
で、誰か一人、人柱になれば、完全に水がとまるという。誰だって、そんな人柱になりてえ人はねえ。
それじゃ、誰かなってもらわなければ困る。
「こういうことにしょう、あてっつぎをみて、横にあてっつぎがしてある人があったら、その人が人柱になることにしょう。それではどうか」
という案をだした。
案をだした人は、名主がなにかの人、そのムラではえらい人だった。
みんなの着物をしらべた。そうしたら、そういう案をだした名主様が、よこあての着物を着ていた。それで、その人がとうとう人柱になったんだって。
名主様の娘さんが嫁に行った。
ところが、何をいっても一言も口をきかねえ。
「これじゃしょうがねえから離縁すべえ」
というので、もらった嫁御を途中まで送ってきた。
そしたら、山でキジが鳴いていたん。
キジの鳴き声を聞いて、嫁がそこで歌をつくったって。
「口ゆえに、おやはながれの堰柱、キジもなかずば、よもやうたれまい」
そういって歌をつくった。
その人は馬鹿でもなんでもない、親がそういう目にあったんで口をきかなかったんだと。
それでまた、わかって、離縁が解消になって、嫁ぎ先にもどったって。

老捨山　むかしは、六十になると、姥捨山に捨てたという。
あるところに、親子がいて、息子がおばあさんをおぶって姥捨山へつれて行ったって。
そしたらおばあさんがおんぶされて行ぎながら、木をおっかいていった。
「なにしてるんだ」
と息子が聞いたら、
「それをたよって行けばうちへもどれる」
といった。
息子は、おばあさんを姥捨山へ捨てることができないでうちへつれもどしてかくしておいたって。
そしたら、中国からなぞを出してきた。
第一番目が、灰で縄をなってよこせというわけ。
誰もわからない。
年をとったおばあさんをかくしておいたせがれが、おばあちゃんに聞いてみた。
「どうしたらよかんべえ」

「縄をなって適当に尺に切って、それを焼いて、縄の灰をそっくり、くずれないように渡したらよかんべ」
おばあさんのいうとおりにして、灰の縄をつくってお上に差しだしたって。
つぎに、長い棒で、きれいにけずってあって漆(うるし)がぬってあるんだって。これを、どっちがうらかもとかを知らせてよこせという問題だった。
これもわからない。おばあさんに聞いてみた。
そしたら、
「その木をそっと水の中に入れてみろ。かならずもとの方がいくらか沈む。うらが浮く。それでしるしをつけてもっていげ」
これも、教わったとおりにお上へ差しだしたって。
その次に、同じ大きさの、毛色の同じ馬を二匹よこして、どっちが親で、どっちが子かを知らせろという問題がでた。
それもわからないので、おばあさんに聞いてみた。
おばあさんのいうには、
「親は遠慮して、子にさんざ食わせてから食うもんだ。先に食ったほうが子だ」
と。
こうして、三つのなぞをといたわけだ。
そしたら、おばあさんに教わったということがわかって、年寄は大切にしなくちゃなんねえということになったって。(女屋)

むかしは、年がくると、年寄りを姥捨山へやらなければならなかった。
あるところに、親子がいて、息子がおばあさんを、わかれを告げて姥捨山へ背負って行ったって。そしたら、おばあさんが、山へ行く途中もみがらをまいていった。
せがれが、どういうわけだと聞いたら、そのからをたよりにうちへ帰って行けという。道にしるしをつけてきたといった。
それでおばあさんを(捨てるのは申訳ないというので)うちへ背負って帰って、かくしておいた。
そしたら、殿様から
「灰で縄をなってこい」
という命令がでた。
誰にもわからない。
それで、おばあさんに聞いた。
「きわらで縄をなって、燃して、そのままとって、三方にあげて出せ」
と教えてくれた。
おばあさんに教わったとおりにして灰の縄を殿様のところへ出した。
そしたら、これは誰に聞いたという。おばあさんに教わったといったら、殿様は、
「年寄りは大事だ、わからないことは年寄りに聞け」
ということで、それから、年寄りを大事にして姥捨山へすてなくなったという。(野中)

むかしは、六十一歳になると、年寄を姥捨山に捨てたという。
ところが、年寄(おっかさん)がかわいそうで、どうしても捨てられないでいた息子がいたって。
その息子は、おっかさんを捨てるのがかわいそうで、部屋ずまいさ

せていたって。
　そしたら、あるとき、殿様から、
「灰で縄なって来お」
というおふれがでた。
ところが、どうしても灰が縄にならない。
そこで、おっかさんに聞いた。
そしたら、おっかさんが
「わらをよくはたいて、麻のようにしてそれを縄になって燃せ。そうすれば灰の縄ができる。それをお盆の上にのせてもっていげ」
って教えてくれた。
そのとおりにして、せがれは殿様のところへもって行って献上した。
これは、誰もできなかったこと。
それで、殿様は、
「これは、おまえの智恵じゃなかろう。誰におそわったのか」
と聞いた。
「実は、母親に聞きました。そのことお殿様には申訳ないが、母親を山に捨てなければならなかったんですが、かわいそうで捨てられずに、部屋ずまいにしておきました。その母親から聞きました」
それから、年寄は大事だからというので、年寄を姥捨山に捨てなくなったって。（天川大島）

むかしは、七十歳になると山へ捨てたって。
あるとき、お殿様が（七十の年寄は山へ捨てるようにという）立札を国中に立てたと。
あるムラに吾作という人がいた。おっかさんにこれまで大事に育ってもらったが、ちょうど七十になったが、もったいない、親を捨てるわけにはいかない。かくすべえと思ったが、山へ捨てることにした。十五夜の晩に、月のあかりをたよりに、山へつれて行くというのでおぶって行った。
そうすると、おっかさんが、何か折る音がする。
「おっかさん、あぶないよ、しっかりつかまっていなけりゃあぶないよ」
といったら、おっかさんは、
「大丈夫だよ、月のあかりであかるいから」
といって、木の枝を折っちゃ、道におとして行った。吾作が帰るときのしるしだという。
　おっかさんは草をあつめて、そこへ寝た。
「足が痛いだろう」
というと、
「痛くない。やわらかでいい、楽だよ」
という。
吾作は、
「帰るから、明日食べ物を用意して持ってくるよ」
吾作はうちへ帰っても、外べえながめている。寝ることもできない。
十五夜のあかりで、むこうの方があかるい。
「おっかさん、おっかさん」
と、山の方をむいて呼んだ。
そして、どうしておっかさんをあんなところへおいてきた。と思って、おっかさんを背負ってくるって、山へ行って、おっかさんを背負ってきた。
そして、こんどは、地下室をこしらえた。
吾作は山へ行って、

「おっかさん、今日は帰るんだよ」
「いいよ、ここにいたって大丈夫だよ。心配しなくもいいよ」
「心配しねえじゃいられねえから、今日はどうしてもつれて行くよ、ムラの人にも地下室は誰にも知んねえようにこしらえたんだから」
って、
みつかればそれこそ、役人にとっつかまってしまう。
そうれで、おっかさんをうちへつれてきて、地下室へは、なにかはこんで食べさせていたって。
そうしたら、そのうちにお殿様は、無理なことをいってきた。できるか、できねえかしんねえ。「灰が縄なって出せ」と、つかいのものにいいつけてよこしたって。
灰で縄をなうなんてわからない。やっぱり年寄に聞いたら、
「(おっかさん) そんなのわきゃあねえよ」
といって、おっかさんが教えてくれたんだと。
「わらのげえ、塩一杯ぬりこんで、なわなって燃す。そうすると形が残るんだ」
と。
おっかさんが教えて、お殿様の使いのものにやった。
そうしたら
「これはえらい」
って。
そうして、またむずかしいことを手紙でよこすんだと。
こんどはなんだと思ったら、
「まるいもののげえ糸をとおせ」
って。
それは、こっちの穴とあっちの穴と、あっちこっちになっている。
どうしてそれに糸がとおせるって、みんなぶいぶいしていた。
また、おっかさんに話した。
そうしたら、
「アリの足に糸をしばって、穴のさきっかたへみつをぬっておけ」
って。そうすると、あまい匂いがするから、そこへアリがはっていく。
これも、お殿様のところへ持って行った。
そうしたらまた、
「おまえはえらい」
って。
また、むずかしいことをいった。
こんどは、
「たたかなくっても鳴る太鼓をつくってこい」
ということだった。
またわからないので、おっかさんに聞いたと。
そしたら、おっかさんは、
「太鼓をはる前に、中にハチを入れろ、そうすると、ハチが外へ出たくってあばれるから、たたかなくっても鳴る太鼓ができる」
って、
そのとおりにして、太鼓をつくって、お殿様のところへもって行った。
そうしたら、しまいに、お殿様が、吾作にむかって、
「おまえは、この国で一番えらいから、なんでもほうびをやる。なにがいいかいってみろ」
って。
吾作は、

「わたしは命が一つほしい」
といった。
「おっかさんの命がほしい」
って。
「(七十になっても捨てないで、うちへかくしておいた)おっかさんがいろいろ教えてくれたんで、これだけできました」
って、正直にいったって。
吾作は、
「親の命が一つほしい」
といったって。
そうしたら、お殿様は、吾作のいうとおりにして、それからは、年寄を粗末にしなくなって、立札などをよして、姥捨山がなくなったって。(上大島)

むかし、あるところにおばあさんのいる家族があった。
おばあさんが年をとって、働けなくなって姥捨山に捨てなければならなかったが、捨てないで、うちへかくしておいたって。
そして、息子は、箱にご飯をつめて、おばあさんのところへはこんで食べさせていたって。
そしたら、ある日、孫が箱をつくっていた。
息子が、
「おまえなにしてんだ」
と聞いた。
孫がこういったと、
「おとっつあんが年をとったら、この箱に飯をつめてはこんでやろうと思ってんだ」
息子は、そのことばを聞いて、たまげて、おっかさんをかくしておいたところから出してきて、みんなの見えるところで、ご飯をくれるようにしたと。
あるとき、殿様からふれがまわって、
「灰の縄をなって出せ」
という。
ところが、灰の縄など、なえっこない。
そしたら、灰の縄のつくり方をおばあさんが教えてくれた。
縄をなって、それを燃して、そおっと出せばよいと、おばあさんが教えてくれた。
そのとおりにして、灰の縄をつくって、殿様のところへもって行ったって。
そしたら、こんどは、殿様から、
「筒の中のまがった穴にひもをとおせ」
というおふれがまわった。
これもわからない。
またおばあさんに聞いてみた。
むこうの穴のところにあめえもんをおけ。
アリンゴの足にいとをしばりつけて、こっちの穴からくぐらせてやれ、という。
そうしたら、アリンゴが糸をひいて、穴をくぐって、細長いまがった穴に糸がとおせたって。
そのようにして、殿様のところへもっていった。
そしたら、殿様が、
「どうして、このことができたのか」
と聞いた。

「姥捨山に捨てなければならないおばあさんがいるんだけど、山へ捨てないでうちへかくしておきました。そのおばあさんに聞きました」
それを聞いた殿様は、年寄には知恵があるというので、それからは年寄を大事にするようにというふれをまわして、姥捨山に捨てなくもすむようになったという。（上増田）

むかしは、六十歳になると、年寄りを山へ捨てたという。
ところが、あるところに、（親孝行の息子がいて）おばあさんを捨てきれずに、殿様のところへ申し出た。
「なんとか助かる方法はありませんか」
っていったら、
「おまえの頭で、なにか特別のものができたら、これからは、年寄りを大事にしてやる」
って。
それで、家へ行って、おふくろに相談してんべえ。助かるもんなら助けてもらおうというので、殿様に
「なにをしたらいいんでしょう」
と聞いたら、殿様が、
「灰で縄なってこお」
っていった。そのことをおばあさんに話すと、
「そんなことは簡単だ」
という。
「縄を燃して、そっくり、なにかの上へあげてもっていげ」
って。
それで、息子は、
「殿様、灰で縄なって来ました」
って、持って行ったら、殿様が、
「まいった」
っていって、それからは、姥捨山がなくなったんだって。（笊井）

三枚のお札　むかし、ある山寺に、和尚さんと小僧さんと二人で住んでいたって。
ある日のこと、小僧さんが山へクリ拾いに行ぎたいといった。和尚さんは、山はあぶないから、やめた方がいいよといったけど、それでも行ぎたいというので和尚さんは、
「三枚のお札があるから、（あぶない目にあったら）これに助けてもらうように、この三枚のお札をやる」
って。
小僧さんは、三枚のお札をふところに入れて、大事にして、でかけた。
山へ行くと、やさしげなおばあさんがあらわれた。
「小僧さん、どこへ行きます」
っていうから、小僧さんは、
「わたしは、山へクリ拾いに行ぎたいんです」
っていった。
するとおばあさんは、
「クリならうちにたくさんあるから、いっぱいやる。うちへおいで」
っていった。
それから、小僧さんは、おばあさんの後について行った。そしたら、どんどん山奥へ行っちゃった。
そこに一軒家があって、おばあさんはそこへ入った。
そこでクリをたくさんだしてくれた。
「食べろ、食べろ」

というので、小僧さんはクリを腹一杯食べたって。そしたら、眠くなっちゃって眠ったら夢をみた。こわい夢だった。
目が覚めると、もう夜になっていた。
和尚さんに、鬼婆がいるといわれたがここにいると、食われてしまう、小僧さんはそう思うとこわくなった。ここにいるのがいやになった。小僧さんは考えて
「おばあさん、わたしはお便所へ行ぎたくなったんで、行がせてください」
といったら、おばあさんが、
「行ぎなさい。だけど、逃げちゃあだめだよ」
といって、小僧さんの腰に縄をゆいつけて便所へやった。
小僧さんは、便所にはいられねえ、早くこのばあさんのところから逃げ出そうと思った。
小僧さんは、便所の柱に一枚のお札をはった。
おばあさんが、
「まだか、まだか」
というと、お札が
「まだだよ、まだだよ」
といった。
おばあさんは（知らないで）お札とはなしをしていた。
小僧さんは、その前に便所の窓をあけて、そこからとびだして逃げていた。
おばあさんは、あんまり時間がかかる。
いくら呼んでも、まだだよ、まだだよといっている。それで、便所の戸をあけてみた。小僧さんはいねえ。逃げちまった。便所の中はからんぽ。

おばあさんは、これじゃしょうねえと思って、すぐに追いかけた。どんどん、どんどん追いかけて行った。小僧さんに近寄って行った。
小僧さんは、お札を一枚だした。
「山出ろ」
っていって、お札をうしろへほんなげた。
そうしたら、じゃり山が出た。
おばあさんがその山へのぼると、のぼってもくずれ、のぼってもくずれ、あがることが容易にできねえ。
小僧さんは、この間に逃げなくちゃあなんねえと、一生懸命に逃げた。おばあさんも一生懸命だ。逃がしちゃなんねえと、一生懸命追いかけた。
そうしたら、たちまち追いつきそうになった。そうで、このおっかねえおばあさんにまたつかまりそうになった。
これじゃ困ると思って、小僧さんはまだお札が一枚あったから、こんどは、
「大川出ろ」
って、お札をうしろへほんなげた。そしたら川が出た。
おばあさんがぼちゃんと川へとびこんで泳いできた。この間に逃げなくちゃなんねえと思って、小僧さんは、一生懸命逃げたら、やっと山寺へ着いた。
「和尚さん、和尚さん、いま山のこわいばあさんに追いかけられてるんだから助けてくれ。」
和尚さんは
「わしがあぶないから山へ行くなといっただろう。そのとおりだ」
という。
「どうか早く助けてください」

そうしているうちにばあさんが追ってきた。
和尚さんは（本堂に）つづらがあったので、そん中へ小僧さんをかくした。
和尚さんは、そんとき餅をやいていたが、ばあさんがきて、
「今、小僧がここへ逃げてきたわけだ。どこにいる」
つう。
和尚さんは、
「小僧なんか来ねえ」
という。
しかし、つづらがあるんでばあさんは、
「そのつづらの中にいるだんべ、つづらをあけてみろ」
という。
そうしたら、和尚さんが、
「あんたがわしのいうことを聞けばあけてみせる」
というと、ばあさんは、
「いうことをきく」
というわけ。
和尚さんが、
「大きくなれ、大きくなれ」
といったら、ばあさんいうことを聞いて大きくなったって。
それで、こんどは、和尚さんは、
「小さくなあれ、小さくなあれ」
といったら、豆っつぶのように小さくなったって。
和尚さんは、すぐに餅の中へくるんだ。
そうして、それを、小僧さんに食べさせたって。
これでおしまい。（上大島）

むかし、むかしあるところに、山寺の和尚さんと小僧さんがいたと。
ある日、小僧さんが山へクリ拾いに行きたいといったら、和尚さんが、
「あぶないからやめろ」
という。
それでも小僧さんが行ぎたいといったら、
「この三枚のお札をやる」
といって、あぶないときにはこれを投げろといった。
小僧さんは三枚のお札をふところに入れて山へ行ったと。
そうしたら、山にやさしげなおばあさんがでてきて、
「小僧さん、どこへ行く」
といった。
「山へクリ拾いに行きます」
といったら、そのおばあさんは、
「クリならうちにたくさんあるからうちにおいで」
といった。
小僧さんはおばあさんのあとについて行った。
山の一軒家があって、そこへいって、小僧さんに、クリを腹一杯いただいた。
そしたら、眠くなって眠ってしまった。
夜中にこわい夢をみた。目がさめた。
ここのうちには、鬼ばばあがいてこわい。ここにいると食われてしまう。
（小僧さんは逃げだそうと思った。）
「便所へ行ぎてえ」

といった。
そしたら、おばあさんに、小僧さんが逃げてはいけないと思って、小僧さんに縄をつけて、便所へ行って来いといった。
ところが、いつまでたっても小僧さんは帰ってこない。
小僧さんは、早く逃げようと思って、和尚さんにもらったお札を便所の柱にゆいつけて窓から逃げた。
おばあさんが、
「まだか、まだか」
というと、
「まだだ、まだだ」
という。
いくら呼んでも、「まだだ、まだだ」
という。
柱にゆいつけたお札がしゃべっていたわけだ。
あんまり時間がかかるので、おばあさんが便所をのぞってみた。
そしたら、便所の中はからんぽ。
おばあさんは、小僧逃げたなと、小僧をどんどん追いかけて行った。
小僧に近寄ったら、小僧さんは、またお札を出して、
「山出ろ」
って、お札をうしろへぽんと投げた。
すると、たちまち高い山がでた。
おばあさんは、その山をのぼりはじめた。ぐずぐずとおちてしまう。
やっとのことでじゃり山を越えた。
そして、また、どんどん追っかけてくる。
また追いつきそうになった。
小僧さんは、また一枚のお札をうしろへ投げた。
「大川でえろ」
すると、うしろに大川がでた。
おばあさんは、川へじゃぶんととびこんだ。泳いで川から出て（ぽしゃん）追いかけてきた。
小僧さんはそれを見て、このまま逃げないとおばあさんにつかまってしまう。
一生懸命、山寺へ逃げこんだ。
「いま、山のこわいばばにつかまりそうです。助けてください」
和尚さんに、小僧さんをつづらの中へかくした。
そこへ、おばあさんがきた。
「今、ここへ小僧がきたはずだ」
「小僧なんか来ない」
「いや、来たはずだ。そのつづらをあけてみろ」
「わたしのいうことを聞けばあけてやる」
和尚さんは、ちょうどそのとき餅をやいていた。
和尚さんはおばあさんに、
「大きくなれ、大きくなれ」
といった。
おばあさんは、どんどん大きくなった。
こんどは、
「小さくなれ、小さくなれ」
といった、そしたら、おばあさんは、豆つぶのように小さくなった。
和尚さんは、おばあさんを餅の中にくるんで食べたって。
それで、おしまい。（上大島）

徳兵衛さんのかもとり　上大島で、線路（汽車道）の下（した）にごし沼がある。ヨシだのカヤだのいっぱいはえていた。沼にはドジョウがいっ

ぱいた。
そうしたら、（上大島）の徳兵衛さんという人が、ふくべ（かんぴょうのから）をえぐって、それをかぶって、まっぱだかになって、ふんどし一つで、縄帯しめて、それで、沼の中にひそんでいた。
そうするとカモがくる。
ドジョウとりたくて、カモがいっぱいくる。カモがふくべにとまる。それをとってねじっちゃ腰にさす。
またとんできてとまると、とって、ねじって腰にさす。
そうしたら、カモも死にきったのもあるし、死なねえのもある。それが動きだした。
徳兵衛さんは、折角こんなにとって、逃げられちゃあと思って、沼のはたに生えているボヤにつかまって（沼から）あがろうと思った。
そしたら、とてもしっかりしていると思ったら、それがムジナのしっぽだったって。
ムジナは（つかまっちゃあなんねえつうんで）逃げようと後足で地面をかっぱじいた。
そうしたら、山芋を掘りだした。山芋が二貫匁もでたと。
うちへ帰って、ふんどしがしょうたれになっている。
「新しいふんどしかしてくれやあ」
っていった。
おばあさんがしたのでもってきて、「あと」といった。
ふんどしとってみたら、中にドジョウが一貫匁も入っていたって。
（徳兵衛さんは、カモとりに行って、カモとったり、ムジナとったり、山芋とったり、ドジョウとったりしたって）
それから徳兵衛さんは、柄杓を桶屋にたのんでおいた。
「柄杓とりに行ってくらあ」
って出かけた。
桶屋さんから柄杓をかついできた。
途中で、柄杓の先が松の木にひっかかった。それを徳兵衛さんは、お天狗さんにとっつかまったと思って、一生懸命ひっぱったらとれねえ。
首だけなくって、棒（柄）だけ持ってきた。
徳兵衛さんはうちへ逃げてきて、おばあさんに、
「おばあさん、おばあさん、おらあ、こういうわけで天狗さんにとっつかまって、天狗様に柄杓の頭とられてしまった」
って。
あしたの朝になって、徳兵衛さんは、昨日のところへやってきて、柄杓の首をとってきた。
うちへ帰ってみると、柄杓の中にウサギが二匹入っていたって。
一つは雄ウサギで、一つは雌ウサギだった。それで、腹に子供がいたって。
それだから、逃げることができねえ、その柄杓の首の中に入っていたんだって。
一つの雄は逃げた。
柄杓の頭をもって、うちへ帰ってみたら雌の腹ん中の子が十匹もできたって。
徳兵衛さんはころがったってただおきねえ。
それで、徳をした徳兵衛さんだって。
むかし、子供におじいさんがねどころばなしにしたはなし。（上大島）

かもとり　むかし、あるところに、猟師がいた。
たまたまかもがいるんで、かもとりに行った。
かもをとろうとして、川の中にとびこんだ。

かもをとって川の中から出ようとした。
しかし、つかまり場がなかった。
見ると、なにかあったんでつかまってみた。そしたら、それがウサギだった。
ウサギは、足をつかまえられたんで前足で土をかっぱいた。すると、山芋を掘りだした。
猟師はこうして川から土手へあがった。
ふんどしのあいだからドジョウがでてきた。
この猟師、かもをとりにいって、かものほかに、ウサギをとったり、山芋をとったり、ドジョウをとったりしたって。（駒形）

ある人がかもとりに行った。
池へ入ってかもをとって出ようとした。
土手に木の根っこだと思ってつかまえたらウサギの足だった。
ウサギは足をつかまえられて、土をかっぱいだ。そしたら、とろいもがでてきた。
その人が池からあがったら、ももひきの中に、どじょうがいっぱい入っていたって。
その人は、かもとりに行って、かもをとったり、どじょうをとったり、ウサギをとったり、山芋をとったりしたって。
だから、うまいはなしのことを、かもとりばなしという。（駒形）
池にカモがいた。
ある人が、このカモをとろうとした。
はじめに、すげ笠の古いのがあったので、川上から流してやった。
そしたら、カモがじっとしていたので、今度は、自分ですげ笠をかぶって、水の中に入った。
そして、カモを一つずつひきずりこんでとった。
それから、土手のところからあがろうとして木の根っこにつかまった。それが、ウサギの足だった。
ウサギはうったまげてあばれた。前足で地面をひっかいたので、土手をくずした。
そしたら、山芋をうんとかきだした。
その人は、やっとこさっとこおかへあがることができた。
あがってみたら、ももひきの中に、エビが一杯はいっていたって。
その人は、カモをとりに行って、カモと、ウサギと山芋とエビをとって、うんともうかったというはなし。
どこの人のはなしだかわからない。（野中）

山賊の兄弟　むかし、ある人が山にはぐれて、里へ出られないで日が暮れちゃって、（そこにいた人に）道を聞いたら、
「こっちへ来い。むこうへ行げはうちがあるから、そこへ行って泊めてもらえ」
といって、親切に教えておいて、それが山賊のかくれがだった。
そこへやった。
その山賊のおかみさんも、強制的におかみさんにされた人だった。
山で留守居をしていたんだって。その人が、その旅の人をかわいそうがって、かくしたって。
その旅の人は、江戸で働いてかねをもって帰る、その途中だった。
越後の方の人だった。
そしたら、山賊が帰ってきて、
「たしかに男が来たはずだ、どこへやった」
って、おかみさんを責めたって。
おかみさんがすぐに殺されそうなんで、かくねていたんだけど出て、

おかみさんを助けようとした。
「ありがねを全部やるからかんべんしてくれ」
って。働いてためたかねを全部やってしまう。
それで、おかみさんを助けたって。
これからうちまで行ぐには時間がかかる。
はらがへるから弁当食うのに、いくらかぜにがほしいといった。
みんなやっちまっては困る。
「古い刀でもあったら一つくれてくれ」
って。
そうすれば、その刀を売って弁当代にするって。
そしたら、人を殺しちゃあ（刀を）とってあるから、刀がいっぱいしまってある。
それを、束になっているのをほうりだして、
「好きのんをもってげ」
って、
そのうちから、いっしょうけんめい拾いだして、いい刀だと思ってもって行った。
それを売ったら、とてもいい刀なんで、そこでとられたぜにより余計になったって。
そしたら、その人、
「これはあまりだ」
といって、かねを山賊のところへ届けにきたって。
そしたら、山賊もあきれてしまったって、
「一体、おまえはどこの生まれだ」
とよく聞いた。
そしたら、何村といった。

よくよく話を聞いたら、それが自分の弟だって。
兄は七歳のとき、なにか悪いことをして親に叱言をいわれたら、こんなところにはいないというんで、七つでもって出かけた。
それから泥棒になったって。
それで、山賊の親方をしてたわけだ。
そこへ弟がでっくわっしたって、
それで、あにいが改心したって。（女屋）

キツネ退治　むかし、あるお寺に和尚さんと小僧さんがいた。
和尚さんは檀家へ供養に行くと、いろいろのものをもらってくる。
しかし、帰りに、もらったものをみんな、キツネにまきあげられてしまう。
小僧さんは、それがくやしくってたまらない、なんとかキツネをこらしめてくれべえと思っていたって。
（ところが、なかなかキツネも利口、やっつけることができねえでいた。）
あるとき、和尚さんが山むこうのムラへ供養にでかけた。
小僧さんは、
「今日はキツネのやつをやつけてやる」
って、袋の中にあぶらげなどをいれてでかけた。
キツネはいつものとおり待っていた。
小僧さんがきたので、和尚さんに化けて、小僧さんのところへ寄ってきた。
「ご苦労」
といった。
「おまえ早くきたな」
二人ははなしながら帰ってきた。

「和尚さん、弁当をこしらえてきました」
「じゃ、その弁当をだしなさい」
小僧さんは袋の口をひろげた。
すると、キツネの和尚さんが、袋の中に入った。
小僧さんはいそいで袋の口をとじた。袋の中で、キツネの和尚が、
「どうしてばれたか」
小僧さんはこういったと。
「わたしが提灯をつけてきたら、かげがうつった。それがキツネの影だった。それでわかった」（駒形）

和尚と小僧　むかし、あるところにお寺があって、和尚さんと小僧さんが住んでいたって。
あるとき、檀家からぼたもちをもらった。
和尚さんはそれを小僧さんにくれるのがいやで、
「これには毒が入っているから食っちゃあなんねえ」
といったって。
ところが、小僧さんがぼたもちを食べてしまった。
そして、わざと和尚さんが大事にしているつぼを割った。
申訳ねえから、ぼたもちを食って死のうとした、といった。
そしたら、和尚さんは、それを聞いて反省したって。（筑井）

むかし、あるところに、お寺があって、そこには、和尚さんと小僧さんがいたって。
お彼岸の中日に、お寺の近所の人が和尚さんをたのんで、供養してもらうことになった。
お寺へおはぎをもって、これをご先祖様にあげてくれって、たのみにきたって。
その和尚さんはおはぎが大好き。
和尚さんは、おはぎをご本尊様にあげておひるに来てくれというので出かけたって。
お小僧さんもおはぎが大好き。
そのお小僧さん、和尚さんの留守に、おはぎを食べたくなった。
それで、本尊様の口にあんこをいっぺえたけたり、手をよごしたりした。
一つくらい食ってもわかんねえだんべ、二つくらい食べてもわかんねえだんべと、しまいに、みんな食べてしまったって。
そこへ、和尚さんが帰ってきた。
本尊様をみると口のまわりがよごれている。
お小僧さんは、
「本尊様がおはぎを食べました」
という。
和尚さんは、
「それじゃあ、本尊様にきいてみましょう」
って、むちで本尊様をはたいた。
そうしたら、本尊様はかねでできているから
「くわん、くわん」
っていった。
「本尊様は食わねえっていってるじゃねえか」
「そうかい、それじゃ、こんどは、わたしが聞いてみる」
って、お小僧さんは、大きな釜で湯をわかして、にえたっている中に本尊様をいれたって。
そうしたら、こんどは、
「くった、くった、くった」

っていったって。
「和尚さん、このとおりですよ、本尊様はくったくったといってますよ」
って、これでおしまい。（上大島）

赤城と榛名の神の争い　むかし、赤城の神様と榛名の神様がけんかしたんだとさ。それで、赤城の神様はやけをおこして、一生懸命に石っころをぶつけた。榛名の神様は、やけおこしてバラをうんと赤城へぶんなげたという。
そのために、赤城にはバラがうんとあり、榛名には石がうんとあるのだという。（野中）

赤城の大男　むかし大男がいて、鍋割に腰をかけて、利根川で足を洗ったという。
荒山が赤城山になって、鍋割はその里山という。（天川大島）

（むかし、赤城山に）大男がいて、赤城の鍋割に腰をかけて、古利根川（むかしは利根川が、赤城山の南を流れていたといわれている）で足を洗ったという。
それで、鍋割は上が平らになったのだという。（小島田）

山のつくりっこ　むかし、駿河の人と上州の人が（二人で）山のつくりっくらをした。
ニワトリが鳴くまでに（一晩で）山をつくることになった。
ところが、駿河の人が、上野の人のニワトリを早く鳴かせたという。
それで、上野の人は、山をつくるのを早くやめた。
そのために、駿河の富士山の方が、上野の榛名富士より高いのだという。（女屋）

鬼子母神　鬼子母神には、千人の子供があったという。鬼子母神様はいつも人間の子を食っていた。それで、あるとき、神様が、鬼子母神様の子供を一人かくしてしまった。
そしたら、鬼子母神様は、きちがいのようにさわぎだした。
神様が、鬼子母神様にこういったと。
「おまえは、そんなに子供があっても、一人の子がいなくなったくらいでそんなにさわぐ。今度から、人を助けてやれば、子供を出してやる。」
「絶対、人の子を食べません」
と、約束したので、神様は、子供をかえしてやったという。
それから、鬼子母神様にお願かければ、子供は丈夫に育つという。（笂井）

仏様のお守り　これは、玉村の福島のはなしである。
利根川べりのところ、あるとき大水がでて、川木が流れてきた。
その木を拾いに行った人があった。
そのとき、その人は、ご先祖様にあげたごはんばつ（おはつのご飯）を食べて行った。
いつも、おばあさんから、（川へ行くときには）ご先祖様に無事をおねがいして行けといわれていたって。
その人が利根川へ行ってみた。そのうちに、でっかい丸太が流れてきた。それを拾いあげようと思って、川にとびこもうとした。
そしたら、耳もとで、
「じゃだぞ、じゃだぞ」
という。
それで、その人は、川へ入るのをやめたと。しばらく立って見ていた。また大きい木が流れてきた。とびこんでその木をとろうと思った。
そうしたらまた、耳もとで、

「じゃだぞ、じゃだぞ」
という声がした。
その人は川へとびこむのをやめて、川のはたに立って、川木をじっとながめていたと。
そうしたら、そのうちに、その川木のさきが蛇の頭になりうしろは、蛇のしっぽになった。そして、蛇があたまをぽんとあげたと。
その人は、ご先祖様のおかげで助かったと。ご先祖様はありがたいというはなし。
それだから、よそへでかけるときには、むかしの人は、ごはんばつを食べていげといっていた。（笊井）

迦葉山様のはなし　むかし、ある人が迦葉山へおまいりに行った。おこもりをして、
「今夜は、うちにいればとろ飯が食えたのに、ここへ来たから食えねえ」
といったって。
そしたら、（それを聞いたお小僧さんが）
「それじゃ、しばらく待ってろ」
といって、じきにとろ飯をつくってだしてくれたと。
その人がうちへ帰ってみたら、そのうちのこい（納屋）が燃えていて、畑のとろいもが掘ってあったと。
そのうちのこいを燃して、そのあかりでとろいもを掘って、とろ飯をしてくれたんだと。
うちへ帰ってきて、それがわかったと。
だから、あんまり無理なことはいうもんではないというはなし。
なお、高尾山様と古峰山様と迦葉山様は三兄弟だという。お天狗様である。（笊井）

御嶽山　むかし、ある人が御嶽山へおまいりに行った。そしたら、道がいたんでいた。道を直す人がいた。
たとえ志で、十円でもいいから、おかねを入れてくれという箱がおいてあったと。
そうしたら、それを見た人、この人は、信者でもえらい方の人だったが、その人がこういったと。
「なに、こんなところへは、おかねなんかいれる必要はない」
その人はさっさとそこを通りすぎて行ったと。
すこし行くと、その人は谷底へほうりだされたって。
一緒に行った人が、まわり道して、谷底へおりて、その人をやっと助けてやったって。けがはなかった。神様のことだから、けがはさせなかったと。
その人がむこうへ行って、おまいりしようとしたが、足が動かなかった。うちの方へ足をむけると動いた。その人は、とうとう、御嶽山へおまいりすることができなかったと。（笊井）

笠薬師のはなし　（笠薬師は、笊井の西、下長磯との境のところにまつられている）
むかし、縄入れがあったとき、薬師様の境内だけは縄入れができなかったという。竿に白い蛇がまきついて、縄入れが出来なかったという。
むかし、六部（巡礼）がきて、今の薬師様のところで倒れた。それで、そこへ（薬師様として）まつられたものという。
むかしは、真福寺というお寺があったという。
むかしは、八月十二日がご縁日、今は八月八日がご縁日。
もとは、大きなお堂があった。できもんをなおしてくれるという。
境内のうしろ（北側）に竹やぶがあった。お堂の前には庭があって、

桜が植えてあった。
おまつりのときには店がでた。四月八日には、灯籠がついた。
笠薬師は、筑井分にある。（筑井）

仁王様の由来　むかし、今でいう北朝鮮が高勾麗といったころのはなし。
日本では、金剛力士が力持ちで、（自分は）世界一だと自慢していた。
そして、高勾麗に渡った。
高勾麗には微塵（みじん）という力持ちがいた。
（金剛力と微塵と）どっちが強いかと大勢（の人）の前で相撲をすることになった。
（相撲がはじまった。しかし、金剛力士には）どうにもならねえ。どうしても勝ちたい。
（そこで）金剛力士は真剣に観音様におねがいをした。
「どうか観音様、相撲に勝たせてください、日本へ帰ったらなんでもして、観音様にお仕えいたします」
そしたら（観音様にいただいた）観音力によって、微塵を（地面に）はたきつけることができた。
微塵（の体は）粉々になった。
それで、「木端微塵」というのだという。
（さて、日本へ帰った金剛力士は）約束どおり観音様の門番をひきうけることになった。それで、今でも（夫婦して）観音様の門番をしているんだと。
あるとき、泥棒が入って、観音様を盗んで行こうとした。（観音様を）背中に背負って門のところを通ろうとした。
金剛力士は、「あやしいやつ」というので、（泥棒の）えりもとをもって持ちあげた。
そしたら、泥棒が屁をひった。
金剛力士が
「こりゃ、くせえや」
といったら、泥棒が
「におうか」
といったって。
それで、その後、金剛力士のことを、仁王様というようになったって。（駒形）

スズメとツバクラ　お釈迦様がなくなりそうになったとき、スズメはそのままお見舞に行った。
そしたら、スズメは、お釈迦様に米食っていいといわれた。
ツバメは、さんざお化粧して行って、おそくなった。
それで、ツバメは泥食えといわれたって。（女屋）

お釈迦様がご臨終というので、動物たちがみんな寄りあつまった。
そのとき、あわてて来たのがスズメ。
スズメはみのをぬぐまもなく、いそいで来たので、着物の柄もわるく、足も、ぴょこぴょこ歩くようになった。足を右左交代でだせないのだという。
スズメはいそいで来て、誠意があるというので、米が食えるようになったって。
カラスはおしゃれして行って。お釈迦様のご臨終に間にあわなかったので、着物をまっくろにされたんだって。（天川大島）

お釈迦様がおなくなりになるというとき（動物たちがみんな集ってお見舞にきた）、スズメは、なりふりかまわずに一番はじめにとんで

いった。
それで、人間より先に穀を食っていいということになった。初穂をいただけるのだという。
ところが、ツバメは最後に、お化粧してきたので、虫でもとって食えということになったという。（野中）

動物たちの食べ物　むかし、世間中の動物たちをお釈迦様が呼んだ。そしたら、ツバメはあんまりしゃれて行ったので、いい食べ物を与えられなかった。それで泥をくわえてきて巣をつくるという。
スズメは（着のみ着のまま行ったので）穀を食えといわれた。
カエルはお百姓さんのじゃまをしねえように作物につく虫を拾って食えといわれた。
ヘビは遅く行った。
お釈迦様は（おこって）口をきかない。
そしたら、カエルが、
「今ごろ来やがって」
と横口。
「おれのけつでもなめてろ」
といって、自分のけつをたたいた。
それでお釈迦様がヘビには、
「カエルでもヘビでもとって食え」
といわれたので、カエルはヘビに呑まれる勘定になったという。
カエルが「けつでもなめろ」といったから、カエルはヘビにけつから呑まれるのだという。
イナゴは、稲の葉を食うだけで、大した能なし。
それで、お釈迦様に
「へしんでしまえ」
といわれたん。
それをイナゴはまちがえてシシネと聞いて、死ぬまでつるんでいろといわれたと思って、霜がおりて、やっと動くくらいになっても、日向ぼっこしながらも、土手でつるんでいるんだって。（女屋）

ネコが十二支に入れない理由　むかし、お釈迦様が病気になっとき、神様が天から薬を病室めがけて投げてくれた。
ところが、途中できゃらの木にひっかかってしまった。それをネズミがとりに行った。
そしたら、途中でネコがネズミをねらっていて、食べてしまった。
それで、ネコは、十二支に入れられないのでという。（女屋）

子を産む時期　むかし、あるとき、しゃば中の動物がお釈迦様のところへ寄ってきたって。
そこで、お釈迦様に子を産む時期をきめてもらったんだって。
そしたら、猫は三ヵ月、人間は十ヵ月、馬は十二ヵ月といわれた。
馬は十二ヵ月といわれたんでおこってお釈迦様のはなをけったって。
お釈迦様は、
「あいてて」
といった。
そのときに人間は、
「いつ産んだらいいですか」
と聞いたって。
そしたら、お釈迦様は、
「いつでもいい」
といったって。
それで、人間はいつでも妊娠できることになったって。（天川大島）

お釈迦様があるとき、動物の子を産む時期（交尾期）をきめることになった。
猫は一年に三回にしろ。ニワトリは朝早くしろ。
人間は、いつしろといわれたら、返事をしない。おれは、そんな時期はいやだという。
そしたら、お釈迦様が、
「勝手にしろ、好きなときにしろ。ただ、昼間はやってはいけないぞ。夜ならいつでもいいぞ」
といったって。（野中）

十二支のはなし　ネズミは十二支の中に入れられている。
十二支のいちばんさきにいる。
二月の節分の豆は、よく炒れという。
なぜ、くろくなるまで炒るのか。
もと、「福は内、鬼は外」で、福はうちの中へ入れても、鬼は外へ出した。
そしたら、鬼はくやしくって、悪いことをすべえということになった。
あるとき、鬼と人間を約束した。
炒った豆をはやせということだった。そうすればうちの中へ入れる。
鬼もまじなので、その豆が生えた。
人間は「これは弱った」と思った。
しかし、約束だから、鬼をうちの中へ入れなければならない。
人間が弱っていたら、そこへねずみがきた。人間とはなしをした。
「豆がなれば困る」
「生えたのはしょうがない。実がならないようにすればよい。」
ねずみがそういった。
「もぐらがいるから、もぐらに豆の根を掘ってしまえとたのみましょう」
もぐらにたのんだ。
そしたら、豆が枯れてしまった。
それで、鬼はうちの中へ、入れてもらえなくなったって。
それで、ねずみが十二支の第一番にいれてやるという約束で、そうなったという。
そうしたところが、そこへねこがきたが、十二支の中へは入れてもらえなかった。
どうしてかというと、ねこは、大事なねずみを食ってしまうからだという。
そういうわけだから節分の豆はよく炒れという。
また、今でも鬼は
「福は内、鬼は外」
で、外にやられているという。
鬼はうちへいれてもらえないといわれている。（櫛島）

弘法機（こうぼうばた）（万年機）　むかし、おばあさんがいざりばたを織っていたって。
そこへのらぼうがやってきた。
のらぼうは、おばあさんの織っているきれを分けてくれという。
おばあさんは、腰ひもをつけて織っていたが、わざわざ機織台（はたし）からおりて切ってやった。ことわらずに、機（はた）をそののらぼうにやったって。
そしたら、そののらぼうがまた帰ってきて織った機（布）をくれという。

おばあさんは、またはたしからおりて、布をめぐんでやったって。
そしたら、そののらぼうが、
「このはたは、一生用だけ布ができる」
といって、その織り方を教えて行ったという。
そののらぼうは、実は弘法様であったという。

のらぼうがきたとき、何かめぐんでやれば、いいことがあるという。
のらぼうを三人ことわると、そのうちは断つ（つぶれる）という。
だから、のらぼうがきたら、断るものではないという。
なお、のらぼうに物をくれるとき、つかみだしてやるものではない。米櫃から、米をつかみだしてやると、福をつかみだしてしまうから、そうするものではない。のらぼうに物をやるときは、しやくってやれという。（天川大島）

万年機（まんねんばた）　弘法様があるムラへまわってきた。
娘さんが機（はた）を織っていた。
弘法様は、
「いいはただね、すこしくれないか」
といった。
そしたら、その娘さんは、はたし（機織機）からおりて、布になったのを切ってやった。
弘法様は、その娘さんに、いつまでも織れる万年機をさずけてやった。
もし、機織りをやめたければおまきに爪をたてろと教えてくれた。
爪をたてなければずっと織っていられるという。
娘さんは、それからずっと機を織っていたという。
弘法様が人の心をみてあるいたんだって。（笊井）

井戸水がかれたはなし　むかし、あるムラにのらぼうがきた。
「水をくれ」
といった。
そこにいた人（おばあさん）が、
「この井戸は水が出ないよ」
といったって。
そしたら、そのあと、その井戸は枯れてしまったって。
そして、そこの土地では、いくら井戸を掘っても、水がでなかったという。
のらぼうだと思ったのは、えらい坊さんだったと。（天川大島）

弘法井戸　むかしは弘法様が、姿をかくして、人の気をうかがいにあるいたって。
弘法様があるうちへ行って、
「水が飲みてえ」
といった。
そしたら、（おばあさんがいて）
「おらがちの井戸はへび井戸で、水が飲めない」
といったって。
そしたら、そこんちの井戸は、それからへびが本当に出て、飲めなくなったって。（笊井）

むかし、弘法様がまわってきて、そこにいたおかみさんは、
「水を一杯ください」
といった。
そしたら、そのおかみさんは、仕事をしていた手を休めて、
「少々おまちください」

といって、谷底まで水を汲みに行ってきたって。
そして、弘法様に、
「どうぞおあがんなさい」
と、水を差し出したって。
そしたら、弘法様が
「これでは不便だから近場に水の出るところをつくってやるべえ」
といって、庭先に杖をつきたてて水を出してやったって。
弘法様は親切のいい人にはよくしてあるいたって。（女屋）

石芋のはなし　むかしあるところで、おばあさんが軒先で芋をこしらえていたって。
そしたら、そこへ旅の坊さんがきて、
「その芋をくれ」
といった。
おばあさんは、
「この芋は、石芋で食べられない」
といった。
そのあと、そこんちの芋は石芋になって、食えなかった。
旅の坊さんは、弘法大師だったという。
だから、のらぼうがきても、ことわったりするものではないという。
（天川大島）

道を通っていた人が、芋を洗って干してあるところをみた。その芋がほしくって、
「その芋をひとついただけませんか」
といった。
そしたら、芋を洗っていたおばあさんが、
「この芋は、石芋だから食べられません」
といった。
そしたら、そこんちじゃ、芋をつくっても石芋になって食べられない。つくっても、つくっても石芋になって食べられなかったって。
その旅の人は、こんどは、その先に行って、あるうちへ寄って、
「一晩やっかいになりたいのですが」
といった。
そしたら、そのうちはぼろやだったがその旅の人を休ませてやったって。
すると、そのうちは、あとでくらしがずっとらくになったって。
（上大島）

むかし、（旅の人弘法様がやってきて）農家のおばあさんが芋を煮ていたので、
「おばあさん、腹がへったから、その芋を一つくれてくれ」
といった。
そしたら、そのおばあさんが、
「なんでおまえらにやるもんか」
と、えらいけんまくだったと。はじかかせたって。
そしたら、その芋が、いくら煮ても煮えなかったと。（女屋）

どこの人だか知んねえけど、（おばあさんが）芋を洗っていたので、旅の人が、
「その芋をくれてくれ」
っていったら
「この芋は石芋で、くれたって食べられねえよ」

っていったって。そしたら、そのあと、そこんちの芋は全部石芋になっちゃったって。

人には親切にしておくもんだという話。（笈井）

赤堀道元の娘小沼入水のこと　むかし、赤堀の道元の娘が、十六歳のときに、赤城へ行ぎてえと、おおく行ぎたがるが、一人じゃやれないので、おかごにのせて、赤飯をふかしてもって、いく人かでつれて行ったという。

そしたら、その娘はおかごからおりて、小沼へ入ってしまった。

そして蛇になって、沼の真中辺に姿をあらわして、手をあげて、

「わたしはこういう姿になったからみんな帰ってくれ」

って、おともの人にいったって。

そのとき、にこにこって笑ったって。

なお、この娘は小さいときから、のどもとにこけがはえていたという。

むかしから、この辺の娘さんは、十六のときには、赤城へ行ってはならないといっている。（上増田）

むかし、赤堀の道元というところに、年寄夫婦がいて、子がなかった。

子供を欲しがっていた。

そしたら、あるとき巡礼が娘をつれてやってきた。

おじいさんが、その娘さんを

「きれいな娘さんですね」

とほめた。

すると、その巡礼が、

「それじゃ、この娘を、おじさんちであずかってくれ。娘をつれてあるくのはふびんだから、くれてやる」

といって、娘さんを、おじいさん夫婦にくれたって。

その娘さんが十六歳になったとき、赤城へおまいりに行きたいという。

それで、みんなして娘さんを赤城へつれて行ったって。

それが、旧四月八日のことだった。

赤城山へ行って、小沼のふちのところを通りかかったら、娘さんが沼へとびこんだ。

みんなが、あっけにとられてわいわいさわいでいたら、娘さんは、沼の真中に姿をあらわした。

そのときは、人間の姿でなく、蛇（じゃ）になっていたという。

「自分はこの沼の主だ。こういう身だ、今まで、人間の身にかわっていたのだ」

と、そういって、沼の中に姿を消したという。

そのムラの人は仕方なく家へ帰ってきた。

そのあと、まい年、その日（旧四月八日）になると、赤飯をもって、小沼へおまいりに行くという。

旧四月八日は、赤城大洞のおまつりの日である。

むかしから、十六の娘は、赤城へ行くもんではないといっている。

（駒形）

赤堀道元という大尽のうちで、しばらく子供がなかった。赤城様におねがいして、ようやく女の子が生まれたって。

その子は、生まれたとき、わきの下にこけが三枚はえていたという。

その娘が十六になったとき、赤城が見たいという。それで、お供をつれて赤城の小沼へ行った。そしたら、「水が飲みたい」という。お駕

籠からおりて水を飲もうとして、沼へ入ってしまった。
しばらくたってから姿をあらわした。そのときは蛇になっていた。
そして、お供の者に、
「わたしは、こういう姿になったから、親によろしくいってくれ」
といった。
お供の者はおどろいたが、うちへ帰って、娘の親にはなした。
それからは、命日（五月八日）には、赤飯をふかして、おひつに入れて、小沼へ持って行く。
それを沼に入れてやると、おひつをからにしてかえしてよこすという。
娘が十六のときに小沼に入ったので、十六の娘は小沼へはつれて行くなといっている。（笂井）

むかしから、十六歳の娘は小沼へ行くなといわれている。
むかし、十六歳の娘が小沼へ入って死んだからという。
むかし、赤堀の道元のうちで、子供がなくって、ようよう生まれた。できたのを見たら脇の下にヘビのこけらがあったという。
あるとき、赤城へ行ぎてえつうので、赤城の小沼まで行ったら、水が飲みてえつう。おかごからおろしたら、すうっと沼へ入ってしまった。
しばらくすると、沼の真中ごろに首を出して
「おれはこういう姿になったから帰ってくれ」
と、おともの人にいって、姿を消したという。そのときには、体は蛇になっていたという。
赤堀の人は、五月五日には、赤飯を重箱に入れて小沼へもっていぐ。沼へ投げてやると、ぐるぐるうずがまいて、その重箱をひっこむという。（野中）

赤堀の道元というううちはうんと大尽だった。
そこのうちに娘さんがいた。
その娘さんが年ごろになって、赤城へ行ぎてえという。
それで、そのころ大尽だからおかごに乗せて、おともがついて行ったんだって。
沼のところへ行ったら、水が飲みえてというんで、水飲みつれて行ったら、そのまんま小沼へずるずるって入ってしまったんだって。
それから沼の中へ入っていって、姿がすっかりかわって、蛇体になったって。
それから、その日、その日（娘が入水した日）には、おこわをふかしては、ほかいに入れて持っていって、沼へはなすと、それがすうっと入っていって、あけてからんぽになってかえってくるんだというはなしは聞いた。
榛名の湖にも娘さんが入って、おともの人はカニになって、そこをはってめっけてあるいたけどめっかんなかったという。
おともの人は、カニになったまんまで榛名に住んでいるのであろう。
（女屋）

むかし、赤堀の道元の娘が、赤城へ行って、小沼へ入って、着ていたものを全部ぬいで、みんな沼へ入れたって。
そして、弁天様になって、おともの人に、
「自分はこういう姿になったからうちへ帰ってくれ」
といったって。
このとき、道元の娘さんは十七歳だったという。だから、十七の娘

は、赤城へ行かないほうがいいといった。（上大島）

むかしから、十六の娘は赤城へ行くなといっている。

むかし、赤堀の本間という大尽のうちの娘が、十六のときに、赤城の小沼のところへ行って、さあっと沼の中へ入って、沼の真中に立って、蛇になって、

「自分はこういう姿になったから」

といって、またすうっと沼の中へひっこんでしまったって。

そこんちでは、それから、（命日の日には）せきはんをふかして、沼のはたにおいてくる。そうすると、いつのまにか、せきはんがなくなっているという。（小島田）

むかし、（赤堀の道元という）大尽のうちに娘さんがあった。その娘さんには、わきの下に、こけらが三枚あったという。

十六歳のとき、赤城へ行ぎてえといった。

おかごで小沼まで行って、おともの人に、手を洗って神社へおまいりしたいから、おかごからおろしてくれといった。

おともの人がおろしてやったら、娘さんは、沼の中へ入ってしまったって。

道元の家には、中庭に池があった。池にはとび石があった。その石の上には、かならず、竹の皮のぞうりが一足あって、それがいつもぬれていたという。

下働きの者が朝起きてみると、いつもあったという。

これは、沼から使いがきたことを示しているものという。

さて、娘さんは、沼の中へ入って蛇（じゃ）になった。

それで、旧四月八日には、赤堀家では小沼までおこわをもって行ったという。

箱を投げこむと、一度は沈んで、（からになって）うかんで岸のところまでくるという。

むかしから、十六歳の娘さんは赤城へ行くなといっている。

どうしても行ぎたいときには、たもとへ石を一つ入れて、一つふやして、十七にして行げばよいといった。（天川大島）

小沼に祭の時に娘が入った。「ぜひつれていってくれ」と言い、親が願をかけてできた子で、ワキの下にウロコが三枚あった子で、十六歳の時に湖に入って蛇になった。

水を飲むとか手を洗うとか言って入ってしまった。

湖のまん中辺で大蛇になった。

道元の家では今でもその日には毎年赤飯をたいてもってゆく。（宮地）

観音様の相撲（金仏と木仏）　あるムラにいくらかのんきな男がいた。

正直もんで、一生懸命働いていた。

ある日のこと、田圃からの帰りに木像の観音様を拾ったって。

この人は、うちへ帰ってきてから、朝に晩に観音様をおがんでいた。

この話をムラ一番の大尽が聞いていた。

「うちの観音様と相撲させてみよう」

といった。

それで、大尽の金の観音様と、この人の木の観音様と相撲をとることになった。（このとき、二人はこういう約束をした）

「金の観音様が負ければ、わしの身上をおまえにやる。木の観音様が負ければ、おまえは、作番頭でわしのところにただ奉公をしろ」

ということであった。
ところが、相撲をしたら、金の観音様が負けてしまった。
しょうがねえ、大尽さんは身上をその人に渡してムラを出ることになった。
金の観音様を背負って出た。
大尽さんはつぶやいた。
「どうして負けたんか」
背中の観音様がいった。
「おれは一年に一回しか食べられなかった。むこう（木の観音様）は毎日三度三度ご飯をあげてもらっていたからだ」
と。（駒形）

絹笠様　蚕の神様は絹笠様。
むかし、あるところにままっこがいた。
まま母がその子を殺して埋けた。
そしたら、そこへ虫がわいた。
その虫に、なにをくれても食わなかった。
桑をくれたら食った。
やがてまゆをつくった。
それがかいこで、人びとが飼うようになったって。
かいこは、しじ、たけ、ふな、にわと、四回やすむ。
ままっこは、竹やぶ、ふねに捨てられたがかえってきてしまい。最後に、庭で殺されて埋められたのだという。
ふなやすみのときには、もちをついて祝った。
にわやすみにつくうちもあった。
もちはかいこにあげた。
嫁さん（特に初嫁）は、このもちを持って里へお客に行った。（笂井）

ビクニダイ　ビクニダイというところは、阿久津の原というところにある。
むかし、庚申待をしていたときに、呼ばれてきた人があった。この人が、珍しいさかなをもってきた。
そこで、その庚申待の仲間の一人のビクニが、そのさかなをそっととって食ってしまったって。
そしたら、みんなにせめられた。
それじゃ、わたしは旅に出るといって、松の木を一本、そこに植えて旅に出たって。
何年かして、ビクニが阿久津へ帰ってきた。
みると、出るとき植えた松の木が、かかえられないほどでっかくなっていたって。
それで、その木で、でえ（はなれ）をつくったって。
それで、ビクニダイというようになったって。
松の木の年輪をしらべたら、八百年たっていたって。

むかし、竜宮（伊勢崎市宮子町）で膳椀を貸していた。
ビクニがたのむとかしてくれたという。
ところが、あるとき、膳椀を借りた人が、一膳分だか返さなかったから、それからは、いくら頼んでも貸してくれなくなったという。（下増田）

道祖神は兄妹夫婦　むかし、あるところに、非常にきりょうのいい男の子と女の子をもった夫婦がいた。
ある日のこと、二人に親がこういったと。
「おまえたちはきりょうがいいんだからよそへ行って、きりょうのいい相手をさがして来い」

といって、二人を旅に出したって。
二人は何年もの間、あっちこっちさがしあるいたがいい相手がいない。
そして、おめえよりきりょうのいい者はいないというので、兄妹でいっしょになって、うちへ帰ってきたって。
おふくろさんはたまげてしまった。
「おまえたちは兄妹じゃねえか、なんでよりによってきょうだいで一緒になるなんて」
といって、かなしんで死んでしまったとか。
二人は、きょうだいで夫婦になったというので、いましめのために、道端に立っているのだという。（駒形）

お諏訪ヶ渕　韮川の五丁目あたり、どうばの下に渕があった。
その渕にうずがまいていた。
片方が高土手でさびしいところだった。
よくそこの木に人魂がでるというのでさびしがられていた。
むかし、ここは、喜八という大工がいた。おすわという女の人がいた。
おすわは、喜八にのぼせて一緒になった。喜八は真面目な大工だったが、酒と女をおぼえた。
女房のおすわがぐちをこぼすと夫婦げんかになった。
おすわが病いの床に臥した。
喜八は、駒形五丁目の女郎屋に遊びに行くようになった。そこの女郎おかねにのぼせた。おかねは、寝ているおすわの枕元にきていじめることもあった。
ある日大嵐がやってきた。
つぐ日になってみると、おすわは流され、おかねもいなくなった。
それから、お諏訪ヶ渕のところの木に火の魂がでたり、幽霊がでたりするようになったという。（駒形）

山の神の由来　山の方へ行ったとき、こんなはなしを聞いた。
女房のことを山の神という。これが山の神のもとだという。
ある日、若夫婦のところへ、午後三時ごろのこと、里のおふくろさんが危篤だからすぐ来いという知らせがあった。
ちょうど亭主は仕事に出かけていた。
嫁さんは、その帰りを待っていた。亭主が帰ってきたので
「すぐに行く」
といったら、
「いまっから行げば、峠を越えて行かねばならないが、あすこには人っ食い狼がでる。危険だから明日にしろ」
といわれたけれども、その日に行くことにした。
夫婦で一緒に行くことにした。
「今日は十五日、十五夜だからいい」
といって出かけた。
狼谷というところまで行くとやっぱり狼がでた。
亭主が、
「おれが食われるから、その間におまえ行げ」
といった。
そしたら、かみさんが、
「いや、あんたが行げ」
といった。
そしたら、おかみさんが、くるっとけつまくって、狼の方へつんだしたって。
ふつうだと、狼がでると、人間はたまげて逃げる。

ところが今日の人間は逃げるづらあねえ。こっちへむかってくる。
狼は、十五夜の月のあかりで見た。
今日は、口がたてわりで、どこまでっけえ口だかわかんねえ。
そういって、狼がながめていたって。
おかみさんは、先に食われると思ってぶるぶるふるえていた。
そのうちに屁をひった。
狼はおどろいた。
今日は神様が人間に化けてきた。おれをこらしめるためにやってきたんだ。
口はたてで、ひげをはやしている。
ガスまでふんしゃした。
それは山の神様だ。
「助けてくれ」
といって逃げて行ったって。
それから、かみさんのことを山の神というようになったって。
その日はちょうど十五夜で、まんとけつを出した。それから、十五夜の月のことをまんげつというようになったって。
それまでは、十五夜の月といっていたが。
（この話は、越後の人に聞いたものという。六日町あたりのこと）（駒形）

雑煮の由来　むかし、日本の軍隊が朝鮮に兵を出したときのはなし。
虎がでてきて、兵隊は進むことができなかった。
そこで、虎がおそれるものはなにかということになった。
象がでっかくっていいということになった。
象を餅でかためて、車に乗せて先頭にたった。
そして、戦いがすんでから、それを食うべえということになった。
しかし、かたくって食えない。
それで煮て食った。
象を煮て食ったというので、ぞうにということになったという。（女屋）

椀の由来　むかし、難病がはやったことがあった。
それは毒虫がはやらせたものという。
その毒虫を退治するというので、ネズミをうんとふやしたことがあった。
ネズミがふえて、毒虫を退治することができた。そしたら、ネズミがふえて、悪いことをしてしょうがない。
どうにも人間の手におえなかった。
ネズミを退治するのはネコよりほかにはないというので、ネコをふやした。
そうしたら、ネズミが減った。
そうすると、こんどは、ネコがふえた。ネコもあだをするようになった。
これまた、しょうがねえ。ネコを退治できるのは、イヌよりほかにない。
それで、イヌをふやして、ネコをへらした。
どうやら、ネズミのいたずらがすくなくなった。
イヌは、人間に害をしなかったって。
それで、イヌには恩があるというので、人間が食事に使う器（うつわ）に、ワン（椀）という名をつけたって。イヌの恩を忘れないようにするためだという。（女屋）

盆踊りのはじめ　むかし、お釈迦様の一番弟子がいた。
この人は、思うことが目の前にあらわれたという。

あるとき、亡きおとっつあんが目の前にでた。
おとっつあんは、いいことをしたから、天国で楽に暮していたって。
ところが、おっかさんは、子供のためにときどきうそをいったので、自然に悪がたまって、地獄へ行っていたって。
息子さんは、せめて、おっかさんになにかご馳走でもつくってやりてえと思っていた。
ある日、ご馳走をつくって（地獄の）おっかさんのところへ持って行ったんだって。
しかし、おっかさんが手をのばして食べようとすると、煙になってあがってしまう。
息子さんが何をもっていってやっても、おっかさんの口へは入らない。
それで息子さんは、お釈迦さんに聞いた。
そうしたら、
「おっかさん一人にやろうとするから駄目だ。何億万の亡霊がいるんだから、その亡霊に一口でもいいからさずかるように、ご馳走つくってやれ。そうすれば、おっかさんの口にも入る」と教えてくれたって。
それからは、その息子さんは、みんなが食べられるようなものをつくってやった。
ところが、それをするには、どうしても広い野原にござを敷いて、そこへ亡霊をよんで、それで、それぞれの亡霊には好ききらいがあり、娑婆にあるものをあつめてご馳走をするというので、野原へ呼んだって。
そしたらみんなの口へ入って喜んだって。
それで、地獄の釜がさめて、亡者たちがよろこんで、釜のふちへあがって、踊りおどったんだって。輪になっておどった。それで盆踊りができたって。野原にはなござしいて踊った。それが、お盆のときの盆棚になったんだって。（女屋）

蛇窪の大尽（田野久）　力丸のはなし。
むかし、旅役者がいた。名前を田野久六といった。
久六さん、ふるさとのおふくろさんが病気だっうんでいそいで見舞に行くことになった。
久六さんが、ふるさと（力丸）へ帰ってくる途中、大蛇にでっくわした。
「おめえはなんだ」
と大蛇がいった。
久六さん、
「おらあ、田野久六だ」
というべえと思ったが、
「たのきゅうだ」
といってしまった。すると大蛇が、
「おめえタヌキか、タヌキなら化けてみせろ」
といった。
久六さん、風呂敷包みの中から衣裳をとりだして、娘に化けた。
すると大蛇がいった。
「おめて、なにが一番おっかねえや」
「かねが一番おそろしい」
というと、大蛇は、
「こりゃ内緒だがな、わしは柿のしぶが大きらいだ」
といった。
「このはなしは、絶対にはなしっこなしだぜ」
といって、二人はわかれた。

ムラへ帰った久六さん。(うちへ帰ってくる途中大蛇に出合ったはなしをして)

「大蛇は柿のしぶが大きれえだ」

とムラのてえに話したって。

そしたら、ムラのてえは、柿のしぶをうんとこしらえておいたって。

ある晩のこと、大蛇が久六さんのうちへやってきた。

「あのことをはなしたな」

といって、おかねをどさりとうちの中へ投げこんで、

「ざまあみろ」

といって逃げて行ったって。

それで、久六さんは、大蛇になった。

地名にちなんで、久六さんのうちのことを、蛇窪の大尽というようになったって。(駒形)

無言競争　むかし、あるところに、ぼたもちがとても好きな夫婦がいた。ある日ぼたもちをこしらえたが、それを食べる前にもめごとがあった。

そこで、だまりっくらをして、先に口をきいたもんはぼたもちを食えないということにした。

(二人がだまっていたら)そこへ泥棒が入った。二人ともだまっていた。そしたら、泥棒がぼたもちをもって逃げたって。夫婦二人とも、折角つくったぼたもちを食うことができなかったと。(天川大島)

阿感坊の竜宮行き　むかし、宮子の斉藤忠太さんの先祖(あかんぼうという)が、竜宮へふじっつるを切りに行った。なたを川の中におとしてしまった。そのなたが川の中に見えるんで、とりに川の中へ入って、どこかへ行って帰ってきた。そのとき、玉手箱をもらってきた。その玉手箱はあけると目がつぶれるといわれている。(小屋原)

中内のカッパのはなし　中内にカッパのはなしが伝えられている。

むかし、ある人が馬を川にひいて行って洗ってきた。

夜になると、馬小屋で馬があばれている。どうしたかと見に行ったらがあらしをふいていた。かいば桶の中にカッパがいた。

カッパは、川入れに行った馬のしっぽにつかまってうちまでついてきたわけ。

逃げ場がないので、かいば桶をかぶっていた。

桶をひっくりかえしたら、カッパがいた。

「助けてくれ」

という。

「助けてくれれば、お礼に、つき目の薬のつくり方を教えてやる」

という。

助けてやったら、お礼にと、そこのうちのものに、つき目の薬のつくり方を教えてくれたという。

その薬は、おぼえて売っていた。その薬を買ってつけたことがある。(駒形)

カッパのはなし　むかし、桃木川の支流に水浴びに行ったとき、帰るときに次のようにいった。

「カッパさん、カッパさん、明日来るから、川の中にひきこまないでくださいね」

これは、両手で、川の水をはたきながらいって、泳いでわかれてきた。(天川大島)

十五夜　十五夜のお月様の中で、ウサギが餅をついているという。

「十五夜に曇りあれども、十三夜に曇りなし」

という。(上大島)

でんぼうばなし　むかし、(唐の国から、でんぼうの名人がやってき

た。日本のでんぼうのうちへ行ったら、親はいないで、子供が留守居をしていた。
「おとっつあんはどこへ行った」
って、子供に聞いてみた。
「おとっつあんは、富士山がひっくりかえりそうになったんで、棒を三本もってつっかえぼうしに行ったよ」
といったって。
それで、
「おっかさんはどこへ行ったか」
と聞いたら
「近江の湖に大水がでたんで、のみの皮もってとめに行った」
って。
それを聞いて、唐のでんぼうかきは、たまげて逃げて行ったって。
（天川大島）

コンニャク一枚で伊勢まいり　むかし、コンニャク一枚とみそこしを持って、伊勢まいりをした人があったという。
コンニャクを食べて、それをひりだして、みそこしでうけて、また洗って食べた。そうして、一枚のコンニャクで伊勢まいりをしたという。
コンニャクは消化が悪いので、そのままでてくるという。（駒形）

飯土井の猫山　飯土井に猫山がある。
ここに、猫の集会がよくあるという。
あるとき、猫があつまっていて、一匹の猫がおくれてきた。
ほかの猫に、
「どうして遅れたか」
といわれたって。
そしたら、
「今日は、うちではにぼうとをして、おおくあつくって食えねえでおくれた」
といったって。
上増田の岡田養庵先生が（往診のかえりに）それをみた。
うちへ帰ってみたら、うちでにぼうとうをしていたって。
それで、養庵先生は、あの猫はうちの猫だったかとわかったって。
（下増田）

飯土井には猫山といわれるところがある。そこに猫があつまって会議をしたという。
ある晩のこと、上増田の養庵先生のうちの猫が、会議が終るころになってやってきたって。
あたふたとやってきて、
「うちじゃ、今夜おじやをつくったんで、あつくて食えねえ。さめるのをまっていたんで、おくれてしまった」
といったって。
猫をうちゃるなら、飯土井の猫山へうちゃれという。そうすれば、猫は帰って来ないといった。
猫がいなくなったときは、猫の食べていたお椀をさかさにしておくと、帰ってくるという。（笈井）

ある晩のこと、（上増田の岡田の医者が）急病人ができてたのまれて行った帰り道、猫山のところを通ると、さわがしいのでのぞいてみた。
すると、猫があつまって、踊りを踊っていた。

「白はどうした」
という声がした。
「あれはどうした」
お医者さんが見ているところへ、自分のうちの猫に似た、白いでっけえ猫がやってきた。
「おそいじゃねえか」
「ばあさんがあちいおじやをつくってあつくってこりた」
といいながら、その猫も仲間に入ってさわいでいた。
お医者さんがうちへ帰ってみると、おばあさんが、「今日は寒いから」というのでおじやをつくっていたって。
それ以来、猫山に、いらなくなった猫をぶちゃると、かえってこないという。(駒形)

むかし、上増田の医師岡田養庵先生が飼っていた猫が、飯土井の猫山で踊りをおどっていたというはなしがある。
養庵先生のうちで、干しておく手拭がよくなくなる。それで、手拭に糸をむすびつけておいたって。
ある日のこと、手拭がなくなった。
むすびつけておいた糸をたどって行ったら猫山まで行ったって。
そのとき、猫が猫山で踊りをおどっていた。
養庵先生のうちの猫は、笛吹きだった。
その日は、その猫が猫山へ行かなかったのでなかなか踊りがはじまらなかったと。
そのうちにその猫がやってきた。
その晩、養庵先生のうちの夕飯はおじやだった。おじやがあつくって食べられないので、さめるのを待って食べてきたのでおそくなったといったって。
養庵先生がうちへ帰ってみたら、ほんとに、その晩は、おじやだったと。(上増田)

おとね沢の猫　桃木川の笂井地先におとねざわというところがある。
本家の猫が、年をとって動けなくなったから、ある日のこと、おばあさんが、
「どこへでも行げ」
っていったら、その猫は、すぐにいなくなった。
そしたら、おとねざわのかけめで、その猫が、手拭でほっかぶりして、踊りおどっていたという(上増田)

拾い物分配　むかし、ハチとアリが仲よくすんでいた。春先になって、二人で散歩に出た。
すると、魚のにおいがしてきた。
草むらにニシンが一本おちていた。それを拾って、先へ行った。
こんどは、タイがおちていた。
二人は、どうして分けたらいいか迷っていた。
みると、近くに魚屋さんがあった。
「どうして分けたらいいだんべか」
魚屋さんもしばらく考えていた。
「ああ、そうだ。ニシンはハチがとっておきな。タイはアリがとっておきな」
ハチとアリが
「どういうわけだい、おじいさん」
「ニシンがハチだ。アリがタイだ」
といったと。(駒形)

ネズミの嫁入り　むかし、ネズミの親が、自分の娘の婿えらびをした。この世で一番強いもののところへ嫁にやろうとした。

お天道様が一番えらいというので、お天道様に婿さんになってほしいといった。

そしたら、自分より強いのは雲だという。雲におおわれてしまえば負けるといった。

そこで、ネズミは雲のところへ行った。

「是非娘の婿になってくれ」

といった。

そしたら、雲は、風には負けるといった。風に追いはらわれてしまうという。

そこで、ネズミの親は、風のところへ行ってたのんだ。そしたら風は、壁にはかなわないという。

「壁にあたって負けてしまう。壁のほうがつええ」

といった。

それで、ネズミの親は、壁のところへ行って、娘の婿になってくれないかとたのんだ。

すると壁は、

「ネズミに食いやぶられてしまう」

といった。

それで、ネズミが一番強いことになったと。

ネズミの母親は、娘をネズミのところへ嫁にやったと。（野中）

モグラとミミズ　むかし、ミミズには目があり、モグラには目がなかった。あるとき、ミミズがモグラに目をやり、モグラは、ミミズに歌をおしえたという。（野中）

シャチもたまげたはなし　宗さんのはなしだが、この世の中でシャチがいちばつよいという。

ところが、ある日のこと、海辺に女の人がいたら、シャチがきた。女の人は尻をまくってみせた。

そしたらシャチがいうには、

「横口にはたまげねえが、縦口で毛がはえてるんじゃかなわねえ」

といって、逃げて行ったって。（上増田）

コウモリのはなし　むかし、鳥とけものと戦さをしたとき、鳥が勝ちそうになると、鳥の仲間だという。

こんどは、鳥の方が旗色わるくなると、けものの仲間だという。

それで、しまいには鳥からも、けものの方からも、相手にされなくなったという。（女屋）

吉原堰の大蛇　むかし、吉原堰のところに大蛇がでたという。

あるとき、この辺が開けてきて棲みずらくなったので、上長磯の大堰（栗山水車の近く）にうつったという。

うつるとき大蛇のままではのめっこくっていけないので、娘に化けていた。

そこへ、馬方が馬をひいてやってきた。

大堰へ行ぎたくって、のっけてくれといって、馬に乗せてもらたって。

そしたら、その蛇がおもくって、馬がうんと汗かいたって。

（天川大島）

馬追鳥のはなし　むかし、ある農家に奉公していた子供がいた。

大変貧乏なうちの子供であった。

いつも馬の世話をしていたが、主人からはきびしくいわれていた。

あるとき、馬をひいていたら、まちがって馬をにがしてしまった。

主人にきびしく叱られた。

その子は馬を追った。
「うま、うま」
といいながら馬を追って行った。
しかし、馬は見つからなかった。
その子は馬を追っているうちに鳥になってしまった。
それが、うまおいどりであるという。（天川大島）

ツバメの土産　あるうちに、ツバメが毎年来ていた。
ある日のこと、おばあさんがツバメに、
「おめえはまい年よくおらあちへ来るが、たまには土産を持って来お」
っていったって。
そしたら、そのあときて、台所にかぼちゃをおとしたって。
みたら、それがかぼちゃのたねではなく、ヘビのたまごだったって。
ヘビがでて、そのうちはへび屋敷になったって。
南の国はヘビが育たないので、たまごを、北の国へもってくる。日本へは子を育てにくるのだという。（天川大島）

カエルの伊勢参宮　むかし、カエルが伊勢参宮に行った。
（箱根）山の上で休んで立ちあがってみた。
「なんだ、こんなほうまできても、うちのほうと同じだ」
といったという。
カエルはあたまのうしろに目がついているので、立ちあって、自分のうちの方をみたということ。（東上野）

イナゴのはなし　イナゴは、稲の葉をせっせとくらっているんで、お釈迦様が、イナゴに、
「役をしない、そんなものは、ひしね」
といった。
そしたら、イナゴは、ひしねを、ししねとまちがえた。
それで、イナゴは、死ぬまでつるんでいるんだって。（女屋）

亀とムカデ（ムカデの使い）　むかし、亀とムカデが隣りあわせに仲よくすんでいたって。
ある日のこと、亀が急におもいだして隣りムラまでおつかいに行くことになった。
そしたら、ムカデが
「おれが行ってきてやる」
といった。
つぐ朝、亀がどうしたかと、ムカデのうちへ行ってみた。そしたら、ムカデが、一生懸命にわらじをはいていたって。
それで、亀が自分でおつかいに行ってきたって。
おおかありすぎても困るんだいな。（駒形）

カケス　カケスは、よく物忘れする鳥だという。
だから、物忘れする人のことは、カケスのようだといった。
カケスが、クリのいがに小便をひっかける。クリがえんで（熟して）おちる。それを人間が拾うという。
ある人が草を植えていて、植えた場所を空の雲をみて、それをたよりに植えておいた。
ところが、どこへ植えたか忘れてしまった。
春になったら、芽がでて、「ああ、ここだ」といったって。
（天川大島）

カケスがクリをとってきて埋ける。
今、天道様の下へ埋ける。
夕方きて、お天道様の下へきてクリをとりだそうとするがない。

お天道様は動いてしまったのである。（上増田）

カケスは、カエルなどをとってきて保存しておく。クワゼにさしておく。そのとき位置を覚えるのに、天上をみて、あの雲の下だといっておぼえておく。ところが、雲は動いてしまう。それで、どこにさしておいたかわからなくなってしまう。

カケスのわすれんぼうという。忘れんぼうの人のことを、カケスのようだという。（野中）

三人組の女郎買い　むかし、あるところに三人組の男がいた。

熊さん、八さん、文さんといった。

三人あわせると、くまんばちがぶーんという。

あるとき、三人で女郎買いをすることになった。

なんとかして、女郎にもてる方法はないかと考えた。

「いい仕度して行くべえ」

ということになった。

なにがよかんべえということで、いいふんどしをかけていくことになった。

三人ともいいふんどしをかけていった。

はちさんも、ぶんさんも、しりまくってみせた。

ところがくまさんはださない。

「あんたはなにかけてきた」

と女郎が聞いた。

実は、ぶんさんに、竜海院の坊さんをだまして袈裟を借りてきた。

坊さんは、

「まい朝おつとめをしなければならないから袈裟を貸してやるわけにはいかぬ」

という。

それで、無理をいって、坊さんの袈裟を借りてきた。

「実は、子供が病気で、袈裟を一晩かけてやればなおるといいます。是非和尚さんの袈裟を貸してください」

といって借りてきたという。

くまさんが尻をまくってみせた。

みると、錦のえらい袈裟だもんだから、りっぱだと、女郎さんがほれこんだ。

それで、くまさんが一等になった。

朝になった。くまさんは、和尚さんに返さねばならない。時間がきて、くまさんが帰ろうとした。

そしたら、お女郎がくまさんをつかまえてはなさない。

「袈裟はかえさない」

といったんで、くまさんは、

「竜海院の坊さんが困る」

って、泣きだしたって。

このはなし、むかしの浪曲のおわらいだった（女屋）

豆腐の病気　豆腐が病気になって寝た。

そして、

「もとの体になりたい。まめになりたい」

といったって。（天川大島）

お上人様　むかし、お上人様が信州の方からきた。

そして、ムラの人に、わしを埋けてくんろっていったって。

それで、ムラの人が穴を掘って埋けて、たけんぼうの節を抜いてさして、食べものを送ってやっていた。

二十日間は、念仏を申していたって。

いくらか声がしたって。
二十一日目になったら、なんの声もしなくなったって。
下長磯では、七月二十日に、ムラの役員さんが燈籠をつけてまつっている。
ここにいかっている人をおしょうにんさまといっている。（下長磯）

ごぜさんの悲しいはなし　ごぜさんが旅先ではぐれてしまった。
女のいない男べえの山賊のところへ泊めてもらったって。
そしたら、すっかりおもちゃにされて、もっているものをみんなとられて、しまいには殺されて、煮て食われてしまったって。
このはなしは、人に聞いたはなしだ。（女屋）

馬鹿婿（こうこう）　あるところに馬鹿婿がいた。
あるとき、飯のあとのお湯は、大根（こうこう）でかきまわすと、お湯がさめるといった。
風呂に入っている人がいて、「あつい」といった。
そしたら、その婿さん、こうこ一本もってきて、こうこで湯をかんまわしたという。（女屋）

馬鹿婿　むかし、あるところに、馬鹿婿どんがいたんだって。
ある時、この男が親戚の家に泊りに行ったんだって。
夜中になると、お便所に行きたくなって、目がさめたんだって。
ところが、お便所の戸があかない。
外に行けばいいんだけど、めんどくさい。
ふと見ると、雨戸に節穴があった。
馬鹿婿どん、そこから用をたしたんだってさ。
ところが、チンチンがはさまって、どうしても抜けない。一生懸命とろうとしたけどとれない。そのうちに夜が明けてしまった。
その家の人が起きて、庭掃除をしていると、雨戸にへんないもむしがいる。箒でとろうとして掃いたんだって。
すると、
「あいてて」
って鳴いたんだって。
へんな虫だなあと思って、もう一度掃いた。
やっぱり
「あいてて」
といって鳴く。
その人は、おもしろがって何度も掃いた。
そして、家のもんに、
「あいてて虫というかわった虫がいるから見においで」
といったんだって。
なるほど、箒ではくと、「あいてて」って鳴くんだって。
ところが、雨戸を開けると、馬鹿婿が立っていた。
「なあんだ、おまえだったのか」
と、みんなで大笑いしたんだってさ。（野中）

かずのこのはなし　むかし、むかしあるところに、馬鹿婿がいたんだって。
ある年のお正月に、親戚の家にご年始に行ったんだって。そこの家で、いろいろご馳走になったんだけど、特にかずのこのおいしかったこと。親戚の人にたのんでおかわりをしたほど。
それで、その男（馬鹿婿）は、かずのこをどこから出してくるのかと、物かげにかくれて見ていて、覚えておいたんだって。
夜も更けて、みんなが眠ってしまってから男は起き出した。誰にも気づかれないように、抜き足、さし足で、かずのこのしまってある所へ行ったんだって。

そこで、かめの中から、あのおいしいかずのこを取り出して、食べはじめたんだって。
そしたら、あんまりおいしいもんだから、手で出して食べるのでは間に合わない。かめの中に頭をつっこんで、食べたんだって。
むしゃむしゃ、腹いっぱいになるまで食べたんだって。
さてと、頭をかめから出そうと思ったんだけど、ひっぱっても、ひっぱっても、どうしても頭が抜けない。
男はあわてた。
こんな所にいると、家の人に見つかってしまう。それで、裏の竹やぶへ行って立っていたんだって。
ところで、これはもう一人の泊り客。
夜中にお便所に起きた。
そのお客さんが用をたして、お尻をふこうとしたら紙がない。困ったお客さん、あたりを見まわすと、そこに石ころが落ちていたんだって。
その石ころでお尻をふいたんだって。
その石ころを便所の窓から竹やぶにむけて、ポーンと投げた。
すると、そこに、例の馬鹿婿どんが立っていた。
ちょうど、その石がかめにぶつかった。
かめがわれて、その男の頭が出たんだってさ。(笊井)

どっこいしょ　むかし、あるところに馬鹿婿がいたんだって。
あるとき、親戚の家におつかいを頼まれて行ったんだって。
その家で用事をすませ、おだんごをご馳走になったんだって、それがあんまりおいしいので家へ帰って、おかみさんにつくってもらおうと思ったんだって。
家へ帰るまでに、だんごっていう名前を忘れては困るので、帰る道を、
「だんご、だんご、だんご、だんご」
っていいながら、歩いて行ったんだって。
もうそろそろ、家が近づいて来たので、少し気がゆるんだ。
道に水たまりがあった。
「どっこいしょ」
といって水たまりをとびこした。
すると、こんどは、「だんご、だんご」といわずに、
「どっこいしょ、どっこいしょ」
といいながら帰ったんだって。
やっと家について、忘れないうちに、すぐにおかみさんに、
「どっこいしょつくっておくれ」
と頼んだって。
おかみさんはきょとんとして、
「どっこいしょなんてもん知らないよ」
といったんだって。
「まるくておいしいどっこいしょだよ。おまえの親戚でつくってもらったんだ」
馬鹿婿がそういっても、おかみさんは、やっぱり
「そんなもんは知らないよ」
という。
二人はけんかになった。
馬鹿婿がおかみさんの頭をポカリとはたいた。
おでこに大きなこぶができた。
「おまえさんがはたいたから、おでこに、まるでだんごみたいな、でっかいこぶができちゃったよ」

おかみさんは怒った。
そしたら、馬鹿婿は
「ああ、それ、そのだんごってやつだよ。そのだんごつくっておくれ」
っていったんだってさ。（笈井）

むかし、あるところに、すこし知恵おくれの子がいたって。
ある日のこと、おっかさんがだんごをつくって、
「これをおばあさんのうちへ持って行ってくれ。これはおだんごというもんだよ」
といって、その子に持たせてやったって。
その子は、だんごということを忘れないように、
「だんご、だんご、だんご、だんご」
といいながら行ったら、途中に、小さな堀があったと。
その子は、その堀を
「どっこいしょ」
といってとびこえた。
そしたら、「おだんご」というのを忘れて、こんどは、
「どっこいしょ、どっこいしょ」
といいながら行ったって。
そして、おばあちゃんのうちへ行って、
「おばあちゃん、どっこいしょを持ってきたよ。食べてね」
といったって。
おばあちゃんは、「どっこいしょ」ってどんなものかと思って、風呂敷をあけてみた。
そしたら、だんごだった。
「これはだんごうもんだよ」
といって、大わらいしたって。（上増田）

むかし、あるところに馬鹿どんがいた。
ある日、嫁さんのうちへお客に行ったって。
それで、ご馳走をつくってもらった。
そのご馳走がおいしかった。
それはだんごだった。
婿どんは、だんごということばを忘れないように、
「だんご、だんご、だんご、だんご」
といいながらうちへ帰ってきたって。
途中に川があった。
「どっこいしょ」
っていって、その川をとびこした。
そしたら、こんどは「だんご」ではなく、
「どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ」
っていいながら帰ってきたって。
うちへ帰ってきて、嫁さんに、
「どっこいしょこしらえてくれ」
っていった。
そしたら、嫁さんが、
「そんなものわかんねえ」
といった。
婿どんは、むっとして、嫁さんの頭をはたいたって。
そしたら、ひたいにこぶがでたって。
嫁さんが思わず、

「あっ、だんごのようなこぶができた」
といった。
嫁どん、
「ああ、そのだんごだ」
といったって。（天川大島）

むかし、あるところに馬鹿婿どんがいた。
ある日のこと、嫁さんの里へお客に行った。
そしたら、里のおっかさんがだんごをつくってくれた。そのだんごがとてもおいしかった。
おっかさんに聞いた。
「これはなんつうもんだい」
「だんごつうもんだ」
「そうかい、うんめえなあ、うちへ行ってつくってもらうべえ」
それで、だんごということを忘れないように、帰りながら、
「だんご、だんご、だんご」
といってきたって。
ところが、途中に堀があった。
婿どんは、その堀を
「どっこいしょ」
といってとんだ。
そしたら、こんどは、「どっこいしょ」になって。
「どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ」
といいながら帰ってきたって。
うちへ帰ってくると、おかみさんに、
「どっこいしょこしらえろ」
といいつけた。
そしたら、おかみさんは、
「どっこいしょなんつうもんは知らねえ」
といった。
「知らねえがあるか、おめえんちでもらって食ったんだから、知らねえはずはねえ」
といって、嫁さんをはたいたって。
そしたら、嫁さんが、
「痛てえ、だんごのようにこぶができたがね」
といったと。
婿どんは、
「そうだ、そのだんごだ」
といったって。（小屋原）

むかし、あるところに、馬鹿息子（婿）がいたんだって。
ある日、嫁さんのうちへ行ったら、だんごを（ご馳走に）出してくれたんだって。
「これはなんだい」
っていったら、
「だんごだ」
といった。
家へ帰って行くのに、
「だんご、だんご」
といいながら来て、途中に堀があって、
「どっこいしょ」
といってとんだ。そしたら、こんどは、どっこいしょになって、

「どっこいしょ、どっこいしょ」
っていいながら家へ帰ってきて、かみさんに
「どっこいしょつくってくれ」
っていったら、
「そんなものはねえ」
っていわれたって。
「知らねえはずはねえ」
って、おかみさんをなぐった。そしたら、(おかみさんの)ひたいにこぶができた。
(婿さん)そのこぶを見て。
「これだ」
といった。
それで、だんごということがわかったって。(笊井)

むかし、あるところに馬鹿息子がいたって。
ある日、嫁のうちへお客に行ったって。
ご馳走もらって食ったら、
「こりゃあうんめが、なんてえもんだね」
「だんごっていうもんだ」
「だんごかね。へえ、こりゃうんまかった」
って。
「じゃあ、うちへ行ってつくってもらうべえ。だんごだね」
それで、忘れねえように、
「だんご、だんご、だんご、だんご、だんご」
っていいながらうちへ帰ってきた。
ところが、近道するんで、道でねえところを通ったら、堀があったんで、
「どっこいしょ」
ってとんだって。
そしたら、だんごっつうのを忘れて、こんどは、どっこいしょになった。
「どっこいしょ、どっこいしょ」
でうちへ帰ってきた。
そして、おかみさんに、
「おめえんちへ行って、どっこいしょもらって食ったらうんまかった。つくってくれ」
っていったら、おかみさんが
「そんなもんは知らねえ」
つう。
「知らねえがあるか。てめえがつくるんが上手でつくれるんだから、つくってもらって食べろって、(てめえの里のおっかさんに)いわれたんだ。
「わたしはそんなもんは知らねえ」
「知らねえわけがあるか、このあま」
って、こつんとくれたわけだ。
そしたら、こぶがふくれあがっちゃった。
「みさっせえ。だんごのようなこぶができた」
っていったって。
「そうだ、そうだ、そのだんごだ」
って。
馬鹿婿どんのはなしだ。(女屋)

馬鹿婿(れんこん)　むかし、あるところに馬鹿婿がいた。

はじめて、蓮根をみた。
「これは大根じゃねえ、はすだよ、れんこんだよ」
というと、
「ていねいに穴をあけたな」
といったって。（女屋）

むりどん　むかし、あるところに貧乏で借金の払えない男がいたと。
ところが、そのうちは、雨が降ると雨もりがする。
それで、
「借金とりより、むりどんがこわい」
といった。
そのうちへは、いつも、オオカミがきていた。
そのうちの人を食おうとしていた。
ところが、むりどんというこわいもんがいるということを聞いて、
それっからは、オオカミはこなくなったという。（笂井）

人がみたらカエルになれ　むかし、かねをためて、そのかねを勘定して、しまっておくのにツボの中にしまっておいて、
「ほかの人に見られたらカエルになれよ」って、ぬすまれねえように、いい聞かせておいたって。
そうしたら、泥棒がそれ聞いていて、ツボの中のかねみんなとっちゃって、かわりにカエルを入れておいたなんて。
今度は、その人がツボをあけた。
そしたらカエルが入っていた。
いくら、
「おれだ。おれだ」
といっても、カエルがかねにかわらなかったって。（女屋）

ひとつきにいっぺん　むかし、あるところにいい娘さんがいた。ところが、その娘さんは、「ひとつきにいっぺん屁をひる」という。
（それで嫁に行けないでいた）
そしたら、
「ひとつきにいっぺんぐれえよかんべ」というので、その娘さんを嫁にもらった人がいた。
そしたら、夜、旦那さんが、あすこをつくごとに、「ぷ、ぷ、ぷ」と屁をひったって。（上増田）

おもしろばはし　石臼ったま。
「このあいだの北風で、ここんちへ石臼ったまがとんで来なかったんべかな」
（じいさんがきて聞いたと）
「うちのくもの巣にひっかかっているからとってってくれ」
と、子供がいったって。
このはなしは、近所の宗さんのはなしてくれたもの。この人は大変おもしろい人で、みんなが寄ったときに、おもしろいはなしをしては、みんなを笑わせたって。
しゃちのはなし
「この世の中で、しゃちが一番強いんだ」
と、しゃちが自慢していたって。
「どんなもんだい」
といばっていた。
しゃちがやってきたので、おんなしゅがとっさに、しりまくってみせたって。
そしたらしゃちが逃げだした。
あとでしゃちに聞いてみた。
「わしは、二つまなこならこわくねえが、一つまなこでたて口だっ

たので逃げたんだ」（上増田）

おもしろいはなし　あるところに、新婚夫婦がいた。

ある日、夜中に嫁さんがしくしく泣いたんだと、

婿さんが、

「どうしたんだ、どこか痛いんか」

と聞いたら、

「そうじゃない。」

「どうしたんだ」

「夢を見たんだ」

「どんな夢を見たんだ」

といった。

そうしたら、

「花婿の大安売りというところがあった。花婿を売ってる店があった」

という。

「そうかや、じゃ、すこしはいい婿さんがいたか」

と聞いたら、

「まあいました。百万円もだせばちょっとしたんが買える」

って。

「そうか、じゃあ、おれのようなもんもいたかい」

といったら、

「いました。いました。」

いっそう大きな声で泣きながら、

「束なっていました」

といったって。

「一本百円の札がさがっていました」

といったって。

そういうはなし。（女屋）

のみの夫婦　上陽村に体がちいさいが、大やんという名前の人がいた。消防手になったけどほかの人と一緒に仕事ができないほどであった。

ある夏の日のこと、大やんは畑仕事に行っていて、そこへ、おかみさんが子供をおんぶしてナスもぎにきた。

子供を下におろしてナスをもいでいた。

ところが、夕立がきそうになった。

「御荷鉾の三束雨」といって、西南の方からくる夕立は雨足が早く、麦を三束まるかないうちにやってくるといわれた。

「早くおぶっつあれ」

と、おかみさんは、ナスの間で草むしりをしていて大やんをおんぶしてきた。

いそいでうちへ帰ってきた。

うちへきて、おんぶしている子の顔をみたら大やんだった。

「なあんだ、おとっつあんかい」

おかみさんはたまげて畑へひきかえした。

畑では子どもが泣いていたって。（駒形）

あるところに、のみの夫婦がいた。

あるとき、おかみさんがナスもぎに行った。そのとき、子供をおぶって行った。

畑へ行って、ナスをもごうとした。

そしたら、背中で、

「それはたねナスだからもぐな」

っていったって。
みたら、おんぶしていたのはおやじさんだったって。
おかみさん、うったまげて、おやじさんを畑へおっことしてきたって。（東上野）

むかしあるところに、のみの夫婦がいた。
ある日のこと、おかみさんが、自分の亭主をあかんぼうだと思って、おぶって畑へ行ったって。
そして、ナス畑で、ナスをもごうとして、ナスに手をかけた。
そしたら、背中で、
「おい、それはたねにするんだから、とるのはよしてくれや」
といったって。
おかみさんがひよいとみると、おんぶしているのは、あかんぼうでなくって、自分の亭主だった。
「このじじいめ」
といって、おかみさんは、亭主を畑におっぽりだして、うちへ帰ってきたって。（上増田）

むかし、あるおかみさんが、朝、もっくらおきで、子供をおんぶして、畑へ行って、ナスをもごうとした。
そしたら、突然、
「おっかあ、それはたねなすだからとんなや」
といった。
それで、おかみさんがおんぶしている子を見たら、それがあかんぼうでなくて、自分の亭主だったということがわかった。
「なんだ、このじじいか」
といって、帯ひっといて、旦那さんを、そこへほうりだして帰ってきたって。（笂井）

話の結句　話が終ると、「いちがさけ申す」といった。（栃島）

二、伝　説

下川淵の伝説　方尺の杉〈鶴光路町〉今の下川淵小学校の庭の杉、昔検地の時使用した物指をその樹の空間に埋めたという。或夜何者かそれに火をつけたので、杉の木のてっぺんに毎晩火の玉がついたという。

火の滝〈下阿内町〉昔、利根の渡場の近くに或る女が殺されて入れられた滝がある。その女は緋鯉となり、滝の主となってその滝に住んでいたという。

尼が橋〈公田橋〉公田の利根川に架けた橋は、或る尼僧が奉加を集めて作ったものといい、大いに人を利したが、今は流れて名前だけのこっている。

権左の土堤〈新堀町〉利根川に権左という男が溺死して以来、同じ場所で死人が多いので、権左のたたりかと供養した。後この事は止んだ。

化石（ばけいし）〈亀里町〉六地蔵のさお石らしい六角の石だが、昔盗まれた。ところが通行人があると、「竜門に帰りたい、帰りたい。」と呼ぶので、元の処へ戻したという。いまは小川に捨てられている。

鎌倉街道〈亀里町〉極楽寺の門前から鎌倉へ通ずる道を鎌倉街道という。鎌倉では極楽寺街道という由、常磐の墓があるからだろうという。

はりつけ田〈新堀町〉昔、人をはりつけにした芝地、いまは小さな

田になり、作る人にたたると言う。現在は特に変わった事はない。
常磐御前の墓〈亀里町〉極楽寺に常磐の墓という五輪塔がある。常磐はここで死に、頼朝が廟所を作り、阿内村に寄進した。また護持の阿弥陀仏一体も納めた。この秘仏は明治の頃迄あったが、角田某が無住に乗じて売払ったという。
魚遊寺〈公田町〉昔、寺に大火があったがいけの魚は何の変りもなく泳いでいたので、此の名ができたという。
片手不動〈徳丸町〉宝乗寺の不動は公田の不動と喧嘩して手を取られ、片手がない。
馬具塚〈亀里町〉小字古城址に古い五輪塔がある。これは常磐御前が乗って来た馬具を埋めた所に塚を作り、五輪を建てたのだという。
化薬師〈力丸町〉薬師様が毎晩化けて出たところ、勇気ある人に袈裟がけに切られてしまった。そのためいまも上半身がない。
化燈篭〈鶴光路町〉善光寺に六地蔵燈篭がある。昔化けたので鎗で突かれた。鎗の痕が残っている。
上川淵の伝説　血の降る石〈上佐鳥町〉郵便局の近くにある赤味がかった岩で、村の人が畑の中から出そうとすると血の雨が降ったという。
赤橋〈下佐鳥町〉下佐鳥と後閑と佐波郡上陽村西善との境、藤川に架けた橋は一枚橋といい、昔八幡太郎が戦いのときここに休んだ。その時は赤い石橋だったので上野の赤橋といった。
八穴橋〈上佐鳥町〉昔近くの林に八つの穴があり、狐が住んでいた。そこでこの橋を八つ穴橋と呼ばれた。
旦那坂〈後閑町〉後閑と天川の境にある。昔追剝ぎが「旦那々々」と呼びかけおどしたので、旦那坂の名がある。
おこり仏〈朝倉町〉昔、旅人がここで急死した。大小二つの石仏をおこり仏として祭った。大きい方を触ると腹痛になり、小さい方に触ると癒るという。この周囲をいきをつかず三回廻ると腹痛がとまるという。
八穴稲荷〈上佐鳥町〉阿内宿の某家に狐が嫁となった。子供が一人生れてからそれが発覚して追い出されたが、時恰かも田植の最盛期で、夜半に田植をたすけたという。
同様の伝説が一本杉正平稲荷にもある。女狐は「ウラドノハニクケレド、フタリノコガカワイサニ、ホニホニサキヤレ、ヤエボニサキヤレ」と唱いながら田植をしたという。この方は男女二人の子があったらしい。
利根川　元はせまくて、公田には尼が橋という地名があるように橋がかかっていたという。
下阿内では、利根川の松林で木を切ると、どちら側にもたおせたというくらいせまかったという。その木で蚕室をつくり、大きい建物だったので、味噌屋の清水井の建物になった。（亀里）
昔、利根川は狭く、竹棹でわたれたという。（公田）
ごし沼　今の繭検定所のところに沼があった。
ごし沼といっていた。そこには清水がわいていた。（上大島）
源太島　東片貝にあった。むかし池があった。
ヨシが生えていて、さびしげなところであった。
むかし、片貝の若いものが恋愛して、親の許しが得られないで一緒になれなかった。
二人は、それを悲観して、源太島のところへとびこんで死んでしまった。
うちのものがそこへ石塔をたててやったが、いつでも逆さになってしまうという。

その後、光ったもんがそこからとびだす。そして、空中をとんでいた。

わしも、馬をひいていて、その火の玉を見たことがある。

七つ八つのころだった。親と一緒に稲あげをしていた。親は馬をひいていて、わしは、しょいこで稲を背負って、馬をひいていた。

いぼやくしのところに、イノミの木があった。

そこまできたら、ぷうぷうという音がした。

あかりがついていた。

馬はたまげてしまった。

あとからうちの人たちがきた。馬が逃げたといったら、大さわぎをやって、馬をみつけた。

おやじがいうには、

火の玉はイノミの木のところから上長磯の栗山の杉の木のところまでとんでいった。それから先はわからなかった。

わしのおやじがやっぱり源太島の田へ、田の草取りに行って、けえりに、イノミの木のところを通ったところ、光っているものが出たので、はだしになって、長磯東の田の中をすどおしで逃げてきたらその後追いかけてきたという。

そのあとのことはわからない。（野中）

むかし、よく、「源太島がでた」というはなしを聞いた。

火の魂がとんだという。

源太とおしまという人がいて、心中して、その火の魂がでるといった。（野中）

お女郎石　上大島には、お女郎石というのがあった。この石を、わかいしゅがかつぎっこした。二十二貫ほどあった。かっこうの悪い石であった。それをかつげれば、女郎買いに行ってもよいといった。むかしは、この辺の人は、玉村まで女郎買いに行ったという。（上大島）

古利根のはなし　むかしは、この辺は大利根の底だった。

安堀のところが土手で高くなっている。

むかしは、かくしだがあったという。（下増田）

七里が土手　七里が土手の七不思議というのがある。

毛呂の目なし魚…片目の魚がいるという。

宮子の片葉のヨシ

須永のめくら八幡…キリギリスが八幡様をかじって八幡様の目がなくなったという。（東上野）

弥太夫堀　弥太夫堀（やだいゆうっぽり）というのがある。むかし、弥太夫様という人が堀ったという。宮原から出ている堀である。（上増田）

女堀　推古天皇の時代、女の時代に掘ったという。

しかし、女堀はできないで、そのあとに大正用水ができたものという。（天川大島）

田村屋敷　宮原の西、荒砥川に架っている橋を田村橋という。その近くの字名を田村屋敷という。（上増田）

朝倉ごてん　八幡山の北西の御殿山にあった建物で、春秋亭といった。元禄十五年に酒井忠挙が茶室として立てた。息子の安息所として作ったという。（朝倉）

乗明院の由来　天台宗の寺で、公田山魚遊寺という。慈覚大師の開祖という。魚遊寺の名の由来はこの地方の郡司が魚を寺のまわりの濠で釣っていたところ、池水が火気を発し火事になったので、住職が読経するとさめて魚群が集まってきた。そこで寺を再建して魚遊寺としたという。（公田）

音根沢　子供が泣くと、音根沢に化け猫が出るとか、音根沢へつれて行くといった。岡田養庵先生のところで飼っていた猫が、年をとってもぼれて、音根沢猫になったというはなしがある。（上増田）

天狗松　天狗松は、今の天川大島町の郵便局の西にあった。松並木の中の一本で、並木中で一番大きな松だった。

前橋藩の殿様が植えたものという。

しかし、並木のはじまりについての記録は残っていない。

殿様が四国あたりから転封してきたとき、こちらに松がなかったのでもってきて植えたものという。山の松でなく、（海の）沿岸の松を植えたという。

天狗松はさしわたし径が一メートル以上あった。

上が二つに分れていた。このいわれはわからない。枯れたので、県の方へはなして切った。（天川大島）

頼朝の鞍掛け松　山王の神社の北に、頼朝の鞍掛け松というのがあった。

大正五年の春、山王の坊さんがそれを欲しくって、檀家を村人足にだした。わしも行ってつなひきをした。ところが、でっけぇ松の木で、（植えなおしたが）つかなかった。（女屋）

親抱きの松　駒形の根岸さんのところにある親抱きの松は、天川大島の松並木の松と伺い年だという。

天川大島の松並木をつくるときに、この近在の人が人足にでた。そのときの人足頭が、小屋原の中村文弥さんの先祖の人だったという。

そのとき、あまった苗をもらってきて植えたという。

一本は駒形神社に植えた。

もう一本は、根岸さんのところ

もう一本が中村さんのところ

中村さんは、一本の松を、高砂の雑土林の中に植えた。それが黒松で、よく育ったという。大胡、藤岡街道を通る人がこの松を旅の目印しにしたという。それで、地名を一本松とした。

それから、この地方にも松が育つということがわかった。それで松を植えたのだという。

五平原の松…五平じいさんの茶屋の所。

近江屋の雷電神社のあったところ、この黒松を酒の銘柄にしたという→黒松正泉。（駒形）

お上人様の木　むかしから、お上人様の木は切れないといっている。木を切ったうちのものは病気になるといった。

森村菊男さんの親が消防団の役員をしていたとき、お上人様のいのみの木のこさぎりをした。

そしたら、その人のおっかさんが中風になったという。

菊男さんのところでは、うちのものが中風になったり、死んだり、うちが火事になったりした。

昨年、お上人様の西南にうちをたてた人がいた。枝を切ったが、その後なんともない。一枝でもとっては悪いというのに、この人はこさぎりをした。ムラの人はおっかねえことをしたといったが、なんともねえ。

むかし、女屋の人が、このいのみの木にのぼって小便をした。そしたら、木の上からおっこって、足をくじいたという。

お上人様のおまつりは七月二十日、このとき灯籠をつけた。（下長磯）

下長磯のおしょうにん様のいのみの木　下長磯のおしょうにん様の境内のいのみの木はたたるという。

むかし、女屋和十さんの子供の重雄さんというのが、おしょうにんさまの木にのぼって小便をした。そしたら、下へおっこって足をもい

じゃった。

下長磯では、おしょうにんさまの木をいじると、時の区長さんが死ぬといわれている。

この木のこさぎりをすると、区長さんが死ぬといわれている。ある時、三代つづけて区長さんが死んだという。

だから、まわりの桑原をもっている人も、枝がぶらさがっても手を出さない。どんなにかぶさっても切らない。

女屋の神社にあったいのみの木も、おしょうにんさまの木と同じくらいの大きさだったが、土地改良の関係で神社の移転のときに切ってしまった。

女屋の神社の木についてはたたりのはなしはなかった。

子供が手拭おとしという遊びをして、天下をとると、いのみの木のこぶしのところに腰をかけた。

土地改良のとき木を切って、そのこぶをわし（女屋義雄さん）がもらっておいた。

きりぶは下長磯のとよちゃんという人、この人のいうには、このいのみの木は、三百五十年以上たっていたという。

いのみの木のうち一本は、落雷のため中が空洞になっていた。

子供がいたずらに、石っころを投げて、その穴に入れていた。大正のはじめのはなし。（女屋）

下り松　広瀬川をはさんで、むこうの渕から、川の真中ごろまで、枝がさがっていた。この松を下り松とよび、芦原堰の上流、五十メートルほどのところにあった。

子供のころ、広瀬川で水浴びをしたが、橋からとびこんで泳いできて、松の上へあがって、てっぺんから川へとびこんだ。みんな一緒にそんなことをした。（天川大島）

船渡の松　今も松がある。巡礼橋の北のあたり。

下の小屋といって、ここに、番人がいた。この松は、船止めの松だった。船をしばった松という。（上大島）

上大島の舟渡（ふなと）というところに松が生えていた。舟渡の松といった。（永明小学校の南のところ）。

その松の木のところへ行って、お振舞のときに、膳椀をたのむと貸してくれたという。（小島田）

下川淵小学校の杉の木の伝説　下川淵小学校の校庭の西側にある大きな杉の木は、昔からその木を切ったり、枝を折ったり、登ったり物をぶっつけたり、根もとの石を動かしたりすると、どこか近くで、必ず良くないことが起こるといわれている。また現在では、木を傷つけると、その傷をつけた人が死ぬとかいうことだった。（新堀）

天川の弾正林　五差路のあたりを、ダンジョウ林とよんだ。

日光のまねをして、浜松の松を持ってきた。

処刑所があり、定例日には首切りを見にいったという話だ。（朝倉）

樋の滝　くもが足に糸をかけるので、株につけかえたら株がひっぱりこまれた。（笂井）

明治三十七年生れのおじいさんが子供の頃、父親（明治十一年生）から聞いた話。

端気川が利根川へ流れ込む少し上流に滝があった。狭い険しい滝だったが、年々まわりがかけていき、滝つぼが大きくなっていった。ここに大きい鯉が住んでいて滝つぼが赤くなるということから、緋の滝と呼ばれた。そしてこの鯉を見ると災難があると伝えられていた。有る時、釣りに行った人がそれを見て腰をぬかして、やっとの思いで

家に帰り、寝込んでしまい、しばらくおきられなかったそうだ、鯉が姿を見せるときは霧がまくといわれたので、釣人は霧がまくと、急いで逃げて帰ったそうだ。すこし上流のそばにある旧家の女中がもちつきの手あわせをしていた時、きねで頭をたたきわられそれで滝に投げ込まれた。投げ込まれる時、主人の家にうらみを残し「滝を登ってこの屋敷を欠いてやる」と言い残したそうでそのためかどうかは、しらないが、それからは主人の家は災難続きだったそうである。その後土地の人が水神様をまつり、おまいりに行く人もあったそうだが、この緋の滝も河川の改修のため、現在ではなくなってしまった。（下阿内）

改修前の樋の滝は下阿内側は杉の木が生い茂り、樋越側は雑木林だった。女、子供には近寄り難い淋しい場所だったせいか数々の伝説が生れた。

勢多郡誌に記載されている、伝説は『利根川の渡船場で女が殺され樋の滝へ投げ込まれた、女は緋鯉となり滝の主になった』。〈緋の滝〉

また村の古老の話では、いろいろとあり『昔、舟を通すために滝を埋めた、すると竜神様が怒って火の雨を降らせた。今でも竜神様の怒りは治まらず、滝を上へ押し上げている』〈火の滝〉

こんな話もある『川の端の家で餅をついていた、そのとき誤って手あせをしていた奉公人の頭を杵で頭を割ってしまった。動転したその家の人は、血で染まった餅と奉公人を端気川へ流してしまった。すると川の水まで赤く染まりその奉公人は滝で大きな鯉となった。それから緋の滝と呼ばれるようになった。この緋鯉が姿を見せる時は霧が滝壺にまいて、緋鯉を見た人は病気になった、釣りをする人は霧がでてくると早々に家に逃げ帰ったという』。〈緋の滝〉

またこんな話もある。『あるお大尽の処へ隣村から娘が奉公に上がった。お大尽はけちで口うるさく娘はお大尽を恨んで樋の滝へ身をなげ自殺をした。それから夜な夜なお大尽の処へびしょ濡れの体で幽霊となって出た。お大尽もこれまでのことを反省して娘の供養をしてやると、それからは幽霊も出なくなったという』。

広瀬川通船繁昌記にある樋の滝の話は、嘉永七年〈一八五四〉前橋商人、三川民平を筆頭人として、端気川に舟の交通ができるようにと松平の殿様に工事願いを提出、これが認可された。工事を始めたが下阿内村の樋の滝という難所があり、その高さ二丈ばかりある。これを掘り崩したり、また蛇篭や石を埋めてようやく平にした。その仕事は人間業ではなく、天狗か鬼人のやったようだ。これも領主、名君のおかげである。

噂によると、この樋の滝には大蛇の主が居て、樋の滝を掘り崩されて居所を追い立てられ、無宿者になってしまった。ところがこの大蛇、美しくも艶のある声で泣いて淋しい、この声誰が聞くともなしに噂になった。そこで、樋の滝の西へ石宮を建て、水神様として祀った。このとき嘉永七年三月、石田氏。

元々滝は端気川が利根川にそそぐ所だったが、五〇メートルくらい上流にのぼった。

滝の下に松の丸太がしずめてあった。

主は、蛇とあるが、鯉がいたという話もあり、大きい鯉を見た人がいる。

昔は端気川の水量が多く、ふちいっぱいまであった。（下阿内）

樋越の村の大尽の女中をうめた。それが鯉になって主として滝の中きいた。（朝倉）

竜宮の椀貸伝説　お振舞のとき、膳椀がほしいときには、いついっか、何人分の膳椀を借りたいと、書いたもんを竜宮の渕に入れると、ちゃんと貸してくれたという。渕のところには、うずがまいていて、そこへ書いたもんを投げ入れた。

ところが、あるとき、ごまかして返した人があった。そしたら、それからは、いくらたのんでも貸してくれなかったという。（上大島）

宮子の竜宮の渕は、荒砥川と広瀬川の合流点。ふちがあってうずがまいている。

振舞ごとがあったとき、お膳をいく人前、お椀をいく人前と紙にかいてその渕へ投げこむと、あとで、それだけの膳椀を貸してくれた。

あるとき、膳椀を借りた人が、足らなくなった膳椀をだまって返した。

そしたら、それっきりかさなくなったという。

なお、竜宮の近くにビクニデエというところがある。下増田分である。（駒形）

下り松のところに堰があった。

そこにむかし、竜宮があったという。

お振舞のとき、四十人分でも、五十人分でも膳椀を貸してくれとおねがいすると、間にあわせてくれたという。

口頭でたのんだという。すむと返した。これは竜宮で貸してくれたものという。

堰の名は芦原堰といった。そこには大きなうずがまいていた。

ここはむかしの大利根のあとといった。（天川大島）

（伊勢崎の宮子）竜宮へ行って、お振舞のとき、膳椀をいつ、いくつ貸してくれと、川の端へたのむと、それだけ膳椀を貸してくれたという。（上増田）

芦原堰（椀貸伝説）　むかし、お振舞のとき、膳椀が足りないとき、芦原堰のところへ行っておねがいすると、たのんだだけの膳椀がでてきたという。

ところが、あるとき、どっかのうちで借りたものを一つかくして返さなかった。そしたらそれからは貸さなくなったという。

むかしは、ムラの大尽のうちで膳椀をもっていた。人寄せのときには、大尽のうちから、十人前とか、二十人前とか膳椀を借りた。お振舞用の膳椀をもっているうちは、ムラにも何軒もなかった。

芦原堰は、広瀬川と韮川の分峡点にある。（下大島）

阿感坊のはなし　むかし、宮子に阿感坊という人がいた。

ある日のこと、竜宮へふじのつるを切りに行った。そしたら、鉈をおとしてしまった。見ると浅いところに見えている。

浅げなので、阿感坊は川の中へ入っていった。

そして、だんだん中へ入って行ったら、竜宮へ着いたって。

乙姫様は、はたを織っていたって。

阿感坊は、竜宮で、雲にのったり、雨を降らせたりして遊んでいた。

それで、三日べえ夢中ですごした。

「家へ行ぎたい」

といったら、乙姫様が、

「ここへきたということは、絶対にいうな、いうと、命がないぞ」

といったって。

阿感坊がうちへ帰ってみたら、うちがにぎやかだった。

「どうした」

といったら、
「今日は、阿感坊の三年忌だ」
といった。
三日間竜宮にいたと思ったら、三年たっていたんだって。
三年の間どうしていたと聞かれたが、絶対にいうなといわれているので、いわなかったと。
そしたら、代宮様がこのはなしを聞きつけて、しらべがはじまった。
「三年間どこにいたかいえ」
「いえば死ぬからいわない」
「いわなければ命をもらうだ」
阿感坊は、いっても、いわなくも、どうせ命はねえんだというので、竜宮でのことをはなしたって。
そうすると、竜宮のはなしをいい終ると時に、体がおとろえて、死んでしまったって。
なお、阿感坊は、竜宮から帰ってくるときに玉手箱と観音様のお像をもらってきたって。
その観音様をよこせといってきた。
阿感坊は偽物をこしらえて、代官様にやったと、今その観音様の偽物は区長箱の中に入っている。
玉手箱は、今、宮子の斉藤忠太さんのところであずかっている。これには、白いヘビがからまって守っているという。
宮子では、むかし、日照りが続いて困っているとき、観音様を竜宮様のところへもって行って雨乞いをしたという。このときは偽物の方を出して、本物は阿感坊のうちにおいてあるという。
竜宮様は、お振舞のときには膳椀を貸してくれるという。

いつ、いっか、何人前の膳椀を貸してくださいとたのむと、それだけの膳椀を貸してくれたという。
ところが、あるとき、誰か一つ膳椀をかくして返さなかったって。
そしたら、それからは、いくらたのんでも、膳椀はでてこなくなったという。（東上野）

むかし、宮子の阿感坊という人が、竜宮の辺へ竹を切りに行ったって。
それでなたを川の中へおとしたんで、それを拾おうと思って川へ入って、それっきりになっていたって。
何年が後に、うちへ帰ってきたら、何代も過ぎていたって。
阿感坊は、うちへ帰るとき、あかずの箱をもらってきた。それをうちへ大事にしまっておいたって。
阿感坊のうちから近くに殿様が住んでいた。その箱をだせといわれていたが、とうとうださずにおいたって。
第二次世界大戦が終ってから、前橋のある官庁の人がもって行ってあけたが中にはなにもなかったって。
このはなしは、宮子の斉藤忠太さんに聞いたもの。（駒形）

片葉のヨシ　鏡田のすぐ近くのところに、片葉のヨシが生える。
義経が刀で、片方だけヨシを切った。
それから片葉のヨシになったという。（駒形）

片葉のヨシは、ふつうのヨシより葉が細い。
こぶりのヨシである。
しんがでるときは両葉があるが、古くなると片葉になる。
片葉のヨシは、八坂樋の土手のところにある。

新土備前守が腕を切られ、土手に逃げたときその日（新茶）をすったヨシが片葉になったのだという。（下増田）

新土塚のところに、片葉のヨシが生えている。
伝説があるが、くわしいことはわからない。（上大島）

上増田にこえどの田圃というのがある。
むかし、殿様が越えたところという。
むかし、豊城入彦という殿様がやってきて、ここを越えたという。
その殿様の歩いたあとに、片葉のヨシが生えているという。
八坂樋という堀があって、そのそばのところ。上増田の東組の東の方で、二之宮とのあいだ。
豊城様の歩いた足跡に片葉のヨシが生えたんだそうだ。（上増田）

二之宮の新土塚のところに、片葉のヨシが生えているという。
（上大島）

駒形の清内地内の広瀬川のはじにヨシが生えている。ここのヨシは、何年たっても片葉であるという。
源頼朝が馬に乗ってきて、その馬がヨシを食って、そのあと、片葉のヨシが生えるようになったという。（野中）

旦那坂　朝倉と天川大島の境のあたりにある坂。
むかし、ここに追いはぎがでて、
「だんな、だんな」
といってよびとめた。
それで、旦那坂という名がついたという。

夜、人通りがすくなくなると、そこを通る人に、
「旦那、旦那」
といってよびとめる。
「なんだね」
というと、
「ちょっとかねが用だけど、貸してもらいたい」
といったって。
それで、そこの坂を、旦那坂とよぶようになったという。（天川大島）

朝倉の辺にある坂。
むかし、人がこの坂のところを通ると、子供がかくれていて、
「旦那、身ぐるみぬいで行ってくれ」
という。
かげで、大人が鉄砲をかまえているという。
それで、そこを旦那坂とよんだという。（女屋）

旦那坂は、天川の下か、朝倉分にある。
旦那坂はさびしいところだった。
むかしの農家は、稲荷まつりかえびす講でないと魚を食べなかった。
ある人が、イワシを買って、風呂敷に包んで首に結びつけて背負ってきた。旦那坂のところまでくると、誰かが、
「旦那、旦那」
と呼ぶんだって。
それは、オトウカが遊女に化けていて、
「旦那さん、旦那さん、遊んでいきませんか」という。化かされた人は、遊んだつもりになる。あとで気がついてみると、魚が一匹もな

いんだって。
うちへ帰る途中、オトウカに化かされて、秋そばの畑の中を、おお深けえ、おお深けえ」といいながら、そこから出て行ったというはなしもある。

旦那坂のところには、むかし、おいはぎも出たという。（野中）

だんな坂　上朝倉から天川に行く道で、坂になって二本あり、北を小だんな坂、南を大だんな坂とよんだ。
江原山と山にはさまれたせまい所で、さびしい所だった。
繭を売った人が金を持って通るとおいはぎが出て「だんな、だんな」とよんでよびとめ金をとったので、だんな坂とよばれた。
そこで、そこを通る人は、石ころを袋に入れたり、着物のたもとに入れたりした。
「だんな、だんな」とよばれたら、よんだ方に石ころを投げた。
段々坂というのが本当の名という。（朝倉）

鏡田　駒形町の清内というところに鏡田といわれるところがある。
むかし、源義経が家来と一緒にここへやってきた。戦いをしていて逃げてきたのだという。
それで、馬に水をやりながら、田をのぞいて、自分がどのくらいけがをしているかみたという。
そしたら、顔がちゃんとその田にうつった。それで、その田のことを、鏡田とよぶようになったという。（駒形）

宮川という用水路のところに清水がでていた。
くぼいところに水がたまっていた。
むかし、源頼朝がこちらへ征伐にやってきてけがをした。
水たまりをのぞきこんでみたという。
水たまりの田を鏡の代りにしたので、鏡田といった。
その田のまわりにヨシが生えていた。
なお、宮川のことは、ながっぽりともいっていた。（駒形）

むかし、源頼朝が愛馬するすみに乗ってきて、自分の姿をうつしたという田。
駒形町地内にある。
なお、するすみが倒れたので、矢田の寺にまつったという。その馬のひづめをまつったのが駒形神社。（駒形）

六文棒のこと　今の六文棒に休み茶屋があった。そこで六文のはぜ棒を売っていた。旅の人がそこで休んでいったという。
それで、六文棒という地名ができたという。（駒形）

五平原・桃井　むかし、五平というおじいさんが、今の駒形小学校の近くで、茶屋をしていた。
桃畑があって、店で桃を売ったり、井戸を掘って水をだしたりしていた。
それで、そこのところを、桃井というようになった。（駒形）

大島のこと　この辺は大利根のあとという。
利根川の中にあった島なので、大島と名づけたという。
この辺は、どこを掘っても石がでてくる。
もとはただ大島といった。それがのちに、上と下に分れたものという。（天川大島）

天川大島のこと　天川大島は、下大島と天川で半分ずつ、寄りあつまってつくったムラという。
樋沢・牛込姓の人は、天川から移ってきた人という。
新井・関口姓の人は、下大島から移ってきた人という。

原はむかし山だったところ、火葬場ができてから、よそから入ってきた人がつくったムラ。本村生まれの人は、もとはいなかった。

（天川大島）

天川大島のことは、むかしは、新地といっていた。

下大島へよったところへ人家をつくって住むようになった。

（下大島）

むかし、利根川がこの辺をながれていた。そのころ川の中に島ができた。

大嵐のとき、今の利根川になったのだという。

三島が残っている。（上・下・天川大島のこと）（上大島）

女屋の由来　むかし、この辺が旧利根川の川原だった時代、川原のあとがだんだん開けていった。

そんなとき、女だけで酒場をやっていた人がいた。

そのころの職人たちに酒を売っていた。

職人たちは、仕事が終ると、その店へ寄って酒をのんでいたという。

その女のうちがなまって、女屋になったのだという。（上大島）

むかし、古利根の時代にこの辺で戦さがあった。今の女屋のムラで、女の人が酒を売っていたという。それを戦さ人が飲みに行った。

女のうちへ酒飲みに行くので、女屋になったのだという。（女屋）

小屋原の由来　小屋原は、もと、小屋の原だったという。

小屋原姓があったが、玉村の角渕に移ったという。（笂井）

八日市　八日市という地名は、小島田にも、笂井にもある。両方の地域につながっている。小島田には、三角（みかど）という小字名もある。（小島田）

小島田の二本杉　牛橋の東に一本杉があった。すぐ前を東街道が通っていた。杉のところに石塔（五輪塔？）があった。

この石をたたいて粉にして、目につけた。これは目の神様として信仰されていた。（小島田）

鯨田　鯨田は上増田の小字名。そこには、ひとまちで七反くらいの田があった。でっけえ田圃でくじらだといった。

むかし、利根川が流れていて、鯨田のところまで鯨がのぼってきたので、その名がついたという。（上増田）

小字名　すみよしのそばにどうどう（百々）という場所があった。田村橋がある。これは、荒砥川にかかっている橋である。

その西に田村屋敷というところがある。

むかしは、そこを藤の木とよんでいた。

そこにうちの畑が四反あったが、そっくり荒砥川に入ってしまった。

（上増田）

ひだりい田　下増田にひだりい田というのがある。

むかし、そこんとこに比丘尼がいた。

その人が年をとったかなんだかで、食いもんがなくなった。

それで、比丘尼は

「ひだりい、ひだりい」

と泣きながら死んでいったという。

それで、そこの田圃のことをひだりい田というようになったという。

この辺にも、ふまがくるという田があった。

あのうちにふまがあるのは、あの田をつくっているせいだということを聞いた。（上増田）

お行塚（ぎょうづか）　今の茂兵衛地蔵の東のうちのところにお行塚がある。西高島地内。

そこにむかし行者がいた。土地の人からあがめられていた人であった。

あるとき、みんなのしあわせを願って仏になるといった。

穴を掘って、竹の節をぬいたのをもってその中に入った。そして、穴の中で鉦をならしていた。鉦の音が聞こえているうちは、水を筒から水を入れてくれといった。いく日かたってから成仏した。

それから、その行者の成仏した塚を、お行塚とよぶようになった。

今は無縫塔がある。

現在は、特別の信仰はない。(駒形)

竜宮のもとは下大島　ここから、宮子の竜宮へひっこしたものという。そのとき、三日三晩、雨が降り続いたという。(下大島)

義経の東下り　源義経が、東下りのとき、ここを通ったという。

桃木川にかかっている観音様を渡ったところに堀があって、その中に、でっかい石があった。その石に義経が腰かけた。それで、その石のことを、義経の腰掛石とよんでいる。(女屋)

小屋姓のこと　富士見村に古屋姓がある。

古屋家の先祖は、笂井がもとだという。

元禄十四年に原之郷へ行ったものという。「小屋」と記した石塔も位牌もあるという。古屋豊平さんのところがもとという。(笂井)

なた切り薬師のはなし　小屋原の長谷戸に薬師様がまつられている。

この薬師様のことを、なた切り薬師という。

むかし、弘法様がなたでつくった薬師様という。

むかし、祭文語りが、なた切り薬師のお堂に住んでいた。

わたしのすぐ上の兄が笂井小学校へ通っていて、腹痛をおこした。

忠男兄が彦重兄をおぶってきた。

長谷戸の石井家の墓場のところまで来たが、くたびれてうちへ帰れずに泣いていた。そしたら、祭文語りの人が、かわいそうだからというので、大塚田のうちまでつれてきてくれた。

それで、彦あんちゃんは、そのあと、うちを離れていたが、帰郷するとかならず、祭文語りの人のところへあいさつに行った。

祭文語りの人が丈夫のうちはそうしていた。(上増田)

九十九谷伝説　むかし、弘法大師がやってきた。

千谷あれば、そこへ寺をつくるということだった。

ところが(赤城山には)谷が九百九十九谷しかなかった。

一谷足りなかった。

それで、(赤城には)寺をつくらずに、弘法大師は帰って行ったという。(天川大島)

(むかし、弘法様がやってきて)百谷あるところに、一谷に一つずつお寺をつくろうつとした。

赤城山へきて、谷を数えたら、九十九谷しかなかった。

それで、赤城山はその場所にえらばれなかったって。(女屋)

義経の馬の足跡　源義経の馬の足跡というのが、後閑山にある。

後閑山の石にその足跡がついていたという。(女屋)

下長磯のおしょうにんさま　むかし、坊さんが、婆婆にさんざいたから、自分はもうあの世に行ぎてえというので、生き埋めにしてもらったという。

竹筒を自分の前まで埋めてもらって、中に念仏を唱えているから、鐘の音が聞えるうちは、水をさしてくれと、そういって埋まったという。一週間は、鐘がなっていたという。(女屋)

大尽になったはなし　しわくってはたらいてかね残したつうはなし

はある。
　むかしっから、安田善次郎という人は、おばあさんと二人で住んでいた。
　おばあさんが病気で病んでいたのを捨てて東京へ出て、樽拾いに入って、それからかねのこして、あれだけの財閥になった。六十歳までに七十依残したという。七十依のかね勘定するには、むかしの十円のかねで勘定して、一人で勘定したんじゃ六十年かかっても勘定しきれねえつう。
　自分で残したかねが、生まれてっから六十年かかっても勘定しても、勘定しきれねえだけのかね残したって。（女屋）

はせ五郎兵衛のはなし　むかし、はせ五郎兵衛という人がいて、十日夜に、高崎の観音様へおまいりに行った。その途中で、くわばらをうなっている人があった。
　それをみた五郎兵衛さんが、「この辺じゃ珍しいね。えんがの先にかねつけてうなうんかい」
といった。
　そして、
「うちの方じゃ、かね（刃）をつけねえでうなうよ」
といったと。
　そしたら、畑でうなっていた人が、
「そんなら、えんががさせなくってしょうがあるめえ」
といった。
　それで、五郎兵衛さんが、
「こうやるんだ」
と、刃をとってうなってみせたと。
　そしたら、その人も
「ほんとうだ」
といったって。
　五郎兵衛さんは、のせっくり（むてっこじ、いせいのいいこと）の人だった。（上増田）

おさか　天川大島の刑場で、一番最後に死刑になったのは、おさかという人。
「二十三町ひきまわされて、かかるところは天川の原」
といったという。
　最後に役人から、「食べたいものがあったらなんでも食べろ」といわれて、そばを食べたとかいう。
（べつの人のはなしでは、槍でついたら、それが胃から出てきたとか）（上大島）

近藤さま　櫛島村でまつっている人で、村おこしの偉人である。働くことをすすめるため、毎朝、馬にのって村内をまわったという。
　近藤弥一郎といって、藩の代官だった。（公田）

　昔、櫛島が大変貧乏していた頃、お城から家来の人が馬に乗って、鈴をならしながら村の中を通った。
　鈴で村の人をおこして仕事をさせたので、村は、だんだんゆたかになったという。
　その人をまつった祠が、神社にある。その人は前橋藩の代官で近藤ヤイチという。（櫛島）

三、世間話、怪異

(一) 世間話

① 人物

下大島の旧家　下大島で古いうちは関口家、長左衛門の系統。関口姓が多い。

高橋は二軒あるが、もとは山口、高橋の屋敷へ出たので、高橋を名乗っている。

むかしは、屋敷の名をたてた。

下大島には中川原というところがある。原といっている。古利根の名残り。(下大島)

笂井の石井家　笂井の石井家は、大胡の寺の檀家で、盆のときは、大胡までぼんぶちに行ったという。(笂井)

笂井の姓　羽鳥は丸力から来たという。しかし、その系統は三つほどある。その中で、力丸系統の羽鳥姓が一番多い。

笂井では、小屋、丸橋、大手姓が古いという。(笂井)

式守という苗字　奈良太一家の墓地に筆子塚がある。

その墓石に書かれている筆子の一人に

サイ川式守助太夫

と記してある。(上増田)

上増田の木村家　繁年橋から近戸様までの間は、本家(木村一男家)の土地であったという。(女屋)

笂井の旧家　大手、丸橋、小屋、須藤が笂井の旧家という。

このうち、小屋がうんと栄えた。

もとからの小屋のうちはすくない。

小屋の空き屋敷へ入って小屋を名乗るうちもあった。また、よそからきて小屋の姓を名乗る人もあった。

小屋家では三輪様をまつり、三輪講という行事をしていた。(笂井)

笂井の羽鳥家　笂井の羽鳥家は、もとははっとりといった。

はっとりをはとりと聞きちがえた人がいて、はっとりがはとりになったという。

もっとも、もとからはとりという姓の人はいたという。はとりは幡州からきた家という。(笂井)

女屋の井田家のはなし　井田家は、人数があんまりなくって、飯を煮て、釜のまん中だけ食って、あとは寺沢川へ流していたという。

一人娘が死んで、三左衛門はそれから道楽して、身上がなくなったという。

このはなしは、食いもんは粗末にするもんではないというはなしとして聞いていた。(笂井)

大胡のお寺が菩提寺だった家　丸橋家と石井家は、むかしは、大胡のお寺が菩提寺だったという。

今は安養院が菩提寺になっている。

笂井から下長磯へ行く道のところに、しゃくぜんという地名がある。

そこには、しゃくぜん寺という寺があったという。その寺の檀家が石井、丸橋家だったという。

大胡のお寺は、こっちの寺のぜんと長をあわせて、長善寺としたのだという。

ところが、大胡の寺は、遠いというので、こちらの寺へ宗旨をかえたという。

大沢、井野の両家は、小屋原から駒形へでたという。

大体、駒形の上組には、小屋原に縁のあるうち(大沢とか井野とい

う苗字のうち）がある。
笂井では、大手、丸橋、小屋、須藤が、檀家であるという。（笂井）
関口家のこと　関口家は、むかしの豊受村の方からきたという。
天川か後閑の方からきた関口家もあった。
天川大島の関口と新井家は、下大島の来迎寺の檀家である。（上大島の浄土院の檀家もある）（下大島）
木暮姓のこと　駒形には小暮と木暮の姓があって、双方をこぐれと呼んでいた。
小暮は上（一丁目が多い）に、木暮は下（六丁目）にあった。
明治二十二年ごろ、親類が寄り合って（木暮丈吉さんという人が中心）、下の木暮をきぐれと呼ぶようにしたという。
上と下の呼び方を分けたわけ。
わかりやすいようにということである。（駒形）
石取りさま　検見に来た役人のことで、座敷に備後の畳の上に床机をすえて南向きにすわった。庭ではかるのを見ていた。
役人が来るので、中村家の便所の板は一枚板だった。（亀里龍門）
三人三助　上増田の大塚田に三人三助といわれる人がいた。
「助」という字のつく名前の人が三人いたというが、本当の名はわからない。
この三人が、あるとき伊勢参りに行ったんだって。
そいで、お伊勢参りに行く途中、お百姓さんが縄をひっぱって（つなを張って）さくを切っていたって。
それを見た三人、からからと笑ったと。
田の中にいて、さくを切っていた人が「なんで笑うんだ」
といった。
そしたら（三助のうちの誰かが）
「こんなもんはいらねえ」
って、はってあったつなを切ってしまったって。
すると、お百姓さんが、
「それじゃ、おまえさんは上手にさくがきれるんか、おまえさんがきってみろ」
っていったって。
そしたら、三人が交代で、一はかのさくを、つなぎ、つなぎできってみせたって。
つなを張ったと同じように、上手にきってみせたって。（上増田）
大前田栄五郎　昔ここまで逃げてきて、利根川を渡って、軍艦岩にかくれたという。（新堀）
三輪箭次　寺小屋の師匠で、赤城下の天神さんといわれた秀才だった。明治十年頃生まれた人は教えを受けている。（亀里龍門）
よたろうの話　昔、よたろうという名の人がいた。ある日、よたろうが魚つりに行ってとっても大きななまずをつった。そのなまずがあまりに大きくて、手で持てなく背中にかついで持ち帰ったが、帰る途中「いわれの木」〈下川淵小にある〉という木があり、そこを通ってよたろうは帰るのだった。
そうして、よたろうが「いわれの木」の横を通っていると「よたろう、よたろう」と自分を呼ぶ声が聞こえたので、後をふりかえってみた。しかし、誰もいない。ふっと今度は返事をする声が聞こえてくる。又、あとをふり返ってみたが、やはり誰もいない。すると今度は「よたろう」と呼ぶ声が木の上から聞こえてくるのだった。木の上を見てもやはり誰もいない。今度は返事が自分の背中のすぐ後ろから聞こえてきた。そうです。なまずが返事をしていたのです。気味悪くてそのなまずをすてやっとのことで帰ってきたのだった。しかしよたろ

うのお母さんがよくばりで「なんでそんな大きいなまずをすててきたんだい」とよたろうを怒った。そして「もう一度行ってひろってこい」といいつけたが、こわいのでお母さんと一緒に行くことにした。いわれの木に着いてみると、なまずは木にのぼっていたとのことだった。（横手）

やくざの話　下阿内村の古老の話では端気川のお諏訪橋のたもとに三文商いをしている店があった、そこに村の若い衆が集り博ちを打っていた。手先の器用な若者がいかさまをやってしこたまもうけた。ほかの若い衆もいかさま博ちとは思っていなかったらしく、「うんまくやったなあ」と口々にいいながら帰っていった。ところが本物の博ち打ちがいたのである。帰ろうとするその若者をやさしく呼び止めた「若い衆ちょっとまちな」そう言うと、懐からギラリとした短刀をとりだすと若者の腕をつかんで「これが悪いことをしたのだ切っちまおう」。静かに言うだけに凄みがあった。若者は平謝りでようやく許してもらったという。大前田の子分だったのだろう、そんな話をしてくれた古老がいた。また下阿内の墓の石碑にサイコロとツボの彫ってある墓がある。大前田一家の子分だった人だという、大きい石碑である、子分でこれだけ大きい墓なのだから大前田栄五郎の力を思い知らされる。

栄五郎は人間的にも大人物だったらしく、当村にも尊敬していた人がいて自分の子供に栄五郎と名付けたひともいるくらいである。

栄五郎は明治七年、博徒には珍しい八二歳という高齢で大往生を遂げた。その葬儀に清水次郎長の名代として、追分半五郎が来たと言う話も伝わっている。（下阿内）

井田三左衛門のはなし　むかし、井田三左衛門のうちはおおくとくせいで、どうしたらこの財産がくずれるだんべかと、人に聞いたって。そうしたら、その人が、三食食って、膳椀を粗末にすればくずれるといったって。

三左衛門はそうしたら、そのとおり財産がなくなったって。

今の田代勝男さんの西に屋敷があった。（女屋）

島崎宗次郎さんのいったことで、井田三左衛門は、当時の女屋の地所の三分の一をもっていた。（女屋）

梨大尽　関口梨昌翁のうちのことを、ムラでは梨大尽とよんでいた。

頌徳碑のとなりに関口翁の墓地がある。

梨昌翁の家は大きかった。間口が九間。部屋が九つあった。部屋が三つずつ三列にならんでいた。屋根に板ぶきだった。書院づくりの部屋があった。（下大島）

関口安太郎さん（代議士）のこと　梨昌翁の顕頌碑をたてたときの記念の小冊子がある。これは、梨組合で発行したもの、大正十四年にだした。

梨昌翁（長左衛門）のひこ孫が関口安太郎さんである。関口恒二下大島町自治会長さんのおじいさんが関口安太郎さん。

安太郎さんは、代議士になってからは、今の煥乎堂の音楽会館のところに住んでいた。下大島の本邸は、屋敷の広さが三千坪くらいはあった。

児童公園のところにあった牧場にも関係していた。市内にも土地をもっていた。

安太郎さんの家は、当時下大島で一番の大地主だったが、代議士になってから、土地を手放したという。

安太郎さんの弟さんで、代議士になった人もあった。

また、もう一人の弟さんで、両毛線の会社の技師長格の人がいた。

この人のおかげで、両毛線が早く敷けたという。この人は、両毛線が国営になったとき、会社をやめたという。（下大島）

関口栄吉さんのこと　関口佐十郎さんの父親が栄吉さん。

この人は生糸商をしていた。甘楽社駒形組という組合製糸を経営していた。

この人は、江戸まで行くのに、朝の夜明けごろには、熊谷まで行っていたという。作男に馬にのせてもらって、熊谷まで送らせたという。

うちでは、大掃除のとき、駒形組の大福帳を細くきって、はたきをつくったのを覚えている。（下大島）

木瀬貯蓄銀行のはなし　木瀬貯蓄銀行の中心人物に、小島栄太さん、関口栄吉、下田弥三郎氏など。小島氏が頭取をしていた。今の町田卯三郎さんのところの前の土蔵が銀行。

のちに、上毛実業銀行に吸収され、その駒形支店となった。

上陽の田は、ほとんど小島さんのところの田だったという。

駒形に五十嵐さんという家があった。このうちは機屋をしていて、伊勢崎銘仙で大もうけをした。

そしたら、一般の人は五十嵐さんのところへ金をあずけに行って、上毛実業銀行へはお金をあずけなかったという。

農家の人たちは、当時の銀行よりかねもちの方を信用していたのだという。（下大島）

榎店のこと　小暮さん（現美好さん宅）のところは、榎店（えのきだな）と呼ばれた。

近所の人は、むかし、小暮さんのところでは物を運んできた馬を休ませた（つないだ）のでたてばんちといっている。榎店という人もある。

この辺は、駒形の一丁目になる。

大昔、この辺のうちのもと（先祖）は小屋原の人であったという。小暮という苗字も小屋原にある。屋敷に榎があったので、榎店といった。（駒形）

下田弥蔵さんのうち　弥蔵さんのところでは屋敷内の塚（古墳）の上に、八幡様がまつってある。

稲荷様はべつにまつってある。これはわら宮で、まい年つくりかえた。

弥蔵さんのうちの屋敷には、大きい松があった。赤城山から見えたという。

大正年間に、あらしで倒れてしまった。（小島田）

でんぼう好きののぼるさん　東上野にでんぼうの上手なのぼるさんという人がいた。

まんからをいうが、それがまんからとはわからなかった。ほんとげはいった。つくりごとがうんまかった。

そのために、ムラの人は、のぼるさんのことを、「でんぼうのぼる」といっていた。

よそからきた人まで、のぼるさんのでんぼうを知っていた。

のぼるさんのでんぼうを、一度聞いたことがあった。

これは、第二次世界大戦の末期のころのはなしである。

泉沢の沼とか大胡の千貫沼へ、アメリカの兵隊が飛行機でおりたって、うんときて、水浴びをしたり、日本人を刀でうんと切ったりしているという。

のぼるさんは馬喰をしていたから、よくうちへも来た。牛屋できてそんなはなしをしたのである。

そのはなしを聞いて、おれとおとっつあんはおっかなくってふるえていた。

みんな殺されるだんべえと思ってふるえていた。
ところが、あとで、そのはなしはでんぼうだということがわかった。
太田の方へ、敵の飛行機がうんと見えたころのはなしである。
このはなしは、本人から聞いたもの。（東上野）

寿美蔵碑　竹本大国太夫は、大坂で旗上げをしたという。
その記念碑が、駒形造園の下にある。（駒形）

内田忠順　内田忠順は駒形の医者。福田宗禎の弟子、蘭学を学んだ人。寺子屋の師匠もした人。善心塚に忠順の墓がある。（駒形）

耕作じいさんの失敗　駒形の耕作じいさんは、大正八年に、東京浅草で開かれた平和博覧会の見物に行った。
そば屋に入って、もりそばをとった。
「こりゃやすいや」
といって、せいろそばにじかにおつゆをかけた。
おつゆはせいろの下にこぼれた。
耕さんは持っていた手拭でおつゆをふきとった。そして、それをチョコにいれてそばを食べた。
そばはまずかった。
こんどは、耕さん。
「東京のそばはまずいや」
といったって。（駒形）

物ぐさもんの平吉さん　むかし、隣のうちに平吉さんという人がいた。
この人はものぐさもんであった。仕事がきらいで、田植もおそかった。
田植は、ムラで一番おそかった。それで、「足洗い田」といわれた。
たたみを外へ干しておいて、とりこまないでいて、くさらせてしまったという。（上大島）

まんから七やん　上大島にまんから七やんという人がいた。
「七やんのはなしじゃわかんねえ」
といわれた。
たとえばこんなはなしがあった。
ある人が、
「蚕飼って、桑がたんねえ」
といったら、
「桑はあるよ、あすこんちじゃ、桑が余って、売りてえっていっているよ」
という。それで、そこんちへ行ってみると、桑はなかったって。
千三（せんみつ）といわれる人がいた。千に三つしか本当のことをいわないのだという。（上大島）

みつまん　東上野に、みつまんというあだ名の人がいた。
万に三つしかほんとうのことをいわないのでこの名がついたという。（天川大島）

嘉造天狗　二之宮に、嘉造天狗といわれる人がいた。この人は働くのが好きの人、人もつかっていた。一銭のかねも大切にするような人だった。
この人は、生きているうちに葬式をしたという。自分の屋敷に石塔をたて、新盆もしたという。譲りしたという。（上大島）

良寛さんのはなし　良寛さんは大変おだやかな人だったという。身なりをきたなくしておいたものだら、のみ、しらみがいっぱいたかっていたって。
それで、良寛さんは、
「のみしらみ、野になく秋の虫ならばわがふところは、武蔵の原」

と詠んだって。（上増田）

どんどこじい　むかし、上大島に、どんどこじいと呼ばれる人がいた。

この人はおがみやさんで、こうすけやんといった人。病気のとき、この人におがんでもらった。

あるいは、聞きに行った。

子供が夜ねぶらないときに、おがんでもらいに行ったことがある。

この人は、太鼓をたたいておがんでいたからどんどこじいとよばれた。（下長磯）

力持ちの話　笂井の斉藤徳治さん（明治三十五年ころの生まれ）は力持ちだった。

この人は、自転車のうしろの荷台に米を二俵つけ、一俵はかついで、自転車に乗って、笂井小学校の校庭をまわったという。（片手でハンドルをもって）

前橋へは、二俵ずつはこんだ。

力のある人は、米俵を三俵ならべておき、一升ますの上にのぼって、真中の一俵をぬいてかついだという。俵の両わきにあがって、真中の一俵をひきぬいた。

わかいしゅは外風呂の湯がまを二人してはこんでしまった。湯に入ろうとしたら、湯がまがなかったというはなしがある。（笂井）

奥原の力持ち　むかし、奥原に力持ちの人がいた。深沢嘉一さんという人、この人はこびきだったという。

あるとき、二人して、泉沢から大きな石をはこんできたという。

木を切っていたとき、木の下敷きになってしまった。

おきあがろうとして手をふんばったら、手が土の中へめりこんでしまったという。（下増田）

ポンプをつくった人　島崎弥吉さん（五十郎さんの親、万福寺の坊さんの親）は竜骨をつくった。これをりゅうこしといっていた。これは手押しポンプのこと、このポンプから出た水が、竜柱を越したので、そのポンプのことを、りゅうこしといったものという。

田代幸太さんという人もポンプをつくった。（女屋）

利作さんのこと　女屋利作さんに女屋の人。米夫さんの父親明治のはじめに生まれた人。

利作さんはこんなはなしをした。

「おれは天皇陛下と親戚だけど、多く近い親類がふえたので、このごろはおつきあいはしてないだ」

といったという。（女屋）

上大島のおがみやさん　上大島の湯沢国蔵さんは、この界隈ではおがみやさんとして有名だった。

女屋から上大島へ婿に入った人。

女屋の尺地様を信仰していたのもこの人。

この人のところへは、方々から見てもらいにきた。縁日のようにみてもらいにきた人があったので、梅をたくさんつけておいて、お茶菓子としてだしたという。（大樽に一つつけておいた）

病気の人をみて治してやったりした。

玉村の方からもきたという。

あるとき、天川の方から二人でみてもらいに来た人があった。この二人の人は、来ながらおがみやさんにいくらやったらいいかと、はなしながら来たんだって。十円とか二十円とか、二人で相談してきたんだと。

二人はみてもらってから、おがみやさんに、「どのくらいやったらいいですか」

と聞いた。そしたら、おがみやさんは、
「あんたがたは、相談してきたんべ」
といわれたって。
この人は、いれもんの中にどじょうを入れておいて、その中に幣束をたてる。その幣束がゆれると神様がのりうつったといったという。
神様を入れた風呂敷を背負って、「だまくらかしてくるか」などといって出かけたという。
人の悪いことをなおしてやって、それが自分のところへもどってきたといわれた。自分の子供が不孝な死に方をしているので、ムラの人がそんな悪口をいっていた。
この人は、掛軸のようなものを背負っていった。
この人のところへおがんでもらいに来たり、よそむらまでかけて行ったりした。
この人は、先をよんであてた。おがむとあたるという。（二六島）

波志江の岡田家のこと　波志江に岡田さんというちがある。
あるとき、大晦日の晩に、ご飯が残ってはというので、番頭さんに、
「冷飯を一杯ずつ食べてくれ」
とだしたと。
そしたら、そのうちの一人が、
「大晦日に冷飯とはこれはつなり」
といったと。（上大島）

上野のでんぼう　東上野にでんぼうがいた。世間の人からは、まんからやといわれた。馬喰をしていたから、でんぼう馬喰ともいわれた。
なんでも、いいかげんなことばかりいっていたという。（野中）

長谷戸のKさんの話　長谷戸のKさんは、よく人のものを持っていってしまうという。
てんがを畑に置いておくと、
「おじやんと仲よくしなよ、一緒に行ぐべえ」
といって、そのてんがをかついで行ってしまうという。
それだから、ムラの人は、
「Kさんがくるから」
といって、農道具はうちへもっていったという。（上増田）

関口家のこと　関口家はもとの苗字はわからないが、つぶれ屋敷に入って関口姓を名乗ったという。
勝三郎さんのうちが古い。
むかし、関口天神があったという。神主さんに聞いたはなし。
関口一家の正月三が日の家例は、そばがれい。
三が日は、朝はそば、夜はご飯。
朝は神様にそばをあげたり、食べたりする。
三が日は餅を食わない。食うとできもんができるといわれた。
（上増田）

中村家　中村さんのところは、キュウリをつくってはいけないという。（上増田）

小屋原の布施川家のこと　吉井町にも布施川姓があるが、小屋原から移ったものという。
むかし、馬に乗って、先祖の墓参りにきた人があったという。
布施川家では、正月のお飾りは、一夜飾りである。その理由は、むかし、先祖が戦争から帰ってきたのが大晦日だったためという。
そのために、一家の者がみんなして、七、五、三をべつべつにつくって、あわせておもてざしきの入り口にかざったという。（四組つくった）
むかしは、何軒かであつまって、三十一日の晩は、おかざりを共同でつくったという。それを分けてもちかえった。（小屋原）

生まれかわり　むかし、大尽の人が死ぬと、足の裏にその人の名前を書いてやった。そうすると、どこかへ生まれかわったという。

ところが、それを悪用して、もとは大尽の子だったけれども、貧乏っ子に生まれかわったと同情をひいて、おかねをとったというはなしがあった。むかしのことだが。（女屋）

大食のはなし　あるところに大食の人がいた。

あるとき、下山の忠まんじゅうを十くしくった。そのあとうちへ帰ってきて、あきあげのぼたもちをまた食ったって。（天川大島）

大食の人の話　今から五十年も前のこと、川島喜太郎さんという人がいた。

この人は、あめえもんが好きで、へったなし。

麦まき時分に、あんぴんを四十六コ食べたという。

さくを切ることになったが、四十六コも餅を食ったのだから、田へ行っても仕事にならなかった。

ももひきをぬいで半ズボンをはいて、さくを切ってむこうのクロのところへ行くため糞をひって、またこっちへさくを切ってくるとズボンをぬいで糞ひって、それをくりかえしたって。（下長磯）

ある大尽のはなし　ある大尽（地主）の家で人をつかっていた。

この主人は人づかいがあらかったという。

三時休みには、ジャガイモをゆでたり、サツマイモをふかしてきて、

「うんと食え」という。

「遠慮すんな、遠慮すんな」

といってくれた。

番頭さんが、

「いいよ」

というと、

「おまえは、本当に遠慮ぶかいな」

といって、わざわざ手渡しにしてくれたという。

これは、こじょうはんをうんとくれて、夕飯のたしにするためであった。（笊井）

赤城下の杉大尽　石井要作さんのところは、むかし、赤城下の杉大尽といわれた。

むかしはえらい大尽だった。

そこのうちのあるじは、農業をするのがきらいで、馬喰をはじめて、

「上州の旦那、旦那」とおだてあげられていたという。

へんな馬を売りつけられたりした。

馬を買ってきては、でっけえほらをふいていたという。

旦那ぶっちゃったもんだから、身上をつぶしてしまったという。（野中）

力丸の羽鳥大尽のはなし　力丸の羽鳥家は、正月三が日の間は、せっちんへ入って、しなびたかぶをかじった。

むかし、食うものがなくって、かぶがとってあったので、かぶを食べた。そのことを見習ってのことであるという。（女屋）

にわか大尽のはなし　あるところにMという大尽がある。

そのうちは、むかし、ごぜさんを泊めた。

ごぜさんがもらってためたぜにを持っていた。

そこんちのおやじさんが、

「そんな大金、あんたがもっていてはあぶねえ、わしにあずけておかねえかい」

といって、おかねをあずかったって。

ごぜさんが帰るときになって、あずけたかねをかえしてくれといったら、あずかったおぼえはないといってかえさなかったと。

そしたら、そのごぜさんが、帰るときに泣きながら、
「今にみろ」
といったって。
それから、そのうちでは、体の不自由の子供ができたという。（不幸が続いたという）
世間では、そこのうちのことをごぜ大尽というあだ名で呼んでいた。
（天川大島）

玉風と電光のはなし　これは、明治のころのはなしである。
駒形に、玉風と電光という足の早い馬がいた。
玉風は北海道の産、電光は三里塚の産であった。
玉風は、根岸の牧場で半脱臼してもらってきたという。
電光は、天皇陛下のおいでになる式のときに、とびだして無礼をはたらいたというので、殺されるところを、牧夫の人が、駒形の小島さん（常三郎さん？）と知りあいで（縁つづき）こっちへもらってきたものという。
はじめは、玉風の方が早いが、後半になると、電光にかなわなかったという。
子供のとき、竹の先にわらで馬の首をつくってつけ、わら馬をつくった。たずなをつけて、これに乗ってあそんだ。
「はいこう、でんこう三十回、玉風のこせば（のりこせば）一着だ」といってあそんだ。（駒形）

桃中軒雲右衛門　桃中軒雲右衛門の弟の松五郎さんが住んでおられたのは、小屋原のお寺の裏で、細谷持徳さんのうちのあたり。
雲右衛門は小さいときに、上増田の木村清さんのところで世話になっていた。
夜になると、桃木川の（養庵堰の）堰端へ行って、稽古をしていたという。堰の音がするので、声がよそへは聞えないので、ここで声を出していたのだという。
よそへ興業に行ったときには、人力車にのって、太鼓をたたいて、ふれてあるいたという。（小屋原）

雲右衛門は義太夫語りだった。
せいうんという人が浪花節語りだった。
この二人は、上増田の木村清さんちにいたという。清さんのところは、新屋敷とよばれた。当時の当主は勘八やんという人、この人は馬喰で、芸人などを寄せる人だった。（上増田）

桃中軒雲右衛門は、上増田の生まれという。浪曲の元祖という。
（天川大島）

桃中軒雲右衛門、琴右衛門　雲右衛門親子が、この辺へ仕事の手伝いにきたことがあったという。
雲右衛門は、小さいとき、上増田の桃木川にある養庵堰のところでけいこをしていたという。
雲右衛門の弟子に、琴右衛門という人がいた。この人は、明治二十二年生まれの人。（駒形）

雲切り源右衛門　うちの前のうち（青木家）の隣にご年貢米を納める御蔵（おくら）があった。そこにでっかい白蛇がいたという。
そこを富沢源右衛門という人が通りかかってその蛇をぶったぎったと。
その蛇は、天に舞いあがって見えなくなった。
源右衛門のことを、その後、雲切り源右衛門と呼んだという。
その後、そこのうちの者は、うち中目をわずらったって。

易者に見てもらったら、蛇のたたりだという。
それで、蛇をおまつりした。川のはたに諏訪様をおまつりした。一年に一回、稲荷祭りの日に赤飯をふかしておまつりをしている。（野中）

閑家のこと　上長磯の閑家は、むかし、赤城南の七軒の資産家といわれた。身上が傾いてから終るまで、三代かかったという。
今でも年寄りの人は、閑家のことを大尽とよんでいる。閑家のことは越後まで聞えていたという。市五郎大尽といわれていた。
上長磯の稲荷様の本殿は、閑家でつくったものという。
浅間焼けのあとで、ききんで仕方なく、閑家で、飯をくれて仕事をさせたという。貧民救済で神社をつくったという。（上長磯）

駒形茂兵衛のこと　むかし、小屋原の庚塚の水車の近くの墓地に石塔があって、茂兵衛の墓だといわれていた。
出征していて、終戦になって、二年間、ビルマで抑留されていた。そのとき、いろいろのことをやらせられた。
寸劇をやったりしていたら、人気があって、劇団をつくった。群馬県出身の人が多かったので、劇団の名前を、「大利根劇団」とした。
その劇団が上演した劇の中で、一番うけたのが、「一本刀土俵入り」だった。
戦友から聞かれた。
「金井さん、茂兵衛はどういう人物だか知ってるかい」
親の代から、茂兵衛のことなど聞いた覚えはない。
「知らねえよ」
と答えた。
女屋覚元さん（県の副知事）の兄さんが同年兵、後にも聞いたが、「茂兵衛のことなど聞いたことはない」という。「おめえが知らねえのにおれが知ってるはずがねえ」といった。
うちへ帰ってきてからのこと。
駒形の劇場へきたという劇団の人が五、六人で、茂兵衛の墓参に来た。
そのとき、わたしは、庚塚の近くの田圃で仕事をしていた。
「茂兵衛さんの石碑はどれでしょうか」
と聞かれた。
わたしも、うちへ帰ってきてから、茂兵衛のことについては興味をもって、駒形の人たちに聞いていたので、茂兵衛の石碑というのも知っていた。
「これだつう」
と教えてやった。
庚塚の墓地のところに、その墓石というのがあった。
その人たちは、その墓におまいりして行った。
昭和二十四、五年のころのことだったと思う。
その人たちは、和服で、インバネスを着ていた。寒い時期のことであった。
それから、「一本刀土俵入り」の映画がうけて、茂兵衛の存在はえらいことになった。
仮空の人物みてえのを、今のところへもって行って、駒形が売りものにした。観光の宣伝につかった。
（茂兵衛地蔵の）縁日もきめて、にぎやかだった。灯籠もついたし、出店もでた。
（地蔵様の）除幕式があった。
俳優の加東大助もきた。
町田酒造の社長さんが土地をだして地蔵様をつくった。
ところが、いつのまにか（人気も）消えてしまった。

一番よかったのが、水戸屋さん。
あの人だけがもうかった。
ビルマで、「一本刀土俵入り」を上演したとき、おつたに紛したのは、佐野の生まれの若者だった。これが大変上手で、外人がこのキャンプには女がいると大さわぎしたほどだった。（小屋原）
東上野に駒形茂兵衛のモデルがいて、墓がある。（天川大島住宅）

小屋原の人らしく、墓は泉蔵寺にあったが、今は駒形の茂兵衛地蔵尊にある。過去帳は泉蔵寺にある。（小屋原）

駒形の亀井さんという人が、おばあさんに聞いたはなしが、「一本刀土俵入」のはなしのもとだという。
亀井さんという人がそのはなしをもとにして小説を書いて、長谷川伸のところへ送った。批評を求めるためにそうしたものという。
そうしたら、長谷川伸が、そのはなしを小説にした。それが「一本刀土俵入」であるという。亀井さんは、長谷川伸に小説をとられて、やけがったという。（笂井）

横沢重五郎という人　笂井に横沢重五郎という人がいた。
材木屋をしていた。山師であった。
まわりの人からは、山重さんとよばれていた。
英五郎の代貸をしていて、子分の中では指折りの方だったという。
この人は、生きていたころは羽振りがよかったが、死んだあとには、待金があって、財産はなかったという。
今は屋敷だけが残っている。羽鳥隆治さんの屋敷がむかしの重さんの屋敷である。むかしは横沢という屋敷であった。
おやじさんに聞いたら、そこが山重さんという博奕ぶちの屋敷であったという。（笂井）

番神山　むかし、駒形の近江屋という酒屋さんに、力の強い杜氏がいた。この人は新潟生まれ。
しょいだるには、なわが三本しめてある。そこに足を入れて下駄のようにはいて、米俵を両手にさげて（かかえてもって）あるいてみせたって。
その杜氏が、あとで相撲とりになった。
生まれ故郷の山をしこ名にしたって。
番神山とよんだ。
大正ごろの人であった。（駒形）

②　事　件

天明の泥押し　軍艦岩の向こうを元は川が通っていた。せまいので泥がつかえて、土が新堀の方におしあげた。（新堀）

天明の墳火　新堀の田村さんの家の倉に、泥流のあとがのこっている。（亀里龍門）

大火の話　むかし、このムラのＩさんのうちで嫁さんが機織りをしていた。冬で寒いので炭をおこして（股の下において）機（はた）を織っていた。そしたら、風がでて着物のすそに火がくっついたが、それを知らずにしばらく機（はた）を織っていた。気がついたら消しようがなくなって、下半身を大やけどした。
そのことを聞いたムラの人がいうには、
「千戸ねえムラで、万戸燃（も）した」
って。（笂井）

駒形駅のはなし　駒形駅は、はじめの計画では、今の駒形小学校のあたりにできる予定であった。

ところが関重兵衛という貿易商がいて、あの汽車が通ると、煙がたって、桑がけむいそまって蚕がとれなくなる。まるで竜がけむをはいて、地ひびきをたっておしてくるので、稲のつゆがおって、米もとれなくなるといった。

それで、駅の場所を今のところにうつしたという。

しかし、すでに、切符はつくってあって、判もできて、駒形という名になっている。そのために、駅の名をかえるわけにはいかないで、駒形に駅がなくても駒形駅という名になったのだという。

関市兵衛はその後、伊勢崎へ行って製糸工場を経営した。大正三年に駒形神社へ、春日燈籠を寄付している。

（伊勢崎の太織の元祖は、駒形の原正久という人）（駒形）

両毛線　はじめの計画では、駅は駒形の町の中へつくるはずであった。ところが、町の人が反対したために、今のところ（小屋原）につくられた。

駒形の人たちが反対した理由は、次のとおり、汽車の煙のために、かいこが飼えなくなる。

桑が汽車からはきだされる灰でよごされるということ。

火の粉がとんで火事になるということ。

小屋原では、汽車の火の粉で火事になったことが二回あった。

（下大島）

駒形のはなし　正月に絵入りのカレンダーをくれたが、近江屋は、「上州上陽駒形」としてあった。

近江屋さんは、はじめは上陽に酒屋をはじめたが、水がわるくってだめで、駒形へうつってきたという。

場所は、駒形の岡崎本店で、むかしは酒屋だったという。近江屋はそっくりそこへでたという。かりちんをどっさり払ったという。さかづきなどもどっさり借りたという。（笂井）

開化物語　むかしはランプを使っていた。

駒形に電灯がついたのは大正三年のことであった。

そのころのはなし。

あるうちで、おじいさんがおばあさんに、

「電気がもったいないから消せや」

といった。そしたら、おばあさんはうちわであおいで消そうとした。まちがって電球をわってしまった。電気が消えた。

おばあさんは

「よかった」

と思った。

翌日、電気はつかなかった。

「馬鹿ばばあめ」

って、おばあさんはおじいさんに叱言をいわれたって。（駒形）

文明開化　元治元年（一八六四）生まれのおばあさんは、新井から増田まで汽車を見にきた。

飛行機がとんでくると、兄が外へでて

「あれが飛行機だ」

といって、「万歳、万歳」といっていた。

貨物列車は、通るとき

「バカドケ、バカドケ」

といいながら通るといった。

むかし、

「バカドケが通ったからおひるだ」

といった。（上大島）

両毛線開通異聞　両毛線をつくるとき、小屋原は、水害の多いとこ

ろだからといって反対した。駒形の方へもっていってほしいと要望したという。

そしたら、会社の方で線路を高くしてやるといった。

そのために、小屋原地先の線路は、まわりのところよりいくらか高くなっている。土をもって高くして線路をとおしたという。

小屋原には、方々に、池とか沼がある。踏切りは坂になっている。（小屋原）

汽車をはじめて見た人のはなし　汽車をはじめて見た人は、馬に乗って、汽車と競走したという。

その時分の人は、馬が一番早いと思っていた。（野中）

電気の芯をだせ　昭和四年に入隊した片品村花咲の新兵さんのはなし。

その人は、まだ電灯というものを知らなかった。

それでまわりのものが、その新兵さんに

「いますこし、電気の芯をだせ」

といったって。

そしたら、その新兵さんはじっとねじっていたが、消えてしまったって。（上増田）

しもやというところ（大演習異聞）　むかし、陸軍大演習があったときのはなし、兵隊さんがきて、おばあさんに道をたずねた。

「この辺に、しもやつうところがあるつうがどこだい、おばあさん」

おばあさんは、兵隊さんにそう聞かれたんで

「しもやはそこにあるからつかんてくんない」といったって。

ところが、兵隊さんにはわからない。困っていた。

そしたら、そこへ子供がとんできて、

「兵隊さん、なんだい。」

といった。

「しもやつうところはどこだい」

といった。

子供は、そこへ行くにはこういうふうに行くんだと教えたって。

おばあさんは、「しもや」を外便所とまちがえたわけだ。

字がわかれば、そんなまちがいをせずにすんだが、おばあさんは、字を知らなかったんだって。

このはなしは、大正のころにあった大演習のときのはなしで、本当にあったはなしだという。（小屋原）

笹場の大火事（笊井）　昭和二十五年一月十五日、西原に火事があった。笹場の大火事といっている。

西原はこのとき大体燃えた。（笊井）

ささばの大火　明治の直前に笊井に大火があった。十一軒やけたといわれている。これをささばの大火という。

うちのおじいさんは、三年はたらいてうちを建てたという。その年は明治元年のこと。

母屋の西に、隣家との境に大壁をつくった。

土蔵をつくるのと同じようにしてつくったもの。

このときの火事の原因はつけ火だった。

金貸におかねを二度とりたてられたことに腹をたてて、火をつけたものという。（笊井）

小屋原の火事　明治時代の火事のとき、かまど十五軒焼けたといった。

汽車の煙突の火の粉がとんで火事になった。

むかしはすぐ屋根だったので、南へ燃えぬけたという。

その日は、ムギまきで田圃へ行っていた。火事だというのですぐに

とんできたが、なにも出せなかったという。
うち（井野安治家）はみんな燃えた。鎌原の田圃を売って、その金でうちを建てた。（小屋原）

小屋原は、むかし、汽車のえん（火の子）で火事になったことがあったという。
そのころは、屋根はわら屋根、火の子がとんで火事になったというので、そのあと、トタン屋根にしたほうがいいというので、わら屋根のうちがなくなったという。
（すくなくなった）（筑井）

大正十二年の出来事　九月一日に関東大震災があった。
この年に日下部橋（当時は板橋）ができた。
この年に、女屋に電気がついた。電気は伊勢崎から送られてきた。（女屋）

関東大地震のこと　大正十二年の関東大震災のときは、伊勢崎の機屋の機巻（はたまき）き場にいた。
そのときは、立ってはいられず、柱につかまっていた。
巻き場には、水がたまっていた。地震でゆれると、道の方へ水が出てしまった。
バケツの水は、びしょん、びしょんなってゆれた。（女屋）

関東大震災のときには、川がゆすぶれて、水が道へあがって、道がびっしょうたれになった。
宿田川（の川）が東街道にはねた。
ちょうどおひるのとき地震がおきた。
夜になってから、伊勢崎が火事だというので消防手がでた。しかし、どこまで行っても、火事場がわかんなかったという。
しまいになって、東京が火事だということがわかった。
地震のときは、竹やぶに逃げこんだ。竹やぶは、竹の根がはっているので大丈夫だといった。
火事騒ぎのあとは、朝鮮人騒ぎがあった。朝鮮人が井戸に毒を入れるといった。朝鮮人が荒砥へ来たというので、今井の人が馬をとばして女屋へ知らせてくれた。
こんどは、女屋から西の野中へ馬で知らせた。
そのころは、そういう情報網だった。
そのうちに、竹橋（桃木川に架す、綜合市場の東）のところへ朝鮮人がきたからというので、ムラの人は、竹槍をもって、桃木川をのぼって行った。井戸にはふたをしろと大さわぎだった。（女屋）

大正十二年の関東大震災のときには、朝鮮人が井戸に毒を入れるというので、大さわぎをしていた。
震災のあと一週間くらいは、青年とか消防があつまって、竹やりをもって警戒にあたっていた。
朝鮮人がきたといって、半鐘を鳴らしたこともあった。
子供たちは、おっかなくって、梨もぎとか、畑へささぎもぎなどに行けなかった。
青年とか消防は、大字ごとにべつべつにあつまって警戒していた。（上大島）

ゆれて石塔が倒れた。沼がいくつかあったが、水がはねて道にかかった。
南東の空が赤くなり、消防団が出動した。（宮地）

関東大震災は、わたしが十五、六のころのことである。
大正十二年の九月一日十一時五十二分のこと。
そのとき、川へ行って、魚を釣っていた。
川の水がばちゃこん、ばちゃこんやっていた。ぶつかりっこしていた。
地震とは知らなかった。目がまわったのかと思った。
土蔵の壁がおちていた。
はじめのうちは、野中でいえば、下大島が火事だといった。ポンプをひいていったら、こんどは駒形が火事だという。駒形へ行ってみたら宮子が火事だという。宮子へ行ってみたら、まだむこうだということがわかって、ひきあげてきたという。あとで、東京の火事だとわかった。
つぐばんあたり消防団がでた。
朝鮮人がこっちへせめてきて、井戸へ毒をいれるというはなしがあって、警戒していた。言葉がおかしいと、朝鮮人だというので殺したというはなしもあった。(野中)

せん風のはなし　(大正九年)わしが十七、八のときのことだった。
大水がでて、川へ魚とりに行って、まち網をしていた。
そしたら、ぐうっと音がした。汽車の音だんべと思った。北へむいて、右の耳にごおっと音がした。
みると、まっくらのものがまきあげられた。
それが、たつまきだった。(野中)

野中の大火　両毛線のできたころのはなし(明治二十二年)、野中に大火があった。ムラの人は、両毛線の工事に出ている留守に、石井さんのうちで松葉を燃していて、裏木戸をあけたら、風がはいって焼けてしまった。ムラの上から下へ焼けていった。
それを、八まん十六軒焼けたといった。
新聞記者が聞いて、「八万十六軒焼けた」と思った。
「へえ、田舎でも八万軒もあるのか」とたまげたという。
八幡様と、民家が十六軒焼けたのである。(野中)

飛行機　子供の時分、わたしの兄が、飛行機だ、飛行機だといっていたのを覚えている。(上大島)

ほうき星を見たはなし　明治四十三年にほうき星を見た。
小島田へ奉公に行っているときに見た。
夜の十一時すぎに、小便して寝ようというので外へ出た。
頭の真上より南でちょっと東のあたりに、一メートルというか、五尺くらいの長さで、五センチくらいの太さで、野球のたまくらいの星が長く尾をひいて、南から北へむかってとんだ。
先とうらの太さはちがわなかった。光りは先がいくらか太かった。
その晩きり見られなかった。
ほうき星がとぶと、戦争があるといわれた。(女屋)

明治四十三年の大水のこと　大水がでたのは、わしが小島田へ奉公に行った年だった。
奉公先の裏の土手から女屋の方を見た。女屋はまるで島だった。牛橋は通れなかった。
人間のせったけ(身長)も水がでた。二日も三日も水が田圃にのっていた。
おれんちは、ムジナキヨウに田を二反借りてつくっていた。
はじめ一俵こなして食っちゃった。地主へは一反三俵やるわけ。こなしたら五俵しかない。
地主におさめるだけしかない(二反で六俵しかとれなかった)

みんな（五俵）納めても、むこうじゃかんべんしてくれなかった。なんでもかんでもよこせという。
とうとう地所をとりあげてしまった。
仕方なく、他の人の名でその田を借りて何年かつくった。（女屋）

③ 番　頭

番頭さんのはなし　二之宮の榛沢さんのところで番頭さんを使っていた。
このうちでは、番頭さんにだすおかずの魚の切り身が小さかった。
あるとき、番頭さんが、こういったと。
「おおか網の目がでっかくって、魚がむぐってしまう」
これは臼井の番頭さんのはなし。
あるうちで、正月前にご飯があまる。
それを番頭さんに食べてもらうことにした。
そしたら、番頭さんが、こう歌に詠んだと。
「大晦日にひやめし、これが初なり」
夜なべ仕事に、番頭さんたちだけちょうぱしをつくれといわれた。ちょうぱしづくりは、さかさになってやるので大変な仕事。
そのうちには、三人の番頭さんがいた。
ある日のこと、そのうちの一人が、いろりばたに寝て、わざとねごとをいうことにした。
「昼はいもめし、さつまいも、夜はちょうっぺしをせたけつくる。大変だ。」
それを聞いた旦那さん。
「そんなに、寝ごとにいうほどいやなら」
と、ちょうぺしつくりをやめたという。（上大島）

朝飯前仕事　これも番頭さんのはなし。
朝飯前仕事に行ってきた番頭さんに、主人が
「おめえ、はあ行ってきたんかい」
といったら。
「じゃあ、いまいっぺん行っくべえ」
といったって。
これは、ほんとうにあったはなしである。（上増田）

番頭さんの知恵　北爪さんのうちでは、むかし番頭さんをつかっていた。
このうちでは、うちのもんと番頭さんとはちがうめし（べつめし）を食べていたって。
元旦のこと、番頭さんが。
「ひやめし食んべえや」
って、あさっぱらからいったって。
そういえば、まさか冷飯はくんなかんべと思って、そういったんだと。（上増田）

番頭さんの負け　上増田の宮原のNさんのうちの番頭さんのはなし。
Nさんがその番頭さんに、ある日。
「馬に米俵が六俵つけられるか、つけられれば、米をみんなやるよ」
といった。
そしたら、その番頭さんつけられるという。
もともと、馬に六俵の米はつけられないと思っていたので、その人が番頭さんにわざといったこと。
ところが番頭さんはつけられるといってつけはじめた。真中につけはじめた。ところがつけられない。とうとうあやまったって。

虚勢を張ってつけられるといったが、一俵つけようとしてよろけてしまった。
それで、とうとう、たまげてあやまったって、それが、このはなしおしまい。（下増田）

ある奉公人のはなし　笊井から、近くの二之宮へ作番頭として奉公に行っていた人があった。
もう四十数年前になくなった人のはなしである。
その人から聞いたはなしだ。
奉公先は大尽のうち。
ところが、そこのうちは、いつもひやめしをくれていた。
あんまりくやしいので、ある日のこと、朝早く起きて、とぼ口のところへ糞をひっておいた。
それを主人がみつけた。
よばれて叱言をいわれた。
それでその人はこういったと。
「わしはいつも、ひやめしを食っているんで、けぶのでるような糞はひりませんよ」（笊井）

ある番頭さんの話　ある家で奉公人をつかっていて、お盆、農休み、お節供のときには、朝の四時ごろから九時ごろまで仕事をさせた。一日以上の仕事をさせたという。
これだけ働かされると、番頭さんは腹がへって仕方がない。
（盆のときのはなしだが）番頭さんたちは、ぼたもちをうんと食った。一人で十六コと十二コ食ったって。その上、めんめを食った。
二人でぼたもちとめんめを全部食ってしまったので、また材料を買ってきてつくりなおしたって。（笊井）

半日遊び日　むかし、ある番頭さんに、誰かが、
「ためかつぎは、一日しても半日仕事だ」
といったって。
そしたら、その番頭さん、近所からにない桶を借りてきて、旗ぎおに桶をつるして、いっぺんにためだしをしたって。
ためかつぎは、桶に肥を入れて行くときはいいが、かえりはからっぽだから、半分遊んでいるというので、半日仕事だといったもの。
（上大島）

飯が仕事をする　あるところに、大食の番頭さんがいた。
ある日、旦那さんが、
「おめえは、そんな大飯食って、仕事もろくにしねえで」
っていったって。
そしたら、その番頭さん、桑原うないに行って、エンガを畑につっとおして、柄に弁当しばりつけて遊びに行ったって。
帰ってきたら、旦那さんが
「どうしたや」
っていったら、
「今日は、飯に仕事させべえと思ったが、（エンガの柄に弁当くっつけておいたが）飯はちっとも仕事をしなかった」
っていったって。（下増田）

むかし、あるところに番頭さんがいた。
ある日のこと、旦那さんが、
「飯が仕事をするんだが、飯べえ食っても仕事ができねえ」
って、番頭さんにいったんだって。
そしたら、その番頭さんは、弁当を持って畑へ行った。エンガの柄に弁当ぶらさげておいて、自分では仕事をしなかったと。

夕方、うちへ帰ってきて、旦那さんに、
「エンガの柄に弁当持たせたけど、弁当は仕事をしなかったよ」
といったって。（女屋）

むかし、あるところに、番頭さんを使っている主人がいた。
ある日のこと、主人が番頭さんに、
「腹がへっては仕事はできねえ、飯が仕事をするんだ」
といった。
これは、主人が、番頭さんに、「うんと飯を食って、うんと働いてくれ」という意味だった。
「桑原うないに行きなさい」
と主人がいった。
番頭さんは、弁当をもって畑うないに行った。
そして、えんがを畑にさして、その柄に弁当をぶらさげておいて、自分では木陰へ行って昼寝をしていたって。
そこへ主人が見まわりにきたと。
みると、番頭さんが昼寝している。
主人は、
「どうしたんだ」
と聞いた。
そしたら、
「ご主人様に、『飯が仕事をする』といわれたから、えんがの柄に、弁当をしばりつけておいたが、飯はちっとも仕事をしませんでしたよ」
といったって。
ことわざ、
「腹八分、医者いらず」
というが、これでは仕事はできない。（櫛島）

むかし、あるところに番頭さんがいた。
あるとき、旦那さんが、
「飯が仕事をする」
といったって。
そしたら、その番頭さんは、畑へ弁当もって行って、えんがの柄に弁当をしばりつけて、仕事をしないで、一日中見ていたって。
そして、うちへ帰って、旦那さんに、
「飯はちっとも仕事をしない」
といったって。（上増田）

むかし、ある人が「飯が仕事をする」ということを聞いて、弁当をもって畑へ行って弁当をどっかへぶらさげておいた。
そしたら、ちっとも仕事をしなかったって。
これは、ほんとうにあったはなし。（小島田）

むかし、神社の裏に鶴さんという人がいた。この人は、一時農家へ奉公していた人。
あるとき、奉公先（下長磯の斉藤家）で畑うないをしていた。そこへ、主人のおかみさんがこじょうはんを持って行ったって。
そして、
「こじょうはんがあるから仕事がいっぺえできるんだ」
といったって。
そしたら、鶴さんが、こじょうはんを風呂敷ごとえんがの柄にしばりつけて、うちへ帰ってきた。

そして、
「こじょうはんが仕事をするんなら、こじょうさんに畑をうなわせろ」
といったって。（下長磯）

笂井に、はんじさんという人がいた。
この人は腕が強くて、人の倍も仕事をした。
その代り、ご飯もうんと大食い。
それで、はんじさんを頼んでいた主人が、あるとき、はんじさんに
「飯が仕事をするんだ」
といった。
それを聞いたはんじさんは
「そうかい、飯が仕事をするんかい」
といった。
そして、畑へ仕事に行って、えんがを畑へつっとおして、飯が仕事をするつうから見てんべえといって、弁当をえんがの柄にしばりつけて見ていたって。
そしたら、晩方、主人が畑へ来た。
はんじさんは主人に、
「おやじ、おやじ、飯がうたうつうから、どんなにうたうか、飯をえんがにしばりつけておいたけど、飯はちっとも仕事をしなかったよ」
といって、弁当をほうりだしたって。
旦那さんに
「おおくそんなことをいうもんじゃねえ」
といったって。（笂井）

むかし、ある大尽のうちで、番頭さんをたのんで使っていた。
番頭さんは、仕事をして腹が減ったんだけど、三杯以上茶碗をだすとなんとかいわれた。
あるとき、主人が、
「（おまえが働くのは）飯が仕事するのだ」
といったって。
そしたら、その番頭さん、畑うないに行ってえんがの柄に弁当をしばりつけておいたというはなしがある。（野中）

田の草取り　盆の朝飯前の仕事というので、あるうちの旦那さんが、番頭さんに、
「〇〇（地名）の田圃へ行って、田の草取りをしてくれ」
といった。
そしたら、その番頭さんが、
「今日はお盆だというのに、田の草取りをするんかい」
といった。仕方ねえ田の草取りに行ったと。
番頭さんが田の草取りに行って帰ってきた。そしたら旦那さんが、
「行ってきたかや、早かったな。田の真中になにかなかったかや」
「なにもなかったよ」
実は、旦那さんは朝早くぼたもちを持って行って、竹を三本しばって三脚のようにして立て、その上にぼたもちをのせておいた。
番頭さんにはそれがわからなかった。
ということは、番頭さんが、きちんと田の草取りをしなかったということだ。
それが、旦那さんにわかってしまったという。（女屋）

むかし、あるところに、番頭さんを使っているうちがあった。

その家の旦那さんは、おおか番頭さんに仕事ばっかさせるので、にくまれていた。
ところが、おかみさんは人を使うのが上手だった。
あるとき、番頭さんに
「田の草を七まわりとれば、旦那が死ぬ」
といった。
そしたら、番頭さんが一生懸命に田の草をとったって。
そのために、その年は、米がうんととれたって。（上大島）

上増田大塚田のあるうちの番頭さんが、農休みの飯前仕事に、田の草取りをしろといわれた。
神社の西に三反くらいのまちがあり、その田の草取りをするようにいわれた。
そしたら、その番頭さんが帰ってきた。
主人が、
「どのくらいとったや」
と聞くと、
「みんなとりきった」
という。
「そんなことあるめえ」
と主人がいうと、その番頭さん、
「じゃ、いま一回とってくべえ」
といって、その田の草取りをしてきたって。
このはなしを聞いて、ムラの人がいうことに、
「田のまわりだけとるのも容易じゃねえことだ。みな口かんまわしてきただけだんべ」
と。
べつの話では、番頭さんが、田の草取りをきちんとしないことを知った主人が田の真中に酒をたてておいて、田の草取りをすませてきたという番頭さんに、田の中になにかなかったかと聞くと、なにもなかったと答えて、田の草取りをきちんとしなかったことがばれたという。
（上増田）

このはなしは、どこの誰ということはわからない。
むかし、あるところに、番頭さんがいて、うんと酒好きだった。ところが、この番頭さん、田の草とりをやらせると、いつも早い。そこのうちの旦那さんはどうも不思議だと思っていた。
ある日のこと、今日はひとつ調べてみようというので、田の真中に酒の瓶をおいておいた。
その番頭さんが帰ってきたので、旦那さんが、
「なにか、田になかったかい」
と聞いた。
そしたら、番頭さん
「なにもなかったよ」
といったって。
それで、その番頭さんが、田の草とりをきちんとしなかったことがわかってしまったって。
その番頭さんは、田の草取りをやらせると、水は、走り水は、田のまわりをとって、水をにごらせるくらいにしていたという。（野中）

ある家の番頭さんのはなしだ。
この番頭さんは、田の草取りをやらせてもきちんとしない。それを

旦那さんが知っていて、あるとき、田の真中に酒の瓶をおいた。
その日、その番頭さんは、酒の瓶を持って来なかった。
それを見た旦那さんがいった。
「田の草を順々にとっていけば、田の草は全部とり終えるわけ。そうすれば、酒の瓶をおいたのだから、それにあたるわけだ」
番頭さんが田の草取りをきちんとしないで、いい加減に、まわりだけとっていたことがばれたというはなし。（笊井）

田のまん中に一升びんの酒をおいて、番頭に草とりをさせた。何かみつかったかときいたら、草とり作業が大変なので、まわりをやっただけなので、一升びんが見つからず、酒がのめなかったという話。（亀里寺家）

田の草取り　むかし、あるうちの番頭さんが、田の草取りをしても、まわりだけとって、真中をとらなかった。それを旦那さんが知って、あるとき、田の真中に一升徳利を置いた。
夕方、番頭さんが帰ってきた。
「終りました」
「田の中になにかなかったか」
「なにもありませんでした」
それで、番頭さんが、田の草取りをきちんとしなかったことがばれてしまったって。（天川大島）

④　神　仏

寺家　山の中に小さなお堂があった。名はまんにち堂、別名りょうにち堂といった。いつのころの話かわからないが、小僧が寺家の村にたどり着いた。そして「今晩一晩泊めて貰いたい」と言った。しかし、身なりが悪いため「ふとんがないから泊められないけれど、りょうの寺へいくと泊めてくれるよ」と言った。小僧は言われたとうりに、まんじき堂にきて、とんとんとんと戸たたきながら、言った「おしょうさん、今晩一晩泊めて下さい」。しかし、返事がない。また、「今晩一晩泊めて下さい、旅の途中の小僧ですが」。すると今度は返事があって、「さあ、おまえさんも中にお入り」。入ると、大ねずみが、おしょうさんのしたくをして、その回りには百匹のねずみが、死んだおしょうさんの鼻や口をかじっていた。小僧はおどろいて、逃げだし、村の人に、その話をした。おしょうさんは、いたるところをねずみにたべられていた。小僧は風のごとくいなくなってしまった。（亀里）

夜泣き地蔵　駒形の清内の霊園内に、子供の夜泣きによい地蔵様がまつってある。（駒形）

仏様のお茶　おばあさんが、死んだ人の夢べえみているので、易者にみてもらった。
そしたら、おたくじゃ子供が二人なくなっているだろうという。
その仏様の命日にはかまいりをしないだろうといわれた。
たしかに二人の子供がなくなっている。一人は四つのとき、もう一人は生まれてまもなくなっている。行雄さんの弟である。
坊さんにおがんでもらって、塔婆をたてろといわれた。
毎朝仏様にあげているお茶は、ながしに捨てないで、軒下にすてろといわれた。
そのとき、家をたてるときだった。
屋敷をいじったことがあるだろうといわれた。
土をもったというはなしをした。
そこがさわっているから、よけをしたほうがいいといわれた。
そのとおり、よけをしてもらった。（下大島）

鬼子母神様　鬼子母神様は、人間の子を食ってしょうがないので、ある神様が鬼子母神様の子を十二人かくした。

（そしたら大さわぎになって）それからは、人間の代りにザクロを食えといったことになったという。（野中）

伊勢参宮の話　むかし、夫婦で娘さんをつれて、親子三人で伊勢参りにでかけたって。

親としては、娘さんが子供だと思っていたら、ちょうど、お伊勢様の境内に入ったところで娘さんが大人になった。

それで、親として考えた。

「神のみすえの人ならば、つきもさわりもくるしかるらん、アビラオンケンソリカ」

と三べんいっておまいりしたって。

そしたら、無事にお伊勢様におまいりして、うちへもどってくることができたって。（笊井）

道祖神　井上徳三郎さんのところにある道祖神塔は、戦争中防空壕をサツマムロとして掘ったらでてきた。

出たのをどうしてよいかわからなかった。

うちの者が病気勝ちだった。

日蓮様（行者？）がきたときに、

「こういうもんがあるけど、どうしたらよいか」

と聞いた。

そしたら、

「お墓のすみにまつればいい」

といった。それで、墓にまつっておいた。

あるとき、うちのおじいさんが、神社の役員をしていて、神主さんが墓の近くを通って道祖神塔をみた。

「井上さん、道祖神があるけどもらってえなあ」

といった。

それで、

「どこへたててておけばいいのですか。うちからでたんだから、うちへおきてえ。」

といったら

「稲荷様（屋敷神）へ行く道のはたにおけ」

といわれた。

それで、今のように、庭と稲荷様へ行く道の境のところにたててある。

今では、正月に幣束をたてておがむ程度。

うちだけでまつっている。

うちの裏に山があって、土手があった。

そこにサツマイモのむろがあった。それを掃除していたらでてきた。

その中にうまっていたもの。

第二次世界大戦が終ってまもなくのころのこと。（上増田）

山王様　山王様は麻がきらいという。

山王では、子供に麻の葉の着物を着せなかった。

下大島にもやらなかった。山王様の氏子なので。（天川大島）

人魂のこと　むかしは、ひかりもんがとんだり人魂がとんだりした。

年寄りの人は、人魂を見たはなしをよくした。

わしは、一度、人魂を見たことがある。

空の高いところでなく、中空に静かにとんでいった。

色は黄色味がかっていた。オレンジ色が濃い感じ、尾をひいて行った。

増田から夜遊びのかえり、駒形神社の裏、小屋原の上のあたりの中

空を、二之宮の方へとんで行った。
駒形神社の裏で見ていたら、増田あたりで消えた。（駒形）

⑤ 自　然

伝説のある老杉〈ほうしゃくの杉〉　下川淵小の西南隅、前の旧校舎に接する所に老杉がある。これが「いわく」をもっているとかで、根元近くに、石像だか、石塔だか置かれている。何となく不気味な感じがして、その「いわく」は、この樹を切るとか、枝を折るとか、登るとかすると、変わり事があると言われている。また、提灯が下がったとか、夜なきをしたとか、さまざまな「いわく」がこの樹から出ている。（亀里矢島）

天川の松並木　天川大島の松並木の松の中には、大天狗、小天狗という名前のついた松があった。（下大島）

野中の一本杉　野中の一本杉のところには、稲荷様がまつってあった。むかしの人が、そこへあぶらげをあげた。そこへキツネが巣をつくった。ある人が、町から帰ってきて、風呂敷包みを首にひっかけてその前を通った。そしたら、キツネにだまされて、うちへ帰ってきてみたら、風呂敷の中味をきれいにとられて、からっぽの風呂敷を背負ってきたという。
むかしの人で、稲荷様を信仰していた人は、毎月（旧暦）の十五日に、おこわをふかしてあげていた。（野中）

大松　むかし、下増田の大松というところにオトウカがいた。（下増田）

天狗松　松並木の中に、天狗松といわれる松の木があった。根元は一つで、先が二つに分れていた。（天川大島）

かみなりさま　赤城のかみなりはきても、あんまりあばれない。あばれるのは御荷鉾のかみなり。
「御荷鉾の三束雨」という。御荷鉾へ雲が出たぞというと、ムギを三束まるかないうちにふってくるといった。（女屋）
「御荷鉾の三束雨」ということわざがあった。
御荷鉾の方からくるかみなりは、ムギ三束まるくうちにくるといった。
ところが、最近は、かみなりがこなくなった。
なにかあって、それから来なくなったものという。
かみなりよけに、「くわばら、くわばら」といった。
むかしは、桑原に下肥をまいた。
かみなりさまは、下肥がきらいだという。
かみなりさまは、そこへおちろというと、きらっておちないという。（笂井）

榛名に夕立がたつと、かならず赤城からも夕立がたつという。それで夕立が大きくなる。雹をふらすという。
そういうときには、御荷鉾の夕立が、赤城へすけっとにきたという。御荷鉾から大いそぎですけっとにきた。
それで、御荷鉾へ夕立がたつと、この辺の農家の人たちは、ムギを三束まるかないうちに雨（夕立）がやってくるといった。
御荷鉾に夕立がたったから、早くムギをまるけといった。（野中）

カエルの話　雨が降りそうなとき、田へ行くと、カエルが、
「ゴケ、ゴケ」
と鳴いて、後家の人を馬鹿にするという。（上大島）

ビクエダイ　荒砥川と広瀬川が合わさっているところに、ビクエダ

イがある。駒形駅の南東で合流している。広瀬川と桃木川が合流し、広瀬川となっている。桃木川の終りは小屋原分。（上増田）

猫見塚　亀泉に猫見塚というのがある。猫がとしをとると、そこへつれて行く。猫が踊りをおどったという。そこの地所は持ち手がなかった。そこの土地をつかう（持つ）と、ふまがくるといってきらった。

（天川大島）

火柱がたったはなし　下増田の飛地と小屋原のぶつかったところに、火柱がたったのを見たことがあった。

大山の金物屋さんは、大塚田で見たことがあるという。火事じゃねえかと思ったという。

むかしからのいい伝えで、火柱がたって倒れた方に火事があるといった。わしが見たのは、夏のむしあつい晩だった。火柱がたって、こっちへ倒れた。そしたら、その年に、駒形の四丁目に火事があったという。

虹のような赤いものがぼうっとしていた。大きくあかるくたった。消えた方角に火事があるといういい伝えがあった。（駒形）

女郎石　上大島には女郎石というのがあった。

（今は、石田安衛さんのところの庭にある）

この石をわかいしゅがかついだ。

この石がかつげれば、女郎買いに行ってもよいといった。

約二十貫あった。

夜遊びに出て、かつがせた。

この石は、かっこうが悪いのでなかなかかつげなかった。

むかしの消防小屋の前あたり、金毘羅様のうら（北側）あたりにあった。

この石をかつげれば、むかしは、玉村の宿まで女郎買いに行ってもよいといった。（上大島）

源太島　源太島に火の玉がでた。

東片貝の虚空蔵様の近くにでた。（上大島）

大島という地名　利根川が乱流していた時代に島だったところが大島だという。（下大島）

⑥　その他

巡礼橋　越後から来た巡礼の人がいた。

この人はうんとおかねを持っていた。

この人を殺して、おかねをとって、清水川へ投げこんだという。

そのあとそのうちは大尽になったけれども、まがわるかった。（屋敷がたたず）

今は長磯にいないで、よそへ行っている。

今、そこに、巡礼橋がかかっている。（下長磯）

社日講のときのはなし　むかし、社日講のとき、すしとかぼたもちなどを、宿のうちで男衆がつくった。

あるとき、ぼたもちをつくった。

それを、ある人がそっとたもとの中へ入れた。

ところが、それを見ていた人があった。

そこで、その人が、

「今日は、一杯いただいたんで、踊りでも踊るべえや」

といって、みんなして、手をあげて踊りを踊った。

そしたら、たもとからころころとぼたもちがころがりでた。

「ありや、これは」

と、その人は大あわてにあわてたって。（下長磯）

二反の白　むかし、あるところに嫁さんと姑さんがいた。

二人は表向きは仲がよかった。
ある日のこと、神まいりをした。
そしたら、そこに絵馬が奉納してあった。
武士の絵があがっていた。
嫁さんと姑さんがそれを見て、「ありや、なんだろうか」といった。
二人で
「あれは義経だ」
「いや、頼朝だ」
といいあっていた。
それで、二人とも、自分のいったことをおしたくて、神主さんのところへ、たのみに行ったと。
姑さんは、ひとりでこっそり神主さんのところへ、白のきれ一反を持ってたのみに行った。
「もしあの絵はなんの絵だと聞かれたら、自分のいったことをいってください」
とたのんだ。
嫁さんもひとりでこっそり神主さんのところへ行って、白のきれ一反持って行って、姑さんと同じように、自分のいったとおりのことをいってくれとたのんだ。
おたがいに、おねがいしたわけだ。
そして、あとで二人そろって神主さんのところへ行った。
「あの絵馬の人は、なんという名前でしょうか」
と聞いた。
そしたら、神主さんが、
「あれは、義経公でもなし、頼朝公でもない。二反の白ただとり公だ」
と教えたと。
二人で、二反の白(反物)をただとられたということである。(女屋)

おもしろいはなし　小島田の下田源次さんのお父さんは大胡の人。
この人はおもしろいはなしをする人だった。
小島田へ田植の手伝いにきて、苗取りをしながら、こんなはなしをした。
赤城山の堀っこで、びしゃん、びしゃんと音がする。ちょうど田の草取りをしていたので、はっていってみたら、ねっこはどじべたにいるが、先がうなぎになっていたよ。(女屋)

ばかっぱなし　はせ五郎兵衛のはなしはばかっぱなし。
いっていることが全部うそというはなしがある。それをまんからといった。
「やつのいうことは全然あてにならない」といった。
すこし本当のことをいうやつのことは千三(せんみ)つといった。
「やつは千三だからなあ」
といった。
増田にまんちゃんという人がいた。
この人は、いつもじょうだんべえいっていて、あてにならないので、「まんからまんちゃん」と呼ばれていた。
駒形の新駒町の、藤原の菓子屋のじいさんは、今でいう漫談屋であった。
芸名を日本漫遊といった。
この人は、あっちこっち、じょうだんをいってあるいた。
あっちこっち、菓子屋をしながら、たのまれると、漫談をした。
(駒形)

屁の失敗　むかし、嫁さんがムラまわりをしているときとぼ口をま

たぎながら粗相した(屁をひってしまった)。でもん、はれもんとて注意していたがでてしまった。
そしたら、そこんちの人が、お茶をだすのに
「屁くさいお茶でも、どうぞおあがりください」
といってだした。
そしたら、それを聞いたその嫁さんは、その場にいたたまれなかったと。(筑井)

生き血とり　上大島で、夜おそく通ると、生き血がでるといわれたところがあった。(女屋)

後家の親子　むかし、ばあさんと嫁さんで暮していたって。
あるとき、井戸掘りをたのんだ。
そのとき、ばあさんはよそへ出かけて行った。
ばあさんの留守に嫁さんと井戸掘りがいちゃいちゃしていた。
そこへばあさんが帰ってきた。
「どうしたんだ」
とばあさんがいったら、嫁さんは、
「いま内井戸を掘っているんです。これから外井戸を掘ります」
といったって。(駒形)

旅行中の用心　行商の夫婦がいた。
あるとき、亭主が行商にでかけるので、かみさんのことが心配で、かみさんの股のところへ「鶯(うぐいす)」という字を書いておいた。亭主がでかけるときかみさんに
「大事にしているか」
といったら
「大事にしている」
といった。
亭主は安心して旅にでたって。
亭主があっちこっち行商して帰ってきた。かみさんの股のところを見たら、出かけるときは、右の股のところへ書いておいた字が左にいっている。
それで、亭主はかみさんをせめた。
そしたら、かみさんが、
「馬鹿め、うぐいすの谷渡りがある」
といったって。(駒形)

オトウカ　シノヤブがあり、オトウカがうるさいので、煮え湯をいれたら、その家の子が育たなくなったと言う。
桃木川の土堤にオトウカの穴がたくさんあり、オトウカの火がついたり、消えたりした。
オトウカのヨメイリという。(上長磯)

松並木　松並木は松平大和守様のお手植えである。長さんちの家が殿様の休ケイ所と言う。
天川大島は新地大島と言い、大島より新宅に行ったところと言う。(下大島)

ヤツアナ　「ヤツアナ」というところがあった。端気川のうねっていたところで、一人でゆくなと言われた。
オトーカ、オイハギが出ると言われた。
町で魚を買ってくると、グルグル体がまわって家につけなかったことがあった。「オトーカが欲しかったから」と言われた。(力丸)

常さん鋤(すき)　常さんは器用な人だった。
あるとき、自分で鋤の形を考えて、鍛冶屋さんにたのんで鋤をつくってもらった。
その鋤をつかって鋤をかけた。

はんどりはせがれの儀右衛門さん。
「べえらべえら、べえらべえら」といいながら鋤をかける。田のはたへいくと
「そおれ儀右衛門ひっかえせ」
といって、ひっかえして、また、「べえらべえらべえら」いいながら鋤をかけていたって。（上増田）

倉切り　土蔵あらし。刀とのこぎりで土壁に穴をあけた。（亀里龍門）

桃木川の大蛇　上長磯の栗山水車のそばに、桃木川の堰がある。そこへ、あるとき、野中の人が魚釣りに行った。
堰の近くで魚を釣っていたら、いびきをかく音がする。一本橋があって、それを渡ってむこう側に行ってみたら、大蛇がいたって。
その人は、おったまげて逃げてきて、そのままやみついて、死んでしまったという。
いびきをかいていたのは、大蛇だったのである。（野中）

縁組のはなし（炭焼五郎兵衛）　むかし、あるところに、わかいしゅがいて縁遠いかった。
いつになっても人になれないといって親たちが心配していたって。
あるとき、おやじさんがうぶすなさまへお願かけに行ったと。
そうしたところが、しゃんしゃん音がして、白い馬に乗った神様がやってきたんだって。
それを、おやじさんが縁の下で見ていたんだって。
白い馬に乗ってきた神様は八幡様だった。
「うぶすなさま、縁組をたのまれているんだけど、どんだんべさ」
といった。
そしたら、うぶすなさまが、
「おらあほうに、炭焼五郎兵衛という人がいるから、そいつととりくませべえじゃねえか」
といったと。
そうしたところが、そのよく日、仲人がきてはなしがもちあがって、五郎兵衛とその娘とが一緒になったんだと。
むかし、ある人が、神社へおまいりに行って神社の縁の下にはいこんでいた。
そしたら声がした。
「八幡様がきた」
「うぶすなさまがきた」
「だれがきた」
という声がした。
そして、
「あすこの娘と、どこどこのむすこと一緒にすべえ」
といっていたという。（東上野）

千人針　第二次世界大戦中、千人針を縫って、兵隊に贈った。
千人針は、トラ年の人が、自分の年だけの玉を縫ってやった。ほかの人は一針だけでよい。
これを、兵隊に行く人がまいていくと、無事に帰ってくるといった。
トラは、千里行って、千里帰るというい伝えがあるからという。
なお、トラ年に生まれた人には、とらと名づけた。（東上野）

千人針は、トラ年の人は、自分の年の数だけの針を縫った。五十歳なら五十針を縫った。
黄色のさらしに、あかい糸でたまをむんだ。糸をつなげて、玉をつくった。さらし二枚でつくった。
これを兵隊に行く人は、腰のまわりにまいた。

これをまいていれば、兵隊に行っても、無事に帰れるといった。（女屋）

頭のいい人　むかしは、頭がいいが無学の人がいた。
そういう人は、どちらかというと、へそまがりだった。（笈井）

かわった名前　「おなべさんとはかわった名前ですね。おたらいさん」
といったというはなしがある。（小屋原）

子供の答え　ある人が、子供に、
「お天道様とお月様は、どっちが役にたつか」
と聞いた。
そしたら、子供は、
「お月様の方が役にたつ」
といったって。（女屋）

ユズの初なり　むかし、おやじさんがユズの木を植えた。いく年たっても実がならなかった。やっとこなった。
ある日のこと。
「ユズがなったよ」
というので、箕をもっていってもぐことになった。
ところが、実は一つしかなっていない。
はじめてなったユズに、「み（実＝箕）」一つなったということであった。（野中）

水酒のはなし　ムラの会合で、みんなで酒を出しあうことになった。
けちな人がいて、おれ一人くらい水もってててもよかんべというので、水をもって行ったって。
そしたら、酒だと思って飲んだら、水だったって。
みんなが、酒の代りに水をもって行ったわけだ。

嫁をもらうこと、嫁をくれること
嫁をもらうなら下郷からもらえ。
嫁にくれるなら上郷へくれろ
（下郷はよく働く、上郷は楽だから）（天川大島）

駒形の榎棚　駒形に榎棚とよばれる木賃宿があった。商人が泊っていた。わたしが覚えて泊った人もあった。荷馬車のとりつぎをしていた。たてばだった。
前橋のたてばは、天狗坂のところにあった。ここで馬をやすませた。（下大島）

兵隊のがれのこと　上大島の高所家は湯沢家の分家である。
むかしは、惣領やうちを相続する人は兵隊に行かなくもよかった。
新宅にでれば戸主になれるからというので分家したものもあった。
高所家は、屋敷が高いので、高所という苗字にしたという。たかしょという。
まわりからみて、一メートルくらい高い。
つきあいは、湯沢家の本分家としてのつきあいをしている。（上大島）

茶しぶのこと　この話は、実家（上増田大塚田の木村家）のおとっつあんに聞いたもの。
外国の人があるうちにきた。
茶しぶのいっぱいついたおやじさんの湯のみ茶碗をみて、その外国人が売ってくれといった。
おやじさんは、外国の人にやるんじゃというので、きれいにみがいたって。そしたら、その外国人は、「いい」といってその茶碗をもって行かなかったって。
うちのおとっつあんは、「おれの茶碗は絶対にみがくな」といっていた。茶しぶのついている茶碗は、古くつかっているしるしである。

お客に出す茶碗はきれいにみがけ、お客さんには、きれいな茶碗でお茶を出せといった。

しかし、「おれのは絶対にみがくな」といった。（上増田）

夜遊び　むかしのわけえしは、ハーモニカをもって遊びに行ったもんだ。

娘の家のそばで、ハーモニカをふいた。

懇意な人なら、その音を聞いて、うちから出てきたという。

これは、江木のはなし。

あるうちに、うんと器量のいい娘さんがいた。これをわけえし同士でとりっこした。

娘をとられたわけえしが、友だちをつれていって、娘さんのうちの石塔をみんなでんげえした（ひっくりかえした）という。

わたしが、十七、八のころのはなしだ。

あるとき、娘さんが外湯に入っていた。

そしたら、わけえしがきて、その風呂の火をどんどんもしてあつくした。娘さんはあつくてたとうとしても、まわりでわけえしが見ているんで、たてなくってこりたというはなしもあった。

江木のむかしの分教場の裏の火の見やぐらの近くの人のはなし。

そのうちに器量のいい娘さんがいた。

その娘さんが外湯に入っていたら、上泉のわりいわけえしが、三人とか四人で、せえふろをひっくりけえしたって。

そしたら、娘さんが、せえふろこがからころがりでたって。泣きながらでたって。

生きていれば、今百歳くらいの人のわけえしのころのはなし。

なお、そこんちのおとっつあんは、娘さんがやられちゃあなんねえつうで、遠くから見ていたんだって。

それでも、せえふろを、でんぐりけえされたって。（東上野）

むかしの嫁　むかしは、嫁に行くと、「こじゅうと一人で鬼八人」といった。

こじゅうとがいばっているということ。

「追わずに逃げろ（いかせろ）」という諺がある。

嫁がきにいらないときには、追いだすということをしないで、嫁がいられないように、まわりでしくめという。（下増田）

のっつけがみさん　姑さんのいないところへ嫁にいくと、その嫁さんのことを、のっつけがみさんといった。

この場合に、うちに姑さんがいなくとも、

「世間が姑だ」

といった。（下増田）

五平馬　むかし、五平さんという人が、風呂敷に大根を包んで首にひっかけてきたら、五平馬が

「フロシキデエコン、フロシキデエコン」

とないたという。（上増田）

宮子の白蛇のはなし　宮子（伊勢崎市）の前山の墓に白蛇が出るというはなしを聞いた。

それでそこへ見に行ったが見られなかった。小学生のころのはなしである。（駒形）

キツネを屁で追いはらった話　むかし、新土塚の近所の女の人が外へ出て、しゃがんでおしっこをしていた。

そしたら、キツネがでてきた。逃げるわけにはいかない。思わず力をいれたら屁がでた。キツネはその音にたまげて逃げていったって。（上大島）

けんちん汁の起こり　むかし、鎌倉の建長寺で供養があった。

近所の奥さん方が手伝いにきていた。
（野菜など）おめでたのときの切り方はこうだ、お葬式のときはこうだと（教える人がいて）教えていた。
そしたら、きれっぱしがでた。それを油でいためて、汁にいれたら、うんとうまい汁ができた。
これがけんちん汁のおこりだという。（上大島）

夏の虫　日向ぼっこで、背中をあたためることを、
「おれは夏の虫だ」
という。
北をむいている。
こくぞうのことを、ホリという。米を箕の中に入れて、口を北へ向けておく。ホリに北へ向けて出るので、こうしておくのだという。
夏の虫はそういう行動をする。
ばくちに負けたときなど、
「今日はオケラだい」
といって、両手をひろげる。
すべてつかって、一文なしになったことを、オケラという。（筑井）

珍説桃太郎　むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがあったとさ。
おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行ったとさ。
おばあさんが川で洗濯していると、川に桃がながれてきた。
おばあさんが、
「いい桃はこっちへ来い、悪い桃はあっちへ行け」
というと、いい桃が流れてきたので、おばあさんは、いい桃を拾って、うちへもってきたって。
そうして、その桃を食ったって。
そうしたら、おならがでたって。
それで、
「じじいは山で、くさかろう」（上大島）

弥助さんの謎　むかし、あるところに弥助さんという人がいた。大変仲のいい夫婦だったが、弥助さんのおかみさんが大変なやきもちやき。隣のうちへ回覧板持って行っても隣のおばあさんと話をしたというのでやきもちをやく。
それで、弥助さん、あるとき、自分の大事なものを剃刀で切って、ハトロン紙にくるんで、おかみさんにやったと。
「これがなかったら、おめえに年中おこられる世話がねえ。これおめえにやる。」
って、
そうしたら、隣のおじいさんが、こういうなぞをつくったと。
火のないこたつとかけてなんととく
弥助さんととく
その心は、あったまらない（上大島）

馬と火事　馬はうちが火事のときなかなか外へ出ない。むかしの馬屋はうちの中にあった。
あるとき、近所に火事があった。
急いで行って、馬をひきだしたが、また馬がうちの中へとびこんで行って、とうとう焼け死んでしまった。かわいそうなことをした。
火事のときには、馬屋の中へ、臼をころがしこめば、馬が外へとびだすといった。（朝倉）

でんぼう馬喰　東上野には、むかし、でんぼう馬喰といわれた人がいた。
そういううわさを聞いただけ。（野中）

バンゾウ　馬喰のはなぶりをする人のことは、バンゾウといった。
「バンゾウする」といった。
馬の売り手と馬喰の仲をとりもつこと。（上増田）
乞食の知恵　あるとき乞食がまわってきた。
物をくれといったのでことわった。
そしたら、その乞食が、かえるときこういったと。
「不思議はもんだよ、昨年、わしをことわったうちへ行ってみたら、灰になっていたよ」（上増田）
乞食のはなし　二之宮の南のつふろというところのおばあさんのはなし。
このおばあさんは、手をふんじばって乞食の真似をしていた。
あるとき、高尾山へおまいりに行ったら、そこにそのおばあさんがいた。
「ばあさん来てるんかい」
といったらたまげた。
あるところに、ぼろ大尽というちがあった。
そこへあるとき桑買いに行った。
そしたら、隣の桑原に掘立小屋があった。小屋のまわりに、とうもろこしのからをまきつけて、壁の代りにしていた。
その掘立小屋で馬を飼っていた。
この人は、本当に生活に困っているのではなかった。（上増田）

のらぼう（乞食）がきたとき、「おとりなさい」（物をやらないこと）と三人に対していえば、その家は断つといった。
どんな身なりの人がきても、ひきわりなどはかってくれろ、手づかみではくれるなという。
茶飲み茶碗でもいいから、かならずはかってくれろという。
手づかみでくれると、「福をつかみだす」
といってきらったものである。（天川大島）
女のよばい　むかしから、「後閑朝倉女のよばい、男後生楽寝てまちろ」といっている。
むかしは、この辺の女の人はさかんに機織（はた）りをした。男の人は後生楽しても暮しが成りたつといった。
大正時代には、機織りがさかんで、娘三人いれば身上がもてるといった。
機場（はたば）では、小さい農家の人は、機織りをしてかねをとった。
（天川大島）
芦原堰　むかし、ここに下り松があった。
この堰のところに、大きなナマズがすんでいた。名をイヌボウといった。（天川大島）
天川大島のこと　天川大島はむかしは新地大島といった。
このうちの先祖は柳岡啓造といった。
七ヶ郷（天川大島、下大島、両家、東善、西善、山王、矢田）の名主をしていたという。
本家の人は、この辺の石数をはかるとき殿様のおともをし、宿をしたという。
柳岡は、榛東村の山子田からきたという。（天川大島）
おとがはじまる　子供が「わけもなく」ぐずいったり、泣いたりすることがある。
そうすると、子供がはじまったんじゃねえかという。
おとがはじまったんじゃねえかという。
「この子が、あんなことをするんじゃあ、おとがはじまったんじゃ

あねえか」といったりする。（上増田）

兵隊の新兵と古兵　むかし、軍隊では、新兵が古兵におどろかされた。

電気がつきはじめたころのこと、古兵が新兵に、電気の油をとりに行って来いと命じた。

そしたら、新兵が油をとりに行ってきたら、電気がついていたって。（女屋）

まんじゅうの味　むかし、まんじゅうを二つにかいて食べていた人があった。

それをみていた人が、

「どっちがうまい」

と聞いたって。

そしたら、聞かれた人は、まんじゅうを下において、てばたきをして、

「おじさん、今どっちの手がなりましたか」

と聞いたって。（女屋）

油だくねえ　電灯がつく前は、ランプをつかっていた。

そんなとき、子供が夜おそくまでおきていると、

「油がもったいないから、早く寝ろ」といったこともあった。

「安物だくねえ」ともいう。（小屋原）

出征兵士と母親　上大島の人のはなし（石田吉雄さんの家）息子さんが出征することになった。

いよいよ出発することになった。

そしたら、おっかさんが息子さんの足をふみつけていて、

「早く行げ、早く行げ」

といったという。

母親としては、一刻でも長くいてもらいたいという気持であった。

ある人が柄杓を買ってきた　肩にかついできて、そのままうちへ入ろうとした。そしたら、柄杓の先がくぐりにひっかかって入れない。

そしたら、その人は、「オトウカにひっぱられた。助けてくれ」と、大さわぎしたという。（東上野）

丙午の女性・馬のこと　むかしの人は、丙午年うまれの女性は嫁にもらうもんではないといった。気がつよいといった。

丙午年生まれの人は根性があるという。

置物でも、馬を買うとそのうちは繁昌するといった。飾りもんとして、床の間などに馬の飾りもんをしておくのはいいという。

埼玉県の上岡の観音様は馬の神様として知られていた。今は牛の神様として信仰されているという。

ここでは絵馬を受けてきた。

一月十八日は、石山の観音様のご縁日である。馬をひいておまいりに行った。

上岡の観音様へは、今は馬の代りに、牛の飼い主がおまいりに行っている。

下大島のところには、おそうでんさまをまつってある。（下長磯）

馬のはなし　馬の子は、生まれて、すこしごろごろして、親が体をなめてくれると立った。

馬が座敷にあがるとよくないといった。

丙午うまれの女の人は、亭主を食うとか、子を食うとかいった。だから、むかしは、丙午の女の子を生むもんではないといった。

むかしは、馬が病死したり、けがをしたりすると、屋敷に馬頭観音の塔をたてて供養してやった。

むかし、上増田に草競馬があった。

麦の生えている田圃でやった。麦はあとでまた生えるといった。
むかし、馬を石山の観音様へおまいりにつれて行った。
石山の観音様には、大きなわに口がさがっていた。馬をつれて行って、その下をくぐらせて、馬に度胸をつけるといった。
田植が終って、オサナブリのとき、馬が骨をおってくれたというので、うどんなどご馳走を馬にもくれてやった。
馬の年は歯でわかるという。
豆まきのときは、馬屋の前では豆まきをしない。
夏は、うまやに、杉の葉をさげておいた。はえよけという。（笈井）

馬には、うまやぐせというのがあった。
ヒヒーン、ヒヒーンとないて、足ぶみをする。
主人が外から帰ってくると、顔を桶の中につっこんで、桶をほうりあげる馬もいた。
よその人がきて、あがりはなではなしをしていると、わざとうるさくする。うちのもんが、「しょうがねえな。」といってえさをやるとおとなしくなる。
はたっぺ…はたおりともいう。
足をふんばって、目をすえて、首を左右にふる。
みっくい…自分のおっぽをくわたり、しりっぺたをかじったりする。痛いのではねる。
はねっぱたきをする。前を、足ではたく。
これは、えさが欲しいためという。
くいっぽう……まあせんぼうをくわえて、のびる。首をのばす。
これは病気で、軍馬としては採用されなかった。
はたっぺは軍馬にとった。

くせのわるい馬は値段が安かった。
これを、馬喰はかくしてもっていった。（上増田）
鴻地家のはなし　大坂の鴻地家では、お元日に大将が便所へ入って泣いていたって。
むかし、生活に困って、食うものがなかったころのことを思ってそうするのだという。（笈井）
聞きちがい　むかし、旅の人がある宿屋さんに泊った。
そしたら、旅の人に女中さんが、
「半殺しにすべえか、もちいすべえか」
といったって。
旅の人が、
「半殺しはいやだ」
といったら、もちを出してくれたって。
半殺しというのは、ぼたもちのことだ。

旅の人がやってきた。
そこに、トロイモを掘っている人がいた。
「このむらはなんというか」
「おむらにお客に行っていない」
「このところはなんというか」
「トロイモだか、ヤマイモだか、掘ってみなければわからない」
といったって。
ヤマイモのあるところは、見分けがつくようにと、つるのあるうちに、ムギをまいておけといった。
つるが枯れてなくなっても、ムギが芽を出すから、ヤマイモのある場所がわかるという。（天川大島）

徴兵のがれ　むかし、兵隊にやるのがいやで、おふくろが、赤城山へ行って、ぼんぜんをたてて来るといった。

兵隊検査前に、長七郎岳へぼんぜんをたててきた。（駒形）

百円札のはなし　むかし、のらぼうをしてかね残した人があった。

大正時代に百円札がやっとできたころ太田の方で、乞食が百円札をいく枚ももっていたんで、あやしいと思われて警察のとりしらべをうけたって。

そしたら、その乞食は、百円札をためるのがおもしろくって、乞食をしていたんだって。

もらったかねをためちゃあ、それを百円札にかえていたんだって。（女屋）

千円祝　駒木の神主さん（守康さん）のうちでは、千円祝いをした。千円たまって、千円祝いをした。（駒形）

北海道はうんと寒いというはなし　北海道はうんと寒いんだって。

だから、なんでも凍ってしまうんだって。

北海道はおおか寒いんで、なんでも凍っちまう。

朝、「おはよう」ってあいさつすると、はじめは、「おはよう」が届くけど、いく度もいっていると、「おはよう」が凍っちゃって、届かなくなってしまうんだって。

吹竹みたいに、竹筒つないで、

「おはよう」

という。

やっぱりそれも、はじめは（声が）くぐるがあとは凍っちまう。竹筒の中へ「おはよう」がみんな凍っちまう。

いくら、「おはよう、おはよう」っていっても、竹筒の中へすっかり「おはよう」が凍ってしまう。

それが、だんだん太陽がのぼって、気温があがってきたら、とんでもないときになったら、

「おはよう、おはよう」

っていういう。

はてな、聞いたような声だと思ったら、自分の声だったって。

夜、ジャンジャン、ジャン、ジャンって鐘が鳴りはじめた。

「さあ、火事だぞ」

って、窓を開けて外を見たら、まっかに燃えあげて、はああと、ジャンジャンの音が聞こえなくなっちゃった。

そしたら、音が凍っちゃって、音がしなくなっちゃった。

それで、火事もまっかに、ぼうっと燃えあがって、きれいだなあと思ったら、火事もじっとしちゃった。

火事が凍っちゃった。

火事が凍ったんで、こりゃあ珍しいや、これ内地へ持って行って、見せ物にしたらもうかるだんべえつうんで、火事をそっくり買っちゃった人があるん。それで船に積んで、内地へ持ってくべえと思ったら北海道とちがって、こっちは気温があったけえんで、火事がとけて、船の上で燃えちゃったって。

船までそっくり燃えちゃったんで、その火事をそっくりうちへ持ってきられなかったって。

そういうはなしもある。（女屋）

ていねいすぎる言葉（朱膳朱椀）　むかし、あるところに、ていねいな言葉（むずかしい言葉）を知っている男があったと。

あるとき、父親が木からおちて、下にあった石に頭をぶつけて大けがをした。

早速医者へかけつけた。

そして、こういったと、
「小生の父、えんやの上に落ち、しゅぜんしゅわんもろもろといで、くすりいっぷくそうけいは」
いい言葉をいってくすりをもらおうとしたわけ。
ところが、あんまりわかりがわるい言葉。ひまかいちゃって、おとっつあんのけがにくすりが間にあわなかったと。（女屋）

すいとん　墓場にでっかいイノミの木があった。
そこに、キツネがきて、
「弥太夫さん、弥太夫さん、うらのイノミの木がけえりますよ」
という。
行ってみるとなんともない。
とんとんと、とぼ口をおっぽでたたく、
「弥太夫さん、弥太夫さん、うらのイノミの木がかえりますよ」
という。
そして、ずいとん、ずいとん、木を切る音がする。
そこへ行ってみると、なにもいなかったと。（上増田）

大きいはなし　三人の人があつまって、大きいはなしのしっくらをした。
まずはじめに、
「おれがゆってんべえ」
といって、
武蔵の原にはびこる梅の木
天までひびくウグイスの声
と、
そうすると、こんどは、次の人が、
天地をば、まるめあわせてのむやつを
まみげの上でおどらせてみる
といったと。
そしたら、三番目の人が、
富士山に、腰うちかけて青空を
笠にかぶれど、肩はかくれず（上増田）

とうもろこし（豆ぼうち）　（近所の宗さんは、よくでたらめばなしをしていた）
むかし、夫婦で豆ぼうちをしていた。
そうしたところ、二人がもようして、例のことを、庭ではじめた。
そこへ子供が遊びから帰ってきた。
二人はうったまげた。とうちゃんがころがってしまった。
男の道具に、とうもろこしの実がいっぱいくっついた。
それを見た子供がいうことに
「とうちゃん、とうもろこしくんねえかい」
と。（上増田）

常さん鋤　常さんは器用な人だった。
あるとき、自分で鋤の形を考えて、鍛冶屋さんにたのんで鋤をつくってもらった。
その鋤をつかって鋤をかけた。
はんどりはせがれの儀右衛門さん。
「べえらべえら、べえらべえら」といいながら鋤をかける。田のはたへいくと
「そおれ儀右衛門ひっかえせ」
といって、ひっかえして、また、「べえらべえら、べえらべえら」いいながら鋤をかけていたって。（笊井）

電気のはなし　電気のことを、むかしの人はエレキといった。エレ

キにさわるとつたわるといっておっかながった。
電気は晩方になるとひとりでにつく。
電気は夜を知っているといって不思議がった。（野中）

えんまさまのとりしらべ　死んでうまれた子が、あの世へ行ってえんまさまに調べられた。
「おまえは（死んで生まれたのだから）娑婆のことは知るまい。だから、娑婆へ出る前のことを話せ」
と、えんまさまがいったと。
「腹の中は気候のいいところで、一年中はだかでいられました。夏も冬もないいい気候でした。一年中松たけがでていました。まい晩、松たけがでていました」
その子は、えんまさまの質問にそう答えたと。（女屋）

ものはづけ　むかし、ものはづけというのがあった。
撰者が
「糞くらえ」
といったら、
「浅間の噴火だ」
と答えた人がいた。
撰者が
「どうしてか」
と聞いたら、
「にしがくらえ」
といったって。（櫛島）

むかしの嫁さん　猫の目を入れなければだめだ。
むかしの嫁さんは遅くまでつかわれた。
麦刈りのころは、朝は四時ごろから、夜は九時ごろまでつかわれた。
嫁に来るとき、親からもらってきた地下足袋をこちらへきてはいたら、こちらの親におこられた。それで、はだしで仕事をした。
遅くまで寝ていると、死んだしゅうとさんが夢の中で起こしてくれた。
五時ごろ、「飯食うべえや」という声がした。（小屋原）

稲荷藤節について　上増田の久川光国さんのおじいさんが稲荷藤という人。
この人は、毎晩、盆踊りの親方として出かけた。この人が音頭をとると、踊りがそろったといわれている。
おかみさんは、稲荷藤さんの声にほれて一緒になったのだという。
（上増田）

(二)　怪　異

オトウカのはなし　ハタケ（向田のところ）に赤飯が供えてあったことがあった。今の佐藤さんのうちの近く。
「おじいさん、こんなにうんまげなおこわがあがっているよ」
といったことがある。
一（いち）さんは、オトウカに化かされたことがあった。
藤五郎さんのところで酒をもらって飲んで、かごにてんが、あさくわを入れて、背負って、あるきで行った。坂をのぼって、まがって○○さんのうちの畑のところまで行ってそこで眠っていた。
これから、江木の病院のところまでのぼって行ったという。
うちのもんは大さわぎで、桃木のまがりの方までさがしに行ったがみつからず。
そのうちに、おじいさんが泣きながら、足をずりずり帰ってきた。
おじいさんがあとではなしたところによると気がついたところが江

木の病院のところだったという。（女屋）

むかしのはなし。うちのおじいさんが、裏の竹やぶでなにか仕事をしていた。

今の中学校の裏がなら山だった。そこにおとうかがすんでいた。

川島の裏の高いところにも穴を掘ってすんでいた。ここへは、子をうむときだけきていたという。

おじいさんが仕事をしていた近くをおとうかがとおった。そしたら、おじいさんがくしゃみをした。

おとうかがくねより上までとびあがったと。

あとで、おかまぎとうをしたら、ある人にきつねがのりうつって、こういったと。

「おらあ、まさやん（おとっつあんの名前）の三度ひゃくしょ（くしゃみ）にはたまげたよ」

おとうか（きつね）は、山下というところから、源三さんのくねのわきを通って、川島の穴へかよっていたって。

おとうかが、子をはやすときになると、穴をきれいにそうじするんだと、そうすると子をうんだという、近くの人がそれをみた。

子がうまれると、川嶋のうちでは、お祝いにおこわをふかして、穴のところへあげたって。（下長磯）

カワラチゴなどをとりに野原へ行くと、キツネに化かされるといった。

キツネはまゆげを勘定して化かすからまゆげにつばきをつけていげといわれた。（上大島）

きつねの嫁入り行列に出会って、かさをつき出したら、逆にだまされて、山で松の木をかじっていた。

まゆをつばでぬらすと、だまされない。

ある人が野火をもやして、狐を焼き殺してからは、いつもだまされるようになった。（亀里寺家）

病人にキツネがつくと、どこまで送っていってくれという。

そこまで送って行くと、病人がばったり倒れて、そうすると正気にもどるといった。

キツネ（オトウカ）がついたときに、病人の寝床に毛がいっぱいあったという。

キツネにばかされた人があった。その人は、あぶらげを買ってきたって。そうしたら、そば畑の中を、「おおふけえ、おおふけえ」といいながらあるきまわっていたという。（上大島）

ある人が、キツネの子にくれべえと思って赤飯をもって行ってあげておいた。そしたら田で仕事をしていた人が、その赤飯をとって食べてしまった。キツネの親が、赤飯を食べた人のあとになり先になりして、「赤飯を子供にくれるんだからよこせ」といったって。

赤飯を食べた人は、そのあと大病にかかったって（どこのいなりさまのことだかわからない）。（天川大島）

キツネの恩返し　むかし、ある人がキツネを助けてやった。

そしたら、あとで、そのキツネが女の姿になってきた。

そして、その人の嫁さんになった。子供もできたと。

ところが、あるとき、旦那さんに正体がばれてしまった。

それで、ひまをもらって、そのうちから出て行ったという。

キツネの嫁どり　わたしが、小学校に入るか入らないかころのこと、キツネ嫁どりを見た。何回か見た。
うちの庭から見た。
東の方で、駒形駅から、駒形の下の方へ行く道があった。その辺は、むかしは松林だった。
その道を嫁どりが通っているように見えた。だんだん南へ歩いて行くようにして消えていった。
提灯が十五か二十くらいつながって見えた。
いくらか、ついたり消えたりした。
キツネの嫁どりは、くもりのような晩に見えた。（小屋原）

（天川大島）

キツネの嫁どりを見たことがある。
ちゃかちゃかちゃかちゃかとあかりが見える。
どんよりと湿気の多い晩に、ちゃかちゃかあかりが見える。
人の気配がすると、そのあかりは消えてしまう。あかりの消えたあとは気持が悪かった。
下流山（東善経塚の北域）手前にわずかの田があるが、そこの辺にでたのを見た。
提灯のような感じである。あかるいけど、光はなかった。ただ、あかるいなという感じである。（駒形）

万福寺の方にきつねのよめどりが見えた。
がやがやにぎやかだった。
ながめていると、あかりが、消えたり、ついたりした。（女屋）

提防の所に火がついたのを見た。（亀里寺家）

竹橋あたりへ魚釣りに行って、きつねのよめどりを見たことがある。
暗闇で、どんより曇っている晩に多い。
ちゃらちゃら、消えたりついたり、消えたりついたり、列をつくっていった。
これは、本当だと思った。
あの辺だったと、つぐ日そこへ行ってみると、草むらがふみあらされていた。
一番よくきつねのよめどりを見たのは、うちを出て、経塚の古墳の方で、山ぎわをおとうかのよめどりが通ったとこ。
昭和二十年から三十年ころまでのこと。（駒形）

年寄りの人がいって聞かせた。オトウカはご祝儀をすることがあるって。
オトウカは、何もいわずに、せっせと通るという。
こう、年寄りの人がわしに話して聞かせたことがあった。（東上野）

桃木川のまわりあたりに、オトウカが提灯をつけて通ったのを見たという。
人間の嫁どりなら、道を通るのに、オトウカの嫁どりは、川を越して行ったりする。道のないところを通っていくという。
人間の嫁どりは、提灯が横に動いていくが、オトウカの嫁どりは提灯が上下に動いた。それで、あれは、オトウカの嫁どりだといった。（女屋）

これは、わたしの実家のある寺家でのはなし。
信濃街道に、あかりがついたり消えたりしたことがあった。
二十も三十も、提灯のようなものが、ついたり消えたりするように見えた。
あれは、オトウカの嫁どりだといった。
わたしが小学生だったころのはなし。（笂井）

チョーチンをつけたのが見えた。（力丸）

遠くの方で、夜、ポツポツと灯がついて見える。（下朝倉）
樋の滝の所に、いくつもついたり消えたりしていた。（新堀）
学校の杉から新堀までチョーチンがぶるさがっていた。「オトーカの嫁とり」と言った。
矢島から横手までチョーチンが並んだとも言う。（公田）
これは子供のときのはなしである。
笂井の六本木さんのうちの人が、今の中学のあたり鯉池があったところのうちのせがれさんのところへ嫁に行くときのこと、おばごの友だちのご祝儀だったので、嫁さんのあとについて行った。
そしたら、大島山のあたりに、ちゃかちゃか提灯がいっぱいついたようになった。
「あれは、キツネの嫁入りだぜ」
といった。
わたしは、キツネの嫁入りをはじめて見た。
十歳になる前のことだった。
それは長かった。
小屋原の西原から両毛線の線路のところあたりまで続いた。
あかりがついたり消えたりついたり消えたり、提灯のあかりのように、一列にならんでいた。色も提灯のあかりのようだった。
行列のように、動いてみえた。
そして、ごとごと、ごとごとと音がした。
嫁さんを送って行った人がみんな見た。
わたしは、それを見て、おっかなかった。
オトウカの嫁どりをみたのは、このとき一度だけだった。（笂井）

キツネの嫁入り　山王から後閑にかけてのところ、キツネの嫁入りを見たという人があった。
提灯が六つとか七つ、動いているのを見たことがある。子供のとき、一回見たことがあった。（下大島）

オトウカツキ　むかし、あるところに、オトウカツキの人がいた。
刀の名人が刀をふりあげても、オトウカはおちなかった。
ところが、よっぱらいが、弓をひいた。そしたら、的がさだまらず、そのキツネ（オトウカ）がおっかなくなってはなれたという。（女屋）
おじいさんにオトウカがとりついたので、おこわ（赤飯）をしょわせ三本辻まで送った。オトウカがおじいさんから抜け出たらおじいさんは死んでしまった。（亀里）

これは、わたしが嫁にきてすぐのことで終戦の翌年（昭和二十一年）の話である。
嫁ぎ先の屋敷には、稲荷様が祀ってあった。この稲荷様はえらい稲荷様だったという。ところが、わたしは、稲荷様がきらいで、嫁いで五日目の日に、稲荷様におまいりして、
「稲荷さん、わたしは、稲荷様がきらいだけど、かんべんしてくださ

い」
って、塩をもって行って清めてきた。
そして駒形に妹がいて、そこがちょうどおまつりだったので、妹のところへ旦那と一緒にお客に行った。妹のところで稲荷ずしをつくってくれた。それを土産として持たせてくれた。
帰ってきたら、その稲荷ずしがなかった。
旦那が
「もらってきた稲荷ずしはどこへやった」
といったから、
「知らねえ」
と答えた。
（それからおかしくなった）
「おれは、腹がへったから、うどんこさえてもってこお」
っていった。旦那がうどんをもってきたら、うつぶせになっていて、
「そっちへ行け」
って、旦那（とうちゃん）にいったって。
わたしが、何日もおかしくって、ご飯を食わずにいたので、とうちゃんが（おがみやさんに）見てもらった。（そしたら、稲荷様がついているというので）ある日、うどんが食いてえというので、うどんをあつくして、その上に、あぶらげをこまかくきざんでのせ、その上に、まっかに、すきまなくとんがらしをのせておけといわれたので、（とうちゃんは）わたしのところに、そのうどんを持ってきた。
そしたら、わたしは、うつぶせになっていて、それを見ないで、
「上の赤いのをとれ」
って、どなっていたって。
そしたら、こんどは、しょうがないからというので、（おがみやさんに）
「犬のいう字をでっかく背中に書いて、三回ぶっくらせ」
といわれたので、とうちゃんが、わたしの背中に、げんこつで犬のいう字を書いて、三回、どんとたたいた。
すると、わたしは、ほっと気がついた。
それで正気になった。（笈井）

キツネがまやかすこと　晩方になって、今まであかるかったのが、急に暗くなる。
そうか、こんなに急に暗くなるはずがないと思って、道端に腰かけて煙草をすっていると、晴れてくるという。（上増田）

キツネに化かされたはなし　隣のおじいさんが田圃へ行ったままいなくなった。近所中の人がでてさがした。そしたら、上増田の大塚田にいたという。
このことは、わたしは、さがしに行ったのを見ていた。小学校一、二年生のころのことだから、大正七、八年のときのはなしだ。

キツネに化かされたはなしを聞いた。
馬糞をまんじゅうに見せられて食ったという人もあった。
ためこがの中に入って、いい湯だといって、体を洗っていたという人もあった。（下大島）

ある人が、三月のお節供のとき、あぶらげを買ってきた。
そしたらキツネに化かされた。
ソバばたけを、「おおふけえ、おおふけえ」
と、一生懸命にあるいていたという。
その人にあとで聞くと、そこが川だと思ったって。（上大島）

子供のとき、山へカラチゴを取りに行くと、キツネがまゆげを勘定して化かす。そうするとうちへ帰れなくなるといった。
それで、化かされないように、まゆ毛につばをつけて山へ行った。
ソバ畑へ入って、
「おおふけえ、おおふけえ」
といって、おしあるいていた人がいた。
あとできくと、ソバ畑を川だと思って、そういいながらわたったのだという。
キツネに化かされたはなしである。（上大島）

三十分かかる所を、夜、四時間かかった。どう行っても元の所にもどってしまう。一休みして、タバコをすったらわかった。（朝倉）

むかし、オトウカに化かされて、野だめに入って、「ああ、いい湯だ、いい湯だ」といっていた人があったという。（野中）

むかし、ある人がオトウカに化かされて、馬糞をまんじゅうだと思って食わされたというはなしがある。（上増田）

まゆげを勘定されると、オトウカに化かされるから、まゆげをしめしておけといわれた。
まゆげを勘定されないように、まゆげにつばをつけた。
キツネのいたずら　後閑の稲荷様に留守居番の人がすんでいた。
夜中になると、戸を、ぱさ、ぱさとたたく音がする。
留守居番の人が出てみるとだれもいない。
キツネが夜中にきて、しっぽで戸をはたいたのだということだ。
（天川大島）

七兵衛ぎつね　新土塚の七兵衛ぎつねが、この辺の人についた。それを、先達におがんでもらって、おとしたという。（下増田）

オトウカの恩返し…送りオトウカ　上増田の中村佐四郎さん（わたしのおじいさん）は、ふだんオトウカをかわいがっていたという。中村さんのうちの背戸の雑木林（屋敷山）は広く、そこにオトウカがすんでいた。
おじいさんは、二之宮から中村家へ婿にきた人。
おじいさんが二之宮の実家へお客に行くときには、おじいさんを二之宮まで送って行った。
また、帰るころになると、途中まで迎えにでたという。べつに知らせてあるわけではないのに、その時間になると、迎えに出たのだという。（上増田）

オトウカに油あげをとられたはなし　むかし、竹橋を渡って、町まで買い物に行ってきたかえり、油あげを買ってきたら、うちへきてみたら、みんなとられてしまったという。（東上野）

オトウカ　むかし、永明小学校北の墓地の中に、子づれのオトウカがいた。親が二匹、子が四匹。
このオトウカは、とくに人を化かしたわけではない。（上大島）

オトウカの子をとりあげたこと　上増田の岡田先生が、あるときオトウカの子をとりあげたって。
「いくらでよかんべ」
といっておかねをよこした。ご馳走にもなってきた。おかねは木の葉だったが、ご馳走は本物、近所にご祝儀があって、そのご馳走をぬすんできたもの。（笂井）

オトウカにつけられたはなし　むかし、稲を田圃で土干しにしていた。

みながわをまるめて背負って、八日市の墓場の裏へ、ばあさんとおやじと二人で田へふたをしに行った。

行ぐとき、今井の方へ火の玉が五つも六つも出た。

ぱっときえると、すぐそばへきて（火の玉が）そわそわ、そわそわしている。

二人は、火の玉にうちまできられちゃあかなわねえというので、細引きであがりはなをひっぱたいた。

東んちに、まるという犬が飼ってあった。

犬をけしかけたが、まるはよんでもこなかった。

二人は、東んちの庭を通って、やっとうちへ帰ってきたって。（笂井）

目がタニシになる　死んで数日たち、目がくさった状態をいう。

体は死んでいて狐がうごかしているという。（亀里）

八ツ穴　この話は現在の亀里町の竜門の事だったそうだ。そこには森があって、穴が八ツあったかどうかは知らないが、その森が八ツ穴と呼ばれていたそうだ。そこには、おとうかへきつねに似た動物〉がいたそうだ。その、おとうかと言うのが人をばかしたり、いろいろないたずらをした。また、時には良いこともしたそうだ。その一つに、おとうかのちょうちん行列というのがあり、おとうかは、夜になるとちょうちんを持ち、何匹も何十匹もならんで道を歩いたそうだ。

通りがかった人がいると、その人を変な場所へ連れていったりして、朝まで帰れなかったということだった。また酔ったりしている人がいると、その人を川へ連れていって、川の中に落としたり、池の中へ落としたりしたそうだ。良い例で、おとうかが、竜門の三輪という家に嫁に来た。それは、ちょうど田植の時期で、その家の人が朝早く田へ行くと、田には一面に苗が植えてあったそうだ。（亀里）

オサキ　むかし、オサキを飼っているうちがあった。

オサキは、ネズミみたいなもので、よそんちから、なにかひいてきたという。

オサキを飼っていて、大尽になったというちもあった。

むかし、ご飯しゃもじでおひつをたたくと、「オサキがくるから、絶対におひつをしゃもじでたたくな」といわれた。（上増田）

オサキのこと　オサキが病人につくことがある。

「どこそこまで送って行けばはなれる」といったりする。三本辻まで行くと、ぱたっとはなれたりする。

その病人がなくなってからみると、寝床が毛だらけだったというはなしがある。

ふだん、釜のふたをたたくと、オサキがくるといった。

味噌桶のふたはきちんとしてあるのだが、真中の味噌がなくなっていることがある。オサキがもっていったのだという。

また、まゆを売るときには、まゆの方にぶらさがっておもくして、オサキを飼っている人にもうけさすという。（上大島）

オサキドウカ（稲荷）　むかし、オサキを飼っているというちがあった。

オサキドウカというのは、うちのもんには見えるが、よそのもんには見えないという。

まゆをはかりにかけるとき、オサキがまゆのまわりにぶらさがるんだった。オサキが目方になるのだという。

また、あがる前のかいこを近所から盗んでくるという。

かごの上でころころのころがると、オサキドウカの毛がうんまくかいこをはさんで持ってくるようになっている。

粉箱に入って、粉を毛の間につけてもってくるともいう。粉をうち

へもってきて、粉箱に入ってはたくという。
米でもなんでも、そういうふうにしてはこぶんだって。
オサキドウカはうんと子がふえるんだって。
オサキドウカのことは、はなしだから、ほんとだか、うそだかわからない。(女屋)

下川淵の昔のむじなの話　昔、一本杉の周りにはお墓があったそうだ。お墓の周りには何びきかの、むじな〈たぬき〉が住んでいた。ある夜のことだ、男の人が夜遊びをした帰り道に、突然火の玉が出て来たので、男の人は、とっさに木の下に逃げ込み、たばこの火をつけた、そうしたら、その火の玉はたちまち消えてしまった。また遠くのほうが火事のようにみせたり、ひとがたくさん行列しているようにみせたりとってもずるがしこいむじなだった。むじなは、火ととうがらしがとってもきらいだった。(亀里)

ムジナキョウ　ムジナキョウには、女松があって、枝がその上で、ムジナがお経を読んだんだって。で、ムジナギョウというようになったという。(女屋)

むじなきょう　むかし、むじなきょうに、ムジナがすんでいた。餅をだしておくと、その上にのっかる。そうすると、くさくてくえなかった。
また、餅をとられてしまったという。(女屋)

ムジナキョウのムジナ　ムジナキョウにはムジナがいた。
このムジナはよく人を化かしたという。
そのムジナを、芳太郎さんのおやじさんの覚さんが鉄砲でぶった。
それから、ムジナはでなくなったという。(東上野)

むかし、女屋の一番北のところにムジナがすんでいた。
かげがあって、滝がおちていた。
そこにすんでいたムジナが、近くの万福寺へ行っていて、しじゅうお経を聞いていた。
それで、滝のところへきて、滝をみながらお経を唱えていたという。
ムジナがお経を唱えているので、むじなきょうという地名ができたという。(女屋)

むじなつき　前のうちの人で重ちゃんという人のはなし。
この人は、病気でしばらくの間寝ていた。
それで、むじなつきといわれた。
縁の下から、むじながでたといわれたりした。
寝ていてうんと食うという。
子をうんでいっぺえいるという。
だれかにおがんでもらったという。
むじなきょうに、むじなの巣があったという。
重ちゃんは、あおんぶくれになって死んだ。

ムジナが桃木川のそばにいた。
リヤカーのあと押しをしてかえりに、道にかくれていて見た。
四時ごろ、橋のそばに、ちょろちょろっと出た。
はじめは犬かと思ったが、それがムジナだった。(東上野)

ムジナ　ムジナが化けもんになったといった。
お諏訪様の道、田の方であかしがみえた。
あれは、ムジナがあかしをつけたんだんべといった。(上増田)

ムジナが石に化けていたはなし　むかし、ある人が道をあるいていて、道端にあった石をけった。そしたら、その石は、ムジナが化けていたもの。その人のあとをつけてきたって。道端の石でもやたらける

ものではない、よけてとおれといわれた。（天川大島）

ネコのはなし　ネコは一年に三回子を産むという。

春うまれたネコはネコといって、ネズミをとる。春子はネズミをとるというので喜んでもらわれていくという。

夏できた子は、トコといって、トリをとるのできらわれるという。

秋にうまれた子は、ヘコといって、ヘビをとるという。

ネコの子をもらいに行くと、ネコは、

「おたくさんには、がき（子ども）がいくたりいますか」

と聞くという。

ネコは、子どもがうんといるといやがるという。

イヌは、子をもらいに行くと、

「おたくには、お子どもさんがいくたりいますか」

と聞くという。イヌは、子どもがうんといると喜ぶという。

ネコの子をもらったお礼には、なまぐさというので、かつおぶしを、一本とか二本持っていく。これは、ネコの親のところへ持っていくものという。

ネコをもらってくるときには、目かくしをしてくる。

ネコの名前としては、タマというのが多い。ブチ、ミケなど、毛色によって名前をつけたものである。

ネコは生ぐさが好き。特にマタタビが好きという。「ネコにマタタビ」という。ネコが病気になれば、マタタビをくれた。

ネコは、小さいときからしつければいうことをきくようになる。ここんところへうんこをしろといって、そこへつれて行って二、三度めんどうをみてやれば、そのとおりにする。

ネコは（用便の前に）砂をかいてくぼみをつくってから用をたす。そのあと土（砂）をかける。

ネコの病気にネエラというのがある。虫がわくという。

ネコにイカをくれると、腰がぬけるという。

タコをくれると太コ（でっかくなる）という。

障子のところには、一窓紙をさいておく。バレンのようにする。それを、ネコクグリといった。

ネコは柱で爪をとぐ。大体同じところでといだ。

ネコがいなくなったときには、今まで食べていたお椀を、今まで、ネコが食事をしていたところに、かぶせておくとよいという。

オスネコはふける。さかりがつく。

このときは、「ガオン、ガオン」といいながらでていく。二十日から三十日くらいたつと、さかりがおわって帰ってくる。

春の秋、二回くらいふけだす。

ネコのくびったまをもってぶらさげてみて、うしろ足をたたむネコはネズミをとる。いつでもとび出せる態勢をとっているのである。

ネズミをとらないネコは、うしろ足を下にさげている。

ネコが死ぬときには、飼い主に姿を見せないという。

ネコが死んだときは、三本辻に埋けてやる。土をかけて山にして、ご飯のしゃもじをたてる。しゃもじには、なにも書かない。

ネコの爪を切るなという。ネズミをとらなくなるといった。

ネコには鏡を見せるなといった。その理由はわからない。

ネコを殺すと、七代たたるという。

ネコが一貫匁になるとお祝いをする。

三毛のオスはすくない。船のりの人がほしがった。海が荒れるか荒れないかをしらせてくれるという。

ネコは手をなめて顔を洗う。そのとき、手が耳をこすと、天気がいいといった。

ネコは年をとると、化けるといった。
年をとったネコがあつまって、踊りをおどったという。この近所のネコがあつまって、踊りをおどったというはなしもある。
亀泉に猫見塚というところがある。踊らないネコは、そこへあつまって、猫田で踊るネコの踊りをみていたという。猫田は、東片貝にある。ここにネコがあつまって踊りをおどったという。
ネコは、ネズミをとって食ったので、十二支にははいれないという。
ネズミは十二支のいちばんはじめで、えらいからという。
お釈迦様は、自分が病気のとき、見舞に来た順番によって、十二支の順番をきめたという。（野中）

猫は四土用といって四回子をうむというが、ふつうは三回である。
春うまれる子はねこといって、ネズミをとる。猫の子は、春猫をもらえという。
夏の猫は、へこという。へびをつっつく。
秋の猫は、とこといって、とりをとる。
猫でも、毛ぎらいする雄猫があるという。自分の子供でないということがわかるという。そういうのは雄猫が食いころしてしまう。
子猫の頭を三つはたくと、生まれたうちをはなれるという。もらわれたうちにいついて、うちへは帰って来ないという。
飼っていた猫がいなくなったときには、その猫の使っているおわんを、屋敷稲荷にふせてあげておけば帰ってくるといった。
子猫をもらいに行くと、「おたくにはがきがいますか」と聞く。犬は、「子供さんがいますか」と聞くという。（天川大島）

猫を十年さき飼っていると化けるという。

あるとき、猫がおしっこするので、うちゃりに行った。ふところに入れて捨てに行ってきたが、三日たったら帰ってきた。
それから、かわいそうだというので飼ったという。（上大島）

六部のたたり　むかし、笂井に利助という人がいた。
六部がまわってきたとき、その六部がかねをたくさん持っていた。六部をころって、かねをとって、前の田圃に埋けた。
そしたら、その田をつくると、六部のたたりで早死するといわれている。
利助さんという人は、利口でかねをうんとのこした。
そしたら、一人娘に死なれたり、運のわるいことがあった。
坊さんにおがんでもらった。
坊さんがいうには、
「おめえはつみをつくっておる。それでそういうことになった」と。
それで、利助さんは、お寺に大般若経六百巻を寄付した。
また、釣鐘のでっかいのを寺に寄進した。
この釣鐘は第二次世界大戦のとき供出してしまったが、よそムラの人も、この釣鐘はいいもんと認めていたほどであった。
あるとき、小屋原と笂井のわかいしゅでけんかをしたことがあった。
そのとき、小屋原の連中が、笂井の高札にこうはりがみをしたと。
笂井にすぎたるものが三つある。
　一に一党
　二に釣鐘
　三に勘造武政
一党というのは、石井一党という人のこと。
釣鐘は、安養院に寄進したもの。

勘造武政というのは、小屋勘造という人。農家で職人でもあった人。この人の元の屋敷がすこし残っている。

さしものしであった。長持などをつくっていた。かねをのこすのも、かねを使うのも上手であった。

仕事の名人であり、前橋藩から武政という名のりを許された人。長持などをつくって、殿様のところへ納めたという。

あるとき、家老のうちが火事になった。それを焼くのがつらくて、屋敷のまわりの堀へなげこんだ。そしたら、その中に水がしみこまなかったという。

この人は、大工のこともわかった。

だから、旅をしてあるいていて、おれも年をとったから、うちをつくりかえて、一ぺん名主でもして死にたいと思ったって。

水車もきざんだこともあるので、うちのことをくるまんちといわれた。

さて、武政さんは、自分でうちをつくった。

むかしは、名主の役をつとめると、前橋様がまわってく。槍持をついてくる。槍をたてるだけの天井をつくらなければならない。

殿様のおいでになる部屋は、釣天井にして、上へあがれないようにした。

槍を斜にたてておけるだけの高さに、天井をつくらなければならなかった。

家をつくったら、くるまんちで、名主をしてえつうから、こんどはさせればいいというので名主をさせたという。（笂井）

六部大尽　宮原のN（あるうも）さんのうちでは、むかし、六部を泊めて殺して、土蔵の中に入れて、かねをとった。

そのあと、急に大尽になったという。

ところが、このうちでは、そのあと、女の子が育たないといわれたという。（上増田）

むかし、六部を泊めたうちがあった。

そういううちの中で、その六部が出て行ったのを見た人がいないというはなしがある。下長磯の下に巡礼橋がある。あの近所で巡礼が殺されたという。（女屋）

急に大尽になった話がある。ごぜどんは、金をたくさんもっていた。それを殺して、その金をとって、それがもとで、とくせいになったというはなしがある。（野中）

火の玉を見たら人が死んだ話　わたしが九つのとき、桐生の糸撚り屋へ奉公に行っていたとき、火の玉を見た。

そのとき（奉公人の中では）わたしが一番のちびで、外へ水車を止めに出た。水車を止めて外へ出たら、夜の十時半ごろだったが、火と同じ色をした火の玉が、前のうち、ひゅうっと、波をうってでてきた。さきっぽは五センチくらいの玉で、五、六十センチの尾をしていた。その火の玉が、電線の高さのところをとんできて、その尾が電線にひっかかった。すると、「しゅう」っとえらい音がして、ふんわら、ふんわら遠くへ行って、墓のところの一本松まで行って消えた。

そのことを、うちへ入ってから大人に話した。すると、大人が、

「それは火の玉だ」

っていった。

「火の玉ってなに」

っていうと、

「火の玉は、人が死ぬときにできるんだぞ」

といわれて、急におっかなくなってたまげた。見ていたときは、ちっともおっかなくなかった。

そして、そのあと、わたしが火の玉を見た十時半ごろ、前のうちの女の人が死んだという話を聞いた。（笂井）

人魂はいく度もみた。

人魂を見たあとは寒くなった。

夏のことで、おおく暑いんで、富田のおばさんちへ、風呂をもらいに行った。庭にむしろ敷いてそこにいたら、でっかい火の玉がとおった。色は赤かった。

それがとおったあとは、温度がさがったような気がした。

屋根より上をとんだ。

まるまっちい形のものが、青火をひいてとんだ。

人が死ぬときには、人魂がとぶという。

わたしが、七つ八つのころ、人魂を見た。

お星様がとぶと思ったら、それが人魂だった。

人魂を見たあとは、さびしいような気がした。

人魂は小さく見えたり、でっかく見えたりした。（東上野）

東片貝の虚空蔵様の東あたりで、赤い玉（光り玉）をみたことがある。赤い玉が尾をひいて、中空をとんでいた。そのときは、雨っぷりであった。横にとんでいた。

光り玉を見たあとはさびしかった。、わしが二十歳代のころのはなし。昭和のはじめごろ。（上大島）

むかし、夜遊びに歩いていたころ、お寺の墓場のそばを通ったら、墓標に伝わって青い火が燃えあがるのを見たことがある。（野中）

笂井の人家からはなれた西に塔越というところがある。そこに、塔越山という山があった。

そこへ、人魂がでたのを見たことがある。

人魂の大きさは、径が十センチくらい。色は、青とか赤とか、ふわふわしていて、ついたり消えたりしていた。ざわざわ音がした。しっぽは一メートルくらいの長さ。

桑つみをしていて、暗くなってから見た。わたしは、三回くらい見た。

人魂がでると、人が死ぬといわれた。（笂井）

前んちの羽鳥重（じゅう）ちゃんと二人で、暮の火の番をしていたことのこと、小雨の降る晩だった。

北組をまわっていた。

機屋のうちができたばっかりのときだった。

東田圃へ出たら、今井の観音様の西側に火の玉が見えた。一つ消えると、続いてぱっぱっと消える。消えたかと思っていたら、すぐ足もとに火の玉がきていた。（笂井）

人がなくなるとき、息をひきとる前に人魂がとびだすといった。何時間かして、その人が死んだというはなしを聞く。人魂は、そのうちの人には見えないという。

カラス鳴きが悪いと、人が死ぬというが、なくなるうちの家の人にはその鳴き声が聞えないという。カラス鳴きが悪いと、誰かがなくなるのではないかと心配した。（下長磯）

あの世を見た話　ある人が貧血で死にそこなった。目の前にお花畑が一面にひろがっていた。赤・白・紫、うんときれいだった。

「わあきれいだ。わあきれいだ」

といって、そっちへ行こうとしたが、自分の体が動かなかった。

すると、誰かが体をゆすっていた。頭をあげると同時に目がさめたという。（笈井）

むこうに、きれいな花が咲いていた。だんだんと、そっちの方へひっぱられるような気持がしたという。

気をとりもどして、丈夫になって、そういったはなしをする人があった。（小屋原）

ある人が（大病のとき）きれいなところへ行ってきたという。蓮の花が咲いていて、きれいなところだったという。（野中）

棺桶からはいだした人の話　これは、上長磯の人のはなし。

ある人がなくなった。

棺桶に釘をうたないでおいた。かたかたと音がしていて、そこから人魂がとびだしたって。

べつの話では、棺桶からはいだして、白装束姿で、縁側のすみにすわっていた。（笈井）

仏のたたり　盆・彼岸のとき、いそがしい、いそがしいと仕事をしていて、仏様にはなにも供えもんをしなかったと。

そしたら、仏様が帰るとき、そのうちの子供をいろりにけこんできたという。子供は、大やけどをしたって。

だから、（仏様がお客にきたときは）なんでも、まるめたものをつくって、供養してやれといった。

子供のやけどは、仏のたたりだといった。（天川大島）

仏様のおしゃべり　無縁仏の墓は、新井の墓のとま口のところにあった。

あるとき、そのそばを夜通った人があった。

そしたら、にぎやかな話し声が、墓から聞こえてきた。

そのことを坊さんにはなしたら、

「あの世へ行ってから、みんなはなしがあるんだよ」

といったって。（上大島）

生まれかわりのはなし　わたしの父親のいとこが堀越にいた。

そこのうちに子供ができた。

しかし、二人も小さいうちに死んでしまった。

そしたら、おばさんが、死んだ子に、

「こんど生まれてくるときは、寿命を長く、いいところへでろ」

っていって、そのところへすみでしるしをつけて埋けてやったって。

そしたら、すみのしるしのある子がそのおばさんのところへ生まれたって。

おばさんは、その子のことを、

「おらちの竜（男の子）は生まれかわりだ。おれにさずかった子だ」

といったって。

これは、明治時代のはじめのころのはなしという。

その男の子は、大きくなって、佐渡の巡査になったという。

（天川大島）

子供が死んだとき、足の裏に字（所と名前）を書いてやった。そしたらよそへ生まれかわった。そのしるしができたという。（生まれかわった子に）（上増田）

三隣亡　この畑を自分のものにしたいときは、餅をその畑にいけておく。
そしたら、わたしのおじいさんが、畑のさく切りをしていたら、餅がいけてあったのを掘りだした。
おじいさんは、
「こんなことをしやがって」
といって、その餅に小便をひっかけたって。（上増田）

三本松のはなし　笂井の東、三軒家のむこうに三本松があった。
なんで三本松が生えているかというと、こんなはなしがある（三枚の葉の出る松のこと）
むかし、母親が、六つになる女の子をつれて、白装束にわらじばき、すげがさをかぶって、巡礼になってやってきた。
三本松のところまできたら、親が行き倒れになって死んでしまった。
ムラのてえ（宮原・宮下の区長や伍長たち）がよって相談した。
残された六つの子をどうするということになったが、誰もひきとりてがなかった。
そこで、その場に、親と一緒に生き埋めにしたって。
そうしたら、夜になると母親が亡霊になってでてきた。三本松のあたりを人が通ると、そこへ母親の亡霊がでてきて人をおどろかす。
ムラの人は困って、お寺さんをたのんで供養してもらった。
そしたら、それから亡霊はでなくなったという。
ムラの人は、母娘の供養のために、埋めたところに一本の松を植えた。
そしたら、不思議なことに、その松の葉は三本の葉がでたという。
これが三本松の由来。（笂井）

へびよけ　むかしは、女の人はおふりで、パンツなどはいていなかった。
あるとき、おかみさんが、川へ行って釜を洗っていたって。
そしたら、むこうから蛇が矢のように向かってきたので、釜っぷたで受けたって。蛇は三つに切れた。
だから、女の人は、便所へ行かねえで、露天で小用をたすときには、三度つばきをしてからしろという。
蛇はまたの間に入ると抜けないという。（笂井）

下増田の七不思議
比丘尼台
天神様のたつまき
竜宮の椀貸し
増田が渕の片葉のよし
キツネの詫び証文
まりしてん様の御神木（下増田）

怪談　夜、八ツ穴から女の人が馬車にのった。鶴光路をすぎて、ふと気がついたら、乗っていなかった。（朝倉）

話　馬車に夜乗っていたら、前の方を白いものがフワフワしていた。びっくりしてよく見たら巡礼の人が、ハンコを押す白い着物を着て歩いていた。（朝倉）

アズキとぎ　アズキをとぐ音がする。土橋の所にも出た。東田川に出た。（亀里寺家）

伝説　テンプラを作ってもらっての帰り、徳丸橋の辺で田中の子供がくるのとすれちがったら、消えてしまった。そうすると蛇の目のカサのキレイな女がついてきた。（力丸）

のっぺらぼう　矢島の若いしが念仏橋を渡って横手へ夜遊びにでかけた。そしてその帰り念仏橋の所までくると、川瀬の音が聞こえなく

なり、空の星が急に消えてしまった。そして、後ろの方から、「まってくれ、まってくれ、私も連れていってください」と、のっぺらぼうが言った。何人ものひとが見たそうだ。（亀里）

迦葉山様のはなし　あるとき、迦葉山様へ講で行った人があった。その人が、「今夜はうちにいればとろ飯が食えたのに」といった。そしたら、お小僧さんがそれを聞いて

「しばらく待ってください」

といって、しばらくたったら、とろめしがでてきた。

つぐ日うちへ帰ってきてみたら、うちのとろが掘られてなくなっていたし、こやしばが燃えていたって。

それで、それは、こやしを燃やしてあかりにして、とろを掘ったんだんべということになった。

だから、そんな無理なことはいうもんじゃないというわけ。

それは、どこの人のはなしだかわからない。（笂井）

大蛇のはなし　竹橋から清内の間で、蛇のぬけがらの大きいのがあったのを見たことがある。

茶碗くらいの太さであった。

大きいぬけがらを毎年見たことがある。

河川改修で、諏訪渕がなくなったら、自然にでなくなった。

諏訪渕には、女の泣き声が聞こえるとか、火の魂がでるというはなしがあった。

今は石の宮が残っているだけ。（駒形）

ウナギさしの人　むかし、ウナギさしを商売にしていた人があった。その人の子供に、骨なしの子が生まれたという。（上大島）

不思議なおばあさん　むかし、あるうちにおばあさんがいたら旅のおばあさん（おがみやのような人）がやってきた。なにかめぐんでくださいといったら、えらいことばで

「うちにはなにもありませんよ」

っていったという。そしたら

「それだけの大家で、米一粒くれられない。いまにみろ」

って、そこおがみにきた人がいったって。

そのあと、そこんちは、いいことがなかったという。（笂井）

死んだ両親が夢にあらわれた話　終戦後まもないころ、わたしは丸橋安衛のところへ後妻として嫁いできた。

嫁いできて間もないころの話である。

わたしが座敷のすみ（家の鬼門の方角だから、東北のすみ）に寝ていたら、おじいさんとおばあさんがでてきた。おじいさんは背が高く、手作りのこまかい模様の銘仙の丹前を着て、さんじゃくをしめていた。おばあさんは背が低く、ねじりずっぽうを着て、はんてんを着ていた。おじいさんが左側に、おばあさんが右側に立っていた。そして、

「（あんたは）ここんちへ縁づいてきたんだから、安をよろしくお願いします。安が一人でいるんだから、お願いします」

といって、頭をさげたとたんに目が覚めた。

あとで、亭主に、こういう夢をみたといったら、それが死んだおじいさん、おばあさん（安衛の両親）だった。

そのとき、わたしが亭主に、

「あのねえ、とうちゃん」

って話しかけたら、その声が、おふくろさんにそっくりだといわれた。

あとで見たら、寝ていたすぐそばに、位牌が一枚落ちていた。すこしはなれたところに、九枚ほどの位牌があった。（笂井）

化けもん源重　むかし、あるところに、じくなしの大工さんがいた。名前は源重さん。

源重さんは大のさびしがりや。
それで、ムラの人が馬鹿にして、ある日のこと、おどかしてやろうというので、まゆを入れる袋を幽霊のようにして、墓場へもっていって源重さんがやってきたら、それをだしたって。
そしたら源重さん。ちっともおどろかないで大工道具をそのままだして、
「これが化けもんか」
といって、その袋にかかっていったって。
ムラの人は、源重さんが、からから逃げると思ったら袋にかかっていったんでおどろいた。
それからは、ただの源重さんでなくって、化けもん源重と呼ばれるようになったって。（上大島）

天狗様がたまげたはなし　むかし、あるムラへ天狗様がやってきた。はじめ見たところ、ムギが稔ってまっきいろだった。
そのあと見たら、今度はまっさおになっていた。ムギのあと、田植がすんでいたのである。
あんまり人間は仕事が早いので、天狗様がたまげたって。（笂井）

オトボウ　むかし、オトボウというナマズがいた。
野中清水といわれるところにいた。
野中清水のあたりには、むかしは大きい池がいくつもあった。川には、川菜がはえていた。魚もたくさんいた。今は水源池になっている。
この辺には、ナマズがたくさんいたという。
ここへは、夜、あかしをつけて、やすで魚をとった。それをヒボリといった。
あるとき、野中清水で大きいナマズをとった。こしごに入ってもってきた。
そしたら、山の方から、
「オトボウ、オトボウ」
と呼ぶ声がした。
すると、こしごの中のナマズが、
「おおい、おおい」
と返事をした。
その人はたまげて、ナマズをおいて逃げてきたという。（上大島）

四、その他

(一) 話

木暮安太郎さんとむかしがたり　むかしのはなしは、父親から聞いたことが多い。
こたつにあたりながらとか、あがりはなで、夜なべ仕事のときに、親と二人ならんで縄をなっているときに聞いた。
夜なべ仕事は、わらひとっくびりなうことで、五房の縄がなえた。
夕飯を食べてからひとっくびりのわらで縄をなった。
おふくろさんは、そのとき、こたつで裁縫をしていた。
縄ないをはじめたのは、小学校五、六年のころ。わかいしゅになっても米俵つくりなど、わら仕事をしていた。そのあいまにはなしを聞いた。
おとぎばなしは、おばあさんとかおっかさんに聞いた。おばあさんは、天川町の生まれ、おっかさんは、下大屋の生まれ。
おばあさんのほうが余計に話してくれた。寝物語が多かった。
「竹橋の子ぎつね」とか、「観音様の相撲」の話は、おばあさんから

聞いた。

伝説は誰ということなく聞いた。

おばあさんから聞いた話が多かった。（駒形）

話の経路　おとぎばなしは、おばあさんやおっかさんに聞いた。

世間話とか伝説は、おじいさんとか、おとっつあん、あるいは近所の人に聞いた。

寝物語とか夜なべ仕事のとき聞いた。（駒形）

長っぱなし　ふだん、長っぱなしをしていると、「大工のももひきで、こんつぎだ」といった。（野中）

ねどこばなし　むかしばなしは、子どものころ、ねどこばなしで聞いた。（上大島）

市がさかえた　むかしは、おしまいということを「いちがさかえた」といった。

人が死んだとか、おしまいだというときにいった。

大正のはじめのころ、映画が入ってきてから、「一巻の終りだな」というようになった。（駒形）

話が終ること　話が終ると、「いちがさけ申した」という。

いちがさけ申した　ある人がうそついた。ところが証人がでて、うそということがばれた。人にやりてあられて、にっちもさっちもいかなくなったとき、「いちがさけもうした」といった。

やりこめられて、どうにもならなくなったときにいう。（上増田）

(二)　ことわざ

むかしのことわざ　「追わずに逃げろ」ということわざがある。これは、嫁さんをいじめて追いだすこと、そうすると、嫁さんはつらくて、自分から逃げだす。

「出て行け」といわなくも、嫁さんが自分から出て行く。

こうすれば、姑さんが追いだしたことにはならないですむという。

嫁さんが自分から逃げだすのをまつことである。（上大島）

師走女に角がでる。

たとえ　ある人がいった。

「おれんちのおっかあは、あんこにるんに、砂糖を入れるとき、袋のすみをもって入れるんであまみがうすい。まるで、砂糖屋の前をかけ足で行くようだ」

あまみがうすいということ。（女屋）

ことわざ　朝雨にかさいらず。

朝雨が降ったときは晴れるという。　親馬鹿、子ふくべ。

親は子を思う。そういう親子なら子供はしあわせだという。（上大島）

なみにはなをそろえろ…人なみにしろということ。

おわずににげろ…嫁を追いだすのではなくて、嫁がでていくようにすること。

「あの嫁さんは、『追わずに逃げろ』をかけられたよ」

といった。

嫁さんに対して、ふだんから無理難題をめったいうこと。

のっつけおかみさん…姑さんのいないところへ嫁に行くこと。のっつけよめごといった。

なお、姑がかくなると、「嫁の天下になった」といった。（小屋原）

「親が死んでも農のわかれはするな」

百姓は忙しいということ。田植のころのことをいう。（野中）

駕籠に乗る人、かつぐ人、そのまたわらじをつくる人。（上大島）

「かかあの頭と半鐘は、たたけば損がたつ」といった。（下長磯）

「後閑朝倉女のよばい。男後生楽、寝てまちろ」。（天川大島）

三か日、ぞうにを食べると、おできになる。（亀里）
「いもはかげの俵」という。（小屋原）
「長話は庚申待の晩にしろ」といった。
「市がさけ申した」…人が死んだとか、物事の終りのことをいう。（女屋）

背の高い人のことは、半鐘泥棒という。
会合のとき、一斉に腰をあげることをアブの総立ちという。
ウグイスの声のととのわない鳴き方を、ササナキという。ウグイスの異名を、春告げ馬という。（野中）
「下郷（しもごう）へ嫁に行くか、はだかでバラしょうか」
上陽・上川・下川の方のことを、この辺では下郷とよんでいる。この地域ではとりこみしつけが大ごとなんで、そんなことをいった。
嫁をもらうなら下郷からもらえ、嫁にくれるなら、上郷へくれろ。
下郷はよく働くところ、上郷は、赤城のすその地方のことで、仕事が楽という。
嫁は台所からもらえ。
こぬか三升もちゃ、婿にでるな。
いもはかげの俵。米の代りにいもを食べるということ。
Hさんのうちの先祖は、飯の中にムギをうんと入れて、米はちっとんべえ入れて食べた。よなべにいもをこしらえて、ムギ飯の中にうんと入れて食べて大尽になったという。（天川大島）
「大木の下には物は育たず」
まわりのものは、みんな大木のこやしになってしまうからだという。（野中）
「隣かせげば宝もうけ。」
となりのうちがかせぐと、それにつられて、うちもかせぐこと。
いつまでも、あるとおもうな、親とかね。
孝行したい時分に、親はなし。（上大島）

㈢　こ　と　ば

十五日のおかゆ　「そんなことしちゃあもちゃづけえだ」
というと、
「十五日のおかゆみてえだ」
といった。
十五日のあずきげえの中にもち（これは十四日についたもちのきれっぱしなど）を入れるので、もちあずきけえといった。
それになぞらえたはなし。（上大島）
切っても切れないもの　切っても切れないものは、お勝手の菜切包丁と、わたしとあなたのえんばかり。（上大島）
頓智ばなし　うちのおじいさんがいったこと。
かねのなる木を庭に植え、きれいな女と手をとって、奈良の大仏腰にさし、横須賀の軍艦下駄にして、世界一周してみたい。（上大島）
早口言葉　むかし、子供があつまって、早口言葉をいった。
隣りの客はよく柿食う客だ。
生麦生米生卵。
東京特許許可局。（野中）
たとえ　たんぼのいなごのようだ…
ネコの子をもらうようだ…嫁さんをもらうとき、なんにもかまわずにもらうこと。（野中）
カエルの鳴き声　雨が降りそうなとき、田圃へ行くと、カエルが、
「ゴケゴケ」

（上大島）

と鳴いている。後家さんを馬鹿にして鳴くという。（上大島）

ことばのちがい　泉沢では、「リヤカーのあとをおせ」というが、下長磯では、「リヤカーのあとをおっぺせ」という。

セミの鳴き声。

ミーン、ミーン、ミーン、ヒットコヒージー、（泉沢）

ミーン、ミーン、タカイヨー、タカイヨー、ジー（下長磯）

けんとくをひく　けんとくということは、むかしの人がよくいった。（下大島）

「けんとくをひく」という言葉は聞いたことがある。

相手の様子をうかがうこと。

なにか、ほかのことをやって、相手の反応をみるようなこと。（上長磯）

十五夜と十三夜　「十五夜おつきにくもりあり、十三夜おつきにはくもりなし」といった。（女屋）

カスミということ　「あの人はカスミが広い」という。沙婆が広いということである。

隣組のことはゴグミといった。上大島には、宿口というところがある。（野中）

いい伝え　晦日にくれるものはなんでももらえといった。（野中）

古謡・悪口

いきな小島田　上野でみそめ

つつみかくして　堀の下

いき＝江木

小島田＝小島田

上野＝東上野

つつみ＝堤

堀の下＝堀之下

この近くの地名をおりこんだもの。

小島田こやし、田圃のこやし

女屋のやつら馬鹿やつら

右の二つは、小島田の子供と女屋の子供が、四月八日になると、田圃で石合戦をしてけんかをした。そのとき、おたがいにいい合った言葉である。

下長磯へ水浴びに行ったとき、けんかしたこともあった。（小島田）

むかしのことば　むかしの言葉で

「ユズと乞食の子は、生まれてから一人前だ」といった。

乞食として女一人で歩くよりは、子供を背負ってもらいあるくほうが、もらいがよかったという。同情があつまったという。（女屋）

果報は寝てまちろ　ある男が、ドドメの木の下で寝ていた。

じっとしていたのでは、ドドメはおちて来なかった。

それで、ちょっと動いたら、ドドメがおちて口の中へ入った。

それで、手をうごかさないと口にはいらないということがわかったというはなし。（女屋）

ことわざ　嫁も十年たてばうちになる。

嫁に行っても十年もたてば、嫁ぎ先が自分のうちになるということ。（上増田）

仕事のきついところ　「〇〇へ嫁に行くか、はだかでバラ背負うか」という。（上増田）

物ぐさもんの節供働き　ふだん、ろくに仕事をしていないものが、遊び日に仕事をすると、「物ぐさもんの節供働き」といわれた。（上増田）

仕事の早い人　仕事の早い人のことは、天狗のようだといった。（上増田）

たとえ　遠い火でけつあぶりをしていると、「赤城山の野火であたるようだ」といった。（女屋）

早口言葉　ソーダ村の村長さんがソーダ飲んで死んだそうだ。葬式まんじゅうでっけえそうだ。中にはあんこがねえそうだ」（上増田）

わぐりという名前　むかし、子供にわぐりという名前をつければ、そのあと子供ができなくなるといった。（東上野）

一枚の着物　いい着物が一枚しかなくって、どこへでも着ていくと、「一見葬礼火事見舞」といった。（東上野）

悪口　はたけのじしばり、田にびるも、じしばりはやたらふえた。びるもよくふえる草、これがふえると、どうしようもなかった。（笂井）

ことば　「盆にゃぼたもち、昼間はうどん、夜は米の飯、とうなす汁よ」という盆唄があった。

盆のときの、ひるうどんのことは、ひるばてえといった。

仕事をはじめることを、さんばをぶつという。

大塚田の西んちのおばあさんは、話が終えると、「いちがさけ申したとさ」といった。（上増田）

秋なすは嫁にくれるな。（下長磯）

かいのくに、かいがなくって、かいをかいに行ったら、かいがかいなくって、かいをかいに行ったかいがない（え）。

たけやがやけた

（上からよんでも、下からよんでも同じ）

坊主が屏風に、上手に坊主の絵を書いた。

隣の客はよく柿食う客だ。

生麦生米生卵。

うたうたやの前を通ったら、うたうたいが、うたをうたってた。うたをうたえといったが、うたうたいのようにうたがうたえなかったので、うたをうたわなかった。

隣の塀に竹たてかけた。

鳥取小坂子嶺小暮勝沢のこしてもったいない。

六供実正市之坪、代田しんぐりけえって柿の宮。（女屋）

総社の明神様の裏の地に、数年大蛇がすむそうじゃが、そのじゃが、おしゃか、めじゃか、なんじゃか、かんじゃか、わからんそうじゃ。（女屋）

ソーダ、ソーダ、ソーダ村の村長さんが、ソーダ飲んで死んだそうだ。葬式まんじゅう、でっけえそうだ（うんめえそうだ）

（このあとに「なかにはあんこがねえそうだ」といった）。（女屋）

地口・言葉遊びなど　いきな小島田上野で見染め、つつみかくして、堀之下。

いき…前橋市江木町のこと

小島田…小島田町

上野…東上野町

つつみ…堤町

堀之下…堀之下町

以上、五つの町はいずれも隣接している。町の名を織りまぜてつくったもの。（女屋）

諺とか方言とか　女屋の人が、ある日のこと田圃で「アワ・ヒエべえ食っているから、はだあいがこそっぱいねえ」といったって。

庚申様は百姓の神様。

なにか終ると、「市がさけ申した」という。

「ツバクロの市がえり」　おおくおしゃべりする人のことをいった。

むかしは機(はた)を織って、それを伊勢崎（一六日が市日）とか前橋（四日、九日）の市日に売りに行った。もうけたかねで、土産とか糸を買ってきた。それを首ったまへしばりつけて帰ってきた。おたがいに行きあった者同士が名のりあって、一緒にきた。それを市がえりといった。世間話などしながらきた。しゃべるのが、ツバメのさえずりに似ているのでそういった。

アブの総だち…アブが追われて一斉にたつこと。

かがやく…なにか物色すること。

はやす…正月にのし餅を切ることをはやすといった。

塩は夕方になると、ナミノハナといった。

酒のことは、ササといった。

「蚕さなかに嫁御に出られ、もらわじゃなるまい子猫でも」…嫁のてがわりをもらうこととネズミのおどかした子猫でももらうということ。（女屋）

サンバが始まる　サンバは芝居に先立ってやるおどり。仕事がはじまることを「サンバがはじまる」という。

(四)　な　ぞ

なぞかけ　なぞかけもよくやった。

わからないときは、「降参」とか、「わからない」といった。

朝早く、一本道を通るものなあに…雨戸。（野中）

むかし、小学校の行きかえりになぞかけをした。内容はよく覚えていない。

手袋の反対なあに…ろくぶて。

答えると、相手を六回ぶったりした。（下大島）

火のないこたつとかけてなんととく。

弥助さんととく。

その心は、あったまらない。

むかし、弥助さんという人がいた。この人のおかみさんは大変なやきもちやきだった。

弥助さんが回覧板をもって隣のうちへ行っても、やきもちをやく。

それで、弥助さんは、こうすればやきもちをやかなくなるだろうというので、あるとき、自分の大事なものを切って、紙に包んでおかみさんにやったって。

弥助の、今まであったまらがないのでこのなぞができたもの。

（上大島）

「なんぞなんぞなあに。なっきりぼうちょうきりぼうちょう。いくらきってもきりきんねえ」といった。はじめの言葉。

「なんぞかけやるべえや」といってはじめた。

だれかがだして、わかるもんが答えた。

誰もができねえときは、「まいった」といった。そうすると、だした者が教えた。

あたると、だした者が「大あたり」といった。（櫛島）

なぞは、むかしはこたつでやった。

なぞをはじめるときは、

「なぞなぞなあに、なっきりぼうちょうきりぼうちょう。きっともきってもきりきんねえ」
といってはじめた。
わからないときは、「降参」といった。答えられると、「ご名答」といった。（女屋）

謎のことは、なぞとも、なんぞともいった。
はじめるときは、「なぞのあてっこしよう」といってはじめた。
わからないときは、「降参」といった。（女屋）

なぞをかけられてわからないときは、
「降参」
といった。（横手）

むかしの人は、なんぞといったが、今のわかい人は、なぞという。
なんぞをはじめるときは、
「なんぞなんぞなあに。なっきりぼうちょうきりぼうちょう。きってもきってもきりきんねえ」
といってはじめた。
なぞがわからないときは、「わかんねえや」といった。
なぞがとけたときは、「あたった」といった。（下阿内）

子供たちが遊んでいて、一つの遊びにあきると、なぞかけをした。
「なぞかけすべえや」
といった。
「なんぞなんぞなあに」
といってはじめた。
わからないときは、
「わかんない」とか「こうさん」
といった。
そうすると、手にしっぺをした。
なぞなぞしたものは、あてられるとつまんなかった。なるたけあたらないようなのをだした。あたらないとうれしかった。（笊井）

なぞなぞなあにといってかけはじめた。
わからないときは、「まいった」といった。
上が大火、下が大火事なあに…風呂。
追っても、追ってもおっつかないものなあに…かげぼうし。
竹の穴から出たり入ったりするものなあに…かぎ竹。
畑で赤いちんこ出しているものなあに…トウガラシ。
お竹さんの穴を、出たり入ったりするものなあに…かぎ竹。（小屋原）
大人の遊びのなぞもあった。
芸者とかけてなんととく。
花瓶ととく、その心は花が多けりゃころびます。
子守りとかけてなんととく。
変り大根ととく、その心は、おろせばからみになる。
孟宗竹藪とかけてなんととく。
十歳以下の子供ととく、その心は、まだけははえぬ。（女屋）
おがめばおがむほど長くなるものなあに…なわ。
朝早く起きて戸をたたくものなあに…風。（笊井）
朝別れて夜会うものなあに…門。
朝早く起きて地獄へ行ってくるものなあに…つるべ。

朝早く一本道通るものなあに…雨戸。（上増田）
朝早く細道通るものなあに…夜畑道を通るものなあに…雨戸。
（天川大島）
朝早く起きて細い道を通ってまた夕方になると細い道を通るものなあに…雨戸。（亀里）
朝起きてたたみの目を勘定しようとするものなあに…座敷箒。
（小島田）
朝早く赤い帽子かぶって鳴くものなあに…ニワトリ。（横手）
朝起きて赤い頭巾かぶってくねくぐりするものなあに…ニワトリ。
（亀里）
朝早く起きて赤い帽子かぶって垣根をやぶってとなりんちへ行くものなんぞ…ニワトリ。（上佐鳥）
上が大火事下が大水なあに（なんぞ）…ランプ。（女屋）
足が一本骨が三十四本なあに…からかさ。
足が一本目が一つなあに…針。（野中）
一本足の一ツ目小僧なあに…針。（女屋）
一本道を行くと落し穴なあに…スプーン。
一本道を行くと草ぼうぼうなあに…くし。（野中）
池に反り橋だんごちんこなあに…鉄瓶。
行って帰って来ないものなあに…鉄砲玉。（小島田）
おがめばおがむほど長くなるものなあに…なわ。（野中）
大きい野原に梅干一つなあに…へそ（小島田）
うち中の力持ちなあに…かぎ竹。
あがったりさがったりぎっこんばったんなあに…かぎ竹。（上佐鳥）
赤い小袋にアワ一升なあに…ホウズキ。（上大島）
赤い小袋に、米一升なあに…ホウズキ。
切れば切るほど長くなるものなあに…さく。（宮地）
上が大火下が大火事なんだ…へっついの鍋。（女屋）
いるときいらなくて、いらないときいるものなあに…風呂のふた。
（野中）
骨なし、はなし、ひょろひょろでっくりなあに…くそ。（上大島）
かろうとかもじに、びわのはふたつなあに…馬。（駒形）
秋になるとおいでおいでをするものなあに…ススキ。（小島田）
あるとき、問答をする坊さんがやってきた。そのとき、なにかを賭けたという。負けると、それをとられてしまったという。
その坊さんに、ムラの人が、
「坊主糞くらえ」
といったところ。
「浅間の夕立だ」
といったって。
「その心は」
というと。
「にしがくらい」
といったって。（女屋）
青竹に骨なしなあに…ネギ。（天川大島）
「坊主糞くらえとかけてなんととく、浅間の夕立ととく。心はにしがくらえ」。（下阿内）
いるときいらないで、いないときにいるものなあに…玄関のかぎ。
上は機械屋下は振子屋なあに…時計。（野中）
のびれば若くって、縮まればとしよりなあに…ちょうちん。
のびればしわがなくなるから。（上増田）
とけないなぞ　たべらべらとかけてなんととく。

富士の北平（きたひら）の雪ととく。
その心は、年中とけない。
（「たべらべら」というのは、でたらめの言葉だから、その意味を考えてもわからないということ）。（上増田）
畑で白いはなたらしているものなあに…もめん。
小学生のとき、先生が勉強にあきるとなぞなぞをした。「なぞなぞ知っている人はいないか」といって、なぞなぞをした。寒いとき、うちでこたつに入ってしたこともあった。わからないと「降参」といった。（上増田）
畑でけんかしながら、子供のできるものなあに…里芋。
梅にウグイスとかけてなんととく。
かわいい一人娘の葬式ととく。
その心は、なきなきうめにいく。
畑の中で剣術しているものなあに…クワゼ。（上大島）
朝早く起きて、地獄へ行ってくるものなんだ…つるべ。
畑で剣術つかっているものなあに…くわぜ。
畑で白いはなたらしているものなあに…わた。
着物ぬぎでっかくなるものなんぞ…竹の子。
骨なしはなしぺったんこんなんぞ…うんこ。
追っても、追ってもついてくるものなんぞ…かげぼうし。
蚊がのどにとまって、それを殺したところ、むかしの国の名前が六つでた。それなあに。
加賀の国…蚊が
能登の国…のどにとまって
周防の国…（血を）すおうと
駿河の国…するが
美濃の国…（それが）身の
尾張の国…おわりになった。
大神楽とかけてなんととく。
やきもちととく、その心は、ふいたり、たたいたり。
天井からじゃがおりて、下でふなとめているそれなあに…かぎ竹。
八帖の間にけだものが二匹いるが、それなんだ…しかとくま（四角の間）
三里むこうの山火事なあに…きせる。
きどうかねどうからねどう。いそいで通る奉公人なあに…鉄砲。
子供はみかんとかけてなんととく。
田原藤太秀郷ととく、その心は、むかでかなわん。
山でこいこい、畑でいやだいやだしているものなあに…ススキといもの葉。
目で見ないで、手でみるものなあに…風呂のかげん。
あったらこばちに穴七つなあに…人の顔。
働くときに横になって働いて、休むとき立って休むものなあに…天秤棒。
一銭ださないで買えるお勝手のものはなあに…七厘（しちりん）。
（小屋原）
火のないこたつとかけてなんととく。
弥助さんととく、心は、あったまらない。
梅にウグイスとかけてなんととく、かわいい一人娘のお葬式ととく。
その心は、なきなきウメに行く。
切っても、切っても切れないものなあに…水。
三ツ目小僧に歯が二本なんだ…下駄。
畑ではなたらしているものなんぞ…綿。

畑で赤いちんこだしているものなんだ…ニンジン。
きどうかねどうかなくりどう、走って道る奉公人なあに…鉄砲。
白壁土蔵になかぴっかりなあに…行灯。
竹にまんぐるまに、ぎっこんばったんなあに…そろばん。
なぞかけするときは、子供たちがあつまって、「なぞかけすべえや」といって、じゃんけんをして、勝った者がなぞをだす。あとのものが答えた。
答えると、こんどは、その者が出す。わからないときは、「降参」といった。あたったときのきまり文句はとくにない。
もりっこしていて、店の前などで日向ぼっこしていてやった。なぞかけをしたり、しりとりをしたりした。
子供のなぞかけは、「…なあに」という形で、「…とかけてなんととく。心は」というなぞはなかった。(筑井)
なぞなぞは、小学校で昼休みにしたことがある。
びしゃりん、びしゃりん、びんびしゃりん。まで子の代までびんびしゃりんなあに(なんだ)…ながし。(上増田)
道楽息子がかねへらす、なんぞ…砥石。(小屋原)
おたけさんの腹に入ったり出たりするものなあに…かぎ竹。
畑で白いはなたらしているものなあに…もめん。
むかし、子供がいろりばたに腹うけて、ばんがた、なぞかけてやった。きょうだいでやった。
「なぞなぞなあに」といった。
さかさ井戸からじゃがでて、こぶながとめるものなあに…かぎ竹。
むこうの山へひょうが降って、こっちの山へ雪が降るなあに…わたくり。(天川大島)
朝早く起きて、行ったり来たりするものなあに…とぶ口のこと。
天気がよいと人の真似ばっかりするものなあに…かげ。(東善)

(五) 方　言

前橋の方言

あいさ…間のこと。
あきない…商人・商店のこと。
あぐろ…「あぐろをかく」。
あさひやけ…夕焼けに対する。
あしもと…秋のとりいれのとき、こぼれおちた穀物のこと。
あま…女の子のこと。
あやとり…あじとり。
いかき…ざる。
いきみ…力むこと。息を張ること。
いけす…魚とりのとき、とった魚をいれておく箱。
いけばる…いきみと同じ。
いちばん…はじめての客。
いちまけ…一族のこと。
いっけ…いちまけとほとんど同じ。
いっかる…のること。
いっける…のせること。
いっちょうらい…最高の着物のこと。
いびくる。いじくる…いじる。さわる。いびる。
いどころね…いろりのはたとかこたつに入っているとかして、布団もしかないでその場に寝てしまうこと。
いぶせい…あぶない。
うじ…昆虫などの幼虫のこと

うじゃらける…きずなどがただれること。
うだつ…堀立小屋。
うだる…暑さで体がまいってしまうこと。
うちゃる…捨てる。
うちわ…身内のこと。
うでっこき…力の続くかぎり。
うなう…耕す。土を堀りおこす。
うまいれ…農道。小道。
うまづら…長い顔のこと。
うむ…果物が熟すること。きずが化濃すること。
うら…末端。木のうら。
うろぬく…間引く。
うわっこ…かいこのおくれごのこと。
うんだらがき…熟した柿のこと。
うんめる…うめる。「湯があついからうんめる」
うんま…馬、こんま（子馬）
ええ…祭の前夜、ええばん。
ええかん…かなり。（以上女屋）
えごいも…里いも。（西片貝）
えっかる…乗る。
えっける…乗せる。
えぼがちげえろ…いぼがちがえる。
いぼる…えぼる。ぐずること。
えらい…大変。
えんこ…すわること。
おいこくる…追い払う。
おおか…あんまり大変。
おおごと…大変なこと。病気、疲れなどで大儀なこと。
おおな…田の上手のこと。
おおね…大体。
おおふ…けちけちしないこと。
おかざり…正月飾りのこと。
おがみや…祈禱師のこと。
おくり…奥。
おこさま…かいこ。
おだ…「おだあげる」、勝手なことをいうこと。
おたくら…冗談。「おたくらいう」（女屋）
おたふくまめ…そらまめ。
おたま…と手玉。
おみゃぞっぱい…つけものの茶菓子。ちゃぞっぱ。（西片貝）
おちょくる…からかう。
おっつあれる…叱られる。
おっつめ…年の暮。
おてんたら…おべっか。
おとしご…私生児。てんぼうともいう。（堤）
おとみっこ…子供が意味なくぐずると、「おとみっこだ」という、次の子がはじまる（妊娠する）とそうなるという。
おにむし…かぶとむしのこと。
おはしん…針仕事。
おばんし…女中さん。飯たきの手伝い。
おひかり…稲妻。
おひかりさま…かみなりのこと。ごろごろさまともいう。

おびや…産明け。
おひゃらかす…からかうこと。
おふくで…正月の鏡餅のこと。（西片貝）
おやす…終わらせること。
おろし…下屋。
おんか…公然。
川ながれ…水死人。
がいがい…げじげじ。
かいまき…夜着。
かかあ…妻。おっかあともいう。他人に対して、旦那がいうことば。
かがむ…腰を折ること。
かがやく…あてもなくさがすこと。家のまわりのかたづけことなど、小さな仕事をすること。
かかりご…あととりのこと。
かかる…厄介になる。ふかる。親があととりの厄介になること。
かぎだけ…自在かぎ。
がきぼとけ…無縁仏。
かくねっこ…かくれんぼ。かくねんしょ。
かじかる…寒さのため、手の自由がきかなくなること。
かじばな…彼岸花。
かしょう…さそうこと。
がしょうき…乱暴のこと。
かずける…かぶせること。せいにする。
かあめこ…盗む。ごまかす。
かたばりっか…頑固なこと。
かため…夫婦約束。
かっちらかす…ちらかすこと。
かっぱじく…はじきだすこと。
かっぱく…排除する。
かてめし…米、麦のほかに野菜などを入れたまぜめしのこと。
かてもの…おかず。
かど…家の出入り道のこと。
がなる…どなる。
かなつんぼ…耳が聞こえないこと。
かぶつ…株。
かべつち…粘土。
かまぎっちょ…とかげ。
かみ…北の方。
がめる…ごまかす。
がらり…うっかり。
かんからかん…あきかんのこと。
かんくさん…巡査。
かんのんさま…しらみ。
かんばん…はっぴ。
ぎす…きりぎりす。やせている人のこと。
ぎょうさ…礼儀作法。
きらず…おから。
きりばん…まないた。
きりしょうじん…人よりすぐれた人のこと。
くしょる…折ること。
くたばる…死ぬこと。多少悪口。
くちい…きゅうくつのこと。

やけぼうろく…火事見舞のこと。
「あの家は、やけぼうろくで身上のこした」
などといったことがある。
やけぼこり…やけぶとりのこと。火事になって、火事のおかげで大尽になった場合にいう。
やしなう…世話をする。食事のとき、病人に食べさせてやったり、小さい子供に食べさせてやったりすること。
やしゃご…ひこまごの子。
やなあさって…明々後日。しあさってともいう。
あした—あさって—やなさって—しあさって。
きのう—おととい—さきおととい。
やべ…行け、歩け。やぶ…行くこと。
やまし…ペテン師のこと。ごまかし、でたらめをする人間のこと。
やめる…痛むこと。
ゆい…仕事の助け合いのこと、エエという。エエ仕事。エエツカリという。
ゆて…手拭のこと。てねげ、てのごいともいう。
ゆどの…風呂場。
ゆんべ…昨夜、ゆんべなこともいう。
よいっぱり…一晩中
よじける…よろける。
よた…いいかげんなこと。よたる、よたもん。
よなげる…糸のみだれを直すこと。悪いものの中からえりわけること。
よなべ…夜業。
よめご…ネズミのこと。
かいこをあげたあと、ネズミといわずヨメゴといった。
よもの…ネズミのこと。
ろくしゃく…ふんどし、ごろつぎ、葬式のときの穴っ掘りのこと。
わかされ…分家、親類。
わざと…すし、心ばかり。
わたくしあめ…にわかあめ。
わたまし…新築祝い。
わにる…ふざける。
わらにゅう…稲のわらを積んだもの。
や…篠などの刈株。
やけっぺ…やけど。
やんめ…急性結膜炎。
ようのめ…魚の目。
よこめ…斜視。
わくさ…わきが。
みてくれ…ていさい。
みじめ…みにくい。
よこっくち…口出しすること。
はがむ…はにかむ。
やせぎす…やせっぽち。
やしんぼ…食いしんぼう。食い意地がはっていること。
よっちくらい…よりあつまり。
わからずや…わかりの悪い人。因業もん。
ゆっつけおび…もりっこおび。
もぐらっぷさげ…麦まきの祝い。
あなっぷさげともいう。

まんむき…ちょうどいいこと。
みてくれ…体裁。
やまっかけ…山盛り、たくさん。
わっか…輪。
まける…あける。こぼす。
まるく…束ねる。
みしめる…身を入れる。一生懸命にする。
ろくすっぽ…ろくろく。
まんが…馬鍬。
みみったぼ…みみたぶ。
ゆたん…まゆを入れる袋。
「ゆたん袋にへかけて」（堤）
いける…なおる。「病気がいける」
ろくにけえった…死んだこと（女屋）
（以上、前橋東部を中心にした方言）
利根川東、桂萱、木瀬村中心。

方言　モモッタマ…もも
「おおくくたびれて、モモッタマが病くなった」という。
ブッテジカル…しりもちついて動かないでいることをいう。腰をおろしていること。
テンキアメ、トオリアメ…晴れていて雨の降ること。
サマジイ…「あの人はてんでサマジイ」
いせいのいいこと。どきょうったまがいいこと。
ツッケナハッケナ…「みんなに、ツッケナハッケナされながら働くのも大変だね」
じゃまにされること。つめたくされること。
シャバズレ…威勢のいいこと。
「あの人は、シャバズレしている」
それは、いい意味ではない。今の言葉でいえば、とんでいるということ。
イスカ…ふつうでないこと。意地の悪いこと。
シノギ…葬式のときにだす軽い食事のこと。一時しのぐこと。
カタケ…「カタケに食べる」という。そのものだけ食べること。それば っかり食べること。
ヒトカタケというのは、一食のこと。（上増田）
テッコモリ…おたかもりのこと。
トウテキシンダ…「かみなりにうたれて、トウテキシンダ→すぐに死んだということ。
ヒガライチンチ…一日中、「ヒガライチンチ、ナニモシネエデオエチャッタ」。
ヒックラ、ヒックラ…「あの人は、ヒックラヒックラしていて、なかなか死なねえ」といった。なかなか楽になんねえこと。
イカイ…大きい。
イロツケル…「よそんちでなにかもらって、なにかいろつけてけえさねば」といった。気持余計にやるようなときにいう。
ホージャク…コガネムシのこと。
ヤブニマンガトオス…意見のとおらないところをいいとおすこと。
竹やぶには、ねっこがいっぱいはっていて、テンガでもとおらない。
「あの人は、ヤブニマンガトオス」といった。むちゃをとおすことをいった。
モックラオキ…暗いうちに起きること。朝早く暗いうちに起きること。

モヤイジンショウ…夫婦二人が寄せてつくった身上のこと。
二人だけでだしあってつくった家庭。
ヒザッコブ…ひざのこと。
スナックイ…足の指のまたのところにできる。かせる。かゆくって痛い。
オサキタバコ…人の煙草をもらって吸うこと。自分では持たずに行って、先方でもらって吸う煙草のこと。「あの人は、自分で持ってこねえで、人の煙草をとって吸う。」という。
サマジイ…「あの人はサマジイきもんを着てきた」という。いいきもんのこと。
コクゾウムシ…米につく虫のこと。
コノチュウド…近ごろ。
ケエシ…連作のこと。
「ナスはケエシするとならない。だめだ」という。
クチイレ…仲人のこと。人の世話をすること。
キリハギ…幣束。
ツッタケ…きれの長さのこと。身長の丈。
クビッタマ…くび。
エリックビ…えり。
チンゲ…えりくびのところの毛。
スキダレ…アマダレ。
ヤケボウロク…火事見舞。
ヤケボコリ…「あの人は、火事になって、ヤケボウロクもらって、とくせいになった」という。それを、ヤケボコリといった。
ホマチ…ヘソクリのこと。
かいこをはいてから、桑があまりそうだと、あとから余計はきたてる。それを、「これは、おれのホマチだ」といった。自分のもんになること。
ツッカケワンナ…意地悪のこと。
テッコマヒッコマ…出たりひっこんだりすること。
キリダテ…げのおりていないうちのこと。
チギ…さおばかりのこと。
クマビル…「あの人にクマビテいる」という。
年の割にふけてみえること。
ウブスナガラ…「あの子はいい子だ。ウブスカガラだ」
ウブスナツライ…また生まれたてのあかっこが笑うことを、ウブスナワライという。目もあいていないときに、にこにこっと笑うことがある。それをウブスナワライといった。
これは、ウズフナサマが、あかんぼうの尻をつねるせいだといった。
ノボウトウ…施主のない石塔のこと。
オシラサマ…かいこの神様。（笂井）
たろうじ…田植のときの苗くばりのこと。
すうとめ…田植のとき、苗を植える人。
ささらほうさら…不幸があったうちについて、「親がこうなったから、子もこうなった」といったりする。
「あすこんちは、おっかさんが病気のところを、子供がけがをしたという。それでうち中がめちゃくちゃになった」という。
そんな状態のことを、ささらほうさらという。
じんしく…合うこと。つりあうこと。
てびねっくせ…てのろのこと。
はやす…「もちをはやす」という。
これは、お正月にいうことば。のしもちを切ること。

ぐしもちは、はやせといわれたことはない。
ひるばて…ひるうどんのことをいう。これは、盆のときいう。
ふだん、お客がきたとき、ひるうどんをつくってだすが、このときは、ひるばてとはいわない。
「あさはぽたもち、ひるまはうどん、よるに米の飯、とうなす汁よ」という。これは盆踊り唄、
こじょうはん…三時のおやつのこと（小屋原）
ヒシテエ…一日中
イチニチサンガラ…一日中、「イチニチサンガラ遊んでいた」
オワンナレ（ワンナレ）…西んちのおばあさんがお茶を出した。そしたら、ある人が、
「今日は、わしはとろを食べたから、お茶は飲まない」
といった。
そしたら、西んちのおばあさんが「おわんなれだったね」
といった。
こころは、「あいにく（はじをかかせたな）だったね」ということである。お茶をいただかないで、「わんなれだ」といったのである。
（上大島）
カラッチャ…おちゃがしなしでお茶を飲むこと。
「からっちゃ飲むのは、ぼうちうちよりつらい」という文句があった。
モモイタガタッタ…ももがつっぱって痛いこと。たつとふらふらする。
そういうことを、「モモイタがタッタ」といった。（駒形）
ノッツケオカミサン…姑のいないところへくる嫁のこと。
ユガマ…風呂桶のこと。
タメコガ…肥溜
マツゴク…松の落葉のこと。
ホカケ…新米のこと。はじめてとれた新しい米。はじめて食べるときは、大神宮様とか仏様にあげた。
ケントクヲヒク…人の顔色をみること。顔色をうかがうこと。
テビネックセエ…手のろのこと。
ジネエ…病気のとき、じねえがあったという。
前からどうもおかしいと思った。じねえがあったわけだという。
オキリコミ、ニボウトウ…煮こみうどん。
シャッキラ…尺取虫。
ハイトリババア…カマキリ。
テツコマッコ…ありじごく。
カマギッチョ…トカゲ。
カブトムシ…こやしむしの成虫。
デエロ…ナメクジのこと。（小屋原）
ごねる…子供がぐずぐずいうこと。
なんぷ…様子。むずかしい問題のときなど。まわりの様子をみること。
いじしがあがった…きず口に、新しいにくがもりあがること。
果樹のきり口についても、「いじしがあがってきた」という。
てびねっくせえ…のろい、手のろのこと。
「てめえ、てびねっくせえなあ」という。
ねじっこ…つみっこともいう。
もりっこ湯…しまい湯のこと、しまい湯に入ったものは、あか（垢、赤＝あかんぼう）をしょってでるから。
風呂をよく晩、たてかえししたうちもあった。

のっつけよめご（かみさん）…姑のいないうちへ嫁にきて、すぐにおかみさんになる者のこと。まわりとのおつきあいがあるから、大変だといった。

ホマチ…余分の田、かくし田のことをホマチといった。

これは、ぶのびの田だった。

ナミノハナ…塩のことは、ナミノハナといった。

ナガムシ…ヘビのことは、ナガムシといった。

ヘビのたたりのことは、ナガムシのたたりといった。（下大島）

チチオヤ…乳をくれた親のこと。

ネソビレル…ねそっかれるという。

「おれは、ゆんべ、ねそっかれてこりたい」

という。

クマビル…「あの人はくまびている」という。

年齢よりふけていること。

「あの人は、自分の年よりくまびていらあなあ」という。

バンテンガアリ…順番にまわってくること。

ツッカケワンナ…今でも使っている言葉。なにかいいつけられたときにいう。

「おめえがやれ、おらあやだ」

「てめえら、つっかけわんなにそんなことをして」

自分はやらないで人にやらせること。なにかいいつけられたとき

「てめえがやれ、おめえがやれ」

と、人におしつけること。

ムラの役をつとめてくれるといわれたとき、「役でもなんでも、つっかけわんなにして、やりたがらねえや」

という。

同じいとこでも、つきあわないということがある。よそムラへくれたいとこは、小枝になったからつきあわない。行ったり、来たりしない。

「ソッケナ、ハッケナにした。」

という。

それは、つめたくあしらうことをいう。（笊井）

ススケダツ…いくらか寒さを感じること。

サントクイモ…ジャガイモのこと。

三つの得があるということ。

ハエヌキ…その土地で生まれた人のこと。

ケッカイ…子どもにならず、かたちのない子のこと。血のかたまりという。

むかしのいいつたえでは、ケッカイは生まれるとすぐにお勝手に行って水を飲むという。

タダイモ…ただ、いもといえば里芋のことである。

トウテキ…「やつはとうてき死んだ」という。

これは、突然ということ。ひょいと死んだということ。

ヘラヘェト…「やつはへらへえと食ったいな」

「やつはヘラへえと飲んでうっつぶれたいな」

「おらあ、どこそこへ行って、へらへえとうもらって飲んだいな」

これは、かぎりなく、遠慮なく食うこと、飲むことをいう。

ヒックラヒックラ…「あの人は、いつまでたっても、ひっくらひっくらしている」という。

これは、死にそうないことをいう。

ヨウサンガラ…夜遅くまでということ。

「てめえは、夕飯も食わずにヨウサンガラ犬のふけたんみてえに、

どこをほっつきあるいていたんだ」
「いい娘がいたんで、うちへなかなか帰って来らんなかった。」
「このやろう。なんでその娘をうちへつれて来なかったんだ。」
ミヤゲッコ…娘が結婚する前にできた子供のことをいう。
結婚してつれてくる子供のことをいう。結婚しなければ、ミヤゲッコとはいわない。
テテナシゴ…父親のいない子。
ヨロク…余分のもうけのこと。ふつうなら収入のないときの収入のことをいう。
ホウジャク…コガネムシのこと。
これは大豆について葉を食べてしまう。
ヤブリマンガ…わからずいうこと。
自分の意見をなにがなんでもとおすこと。
ヨトウサレ…きまった量より、うんと大変なこと。
「てめえ、そんなよとうされのことをしてみろ、あまってしょうがねえや」
あんどもねえことをすること。分量をうんと多くしてしまうこと。
必要以上のことをすること。
モックラオキ…朝早く起きること。
「今朝は、モックラオキして畑へ行った」
「今朝はモックラオキで、暗いうちに畑へ行った」
モヤイシンショウ…モチアイジンショウともいう。
結婚する人が、おたがいにいくらかのものをもちよせて家庭をつくること。
「おれはもちあい身上だ。みかん箱一つで身上もった。親にはなにももらわねえで身上ふっつけた」
サマジイ…物でももっているときにいう。
「おめえは、いいものを持っているな。サマジイのを持ってるじゃあねえか」
というようないい方をする。
すばらしいとか、すごいという意味。（笊井）
桑の実のことを、ドドメ、クワイチゴという。
尺取虫のことは、シャッキラ、シャクトリという。
尺取虫が首のまわりをひとまわりすると、その人は死ぬといった。
ササラホウサラ…むかしのとしよりの人がいったこと。
「みんなをササラホウサラにしてしまう」といった。これは、あるもんをどっかへやってしまうこと。
「ササラホウサラシチャッタ」という。
みんなちらかして、ある品物を、どっかへやってしまうこと。
洗面器のことは、カナダライという。
便所のことは、チョウズバといった。手洗い鉢のことは、チョウズバチといった。
えらいけんまくで…おっかねえ顔をしていること。
足のうらのことを足のへったという。
ぜにっくびというのは、きものえりが中に折れていること。
まぶしいことは、ひずりいという。
稲光りのことは、おひかりという。
「おひかりがひでえぜ」という。
男親同士が兄弟の子のことは、しんのいとこという。
夕方、人の顔が見えなくなると、ダンダゴロといった。
だれだかわからないようなこと。
いじし…「いじしがあがったからなおる」

といった。
つなみかぜ…東南から吹いてくる風。
つなみ風が吹くと、天気がだめになるといった。したけともいう。
（東上野）

ナマハンジャク…中途半端なこと。
「ナマハンジャクのことをいうな」
「ナマハンジャクのことをするな」
タコト…いいかげんなこと。
ノタス…怠けること。
カラユウダチ…雨が降らないで鳴るかみなり。
カワギ…川の流木。大水がでると川に流れてきた。これをかわぎあげた。
ヒバタ…一日に一匹（二反）織る人がいた。
わたしの妹（須藤しげさん）は、「ヒバタを織る人がいるから織ってみろ」といわれて織った。
妹の方がわたし（石井たみさん）より、織るのが早かった。
二人とも、ヒバタが織れた。（笊井）
ヒトサバラ…ひとあめのこと、いっときのこと。
ヒカラヒカラ…死なないで、あの人は、ヒカラ、ヒカラ生きているという。
父親のちがう兄弟のことは、タネチガイの兄弟という。
ゲンノショウコのことは、イシャイラズという。これをせんじてのむと、腹痛がなおる。またそれを痛いところへはると、なおるという。
トイモ…里いものこと。子がいくつもつく。
子のげえ子がいくつもできる。里いもはしっかりしていてうまい。
ジイモ…これも、里いものこと。また、里いものことは、イモという。
トシヤミ…表裏でなくなると、あの人はトシヤミだったという。
カーラケ…酒をいれて神様にあげた。やきもののこと。
また、陰部に毛のはえていない人のこともカーラケといった。（笊井）
ことばのいろいろ　なかじゅうと…嫁さんからみておじいさんの息子、娘のこと。
しゅうと…義理の父。
しゅうとめ…義理の母。
こじゅうと…旦那さんのきょうだい、男女とも。
米のいとこ…いちばん近いいとこのこと。
男親の方のいとこを米のいとこという。こちらは血が濃いという。
米のいとこ同士では結婚しないほうがいいといった。
まきめ…頭のつむじのこと。
「あの子は、まきめが二つあるから、こんじょうがまがっている」といった。
いすか…つよいということ。
すなおということ。
ささらほうさら…やっちらかり、めちゃくちゃということ。
ゆびのことは、いびといった。
やっこ…はえさがりのことは、やっこといった。「あの子はあんなに、やっこをさげているよ」といった。子供が弱いと、やっこをきらないでおいた。やっこをさげておいた。
まきめ…つむじのこと。
くまびている…年よりふけてみえること。
ずんぼう…もりっこばんてんのこと。

亀里町矢島の方言

ショッペナシ（的はずれ）
チャランポラン（張りがない）
ガケエー（体格）
ジキ（おいおい）
イッテンベエヤ（行く）
チヤリ（じょう談）
ケントク（かけ引き）
ネジッコ（すいとん）
カテッポー（片方）
アンジャァネエ（大丈夫）
カショウー（連れ）
マニアワズ（ばかを言う）
オダヲアゲル（じょう談）
コカス（しかる）
ブキ（不器用）
ヒョロクダマ（不まじめ）
アクテエ（悪口）
イチガサケエ（限界）
カンク（巡査）
セエフロ（風呂桶）
アンベエ（病気）
ズデエ（最も）
ウチバ（少し）
デンボ（うそ）
ゲエロクダマ（かえる）
オテンタラ（お世辞）
ババッチ（汚物）
ホグイ（飯だけ）
ベッチョウカク（べそかく）
ドッコイドッコイ（同等）
デングリケエス（倒す）
ノビル、オダブツ（死）
ジャンボン（葬儀）
ヤツ（お前）
ガッショウクム（死、手をくむ）
ウテイ（覚えが悪い）
ヒルトンビ（空巣ねらい）
ヒズラ（悪い顔）
ノラボウ（こじき）
サッキ（先頃）
ズデイ（どうでも）
ヒョイト（急に）
オタンチン、オッチョコチョイ（道化物）
ヒョロリ（たちまち）
カマウ（犯す、馬鹿にする）
スゲエ（すごい）
アイヨ（はい）
ウゲェス（ウグイス）
デッコマヒッコマ（不揃い）
キンタマガチイセイ（度胸がない）
ヒヤール、ヘエル（入る）

ブッタマゲル（驚く）
ボタモチ（おはぎ）
オツケ（汁る）
マンマ（飯）
テンガ（鍬）
エズヲカク（理想いう）
テメエーラ（お前達）
サッサ（早く）
ヤベ（来い）
オシイ（汁）
ゲーロ（蛙）
ヒズリイ（マブシイ）
アンチャン、アンニヤ（兄）
ネーヤン（姉）
オトッチャン、オトッツアン（父）
オカッチャン、オッカサン（母）
バー（おばあさん）
ヂー（おじいさん）
デッカイ（大きい）
チッチャイ（小さい）
スベエー（しよう）
タケイ（高価）
トワイ（遠い）
チケイ（近い）
オモテイ（重い）
ナゲイ（長い）

オメンメ（ウドン）
カレイ（からい）
ショペイ（塩からい）
ウント（多い）
チットンベ（少い）
パッパ（タバコ）
ケッツマズク（つまずく）
ヘイリグチ（入り口）
ウンメイ（うまい）
ショッペイ（塩からい）
ウンマ（馬）
コージョウハン（おやつ）
テンデ（非常に）
チャッポ（帽子）
カンク（巡査）
ケーコ（蚕）
メンメ（ウドン）
デーク（大工）
トンカチ（金ずち）
シンペイ（心配）
カケリッコ（競走）
カゲン（状態）
アンベイ（気嫌）
メンチ（前の家）
ショウタレ（ぬれる）
エンデ（歩く）

ヒズリイ　（まぶしい）
メメッタ　（みみず）
デイコン　（大根）
ナッパァ　（白菜）
サミイ　（寒い）
アチイ　（暑い）
ガンス　（ございます）

かがやく　かがやく…「うちのまわりをかがやく」という。

人がたずねてきたとき、「さっきその込をかがやいていたんだからいるはずだ」といったりする。そういうとき「かがやいているからまってろ」という。さがしてくること。

なにか一つ仕事をしているとき、まわりでかがやいてやれば、その人がらくになるという。たとえば、脱穀（稲こき、麦こき）をしているとき、からをまるいたり、とんだものをあつめたりするのを、「かがやき仕事をする」といった。

「こくより、かがやき仕事のほうがよういじゃない」という。かがやくというのは仕事がきまっていない、「としよりは、うちにいて、かがやき仕事をしてくれるので、役にたつ」という。助手的な仕事をすること。

かがやき仕事というのは、きまった仕事ではない。

「としよりがうちにいて、かがやいてもらえるから、わかいもんが外へ出て仕事ができる」といった。

としよりのほうからいうと、「としよりだから、なにか、かがやき仕事をさせてくれ」という。

麦こきをしているとき、わかい人がこきやになる。としよりの人はかがやき仕事で、あしもとをかたづけたりする。そうすると、こきやがうまくいく。

植木屋さんの仕事の場合だと、わかいもんが、植えたりはぎったりする。としよりが、かがやき仕事で、おちばをかたづけたりする。そうすると、全体の仕事がはかどるという。（亀里矢島）

猫がかがやいている。

こいの中を、猫がねずみをねらっていることをいったもの。（女屋）

「そこらかがやいている」という。ちらかっているのをかたづけること、ととのえることをいう。（下長磯）

かがやく…「うちのまわりをかがやいている」という。これは、うちのまわりをかたづけること。

「おばあちゃんどうしたい」と近所の人がきていう。そんなとき、「うちのまわりをかがやいているよ」といったりする。

「へんな人がきて、うちのまわりをかがやいているから注意しろ」という。これは、あやしい人間がふらふらしているということ。犬とか猫が庭をかがやいているといういい方もする。

あるとき、詩吟の先生のはなしで、上大島の診療所の野崎先生の奥さんがよそからこちらへ越してこられたときのこととして、こんなはなしをしてくださった。

あるおじいさんがけがをして、診療所にみえられた。その後よくなった。おじいさんは診療所へ来なくなった。

診療所の奥さんがおじいさんによくつきそってきた人にたずねた。

「おじいちゃんこのごろどうしていますか。よくなりましたか」

そうしたら、その人が、

「おじいちゃんはこのごろ、うちのまわりをかがやいていますよ」

といったって。

奥さんは、かがやくということばを知らないもんだから、おじいちゃ

んの頭の毛がぬけて、てかてかにひかるようになったと思っておどろいたという。（上大島）

つけもんのお茶菓子のことを、おちゃじょっぱいといった。

「からっちゃは、麦ぼうちよりつらい」といった。

口じんぎのときは、お茶だけだした。からっちゃで、一杯茶だった。

（下大島）

むかしは、お茶を飲みながら、たくあんとかなっぱのつけたもんなどを食べた。

このような、つけもんのおちゃがしのことをちゃぞっぺといった。

（下増田）

つけもんのおちゃがしのことは、おちゃぞっぺといった。

からっちゃは、ぼうちうちよりおおごとだといった。

「ばあさん、おちゃぞっぺはねえかい、からっちゃは、ぼうちぶちよりおおごとだ」

という。

こういうことは、身内の人とのあいだでかわされる会話である。

お茶を出す方は、はじめから、

「からっちゃですけど」

といってだす。（小屋原）

つけもののおちゃがしのことを、ちゃぞっぺといった。

「なんのちゃぞっぺもなくって」

とか、

「ろくなちゃぞっぺもなくって」

といったりした。

百姓は、おちゃぞっぺに野菜があればいいといった。おとっつあんがそういった。

おちゃがしには、なっぱにこうこがあればよいという。（上増田）

はやす　のしもちを切ることを、正月のうちは、はやすといった。

（上大島）

大根、人参、午房などの葉を切りおとすことを、ハヤスという。

また、正月、のし餅を切ることも、ハヤスといった。

「大根をはやす」という。

大根の葉を切りとって干す。そのとき、葉を切りとることを、はやすといった。

大根の料理をするとき（切る）も、はやすといった。

なお、もちをはやすということは、聞いたことがない。（小屋原）

「早く切ってかたづけりゃ」という。暮についた餅を切ることをいう。

これをていねいにいうと、「もちをはやす」という。

三月の節供のときは、「ひしに切る」という。はやすとはいわない。

（下長磯）

おぞくる　もしき（枝）を、まるきりいように切りそろえることを、おぞくるという。（野中）

じんぎということば　診療所の野崎先生が上大島へ越してこられたとき、ムラの人が、

「先生のところへ、じんぎに行かなくって」

といったって。

そうしたら、先生は、

「上州だから、おひかえなすってといって、あいさつにくるのか。じんぎにこられたら、どうしようと思った」

といったって。（上大島）

マワリブチ　これは言葉としてあった。

困った人がいると、隣同士で助けあうということである。（野中）

火事見舞のこと　火事見舞のことは、ヤケゴウロクという。（女屋）

方言　おんがことねえ…（そんな）思いをすることはねえ。

ひやあもねえ…わきゃあねえ。かんたんなこと。（上大島）

カブリギ　死んだ人の一番いい着物を、菩提寺の坊さんにやる。それをカブリギをやるという。（笂井）

けんまく　「えらいけんまくで」というのは、おこっている様子をいったもの。

この辺でいうのは、

「〇〇さんは、えらいけんまくできたぜ」という。えらくおこってきたということ。（上増田）

タビゲエル　離縁してうちへ帰ってくること。（下長磯）

ウブスナガラ　神社のこと、ムラがらのこと。

「おらあほうのウグスナガラだから」という。（笂井）

トロッペシ　さんざ食ったことをいう。

十二分に食ったということ。

「どうだい、いまいっぱい食わねえかい」

というと。

「とろっぺえ食ったからいいよ」

といったりする。

もう十二分に食べたということ。（下増田）

そぶつ　粗末な着物のこと。

食いもんについては、「そぶつですが召しあがってください」という。

いとこより先のつきあい　いとこより先は、いわしのなべくらいという。いくらか勾いがするということ。

つきあいが、だんだん遠くなっていく。（下増田）

たんぼがた　西善は、この辺の人からは、たんぼがたといわれた。よく働くところだった。駒形へ嫁にきたら、朝などがつがつしないのでおどろいた。（駒形）

とくせい　「とくせいのまんがんじ」…しあわせのことをそういった。（上増田）

方言のこと　のたす…怠けること。

「〇〇は、のたしてべえいる」という。

ずるずるしていて、仕事などみしめてしないことをのたすといった。

のだあこと…でたらめをいうこと。

「のだあことをこきやがる」といった。

むかしの人がいった。でたらめのことである。

むてっぽう…とんでもねえことをすること。

たきごわめし…赤飯の代りに、たきごわめしをつくった。

もち米のもちがつけないときには、こごめの粉でこもちをついた。

しょうたれになる…びしょぬれになる。

七月っ子は投げても育つといった。

歯が生えてうまれた子のことは、おにっこといった。

のっつけがみさん…姑さんがいないところへ嫁いだ嫁さんは、すぐにおかちさんになれるということ。

のっつけがみさんは、姑さんがいないから楽でもあるし、近所とか親戚とのおつきあいについては、はじめてなので、おおごとだといった。

のっつけがみさんについては、楽あれば苦ありのたとえのとおり、いちげえにいいとはいえない。

姑さんがなくなると、嫁さんの天下になったという。

うちでは、財布はおばあさんがにぎっていたが、身上まわしは、男

衆がするもんだと思っていた。男衆がいれば、女衆は、自分では身上まわしをするなどとは思ってもみなかった。（上増田）

なちにははなそげ　みなさんなみにすること。

はなをそろえろということ。

とくにでしゃばるな。ということ。

これは、飲み食いするときにいう。

人なみということ。（下増田）

「女衆もまぐまぐ（まごまご）しねえで、早くすわってください」

おねりの前の昼食のとき、お客さんの食事が一段落したとき、みよ子さんがいったことば。

「まごまごしないで」とは、ぐずぐずしないでとか、遠慮しないでという意味。（笂井）

こじくりん　こじくりん…小柄な人のこと。

「あの人は、こじくりんとしている」

とびあがり…そそっかしい人のこと。（女屋）

方言いろいろ　のたす…「あれ、のたしてんだから」という。怠けていること。ずるいこと。真面目でなく遊んでいること。

のたしやともいう。怠け者のこと。「あのやつはのたしやだ」

「あの組（班）の人たちはのたしやだ」

「のたしやべえいる」

このことば、今でも使っている。

のてっくり…ふつうでないこと。でっかいことをするとか、ばかげたことをすること。

たとえば、かねを借りるにしても、五万円借りれば間にあうところを、十万円とか二十万円借りたりすること。

とびあがり…人なみでない行動をする人のこと。（上増田）

こが…風呂桶。「こががこわれちゃった」

ささらほうさら…「あのやろうは、ささらほうさらで」という。せかせかしているようなこと

そそくさということ。

のてっくら…「あのやろうはのてっくらだ」

すこし、のっぱなこと、むこうみず、のうてんきと同じようなこと。

のたす…ずるけること、怠けること。

のたくら…のんびりしていること、「あのやろうはのたくらだ」という。でれんこしていること。

のうてんき…思いもつかぬこと。あたまえくること。（駒形）

乞食のこと　乞食のことは、のらぼうといったり、ハチッピラキといったりした。（笂井）

かすみが広い　世間の広い人のことは、かすみが広いといった。（野中）

のだこと　田圃あたりではなしていること、大していみのないこと。（笂井）

のてっくれ　「あのやろうは、のてっくれのことをすらあなあ」という。人のしないことをすること。あぶないこと、とっぴょうしもないことをする。（笂井）

とろっぺち　ことばに聞いたことがあるが、よくわからない。

酒の席で酒をすすめられたとき、断るのはべろべろになったという。（上大島）

のいんぼう　仕事をしない人のこと。（鶴光路）

(六) その他

古鉄瓶のこと　笂井の西原の人がいうのに、斉藤順衛さんのうちへ、あるとき古物屋さんがきた。

「なんかはらいもんはねえかい」

といってきた。

順衛さんがひょいと見ると、古物屋さんが古い鉄瓶をもっていた。それには、カニが刻んであった。

「古物屋さん、その鉄瓶いくらで買ってきたや」

順衛さんはその値段を聞いて、

「売れや」

といって、うんとかねだして、その古鉄瓶を買ったって。

その時分で、二百円といくらかとかで買ったという。鉄瓶は、とぐまん、仇にも貸しておけという。使わないでおくと、さびて、だめになるからという。(笂井)

女屋益美さん　女屋の女屋益美さんという人は、ムラのために尽した人である。お寺へ行く道は、昭和八年ごろにつくった。この道のことは、寺道とよんでいる。(上増田)

常さん鋤　上増田の島の斉田登志雄さんの祖父だか曽祖父にあたる人に、常さんという人がいた。(常右衛門さんという人)

この人は、鋤を自分で使いいいように考案した。名前をとって、常さん鋤といわれていた。

この鋤を使って、せがれの儀右衛門さんははんどりをさせてすきかけをした。

常さんは、鋤をかけるときに、具合よく、

「ぺえら、ぺえら」

といいながらかけたという。鋤をかけていって、田のふちまでいくと、

「それ儀右衛門ひっかえせ」

といって、馬をひきかえして、また、

「ぺえら、ぺえら」

といいながらすきかけをしたという。

調子よく鋤が土をかえすので、「ぺえら、ぺえら」といったものという。

その常さん鋤はうんと使いよかったという。自分で考案して、鍛冶屋につくらせたものという。(上増田)

かかあ天下　かかあ天下という言葉はあったが、この辺には、そういう人はいなかった。

「上州はかかあ天下」といった。

おんなしゅがうんとかせぐという意味であるという。

わたしんちは、どっちかといえばかかあ天下だった。

かねのだし入れはおっかさんだった。

うちには、米が大変あった。田植がすぎると米を売ったことがあった。その年の作柄を予想して、土蔵から米を出した。穀屋のそろばんより、おっかさんの暗算の方が早くできた。(上増田)

捨て場　馬でも、猫でも、犬でも、死んだものを捨てたところ。

笂井小学校の前に今機械屋さんがある。そこがむかしの捨て場であった。

ニザン(のちざん)もここへ捨てた人もあった。ただし、これは、捨て場の近所の人くらいであった。ニザンの捨て場は墓地であった。

それよりむかしは、とぼ口のところへうめた。

わたしの惣領のときのはなし。人にニザンを踏まれれば踏まれるほどえんぎがいいといった。

ふまれればふまれるほど頭がよくなるといった。大正十四年のこと。

次男のとき（昭和二年）には墓場へもっていってうめた。なにかにくるんでいって捨ててきた。（笂井）

カラスネブリ　うすめをあけてねむることがあった。

それをカラスネブリといった。（笂井）

七つまで　むかしの人は、子供は、七つまでは神様だといった。（笂井）

かみなり　赤城のかみなりはこわくないという。

榛名とか御荷鉾のかみなりはここへ来るという。

「御荷鉾の三束雨」という。

駒形には雷電神社がある。

ここに黒松の大きいのがあった。

どんなによく晴れている日でも、この松の木の上にかすみがかかると、かならず夕立がきた。

森本酒造の黒松正泉の名は、雷電神社の黒松に由来しているという。

駒形は水がいいので、酒が有名という。（駒形）

三角点　この辺の三角点は、駒形町一丁目の琴平橋のところにある。

伊勢崎はおふじ山。

前橋は二子山。（駒形）

ゴイロ　子供が遊んでいて、休むというときには、「ゴイロ」といった。（駒形）

あきあげ　あきあげまでは、嫁は里に泊ってくることができなかった。

あきあげのときは、「泊ってきてもいいんだ」といわれた。

このときは、「あきるほど泊ってきられた」（上増田）

いいもちとこもち　もち米をついた餅のことは、いい餅といった。米（うるち）の粉でついた餅のことは、こもちといった。

一月十四日ごろもち草がとれた。このとき草餅をついた。これがご馳走であった。（上増田）

ミョウガ　ミョウガは馬鹿が食うという。（天川大島）

長男のこと　「えんの下のクモの巣も、かまどの下の灰もみんな長男のものだ」（天川大島）

二男坊のはなし　二男坊は嫁さんをもらえなかった。

そこで、こんな俗謡があった。

「いやでござります、ごきりょうがよくも、二番息子の宿なし猫は」（天川大島）

七つ下り　山ん中は、七つさがり（今の午後四時すぎ）だと、大人でもおっかなくって通れなかった。（女屋）

馬の子とり　女屋義登さんのうちには雌馬がいて、子とりをしていた。

あるとき、うちで（種馬をつれてきて）交尾させた。それを見ていた子供が、

「人間も子供をつくるときはつるませるんかい」

といったって。（女屋）

ネズミの証言　ネズミは、人間が子を産むときに大さわぎをするのを笑うという。

それは、どうしてかというと、ネズミは、子をつくるときは大さわぎをするが、人間は、子をつくるときにこっそりして、子をうむときに大さわぎするという。（駒形）

飯塚のこと　ここは、むかしから田圃型、うんと働くところ。

世間の人からは、

「飯塚へ嫁に行くか、はだかでバラしょうか」
といわれた。
むかしから、田圃型という。（小屋原）

なわ　縄をなっていて、足がでると、赤城山へむかうぞといわれた。
そういうなわのことは、ムカデ縄といった。
「ムカデみてえだ」
といわれた。（駒形）

珍問答　三つリンゴがある。その三つのリンゴを二人の親と二人の子が一つずつ食べられたが、どういうわけか。
（親は二人だが、子は一人。二人の子というのは、親＝夫婦二人の子という意味）（女屋）

振り米　むかし、竹んぼうの中に米を入れて、それを振って、米の音を聞かせて、安心させて死なせたところもあった。（女屋）

尺取虫　尺取虫のことは、カックイボウといった。（野中）

のきだれ（あまおち）　のきだれのおちるところを、あまおちといった。
ここへは、小便をするなといった。
仏様にあげたお茶は、かならず、軒下に捨てた。「仏様は、闇の中にばえいるのだから、あかるい天道様のあたるところへ（お茶を）ながしてやれ」とおばあさんにいわれた。（下長磯）

トマト　むかしの人は、トマトを食べなかった。
きちげえナスといってきらった。
砂糖をつけて食べればうんめえという人もあった。なおまずくって、うちの裏の川へ捨てた人もあった。（上大島）

チギのはなし　チギというのは、でっかいはかりのこと。
あるとき、だれかが、だれかに、
「おめえのちんぼへ、はかりのたまをぶらさげていれば、なにかほうびをやる」、といったら、そうして、まわりだした人がいたという。
（笠井）

カネバコ　銭を使わず、一生懸命働く人がいると、あすこんちには、カネバコがいるといった。
カネバコがいるから、あすこんちは身上がいいといった。（上長磯）

でっかいことのよみっくら　むかし、歌よみがあつまって、でっかいことのよみっくらをしたって。
そのときの歌は次のとおり。
○武蔵野の　原にはびこるうめのぼく
　天までとどく　うぐいすの声
○富士山へ　腰うちかけて　青空を
　笠にかぶれど　肩はかくれず
○天地をば　まるめあわせて　のむやつを
　まみげの上で　おどらせてみる
（これは、子供のとき、おばあさんに聞いたこと）。（上増田）

でっかいこと
赤城榛名を下駄にはき
大利根川を帯にまき
丸登の煙突杖にもち
……（上増田）

血の雨　おじいさんのはなしで、むかし、血の雨が降るというわさがひろまった。
赤飯のおにぎりを神社へあげれば助かるといわった。（上増田）

ケサハハ　コオロギのことは、ケサハハという。
ヒリヒヨヒヨヒヨと鳴くのと、

リイリイリイリイリイリイリイと鳴くのとある。
それをよく聞くと、
「カタサセ、ソソサセ、カタサセ、ソソサセ」と聞こえる。
「カタサセが鳴くようになっちゃあ、寒さをしのぐ仕度をしなくっちゃあなんねえ」
といった。むかしはみんなあてっつぎの着物を着た。
あてっつぎをしろということだ。それをコオロギが教えたという。
（女屋）

三隣亡　三隣亡を信心して祝ううちがあった。
三隣亡というのは、あたり三軒のとなりのうちを亡ぼして、そこのうちが大尽になるというわけ。（女屋）

子供のぐず　子供がわけもなくぐずをいう。そうすると、その子のあとができた（母親が妊娠すること）といった。（下大島）

ゴイロ　子供が遊んでいて、一休みするというときには、「ゴイロ」といった。（下大島）

人が死ぬということ　人がなくなるということを、
「どこかでさけもうした」
という。
おしまいになったということである。
「十王十体になった」ともいう。これも人がなくなったということ。
（下大島）

下増田とギス　下増田で、八幡様をギスがかじった。
そしたら、八幡様がおこって、これからは、下増田には、ギスをすまわせないといったと。
それで、それからは下増田にはギスがいなくなったという。（下増田）

かみなりのはなし　むかしは、榛名や御荷鉾の方からかみなりがやってきた。
榛名からのかみなりが一番きた。そのかみなりは、雨をたくさんもってくるので、農家の人からよろこばれた。
御荷鉾からのかみなりは、三束雨といわれ、早くやってきた。
（上大島）

ダンダゴロ　夕方、人の顔がはっきり見えなくなると、ダンダゴロといった。
誰だかわからないということである。（上大島）

犬の足は三本足　犬が片足をもちあげて小便をするのは、てめえの体をよごすのはいやだということである。（櫛島）
犬はむかし、三本足だった。
三本足じゃあるけなかんべというので、（神様に）一本足をもらった。
それで、もったいなくって、小便するとき、もちあげてするのだという。
また、道に迷わないために小便するのだという。（天川大島）

ホトトギス　ホトトギスは、一日に千声鳴かないと、地上へおりて食べものが食えないという。
桑の木に、カマギリチマとかカエルなどがさしてあった。これは、ホトトギスのために、モズがとってきて、わざわざさしておいてくれたものという。
モズは、口は悪いがなさけぶかいので、えさをとっておいてくれるのだという。
日の短いときに、ホトトギスは一日に千声なけないので、モズが助けてくれたのだという。（天川大島）

大晦日に火をたやさないこと　大晦日には、いろりにねっこをくべておいて、火をたやさなかった。

大晦日に早く寝ると、しらががはえるといった。
一月十四日のおしらみまちの晩も同じ、早く寝ると、しらががはえるといった。（天川大島）

ノウデガラ　よそで聞いたこと。田植前にぼたもちをして食べたという。（下増田）

百日かつら　うちのもの（親）がなくなったとき、そこのうちの施主が、百日かつらといって、ひげも、あたまもそのままにしておいた。
百日たつと、いみあけといって、施主が世話になった家へあいさつにまわった。組内くらい、いい仕度をして、
「お世話になりました」
といってまわった。
百日かつらといい、百日たつと、きれいになってまわった。お礼まわりである。
なにかもっていったというはなしはきかない。（下増田）

たろうじ　「たろうじしてきた」と、子供に対していった。田植のとき、田をならしたり、クロをぬったりすること。なえちらしをするのもたろうじの仕事。田植のとき、植えつけの準備をするのがたろうじということ。すうとめというのは、田植のとき、植え手の女衆のこと。（小屋原）

ネコの分・ネズミの分　田植をしていて、田の形によって、はんぱのところ（さくのとおらないところ）ができる。
そういうところについては、ネコの分、ネズミの分といって植えた。
すうとめがはえない（植えられない）ところへ植えた。
せまい場所のことは、ネコのひたい（してえ）だといった。（小屋原）

花が咲く　「花が咲く」というのは、女の人が生理があって、子供をうめる状態にあることをいう。（上増田）

猿利口　猿は欲がふかいということ。（上大島）

正月様と庚申様は不仲　庚申様は百姓の神様という。
寒のうちは、庚申待はやらない。正月様と庚申様は仲が悪いという。
庚申様の当番のうちで庚申様の掛軸をあずかっていて、お正月には、それを出してかざっておく。しかし、庚申様のおそなえ餅を、正月様にあげる餅は、臼をべつにしてつく。正月様の餅をついて、臼をきれいにあらってから、庚申様の餅をつく。餅米をふかすところから、正月様とはべつにする。
一年に一回のところと、秋だけ、宿を一まわりするところとある。（東上野）

笠薬師のこと　むかし、笠薬師の境内の桜の木を切ったら、白い蛇がでたという。
笠薬師の由来については、次のような話が伝えられている。
むかし、えらい人がやってきて、ここで行き倒れになった。それで、その人を薬師様にまつったものという。その人が笠をかぶっていたので、笠薬師とよんでいる。
薬師様の縁日は、月の七、十七、二十七日。
このときには、駒形の佃屋というまんじゅう屋が店をだした。
今年（平成二年）四月の縁日のとき、奥の院に板碑があった。（笂井）

片貝の虚空蔵様　片貝の虚空蔵様は、ウナギをあげる神様。
片貝の人はウナギを食べないという。虚空蔵様の庭（境内）には、池があって、ウナギを放したところ。
目の悪い人が信心でウナギをあげるという。（女屋）

虚空蔵様　駒形の牛乳屋さんが、いい牛がいたので、記念にたてたという。（駒形）

絹笠さま　まゆの背のはん点は、絹笠さまの乗っていた馬のひづめ

でけられたあとだ。（公田）

神社について　公田町にある熊野神社は、石原家の神様。ひえ神社の山王様は高岸家の神様。諏訪神社は町田家の神様、と分かれている。これは、昔の人が字のよりどころとして、造ったものであって勢力には関係ない。また、江戸時代には、上ぐるわ、中ぐるわ、下ぐるわのほかに、もえもんぶん村という字があったらしいが、どこをさしているのかわからない。（公田）

化粧薬師の話　石で作った七体の薬師で、この像の顔や胸の部分に白いけしょうがしてある。ヤンメ（目の病気）にかかると、薬師様についている白いおしろいを目にぬる。それでヤンメがなおったら、お礼として、うどん粉を持って行って、お化粧をしてやるのだ。（亀里）

岩船地蔵　上公田に岩船地蔵という地蔵がたっている。昔、今その地蔵様が立っているところに、体の具合の悪いひとが通った。なにか神様の啓示〈神が人に教え示すこと〉をうけて、地蔵様をたてたのだそうだ。それからというもの、頭が痛い時は、お地蔵様に「地蔵様、頭が痛いので治して下さい」と、たのんで、治ったら、赤布で頭巾を作って、お地蔵様にかぶせて「有り難うございました」と、と礼をしている。お腹の痛いときは、腹がけを作って、同じように願む。そのほかに、赤ちゃんの夜泣きにもきくそうだ。

このお地蔵様は、百年以上も昔に作られたそうだ。昔は、お地蔵様の所に屋根があったそうだが、燃えてしまって今はない。私はイボを治してもらった。半紙でお米を包んで、イボの処をこする、そしてお地蔵様の所に穴を掘って、半紙に包んだお米を中に入れて、砂をかぶせる、そしてお願いしたら私の場合では約三か月ぐらいで、すっかり治ってしまった。

八幡様でもそのような言い伝えがあるそうだ。八幡様の石を「八幡様、お礼の時には石を二つ返します」と言って石を持ってくる。そしてお礼に石を二つ返すのだそうだ。この八幡様の言い伝えは、どこの八幡様でもかなえられます。なぜ、そのようになったかは、よくわからないけどれど、ずいぶん昔から言い伝えられている。

お願いをはたしの時に、むかご〈ヤマイモノ実〉に糸を通して、じゅずを作って首にかけてやる。そのお地蔵さんができたのは、嘉永三年十一月三日で毎年七月二十三日がお祭りである。（公田）

不動様　利根川の流れがまだ、現在の所ではなかった頃、不動様は、利根の向こうの萩原山のものであったという。しかし、利根川の流れが現在の所に変わったため公田にのこった。今でも萩原山不動様と言われている。（公田）

極楽寺の薬師堂　これは、薬師如来の神様をまつってある。昔から目の神様と言われている。目の病気にかかると紙に「メ」と言う字を百回、百字書くのだ。その書いた紙で目をこすってやって、薬師堂の境内におく。（亀里寺家）

天神様と八幡様　竜門に昔から、天神様という神様と、八幡様という神様があった。その神様は、子供達が小屋をたてて、その小屋にとまる。その小屋の前に穴をほり、火をもやして太鼓をたたきながら一夜をあかす。つぎの朝は、村の人達が、お祝の赤飯を炊き、明るくなるのといっしょに、あげにきてくれる、天神様は十五夜の夜のお祭りをし、八幡様のお祭りは、十五夜から十日後に、同じようにして行なわれる。ある時、天神様の祭りと八幡様の祭りをいっしょにしたことがある。その時には病人がたくさん出たので、それから別々になったそうだ。

この祭りは、半分になり、東は天神祭りを、西は八幡祭りをするようななった。（亀里龍門）

七観音　亀里の矢島にある七観音の堂の境内に公民館、大神宮などがある。七観音は、由来書によると、千手観音、馬頭観音、十一面観音、子安観音、聖観音、如意観音、不空絹観音、である。千手観音は、手が千本くらいある観音様、十一面観音は顔が十一ある観音様で子安観音は、子供を抱いている観音様で馬頭観音は頭が馬の観音様である。ほかの観音様は普通である。明治の頃、廃寺となったが、七観音は今に残って、安産、子育て、家内安全、諸難消除、牛馬守護の利生のために、篤信者の参拝が絶えることがないということである。お産のときに願いをかけると、必ず御利益があって、安産すると信じられて、七観音にお願いをかける。そのとき腹帯を奉納する。ここの部落には、お産で死んだ者が一人もないという、縁日は二月十七日と盆の十七日である。

堂の傍に石造の地蔵尊が立ち、その後ろに中興三部大阿じゃ梨法印蓮海塔がある。寛政五年三月建立とあるから、その頃の人であろうか。ここには、無縫塔が蓮海塔の後ろに並んでいる。（亀里矢島）

徳丸町のお不動様について　遠い昔のほうれきの頃〈一七五一〉といい伝えられていることです。徳丸の西向きの不動様といいました。さて、ほうじょう寺という大きい寺があってたくさんの坊さん、だんかもたいそうありました。さんぱいする人と多かったものです。さて、信仰のあまり、おまつりの夜に火災を起こして、天保の頃〈一八三〇〉おしいかな不動様は焼けました。

その後新しく不動様を高崎市倉賀野町のえいらく寺より授けられ、現在その位置に西向きとしておまつりしてあります。

町としては一月二十八日、八月二十八日の年二回おまつりをしています。一月二十八日には村をあげておいわいし、おとうみょうをあげ、善光寺のじゅうしょくにお願いしてごまをたき、おきょうをとなえて、無事安かれと、町中れいはいしています。そのためか町中健全にいまもなお仕事にせいれいしています。（徳丸）

房丸町の四体大明神　明治天皇の前の天皇時代の頃、ある一家四人家族が生き埋めになった。村の人々はその一家が良い人だっただけにかわいそうになり奉ったのが始まりでこれを四体大明神と村の人々が名付けた。

この大明神には遠くの方から体の悪い人々がお参りに来たそうである。

それが最近区画整理によって四体大明神を移動するため、四体大明神が奉ってある下をほってみたら、男の人の歯、女の人の歯、ステッキその他いろいろな品物が出た。村の人々は四体大明神を移動した事により悪いことがないように近くのお寺で奉った。

なお四体大明神を移動したとき、村の人はいっている、「殺された理由は上の人に逆らったからだ」と。（宮地）

駒形神社の御神体　馬のヒヅメだった。見た人がある。（力丸）

細野天神と扉天神　下増田の阿久津に、天神という地名がある。そこに細野天神が祀ってある。

ある年の八月、えらい竜巻がしてきて、天神様の扉をまきあげて、利根の追貝までもっていってしまった。

追貝には、扉天神というのがあるという。

その日は、雲ができたと思ったら、麦をあつめる間もなく竜巻がやってきたのだという。（下増田）

弁当の賭け　むかし、三人兄弟で山刈りに行った。三人分の弁当をもって行って、くじびきで、

おかずだけ食べるもの、

めしだけ食べるもの、

食わないもの

ときめて、仕事をしたら、おかずだけ食べるのがいちばんつらくて、なにも食わないで仕事をしたのが、いちばん楽だったという。（下増田）

永明地蔵　あるとき、真楽寺の住職と寺世話人が同時に、寺の境内に地蔵様が埋まっているという夢をみた。

不思議なことがあるものだと、二人は話し合って、夢にでてきた場所を掘ってみた。

そしたら、夢にみたとおり、境内から地蔵様がでてきた。

その地蔵様は、今、真楽寺境内の納骨堂の前にまつられている。

名前を永明地蔵と呼んでいる。

とくにご縁日はない。

子育地蔵として信仰され、寺へおまいりにきた人がおがんでいく程度である。（駒形）

万才池　万才池というのがあった。

むかし、ここでどんどんやきをしたという。お正月のおかざりをあつめて小屋をつくって、どんどんやきをしたという。（東上野）

弁天沼　弁天沼が神社の西南にあった。

弁天様は、旧の永明公民館のところへひっこした。

正月の元日と十四日におまいりした。

その沼をわかいしゅ田としてつくっていた。二反五、六畝あった。

ここはやち田（湿田）で、米だけつくっていた。　むかし、上大島へきた婿を、そのやち田につっこんだという。（上大島）

古川のはなし　下長磯の川島（かわじま）の西北あたり、川島重貴さんのうちのことを、むかしは大竹やぶといった。（下長磯）

増田が渕　新土塚の下から安堀辺まで。

むかしの、佐波新田用水の下あたり。（下増田）

島のこと　むかし、利根川が流れていたときの島という。（上増田）

なまずっ川　一木杉の東の川のことを、なまずっ川とよんでいた。

山芋がウナギになること。

山芋を池（沼）にさしておいて三年たつとウナギになるといった。（小島田）

五郎右衛門堰　筑井からひいている。

田植前に堀払いをする。耕地をつくっている人がでる。

五郎右衛門という人については知らない。（上増田）

荒口川　もとは荒口川といっていたが、戦後になってから、荒砥川というようになった。（上増田）

八坂用水　八坂用水のことは、もとは、伊勢崎新堀といっていた。（上増田）

荒砥川のこと　荒砥川は、もとは、荒口川といっていた。（上増田）

藤川と端気川　藤川は、藤つるのように曲がっていたので、この名前がある。曲がっているので流れが悪く、水はけも悪いので、よくあふれた。大雨や夕立でもあふれた。田植えのあと、あふれて苗がよくよその家の苗と一緒になったことがあった。こやしが浮き上がったこともあった。

藤川では、鰻や鯉などの魚やしじみがとれた。

伊勢崎市稲荷町の清水嘉造さんは、魚とりの名人で、猫のなきまねがうまく、愛称を「猫さん」といった。

下阿内町の中沢千司さん（故人）も魚とりの名人で、端気川の「う」だといわれた。寒中でも鯉がほしいというとすぐとってきた。とれる所は人に教えなかった。ほかの人が釣りにいくとつれなくしてしまった。

端気川はまっすぐで、はけがいい（よくながれる）から端気川といっ

た。

端気川　樋の滝の工事で、一尺に一寸のこうばいをつけたという。ウナギがのぼったという。（力丸）

川筋にタル屋、酒屋があった。

新地の先に樋の滝があって、舟がのぼりにいくので工事をして、水神宮がつくられた。

水神宮には、安政元年甲寅三日　石田氏と刻んである。石田氏というのは、藩の役人という。

土地改良で川が東へ八十メートル動いてしまって、お宮から離れてしまった。（下阿内）

藤川　まがりくねった川だった。（力丸）

藤の木のようにまがっているからフジ川という。飯玉さまの北が水源になっている。（力丸）

昔は細かった。川虫が多いから清水の川だと思った。（力丸）

処刑場　さびしい所で、追いはぎが出た。

処刑の最後は、女性で、明治に入ってからのことだった。

（天川大島住宅）

権現山　鎌倉権五郎をまつっていて、泉蔵寺に移したので、山からお寺まで灯籠をつけた。

権現沼は、古利根川のあとの水たまりだった。（小屋原）

八幡山古墳　昔、北の山の天ぺんを井戸の深さくらいまで掘ったのを見た覚えがある。

赤い朱が、いっぱい出た。（下朝倉）

八幡山　明治二十年頃、夜見ていると灯がついたので、掘っているのがわかった。その頃古墳の発掘が大変多かった。いいものも出たらしい。

北の方の山の上に、窪地になっていたのを見たことがある。

琴をひく男子像はここから出たものらしい。（朝倉）

力丸城　昔は蛇窪（ジャクボ）城と言った。小字に竜岸（リュウガン）や、寺号に降竜山があり関係がある。

昔大きな蛇がいたという。

蛇窪という地名があり、清水がわいていた。その水をくんで湯にすると「シブ湯」で汗もがとれた。湯屋もあった。（力丸）

端気川は輸送用（米の運搬用）に昔掘ったものである。船は公田まであがる。（新堀）

川のせまかった話　昔利根川は狭く、大前田英五郎が逃げて飛んで渡った。（話にのこっているだけだが）

昔小さな丸太の橋があった。今の神社の前の川原にシブ池があり、シブ池の湯があった。伊香保に似た湯で、わかし湯にした。

カエルが多くいた。

明治二十二年の大水で流れた。（新堀）

軍艦岩　川向こうの軍艦岩は新掘分であり、東群馬郡になっていた。向こうに新掘分の土地がある。

軍艦岩の間が狭くてつまり、昭和大橋の辺より新掘に土があがったのではないか。南玉まで火山灰土である。（新堀）

小屋原の中村家の松　小屋原の中村一衛さんのうち屋敷に松の木があった。

その松は、中村家の先祖が庄屋をやっていたとき、天川大島の松並木を植えるとき勤労奉仕の親方をしていたので、一本もらった松だという。

この松は、黒松で、松並木の松と同じものだったという。

むかしから、その松にはしめ縄をはって大事にしていた。最近、バ

イパスをつくるので家を移転するときに切ってしまった。（小屋原）

船戸（渡）の松　清水川にかかっている橋があり、それを船戸橋といった。その橋の北に松があって、大きい松が一本あった。船戸の松といった。

むかし、船が流れてきて（漂流）、その船をつないだ松という。

むかし、この辺は、利根川が流れていたが、水がなくなって（高いところは）島になったという。　むかしは、夜になると、オトウカがでた。

提灯をつけたような火がいくつもみえて、オトウカのよめどりといった。それが、船戸のあたりに見えた。

船戸の松のところは、石っかわらだった。

野火をつけたこともあった。

昭和五年のころ、ムラのわかいしゅが川砂をとったり、コンクリートに使う小石をとったりしていた。（上大島町）

見切塚　むかしは高いところであった。共愛短大の北、新田用水のすぐ上あたり。

八日市は笂井の本家ほんもとという。（笂井）

忌み田　樋越の東の方、稲荷山のほうの田圃。

ぶすづかとか、おぎょうだというのがあった。

そういう田は、借りてつくるのはいいけど、主のうちにたたるという。

それを、飯塚のTというううんと欲のふけえものが、そういうところを、こまめにみんな買ってしまったと。

Tというのはかねをうんとのこしたもの。

ごく最近のこと、昭和のはなし。（女屋）

馬具塚　古城趾にある塚で、古い五輪塔が立っていた。常盤御前の乗ってきて馬具を埋めた。五輪田のふちにあった。（亀里）

お蔵屋敷　お蔵屋敷は、宮の下の神社の近くにあった。今は田になっている。（上増田）

五輪田　古城趾の所で、今の経済連から北の所にあった。五輪塔が立っていて、さわるとたたりがあるといわれた。

五輪塔は今、極楽寺に移してある。（亀里）

古城跡　土地改良前は高低差がだいぶあった。

アンニャ坊は、猫田の場所で、猫のおどりがあったという。

今の経済連の北門で守衛のいる所で、五輪塔が立ち、塚があった。（亀里）

処刑場あと　供養碑は、道の関係で三回動いている。

天台橋は涙橋といった。

西に東屋という店があり、唐丸かごでつれてこられた処刑される人が、好みのうどん、そばを食べさせた。（天川大島住宅）

せっちん大工　寺家にいた大工は、せっちん大工といわれ腕が良くなかった。この人の作った家はゆるくて、こわすのにかけやがいらないといわれた。（亀里）

ナカヤ熊五郎　前橋の名工といわれた人で、ノコギリを作らせると刀を丸くしならせても折れず、八十本木を切っても目立の必要がなかったという。（亀里）

小島田の一本杉　小島田の一本杉の根元には、いしごっぺがあった。（女屋）

下り松　今はなくなったが広瀬川のところにあった松。上川淵分の方へ枝がまがっていた。ここは、下り松という字のところ。（天川大島）

うるしの木　松平様はうるしの木を広瀬川の両側に植えたという。今でもウルシの木が残っている。（下大島）

曲輪の名をつけた榎木　竜門部落の中ほどに榎木曲輪というのがあ

る。本当は、中村曲輪で、その一角全部が中村の姓の家であるが、一角の入口に樹齢百年経った老榎が二本門柱のようにかまえているので「榎くるわ」とよんだのだそうだ。（力丸）

オウチの木　役に立たない木、獄門のさらし首の木に使う。（亀里）

松の木　中條さん、木暮さん宅の松は、天川大島の松並木と同じ年であるという。（小屋原）

寺家柿　小さい渋柿でチンボガキといった。土があっていて名産だった。

養蚕の綱に渋をつけて丈夫にするために使うので、どの農家にも一本ずつ植えてあった。

運動会の時、渋ぬきをして食べた。たくさんなった家には買いに来た。（亀里寺家）

河岸　むかし、ここを舟が通ったところという。（小屋原）

ケエット　川を越したところをケエットといった。

橋のないとき、浅瀬を越えて渡った。川をけえたところという。（笂井）

はけた　女屋の地形名。

万福寺の西、がけになっていた。しのとかならなどが生えていた。その下に清水がでていた。

そこの田へ行くときには、水をもって行かなくもよかった。（上増田）

上増田の小字名のこと

田村屋敷

鯨田

百々…どうどう

天神内野…ここのことは、道場ともいっている。ここへ霊園をつくって、道浄寺と名づけた。

天神内野というのが本当の名である。

上越殿…上堀田分　この小堀に砂利がたまるので、砂利川ともよぶ

下越殿…下堀田分

天神内野のところは、しけっ地で一毛田だった。そこには、むかしは、どじょうやたにしがたくさんいた。

そこへ、霊園をつくった。

なお、ムギをつくれなかったので、春はレンゲ畑にかっていた。（上増田）

油免　伊勢崎領に入っている所。お姫様が音でねむれない、魔物の声が聞こえるというので調べてみると水車の音だった。

油が切れて音が出ていたので、一日中油をくれるようにといって、租税を免じてくれた。（亀里）

一休の頓智　和尚さんが檀家からもちをもらってきてしまっておいた。

それを和尚さんの留守に小僧さん（一休）が半分ぬすんでおいた。

和尚さんが帰ってきてみると、もちが半分しかない。

それで、和尚さんが、

「十五夜の月はまんまるなるに」

といった。

そしたら、一休さんが、

「雲にかくれて、ここに半分」

といって、半分のもちを出してやったと。（上増田）

お盆にぼたもちをつくる訳　お盆の時、六部が墓場で寝ていた。ところがお盆だもんで、仏さまの声がにぎやかだった。その内、

「村の子供がへっついでやけどをした。その家はしやっかち（しぶったれ）でぼたもちを仏に進ぜなかったので、仏さまがその家の子供を

つきおとした」
と、話すのを六部は聞いた。不思議に思って六部がその村をまわったら、本当にやけどを子供のいる家があった。六部が
「ぼたもちを仏さまに進ぜたかね」
と聞いたら、あげなかったと家の者が答えた。
それで、盆にはぼたもちを作るもんだといった。（徳丸）

しょうぶ酒を飲む訳　娘が寝ている所へ毎夜〳〵いい男がきた。毎夜、同じ時刻にどこから入ってくるかも判らないので娘はきたいに思っておふくろに話した。おふくろは、今夜男がきたら着物に針をさしてやれと言うので娘はそのとおりにした。朝になって針に通した糸をたぐっていったら、糸は古井戸の中に続いた。古井戸の中で蛇の話し声が聞こえて、子を宿してもしょうぶ酒を飲めば虫がくだってしまうと言っている。おふくろは早速娘にしょうぶ酒を飲ませた。すると、虫がいくらも下った。（徳丸）

金山彦命の碑　阿内村がうずもれた後、再興した記念に立てたもの。阿寺　両村中とある。（亀里寺家）

半夏さん　はんげさんは、おおくいそがしくって、半夏の日に、田へ片足、畑へ片足かけて死んだって。
そうなんで、半夏の日には田植をするもんじゃないといった。
（上増田）

休みあがり　仕事をしてえる人が、休みをして、そのままあがってしまうこと。屋根屋さんがよくそうした。（上大島）

ため柄杓の柄が折れたもの　ため（下肥）柄杓が折れたのは手がつかんねえといった。
きたなくって、どこをおさえていいかわからないこと。
どうにもなんねえことをいった。
手のつけられないことを、ため柄杓の柄が折れたという。（上大島）

うちをさかさにして金魚を飼え　雨っぷりのとき仕事をしていると、
「そんなん仕事がしたけりゃ、うちをさかさにして、金魚を飼え」
といわれた。（上大島）

さんじょさま　むかしは、夜なべに、女の人は糸つむぎを、男衆はそのうしろでなわないをしていた。
十二時すぎると、さんじょさまがあがるのでおがんだ。さんじょさまをおがむと、小銭に困らないといった。（上大島）

おいはぎ　天狗松のところに、おいはぎがかがんでいて出たという。
（天川大島）

オトボウ　むかし、広瀬川のはたに沼があった。
五つか六つの子がその沼に入ってしまって、
そしたら、おっかさんがはりあいが悪くって、
「おとぼうやあい」
って、その子の名を呼んでいたって。（天川大島）

かつぎ石　むかし、寮の裏に石があって、わかいしゅが力だめしにかついだことがあった。
力だめしに、かつぎっこしたわけ。（天川大島）

十日夜の餅　笊井では、十日夜の餅を寺にもって行った。羽鳥一家だけ（もと五、六軒、今は一軒だけ）
ところが、斉藤家では、落人で困っていて、餅がつけなかったので、十日夜の翌晩うどんをつくって、寺へ持って行っている。（斉藤達也家では、現在でもこのことを続けている）。
なお、餅はあんぴん。（笊井）

厄年餅　笊井では、厄年の者がいる家では、正月の行事がすんでか

ら、餅をついて、親戚とか近所へ配るしきたりがある。この餅のことを厄年餅と呼んでいる。なお、日取りは家によってちがうようである。

男は数え二十五と四十二のとき。女は十九と三十三のとき。一月二十八日に餅をついて、親戚にくばった。餅はあんぴん、これを重箱に入れてくばった。特に数はきまっていない。

四十二歳のとき、とくにかたくした。

厄年餅をくばるのは、年をさきにとって厄を先に越そうというわけ。厄年餅を食べてもらえば、厄のがれができるといった。(笂井)

土用には石もくさる　ある日のこと、旦那さんが番頭さんに、

「土用は石もくさるというから、なんで刈ってこい」

って番頭さんにいいつけたところ、その番頭さん、石塔を荷車につけてきて、門を入れないから、門をおったおせっていったって。(波志江の五郎兵衛の話である)。(下増田)

やくざの墓　線香立ての裏にサイコロとツボが彫ってある。(下阿内)

強訴　明治の初めに強訴があり、主謀者のお坊さんは、死体をしばられたまま埋められたという。(亀里)

機織りの音　むかし、機織りの音が次のように聞こえたという。

「とっちゃ、かっちゃくい」(上大島)

オオカミガクシ　梅林で外に出られなくなったことがある。

だれの目にもつかない。十歳くらいの子で、「うんとヒゲのばした人と遊んできた」と言ったので、オオカミがくしといった。(力丸)

浅間の噴火　丈七という人が、さかな取りにいって、浅間の噴火でおきた洪水で、今の新堀神社の所(稲荷さま)にとりのこされ、二日二晩、飲まず食わずにいた。村人に助けられた。(亀里)

六部大尽　三ツ仏(ボトケ)という地名があり、その屋敷に六部が入ったが、出るのを見た人がいない。その後大尽になった。(下阿内)

念仏橋　念仏をとなえた橋。天明三年の三十三年忌の無縁仏の供養の念仏をとなえた。(亀里寺家)

尼が橋　ぬで島と公田の境に尼が橋と言う橋がある。利根川がまだ、現在の所を流れていないとき、細い川があった。そのとき、尼さんが川を渡るのに不便だと言って、作ったものだと言われている。合力をうけて作った橋と言われている。(公田)

尼さんが今、利根川のある所に橋をかけたのでこの名がある。櫛島と下新田をむすんでいた。(公田)

ウシ橋　橋がなくて牛の背を渡って行った。のちに牛橋と名がついた。ウシ橋と一本杉の間でころぶと必ず死ぬと言われた。ころばないほうがいいと言われた。(小島田)

一木杉の石をけずってつけるとイボがとれる。そこで石がけずれるのでけずれないようにした。(小島田)

寺の裏は山でオトーカがいた。(下増田)

オサキが天井のスミから入ってくる。カラの米ビツが一ぱいになると言う。お腹立ちになると逆にカラになる。(下増田)

娘にオサキがついた話がある。(下増田)

村の北に長名寺という寺があった。七堂ガランがあった。のこる碑は参道の南という。

中世の弥ゴ屋敷と言うところ。(小島田)

大蛇　虚空蔵様の東に大蛇がでたという。

栗山の水車より東、女屋と上長磯の東あたりという。(上大島)

乞食のこと　乞食を三日すればやめられないといった。(上大島)

石かつぎ　むかし、わかいしゅなどが石をかついだ。

四十貫くらいの石をかついだ人もいた。
この辺で砂利とりをしていると、まぎれて、でっかい石がでてきた。そういううわさがでると、わかいしゅがその石をかつぎに行った。藤井仲次郎さんという人は力持ちだった。
仲ちゃんは、四十貫の石をかついだという。
細長い、かつぎいい石がでるとかついだ。
もと、庚申様の境内にかついだ石があった。（下大島）

えんがとてんが　えんがは、田（畑）におきっぱなしにしてもかまわない。
「えんが＝田米みればかなわない」ということ。
ところが、てんがは、田（畑）へおきっぱなしにするととられるという。
「てんかとる」というためという。
それだから、てんが（手鍬）は、畑より田へおいてくるなという。（上大島）

石　八幡太郎の乗った馬のひづめのあとのある石があった。（下朝倉）
ヤケイシ――空気中で急にひえた石で穴が多い。
ナマイシ――土の中でゆっくりひえた。（亀里寺家）

蘇姓について　先祖は三字のアザミであったが、花の蘇にかえたのだという。（上増田）

力丸町の樋口一家　力丸町の樋口一家では、一月十四日まではおもちをつけない。それは戦争があった頃、樋口一家でもおもちを作ろうと、もち米をひやしたが、戦争でおいつめられてもちができなかった。それなのでそのもち米を使って赤飯を作ったが、もち米はもちを作るわけだったのでたくさんひやしてあった。だから、できた赤飯はたくさんあり三日食べてもあまるくらいあった。そして戦争がおわって、十四日に初めて、もちをつけるようになった。そんなことがあってから今でも昔のしきたりを守っている。（力丸）

駒形町　明治三年に、駒形新田を、駒形町とよぶようにした。（駒形）

泥湯　むかし、お諏訪ケ渕の上、韮川のところ、今のぽっくり観音のところに、どろ湯があったという。（駒形）

猫　猫は年をとると、踊りおどるという。（女屋）

まじない　大工さんがグシに男と女の陰部を書いた。棟木にはっておくと、その家は富むという。（力丸）

小島田と女屋の子供のけんか　小島田と女屋の子供たちは、四月八日に万福寺へ甘茶飲みに行って、そこで出会ってけんかをした。また、何人かのものが集団で出会ったときも、いつとはかまわずにけんかをした。
そのとき、おたがいに悪口をいいあった。
女屋の子供が小島田の子供に対していった言葉は、
「小島田乞食（こじき）、田圃のこやし」
というのであった。
女屋の連中は、東川まで出ていった。
小島田の子供たちは、一本杉まできた。
そこで、砂を投げたり、小石を投げたりしてけんかをした。
悪口をいいあった。
むかしは、竹を割って、それに石をはさんで投げたという。こうすると、石が遠くまでとんだ。
うんとむかしの人は、石投げもっこというのをこしらえて投げたこともあったという。（女屋）

日本の国のこと　むかしの人のいうことに、日本の国は海の中にあ

る。
なべっぶたのように海の中に浮いている。どっちへ行ってもまわり中が海。
ナマズが、なべの下にいて、あばれると地震がおこるといった。（女屋）

ハチの巣　ハチが低いところへ巣をつくると、その年は大水がでないという。
高いところに巣をつくると、大水がでるという。
ハチの巣の様子で、人間は嵐をさとった。（女屋）

前橋様の弓の材料　下長磯の川島せいさんのうちの竹は、前橋様の弓の材料になったという。（女屋）

マルビ　一月十四日の晩、八合くらいのご飯をたいて、神の鉢にそれを全部もりつけて、ヤナギのはしを二本さして正月棚にあげる。
これをマルビという。
二、三日そのままにあげておいて、さげた。（東上野）

もしきのこと　むかしは、嫁にくれる、婿にくれると縁談ごとのときには、うちのまわりをまわってみて、もしきがたくさんあると、あのうちは、とくせいだといった。（天川大島）

婿選び　むかし、ある大尽のうちで、娘の婿を選ぶことになった。
そのために難題をだした。
わら一把を庭に置いて、これを十六把に勘定しろというのである。
それで、一人の男がきた。
「門を入ればにわ（庭）ござる。
むこに入るには、くわ（苦は＝鍬）でござる。
あなたの顔にしわござる。
庭の一把で十六把」
これで合格したという。（女屋）

厄年餅　うちでは、厄年餅は一月二十八日についた。年とり前につくものという。
女は十九、三十三、男は二十五、四十二の厄年のときについた。
餅をついて、親戚にくばっただけで、うちでは、門松をたてなかった。（笂井）

竜宮様のはなし　むかし、今の宮子の竜宮のところに、岩が流れてきたという。
そのころのこと、運送をひいてきた人があった。
途中できれいな女の人に出会った。
「車に乗せてくれ」
といった。
運送ひきの人が、その娘さんをつれて、今の竜宮のところまできた。
そしたら、その娘さんがいなくなった。
それから、あそこに竜宮ができたという。（東上野）

笑い話　玉村宿の女郎屋で遊んで、朝暗いうちからその分桑原うないを一生懸命やったら、いつもに比べて力がいる。
明るくなって見たら、てんがの先の金がとれていた。（亀里寺家）

お上人さま　お宮の上にのって小便したら、落ちてびっこになった人がいる。（下長磯）

十日夜　旧暦十一月十日が十日夜だが、ここの神社は稲荷神社で、イナリさまが、けんかして犬にかみころされたというので、九日におまつりする。
村では犬を飼っていいことはないといわれていた。（下長磯）

石神井　薬新の近くにある（井戸）で、弘法大師が来て、出してくれたという。

なた切薬師も、弘法大師がナタで削って作った薬師という。（小屋原）

天明三年ころの相子　昼間ローソクでくらした。（新掘）

いたずら　外でフロに入っていると、かついで動かしてしまうことがある。（朝倉）

水鏡のはなし　むかし、ある人が、酒をつくってかめに入れておいた。

ある日のこと、おかみさんに、酒をくんで来いといった。

おかみさんが、酒をくもうとしてかめをのぞいてみたら、自分の顔がうつったのを、他の女がいると思った。

それで、おかみさんがやきもちをやいておこった。

そしたら、旦那さんは、

「そんなわけらない」

といった。

自分でかめをのぞいてみた。

自分の顔がうつっているとは知らないで、女房は男をかくしているとおこった。

そしたらそこへ坊さんがきた。

二人の話を聞いて、これは、水鏡というもんだと、教えたという。（女屋）

長いはなし　天上から古いふんどしがさがってきて、いくらたぐってもたぐりきれねえ。（女屋）

血脈を盗め　ある日、地獄のえんまさまが、鬼どもをあつめて会議を開いた。

「近頃、みんな極楽へ行ってしまって、地獄へ来るものがいない。それでは困る。どうしたらいいか」

「あれは、善光寺の血脈のご縁による、悪が消滅してしまうのだ」

と鬼がいった。

「それでは、その血脈をなんとかして盗みだせ」

とえんまさまがいった。

「誰がよかんべ」

それで、むかしからの泥坊の名があげられた。

古い悪人をだそうということになった。

「石川五右衛門がよかんべ」

ということになった。

五右衛門はそのはなしを聞いて、よろこんで血脈を盗みに善光寺へ行ったと。

五右衛門は善光寺から血脈をうまく盗みだした。

「これがあればおれの役目もすんだ」

と、そういって、その血脈を

「ありがたい」

といただいたんだと。

そしたら、五右衛門はがらり地獄へ帰れなくって、極楽へ行ってしまった。

そのために、石川五右衛門は、今は極楽にいるという。

これには、えんまさまも処置なしということだ。（女屋）

旅人の報恩　むかし、あるところに、まずしい家があったと。

あるとき、旅の人がきて、

「宿をかしてもらいたい」

といった。

「こんなにぼろやだけど、よかったら休んでください」

といったら、その旅の人は、

「結構ですから休ませてください」

といって、そこのうちへ泊ることにしたって。
おばあさんが、かぎ竹に鍋をかけて、おかゆを煮てやった。
その旅人は、おかゆを食べて休んだ。
翌朝、お礼をいって出て行ったと。
そしたら、そのうちは、だんだんとくらしがよくなったという。

にわか大尽のはなし　むかし、あるうちで、ごぜさんを泊めて、親切にしてやった。そしたら、そのごぜさんがお礼におかねをおいていった。
そのうちは、そのおかねで大尽になったという。（駒形）

貧乏神の話　ある人が馬にのって自分の家に帰る途中山伏が歩いているのに会いのせてやった。
のせた山伏がいうには、自分は実は貧乏神で、これからこの先の家にいってとりつくのだという。きたなくしている家なのでとりつくのだともいった。
その家というのが、馬にのせた人で、内心びっくりしたが、なにくわぬ顔で、山伏に、急に用事を思い出したといって山伏を馬からおろし、大いそぎで家に帰ると、家中のものに言いつけて、大あわてでそうじをして、みちがえるようにきれいにした。
しばらくして山伏がその家に来て中をのぞいたが、きれいになっているので、家をまちがえたと思って、外へ行ってしまった。（亀里）

抜け作　むかし、ある男が嫁さんをもらった。
近所の人がよばれていった。
おっかあもらってやったかやといった。
そしたら、その男、
「おっかあがいやだといったからよした」
といった。（野中）

ネズミ浄土　おじいさんが、仏様にあげただんごを持って畑へ行ったって。
だんごを食べようとしたら、穴があって、そこへみんな入ってしまった。
おじいさんが穴の中へ入ってみた。
そしたら、博奕をしている者がいた。
おじいさんが、鳥のなき声をだしたら、
「夜があけた」
といって逃げた。
あとにおかねがおいてあった。
おじいさんは、そのおかねを持ってうちへ帰ってきたって。（上大島）

左甚五郎のはなし　左甚五郎が修業中のときのはなし。
家へ帰るとき、あるところを通ったところ、日が暮れて困った。農家に一夜の宿を貸してくれといったら、年寄が死んで、今夜は泊められないといった。
「どこでもいいから」
といって、泊めてもらった。
みると、死んだもんの上に刀がのっかっていた。
甚五郎がわけを聞いた。
「猫が死んだもんの上をとぶと、死んだもんが歩きだす」
という。それで、とばねえように、刀をのせておくという。
話を聞くと、化け猫がでるという。
竹やぶの中に親分がいて、穴から首だけ出して猫の踊りを見ているという。
「そんなにおもしれえことがあるんか」
と、うちの人につれて行ってくれといった。

それで、竹やぶへ行って見せてもらった。
その様子を書いといて、彫刻したのが日光東照宮の陽明門の猫のほりもんだという。
それで、日光には、ネズミがいねえんだという。
左甚五郎があるとき、宿屋に泊った。
ところが、宿賃がない。
甚五郎は、竹やぶへ行って竹を切ってきて、竹で、桜の木をつくった。だんだん開いて、桜の花が咲いたという。また、竹でつくった鳥が鳴いたという。（笂井）

まま母のはなし　むかし、あるところに継母がいた。
あるとき、自分の子は米の中に、ままっ子は糠の中に入れた。
米は食えるから大丈夫だろう。糠は食えないから、ままっ子は死んでしまうだろうと考えた。
そしたら、自分の子は米の中で冷えて死んでしまった。ままっ子は糠があったかくって生きていたという。
継母は、その後反省したという。（天川大島）

秀郷のムカデ退治　むかし、大蛇が子を産むと、その子をムカデに食われてしまう。それで、そのムカデを退治してくださいと、秀郷にたのんだ。
秀郷が弓で射るがだめ、矢がとおらない。
ムカデは、つばきが毒だという。つばきを矢の先につけて射たら、ムカデを退治することができたという。（女屋）

いろんな話　広瀬町一丁目周辺は、かつては雑木林と松林であり、これを桑畑にかえたが、それでも、狐や狸が棲んでいた。特に旦那坂や新坂の付近は、日中男でも心許ない状態であり、おいはぎが出たという。
飯玉神社周辺は元屋敷といわれ、後閑の中心であるという。
口の悪いのと道の悪いのが後閑であるという。
古くエボリと呼ばれる環濠屋敷があったという。（広瀬町一丁目）
昭和三十五年は戸数五十六軒で、山王・東善・中内で瓦屋根の無い所は中内だけだった。これは全てが農家であったことを物語る。中内は旧上陽村であり、佐渡・伊勢崎・玉村地区の交易圏にあった。（中内）
井戸水は丈三の深さを必要とした。
現木工団地は松林だった。昔は軍馬用の鍛練場だった。（野中）
正月二十日に田植の日取りを決めた。遅くとも六月二十八日には終るようにした。（野中）
野中の四塚と呼ばれる塚（古墳）が、国道50号上に二つ、昔の学校道の脇で国道下に一つ、マツセーの北側に一つあった。（野中）
明治二十一年に八幡十六軒が焼ける大火があった。
大正八、九年に、野中に三年不魔があったと伝えられ、大正八年には感冒で八人が死に、大正九年九月四日にはつむじ（竜巻）で一人亡くなった。
昭和初めも凶作があった。（野中）
一本杉に目の神社があり、石宮がある。
字十三仏にイボ薬師があり、イボの木が生えている。
源太島の字名は、源太とお島の話から由来する。
念仏橋のたもとに、寒念仏供養塔がある。（野中）

いろんな話　円満寺には安政五年の銘のある十三夜塔がある。
（広瀬町一丁目）
旭地蔵や聖天様がある。（下長磯）
笂井の笠薬師は目の神様である。（下長磯）
下長磯の塾は近隣の知識階級の母体となった。（下長磯）

ヘッツイは冬至に作る。「見るも聞くもない」と言いながら、押し切りでワラを切って粘土に混ぜた。（中内）

下長磯の川島亥之吉さんの米は一等の甲で、前橋税務所管内で唯一であった。昔は最高の米は前橋藩の陣馬米となった。

新高尾（高崎）・長磯・朝倉は優良米の産地である。（下長磯）

一月十三日は御年始日で、片貝と兄弟村（田植の水を貰う都合上）だったので片貝へも挨拶に行った。（野中）

大演習の直後、内田兵弥さんという菊作りの名人がいた。今は岡田さんを中心に老人会がその伝統を継ぎ、菊作り、朝彦作りをしている。（中内）

冬場はわら仕事が中心で、サツクツマリ・ワラタタキ・ワラマワシ等の道具を使い平均一日七～八枚の俵を編んだ。俵一枚にコデナワが九ヒロ必要となるため、ナワ作りには大変な時日を要した。そのため朝は四時から夜八時頃までワラ仕事に追われた。（中内）

後閑山を中心に松根油採りが行なわれ、これが開墾の始まりとなった。（広瀬町一丁目）

伊勢崎の業者と提携して賃機を織っていた。一疋は二反であり、早く織り上げるのを競い合った。男衆（おとし）の日当よりも高収入となった。（広瀬町一丁目）

日下部様がいたので日下部橋という。（下長磯）

五合田ンボや地獄タンボと呼ばれる地名がある。（下長磯）

永明小の南に船戸（渡とも止とも）の松といわれる所があり、昔は山だった。そこから骨と刀が出た。（下長磯）

おとうかの嫁取りが、片貝神社・猫が踊ったといわれる猫田で見られた。

墓地の隣りにおとうか山と呼ばれる捨て場があり、中国の金が出た。（野中）

清水川に巡礼橋という橋がある。昔巡礼が盗人に切られ、土橋を石橋にしてくれと頼まれて石橋とした。その橋のたもとに巡礼様という石の塔があった。現在は不明である。（下長磯）

篠で編んだフミゴザでウドンをこねた。（中内）

権現沼　稲荷神社の前の方にあった。

三日月型をしていた沼で、深かった。（小屋原）

嫁御呼び　嫁にきたとか、きょうだいとき近い親戚のうちで呼んでくれた。そういううちへ一見に行った。

これは、式のあと、一カ月くらいたってから行くこともあったし、つぐ年の正月に、ご年始がてらに行くこともあった。

おじさん、おばさんのうち、母親の実家などへ行った。ご馳走してもらってきた。

一見に行くうちは、何軒でもなかった。

嫁御呼びというのは、近所の人（組合の人）が呼んでくれること。

これは、日どりはとくにきまってきなかった。

嫁にきて、一月か二月くらいたってから呼んでくれた。

このときは、折箱など、なにか手土産をもって行った。

呼ばれて行くときには、とつぎ先の親がつれて行ってくれた。嫁婿そろって呼ばれて行った。

赤飯とかうどんとか、ご馳走してくれた。

このときは、まるまげに結って、訪問着（江戸褄）を着て行った。

呼んでくれたのは、うしろんち、となりんち、しんたくんち、周雄さんち、和三郎さんち。（笂井）

馬入れ　田に入る道路のこと、入り口。（小屋原）

本船川　本船川のことは、なかっぽりといった。（笂井）

高砂という地名　桃井のむこう、砂がもちあげられた所。（駒形）

長谷戸のこと　長谷戸（ちょうがいと）のことは、むかしははせとといった。（小屋原）

弥勒　荒砥川の西にある地名、上増田地内。（上増田）

巡礼橋　むかし、巡礼がまわってきたとき、殺されておかねをとられたという。そこにつくられた橋が巡礼橋だという。

こなべだて　自分一人だけで、ご馳走して食べること。こなべだてといった。

つめりっことか、ねじっことき をつくって食べた。

世間の人に、「あの人は、こなべだてが好きだ」といわれた。（笂井）

七夕のこと　七夕のときは、里芋の葉にたまった露ですみをすって、短冊に書く。

この日、七夕様がメズラ畑で織姫様とあいびきをするので、七夕の日には、メズラ畑へ入るなという。

メズラは、早くとっておけといった。

七日日には川の行って水浴びをした。ふだん、川へ水浴びに行ったとき、カッパにひかれないようにと、この日水浴びをした。

実家にいたとき、新井の水車の堰のところにカッパがいるといった。

七日日には、女の人は髪を洗った。

七夕の日には、むかしはゆでまんじゅう、後にふかしまんじゅうをつくって祝った。

七夕のときには、新竹で飾りをつくった。

八日に、自分のうちの苗間のところへこのかざり竹をたてた。虫除けのためという。

また、新しい着物をつくったときは、七夕様にあげることもあった。七夕の日の朝飯前に、墓掃除をした。（上大島）

中沢家の家例　大晦日の晩にご飯。

火を消さないように、太い薪をくべてたく。その火に灰をかけておき、元旦にその火をつけて正月の炊きことをする。

三が日はぞうに。夜はご飯。（下長磯）

ホカケ　新米がとれると、嫁は新米を持って里へお客に行った。

里の親に新米を食べさせるわけ。

三升くらい持って行った。

十二月になってからのことで、里の親に新米を炊いて食べさせるものという。

これをホカケといった。（野中）

十三夜　かやを十三本か三本かざった。供えるものは、おてまる十三個、秋の野菜・果物十三個（さつま、さと芋など）だった。（上朝倉）

おエビス講　座敷に台をつくって、おエビスさまのお宮をおろし、赤飯・寿司（まきあげる）・あぶらげずし（俵のかわり）・ケンチン汁・昆布巻・みかん（運がつく）・頭つき・浪の花・柿（身上をかきあげる）

などをあげた。さげたものは子供に食べさせると縁遠くなるといって大人が食べた。

財布をあげて「倍にしてくれ」とお願いした。（亀里　寺家）

弁天沼　神社の西南のところに、むかし弁天沼があった。沼の中に島があって、弁天様をまつっていた。

これを、青年会の者がもってかついで埋めた。マクモが生えていた。やちだった。庭の土をはこんでうめた。

そこを田圃にして、青年会で耕作した。

町内の共有地であった。青年がつくって小作米をだした。米二俵、それを夜警のときの費用にあてた。（上大島）

たこあげ大会　女屋ではたこあげ大会をした。これは大人がやったこと。場所は薬師の田圃、昭和十年頃、うなるたこをあげた。

近在の人も、たこをもってきてあげた。

女屋ではたこあげ大会を何回もやった。（三回ほど）

たこあげがはやると、景気が悪くなるといった。（女屋）

ひとえもん　ひとえもんのことは、むかしの人は、モノシといった。

（女屋）

すすはき　春と秋の二回、すすはきをした。

このとき、近所の人がお茶をもってきてくれた。お茶がしも用意してきてくれた。

すすはきをしているうちでは、お茶の用意ができないというので、お茶の用意をしてくれたのである。

そのうちで、すすはきをするときには、今度はこちらからお茶をもっていってやることになっている。

ええがえしということである。（櫛島）

あげ念仏　人がなくなって、四十九日には、あげ念仏をした。

（天川大島）

小屋原の井野家　小屋原の井野家は三つの系統に分れている。源三家の本家は、喜貢さんのところ。（小屋原）

三つのおまつり　四月十五日に、ぼんでんあげ、天道念仏、獅子まわしの三つの行事を一度にやってしまう。

これを、上・中・下の二つの組で分担してやっている。

三つとも昼間の行事。（東上野）

お宮まいり　元日の朝、公民館に集まって日枝神社へおまいりに行った。（西善）

方言いろいろ

ササラホウサラ…ちらかっていること、めちゃくちゃなこと。

サマジイ…すごい

ヌカ…もみがらのこと。これを、やきぬかにして、かいこのときにつかった。（笂井）

小屋講　今はやめているが、全部で三十軒ほどで小屋講というのをやっていた。

十二月二十日にやっていた。夜の行事。

宿は交代。

三輪大明神の掛軸をかけておまつりをした。

農家の人はもち米を出し、非農家の人はおかねを出した。

あつまるのは、男でも女でもよいし、一戸一人ずつ参加した。

小屋高男さんの屋敷に三輪様がまつられている。もと、小屋家の氏神様の地所を買ったうちの屋敷にまつられている。

三輪様と稲荷様は同等としておまつりしている。

笂井の近戸神社は、小屋家の御鏡が納めてある。

笂井小学校の奉安殿は、三輪神社の中宮であった。（笂井）

シラガ大夫　シラガ大夫のマユは、綱みたいで穴があいていて使えない。幼虫のうちに、ズが出ていると酢の中に入れてひっぱり出した。

テグスに使った。（亀里）

ニワアガリ　稲こきが終ると、もみを庭に干した。

それがかたづくと、嫁はニワアガリといって里へお客に行った。お土産として、餅かぼたもちをつくってもっていった。（上佐鳥）

七親世音縁日について　前橋市亀里町字矢島地区に古来より伝わる、七観世音の春の縁日が二月十七日地区住民を始め、近郷からの参詣者を得て賑やかに行われました。

七観世音とは、聖観世音・千手観世音・馬頭観世音・十一面観世音・

不空羂策観世音・如意輪観世音・子安観世音の七躰の観世音様が安置され、地区住民は七観音と称して親しんでいる。

縁日当日は、地区住民から選出された七観音の世話人によって、観音堂の鍵が開けられ、堂内の清掃が終わると、一躰一躰観音様のお厨子が開帳される。観音堂への参道には地区住民によって、赤地に白抜きで、「七観世音」の地区住民から寄付して頂いた幟旗が建てられる。

午前九時三十分より極楽寺住職によって、観音経の読誦と七観世音菩薩のお札、安産のための腹帯の加持が行われる。このころより地区住民はもとより近郷より参詣がある。特に安産祈願かけによって、無事出産された方は大願成就の旗をもってお礼参りに来られる。また、妊娠された方は腹帯を頂きに来る。家内安全、諸難消除、息災延命等それぞれ心願をもってお参りに来て下さる。

参詣がすむと、地区婦人会の方々から、おいしい甘酒の接待を受ける。その甘酒を頂きながら、子供のこと、孫のこと、家のこと、農作物のこと世間話に話が弾む。今も昔も信仰を通じて人と人の和合は変わらない。

この七観世音の縁日は、観音様の信仰を通じて、地区住民の結束を益々深め、この地に生きる喜びを知ることである。（亀里矢島）

渡し……45, 124
わらじ……72
ワラ仕事 ……112
わらたたき ……103
わらでっぽう ……410
椀 ……474

や

ヤカガシ……131
ヤキカガシ……394
やぎの乳……77
焼場……46
焼場の金……355
八木節……254
やきもち……6, 80, 81, 84, 85
厄おとし……212, 223
やくざ……504, 589
薬師様……19, 136, 140
薬師堂……582
厄神送り……395
疫神の宿……143
厄神の宿……413
薬草取り……408
厄年……25
厄年餅……26, 385, 393, 588, 591
厄除け……313, 315
厄除地蔵尊……139
厄除け大師……278
やけど……208
ヤケボコリ……51
八坂用水……584
屋敷稲荷……9, 414
屋敷神……18, 89, 127
屋敷どり……88
やしき濠……7
屋敷祭り……415
矢島……41
矢島の観音……139
休みあがり……588
矢田……43
屋台……229
弥太夫堀……491
八ツ穴……527, 543
厄介田……46
柳……220
屋根替……90
屋根職……56
やぶさめ……244
山入り……376
やまど……224
山の神……473
山の組合……56
山のつくりっこ……462
山はじめ……376
山開き……376
やままゆ……111
やんめ……208

ゆ

結納……324
郵便局……276
湯瀧……352
ユズの初なり……529
油田……43
指遊び……252
ユミアケ……27, 364, 367
油免……587

よ

夜あそび……58, 267, 318, 530
八日市……125, 499
養蚕……15, 109
養蚕祈願……112, 163
用水……100
幼稚園……277
よかよかあめや……126
ヨギ……74
横沢重五郎……512
横手の渡……124
ヨコのあてっつぎ……449
義経の東下り……500
吉原堰の大蛇……479
よそいぎ……68
よたろう……503
予兆……213
夜泣き……314
夜泣き地蔵……522
夜なべ仕事……103
ヨノ……74
よばい……58
よびけえす……350
嫁……60
嫁入り行列……329
嫁入り道具……74
嫁送り……329
よめご……223
よめごさん……218
嫁御呼び……347, 595
嫁とり……327
嫁のお客……347
嫁の里帰り……346
嫁の道具送り……332
嫁の入家……330
嫁迎え……327
よもぎ……399
寄り合い……50
頼朝公……271

ら

雷電様……154
落雷……154
ランプ……91

り

力丸……41
力丸城……585
力丸堰用水……100
力丸橋……123
離婚……348
竜宮……500, 591
竜宮の椀貸……495
流産……301
竜柱……90, 223
龍門……43
竜門五苗……41
リョウ……54
良寛さん……506
両毛線……121, 513
料理番……341
臨月……291

れ

恋愛結婚……348
蓮花院……278
連作……96

ろ

浪曲語り……263
六三除け……209, 211
六地蔵のローソク……288
六部……546
六文棒……37, 278, 498

わ

わかし湯……46
若水……374
若宮八幡宮……134
若者組……57
和讃……260

仏様のお守り ……462
仏様のご飯 ……206
仏のたたり ……210, 549
仏の日 ……383
ホトトギス ……218, 580
ホマチ……47
堀……88
堀の水かえ ……112
堀払い……52
盆市 ……125
盆唄 ……256
盆おくり ……406
盆おどり ……474
盆行事……28
本郷……43
本膳 ……341
盆棚 ……406
盆中の死者 ……360
ぼんでんあげ ……402
盆のお茶 ……206
盆の野まわり ……407
盆迎え ……405

ま

まいだまかざり ……378
枕団子 ……351
枕めし ……224
まじない ……210, 211
増田 ……276
増田学校 ……277
増田が渕 ……584
マダリンさま ……143
待ちあみ ……112
待ち女房 ……331
松 ……415
松飾り ……416
まつごく……47
松並木……45, 527
松葉刈り ……105
まつり ……228
祭り用の股引 ……115
間取り……90
間引き ……301
まま母 ……594
豆 ……394
豆ぼうち ……536
豆まき ……394
まゆ玉 ……380, 396
摩利支天……19, 142, 277
まりつきうた ……253, 252
マルビ……28, 378, 380, 591
マワリブチ ……574
マンガ ……105
まんがおし ……223
まんから ……506
万才池 ……584
まんじゅう ……6, 78, 81
まんじゅうの味 ……533
万年機 ……466

み

箕 ……403
見合い ……321
見返り稲荷 ……144
三日月さま……77
御荷鉾の三束雨……13, 215
三河万歳 ……263, 265
見切塚 ……586
水あび……63
水鏡 ……593
水掛け着物 ……366
水酒 ……529
水番 ……101
みそかそば ……418
道しるべ ……124
ミツボトケ……43
みつまん ……506
三峰講 ……155
三峰様 ……207
ミノ……74
箕薬師 ……137
耳かくし……74
ミミズ ……219
耳ふさぎ ……211
宮子の白蛇 ……530
ミョウガ ……578
弥勒様……44
三輪様 ……153
三輪箭次 ……503
三輪大明神 ……144

む

六日年……28, 376
無縁仏 ……165
むかしの嫁 ……530
むかしの嫁さん ……537
昔話 ……442
ムカデ退治 ……594
ムカデの使い ……480
麦打唄 ……246
麦作……13
麦ふみ……13
麦飯……84
婿選び ……591
むこのあいさつまわり ……330
婿のご年始 ……347
無言競争 ……476
むじな ……544
虫封じ ……314
娘をもらいたい ……211
村廻り ……342
村役……49
むりどん ……487

め

命名 ……303
めかい ……395, 403
めけえ ……208
飯が仕事をする ……518

も

もぐらでっぽう ……410
モグラとミミズ ……479
もしき ……591
モズ ……218
もち……6, 78
餅 ……81, 85, 205
モチグサ……81
物をさがす ……212
物ぐさ ……506
モノシ……73
ものはづけ ……537
モノビ ……222
喪服……67
木綿……67
桃太郎 ……442
桃木川……45
桃木川の大蛇 ……528
モヤイ身上 ……348
モライ一見 ……328, 334
モライ方 ……325
モリッコオビ ……312
もろこしもち……83
モンペ……70

はれもの ……210
番神山 ……512
半夏さん ……588
半夏田植 ……107
ハンゲッパ ……220
半夏の日 ……203
半鍾……56
バンゾウ ……532
半天 ……114
番頭……53, 103, 517
はんどり ……223
半日遊び日 ……518
はんねん橋 ……123
半バック……74
パン屋 ……126

ひ

ヒイラギ ……395
日枝神社 ……233
東前橋駅 ……121
彼岸 ……396, 408
引き出もの ……342
ひきわり飯……5, 76
ビクエダイ ……524
樋口……42
比丘尼さま ……273
ビクニダイ……43, 472
飛行機 ……516
樋越……43
ビションマイ ……111
ひだりい田 ……499
左甚五郎 ……593
ヒツケエシナノカ ……363
ひとえ……73
人がみたらカエルになれ …487
人魂 ……523
ひとつきにいっぺん ……487
初七日 ……363
日取り ……323
避妊 ……301
ヒノウエ ……223, 360
丙午 ……224, 533
樋の滝 ……493
火の玉 ……350, 547
火柱 ……525
ヒバリ ……218
避病院……46
百円札 ……535
百社まいり ……165
百体観音 ……139
百日かつら ……581
百万遍……20, 158
日傭……53
雹 ……215
雹害 ……105
標準服 ……115
ひるばした……85
ひるばて ……36, 84
拾い親 ……308
拾い物分配 ……478
披露宴 ……338
広瀬川 ……274
貧乏神 ……593

ふ

深沢……42
ふかしまんじゅう……80
深町……41
福島橋 ……123
副食……76
不幸の時の膳……87
不幸見舞……51
藤岡街道 ……276
藤川 ……584
富士山 ……144
ふだんぎ ……4
フダンギ……67
ふだん着……68
普段着……69
仏壇 ……9
不動様 ……137, 582, 583
不動信仰……19
不動尊祭り ……385
ぶどうっこ ……298
フナト……44
船渡の松 ……124, 493, 586
舟橋 ……123
ふりこのよめご ……331
振り米 ……579
古川 ……584
古鉄瓶 ……577
古利根 ……491
フレ正月……62
フロオケ……91
ふろしき……76
文明開化 ……513

へ

米寿 ……316
兵隊ごっこ ……267
兵隊のがれ……62, 529
臍の緒 ……297
ヘッツイ ……9
屁の失敗 ……526
ヘビ ……219
ヘビイチゴ ……220
ヘビの神様 ……127
へびよけ ……550
ヘヤ ……293
弁才天 ……142
便所 ……212
便所まいり ……303
弁天沼 ……584, 596
弁当 ……77, 88

ほ

棒打ち ……108
棒打唄 ……246
防寒具……71
ほうき……91
ほうき星 ……516
宝篋印塔 ……273
方言 ……561
奉公人……53
豊蚕信仰……21
ホウシャク ……219
ほうしゃくの杉 ……524
宝乗寺 ……137
ホウジロ ……217
坊主頭……74
ホーソー ……314
ほうそう送り ……208
ボウチ唄……14
防風林 ……9
ホガケ……94
ホカケ ……596
ボク ……366
牧草 ……104
星祭 ……166
細野天神 ……133
ぼたもち……6, 81
ボタモチ地蔵 ……139
ぽっくり観音 ……139, 273
ポックリ観音 ……350
仏様のお茶 ……522

ナメクジ……219
成り木責め……211
ナレアイ……320
なわ……579
なわない……103
ナンド……8, 293
なんぷう……36
ナンミョウサマ……166

に

新潟の女……278
仁王様……464
西川……44
二十三夜様……150
二十二夜様……150
二反の白……525
日蝕……217
新田用水……100
二百十日……408
にぼうとう……6, 79, 81, 85
二毛作……14
二夜様……151
二夜待……22
入家式……339
女体様……287
女体神社……133
庭……9
ニワアガリ……12, 101, 597
にわか大尽……593
庭銭……26, 355, 359
ニワトコ……220, 379
にわとり小屋……88
妊娠……287

ぬ

抜け作……593
櫛島……38

ね

ネコ……219, 545
ネコの分……581
猫見塚……525
ねじっこ……80, 83, 86
ねじりずんぼう……70
ネズミ……218
ネズミ浄土……593
ネズミの分……581
ネズミの嫁入り……479
ネックイ……269
熱さまし……208
寝間着……74
年忌……367
年始まわり……374
年中行事……419
年番……48
念仏……257
念仏供養……365
念仏玉……351
念仏橋……123, 589
念仏申し……51
燃料……91

の

のいんぼう……576
納棺……353
農作業……96
ノウヂカラ……10, 581
のうぢから……107
農休み……17, 102, 105, 399, 407
軒下……164
のきだれ……207, 579
後産……296
のっつけがみさん……530
のっぺらぼう……550
のてっくれ……576
野中の一本杉……524
野中の大水……516
野中の太鼓……58
野辺の送り……357
のみの夫婦……488
ノラギ……67
乗り合い馬車……45

は

灰よせ畑……46
ハエ……219
羽織……67
墓……361
ばかっぱなし……526
墓場の年始日……28
墓ほり……51
墓参り……205, 384
馬鹿婿……482
はきたて祝い……16
履物……72
はぐさっ競馬……40
馬具塚……586
バクロウ……45
端気川……112, 125, 584
はけた……587
箱膳……88
はし……78
橋……122
ハシカ……209
馬車……125
はせ五郎兵衛……501
機織り……75, 103, 112
はたがみ祝い……397
畑……95
八十八夜……399
ハチの巣……591
八幡様……144, 582
八幡まつり……230
八幡山古墳……585
初卯……385
初午……135, 396
八海山……155
二十日灸……385
二十日正月……384
八朔……403, 408
初節句……306
初田植……12
八丁じめ……47, 400
初なり……165, 211
八百八塚……44
初穂……12, 165
初詣……375
初湯……373
初嫁のご年始……375
馬頭観音……139
ハナ……379
花が咲く……581
はなくさ餅……398
花咲爺……443
話の経路……553
花まつり……397
早口言葉……554
はやす……35, 574
腹帯……289
針供養……413
ハリツケ田……44
春駒……263
榛名講……157
春まつり……398
はれぎ……4

つ

通婚圏 ……326
塚……44
ツゲ ……353
漬け物……77
つじゅうだんご……83
つじゅうねじ……83
土……96
土遊び ……269
土の橋 ……271
つつたけ……76
つなはり ……106
常さん鋤 ……527, 536, 577
つねっき……68
角田……42
ツバキハッケ ……210
ツバメ ……220
ツバメの土産 ……480
つぶどんの歌 ……252
つぼ庭……89
爪切り ……205
通夜 ……351
鶴の恩返し ……444

て

デエ ……7
出かせぎ……56
デカワリ……53, 393
でがわり相撲……58
出来秋……77
できもん ……208
適齢期 ……320
でっかいこと ……579
手伝い ……105
てびねっくせえ……36
手毬歌 ……278, 440
寺へのご年始 ……374
天下……61
てんが ……206, 590
電気……91, 514, 536
天気雨 ……214
天気まつり ……214
天狗 ……552
天狗松 ……492, 524
天竺浪人 ……165
天神講 ……152
天神様……21, 134, 142, 582
電灯……62
天道念仏 …20, 28, 159, 256, 408
天王様 ……146, 400
天王信仰……20
天王まつり ……401
でんぼう ……505
でんぼう馬喰 ……531
でんぼうばなし ……476
天明の泥押し ……512
天明の噴火 ……512

と

十日夜 ……251, 410, 413, 592
十日夜の餅 ……588
どうぎ ……5
道玄橋 ……123
湯治……54
冬至 ……205, 216, 415
道祖神 ……275, 523
道祖神は兄妹夫婦 ……472
桃中軒雲右衛門 ……510
どうどう ……499
とうなす ……415
動物たちの食べ物 ……465
豆腐の病気 ……481
とうふ屋 ……126
とうもろこし ……536
灯篭 ……401
戸隠神社 ……155
とくせい ……575
どくだみ ……220
徳兵衛さんのかもとり ……458
とげぬき ……208
床上げ ……305
床入れ ……341
床の間 ……8
年祝い ……316
としとくじん ……418
としとり ……394
年まわり ……223
土葬 ……360
土地広げ……63
とつきとうば ……209
どっこいしょ ……483
利根川 ……490
とびあがり ……216, 217
飛地……39
扉天神 ……134, 143, 583
トマト ……579
トモコヨビ……25, 329
富山の薬売り ……126
土用 ……589
土用のみつめ ……401
土用餅 ……407
トリアゲバアサン ……295
取り結び ……337
トロッペシ ……575
とろめし……83
とろろ ……208
どんどこじい ……507
ドンドンヤキ ……380
呑竜様 ……312
呑竜坊主 ……313

な

菜 ……205
苗代祝い……11, 108
長生き ……224
ナカザシキ……90
ながし ……9
長っぱなし ……553
ナカヤ熊五郎 ……586
流れ潅頂 ……302
投げ餅……94
仲人 ……321
仲人へのお礼 ……348
仲人まわり ……326
梨 ……108
梨大尽 ……504
なぞ……34
なぞかけ ……557
屶刻薬師 ……140
なた切りやくし ……500
ナタネ油 ……126
なちにははなそげ ……576
夏下冬上 ……205
夏の虫 ……531
夏祭り ……136, 278
夏まつり ……401
七草 ……377
七草がゆ……79
七草の唄 ……253
七ツ坊主 ……312
ナナデンボウ ……321
浪花節 ……263, 266
なべかり ……375
なべ飯……84
涙橋 ……123

神社総代……50
シンショウマワシ……60
シンタク……60
新築祝……51
新米……12, 108
神明様……136
真楽寺……272

す

水車……112
炊事用具……87
水神様……142, 153
水田耕作……101
すいとん……79, 86, 536
水利……99
スートメ……52
杉の木……493
すすけだつ……76
すすはき……597
スズメとツバクラ……464
捨て場……577
須永……42
ずになる……111
ズボン……114
炭焼五郎兵衛……528
相撲大会……46, 229
スリバチ……355
諏訪神社……135

せ

清内橋……122
青年会……57, 317
青年団……56
性別の見分け……290
才文……260
関口栄吉……505
関口安太郎……504
石尊ごり……145
石尊様……144, 400
石尊信仰……19
赤飯……81, 86
堰普請……101
セチギモノ……67
節供……399
節句のもち……78
せっちん大工……586
セッチンまいり……304
節分……209, 394
節分の豆……211
善光寺……137
泉蔵寺……137
せんぞく橋……123
先祖まつり……60
洗たく……75
洗濯……205
千人針……528
せん風……516
千両祝い……62
ぜんわん貸し……277

そ

そうじ……205
葬式……349
葬式の赤飯……355
雑煮……473
壮年団……317
ぞうり……72
ゾウリキラシ……321
ソーレイ……349
葬列……358
外風呂……59
外湯……94

た

田……95
大火……512
代参講……20, 157
大蛇……551
大食……77
大尽……500, 509
大震災……62
大豆……394
大日寺……137
田植え……102, 106
田植唄……11, 246
田植を忌む日……12
田植えをして悪い日……203
田おこし……106
田川……43
タケナガ……74
竹の橋……277
竹橋……123
竹本国太夫……274
たこあげ……269, 597
山車……231
畳……92
タチビの餅……365
タツの日……203
たつみ……217
立て場……125
たとえ……553
七夕……216, 400, 596
種籾……10
種モミ……102
種屋……109
田野久……475
田の草とり……108
田の草取り……520
タノクロアズキ……108
足袋……71
タビガエリ……348
玉風……510
卵……77
魂呼び……350
田村屋敷……491
ためくみ……40
タライ……363
タロウジ……107
たろうじ……581
俵かつぎ……57
誕生祝い……310
ダンダゴロ……216, 580
旦那坂……124, 497
たんぼがた……575

ち

力くらべ……55
力米……299
チカラメシ……356
力餅……299, 365
力持ち……507
チギのはなし……579
血の雨……579
チバナレ……210
茶しぶ……529
ちゃぞっぺ……36, 80, 86
忠兵衛橋……123
中宿……329
チョイチョイギ……67
チョウズバ……89
徴兵のがれ……535
調味料……77
チョボクレ坊主……265
チン毛……302
鎮守……131

魚屋 ……126
下り松 ……586
作業着……69
さくたて ……377
ザクニ ……7
酒づくり ……270
サケの切り身……84
さげ穂……13
笹場の大火事 ……514
座敷 ……334
サツマ……76
さといも……76
里帰り ……307, 375
里米 ……299
サモト ……8
猿聟 ……445
ざれうた ……252
三角点 ……273, 578
サンゲサンゲ ……400
蚕種 ……109
三十五日 ……364
三十三年忌 ……368
さんじょさま ……216, 588
山賊の兄弟 ……459
産泰講……20
産泰様 ……154, 287
サンニチ ……205
三人組の女郎買い ……481
三人三助 ……503
山王 ……131
山王様 ……523
サンバ ……294
三宝荒神さま ……142
三本松 ……550
三枚のお札 ……454
三夜待……22, 150
三隣亡 ……222, 550, 580

し

仕事着……70
シキビの葉 ……352
じくぼ ……100
寺家 ……522
寺家柿 ……587
四郷堀……99
仕事はじめ ……375, 376
死後の対応 ……350
死産 ……301
獅子 ……147
しじま……68
ししまつり ……397
獅子まわし……21
死者の装束 ……353
死者への供物 ……351
四十九日 ……364
四十九の餅……27
地蔵……18, 127, 137
四体大明神 ……583
下着の種類……70
仕立て屋 ……113
自治会……48
自治会費……50
七か郷……39
七観世音 ……597
七観音 ……583
七五三 ……312
七兵衛ぎつね ……542
七薬師 ……140
七里が土手 ……491
地づき……89
しって ……105
自転車……46
自動車……46
信濃街道 ……122
死水 ……350
地主 ……103
じねえ……36, 210
死の知らせ ……350
死の予兆 ……349
しび布団……74
シメエ正月 ……385
注連縄 ……416
霜 ……215
下田……42
下増田の七不思議 ……550
霜道 ……105
霜除けの餅 ……215
霜除け餅 ……399
ジャガイモ……85
シャカのねはん ……396
シャクジサマ ……133
石神神社 ……133
蛇窪の大尽 ……475
しゃけ……83
写真 ……205
シャチもたまげたはなし …479
シャツ ……115
社日 ……224, 397
社日講 ……525
社日様 ……151
ジャンボン ……349
祝儀の膳……87
十五夜 ……407, 476
十三夜 ……407, 596
十二支 ……466
収入……96
十八日粥 ……384
周濠……92
十六日念仏 ……163
祝昌寺 ……137
主食……76
朱膳朱椀 ……535
出産 ……291
出産祝 ……307
授乳 ……298
巡礼橋 ……123, 525
しょうが ……403
正月飾り ……386
正月様 ……581
正月棚 ……130
正月の唄 ……252
正月のお棚 ……386
松竹梅 ……448
しょうぶ ……399
しょうぶ酒 ……588
消防小屋 ……275
消防団……50
城峰講 ……153
乗明院 ……491
浄瑠璃しばい ……246
食事……76
食制……87
食物……76
食糧……76
処刑場 ……585
処刑場あと ……586
処女会……57, 318
初潮 ……316
初七日 ……363
女郎屋 ……59, 63
シラガ太夫 ……597
白川……45
じりやき地蔵 ……138
ジローの一日 ……393
代掻き ……106
師走八日 ……414
じんぎ ……574
寝具……74
神社 ……582

くれのみょうじょう……217
クロ……108
桑……220
桑切り……111
くわだて……377
軍艦岩……39,585
くんち……409

け

稽古習い……241
芸人……263
競馬……269
ケエシ……96
けえっと……122
けえば……105
ケサカケッコ……298
ケサハハ……219,579
化粧品……75
化粧薬師……582
下水まわり……58
下駄うらない……210
ケッカイ……224,298
結婚式……327
ケデエ……74
下痢……208
けんか……206
源太島……490,525
検地……46
けんちん汁……82,530
けんとくをひく……36,555
げんのしょうこ……208
けんまく……575

こ

小石神社……155
ゴイロ……580
郷蔵……46
耕作土……96
荒神様……136,142
庚申様……21,581
庚申待……147
香辛料……78
香奠……359
香奠返し……359
引法井戸……467
弘法機……466
コウモリのはなし……479
膏薬……126
御詠歌……260
子を産む時期……465
コオロギ……219
蚕影様……164
子狐……276
虚空蔵様……19,141
虚空蔵大根……112
石取りさま……503
ごくみ……47
後家の親子……527
五穀……84,95
護国神社……132
コザ……8
小作……53,103
子授け祈願……287
子授けの米……208
乞食……532,576
乞食の知恵……532
こじくりん……576
こじっこめ……417
ごし沼……490
小島田の二本杉……499
ごしもち……93
ご祝儀……67,327
五十号線……122
古城跡……586
小正月……378
コジョウハン……78
御神体……583
牛頭天王……147,271
ごぜさん……263,265,482
子育て地蔵……270,287
子宝米……213
ご馳走……86
琴平神社……272
子供組……317
子供の神様……165
子供のきもの……70
子供のぐず……580
子供のけんか……63
子供の墓……361
子供のやけど……208
コト八日……28,395,413
ことわざ……33,553
こなべだて……596
ご年始……56,62,347
御年始日……386
ご年始まいり……374
子墓……26
小旗始め……398
ご飯……82
古墳……44
五平馬……530
五平原……498
駒形……37,513
駒形駅……121,272,512
駒形会議所……276
駒形小……275
駒形神社……270
駒形長寿観音……139
駒形茂兵衛……271,511
古峰ケ原様……154
小麦ほし……108
米だけのごはん……77
米の検査官……108
米の飯……83
子守り……311
子守歌……253,311
小屋……500
小屋講……597
こやし切り……104
小屋原……499
小屋原の火事……514
五輪田……586
五郎右衛門堰……584
五郎右エ門堀……45
五郎右衛門用水……100
権現沼……595
権現山……585
近藤さま……501
コンニャク一枚で伊勢まいり……477
コンニャク橋……122
紺腹掛……114
金毘羅様……144
紺股引……114
婚約……322

さ

サイソクマゲ……368
祭壇……355
裁縫……75
才文……260
祭文……265
境……47
酒蔵……113
サカサッコ……298
さかな……82
魚取り……112

かいやし……93
カエル……524
カエルの伊勢参宮……480
かかあ天下……577
鏡田……498
かがやく……35, 573
柿……220
書初め……60
かぎ竹……92
神楽……225
カクラン……315
カケオチ……326
カケス……480
かげの俵……84
笠薬師……463, 581
飾りかえ……379
迦葉山……463, 551
春日……44
かずのこのはなし……482
かすみ……36
かすみが広い……576
風邪の神送り……208
火葬地……46
嘉造天狗……506
かたけ……81
片葉のよし……272, 495
カタビラ……353
形見分け……366
家畜……112
かつぎ石……57, 588
がったん……63
カッパ……476
かっぱたけ……212
カドイレ……323
カナババ……305
金仏と木仏……471
カナヤシキ……43
カネツケ……343
カネバコ……579
カビタリモチ……413
かぶと虫……219
カブリギ……575
被り物……71
カマイタチ……210
鎌倉街道……121
かまの口あけ……400
紙位牌……364
上海道……121
髪型……74
神棚……9
かみなり……214, 524, 578, 580
雷除け……211
亀里小学校……46
亀とムカデ……480
かゆかき棒……379, 383
通帳……126
カラス鳴き……349
カラスネブリ……578
からっ風……215
刈りあげの祝い……108,
カリブシ……25
家例……388, 425
カワギ拾い……56
川びたり……212
カワラチゴ……219
カワリムコ……25, 337
寒……214
棺桶……354, 549
寒九の雨……214
勘定……126
関東大地震……515
神無月……28, 131, 408
寒念仏……163, 206
カンの虫……314
観音講……154
観音様……137
観音様の相撲……471
観音信仰……18
観音橋……123
観音山……142

き

木を切る……219
祇園……147, 227, 229
聞きちがい……534
キゴザ……74
鬼子母神……462, 523
汽車……514
気象……213
ギス……219, 273
木瀬貯蓄銀行……505
北爪……42
北爪源求……271
キツネ……530, 538
キツネ退治……460
狐つき……223
キツネの嫁どり……539
絹……67
絹笠様……16, 163, 472, 581
城宮……133
ギバが娘……279
肝煎……48
キモイレ……25
キュウリ……207
キュウリ天王様……135
行商人……125
キョウソ……111
キョウドウ……52
共同田植……11, 52
共有地……54
浄め……363
キリギリス……219
禁忌……206
金魂神……127

く

食い初め……308
食いっこ……59
日下部様……143
草刈り……104
草刈唄……251
草競馬……55
草ばくち……55
ぐし……93
ぐしもち……94, 224
九十九谷……500
鯨田……499
くずさらい……112
薬屋……126
下り松……493
口がため……322
口見舞……367
区長……50
クッツキアイ……320
公田……37
公田の渡……124
熊野信仰……21
くまびる……36
雲切り源右衛門……510
供養塚……164
蔵……89
鞍掛け松……492
倉切り……528
倉開き……378
蔵びらきの唄……253
クルマヤ……42
くるわ……47
クレ方……325

うぶ湯 ……297
馬……40, 217, 533
馬入れ ……595
馬追鳥のはなし ……479
馬を借りる ……113
馬捨場 ……113
馬と火事 ……531
馬の足跡 ……500
馬の子とり ……578
うまや ……9, 113
馬や肥いだし ……384
厩肥 ……211
生まれかわり ……206, 368, 509
549
梅 ……220
梅若忌 ……397
浦島太郎 ……442
うるしの木 ……586

え

エイ……52
映画……63, 264
永明地蔵 ……584
エエ仕事 ……107
榎店 ……126, 505
榎棚 ……529
エビス講 ……153, 212
えびす様のお膳……82
恵方まわり ……374
えんが ……590
縁側 ……204
縁組 ……528
えんまさま ……537

お

おいなりまつり ……414
追いはぎ……63
追分 ……124
往還 ……121
オールバック……74
おエビス講 ……596
大きいはなし ……536
大食 ……509
大島 ……498
大島梨 ……109
大そうじ ……416
オオド……91
大松……42, 524
大水……63, 516
大晦日 ……418, 580
大山講 ……154
おかいこあげ……80
お蚕日庸 ……111
お顔かくし ……417
お飾り ……417
おかず ……76, 77
オカッテ……9, 91
オカッパ……74
オカノ ……279
オカマサマ ……9, 127
おかまじめ ……130
おかまの口あけ ……404
おかまのるすんぎょう ……409
お神おくり ……131
お神むかえ ……131
おがみや ……166, 507
お行塚 ……272, 499
おきりこみ……6, 79, 83, 85
オクマンサマ ……135
お蔵屋敷 ……586
オクリ一見 ……328
オクンチ……28, 244, 412
おこあげ ……400
おこあげ祝い……17
おこもち ……399
おこもり ……412
オコリボトケ ……142
オコンマヤ……9, 90
おさか ……501
オサキ ……206, 207, 222, 543
オサナブリ……12, 101, 107
お産 ……294
お獅子 ……146, 232, 265
お七夜 ……303
押麦……5, 84
お正月さま ……416
オショウデンさま ……127
和尚と小僧 ……461
お上人様 ……166, 481, 500, 591
お上人さまの木 ……492
お女郎石 ……491
おしらさま ……396
お諏訪ケ淵 ……473
お歳暮……61, 309
お節供 ……397
おそうでんさま ……142, 385
おぞくる ……574
おそなえ ……418
お大日……44
オタナアゲ ……364
おたなさがし ……376
オツイ……70
お手玉 ……266
お手玉のうた ……252
お寺の年始日 ……375
オトウカ ……527, 537
オトウカツキ ……540
おとがはじまる ……532
音根沢 ……478, 492
オトボウ ……552, 588
おなめ……78
女屋 ……499
鬼っ子 ……298
おねり ……226
お念仏ばあさん……51
おはやし ……229
オハリ……75
帯……72
おひなさま ……397
おひねり……86
お日待 ……22, 29, 151, 412
お百度参り ……165, 274
お札 ……416
お遍路 ……166
オボヤキ ……300
おまいり ……124
お松市……45
おもしろばなし ……487
オモテザシキ……90
親子狐 ……275
オヤコモチ……81
親抱きの松 ……271, 492
御嶽山 ……463
女イチゲン……25, 344
女のよばい ……532
女堀 ……491

か

蚕神信仰……15
かいこの歌 ……252
蚕のお札 ……163
蚕のまじない ……211
かいこの休み ……111
開拓……39
怪談 ……550
害虫 ……113
買い物……56, 126

索　　引

あ

阿内……37
赤城型民家……7
赤城と榛名の神の争い……462
赤城の大男……462
赤城の夕立……214
赤鳥居……275
赤堀道元……469
アガリハナ……90
阿感坊のはなし……476, 495
アキアゲ……14, 79, 105, 413, 578
あきの方……131
秋葉講……155
秋まつり……410
あげ念仏……597
明けの明星……216
朝倉ごてん……491
麻の葉の着物……71
浅間砂……96
浅間の噴火……589
朝飯前仕事……517
朝湯……373
アシイレ……25, 323
芦原堰……495, 532
小豆粥……79, 378, 383
あずきとぎばあさん……224, 550
あずきぼうとう……81
あずまおうかん……122
東街道……121
遊び……266
あそび日……55
愛宕様……136, 143
頭をひやす方法……208
あつけ……208, 209, 314
あと念仏の水……366
アナガタ……357
アナップサゲ……13
アナバン……356
穴掘り……356
あの世……549
油だくねえ……533
油もち……78, 415
あぶら餅……84
油屋……126
あまおち……579
雨蛙……219
尼が橋……589
天川大島……498, 532
天川大島住宅……39
天川の弾正林……493
天川の松並木……524
雨具……74
あまねじ……80
阿弥陀様……19, 141
アメ屋……126
操翁式三番叟……244
荒口川……584
荒砥川……584
淡島さま……143
あわせ……73
あわせ苗……205
あんこ会……55
あんころもち……80
安産……288

い

飯玉神社……133
飯土井の猫山……477
家づくり……89
生き血とり……527
生き盆……28, 404
生きぼんぶるまい……347
池さらい……412
石……62, 224, 590
石芋……468
石かつぎ……589
石川五右衛門……593
石柱……270
石船……125
医者……46
石山の観音……384
伊勢参宮……157, 523
市がさかえた……553
一月四日……27
一見……348
一見座敷……333
一人前……52, 62, 316
イチマケ……60
一里塚……124, 270
イッケ……60
五ツ坊主……312
一本杉……147
井戸……91
井戸替え……89
イトビンヤッコノあねさん……279
井戸水……467
稲作……10
稲作儀礼……101
稲荷様……128, 144, 147, 396
稲荷様のひっこし……224
稲荷神社……132, 135
稲荷藤節……254, 537
稲荷祭り……29
犬……218
犬はじき……362
井野……42
いのみの木……492
祈り釘……212
イボ……209
いぼ神様……140
いぼ薬師……164
忌み明け……366
忌み田……586
いもめし……83, 84
いろり……9, 92
イワシ……394
岩船地蔵……139, 582
インキョメン……61

う

上野神社……132
牛……217
牛橋……123, 589
臼……363
謡……338
うたいこみ……338
ウダツ……8, 36, 92
内田忠順……274, 506
筑井……38
筑井大橋……122
筑井橋……122
うどん……76, 77
うなぎ……83, 219
ウナギさし……551
老捨山……449
産毛……302
ウブタテメシ……296

前橋市民俗文化財調査報告書第三集

前橋南部の民俗

―上川淵・下川淵・旧木瀬地区―

平成五年三月二十五日　印刷
平成五年三月三十一日　発行　（非売品）

編集　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目十二番一号
電話　〇二七二(二四)一一一一(代)

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町六七
電話　〇二七二(五一)一二一二(代)